

【完結】学園都市のナンバーズ

beatgazer

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

初めまして。

鎌池和馬 氏 『とある魔術の禁書目録』 と

大友克洋 氏 『AKIRA』 のクロスオーバー二次創作です。

『AKIRA』は、コミック版、映画版から。

『とある魔術の禁書目録』は、旧小説からですが、主に『とある科学の超電磁砲』の時系列に沿って進みます。

54話からが、『超電磁砲』コミックスの時系列に対応した話になります。

(22／2／23) 完結しました。

(22／9／22) 第2話（本編第1話）を全面的に改稿しました。

感想、評価、誤字報告等、ありがとうございます。

40	39	38	37	36	VIII・ ジョーカー	35	34	33	VII・ 初春	32	31	30	29	VI・ 浜面	28	27	26	25	V・ 木山春生	24	23	22	21	20
323	314	307	299	292		284	274	268		260	252	243	238		228	218	211	202		192	185	178	171	159

8
2

X
V
I.
大佐

8
1

8
0

7
9

7
8

7
7

X
V.
一方通行

7
6

7
5

7
4

7
3

7
2

7
1

7
0

X
I
V.
竜作

6
9

6
8

6
7

6
6

X
I
I
I.
黄泉川

6
5

6
4

6
3

6
2

684

672

665

654

643

635

626

617

608

598

590

583

574

567

558

549

541

533

525

520

512

XXI. 山形

102	886
101	873
100	861

XX. ナンバーズ

99	848
98	836
97	824
96	813
95	802

XIX. 麦野

94	793
93	786
92	775

XVIII. 甲斐

91	766
90	757
89	748
88	740
87	733
86	722

XVII. インデックス

85	711
84	704
83	695

h e l p u s . m v g 4	八 月 . b	八 月 . a	E p i l o g u e	1 2 0	1 1 9	1 1 8	1 1 7	1 1 6	1 1 5	1 1 4	1 1 3	1 1 2	1 1 1	1 1 0	1 0 9	X X I I . ア キ ラ	1 0 8	1 0 7	1 0 6	1 0 5	1 0 4	1 0 3
116311411127				112111011090107310571045103210191006992980969													958945936924914899					

1. Prologue

7月某日――

木山春生はとある地下研究施設の一室を訪れていた。白い床に、白い壁。出入り口の扉を威圧するかのようには、いくつものコンピュータディスプレイが人工的な輝きを放っていた。木山は一卓のテーブルに向かって座っている。やや浅めに身を乗り出すようにして腰掛けたオフィスチェアのアームレストは先端の塗装が明らかに禿げ、内部の薄暗く変色した緩衝材を覗かせている。時々木山は姿勢を変え、椅子から微かな悲鳴を引き出しながら、綴じられた研究記録に目を落とっていた。

「こちらが……25号。あなた方にはある意味最も身近なナンバーズでしょう……26号はLEVEL4相当の念動力使いです。……27号は優秀な空間移動能力者です。このAIM拡散力場の波長は極めて独特でD-15タイプを示しています。自身と第三者とを同時に位置演算をこなして移動することができますのです」

一際大きなディスプレイに、様々な資料を映しながら早口で語るのは、白衣を身に纏った初老の研究者だ。顔の皺こそ年齢を感じさせるが、逆立ったような髪と、きらきらとした目つきは、研究者としての熱意を滲ませているようだった。

木山の顔は彼と対照的だった。目を隠すほどの前髪、日に当たったことがないかのような白い肌、曇った目などは、幸薄そうな印象を与える。研究者の映すディスプレイには興味を示さず、記録をめくっていくその顔には、期待外れだ、という心情が表れていた。

「それで……この子たちは全て念話テレパスによって通じ合っていると」

「その通りですよ、木山博士。あなたが求めている、能力者の脳と脳を繋ぐネットワーク。中央の奴らは全く興味を示していませんが、まさに我が素材たちは、あなたの理想を既に実現しているのですよ」

木山が一言発すれば、研究者はその何倍もまくしたてる。そういつたちぐはぐなやり取りが、先ほどから続けられていた。

「なぜ、興味を示さないのでしょうか？ Dr. 大西」

木山の疑問に、大西と呼ばれた研究者の口は固く結ばれた。

「確かに、複数の能力者を繋ぎ合わせて、より高度な演算を実現するネットワークこそ、私が欲するものです。しかし、この黒塗りは——」

言いながら、木山は研究記録を持ち上げ、大西に向けて見せた。

「ただのお預けというわけではないのでしょうか？ 学園都市の主流が、ここのラボの、保育園ベビールームを傍流と見下すだけの……不都合なことがあるのでしょうか」

大西は顎を引き、木山を見つめた後、口を開いた。

「ない、といえば、嘘になる」

声色は厳しさを孕んでいた。

「といっても、そちらのことだ、噂には聞いているだろうがね……」

「ええ」

木山は頷いた。

「ただ、それはさほど問題ではないと思う。それよりも、今あなたが言った20番台のナンバーズのあとは、ずいぶん芳しくないようだけれど」

「……予算を削られてしまつてね……」

自嘲気味に大西が答えた。

木山は顔を上げることなく、手元の資料に視線を落としたまま口を開く。

「32、33、36、37、38、そして最後の40号……実験中に精神障害が極まつて死亡……残りの数人についても、さしたる能力発現には至らなかつた——あなたたちの研究のピークは20番台で、この学園都市の能力開発法は、カリキュラムに取って代わられた」

憐みの混じつた木山の言葉に、大西の拳が握られた。

「否定はせんよ。だが、神を超えるなどとはごく木原の連中などとは、私は違う。結局の所、やつらは科学と宗教の線引きすらできていないのだ。この”プロジェクト”が成就すれば、どれだけの技術革命を成し得ることか。私は、それを信じてやまぬ！ 『アキラ』さえコントロー

ルできれば——」

「ア・キ・ラ？」

木山が聞き返した所で、研究室の扉がスライドして開いた。

「そこまでだ、ドクター。喋り過ぎだ」

入ってきたのは、大柄な男だった。白衣を着た木山や大西と異なり、スーツを着た、厳めしい風貌の男だ。

「まだその学者が、我々の側につくと決まったわけではないのだろう」「ええ、大佐。ですから、より高度な機密に当たる部分は確かに秘匿した上でプレゼンをしています」

大西は、自分より頭二つほども背の高い男に、笑みを浮かべながら答えた。

「あなたは？」

木山が問いかける。

「敷島大佐だ」

低い声で、ぶつきらぼうに男が答えた。

「大佐……あなた、軍属？それも、誰かの子飼いの連中とは違う、正規の……都市軍隊アーミィの人がどうしてここに？」

「その質問に答える必要はない。少なくとも、現時点ではな」

敷島大佐は、大西の隣に立った。木山とテーブルを挟んで相向かいになり、ディスプレイを大きな体躯で隠す位置だ。

「ただ、主流派の有望な若手科学者である、木山春生博士。君が我々の研究に興味を持ってくれているということは、こちらとしても喜ばしいことなのだ。我々は、書庫バンクの触手に囚われていないナンバーズを、適切に維持・管理し……この国のよき発展に資するよう、守らなければならぬのだ」

「……いかにも国家の軍人らしい考えだ。この学園都市では、あなたたちは決して歓迎されているわけではないのに」

「軍人が嫌われることは、国が平和であることの何よりの証左だ」

敷島大佐はゆっくりと、しかし淀みなく答えた。

「だが木山博士。この保育園も、計画も、窓際へ追いやられた学者と、

外から遣わされた軍人のお遊びでは、決してないのだ。我々が行うことは、この国家の、この学園都市の存亡にも関わるものなのだ」

「随分大層な物言いだけれど」

木山はテーブルに置いた研究記録を、指でコツコツと叩いた。

「この研究のこれまでの成果は、学園都市が行っている数多の計画の中でも目新しいものではないでしょう。30年も前にLEVEL4級能力開発に成功したことは確かに画期的だったのでしょうけど、今となっては大能力者だって、学校が一つ建つくらいにいるのだし。そして、私が耳にしている副作用が現実であるなら、猶更過去の遺物であると言わざるを得ない。だから、あなたの言う、その——学園都市を滅ぼすほどの潜在的可能性が一体どこにあるのか、聞きたいのだけれど」

「それが知りたいのなら……我々の側につくと、確約してほしい」

敷島大佐は、テーブルに両手をつけて木山に向き合った。その目からは強い意志が迸っていた。

「木山博士。あなたの構想する幻想御手は、我々の研究を用いればすぐにも実現するでしょう。そして、あなたの研究をこちらに提供して頂ければ、我々永久機関計画の再興もできる。利害は一致するのです」

大西も自信に満ちた口調で木山に語りかけた。

「……あの子たちを救うことが、今度こそできるかもしれない……」

木山は、敷島大佐にも、大西にも聞こえない程の声で呟いた。それから、顔を上げた。

「うん……契約書にサインする前に、もう少し聞かせてもらいたいことが」

木山が言った。

「この記録が、所々お預けなのはいいとして……一人だけ、番号が飛んでいるのはどうしてだろう、この……」

「……28号か……」

敷島大佐が絞り出すように言った。

大西は大佐の顔を窺っている。

「大佐、人材の補充は急務です。木山博士に協力を仰ぐためにも、ここは我々の研究について、更に丁寧な説明を——」

「ドクター。君はどれだけ、28号について正確に把握している?」

敷島大佐は大西の言葉を遮った。大西は言葉に詰まり、その様子を木山は不審に思った。

「……どういうこと? Dr. 大西。あなたはここの研究主任なのでしよう。28号について教えてほしいのだけれど」

「……それは……大佐の言う通り、私とて資料でしか見たことがないのだよ」

「28号も既に死亡しているということ?」

「どうかな。ただ、我々にはそれを明確に確かめる術も伝もないということだ」

「仰る意味が分かりませんね、どういうことですか?」

木山の重ねての問いに、敷島大佐は一層表情を厳しくし、大西は不敵な笑みをうつつすらと浮かべていた。

数秒の間があつた。敷島大佐の沈黙を、喋つてもよいという許可と受け取つたらしい。口を開いたのは大西だった。

「28号を担当していた科学者も、目撃者も、機械すらも、全員死んでしまったからね……」

「全員死亡……? 30年前のその研究は、ご老人ばかり携わっていたの? それとも、実験中の能力の暴走ということ? あなたたちの計画で、過去それほどの案件があつたとは聞いていないのだけれど」

木山は、自分で反芻した大西の言葉に胸の奥が痛むのを感じていた。学園都市は、街そのものが人間の超能力開発を行う研究機関だ。その発展の中では、実験に参加した人員の犠牲を伴うような研究や事故もあつたし、現在進行形で行われているものもある。そして、犠牲の数が大きくなればなるほど、そのような出来事は暗部の奥へと隠されるものだった。木山がこうして大西達に接近を図るのも、過去に彼女が関わった実験による犠牲が理由だった。

「28号は我々の最大の成果であり……それ以上に最重要機密だ。国

家規模のな」

敷島大佐が語った言葉は、つまり28号にまつわる情報が、学園都市に留まらず、本国政府が隠しているものと示していた。

「ただ、木山博士。28号の代わりではないが……別のナンバーズについて、我々と共に研究に参加してもらいたい、きつとあなたの目指すものにも大いに役立つはずだ」

「別のナンバーズ？」

木山が訝しげに聞き返した。

「失礼なことを言うようだけど、私が耳にしている噂によれば……あなたたちが成功と呼ぶ20番台の子たちは、もうずっと満足に歩けないというのだけだ」

「全くの健康体だよ」

大西が笑みを絶やさずに言った。

「木山博士——我々と共に、41号の研究に参加してみないかね？」

I. 金田

2 【改】

ライディングブーツが浄化槽の金属蓋の上を踏みしめた途端、排泄物と齧歯類の獣臭さを掻き混ぜて油漬けにしたような臭いがムワツと立ち込め、少年は思わず包帯を巻いた左腕を鼻の前に翳した。すり減ってほぼフラットになったブーツのソールがそこからいくつか歩みを進める度、日没前にひとしきり通り過ぎて行ったゲリラ豪雨の残滓であろう、ぴちやりぴちやりと水つぽい音が、雑踏の喧騒に負けじと聞こえる。少年が顰めた顔を幾らか上向かせると、数区画遠くに聳える複合施設のビル外壁に備え付けられた巨大なスクリーンの映像が、バラエティの予告編からニュース番組へと移り変わった所だった。今夜の主要な見出しが並列されている。来年に自国開催を控えたオリンピックで選手村として使われる予定の埋め立て地造成工事を巡る汚職疑惑、超能力原動兵器経済不況対策を巡る予算委員会での紛糾、東欧の黒海沿岸紛争地帯におけるPKW使用疑惑への国連査察、地域の治安悪化の元凶とされる無能力者武装集団スキルアウト対策に機動隊を投入する条例案の継続審議。少年はそれらの見出しをインテックス一瞥すると、興味なさげに視線を周囲へと送る。車道を堂々と横切る若者の集団にクラクションを鳴らした軽自動車がすぐさま取り囲まれ、罵声と共に蹴られたりどこから取り出したのか鈍器で殴られたりすると、みるみる車体にへこみが生まれていき、運転席の中年の男は途方に暮れてハンドルを握り締めている。解体なのか改装なのかよく分からない寂れた建物の前に建てられた虎模様のバリケードの近くでは、真夏なのに分厚いパーカーを着込んで座り込む少女数人が、何事かを語る警備員アンチスキルのペアを気怠そうに見上げている。のろのろと蛇行するオートバイが規制と明白に逆方向へ通り過ぎると、微かにアルコールの匂いがした。

少年の感覚には、まだ浄化槽から立ち上る悪臭がこびり付いていた。ブーツの足首に纏わりつくようなそれを振り払おうと足を速めようとしたその時、ズボンの懐で携帯電話が震え、メッセージの受信

を告げる。少年は内容を確認すると、ニヤリと口角を上げ、今度こそ歩くペースを上げた。

足音はいつの間にか乾いたものとなり、辺りに人影はまばらになる。数分前にニュースを映していたビルに近づいてきたが、少年がやってきたのは煌びやかな表通りとは裏側にあたる区域で、バラックをミルフィーユのように重ねた法規度外視の建造物群が、十二単の裾のように中心のビルの背後へ広がっている。巨大な足に踏みつけられたかのようにくしゃりとした廃車の傍を通り過ぎ、故障しているのか或いは一時停止を要求しているのか判別し難く不規則に赤色点滅をする信号を頭上に歩くと、バラックの一角にぼっかりと口を開ける出入口を前にした。ひび割れをガムテープで雑に補修された照明付き看板が、チチチと時折明るさを揺らめかせながら音を鳴らしている。下り階段の手前にはオレンジ色の生地をしたマットが申し訳程度に置かれているが、吐瀉物の染みと踏みつけられてから間もない吸い殻で汚れていた。

少年は、微かに感じたヤニの匂いに鼻を鳴らす。染みを踏みつけないうよう、僅かに気を配って大股に歩き出し、それから地下への階段を一気に駆け降りる。ブーツが軽やかな8ビートを奏でた直後、少年はグローブで『先生方・当店は食品衛生基準法パス済み（去年）』と汚く張り紙がされたドアを睨みつけると、グローブを嵌めた手を突き出し、ドアノブを握り締めた。

—— 7月1日 夜 ——

—— 第一〇学区、エリアG「ストレンジ」地下1F、スナック「春木屋」 ——

山形の視界にまず入ったのは、弱弱しい照明の生気の無い暗緑色だ。正面には、カウンターで固まる男の背中とこちらを睨みつけるマスターの視線を捉えたが、山形は一顧だにせず右を、それから左へと首を振る。目当ての人物の姿を見つけると、山形は店内を歩き出す。

南国の雰囲気を感じさせる音色が自然と耳に忍び寄ってくる。ゴング、スリットドラム、レヨン、アングルンが無造作にスローテンポで叩かせて、その一部分をループさせたような音楽だ。派手さも緻密さも無いが、不思議と心地は悪くない。BGMのループにアクセントを加えていくのは、酒に浸る人物共の立てる物音だ。傾けられるボトルとグラス、注がれる液体が立てる泡、鳴らされる喉、互いの身体を弄って起こる衣擦れ、潜められたり、急に笑ったりと忙しない話し声。それらの主である客人たちの背中へ、こちらに関わるなど暗に告げている。

山形が歩を進める度に、小気味よくブーツが立てる足音は、それらの客人の不穏な雰囲気を跳ね除けていく。鋭い視線を背中へと向けるスキンヘッドのマスター、刺青と口紅を施したカップル、僅かに髭面を覗かせて机に突っ伏し軀をかく男、山形が向かうのは彼らではない。

店のシンボルの一つである、古風なジュークボックス。弧状に並べられたCDは照明を受けて記録層を光らせていて、虹色に輝くびんぎさらのようだ。その内の一枚を、カマキリの前肢のように細いアームが摘まみ上げ、軋みながら移動させていく。あらゆる技術が世界最先端の実験場となっているこの学園都市では、このような機械を表側に放り出せば、目を丸くする者が大半だろう。

光を放つジュークボックスの機体にやや体を預けて、山形と同年代の少年が立っている。山形がかなり長身であるのと比べると、幾分小柄に見える。真っ赤なジャンパーを着た背中には、赤と青のカプセルのイラストが大きくあしらわれている。顔をジュークボックスへ向けているため、表情は窺えない。山形はその少年の隣に立ち、肘を機体の操作面について口を開いた。

「クラウンの奴ら、ケツまくられて、環状5号で玉乗りし始めたつてよ」

山形はたったそれだけを言うと、すぐ踵を返した。

赤い少年は特に頷きもしなかったが、盤面のボタンをいくつか人差し指で弾むように押す。クラブミュージックで使われるグリッドコ

ントローラーのように、ボタンは一斉に煌びやかに光り、音楽の再生を終了する。

「おおい、待ちやがれ、ドア開けるときは静かにつて、最近の学校は脳ミソ弄ってばかりで基本の礼儀も教えねえのかよクソガキ？」

何故か襟元がびしょびしょに濡れている客の近くを山形が通り過ぎたとき、マスターがカウンターの向こうから苛立たしく悪態をついた。

山形はすかさずせせら笑った。

「そつちがビビり過ぎてンだよ！おくすりねんねの時間だったかよ!？」

山形のにやけた顔は、マスターよりも服を濡らした男の背中へと向けられていた。

山形の言葉を聞いた男が、襟元をおしぼりで拭う手をぴたりと止めた。

「言つとくけどよ」

山形が大げさに手を広げ、バシンと男の背中を叩いた。それから、男と顔を並べ、低く囁いた。

「最近『クラウン』の奴らがうっとおしいんだよ、新しいお菓子を売り始めて……おいまさか、俺らの縄張りで買ってねエよな？」

「いつからウチがお前らの便所になったってんだ、ここは俺の店だ、何売ろうが自由だろ」

縮こまっている男に代わるように、マスターが顎を突き出して言い返した。

「お前らこそいい加減少しは金を落とせ。ウチはハチ公前じゃねえんだよ」

「お生憎様ア、無能力者の財布があつたかいと思つてンの？よオク知つてンだろ！」

赤い服の少年が自分を追い越し、先に出口へと向かった所で、山形はマスターへ言いながら出口へと向かう。

「180万もガキがいりゃあ、それだけクズも多いわな畜生……」
マスターが忌々し気に吐き捨てた。

ドアに手をかけていた山形は、店内へと振り返る。

顔には満面の笑みが浮かんでいた。

「そりゃ誉め言葉だぜ！あの上澄みのサイコパス共と一緒にされるよりはなア！」

思い切り金属のドアが引き閉められ、けたたましい音と衝撃が店の空気を揺り動かした。

マスターは暫く閉じられたドアを睨みつけていて、その右手には小包が握り締められていた。

春木屋からやや離れた別の区画にある駐車場の一フロアを、2人の若者は訪れた。この辺りは通称、屋台尖塔と呼ばれ、元々は巨大な立体駐車場だったのを無秩序に改築し、飲食店や雑貨店、何を生業としているのかも明らかでない怪しげな事務所などが所狭しと繋ぎ合わせられている。その姿は、かつて中国の一都市に存在していたという、城跡に築かれたスラム街に似ていた。

しかし、2人の若者は、客でごった返す屋台通りではなく、数少ない空フロアに目的があった。持ち主を失ってからどれだけの年月を経ているのだろうか、傷だらけで塗装の色を落とした様々な車両が、ぽつりぽつりと墓石のように動かないでいる。このフロアの明かりは機能していないが、街の明かりが差し込むことで、視界は案外良好だった。

朽ちつつある車両の脇をいくつか通り過ぎた角の一角に、それらは明らかに異なる真っ赤な色彩の、巨大なバイクがあった。薄暗い一帯の中で、それは唐突に、レンブラントの絵画の人物のように、見る人の眼を釘付けにする。巨大な二輪と、跨ぐというより、カーレースのように乗り込むという表現が適しているであろう座席、極端に長いホイールベースと、それに伴う流線形のフォルム。紅の外装には、神社の護符や電子機器メーカーのロゴが書かれたステッカーがごてごてと貼り付けられていた。

極めて低いそのライディングポジションには、先客がいた。

「230……いや、40はいけるか？」

目の前の計器を弄り、ディスプレイに目を凝らしているのは、髪を短く刈り込んだ、あどけなさの残る少年だ。柔らかな青竹色のパーカーを着て、ブツブツと呟いている。ボタンを押すたびに、白や黄色、赤といった色とりどりの照明が、少年の顔を照らし、目を輝かせた。

「この障害物検知システムは……Rader^{レイダー}? いや、Lidar^{ライダー}か？」

……エンジンは、10,000回転の——」

「10,000じゃねえ」

赤いジャンパーを着た若者は、運転席を覆う程に大きいフロントガラスに手をつくや否や言った。

パーカーの少年は、肩をびくつと震わせて相手を見上げ、顔を顰めた。

「金田……」

「12,000だ。勝手に切り捨てちゃってさア、パンの耳にしちやあデカいだろうよ」

金田はパーカーの少年を見下ろして笑った。

「誰がチューンアップしたと思ってる? この俺だよ! お陰で、トんだじゃじゃ馬なんだよ、そいつア」

笑いながら金田は急かすようにバシバシとガラスを叩く。短髪の少年は小さく舌打ちし、スイッチを操作して運転席を覆っていたガラスを開けた。その瞳は淀んでいる。

「乗りたいんだつたらよ、もう一皮剥けなきやアダメだぜ鉄雄ちゃんよ」

短く鳥が囀るような音を立てて、ガラスは完全に縦向きになる。

鉄雄がパーカーのポケットに手をつ込んでその場を去るのと入れ替わりに、金田が自身のバイクへ乗り込む。

山形と鉄雄が、より奥まった場所にある自身のバイクへと歩み寄る。

「相変わらずイかれた野郎だぜ」

金田に呆れたのか、鉄雄を励ましているのか、山形が左手の包帯を

摩り、笑みを浮かべながら言った。

鉄雄が、自身のパーカーと似た色のバイクの横に立ち、ハンドルを握り締めた。鉄雄のバイクは、他の2人の仲間に比べ、一回りも二回りも小さい。

「……乗ってみせるさ」

鉄雄が金田に向かって目を細めて言った。

「なら、まずは今夜、サーカスの猛獣を捕まえてみせな！あのドでかいゴリラをよ！」

ガラスが再び運転席を覆い、金田はバイクを始動する。

口径20インチはあるだろう、巨大な後輪が急回転すると、石礫が弾け、ヒビの目立つ壁面へパチパチと当たり、跳ね回る。金田のバイクは唐突にバツクし、方向を整える。

金田が右手でアクセルを捻ると、前輪のコイルが超電導を起こし、金色のスパークが迸る。

次の瞬間、バイクの前半身は頭をもたげ、金田は満面の笑みを浮かべる。そして後輪が砂埃を巻き上げると同時に、金田のバイクは弾かれたように動き出した。

山形と鉄雄も後に続く。

3人の若者は、がらんどうのフロアにけたたましく排気とスキールのトリオを轟かせ、猛然とスロープを駆け降り、傾きかけた料金所をすり抜け、夜の街明かりの中へ飛び出していった。

バイクが駆け抜けた後には、ランプが赤や橙、白の軌跡を空気に垂らし、幻想的に尾を引いていく。信号、街灯、店舗やオフィスから膨れ上がっている明かりが、風と一体となってライダー達の頬を掠めていく。金田は目の前の盤面を操作し、仲間との無線回線を起動した。

「甲斐！ジョーカーは今どこだ？」

「駅前を過ぎたらしい！もうすぐ7号だ」

「乗らせるかよ、野獣は檻に入れねえとな」

他学区に逃げられては面倒だと、金田は日頃の抗争で嫌という程実感している。警備員アンチスキルに絡まれる確率は高くなるだろう。

「金田ア!!」

先行する山形から通信が入る。

「見たか? さつき脇に風紀委員ジャッジメントが居なかったか?」

「ああ。今夜はいつも以上に客入りがいいな」

金田が応じた。学園都市一治安が良くないと評判のこの一〇学区内では、腕章を付けた学生自体が出歩くのも珍しい。たちまち不良に囲まれるのが関の山で、治安維持にあたるのはあくまで大人の役割だ。金田の覚えが確かなら、彼らは基本学校の中で活動するものだった筈だし、ましてやこのような夜中に街へ繰り出すジャッジメントには、遭遇したことがなかった。

「走ってる俺らを持ち物検査するツてンならおつかねーけどな」

お行儀よく七学区だとかその辺に帰れ、と金田は念じた。

金田は気合を入れ、アクセルを強くした。前輪が一瞬浮き上がり、更に唸りを上げて加速する。

金田は首を捻る。後ろには、金田に遅れまい、と何とか付いてくる鉄雄の姿があった。

「聞いたか、鉄雄! ジャンキー共を叩きのめすぞ!」

言われなくてもわあつてるよ! と後続の鉄雄が叫ぶが、金田の耳にはつきりと届かない。

それでも、2人のバイクは猛然と一〇学区の街中を駆け抜けていった。

金田達は、最初の3人から、相手のチームを先に追っていた仲間と合流し、10人ほどに人数を増やしていた。途中で相手のグループのバイクを2、3人追い詰め、カフェテリアのガラスへ大分させたり、得物の鉄パイプで殴り倒したりしたが、一番の標的であるリーダーにはまだ追いつけていない。

「囧だな」

ゴミの山にひしゃげたバイクごと突っ込み、それきり動かないでいる、ピエロのフェイスマスクをした相手メンバーを見下ろして、金田

は言った。

「ああ、奴ら、ここ2週間で頭数無駄に増やしやがってるからな」

山形が唸るように応じた。雨どいの一部を切り取ったような、釘を幾つも付けた鉄パイプを握り、地面にコツコツと打っている。

「こんなちんたら走るつきやできないのによ」

相手の人数は、金田達のチームのほぼ倍だ。リーダーはきつと、別の場所にいる。こちらの襲撃は事前に察知されていて、多分既に高速に入っているのだろう。

金田は、チームを地上に残るグループと、高速のランプから追うグループとに分けた。

雑然とした市街を抜けて、金田達は高層ビルの合間を縫う高速を走っていく。既にここは第一〇学区ではない。直線的な高速の両脇は、整然とした街路樹が真っ黒に立ち並んでいた。

早めに蹴りをつけなければならない。金田達は、飛ばしに飛ばして、相手の先回りを試みる。

間もなく、他の仲間が追い立ててきた、奴らのリーダーと相對する筈だ。

前方から3つの明かりがこちらに近付いてくる。仲間のものではない。挟み撃ちにする筈の仲間は撒かれたか、やられたか。金田は回線を急いで繋いだ。

「山形、鉄雄！ここは俺にやらせろ！」

金田は仲間の2人を制した。山形と鉄雄は甲高くブレーキをかけ、金田は2人の間を、一人猛然と進んだ。

「ジョーカー！」

相手のリーダーの通り名を、金田は口にした。

ドラッグ塗れのチームを、高見から見物する、猿山のボス。自らは決してクスリに手を出さず、金を巻き上げる男。金田のハンドルを握る手に力が込もった。

どうやら相手も金田と同じタイマンを望んだようだ。金田の真正面に光源が煌めいている。

金田はバイクを白線に乗せる。

相手のランプが加速度的に近づき、3つのヘッドランプだと見分けられる。

エンジンの音が後から追い重なってくる。

歯を食いしばった。

それでも、笑みがこぼれるのを抑えられなかった。

怖いのか楽しいのかは分からないが、ただ高揚した。

真正面からあわやぶつかり合うという瞬間、金田は相手の光の向こうに、カマキリ型のハンドルと、顔に塗られた悪趣味な白いペイントを見た。

爆音が一瞬振り切れたように耳を叩きつけた。金田の体に思ったような衝撃はないが、耳鳴りが聴覚の全てを満たしている。すぐにブレーキをかけてバイクを横に倒した。両輪がアスファルトに摩擦し、けたたましい音と土埃を上げた。

今しがた走り抜けてきた方向を振り返ると、相手の男がバイクから投げ出され、起き上がろうとしている所だった。達磨のような膨らんだ身体だ。

しぶとい奴だ、追撃してやる。そう思い、再びバイクを立て直そうとした時だった。

「金田！」

山形と鉄雄が金田の側まで来て停まった。うずくまっている^{ジョーカー}あの男を素通りしてきたのだ。何事かと思い、口を開きかけた所で、サイレンと、気怠そうな声がスピーカー越しに聞こえてきた。

「あー、こちら警機73、暴走集団が14番線大松川ランプ付近で乱闘中、至急応援……あつ、また君らあ？ やっほお！ 職業訓練生の坊ちゃん！ 高場先生に指導してもらわなきゃあじゃんよ……」

「やっべ」

山形が思わず声を洩らした。

「ホルスタインだ」

「違エよ」

金田にも覚えがあった。

「弁慶だ、ありや」

恵体の、警備員アンチスキルの女だ。一〇学区の教員ではないらしい。以前、検問を強行突破しようと試みた所、予想外にも盾でバイクを薙ぎ払われて倒された。バイクを1台スクラップにされた上、御用になったその時の記憶は、金田にとつて若干トラウマとなっていた。

「どうするよ、金田？」

鉄雄が聞くと、金田はへっ、と笑い声を上げた。

「上等だ！」

声は僅かに震えていた。

「イリユージョンと行こうじゃねえか！あいつらからはドロクさ」

もう一度、先ほど相対した男の方を見ると、既にバイクを立て直し、後から寄ってきた向こうの仲間2人と共に、警備員の車両とは反対側へ走り去っていく所だった。

ぐずぐずしてはいられない。金田は再びバイクを駆り出した。

「行くぞお！鉄雄お！山形あ！」

後の2人も雄叫びを上げた。3人は警備員を撒くべく、そしてクラウンのリーダーを倒すべく、摩天楼の谷間へと再び走り出していた。

島鉄雄は、金田と山形に引き続き、3人の内のしんがりを走っていた。鉄雄のバイクの性能がこじんまりしたものであることもその理由だが、それを抜きにしても、2人の前に立つと、特に金田には、すぐ笑われ、追い抜かされてしまうのだ。

金田も山形も、鉄雄にとつて友達と呼べる数少ない内の一人であることは違いない。それは分かっていた。鉄雄も小学校、中学校と能力開発こそ受けていたが、結果は変わることなくLE^無VE^能LO^者。元々折り合いが悪かった養父母とも、能力向上が見られないことで決定的に仲が悪くなり、いつしかスキルアウトになってしまった。職業訓練校に集まる、学園都市の本来の順路から外れてしまった若者たちの中でも、鉄雄はその引つ込み思案な性格から、日陰者だった。そんな自分に、走る楽しさを教えてくれ、仲間へと誘ってくれ、喧嘩の時に庇ってくれたのは金田達だった。薄汚れた学校よりも、陽の当たる学生達が歩き交う街中よりも、今この空間が一番居心地がよいとは思っていた。しかし、親しい仲間のすぐ後ろにいるからこそ、自分の地位の低さと弱さを余計に感じ、前2人に対する嫉妬を強くしてしまうのだ。

だからこそ鉄雄は、今夜のクラウン襲撃では、金田達に先んじて一旗揚げようと息巻いていた。どこかのタイミングで、俺が先頭に立つてやる。そう思つて数十分、先を行くクラウンは、いつの間にか2人になっていった。あの一番大型のリーダーは途中で離脱したのか。しかし、金田と山形はそれに気づいているのかいないのか、目標を変えようとはしないようだった。

クラウンと鉄雄達は、第十九学区に向かつて走っていた。この先が整備区間であることを示す赤コーンを吹き飛ばして、クラウンの2人はトンネルへと入っていく。やつら、俺らを撒く気だ！と山形が叫ぶのが聞こえた。コーンがばこん、と間の抜けた音を立てながら鉄雄のバイクのすぐ横を跳ねていった。

トンネルの中は黄色灯が煌々と照らしていた。バイクのエンジン音の反響に交じって、誰かが何事か叫んだ。金田や山形の声ではな

い。そう思った瞬間、クラウンと鉄雄達との間で爆発が起き、煙が瞬く間に目の前を塞いだ。

モロトフなんちゃら、という名詞が一瞬鉄雄の脳裏をよぎった。やたら爆発が激しい。ひよっとしたら相手が空気操作か^{エアロハンド}発火能力^{パイロキネシス}なのかもしれない。金田と山形がたまらずバイクを横倒しにしてブレーキをかけている。

今だ！と鉄雄は歯を食いしばった。ブレーキをかけるどころか、更にエンジンの唸りを上げた。前方に停まった2人のどちらかと当たろうものなら、大惨事だが、構うことはなかった。息を大きく吸って止め、煙の中へ突っ込んだ。途端に熱さが顔を襲い、目も思い切り閉じた。けたたましいサイレンが鳴り響き、自分の体に泡立つ冷たさが纏わりついた。煙を感知して、消火剤を撒くスプリンクラーが作動したのだ。

急に前方が眩しくなり、鉄雄は目を開けた。クラウンの2人のテールランプがずっと先で見えなくなる所だった。

鉄雄おお！という金田の悲鳴にも近い叫び声が聞こえたが、止まらなかった。俺だってやれる、やってやるんだ！煙を抜けたことで、鉄雄の決意は一層固いものへと変わっていった。

トンネルを抜けると、急速に周りの風景が寂れたものに変わっていった。再開発に失敗した、第一九学区、通称“旧市街”に入ったのだ。先ほどもまでのトンネルの明かりも、その更に背後のビルの光も、引き波のように薄れていく。

クラウンの走りはお世辞にもうまいものではなかった。鉄雄は己のバイクの性能の低さを、金田達に叩き込まれた技術でカバーし、徐々に距離を詰めていく。

前方の一人がこちらを振り返ったのが見えた。白いマスクとサングラスに顔を隠しており、表情は窺い知れない。と、次の瞬間、何かスイッチを入れたかのように、2人はエンジンをけたたましくし、急

加速した。何かスピードの上限をこじ開けるような改造をしておいたのか。2人のテールランプが危なっかしく揺れていることから、危険な急加速だと見えた。この先は整備区間故に、道路の状態が不安定だ。あの分じゃバランスを崩して自滅するに違いない。そこがチャンスだ——鉄雄はしっかりとハンドルを握り締めて追いかけた。

明かりの消えた料金所を突っ切った所で、突然クラウンよりも遙か前方に光の壁が現れた。警備員か？と頭をよぎったが、クラウンの二人が逃れるような分かれ道は無かった。一撃与えて、逃げ切つてやる。鉄雄は光源へと進んでいった。

近づいていくと、何名かの人影が、光源を背にして見えた。女性らしきシルエツトもある。クラウンのやつらはどこだ？道路は封鎖されている訳ではなく、両脇に置いた発光器からこちらを照らしているようだった。

「もう一台——しまっ——止まりなさい！——」

甲高い女の声が聞こえたが、鉄雄は中央を突っ切った。光の先に、2台のバイクが倒れていた。その内、奥の方の1台の傍らに、うずくまっている者がいた。あの白マスクのやつだ。

とどめだ。鉄雄はダッシュボードに忍ばせておいたレンチを左手で取り出し、身を乗り上げた。バイクが唸りを上げ、男を一気に照らし出す。

ゴーグルがこちらを向いているのが見えた。きっとその奥の目は驚愕に見開かれているに違いなかった。男の顔目がけて、鉄雄は左手を思い切り降り抜いた。

くぐもったような声と共に、手応えを感じた。あまりに高速で動いていたためか、思ったより感触はなかった。振り返っても、既に後方は暗く、男の様子は見えなかった。

へっ、ざまあ見ろ——このままストレンジへ戻って、消火剤に濡れた金田達に、戦果を知らせてやろう。そうほくそ笑んで、前を向いた瞬間——。

ヘッドライトが、すぐ目の前に立つものをありありと照らし出し

た。子どもだ。鉄雄は叫んだ。思い切り叫んで、ブレーキをかけた、が、ぶつかるといふ恐怖を覚える前に、すぐに轟音と熱が鉄雄の感覚を埋め尽くした。

金田は、山形や他の仲間とも合流して走ってきた。トンネルを抜けたところで、鉄雄だけが一人先走ってしまったのだ。自分達が鍛えたとはいえ、まだ未熟な鉄雄のことだ。返り討ちにされるか、不安定な道に足を取られて自爆するかもしれない。無線で他の仲間と連絡を取り、こうして整備区間の料金所を通り過ぎた所まではよかった。しかし、鉄雄が見つかる前に、検問に捕まってしまった。

「なあ、通してくれよ！俺たち仲間を心配して追いかけてきただけなんだぜ！」

「そうはいきません、既に警備員から連絡は入ってますのよ。あなたの上下オレンジの身なり、その赤い亀のようなバイク。全く趣味の悪い……今夜ストレンジから飛ばしまくってきたバイカーズでしょう？」

「だから！仲間を知らねえかって聞いてるんだよ！」

「それ以上口応えするようなら、あなたをここで磔にして、その大事な大事なバイクをパンクさせてもよろしくてよ？」

金田はここでぐっと反論の言葉を呑み込む。このツイントールのが言うことは出まかせではない。事実、金田の横で先に強行突破しようとした甲斐はタイヤをパンクさせられて止められたし、山形は掴みかかろうとした所を突然地面に叩きつけられ、今も這いつくばって動けない状態だ。山形の四肢の袖には至る所に金属矢が刺さっている。この目の前の女は、何かの能力者だ。下手を打てば、自分も体の自由を奪われ、より状況が悪くなる。

それでも、仲間である鉄雄のことが心配なことに変わりは無かった。なんでこんな真夜中に、学生であるはずの風紀委員が出張ってくるんだ、このままでは警備員が直に駆けつけてくるだろう、そうすれ

ばまた——そこまで考えたとき、別の風紀委員が駆け寄ってきた。

「白井さん、前方でもう一人見つけました」

「ありがとう。状態は？」

「それが、爆発事故を起こしたらしくて——」

「何だつて!?!」

金田は、報告に來た風紀委員の肩を掴んだ。ひえっ、と声を上げて、その華奢な体をした風紀委員は不安げにこちらを見た。

「そいつだ！俺達の仲間だ！動けんのか？ああ、もう、会わせろ——」

目の前の少女の肩を乱暴に揺さぶった所で、首筋に重い衝撃が來た。いつの間にか背後に回ったツインテールの、痩せぎすな見た目からは想像もつかない、勢いの乗った回し蹴りを受けたのだ。金田はぐふっ、と腹から空気を吹き出して、アスファルトに倒れこむ。

「いい加減にしなさい、この野蛮人！やはり全員拘束しないとダメですわね、警備員の先生方はまだ來ないのかしら——」

そう言つて、ツインテールが両手に鋭利なものを取った。山形を拘束したあれだ。ライトに照らされて、何本ものその先端がギリリと光るのを、金田は見た。やばい——と思つた次の瞬間——。

「——へり？」

遠くの空から、光を点滅させながら、何かがこちらへ向かつてきた。ババババ、という音が次第に上空を覆っていく。金田は拘束されてはいない。また蹴り飛ばされないように、ゆっくりと注意深く体を起こした。

ヘリコプターのようにそれは見えた。テレビの取材などでよくあるものではなく、全体的にもっと幅のある、いかついやつだ。前と後ろの2カ所にプロペラが付いていて、逆光でよく見えなかいが、側面下部には砲塔らしきものも備わっている。ここまで見て、金田はそれが軍用なのでは、と気づいた。

その航空機は土埃を巻き上げ、風紀委員達が張った検問の向こう側に着地した。側面が金田達側に向く形になり、「STF—14」と書か

れているのが見えた。ドアがスライドして開き、中から数人の特殊部隊のような装備に身を包んだ人間が、無駄の無い動きで降りて散開した。

都市軍隊^{アーミー}——。最先端の科学技術を狙うテロから、学園都市を防御するという目的で本国から派遣された、軍事部隊。要人を海外から招聘した時など、空港で警備に当たっているのを、金田はテレビのニュースで目にしたことがあったが、こんなに間近で見るのは初めてだった。暴走集団の小競り合いで軍隊が出動するのか？そんなことは聞いたことが無かったし、金田にとって初めての経験だった。

そして数人の兵隊に続いて、一際大柄な男が降りてきた。こちらは、ごてごてした装備を身に付けておらず、ぴっちりとしたスーツを着ている。春木屋のマスターのようにハゲ頭だったが、鋭い眼光とその体軀は、まるで刃物のように厳しい殺気を放っていた。軍服姿の兵隊が警備する間を悠々と歩くその様は、却って不気味な威圧感を感じさせた。

スーツの男は、金田達や風紀委員がいるこちら側を見やつて立ち止まり、しかしそれ以上近づいては来なかった。俺達に用があるのではないのか？金田が風紀委員の表情を窺うと、彼女達も困惑しているようだった。

「どうしてアーミーが？初春、そんな連絡はありました？」

いいえ、無いです——とツインテールの問いに、もう一人の少女が首を振る。よく見ると、頭に花が咲いているかのようになりすぎる髪飾りが巻かれていた。この状況になんて釣り合わねえ恰好してるんだ——そんな感想が金田の頭を一瞬よぎった。

再びスーツの男の方を見ると、兵隊の一人と何やら話している所だった。口を動かしているのは分かるが、ヘリのローテーションの音がけたたましく、何を話しているかはさっぱり分からない。

「どういうことか説明してくださいー！」

別の方向からいらついた声が聞こえてきた。見ると、眼鏡を書けた藍色髪の少女が、兵隊の一人に詰め寄っている。腕章をしていることから、風紀委員の一人のようだ。

「我々に任せてほしいということだ！これは軍令だ！」

「アーミーの出番ではないでしょう？ただのスキルアウトの抗争ですよ！」

「君たちの手には負えないことだ！」

押し問答を繰り返している。その時、後方からも新たな光源が現れた。

先ほど、金田達に迫っていた警備員の車両だ。金田はあつ、と声を出し、膝をついた状態から立ち上がろうとしたが、ツインテールにきつと睨まれ、そのまま動けずにいた。

「黄泉川先生！アーミーが……」

「白井。ここは一旦引くじゃん」

「どうしてですか？訳が分かりません！」

「ここじゃうるさくて話せないじゃんよ、固法このり！一度支部に戻って説明したげる！」

もちろん、こいつらの事情聴取もね。と警備員は金田達を見下ろし、予想外の素早さで金田の後ろ手に手錠をかけた。くそつ万事休すか、と金田は歯噛みした。しかし、鉄雄はどうなったか、結局まだ分かっていない。

「おい！俺の仲間があつちで一人倒れてんだ！どうなってるんだ！」

まともな返事は期待できないと思ったが、金田はローテーションの音に負けないよう、声を張り上げて兵隊に叫んだ。すると、兵隊はこちらに近づいてきて屈み、顔を金田と同じ位置まで下げてきた。

「安心しろ。病院へ連れてってやる」

「病院？どんぐらいの怪我してんだ！歩けるのか！」

「そっちの警備員に連絡してやるから、詳しい話は後で聞くんだな」

口調は意外に柔らかかった。しかし、兵隊の顔は、そんなことは興味ない、と言わんばかりに無表情だった。警備員だつて？振り返ると、自分を拘束した警備員は口を真一文字に固く結んでいた。

なんだよ、その顔は。お前らグルなのかよ。金田は焦りを募らせた。

へりの方を見ると、何かが乗せられた担架が近くまで運ばれ、そこ

をスーツの男が覗き込んでいた。担架から垂れ下がった腕と、白い袖が見えた。

「鉄雄！おい！聞こえるか！」

鉄雄!?生きてるのか?返事しろ!他の金田の仲間たちも、口々にへりに向かって叫んだ。しかし、警備員や風紀委員に全員既に拘束され、近づくことは叶わない。

「おい、警備員、早く連れて行ってくれ」

兵隊は金田に手錠をかけた警備員にそう告げると、ヘリの方へ引き返していった。金田はまだ必死に声をかけていた。

軍が現れた。担架に乗せられているのは恐らく鉄雄だ。しかも、風紀委員の話によれば、鉄雄は火災を起こすような単独事故を起こしたのだという。それなのに、鉄雄の腕にも袖にも、不自然な程傷が見当たらない。ただ、意識が朦朧としているようだ。何かが、何かがおかしい。

「暴れるんじゃないよ!私らが出る幕じゃないんよ」

なんでだよ!と金田は自分の体を抑えようとする警備員の顔を睨みつけた。その警備員の表情も、どこか不安げだった。

金田だけではない。山形も、甲斐も、仲間も、風紀委員も、警備員も、眩しい光源の向こうで、軍用ヘリが扉を閉め、再び空の闇へと飛び去っていくのを、困惑と不安の表情で見送るしかなかった。

「だから、さつき説明した通りだよ、なあ、先生“！”」

金田は声を荒げた。彼らバイクーズは、とある警備員の詰所に連行されていた。金田は殺風景な部屋の中に立たされており、かれこれ1時間近く尋問されていた。自分達を尋問している警備員は、部屋の中に2人いる。1人は大柄な男で、金田達が通う職業訓練校トレーニングセンターの体育を担当している高場という教師だ。高場は椅子にふんぞり返って座り、太い両足をと両手をそれぞれ組み、角張った顎を余計に突き出すようにして、威圧しながら金田達を問い詰めていた。もう1人は高速道路で金田達を拘束した、ジャージ姿の女性警備員だ。こちらは黄泉川という名前で、金田達の職業訓練校とは別の（多分もつと真つ当な）高校の教師らしかった。黄泉川は入口の扉の前で、腕組みをしながら立っている。何やら物思いに耽っているようで、この小1時間ほど、あまり高場の尋問に口を挟むことはなかった。

「1名が鼻を折り、もう1名が手首を折り、あと1名は全身打撲、レストランの窓ガラス弁償、器物損壊の、オ・マ・ケ、つきだ」

男性の大柄な警備員が、片手をばん、とついて金田に正面から顔を寄せた。「こいつらはすべて、お前たちの敵対チームのメンバーだ。お前らがやったんだろう！金田、お前か？」

高場の重力に逆らうように不自然に固められた前髪が、金田の鼻先まで来たので、あからさまに金田は顔をしかめた。

「ちがいます」

「山形！」

「勝手にチョンボしたんじゃないすか」

「甲斐イ！」

「俺しよんべん行つてて……」

「ふざけやがって！これを見てしろ」

高場は、タブレットを取り出して甲斐の真正面に突き付けた。

「レストランに突っ込んだやつ、監視カメラの映像だ。ここに映ってる顔は」

高場は静止画の一点を拡大させた。

「お前だろう！」

「そのお、やつらがあ、イケないクスリをばらまいてるっていうんでえ、これはごらしめてやんないといけないなあ〜って思ってたえ——」

「じゃあ、なんでまずあたしら警備員や風紀委員に連絡しなかったんですよ」

歯ぎしりする高場の背後から、唐突に黄泉川が声を発した。顔を上げて甲斐を見据えている。甲斐は高場に対する舐めた態度を一転、優等生的な笑みを浮かべた。

「はっ、先生方のお手を煩わせてはいけないと判断いたしましたっ！」
こいつ、女相手にあからさまなんだよ。と、金田の隣に立つ、太眉の蛭名えびなが呟いた。職業訓練校には女性教師が殆どいないので、金田もこういった反応をしたくなる気持ちは理解できた。

「ドラッグが関わるとなると、暴走行為どころじゃなく、立派な犯罪じゃんね。そういうことは、君ら子どもでどうこうせず、私ら大人に任せてほしいんですよ。」

見栄を張るのかというくらい目つきを険しくする高場をよそに、黄泉川は淡々と言葉を続けた。その目つきは高場と異なり、怒りをはらんだものではなかった。むしろ、残念そうな、過ちを犯した生徒相手にどうすればよいか、悩むような表情だった。金田はそんな黄泉川の顔を直視できず、目を伏せた。甲斐達他のメンバーはどうだか分からないが、こういう「話を聞いてくれそうだな」教師相手では、しかも女性となると、普段の態度や言動で反抗しづらくなるのだ。

「黄泉川先生！こいつらには生半可な言葉かけでは通じません！自白もとれたことですし、器物損壊と傷害で、合わせてマイナス5ポイントずつ、それと私の鉄拳指導で——」

「前にも言ったと思うんですけど、高場先生。あなたの『指導』は体罰です。痛みはその場での抑圧にはなっても、根本の矯正には繋がらないじゃないよ……」

「よみかわせんせー、別にいいっすよ、俺らが悪いんですからあ」

指を鳴らす高場を諫める黄泉川。山形が不貞腐れて言った。そう、慣れてるし。と甲斐が言い、別のある者はぐすんと泣き真似をし、別のある者は笑い出した。そんな生徒達の様子に憤慨して、高場がばんと机を叩いて吠えた。

「お前らあーここに連れて来られている意味が分かっているのかあ！」

わかってませーん、どうでもいいです。と好き勝手に金田達が応えていると、黄泉川の背後のドアがノックされた。

「どうぞ」

失礼します、と入ってきたのは、1人の眼鏡を掛けた風紀委員ジャッジメントだった。彼女が扉を閉めるやいなや、黄泉川は風紀委員と耳打ちしながら話をしている。高場はそちらを気にするようでもなく、変わらずに金田達を睨みつけている。

「何の話をしてるんかな……」

虻名が金田に囁いた。

「さあな……」

金田には分かりかねた。先ほどまで高場の怒鳴り声やら、金田達チームの笑い声やらで騒がしかった室内が、今は不思議な緊張感に包まれていた。相変わらず威圧してくる高場のせいではない。黄泉川と風紀委員が小声で話している内容が、何か今までの尋問とは違ったもののように思えた。

風紀委員は、黄泉川に別のタブレットを渡すと出て行った。黄泉川はそれを高場に見せた。高場は目を細めて、眉間に皺を寄せた。「これは、違法なんじゃ……」とか、「いーのいーの、それくらい私も怒ってんじゃん」などという会話が聞こえてきた。

「あー、せんせー、質問いいですかあ」

沈黙に耐え切れなくなったのか、甲斐が手を挙げて静けさを破った。

「今説明してやるところだ！」

「高場先生、これは現場にいた私がするじゃんよ」

高場が苛立たしげに言ったのを、黄泉川が穏やかに制した。黄泉川は椅子には座らず、高場の隣に立って金田達に向き合った。

「質問なら俺もあるぜ……」

金田も静かに問うた。ここまでの尋問の中で、金田が一番知りたく、そしてまだはつきりしていないことがあった。

「あいつのケガはどうなんだ!? 今どこの病院にいるんだ!？」

「島君のことも話すから、だから、話を聞いてほしいじゃんよ」

黄泉川が言った。金田が最も気にしていたのは、鉄雄のことだった。あのとき、アーミーにへりで運ばれてから、一体どうなったのか。高場はそれを聞いても、まともに答えず金田達を先に問い詰めるばかりだった。

「まず、どうして島君が事故を起こしたのか。風紀委員や君らの証言、あの旧市街の高速の監視カメラの映像を照合して辿ってみるんよ」

黄泉川が説明を始めた。金田達は押し黙って耳を傾けた。

「固法や白井達、風紀委員は、旧市街手前のトンネルで火災警報が作動したのを受けて、島君と敵バイカーズ『クラウン』の2名の行先を想定した。それで料金所の先に検問を張ったんよ。私ら警備員もそこに向かった——その火災は君らの仕事じゃないってことは調べてあるから大丈夫。それで、検問に先に来たのはクラウンの2名。内1名はその場で捕まえたけど、もう1名は強行突破を許した。それで、1名の確保と、もう1名の追跡に対応している中、間を空けずに島君がやって来た」

黄泉川は一度そこで言葉を切った。

「島君、かなりスピードを出してたみたいだね。風紀委員達は島君が検問を突っ切るのを止められなかった。そして、島君は検問の先でバランスを崩して転倒していたクラウンのメンバー1人を、所持していた鈍器ですれ違いざまに殴った——時速120kmで勢いつけて殴られて、鼻の骨を折るだけで済んだのは運がいいじゃん」

あいつ、そんな張り切ってたのかよ……と山形が呟き、メンバーは

顔を見合わせた。普段はチームの後ろを走る鉄雄だが、今夜は確かにトンネルで先行していた。そこまで意気込んでいたということだろうか。

「で、そのあとなんで鉄雄は事故つたんだ？」

「その場を直接目撃した者はいないんよ」

黄泉川は、金田の問いに直接には答えなかった。「後から風紀委員が駆け付けようとしたんだけど、ちようど島君を介抱しようとしたところで、アーミーが来た」

「あとは、俺達も見た通りってことか……」

金田が呟くと、山形が首を傾げた。

「なあ、その事故現場を映してるカメラはなかったのか？」

「ある。だけど、その島君が事故を起こしてから、アーミーが撤収するまでの15分間位が、綺麗に消去されていた」

「はあ!?なんで? 甲斐や蛭名が疑問を口にした。山形はぐつと顎を引いて、ゆっくりと言った。

「おい、その消したやつってのは……」

「多分、アーミーね」

「おい、だったらー!」

金田は拳を握り閉めて黄泉川に言った。

「黙ってるだけなんかよ? アーミー相手に、あんたら警備員つてのはそんな臆病なやつばっかなのか?」

「お前たちは分かっていない!」

黄泉川が口を開く前に、高場が金田に怒鳴った。

「アーミーの方が、与えられている警察権はより高度なんだ。俺達はどう足掻いても教師の集まり。奴らはれっきとした軍隊だ。奴らが監視カメラの映像を持ってくといええば、俺達は逆らえん……」

「へっ。どうしたよ……いつもの威勢のいいアゴが縮んじまったか……?」

金田は、普段偉そうなことを言う高場の弱気な発言に苛立って、挑発した。高場は何か言いたそうに口を開いたが、黄泉川がそれを制した。

「もちろん、私らも黙ってるばっかじゃないんさ。」黄泉川が金田に諭すように言った。「こつちに戻ってからも再三、問い合わせたんだけどね、向こうが言うには『捜査に関わることは答えられない』んだとさ。」

黄泉川の説明を聞く内に、金田の頭の中では、疑問がどんどん膨らんでいった。

「くせえな……」

「えっ、何の匂い？」

「ばか、ちげえよ。」と、金田は山形に釘を刺す。それから、黄泉川に視線を戻した。

「鉄雄のは、ただの事故じゃねえ……アーミーが隠したがっているものはなんなんだ？」

「私も、それが気になるの。だからね——」

そこで、黄泉川はそこで少しいたずらっぽい笑みを浮かべる。甲斐の顔がまたしても緩んだ。

「——映像を取ってきた」

黄泉川はそう言って、先ほど風紀委員から受け取ったタブレットを示して見せた。

金田にはしばらく、黄泉川の言った意味が分からなかった。それは、他のメンバーも同じだったようで、互いに顔を見合わせた。

「あの、とってきたって……」

「そう、盗^とってきたの」

タブレットをひらひらとさせながら、黄泉川が事もなげに言った。

「それってえ、先生、ハッキングってこと？」

甲斐が目を輝かせて聞くと、黄泉川は素直に頷いた。

「風紀委員の中に、その辺の技術に長けたのが居てね。普段はそれで私も注意するんだけど、今回はちよつとお願いしてね」

「でもいいのかなア、アーミー相手にそんなことをしちやって……」

小太りのメンバー、由井が気弱そうに漏らしたが、黄泉川は毅然とした表情で答えた。

「君達に是非分かってほしいんだけど……私達警備員がアーミーと違

うのは、私達は教師だったこと。教師は子どもを守るもんじゃんよ。だから——」

ここで、金田は黄泉川にじっと見つめられ、思わず顔を引いた。黄泉川の目は、久しく金田が見たことのない、子どもを慈しみ、守ろうとする正しい大人の目だった。

「島君がどうして傷ついたのか、そして今はどこにいるのか。突き止めたいたのは君らと同じ気持ちじゃんよ。ねえ、高場先生！」

急に名前を呼ばれて椅子に座ったままの高場がびくん、と肩を震わせた。

「も、もちろん、そうですとも！島は俺の生徒だからな！」

思ってもないことを、と金田は内心で悪態をついた。

「高場先生、訓練校の子どもたちを守るのは、まずはその教師たる貴方じゃんよ。だから、力に訴えるよりも、先にやるべきことがあると思うじゃん……」

「なあ、その映像、早く見せてくれよ」

縮こまる高場をよそに、金田は黄泉川に頼んだ。あの高速の事故現場から感じていた違和感を、吹っ切りたい気持ちが高まっていた。どうして、鉄雄は運ばれていったのか。アーミーが何を隠しているのか。それを知る手がかりを得たかった。

「いいよ。プロテクトを解き切れなくて、画質が荒いんだけど……」

黄泉川は、タブレットを金田達が見られるように、テーブルの上に置いた。金田達は、顔を寄せ合って画面を覗き込んだ。画面には、誰もいない夜の高速を映す静止画が表示されていた。工事中の区間のためか、街灯の明かりもなく、暗視モードの画像はかなり見づらい。「最初、島君に何があったのか、スローで再生するよ」

そう言つて、黄泉川は細い指で画面を弾いた。すると、断続的に映像が再生され始めた。

道路上には、誰もいない。と、片側から光が差してきた。鉄雄のバイクのライトだった。ライトで道路が照らされていくと、道路上に何かが立っているのが映し出された。

「ん……？」

山形が声を漏らすとほぼ同時に、金田は画面をタップして映像を止めた。

「おい、これ、なんだ……」

金田は画面のほぼ中央を指さした。鉄雄のバイクのライトが照らす先に、明らかに人が立っている。よく分からないが、大きさからして子どもくらいの背丈だ。

「ひとまず、最後まで見てほしいじゃんよ」

黄泉川が再び画面を操作し、映像が続けられた。ライトで何者かを照らした後、鉄雄はそれに気づいたらしく、バイクを急に横倒しにして止まろうとしている。と、数カット置いて、爆発が起き、道路の上に炎と煙が上がった。

「おい、こりゃあ……」

山形が声を漏らした。

「そういうことか、こいつのせいで鉄雄は事故ったんだな」

蛭名が憎々しげに言った。

「けどよオ、なんかおかしいぜ」

甲斐が蛭名と山形に視線を向ける。

「そうだ、人とぶつかって爆発なんか起こすかなア」

横から由井が疑問を述べる。

その通りだ。人と、猛スピードで走るバイクとがぶつかれば、それはバイクが人を跳ね飛ばす結果になるはずだ。だが、この映像ではバイクが派手に爆発を起こしている。それこそ、何か壁のようなものにぶつかって、車体がひしゃげてガソリンに引火したかのような……。

「君達の疑問も最もじゃん、もう一度、この爆発の様子を見て」

黄泉川は映像を戻して再生した。金田達は目を凝らして見る。

ライトの明かりが差し込む。鉄雄のバイクが何者かを照らす。鉄雄がバイクを横倒しにする。何者かに鉄雄が近づいていく……。

「あっ」

金田は映像のおかしいことに気づき、声を上げた。同時に、黄泉川が映像を一時停止した。まさに、炎が上がった所だ。

何者かは、炎に照らされている。炎は、それよりも手前で上がって

いる。

「なんだあ、生きてるぞ?」

甲斐の声が裏返った。

「ぶつかったんじゃない……」

金田はタブレットから顔を上げて、黄泉川に向かって確かめるように言った。「何か、バリアーでも張ったかのよう……」

「そう、これを見ると、この中央の人物が見えない壁を張って自分の身を守ろうとしているように見えるの、目測、ざっと10M手前って所かな」

頷きながら、黄泉川が金田に答えた。

「念動力か、テレキネシス空気操作か……」

高場も出っ張った顎に手を添えて唸った。

「能力者の可能性がある」

「まだね、この人物のことで続きがあるの」

黄泉川が画面に触れると、止まっていた映像が動き出した。燃え立つ炎に照らされたその人物は、数歩歩いて――。

「……おい、消えたぞ?!」

「なんだ、テレポーター瞬間移動者か!」

「やっぱ能力者かこいつ!」

口々にメンバーが思ったことを口にしてしていると、黄泉川が映像を止めた。

「この人物は、不自然に現場から消失。この後、風紀委員が駆けつけるも、アーミーがやってきて、島君を担架に乗せてへりへ運び込んだの」「鉄雄の様子はどうだったんだ?」

金田は黄泉川に聞いた。

「映像を詳しく見たけど、まあ手足は無事みたいだし、本人も少し動いている様子があった。骨折や打撲があるかもってところ、恐らく命に別状はないじゃんよ」

金田達が口を開く前に、黄泉川は言葉を継いだ。

「そこで、君達にお願いがあるじゃんよ」

へ?お願い?と甲斐が素っ頓狂な声を上げた。

「そう。お願い」

黄泉川は、悪戯っぽくウインクしてみせる。

「今夜の暴走の処分について、ポイントのマイナスとかはひとまず保留にしてやるじゃんよ」

「マジかよー！」

甲斐や由井が頬を緩ませた。

「その代わりに何かしろってことか？」

山形が黄泉川に聞いた。

「ちよつと協力してほしいじゃんよ」

君達の仲間に何があったか、突き止めるためにもね。と、黄泉川は答えた。金田には、黄泉川の言葉やその立ち振る舞いが、隣に座る高場よりもよほど頼りがいがあるように見えた。

黄泉川は、希望の色を目に湛えながら、金田達に協力を呼びかけた。先ほどもまでの罵り合いのような雰囲気とは打って変わって、部屋の中には緊張感が漂っていた。

「この、島君の事故に関わっている謎の人物。映像を解析してみたんだけど、同じような特徴の人物は、この映像から分かる限りじゃあ図書館に登録されていなかった。私達はこの人物についてももう少し探りを入れて、そこから島君の手がかりを得たいと思うの。彼をこの学園都市のどこかで見かけたら、風紀委員か私達警備員に知らせてほしいじゃんよ」

「へっ、鉄雄が怪我したのはこいつのせいなんだろう」

金田は不敵に笑った。

「同じチームの仲間として、ただ黙ってつーほー、て訳にはいかねえな」

「アーミーとの繋がりも否定できないんだぞ！」

高場が念を押すように言った。

「下手にお前たち子どもが探りを入れるな。見かけたらでいい、俺達に知らせてくれるだけでいい」

「もう一度言うけど、君達の身を守るのが私達の役目じゃんよ」

黄泉川が高場に続いて言った。

「他の警備員や風紀委員にもこの情報は共有しておく。頭の片隅に入れておく位でいいの」

「っていうけどさあ、先生」

甲斐が腕を頭の後ろで組んで言った。

「こんなはつきりしない監視カメラの映像だけじゃ、どんなやつか分かんないぜ」

「さっき、『彼』って言ったよな?」

山形が黄泉川に言った。

「男だって分かっているってことだよな……」

「その、人相が分かる位の画像があるんだろ?」

金田が言うと、黄泉川はクリップボードから2枚の紙を手にとった。

「ええ、ここに——かなり特徴的な外見をしているからね」

黄泉川は、その2枚のプリントアウトした画像をテーブルの上に置いて見せた。

「だからこそ、目撃したら知らせてほしいじゃん」

金田達は2枚の画像を覗き込んだ。2枚とも、謎の人物を拡大して映した画像だった。

まず1枚目。鉄雄のライトの眩しさに手を翳したのだろうか。右の掌に、刺青か何かで数字が描かれているのが映っていた。

26

そして、より目を引いたのがもう1枚の画像だ。1枚目では翳した手で顔が隠れていたが、こちらでは顔がはっきり映っていた。

子どものような体躯に張り付いていたその顔は、皺が深く刻まれた、学生とは程遠い、明らかに男の老人の顔だった。

「どう思います?」

金田達が部屋を出て行った後で、黄泉川は高場に問い掛けた。

「あいつらが手掛かりを見つけるとは期待しませんな。何せ毎晩バイクで走るしか能がない奴らだし——」

「高場先生、あの子たちのことでなく、この人物——」

黄泉川はクリップボードに挟んだ、謎の小男の画像を見つめた。

「そいつですか……かなり小柄な老人に見えますが」

「もちろん、外見的な特徴も気にはなりますが」

黄泉川は画像を見つめながら言った。

「この彼が、何らかの能力者だとしたら、あなたは何だと思えます?」

「やはり能力者ですよね、さっきも言ったかもしれませんが、念動力でバイクを止めたか、或いは空気操作で壁を作ったか……」

「ええ、そして、その場から突然消えた」

「消えたってことは瞬間移動者……え？」

高場は椅子から立ち上がって黄泉川を見た。黄泉川も視線を高場に向けている。高場は黄泉川の言わんとすることが理解できたようだ。

「一度に複数の能力使用の特徴が見える、ということは……」

「デュアルスキル
多重能力。かもしれない」

黄泉川は重たくその言葉を口にした。

「しかし——研究者たちが血眼になって突き詰めたのに、それが実現したなんて話は聞いていないし……もし実は成功していて、それがしかもアーミーと繋がっていたとしたら……」

「ええ、大事件になるじゃんよ」

学園都市の科学発展を担う、研究者派閥の勢力図が一変しかねない位の。一介の教師でしかない黄泉川と高場であるが、上層部認可の警備員という組織に属している以上、その位の予想は容易についた。

「黄泉川先生……統括理事会に報告すべきだろうか？」

「いや……」

黄泉川は返答しかねた。理事会の方針で、多重能力に関する研究は一通り不可能だということを決着がついていることになっている。それがもし続けられていて、何らかの成果を出しつつあるとしたら、行っているのは、暗部……。

「警備員の間では情報共有を密にするけど……思った以上に、慎重に事を進める必要があるかもしれないじゃんよ……」

自分達がハッキングしてまで掴んだ情報が、何か大きな相手と相対していることの端緒かもしれないと、黄泉川は先程までの金田達に対する温かな表情を変え、口を真一文字に結んだ。

「確かにあの顔は一度見たら忘れらんねえけどよオ……」

甲斐が愚痴を吐いた。

「なんだったら、かわいい女の子だったらよかったのによ」

「そーそー、それ分かるウ」

山形が同意する。

1時間以上の拘束から解放されて、金田達は黄泉川が呼んだタクシーで、職業訓練校の男子寮へと帰る車中だった。金田達はバイクを返して欲しいと頼み込んだのだが、これは帳消しとはならず、1週間の没収。遂には高場の度重なる喝で諦めざるを得なかった。2台のタクシーの内、1台には金田のほかにも、甲斐と山形が乗っている。

「金田ア、この後どうするよ」

「そうだな……とりあえず、明日白^{びょういん}ビルを当たってみるか。あと力オリちゃんにも念のため聞いてみようぜ」

甲斐の問い掛けに、金田は一呼吸置いて答えた。

「アーミーがそこらの病院に鉄雄を入れてくれるとは、あまり思えないけどな……」

「なんだよ、まさか本土に運ばれたって言うのか？」

「そうとは言ってるねえよ、もしそうなら、俺らには手も足もでないだろうが……」

甲斐と山形のやり取りを聞き流していると、金田の頭にふと別の疑問が湧いてきた。

「なあ、甲斐」

「えっ、なんだよ」

甲斐は金田に名前を呼ばれて、金田の方を見た。

「お前、いやにあの黄泉川って警備員に馴れ馴れしかったな……」

「えっ、いや、そんなことないって……」

「甲斐さあ、もしかして、知り合いなん？」

山形が割り込んできた。

「いやあ、ほんとなんでもないって……」

「なんだよ歯切れわりいなあ。さてはあの胸ばかり見てたんだろ
うが」

山形のからかうような突っ込みを聞きながら、金田は甲斐の過去について考えていた。甲斐がこうやって話をはぐらかそうとするのは、甲斐の昔に関わるのが話題に上がったときだ。本人は話しながら

ないが、噂では甲斐は元々育ちが良い家庭で、中学位までは模範生だった。何かのきっかけで金田達と同じように道を外した、と聞く。もしも中学の時、あのツインテール女と同じように風紀委員に入っていたようなことがあれば、警備員とも面識があるのかも……。

「胸といえはさア、あのアゴ野郎、やけに黄泉川先生に対してへこへこしてたよなア」

甲斐が話題を逸らすように言った。

「だよなア」

山形が相槌を打った。

「あの女たらしめ、今頃誘ってるかもしれないぞ」

「ジャージとかじゃなくてさ、もう少しかわいいカツコすればいいのになア」

そんな他愛もない会話をしつつ、金田達は、明日土曜日に病院を当たって鉄雄を探すこと、もしあの謎の小男を見かけたらすぐ互いに連絡を取ること、などを確認した。

こうして、クラウンとの抗争、鉄雄の謎の事故、警備員からの協力依頼など、色々なことが起こった夜は更けていった。

「もうこんな時間だ……どうです、黄泉川先生、このあと一緒に夜食でも——」

突き出た前髪をさらっと片手で掻き上げて、高場は黄泉川に笑みを見せた。

「気持ちありがたいじゃんけど——」

黄泉川はため息を大げさについてみせた。

高場の黄泉川に対する何度目か分からないアプローチは、この夜も実を結ぶことはなかった。

Ⅱ. 上条

6

7月2日未明 —— 第七学区 某大学病院

「そちらからの報告書は読ませてもらったがね？ ずいぶんとちぐはぐな所があるように思えたよ？ もっとも、患者の容態が良い分には、文句は言わないけどね？」

一つの病室に、一つのベッドが置かれていて、その周りには何人が集っている。中肉中背の、カエルのような顔をした医者は、語尾を上げる特徴的なイントネーションで話している。

「同意見だ」

敷島大佐が答えた。医者の話し振りは、ともすると相手の気を悪くしそうなものだが、特に眉間に皺を寄せることもなく、敷島大佐は事務的に話している。

空がもうすぐ白み始めるか始めないかという時間帯。最先端の街が最も静けさに近づく時に、計器の電子音だけが規則的に発せられる病室には、ベッドを囲む男達の気配も覆い隠すような静謐さが漂っていた。

「けれど、医者として私から言わせてもらおうよ？ 怪我を治し、元のように陽の下で健康に振る舞えるようにすることを治療と呼ぶからね？ 君らのような兵隊さん方の考えには、できればあまり関わりたくないのだが——」

カエル顔の医者は手元のクリップボードに挟まれた紙をめくった。擦れる音が、部屋の静けさに少しの変化をもたらした。

「——なぜ、昏睡させ続けておく必要があるのかね？ 私なら、今すぐにも目覚めさせてやることができるよ？ もうじき朝だしね？」

「我々はこの者に関心がある」

敷島大佐は、微かな医者の反抗心を感じたのか感じなかったのか、どちらにせよ取り立てて反応を示さない。

「そこでドクター、治療費はこちらで出す。彼を」

敷島大佐は、額に包帯を巻かれ、ベッドで眠る島鉄雄を、ごつごつした手で示した。

「我々が預かる」

医者は視線を書類に向けたまま、黙っていた。敷島大佐は手を下して、念を押すように言った。「何かあるかね？」

敷島大佐の聳えるような体軀を、医者は一度見上げて、また手元の書類に目を落とした。ややあつて、一言答えた。

「何もないね」

7月2日昼 —— 第十学区 職業訓練校

真上に居座った太陽から、焼け付くような日差しが重たく降り注いでいた。職業訓練校の建物は、南に向かつて開く凹の形をしており、遠目に見る限りでは、学区の中でも比較的小奇麗な外観だった。しかし、実際に建物へ入ろうと歩いてゆけば、荒れた様子が見てとれる。中庭へ上がる階段は何か所も亀裂が入っており、箒をひっくり返して地面に突き刺したような櫟の木々は、その薄茶色の樹皮に、いくつもの下劣な落書きを刻んでいた。

今日は日曜日だが、訓練校は授業の有る無しに関わらず、行き場のない少年達の溜り場となっている。一時は厳密に施錠しようとしていたらしいが、警備が少年たちの荒れた行動に追いつかず、半ばサジを投げたような状態になって久しい。うだるような暑さの中、のろのろと行き交う学生達の背中では、いつも以上に曲がって見える。一際大きな櫟の木陰に置かれたベンチに、何人かの少年が額を突き合わせていた。

「ほら、買ってきたぜ」

「サンキュ、甲斐」

金田は甲斐から投げ渡されたパンの袋を早速開けた。集まっているのは、金田達チームのメンバーだ。

「なんだよ……お前またミルクパンなんか食ってんの？」

「文句あつかよ」

焼きそばパンの麺を口元からぶら下げた山形を、金田が睨みつけた。

「甘過ぎんだよ、お子ちゃまじゃねえんだから」

「どうせ食うなら、タンパク質とカルシウムが入ってるのがいいだろ？」金田が一口目を頬張りながらもぐもぐ言った。「俺達は健康優良不良少年なんだからよ——」ところで、鉄雄の白ビル、判った？」

「駄目駄目。ゼエーンゼエーンダメ」

焼きそばパンの紅シヨウガを口元に張り付けた山形が答えた。

「俺思っただけだよ」

人差し指を立てて、甲斐が言った。

「変だぜ、やっぱし」

「ああ、俺もそう思うぜ、山形はなんでなんも飲まないでパンをばくばく食えんのか……」

「めんどいんだよ」

「そうじゃなくてさ……」

金田と山形の言い合いを制して、甲斐が言った。

「鉄雄のお袋に聞いても知らねえっていうし、アゴ高場に聞いてもナシのツブテだし」

「あの野郎オ、味方だとかほざいといて、能無しめ……」

ま、最初から期待してねえけどな、と金田は言った。

「カオリちゃんは？」

「電話してみた、けど、何も聞いてないって」

甲斐が答える。

「鉄雄の野郎オ、彼女を心配させやがって、どこに行ったんだア？」焼きそばパンの青のりを口元にまぶした山形が眉間に皺を寄せた。

「ジャージ先生にいい報告はできそうもねエなア」

甲斐がベンチの背に深くもたれて言った。

「アーミーの基地に行つて、聞いてみればいいんじゃないやね？『こんちは、ぼくらのともだちをさがしてるんですけど』ってさ」

「バカ言えよ……たださ、俺ひとつ気になる話を掴んでさア」

金田がもったいぶったように切り出すと、周りのメンバーは目を細めて金田の方を見た。

なんだよ。

まさか風紀委員のJCとおともだちになったとかア？

バーカ、そんなこと言ってるからお前は童貞だつっーの」

メンバーが口々に好き勝手言い始めたのを、金田は腕を広げて制する。

「違えよ……キャブレターボーイズのリーダーに聞いた話なんだけだよ」

メンバーは互いの顔を突き合わせた。

「第七学区にさア、それこそ上層部のお偉いさんから暗部のゴロツキまで受け容れるお寺みてエがあるんだと」

「なんだそりゃ」

「本当なんだろうなア金田？」

「俺も実際お世話になった訳じゃねエけどよ……案外、ででんと建ってるらしいのよ、その病院」

金田が続ける。

「……で、そんな病院なら、俺らみてエな不良だって、お見舞いに行ってもいいだろ？」

「でもさア、第七学区だろオ……俺やなんだよね、あの辺」

甲斐が愚痴をこぼす。

確かに、俺らが歩くような場所じゃねえよなあ、と山形や他のメンバーも言う。

金田が、微かに眉間に皺を寄せた。

「確かにいけすかねエき……ただ、それだけ顔の広い医者なら、何か知ってるかもしれねえだろ？」

結局、その日の午後は、その噂の病院を当たってみようという話になった。

第七学区に出掛ける、というのは、金田だって気が進む訳ではなかった。他のメンバーだつてそうだ。

そこは金田達にしてみれば、いわば、‘まとも、な所だったからだ。

道中では、制服姿の女子学生や、休みを利用して洒落た服装をした男子学生の、奇異なものを見る視線が金田達に刺さった。金田達の中でも、特に普段の工業科の作業で使うようなツナギを着た山形の服装は目立ったし、先を歩く金田や甲斐の、顎を引いて上目づかいに前をキツと見据える歩き方は、普段この辺りを歩き慣れない者であるという雰囲気周囲に発するの十分にだった。

能力開発。

金田の脳裏に、何度目ともつかない言葉がよぎる。

第一〇学区とは打って変わって、この道端には、吹き付けられた落書きも、割れた瓶やら缶もない。ゴミがあつたとして、学園都市製の自動清掃ロボットがすぐ回収してくれているのだろう。様々な人の声、モノの音が通り過ぎていく通りは、普段金田達が居る場所とは正反対の、明るく開放的な空気に溢れていた。

自分が施設に引越してきた頃のことを思い出す。

あの頃はまだ、そんな外れてなかったっけ。

「おい、金田」

「……？ああ？」

「何ボサツとしてんのよ。返事しねえからさア」

「ん、ああ——」

金田は少し頬を緩めた。

「ちよつと、な」

昔がどうであれ、今の仲間が大切だ。金田は先ほどまでの考えを払った。甲斐や山形、チームの仲間。バカ騒ぎをしたり、思い切り走ったり、警備員の厄介にもなれど、自分には仲間がいる。

そして、鉄雄だってその一人なのだ。金田は自然と歩みを早めた。

「島……さんでよろしいんですね？」

「あア、そうだよ。ここに来てないかなあ」

金田が別チームの知り合いから聞いた病院は、特に変哲のない大学病院だった。玄関から受付へと歩いてきたが、ここまでの周囲の様子は、特に怪しいところのない、ただの清潔な病院だった。暗部などという薄汚れたものの気配は、少なくともここまではない。

「昨日の深夜、バイクで——あー、転んだんだけどさあ……」

金田は受付の看護師に向かって、鉄雄が入院しているかどうかを尋ねていた。しかし、看護師の答えは、「そのような患者は運び込まれていない」とのものだった。

「昨晚に交通事故でうちに来た患者さんなら何人かいますけど、鳥さんという方は受けてないですね」

「でもさあ、夜遅い時間なもの、宿直の先生とかに聞いてみてもらえないかなあ」

「あの、でも恐れ入りますが、皆さんは……」

看護師は少し首を伸ばして、金田の後方を見やった。待合のソファにしかめ面で座った甲斐達は、やはり不良らしい殺気が漂ってしまった。特に強面の山形や、だぼついた服でどかんと座る、大柄の三方などは、一般の人からすれば近寄りがたい雰囲気だろう。看護師の顔は、応対の事務的な笑顔から、早く帰ってくれ、という迷惑そうな表情へと変わりつつあった。

「なんだよ、学生証なら出したでしょオ？3回位再発行してるけど本物だよ？訓練生だからって怪しい目で見るのは良くないと思いますけどオ？」

「いや、でも、とにかく、お問い合わせの患者さんは、こちらには来ていないので——」

「もういいよ、金田」

甲斐が諦めたように立ち上がって言った。

「帰ろうぜ」

そうだな、胸糞悪いし。と山形がぼそつと呟いた。金田も踵を返して、出口へ歩き始めた。

「誰か友達を探しているね？」

そこに、金田達へ声をかける者がいた。メンバーが声のした方を見

やると、白衣をまとった小太りの医者がこちらを見返していた。カエルのような顔をしている。

「何か知ってるのか？」

金田が数歩早歩きで詰めて問うた。ブーツの靴底が、リノリウムに擦れて甲高い音を放った。

医者は顔の中心から大分離れた両の目をぱちぱちさせて、金田を見た。物珍しいものを見るようで、しかし泰然と構えているような、感情の読み取りづらい目だった。

「患者の個人情報に教えることはできないよ？」

「はア？何だそれ、呼び止めておいて」

甲斐が反抗心を露わにして言ったのを、山形が制した。

「まあ待てよ——情報があるってことは、何か知ってるんだな？」

「そうだな……先生、目の下にクマができてるぜ」

金田が先を続けた。

「昨日の夜ここで働いてたんじゃないか？」

「患者さんわきやくでもない人に敬語を使うのはやめておくよ？まあ君達も相当、年の上下に関係なく、物怖じもせずに話すみたいだしね？」

「もつたいぶらないでくれ、どうなんだ？」

金田が答えを急かすように聞いた。

「俺らの仲間なんだ。会わせてくれよ」

カエル顔の医者は、やや肩を上下に動かして一息ついた。

「ここからは私の独り言なんだけどね？」

そう、口を開いた。

「昨日の夜に、全身至る所に打撲をして、一時的に意識を失った少年を治療したんだけどね？私は医者だから当然治そうとしたし、99%は治したよ？けど、ちよつと私の主義が通らない事情があつてね？」

医者は、見舞客や散歩に出た患者のいる中庭へ目を細めた。夏の日差しは明るさだけを窓から差し込ませていた。空調の効いた受付前のロビーは、先ほどまで金田達が歩いていた街中とは異なつて、肌にな静かに粟立つ涼しさを、消毒用のアルコールの匂いと共に漂わせていた。

「誰か邪魔をしたのか？」

金田が問うた。

「私はこう見えて、この都市まちの色んな人たちに顔が利くんだけど、普段あまり関わらない人たちもいてね？外部から来た人たちなんかは特にね？」

「アーミーか!？」

メンバーが顔を見合わせた。

「……それで、鉄雄は？」

「私は気が進まなかつたんだけどね？本国の政府機関の仰ることには——」

「鉄雄はどこだつて聞いているんだよ？知ってるんだろ？」

金田がやや声を荒げた。金田達のただならぬ雰囲気を感じてか、周りの患者や見舞客は自然と遠ざかっていた。

「私には知らされていない。君たちが思っている以上に、彼は大変な事に巻き込まれてしまっているかもしれないんだよ？」

「何だよそれ、どういうことだ？」

「ただ、先ほどから様子を見ていたが」

医者は金田達メンバーを見渡した。

「君たちは、とても仲間思いなようだ、見かけによらずにね？」

いきなり何を、と金田達は面食らった。

「私は医者だよ？医者は、患者を治するのが仕事——怪我や病気や、それに、もしも傷ついたなら、人との、仲間との絆も治したいと思うんだがね？君たちが彼を追うなら——答えは持っていないが、一つ、手掛かりになりそうなおことがあるんだよ？」

メンバーと顔を見合わせる金田を、カエル顔の医者はじつと見つめた。

「知りたいかい？」

第七学区の、とある学生寮へと向かう道を、一人の少年が歩いてい

た。成績が冴えない彼は、高校の土曜補修を終え、くたびれた体を、午後の暑さの中引き摺って帰っていた。

中身の貧しい財布との相談にはなるが、何か飲み物を買って帰るか——そう思案していた時。

ビルとビルの間隙を抜ける脇道の奥から、ドスの効いた声が複数聞こえてきた。

反射的に顔をそちらへ向けると、明らかに素行不良そうな若者たちが、暗がりの中で何かを囲んでいるようだった。第7学区は明るい表通りとは裏腹に、少し裏路地へ出れば、特に夜間や休日ともなると、不良グループが出没することも多い。

きつと誰かが不幸なことにカツアゲでもされているのだろう。助けてやろう、という正義感が顔を覗かせたのも束の間、やはり関わらないのが身の為、と彼はそそくさとその場を立ち去ろうとした。

ピシッ

明らかに聞きたくない音、ガラスに小石をぶつけたようにヒビが入る音が聞こえた。彼が近くにあった電化製品店のショーウィンドウを見やると、パキンッ！と展示ガラスが割れた。

ガラス片が外側へ向けて飛び散る。驚いて彼は咄嗟に学生鞆で顔を庇い、道の方へと数歩よろけた。行き交っていた人たちが驚いて立ち止まった。その時ほぼ同時に、脇道の奥からくぐもった叫び声が聞こえてきたが、彼には気にしている余裕はなかった。そして次の瞬間、

あぶない!! と誰かが叫んだ。

危ない? 言葉を反芻して辺りを見渡した彼の周りに、バラバラと何かが落ちてきた。

いくつものコンクリート片だった。大きなもので拳を超えている。はつとして上を見やると、ビルから道へせり出した看板が、根元から抜き取られた雑草のように落ちてくる所だった。

彼は鞆で頭を多い、身を屈めて、どちらとも知れず無我夢中で駆け出した。間一髪で、背後に叩きつけるような衝撃を感じた。

「不幸だ」

悲鳴や驚きの声が次々に飛び交う中、彼は眩いた。少し間を置いてから、周りを見渡す余裕が出てきた。

目の前の、脇道への入口に、一人出て来た。子供のようだ。

強烈な白日の元に、その子どもらしい人物の顔が晒された。その顔が不幸な少年の方を向く。

体格に恐ろしく不釣り合いな、皺の深く刻まれた老人の顔を、上条当麻は口をぽかんと開けて見つめた。

学園都市のとある場所に、^{アーミー}軍の管轄する病院がある。最先端の建築技術をもって立てられる施設が多い学園都市にあって、その無骨な外観は、快晴の夏空に向かつて、静かではあるが異質さを放っていた。そこは一般の患者を受け入れるような場所ではなく、主に軍属の患者について扱う病院だった。

その建物の中でも高層に位置する一室で、敷島大佐はD r. 大西からの報告を受けていた。大佐は手を後ろに組み、足を肩幅に開いた休めの姿勢で、ガラス越しの外の風景をじっと見つめていた。岩のように佇むその姿勢は、背広で固めているとはいえ、如何にも軍人という気質を纏っていた。

「ここに移してから半日経つが、その島という少年の脳波について、何か分かったのか？」

対して、D r. 大西は飾り気の無いデスクに向かい、椅子に座って何枚もの資料をめくりつつ答える。二人の視線は全く別方向にそれぞれ向かっている。

「彼がハイウェイを暴走している最中、26号をあわや跳ね飛ばす所だったようです。その時、26号は突進してくるバイクを防ぐため、能力を強力且つ瞬間的に展開しました。私の推測としては、その際に島という少年の脳波が26号の力に共鳴し、特異な形で検出されたのではないかと……今はそのような兆候は見られませんが、再び危急の状態に晒された時、もしくは外部からの刺激を与えることで、再現されると思われます」

「才は？」

「15才と、7か月ですな」

「今から伸びるか……？」

大佐は振り返り、大西を見た。何か期待を込めた声色だった。

「個人差がありますからな」

大西は厳しい表情で答えた。

「過去には18才を過ぎてから覚醒した例もありますからな」

「怪我の状態は？」

「頭部の包帯は外すのにもう少し時間がかかりますが、身体・精神共に至って問題ないとの見立てです」

その時、二人の居る執務室のドアがノックされた。

「失礼します」

入ってきたのは、黒服にサングラス姿の男だった。サングラスの黒色はかなり濃く、間近で見ても瞳を窺うことはできない。弦の根元の部分から張り出すように小型の機械が装着されている。

「ご報告申し上げます。26号が第七学区に出現。能力を使用し、騒ぎになってきているようです」

「騒ぎだと？まだ捕まえられんのか」

大佐の声色は、大西と話す時とは格段に変わり、非常に威圧的なものになった。

「空間移動を繰り返すもので、追跡に全力を挙げておりますが……」

「今、どこにいる？」

黒服の部下は右手でサングラスの機械端末に僅かに触れた。

「最新の情報では、同学区の商店街を逃走中とのことですよ」

「警備員アンチスキルなどに捕まってみろ、被験体ナンバーズが明るみに曝されれば、奴ら鬼の首をとったように圧力をかけて来るぞ！」

大佐は痺れを切らしたかのように大股で部屋の扉の方へと歩き出した。

「ドクター、島の処遇はひとまず経過観察とし、一旦帰せ。明日夜に再検査とする。波の追尾を抜かりなくするのだ」

「はア、分かりました」

椅子に座ったままの大西を残し、大佐は勢いよく部屋を出ていき、慌てて部下がそれに追隨していった。

大西は小さくため息をつき、紙資料をトントンと叩いてまとめると、傍らのパソコンのディスプレイを見つめた。

「一過性のものでないとするなら……この一致は……いやしかし……」

大西の見つめるディスプレイには、赤や黄色、黄緑色など、鮮やか

な色をいくつも帯びながら回転する王冠のような、独特な3Dの波形が映し出されていた。

7月2日午後 —— 第七学区 学生街

「結局のところ、全然分かんねエな、鉄雄のやつがどこにインのか」

甲斐が小石を蹴とばしながら言った。金田達は大学病院を後にして、これからの行動を打ち合わせるために、第一〇学区へと一旦戻ろうとしていた。

「特別な脳波だとか……まるで鉄雄が能力に目覚めたみてエな言い方じゃん、あの医者さア」

「胡散くせエよなア」

「あいつ一人で抜け駆けとか、よしてくれよ……」

チームのメンバーは口々に言う。

カエル顔の医者言うには、鉄雄の怪我自体は大したことはないものの、脳波に異常が見られたため、ある組織が関心を示して、移送されたという。昨晚の騒動からして、組織というのが十中八九アーミーの事であろうことは、金田達に容易に予測できた。

（まあ彼らもそれなりの常識は弁えた人たちだからね？この都市の熱心な研究者に比べたら……すぐにずーっと身柄を拘束、なんてことはないと思うがね？今日明日にでも君達の元へ帰るとは思うよ？）

金田は、カエル顔の医者の言葉を反芻する。

（ただ、なんとなく、一度再会できたとしてもだ。彼を見放さないように、注意を払った方がいい気がするんだね……）

金田は携帯電話に登録された番号を見た。「黄泉川せんせ」とある。いつでも頼つていいのだと、恐らく裏の無い善意で、黄泉川というアンチスキルの教師は言っていた。

だが、何と説明したものか。

鉄雄は脳みそに異常があるらしい、などと云った所でどうにかなるものではない。金田にはそう思えた。

「おいイ、なんか騒がしいぜ？あつち……」

金田の思考は、唐突に山形が何やら指差して声を上げたことで遮られた。

「パトカー停まってんな……」

「行ってみようぜ」

第七学区のこの通りは学生街であるため、休日ともなれば歩き交う若者が多く、寧ろ車はあまり通らないのだが、前方ではアンチスキルの警邏車両が数台、路肩に灯火を光らせて停まっていた。規制線が引かれているのか、前を覗こうとする人々で混み合っていた。

渋滞の近くまで一行が来てみると、どうやら建物の看板の落下事故があつたとか、ガラスが割れただとかという話が聞こえてきた。

金田の隣で、甲斐が怪訝そうな表情を見せる。

「オンボロの店の看板が落ちただけだろ？の割にはさ、やたらうるさくね？」

「すつ、すみません！ちよつと通してください！」

その時、群衆を掻き分けて、白いワイシャツ姿の男が飛び出してきた。金田よりは背が高く、男の突進を受けて、金田は思わず尻もちをつく形になった。

「っ痛エー！」

「あつ、ごめん、悪い！」

言うが早いか、男は足早に金田達の後方へ駆けていく。男はフードを目深に被った小柄な人物の手を引いていた。そのフードの奥の顔を一瞬見た瞬間、金田の脳裏に、警備員の詰所で見せられたタブレットの映像が蘇った。

「あいつだー！」

「え、なんだよ!?!」

金田が座ったまま叫んだのに対して、甲斐が困惑して聞き返す。

「今通ったちっこい奴！鉄雄が事故ったときのあのガキだ！」

「えエっ!?!」

「ンだと！追うぞー！」

山形が金田を助け起こした。

「でっ、でも、その辺のアンチスキルに知らせた方が——」

「バカか甲斐てめエ！あいつの所為だよオ！」

金田は尻についた砂を払いながら言った。

「——俺らの仲間が怪我してんだよ！一発殴ってやんねエとな」

金田達は、は先ほどの男が曲がった路地へ向かって走り出した。

まさか自分がアーミーに追われる身になるとは、終ぞ考えたことはなかった。

「——おい、大丈夫か？」

暗がりの裏路地へ曲がった上条は、息をつきながら、ここまで手を引いてきた子供へ問いかけた。

正確には、子供と言い切っていいのか分からない。老人と言った方が正しいのだろうか？体格は小学生の低学年ほどのその老人の顔をした人物は、先ほどの看板落下騒ぎの時、ひどく怯えた顔で上条の方を見た。

——数分前

「逃げなきや」

そう言った彼の声は、外見に反してとても幼い、子どもものだった。しかし、彼はすぐその場にうずくまった。

「えっ、あれ、だ、大丈夫——です、か？」

聞き方に戸惑いながらも上条は駆け寄り、膝をつけてその小男を氣遣った。

改めてよく顔を見ると、ただ老いている、というだけでなく、ひどく不健康そうな顔だった。頬骨がはつきりと浮き出たその肌の色は、およそ日の下で暮らす元気な子供のものとは程遠い土気色をしていて、大きな瞳が一層彼の異質さを際立たせていた。そんな彼はひどく汗をかき、苦悶の表情を浮かべていた。

「ええつと……」

病院へ連れて行った方がいいのだろうか？

思案している内に、周りに野次馬が増えていくのを上条は察した。とりあえず、あまり変に注目を集める前に、なんとか穩便にこの場を切り抜けた方がよさそうだ。上条はそう考え周りを見渡した。すると、先ほど小男が出て来た路地に、数人の男がのびているのに気づいた。先ほどこの小男に絡んでいた不良たちだ。

「……まあ、因果応報ってことで」

手前に倒れていた不良が着ていたパーカーをはぎ取り、小男に着せた。かなりダボダボな恰好になったが、却って今はその方がいいのだろう。フードを被せると、顔は影になって間近で見なければ分からないはずだ。

「その、じゃあ病院へ——」

「その少年、止まりなさい」

事務的な、しかし通る声が後ろから聞こえた。俺のこと？上条は振り返った。

深緑色のキャップと、真夏に似つかわしくない長袖の上着、白色のズボンを履いた、屈強そうな男がいた。帽子の正面に、三角形を2つ重ね、その上に桜をあしらった紋章がある。警備員、ではなく——

「ア、アーミー？」

「その人物は要注意人物だ。我々が追跡していた。我々が引き取る。」

アーミーの男が言った。有無を言わさぬ迫力があつた。男の後ろでは、別の数人の仲間が野次馬を遠ざけている所だった。人払いをしているのか？なぜ警備員でも風紀委員ジャッジメントでもなく、学園都市と本土との境界を警備している筈の軍アーミーがここにいます？

いや、それよりも——上条は小男を見た。フードを目深に被って顔は窺えないが、上条の背後に回り、アーミーから隠れるようにしていた。

震えている。

「あの——この、子ども？なんかひどく具合悪そうなんで、病院に——」

「我々が預かる」

徐々にアーミーの男が距離を詰めてきた。帽子の鍔に隠れてよくは分からないが、射抜くような油断の無い視線を感じた。

まずい。ここから離れよう——そう本能的に恐れた上条は、右手に捕まる人物をみやった。

いない。

「ええ!？」

上条は辺りを見回した。あの印象的な風貌はどこにも見当たらない。

「飛んだぞ!!」

「探せ!」

アーミーの兵士たちが叫び、色めき立った。彼らの視線の先を負うと、小さな背中が、兵隊の隙間の向こうに駆けていく姿が辛うじて見えた。

まるで、一瞬でジャンプして何人もの大人の壁を乗り越えたようだ。上条は狐につままれたような気持ちになった。

「おかしいな、さつきまでそこに……」

「おい、君」

上条に詰め寄って来たアーミーが、相変わらず厳しい声色で言った。

「両手を壁について、背中をこちらへ!」

「え?!ちよ、ちよ待って!俺はただの健全な男子高校生——」

「両手を壁について、背中をこちらへ!」

2、3人の屈強な兵士に気圧されて、上条はごくりと唾を呑んだ。

「はい、はい……」

言われた通り、上条は近くの店舗の外壁に両手を突き、地面を見つめた。

誰とも知らない手が、自分の身体を、上半身から靴まで、乱暴にばんばんと叩いて身体検査をしていく。

「こちらを向きなさい」

大人しく従おうと、上条は努めて平静を装って兵士の方を向く。

リムが奇妙に飛び出た、半分だけのゴーグルのような片眼鏡を装着

した兵士が、2、3秒上条を直視した。

「……該当者ナシ。反乱分子ではありません」

「よし、もう行ってよし」

「ホラホラ、全員下がりにさいー！ここの一帯を只今から非常帯とするー！」
言うが早いのか、上条は兵士に背中を押されて、他の野次馬の渦に押し込められた。

アーミー達は、道を塞ぐようにテープを張ったり、警戒したり、別の路地へと散開したりしている。

「……くそつ、何だよ……平和が一番だつての……！」

上条は小さく悪態をつくくと、頭を振り、先ほどの嫌な経験を忘れようとした。

そうして1、2分歩くと、騒ぎの現場からは大分離れ、いつも通りの賑やかな通りに戻っていた。

しかし、不安そうな顔をしていた、彼は、大丈夫だろうか。

「……無事、逃げろよ」

アーミーへの不満から、愚痴るように呟いた、その時だった。

ぐいつ、と、予想外の力に引つ張られ、上条は、大人一人がやつと通れる位の、ビルとビルの隙間に連れ込まれた。

「……は？」

先ほどの小男だ。

上条が着せたぶかぶかのパーカーのフードを、ちらりと上げて上条を見上げた。

「ありがとう」

「へっ？」

小男から突如感謝を述べられたことに、上条は戸惑った。

「ああ、あんな不良共のことは、別にどうってことないけどさ。だけど――」

上条は背後を見た。明るい通りに、こちらを探る人の目は無い。それからすぐに、小男の方を見やった。

「何仕出かしたんだか知らないけどさ、早く逃げた方が……」

「――こつちから反応があつたんだ！」

上条の嫌な予感当たるものだ。狭い空間に反響するように、大声と、いくつかの足音が聞こえてきた。

ヤバイ——上条は、赤の他人の振りをして、その場を離れようとした。

しかし——小男がひどく咳込んだのを聞き、振り返った。

小男は、やはり先ほどまでの蒼白な表情で、上条の腕の袖を掴み、何度が引つ張った。

助けてほしい。皺の刻まれた顔の中で、明るく光る瞳が、明らかにそう言っていた。

「——ああッ！もう！」

上条は頭を1・2度振ると、左袖にまだしがみつく小男を見た。

「不幸だよなあ」

上条は小男を引つ張って、路地の反対側へと向かって駆け出した。

ひとまずはここを離れたい。そして、適当な所で彼を誰かに——俺を追いかけてこない誰かに、引き渡そう——。

そうして、現在。

なぜ、自分は今、別の不良にも追われているのだろうか。

再び走り出した上条は、息を切らしながら、自問自答した。

「待ちやがれエ！」

「そいつに用があるんだよオ！」

ツナギを着たり、やたら厚底のブーツを履いたり、前髪を上に戻らしたりと、なんとなく古風な感じのする不良たちだ。もつとも、髪型に関しては、自分も学友に「ウニ」などと呼ばれる位個性的ではあるが。

上条は走りながら、己の左手にしがみついてついてくる小男のことを考えた。所詮子供と同じ足だ。このままではいずれ追いつかれる。振りほどいてしまえばいい——のに。

彼はひどく咳き込んでいた。左手を握る手もひどく汗ばみ、熱を帯びているのを感じた。

なぜ上条当麻は変な正義感を持ってしまうのだろうか。

小男を抱え上げて、上条は歯ぎしりをした。

「あんたら兵隊さんに、ここの活動許可は出てないはずだけど？」

「命令で我々は展開しています」

看板落下の事故現場付近では、黄泉川がアーミーの一兵隊と押し問答をしていた。黄泉川たちが支部から通報を受けて駆け付けた際には、既にアーミーが辺りを封鎖していた。

(……展開が速すぎる。前々から出張ってたか?)

黄泉川の胸の内に、アーミーに対する疑念が膨らみつつあった。

そうしていると、その場にいたアーミーの半数ほどが、東へ向けて移動を開始した。

「動いた！」

相手方の行動の変化に、黄泉川はすぐさま対応する。

「鉄装！この場を抑えておいて！」

「はっ、はい隊長！」

部下が緊張感を孕んだ返事を返す。

アーミーはただならぬ様子だ。学生の平和を預かるアンチスキルとして、ここは放っておく訳にはいかないだろう。

黄泉川は群衆を掻き分け、少し離れた所に停めておいた車両へと乗り込むと、すぐさま通信端末を手にした。

「こちら、警機73！東へ動いた！アーミーを追う！」

「黄泉川先生、そっちもアーミーが規制線を引き始めてる！」

「法を守ってるのはこっちじゃん、高場先生！」

黄泉川は端末を握る手に力を込めた。

「外から来た連中に、この都市まちを好き勝手させるのは嫌いだよ——
行くよ！」

第七学区の休日の通りに、サイレンの音が再び木霊し始めた。

1台の黒塗りの車が、学園都市の街中を走っていた。分厚いスマートフォンガラスの表面を、ビル街の姿が反射して流れていた。

運転席と助手席には二人の黒服の男がいて、助手席の男は目の前に設置された機械をしきりにいじりついている。機械は地図が表示されたディスプレイと、レコーディングミキサーで使われるような大小様々なレバーがついている。男はインカムに向かって何事か早口で更新している。

「第七学区でのクラス2警報発令について、統括理事会から承認が下りました」

「警備員からの退去要請を拒否しました」
アンチスキル

「26号の現在位置は、メインストリート東、座標は……」

「現地の部隊の追跡は？」

後部座席に座るのは、厳しい目つきをした敷島大佐だ。

「対象が商店街を抜けて逃走しており、まだ捕捉できていません。」

「鈍足めが……それにしても抜け道を知っているかのような逃げ足の速さだな？」

「26号は身元不明の人物に同伴して移動している模様です」

「何？」

大佐は目を細めた。

「何者だ」

「追跡班の画像によると、第七学区の学生ではないかと思われれます。」
「見せろ」

助手席の男が端末を操作すると、後部座席側に設置されたディスプレイに画像が映し出された。髪の毛が逆立った、白シャツと黒ズボン姿の細身の人物が、子どもの体格をした人物の手を引いている。

「高位能力者である可能性は？」

「書庫にアクセスした限りでは、少なくとも大能力者以上の登録上の人物で、類似した外見の者はありませんでした」

「であるなら容易い。こいつも拘束対象に加えろ」

大佐はその画像をじつと見つめた。

「はっ」

「ラボを呼び出せ」

「はい？」

大佐の一言に、前の2人の黒服は明らかに驚いた様子だった。

「27号ですか!？」

運転席の男が声を上げた。

「しかし、第七学区に更に被験体サンバースを出すのは——」

助手席の男は振り返って、サングラス越しに大佐を見た。

「兵隊が十人だろうが百人だろうが、取り囲んで捕えられるなら苦勞はせん」

大佐は、腕組みをする両の握る手に力を込めた。

「急げ！時間が惜しい！」

7月2日午後 —— 第七学区 路地

「なんで追っかけてくんた！何したっていうんだよ！」

金田達の目の前には、白シャツとストラックスという、いかにも高校生らしい少年が、焦りと憤慨の表情を浮かべていた。こちらを睨みつけながら、両手をやや広げて立っている。背後は行き止まりだ。メインストリートから商店街へ入ると、アーミーが既に人払いをしたのか、通りに目立った人の気配はなかった。金田達は、二人を商店街から更に脇に逸れた、袋小路に追い詰めていた。

少年は背後に隠れた小男を庇うかのように、一歩後ずさりした。

「手前じゃねエよ、用があんのは、その後ろの坊ちゃんでき」ポケツトに手をつ込んだ金田が笑みを浮かべて言った。金田の後ろには甲斐と山形が、退路を塞ぐように立ち、更に他の仲間が路地の出入り口を見張っている。

「そいつのお陰で鉄雄……お前は知らねーだろうが、俺達のバイクチームのスクラム・ハーフなんだがよ。今、入院してンだけでもよオ、もし会ったら色々世話になったからよろしくって頼まれてンだよ」

「ふざけんなよ」

少年が怒りを込めて言い返した。

「てめえらのうるせえ暴走がなんだか知らねーけど、てめえらのやってることはただの憂さ晴らしだろうが！それに小さな子供を巻き込んで、許されると思ってんのか！」

「うるせえな！」

山形が凄んだ。

「いいご身分の学生様が粹がってンじゃねエよ！俺らの何が分かるってンだよ！」

「何だと！」

「まあ山形、待てよ」

金田は反して落ち着いた声で言った。

「アーミーが追っかけてきてることだし、時間はかけられねエ。そのガキが」

金田は少年の背後で震える小男を顎でしゃくった。

「——才がなんぼだかしらねーけどさ、ただのガキじゃねエってことは分かんた。お前はとつとこつから失せな」

「この子をどうするつもりだよ」

「どうする」

金田は甲斐と山形を見やった。

「細けエことは後にして……」

「とりあえず、鉄雄の怪我の分だ、5・6発ぶん殴つとくか」

「馬鹿言いやがって！」

少年は歯を食いしばった。

「この子の様子を見てみる！明らかにおかしいだろ！病院に早く連れて行かなきゃ——」

メインストリートでアーミーに囲まれてから十数分。小男の顔は汗が吹き出し、息も走ったこと以上に荒く、上がっている。

「なら、猶更だ。早くどいてくんねえと、お体に障るぜエ」

金田と甲斐、山形が一步踏み出した。その時、小男が大きく震えて、真一文字に口を結び、眉間に深く皺が刻まれるほど強く目を瞑った。

「あつ——」

少年は、周囲の異常を見た。ビルの壁際に積まれていた、ゴミ箱や得体の知れない袋、廃棄された自転車など、雑多なものが、少年の頭上より高く、4〜5メートルほど浮かび上がっていた。

金田たちも目を丸くして、その場に固まった。

次の瞬間、浮かび上がったそれらが、金田達へ向かって、銃口から放たれたかのように、一気に直線的な軌道で向かった。

「うわああああ!!」

3人は体をかばったり、横に飛んだりして身を守ろうとした。地面に炸裂した、硬質な箱が大きな音を連ねて地面に激突し、空き缶でも入っているのだろうか、中身は金属音をけたたましく響かせた。雑誌か何かの紙クズが頭上に広がって散らばるその様は、一斉に飛び立つ鳩の群れのように見えた。自転車もまたガシャンと大きな音を立ててバラバラになり、片方のタイヤがまり玉のように跳ねながら、小男の方目がけて飛んできた。

「危ない!」

少年は咄嗟に、両手で小男を押さえつけて庇った。小男と一緒に、少年はジメジメした薄汚れた固い地面に倒れ込んだ。

不意にやかましかったその場が静かになった。羽ばたいていた紙の群れは、蒸し暑く淀んだ空気の中を静かに落ちていき、おもちゃ箱をひっくり返したかのような缶ゴミや機械の部品は、それらに見合っただけの音を立てながら転がり、徐々にそのスピードを遅くしていった。

金田達もまた、地面にうずくまっていた。甲斐は「血が……」と呻きながら、擦りむいた右手を見ていたし、山形は額を打ったらしく手で押さえていたが、目立った怪我はないようだ。金田は膝を突きながら、小男を睨みつけた。

「……その力か……」

「えっ?」

少年の耳に金田の呟きが届いたようだ。

「その能力で鉄雄を……」

金田の脳裏には、警備員の詰所で黄泉川から見せられた映像が蘇っていた。金田の声色は、先ほどまでの落ち着いたものではなく、静かな怒気を孕んだものだった。

「何の能力者だ手前——いや——」

金田は立ち上がった。

「一体、何者だ？」

小男は、目を丸くして、金田を見て、それから、自分の肩を掴む少年の右手を見た。

そこで、少年はハツとした表情になり、言葉を発しようとして口を開いた。

「おいイ！金田ア！」

見張りに立っていた仲間の一人が叫んだ。

「アーミーが嗅ぎつけたぞ！」

ヤバい！と、金田達は後ろを振り返った。

「どうする!?!」

甲斐が金田の方を見た。

「アーミーに捕まるのはごめんだ——逃げるか！」

山形が言った。

「ああそうだな！勿論——」

金田は猛然と走り出した。少年と小男に向かって。

「こいつを連れてな！」

金田の鋭い蹴りが、少年の腹にめりこんだ。少年の腹から強制的に空気が口について出て、たまらず半回転して地面に身を投げ出した。金田は乱暴に小男の腕を掴んだ。小男は振りほどこうとしたが、金田の握る手の力はそれを許さなかった。

「ごほっ——待て——」

少年が呻いて立ち上がろうとしたその時には、金田達は路地の出入り口に向かって走り出していた。

しかし、金田達にとっても安泰ではなかった。

「こつちに誰がいるぞ！」

屈強なアーミーの兵士が5、6人、すぐそこまで迫っていたのだ。

「お前たち、何をしている！」

「ちくしょう！」

甲斐は呻いて、アーミーたちが来た方向とは反対方向を指さした。
「逃げる！」

「二手に分かれるぞ！」

路地から小男を引っ張って飛び出した金田は仲間呼びかけた。

「うまくアーミーを撒け！あとで春木屋タコのみせで落ち合おうぜ！」

山形は、先ほど小男に飛ばされて転がっていたゴミ箱を抱えた。閉まっていた蓋を思い切って開けると、山形は中身をぶちまけた。

「そらよっ！」

あまり広くはない道に、多くの空き缶が転がった。

「うわっ！」

数人の兵士が足を取られてつんのめる。

「よし、今だ！」

金田は小男を引っ張ったまま、そのまま走り抜けようとした。

「待ち、やがれッッ！」

しかし、その時に遅れて路地から飛び出してきた少年が、勢いをつけて金田の顔面を殴り飛ばした。金田は小男の腕を放し、倒れ込んだ。

「いつ——てエな野郎オ！」

それでも、金田は殴り合いに関しては、恐らく目の前の少年よりずっと経験豊富だった。ひるまずに立ち上がり、少年に掴み掛る。

「こつちだって痛かったんだよ——」

少年は金田より頭一つ分背が高いため、顔面を押さえつけるような恰好になった。

「んだとこのオ！ひよろひよろしやがって！」

金田は顔を抑えられながらも、少年の胸倉を掴んで引っ張り上げた。

「おい金田ア！そんなことしてる場合じゃないって！」

甲斐がひどく慌てふためいた。アーミーは先ほど山形によってひるまされたが、もう体勢を立て直し、数歩歩けば届く距離まで来てい

たのだ。

「離せよこらア！」

山形は既に両腕を後ろ手にされて捕まえられている。

「まとめてこいつらを拘束しろ！大佐へ繋げ、26号を確保——??」

リーダー格と思われる兵士が怒鳴ったところで、けたたましいクラクションの音が鳴り響いた。間を置かずにエンジン音がクレッツシエンドをかけて商店街に木霊し、揉み合う金田達に迫った。

「うわああああ！」

金田と少年は、互いに掴み合ったまま、よろけるようにして避け、壁に体を打ち付けた。

急ブレーキをかけて停まったそれは、警備員のパトカーだった。

「73」と側面にペイントされているのが見える。助手席の窓は開けられていた。ポニーテールの女性が顔を出した。

「あれえ、あんたたち、何してんじやんこんなところで！」

「あんた、こないだの先生——」

黄泉川だった。目を丸くして、金田達を見ている。

「黄泉川先生？」

黒髪の少年が驚いたように声を上げる。

「えっ」

金田は声を聞いて、たった今胸倉をつかんだままの少年の顔を見た。

「知り合いなのオ？」

「話はあと——乗って！」

ガチャリ、と後部座席のドアが開けられた。

「いいんすか？」

「いいから、早く！」

金田の問いに被せるように黄泉川が叫び、窓から背後を振り返った。一旦は散らばったアーミーがつかつかと歩き、近づいてくる所だった。

「その子を手連れてきて！」

黄泉川が叫ぶと、少年がパトカーを避けて立ち竦んでいた小男に駆

け寄り、手を引つ張つて連れてきた。

「警備員に警告！ここは第2級警報発令中だ、我々の警察権が優先される！妨害はやめなさい！」

近づいてきた兵士が断固とした口調でまくし立てた。

「ハッ、うちの子らに手を出すんじゃないよ！」

後部座席に、金田と小男を抱えた少年、更に反対側から甲斐と、兵士を振りほどいた山形が乗り込んだのを確認すると、黄泉川は叫んだ。

「出してー！」

「はー！」

運転席のもう一人のアンチスキルが返事をするやいなや、車は急発進した。アーミーが何事か叫ぶのが聞こえたが、金田達にそれを気にしている余裕はなかった。何しろ、男が4人も、小男を1人抱えて座るには、狭かったのだ。そこに、急加速による慣性加わり、金田達はもみくちゃにされた。

「つてえー！」

「いたいいたいいたい！手エ踏んでる！」

甲斐と山形が呻いた。

「黙つて！少し我慢するじゃんよ！」

黄泉川が一喝する。

金田はなかなか身動きが取れない状況で、隣に座る少年に向かって首を回し、睨みつけた。

「あとでてめえ、タタキにしてやるからな」

「へっ、不良がうるせえぞ」

金田と少年が互いに罵り合う中、少年の膝に抱えられた小男は、肩で息をしながら、不安そうに身を縮めていた。

「大佐、26号は、身元不明の少年数名と共に、警備員の車両に乗って逃走中とのことですよ。」

「何？アンチスキルだと？」

黒塗りの車内では、大佐が部下から新たな情報を得ていた。

「第七三支部のものと思われませんが……」

「なぜ警備員がそこまで出張なのだ……！」

大佐は歯噛みした。

「26号の現在地は？」

「はい、ここは……」

助手席の部下がディスプレイを確認した。

「……このまま進むと、団地へ向かいます。第七学区の学生寮が多くある場所です。我々もそこへ向かいます」

「先に抜けると思われる箇所に検問を敷き直せ！絶対に逃がしてはならん」

大佐は強く言った。

「『ママサル』はどのくらいで到着する？」

「あと10分ほどかと……」

大佐は窓の外を見た。ビルが立ち並ぶ中心街は既に遠くなり、閑静な街並みへと変わりつつあった。

「外は餓えた獣だらけだ、被験体ナンバーズにとっては……一刻も早く、守らねばならん」

黒塗りの車は、静かな街並みの中を、そこにそぐわぬ姿で、走り続けた。

7月2日午後 —— 第七学区

商店街を抜けた、金田たちが乗る警備員アンチスキルのパトカーは、学生街郊外の住宅街へと入りつつあった。都市軍隊アーミーの姿は、商店街の遭遇以来ない。運転する警備員が仲間と連絡を取り合いながら、追跡を避け、検問をかいくぐっているようだった。

「黄泉川先生、これからどこへ？」

「本当なら、その子を——」

黄泉川はツンツン頭の少年の膝に座る、息を荒くしている小男を振り返って言った。

「——病院へ連れて行きたい所だけど、あつちはアーミーの警備が厳しいみたいじゃん。うちの支部の周りも警戒されているみたいだし。応急的にはなるけど、状態を診ることができて、且つ怪しまれなさそうなどこへ行くよ」

「それって？」

少年が聞き返す。

「あなたの担任のとき、上条くん」

「えっ、小萌先生の……」

上条と呼ばれた少年はキョトンとしている。

「あのさあ、センセ。確かに俺達協力するとは言ったけどさア」

上条の隣で窮屈そうに座る金田が割り込んだ。

「どっかで降ろしてくんないかなあ……」

「そうそう」

甲斐も同調した。パトカーに乗り込んだチームのメンバー3人中で、一番小柄な彼は、山形の上ののしかかり座る形になっていた。山形はさつきからずつとうつとおしそうに顔をゆがめているし、甲斐は車が跳ねる度に頭を天井にぶつけるので、居心地悪そうにしていた。

「そろそろオツムが……いてェ」

「てか、アーミーはあんたらの上司みてエなもんだろ」

山形が怪訝そうに言った。

「何でさつきから仲悪そうにしてんだ？」

黄泉川は少し間を置いてから、口を開いた。

「君らはさ——アーミーについてどの位知ってる？」

「えっと」

上条が首を少し傾げて答えた。

「学園都市の技術の外部流出とか、不正な持ち出しとかを防ぐために、
‘出入り口’の警備にあたってると」

「そう。それこそ国同士のパワーバランスを壊しかねないのもあるからね」

運転席の、名前は分からないが、女性の警備員が言った。

「ただね、それは建前じゃん」

黄泉川が目つきを鋭くして言った。

「建前？」

金田が言った。

「おれらのまちをまもるへいたいさん、ってわけじゃねエのか」

「ボスが違うの」

黄泉川が言った。

「あたしら警備員は、統括理事会を頂点とする学園都市の組織のひとつ。元はと言えば教員だし。けど連中は、本国の国防軍の所属。要は政府の駒じゃん。あたしらとは指揮命令系統が○つきり違うの」

黄泉川の言葉には、幾分嫌悪の心情が含まれていた。

「元々学園都市は、この国の科学技術発展を目指して建設された巨大な実験室。それが肥大して、成果を重ねて言って……今や科学で君らのような若者の能力の開発なんてのも当たり前にやってる。学園都市は世界もうらやむ先端技術の塊。機密保持の点からも、独立性を高めていって……政府はそれが面白くないんじゃない？」

黄泉川は言葉を続ける。

「早い話が、あたしらの学校を、君ら生徒を監視して、どうにかコントロールに置こうとこの街に入り込んでるってわけ。技術の適正な保

全なんて建前をつけてね……」

「だけど、こいつと何の関係が……」

金田は具合の悪そうな小男を見た。

「鉄雄のことと言いつい、いまいち分かんねエぞ」

「その子は、多分、アーミーの研究機関に関係してるんじゃない？」

黄泉川が言った。

「アーミーは、私たちの学校でやってるような能力開発とは別系統で、能力を発現させる手法を研究してるらしいの。詳しくはあたしらも情報を持ってないんだけど」

「別の手法……」

上条が、ほぼ白髪、小男の頭に視線を落とす。

「子供を、こんな姿にしちまう研究なんて……そんなのあっていいのかよー」

「もしその子が、何らかの被験者だとするなら」

黄泉川が続けた。

「何せアーミーのその方面の研究は、なかなか表に出てこないから。興味深いじゃん？その子は手掛かりになるじゃんよ」

「実験体^{ナンバーズ}たちを、絶対に学園都市の科学者共の手に渡してはならんだ」

住宅街を見下ろす小高い丘の、小さな公園の駐車場に停められた、黒塗りの車の中で、敷島大佐が語気を強めて言った。そこには黒塗りの車の隣に、3倍はあろうかという大きな軍用のトラックが1台、鎮座していた。

「彼らが白日の元に晒されれば、あの力にも触れられてしまいかねん——26号の居場所はまだ分らんのか！」

「警備員の車両に乗り込んでから、衛星への発信が途絶えています」

助手席の黒服が答えた。

「……逆を言えば、まだ車両で移動を続けているものと思われまます」
「妨害されているな？」

敷島大佐は齒噛みした。

「マサル」の力に、頼るしかあるまい」

敷島大佐は手を組んで低く唸るように言った。それから、車のドアを開け、隣に停めてあるトラックの後部へと回った。

「どうだ、何か分かったか……」

大佐は後部のドアを開け、中にいる者に呼びかけた。

内部の照明は暗い。少量の銃器や計器類が置かれているほか、兵士が座るであろうベンチや、傷病兵を搬送する際に使われるであろう簡易ベッドが置かれていた。そして最も奥まった所には、別の人間が上半分をガラスで包まれた奇妙な椅子らしきものに座っていた。

「……ここから……西……だね」

その人物が、小さなあどけない声で、ゆっくりと言った。

小さな声であつても、大佐の耳には十分届いたようだ。

「西、か……」

合点したように、大佐が頷く。

「何か目印になるようなものを、視てくれ」

「上条クンチはこの辺だったかな？」

アパートや寮らしき建物が立ち並ぶ辺りまで車が差しかけた所で、黄泉川が上条に聞いた。

「どうする、降りたいかい？アーミーの姿は見えないけど」

「いや、俺も追われてるんで、まだ先生と一緒になら心強いです。それに――」

上条は横目で金田を見た。

「こいつら、この子に何するかわかりませんか」

「んだとオ、このオ」

金田は敵意をむき出しにする。

「やめな！」

黄泉川が一喝した。

「とにかく、もうすぐ着くよ、小萌先生に連絡はついた——」
「隊長！」

緊迫した声で運転席の隊員が言った。

「——アーミーです……」

全員が、前方を見た。片側1車線の道路の先を、両車線ともどつかりと塞ぐように検問が敷かれていた。数台の軍用車まで居座っている。

「やべエぜ、先生」

運転席の後部に隠すように頭を低くして、甲斐が言った。

「引き返そうぜ」

「この車両、マークされてるだろうしな」

甲斐の後ろで山形が言った。

「まずいんじゃないの？」

「そんな、こんなところまで……」

上条が呟いた。

「やっぱり不幸だ……」

「黄泉川先生！」

運転手が更に言った。より切迫した声色だ。

「後方にもアーミーが——挟まれました」

「退去要請は無視か！舐めやがつて、くそっ」

黄泉川が歯噛みした。

「もう少しなんだけど……君たち」

黄泉川はシートベルトを外しながら、後部座席の金田達に呼びかけた。

「何とかしてみるから、騒がずにいて。それと上条クン」

黄泉川は上条の顔を見た。

「奴らの狙いは、大方その子……右手でしつかりと、抑えといて」

「……ハイ」

上条がやや間を置いて返事をした。

金田は、たった今の上条と黄泉川のやり取りに何か引つかかるものを感じた。それを問おうとしたが、黄泉川は運転席の部下に、近辺の

警備員仲間にすぐ駆けつけるよう応援を頼むことと、いつでも車を出せるようにしておくことを告げると、すぐにドアを開け、降りていつてしまった。

「……大丈夫かな、センチ」

甲斐が頭を下げたまま、不安そうに言った。

「黄泉川先生ならやってくれるさ、つえーんだぞ」

「ツるせえ、黙ってるよ」

「んだと……」

上条と金田が険悪に言い争う。

しかし、この状況で流石に騒ぐ訳にはいかないと踏んだ甲斐と山形から非難がましい目で睨まれると、二人とも返す言葉を呑み込んだ。

上条は、窓越しに外の様子を窺った。膝上では、小男が相変わらぬ荒い息で、背中を丸め、手をぎゅっと握りしめていた。時折、「あーっ」と掠れたような声が混じるその呼吸が、金田にはひどく不安を駆立てるようなものに思え、意識を外黄泉川の方へと集中させた。

アンチスキル
「警備員第73支部所属、黄泉川愛穂」

黄泉川は検問の兵士に身分を告げた。

「学生街で乱闘騒ぎを起こした少年達の身柄を移送中じゃん。通してもらいたい」

「その車は我々の任務を妨げた嫌疑がかかっている」

兵士が答えた。先ほどの学生街の者たちとは異なり、迷彩風で身を包み、透明なバイザー付の軍用ヘルメットを被っている。警戒度の高さを伺わせた。

「武装を解除し、我々に預けなさい。また、君たちにも同行を願いたい」

「こちらは統括理事会の承認を受けて任務に当たっている」

黄泉川が毅然と返した。「我々を拘束しようとするならば———そうね、あんたら、ますますこの立場がまずくなるじゃんよっ。」

「第2級警報発令中だ！」

兵士が語気を強めて言った。

「だとしても、あたしらを逮捕する権限はないじゃん」

黄泉川は眉一つ動かさず答えた。

「話にならないな……」

兵士は一呼吸置いた。

「……こちらは、ある重要参考人を追っている。中を改めさせてもらいたい」

「だから、そんな大層なやつはいないって言ってるじゃん」

あくまで黄泉川は取り合わない。

「中にいるのは、あたしの仲間と、可愛いスキルアウトだけじゃん」

兵士が、ヘルメットの側頭部に取り付けられたマイクに手を当てる。

「……大佐。アンチスキルは要請を拒絶しています。如何しましょう？」

無線で、上官の指示を仰いでいるようだった。

「それは嘘だな」

そのすぐ後、検問で置かれているゲートの後ろに停めてあった黒塗りの車から、男が降りてきた。傾き始めた西日が、アスファルトの上に男の巨軀の影を落とした。

「中にいるのか——そうだな？」

紺色の背広に深緑色のネクタイを締めた、聳えるような大男が、まっすぐ黄泉川を見据えながら歩み寄ってきた。有無を言わせぬ雰囲気押し出して、近付いてくる。

黄泉川の額から、一筋の汗が流れた。

パトカーの中では、小男がハッと息を呑み、顔を上げた。緊張で目を見開いている。

「マサル……」

小男が呟くのを、金田は確かに聞いた。

日が傾き、橙色がかった斜光が街路樹や住宅街を照らし、それらは一様に同じ方向へ影を伸ばしていた。日の光は生活風景に突如切り込むように居座る、岩のような数台の軍用車両と、挟まれるように止まる一台の警備員の車両も、平等に照らしていた。検問が張られていることが既に周知されているのか、付近の住民の気配はせず、皆関わり合いになるのを恐れて引きこもってしまったかのようだった。

黄泉川は、巨躯の軍人と対峙していた。もう7月だというのに羽織っているスーツのジャケットはパンパンに張っていて、山のような威圧感を見せているが、それ以上に四角形の顔から見下ろす視線が、ここを一步も通さないという強固な意志を黄泉川に見せつけていた。仕事柄多くの不良や犯罪者を相手にしてきた黄泉川でも、都市軍隊の軍人と相對するのは冷や汗が流れた。

「あんだ、こないだの……」

黄泉川の言葉に、大男は少し眉を上げた。

「そちらの言葉には、嘘が含まれているな」

黄泉川の言葉には直接応えず、見た目通りの低い声で大男が黄泉川に言った。

「そんなことはないんだけど」

黄泉川もやや見上げる形で返す。車内の少年たちと謎の子どもを安全なところまで送り届けるため、警備員としてここは引くわけにはいかなかった。

「さっきも言ったけど、2級警報はあんたらアーミーの車両展開を、この第七学区で許可するもの。あたしら警備員アンチスキルに対しての逮捕権や捜査権の優越はないじゃん、違う?」

「さすが学園都市の先生様といったところか」

大男の射貫くような表情は変わらない。

「我々として十分承知の上なのだ」

「なら、通してくれたって——」

「お前たちと事を荒立てたくはない」

大男は黄泉川の言葉を遮った。

「我々が、ここではいわば余所者だということも理解している。我々は、学園都市と、この国と、その両方の繁栄を護るのが役割だ、故に——」

軍人はやや手を警備員の車両へと上げて向けた。

「その障害となるような事案は防がねばならん、そちらも願いは同じ筈だ」

「あんたらと一緒にしないでくれ」

黄泉川の口調が強くなった。

「その腰の銃には、当然実弾入ってんじゃない？子どもを傷つける兵器を振りかざしておいてさ」

内心では、応援はまだかと焦り始めていた。ここにいるのは自分と仲間が一人。突破するのはほぼ不可能だ。とにかく、時間を稼がなければならなかった。

「手荒な真似をしたくはないが……」

大男は細めた目で周囲の兵士へ合図を送った。

「中を改めろ！」

一斉に、7、8人の兵士が車両に駆け寄っていく。

黄泉川は舌打ちして首を振った。

「やれやれ、あんたらの立場がヤバくなるじゃんよ？この脳筋——」
黄泉川の抗議の声は、後方から突如聞こえてきたバチイツという張り裂けるような音と、少年たちのくぐもった悲鳴で途切れた。

黄泉川も、大男も、足を止めた兵士たちも、警備員の車両に雷光のような光が走り、窓ガラスが割れ、車がボンッと一瞬浮き上がったから炎を上げるのを見た。

黄泉川と大男が押し問答している間、上条は右側に座る小男が、青白い顔で浅い呼吸を繰り返していることに不安を募らせていた。小男の左手に添えるように右手を置いているが、小男の手からは、異様な冷たさと滲む汗を感じ取っていた。

「なあ、ここ通れないなら、あいつらの言う通り下ろして、この……こ

の子、預けた方が」

「バーツカ、お前、そいつ明らかに普通の人間じゃねえだろ」

上条の言葉にすかさず金田が畳みかける。

「ツなツ……お前、さつきからそんな言い方!」

上条は左側の金田を睨みつける。

「病気とか、その、見た目だって——」

「俺らのダチがなんでケガしたかってのは、そいつが能力でバイクをぶっ倒したからなんだよ!」

後ろから甲斐が口を挟む。

「俺が思うに、そのナリだって、アーミーのやつらにやたらいじくられたんじゃねーの?」

「そんなの関係ない!」

上条は歯噛みした。

「なるべく早く、今は——」

「おい、金田よオ」

3列目に座る山形が遮るように言った。

「あの、先生と話してるタコ男さあ、見覚えねエか?」

「うん?」

金田も身を起こす。

「ありやあ……鉄雄が事故った時いた奴だ!」

金田の声色が昂った。

「おい、アイツ、アーミーのリーダーだろ?聞いてみようぜ!」

そう言つて金田はドアを開けようとする。

「騒いじやダメだよ!」

運転席の警備員が慌てて押し留めようとする。

「そうだよ、金田、さすがにアーミー相手に下りてくのはヤバいつて……」

甲斐も金田を宥めようとする。

「うるせエー!あいつならなんか知ってんだろ——おいあんた!カギ開けてくれよ!」

ドアは運転席からロックされているらしく、金田は運転席の警備員

に叫んだ。警備員は、眼鏡の向こうの瞳に、明らかな困惑を浮かべる。「いい加減にしろ！アイツらに怪しまれるぞ！」

上条も両手で金田の肩を抑えて制止しようとする。

「んだとこの——」

「ううううううううつつ」

上条は、髪を金田に掴まれながらも振り返った。

小男がうつむきながら、今までにない位震えていた。両手を握りしめながら。

上条は気付いた。右手を、離してしまつたと。

「おい、兵隊どもがこつち来るぞ！」

叫んだのは、山形か、甲斐か、金田か。誰だかはつきりしなかったが。

「い、や、だ……！」

と、くぐもつた声が絞り出された、その途端だった。

辺り一面に、眩い光と、鞭のような高熱とが、上条の眼前一杯に広がった。

黒煙と炎を上げる車から、金田は外へと転がり出た。喉に絡みつくような感覚がして何回も激しく咽せ込んだ。そして開いたドアから高熱の車内を覗き込み、「甲斐！山形！」と仲間へ呼びかけた。痛っ、熱い——そんなように呻く甲斐をまず引き出した。

「甲斐ー！」

顔の間近で再び呼びかけた。甲斐の見た目に大きなけがは無いが、奇妙に目の焦点が合っておらず、朦朧としているようだった。

それから煙に巻かれながらも、奥の山形を何とか引っ張り出した。気を失っていた。

車の反対側では、白いワイシャツにいくつも焦げをつくっている上条が、小男と運転席の警備員を車外へと運び出していた。警備員の女も気を失っているのか、アスファルトに横たわり、身動きをしなかった。

「おい、この野郎オ!!」

金田は山形を安全なところへ横たえると、立ち上がって上条の陰に隠れるようにしている小男へ怒声を浴びせた。「てめえの作業だろ！」

小男は怯えるように金田を見ながら後ずさりした。

「全員、動くなー！」

厳しい声が辺りに轟いた。

「監視カメラの遮断はできているか？」

「はい、半径500m以内、対処済みです」

敷島大佐が側にいた黒服の部下に、目配せしながら問うと、部下がすぐ答えた。

「車を消火しろ」

大佐が無線で呼びかけると、警備員の後方にいたアーミーの兵士が消火剤を持ち出し、燃え盛る車両へと噴射した。シャツという音が響き、白い粉に塗れた車は燻ぶった。

「負傷者はどうしますか？」

「あちらの自業自得だ。そこまでする義理はない」

黒服の部下の問いに対し、にべもなく大佐が答えた。

車両が突然爆発を起こしたことで、その場の交渉の空気は大きく変わっていた。黄泉川にとっては予想外のこと、部下や少年たちを案じる気持ちと、次に打つべき手を考える思考とで、頭が混乱し始めていた。

「これで分かったろう」

大佐が落ち着き払って黄泉川に言った。

「彼は不安定だ。我々が預からなければならぬ。お前たちの手には余るのだ」

「そう？彼は嫌そうだけど？」

黄泉川は笑みを浮かべていったが、部下が倒れていることもあり、内心は焦りを募らせていた。応援もまだ到着しない中で、学生数人と能力不明の人物を守るのは難しい。状況は良くなかった。

「26号！」

大佐の声に、26号と呼ばれた小男がビクツと震えた。

「散歩は終わりだ。我々と来い」

26号は青白い顔で辺りを素早く見回し、そして、一番側にいる上条を見上げた。

上条は、皺の刻まれたその顔に、見開いた大きな目を見た。眼だけを見ると、不思議と目の前の小男が、大人を怖がる子どものように見えないこともなかった。

「あんたら、本当にこの子を預けていいのか？」

上条は大男の大佐に向かって言った。

「そもそも、この子はあんたらの所から逃げ出して来たんじゃないのか？」

「お前たちには理解できんことだ」

大佐は事も無げに言った。

「分からののか。今、こうしている間にも、その者の能力は制御が利かなくなっている。我々だけが対処できる」

大佐が手を挙げると、兵士達が再び足を踏み出した。

「さあ、26号!」

兵士が距離を縮めようとした瞬間、何者かが警備員の車両の陰から、兵士たちの死角から飛び出し、26号に猛然と飛び掛かった。

26号は2、3度地面を転がり、仰向けに押さえつけられた。

「おめえらこそ動くんじゃねえぞ!!」

金田が叫んだ。26号の額にまっすぐ銃口を向けていた。

「よすじゃん!少年!」

「おい何やって——!銃なんかどっから、やめろ!」

「うるせエ!黙ってる!」

黄泉川や上条が呼びかけるが、金田は制した。

「大佐!」

黒服の男が、焦りを含んだ声で声をかけた。

「無駄なことはよせ」

大佐の表情は意外にも変わらなかった。「お前らもただでは済まなぞぞ」

「うるせエ!痩せ我慢すんじゃねエツ!」

金田が26号を押さえつけ、銃口を向けたまま大佐へ怒鳴った。

「こいつが欲しいんだろうがツ!」

「……よく理解していないようだな」

大佐は襟元の機械を操作した。「マサル」

「……出て行っても?」

大佐のイヤホンから、子供の声で応答があった。

「お前の助けが要る。今、銃火器は使用できん」

大佐が小声で言った。

業を煮やした金田は26号の胸元を掴み上げて叫んだ。

「ゴチャゴチャ言ってるじゃねエよツ!俺達がこっから逃がしてくれりやア用はねエんだ!!」

すぐに、金田は26号に顔を向けて囁いた。

「ただの脅しだ、安心しろ……ゴム弾だからよ」

そう囁かれても、タカシはますます疲弊した表情を浮かべるばかりだった。

黄泉川には、金田が横たわる部下の警備員の携行銃を奪ったのだと分かった。

「やめな！アンタのやってることはますます不利にするだけじゃんよ！」

「そうだ！そいつを離して——」

「お前らまで口を挟むんじやねエよ！」

黄泉川や上条の声を再び遮った金田は、乱暴に26号を揺らした。

「さア、どうすんだよオてめエら！」

「やめて」

スピーカーを通したようなざらざらした子供の声が響いた。

金田も、黄泉川も、上条も、一斉に声のした方を見た。

大佐の後方から、奇妙な機械が現れた。それは球形をしていて、真っ赤なリングを横半分に割り、上にガラスを被せたような見た目をしていて。そしてそれはフワフワと浮遊しながら、近付いてきて、金田たちには中に人が座っているのだと分かった。それは緑色のジャケットと赤いネクタイを身に着けた、またしても老人とも子供とも見える小男だった。

奇妙な機械と、機械の中に座る小男とを、金田たちは黙って見ていた。26号と呼ばれた者よりも恰幅がよく、細い目でこちらを見据えて、機械と同じ真っ赤な椅子に、どこことなく気取ったように座っていた。

「お前も仲間か……う？」

金田が唸るように言った。

「彼は、ぼくの友達なんだ」

機械に取り付けられたスピーカーを通して彼は言った。

「君たちがこれ以上傷つかないためにも、彼を返してほしい」

「てめえも能力ちからを使えるってのか」

金田が笑みを浮かべて言った。

「おいたはすんじゃねエぞ、お友達がどうなってもいいのかなア」
機械の中の小男の表情は、不思議な物を見る目でこちらを見ていた。

「……僕には分かる。タカシが——」

小男は26号の方を向いた。

「——能力を放ちたいのを、無理やり押さえつけられていたような、不安。……何かしたのかい？」

小男はガラス越しに、次は上条をじつと見つめた。

「俺は……」

上条は少し後ずさった。

大佐は小男の言葉を聞いて、眉を潜めた。

「……マサル、あの小僧がタカシを制御していたと？」

マイクを通してマサルと呼ばれた小男に聞いた。

「はつきりとは分かりませんが、恐らく」マサルが答えた。

「彼からは何か……ぼくらは違う能力があるような……」

「——何が言いてえのか分かんねえが、とにかくここから解放しろよ」

金田は銃口でタカシと呼ばれた小男の額を突いた。

「お前が何か怪しげなことをすれば、引き金は軽く動くぜ」

「もうよせ」

上条が金田へ詰め寄った

「あア？」

金田がうるさそうに上条を見た。

「さつきから聞いてりやてめえは、自分の憂さ晴らしで他人を巻き込んでるだけじゃねえか！」

上条の声には怒気が込もっていた。

「なんだとー」

金田も唾を飛ばして返す。

「だったらてめえ1人でアーミーに捕まってこいよバカ」

「そうやって今までも、自分のことだけ考えて、他人を傷つけて生きて

きたんじやねえのか!!」

「んだとてめえ!!俺の何を知った口をきいてんだ!!」

詰め寄る上条と金田が言い争う中、金田に押さえつけられたタカシには、マサルの声が聞こえていた。

〈タカシ〉

その声は、ほかの者には僅かでも聞こえることがなかった。

〈しつかりするんだ、タカシ〉

〈……マ・サ・ル……〉

〈迎えに……来たんだ……〉

マサルはタカシに呼び掛ける。

〈ぼくらは外じゃ生きていけないんだよ……さあ、帰ろう……〉

金田に首元を幾度となく押さえつけられるせいで、ただでさえ荒いタカシの呼吸は、時折更に苦しそうになる。

〈カプセル……を……〉

〈大丈夫、ちゃんとある〉

マサルが言う。

〈だから、帰るんだ……ぼくが助ける〉

マサルはタカシに語り掛ける。

〈能力ちからを、あと一度だけ、使えるかい?〉

ぴしい、と金田は右手に違和感を覚えた。

持っていた警備員の銃を見やった次の瞬間、バシィツと鋭い音がして、銃はバラバラに割れ、中のゴム弾が金田に向かって飛び出した。

「うわア!!」

金田はくぐもった声を出した。顔面にいくつものゴム弾が勢いよく当たったためにもんどりうった。

「あつ——」

上条が目を見開いた。黄泉川も驚いて駆け寄った。

タカシは、汗に塗れた顔を、何かに集中するように一層厳しくした。すると、アスファルトにみるみる亀裂が入り、上条や黄泉川はよろ

けた。金田は周囲の以上に気付いているのかいないのか、顔を抑えて地面にうづくまっただままだった。

次の瞬間、大佐の側にいた筈のマサルはタカシのすぐ隣にいた。それとほぼ同時に、道路に走った亀裂を押し分けるように、水が勢いよく噴き出した。

「遊びはもう終わりだ」

誰にも聞こえない位の小さく、低い声で、大佐が呟いた。その顔には、薄く笑みが浮かんでいた。

絵のように閑静だった住宅街は、ボウルの中の板チョコレートのように粉碎されたアスファルトによって様変わりしていた。道路の建材同士が擦れ合ったり砕け合ったりする地鳴りが断続的に響き、いくつもの箇所から水流が夕暮れの空目掛けて打ち上がっていた。

「鉄装!!」黄泉川は先ほどの爆発で倒れ伏していた警備員アンチスキルの同僚を抱え、何とか路側帯まで退避した。先ほど囲んでいた都市軍隊アーミーの兵士達ミイは、能力の巻き添えを恐れてか、遠巻きにこちらを眺めているだけだ。

一方、警備員と同様に気絶していた山形は目を覚ましていた。火傷を負っている甲斐と共に、黄泉川たちとは逆側に避難し、目の前の異様な光景に呆気に取られていた。

「なんだこりゃア……あいつらの仕業なのか!？」

「おーいー！金田アーどこだア!!!」

甲斐が思い切り叫んだその先で、再び道路が変動し、一部分が大きく隆起した。

金田の姿は見えない。

甲斐は、一番高く盛り上がった場所に立つ小男を睨んだ。

タカシは隆起した道路の一部分の頂点に立っていた。すぐ側にマサルが現れている。

「マサル！タカシを連れてすぐこちらへ戻るんだ!」

敷島大佐が無線でマサルに呼び掛けた。

「もう大丈夫だタカシ！さあ一緒に!」

「ウン」タカシはようやく少し安堵の表情を浮かべて、汗と泥に汚れた手をマサルの浮遊ユニットへと差し出した。「ありが——」

その時、ソフトボール程の大きさのアスファルトの塊が勢い良くタカシ目掛けて飛んできた。タカシは後頭部に衝撃を受け、バランスを崩し転がり落ちていった。

「タカシ！——ううッ」

マサルはタカシの痛みを共有し顔を歪めた。

「マサル！どうした!」敷島大佐は後方から叫んだ。マサルから明確

な応答は無い。

「へへっどうだ!!」先程銃の暴発で倒れていた金田が再び立ち上がった。鼻血を流している。ゴム弾とはいえ、何発も顔面に受けそれだけで済んでいるのは驚くべきことだった。「さっきのは山形と甲斐の分——そしてこれが——」

「あッ」両手をついたタカシは、自分目掛けて足を振り抜こうとする金田の姿を見た。

「鉄雄の分だア!!」

「やめて!!」

マサルが痛みから意識を呼び起こし、金田へと集中した。

金田はサッカーボールのように、タカシを蹴り飛ばす算段だったが、タカシの目と鼻の先で足を取られたような感覚がした。そのまま、金田は後方へと飛ばされ、強かに背中を地面に打ち付けた。

タカシが、吹き飛ばされた金田の方を見た。その顔は、不安ではなく寧ろ怒りで歪んでいた。

「やべっ」金田は痛みをこらえて、何とか体を捻って転がした。間一髪、金田のいた場所を亀裂が走り抜けていく。そのままタカシの能力(ちから)は、金田達の後方に控えていたアーミーの部隊の方へと達していく。

「回避イ！」慌てた兵士たちは隊列を崩した。何人もの兵隊が足を取られ、倒れ、そこかしこで叫び声が上がった。

金田が避けたのを見て、タカシは一層表情を険しくして、再び意識を集中した。目は見開かれ、額にはこれ以上ないほど汗が浮かんでいた。「——ッ!!」

「もうやめてくれ!」

次の瞬間、タカシの放たれようとしていた力は不意に霧散した。タカシは肩に置かれた手を見た。

上条が、右手をタカシの肩に置いていた。

「これ以上能力を使ったら、よく分かんねえけど、お前——」上条は息を切らして語り掛けた。「持たないんじゃないのか?」

上条の声を聞き、そして自分の能力が思ったように出せないことを

自覚して、いよいよ意識が薄れかけたタカシは、その場にへたりこんだ。

すると、波打っていた地面は動かなくなり、地鳴りも止んだ。

「おいッ」上条はタカシを揺さぶった。「しつかりしろ！」

「タカシを離して！」マサルが、上条の頭上から呼びかけた。上条は見上げて、浮遊ユニットに入ったマサルを見た。

「彼は、ぼくらと一緒にやなぎや、いけないんだ」マサルはガラスの中から手を差し出した。その掌に、27とプリントされているのを、上条ははつきりと見た。

「お前らは一体——」

「確保オ!!」上条が言いかけた時に、兵士の誰かが叫び、一斉に上条達へと距離を詰めてきた。

まずい、このままじゃみんな捕まる——上条は苦しむタカシを、次にマサルを一瞥して、兵士たちが逃れようとその場を駆け出した。

「おい待てエー！」上条は数歩走り出したところでいきなり足首を掴まれてつんのめった。金田が唾を飛ばしながら、大声で上条に叫んでいた。「置いてくんなア！」

「はア!？」上条は足を引き抜こうとしたが、金田が予想以上に強い力で掴んで離さなかった。「こんなことになったのもお前のせいだろおが!!」

「足くじいたんだよ！」片足を引きずって立ち上がり、今度は肩を掴んできた金田の言葉に、上条はここまで自分勝手な人間がいるものかと顔をしかめた。「お前も人助けが好きなら俺だって——」

「逃がすなア！」何人もの兵士がすぐ側まで来ていた。上条は必死で金田の腕を引っ張り、再び走り出した。

「ええい畜生お!!早く逃げるぞ!!」

二人は兵士たちの腕を掻い潜りながら、無我夢中でこぼこになった道路を逃げ出した。

「マサル……もう限界だ……」上条と金田が去った後、タカシは立ち上がれずに、マサルへと助けを求めた。

「タカシ……！」マサルはユニットのガラスを開けて、ポケットから何かを取り出した。「カプセル！」

数錠のカプセルが、タカシの掌へと収まった。「さあ、早く！」マサルはタカシの側へ再び近づいた。タカシが急いでカプセルを飲み込むのと同時に、二人は大佐のすぐ後ろへと転移した。

「あれは!!」その時、大佐の側の兵士が何かを指さして叫んだ。

別の警備員の車両が、先ほど退避したアーミーの部隊を蹴散らすように猛スピードで突っ込んできた。「黄泉川先生エエ！早く！」

運転席の窓から、尖った前髪と顎が声を張り上げた。車は先程の地割れで通れなくなるギリギリの所で急停車した。

黄泉川はまだ意識がはっきりしない同僚に肩を貸して立ち上がった。

その時、地面に何かが落ちているのを見つけた。

「これは……?」

「あーッあのアゴ!!」「助けにきたのかア!？」金田や上条達は痛めた場所を抑えながら慌てて駆け寄った。

「助かったじゃん！高場先生！」黄泉川も同僚に肩を貸して乗り込んだ。

「鉄装さんは無事で?——あれエお前らア！」高場は黄泉川や上条に続いてよたよたと乗り込んでくる、金田、甲斐、山形の3人を見て声を裏返らせた。「アーミー相手に何やっとなだアア!？」

「話はあと!!」黄泉川は後部座席に同僚を座らせると、すぐ助手席のドアを勢いよく閉めた。「出して!!」

ギヤアン、と音を立てて、車は急発進し、元来た方へ走り出した。

「大佐！逃げます!!」

「構わん!!」追跡しようとする部下を大佐が押し留めた。「これ以上、荒立てるな！」

大佐は、泥と水に塗れ、大地震の後のように崩壊した目の前の道路と、その奥を遠ざかるアンチスキルの車両をじっと見ていた。「もう十分暴れてしまったが……」

「点呼オ！確認次第、動ける者は作業にあたれエー！」辺りがようやく落ち着いた所で、兵士たちは現場の応急的復帰と、負傷者の確認を始めていた。

「理事会にはなんと？」隣の黒服が大佐に聞いた。

「私が責任を取る。これはやむを得なかった事だ」大佐は低い声で答え、踵を返した。

軍用トラックの中にはマサルとタカシがいた。タカシは先程瓦礫をぶつけられた後頭部を、衛生兵に手当してもらっている所だった。

「大事はないか？」大佐が膝をついて、マサルやタカシと目線を合わせた。

「出血が多少ありますが、一先ず、骨や脳に異常はないでしょう。安定剤を摂取したため、落ち着いていますし」衛生兵が答えた。

「あの少年、タカシの力を止めたんだ」マサルが横になったタカシを見ながら呟いた。

「それは今重要ではない、タカシ」大佐はタカシを厳しく見据えて言った。「あの場でカプセルを与えたのか？」

ビクツと肩を震わせてマサルは身を縮めた。「は、ハイ……タカシが危なくて……」

「落としてはいないだろうな？」

大佐の重ねての問いに、マサルは、それはない、きつと。と小さな声で答えた。

「なんだよ」金田は、こちらを腕組みして見据える黄泉川を睨みつけて挑発した。

その日の夜、金田達は警備員の事務所へと連れて来られ、傷の手当てを受けていた。金田はタカシに吹き飛ばされた際の足の負傷を、また、山形と甲斐、上条は車が爆発した際に負った火傷を手当てしてもらっていた。

「お前、助けてもらって置いて、その言い草は——」上条が憤慨して金田に言った。

「いいじゃん、上条君」黄泉川は上条の言葉を遮って、なおも金田を見つめていた。

「私らが謝らなきゃいけないじゃん」

「は？と肩透かしを食らって、金田や甲斐、山形は黄泉川を見直した。「今回、君たちをあんな危険な目に巻き込んでしまったのは、私らの判断ミスじゃん」黄泉川はじつと金田を見つめている。その目は金田の予想に反して、こちらを叱ったり見下したりする教師の目ではなく、憂いを帯びたものだった。金田は見返すことが躊躇われ、顔をややそむけた。

「アーミーがあそこまで強気で来るのも、連れて行こうとした彼の能力も、予想外だったんじゃない」黄泉川は頭を下げた。「すまなかった」

「黄泉川先輩……」額に包帯を巻いた同僚の警備員が、そんな黄泉川の姿を見て声を漏らした。

金田達も、上条も黙っていた。少しの間、部屋は静けさに包まれた。「……どうした先生、優しいじゃん……」金田が頭を掻いて呟いた。

「けど、君にはひとつ聞かなきゃいけないじゃん」黄泉川は顔を上げ、金田に向かって言った。声色がやや厳しくなっていた。

「なんであの時、鉄装の——」そう言って黄泉川は同僚の方をちらりと見た。「銃を奪って、あの彼を人質に取ったん？」

「俺らの仲間があいつにやられたからだ!!」金田が握り拳を作って言った。「それも、2度もだ!」

「だったら!」黄泉川は声を張り上げて言った。「——仲間を思っつてやったんなら、その結果どうなった？」金田は黄泉川に言われて、甲斐を、山形を見た。二人とも、あちこちに傷を作った顔を、居た堪れなさそうに金田から背けた。

「——少なくとも、アーミーやあの少年達を焚きつけるようなことは、するべきじゃなかったじゃん」黄泉川は諭すように、少し声のトーンを弱めて言った。「君も、チームのリーダーなら、その判断力を磨いてかなきゃいけないじゃん」黄泉川は腕組みを解いた。「仲間を守りたいんならね」

そして、同僚の方を向いて言った。「鉄装、始末書を書かなきゃいけないんだけど、手伝える？」

「も、もちろんです！」鉄装と呼ばれた、眼鏡を掛けたアンチスキルはがばつと立ち上がり即答した。

「大丈夫？ありがとう」黄泉川の表情が、柔和なものになった。「じゃあ行こうか、あ、それと君たちも、もう帰っていいよ」

「ハイ」黄泉川の言葉に、まず立ち上がったのは上条だった。

「上条君、今日は迷惑かけたね、すまなかつたじゃん」扉の近くで、黄泉川は振り返って上条の方を見て言った。

「いえ、そんなことは」上条が答えた。

「ありがとう、力を貸してくれて」黄泉川はやや声を大きくして言った。「君らも彼に感謝するじゃん」

「は？どういうことだよ」甲斐が訝しげに言った。

「あの爆発で、君たちや鉄装がただの火傷や気絶で済んだのは……上条君のお陰じゃん」黄泉川は上条に微笑みかけ、それから鉄装と一緒に扉を開け、部屋を出て行った。

あとには、学生達が残された。

「お前、なんかしてくれたんか？」山形が部屋を出て行こうとする上条の背中に問いかけた。

「別に——」上条は背中を向けたまま言った。「上条さんは何もしてませんよつと」

「うわ、自分のことさん付けとかきめエ……」甲斐がからかうように言った。

「ごつちこそ、お前らとはもう会うのはごめんだよ」上条は手をひらひらさせながら出て行った。

そして、部屋にいるのは、金田と甲斐と山形だけになった。

「……なあ、金田」甲斐が金田におずおずと言った。黄泉川の言葉を聞いてから、金田は俯いて押し黙ったままだった。「俺ら、気にしてねエぜ？なア山形」

「ん？ああもちろん」山形も笑って言った。「こんな傷、クラウンのやつらとしよつちゆうやり合つてできてんじゃんかよ」

金田は甲斐と山形の方を見て、何とも言えない表情で口を開いた。
「いや、俺は……」

「それより、いいニュースだけ、金田」山形が、ポケットから携帯を取り出して、画面を突き出して見せた。そこには、メッセージアプリが表示されていた。

「鉄雄の奴、さっき帰ってきたらしいぜ！」

オフィスで報告書を作っていた黄泉川は、一旦パソコンを打つ手を止め、伸びをした。そしてため息をひとつ大きくつくと、ポケットの中をまさぐった。

「これが……何か手掛かりになるかも……」

黄泉川の手には、一錠のカプセルがあった。

Ⅲ・鉄雄

13

緑。

黄色。

緑。

黄色。

機械音。

明るい——暗い、いや明るい——

緑、黄色、緑、黄色……。

「26号と……始まった……」

「パターンの比較は……」

「進めてくれ——」

機械音。

「レベル7からの……投与を……」

「しかし——！アキラのような……」

「それは……必ず……」

緑。 走査線。

身体が前へ前へと運ばれていくのを感じる。

「あ……き……ら」

緑色の光。

7月3日午後 —— 第七学区、柵川中学校

「——でね、学園都市のどこかの公園ではね、不思議な絵描きが居てね、その人に似顔絵を描いてもらうと、絶対対モデルになれるんだって！」

「ルイコだったらまた言ってるよー、これでいくつめ？」

「うん？百八不思議くらいかなー？」

「またまたー！こないだもなんか言ってたっけ？そうだ、『学園都市には同じ顔の人が1万人いる！』だっけ？」

「えーじゃあ、むーちゃんはなんか面白い話もってないの？」

「あたしい？そーだなあ、前も話したっけ？『この学園都市は、今から何十年も前、悲惨なる原子力事故の反省のもとに、より安全なエネルギー生産を研究する目的で建設されたが、実はそれはタテマエで、本当はたった一人の少年によって……なんたらかんたら』

「むーちゃん長いよ……それ多分2回目か3回目」

よく晴れた日の放課後。太陽はやや西へ傾きかけているが、十分にギラギラとした光を投げかけ、生徒たちの歩く地面を照らしている。数分もしない内に、どの生徒も汗を肌にかかっていた。

4人の女子生徒が会話しながら、校門へと歩いている。月曜日の今日から、期末テスト期間であり、しばらくは放課後の課外活動がない。生徒たちは翌日の科目に備え、夏の日差しの中をいつもより早めに帰る。

「むーちゃんの言ってるのアレでしょ？学園都市の地下どっかに、最強の能力者が封印されてるってやつー」

「最強かあ、そんな人がいたら、世界は学園都市がとつくに征服してるって」

「ま、LEVEL0のあたしらには関係ないってことよ、でしょルイコ？」

「まあねー……そうだ！昨日仕入れたばかりのニュー不思議！」

ルイコと呼ばれた黒の長髪の女子生徒、佐天涙子は足を止め、人差し指をぴんと立てて話す。

「昨日学生街で、電気系統の事故があったでしょ？そのときにね……」

目撃されたのよ……」

涙子はわざとらしく声色を突然低くした。友人たちは苦笑いしながら顔を近づける。

大方、また突拍子もない噂話なのだろうが、こちらを惹きつけようとする涙子の意図に乗ってやろうとしているのだ。

「ごった返す人ごみの中をね、この暑さだっていうのに、黒のジャケットを着た、こどもがね……」

「こどもだったら大人の何倍もいるよー、ルイコ?」

「もう、アケミ、まだ続きがあるの!……そのこどもがね、顔を上げると……」

涙子がうつむき加減だった顔をずいっと上げた。

「顔は、しわくちやの老人だったって言うのよ!」

4人の間に、沈黙が流れた。涙子は明らかに動揺して他の3人の顔を見回した。

「あれ?みんな、怖くないの?」

「ルイコ」

アケミが苦笑いしながら言った。

「ちよつと古臭くない?その話」

「ええ、昨日ネットで出てきたばっかなんだけどなあ……」

「似たような話はあるじゃん?ほら、ターボばあちゃんだかじいちゃんだかが高速のバイクにぴったしについて走るとか!けっこう古いネタなんじゃないかなあー」

空気がほぐれてきたところで、4人は再び歩き出した。

「昨日っていえばさ、住宅街でおつきなガス爆発の事故あったじゃん?」

「あったあった?珍しく消防だけじゃなくてアーミーまで復旧にきてくれたやつでしょ?」

「それ、あたしが普段使ってる道だったんだよー」

「ええ、まじで、まこちん?」

涙子が驚いて言った。

「まこちん家は平気なん?」

「うちは大丈夫！」

茶色がかったショートヘアの女子生徒が笑って答えた。

「ただ、大分通行止めが広いみたいだからさー、今日は回り道して帰んなきゃだよ」

「えー、そうなんだあ……じゃあ、ジョセフであんまり長居しない方がいいかも——」

「ねえ、何かうるさくない？」

むーちゃんが顔をしかめて言った。

校門の外から、排気音が聞こえる。

校門を曲がって出たところで、4人は急に立ち止まった。

前方に、バイクに跨った明らかに不良らしい男がいたからだ。

バイクはとにかく真つ赤で、しかもいろいろなステッカーがごてごてと貼り付けられているので目立つ。乗っている男はそこまで大柄ではない。スポーツに熱心な体格のいい柵川中の女子生徒なら彼よりも大きく見えるだろう。逆立った短髪は特に額を広く露わにしているが、その額には包帯が巻かれているのが見える。

周りは校門から出た制服の中学生ばかりなので、明らかに浮いている。生徒たちは男を怖がってあからさまに避けて歩いているし、男もそのことが分かっているのか、携帯電話に落とした目線は泳いでいるように見える。

「うわ……」

涙子が声を漏らした。

「何してんのさ、こんなところで……」

すると、男が顔を上げて、涙子たちの方を睨んできた。

「……何だよ」

男の口がそう動いた。

「ムシよムシ」

アケミが涙子の袖を引っ張った。

「早く行く？」

4人も周りの生徒と同じように大回りして、横を避けて行くこうとし

た。

「……カオリ！」

唐突に、男が誰かの名前を呼んだ。自分の名前ではもちろんないけれども、涙子は思わず振り返った。

校門から出てきた別の女子生徒が、目を見開いて男の方を見ているのが分かった。涙子には見覚えのないぼさぼさの髪をした人だ。

その女子生徒は何事かを言いながら、慌てて男の方に駆け寄っていく。「てっ」とか「びょういん」とか言っている気がするが、排気音が急に高まってきたのでよく分からない。その後すぐぼさぼさ髪の女子生徒が男の後ろに乗り込むと、バイクはすぐに発進して、甲高い音を吐き散らしながら涙子たちの前から消えた。

「うっざー！」

アケミが吐き捨てた。

「こんなところまで出てくんよ不良！」

「最近多いらしいよーあーいうの」

むーちゃんが言った。

「夜な夜な、一〇学区の方とかめっちゃうるさいらしいし」

涙子は友人たちの会話を聞きながら、ふと何かが落ちているのに気が付いた。携帯電話だ。

涙子はそれを拾った。

白色。角の塗装が何か所かはがれていて、それなりに古く使い込まれているようだ。熊の人形のストラップが揺れている。

さっきの女子生徒のものだろうか？ 涙子は友人3人に拾ったそれを見せた。

「これ、落ちてたんだけど……」

友人たちが近くに集まり、覗き込んできた。

「——やめといたほうがいいよ」

突然、背後から別の声が出た。

涙子達が振り返ると、別の女子生徒のグループがこちらを見ていた。背丈がなんとなく自分たちより高いから、先輩だろうか。

「そのスマホ、さっきのバイクに付いてったヤツ、あたしらと同じ3

年生のなんだけどね」

1人が言った。

「そうそう、不良と付き合ってるなーんか嫌なヤツなんだよ、あのコ」
もう1人が言った。

「あたしからも関わり合いにならないようにしているってわけ」
「はア」

涙子はなんとなく返事をした。

「えと、これ、どうすれば……」

「その辺に捨てとけばー?」

先輩達は適当な言葉で応じて、その場を去っていった。

涙子達はその場に残された。

「ルイコ、いいよ、ほっておけば?あの先輩たちの言う通りだよ」

アケミたちがそう言う。涙子はスマホを見つめて考えた。

ストラップのクマは、よく見ると、吸い込まれそうな黒い瞳をして
いる。

「……これ、職員室に届けてくるよ」

涙子は笑って友人たちに言った。

「みんなは、先に行つてて!」

「……ま、ルイコならそう言うわね」

アケミは笑って言った。

「優しいんだから」

「えへへ」

涙子もはにかんだ。

「ありがとう」

「じゃ、先に行つて待つてるよー!!」

「うん!」

朗らかに友人たちを見送って、涙子は踵を返して職員室へと向かっ
た。

その時、手に持った携帯電話が震えた。

「えっ」

涙子は思わず声を漏らした。

電話の画面を見てみると、着信が今まさに来ていた。

「金田くん」と表示されている。

涙子は周囲を見渡す。誰もが、談笑したり、自分の携帯に目を落としたり、音楽を聴いたりしながら、通り過ぎていく。

首筋に汗が流れるのを感じる。どうしようか。

悪そうな声が聞こえたら、すぐ切ろう。

涙子はゆっくりと電話を耳に当てた。

東京某所

「話を通してみるよ？けれども、あちらさんもホトケではないからねえ」

召還を受けて、敷島大佐は上官と面談していた。

「加えて、幹部会もとても騒がしい。根津達がはしゃいでいるのさ。『都市軍隊を学園都市から引き揚げさせる口実ができた』とな。」

学園都市が始まって何年経つと思う？どんな能力者が生まれたと思う？やれ、何も無い所からポツと火を出すわ、軍艦一隻サイズの雷を出すわ。うちの装備だって、学園都市の技術供与があるからこそだろう？対して君はどうだ」

壁に向かって話していた上官は、大佐の方を振り返った。

「たった数人、あの満足に動けるかもしれない子等をあやしているだけだろう？政府が学園都市に、どう立つべきか？あれは最早飼犬ではない。うまく立ち回らねば、こちらの腕ごと持ってかれる。今だって、統括理事会から唾が私の所にも飛んできています」

大佐は、座って膝の上で手を組んだまま、黙っている。

「アーミーを一塊、君に与えてやっていることにも、説得力は薄れてきているのだよ」

「ナンバーズを、何よりアキラを、守るためです」

大佐が視線を上げて絞り出すように言った。

「理性ある我々が、マッドサイエンティストどもから」

「アキラねえ、君はそれに拘るが」

上官は大佐の言葉を遮るように言った。

「大事なのはねえ、根回しと取引だよ。天秤は大方、あちらさんに傾いているのだから。君は嫌いなようだが？」

上官は再び大佐に背を向けた。

「次に同じような事案があれば、私も君を庇い切れん。身边を整理整頓しておくことだな」

7月3日午後 —— 第十学区 職業訓練校

「……知つての通り、この学校は、お前等のように、一般学生スキルアクトの能力開発について行けぬ者や、集団生活に馴染めぬ問題児を集めた、職業訓練校だ……だが、しかし、ここは——」

講堂のように広い教室で、黒板を背にして、ちよび髭を生やした男性教師が何やら声を張り上げている。

「——単に技術を教えるだけではなく！お前等がこの学園都市で、一般社会で適応出来る人間になることを目指しているんだ」

この時間は科目の授業だった筈だが、途中からこのような説論が続いていた。

「いいか、この事だけは覚えておくんだ！」教師は教卓をバンと叩き、一層声を張り上げる。

「この、学校が、お前等の最後のチャンスなんだぞ……！」

教師の涙ぐましい演説に、聴衆は胸を打たれ、聴き入っているかと言うと、悲しいことにそうではなかった。

漫画や雑誌を広げる者、スマホの画面を読み耽る者、足を机の上に投げ出していびきをかく者、ペンをひたすら転がしている者、ヘッドフォンを耳に当てたまま寝息をかく者、隣の仲間と構わずお喋りする者。

教師の言葉は、生徒たちの胸どころか耳にすら届いていないのが現状だった。

「貴様等は——ッ！聞いてんのかア、話をオ！」

そりゃあ聞いてまーす、とか、内容が難しくて分かりませんでしたア、とか、うっせえ、だの、好き勝手な声がちや混ぜになって響く。

「死ぬまでクズをやりたくはないだろう！来月は技術祭だぞ!？」教師は教壇をうろうろしながら怒鳴った。「各種工場からも見に来て頂く

「お前等の雀の涙ほどの努力さえあれば！将来の道が開けるチャン
スかもしれないぞオ！」

「おい、金田ア」山形が後ろの席から金田に声をかけた。

「鉄雄の奴おせえよなア」

「遅いも何も、ゆうべ『戻ってきたぜ!!』ってのはしやいでたのはお前だ
ろ、山形」

「いや、蛭名のヤツがほんと見たんだって、寮に鉄雄が入るところオ」
「はア、話したんじやねエのかよ」

金田は怪訝そうに振り返る。

「それが、『入院で疲れたから寝かしてくれ』の一点張りだったらしく
てよ、そんなときは会えなかったってんだよ」

「つまねエ奴だなア」金田は頬杖をついた。

「んで、朝になって行ってみてもウンとも言やしなかったしな……」

その時、廊下からドタドタドタと騒々しい足音が聞こえてきた。

「おおーい!!」

扉をガラツと引きちぎるように開けたのは甲斐だった。

「聞いてくれエ、みんなア!——」

「授業中だぞ甲斐イ!!」

すかさず教師が叫ぶ。

「お前どこに行ってた!?!」

「我らがスクラムハーフがア、ご帰還だぜエ!!」

満面の笑みを浮かべる甲斐の後ろから、鉄雄がバツが悪そうに入っ
てきた。いつもの広いデコには、包帯が巻かれている。

「鉄雄!!」

金田達はガタツと立ち上がった。

「こらあア!席につかんか席にイ!」

鉄雄は教師を無視して仲間の方へと近づいた。あつという間に教
室の騒がしきは倍になり、鉄雄の周りに人だかりができた。

「よく生きてたなア」

「どこの病院行ってたんだよ!」

「鉄雄オ!」

金田が駆け寄ると、鉄雄は笑顔を浮かべて金田の方を見た。

「金田！」

包帯こそ巻いていたが、それ以外に変わりはないように見えた。

「ケガはもういいのかよオ」

「ああ……カスリ傷さ」

高速での事件から2日しか経っていないが、鉄雄のあどけなさの残る声が、金田にはとても懐かしく感じた。

「よしッ、今夜はパーティだ！」山形が握り拳をつくった。

「飛ばすか、久しぶりにイ！」

「たった2日ぶりだけだな」

甲斐が悪戯っぽく笑った。

「それがさ、今夜7時にまた病院来いって言われてて……」

鉄雄の顔が曇った。

「バカ言ってるじゃねえよ！」

金田は鉄雄の肩をバシッと叩いた。

「カスリ傷なんだからオ、構やしねーよ」

「よしっ！そう来なくちゃ」

教師が「テスト範囲だなあ」とか「試験に出そうだなあ」とか黒板を指しながら言い始めたが、もう誰もそちらを気にする者はいなかった。

「金田、1つだけ頼みがあるんだよ」

鉄雄が声を潜めて金田に言った。

「何だよ、治療費ならアーミーに請求しろよなア」

金田が額を近づけた。

「走り行く前に、会つときたいんだ、その——」

「なにになに!?あれちゃんですかア」

金田は人差し指で鉄雄の頬を小突いた。

「もちろん、行ってやれよ、カオリちゃんどこ！」

「バツ！そんなでけえ声……」

金田がわざとらしく声を大にしたので、鉄雄が顔を赤くした。おおッ、とかヒューとか、仲間が囁し立てた。

「今夜7時に、いつもの駐車場な！」

金田が笑った。

「病院じゃねエぞオ」

「……わりいな」

鉄雄もはにかんで言った。

「じゃ、早速行ってくるよ」

がんばれー！とか、癒してもらえエー！と声がかかる中、鉄雄は明らかに入る時よりも軽い足取りで去っていった。

「……ヨシッ」

金田が仲間に声をかけた。

「そうとなったらア！授業は——」

金田はわざとらしく両手を広げて、もったいぶった。

「——自習！各自、好きにしまえ！」

うおおお、と歓声が上がリ、途端に何人もの生徒がバタバタと教室を出て行った。

「——貴様等、0どころじゃない、マイナスだ……死ぬまでトレーニングをやってろ……」

椅子にへたりこんだ教師は顔を抑えてうめいた。

同じ職業訓練校内の保健室では、若い保健師が椅子に座り、電話を受けていた。

「……全部じゃないです、学校うの分析機ちじゃ限界がありますからね？

……でも大体なら」

『ありがとう、どんな感じだった？』

電話の話し相手は、快活な女性の声だ。

「普通の人間が、これを飲んだら、……気が狂っちゃうか、死んじやいますね」

保健師が机の上の印刷された書類をめくった。

「そっちにさっきデータを送りました、見れますか？……ハイ、4ページの……N067が高いですよ？使用規制がかかっているやつですよ。一般の規制は認知されていないはずの——」

「認可だろオ」

不意に保健師の背後から声が出た。

保健師はぼつと振り返った。入口に、少年が一人立っていた。

「ごめんなさい、後でかけ直す」

保健師は携帯電話を急いで置いた。

「正ちゃん！」

保健師は立ち上がって言った。

「おどかさないですよ！」

「カッカすんなって」

笑みを浮かべて金田は部屋へ入ってきた。

「今はダメよ、向こうに」

隣室へと続くドアを見やって保健師は言った。

「ドクターがまだいるから——」

「残念だけど、ゆっくりしては——」

金田はいきなり保健師の顎をぐいと引き寄せ、キスした。

「——いられねエーんだ」

唇を離すと、保健師は顔を背けた。

「あっそ、で、なアーに」

顔は紅潮していた。

「預けたろ？あれ」

金田は上機嫌に言った。

「俺の愛車のキーよ、今夜はパーティーなのさ」

「鍵？ならさつき」

保健師は怪訝そうに言った。

「鉄雄くんが取ってたよ」

「はア？」金田の表情が一気に険しくなった。

「何ンで!？」

「なんでって、知らないけど」

保健師は困惑した。

「これから多分走るから、金田に渡してやるって言ってた」

「あんのデコ助野郎オ……」

金田はもつと顔を歪ませると、走って慌ただしく部屋を出て行った。

「あ、ちよつと——！もオ！」

保健師の顔は別の意味で赤かった。

携帯電話を再びとると、保健師は耳に当てた。

「あ、黄泉川せんせ、すいません——ハイ、その辺に出回ってるやつじゃないってのは分かったんで、もう少し詳しく調べてみます」

『ありがとう、牧子ちゃん……何かあった？』

「いや、うちのバカ生徒が———そういえば」

保健師は思い出したように、睫毛の長い目を瞬きさせた。

「——黄泉川先生が言ってた生徒、島鉄雄でしたっけ？さつき帰ってききましたけど……」

鉄雄は、校舎の外、陽の当たらない非常階段の陰まで歩き、足を止めた。

真つ赤なバイクがそこに停めてあった。

「ありがとよ金田」鉄雄が笑みを浮かべて呟いた。「借りるぜ」

「鉄雄の携帯繋がったか!？」

「ダメだ、何ンとも出ねエな」

「まあ、乗りたがってたもンなア、金田のバイク……」

金田と甲斐、山形は職業訓練校敷地内の一画で顔を突き合わせていた。た。

今は使われなくなったプールの近くにある、水質管理棟の陰になるこの場所は、金田達のたむろす場所の一つだった。

「なア、ちよつと」

そこへ、別行動していた仲間が数人やってきた。茶髪の男を一人引きずりながら。

「どうしたよ」金田が仲間たち見て言った。

「なんだそいつ」

「1階商業棟の男子トイレでコソコソ電話してやがった。」大井が茶髪の男を地面に投げ出して言った。「ちよつと詰めたら、すぐビビツて吐いたぜ、相手はクラウンだ」

「何ンだと!!」

山形が跪いている茶髪の男に詰め寄り、襟元を乱暴に引き上げた。

「てめエ、あのピエロ共に何チクリやがった?」

山形に詰問された男は激しく瞬きした。

「お……おれ、なんも知らねえよ……ダチと話してただけで——」

金髪の男が上擦った声で答えた。汗をだらだらと流していて、鼻の穴に通した2つのピアスにも雫が光っている。

「ああ!？」山形が襟元を握る手に力を込めた。

「鉄雄って言ってたよなア、お前」

大井が男を見下ろす形で言った。

「そのナリじゃあ、工業科じゃねエだろお前。鉄雄くんのお友達ですかア?」

どうなんだよ!？」と山形がもう片方の手を握り拳にして振り上げ

た。他の仲間が、男が逃げられないように両足首を押さえつけた。

「ま、待って——もう殴らないで、言う！正直に言うから！」

慌てふためいて男が言った。

「戻ってきたら教えろって頼まれてたんだよお、あの島って1年生が！追っかけるからって言うてよお」

「誰にだ？」

金田が問うた。

「じよ、ジョーカーだよ……おめえらも知ってんだろ」

男が声を小さくして言った。

「俺、知らない内にあいつらのヤクを運ばされちまって、それで脅されて、仕方なく……ほんとだ、俺、あいつとは知り合って1週間しかたつてねえよお！」

片足を抑えている蛭名が、男の関節に圧力をかけたので、男は呻きながら声を張り上げた。

「なあ、金田、思い出したぜコイツ」

鉄雄に何度か電話を試みている甲斐が金田に言った。「どつかで見たことあると思った。商業科の錠前屋だよ」

「なアるほど、道理で最近あいつ等やたら羽振りがいいと思ったらねエ」

金田が口元を歪ませて歩み寄った。山形が掴み上げていた手を離したので、男が両手についてゼエゼエと肩を上下させた。

「なあ、錠前屋さんよオ」

金田が膝をついて、男に話しかけた。ライディングブーツが、男の地面についた指を軽く踏んでいる。男は目を見開いた。

「お前、名前は——？」

男は素早く辺りを見回した。金田達のほかには、物陰になっているここに寄って来る者はいない。

「は、はまづら——」

男が声を絞り出した。「浜面、仕上だ。痛え、マジだって、嘘じゃねえ！」

「渡辺」

金田はブーツに体重をかけながら、丸刈りの仲間を見た。渡辺は男から取り上げたらしい学生証を読んだ。

「合ってる」

学生証をひらひらさせて伊瀬原が言った。「商業科3年生——
おう、素点ポイントがマイナス30だとよ、やるじゃんお前」

「ふーん……甲斐、鉄雄に連絡とれたか？」

金田が甲斐に聞く。

「ダメだな、出ねえ」

甲斐が答えた。

「なア、金田、鉄雄のドジは自業自得だとしてもよオ、カオリちゃんところ行ったんだろオ？危ねエゼ」

山形の言葉を聞いて、金田は暫し無言で考えた。

「……あのバカが」

そして誰にも聞こえない位の声で呟いた。

金田はもう一度浜面の方に向き直った。じつと睨みつけると、浜面は顔を僅かに引いた。

「よし、浜面センパイよオ」

金田が低く言った。

『追っかける』ってフかしたそのお仲間、連絡とれますよねエ、当然」

浜面は、今の自分が人生で一番情けない顔をしているに違いない、と思った。汗だか涙だかよく分からないもので、目の前の金田の顔がひどくぼやけた。

——第七学区 柵川中学校

「カオリちゃんか!?今どこにいる!?!」

佐天涙子は思わず顔をしかめて、携帯電話を睨みつけていた。自分のものではない。

恐る恐る、先ほど拾った携帯電話の着信に出たところ、鼓膜を震わせるくらいにやかましい声で男がまくし立ててきたからだ。

「あ、あの、カオリさん、じゃないです」

言葉を選びながら、再び携帯電話を耳に当て、涙子は言った。周りの生徒たちが怪訝そうな顔をして涙子の方を見ているので、校庭の端の方へと足早に移動する。

「あれ、カオリちゃんじゃないのオ？」

素つ頓狂な声で相手の男が言った。エンジン音だろうか、けたたましい音が電話の向こうから絶えず聞こえている。

「ちがいます！わたし、これ、拾ったんです」

涙子はエンジン音に負けないよう、ゆっくりはつきり答えた。

「持ち主の、女の子なら、さつき、知らない男のバイクに、乗つかつていきましたよ！」

「マジか!!」

相手の男が驚いた声を上げた。

「何色のバイクだった!?!」

「えっと、赤です、赤！」

涙子が答える。

「めっちゃ、真っ赤つか!!」

「あんの野郎オ!!」

柄悪く相手が唸った。

「それ、俺のなんだよ！どこ行ったか知ってる!?!」

「知るわけないでしょお！」

涙子の口調もつい乱れる。

「あの、これ、落とし物で届けておきますから！」

「ああ、サンキュー！できれば……えっと甲斐、何中だっけ？」

相手の言葉が途切れた。

「知ってますよ！柵川中！」

涙子が相手の言葉を継いだ。

「あたし、その生徒ですから！」

「なアんだあ！そうなの！」

一層相手の方の騒音がうるさくなり、男の声は辛うじて聞き取れる位だった。

「じゃ、ヨロシク！」

「あ、ちよつと——」

涙子が言いかけた途端に、電話は静かになった。

「暴走族相手に、いいんですか？自分の校名、軽々言っちゃって」

飴玉を転がすような軽やかな声が背後から聞こえた。

涙子が振り返ると、頭はかなり目立つ花飾りをつけた小柄な女子生徒が立っていた。

「初春！」

涙子が目を丸くした。

「聞いてたの!? てか、ええー!!」

涙子は口を抑えた。

「あの人、バイカーズなの!」

「校門に不良が来ているっていうから、駆け付けようと思ったんですけど」

涙子の同級生である、初春飾利は、右腕を少し上げて見せた。盾の紋章をあしらった腕章が付いている。

「もう行っちゃったみたいですね」

「?——それで、なんでバイカーズって分かったの? この携帯の相手」

涙子が聞いた。

「ジャッジメント風紀委員に連絡が回ってるんです。ここに立ち寄るバイカーズがいるから、警戒してって」

初春が答えた。

「最近、十とか十九学区の方でバイカーズ同士の抗争が激しくなってるんです。今日校門に来てた人もそれ絡みらしくって、今夜あたりもケンカが起きるかもしれないから、見廻りを強化するところですよ」

初春は涙子の目を覗き込むように話し続ける。「さっきの会話、お相手はまさか涙子さんのお友達じゃあないですよ? バイカーズの関係者でしょ?」

「でも、バイカーズ相手なら——」

涙子が心配そうに初春に言った。

「——初春、あんた一人で平気なの?」

「後で先輩と合流する予定です。固法先輩か、白井さんか——」

ふと、初春は言葉を止めた。

「そういえば、どこで落ち合うか、話してなかったな……」
「ならー」

涙子は初春の肩に手を置いた。

「あたしも一緒に行く！」

「ええ!!だめですよ佐天さん!!」

初春は慌てたようにぶんぶん首を振った。花飾りが揺れて今にも落ちそうだ。

「それこそ、風紀委員でもないあなたを巻き込む訳にはいけません!」

「とりあえず、先輩達と落ち合うまでよ！」

涙子が笑って言った。

「道中、何かあるか分かんないし！」

「で、でも——」

「水臭いこと言わないの!パンツを曝け出し合う仲じゃあない！」

「それは佐天さんだけです！」

顔を真っ赤にして初春が否定する。

「私は佐天さんのスカートをめくったりしません！」

「まあまあ、で、ひとまずどこへ行くのー?」

佐天は言うが早いか、初春の手を引いてさっさと歩き出す。

「それは、先輩と連絡を取ってからです！」

初春は早足で佐天に付いていく。

「つていうか、本当に来るんですかあー?」

「あーもしもし、アケミ?ごめーん、ちよつと急用できちゃってさあー

——」

「佐天さーん!人の話を聞いてますかあ!？」

2人は噛み合わない会話を続けながら、学校を出て行った。

「みんな心配してたよ、鉄雄くんのこと……死んだんじゃないかって」
第七学区南側の、他学区との境を為している川。その河川敷に、カ

オリと鉄雄は来ていた。

「……わたしも、何か鉄雄くんにあつたら、どうしようって……」

カオリの声はとてもか細く、河川沿いの道路を車が走り抜ける度にかき消される。鉄雄は時折手に持ったジュースを口元に運びながら、目の前の川を見つめている。

傾きが増し、橙色を強める陽の光が、さらさらと流れる水面で、燃えるように輝いている。ここ数日、天候は梅雨の合間の晴れが続いていたため、川の流れはとても穏やかだ。火柱のように縦方向に伸びた光は、向こう岸へと続き、遠くのタワーマンションや工業地帯の陰影とのコントラストを強くしていた。空は地平線でぼうつと明かりを燈しているが、上に行くに従ってベージュ、薄紫、藍色と裾模様を描いて、鉄雄とカオリの上空は完全に夜の色を現していた。

「……心配、ね……」

鉄雄はカオリの言葉に対して、ただ呟いた。そして、空になった空き缶を前方に向かって放り投げた。法面の芝生の上を、音も立てずに空き缶は転がっていき、二人からはやがて見えなくなった。

「……そのアーミーの病院で目が覚めたら、手術台みたいな所に寝かされてて——」

唐突に鉄雄が語り始める。体育座りをしているカオリは、膝をより自らの体に抱き寄せた。

「その検査ってのが、こう……」鉄雄は目を瞑って、頭を押しさえた。「頭の中をいじくられているような……」

「能力検査スキャンってこと……?」

カオリが問いかける。

「どうだろ、そんな学校みたいな感じじゃあなかったような」

鉄雄は頭に巻かれた包帯をなぞるように手を動かし、空を仰いだ。

「あそこにはもう戻りたくねえな……」

カオリも空を見上げた。仰いだ先の空では、星が瞬き始めている。

鉄雄がカオリの方を久しぶりに見た。

「逃げようぜ、どっかへ」

「どっかって……？」

カオリも鉄雄を見た。二人の視線が暫く交わる。やがて、鉄雄は足を延ばし、芝生の上に身を横たえた。

「どっか……遠くへさ」 夜空を見上げながら、鉄雄が言った。

観測用の機器だろうか。明るい西から東へと、赤色に点滅する一際輝く光が、ゆっくりと移動している。

車の音がしばらくしていない。どこからか、時間を間違えたかのように蝉の鳴き声が遠鳴っている。

「あたしね」

カオリが川面を見つめながら言った。

「なんとか、卒業まではがんばる」

「なんだよ」

鉄雄が少し語気を強めて言った。

「逃げるなっということかよ」

「そうじゃないの」

カオリの口調は、先ほどまでよりもはっきりしたものになっている。

「あの学校も、今の寮も、——親も、好きじゃないから……言ったでしょ？ 中学の卒業資格を取らないと、あたしだけじゃ、この学園都市を離れられないって」

カオリは、再び鉄雄を見た。

「鉄雄くんが外へ行くなら、あたしも、行きたい……」

鉄雄は空を見上げたままだ。西の橙色は、急速に夜の闇に溶かされている。

「そうだな」

ぽつりと鉄雄が呟いた。「もう少し、粘るつきやねエかな——」
声色はどこか嬉しそうだった。

鉄雄は体を起こした。

「今夜、金田達が祝ってくれるってんだ」

はっきりした口調で鉄雄が言った。

「また、走るの？」

困ったような顔をしてカオリが言った。「もう、無茶しないでよ」
「悪いな」

鉄雄が立ち上がり、カオリに向かって言った。
「遅くなっちゃった。寮まで、送るよ」

ここに来てから、初めて鉄雄ははつきりと笑った。カオリに向かって手を差し出した。

「……うん」

カオリも嬉しそうに鉄雄の手を握った。

「チップ、あいつら、動くぜ」

ナイトスコープで覗いていた一人が言った。

鉄雄とカオリの様子を、数十メートル離れた所から、夜の暗闇に溶けるような服装をした数名が見張っていた。それぞれ、マスクをしたリ、ヘルメットを被ったりしていて、表情や風貌は分かりづらい。

「チッ、もう少し暗くなるまでいちゃついでくれてりやア良かったが」
一人がやや苛ついた声で言った。ピエロのペイントが施されたヘルメットをつけている。鼻を覆うように包帯が巻かれていて、雑なフェイスガードのようだった。

「まあ、そろそろ頃合いだ」

男がカプセルを一錠、口に放り込んだ。カプセルはガリツと音を立てた。

「追うぞ」

「ねえ、ほんとにこの道で大丈夫なのお?」

「うるせえ、大丈夫だって!黙って乗ってる」

鉄雄は盗んだ金田のバイクで、カオリを後ろに乗せて裏路地を走っていた。カオリの住む学生寮は第7学区の外れ、隣の学区とほぼ隣接する場所にある。

「ここらは俺らの庭みたいなものだ。こつちの方が近道なんだよ」

「ならいいけど……」

辺りはすっかり暗くなり、間隔を置いて街路灯が灯り始めていた。鉄雄達は巨大な運送会社の倉庫近くを走り抜けていく。コンテナが両脇にいくつも積み上がり、城壁のように連なっていた。

鉄雄くんが外に行くなら、あたしも行きたい――

カオリの先ほどの言葉が嬉しかった、今も、自分の腰に手を回しているカオリの身体の体温が伝わってきて、鉄雄の胸に沁み込んでくるようだった。生温い夜風のそれとは違うものを鉄雄は感じていた。

緩やかなカーブを抜けた所で、鉄雄は加速しようとローギアへのシフトチェンジをした。

すると突然、バイクが減速し始めた。慌てて鉄雄が加速を試みるが、みるみる推進力を失っていく。

「ああ……止まっ……ちやっ……た」

カオリが不安げな声を上げる。

「そうかア、ギアチェンジでもモーターを5000以下に下げちまっちゃいけねえんだ」

鉄雄は計器をやり始める。手元が暗くてよく見えない。

「お尻がいつた〜い……あれ?」

カオリは一旦降り、伸びをしたところで、今しがた自分たちが走ってきた方を見た。

コンテナで形作られた狭路の向こう、闇の中に、明るく蠢く白色の光が見えた。

「金田くんたち……?」

「えっ？」 鉄雄も振り返った。

唸るような音が、反響しながら暗闇から顔を出してきた。街灯が彼らの姿を映し出す。

「……!!じゃない!!」

鉄雄がぼつとバイクから降りた。何台かのバイクが二人のすぐ側を通り抜け、その瞬間、カオリが呻き声を上げて、顔を抑えて倒れ込んだ。

「カオリ!!」 鉄雄はうずくまるカオリの傍に駆け寄った。

血の痕が灯りに照らされたアスファルトに、ドリツピングした絵具のように飛び散っている。

カオリはぶるぶると震えている。

鉄雄は突然後ろから押さえつけられ、顔を強かに路面に打ち付けた。

果汁が弾けたように、血の味を感じる。

鉄雄の横でカオリの身体が無理やり引き摺られていき、鉄雄の視界には、ヘッドライトに照らされたブーツが映った。

「この間は世話になったな」くぐもった男の声がしたと思ったら、目の前のブーツが鉄雄の顔を蹴飛ばした。顔中が、火花が飛び散ったかのように熱くなった。

「やめろ——」歯ぎしりして声を上げるが、頭をもう一度押さえつけられる。砂利が口の中に入り、苦味と硬さが迸った。

カオリの悲鳴が聞こえる。頭を抑える圧力が緩んだので、鉄雄は声の聞こえた方を見た。

コンテナの前で羽交い絞めにされたカオリが、顔を思い切り殴られるのが見えて、鉄雄の頭は一層くらくらしした。

「で、その暴走族たちとどうやって連絡をとるんですの？ええと、——」

「高場だ！常盤台のお嬢さん、覚えておいてくれよ」

「……どうやってですか？」

助手席に乗る白井黒子の声に若干の苛つきがあるのを、初春は感じ

た。

放課後に巡回の指示を受けた初春は、柵川中学校を出た後、まず風紀委員の同僚である白井黒子と合流した。しかし、相手は二輪を駆るバイカーズだ。徒歩で巡回したところで、家の隙間を走り回るネズミを素手で捕ろうとするようなものだ。

そこで、警備員アンチスキルの先生が一人、車で応援に駆けつけてくれると聞いて、乗せてもらったが——乗っていたのは黄泉川先生や鉄装先生ではなく、がちがちに上へと固めた頭髪からわざとらしい香りを漂わせる、ガタイの良い男性教師だった。

聞けば、あの柵川中に立ち寄ったバイカーズの少年の通う学校に勤務しているという。

「俺はあいつらの教師だからな！生徒の連絡先くらい職員室で探してきたに決まってるだろ！ほれ」運転しながら、高場は片手で電話を黒子の手に押し付ける。

「うわ、ベタベタしてる……って、私はどうすれば？」

「ああ、連絡先から、そうだな……金田ってやつを探してくれ！」

「か、ね、だ……これかしら？金田しようたろう？」白井が指で画面を操作する。

「そう、そいつ！かけてくれ！」弾んだ声で高場が言った。

「ええ、なんで私が？」白井は困惑している。

「運転中は通話禁止ですから、白井さん」

初春が言うと、白井はあからさまに嫌そうな顔をして通話を試みる。

高場の電話を耳に当てたまま、白井は沈黙している。

「……番号が間違ってますわよ」

「ええ!?なんで!」高場が情けない声を上げた。

「そりゃあバイカーズやつてるくらい不良なら、ほんとの番号なんて学校に教えないんじゃないですかあ？」初春が言った。

高場は困ったような顔をして運転している。白井が隣で「どうするつもりですか!?」と文句を言っている。警備員相手にこのような態度をとる白井を、初春は見たことがなかった。

「ねえねえ、それじゃ、このカオリさんの携帯でかけてみましょうよ！」初春の隣から、夜の暗さを吹き飛ばすような明るい声が飛び出した。

「さつき金田って人からかかってきましたし！」

「それはいいですねえ——つて、高場先生！」初春は高場に抗議の声を上げた。「なんで佐天さんまで乗せちゃったんですか！」

「そうですね！このお方は無関係ですよ！」白井も高場を叱りつけるように言った。

「ええ？キミ、風紀委員じゃないの!？」高場の声が裏返った。

「違いますよ！初春が心配で付き添ってて……」涙子が困ったように笑って言った。

「腕章ぐらい確認してくださいまし」白井が頭を押さえて呻いた。「あなた、ほんとに警備員ですよ……?」

高場は目を泳がせた。「ま、まあ、キミ、金田に電話できる？頼んでもいいか？」

「えと、はい——なんて聞けばいいんですか？」

「どこでやり合うつもりかってさ！」

先ほどまでの動揺がもう吹き飛んでいるようだ。高場は気を取り直してハンドルを握り直した。「さあ頼んだぞキミ！」

山形のバイクの後ろに乗っている金田は、携帯が着信を受けていることに気が付き、振り落とされないように片腕でしっかり山形に掴まりながら、電話を耳に当てた。

「カオリちゃん!？」

「いえ、さつスキの、柵川中のもですけど——金田さん、どこに向かっているんですか!？」

「どこって——なんでそんなこと聞くんだよ!？」

金田は、自分たちと関わりのない中学生がなぜそんなことを聞くのか、疑問に思った。

「今、警備員や風紀委員がそちらに向かっていているんです！高場って先生が知りたがってますー！」

「はあ!?おい、そのアゴに伝えてくれ!手エ出すんじゃねエってな!!
切るぞー!」

「まっ、待ってください!教えてくださいってば——!」
相手の女子生徒の声に、金田は携帯を耳から離しかけていたのを止める。

鉄雄の顔と、カオリの顔を思い出し、次いで、黄泉川という先生が
言っていた言葉を思い出す。

(——君達を守ることが、私達警備員の役目じゃんよ)

「……7学区南西のコンテナ場だ。抜け道のどつかで、鉄雄は追いつ
められてるはずだ。分かったら、遅れんじゃねエって伝えてくれ!!」

金田は言い終わるとすぐ電話を切り、ポケットにしまった。

「誰からだよ——!?!」

山形が前から大声で怒鳴った。

「どうやら、無観客試合じゃなさそうだぜ!」

金田は怒っているのか喜んでいいのか、よく分からない高揚した声
で発破をかけた。

——気持ち悪い。

悲鳴を上げた途端に顔を殴られたので、ただでさえ痛かった目の辺
りに熱湯を浴びせられた感覚になり、身体感覚がフワフワしてき
た。

腹だか胸だかの辺りも殴られている。

酸っぱいものが喉を駆け上がって口から飛び出していった。咳が
止まらない。

右目は変に塞がれた感覚がする。片目でようやく見えた目の前に
は、真っ黒な顔があった。

影になっていて、よく見えない。

油の匂いがする。

『おい、うるせえんだよ、きつきからあ!!何とかしろやあ!』

私は突き飛ばされガス台に背中をぶつけ尻餅をついた。弾みで鍋がけたたましい音を立てて床に落ちた。

向こうの部屋からは甲高い泣き声が聞こえる。

ああそうだ。ヨーグルト臭がして思い出す。私はそろそろあいつのおむつを替えなきゃいけないかったのに、夕食の支度に手間取って――。

『ガキのお守りすんのに、てめえが働かねえで誰が働くんだよええ!!』
目の前の男ひとが大声で怒鳴り散らしながら迫ってきてわたしを蹴飛ばした。顔を腕で覆うが代わりに腹に来た。何度も蹴られる。ついでに殴られる。

あーあ。これは痣になるな。明日は体育だっけ。どうしようまた着替えられない――。

『いいか、誰の金でお前等が飯を食えてると思ってる?ああ!何とか言ってみろよええ!!』

いや母親が食器棚に隠したへそくりを少しずつとってそれで菓子パン買ってるだけだし。ろくなもの食べさせてくれないじゃんこの男――

『俺だ!俺が稼いだ金なんだよ!!だからお前はこのボロ家のことをやんのが当たり前だろうがあ、弟のクソの始末もできねえのかよ役立たず!』

弟?

――あの泣き喚いてるものはこの男の子どもかもしれないが。私のきょうだいなんかじゃない。

口元を切ったせいで無意識に唾を垂らしながら私は別の部屋の物音に耳を澄ます。

右隣の部屋は灯りが灯っていてそこでは母親がいるはず。

(浄化の炎よ、科学に溺れた人間の欲望を焼き払い給え。救いの日は近い。ミヤコ様のお導きにより大覚様へと随うることこそ、我ら衆生の

――)

『ボーツとしてんじゃねえこの女あ!!』

顔を2・3発平手で張られて髪を掴み上げられる。

母親は今日もなんとか教にハマっていてお祈りをしている。父親が死んでからずっとあの調子だもの。助けてくれる訳がない。

私は向きを変えられ台所のまな板の上にこれから裁かれる魚のように頭を押さえつけられる。

切りかけの野菜がそこらじゅうに散らばる。

あの男が私の下半身をとこらじゅうに散らばる。

『ガキの世話もできねえてめえみたいないな役立たずなんざ、これくらいしか使い道がないってんだよなあ』

あの男が耳元まで顔を寄せてきて喋る。そちらに顔を向けると獣のような笑みを浮かべているのが分かる。

ヤニと酒の匂いが鼻いっぱいに満ちる。

ああ。そうだ。だから。

これは私じゃない。

今の私じゃない。

きつと、あの時の私のことなんだ。

ざらついた作業用手袋が自分の身体を弄るのを感じて、カオリはそう思うことにした。

—— 学園都市 外壁東部 東京方面 検問所

上官との面談を終えた敷島大佐は、幾重にも施されたセキュリティチェックを受け、ようやく学園都市内に入ろうとしていた。

最終チェックである金属探知ゲートを抜けた後、入域履歴を残すため、外交官用パスポートを受付に提出する。

所定の位置に置かれたパスポートは、明滅する緑色の光に晒される。

「お取りください」

傍にある端末から機械的な音声が届く。

「ここを通るのは初めてじゃありませんが……まだ慣れません」

同じようにパスポートチェックを受ける黒服の側近がぼそつと漏らした。

「人間が全く相手をしない分、さぞかし人為的なミスは少ないだろうな」

大佐が静かに話すと、黒服は肩を少し震わせた。「申し訳ありません——」

「お前たちを叱ってるのではない」大佐は声色を変えずに言った。

黒服は縮こまったままだ。大佐の声は慰めているようには聞こえなかった。

敷島大佐はパスポートを手を取った。付近にある排紙口から、入域を受理したというレシートが発行される。

それを手に取ると、大佐は目を細めた。

レシートの末に、短い文章が印刷されていた。

へ ナンバーズ ヒキワタサレタシ アーミー シレイカン シキシマ タイサ ドノ

敷島大佐は頭上を見上げた。

監視カメラの漆黒のレンズが、こちらを見つめている。屈折した自分の姿が見えた。

周りを見渡す。明るい白色の光に照らされたターミナルには、人影はまばらだ。

「……大佐？」

黒服が声をかけるが、大佐は黙っていた。

(統括理事会からも唾が飛んできている)

上官の言葉を思い出し、大佐は再び監視カメラを見た。

「……もう出られないかもしれないな」

「はっ？」

黒服の怪訝な声には答えず、出口へと敷島大佐は歩き始めた。

煌々と明かりが灯る自動車発着用のロータリーでは、別の部下が待機していた。

「大佐！お戻りのところ急にすみません、至急お伝えしたいことが——」

「なんだ」バッグを部下に預け、大佐は尋ねた。
「Dr大西からです。例の島という少年のEEG脳波に、‘青’のパターンが見られたと」

敷島大佐は車に乗り込む前に立ち止まった。

「……能力発現か？」

「可能性が高いとのことです。現在付近で観測車が待機しています」

敷島大佐は元来た方を振り返った。

学園都市と外界を隔てる巨大な外壁は、夜の街明かりを受けて、黒々とした巨躯を夜空にせり出していた。

「……回収しろと伝えろ、我々はラボへ向かう」

「はっ！」

部下と共に乗り込んだ大佐を、車は外との出入り口から学園都市内
部へと運んで行った。

——いい気味だ。

クラウンのメンバーの一人、チツプはほくそ笑んだ。

数日前、第十九学区で転倒し、相手チームの奴に殴られたときは、死ぬかと思った。あと少し当たり所がずれていれば、鼻どころか首から上まるごとが吹っ飛んでいたかもしれない。

お陰で言葉はうまく発音できないし、ふとしたときにすぐまた鼻血が流れてくる。ドラッグをキめていなければやっていられなかった。

最近ジョーカーが引き入れた、錠前屋の情報で、自分を襲ったのが職業訓練校の1年生のガキだということが分かった。今日はそいつへの復讐だ。しかもケツ持ちならぬ彼女持ちとききた。

2・3発顔面を蹴り飛ばしてやった。こいつはさつきからカオリとかいう彼女の名前ばかり叫んでいる。

女々しい奴め。この間のお返しだ。もっと釣りをつけてやる。

「うっせえなあ——大事な彼女が可愛がられるとこ、よく見とけよオ」

鉄雄を押さえつけている仲間が愉快そうに言った。

「まあ、それもいいんだけどよ——」チツプは思いついたように言った。

自分たちの喧騒を余所に、物言わずに佇む真っ赤なバイクを見た。

「いいバイクだなア、オイ」チツプは、鉄雄達が乗ってきたバイクを指さして言った。街灯の光に、真っ赤なボディが照らされている。

こいつ、こんな派手なバイク乗ってたか？チツプの頭にふとそんな疑問が浮かんだが、ムカつく相手をいたぶることとドラッグによる高揚感で、すぐに疑問は消えた。

「——燃えてるみたいだぜエ、燃えちゃうねエ、チキショー！」チツプは根城から用意してきた松明に火を点け、真っ赤なバイクへと近づいていく。

鉄雄は目を見開いた。額から流れてきた血が沁みたが、そんなことは気にしていられなかった。

「——やめろ!!そのバイクに傷一つでも付けてみる!ぶっ殺してやるからな!」鉄雄が必死に叫んだ。

仲間が声を上げて笑った。

「大丈夫だって」チップは鉄雄に見せつけるように、松明を金田のバイクの真上にかざした。松明の炎が、赤いボディに反射し微かに揺らめいている。

それをチップは綺麗だと思った。そしてその綺麗なものをぶっ壊すのだということに、背筋がゾクリとした。

「傷一つも残らないよーに燃やし——ああ?」

チップの携帯が、懐でマリンバの音を軽やかに鳴らしている。携帯を取り出して「チツ」と舌打ちし、耳に当てた。「オイオイ何度目だア?……いや、もうお前の仕事は終わってんだよ……今いいトコなん——何?」

チップは言葉を止めた。

自分の手に持った松明が、いつの間にか手を離れて、およそ顔の高さまで浮かび上がっていたからだ。

ゴーグル越しに、炎が揺らめいた。熱を感じる。

悔しかった。

憎かった。

目の前のピエロ^{クラウン}どもが。そして、無力な自分が。

何が俺らの庭だ。何が一緒に学園都市^まの外へ逃げるだ。

カオリは何度か悲鳴を上げた後、先ほどから押し黙ってしまった。奴ら数人に囲まれていて、何をされているのか様子は見えないし、見たくもないものがあるのだろう。

鉄雄は、今の状況に、ただ悔しさを募らせた。

その悔しさは、沸々と怒りへと色を変えていった。

体中の痛みも飲み込んで、鉄雄の思考を怒りが満たしていった。

——殺してやる。

頭をかち割って。骨を砕いて。中身をぶちまけさせて。

何でもいい——殺してやりたい。

小さな脳内で圧縮された怒りは、行き場を求めて鉄雄の頭をぐわんぐわんと揺らした。

それは耐え難い頭痛へと突然変わり、鉄雄は顔を歪めた。

極めつけに、目の前の男が金田のバイクを燃やそうとしているのを見た。燃え盛るその炎のイメージが、いよいよ鉄雄の怒りに火を点けた。

バルブを無理やりこじ開けるように激情が溢れ、鉄雄の頭はぱっくり割れたように痛んだ。

鉄雄は絶叫した。

最初に、小石が、転がっていた空き缶が、ふわりと浮き上がった。

次に、夜空に伸びあがっていた華奢な街灯がバネのようになり、パリンと灯りを消したかと思うと、金属音を立ててぐにやりとひしやげた。

その歪んだ何本かの街灯の先は、クラウン達の方を全て向いていた。

アスファルトに亀裂が走り、生まれた破片も浮かび上がった。クラウン達は異常な事態に気付き動きを止めた。

次の瞬間、石礫やガラス片、ゴミといったものが、嵐に吹き飛ばされたように一斉にクラウン達へ襲い掛かった。

ある者はゴーグルにヒビが入り、たまらず顔を腕で覆った。

ある者は油で汚れた衣服が切り裂かれ、皮膚のあちこちから血を流した。

ある者は前から見えない巨大な手で圧される感覚に襲われ、後頭部から強かに倒れ込んだ。

そしてある者は、燃え盛る松明ごとコンテナへ押し付けられ、炎に包まれた。

「ああああー！！！」

火だるまになった男の悲鳴が響いた。

そしてその異常事態は、急にパタリと止んだ。

クラウン達は、何が起きたのか分からず、ネジが切れたように立ち止まったり、へたり込んでいた。

ただ一人、火に巻かれている仲間の悲鳴が響き渡った。

「お、おい——チップー！——」

その悲鳴を聴いて、他の仲間は再起動したようだ。慌てふためくが、火を消すようなものは生憎彼等は持ち合わせていなかった。

見れば、コンテナも木製だったようで、火が回り始めている。辺りは静謐な街灯の代わりに、揺らめいて踊る炎の灯りによって不規則に照らされていた。

カオリは、地面に倒れて、何も言わなかった。

鉄雄は、汗をだらだらと流して、這いつくばっていた。

「——誰か来るぞー！」

クラウンの一人が叫んだ。

「ぜってえ逃がすんじゃないぞー！甲斐ー！山形ー！」

金田は言うが早いか、山形のバイクから後ろ脚を伸ばすようにして飛び降りた。

培った高い運動神経が、彼のバランスを保ち、体を倒さなかった。

金田は足を必死に動かして走る。

前方では火災が起きているようだった。炎が真っ黒な上空に向かって燃え盛っている。

クラウンのメンバーは二手に分かれて逃げ出した。

一方は、金田達とは逆方向に、一目散にバイクを走らせた。そちらを甲斐と山形が加速して追いかける。

一人、動き出しの遅い奴が、甲斐と山形の隙間を抜けて、金田の方へ走ってきた。

金田は、猛然と走り、そいつの正面へと向かっていく。驚いたように、相手が上体を仰け反らすのが見えた。

次の瞬間、目の前に迫ったそいつの顔面目掛けて、金田は膝を突き出してジャンプした。

顎にヒットした。金田はバイクとはまともに当たらず、少しよろ

けながらも無事着地する。

対して、相手は両手をだらしなく広げて地面を転がった。相手のバイクは火花を立てながら路面をスライドし、近くに停めてあったトラックの足元にぶつかってひしゃげた。

金田は倒れた相手を一瞥すると、炎の燃え盛る方を見た。

自分のバイクが停めてあった。そして、その傍に、うずくまる仲間の姿があった。

「――鉄雄！」

金田は駆け出した。

金田が発破をかけて飛び降りた。無茶な行動だが、今に始まったことではない。

山形は甲斐と共に、燃え盛る炎や金田のバイクの横を抜けて、反対方向に逃げたクラウンのバイクを追った。

スピードには歴然とした差がある。追いつける。

山形は確信して距離を詰めようとしたが、その時、夜の闇の向こうに別の明かりが見えた。

「ここだ！」

高場が大声で言った。「シートベルトはしたかア！しっかり掴まれ！」

掴まるってどこに――疑問に思った瞬間車がブレーキをかけながら向きを変えたので、強烈な慣性に耐えようと佐天涙子は身を強張らせた。

横なぶりの圧力があつた後、車は道の真ん中を塞ぐようにして止まる。

「火が!!」

黒子の声を聞き、顔を上げると、ドアガラスの向こうに大きく燃える炎が見えた。

「初春！消防！それに救急車も！」

黒子は甲高く叫ぶと同時に、シートベルトを解除してドアから飛び

出した。「ハイッ」と初春が威勢よく返事をし、携帯で通報する。

普段の、お花畑に囲まれたように過ごしている彼女の違う一面を見たようで、佐天は場にそぐわず感心した。

「佐天さん？絶対車から出ちゃダメですわよ？」

黒子がツインテールをなびかせて、涙子の方を向いて言った。

「はい——白井さんは？」

「ご安心なさい」警備員車両の赤色灯に照らされた、黒子の自信に満ちた笑みが見えた。

「私——ジャツジメント風紀委員ですの！」

黒子がキツと前を向き、両足を踏みしめ、真っ直ぐに立った。

遠くでゆらめく炎が、腕章の光沢を輝かせる。彼女の小さな体から、何倍も背の高い影をこちらに走らせている。

——かつこいい。

純粹に、涙子はそう心から思った。

「お出ましたな！」運転席から飛び出した高場も、黒子の横に立つ。

小さな風紀委員と、大きな警備員が、アンチスキル赤色灯と炎に照らされて並んだ。

向こう側から、2台のバイクが爆音を轟かせてみるみる近づいてきていた。並走しながら迫ってくる。

「その暴走族！バイカーズ止まりなさい！」「止まれエー！」

甲高い声と低く重たい声がコーラスを奏でて響く。相手に聞こえているかは分からないが。

現にバイカーズはスピードを緩める気配が無い。

「警告はしましたわよ」「警告したからな」

——案外いいコンビになるかもしれないな。ガラスが息で曇るほど顔を近づけた涙子は、そう思った。

「どけえええ!!」

高場側に迫るクラウンの一員は、叫びながら突き進んでくる。

「言うことを聞かないガキは……行くぞ！」高場は息を吸い込んで、右足を下げ、左足に体重をかけた。そして、右腕を大きく振りかぶる。

バイクが高場を跳ね飛ばそうとする瞬間、高場は僅かに体を横にずらした。

「指導オオ!!」

右腕をハンマー投げのワイヤーの如く大きく振り抜いた。

どかつ、と音を立てて相手はバイクから浮き上がり、地面を2、3転して呻いた。主を失ったバイクはふらふらしながら軌道を変え、コンテナへぶつかって止まった。

加速するバイクの勢いはどこへ行ったのか、高場の足元はぐらつくことはなかった。

「腐れ風紀委員が!!」

黒子の方に突き進んだクラウンは、どこからか手のひらサイズのボール状の物を取り出した。それを口元に運ぶ。

（――手榴弾!!）黒子は目を開いた。

相手は、掌に載せたそれを、ひよいつと投げた。

投げた先は、黒子ではなく。

警備員の車だった。車両の真上に飛んで行く。

中には初春や涙子がいる。

「間に――合えッ!!」

黒子は車両の上へと意識を集中させる。

次の瞬間、浮かび上がるような感覚があり、黒子の身体は赤色灯のすぐ横、車体の真上を踏みしめていた。

ガタンと車が音を立てる。黒子は手を伸ばして、手榴弾を受け止めた。

安全レバーが外されている。

黒子は迷わず、身体を反転させて、それを車両の後方に投げた。

そちらへと蛇行しながら逃げる、クラウンに向かって。

ぼん、と音を立てて、手榴弾が炸裂する。

相手は爆風に押されてつんのめり、春巻きのように地面を転がった。

「……死んでないかしら?」

黒子はそう呟き、車両の上から飛び降りた。

前方から、別の2台のバイクが来て、急ブレーキをかけて止まったからだ。

黒子と高場が再び並び立つ。

「そのバイクーズ！」「お前等！」

二人が声を上げる。

「止まりなさい！」

山形と甲斐は、そろそろと手を挙げた。

「もう……止まってまあ……」

甲斐は冷や汗をかきながら、小さく言った。

通報を終えた初春は、車から降りる。

流石白井さんだ。まあこんなもんか。

けれども、あの高場という先生もすごいな。

アームポイント 肉体強化の能力者かな

？

声をかけようとしたところで、燃え盛る炎の方に、別の地面をのたうつ者を見た。

——人が燃えている。

それだけでない。うずくまる人影が他にも見える。

「——ッ！白井さん！高場先生！」

初春が叫び、2人もそちらに気付いた。

「私、毛布取ってきます!!」

初春はダツと車両のハッチバックを開け、毛布を掴み取ると駆け出した。

「……鉄雄！」

金田はうずくまる鉄雄へ声をかけ、歩み寄った。

鉄雄が顔を上げる。額の包帯は取れ、口元や頬が切れ、血を流しているのが見えた。

鉄雄はふらつきながら立ち上がった。

「……鉄雄？」

先程よりも静かに、金田は再び名前を呼んだ。

鉄雄は、金田を見た。

その汗まみれの顔は、くしゃくしゃに歪んでいる。

明らかに怒りが現れている。

炎が、メラメラと音を立てて、二人を明るく照らした。

「高場先生！バイクアースの拘束を！」

「ああ、分かった！」

黒子と高場が互いの行動を即座に決定し、それぞれ動き始めるのを見て、佐天涙子はようやく肩の力が抜けた。

車がここに停まってから、ほんの十数秒しか経っていないはずなのに、とても長く息詰まるドラマのワンシーンを見たようだった。

能力者である風紀委員と、よく分からないが強い警備員。アンチスキル

その戦いの様を初めて見たことで、不思議な高揚感を涙子は感じていた。

……そういえば、流れでこんなところまで来て、随分遅くなってしまった。

アケミ達、心配しているだろうな。ひとつ連絡を入れておこう。

しかし、何と言いついたものだろうか。

そう考えながら、携帯電話を取り出した時。涙子の背後で後部ドアが勢いよく開いた。

息を切らした初春が、ラゲッジを掻き漁っている。

「——ど、どうしたの!?!」

驚いて涙子が目を丸くする。

「怪我人！」

初春が、積まれていた毛布かシートか何かを数枚引つたくるように抱きかかえて、短く答えた。

「多分、重傷」

「救急車は——」

「応急処置！」

涙子の言葉を遮るように初春はぴしゃりと言うと、小さな体で何枚もの布を抱えて駆け出した。

しかし、すぐに戻って顔を覗かせた。

「佐天さん——座席のすぐ後ろに、救急箱あります、持ってきてくれ

ます?。」

「えつと、——これ?。」

佐天が身を乗り出して見つけたその箱には、確かに赤十字のマークが書いてあったが、救急箱、というには、無骨で頑丈な印象がした。「そうです、……ごめんなさい」

初春は最後、口調を弱めると、再び炎の燃え盛る方へ駆け出した。

——なんで謝られたんだろう?

涙子は疑問に思いながらも、救急箱を持ち上げようとした。

予想以上に重く、それを両手で抱えて車から出るのにやや時間がかかってしまった。涙子は初春の後を追って走り出した。

初春飾利が、火に巻かれた人間の元へ到達しようかという時、上空にヴィーンと唸りを立てて何かが飛来してきた。

回転翼を回す、その幾つかの物体が、メレンゲのように白い半液体を炎に向かって噴射する。

学園都市の消火用ドローン。交通状況や地理的条件で、人の手が火災現場に駆け付けられるのが遅れる場合、初期消火に当たるものだ。

地面に倒れ伏した人間を巻いていた炎は程なく消えた。初春はゴクリと唾を飲み込んでから、消火剤で泡塗れのその人物の状態を確認する。

腐乱した卵の匂いが鼻をつく。髪の毛の大半は原型を留めずに燃えてしまっている。

顔は煤で汚れ、マスクだかゴーグルだか分からないものを身に付けていたのだろうか。皮膚に癒着していないことを願った。

火傷がひどいのはとくにお腹から胸にかけての胴体部分で、作業着のような物を着ていたのだろうか、溶けてしまい、赤く爛れた皮膚が露わになっていた。

ここまでひどい火傷の負傷者に、初春は遭遇したことはない。

風紀委員の研修で習ったことを必死に頭から呼び起こしながら、初春は対処しようとした。

「聞こえますか!？」

体が震えるのをこらえて、初春は呼びかけた。黒く煤けた唇が僅

かに動いたが、ヒューツと声にならない息の通りが聞こえるだけだった。

意識はあるようだが、危ない状態だ。火傷は時間が経てばたつほど、身体を蝕んでいくと習った。

持ってきた布類の中から薄いシーツを選び、消火剤を包むようにして全身を巻いた。初春の手に、溶けかけた化学繊維がいくつもくっ付いた。

「大丈夫です、すぐ助けが来ます！」

今、自分の持ち合わせでできることはこの位だ。初春は励ましの言葉をかけ、立ち上がった。あとは救急車が早く来てくれることを祈るしかない。

周りを見渡すと、コンテナの方の大きな火災にも、ドローンが群がっている。しかし、こちらは暫く時間がかかりそうだ。

「初春ッーッー！」

悲鳴に近い涙子の上擦った声が聞こえ、初春は顔をそちらに向けた。

道路脇に、女性らしき人が座り込んでいる。涙子はその近くから呼びかけたようだ。

初春は急いでそちらへと駆け寄った。

応急キットを抱えた涙子は、初春が向かった方とは離れた所に、座り込む人影を見つけた。涙子はそちらへと駆け寄る。

しかし、数メートルの所で足を止めてしまった。

その人は、自分と同じ中学校の制服を着ていた。

ブラウスは前で引き裂かれ、胸元が露わになっている。スカートも無理やり下ろされたように乱れ、下着が覗いている。

そして、顔を見て更に涙子はショックを受けた。

まず右瞼が大きく腫れ上がっていて、目がほとんど見えていないような状態だ。額の辺りにもひどい青あざがあり、鼻は不自然に曲がりだらだらと血を垂らしていた。唇にも切り傷があり、半開きの口からは涎と血が混ざったものが糸を引いて、引き裂かれたブラウスを更に

汚していた。

「……ッ!!」

涙子は悲しいような、怖いような、とにかく良くない感情が胸に駆け上がって来るのを感じ、震えた。

「初春!!」

助けを求める声は、自分でも怖くなるくらい上擦った。

涙子は唇を噛み締めると、走り寄り、その人の姿を周りから隠すように、目の前にしゃがみこんだ。

「……カオリさん?」

あの、校門の所で、バイクの少年の後ろに乗っていた、3年の先輩だ。

カオリは顔を上げた。顎から血の雫が滴り、ブラウスに一層赤い染みを作った。

「……だれ?」

奇妙に息が抜けるような発音だ。

涙子は恐怖で、しゃがみこむ足がガクガクするのを感じた。何とか、言葉を継ぐ。

「——あなたの、後輩です」

言いながら、脇に置いた救急キットを開ける。

中には、消毒液やガーゼ、包帯、大きなチューブ等が入っている。どれを使えばいいんだろう? 気持ちが悪く落ち着かず判断力が乱れている。涙子は中からガーゼを取り出そうとするが、手が震えて上手く取れない。

「佐天さん——!ッ」

初春が、残った毛布を抱えてやってきた。カオリの姿を目にして、口に手を当てる。

抱えていた毛布が、ふあさつと地面に落ちた。

「……ひどい……」

一瞬、3人は動きを止めた。

炎の燃え立つパチパチという音、ドローンの駆動音、消火剤の巻かれる噴射音。

カオリが、唇を動かした。

「あたしは、大丈夫……」

そして、傷だらけの顔を歪ませた。歯が欠けているのが見える。笑っている。

涙子はそれを見て、ハツとした。

ブーツとれている場合ではない。

「初春ッ！貸してッ！」

涙子は地面に落ちた毛布を引つたくると、カオリを抱きしめるようにして身体を覆った。

たった今知り合ったばかりだが、こんな姿をほかの人に見られたくはなかった。

涙子の行動に、初春も動き出した。涙子の持ってきた救急キットから、太いチューブ状の物を手に取ると、すぐ掌にジェル状の中身を押し出した。

「対外傷キットです」

初春は早口に呟きながら、それをカオリの痣や傷口に塗る。

「消毒と、止血、それと——傷口を塞ぐ、3つも同時にこなしちゃう、優れもの、なんです——ど、どつかの病院の、ドクターが、っは、発明したらしい、ですよ？」

自分に言い聞かせるように、初春はカオリの傷にジェルを塗っている。

「っす、すごいですよね？」

涙子は、初春の言葉を聞いて、もう限界だった。

カオリの顔を見ることはできなかった。

「なんで——大丈夫、なんて、言うんですか……？」

毛布ごと、カオリの身体を抱き締めた。

カオリはとても痩せていた。いろんな場所で、骨が皮膚に浮かびあがるような体つきだ。毛布越しでもそれが分かった。

涙子は頬を温かいものが伝うのを感じた。

なんで泣いてるんだろう、わたし——。

「……ありがとう」

涙子の耳に、カオリのか細い呟きが聞こえた。
遠くから、サイレンの音が聞こえる。

——なんで、そんな顔をしてやがる。

金田は歯噛みした。鉄雄の痣だらけの顔は、怒りに歪んでいる。
包帯が巻かれていた筈の額には新しい切り傷があり、血が頬を伝って赤い跡を残していた。

「……鉄雄」

金田はゆっくり歩み寄り、肩に手をかけようとした。

その手を、鉄雄はパシツと弾いた。金田は目を見開いた。

「なんだてめエ」

金田低く言った。

「お前こそ、なんで来やがった」

鉄雄が金田を睨みつけて言った。

「何イ」

金田も怒りが湧いてきた。

「てめエ、それは一体どういう——」

「俺一人でもやれたんだ！」

鉄雄が眉間に皺を寄せ、突然大声で言った。

「いつもいつも、助けに来やがってエ！俺だつて——やられてばかりじゃないんだよオ！」

鉄雄の言葉は、怒りの声かと思うと、途中には悲痛な響きも混じっている。

「いつまでもガキ扱いしやがって——沢山なんだよオ！」

金田はじつと黙って聞いていたが、しばらくして口を開いた。

「うるせエよ」

金田が言うと、鉄雄は目をより大きくして金田を見た。

「元はと言えば、てめエが他人様のバイクで、ハマこいたからこうなったんだろうが」

「うるさあああい!!俺に命令すんなアアア!!」

鉄雄が両手を握りしめ、思い切り叫んだ。

「鉄雄……」

金田が静かに言った。

「お前、どうし——」

その時、金田達のすぐ傍の地面に、甲斐と山形がドタツと倒れ込むようにして突然現れた。後ろ手を拘束され、腹這いになる形だった。

「ああ？お前等——」

「金田ア、ひでエよオ」

甲斐が情けない声を出した。

「俺ら、なーンもしてねエんだぜエ」

甲斐と山形がもがいていると、次にツインテールの小さな女が現れた。

制服に腕章——あの能力者の風紀委員だ。

ゲツ、と金田は声を漏らした。

「そのの2人！」

ツインテールはビシツと金田と鉄雄を指さし、声を張り上げた。

「ジャツジメントですの。ほかの男共同様、事情聴取のためにそこを動かないでくださいまし」

「はア、待てよ!!」

憤慨して金田は反論した。

「俺らは仲間を助けようとしたただけだぜエ、やられたのはこっち!!」

「嘘臭いですわね」

風紀委員の女は、汚い物を見る目で金田を睨んだ。

「あそこにいるアイツら——」

風紀委員がくいつと指さした先には、やや離れたところで倒れている二人の姿があった。金田と反対方向に逃げた、クラウンのメンバーだ。

「あなたとケンカしてたんでしょっ？」

ええ!?と山形が戸惑ったような声を出した。

「だから違うッて！」

金田は強く否定する。

「俺が蹴り飛ばしてやったのは、そこにいる一人だけ！」

金田は片腕で、先ほど倒した相手を示す。地面にのびて動かない。

一瞬、沈黙が流れる。甲斐が、「あちやく」と脱力しながら、地面に額をコツンと打った。

「——吐きましたわね？」

風紀委員が勝ち誇った笑みを浮かべて言った。

「アンチスキルに引き渡しますわ」

「ああッ！てめえ、はめやがったな！」

金田は慌てて叫ぶ。

「何のことですか？」

風紀委員が拘束ロープを取り出した。

「大人しくしなさい！」

「……ケツ」

金田達と風紀委員とのやり取りを見ていた鉄雄は、小声で吐き捨てた。

「どいつもこいつも……」

何事かぶつぶつと呟きながら、その場をよろよろと離れようとする。

「おい、鉄雄！」

金田は、風紀委員から鉄雄の方を向いて声をかけた。

「どこへ行く気だ！」

「勝手に動かないでくださいまし！」

風紀委員も声を張り上げる。

「うるせえ!!放つといってくれえー！」

鉄雄が頭を押さえ、叫ぶ。

「おい、様子がおかしいぜアイツ……」

甲斐が困ったような声を出す。

「島!!」ドタドタと、高場もその場に現れる。

高場の声も鉄雄は無視して背を向けている。

「……鉄雄くん」

弱弱しい声がした。なぜか、全員がその声の方向を振り向いた。カオリが、毛布に身を包み、ゆっくりとこちらに近づいていた。

「う、動いちゃダメですって……」

初春と涙子が両脇を支えながら、引き留めようとしている。

「カオリちゃん……」

痛々しい姿のカオリを見て、山形が声を漏らした。

鉄雄がカオリの方を振り返り、目を見開いた。

「カ、カオリ……」

先程までの威勢は消え、急に鉄雄は弱気な声を出した。

「鉄雄くん」

カオリは、傷だらけの顔を上げて言った。

「しよがなかつたんだよ。運が悪かつたんだね」

カオリはゆっくりと、言葉が続ける。

「……大丈夫だよ。鉄雄くんはわたしを守ろうとしてくれたんだもの」

鉄雄は、カオリの傷だらけの顔を見て、毛布にくるまれた姿を見て、カオリの弱弱しい言葉を聞いて——絶望した。

——俺のせいだ。

俺のせいで、カオリは……。

頭痛が波となって、何度も鉄雄に押し寄せた。たまらず、膝をついた。

悪寒がして、何度も咽て咳込んだ。胃から酸っぱい物が駆け上がり、吐き出した。

べちやべちやと音を立てて、どす黒い血や内臓が口から飛び出してきた。

——血？内臓？鉄雄は自分の身体を見た。

腹がぱっくり切り裂かれていて、桃色をした腸が血だまりの中に引きずり出されていた。ぬらぬらと炎の揺らめきを受けて輝いている。

「あ、あ、あ——」

途切れ途切れに声を上げ、鉄雄は急いで臓物を自分の腹の中へ押し戻そうと、集め出した。両手が血で真っ赤に染まり、生温さに包まれた。

次の瞬間、鉄雄の座り込む地面が大きく揺れた。バランスを崩し、鉄雄は両手をつこうとした。

地面がぱっくり割れていた。

今、鉄雄は虚空の中にいた。身体が、どこまでも下へと落ちていく。鉄雄は、あらん限りの声で叫んだ。

突然、目の前が緑色の光に包まれ、眩しさに鉄雄は目を覆った。

声が光の向こうから聞こえる。

(やめろ！鉄雄!!やめろよ畜生!!)(やったよ、鉄雄君!もうこれで――)(41号!終わりだ!)(アンタをぶちのめした後でね!)(彼からの呼び声だよ……)(保育園児が!!超能力者に勝とうだなんてなあ!!)(不良が、女の子相手にみっともねーと思わねえか?)(まつ、待ってくれえ!)(言うなれば、多才能力者だ)(きみが、41号?)(理論的にはだね、LEVEL6の域に……)(鉄雄くんが行くなら、あたしも行きたい……)

(ア．．．キ．．．．．ラ)

「知らない!!そんな奴は知らない!!」

鉄雄は頭を振った。

「……彼、ドラッグでもやってるんですの?」

黒子が胡散臭そうに言った。

皆が不安げに見守る中、鉄雄は膝をついて、目の前の地面に転がる何かを、必死にかき集めるように腕を動かしている。

「いや、あいつ——だって、酒も一口でやられるような奴だし——」

「酒？」

「ああ、いや、なんでも——」

金田と黒子がそんなやり取りをしていると、急に高場が大声をあげた。

「やっと来たか！——おおい、こっちだ！」

眩いライトに気付き、全員がそちらを見た。

白色の大きな車体、救急車だ。金田達を明るく照らすように近くで止まると、すぐに何人かの白衣を着た人物が、医療器具を手に降りてきた。

「こっちです、ケガ人は3名、重度の火傷が1人——」

初春が白衣達を案内しようと駆け出したが、途中で止まった。

救急士とは明らかに出で立ちの異なる、黒服とサングラスをまとった大柄な男が数名、行く手を塞いだからだ。

「おい、お前たち、どういうつもりだ——」

高場が抗議しようと詰め寄る。黒服と高場はほぼ同じ体格だ。相手は何も言わない。

黒服達の壁の向こうで、白衣の人物達が鉄雄を取り囲んでいる。

「なんだてめエら？葬式帰りかア？」

金田は不敵に挑発した。鉄雄の様子を見に近付こうとするが、黒服の1人に強く押し戻され、尻餅をついた。

「金田！」

甲斐や山形が叫ぶ。金田は顔を上げて、黒服達を睨み付け、隙間から様子を伺おうとした。

ペンライトで瞳を照らしたり、子供のお菓子で見かけるような冗談みたいな緑色の液体を注射する様子が辛うじて見えた。

彼らはひたすら鉄雄だけを診ていた。他のカオリやクラウンの連中には近づきもしない。

「ねえ！ほかの人は?！」

我慢できなくなり涙子が叫んだ。

「この子ひどい怪我なんです、ねえ——」

涙子が懇願する間に、白衣の連中は鉄雄を担架に乗せて車へ運び込んだ。黒服の男たちも何も言わず乗り込んだ。

鉄雄は行ってしまった。

「なんなんだ、あいつら……」

金田が呟いたのとほぼ同時に、サイレンの音が近付いてきた。

今度は反対方向から、救急車がやって来た。

「風紀委員からの通報を受けて来ました！負傷者は!？」

降りてきた男の救急士が高場や白井たちに声をかける。先ほどの白衣の連中と比べ、より機能的な服装をしている。

「こちらです！特に、火傷の人が重傷で……」

初春が案内を始めた。涙子は手当てを受けるカオリに付き添っている。

「あの一！」

黒子が一人の救急士に声をかけた。

「先ほど1名、別の方々に連れていかれましたが……」

「えっ?」

救急士が怪訝そうに言った。

「今所要請を受けたのは我々だよ？我々が一番に来たんじゃないのかい?」

「どういうことだ?」

高場も疑問の声を上げる。

「そういえば金田」

相変わらず這いつくばったままの甲斐が言った。

「さっきの連中、サイレンとか全然鳴らしていなかったよな……」

そうだ。あいつらは、突然現れた。

まるで、すぐ近くからずつと見張っていたかのように。

金田は唇を噛み締めた。

ドローンはいつの間にかコンテナの火災も大方消火し終えていた。

木が燃えた後の煤けた匂いが、辺りに漂っていた。

「やられたな」

黄泉川が部屋の扉を開けるなり言った。

「あの119番もどきは、都市軍隊アーミーの車じゃん」

黄泉川は机の上に、プリントアウトされた何枚かの写真を無造作に広げて言った。

「それも、ただの救急車アンピじゃなく、何らかの観測機能のついたね」

クラウンに鉄雄とカオリが襲われた現場近くに設置されていた監視カメラの画像だという、その写真はかなり粗かったが、トラックと救急車をちぐはぐに繋げたようなフォルムは判別できた。

「で、こつちが防衛省のホームページにはばんと載ってるやつ」

そう言つて、別の1枚を机の上に置く。

『高線量地帯救難特殊車両』とタイトルの振られたその写真は、先ほどの画像の車を、自動車販売カタログのように鮮明に写したものだつた。

「小学生でも読めるように、ご丁寧に振り仮名まで付いてるじゃん……」

「コウ……セン……リョウ……ビームでも出すのか？」

「高線量」

山形の眠そうな言葉を、黄泉川は遮った。

「あんたらの学校と同じ10区には、石棺イソカネがあるじゃん？今も過去のメルトダウンの影響が残っているかもしれないって、その観測と対処のために導入した車両——表向きはね」

黄泉川は早口に言いながら、空いているパイプ椅子にドカツと音を立てて座った。すぐ隣で机に突っ伏していた甲斐が、跳ね起きた。

金田達は「事情聴取」の名目で、この警備員アンチスキルの詰所へ再び連れて来られていたが、長いこと待たされていた。ここへ金田達を連れてきた高場は、消防や燃えたコンテナの所有会社に事情説明をするとかで、しばらく席を外している。

また、甲斐や山形を拘束した風紀委員ジャッジメント達は、「本来、校外活動はし

ない」とのこととで、それぞれの家や寮に既に帰っていた。

「あんたらの証言を基にすると、島君の状態を観察するために、殴り合いを遠巻きに眺めてた——ってどこじやん」

黄泉川は写真を指でつつきながら言う。

「鉄雄の状態つてのは、なんだ——」

甲斐が少し椅子をずらして、なぜか黄泉川から距離をとって言った。

「片頭痛の診察とか？」

「恐らく」

黄泉川が答えた。

「能力の発現じやん」

「待てよ」

金田が顔を険しくして言った。

「あいつは、ゼロもゼロの無能力者だぜエ？」

「そそ！俺らみーんな仲良くな、先生！」山形も自虐的に言った。

「それは、私らも把握してるじやん、だけど——」

黄泉川はそこで一旦言葉を切った。

「——あの柵川中の女子生徒……彼女が証言してくれたよ、自分を守るために島君が何らかの能力を使ったって」

「カオリちゃんが!!」

金田が語気を強めた。

「先生、あの子は今、大丈夫なのか!？」

「数日、入院じやん」

黄泉川の顔が曇る。

「初春たちが、駆け付けてすぐによく手当てしてくれたからまだいいけど……辛いじやん、顔も、心も傷を負ったのは」

金田達は押し黙った。カオリの所に行くよう、鉄雄に囁し立てたのは自分たちだ。

「あんたらのチームと付き合ってたのは、彼女の責任だから、私はそれをとやかくは言わない」

黄泉川が、金田達を見ながら、静かに言った。

「ただ、あんな風にひどいことをされてもね、信頼してるんだろうね——島君やあんたら3人は悪くないって、そう言ってくれてるんじゃないん——」

思い出すのも辛いだろうにね……それを絶対軽んじないでほしい」
黄泉川の言う通り、バイクーズである鉄雄と付き合っていることは、カオリ自身の意思による。

鉄雄の何に惹かれているのか、カオリがどう思っているのかよく分からない部分もあるが、とにかく自分たちのことを忌み嫌わず、普通に接してくれる、数少ない「まとも」な学生だ。

金田達は、カオリを抗争に巻き込んでしまったことに、何も言えなかった。

「ただ、さつきも言ったけど、島君は——確かに何らかの力を使つて、彼女が乱暴されるのを防いだ。ただし——」

黄泉川は顔を曇らせた。

「相手一人が大火傷したのは、彼の仕業かもしれないんじゃないん」

黄泉川の言葉を聞いて、金田達は顔を強張らせた。

「先生、鉄雄は……」金田が言ったが、上手く続きの言葉が言えなかった。

「火傷した相手は、今意識不明で、正直言って危ない状態じゃん」黄泉川が言った。

「カオリちゃんが落ち着いたときに、またどう証言するかにもよるけど……もしあれが島君の仕業なら、警備員としては見過ごすわけにはいかない」

黄泉川は両手を組み、じっと金田達を見つめた。「今回先に手を出したのはクラウンの方。だけど、重傷者がはつきりと出てしまった以上、あんたらの活動も厳しく見なきゃいけない——」

もちろん、クラウンのチームにも取り締まりは入れる。それでも、しばらくあんたらのバイクは預からせてもらうよ」

金田達は顔を見合わせた。

「でも、先生——」山形が抗議の声を上げようとした。

「また走るの？相手がもつと厳しい報復に出るかもしれないじゃん

！」

黄泉川は語気を強めた。

「カオリちゃんみたいに巻き込まれる人、また出したいの？私は、そんなこと許さない」

黄泉川の言葉に、山形は言葉を飲み込んだ。

「これは、あんたらの身を守るためでもあるの」

黄泉川は、組んでいた手を解き、先ほどより口調を弱めた。

「最近はただでさえ物騒じゃん……」

黄泉川はそう言うと、広げられた紙を集め出した。部屋の明るい光を上から受けて、その目元には、はつきりと隈が浮かんでいた。

「……俺らのこと以外でもナンかあるンすか……？」

甲斐が探るように聞くと、黄泉川はため息をついた。

「まあ、いろいろとね……」

そして、紙の束を掴んで、黄泉川は立ち上がった。

「島君は、能力の発現やアーミーの関わりが強く疑われる以上、あんたらも深く関わるべきじゃないよ。つまらないかもしれないけど、暫く大人しく過ごしてほしいじゃん。」

……長く待たせて、悪かったね」

黄泉川は、先ほどよりも表情を明るくして言った。

「それじゃ、山形君と甲斐君。帰っていいよ。」

「——えっ!?待てよ」

金田が目丸くして言った。「先生、おれは——」

「ああ、金田君は……」

出口へと向かいかけた黄泉川が言った途端、ばたんと大きな音を立ててドアが開けられた。

「おおい、金田アー！」

高場だった。「やばっ」と金田が声を出した。

「お嬢さんから聞いたぞオ！お前、クラウンのメンバー相手に膝蹴りを食らわせたらしいな……！マイナス何ポイントだろうなア!!」

「はあ、ちよつと待てって！あれはつい……」金田は立ち上がり、両手を突き出すようにして言った。

「じゃあ、金田、俺らもう遅いから帰るわ……」山形と甲斐はそろそろと部屋を抜け出そうとする。

「おいイ!? 待てよ、見捨てるのかア!？」

「さあ、来るんだ金田。じっくり話を聞かせてもらおうじゃないか!!」
「嫌だつてのオ!!」

金田の叫びが、夜の警備員の事務所に響き渡った。

「素晴らしい……肉体の傷の治りといったら、早いものですよ。しかも、観測者からの映像によると……」

アーミーの研究施設の一室で、Dr. 大西は、静かに、だが興奮を隠せない口調で敷島大佐にまくし立てている。

「この相手の不良を燃やすところ……同時刻の波長の変化を併せて推測するに、これは26号と同タイプの念動力テレキネシスですよ、それも強度は低くない……素晴らしい!」

大西は、ディスプレイから顔を上げて敷島大佐を見た。

「これほどの素材なら、ナンバーを与えてもよいでしょう!」

敷島大佐は、映像をじっと見つめた。

「41号と言う訳か……」

静かに呟いた。ディスプレイでは、鉄雄の目の前でクラウンのメンバーが火達磨になって悶え苦しむ様子がスロー再生されていた。

「そこで、この少年の能力開発を一層進める、許可を頂きたいのです!」

大西が、熱意を目に湛えて言った。

敷島大佐は、暫く腕組みをして黙っていた。

大西は、待ち切れない、というように口を開いた。

「大佐!! どうか! この素材は、保育園ベビールームの実験体達を凌駕する程のものになる期待もあります! そうすれば、この学園都市で、再び我々が――」

「ドクター」

敷島大佐は視線を大西に送って言った。

「……統括理事会から、ナンバーズを超越せ、と脅しが来ている」

「な——何ですって!？」

大西は信じられない様子で目を見開いた。

「無論、渡しはしない」

大佐は続けた。

「だが、この少年が、本当に——」

大佐は、別の画面の映像を見た。殺風景な小部屋のマツサージチェアに似たベッドには、鉄雄が沈静されて横たわっている。

「我々の手に負えるものなのか……それを判断しかねているのだ。一歩間違えれば、我々はこの学園都市^まで居場所^ちを失う」

大西が滅多に耳にしない、迷いを含んだ大佐の声だった。大佐は、監視カメラを通して送られる鉄雄の映像をじっと見上げている。

鉄雄の頭には、上半分をすっぽり覆うように楕円体の形をした機械が接続されている。機械の上部からは、人の頭が入るサイズの蛇腹管が壁へと接続されている。その下からは、大量の赤や青の配線が、クラグの足のように一見無造作に張り巡らされている。そして大佐と大西がいる部屋へは、鉄雄のEEG^{脳波}やMEG^{脳磁図}の情報が送られ、コンピュータの画面や机上のホログラムに、2D・3Dの波形として表示されている。それらの形は、今は規則正しい動きを示していた。

「大佐。それならば——尚更、この少年を育て上げるべきです」

大西が、決断を迫るように敷島大佐に語る。

敷島大佐は、じっと映像を見上げたままだ。

「理事会の奴らが、我々へと圧力を強めようと言うのなら——それを跳ね除ける実績が必要ではありませんか？中央の奴らを黙らせ、巷のLEVEL5共を超える……アキラにも匹敵するような」

敷島大佐はここで大西の方を見た。

「第2・第3のアキラを生み出そうというのか？」厳しい視線を大西に送った。

「41号を、我々の盾とし、矛とすればよいのです！」大西も敷島大佐を見返す。

「やってみせましょう！必ずや！」

大佐は目を一度瞑り、再び眠る鉄雄の映像を見た。

「ドクター、なぜ……あの少年にそれ程の期待をかける？」

大佐はゆつくりと聞いた。

「これは私見であり、科学者としての見解には相応しくありませんが……」

大西の口調も静かなもの変わった。

「彼を見ていると、感じるのです。力への欲求をね」

大西は、卓上に設置された危機から光を放っている、ホログラムの波形映像を見つめた。深く皺が刻まれた顔の中で、瞳だけが一際輝いている。

「それを合理的に引き出し、活用の道を探るのが、我々の仕事です……
とはいえ……」

大西は、部屋の本棚へと歩み寄った。分厚いファイルがいくつも詰め込まれている。

「おっしゃる通り、理事会連中からのそういった脅しがあるならば、我々も急ぐ必要があります。何せ、この研究室ラボは人員削減される一方ですからな」

「誰か、力になれる人材の当てでもあるのか？」大佐が、大西を見た。

「我々の研究を今これ以上外部に漏らす訳にはいかないのだぞ」

「能力開発に長け、一方で、主流派からは爪弾きにされているような、研究者——」

大西が、棚にしまわれていた一冊のファイルをパラパラとめくりながら言った。「そんな言わば流れ者ですが、……一人、心当たりがあるのですよ」

大西が、上目遣いで大佐に視線を送った。口元が、微かに笑っている。

「我々と、利害の一致しそうな人物がね……」

大西の持つファイルの表紙には、『AIM拡散力場制御実験 報告』とラベリングがされていた。

河川敷に座り、燃える夕日を溶かしていく夜空を見上げて、鉄雄は隣のカオリに語った。

「俺、まともに働こうかな」

気恥ずかしくてカオリの顔を見ることができない。鉄雄は夜空を見上げ続けた。

「カオリがもう、辛い思いしないようにな……俺が金稼いで、どつか遠くで、二人で暮らすんだ」

意を決して、鉄雄はカオリの方を見た。「なあ、カオリ——」

鉄雄は不意に言葉を止めた。

カオリは立ち上がり、先ほどの鉄雄のように夜空を見上げていた。顔は暗くてよく見えない。

「そうだね、鉄雄君」

カオリが鉄雄を見下ろした。

ひどく殴られ、傷だらけで、血と涎を垂らしていた。

「鉄雄君は」カオリが齒の欠けた口を開いた。「わたしを守ってくれるもんね」

鉄雄は声にならない叫びを上げて後ずさりした。

芝生を掴もうとした手が滑り、鉄雄は坂を転げ落ちて行った。

突然、身体が熱く弾力のあるものに包まれた。

咽返る甘酸っぱい臭気に、吐きそうになる。

腐乱した肉のようなものに、鉄雄は首から下を包まれ、締め付けられていた。

「て、つお、君……!!」

カオリが離れた所で、同じように肉塊に溺れている。

(カオリ!!) 声を出そうとしたが、なぜか喉が掠れて少しも音にならない。

カオリは一気に肉塊に引き込まれ、見えなくなった。

「痛い痛い痛い!!! 痛いよおおお!!!」

カオリの絶叫が響く。

(やめろ! やめろ!)

鉄雄は必死に声を出そうともがく。

ずつと下の方で、金田がボールをリフティングして遊んでいた。そうだ、あいつは運動が上手で。

俺はサッカーを教わりたかったんだ。

鉄雄は今、公園のドームの上に登っていた。

(金田アア!!) 鉄雄は必死に呼びかけた。

(助けてくれエエ!!)

甲高いブザー音が轟き、世界は突然真っ白になった。

鉄雄はまず、額に痛みを感じた。

混乱の後、自分の頭部の上半分が固いものに阻まれていると気づき、身体を振った。

次に、頭部や腕、足にいくつも取り付けられたコードや電極に耐え難い異物感を感じ、無理やり引つ剥がした。

自分を拘束していた椅子から床に降り立つ。足裏に冷たさを感じた。

荒い息遣いが、真っ暗な部屋に不気味に響く。エラー音だろうか、目覚ましのアラームにしては耳障りの悪い音程で、周期的な音が鳴っている。

この部屋には僅かな明かりしかない。出入り口の小窓に淡く見える、外部の光。自分が今しがた脱出した巨大な機械の側面や壁に取り付けられたモニターに点々と、夜光虫のように群れる光。

部屋は、四方に十歩も歩けば壁になるくらいの狭さだった。

周囲の状況を徐々に把握できた鉄雄は、額の汗をぬぐった。

ひどい目覚めだ。

じとつと、患者衣が身体のそこかしこに張り付いている冷たさを感じる。

自分は一体、何をして、何故ここにいるのだろうか。

出入口の小窓に人影が見えて、鉄雄ははっとそちらを見た。

扉が開かれた。

「随分辛そうだね」

長い髪をした、白衣の女性が、今にも掻き消えそうな雰囲気を出しながら立っていた。

「誰だ……」

鉄雄が息を切らしながら問うた。

「初めまして、島鉄雄君」

そう言つて、女性は一步部屋の中へ進み入ってきた。

「君の、再履修担当リメデイになった、木山春生きやまはるみだ」

全く感情の起伏を感じさせない声で、木山は鉄雄に言った。

「よろしく」

長い前髪の間隙から僅かに覗く瞳が、鉄雄をじつと捉えていた。

IV・佐天涙子とカオリ

20

7月5日午後——第七学区 柵川中学校

「バイクーズの彼女のお見舞い?」

怪訝そうな顔でアケミは涙子に言った。

「行かなくていいと思うけどなあ」

「そうかなあ……?」

涙子は困った顔をした。

「初春がさ、今日これから行くっていうから……ほら、あたしも一応、通報者だし……?」

「けどさあ、涙子。あんた、あのバイクーズ達のせいで怖い思いしたんでしょ?」

アケミが少し怒ったように言った。

「所詮、不良共のケンカなんだから、あの先輩だって自業自得だって! 涙子は関係ないんじゃない?」

確かに、その通りだ。

月曜日の夜の事件があつてから、涙子は結局、何があつたかを正直にアケミ達に話した。

アケミ達の意見は、「放っておいた方がいい」で一致していた。

そもそも、涙子は初春と違い、ジャッジメント風紀委員ではない。ただの、中学一年の女子生徒だ。そんな自分が、バイクーズ暴走族の抗争の現場に割って入ってしまったのだし、しかも怪我をした一員の見舞いに行くのは、傍から見れば必要性のないことだった。

けれども。

(あたしは、大丈夫……)

傷だらけの顔で、弱弱しい笑顔を浮かべるカオリの顔を、涙子は頭から振り払えなかった。

そして、何故だか、放っておけない気がした。

「まあ、病院に行くだけだし、初春とも一緒だし……」

涙子は何とかアケミに納得してもらいたかった。

「相手は3年の先輩だもの、まともにも会うのもきつとこれきりだよ」
そう、きつとこれきりだ。

学園都市の学校の例に漏れず、柵川中学校も少子化とは無縁のマンモス校だ。同級生の顔と名前だっていちいち全て覚えていられないのに、3年の先輩との付き合いはそうあるものではない。

あの夜の経験は確かに鮮烈だったが、何日も経てば、普段から快活な涙子の心の中では忘れていくことだろう。

「むーちゃんが、自習室の席確保してくれるって言ってたんだけど……」

アケミがやや表情を和らげていった。

「うん、アケミにも、みんなにもごめんね。昨日一緒に勉強できたのはとっっても良かったよ」

涙子は両手を顔の前で合わせた。

「まあいいよ。また明日ね」

一息吐いて、アケミは苦笑しながら言った。

「ごめん！ありがと、アケミ！」

「ところでさあ、涙子——」

じとつとした目でアケミが涙子を見た。

「——明日の試験、数学が2限だけど、涙子大丈夫なん？」

「げっ、そうだったけ……」

涙子はたじろいだ。

「yとかxとかの関数、单元テストやばかったじゃん！よくお家で復習しといた方がいいよー！」

アケミは涙子の肩をぽんぽん叩きながら笑って言った。

「期末の後、夏休み補習に捕まったりしたら、遊べないじゃん？悲しいぞお〜」

「分かった分かった！——……一夜漬け、がんばります……」

涙子の言葉はだんだんと尻すぼみになっていった。

「佐天さん？準備OKですか？」

教室の入り口の方から、初春が呼んでいる。

「あー、初春！今行く！」

涙子はカバンを肩にかけた。

「それじゃアケミ、悪いけど、むーちゃんとマコちゃんにもよろしく」

「うん、涙子も気を付けて」

アケミと手を振り合い、涙子は教室を出て初春と合流した。

「お待ちせ、初春」

「いいえ、悪いですね、付いてきてもらっちゃって」

初春はマスクをしている。昨日辺りから風邪気味だという。

「あたしも初春と一緒に、あの場にいたから——まあ、一度くらいはお見舞いは行った方がいいかなって」

涙子は歩きながら初春に言った。

「……きつと、怖い思いをしただろうから、あの先輩」

「……そう、ですね」

互いの顔が曇る。

途切れた会話の隙間を埋めるように、初春が不意に咳込んだ。

「初春、大丈夫？」

「すみません、けど平気です……どうも急に暑くなると体調崩しやすくて、私」

初春がマスクの上から口元を抑えて言った。

「けど、これから行くところ、病院だし……かえって悪くしたら大変だよ？テストもあるし」

涙子は心配して言った。

「まあ、熱が出たらまずいですけど、今は平熱ですから」

初春の目元は笑っていた。

「お花とか買ってた方がいいんですかね？佐天さん」

「うーん、どうだろ……世話するの面倒じゃないかなあ」

「じゃあ、佐天さんならどうします？」

「うーん……菓子折り、とか？」

「……案外堅っ苦しいんですね」

「えー、変かなあ！おいしいものもらったら元気出るじゃん？——」
そんな会話を続けながら、二人は生徒玄関へと向かった。

——都市軍隊^{アーミー} 超能力研究所（通称 ラボ）

島鉄雄は、苛々した気持ちを募らせていた。

目の前の画面の映像から、かれこれ10分近く続けて、馬鹿げた幼稚な質問をされているからだ。

「ココニ コドモト オトナノヒトガ イマス ……」

やたら粗いポリゴンのピクトグラムが、大人と子供を形作っている。

「…… デハ シツモンデス コノオトナハ コドモト ナニヲシタ
イト オモツテ イルデシヨウカ ……」

イチバン ボールナゲ ニバン オニゴツコ サンバン
アタマヲ ——」

なんだこれは？俺をコケにしているのか？

最初の数問こそ真面目に答えていたが、両手を後ろで組んで椅子に寝そべる今の鉄雄は、まともに答える気がとうに失せていた。

機械的な質問が次に移りかけたところで、突然止まった。

「気分はどうだね？ 41号!!」

あいつだ。あの口ひげを生やしたジジイドクターの声だ。

「退屈だ!!それにその番号で呼ぶんじゃないやねえ!」

鉄雄は上を見上げて怒鳴った。

「音楽でもかけてくれよなあ!!」

返事はない。

この部屋は天井が高く、天井まで2階層ほどの余裕がある。鉄雄から見て左側の壁面は、2階部分がガラス張りになっていて、ひげのドクターを中心に数人が、よく分からない機械をいじりながらこちらを

観察している。

鉄雄は、上からこちらを見下ろすその研究者たちの態度が気に食わなかった。

素晴らしい能力を持っている。とあのドクターに言われたが、2日前の夜は、クラウンの奴らにカオリ共々リンチされたこと以来、記憶が曖昧だ。

カオリのことが心配だし、金田やチームの仲間はどうしているだろうかも気になった。

しかし、奴等は自分をここから出す気はないようだった。

「ココニ シカクイ ツミキガ アリマス …… コドモガ サンカクノ ツミキヲ モツテキマシタ ……」

「うるせえんだよ……」

鉄雄は機械からの質問を無視することにして、再び天井を仰ぎ、目を閉じた。

「どうだね？」

大西が冷笑を浮かべながら聞いてきたが。

どう、と言われても、木山春生に気の利いた感想は浮かばなかった。

「Dr. 大西。率直に言えば——」

木山は、明らかに不貞寝を決め込んでいる鉄雄をガラス越しに見下ろして言った。

「かなり——あの年齢の被検体にそぐわないプログラムを行っていると思いますが……」

意外にも、大西の表情は変わらなかった。

「その通りだよ、木山博士」

木山の返事は、予想通りだったようだ。

「なぜですか？能力発現を加速させたいなら、もつと彼に見合った方法があるのでは？」

大西は顎に手を当てて、興味深そうに木山の顔を見た。

「木山博士、あなたは教員免許を取得しているね？」

教員免許、と聞いて、木山の脳裏に、嫌な思い出が蘇った。

木山は、僅かに表情を固くした。

「……そうですが、それが何か？」

「ならば予想できるだろう？あの41号が——」

大西は顔をガラス張りの方に向けた。

「——今、どんな気持ちでプログラムを受けているか」

「……少なくとも、前向きではないでしょうね」

木山は静かに答えた。

「その通りだよ！」

大西が笑みをより深くして答えた。

「無能力者であり、職業訓練校生。これだけでも劣等感があるだろう」

「！どうも彼は、彼のバイクチームでも上から命令される立場だったようだ！」

劣等感、そこなのだよ。彼の潜在能力を引き出すためには、それを利用してやればいい」

木山は表情を強張らせた。

「……彼を、焚きつける気ですか？」

「波打つ二トロにね、火花を飛ばしてやるのさ」

大西は楽しそうに、手をパツと広げる仕草をした。

「怒り、妬み、憎しみ、嗜虐性。内面でそんなものたちが渦巻く彼が、超能力を手にしたと分かれば、どうなると思う？」

——きつと、派手な爆発が見られるはずだよ、木山博士」

大西は、木山に背を向け、コンピュータに向かって作業し始めた。

「明日は、君にも彼のカウンセリングをしてみよう。ぜひ、彼を内面から理解を深めて頂きたい」

木山はため息を一つついた。

科学者とは、籠る巣が違えど、みな同じようなものか。

そして、椅子に寝そべる鉄雄の様子を伺った。

目は閉じられていて、時折唇が動いているように見えた。

「……アカイ ヤネノ イエノマエニ ヒトガヒトリ タツテイマス

……」

「……燃やしちまえよ……」

鉄雄の呟きは、誰にも聞こえることはなかった。

涙子と初春が向かった、カオリが入院しているという病院は、電車で行くつかの駅を跨いだ先にあった。

「あの、何か……?」

初春は怪訝そうに、目の前の女性の医師に言った。医師が、初春と涙子の2人を、目を丸くして見ていたからだ。

「ああ、ごめんなさい」

医師は、笑顔を顔に浮かべて謝った。「バイカーズ絡みの患者さんの見舞いだから、てつきり、もつとその……イケイケな人が来るかと思っただらね」

「私たち、あの人の第一発見者なんです」

初春がはつきりと言うと、医師は納得したように頷いた。

「そう、あなた達が……じゃあ、ジャッジメント風紀委員の方?」

はいッ、と初春がきびきびと返事をした。

その横で、佐天は不意に肩を震わせる。

「あの、私は——」

涙子が、自分は違う、と断ろうとしたところ、医師は突然頭を下げた。

「ありがとう!」

ええっ?と、今度は初春と涙子が目を丸くした。

「あなたたちのお陰で、あの患者さんはとても助かったの」

はあ、と涙子は思わず気の抜けた返事をした。

「ただね」

医師は頭を上げた。

「申し訳ないんだけど、もうあの女の子は、退院して、ここにはいない

の」

「えっ、いないんですか？」

涙子は驚いて声を上げ、初春と顔を見合わせた。

「特に対処が必要だったのは、鼻の骨折と、折れた歯の再接着だったんだけどね」

人の良さそうな笑顔を浮かべる女性の医師は、広い待合室に初春と涙子を案内し、ソファに互いに座って、そう語った。

「鼻骨の復元は数十分で終わるものだからいいとして、歯の方は、破折片——折れた歯を君たちがちゃんと持ってきてくれたおかげで、元のようにきれいにくつつけることができたんだ。それに、君たちが応急処置を適切にしてくれたお陰で他の箇所の打撲は治りが早かったよ。ありがとうね」

「いえ……風紀委員の仕事で居合わせた以上、当然のことをしたままです」

初春が照れ臭そうに言った。腕の腕章が、窓からの日の光を受けてきらりと光った。

「頼りがいのあるジャツジメントさんだね……あなたもそうなの？」

医師は、涙子の方を見た。

「いえ！わ、私は、何というか——この子の友達で……」

涙子は慌てて、相手の注意を逸らすように初春の方を見て言った。

「でも、あなたも勇気のある人だよ」

医師が涙子の目をまっすぐ見て言う。

「私が？」

涙子は自分の顔を指さして言った。

「全然、そんなこと……」

医師は、涙子に向かって首を振った。

「怪我や病気で、その時まさに苦しんでいる人を見た時に、どんな行動が取れるか。大抵の人は、関わりたくない、自分には何もできないって思いこんでしまうものだから。」

あの患者さんの姿を見たとき、きつと、ショックだったでしょう」

涙子は俯いた。

確かに、あの時は言い様の無い気持ちで胸の奥から一気に沸きだした。カオリの姿を目の当たりにして、同じ年代の女子生徒として、シヨックを受けたのだろう。

「けれども、あなたたちは行動した。目の前の人を救おうとしてね。大人でもなかなかできないものだよ」

医師の言葉に、涙子と初春は顔を赤らめた。先程暗くなりかけた涙子の胸が、温かい感情で満ちていった。

「これは、勝手なお願いのだけれど…」
「何でしょう？」

涙子は、はつきりした声で聞いた。

「良かったら、あなたたちに、あの子の支えになつてほしいの」

医師は、優しい声で言った。

「患者さんのプライバシーに関わることはあまり話せないけど…あの子は心に傷を負ってる。肉体の傷以上に、深くね。私達はカウンセラーじゃないから、心の傷までは治せない。

バイカーズと付き合う位だから、周りに支えになるような人は、多分少ないんだと思う。

あなたたちが、普通の友達のように、あの子に接してくれると、少しずつあの子の心も癒えていくと思うの。」

涙子は初春と顔を見合わせた。

カオリさんの支え。2日前にたまたま会い、なりゆきで怪我を手当てしたくらい自分に、そんなことができるのだろうか。

「もし、できればいいんだけどね」

「…はい」

相変わらず優しく語りかける医師に対して、涙子は先程とは打って変わって、自信のない返事しかできなかとてた。

(まともに会うのも、きつとこれっきりだよ)

学校でアケミに言った言葉を、涙子は思い出していた。

夜——アーミー超能力研究施設内

敷島大佐は、鉄雄が収容されている棟から、他のナンバーズの収容されているセクションへと移動していた。

大西から、実験体が目覚めたと連絡を受けたからだ。
ベビールーム
保育園。

幼少期の能力開発の副作用で、肉体の成長が止まり、逆に老化が進む実験体の収容施設。

その中でも、特に肉体の衰えが顕著な一人が、とある部屋に眠っている。

そして、その一人が起きるときは、能力を行使する可能性が高かった。

敷島大佐は、部屋の中央に置かれたベッドに歩み寄り、膝をついて屈んだ。

ベッドには、白髪のお下げの、少女とも老婆とも言える人物が横たわっていた。

ベッドの横では、大西が観測用のコンピュータを熱心に見ている。「15分ほど前に覚醒しました、言葉は——」

大西が何か報告しようとしたが、敷島大佐は首を振って遮った。そして、横たわる人物の、皺の刻まれた小さな右手をそっと握った。

掌には、「25」とプリントがされている。「さあ、キヨコ、言っでごらん」

普段全く出さないような、子供に語りかける優しい声色で、敷島大佐は言った。

「何を見たのかな？」
キヨコと呼ばれた人物は、わずかに身じろぎして、目を開いた。

皺の刻まれた顔のなかで、大きな、睫毛の長い瞳は、不釣り合いに輝いた。

「人が、何人も死ぬわ」

声は、あどけない子供の声そのものだった。

「街が、光でとつても明るくなって、私たちは、もう一度、アキラくんに会うの」

「アキラ!!」

敷島大佐が一気に表情を厳しくした。「それは、いつだ? いつ起きるのだ? キヨコ!!」

「もうすぐ……」

キヨコの瞼が閉じられていく。

「あの子を……行かせて……もうすぐ……」

「キヨコ」

敷島大佐の呼びかけに、キヨコは反応しなくなり、静かな寝息を立て始めた。

「どう思う?」

大佐は、不安げな表情をしてキヨコを見つめる大西に投げかけた。

大西は、ハツとした顔をしてから、素早く手元のコンピュータで調べ始めた。

「心電図 ECG、脳波 EEG、脳磁図 MEG全てパターンは正常です。投薬スケジュールにも問題なし……」

大西は、画面と睨めっこしながら、早口でまくし立てていく。

「——いえ、EEGに規定値以上の棘波が先ほどまで見られました……大佐」

大西が、敷島大佐の方を見た。

「今回の発言は、25号の、予知・知覚能力の行使かと思われまます」
大西も深刻な表情だ。

「——最も、今回のものは、久方ぶりではありますが……最高幹部会議の査問に、通しますか?」

「信じるのか?——アキラが、目覚めると?」

敷島大佐は、大西の方へ顔を向けた。

「25号の予知能力の精度は95〜97%です。信頼に足ると……各種のデータがそれを裏付けています——」

二人の間に、沈黙が流れた。

キヨコを取り囲む観測機器の低い唸りが微かに聞こえる。

「……大佐は、どうですか？」

大西は、声を潜めて聞いた。

「私の仕事は、信じるかどうかではない。行うか、どうかだ」

大佐が、^{アキラ}厳しい声色で言った。

「石棺だ。28号のカプセルのもとへ行く」

「また、なんでアタシに面倒くさいことを押し付けてくるのかね、アンタは」

寮母の呪詛を聞きながら、カオリは押し黙ったまま、自室へと向かう階段を歩いて上った。

カギさえ渡してくればそれでいいのに。

中学生であるカオリが退院する際には、身元引受人が同伴しなければならなかった。そこでやって来たのが、カオリの住む学生寮の寮母だった。突き出た顎と骨ばった頬、意地悪そうな小さな目で作られる顔を、カオリ含む寮の住人は「ヤギ女」と呼んでいた。

「大体、カギを失くしたって、何度目だい、ええ——？ 迷惑しかかけないねえ、全く」

「失くしたんじゃない、盗られた——」

「どっちでも同じことさね！ 同類同士、集まるつてもんだ、自業自得じゃないか！」

階段を上がり切って、昼間でも薄暗い廊下を歩く。

真つ赤な生地に花柄を散りばめたワンピースからはわざとらしく、きつい、柔軟剤だか香水だかの香りが、嫌というほどカオリの鼻腔を刺激した。それと共に、この寮母はヘビースモーカーらしく、タバコの匂いが混ざって漂ってくる。

タバコの匂い——カオリの背筋に冷たいものが走る。

自分の身体を痛めつける足、辱める手の感覚がする。

カオリは自分の身体をかき抱いた。

「——おい、オイ、アンター！」

寮母のがなり立てる声がする。それは、ひどく金属質にキーキーと耳に響いた。

カオリは俯かせていた顔を少しだけ上げた。

自分の部屋の前で、寮母がただでさえ小さい目を更に細めて立っていた。カギをチャラチャラわざとらしく音を立てて見せつけている。

「ボーツとしてんじゃないよ、全く」

自分はしばらく立ち止まっていたようだ。

のろのろとカオリは寮母の前まで行き、鍵を受け取った。

「奨学金が下りてさえなきや、あんたをここに置いてく理由なんざないんだ」

カギをカオリの掌に押し付けて、寮母が吐き捨てた。

「大体その金だって、あんたの努力でもらってるものじゃないくせに——あんたの親がムシヨ行きになったお陰で降って来るんだろう？悪者のガキの癖していいご身分だよ。今度何か面倒を起こしてみな。いい加減ここから出てってもらおうよ。あのバイカーズ共の寢床がお似合いじゃないか、掃き溜めに行くがいいさ」

ぶつぶつと文句を垂れながら、ヤギ顔の寮母は去っていった。

カオリは、掌のちやちなカギを見つめた。

ゆっくりと鍵穴に差し込み、回して開けた。

オートロックも防犯カメラもない、前世紀からタイムスリップしてきたかのような、狭い部屋。

カオリが住むことのできる寮はここくらいしか無かった。

硬いベッドに仰向けになって、カオリは天井を見つめた。

所々染みがついている。

先ほど思い出した感覚がまだ残っている。

自分の体中を虫が這いまわっているようで鳥肌が立つ。

カオリはタオルケットを掴み取り、全身くるまった。

自分が、クラウンのメンバーに殴られていた時。

痛みで考えがまとまらない中、カオリがぼんやりと分かったのは、鉄雄が何か能力を發揮したこと。

それで、クラウンを蹴散らしてくれたこと。

そういえば、何年か前に能力測定の話をしたとき、鉄雄くんは何て言ってたっけ？

念動力……テレ、なんとかか、だったか？

何にしても、鉄雄も自分もLEVEL0と判定されたつきりだった

ため、あまり能力の話題は普段からしていない。

もしも、鉄雄が能力を高めて発揮したのだとしたら……

それで自分を守ろうとしてくれたのだとしたら。

カオリは、少しだけ不安が和らいだ気がした。

薄いタオルケットを、より強く抱きしめた。

カオリは携帯電話を手を取った。

鉄雄の番号にかけてみるが、電源が切られているという機械音声が返ってきた。

「……鉄雄君、大丈夫かな……」

そう呟いて、携帯を見つめてみると、別のことを思い出した。

今回、携帯を盗られたり壊されたりすることがなかったのは、あの、

2人の女子生徒のお陰だ。自分と同じ制服を着ていた。

なぜかは分からないが、あの現場に居合わせて。

知りもしない自分のことを介抱したり、抱きしめたり、優しくしてくれた。

中学校に通っていて、ほかの生徒から優しくされたり気遣ってもらえたりした経験は、カオリには思い出せるものは無かった。

みな、自分を避けて、無視したり、悪意をぶつけてくるだけだ。

誰だったのだろう。確か、後輩と言っていたか。2人とも、名前も聞けていない。

すんと、カオリの脳裏に、ふんわりとした優しい感覚が呼び起こされる。

長い髪の女の子。あたたかくて、いい匂いがした。

携帯の拾い主でもある彼女に、後でちゃんとお礼を言いたいと、カオリは思った。

音を大して遮らない壁を隔てた隣の部屋からは、自分と同年代の女子が甲高く話す声が聞こえてくる。

「……メーメーメーうるさいってのあの寮母……ホント、ヤになつちやう！……明日の3時？ウン、いいよー……」

今はまだ明るい時間。隣の女子は学校に通っているのかどうか、怪しい人だった。きつと携帯でまた誰かと遊ぶ約束をしているのだろう。

普段はこちららが向こうのことをうるさく思っていたが、今ばかりは、隣人の愚痴に、カオリは完全に同意した。

明日の3時？明日は確か金曜日だったか……

カオリの思考から、包容力のある髪の毛の匂いはどこかへ飛んでいく。

期末テスト……やってない……

カオリは勉強が得意な方ではないし、欠席も多いため高得点はもとから望んでいない

けれども、卒業までは頑張る、と宣言した。河川敷で。鉄雄に。美しい夕焼けを眺めながら。

自分に優しくしてくれる学校の生徒もいるのだと知った。

柵川中学校の職員室の電話番号を呼び出す。

友達といえる友達のいないカオリにとって、学校関係で一番話した回数が多いのは、多分この番号だ。鉄雄たちバイカーズ絡みの不良行為で、よく電話がかかってくる。

とはいえ、自分からかけたことがあっただろうか。

カオリは少し躊躇った後、番号を呼び出した。

「……あ……私、3-Bの……はい、そうです。」

えと、私、今日、退院して……それで、テスト、受けたいんですけど……」

第一〇学区——「石棺」地下

「第10室……148ケルビンK……チエック」

「第9室……118K、チエック。許容範囲内です」

「緊急用発電装置……チエック」

オレンジ色の防寒着に身を包んだ都市軍隊の特殊能力研究機関の

研究員達が、ガラス張りのコントロール・ルームの中で、呪文のように言いながら状態確認を行っていた。

25号の予知を受けて、敷島大佐率いる研究チームは、原子力施設が集中する第一〇学区の地下深くにあるこの場所に来ていた。

ちやうどこの真上の地上には、かつて東京西部一带に甚大な被害をもたらしたという旧式の原子力発電施設跡があり、それを封じ込めるためのコンクリート構造物や、更に外側から覆うためのシールドがある筈だった。

最初の扉を開けた後にある空間は体育館半面ほどの広さで、ほぼ灯りはない。温度を氷点下に保とうとする空調の音が、ゴオオと絶えず鈍く響いている。入って右手にあるコントロール・ルームだけは、室内灯や計器類の光が目立っており、研究員達の口元に浮かぶ白い吐息が、極寒の中で頼りなく生命の温かみを主張していた。

敷島大佐は、忙しなく作業に追われる研究員達を後目に、入り口とは正反対側へと歩みを進める。

コントロール・ルームの明かりは十分に届かない。よく目を凝らせば、壁面は結露に覆われているのが分かる。

「ここを開けてくれ」

「はっ……っ？」

傍に居る、黒服の上から防寒着を羽織っている部下が、呆けたように聞き返す。寒さのためか、声は明らかに震えていた。

「メインハッチだ！コントロール・ルームに伝えろ！」

「……ハイ！」

側近は、首元の通信機器を弄ろうとしたが、手袋を付けているためなかなか上手くいかない。

その様子に、大佐は苛立ちを募らせた。

「馬鹿者！この低温で使える訳ないだろう！直接行け！」
「ハッ！」

大佐の叱咤を受けて、部下は慣れない耐滑の防寒靴で、不格好に早歩きしながら、コントロール・ルームの大西に伝達しに行った。

大佐はその背中を睨みつけた後、再び目の前の壁に向かい合った。

やがて、敷島大佐の目の前の壁に動きがあった。

目前にあったのは、扉だった。

まず、上下右の三方向にある、フレームと扉とを繋ぐパイプがバシユンと空気を勢いよく動かしながら引っ込んだ。次に、巨大なカパーに覆われた蝶番ヒンジが軋みながらゆつくりと回転し、扉を手前へと引いた。扉の表面を覆っていた結露は、パラパラと砂糖のコーティングのように一斉に剥がれ落ちた。

大人の頭1つ分ほどの厚みを持つ重い扉が開かれ、向こう側には闇が待ち受けていた。

闇の中で、ぼうつと赤い灯りが灯っている。

「第1室——0・0005K。チェック

——各デユワー壁にも、問題は見られません」

「全て、正常なんだな？」

コントロール・ルームで、研究員からの報告を受けた大西が念を押すように言った。そして、鋭い視線を、敷島大佐が入っていった虚空へと向けた。

扉の先へ数歩足を踏み入れた大佐は、目の前の闇をじっと見据えた。

「何年経った？あの瓦礫の山から」

誰に言うという訳でもなく、大佐が低い声で語った。

「能力の研究が軌道に乗り、金と人が入り、この学園都市まちは見事に復興した。……だが今や、大人たちの欲望の掃き溜めであり、若者どもの遊び場だ。秩序の無い……見てみる」

大西が、コントロール・ルームから出て、大佐の横へと並んだ。

「——そして、そこに付け込む奴等だ。このアキラさえも、奴らには科学を前進させるための燃料でしかない。お前達の先人が、自ら空けた大穴を、恐怖で、不安で、たまらずに、恥も外聞もかなぐり捨て、慌てて埋め立てた……」

その結果が、このカプセルだというのに」

敷島大佐や大西の目が暗闇に慣れ、目の前にあるものをだんだんと認識できるようになった。

自動車程の幅がある、太いパイプが、天井からも横からも伸び、更にその周囲を、無数のコードや配管らしきものが、巣穴に向かわんとする蛇が群れるように中央に向かっている。

それらが向かい接続された先は、巨大な球体だった。まるで投げ捨てられてそのまま長い年月が経ったかのように、セメントに不自然に埋まり、配管の繋がり方も一見秩序だったものが皆無に思えた。

赤い非常灯が大佐達のほぼ真正面で灯っている。

非常灯に照らされて、球体に刻印された文字が浮かび上がっている。

へ A K I R A N O . 2 8 へ

敷島大佐達の背後から、黒服の上に防寒着を着込んだ一人の部下が見守っていた。彼は、サングラス代わりに防寒ゴーグルを片手で弄る仕草をした。

学園都市の技術研究で開発された、南極の環境下でも電力消費の効率を低下させないというバッテリーを装備したゴーグルが、暗視モードに切り替わり、大佐と大西、そしてその向こうにある巨大な冷凍カプセルの姿を録画し始める。

「掴みました、杉谷さん——」

彼が咳いた声は、極寒の空気へとすぐ吸い込まれ、他の誰にも伝わることにはなかった。

7月6日午前 —— 第七学区 柵川中学校

「くーっ！テスト明け後はやっぱ体育だよ体育！」

子どもは体を動かしてなんぼでしょやっぱり！」

佐天涙子は教室を出るなり、伸びをしながら軽い足取りで歩いていく。

「随分と調子良さそうですね、佐天さん」

「そらそうよ！初春が見学なのが残念だよ！アケミ達のチームと一緒に勝ちたかったじゃん？」

後ろから、マスクをした初春が、とことこと足を速めて追いついてくる。

発熱はしていないというが、やはり咳込むことが多く、体調が良くなさそうだ。

「テスト返しばっかりだと気が滅入るからね、発散しなきゃでしょお？」

「そうですね」

初春が目を細めて答えた。初春の口元は見えないが、微笑んでくれたと捉えた佐天も顔が緩んだ。

「さっきの数学の時間、暗い顔してましたもんね、佐天さん」

初春の二言目を聞いて、涙子の顔は曇った。その表情は忙しく変わる。

「わっ、やなこと思い出した……」

涙子はこめかみに片手を当てた。

「比例定数間違えたからめちやくちやキツイ上り坂になったんだ、私のグラフ……」

「まあ、補習にはならなそうなんですよね？平気ですって！」

「数学さえ回避できれば、なんとか安心かなあ……」

階段を下り切って、涙子が願望を口にした時、初春がふと立ち止

まった。

「あ！私、ドラムコード取ってきてって先生に頼まれてたんでした！」

「そうなの？一人で平気？」

「大丈夫です、1個だけですから」

初春が、体育館とは反対方向へ足を向けた。

「佐天さん、先行っててください」

「オッケー、じゃまたね」

涙子は初春と別れ、体育館の近くにある更衣室へ向かおうと歩き出した。

途中、保健室の側を通りかかった時、涙子は一度足を止めた。

保健室の隣には相談室があり、ドアのガラス窓から中の様子が少し窺えた。

誰かが机に向かっていている。

「あの人……」

ぼさついた黒髪が特徴的なその姿には見覚えがあった。先日、涙子と初春が助けた、カオリだ。

涙子は窓越しに、カオリの横顔を窺う。カオリは真剣な表情で、机に向かって何かを書いている。

そっか。テスト受けてるんだ。

遠目に見る限りではあるが、昨日の医師が言っていた通り、目立つ傷はなく、ひどい暴行を受けたとは分からなかった。

『——普通の友達のように、あの子に接してくれると、少しずつあの子の傷も癒えていくと思うの——』

医師の言葉を、涙子は思い出していた。

見た目に傷は残っていなくても、心はきつと大変なものを抱えているのだろうか。

けれども、涙子は、机に向かうカオリの姿を見て、ほんの少し安心した。

あのと看は無我夢中だったけど、助けた甲斐があったかな。

涙子は後ろを振り返った。初春はまだ来ない。

「……あとで、初春にも教えてやるーっと」
涙子は足取り軽く、再び歩き出した。
次の時間の体育が、もっと楽しみになった。

——都市軍隊 超^ラ能力研究^ゴ所

率直に言つて、木山春生は目の前の少年が苦手だった。
大西の指示を受けて、木山は島鉄雄というこの暴走族^{バイカーズ}の一員との面談を行っていた。

木山は、もっと幼い子供たちを対象とした実験であれば経験豊富だったが、鉄雄位の年齢の少年、しかもあからさまに演算能力が低いと見える不良相手に、能力開発を行ったことはなかった。

大西は目を輝かせて、この少年が逸材だとのたまっていた。しかし、木山にしてみれば、その評価は過剰に過ぎると思えた。

「——分かるぜ、先生」

声を聞いて、木山は思考の湖から意識を引き上げ、目の前の少年を見た。

鉄雄の声は、声変わりの途中であるかのような、掠れ気味の声だ。
15歳でこの声だと、確かに周囲の仲間からは格下に見られてしまうかもしれない。

「俺なんかが、能力を使えんのかって思ってたんだろ」

鉄雄は、不敵な笑みを浮かべてこちらを見ている。大股に足を開き、両手を体の前で組み、前のめりで座っている。

それは、若い女性研究者である木山を値踏みするような雰囲気を感じさせていた。

この手の視線には、同業者からも散々向けられた覚えがある。

木山は返事をせず、無表情で鉄雄を見返していた。

「あんたがああジジイ連中の仲間なんかどうかは知らねえけど——」

やや間を置いて鉄雄が続けた。

「……あいつらとは違って、なんつーか、期待してないだろ？俺に」

「……映像は見せてもらったよ」

静かに木山は言った。

「相手の暴走族のチームに向かって、周囲の物を飛ばしていたね。確かに、書庫バンクの記録よりも、強度レベルの高い念動力のようだ」

「……ハッ！やっぱ、さっき言ったこと、撤回するわ」

鉄雄はつまらなそうに両手を広げて、笑い出した。

「あいつらと同じこと言ってるぜ、アンタ。俺は確かに念動力テレキネシスって判定されたことはあるけどよ、強度は知ってんだろオ」

「ああ」

木山は手元のクリップボードの資料をちらと見た。

「無能力者だね」

「そう、それ！ゼロ、LEVELゼロ」

鉄雄は両手でぽしっと膝を叩いてみせた。

「どん詰まりもいとこだぜエ、先生」

顔には相変わらず笑みが浮かんでいる。

「大体、レベルがそう簡単に1も2も上がるんだったら、職業訓練生トレインeeなんてやってないっての！なんかの間違いだよ、きつと！」

膝に手を置いて、鉄雄が再び前のめりの姿勢をとった。木山へと向ける顔に浮かんだ軽い笑みは、木山への、或いは自分自身への軽蔑の表れのようなだった。

「だからさ、先生も諦めなつて！俺をこっから出してくれよ、帰らせてえんだつて、なア」

「私としては別に出て行ってもらっても構わないんだが」

鉄雄の言葉に、木山が返す。

「……ただ、相手チームのメンバーに怪我を負わせたんだ。研究所リサーチを出て行ったら、まず警備員アンチスキルに捕まるぞ」

「へっ、アンチスキルが怖くて今まで走ってられたかよ」

鉄雄はそれがどうした、とでも言いたそうだった。

「今までは、不良同士の諍いで済んでいただろうさ、けれども、今回は

「――」
木山は相変わらず機械が読み上げるような口調で話した。

「――相手が重傷だと聞いているぞ？意識が未だに戻らない程のね」

鉄雄がぐつと顎を引いたのを見て、木山は足を組んだ。

「仮に相手が命を落としたとする。それならば、君は傷害致死罪で立件されるだろう。その場合、素点ポイントは累計マイナス50以下間違いないだ。

成人と同じ、普通裁判所行きになるってことだよ。当然、職業訓練校トレセンも退学。当分娑婆には出られないだろうし、まともな職にも就けないだろう。

……君が守ろうとした、彼女とも会えなくなるだろうね」

鉄雄の表情が、雷に打たれたように固まる。

「……んだと、てめエ――」

「勘違いしないでほしいが、脅しをかけている訳じゃないんだ」

木山は、自らの長い前髪を手で横に軽く払った。

明るいブラウンの瞳が、じつと鉄雄を捉える。

「それらの可能性を考慮したって、出て行くのもありさ。逃げ隠れしてもいいし、善良に罪を償ってもいいだろう。何せ、君はまだ15歳なんだ。時間はまだまだあるさ」

二人の間に、沈黙が流れた。

「あんたは、何が望みだ？」

鉄雄の声は、先刻までに比べ、やや弱いトーンに変化していた。

「俺に力なんてない。俺はLEVEL0だ。俺は、クラウンの奴等に何をしたかなんて覚えてない、俺は……」

鉄雄は、頭を抱えて床を見つめた。

「……俺は、無力だ……」

木山は、鉄雄の姿を見ていた。

劣等感と、後先を考えない思考に染まった、不良少年。

木山がこれまでに見てきた少年少女達の中に、能力を格段に上昇さ

せた者は何人もいた。

彼ら彼女らは、自分だけの現実を強固に持つべく、それに見合った精神力、判断力、演算能力を持っていたし、またそれらの力を伸ばす余地があった。

対して、この少年はどうだろうか？

バイクーズやトレーニー、素行不良といった符号を取り外せば、彼は、ただの、15歳の子どもだった。

学園都市の内にも、外の世界にも、あり触れた存在だろう。

超電磁砲レールガンのような、己の努力のみで高位能力者になれる人間にはとても見えないし、かと言って、今更能力開発を改めて行ったところで、同じ手立ての繰り返しでは、目に見える成果は得られそうになかった。

ただし——木山は、自己嫌悪に陥る鉄雄を見ながら、大西から見せてもらった映像の事を思い出した。

あの記録を見る限り、突発的にはあるが、鉄雄は能力を行使していた。

LEV異EL能2力者、やりようによつてはLEV強EL能3力者位までなら、強度を上げられるかもしれない。

「……」

木山は唾を飲み込んだ。

元はと言えば、この少年の研究は、大西達、都市軍隊アーミーの領分だ。

自分が手を貸す以上、こちらの目的のためにも、一役買ってもらわねばならない。

もちろん、この少年1人だけでは不十分だ。大西達が他にもいると言っていた実験体ナンバース。念話テレパスでネットワークを形成しているという、彼等にもいずれ会ってみたい。

「島君、顔を上げてくれ」

木山が言うと、鉄雄は僅かばかり顔を上げ、顔を覆う指の間から、上目遣いにこちらを見た。

「LEVELOの烙印が苦しいかい？……研究者の言うことは信じら

れないだろうが、私は少なくとも君の気持ちが多少なりとも分かるつもりだ。

そして、君のように苦しみながら、適切な能力開発と訓練を経て、この学園都市での居場所を見出した者も見てきた」

そして、その過程で無残にも使い捨てられ、死んでいった者たちも。

木山は、そつと心の中で付け加えた。

あの子たちに報いるために、目の前の不良少年には役立ってもらわねばならない。

「さつき、君は自分のことを期待していないと言っていた。

私は、ここにいる以上、君にそれなりに興味をもっている。君の可能性を形にしてみたいと思っっている。だから、ここに来たんだ。

どうせ兵隊さんたちは、君をここから出したくはないみたいだ。なら、この機会を利用してみないか？私と一緒に」

我ながら、よくここまで白々しいことが次から次へと見えるものだ。木山は自分自身を嫌悪した。

鉄雄は、ゆつくりと上体を起こし、不安げな顔で木山を見た。

バイクーズの一員として、虚勢を張っていた面影は、そこには無かった。

「……だけど、先生、一体どうやるってんだ？」

鉄雄が言った疑問に、木山はすぐに答えず、手持ちのカバンの口を開いた。

「あのジジイどものやり方は嫌いだ。ガキ向けのQ&Aとか、頭の中をいじくる機械とか……」

「……そうだな……音楽を聴きたい、と言っていたね？」

木山は、徐にカバンから小さな物を取り出して、机の上に置いた。

「……ちよつと、BGMでもかけながらやってみるかい？」

木山が取り出したのは、巷で流行りの携帯型音楽プレイヤーだった。

——都市軍隊 宿舎

『俺は建築や芸術に詳しい訳ではないが』

携帯から聞こえる相手の声が言う。

『バンドリラー禁忌の箱というには些か不格好過ぎるな、これは』

電話をかけている、かどわき門脇も、同感だった。

第一〇学区の、石棺の地下深くにある、都市軍隊の実験体封印施設。自分が映像を残すことに成功した「アキラ」の冷凍カプセルは、深海探査船とタコ足配線のコードをぐちゃぐちゃに絡めたような見た目をしていた。少なくとも、門脇はそう感じた。

「大佐は、25号の予知を受けて俄かに焦っています」

門脇が、静かな声で早口に言う。

「だからこそ、普段、セキユリテイクリアランス上は入れない筈の私も、一緒に入れてしまう失態を犯したのでしょうか」

『そのお陰で、ようやく記録として掴めたわけだ。オカルト話に過ぎなかった、アキラという人物のことを』

向こうの側の声は、冷静ながらもどこか嬉しそうな声色を含んでいた。

「これからどうしますか？」

門脇が聞いた。

「第七学区で暴れた一件だけでも、都市軍隊へ強制査察をかけることは可能だと思いますが」

『たやす「輒く敵城へ忍び込み、忽然と敵を挫く」』

相手が言った。この人物は時たま、古書に書かれているような格言めいたことを言う。

「わざわざ絶対零度まで凍りついたカプセルに、馬鹿正直に触れる理由もないだろう。まだその機ではない。正面から火力を投じて、開けてみたら死体だけでした、では困る』

「では……待つと？」

遠回しな言い方をする相手に対して、門脇はもどかしさを抱えながら聞いた。

「新たに加わった実験体ナンバーズの様子はどうか？」

質問に直接応えず、逆に相手が聞いてきた。

「外部の研究者も招聘して能力の再開発を試みているようです。今のところ目立った成果は上がっていませんが」

『……彼がカギだ』

間を置いて、相手が言った。

『彼の伸長を待ち、揺さぶりをかける。いずれ、奴等は再び、学園都市に噛みついてくる。すっかり丸くなった犬歯で』

「……何か策があるのですか？」

門脇は聞いた。

『警備員アンチスキルから、理事会にある報告が上がってきている。7月2日の第七学区での一件の際、ある薬物を押収したと。学園都市製ではない。規制物質を多量に含んだ、強力な精神安定剤のようなものを』

「それは……」

『お前達、都市軍隊アーミィの研究機関の落とし物だろうか？』

門脇は、通話相手の言葉に、答えを言い淀んだ。

『お前たちのボスに確認してみるといい。そして、警備員の関係に強制捜査に乗り出すよう、挑発するんだ。』

奴等は勝手に自爆し、学園都市で、如何に自分たちがちっぽけな存在かを思い知ることになるだろう』

門脇は、少し間を置いて、口を開いた。

「杉谷さんの、その見方は……潮岸様がそう仰っているのですか？」

電話口からは、何も返答が無い。

「それとも……あの教祖の言葉、ですか？」

『……誰の言葉であれ——』

相手が低い声で、ゆっくりと言った。

『——俺たちは所詮、上の指示で動くだけだ。俺も、お前も』

2, 3秒、会話が途切れた。たったの2, 3秒なのだが、門脇にとっては、それが重苦しく、とても長い時間に思えた。

『——分かるな?』

念押しのような一言を言うと、返答を待たずに、すぐに通話が切れた。

門脇は、ひとつため息をつくとき、携帯電話を操作し、履歴を消した。そして、机の一番下を覗き込んだ。そこには大人の頭一つ分ほどの大きさの、こじんまりとした箱型の金庫があった。門脇は、金庫に備え付けられた端末で複数桁のPIN個人認証番号を入力し、一見何も無いように見えるその上面に、右の掌をかざした。一瞬、手をかざした一面が、ハロゲンライトのような緑色に光った。

門脇は右の掌の静脈認証を終えると、金庫を開けることができた。先程まで使用していた携帯電話を、慎重に中に置いた。そして元通りに扉を閉め、立ち上がった。

門脇は、胸の内ポケットから、サングラスを取り出してかけた。サングラスをかけた黒服の男は、腕時計をちらと見て時刻を確認すると、足早に宿舎の自室を出て行った。

7月7日午後——第七学区 柵川中学校

帰りのホームルームが終わった後、佐天涙子は早足で廊下を進んでいた。

家庭科の授業で使った道具を、被服室に置いてきたことに気付き、それを取りに行こうとしていた。

誰もいない廊下を進んでいき、被服室の扉を開けた。

「……あゝ、良かった、あったあ」

白地の作業机の下に、ぽつんと自分のトートバッグが置き去りにされているのを見つけた。授業で使う裁縫セットが入っている。

涙子はバッグを掴み取ると、再び元居た自分のクラスに戻ろうと歩き始めた。

曲がり角を曲がり、階段を降りようとした。

「しらばっくれてんじゃねーよ!」

涙子は突然聞こえてきた怒声に身を震わせ、立ち止まった。

「ちよ、ユミコ、声でかいって……」

慌てたような声と、ぱたぱた、といういくつかの足音が、女子トイレから聞こえてくる。

「……ケンカ?」

涙子はトイレの出入口を見つめた。風紀委員ジャッジメントに知らせた方がいいだろうか?

一瞬、初春の顔を思い浮かべた。

けれど、勘違いかもしれない……ふざけあつてるだけとか。

一応確かめてみようと思ひ、涙子はそつとトイレに足を踏み入れた。

トイレの角を曲がると、廊下からは見えない位置に、洗面台がある。

その鏡に、何人かの女子生徒が映っていた。

「……曖昧な理由付けて学校休んでたけどさ、アンタが、職業訓練校トレセンの彼氏と一緒にボコられて、入院してたのはみんな知ってたよ!」

背の高い女子生徒が、誰かに詰め寄っている。

その相手は、ぼさぼさの黒髪の、小柄な人だった。

涙子は、はつとした。

カオリさんだ。

向こう側から自分が盗み聞きしているとばれないように、背中をぴたりと壁にはりつけた。

鏡は見えなくなつたが、会話は十分聞こえる。

「アンタ貧乏だしさあ、金無いんだろ? だから——」

詰め寄っている側であろう声が、語気を強めた。

「——アタシらの財布、盗つたんだろ!!」

「知ら、ない——」

「じゃあ!なんであんなの机の中からアタシの財布が出てくる訳!」

カオリの自信のなさそうな声は、間髪入れずに怒鳴り声に押し潰される。

「アンタが昨日からテスト受けに来てんの、知ってんだから——昨日、今日って、うちのクラスで財布が続けて無くなってんだよ、ねえユキ!」

「え、ああ、うん」

ユキと呼ばれた人のだろう声が、突然振られたことに戸惑うような声を出した。

「しかも、ユキのはまだ見つかってないんだよね?」

「まあ、ウン——」

「この不良!ドロボー!早く出せよ!!」

「だから、ほんとに、あたし、知らない——!」

カオリさん、人の財布、盗んだのかな?

ブラウス越しに、また、腕を伝って、壁のひんやりとした冷たさが、涙子の身体に染みていた。

不良……暴走族バイカーズと付き合う位の人だ、きつと人の物を盗んだことだつてあるだろう。

何も見なかったことにしよう。あたしには関係ない。

そんな考えが浮かぶが、足が動かない。涙子は天井を見上げる。

昨日、相談室の小窓から見えたカオリの姿。

机に向かうその様子は、真剣そのものだった。

そのことも思い出し、涙子は目を閉じた。

涙子は、バッグの取っ手をぎゅつと強く握りしめた。

大きく息を吸った。そして——

「あああああ!!漏れる~~~~!!」

体育祭のスローガン斉唱のときに、この声を出していたら、たちまちクラスの人気者になれただろう。

大音量で叫んで、涙子は女子トイレに駆け込んだ。

「はア——?アンタ、何——?」

誰か一人が虚をつかれた声を出したみたいだが、お構いなしに、カオリ達の側をダッシュで駆け抜け、涙子は個室の扉をばたんと閉め

る。

「あああ!!絶対!ゼーったい、聞かないでください!!今からめちやでかいの出しますから!!」

便器の蓋をぱかんと開け、座るとすぐに叫んだ。そして、涙子は右手親指の付け根辺りを自らの口に押し付け、ぶふうっ!!と放屁の音を真似した。

「恥ずいんで、出てっってください!お願いしまあす!!」

トイレの水洗スイッチを連打する。

手元のトイレトペーパーを、ガラガラガラと引き出しまくる。

水の流れる音が、女子トイレの中に響いた。

涙子はぎゅつと目を瞑り、巻き付けたトイレトペーパーがくしゃくしゃになるくらい手に力を込めた。

うまくいきますように。

個室の扉を閉めているので、外の様子は分からない。

「……チッ」

舌打ちが聞こえた。

「ムカつく……次の月曜、財布の中身、倍にして返せよ。……行くよ」

興を削がれたような声が聞こえ、何人かの足音がトイレから遠ざかっていくのが分かった。

足音が聞こえなくなってから、涙子の強張った体から力が抜けた。

ふう、と息を吐くと、ゆつくりと、個室の鍵を開け、そろりと外を見た。

「……カオリさん?」

小動物のような目をぱちくりと瞬きさせて、カオリがこちらを見ていた。

「……大丈夫、ですか、ね?」

涙子は、ゆつくりとカオリの前に立った。

カオリは、涙子の姿を、頭から下へと見た。すると、なぜか突然くすくすと笑い出した。

「えっ？えっ？」

涙子は面食らった。「なんか、あたし、変ですか？——ああ、そっか、変、でしたよね、もちろん！——でもあれは、何ていうか——」
どう答えていいか分からず、言葉を詰まらせる涙子をよそに、カオリはまだくすくす笑いながら、涙子の右手を指差した。

涙子は自分の右手を見た。

先ほど大量に引き出したトイレットペーパーが、ミイラのようにぐるぐる巻かれたままで、それは蛇のようになねって、涙子が駆け込んだ個室へと続いていた。

「……ごめんなさい」

カオリは笑いを堪えて、顔を上げた。

「けど、なんか、おかしくって——」

涙子はぼかんとして、カオリと向き合った。

カオリは、指先で目尻を拭った。

「……ありがとう」

混じりけのない、あどけない声。

全て揃った歯を、僅かに見せて、笑っていた。

「あ……ハイ」

——かわいいな。

涙子は、カオリの笑顔をしばらく見つめていた。

「私——私で良ければ、力になります！……こう見えて、私、風紀委員ジャッジメントなんです！」

初春が胸に手を当てて、小声で、しかし気持ちの込もった目で言った。

周囲では、ペンを紙に走らせたり、ページをめくったり音が絶えず聞こえている。時折、彼女達が座るテーブルの横を、靴音を弾ませながら他の生徒が通り過ぎていく。

女子トイレでの、カツアゲ紛いの場面に飛び込んだ後、涙子はひとまずカオリを連れ出すと共に、初春に連絡を取った。あまり目立たず、話ができる場所として選んだのは、自習室の個室スペースだった。連れて来たカオリはというと、落ち着かなそうに肩を縮めて座っている。時折、通路を生徒が通り過ぎる度、気にするように視線が揺れている。

涙子はカオリの隣、通路側に座っている。少し身を乗り出して、カオリの不安げな顔を覗き込んだ。

「カオリさん」

努めて優しく、声をかける。

「初春は頼りになりますよ。確かに、いろいろナリはちっちゃいですけど——」

ちっちゃいって何ですか！と初春がむくれているのに構わず、涙子は話し続けた。

「——立派な風紀委員です。なんていうか——正しいことは正しい。間違ってることは違うって、しっかり言えるヤツですから」

涙子の言葉を聞いた初春は、今度は目を丸くして、照れたように顔を背けた。そのココロと忙しく変わる表情が可愛らしく、涙子はカオリにはにかんでみせた。

カオリはちらりと初春を見て、涙子を見た。それから口を少し開いたが、言葉は出てこなかった。

「……えと、カオリさんは——」

気を取り直したように初春がこちらに向き直った。

「3年の、何組ですか？」

「……B」

耳を傾けてなければ埃のように片隅に追いやられてしまいそうな声で、カオリが答えた。

初春の耳にはどうにか届いたようで、頷いた。

「3—Bですね。なら、そのクラスには、先輩が——」

「無理だと思うよ」

今度ははつきり聞こえた。

カオリは、初春の言葉を遮るかのように声を出した。

「えっ……」

初春は口を噤んだ。涙子も先ほどまでの笑顔が自然と消えた。

「ああいうのは、初めてじゃないんだ」

ぽつり、ぽつりと、カオリが言葉を紡ぎ出した。

「1年の頃から、何かとね……こんなこと言ったら多分、引くと思うけど、私、暴走族バイカーズの人たちとは結構長い付き合いでね。みんなが、私を、その……嫌がるのも、仕方ないかなって……」

「そんなこと！」

憤慨して涙子は横から言った。

「あたしが今日見たのは、ハッキリ言って恐喝ですよ！悪いことは止めなきや、風紀委員なら——」

「だから、言ってもどうにもならないよ。風紀委員に」

カオリの言葉に初春が目を大きく開いた。

「そんな！私たちは、困ってる人の味方ですよ！」

初春が体を前に乗り出して言った。

カオリは少し顔を上げた。

「初春さん、だっけ？」

カオリの顔がやや綻んだが、横にいる涙子には、ひどく力の無い弱い笑顔に見えた。

「優しいんだね、あなたは」

それから、カオリは涙子にも顔を向けた。

「佐天さんも、ありがとう」

「いえ……」

涙子は返事に詰まった。カオリの顔に表れているのは、幸せや楽しさ、希望の笑顔ではない。

物事を諦めきった時の顔だ。

「もしもね、私が貴方たちと同級生だったりしたら……うん。そうだったら私、良かったな」

涙子は、カオリの両手が、スカートの生地をいつの間にか強く握り締めているのを見た。

少しずつ零れてくるカオリの言葉に、壁を感じた。

見えない、それでいて高く、分厚い壁。

ああ、この人は――。

――ずっと、ひとりだったんだろうな。

1年生の時から。

ひよつとすると、その前から。

自分には、理解できないのかもしれない。

自分には、何人も友達と呼べる人がいる。

初春がそう。

アケミも、むーちゃんも、マコチンも。

自分には、家族がいる。

学園都市から帰れば、家で出迎えてくれる。

ママが。パパが。弟が……。

「――あの、ちょっと――」

初春の唐突な言葉に、涙子は思考の海から引き揚げられた。

顔を上げると、カオリがいつの間にか立ち上がっていた。

「今日は、ありがとう。それに、――そうだ、こないだの事件の時も。そのお礼がまだだったね」

カオリが笑顔を浮かべて初春や涙子に向かって言った。

頭上の白く無機質な電光が、ぼさぼさ髪のカオリを照らし、彼女の

顔に陰を作っていた。

「本当に、嬉しかったよ」

その言葉に偽りはないのだと、涙子は感じた。

「けど、あの一件でも分かったろうけど、私、危ない奴らと付き合ってるから……」

「あなたたち1年生が、関わっちゃ良くないよ」

カオリが、帰ろうとした。

涙子は口を開いた。

長い時間は経っていない筈なのに、やけに口の中がからからだった。

冷たい空気をすつと吸い込んでから。

「待って!!」

自分でも驚く位に、涙子は大声を出してしまった。

周囲のざわつきが、一瞬消えたのが分かった。

けれども、ここで黙ってはいけない気がしてならなかった。

涙子が見上げると、カオリは不思議そうな表情でこちらを見ていた。

「あの、」

涙子はゆっくり言葉を吐いた。

「……友達に、なりませんか?」

「……ともだち?」

カオリが涙子の言葉を反芻した。

「あなたのこと——カオリさんのこと、確かにあたしは、よく知らないけど」

涙子は、言葉の一つ一つを、自分にも言い聞かせるように話していった。

「でも……普通の、友達に、なれませんか?」

——普通の友達のように。

——おととい昨日訪れた病院の看護師の言葉が、頭の中で鳴っていた。

「あたしは、なってみたい、です……」

結局、最後は尻すぼみになってしまった。涙子は目を伏せた。こんなことを言うなんて。何度も会ったわけでもないのに。たった一度や二度、トラブルの場に出くわしたというだけで。カオリの表情が気になった。怒っているだろうか。

涙子が恐る恐る顔を上げると、さつきまでの位置に、カオリの顔はなかった。

カオリは再び座っていて、笑っていた。

「……ありがとう」

きれいな声。

諦めの顔ではない。トイレで出会った時の、あの笑顔だ。

「友達……ともだち、ね。なれるかな？すつごく、嬉しいよ。佐天さん。」

「もっ——」

「もちろんですよ!!」

涙子が返事をしようとした所で、甲高い初春の声が割り込んだ。

初春が、携帯電話を手に、テーブルの向かい側から早足で涙子の席へと乗り込んできた。

涙子は初春に押しつけられて体勢を崩した。

「あたしたち、別に付き合いが何だろうが、関係ありません。その人本人を見てますから！ねえ、佐天さん！」

「う、初春、ちよっと、重いつて——」

「えっ!?あたし、そんな重いですか!?やだなあ！」

「いや、そういうことじゃなくて——」

くすくすと、カオリが涙子と初春の様子を見て、笑い出した。

「ほら！カオリさん、やっぱり笑ってる顔が似合いますよ！」

初春がほっと息をついて、安心したように言った。

「とりあえず——」

携帯電話を操作しながら初春が言った。

「連絡先、交換しませんか？」

涙子が大声を出して静まった自習室は、少し経つと、いつも通りの

物音で満たされていた。

「あの花付けてる1年の子、風紀委員だつて」

涙子たち3人の様子を、少し離れたテーブルから見る二人組がいた。

「どうする、ユミコ?」

ユミコと呼ばれた女子生徒は舌打ちした。

「どうするも何も、あんたの財布がなくなってるのはほんとのことじゃん、ユキ!」

「いや、そうだけど……」

バツが悪そうな顔をして、ユキが口ごもる。

「あの、トイレで脅したのは、やっぱまずいって……」

「なにそれ?」

不服そうに、顔をしかめてユキがユミコを睨んだ。

「あいつがやったに違いないし。あたしを疑うの?ユキ!」

そういう訳じゃ。と、ユキはユミコの剣幕の前に再び黙った。

「あの1年生が何か言ったところで、風紀委員があ不良女の味方はする訳ないじゃん」

ユミコは目を細めて、連絡先の交換で盛り上がる涙子たち3人を見た。

「1年が文句つけるなら、教えてやりやいーんだよ。言う事聞くべき先輩の選び方をね」

——都市軍隊 ラボ

「41号と、他のナンバーズを引き合わせる?」

書類をめくりながら眉を顰めていた大西が、皺だらけの顔を更に陰しくして木山に言った。

「ええ」

木山は答えた。

「島君の再履修は、今のままでは限界があります。良い結果は望めないでしょう」

「木山博士、何もそんな——」

大西が片手を広げて、抗議の声を上げた。

「あなたがここにきて、まだ3日だ。ずいぶんと結論を急いでいますな？」

「27号と呼ばれる、別の実験体との遭遇をきっかけに、島君は能力に目覚めつつある。あなたたちの見立て通りだとすれば、もう一度彼らを引き合わせれば、島君は能力行使にコツを掴むんじゃないかしら？ その瞬間を観測することができれば、今後の研究に弾みがつくでしょう」

木山は、自分よりも背の低い大西に、気怠い視線を送った。

「たった3日といえど、私としては、今のところ目に見える成果が出ていないのは惜しいと思っています。Dr. 大西。あなたもご不満げでしたし」

大西の持つ書類の束を見やって、木山は言った。

大西たちにははつきりと伝えてはいないが、レベルアップ幻想御手の試作品の音声ファイルレベルアップを鉄雄に聞かせ始めた。しかし、これといった能力行使の向上は見られていない。上手く幻想御手が動作するなら、あれは間を置かずに、即効で効果が出る筈なのだ。

その原因として考えられる一つは、音声ファイルが対象に共有させる脳波パターン。それが不適合だということだ。

テレパス念話によるネットワークを構築しているという、ベビールーム保育園の実験体。

カギは、彼らにありそうだ。

「いや、しかし……」

大西は顎に手を当てて唸った。

「確かに、君の考えは試してみる価値があるかもしれない。だが、41号を保育園の者達に引き合わせるのには、大佐が頷くかどうか……」

「……子どもたちに、危険が及ぶかもしれないってことね」

木山は腕組みした。

科学者共より、よっぽど人間らしい考えの持ち主かもしれないな、

あの軍人は。

「……だが、直接引き合わせなくとも、手段はある」

大西が眉を上げて、木山を見た。

「……手段、とは？」

木山もやや視線を鋭くした。

「ウム、そうだな……君の言う通りだ、やってみようじゃないか。あの子どもたちは、見かけによらず、優秀なのだよ」

自分の研究成果をひけらかす時の笑みだ。

大西は、熱の籠った笑みを浮かべて、木山を見た。

島鉄雄は、目を閉じてベッドに横たわっていた。

耳には、ワイヤレスのカナル型イヤホンが取り付けられており、鉄雄は寝息を立てていた。

ベッド脇のサイドテーブルでは、木山に渡された携帯型音楽プレーヤーが、時折控えめに光を放っていた。

「……うう……」

唐突に鉄雄は唸り、体を起こして額を抑えた。

——頭が痛い。

急に異物感に耐えられなくなり、シャカシャカと金属音がやけに響くBGMを鳴らすイヤホンを外し、床に捨てた。

なんだ、これは。頭がガンガンする。

眩暈がする感覚がして、吐きそうになる。落ち着かせるために、鉄雄は音楽プレーヤーの側に置かれた、水の入ったペットボトルに手を伸ばした。

ところが、暗闇の中で上手く掴めず、ペットボトルは床に落ちた。蓋を外しつ放しのボトルの口から、ドボドボと白い液体が床に零れだした。

「ンだよ、くそっ——……？」

悪態をついた次の瞬間、鉄雄は違和感を抱いた。

——白？

鉄雄が床を見ると、暗闇の中で、ブラックライトに照らされたかのように、白い液体がやけに目立って飛び散っている。

それは、壁の方へと足跡のように続いていた。

鉄雄は再び眩暈を起こした。ベッドが揺れている。身体が支えられない。

たまらず四肢をベッドに投げ出した。

ベッドの金属製の骨組みが、ギシギシと音を立てている。

「違う——これは……」

何が違うのか、自分でもよく分からなかったが、とにかく鉄雄は声を出した。

出さなければ、押し潰されそうだった。

眩暈かと思ったのは、本当の揺れだった。部屋が、赤ん坊の弄ばれるボールのように縦横無尽に揺らされている。

次の瞬間、白いミルクのような液体が伝っていった方の壁が、すさまじい音を立てて崩れた。

熊だ。

巨大なテディベアが、壁を壊して鉄雄の部屋に押し入ってきた。

それは鉄雄のよく知っているおもちゃでカオリの携帯のストラップに付いているものだった。それは音楽プレーヤーや実験器具の明かりをらんらんと反射する瞳をもっていて両の瞳からは絶え間なくミルクが流れ出していた。フェイクファーだかアクリルボアだかそんな生地の詳細までは鉄雄は知る由も無いが何故か頭の中にそういう関係ない用語が浮かんでは消え肩や肘脚の付け根といったツギハギの部分からも白い血が裂傷を際立たせるかのように滲み出てきていたそれは一步一步を安っぽい怪獣映画のように音を立てて踏み締めて鉄雄の上に覆い被さって来た目から鼻から口から垂れてくる血や涙や鼻水や涎が鉄雄の顔を濡らしたそれを鉄雄は冷たいと思った

「やめろおおおおお!!!」

鉄雄が腕を思い切り振り、目の前の怪物を払い除けようとした瞬間

間、轟音が鳴り響き、部屋の中の全ての物が怪物ごと押し流されていった。

けたたましい警報音が鳴り響いた。

V・木山春生

25

7月7日夜 —— 都市軍隊本部、ラボ

「お騒がせして申し訳ありません、大佐！ここまでの力を発揮するとは全く予想外で——」

「隔壁を下ろせ！特に保育園周囲2ブロック内の防衛はレッドだ！41号の収容室両サイドを固めろ！」

親鳥に付いていくアヒルのように、無駄に左右に揺れながら、後ろから言い訳めいた事をまくし立てる大西には一切目をくれず、敷島大佐はきびきびと指示を飛ばす。この辺りは流石、アーミーの最高責任者といったところか。指示を受けた隊員や研究者達は短く返事を返し、各自連絡を取り始めたり、廊下を駆けて行ったりしている。木山春生は、他の数人の研究チームメンバーと共に、大佐と大西について、島鉄雄の部屋へと早足で向かっていた。

研究所に来て数日の間に分かったことだが、敷島大佐は部下からの信頼が厚い。いかつい風貌とは裏腹に、警備にあたる隊員たちの会話や勤務態度の端々から、そのことが伺える。週末には、誕生日を迎えた隊員のパーティを開くそうだ。

グイーツ、グイーツ、と規則的に鼓膜を揺らす警報音をよそに、あの海坊主のような大佐がハッピーバースデートゥーユーを歌っている姿を想像して、木山は嘔き出した。

幸い、誰にもバレていないようだ。木山は咳払いをして安堵し、ふと、実験の様子を思い出した。

木山の意見を受けて大西が立案した実験とは、「20番台のナンバーズ3人が、念話を41号に送ることで、41号の共鳴は再現され

るか」を確かめるものだった。

3人のナンバーズが居住する保育園が、ラボ内のどこにあるのかは、木山に知らされていなかった。ただ、会話の内容から、少なくとも同じフロアにはなく、ある程度離れていることが推測された。

敷島大佐は、「鉄雄と他のナンバーズをそれぞれの場所から絶対に移動させず、近付かせない」との条件付きでやっと実験を承諾した。研究チームは、3人の20番台のナンバーズと、鉄雄の様子を、それぞれ観測していた。

大西によれば、鉄雄の意識に干渉してほしい、と要請したところ、意外にも、保育園のナンバーズ——26号と27号はすんなり受け入れてくれたらしい。彼らにも、久しぶりの新入りのナンバーズに対する興味があつたのではないか、というのが大西の意見だ。

ただ、2人だけでなく、3人目——25号とナンバーリングされた寝たきりの女性らしい——も同伴でなければ、十分に力を発揮できない、との弁だった。木山は詳しく事情を知らないが、25号を同伴させるのは初め、大佐が難色を示したようだ。「今は覚醒してほしくない」等と呟いていた。

結局、ちやうど鉄雄が寝ている時間に、実験を実施することになった。

25号が横たわるベッドに、電動車椅子に座った26号と、3人中で唯一歩ける27号が近付いた。そして、静止して数十秒程。

25号は相変わらず目を閉じて横たわったままだが、ベッド内に置かれたテディベアが、ちやうど3人を結ぶ三角形の幾何中心となる位置で、ベッドから数十cm浮遊した。

25、26、27号の脳波が、特徴的な棘波スパイクを示し始めた。その直後、軽度睡眠特有の紡錘波スレンドルを示していた41号の脳波に、3人と同じ棘波が現れた。津波のように連続して高まるその波は、数秒ほどで鉄雄の脳波を塗り替えてしまった。

すると、鉄雄はベッドで眠りから覚め、うわごとを叫んだあと、右腕を思い切り振るい、部屋の設備や壁面が突風に殴りつけられるかのように吹き飛ばされ——と、監視モニターの映像はそこで途切れ

た。

「25号、6号、7号の安全は確保できているか？」

記憶を呼び起こしていた木山は、敷島大佐の厳しい声で顔を上げた。

「全員、保育園内で待機しています。同室内及び各出入口に警備がついています」

「間違っても、これ以上刺激させるな。25号の意識は？」

「2分前から、昏睡状態です」

「……やるべきではなかった」

角を一つ曲がった所で、大佐は一段と声を低くして唸った。

「ナンバースの念話を、41号に向けて反応を探る等と……眠れる獅子の尾に火を点けるようなものだったのかもしれない」

「しかし大佐！」

大西が口を挟んだ。

「ご覧になったでしょう！あの映像を！27号と類似した念動力……テレキネシス強度は27号に比肩する、いや、それ以上かもしれない！たった数日であれば今まで成長するとは！素晴らしい逸材ですよ！」

「僥倖だな」

大佐が答えた。

「それが、部屋一つを吹き飛ばすだけで済めば、だがな」

言うと同時に、敷島大佐は立ち止まった。それとほぼ同時に、研究チームを取り囲むように随伴していた5・6名の隊員達が前へ進み出て武器を構えた。

木山はその武器を見て訝しんだ。彼らが構えているのはハンドガンだ。単純に制圧を目的とするなら、扉を吹き飛ばす程の念動力者相手には心許ないと言わざるを得ない。銃弾の軌道を逸らされればそれで済まない。鉄雄をできるだけ傷つけたくないのだとしても、それなら音響兵器といった演算を妨害する装置が必要だ。

要するに、中途半端だ。

都市軍隊^{アーミー}——学園都市内の技術保護及び治安維持のために、本国から派遣された者たち。

だが木山が見てきた限り、都市内の治安維持に関しては、警備員^{アンチスキル}が矢面に立つものだ。アーミーが東京の政府から申し付けられた大義名分は、アンチスキルとの縄張り争いによって、威厳を損なわれ、揺らいでいる。アーミーとアンチスキルとの折り合いがすこぶる悪いというのは、一般市民から見ても推測に足るものだった。先日の第七学区での「ガス爆発」騒ぎの時に、木山は久しぶりにアーミーの名をニュースで耳にした。災害復旧の人員を補うものとしてアーミーが駆り出されているのであれば、彼らにとって面白くないのではないかと想像した。

裏を返せば、能力者の暴走という学園都市の安全が正に損なわれるであろう事態に、この連中は慣れていないのではないか。木山はそう疑った。

一行は、鉄雄の居室の手前まで来ていた。

木山たちから見て右手側には、かつて扉があつた筈だが、周囲の壁ごと破壊され、くしゃくしゃになった鉄扉の残骸が廊下に打ち捨てられていた。電気系統が寸断されたのか、時折、バチバチツとスパークを起こす音が部屋の内部から聞こえる。部屋の明かりは着いておらず、木山達の位置からは中を伺うことはできない。

「41号は中に？」

「位置情報が途絶えていて、断定はできませんが、恐らく……」

やや自信のなさそうな声で、研究者の一人が大佐に答えた。

「……君は、どう思う？」

斜め後ろにいる木山に向かって、大佐が投げかけた。

「能力者の急速な成長は、初めは得てしてコントロールが難しいものです」

木山は努めて冷静に答えた。

「設備の修繕費用は、そちらで持っていただけますよね？」

「随分と余裕だな」

大佐が、目をぼつかり空いた壁の大穴から逸らさず言った。

「こういった場面は経験がありますから……何度も」

木山は噛み締めるように言った。

「——じゃあ、俺が今どんな気持ちかも分かるよな？先生？」

少年の声が、一同に聞こえた。

暗闇の中から、ひたり、と、裸足が廊下の床へと踏み出した。

島鉄雄が、木山達の目の前に姿を現した。

「41号オー」

大佐が呼びかけた。隊員たちが肩を強張らせ、大西以外の研究員は隊員の陰に隠れるように身を縮めた。

木山は特に隠れるでもなく、やや顔を上げて鉄雄の様子を観察した。

目はどこか虚ろで、額は発汗していた。能力を急に行使した後らしく、脳が酸素を欲して、肩で息をしている。薄い黄緑色の患者衣ガウンは乱れ、尖った鎖骨がはつきりと露わになっていた。

「頭が、痛いんだ……」

鉄雄はゆっくりと言った。

「寝ている所を、ジャマされたンでなア……」

「能力の発現だよ、おめでどう41号！」

大西がつかつかと前へ出て、興奮した声色で語りかける。

こいつ、余計なことを。木山は内心、嘆息した。無理やり起こされて頭痛がする、と言っている相手に、おめでどうは無いだらう。

「お前らの差し金か？」

鉄雄が言った。声色には明らかに苛立ちが含まれている。

「俺の、頭ン中に、割り込んで来やがった……誰かが」

木山はそこで、視線をやや鋭くして鉄雄を見た。

彼は、気付いている。

能力による干渉を受けるだけでなく、相手を見返している。

「睡眠中でも、例えば夢での刺激が引き金になって、無意識の内に能力

が覚醒する事例はあるんだ」

大西がなだめるように鉄雄へ言う。1歩・2歩と歩み寄る。

「今はまだ、君は混乱しているんだ。さあ、別室で安静になれば、精密な検査を——」

「聞いてンだよ!!」

とうとう、鉄雄が叫んだ。腕を先ほどの映像と同じように振るうと、大西が不意に宙へ浮き、背中から壁へ叩きつけられた。

白衣の研究者たちは息を呑み、隊員達は武器を鉄雄へはつきりと向けた。大西はかはつと息を吐き出し、床に転げた。

「やめろ!・41号!!」

敷島大佐が怒鳴った。

「ここで暴れても——」

「うるせえ!!」

鉄雄が再び叫ぶと、今度は大佐が不意に両手を床に付いた。大佐はぐつと堪えようとしたが、1・2秒もしない内に、巨人の手で押さえつけられているかのように、這いつくばった。

「大佐!」

上ずった声で隊員の一人が叫ぶと、隊員たちは、ハンドガンのフェイルセーフを一斉に解除した。

木山は確信した。明らかに、隊員たちは能力者の対処に不慣れだ。目に見えない者に対する恐怖が、カチカチと音を立てて広がっていくようだった。木山は、自然と下がり、彼らから距離をとった。

「お前ら、いい加減に——」

鉄雄が何か言いかけた途端、パァン!と弾ける音がし、木山を含め研究者たちは頭を抱えて伏せた。隊員の誰だか一人が、引き金を引いたのだ。

「やめろ、撃つなア!!」

「野郎オ!!!」

大佐の必死な声を上から踏みつけるように、鉄雄の怒りに満ちた声が響く。

「大佐ア!」

「わ、うわ、あああ——!!」

木山は、顔を少しだけ上げて、様子を伺った。
目を見開いた。

鉄雄は、無傷で立っていた。怒りの表情で、右手をすつと伸ばし、1点へ掌を向けている。

1名の隊員——恐らく、先ほど発砲した者だ——が、壁にめり込んでいる。みるみる内に、彼を中心として、周囲の壁1〜2mの半径内に、放射状にヒビが入っていく。隊員は口も目もあらん限りに開けて苦悶の表情を浮かべているが、声は一切出さなかった。肺も気道も圧迫されて、出せないのだ。

建材が擦れ合う音と骨が砕ける音とが混ざって、硬質なアンサンブルを奏でている。

他の隊員は、敷島大佐同様に、膝をついたり、床に這いつくばったりしている。銃を取り落としてしている者もいる。

大西は相変わらず蹲っているし、他の研究員はすぐみ上って、壁伝いに後ずさるばかりだ。

木山は素直に驚いた。能力の強度が予想以上に高いことに加え、ほんの一瞬他のナンバーズからの干渉を受けただけで、ここまで力を使いこなすようになっていたとは。

——やった。

怖さが無いわけではなかった。彼は、大佐の言った通り、起こしてはまずいものだったのかもしれない。

しかし、こうしている間も、間借りしている木山の個人オフィスから、鉄雄のEEG^{脳波}は観測され続けている筈だ。

—幻想御手《レベルアップ》は、完成する。

木山は確信をもつと、誰もが動けない中、背筋を伸ばして立ち上がった。

「島君——。」

はつきりと、よく通る声で、木山は鉄雄に呼び掛けた。

その部屋はちよつとした公園程の広さで、入り口から奥に向かつて狭まる細長い台形の形をしていた。

高さは4階建て程度、優にあり、中心に植えられている一本の樺が伸び伸びと枝葉を広げている。

木が植えられている箇所を除けば、床は絨毯が敷き詰められており、宇宙船や渦巻、月、星、太陽といった図柄がデフォルメされて描かれていた。壁面にも同様の絵が描かれている。

部屋の奥には、トンネル付きのドームや、熊の顔を模したゲートがある。壁際には、知育用の大きなサイコロや積み木、列車や線路、自動車、人形といった玩具が置かれているが、最近片づけたばかりなのか、散らかっているという程ではなかった。

ただし、全体的に青系統の色が多く使われている部屋は、置かれている物とは対照的に、ひどく冷たい印象を見る者に与える。

部屋の一角に、25号のベッドがあり、その両脇に、26号、27号がいる。

25号は横たわり目を閉じている。彼女を包む布団の上には、ちよこんとテイベアが座っている。

あぐらをかいた26号と、車椅子に座った27号も、俯いて目を閉じ、微動だにしない。

この部屋では、鉄雄が起こした警報音は、一切聞こえない。

ただし、出入口のトラック1台が通れるほどの大きなシャッター付近では、都市軍隊の隊員が2名、厳しい表情をして両脇を固めている。

26号と27号は、ほぼ同時に目を開けた。

「あの人……動き出したよ」

マサルが言った。

「うん」

タカシが答えた。マサルへ一度顔を向けたが、すぐにまた俯いた。「きつと……僕に怒ってるんだ」

タカシが声の調子を落とす。

「僕が、あの日の夜、あの人にぶつかっちゃったから」

「違うよ」

マサルがはっきりと否定した。

「今夜は違う。——僕らが、彼に、働きかけたから。それは、僕らの意志だ」

タカシが再び顔を上げた。

「意志……マサル、あの人は、僕らの、仲間？」

「分からない」

マサルは首を振った。

「だけど、止めなくちゃいけない……」

マサルとタカシは、ベッドへと顔を向けた。

「そうだよ？キヨコ」

横たわっていた25号の目が、開かれた。

「ええ」

キヨコが答えた。目は、瞬きせず、じつと遙か上の天井へと見開かれている。

「彼を——」

キヨコが言う間に、マサルとタカシは、入り口を警備する隊員二人に顔を向けた。

すると、隊員二人は何も言わずに、ボタンを操作してシャッターを開け、外へ出た。

シャッターが、ガコン、と音を立てて閉じられた。

「鉄雄くんを、こちらに」

キヨコの言葉を合図に、3人は再び目を閉じた。

ベッド上のテディベアが、再び浮かび上がった。

「島君。」

立ち上がった木山の呼びかけに、鉄雄は視線を向けた。

「——ああ、先生」

鉄雄はにやりと不敵な笑みを浮かべた。

能力を十二分に発揮し始めた実験体を前に、表情を一層険しくした敷島大佐が、這いつくばりながらも木山へ視線を送る。

「Dr. 木山、下がって——」

「大佐、私に任せて」

木山は床へ押し付けられている大佐へ素早く言った。視線は鉄雄から逸らさない。

鉄雄もまっすぐ木山を見ている。

「……これが、俺の力かい？」

鉄雄は、真つすぐ伸ばしたままの腕をまじまじと見つめて言った。

「なアんか不思議だ……今も頭が痛エのに、スッキリしたような気分でもある……」

鉄雄の念動力テレキネシスで、壁に押し込まれている隊員の歪んだ顔が、先ほどより青ざめている。

「ええ、そのようだね」

まずいな。木山は内心焦った。

ここで人死にを出すと後が面倒くさい。

「けど、まずは謝りたい」

木山は両手を広げて、敵意が無いことを示そうとする。

「力を引き出そうと、君の心に無理矢理踏み込むよう差し向けた。私が言い出したんだ」

「へえ、あんたが？」

鉄雄の眉が上がった。

「ああ、すまないことをした」

木山は静かに言った。

「だから、その兵隊さんよりも……やるなら私をやるといい」

鉄雄は血の気の失せた、壁にめり込む隊員を一瞥すると、腕を下ろした。

がはっ、と血反吐を吐いて、ぐにやりとその隊員が床に倒れ込んだ。破碎された壁の破片が、パラパラと音を立てて床に落ちた。

「救護班を!!」

大佐がすぐ指示を出し、別の隊員が場を離れて連絡を取り始めた。

木山の額に、汗が一筋流れた。

次の瞬間、鉄雄が眉間に皺を寄せて、木山を睨みつけた。

すると木山は、耐え難い重みを感じて倒れ込んだ。膝をつこうとしたが、あまりに重いので勢い余って胸も床に打ち付けた。

肺から一気に、強引に空気が喉を駆け上がり、口から逃げ出して行った。思わず呻き声が漏れた。

「ドクター!!」

少し自由が利くようになったのか、響く大佐の声には力が込められている気がする。

「お前らは動くんじゃないエ!!」

鉄雄が怒声を響かせる。

「——この先生を、やろうと思えばぺしゃんこにだってできるぜ、今の俺はア」

「そうだ、何も、しなくていい……」

木山は息も絶え絶えに言った。

金星の気圧は90だったか。20世紀に地表へ落とされたベネラはさぞかし辛かっただろうな。

鉄雄の能力をまともに受けていると、木山の脳裏に過去のこと^{テレキネシスト}が蘇ってきた。

小児用能力教材開発所の附属小学部に、^{テレキネシスト}念動使いの男の子がいた。

その子は能力開発を重ねるにつれ、職員室で廃棄されるアルミ缶を、1本1本触れずに潰すことを、「先生のお手伝い」として、嬉々と

して引き受けるようになっていた。

ウチには減容機コンパクターがあるんだからそれを使えばいい、そんな1本1本能力で潰すなら足で踏みつけた方がまだ楽だぞ？ 何度かそんな風に声をかけた。

——これはトレーニングなんです。

もっとレベルを上げて、もっといつぺんにたくさん空き缶をつぶせるようになって、

大きくなったら、ゴミ回収の人が楽になれるように、人の役に立ちたいんです。

真剣な目をして、そう返された。

そして彼は、あの実験のせいで、能力を暴走させ、自らの脳の運動野を頭蓋ごとリンゴペーストのように押し潰してしまった。

あの子の感じた苦痛に比べれば。

今、自分の身体にかかる重みは、贖罪の旅の入り口にすらならないだろう。

木山は背骨が軋むのを感じながら、歯を食いしばった。

「——先生には、感謝してるんだぜエ？」

鉄雄が屈みこみ、木山に顔を近づけて言った。

「ほんのさっきまで、俺は自分が能力者になれるなんて微塵も思っ
てなかったさ。それが、今はどうだ……こうやって、他人をひと思いに動かせる」

周囲の大佐や隊員たちを威圧するように、鉄雄は一度辺りを見回した。

「——驚くよなア」

「ああ、形にするって、言ったろう？」

木山は、顎を床に擦りながら、できる限り顔を上げ、笑って見せた。
「もっと、高められると思うよ、君は。短期間にここまで使いこなせるようになったんだ——私は、君に協力したい。もちろん、次は、君

が起きてる間にね。

それとも、……ここで私を殺すかい？」

ここまで言うのに、呼吸困難で目の前がちかちかした。

鉄雄は、しばらくじつと木山の顔を見た。

もし、ここで死んだら——あの子たちに顔向けできない。

木山は、身体が床に沈み始めてるのではないかと思いつつも、何とか鉄雄を見返し続けた。

「……ああ、そうだな」

ふつ、と木山を押しさえつける力が抜け、木山は緊張が霧散し、四肢をそのまま床に投げ出した。

口の端からだらしなく涎を垂らしている。なめくじにでもなった気分だ。

「いや、悪イ、先生。ちよつとばかし、キレちまった」

言葉とは裏腹に、鉄雄は笑みを浮かべていた。

「……素晴らしい、41号！」

なんだ、あいつ生きてたのか。いつの間にか復活した大西の声を聞いて、心の中で木山はそう思った。

「通常と変わらない会話をしつつ、この人数と範囲を制動する念動力——LEVELE4、いや、その先、——待て、理論的にはだね、LEVELE6の域に——」

余計なことをほざいていると、また潰されるぞ。

木山の思いに反して、鉄雄は大西の言葉を無視した。

先程から、鉄雄はなぜか天井の一点を見つめていた。

「……41号、もう気は済んだだろう」

大佐が諭すように声をかけた。しかし、鉄雄は相変わらず、上を見つめたままだ。

その顔からは笑みが消えている。

「……呼んでいるのか？」

不意に、鉄雄が小さく口を動かした。よく耳を澄ませていなければ、聞き逃してしまう程の声だ。

「お前らか、俺の頭に……どこに？どうやって行けばいい？」

——
念話か。

ようやく四肢に力が戻って来た木山は、手について体を起こした。
「……分かったぜ……俺もお前らに用がある……」

鉄雄は小さく天井に向かって頷いた後、踵を返して歩き始めた。

「……待て！41号！どこへ——」

大佐が追いかけてきた瞬間、ひゅん、と空気を切るような音と共に、鉄雄は忽然と姿を消した。

「消えたア!!」

疎み上がつっていた研究者一同が驚きで声を上げた。

——
空間移動、だと？

木山は困惑した。

島鉄雄はあくまで念動力系の能力者の筈。空間を転移する能力を突然使える筈がない。

「……保育園だ」

低く唸るような声が聞こえて、木山は大佐を見た。

大佐は苦虫を噛み潰したような顔で、たった今鉄雄が消失した場所を睨みつけている。

「ベビールームへすぐ連絡をとれ!!ナンバーズは今何をしている!？」

「……は、はっ!!」

大佐の傍に居た隊員が、慌ててドタバタと駆け出す。

「すぐに向かうぞ!!奴はそこだ!!」

20番台のナンバーズが、鉄雄を転移させたということか？

そのナンバーズは、念話を行使するだけではないのか？

木山はこのラボの実験体に対する認識を改めていた。数階層離れているらしいこの遠距離で、念話を通じさせることも驚きに値したが、対象の空間転移も可能にするのだとしたら、今まで誰も実現しなかった多重能力の証にもなり得る。

この目で見てみたい。その保育園のナンバーズを。上手く応用できれば、幻想御手^{レベルアップ}で得られる演算能力も更に高められる。

「——Dr. 木山。ケガは？」

「……心配どうも。ヒマラヤへのアタックくらい疲れしました。やったこ

とありませんが」

案外心配りののできる大佐に、冗談を込めて礼を返せるぐらいには、木山は問題ない。

「君は、医務室へ——」

「同行させてください。研究者の血が騒ぐもので、非常に興味深い」

木山は、大佐の言葉をはっきりと遮った。

「ダメだ、危険だ！」

「先ほどのやりとりを見れば、誰が彼を説得できるか、私の方がまだ見込みはあると思いますが！」

ぴしゃりと言うが早いか、大股で去ろうとする大佐の背中に、負けじと声をぶつける。

ここで引き下がる訳にはいかない。

大佐は一瞬足を止め、木山の方を振り返って、目を細めた。

「……………ここから行く先は重要機密だ。契約内容を書き換えさせてもらうぞ」

「違約金を払わないよう気をつけますとも」

木山の2倍の幅はあろう、大佐の背中を、木山は追いかけた。

後ろから大西たち研究員も慌ててついてくる。大西は「予想以上だ」とか、「学会で発表を」とか、「主流派の奴らを」とか、先ほどからうわごとのように呟いている。

得られる観測結果に期待しつつ、木山は危険を感じてもいた。

このまま鉄雄が保育園へと辿り着いた時、そのナンバーズへ危害を加える、或いは交戦するようなら、止めねばなるまい。幻想御手の完成に必要な彼らに傷が付いたり、最悪どちらか一方でも失われたりするようなことがあれば、それは自分にとって損失だ。

大佐の後ろを、息を切らして追いかけてながら、木山はそう考えた。

いざとなれば——木山は、ポケットに忍び込ませた機械をタイトスカートの上から触り、確かめた。

その時は、自分が鉄雄を制する。

どの道、どんな犠牲が出ようが、自分は既に、研究成果のためなら人が傷つくことを厭わなくなっているではないか。

あぼろ
肋を砕かれ、床に倒れ伏した隊員の姿が思い浮かび、木山は自嘲し
た。

自分も、かつて雇い主だったあの木原ジツイと変わらないのかもしれな
い。

脳裏に浮かんだ邪悪な笑みを振り払いつつ、木山は大佐らと共にエ
レベーターに乗り込んだ。

——アーミー本部、ラボ内 保育園 ベビールーム

不意に両足が固い床を感じ、島鉄雄は周りの景色がさあつと明るくなるのを感じた。

「なんとなく、ガキの声だって感じはしたが……」

鉄雄は鼻で笑って言った。

「マジで、こんなお守りの部屋があるとはな……うざってえ」

鉄雄にとって、その部屋の内装は、養護施設に入れられていた頃の苦い記憶を呼び覚ますものだった。

鉄雄は幾度か頭を振り、鋭い目つきで辺りを見回した。

奥まった所の一角に、コードが何本か繋がれたベッドがある。

その近くで、老人のような風貌をした子供が2人、まっすぐ鉄雄を見つめていた。

鉄雄は、その内の一人に見覚えがあった。

「……お前か。あん時の」

26号^{タカシ}の顔を睨みつけて、鉄雄が唸るように言った。

「ハイウェイじゃあ、世話になったな……」

鉄雄は、3人へと歩み寄っていく。

ひたり、ひたり、と、裸足の踏み締める音が、静かに響いた。

タカシは、鉄雄から視線を離さなかったが、汗が一筋、二筋と額から滲み落ちてくるのを感じていた。

25号^{キヨコ}の横たわるベッドにかけた手を、より強く握り締めた。

「……ンで、お前は」

車椅子に座った少年、27号^{マサル}に視線を移して鉄雄が言った。

「……歩けねエぼっちゃんに、干からびたモヤシのガキか……」

鉄雄はせせら笑った。

「ンでこっちのお姫様は……お人形がかわいくて仕方ない」と

ウサギのぬいぐるみを抱えるキヨコを見て、鉄雄は一層笑みを浮かべた。

「鉄雄君……君が、41号?」

緊張の中、マサルが口を開いた。

「初めまして。君に話したい事が——」

その途端に、鉄雄の表情は憤怒のものへと変わった。

「気安く呼ぶんじゃねエよ!!」

突然の怒鳴り声に、マサルはビクツとした。

「俺の頭ン中に話しかけてきやがって、寝覚めが悪イんだよこっちは——ンで来てやったら、出来損ないのガキどもとはな……何の冗談だ、ええ!?!」

鉄雄は怒りに燃えていた。

悪夢を見せられたと思ったら、その原因が自分よりもずっと小さい子供の仕業だったとは。

しかもその内の一人は、ここ最近の訳の分からない出来事のきっかけを作った奴だった。

鉄雄は、緊張の面持ちのタカシを再び睨みつけた。

「そうだ、元はと言えば、てめえだ……詫びの品の一つでも用意してあるンだよなア?当然!」

「ぼっ僕は……」

タカシは口をぱくぱくさせて、何事か言おうとしているが、上手く声が出ないようだった。

「ハッ、ならてめえからだ……ふざけやがって!!」

先ほど、兵隊を痛めつけたように、こいつらの脆い手足を砕いてやる。

鉄雄は、警備兵にそうしたように、タカシに向かって集中した。

ただでさえか弱い四肢が、鉛細工のように折り曲げられ、みつともない悲鳴を上げる筈だった。

……が、何も起こらない。

「……おい?」

鉄雄は、誰に言うでもなく疑問の声を口にした。

「なんでもうまくいかねエ……」

「最初から、全部成功するとは限らないんだよ」

マサルが、諭すように鉄雄に言った。
その口調が、更に鉄雄を逆上させた。

「調子に乗りやがって！」

鉄雄は、タカシを痛めつけるべく、手を伸ばした。

その腕が、見えない別の手に掴まれたように、不意に止まった。

「なんだと……なんで動かねエ」

鉄雄の目が、驚きに見開かれた。

「君は、まだ僕らには勝てない」

マサルが、はつきりと言った。視線は、鉄雄から逸らさずにいた。

鉄雄が手を伸ばす先のタカシも、口を真一文字に結んで、鉄雄を見返していた。

「バカな！俺はさつき、都市軍隊アーミーの兵隊を何人も血塗れにしてやった！この手で！この力で……」

鉄雄は焦っていた。まさか、このガキどもに、自分が力で劣るとは思いもよらないことだった。

「力は、何かのきっかけであふれ出るんだ」

タカシが、じつと鉄雄を見つめながら言った。

「それは、始めは蛇口が壊れた水道みたいなものだ。みんな、少しずつ、練習して、コントロールできるようになるんだ……僕らだってそうだった。

君は、タカシと出会ったこと、それに、さつき僕らが話しかけたこととか、そういうことがきっかけで、力に目覚めている。でも言い換えれば、僕らが君の力をコントロールしているんだ」
「うるせえ！ガキのお稽古してンじゃねえんだよ!!」

相変わらず動かない片腕を睨みつけながら、鉄雄が歯噛みして言った。

「でも、鉄雄君」

タカシが言った。

「君は強くなるんだよ。僕らの誰よりも」

「はっ……何だよ、そりゃあ……」

鉄雄が眉間に皺を寄せて言った。

「だって、キヨコがそう言ってる」

タカシとマサルは、ベッドに横たわるキヨコを見た。

「そうだよね？キヨコ」

鉄雄も、キヨコを見た。

閉じられていたキヨコの目が、不意に大きく開かれた。

「鉄雄君」

キヨコの声を聞くとほぼ同時に、鉄雄は腕を押さえつけていた力から解放された。

「あなたに、見てほしいの……」

次の瞬間、鉄雄の視覚に滝のようにビジョンが押し寄せ、聴覚には無数の音が迸った。

群れ為すバイク。その騒音。

誰かが自分の目の前に立ち塞がっている。痛い。

金田の必死な声が聞こえる。

けたたましい銃声と、嘲る笑い声が聞こえる。

No. 28と書かれているのが分かる。

光と爆音に包み込まれる。熱を感じる。

鉄雄は、自分の体が、今やそこのビルよりも高く、巨大に膨らんでいることが分かった。

自分の内側から、力が溢れ出してくる。

それは、止めどなく溢れて、どんどん大きくなって……

不安げな顔をしたカオリが見える。

眩しい。その向こうに、誰かが……

「ぼくは……ここだよー！」

ア・キ・ラ。

「そうだー！」

鉄雄はいつの間にか膝を床に就いていた。

「俺は、クラウンの奴らにやられて、それで、やり返して……そこで不意に力が使えて！そんで……夢を見た。変な、夢を。あれは、……今見たのもそうか？本当に起こるっていうのか!？」

「変えられない未来があるの。けれども、一方向だけに進んでる訳じゃないの」

キヨコが、夢を見るような声で言った。

「近道、遠回りの道……いろんな行き方が合って、私達を選べる未来もあるはずよ……」

「じゃあ、その、アキラってのは!？」

鉄雄が問いかけた。

「一体なんなんだ！いつも頭ン中に、そいつの名前が聞こえてきやがる！」

「僕たちの仲間だ」

マサルが言った。

鉄雄は目を見開く。

「仲間だと!？」

「そうよ」

キヨコが答えた。

「ワタシたちの……28番目の仲間……」

その時、重たい駆動音がした。

「41号!!」

低い声が響いた。

シャッターが開かれた出入口に、敷島大佐と木山春生たちが立っていた。

「41号！どうしてここに……いや、それよりお前たち」

大股に鉄雄たちのもとへ歩み寄るなり、大佐が詰問した。

これが重要機密？

後を付く木山は訝しんだ。保育園という名にふさわしい、テンプ
レートのような内装だった。

しかし、鉄雄の側にいる、3人の老人のような奇妙な子どもを目に
して、木山は僅かに目を大きくした。

「そうか、彼らが、ナンバーズ……」

木山とDr. 大西、そして敷島大佐が歩み寄る周囲では、警備兵た
ちが半円状に展開した。

じりじりと、鉄雄に向かって取り囲む形だ。

「タカシ！マサル！キヨコ！……：……どういうつもりだ。我々が頼んだの
は、ただ念話テレパスを送ることだけだった筈だ！なぜ41号をここへ呼び込
むようなことをする！」

大佐が問うた。しばらく、沈黙があった。

「あの」

タカシがそろそろと手を挙げた。

「こないだの事故のこと、謝りたくて……」

「タカシ、下手な嘘はつくな」

ぴしゃりと大佐が言った。どうやら、タカシの言い訳は下手だった
ようだ。

「41号、さあ」

膝をつく鉄雄に向かって、大佐が言い放った。

「戻るんだ」

「ツ！るせえ！俺をそんな番号で呼ぶんじゃねえ！」

鉄雄が怒鳴ると、周りの隊員たちに緊張が走った。

「やめろ、撃つな！ナンバーズを傷つけたらどうする！」

大佐が制した。

「ここに来たところで、お前が見るものは何もないんだ、41号——
——」

「へえ見るものがないって!?!」

鉄雄が、半ば自暴自棄になったように乾いた笑い声を上げた。

「訳の分からねエガキと事故って、それで悪夢を見せられて、こんな建
物に閉じ込められてよオ！ああ、そうかい！見てえものはなんもねエ

さ！それもこれも、アキラって奴のせいなのかよ!？」

「アキラだと!!」

大佐が驚愕して言った。

「……アキラ?」

木山は、どこかでその名前を聞いたような気がした。

大佐は憤りを顔に浮かべ、きつと大西をにらんだ。

「ドクター！何を教えた!」

「ついで、私は何も——」

いきなり大西が疑われている。どうも普段から口が軽いのか、こいつは。

「……では、お前たち、41号に何を教えた?」

大佐がナンバーズの子供たちに向かって聞いた。

「……アキラ君に、会うの」

高い、少女の声が聞こえた。

ベッドに横たわる、少女のナンバーズの声だと木山が気付くのに、少し時間がかかった。

「やがて、人が、死んでしまう、街も……だから、鉄雄君に……」

「待て、キョー! どういうことだ?」

大佐は要領を得ないようだった。

「アキラは変わらない。ずっとあのままだ。どうして、41号とアキラになんの関係があるというのだ?」

「うるせエー! いい加減にしろオ!!」

鉄雄の堪忍袋の緒が切れたようだった。

鉄雄が両手を固く握り締めているのが、背後にいる木山にも分かった。

ピシィッ、と鞭を打つような音がして、部屋全体が揺れ、照明がチカチカと明滅した。

「ダメだ——!」

マサルとタカシが、驚愕して目を見開いた。

「あ、うえから——」

警備兵の誰かが口走るのを聞いて、木山は咄嗟に上を見上げた。

バリバリイツとけたたましい音を立てて、はるか高い位置の照明や天井が、バラバラになつて落ちてくるのを、木山は見た。

「退がれエ——!!」

大佐が叫んだ直後、凄まじい音と衝撃が部屋を揺らした。

「……ツカハッ!」

頭を抑えて伏せた木山は、止めた呼吸を再開した途端に咽た。粉塵が辺りに舞っている。

手探りで、とりあえず自分の体に大事がないことを確かようとすると、指先に痛みを感じた。

きつと照明のガラス片だ。

五体がひとまず無事なことを実感すると、安堵した。

「……島君、やるじゃないか……!」

なお五体を投地したまま、鉄雄の成長を嫌という程実感し、木山は眩いた。

「ツハッハッハッ!——ツゲホツゴホツ——」

鉄雄の振り切れた笑い声の間こえる方へ、新調に顔を向けた。

木山の髪を、塵や礫が滑り落ちていく。

粉塵の向こうに、鉄雄の姿を垣間見た。

「……!あア、そうかい、ハハ……!」

鉄雄の声には、諦観が滲み出ていた。

キヨコが眠るベッドを中心とした同心円状の小さな範囲が、破砕片もなく無傷に見えた。

あのナンバーズ達が守ったのだと木山は推測した。

それを見て、鉄雄は肩を落としていた。

木山は立ち上がった。靴が、ガラス片を踏みしめ、軽い音を立てた。

「島君」

木山が呼びかけると、鉄雄は振り返った。

「先生、俺は……こんなガキ共にも勝てねエんだな……!」

鉄雄の顔は蒼白でありながら、半分が、べつとりと血に塗れている。

「自分がこのザマじゃアな……!」

ガウンの腹や肩の辺りからも、出血していることが見てとれた。

「41号！」

「すぐに処置を——」

大佐やDr. 大西、兵隊たちも動き出す中、木山はゆっくりと鉄雄に歩み寄った。

「島君」

鉄雄に向かって木山は語り掛けた。

鉄雄の真つ赤になった頬に、血ではないものが伝っているのが見えた。

「さつきも、言つたらう、君は、強くなれると……今は休んで、それから、またやってみようじゃないか」

鉄雄は、少し目を見開いて、ふっと笑った。そして、膝をついた。

「……なんだか、寒イぜ……」

まずいな、血を失いすぎている。

木山が内心焦り出した瞬間に、大佐の鋭い声が響いた。

「救護を！担架だ、早く！ナンバーズの心理チェックの準備も急げ！」
バタバタと、動ける警備兵や研究者たちが駆けていく。

鉄雄は止血の処理を施されると、担架に乗せられて木山の横を通り過ぎて行った。

ふっと木山はため息をつき、ポケットに忍ばせた小さな機械をスカートの上から触って確かめた。

この一連の騒ぎを、一通り観測できた。

一刻も早く自分の研究室に帰りたいと、逸る気持ちを抑えつつ、木山は、3人のナンバーズの方を見やった。

キヨコは目を閉じて、眠るように横たわっていて、マサルとタカシは疲れた表情でこちらを見つめていた。

木山は笑みを浮かべた。

「ありがとう。色々と学ばせてもらったよ」

3人は押し黙ったままだったが、木山は返事を待たずに踵を返した。

「彼も、私もね」

(アキラ君に会って……それが鉄雄君の進むべき道よ)

担架に乗せられる道中、キヨコが最後に語り掛けた言葉が、鉄雄の頭の中で反芻していた。

7月9日 夜 —— 都市軍隊、ラボ

「全く素晴らしい！ガラス片を取り出してからの回復力は超人的だよ！汎用性がとにかく高い！オートリパース肉体再生かメタモルフオーゼ肉体変化とも見て取れるこの41号の力は、とにかく広義の意味での念動力だ。テレキネシス彼の今日の実験を見たかね？対象に対する圧力は格段に増している。その上、あれだけ出血していたというのに、もう傷跡も気にならない程だ……いやはや、彼は、私の手掛けた中でも最高級の素材だよ!!」

アマチュアバンドの指揮者よろしく、無駄な動きに見える腕の大振りを変えながら、大西が興奮した口調でまくし立てるのを、木山春生は半ばうんざりして聞いていた。

41号こと、島鉄雄の本日の実験が終了して15分ほど、同じ話を立ちっぱなしで繰り返し聞かされている。彼の能力の向上が、大層お気に召しているようだ。

「Dr. 大西。肉体操作系の能力は、念動系とは分類上、明確に区別されるべきかと——」

「——これで私も、ようやく檜舞台に立てる。研究者として、然るべき榮譽をようやく受けることができる……!」

「ドクター?」

「ああ、木山君、もちろん、君の協力にも感謝しているよ」

わざとらしく、とつてつけたように、大西が木山に向かってにんまり笑いながら言った。

ただでさえ深く刻まれた目尻の皺が、よりはつきり、大西の顔の両岸に渓谷を形づくっていた。

「ああ気にしないでくれたまえ！君が自責の念に駆られるのも無理はない。先日の騒ぎは、確かに君の提案がきっかけで起こったもの……私はヒヤヒヤしたさ？クビが飛ぶのを覚悟したが——」

厭味つたらしく大西が言った。木山がいつも以上に気怠い顔をしているのを、落ち込んでいる者と勘違いしているらしい。

「だが——結果オーライだ。保育園の実験体との接触により、41号は正に！能力に開花したのだからね」

「それは僥倖ですね」

木山は短く答え、踵を返した。

いい加減、これ以上鉄雄を待たせて苛立たせれば、部屋を破壊しかねない。

自分も、片腕に抱えた実験結果の記録書類を、皺くちやの大西の顔へと投げつけかねない。

「お先に失礼します——彼と、幻想御手の効果について評価をしなければならぬので」

「お忘れなきよう！」

歩き去る木山の背中に向かって、大西が声をかけた。

「その幻想御手の波形データを、一刻も早く、こちらにも開示してもらうのだからね……」

——軍人の犬どもに、渡すものか。

オフィスを後にする木山は、声に出さず毒づいた。

幻想御手は、あの子たちを救うためにあるのだ。

木山はため息をつきながら、鉄雄の待つカウンセリングルームへと足を踏み入れた。

「待ちくたびれたぜ、先生！」

支給された漫画本を机に置いて、鉄雄が言った。足組みをして、テーブルの向こう側に座っている。

「そうだろうと思った。すまないね」

木山も椅子を引いて腰かけた。予想よりも、鉄雄は上機嫌そうだった。

「——で、何の話だ？」

「そうだね、今日の結果について……やってみて、調子はどうだい？島君」

「悪くはねエ、と思ってる」

やや恥ずかし気に、鉄雄は木山から目を逸らした。

「それは良い」

木山春生はその日の実験結果について、バインダーに綴じた紙をめくりながら振り返り始めた。

「グレードが70を越したみたいだね……昨日はスチール缶、今日はコンクリートブロックだ。圧力分布測定の数値も、8から25 N/m²」

「コンクリは、ヒビを入れたただけだぜ、先生」

「——うん、まあ、3倍以上だ、やはり、アップデートした幻想御手の振動数が適合したみたいだね、うん、うん、いいんじゃないかな……」

向かい合った席には鉄雄が居るが、鉄雄に向かって成果を褒め称えろと言うより、凶鑑を広げて目を輝かせる子供の独り言のようだった。

研究者という人間は、若い内こそこんな純粋なものなのだろうか。この女性も、いつか大西のように欲を隠そうとしない自尊心の塊になってしまふのだろうか。鉄雄はどこか胸の奥がむず痒い、奇妙な気持ちになり、小さく鼻のため息をつく。

「それっていうのは……凄いのか？」

「さつきも言っただろう、島君。上々だよ。念動力が、比較的具体的なイメージをしやすいものではあるとはいえ、二日やそこらでここまで向上するのは、並大抵じゃない」

「そうか、……そうなのか」

なんとなく、自分よりも実験結果に関心があると察せる木山を見ても、鉄雄はさほど悪い気はしなかった。

「自分でも、驚いてる……頭がスーッとほつきりして……今までずっと、無能力者だったんだ……」

鉄雄は自分の右手のひらを見つめて、呟くように言った。

「正式な強度の測定にかけたなら、ゼロ判定な訳はないと断言できるよ。1だって飛び級さ、最早ユリゲラーの真似事をしているのではないのだから……」

「けど、一体どうして?」

鉄雄が己の手から視線を上げ、不思議そうに聞いた。

「今の今まで底辺だったのが、何でこんな上手くいくようになった？あのガキどもが、俺に悪戯してきたのが良かったってのか？」

「興味深い所を突いてきたね、島君」

木山が薄く笑みを浮かべて答えた。

「あの3人は、それぞれが念動力や空間移動テレポートといった固有の能力を持っている。加えて、3人は互いに、声に出すことなく言葉を伝えられる、念話テレパスのようなネットワークを構成している。2つ以上の能力を行使するというのは、現時点で不可能と言われていることなんだが……とにかく、彼らの念話のようなものが、君の脳に働きかけたことがトリガーとなった。そして、鉄雄君は、あの3人の脳と自分の脳を、一時的に繋いで演算能力を高めることができた。

天の川銀河の中心に潜む、遙か遠くのブラックホールを観測する術を知っているかい？地球サイズの望遠鏡を作るのさ。といっても、馬鹿でかいレンズを実際に製作することはできない。だが、地球各地の電波望遠鏡……アルマ、マウナケア、フランスのNOEMAに南極点……それらをネットワーク化し、得られた観測データを合成することで、疑似的に構成可能となる。Very Long Baseline Interferometry (超長基線電波干渉法)。それと同じ原理だと、私は考えているよ」

「でも今日は、別にあいつらとお話してねエゼ」

「音を聴かせたろう？この間の保育園ベビールームでの一件で、君が能力を発揮していた時の脳波を観測していたね。それを元に、音の波形を改善してみたのさ。これが上手くいったのではないかな。」

木山が矢継ぎ早に言葉が続けるのを、鉄雄は見ていた。木山が、いつもの気怠い表情ではなく、どことなく嬉しそうにしているのが感じ取れた。

「なア、先生は——」

木山は鉄雄の言葉を待った。鉄雄は、口を少し半開きにしていたが、間もなくそっぽを向いた。

「どうした？島君？」

「いや……そうだ、やっぱり『アキラ』って何だか、先生でも知らないのか？」

鉄雄の話し振りにほんの少し不自然さを感じ、木山は少し首を傾げた。

「前にも言ったと思うが、私はラボの人間じゃあないんだ。私だって、知っていることは君と大して変わらないと思うよ」

「そっか……そうだよな」

「ドクターに聞いてみればいいじゃないか。さつきも大層ご機嫌だったぞ、君のことだね」

「誰があのだジジイに！」

D r. 大西に対する評価に関しては、木山と鉄雄は一致していた。

保育園のナンバーズから、「アキラ」という名の実験体に関する情報を仄めかされたことを、木山は鉄雄から聞いていた。

7月初めに大西や大佐と対面した際に出た名だ。

その名前を口にする度、大佐は厳めしい面を更に緊張感で厳しくしていた。

木山も、客員という立場上、詳しくは聞いていない。そもそもどこに存在しているかも分からない一人の実験体など、幻想御手の開発にとって現時点では重要ではないと考え、あまり興味を抱いていなかった。

「……ただ、先人の研究対象だった、という話は耳にしているよ」「ゲンジン？」

「北京のホモ・エレクトスたちまでは流石に遡らないよ、島君。……まあ、私や、大西たち、今の統括理事会とお偉いさんたちよりも、前の人達だろうね。」

木山はバインダーをテーブルに置き、自らの推測だと断った上で話し始めた。

「この学園都市が、どのように成り立ったかについて、島君はどのくらい知っているんだい？」

「悪いが先生。考えたことねエな」

予想通りの答えが鉄雄から返ってきた。

「厄介扱いされて、ここに来たんだ、俺は……この街がどう出来上がったかなんて、アリー1匹の興味もねエさ」

「それは構わないさ。まあ、私なりの推測だが、アキラっていうのは、数多ある能力開発の研究で置いて行かれた、遺物の1つ。ただそれだけに過ぎないんじゃないか？」

「大したことないってのか？」

鉄雄の疑問に、木山は軽く頷いた。

「君も過去に受けたように、この学園都市では超能力開発の方法として、カリキュラム時間割りが採用されている。なんでカリキュラムなのかって言われたら、それが一番、合理的なんだと、長年の研究で合意されたからなんだ。逆を言えば、カリキュラム以外の方法をトライ・アンド・エラー試行錯誤してきた歴史があつて、そこでは数多くの方法が、『これではダメだ』と採用されなかった訳だ。

ここのラボのように、細々と別の方法を模索している場合ももちろんあるけどね」

ここまで、鉄雄は黙って聞いている。以前の彼だったら、この時点で机を蹴飛ばしたり、暴言を吐いたりなど、不平をまき散らしたに違いないが、全く楽しそうではなくとも、話を聞いてくれるだけ、鉄雄が木山へ多少の信頼を寄せているのだと分かった。

「アキラって奴は……ダメだったのか？それにしちやあ、アーミー共は相当ビビってるようだが」

「核燃料デブリみたいなものなんじゃあないか？放射線を発し続けるゴミのように、そう簡単には処分できないものを生み出してしまったのか……そうそう、この学園都市は、元々、前世紀の原子力研究施設から始まったと言われているよ」

「25番キヨコは、アキラを人間だつて風に言つてたぜ」

「フオアキヤスター予知能力者のナンバーズかい？私は、そちらは門外漢だが……連中は隠喩めいた言い方をしばしばするとも聞くからね」

木山は、まだ鉄雄の顔に退屈さが現れていないのを確かめ、言葉を続けた。

「もう1つ考えられるのは、政府が隠したくなる位の破滅的な研究、そ

のものを指すキーワードだってことだ。島君、『童夢作戦』って言葉に聞き覚えは……ないか」

鉄雄が早々に首を振った。

「20世紀の冷戦時代に、それこそ学園都市ができる前だよ？当時極秘で研究されていた実験体が、何かの間違いか、埼玉県のマンス団地で複数体大暴れした事件があった。当時は大規模なガス爆発の事故だということ隠蔽されたらしいが……学園都市の発展と共に、本当のところ報道で暴かれて、政府はそりゃあ、おおわらわだったろうね。」

「今じゃ、超能力研究の負の歴史の1つとして、我々研究者には周知のことだよ。そして、そんな闇に葬られるような研究が、今でもそこかしこで続いているんだからね。アキラがそういつた表に出せない産物だって可能性は、十分あると思うよ——」

「ちよつと待て、先生。その、ヤバい研究つてのが、当たり前にもやられてるって？」

鉄雄の言葉で、木山はハツとなった。

「つい、熱くなつて余計なことを喋ってしまった。」

「——それより、島君。アキラのことよりもだ。」

木山は、話題を逸らすことにした。

「……君は、もっと別のことを聞きたいんじゃないのかい？」

木山の目論見はうまくいったようだ。今度は、鉄雄が下を向いて黙った。

やがて鉄雄は、それまで胸の奥で引つかかっていた疑問を、口にすることにした。

「——どうして俺なんかに、その、こんなに良くしてくれるんだ？」

「どういうことだい？」

木山は、テーブルの上で両手を組み、視線を改めて鉄雄に向けた。「職業訓練校でも、その前も、俺にこの位、なんつうか……マジになつて、向き合った大人はいねえと思うし、それに……俺は、あんたを一度、痛めつけたつてのによ……」

鉄雄は、言葉を探し当てるように言った。

木山は、頭を一度揺らし、前髪を払った。

気怠そうでいて、色の深い瞳が、鉄雄を見つめた。

「より良い手段を探しているのさ」

「手段？」

鉄雄が首を傾げて聞き返すと、木山は目を閉じ、天井を仰いだ。そのため、鉄雄には、木山の表情は見えない。

それでも、鉄雄は木山の心情が、何故だか解る気がした。

「もつと良いやり方が、必要なんだよ。誰も傷つかず、傷つけず……〈救える〉……」

木山の言葉は、だんだんと小さく、最後はただの独り言のようだった。鉄雄は、まだ上目遣いで木原を見ている。

「……先生、あんたは、焦ってんのか？」

木山は顔を上げた。

「いや……何だこりゃ、むしろ……期待してんのか……」

「島君」

木山の顔が俄かに明るくなった。

「——私の考えていることが分かるようだね？」

鉄雄は一瞬勝ち誇ったような笑みを浮かべたが、間もなく怪訝そうな顔になった。

「……さつきから、そんな気もするし、けどよくわかんねエ。勘が冴えてんのか？これも実験の成果かよ？」

「サイコメトリスト読心能力者に接するのは初めてではないのでね。ただ、先ほども言ったように、原則、一人の人間が開発で得られる能力は、一つだけだと言われているよ……原則的にはね」

木山は意味ありげに念を押した。それから、バッグからタブレットを取り出し、指を画面で滑らせてから、再び鉄雄の方を見た。

「ただね……もしかすると、君のその勘は、良い兆候なのかもしれないね」

「よくわかんねエな」

木山は鉄雄の怪訝そうな言葉を聞き、ふっと小さくた笑みをこぼした。それから、椅子に座り直し、より鉄雄と真正面から向き合う姿勢

になった。

「では、もしもだよ？君が念動力に加えて読心能力も得たでしょう！言うなれば、デュアルスキル多重能力、或いはマルチスキル多才能力ってところかな？それは、学園都市で未だ実現していない代物だ。すると——おめでとう！と、Dr. 大西が、きつとジターバグを踊ると思うよ。嬉しくて、跳び上がって……勢いで召されてしまうんではないかな？」

「あのジジイがどうなるうが、知ったこっちゃねエな」

鉄雄は顔を上げ、階上のガラス向こうを見やった。

白衣を着た何人かが見える。大西は、今は見当たらない。

「けど、この可能性については、報告しないでおくつもりだよ」

「どういうつもりだ？」

鉄雄は眉を顰めた。

「ここでの会話が全部録音されてることぐらい、俺だって分かるさ。下手に隠しごとしたら……あいつらが黙っちゃいねえだろうよ」

鉄雄は親指で白衣達を指し示した。

「まあ、この会話は、今は、君と私だけの秘密になっている」

木山は意味ありげに鉄雄に向かって瞬きした。

「ただ、カメラまでは止められなかったからね……今まで通り、普通に会話してくれないかい」

天井の片隅では、監視カメラが静かに二人を見つめている。

鉄雄はそちらを睨んでから、再び木山へと視線を戻した。そして、口を開いた。

「——何を考えてるか、頭ン中に入って来るぜ、先生」

「それは嬉しいね。では……当ててごらん？」

木山はそこで言葉を切った。微かに顔を下げ、鉄雄に促きを促した。

「……俺の、卒業式を開いてくれんのかい？」

「ああ、合格だ」

木山は、はつきりと笑みを浮かべた。

「ひとつ、やってみようじゃないか」

鉄雄がカウンセリング中に木山春生を昏倒させラボを脱走したと、敷島大佐が慌ただしい報告を受けたのは、翌日のことだった。

VI・浜面

29

7月7日 夕方——第七学区

走れ。走れ。

荒く呼吸をする度に、肺が鞭打たれるように痛む。肺が、あばら骨を今にも突き破ろうとしている。

だが、ここで止まる訳にはいかない。

もうすぐだ。もうすぐの筈だ。

曲がり角を、体を傾けて曲がろうとしたところで、外側の足が濡れていた路面にとられ、体を強かに打ち付けた。

「ホラア、遊んでんじゃね〜ぞ〜!!」

嘲り声が、けたたましい排気音と共に迫って来る。

すぐ横で、ガラス瓶がパリンとひしゃげる音を聞き、顔を上げた。

「ッ畜生!!」

両の掌を地面について立ち上がろうとすると、ピリツとした静電気のような痛みが走った。猫の爪痕のように縦方向にいくつもの裂傷ができていたが、構っていられない。

鉛のように重たい自信の体を無理やり起こして、日陰の路地裏を再び走り出した。

「クソツクソツ——なんでこんな——」

浜面^{はまつらしあげ}仕上は、自身の運命に悪態をつかずにいられなかった。

ビルとビルの間、長方形に穿たれた空は、オレンジ色に染め上げられていたが、陽の暖かい光はまるで浜面のいる路地には届かない。

重たくエンジンを鳴らしながら、数台のバイクが、浜面の両側を塞いでいる。

「お願いだよオ！勘弁してくれ——仕方なかったんだ、あいつらに

脅されて……」

「弱エなあ。ちよつと押さえつけられただけで、ペラペラ喋りやがって」

そうせせら笑って言うのは、パツパツに張ったタンクトップを着た、肥満体の浅黒い肌の男。

筈のように排気口をいくつも後ろから伸ばした、巨大なバイクを駆っている。

「お陰でこっちは、一人ビョーイン送りだ……逃がすかよテメエ」

唸るような男の声を合図に、浜面を挟撃するバイク達が、轟音を高めていく。

数日前、こいつらと対立するチームの奴らに脅されたときが、自分の人生最悪の危機だと思っていた。

たった数日で、浜面にとつての人生最悪の日は、今まさに更新されていた。

浜面の背後にいた2台のバイクが、唸りを上げて突進してくる。ただでさえ狭い路地を、横に広がってくる。浜面の逃げ場はない。

目指すべき場所へは辿り着いたのだろうか。———確証が持てないまま、浜面は、自分に襲い掛かる暴力の嵐を予感して、頭を抱えるしかなかった。

その時。

けたたましい音を立てて、上から何かが降って来た。

「なんだア!?!」

悲鳴が聞こえるや否や、甲高いブレーキ音と衝突音が、不調和にアサンブルを鳴らした。

浜面は、自分の身体がひとまず無事なことを感じると、顔を上げて周りの状況を窺った。

降って来たのは、エアコンの室外機だったらしく、バイクの1台に見事にヒットしてひしゃげていた。浜面を襲おうとした2人の内、1人は頭から血を流して、路地の真ん中にうつぶせに倒れていた。もう1人は、コントロールを失ったのか、ビルの外壁に摩擦の跡を残して倒れ、呻いていた。

「ジョーカー！上だ!!」

誰かが叫び、浜面も上を見上げた。

浜面は、安堵の笑みを洩らさずにはいられなかった。

「……駒場さん……!」

「……ここはサーカスのテントじゃない……ピエロ共」

低く、いやに無機質な声が聞こえた。

3階ほどの高さだろうか。ビルの非常階段の1面に誰かが立っている。夕焼けのオレンジを頭上に立っているその貌は窺いしれないが、遠目にも大柄な男だと分かった。

「なんだ、てめえ!」

邪魔をしてきた何者かへの敵意を剥き出しにして、肥満体の男や、その取り巻きたちが、工具やバット等の得物を手に、バイクから降り立った。

「助かった……」

浜面は誰に言うでもなく、つい口から言葉が漏れていた。

高所に現れて、弱者の危機を救ってくれる、ありふれたヒーローのように、大柄な男のを見ていた。

次の瞬間、その男は、手すりに手をかけると、ふわっと体を浮かせて、空中に躍り出た。

「え——」

馬鹿か。戦隊のレッドでもないヤツが、本気でそんな高さから飛び降りたら、ただじゃすまない——。

確かに、ただではすまなかった。

男が着地した途端、舗装された地面が、地鳴りを上げて煎餅のように砕け散った。バラバラと土くれが辺りに飛び散り、浜面は顔を覆いながら後ずさった。

「バカ野郎、なんてヤツだ——」

道化のように、鼻に丸く赤い飾りをぶら下げた男が、半ば放心した声で言った。

「ジャンキーに言われたなら、誉め言葉と受け取ろう……」

煙幕の中から、ぬっ、と男の身体が姿を現した。

でかい。浜面はまずそう思った。

2 mを優に超えているであろう、タンクトップの男よりも更に背の高いその巨軀は、安物の暗褐色のジャケットを羽織って、割れた地面の上に聳え立っていた。さながら、ジャングルの茂みから姿を現したゴリラのようだ。

10 mはあつただろう高さから落下したにも関わらず、2本の幹のような足で立つその姿は、まるで怪我をしているようには見えない。

「……お前らが外で、どこの道を散歩しようが、勝手だが……」

レシートを吐き出すように、男が言う。

「ここは第七学区だ。いつから、『クラウン』は他人の領分でラツパを鳴らすようになった？ ジョーカー……」

「駒場、テメエ——！」

ジョーカーと呼ばれたタンクトップの男が歯噛みして唸った。

「野郎ども！ タタキにしちまえー！」

「達磨の耳は遠いのか……もう一度だけ警告する」

大男がやや声色を強めて言うと、周囲から別の物音がした。

「ここは、我々の領分だ」

浜面やジョーカー達が見回すと、いつの間にか、いくつもの黒い人影が、あちらこちらのビルの窓やベランダから、こちらを向いているのが分かった。皆、銃やボウガンらしき物を構え、いつでもこちらを攻撃できる。

いつの間にか、クラウンのメンバーは、狙われる立場に落とされていた。

「きっかけさえくれれば、お前達の体はネズミに食われたチーズになる……」

そう言う大男も、銃を右手に、淀みなくジョーカー達を見据えている。

「チツ、野郎ども——退くぞ」

ジョーカーが吐き捨てると、クラウンのメンバーはバイクに飛び乗り、まだ明るさの残る通りへと急発進して消えていった。

尻餅をついていた浜面は、大きくため息をつくど、立ち上がった。「ほ、ほんと助かったっ……！駒場さん、悪い、ヘマしちまつて……この恩は一生……！」

浜面はほつとして礼を言いかけたが、すぐに言葉を飲み込んだ。

大男が、大腿にこちらに歩み寄って来たからだ。

脚が地面を踏みしめる度、石が砂粒にすり潰される音が聞こえる。ただの人間が立てる足音とは思えない。

上から狙っていた、他の仲間もいつの間にか降りてきていて、階段やそこかしこの扉から姿を現し、浜面を取り囲んでいた。

「あの——」

浜面は、首筋に冷や汗が流れるのを感じた。

「お前は……」

自分よりも、頭二つ分以上は高い大男が、ほとんど口を動かさずに見下ろして喋るのを、浜面は黙って見るのが精一杯だった。

明らかに、無償の愛を賜るような状況ではない。暗がりの中で光る男の目がそれを証明している。

何か答えようとするが、喉が干上がっていた。

大木のように眼前に塞がる男の表情の中で、黒い瞳を宿した目だけがはつきりと見える。

「騒ぎを持ち込んだからには、見返りを要求する……浜面仕上」

自分にとっての本来のリーダーであり、第七学区の無能力者スキルアウトを束ねる男、駒場こまばを前にして、浜面は、自分の危機がまだまだ終わらないことを悟った。

7月8日 昼——第一〇学区、ストレンジ

「……暑い……」

週末の土曜日。学園都市の中でも、一際治安が悪いスラム街を、浜面仕上は、額から流れる汗をひっきりなしにぬぐいながら歩いていた。

他の学区に比べ、より古い年代に建てられたビル群と、その足元に、サルノコシカケのように折り重なって軒を連ねる木造家屋。それらの間を縫うように道が張り巡らされ、人通りは第七学区の学生街などと比べると格段に少ない。時折すれ違う人は、派手な色に髪を染めたり、耳や鼻、舌にピアスを通したりしながら、大声で喚くように会話したり、或いは押し黙ったまま鋭い眼光を放つたりと、不穏な雰囲気漂わせている。両脇の建物の入り口は大抵薄暗く、違法か脱法か分からないような獣を扱うペットショップ、紛い物であろうアパレルブランド、無国籍な料理、狭苦しいカラオケ、地下へと誘うバーなど、その手の物や娯楽を欲する人々へ静かに口を開けていた。そしてそれぞれの店やその隙間の路地からは、タバコともハーブともとれない匂いが交代に漂い、この街独特の空気を作り出していた。

浜面は辺りを見回しながら、何度目か分からないが、金髪に被ったキャップのツバを摘んで、そつと下げた。

クラウンの連中に見つかからないようにするためだ。連中から命からがら逃げ出して、まさか昨日の今日で、このストレンジを再び訪れることになるとは思っていなかった。眉間に皺を寄せて、浜面は昨日のことを思い返した。

「暴走集団のボウズだ……金田。お前と同じ職業訓練校の……お前はそいつの顔を知っているだろう。連れてこい、話があるのだから……」

「待ってくれよリーダー！俺はあいつらにもう少しで腕を折られるところだったんだぜ!?それに、どこにいるかなんて分かんねえ!!友達で

も何でもねえんだ！」

「屋台尖塔辺りを根城にしているんだろう……第一〇学区なら、お前もよく知っている筈だ……」

「だって、あそこに行ったら、今度こそ俺、叩きのめされちまう……」
「お使い途中で事故にあったなら、それまでだ。また別の手段をとるまでだ

……ただし、逃げ出せば……察しろ」

「……諜報なんて、やっぱ俺の柄じゃねえよなあ」

浜面はぼやいた。

クラウンから這う這うの体で逃げ、浜面は何とか、自分たち第七学区のスキルアウトチームの縄張りまで無事に戻ることができた。しかし、本来の自分の任務は失敗してしまった。必要な情報は得られていない。失敗を取り返すため、リーダーである駒場利徳の依頼を受けて、浜面はこの街を訪れている。クラウンに見つかれば、今度こそタダでは済まないだろうし、かといって逃げ出してしまうえば、駒場から制裁を食らうのは確実だ。

事前に、プリペイド式の携帯電話を渡されており、仲間へ定期的に連絡を入れなければいけないことになっていた。連絡を途切れさせる訳にはいかないと分かっているながらも、今回の仕事は先行きが余りに暗く、浜面はため息が絶えなかった。

「……アシがあればなあ……」

免許こそ取っていないが、駒場のもとで、スキルアウトとして培った経験が、浜面にそれなりの運転の技術を与えていた。しかし、今回は車もバイクもない。自分を狙う敵の縄張りを堂々と徒歩で横切るのは、全く気が進まないものだった。

狭い裏道を使っていこうかとも考えたが、どうせならいざという時逃げられる余地があった方がいい。浜面はそう考え、なるべく目立たないように意識しながら、足早に、道の先に聳える、巨大な立体駐車場を目指した。

「……なんとかここまで来たか……」

幸運なことに、これといったトラブルもなく、屋台尖塔の一角までたどり着いた。

浜面がこれまでに耳にしていた情報が正しければ、金田達のチームの拠点は、屋台のひしめく中心のビルよりも、より外側の低層階だったはずだ。

屋台尖塔特有のスロープをいくつか上がり、いよいよ人の姿が見当たらない、廃駐車場のフロアまで来た。

駐車場内は日陰のためか、外部よりもひんやりとしている。ビルとビルの間をすり抜ける街風が、浜面の首筋の汗を急速に冷やしていく。カツン、カツン。と、浜面の靴音が反響を伴って響いていく。

「静かだな……ん？」

人の気配がせず、空振りかと思っていた矢先に、人の声が聞こえた。

男と、女の声だ。

バイクーズに女も入っていたのだろうか。浜面は、声のする方へ角を曲がって進んだ。

「——いいから、早く、それちょうだいよ!!」

「ただでやる訳にアいかねエな……分かんדרろ？」

何やら穏やかではない場面のようだ。

柱の陰から様子を伺うと、みるからに柄の悪い男が二人と、長い黒髪の女が一人。

「お金？ 幾らいるの!？」

女の方は、相当切羽詰まっているらしく、急ぎ立てて話しながら自分のハンドバッグを漁っている。

「そうだな……金もいいんだけどよ」

男の一人が、片腕を女の腰に回した。

「やっぱ……色々楽しませてくれよな……」

そう言いながら、もう片方の手を、女の尻へと近づける。

「……チツ、お取込み中かよ……」

今は面倒ごとに巻き込まれると厄介だ。浜面はそつと元来た方へ戻ろうとした。

「触るなあああああ!!」

突如、甲高くつんぎく怒声が響き渡り、浜面は思わず背筋を震わせた。

カラン

空き缶が転がるような音がしたかと思うと、バアン!!!と破裂音がした。

「ツクシヨウ!!」

「いてえええええ!!」

男二人の悲鳴が聞こえると同時に、サイレンが響き渡った。

「なんだ……なんだよ!」

浜面が慌てふためくと、鼻をつんと金属の溶ける匂いが刺した。冷たさを感じて上を見上げると、消火用のスプリンクラーが、このフロア一帯で作動したらしく、浜面は濡れないように身を縮こませた。すると、バシャバシャと足音が近付いてきた。浜面はとりあえず、手近にあった清掃用具だか何かが入っている物置の陰に飛び込んだ。

先ほど、女からんでいた男2人が、顔を覆ったり、脚を引きずったりしながら、這う這うの体でスロープを駆け下りて行った。

「……こんなボロビルでも、スプリンクラーは作動するのな」

30秒ほどたっただろうか。耳を澄ますと、サアーツという散水の音だけが静かに響いている。

金属の匂いは失せ、辺りは急に湿っぽくなってきた。他に気配はない。

「……空振りだろうな」

金田達はいない。そう判断して、浜面が物陰から出たところだった。

黒髪をぐつしよりと水に濡らした女が、目の前にぬつと現れた。

浜面は「ヒツ」と思わず声を上げ、尻餅をついた。

「……ぴーなっつ」

「えっ?」

女が、水の音にかき消されそうな声で何か呟いたのを、浜面は聞き

返した。

心臓が、早馬のように鳴っている。

「ピーナッツ……クスリ!!」

女が、へたり込んでいる浜面の襟元にギョツと掴みかかってきた。

「な、なんだよいきなり……」

「レベルを上げるっていうクスリ!!持っていない!?ちようだいよ!!今すぐほしいの!!」

女は切れ長の目をしていた。恐らく、学生だろうか。多分そう年は変わらないのだろうが、濡れた前髪が色白の顔にへばりつき、恐ろしい剣幕で浜面に縫ってきている。目はこちらを射貫いているが、妙に焦点が合っていない。

ああ、こいつは——。浜面は、この女が、もう戻れないところに行ってしまったているのだと、首を揺らされながら不思議と冷静になって考えることができた。

刺激しない方が無難だ。

「俺はさー・持ってねエけどよ——」

浜面は、自分の首元に迫る女の手を掴み、引き離すと、なるべく呼吸を落ち着かせて言った。

「——どうしても欲しいってなら、屋台尖塔の地下街なんかへ行ってみるよ……お前みたいな女でも、相手にしてくれるかもしれないねエ」

「……ほんと?」

空気の抜けるような声で、女が聞いた。

「いや、俺はやってねえから知らねえけど、あんまおススメは……」

浜面が言うが早いのか、女はハンドバッグを抱え、ぱつと立ち上がると、水音を撥ねさせてスロープを駆け降りて行った。

「……世も末だな」

誰に言うでもなく、独り言ちた。

「……今度こそ、誰も居なくなつたな」

さつきまで掴まれていたシャツの襟元を探ると、じつとりと濡れていた。

疲れた。

浜面が再びゆっくり立ち上がった所で、懐の駒場から与えられた携帯がヴヴヴと震えた。

浜面はため息をつきながら、「非通知」と表示されたその着信に出た。

「……別にさぼっちゃいねえよ」

「知ってるぜ！随分災難だったな、お前」

能気な男の声が聞こえてくる。

「……ああ、半蔵」

駒場とは全く気質の異なる、陽気さの塊のような仲間だ。浜面は辺りを見回した。

「……見てんのか？」

「はじめてのおつかいだもんな!!カメラを回しとかなきゃ視聴率はとれねーだろ！」

「いや、こんな罰則紛いの仕事してる奴を被写体にするの、やめてもらえないすかね」

「それよりさ、お前。実は、金田って奴のチーム、こっちで見つけたんだよね？来てくんない？」

「はア？そんな」

浜面は肩透かしを食らった。こっちが神経すり減らして探したというのに。

とぼとぼと歩きながら、浜面は聞いた。

「どこに行けばいいんだよ？」

「あーあー。バイクはねえ。ナンパもうまくいかねえ。おまけに鉄雄の手がかりもなーんもねえ！」

「どーすんだよオ、金田アー！」

甲斐と山形が不満を垂れた。

屋台尖塔のセンタービルと隣の建物とを結ぶ中央デッキに、金田達は居た。

先日、鉄雄がクラウンに襲撃された日以来、バイクは警備員に没収されたままである上、鉄雄は行方不明のまま、特に進展もなく、金田達は怠惰な土曜日を過ごしていた。

眼下には、休日の屋台尖塔特有の雑踏が見える。

金田は眉間に皺を寄せて黙っていた。甲斐や山形の言うように、現状では打つ手なしだ。

「おっ、見てみるよオ」

全然見てほしくなさそうな口調で、甲斐が手すりに顎を乗せて言った。

「世直し・一揆・打ち壊しってヤツだぜえ……」

眼下の、ストレンジの中でもメインストリートと呼ばれる通りの奥から、行列がシユプレヒコールを上げながらやって来るところだった。

『税制改悪断固撃滅』『無能力庶民こそ誉れ高き労働者』『中止だ中止』等と書かれたのぼりを掲げ、或いは叫びながら進んでくる。

そこから少し離れた所では、最近伸張しているという、白い衣装に身を包んだ宗教団体が、火を焚きながら何やら法話をかましている。

「あー、もしもし?」

金田は、甲斐でも山形でもない男の呼びかけに、振り向いた。

「あつ、てめえ——」

山形が指さしたその先には、先日、鉄雄とカオリが襲われた日に捕まえた、クラウンの下っ端が、バツの悪そうな顔をして立っていた。

「確かてめえ……ハナヅラ、だったっけ?」

「浜面だよ……ちよつと声落とせよ」

名を呼び間違える山形に、浜面が疲れた顔をして言った。

「なんだよ今度は! てめえらが絡んだせいで、俺たちの仲間はだ……!」

「ちよつと待て、ストップ! 頼むから静かにしてくれって! 騒いだら見つかっちゃう」

金田が詰め寄ると、浜面は帽子で顔を隠すようにして、慌てている。

どうも挙動不審だ。

「俺はもう、クラウンから足を洗った。てか、初めから奴らの仲間だったことなんてねえんだ」

「調子いいことばっかこいてンじゃねえぞー!」

「いや、マジなんだって、聞けよ人の話!」

両手を組み合わせてぼきぼき骨を鳴らしながら迫る金田に、浜面は汗を浮かべて言った。

「むしろ今は——追われてんだ。見つかったら、ひどい目に合わせられちまう」

「へえ、そりや仲がよろしいことで」

背の高い山形が、顔を寄せて威圧するように言った。

「かくれんぼの最中に、何の用だよ」

「いや、俺も全部を知ってる訳じゃねえけど、多分リーダーが知りたいのは、お前らの——」

「ちよつと顔を貸してほしーんだな!金田くん?」

いやに快活な声で、別の男が金田の背後から現れた。

気配もなくいきなりだったので、金田は目を丸くした。

男は黒地に白のポイントを入れたバンダナをまいていた。山形と同じくらい背が高く、女子受けのしそうな整った顔立ちだ。

「なにあんた……知り合い?」

「いや、知り合いつていうか……」

甲斐が浜面に聞くと、浜面はどもった。

「水臭いなく、いつもお前には世話になってますつてば!運転手さん!」

バンダナの男が浜面と肩を強引に組み、浜面は迷惑そうな顔をしている。

「……で、その仲良しさんが何の用だ?」

金田が静かに聞くと、男がにまっと笑った。

「ちよーつち話があるんだな。そう……鉄雄クンのことで」

何?!と、金田達3人が一様に顔を険しくする。

ああ、やっぱりそうだよな、と浜面は内心合点する。

「てめえ、一体ナニモンだ……」

「まあ、そう怒んなって……そうだな、ここで立ち話もなんだから、どっかでお茶でもしながら喋ろうや」

金田達の怒気を一顧だにせず、男はからからと笑いながら話を進める。

金田は余裕綽綽の優男の顔をじつと睨みつけた。

「そうか、いいぜ」

「おい、金田。こいつ怪しくねえか?」

甲斐が引き留めたが、金田は了承した。

何となく、聞いておかなければならない情報が得られると、金田の直感が働いていた。

「おう、物分かりがいい奴は嫌いじゃないぜ……俺はここにはあんまストレンジ詳しくないんだ。どっかいい場所ない?」

「そういうことなら」

訝しむ甲斐や山形、不安げにしている浜面を後目に、金田が不敵な笑みを浮かべて答えた。

「心当たりがあるぜ。ちようどいい待ち合わせ場所をよ」

——第一〇学区 ストレンジ 「春木屋」

「だから、ウチをテメエらボーズ共の待ち合わせ場所にすんじやあねえつつたんだろ！聞いてんのかア？」

スキンヘッドにちよび髭のマスターが大声で言うのを気にせず、金田達3人と、浜面、半蔵と名乗る優男、そして、浜面側のボスだという気難しい顔をした大男が、テーブルを囲んでカウチにかけている。特に大男が2人分のスペースをどっかり占拠しているので、一番広いテーブルでも大分窮屈だ。

「るせえー！——で、話つてのは——」

山形が切り出そうとした所で、半蔵が手を挙げて制した。

「まあまあ、折角、とても——あー、オシャレなどを紹介してもらったんだ。なんか頼もうぜ。なあ、駒場のリーダー？」

半蔵の言葉に、駒場と呼ばれた大男が小さく頷いた。半蔵は「お前らもいいだろ？」と言うが早いか、カウンターの方を向いた。

「おじさん！」

「お、おじさんって……」

マスターが目を丸くした。

「メニューないすか？俺ら財布と相談しなきゃで……」

半蔵が楽し気に言うのと、マスターは明らかに眉根を寄せて、染みだらけのパウチされたメニュー表を差し出した。

駒場たちのチームには、未成年タバコ・アルコール絶対禁止というスキルアウトらしからぬ鉄則があるのだという。

半蔵は幼い子供のようにコークを頼み、一方で金田達は面食らい、それから嘲笑を漏らした。しかし、くたびれたメニューと睨めっこし

ていた駒場が僅かに顔を上げ、ナイフのように鋭い視線を投げかけると、有無を言わせぬ圧を感じ、金田達は黙り込んでしまった。

「……で、はまづらさんよオ」

咳払いを一つしてから山形が話を向けると、浜面がやや身を引いた。

「このデカブツが、鉄雄のことで、俺らに何の話があるって?」

「俺にふるなよ」と言いたげに、浜面は無言で駒場を見た。

駒場はほぼ表情を変えないまま、低い声で語り出した。

「……お前達、全員無能力者か?」

駒場の問いに、金田達は顔を見合わせた。

「……能力者に見える?」

「いや、全然」

半蔵が即答した。

金田は早くも苛立ちを見せる。

「なんの話だオイ……鉄雄の話はどうしたよ」

「……俺達もそうだが」

金田の催促を気にも留めず、駒場の口調は古ぼけたプリンターが紙を吐き出すようだった。

「能力強度を、その場で即引き上げる……そんな代物の話を聞いたことがあるか?」

「なんだそりゃあ」

山形が怪訝そうに言った。

「無能力者が、急に能力を使えるようになるってか?さんざんカリキュラムを受けても、ウンともスンとも言わなかった奴が?」

「そうだ」

駒場が言う。

「6月の終わり辺りからだ……そういう噂話が、俺達の耳に入り始めた」

「俺らは、七学区を主に縄張りにしてるんだけどよ」

駒場の話に、半蔵が続いた。

「SNSだとかネットの掲示板、あとはスキルアウト同士の話の中で

な……そのブツを使って、今まで出せなかった、念動力やら火炎能力、エレクトロン オプティクスハンド電撃に光学操作。なんでもござれと、バーゲンセール。ラクチンに出せるようになったって、そう言う奴がぼつぼつ出始めたんだ」

マスターから飲み物がどかんと並べられ、テーブルにいくつか水たまりができた。半蔵が泡立つグラスを早速傾けて、話を続ける。

「最初は、根も葉もない作り話だと思ってたんだ。だが、だんだんと俺らのシマで、今までレベル0だった奴がいつの間にか能力を使えるようになって、好き勝手に始めた」

「……そういえば」

金田が顔を陰しくして、思い出すように言った。

「こないだの月曜だ。鉄雄が、クラウンの奴らに力を使ったんじゃねえかって言われたのは……」

「待てよ、クラウンの奴らは、年がら年中、そーいう売り出しをしてんじゃないか、奴等が薬ヤクをばらまく時にさ」

甲斐が金田の話を遮って言った。

「けど、あんなん嘘っぱちだろオ、薬を売り込むためのさア」

「俺達も最初は、ただのジャンキーの戯言だと疑った……レベルを一時的に上げるという謳い文句でドラッグを捌くのは、昔からの常套手段だ」

駒場が声をより低くして言った。

「お前らも知ってるだろうが、そういったドラッグの類ってのは、短い時間だけアタマをシャッキリさせるかもしんねえ。それで演算能力を上げた気になっただけだ……だが、無能力者が、何の訓練や開発もせずに、いきなり低能力者レベル1だとか異能力者レベル2に上がるってのは聞いたことがない。0と1、2の間には、どでかい壁がある。分かるだろ？」

金田達は顔を見合わせ、それから皆頷いた。半蔵も頷き返す。

「……ただ、今回は使える気になるんじゃない……使える筈のない人間が、実際に、能力を使えるようになって、俺たちは確かめただ」

「鉄雄が、その訳の分からねえ魔法の品を使ったってことかよ？」

甲斐が肘をついて言った。

「お前ら、鉄雄のことで話があるって言うってたよな？何で知ってたんだ？」

「俺達の領分にも、クラウンのピエロ共が探りを入れてきている……そこで俺たちは、逆にスパイとしてこいつを送り込んだ。奴らが今行おうとしている企みを暴くために」

甲斐に対して口を開いたのは駒場だった。親指をくいと曲げ、浜面を示す。

「え!?!」

山形が驚いて浜面へ顔を向けた。

「お前、元々このデカブツの手下だったのかよ!?!」

山形の言葉にピクリと眉を上げる駒場の前へ腕を広げ、半蔵が口を慌てて開いた。

「浜面の仕事はあくまでドライバーだ。腕つぶしが弱エって訳でもねえが、前線に出てやり合うとか、交渉に当たることがねえから、俺らの仲間だつてことは知られてないはずだと思つてさ。お前たちやクラウンの連中と近い、一〇学区の職業訓練校トレンセンの在籍つて身分も使いやすいかつたしな」

「……お前らに横やり入れられて、バレちまつたけどな」

後頭部を搔きながら、恨めし気に浜面が金田へと愚痴る。

「んなことこつちは知らねーよ！俺たちは俺たちの筋を通したただけだ！」

金田が強気に言い返した。

駒場が場を収めようと低く咳払いをした。

「ピエロの奴らは、島鉄雄という、お前達の走り仲間チームメイトを探していると言っていた……急に能力が使えるようになった、妙なヤツだとな」

「クラウン達が自分でそう言ってるんなら、今回のその、急に力に目覚めるってのは、奴らの仕業じゃあないってことか」

「そうだ」

金田が合点して言い、駒場と半蔵も頷いた。

「その、能力を上げるブツって、さつきから何べんも言ってるけど

「さア」

山形が肩を竦めて言った。

「具体的には、なんなのヨ？その便利屋さんの正体は？」

「それは——」

半蔵が言いかけた所で、 Bannon と春木屋の扉が勢いよく開かれたので、全員が一斉にそちらを見た。

汗だくで、蒼白な顔をした、髪の高い女が、入り口に息を切らしながら立っていた。

「……はるきや？」

か細く呟きながら、女が、2、3歩ふらふらしながら店内に入るのを、金田達も、他の客も、訝し気に見ていた。

「おいイなんだよあいつ……見るからにイっちまつてんじやん……」

甲斐が声を潜めて言った時、浜面は目を見開いた。

「アイツ……!!」

浜面が、昼に廃駐車場で出会った女だった。

駒場が、興味深そうに浜面を見た。

半蔵は、どこか警戒しながら女を見ている。

「何、知り合い？」

「いや、アイツは……」

金田達が浜面に聞き、浜面が何か答える前に、女はつかつかとカウンターに向かった。

「嬢ちゃん、帰んな」

マスターは迷惑そうにグラスを拭きながら言った。

「ここは嬢ちゃんに出すモンは——」

マスターの言葉を叩き潰すように、バン！と音がした。

女が、カウンターに財布を叩きつけ、小銭がじゃらじゃらと音を立てて辺りに転がった。

「——ぴーなっつ——ピーナッツー」

荒い息も絶え絶えに、女が掌を差し出して言った。

女の言葉を聞いた、周りの客がざわついた。マスターは一層迷惑そ

うに背を向けた。

「カノジヨ、やべーぜ。あの年で……」

甲斐が顔を背けながら言うと、駒場が珍しく不思議そうな表情をした。

「……彼女は、何を言っている?」

「知らねーのか、リーダーさん。ドラッグだよ」

金田が言った。

「もちろん、警備員アンチスキルに見つかりやア確実にお縄のな。だから、一見さんに売るもんじゃねエ。ここにはこのルールがある」

「あいつ……そうまでして欲しいのかよ……」

浜面は、やはりこの女が救いようのない者なのだと改めて感じた。昼に会ったときよりも、更に切迫していて、何を仕出かすかわからない様子だ。

「止めたほうがいい」

「あア?面倒だ、ほっとけよ」

浜面は真剣に言ったが、山形は無関心にグラスのソーダを飲み干した。

「多分あいつは、能力者——」

浜面の言った言葉は、周りの客の喧騒にかき消された。

帰れ!とか、馬鹿アマ!などと、女を罵る言葉だった。

女の背筋が震えているのを、浜面は見た。

「悪イが嬢ちゃん、家に帰んな——」

マスターが背中越しにそう言ったところで、女はハンドバッグに手を入れた。

「どいつもこいつも!!なんで分かってくれないの!」

女がバッグから何かを取り出して叫んだ。

「——みんなまとめて——死んじまえ——!!!」

「ヤバイ」

浜面は、女が何を掴んでいるのか、よく分からなかったが、危険を感じて頭を抱えた。

シュウウウ、と空気を吸い込むような音がして、女の手元の物が、ミ

シミシと音を立てながら、浮かび上がり、白く発光し出した。

次の瞬間——女が倒れ込んだ。

カラン、と女の手から潰れた空き缶が転がった。床にはロックアイ
スがばらまかれ、水溜りが広がった。

「半蔵」

駒場が呟いたのを聞いて、浜面は顔を上げて半蔵を見た。

真剣な面持ちで、半蔵が転がった空き缶に駆け寄る所だった。

「何が……」

「おいィ、俺のグラスがあー!」

浜面が呟いたのをかき消して、山形の声が響いた。

半蔵は、女が叫んだ直後に、空になっていた山形のグラスを引っ掴
み、女の首筋目掛けて投げ付けたらしい。

「悪い。俺はまだ飲み切ってなかったんでね……」

半蔵が、空き缶を調べながら言った。表情は、まだ油断がない。

「……何見てんだ?」

「これ」

浜面が傍まで行って聞くと、半蔵が、調べていた空き缶を浜面に渡
した。

コーヒー缶か何かだったのだろうか。ラベルは黒く焦げ付いてい
てほとんど読めない。所々に亀裂が入っており、手で潰したのは違
う、八方から力を受けて押し潰されたような形をしていた。

「洗剤かなんかを入れた手製爆弾かとも思ったが……やつは違うな」

「能力者……?」

「例の、レベルを上げるってやつか!」

山形が言うと、金田が立ち上がり、女が持っていたバッグの中身を
調べ出した。

「違うぜ」

「なぜ、そう言える……」

「見ろよ」

駒場の疑問に、金田が別の物をバッグから取り出して見せた。

ブルーハワイを思い起こさせる、人工的な青味かかった粉末が、小袋に入っていた。

「クラウンの奴らが捌いてる薬だよ。あいつらとは何度もやり合ったから、分かるぜ」

「てことは、こいつは元々薬中ヤクチュウだったってことか」

甲斐の呟きを聞いて、浜面は倒れ伏している女を見た。

「そうなのか……」

どこか哀れみが込められた声が浜面の口から漏れた。

「おい、お前ら。店で花火打ち上げるのを止めてくれたのは助かるが、なんだ、この嬢ちゃん知ってるのか？」

「知らねーよタコー」

マスターの怪訝そうな声に、金田が乱暴に答えた。

「とりあえず、そこで寝てもらっちゃあ迷惑だ。何とかしてくれ」

「……っていうか、こいつ、起きないけど」

浜面は、倒れたままの女を揺すった。

「きゆうきゆうしゃ……呼んだ方がよくな？」

その場にいた全員の視線が、半蔵に向けられた。

「……ハア？ いや、俺はあいつが空き缶をぶっ放すのを止めようと

……俺、悪くなくね？」

「噂にはなってたぜ。ドラッグを欲しがら、能力者の女学生がいるって事ことあ」

倒れ込んだ女が、駆け付けた救急隊によって搬送された後、マスタ―が呟くように言った。

倒れて動けなくなっただのは、別に半蔵が止めたからではなく、中毒症状によるものではないかと、隊員が見取っていた。

「クスリを手当たり次第に探し、ふとキれたときに、どういう力なんだか、爆発を起こして相手を圧していくってな……」

別にこの街で、若い女が溺れていくのは珍しいことじゃねえ。ただ、その辺のチンピラを寄せ付けない位の能力者が、何で薬にハマる必要があるかってことよ」

「……分かんねエことだらけだな」

金田が険しい顔をして言った。

「あいつ、どこの誰だったんだろうな。それくらいの能力者なら、ちつとは表で顔が知られてる筈だ」

半蔵が言った。

女の持っていたバッグには、空の空き缶がいくつかと、ドラッグの僅かな残りだけが入っており、身元を証明するようなものは無かった。

金田は、中身が大分減ったグラスを揺らしながら考え込んだ。

駐車場で出会ったときの様子といい、あの女は、何かのつぴきならない事情を抱えてたのだろうか。

一気に、今まで使えなかった、能力を使えるようになる……考え始めると、金田はどこか他人事とは割り切れなかった。

金田の手の中で、氷がからからと軽い音を鳴らした。

「……さっきの話の続きだが——」

山形が暫くの沈黙を破って言った。

「何なんだ？クラウンの奴らのモンとも違う、強度レベルを上げる代物つてのは」

金田達が、駒場と半蔵、浜面の方を見た。

半蔵は仲間二人と視線を合わせた後、皆に顔を向けた。

「……噂は色々だ」

駒場が、単調だが有無を言わせないような圧の込んだ口調で言った。

「ある者は、それを、ドラッグの一種だと言う。またある者は、SNSに流れてくるミーメティックな写真だとか、深層ウェブディープでなければ見当たらないファイル……画像、文字数列、音声……」

「全然掴めてねえじゃねえかよオ」

甲斐が呆れたように、頭の後ろで手を組んで言った。

確かに、このままでは、一体何が原因で、無能力者が能力を発現させる現象が起きているのか、探り当てるとつかかりも何もない状態だ。

だから——浜面は、金田の方を見た。

「それでお前らは、俺たち暴走集団バイカーズの情報が欲しいってわけか」

金田は、浜面の言いたいことを理解したらしく、小さく頷いた。

「そうだ」

駒場も肯定した。

「クラウンの奴らが言っていることが本当なら、島鉄雄という、お前達の仲間は何があったのか聞くことが、この騒ぎの元凶に辿り着く糸口になるはずだ」

「ああ、それについてはマジな話のはずだ」

そう答える金田の視線は、鋭かった。

「鉄雄がクラウンに襲われた日、鉄雄は——アイツは、様子が、変だった……」

金田の顔がだんだんと俯きがちになり、隣の甲斐が心配そうに見た。

「……アイツのことは昔からよく知ってる。けど、あんな鉄雄は見たことなかった、俺は……」

金田の話しぶりは、最後には自問自答しているようだった。そんな金田の様子を察して、甲斐が顔を上げて、駒場達の方をみて口を開いた。「……俺達、その日は警備員アンチスキルの奴とも話した。その先生も、鉄雄センセが何らかの能力を使ったのは間違いないと言っていたからな——」

「なあ、その先生って……」

半蔵が急に口を挟んだ。

「その……でかかったか？」

甲斐と山形が顔を見合わせた。

「……何が？」

「なにがってそりや、ツインのフジヤマ——」

「半蔵！無駄話は止せ」

何か慌てたように、駒場がやや上擦った声で言った。

金田が駒場と半蔵を見ると、駒場は珍しく、バツが悪そうな顔をしている。表情筋はちゃんと生きていたようだ。

半蔵はと言えば、にへらにへらと笑っている。はつきり言って、だらしかなさすぎる。

浜面が、やや呆れたように頬杖をついた。

「とにかくだ」

駒場が咳払いして言った。

「島鉄雄とこの先接触できるとしたら、お前達だろう……何が起きているのか、情報をこちらにも寄越してほしい」

「待て、何でそこまで知りたがるんだお前ら？」

山形が警戒の色を隠さず聞いた。

「さつきも言ったろ？」

いつの間にか、弛んだ雰囲気のリセットした半蔵が言った。

「スキルアウトが突然能力を持つてのは、原始人に研ぎ澄ましたナイフを与えるようなものだ。第七学区は……他のところもそうかもしれないねえが……これまで、一応のルールがあつて、その中で皆無能力者レベなりに生きてきた。今、それがめちやくちやになりつつある」

「ハッ！お前らは、欲しくねえのか？そのブツがよ」

金田が挑発するように言ったのを聞いて、浜面は自分ならどうする

か考えた。

もしも能力が使えるようになるなら……今まで、他人の尻に敷かれながら生きてきた惨めな自分から、抜け出せるかもしれない……

金田は、そんな淡い期待を抱かずにはいられなかった。

しかし、駒場も半蔵も浜面も、金田の言葉には首を振った。

「ない」

駒場の返事は、至極明快だった。

「俺達には、俺達の生き方がある。時には泥を啜り、他人の目を掻い潜って日銭を拾うような……高飛車な能力者共とは違う。奴らに相対し、見上げる程の高い壁に傷跡を付けて爪を研ぐのが、本当のスキルアウトだ」

「よっ、駒場のリーダー！」

半蔵が心から嬉しそうに囁いた。その横では、浜面が納得したように何度も頷いている。

駒場の言葉は、金田の心の底に溜まりかけていた淀みを、少しずつ澄ましていくようだった。

「ウチのリーダーさ、こんな仏頂面してっけど——」

半蔵の言葉に、駒場の視線が一瞬鋭くなる。

半蔵は構わず続けた。

「それでも、弱い者には手エ出さねえし、ドラッグもナシだ。人間ってモンを愛してるんだぜ」

「へっ、小難しいこと言いやがって」

金田の口調は悪かったが、浮かべている笑みは、期待通りの答えに満足している証だった。

「俺らだって、今更そんなもんに頼るヨタヨタじゃあねえさ——なア!？」

金田の声に、山形も甲斐も力強く頷いた。

そして金田は、仲間である鉄雄に起こっていることを明らかにしようとして、決意を新たにしていった。

そのためには、共に戦う繋がりを広げておくことは必要だ。

「だがよ、タダで情報をやるって訳にはアいかねエな……」

金田が、不敵に笑みを浮かべて駒場達を見た。

「……」

「……」

金田も駒場も、暫しの間、無言で視線を丁々発止した。

「……3分の2だ」

「……もつとだ」

「……4分の3」

「ケチらないでいこうぜエ、リーダー？」

「半蔵。俺とお前とで折半だ」

「えエ!? そりやないっすよリーダー!」

金田と駒場の交渉に突然巻き込まれた半蔵が、情けない悲鳴を上げた。

「リーダーが全部払ってくださいよ!」

「ダメだ……先月のマンホールで得た金は尽きた」

「おい、浜面君! お前も出せ」

「いや、俺水しか飲んでないっす……」

「どうなんだ!? 払うのか? 払わねエのか!」

金田が痺れを切らしたように啖呵を切った。

駒場の額から、汗が一筋流れた。

「……」

「……」

「……払う」

「いいぜエ、おともだちになろうじゃねえか……」

「ああ」

交渉成立らしい。半蔵は諦めたように顔を手で覆って、天を仰いだ。

金田が連絡先を交換しようとして携帯電話を取り出す。

「今日突然出会った同士で、共闘かー、燃えるねえ」

「案外、収穫はでかいと思うぜ。浜面だけじゃ一〇学区にまでなかなか顔は利かねえ。いざとなったら、お前らバイクチームの力を借りる

かもしれないぜ！」

「あくまで、俺らの顔を立ててくれよな？」

甲斐と半蔵がクツクツと笑い合った。

その様子を見ながら、この二人は気が合いそうだなと浜面はふと考えていた。

「浜面君もなかなかだぜエ？」

半蔵が笑いながら肩を叩いてきたので、浜面は思わず身を竦めた。

「お前らはバイク専門？ かもしんねえけど、こいつは4ツ足、トラツク、とにかくタイヤが付いてるものなら一通りいける！ 俺が保証するぜ」

「へえ？ ひよつとして、重機なんかもいけちゃう？」

山形が興味を惹かれ、浜面へと顔を向ける。

「あ、ああ、昔、建設現場で親方がやらしてくれたことがあつてき——」

浜面が口ごもりながら答えると、山形がぱつと顔を輝かせた。

「そりゃいいじゃねえか！ ちよつと仕事頼まれてくんねえ？」

「何だよ、急に」

「いや、最近先輩のつてで貨物倉庫を一つ貸してもらえたんだけど、そこでき——」

山形たちが、その倉庫で何を企んでいるのか、浜面が知ることはなかった。

「おい」

一同の弾む会話が、金田の不機嫌そうな一声で静まったからだ。

「何してんだよ」

金田は訝しげに駒場を見つめている。

……様子が変だ。

駒場は、巨大な掌に、ちよこんと携帯電話を乗つけて固まっている。「どした？」

「いや、こいつ、さつきから……」

甲斐の訝し気な声に、金田が返した。

駒場は、もう片方の手の人差し指を画面の上に浮かせたまま、固

まっている。

「おい」

不意に、駒場が顔を上げて言った。そして、金田に向かって、携帯電話の画面を突き出した。

「どうやるんだ？」

——某所 薬物依存回復支援施設

木山春生は、非常灯に薄暗く照らされた廊下を歩いている。

患者の精神ケアを目的とした施設は、日中であれば、ふんだんに採光できる造りになっていたが、消灯後のこの時間帯では、頼りない薄緑色の灯りしかなかった。

人によっては恐怖心を煽られるであろうその廊下を、木山は静かに、しかし迷いなく進んでいく。

『面会謝絶』と表示されたとある病室の前で木山は立ち止まり、暗証ロック端末に、手をかざした。

すると、端末がひとしきりノイズを発した後、沈黙した。

木山は取っ手に手をかける。ほとんど音も立てずに、ドアがスライドして開いた。

病室では、ブラインドが下げられていないのだろうか、窓のカーテン越しに、月明かりが柔らかく差し込んでいた。その明かりが、ベッドを照らし、そこに一人の患者が眠っていることを、黙しながら語っていた。

「教職員緊急メールを見たんだ。最近登校していないそうだが、まさかドラッグ中毒になってこんなところに入院しているとは……みんな心配しているよ、きつと」

木山はベッド脇の椅子に腰かけて、優しい声色で言った。

ベッドの人間は、布団を被ったまま、身じろぎもしない。窓辺を向いて横たわっており、枕に乗せた頭から、長い黒髪が、白いベッドへ

いくつもの川筋を作って流れ出ていた。

「元々大能力者^{レベル4}である時点で十分恵まれているだろうに……どんな事情があつて、そこまで高みを目指しているのか、詳しいことは知らないがね……」

木山は、持ってきた紙袋から、一束の花と小さな花瓶を取り出し、窓辺に生けた。

そして、紙袋を、病室の机の上に置いた。

「……きつと、君の助けになるものを届けたよ。お見舞いさ」

木山は薄く笑うと、立ち上がって出入口へと戻っていった。

「お大事にね。釧路君。」

木山が病室を出て、扉をすつと閉めた時、ベッドに横たわる釧路^{くしろ}帷子^{かたびら}は、充血した切れ長の目をあらん限りに開いていた。

そしてぼつと起き上がり、先ほどまでの静寂が嘘のように荒い息をつきながら、紙袋をガサツと逆さにした。

ベッドの上にぽとんと落ちた携帯型の音楽プレーヤーを、月明かりが照らし出していた。

VII・初春

333

7月10日 夕方 —— 第七学区 柵川中学校

「初春の奴、おっそいなー」

佐天涙子は、生徒玄関で、友達と待ち合わせをしていた。

毎月1回、月曜日の放課後、教職員が会議を行っている裏で、ジャッジメント風紀委員は定例会を開いている。そのため、部活動は休みだ。

他の曜日なら、アケミ達と帰っても良かったが、月曜日は彼女達とは都合が合わない。

涙子は、自習室で今日の分の宿題を済ませてしまった。

今日は一日を通して曇り空で、予報によると、もうすぐ雨が降り出すらしい。

世界有数の演算機能によって極めて高い精度を誇る学園都市の天気予報は、言ってしまうえば、ほぼ完璧な予言のようなものだ。天気が崩れることは確定的だろう。

「早くしないと、雨降られちゃうけどな……」

佐天が、窓の外に見える灰色の空模様を眺めていると、ポケットで携帯電話が震えた。

「——あつ、カオリさん……!」

先週の終わりに、連絡先を交換した、3年生のカオリからだった。

涙子の顔が綻んだ。結局、直前の週末には会えなかったが、向こうから連絡をくれたのは初めてだった。

「もしもし?カオリ先輩?」

『——ああ、佐天さん?今どこ?』

外にいるのか、重機の機械音のような雑音が聞こえて、相手の声は聴き取りづらかった。

「やだなあ、涙子でいいって言ったじゃないですかあ、センパイ!」

『そっか——そうだったよね。で、今どこにいる?』

「アタシですか? 1年の生徒玄関ですけど?」

初春のやつ、風紀委員の会議まだ終わんないらしくて……待ってるんですけどねー」

『そう、風紀委員が会議なんだあ』

やや念を押すような言い方が、佐天には引つかかった。

「?——初春に用でしたか?」

『ううん、違うの。なら、……ちよつと手伝ってほしいことがあるんだけど』

「お手伝いですか? あたしにできることなら!」

頼ってもらえることが嬉しく、涙子は電話しながらはにかんだ。

『良かった——玄関にいるなら、靴履いて、外から体育館の方来てくれる?』

「体育館……ですか?」

涙子は外の空を見て聞いた。鉛色の空だ。

「もうすぐ雨降るらしいですよ?」

『そ!だから、急い方がいいでしょ?』

ドドド という音が時折強烈に混じったため、涙子は携帯電話に手を翳して、よく聞き取ろうとした。

『一人で来てね! 急いでね!』

「えっ、何ですか——切れちゃった……」

涙子は、何も言わなくなった携帯電話を見つめた。

——意外に、カオリさんよく喋るんだな。電話だからかな?

「……なんか、急いでるんかなあ」

ひとまず、まだ会議中であろう初春に短いメールを送り、靴を履き替えた。

念のため、傘を手に、涙子は玄関の外へ歩き出した。

校内の別の場所にある風紀委員の活動室では、初春飾利が参加する

風紀委員の定例会議がもうすぐ終わろうとしていた。

「最後に付け足し——体育館東側の通学路で、今日から始まった下水管の工事ですが、工期が当初の予定より2週間延びるそうです、各自明日朝のH R^{ホームルーム}で、クラスメートに周知しといてね。

他に動議がなければ、以上で終わります」

柵川中学校の風紀委員長である、3年の女生徒の一言で、その場のメンバーが、お疲れさまでした、と動き出す。

初春も鞆に荷物をまとめ、部屋を出ようとし——立ち止まった。

「あの——いいですか？」

「なに、初春さん？」

ラップトップ端末のディスプレイに表示されていた資料を操作しながら、委員長が答える。

「先輩——こないだメールで送った、3年のB組の人の件ですけど」

一瞬、委員長は手を止めた。それから、端末をパタンと閉じる。

「ええ、彼女のことなら、大丈夫。教職員の生徒指導会議に上げるよ、私から要請しておいたから」

「あの——私達にできることは？何か無いんですか？」

「……どういうこと？」

「えっ」

委員長は初春の方を見て、怪訝そうに言った。

声色は優しくかったが、なぜか初春は言葉に詰まってしまった。

「現行犯で抑えれば別だけど——今の段階では、恐喝の疑いに留まるからね。初春さんが言った通りのことを、先生方に報告する。これでひとまず十分でしょ？」

ほら、もうすぐ雨が降るから、帰りなさい。私は、職員室に報告にいかないよ——」

「かつ、カオリ先輩は!!」

部屋を先に出て行くこうとする上級生を、初春は言葉を詰まらせながら引き留めた。

「今回が初めてじゃないって、前からだったって……知ってたんですか？」

「それは……」

委員長は、背中を向けたまま、押し黙った。

「でも、今からでも何かできるなら……先輩、同じ3年生なら、カオリさんに——」

何をしてほしいのだろうか？声をかける？慰めてもらう？

初春は、自分が何を言いたいのか、自分でも分からなくなっていることに気付き、口を真一文字に結んだ。

だが、自分はカオリさんと約束した。力になる、と。

頬が熱くなるのが分かった。顔を上げて、委員長を見ると、彼女はなぜか扉を閉めていた。

室内には彼女と、初春だけしかない。

委員長が顔を振り向かせて初春の方を見た。困ったような、憤慨したような、何とも言えない表情だった。

「……私も盗られたの」

「え……」

初春は、予想外の返答が来たことで、言葉を失った。

「先月のこと。ちよつと目を話した隙に、財布をいつの間にかね。すごく、嫌だった。」

しかも、その日は、彼女、珍しく学校に朝から来てたの」

「でっでも——！」

初春は抗議の声を上げた。

「それだけじゃ、カオリ先輩が人の物を盗った犯人だってことには——」

「初春さん。同じように訴えてる人は、私だけじゃないんだよ」

「でも、それでも——」

「あなたが言ったことが正しかったとして！」

委員長が、感情を露わにして言ったので、初春はびくつと肩を震わせた。

「学内のみんなは、きつと同情しない。寧ろ、彼女への風当たりが強くなるだけだと思う。……なんで風紀委員に庇ってもらってるんだって」

「そんな……」

初春は、何を言えればいいのか、もう分からなかった。

「……ごめん。もう、いいかな」

言うが早いのか、委員長は再び戸を開け、今度こそ外へ出て行った。後には、初春一人がぽつんと残された。

「カオリさん……」

初春の胸に、どうしようもない無力感が、重石のように落ち込んだ。同じように、顔を俯かせずにはいられなかった。

(こう見えて、私、風紀委員なんです！)

違う。初春は、自分のことを責めた。

全然、失格だ、私——。

初春は、腕章に片手を当てて、立ち竦んだ。

その時、鞆の中の初春の携帯電話が、着信があったことを知らせた。初春は目を擦り、メールを確かめた。

「——佐天さん」

部屋の窓の向こうでは、墨で塗り重ねたような空が広がっていた。

「体育館って言ってたけど……」

涙子は、カオリからの電話を受けて、校庭を横切って歩いていた。

ドドド——という、重たい金属音が近付いてきた。

そういえば、今日から学校の近くで、道路工事が始まるって言ってたっけ。

曇り空の下、いつもよりも更に薄暗い体育館の裏手に近づくと、一人の女子生徒が立っていた。

「……カオリせんぱい……?」

じゃない。

「1年の、佐天涙子だね？」

気弱そうな女子生徒だったが、涙子はハツとして後ずさりした。カオリをトイレで脅していたグループの一員だったからだ。

女子生徒が、唐突に涙子へと近付いてくる。

「来て」

「でっ、でもわたし——」

「いいから」

乱暴に腕を引っ張られ、嫌々ながら涙子は裏手へと連れ込まれた。角を曲がると、そこは建物と倉庫に囲まれた、行き止まりだ。

「ユミコ、連れて来たよ」

カオリを脅していた、背の高い上級生が、ニヤニヤしながら涙子を見た。

「良かった、いい子じゃん、素直に来てくれるなんて」

手には、熊のキャラクターのストラップが付いた携帯電話が握られている。

「ちようど、今、いいとこなんだ」

涙子は、思わず口に手を当てた。

髪も制服も乱れた、泣きそうな表情のカオリが、行き止まりの壁にもたれかかってこちらを見つめていた。

「せ、先輩……」

「そ、カオリ先輩」

ユミコと呼ばれた、リーダー格の3年生が、小馬鹿にしたように涙子に言った。

「まさか、アンタのことをパイセン呼びわりしてくれる後輩がいたとはね！まあ、アンタの声を聞き分けられなかったようだけど！お耳が悪いのかな？」

ユミコが、背中を壁にもたれかけたカオリに向かって、意地の悪い笑みを浮かべた。片手には、カオリの携帯電話を掴んでいる。

涙子は辺りを見回した。ここは袋小路で、自分とカオリの他には、上級生が4人。さつき、自分を連れて来たユキという3年生を含め、涙子の背後は、いつの間にか3人が固めている。

おまけに、すぐ脇の石垣の上にある道路では、重機を使った掘削工事が行われているらしく、ここで大声で会話したところで、離れた所には聞こえそうにない。

涙子は、自分が誘い込まれたことに気付いた。

電話してきたのはカオリではない。なぜ自分は、そんな事にも気付けなかったのだろうか。

情けなさや悲しさと、今、目の前で起こっている状況に対する恐ろしきとで、涙子は心臓がばくばくするのを感じた。

「るいこ、ちゃん、ごめん……」

力無くカオリが言ったのを聞き、涙子はますます不安になった。

口元を殴られたのだろうか、青痣がはつきりとできており、唇の端からは血が垂れていた。

「そんな……どうして！」

涙子の胸に、急にこみ上げるものがあり、叫ばずにはいられなかった。

「どうして、こんな事するんですか!!」

「どうしてかって? アンタ、何も知らない訳ないよね?」

アハツ、と笑いを漏らしながら、ユミコがカオリの携帯電話を弄びながら言った。

「——まあ、世間知らずの1年生に、先輩として教えてあげようじゃん。」

うちの学年はね、入学した時から、物がよく無くなるんだよ。始めはシャーペンやら筆箱やら、教科書やら……それが、だんだん金まで消えるようになった。

不思議なことにね、物が無くなる日には、決まってこのチビの不良女が学校に来てるの」

ユミコが、座り込むカオリのスカートの裾を、グリグリと踏みつけた。カオリは、俯いたままだ。

「クラス替えしても、3年生になっても、それは続いた……だったら、犯人に制裁して、金を取り返すのが、筋ってもんじゃない?」

「そんな——証拠もなしに、そんなこと……」

涙子は、今にも恐怖で涙が溢れそうになるのを必死で堪えながら訴えた。

「……そつ、そんなに困ってるなら、ジャッジメント風紀委員に言つて……」

「へえ、あのカタブツ達に?」

ユミコがせせら笑った。

「言ったところで、どうにかなった? ならないよねエ、ユリ!」

急に名前を呼ばれたユリが、ひうつ、と声を出してユミコの方を向いた。

「あんた、こないだ財布盗られたっしょ?」

「あ、うん、なくなった」

「風紀委員に言つた?」

「それは、その……」

「言つて、あいつら何かしてくれただ? 金が戻って来た!? ユリ!」

「えつと……」

ユリは、誰とも視線を合わせない。地面ばかり見ている。

「お金は、そのまま……」

「ほおーら」

ユミコが満足気に、涙子の方を見た。

「あいつら、自分の目の前でコトが起こんないと、所詮は何もできないんだよ。」

先生達だってそうだよ！泥棒学年なんてあたしたちのことを呼んでる位だからね……何回授業を潰してお説教の時間を作ろうが、ドクトクの話聞かせようが、終わってないんだ！教師だって解決できないんだよ……そうだよ、みんな!？」

同意を求めてくるユミコに対して、ユリや他の上級生が、引きつった笑い声を出す。

たつぷり語り聞かせてくるユミコに対し、涙子は返す言葉が見つからなかった。不安が膨らみ過ぎて、喉元でつつかえてしまっているようだ。

そんな涙子の様子を目ざとく察して、ユミコが顔を寄せてくる。

「あんた、いるんでしょ？風紀委員のオトモダチ」

涙子は顔を上げて、目を見開いた。

「試しに呼んでみたら？あのお花畑の子をさ……助けてくれるかなあ？」

初春のことを、何で知っているんだろう。

ユミコの言葉に、涙子はポケットの携帯電話に手を伸ばして、しかし動けなくなった。

初春は、助けを求めれば、多分来てくれる。

でも、初春一人が来たところで、この上級生多数に囲まれる状況で、何ができる？

それとも、風紀委員の他の先輩や、先生を連れてきてくれるだろうか。

だとしても――

助けてくれるのだろうか？

カオリさんを。

いや、わたしを。

涙子は、顔を腫らせたカオリに一瞬目を向け、それから目を瞑った。そうだ、考えてみれば、変な話だ。

たかだかここ数日で知り合ったばかりの、学校にまともに通えていない他学年の人のために、なぜ自分はこんな追い込まれているんだろう。

私は、関係ない。

関係ないじゃないか。でも……。

冷静に考えようとすればするほど、不安や疑念が次々と湧いてきて、涙子はどうすればいいのか分からなかった。

「そうだそうだ……別にあんたみたいなの1年生を呼んだのは、嫌みを言うためじゃあないんだよ、ウン」

勝手に自分で自分に相槌を打ちながら、ユミコは改めて涙子を見据えた。

カオリが、不安げな表情で顔を上げた。

「アタシたちは、盗んだ金を利子付けて返せて、コイツに言ったんだけど」

不快な物を見る目で、ユミコはちらりとカオリを見、それからまた涙子に視線を戻した。

「払えないっつーんだよね。でさ、聞くところによると

佐天涙子ちゃん。あんた……コイツの友達だって？」

「えっ……」

涙子は、喉がカラカラなのを感じて、ごくりと唾を呑みこんだ。

友達、だっけ。

涙子は再び目だけ動かしてカオリを見る。カオリが、何かを訴えるように首を振っている。

「……代わりに、払ってくんない？」

「ユミコ、それは……」

ユリが、あんまりだ、というように言いかけたが、ユミコは一顧だにしない。

「どうなの？ねえ!？」

「あつ、あたし——」

友達になりませんか。

誰がそう言ったんだっけ。

ああ、そうだ。涙子は思い出した。

私だ。私が、カオリさんと、友達になるって……

でも——

目の前で、期待を隠さないでいるユミコの顔を直視できず、涙子は目を瞑った。

そして、口を開いた。

「わたし——」

「違うよ」

カオリがはつきりと言った。

涙子は、はっと目を開けて、カオリを見た。

上級生たちも、カオリを見ていた。

カオリは、背中を壁に擦りながら立ち上がり、傷ついた顔を上げた。

血が一滴、カオリの顎で玉を作り、土に落ちて、染みていった。

「その子——友達でもなんでもないの。あたしが勘違いしたただけだから」

「ダメ——」

涙子は息を吸い、目一杯叫ぼうとした。

けれども、口から零れたのは、自分でも信じられないくらい、震え、掠れた弱弱しい音だった。

なんで？驚いて自分の首を抑えると、その指が震えているのが伝わって来た。

「アハッ！」

ユミコが、顔を歪めて、腹を抑えて笑い出した。

「アッハッハッハ!!そうー!そうだったんだあ!」

残念だったねえ、おともだちになれなくて!涙子ちゃん!それとも——その方が良かったのかな?」

そんなことはない。涙子はそう言いたかった。

私は、カオリさんと約束した筈なのに。

どうしようもない敗北感が、涙子の心を、体を満たしていった。

「じゃあ、この場でゼーんぶ、払ってくれるんだよね？」

「ユミコ、もう——」

立ち上がったカオリにユミコが詰め寄り、ユリが何事か言いかけた時だった。

「やめてください!!」

その場にいる全員が振り返った。

カオリも、もちろん涙子も、声のした方を見た。

「風紀委員です!」

初春飾利が、そこに居た。

ポツリ、と、雨が少しずつ降り出した。

「——チツ」

ユミコがあからさまに舌打ちをして、涙子を睨みつけた。

「なんだ、呼びやがったのかよ、アンタ……」

「初春……ッ!」

涙子の口から、やっと声が出た。

小さな、けれども決然とした初春の姿が、なんだかとても頼もしく見えた。

「恐喝は校則違反であり——犯罪です。今すぐ、やめてください!」

初春は、小さな歩幅で、けれども堂々と、涙子達のほうへ歩いた。涙子の後ろを塞いでいた上級生3人が、初春の前を塞ごうとする。

「どいてください」

初春が、自分よりも背の高い3人を前に、きっぱりと言い放った。

「いや、先輩3人前にしてや……」

「ごによごによと、不満げに1人が言い始めたが、初春はその上級生の前に進み出る。

「ちよつと、あんた——」

「どけって言ってるんですよ」

ローファアの爪先同士が触れ合うくらいの位置から、初春が相手の

顔を見据えて言う。

言葉には、有無を言わせぬ力が込められている。

「金、金、金ばっかりの成金に頭下げてばっかりの弱虫が、寄ってたかって、1年生を脅そうっていうんですか？」

「おい、口の聞き方！」

ユミコが初春の物怖じしない言動に憤慨して、カオリの横から唸った。

3人の上級生は困惑して顔を見合わせた。

そして、ユキが目を伏せて、一步横へ退いた。

「おい、ユキー！」

ユミコが怒って名を呼ぶが、ユキは俯いたままだ。

涙子には、その下を向いた口が、「ごめん」と呟くように動くのを見た。

残りの2人の上級生が戸惑って突っ立っている。その内に、初春が構わず間を歩き進んだ。

初春がユミコの前に立つ。

カオリが、不安げな顔で初春を見つめる。

ユミコは横を向き、チツ、と苛立って舌打ちする。しかし、すぐさま笑みを繕って初春を見下ろした。

「へえ。それで？」

ユミコは、まだ余裕を保っていた。

「それで、どうすんの？風紀委員さん」

「ここでやめてくれれば、事案を上報告するまでです」

初春が答えた。

「けど、そうでなくても……いや、やめなさい」

「何？」

癪に障ったように、ユミコがドスをきかせた声を放った。

「おい、1年生、脳ミソお花畑かよ。なめてんなら——」

「あたしは——！」

涙子のすぐ隣まで来て立ち止まり、初春は叫んだ。

初春の大きな瞳が、涙子を見た。

怒りか、悲しみか——涙を目一杯に浮かべている。

それから初春は、カオリを見た。

「あたしは、自分の友達が、傷つけられるのを、許さない！」

猛然と走り出し、初春は両手を伸ばし、ユミコのブラウスを掴んだ。

「何すんだ、てめえ——」

初春は、自分よりずっと背の高い上級生を、ドンと体育館の壁に押し付けた。

何度も、押し付けた。

「だから、今すぐやめろおお!!」

初春の必死な叫びが響き渡った。

「こいつ……!」

ユミコが手を伸ばす。

「もう、やめようよ!ユミコ!」

初春の頭の花飾りにユミコが触れかけた所で、ユキが大声を出した。

取り巻きの他の2人も、流石に初春の叫び声で焦ったのか、落ち着かない様子だ。

雨が、ぱらぱらと徐々に勢いを増している。

「……ふん」

ユミコは、初春の腕を振り払うと、角の出口へと歩き出した。

「……行くよ」

ユミコの言葉を聞いて、上級生たちはぱらぱらとその場を後にした。

途中、ユリが何とも言えない表情で振り返って、涙子達を見たが、何も言わず、結局去っていった。

「……佐天さん、カオリさん」

仁王立ちしていた初春は、ぽつり、優しい声色で言った。

「初春う……」

涙子が、ふらふらと初春に歩み寄った。

カオリは、服の汚れを手で払い落とし、乱れを直した。

「あたし、あたし……」

涙子は、自分より小さな初春の両肩に手を食い込ませ、俯いた。いいんです、佐天さん。と初春が小さく呟き、佐天の片方の手に、自分の両手を重ねた。

カオリが、2人の横を通り過ぎていく。

「……カオリ先輩？」

初春が、カオリの方を振り返って声をかけた。俯いていた涙子も、そつと顔を上げた。

カオリは、立ち止まったが、こちらを見ない。

背中が、ひどく砂や埃で汚れている。

「ごめんね」

ほとんど聞き取れない位の声だった。

「どうして、謝るんですか」

初春が言った。

カオリが少しこちらを振り返った。憂いに満ちた表情だ。

「2人とも、友達になってくれて、嬉しくなって

でも、今日みたいに、やっぱり、巻き込んだらうんだなって」

「そんなこと——」

「ありがとう、でも、やっぱりごめん」

カオリが、足を早めてその場を去っていく。

いつの間にか、工事の音は止み、代わりに雨の音と匂いが辺りに充満していた。

「初春……あたし、怖かった」

佐天の顔を、初春は見た。

雨なのか涙なのか、その顔はぐしゃぐしゃになっていた。

「カオリさんと、友達になるって言った筈なのに——」

「佐天さん！」

初春は、弱気になっている佐天を一喝した。

「追いかけますよ」

「えっ？」

「カオリ先輩を!!」

ぐいっと、初春は佐天を引っ張り上げ、グラウンドへ連れ出した。

「先輩を……」

「当たり前です」

初春が手を離すと、佐天は相変わらず泣きそうな顔で、しかしちゃんと初春の横に付いてきた。

「私達——友達ですから」

約束したから。

雨音を描き分けて進む初春の頭の中に、看護師の言葉が蘇っていた。

（あの子の支えになってほしい……普通の友達のように）

もちろん、やってやる。

初春は、自分自身をそう奮い立たせた。

どれくらい歩いただろうか。

カオリは、気付けば第七学区の学生街をふらふらと歩いていた。

暗くなる時間帯で、しかも雨とあって、辺りの人通りはまばらだった。

雨足が強まり、地面を踏みしめる度に、ローファーを履いた足が冷たかった。

ふと、カオリが顔を上げると、行く手に、誰かが立っていた。

傘を差さず、眼鏡を掛け、ヘッドフォンを身に付けた、学生らしき少年が立ち尽くしていた。

雨の中、カオリは、先に立つ男のを見ていた。

ワイシャツにスラックスという、夏のこの時期らしい学生の服装をしている。背丈からして高校生だろうか。やや茶色がかった髪は額に張り付き、眼鏡は雨に濡れ、表情は何えなかった。

カオリは、2、3歩、近付いた。

「……なんだよ」

声はほとんど聞き取れなかったが、男子学生の口の動き方からして、多分そう言った。

「……べつに……」

「その服」

先ほどよりもはっきりした声で学生が言ったので、カオリは顔を上げた。

「柵川中学……」

「え、あ、はい」

「そっか……いや、ただ、僕、その卒業生だっただけだから。……あ、別に、君が誰かとか、知らないけど」

詰まりながら話す学生の顔を見て、カオリは眉を上げた。

目の上が腫れ、乾いた鼻血が鼻の穴少し覗き、明らかに殴られたような見た目をしていたからだ。

「あ、そうだよね」

何に気付いたのか、男子学生が顔を背けた。

「こんなやられた顔の男に声かけられたんじゃあ、不審者だよな……」

「あの！」

恥ずかしそうに、歩き去ろうとした学生の背中に向かって、カオリが声をかけた。

「えと、だい……じょうぶ、ですか？」

男子学生は一息つくくと、振り返った。

「大丈夫かって、そりゃあキミ——」

彼は、カオリの顔を見て言った。

「キミの方こそ、……大丈夫なの？ その顔」

「えっ」

カオリは自分の顔を触る。

濡れた指先が唇の端に触れると、チクリと針を刺すような痛みを感じる。

「あつ、そっか……私、殴られて……」

「殴られた？」

脱力したように、男子学生が言った。

「そりゃあ、僕も同じだ」

お互いに顔を見合わせ、そして、笑った。

「ぼ、僕ら……似た者同士かな？」

「そう……かな」

「ご、ごめん、気持ち悪いこと言って……」

「いえ、別に」

雨の中、二人はクスクスと笑う。

「誰も、助けてくれなかったろ？」

学生の一言に、笑うのを止めて、相手の顔を見た。

悲しそうな顔をしていた。

「いつもこうだ……僕が、金を雀り取られる時、ほんとに来てほしい時に限って、ジャッジメント風紀委員の奴らは居やしない……ほかの人間だってそうだ。見て見ぬ振りしてんだ……！」

学生の手は、ぎゅっと握られ、震えていた。

カオリは俯いた。

舗装路に打ち付ける雨の音が、ホワイトノイズになって、辺りを満たしている。

「あたし、でも——」

「カオリさくくくん!!」

カオリが言いかけた所で、自分を呼ぶ声が聞こえた。カオリが振り返る。

パシヤ、パシヤ、と水溜まりを踏み飛ばす音が近付いてくる。

「……そうか、君は、ひとりじゃあないんだね」

「えっ?」

学生が冷めた口調で言い、カオリから遠ざかっていく。

「良かったじゃあないか」

雨のカーテンの向こうへ、白いワイシャツ姿が消えていく。

カオリは、何も言えなかった。

入れ違いに、初春と佐天が駆け寄って来た。

「二人とも……」

「ごめん、カオリさん!!」

ハア、ハア、と息を切らし、膝に手を突きながら、佐天が声を振り絞った。

「あたし、あたし、友達になるって言ったのに……!あの場で、怖くなっちゃって……あなたの味方に、なれなくて……」

ほんとうにごめん!!」

頭を下げて、必死になつて佐天が言う。

長い艶やかな黒髪の前から、雨水がポタポタと落ちていった。

「私も……」

初春が、目に涙を浮かべて言う。

「風紀委員の癖して、うまく、上級生に、言えなくて……」

でも、でも!」

初春は目を擦って、カオリの細い手首を掴んだ。顔を仄かに紅潮させて語り掛ける。

「苦しいのに、苦しまされているのに——それを、自分独りで、ボロボロになってまで、背負い込もうとしてるのを、黙って見てられるほど……私は強くない!」

だから——巻き込むだなんて、言わないでください!

苦しい時は、頼ってください!私一人だって、あなたの味方になつてみせます!」

「初春さん……」

カオリは、自分に必死に訴えかける初春の姿に、言葉に、熱いもの

がだんだんどこみ上げるのを感じた。

「あたしも」

ぼつ、と涙子が傘を開いて、3人の頭上に掲げた。

雨が、バツバツとポリエステル生地にぶつかる音が、3人の空間を跳ね回った。

「初春だけじゃない。私だって、次こそ、逃げない……カオリさんの力になります。変わってみせます！」

初春は確かに風紀委員だけど、ちっこくって、華奢で、……ちよつと頼りないから」

「今そんなひどいこと言います？佐天さん！」

さつきががんばったじゃないか、と顔をますます赤くする初春に、涙子はえへつと笑顔を見せた。

「けど、アタシ達……きつと、もつとちゃんと、いい友達になれる、ね、カオリさん！」

涙子がカオリの左手を握り、初春が右手を握った。

雨に濡れた二人の手は、とても温かかった。

「ありがとう……二人とも」

もう、カオリも我慢が出来なかった。

両の目から、はらはらと涙が零れて、雨と混じり合っていた。

初春と涙子が、カオリの顔を見て笑った。

「本当に、ありがとう」

カオリも笑った。

「——ほら、早く帰らないと、風邪ひいちゃいますよっ。」

「カオリさん！あたしと初春、ルームシェアしてるんですけど、近くなんです！寄っていきませんか!?あったかいもの3人で食べましょうよ！」

「えっ? いいの?」

二人に背中を押されて、カオリは歩き出す。

「寮監にどやされないように、遅くならない内に行きましょうよ！」

「そそっ、初春、シャワー貸してもいいよね?あたしら体の芯まで冷え切っちゃったよー」

「いいですよー！何作りましようかね？」

確かに、雨にすっかり濡れてしまった。

それでも、カオリは、手を繋ぐ二人から、いつばいの温かさをもらった。

——鉄雄くん。

カオリは、行方不明の想い人のことを心の中で呼んだ。

——わたし、初めて、……「友達」ができて、幸せだなんて思えてるかもしれない……。

いつの間にか、辺りは夜が包み込み、街灯は、路面に弾ける雨粒と漂う霧に反射して、ふわりと辺りを照らしていた。それは、一面に、光る紫陽花が咲いたようだった。

雨が降りしきる暗い道を、一人の男子学生が歩いていく。

「——風紀委員め……」

先ほどすれ違った女生徒二人。その内の一人は、片腕に腕章を付けていた。

あの腕章を付けた連中が、嫌いだった。

正義を振り翳す割に、自分を全く助けてくれない奴らが。

「いつか——いつか、復讐してやる……！」

大きな力を僕のモノにして、いつかきつと……!!」

歯を食いしばり、介旅^{かいたびはつや}初矢は、街明かりの向こうへと雨夜の道を歩き去っていった。

同時刻——^{アーミー}軍本部、ラボ

カウンセリングルームを出た島鉄雄は、廊下をまっすぐ走り、非常階段を駆け降りた。

途中、警備兵が感付いて追いかけてくるのが分かったので、鉄製の重い扉を能力でひしゃげさせ、足止めにした。

薄暗い階段をひたひたと降りながら、鉄雄は、つい先刻に木山春生から教えられた、研究者用の通用口までのルートを必死に思い出していた。

「しかし……痛エゼ」

鉄雄は、顔をしかめながら、直前まで木山と話していたことを思い出した。

（島君。君の左肩には、位置情報を送信するマイクロチップが埋め込まれている。それを取り除かなければ、ここを逃げ出した所で、遅かれ早かれ捕まる。まあ君の力をもってすれば、力づくで突破も不可能じゃあないだろうが、面倒ごととは嫌だろうか？）

（じゃあ、どーすんだい？）

木山は、天井の片隅の監視カメラを向いた。カメラは、木山と鉄雄を写さないような、見当外れの方を向いた。

（簡単さ）

そして木山は、笑みを浮かべて、手袋を素早く嵌めると、鞆から先のギザギザしたナイフを取り出した。

（へっ？！）

鉄雄は思わず声を漏らす。

（取り除く。外科的に）

（おい、あの、麻酔とかは……）

（心配なくていい。ちゃんと滅菌してあるし、規格からして皮膚下5mm程にあるだろうから、そんなに肉までは抉らないさ。第一、君は傷の治りも早くなっているんだろう？

ちよつと、ちくつとするだけさ。ほら、カメラがおかしいことに気付いたなら、早くて1、2分でアーミーに見つかるぞ？多分、この辺じゃないかな……）

（た、多分って……）

予防注射をするぐらいの軽い口調で、木山はナイフを手に、ずいっと鉄雄に近づいてきた。

——あの時、顔が何となく笑っていたように見えたのは、気のせいではない感じがする。

応急的に包帯を巻いて止血した左肩をさすりながら、鉄雄は思った。

逃亡の手助けが露見しないよう、木山を取り敢えず殴って気絶させたが、少し力を強めさせてもらった。

「まア、おあいこだよな」

何フロアか階層を降りた所で、扉を開ける。

自分の居室は、恐らくアーミーが見張っているだろう。今は、まっすぐここを出ることだ。

「そうになると、服は……」

「おい、待て、止まれ！」

鉄雄の思考に、鋭い声が割って入った。

先の出入口の所で、兵士が2人待ち構えている。

「……面白れエ」

俺の力を試してやる。

鉄雄は、片方の兵士に向かって、左腕を振った。

その兵士が、体を壁に叩きつけられ、ずるずると床に這いつくばった。

「ひっ」

恐怖から、もう一人の兵士が銃を慌てて構えた。

鉄雄は、右の掌を下に向けた。

「わあっ!?!」

兵士が膝から崩れ落ち、床に叩き伏せられた。

構えていた銃は兵士の手を離れてからけたたましく暴発し、跳弾で天井や壁にいくつか傷をつけた。

ヒュー、と鉄雄は口笛を吹いた。

「やるなア、俺」

鉄雄は、押さえつけられている兵士に歩み寄り、しやがみ込んで顔を寄せた。

「オイ」

兵士は、床に顔半分を押し付けられながら、目だけを必死に動かして鉄雄を見た。

殺すか？

一瞬、目の前の兵士が真っ赤に潰れる様子を思い浮かべたが、すぐに木山の言葉が蘇った。

「ここを出て行くのなら……島君。君に頼みがある。」

そう言って、木山は鉄雄に音楽プレーヤーを手渡した。

「この中の音声ファイルを……『レベルアップ幻想御手』を、多くの人に広めてくれ。それから、できることなら……人を傷つけないでくれ、お願いだ」

「……めんどくせエなア」

鉄雄はため息をついてから、息を切らして呻いている目の前の兵士を睨みつけた。

「お前、俺が別のところにいるって、ウソの報告しろ。」

それから、その服、全部寄越せ。

すぐやんねエと、トマトになるぞ!!」

倒れている兵士は、見えない力に押されながら、必死にこくこくと頷いた。

VIII・ジョーカー

36

——第十学区 ストレンジ、「スター・ボウル」跡

「いいかテメエら、ケツの穴締めてカクテル売りにかからねエと、テメエらの糞が踏ん張らなくても飛び出るくれエぶち込んで穴拡げるぞ……只でさえ、警備員アンチスキルに目エ付けられて、俺達アマジでヤベエってこと、分かってんのか!? 薬中のネズミども」

肥満体で、上下逆さまのピエロのペイントを顔面に施した、異様な風体の男、ジョーカーは、チームのメンバーに脅迫めいた発破をかけた。

「クラウン」の一行は、廃墟となつてボロボロのボウリング場跡を根城の一つとしていた。かつて、賑やかに人々がゲームに興じていたであろうレーンは、とつくの昔にオイルが無くなり、至る所の床板が剥がれ、針山地獄の様相だった。壁面には、プロボウラーの大きな広告写真が掛けられ、スプレーによる下賤な落書きでデコレーションされていた。

チームリーダーの強烈な言葉を受けても、メンバーは口々に勝手な意見を喋り、統率の取れていない様子を見せている。

「ここはもう熟れすぎたサラダボウルなんだよオ、第七学区の裏庭にさア、もつと売り込めばいいんじゃないのオ?」

「バカいえ、あそこはゴリラの駒場のジャングルだろうが……こないだ尻尾巻いて逃げ出したン忘れたンか、マジで脳ミソスカスカじゃねエか」

「やつぱさア、手エ広げすぎたんだよ……堅気ジャッツジメントの学生街でも、俺らのことが噂になつてゐるらしいぜ! そんな風紀委員にも追い掛けられるし……」

「アホ、女子高生が怖くてクラウンやつてられんの!? ヤつちまえばいいじゃんかよ」

「アホはそつちだろオ、チップの奴は死にかけてるし、金田ンとこのデコ坊主は見つからねエし、錠前屋は1週間で抜けちまうし……やつてらんねーぜ」

「そのデコ野郎は？金田ンここに脅しをかけようじゃねエか、引っ張り出して叩き潰してやる」

「やられた仲間のことを、相当根に持っているジョーカーは、より強い口調で言った。

「それがさジョーカー、あのツナギの野郎共、バイクしよつぴかれたらしくてヨオ」

ピエロの鼻飾りをつけた、痩せこけた男が嬉々として言った。

「最近じゃあ、マジメに職業訓練生やつてるって話だぜ!!」

その場にいた多くが、下品な笑い声を上げる。

「笑ってる場合じゃねエだろ!!」

緊張感の無い——普段からドラッグをきめている仲間を求めるのは無理な話だが——メンバーに対して、ジョーカーは怒鳴り声を上げた。

流石に、リーダーの怒気に気圧されて、笑い声が収まる。

「このままじゃア、俺らはデコ野郎にやられ、新入りにも逃げられ、おまけにケツを追っかけてたら返り討ちにされた、ヘタレのジャンキーの集まりってことになるだろうが！ここから何とか——」

どう何とかするのか、ジョーカーの言葉は途中で遮られた。

ギシイと床板が軋む音と共に、小柄な少年がホールの入り口に現れたのを、全員が一齐に見た。

「あいつ……」

ガスマスクをした一人が、現れた鉄雄を指さして言った。鉄雄を襲撃した時、チップと共に、訳も分からず返り討ちにされたメンバーだった。

「あんときの……!」

「まさか」

ジョーカーは目を細めて唸った。

「ウワサをすれば、金田ンとこのケツ持ちか……!」

鉄雄は妙な格好をしていた。下半身は、この時期に似つかわしくない、迷彩色の厚手のズボンで、対して上半身は、病院から抜け出して来たかのような、薄緑色のガウンだった。

「なんだ、てめエその恰好。病院のお庭散歩してンのか?」

ジョーカーの一言で、各々がせせら笑った。

「よく、ノコノコと来れたもんだな、え?」

ジョーカーが言葉に怒りを滲ませると、メンバーは次々に、工具やボウリングのピンを手に、鉄雄を囲み出す。

鉄雄は少しこちらに歩いてきたところで、周りを囲まれたことを察したのか立ち止まった。

外が雨だったためか、服はひどく濡れ、水の滴りが、歩いてきた跡を示していた。

「お前らに……用があつてな……」

息切れしながら、鉄雄が言った。

「そりゃア良かったぜ」

ジョーカーが、歯をむき出して笑みを浮かべ、手近にあつた酒の瓶を手に立ち上がった。

「俺らもテメエには、たつぷりと払ってもらわねエとな……」

ジョーカーを始め、メンバーが一斉に鉄雄に殴りかかろうとした時だった。

「うるせエ!!」

バアンと、鉄雄の周囲でいきなり床が破裂し、木片が飛び散った。

メンバーはたまらず顔を覆った。

「ジョーカー! やっぱコイツ……」

先ほど鉄雄を指差したガスマスクの男が、ジョーカーの隣で怯えて言った。

「ビビってんじゃねーよ」

ジョーカーは、大して表情を変えず、瓶を手に鉄雄に近づいた。

「見ろよお前ら、こいつ、震えてんじゃねえか……」

明らかに弱っている様子の鉄雄の脳天を目掛けて、ジョーカーは瓶

を振り上げた。

その途端、

ゴツ、と後頭部に重たい衝撃を受け、ジョーカーの意識は途切れた。

クラウンのメンバーは、何故か急にリーダーが倒れ込んだことに、何が起きたのか分からず、混乱した。

「先生——やっぱムリだ、それどこじゃねエ」

額を抑えて、鉄雄が呻いたが、その小さな声を聞き取った者はいなかった。

「おい！見ろよ！あれ……」

誰かが指差した方では、いつの間にか、ピットの奥に眠っていた筈のボウルが1個、どこからともなく現れ、天井近くに浮いていた。

足元を見ると、ジョーカーを仕留めたボウルが、ゴロゴロと床の勾配に沿って転がっていく所だった。

「おい、クスリくれよ……」

「へっ？」

鉄雄が発した言葉に、何人かが聞き返した。

「お前らの売ってるヤツ……アタマ、スツキリするやつ……痛くて、ガンガンして、たまんねえんだよ」

「お、お前——アタマおかしインじゃねえのか!？」

白髪を長く伸ばした一人が、口をパクパクさせながら、鉄雄を指差して言った。

「おい、馬鹿やめろ——」

ガスマスクの男が、嫌な予感がして、仲間へ声をかけた。

次の瞬間、浮いていたボウルが、白髪の男に向かって急降下し、鈍い音と共に、白髪の男はあぶくを吹いて床に倒れた。

「ひえええ」

他の残ったメンバーは、頭を抱えたり、蹲ったりして動けなくなった。

「聞こえてねえのか!!」

鉄雄が今までで一番大きな声で叫んだ。

「クスリだ！すぐに用意しろ！テメエらのド頭カチ割りてえか!!」

——都市軍隊本部、ラボ

「もつ、申し訳ありません——目の前で仲間がやられ、本当に——
本当に、命の危険を感じました——あんな能力者を相手にするのは、初めてで……」

「……もういい、休め」

目の前で、震えながら顔を俯かせる隊員に対し、敷島大佐は短く、静かに声をかけ、その場を後にした。

41号こと、島鉄雄脱走の報せを受け、大佐は基地内の出入口という出入口を封鎖する指示を出した筈だった。

途中で、正面玄関に41号が現れたという連絡が入り、兵力をそこへ集めた。強行突破するつもりか、と大佐は流血も覚悟して警戒感を高めていたが、それは41号に脅された隊員の虚報だった。

「——怪我人の状況は？」

尋問室を後にした大佐は、別の隊員から歩きながら報告を受ける。

「合計2名です。先ほどの隊員と同行していた、裏手の警邏が1名——

意識は戻っています。そして、Dr. 木山も、先ほどの診察では、目立った外傷はありません。念のため、腹部内蔵の検査を行う予定ですが——」

「……それだけか？」

大佐は、報告の途中で足を止めた。

「はっ？」

「ほかに、傷ついた者はいないんだな？」

「はい」

大佐は、3日前の夜に、居住スペースを脱走した41号の制圧に当たり、重傷を負った兵士のことを思い出していた。あの時の41号は、能力を得たことによる、それまで秘めていた暴力性を明らかに花咲かせていた。

それに引き換え、今夜の脱走は全く異なる。無駄な交戦をせず、手際が良過ぎる。

「……」

大佐が思索に耽っていると、廊下の向こうからDr. 大西が駆けてきた。

「大佐！お呼びで——」

「41号は？今どこにいる？」

「そっそれが大佐——」

肩を竦めながら大西が困ったように言う。

「位置情報は、追えません……発信機が何らかの原因で、不具合を起こしたのか、反応がなく——」

「その発信機ですが、カウンセリングルームと非常階段との間のトイレに、投げ捨てられていました」

大西の言葉を継いで、部下が報告する。

「鋭利な刃物状の物で、取り外したのか、41号の物と思われる血痕も残っていました」

「——このまま放っておく訳にはいかん、何をしでかすか分からんぞ」

「仰る通りです、大佐。恐らく、彼の活動場所であった、第10学区方面に行っただのではないかと……」

大西の言葉に耳を傾ける間もなく、大佐は部下に指示を飛ばした。「捜索隊をすぐ編成しろ！統括理事会に至急、派遣許可の申請を！トレーニングセンター職業訓練校、バイカーズ暴走集団のルート沿い、ストレンジを重点的に当たるんだ！」

いいか、相手は能力者だ！理性のない獣だと思え！ベビールーム保育園のナンバースと同じだと舐めてかかれば、命に関わるぞ!!」

厳しい大佐の言葉を受け、周囲の部下たちがそれぞれ駆け出していく。

「……どう思う？」

兵士達が慌ただしく行き交う中、大佐は大西に問い掛けた。

「41号のことですか？」

「……もっと、深刻な被害が出ていてもおかしくはなかった。そう思わんか」

「確かに、41号の成長は目覚ましい物がありました。この数日でのグレードの伸びは——」

「違うー！」

隙あらば研究成果の誇示を始める大西を、大佐は一括して黙らせた。

「妙だと思わないか？この兵士は皆、学園都市の恐ろしさを忘れている者ばかりだ。金曜日の暴れようを、覚えているだろうか？」

……なのに、なぜ今回は、これ程スマートに事を運んだのだ？もつと血を流してやりたい、己の力を見せつけてやりたい……奴はそういう人間だ。違うか？」

「そ、それは——」

視線を逸らす大西を、大佐は軽蔑の眼差しで見下ろしていた。

この研究者が、41号の自己肯定感の低さに付け込み、嗜虐思考を極端に刺激することで、能力向上に繋げようとしていたことは、大佐も知っていた。

それを、うまく調整したのは誰か。

「……Dr. 木山」

医務室に運ばれている、学園都市から来た人物の名前を、大佐は陰しい表情で呟いた。

——第十学区 「スター・ボウル」跡

「ほんとに、飲んじまいやがった……」

「フェタミンが耳から噴き出るんじゃないかって量だぞ……」

周りのクラウンのメンバー達が口々に囁く中、鉄雄はソファに体を預けて、グラスを脇に置き、天井を据わった目で見上げ、深い一息をついた。

「……おい、大丈夫かよ」

暫く鉄雄が黙って動かないので、傍で見ている一人が恐る恐る声をかけた。

「……ああ」

奥底から吐き出すように、鉄雄が返事をした。

そして、声をかけた男に、顔を向けた。

鉄雄は片手を差し出す。

「お陰サマで、冴えてきたぜ」

「ぐっ」

声をかけた一人が、苦しそうに首に手を当てた。

「お、オイ——！」

他のメンバーが慌てふためく。

男は、ふわりと空中に浮かび出し、突如着く地を失った両足をバタバタさせている。

必死に自分の首を掻きむしり、ぐぐもった声を出している。

鉄雄は、そんな男に向かって手を伸ばし、値踏みするような視線を向けていた。

「や、やめてくれよ！」

ガスマスクを付けたメンバーが必死に言う。

「悪かった——お前やカノジヨをタコにして、悪かった！だからもうやめてくれ！」

鉄雄は、一瞬、驚いたような表情をし、それから

「くつくつくつ……」

笑い出した。

「アーツハツハツ!!——こいつアいや!!」

伸ばしていた腕を引つ込め、腹を抱えて鉄雄が笑う。

浮かんでいた男は、不意に強かに落下し、倒れて暫く動けない。

残ったメンバーは、一様にぞつとしていた。

「怖いか!」

鉄雄が立ち上がり、両手を広げて言った。

「俺が怖いか!? ああ?」

誰も、何も言わない。

この場にいるのは、学校はもちろん、職業訓練校にすら通わず、まともな職にもあぶれた、無能力者の最下層の者ばかり。

高位の能力者と相対した者は全く居らず、皆怖気づいていた。

「俺の力だ……」

胸の前で右手を握り締め、今度は極端に声を潜めて言う。

「いつもためエらには、やられてばかりだったなあ……」

だが、もういいんだ。だって」

鉄雄が再び手を挙げたことで、クラウンのメンバー達は身を縮こませる。

「そのピエロ面を、脳ミソごと潰しちまえるんだからよ」

カタカタと震え出す者や、一步、二歩、後ずさりする者がいる。しかし、脱兎の如く逃げ出す者はいない。かと言って、反論し立ち向かう者もない。

廃墟の空気が、全て恐怖で満たされ、全員の喉元をゆっくりと締め付けていた。

「——けど、今はそうしねエ」

鉄雄が、挙げていた手を降ろし、メンバーはびくびくと顔を見合わせた。

「別に、お前らをここで全員ブチ殺して、スッキリしたっていいんだが……ここに来たのは、そういう訳じゃねエんだ。

なあ、お前ら」

鉄雄はゆっくりと辺りを見回し、言った。

「——欲しくねエかよ、能力ちから」

すぐに返事をする者はいない。鉄雄は、黙ったままの一同に蔑んだ表情を向けて、話を続けた。

「何だ……てめエらだって、強度レベルを爆上げするって、薬を売り捌いてたんだろ？……おい、違うのか？」

鉄雄の問いに、何人かがお互いに、ぼそぼそと耳打ちをした。

「いや、あれは、ただ——気分をハイにするってだけで……」

一人が弁解すると、鉄雄はチツと舌打ちをした。

「んなことだろオと思っただぜ……でもな——」

マジで、そんなブツがあるって言ったら？」

クラウンのメンバーがざわめいた。

「いや、そんな出鱈目——」

「おいバカ、余計な事を！」

騒ぐ男らを鉄雄が睨みつけると、二人は途端に静かになる。

「……てめエで試そうか？」

「いや、よしてくれ……！」

再び辺りが静かになる。顔にマスクを着けていないメンバーは、鉄雄に恐れを為しながらも、未だに半信半疑の表情をしていた。

「まア、安心しろって。その辺の薬局のお零れを理科室で混ぜ混ぜしたのとは訳が違エ。何てったって、学園都市のエリート様特製品だ……」

お前らにも分けてやるよ、今、ここでな」

ざわざわと、クラウン達は囁き合っていたが、一人が前に進み出た。「なア……それ、どういうんだ？」

鉄雄は、進み出た一人を見て、静かに笑みを浮かべた。

——都市軍隊本部

「率直に言うと、木山博士。41号が首尾よく逃げ遂せたことに、我々は疑問を持っている」

医務室から少し離れた部屋で、敷島大佐が、テーブルの上で手を組み、言った。

スーツの上腕部分が引き延ばされ、筋肉質の体格をより露わにしている。

「……何が言いたいのか、よく分からないですね」

木山博士は、大佐の反対側に座って言葉を返す。非常に疲れた表情だ。

「私は、あなた方アーミーの研究する実験体から危害を加えられた。治療が終わったかと思いきや、まさかの尋問ということですか？」

「発信機が、41号の体が除去されていた。なぜ、彼はマイクロチップのことを知っていたと思う？」

「研究途中で報告申し上げた筈です、大佐。保育園のナンバーズとの脳波の共鳴が、一時的に、彼に多才能力デュアルスキルを授けると。ナンバーズから彼が得た読心能力サイコメトリーが、あなた達の何気ない思考を捉えたとは考えられませんか？」

「あなたが、彼に助け舟を出したのではないか？」

大佐は木山から視線を逸らさずに、重ねて問う。

「カウンセリンググループの録音レコーディングは、ここのところ度々不調だったそうだ。例えば、ついさつき……41号が逃げ出した瞬間も。しかも、カメラもなぜか天井のシミを映していた」

「財政難については同情しますがね、大佐。ご自分の所有する機材の保守点検を、より丁寧に行うことをお勧めしますよ。……その威勢があれば、財務省だって、財布の紐を緩めてくれるのではないですか」「皮肉に付き合っている暇はない。博士」

のらりくらりとかわす木山に対し、大佐は厳しい表情を崩さない。「こうしている間にも、41号は、学園都市に解き放たれ自由の身だ。あなたが育んだ、強大な超能力を得て。だが、その力を操るのは、若く、無秩序な暴走族の思考だ。」

あなたも見ただろう、先週の、金曜日の夜……私の部下は、今もベッドの上で、体の自由が利かない」

言葉を切った所で、木山の眉がピクリと上がるのを、大佐はじつと

見つけていた。

数秒の間が、互いにとても長く感じた。

「我々は、彼を管理下に置かなければならない。この学園都市の安全のためにも」

大佐が放った言葉に対して、木山は一つため息をついた。そして、巨軀をじつと見返した。

「安全だと?」

木山の声色には、明らかに怒りが滲んでいた。

「あなた方が、41号カレに何をした? 脳内血管にケタミンやらP C Pをフエンシクリジン湯水のように注ぎ込み、幼児向けの啓発ビデオを延々と見せ続ける、あれが正しいやり方だと?」

あなた方がやったのは、彼を——島鉄雄を、怪物に仕立て上げようとしたんだ。大佐、今あなたが言った通りだ。だから私は、一瞬でも向き合えた彼に——たとえ元がバイカーズだろうが、スキルアウトだろうが、せめて人間らしく、この学園都市で生きる道を与えたかったんだよ。

軍人達の兵器おもちゃにするためでも、古びた研究所に福の神を呼び寄せるためでもない!」

徐々に熱を帯びていく木山の口調に、大佐はじつと耳を傾けていた。

「その通りだ、博士」

意外にも、大佐は怒りを露わにすることもなく、口調はさほど変わらなかった。

「奴は、41号は、人間と怪物とを隔てる、欄干に乗って遊んでいるんだ。そこに押し上げたのは、我が研究者共だ。奴が一度足を滑らせば、次に這い上がって来る時は、どんな姿になっているか。私は、それを恐れている……」

責任は、我々にある。だからこそ、木山博士。あなたには、正直に話してもらいたかった」

木山は、何も言わなかった。ただ、長い前髪の間から、暗い目で、恨めし気に大佐を睨みつけていた。

その時、部屋の入口に、黒服の部下が一人現れた。

「失礼します——大佐、特警のミーティングの用意が整いました」
「軍人として、最後に聞く。博士」

部下の呼びかけにすぐには答えず、大佐は木山に向かって言った。

「——あなたの、41号に向かう姿は、一科学者としてのそれ以上の物を感じた。」

……一体、何を指して、彼をあのように育てたのだ？」

木山はじつと構えてから、口を開いた。

「守りたいものがあるからですよ、大佐。」

その声は、大佐に静かな決意を感じさせた。

「あなたの言葉が嘘でなければ、大佐。考えていることは、さほど違わない筈だ」

大佐は、組んでいて手を解き、席を立った。

「……お送りしろ」

傍に控えていた兵士が、木山に離席を促した。木山は立ち上がり、無表情で大佐の横を通り過ぎ、出口へ向かった。

「……甘く見ないことですよ、大佐」

出口で立ち止まった木山は、大佐に背を向けたまま、静かに言った。
「島君を手元に置いておきたいならば、ここにせめて妨害機構ジャマぐらいは張り巡らせておきなさい。」

あなた方が対峙しているのは、敵国兵でも、長年飼い慣らして来た子供でもない。学園都市の能力者です。そして、それは決して彼だけではないということ覚えておいてください。」

「……忠告に感謝する」

兵士に再度促され、木山はその場を後にした。

「大佐……よろしいのですか？」

黒服の部下の問い掛けに、大佐は何も言わなかった。

——第十学区 「スター・ボウル」跡

「クリスマスのサンタみてエな音だな……ほんとオに、こんなんでも能力が上がるんかよ……」

「あいつ、ウソついてんじやねエのか……?」

「シツ、聞こえるぞ……」

「なあなあ、俺にもそのデータ、送ってくんね?」

一人が音楽プレーヤーを手に取ったのを皮切りに、クラウンのメンバーは次々に、鉄雄のもたらした「幻想御手」^{レベルアップ}を耳に当てて聞いたり、携帯電話でやり取りしたりしていた。

そんなメンバーの様子を、鉄雄は薄ら笑いを浮かべて眺めていた。

「営業初日は、ひとまずうまくいったと思うぜ、先生……」

小さく鉄雄が呟いた。

「ド底辺の乞食ばかりだけど、まあいいか……」

ただよ、俺には俺のやりたいこともあるんだぜ」

それから、鉄雄はメンバーを適当に一人呼びつけて、何事か耳打ちした。

「……えっ」

呼ばれた男は、途端に顔を青くする。

「いいから、早く呼んで来い!」

「はっ、ハイ!」

鉄雄の急な怒鳴り声に、男は体を震わせ、仲間の元へ早足で寄っていった。

「ふーん……確かに見覚えがあんなあ……」

その後、鉄雄の元に、3人のメンバーが集められた。

1週間前に、鉄雄とカオリを襲撃した4人の内、チップを除く3人だった。

「てめエらには、世話になったなあ」

「わ、悪かった……ゆ、許して……」

ガスマスクの男が頭を低くして乞うた。後の2人も、すっかり怯えている。

「いや、そういうのいいからさ」

鉄雄がくいつと親指で背後を指差した。

「あれ、ちよつと運び出してくんねエ?」

えっ、と3人が見た先には、倒れたジョーカーの姿があった。

「いくらなんでも重エよ、やっぱ……」

「死んでんじゃない？」

「バカ、まだ息あんど。気絶してるだけだつてえの」

鉄雄に呼ばれた3人は、総出で息を切らしながらジョーカーの巨体を運んでいく。

脱力した肥満体を運ぶのは、ただでさえひ弱な3人にとって、大変な苦労のようだ。

「てめエら、あの後、留置所ブタ箱に入ってたんかよ？」

鉄雄の一言一言に、いちいち3人はびくついている。

「あ、ああ……警備員アンチスキルに捕まったけど、ホゴカンサツつてやつで……」

「ふーん、マジもんのムシヨに入んなくて良かったじゃねえか」

「そりゃあどうも……なあ、外にほっぽり出すんか？」

汗をだらだらかいているガスマスクの男に、鉄雄が振り向いた。

「ここら辺でいいよ」

3人は、ロッカールームの隅にジョーカーを寝かせると、へたり込んだ。

「なあ」

鉄雄が静かに3人を見下げて言った。

「もう、ムシヨに入る心配はしなくていいぜ」

鉄雄の脳裏には、カオリを乱暴する、下卑たクラウンの笑い声が響いていた。

「なあ、クソ野郎共」

金属製のロッカーが、ミシリと音を立てた。

「おおオ！見ろ、浮いたぜエ！」

「超能力みたいじゃねエ!?コレ！」

「ばアーかてめエ、超能力って言うんだよ、マジで」

「なアなア、俺の声、聞こえるウ?俺、つい今朝まで、テレパス念話のレベ無能力者ルだったんだぜ!？」

鉄雄の与えた「レベ幻想御手アツパー」を聞いてから、クラウンのメンバー達は、それぞれ無能力判定されていた筈の能力が、より強力な形で発現していることに、皆驚き、狂喜していた。片隅に置かれた古びたラジオからは、大音量で音楽が流れ、がらんどうのボウリング場に、いつになく活気ある声が響いていた。

「おい、お前らは、ここに居るヤツで全員なのか?」

鉄雄が、はしゃいでいるメンバーに聞いた。

今、この競技フロアに残っているメンバーは5人。

小太りで、そばかすが多く、眼鏡をかけた男。

よれたパイロットキャップに、サードアイを黒く描いた男。

頭にハチマキを巻き、釣り目の、ピエロ鼻をつけた腕の長い男。

筋肉質の、左腕にタトウを入れた、分厚い唇の大柄な男。

そして、前髪を垂らし、気障な雰囲気を漂わせているYシャツを着た男だ。

「えつと……何人だっけ?」

「最近、一気に抜けたからなア」

「ご、ろく、しち、はち……9人つてところか」

「バカヤロウ、なんでそんな時間かんだよ、お前数も数えらんないのかよ」

「なら、ここにいる5人だ」

鉄雄の一言に、その場の空気が一気に凍てついた。

「あのブタと、クズ3人は、いらねエ」

「で、でも——」

「なあ」

眼鏡をかけ、そばかすの多いずんぐりしたメンバーの男が、何か言いかけた。それを、鉄雄がギロリと目を向けて黙らせた。

「このリーダーは、誰だ？」

「それは……」

「あのブタ野郎にできなかつた——能力を、お前達にくれてやったのは、誰だ？」

鉄雄は、何も言わない5人のメンバーを見渡した。

「……この俺だ!!」

いいかア、このリーダーは、たつた今日から、俺だ!

お前らが、こないだまで俺を追っかけ回してたのは……いいさ、ここにいるお前らには、不問にしてやる……

安心しろ。お前らも、これからいい思いができたからよ」

「いい思いつて……」

パイロットキャップの男が呟いた。5人のメンバーは皆、反応に困っている様子だった。

「揃いも揃って、シンナーで脳ミソ縮んじまつてんのか!?

いいか——お前らは、もうレベル0なんかじゃねエ。そこらのスキルアウトのチンピラよか、ずつといい位置につけてんだ。

今まで通り、コソコソ薬を売りながら、そこらのバイカーズや警備員共アンチスキルにケツを狙われるつもりかよ?」

「……そうだ」

大柄な男が顔を上げて言った。

「前に、俺はアンチスキルに捕まって、更生院に入れられた……いつか、仕返ししてやりたいと、思っていた……」

「俺は——風紀委員ジャッジメントの奴らをブチのめしてやりてエ」

Yシャツの男が憎々し気に言った。

「学生時代、俺はあいつらのせいで、大学に進めなくなつたんだ……ちよつと会計をちよろまかしたただけなのに、人生狂わされて——!」

そうだ、そうだ。と、メンバーから一斉に怨嗟の声上がる。

警備員、風紀委員、他のスキルアウトチーム、高位の能力者。学園

都市の仕組みそのものに対する、恨みを孕んだ声が、辺りに木霊する。
「そオだ……」

鉄雄が両の手を広げて、笑みを浮かべて言った。

メンバーの目には、今や能力を得た喜びに加え、復讐心の炎が宿っていた。

「今まで俺らを打ちのめしてきやがった奴らに、今度は俺達がやり返してやるのさ……俺らはもう、レベル0なんかじゃねえ。能力者だ。今からお前らは、俺のチームの幹部だ。」

いいか、このレベルアッパーを広めるんだ！チャチなクスリなんかより、よっぽどいい金になる！そして、新しく力を得る者が生まれる！そいつらも、俺達の配下だ———いずれは、もっとデカく、もっと派手に、金を分捕れる、偉ぶってた奴らが、しょんべんちびり倒してガタガタ震え出す！

燃やせ！増やせ！奪い取れ！俺達が、この学園都市を、ドン底からひっくり返してやるのさ！」

鉄雄の言葉に今までになく力が込められた瞬間、辺りに衝撃が走った。電灯は明滅し、窓ガラスが幾つかバリインと割れ、生温い夜風が一気に部屋をかけ抜け、木っ端や埃を散らした。

その力の伝播も演出となり、鉄雄の言葉を聞いた5人から、鬨の聲が上がる。

「いいぞ、鉄雄！」

「アンタが、俺達のリーダーだ!!」

「鉄雄様!!」

「鉄雄様……悪くねエ」

鉄雄は、笑みを深くした。

「いいかお前ら。」

もうお前らは道化^{ビエロ}じゃねえ。クラウンなんてダサイ名前は捨てろ。なんかもつと、こう———強そうな名前がいいと思わねエか……」

「新しい、俺達の名前……」

メンバーが眩き、叫びが収まるのと入れ替わって、いつの間にかニュースに切り替わったらしい、ラジオからの声が聞こえてきた。

「——国連事務総長は、先ほど発表した談話の中で、『強国が押し進める帝国覇権主義を捨て、今こそ、多様な価値観に基づく連帯を各国が……』」

「……帝国」

Yシャツの男がぼつりと言った。

「帝国？」

「ああ、どうでしょう？」

聞き返す鉄雄に対し、Yシャツの男は不敵な笑みを浮かべて言った。

——とある薬物依存回復支援施設

「こちらです——！」

「様子は!？」

「ふらつと歩き出したかと思つたら、急に倒れてしまって、話しかけても意識が朦朧としているようで——」

通報を受けた救急隊が、ストレッチャーを走らせて慌ただしく建物へ入っていく。

「——この人です——釧路さん、しっかりして！」

「聞こえますか——瞳孔が開いてる、ひどい痙攣だ。薬物摂取の既往歴は？」

「ここに来たのが2日前で、その日にMDMA合成麻薬の一種を——」

「カルテを早く！急性離脱症状だろう、搬送を——」

担架に乗せられた少女が、何事か口を動かす。

「——何だつて？」

「後で聞いてやれ、今は処置が優先だ」

「……ア……キ…………ラ……」

焦点の定まらない目をした、釧路帷子の言葉は、喧騒の中で誰にも届くことは無かった。

——第十学区 「スター・ボウル」跡

冷たい衝撃と共に、ジョーカーの意識は暗闇から一気に引きずり出された。

「!?——ゲホツゴホツ！」

強烈に咳込んだ。と同時に、鼻につんと鉄の匂いが飛び込んだ。

「お目覚めかい？前リーダーさんよオ」

「……てめエは……」

頭がまだくらくらする。焦点を合わせるのに少し時間がかかったが、目の前には、腕組みした鉄雄が立ちはだかっていた。

ジョーカーは、片手について体を起こした。すると、手がぬるつとした感触を得た。

「……あ？」

ジョーカーは、自らの手を見た。べつとりと、赤黒い血がついている。

「ヒッ」

ジョーカーは息を呑んだ。

自分の傍らに、血塗れのガスマスクが見えた。

ジョーカーの周りには、鉄雄を襲った3人のクラウンのメンバーの身体が打ち棄てられていた。腕を奇妙な方向に折られている者、足が交通事故の跡のガードレールの様にひしゃげている者。そして、ジョーカーの傍らのガスマスクの男は、潰れたガスマスクが、辛うじてそこに頭が合ったのだと教えてくれていた。

マスクとその周辺には、薄紅色のスポンジ状の物や、ライトグレーの破片が散らばっていたが、それらが一体何なのか、ジョーカーに考えを巡らせる余裕はなかった。

「お、お前……」

ジョーカーは、目の前に立つ鉄雄から少しでも遠ざかろうと、後ずさりした。しかし、すぐ後ろは、ロツカールームの冷たい壁だった。ジョーカーが何度も壁を後ろ手で叩く度、赤い手の跡がこびりついた。

「まあ落ち着けて。てめエは、殺しはしねエよ」

鉄雄が、愉悦の表情を浮かべて言った。

ジョーカーは全く落ち着ける気分ではなく、ガチガチと歯を鳴らしながら震え始めた。

「アンチスキルでも、ジャツジメントでも、他のチームンところでも——そうだ、金田ンとこ行って、ぜひとヨロシク言ってくれよ。」

たった今晚から、クラウンは生まれ変わった。これからは、この島鉄雄が率いる、帝国が、てめエらを叩き潰しにくってな」

鉄雄が高笑いすると、その背後からも、無理やり引つ張り上げたよな、乾いた笑い声上がる。

つい先ほどまで、自分が率いていた、残りのクラウンのメンバーだ。皆、取り繕ったような笑顔を張り付けている。

「——これ——これは、どういう——」

状況が飲み込めず、恐怖に首を締め上げられながらも、ジョーカーは何とか言葉を継ごうとする。

「ああ!? 分かったかよ、藁小屋のジョーカーちゃんよオ」

バアンと、ジョーカーの近くの金属ロツカーが音を立てて浮かび、けたたましい音を立てて隣のスペースへと吹き飛んだ。

その音に弾かれたように、ジョーカーは立ち上がった。

逃げなければ。

これまで、幾度もアンチスキルや他のチームとの抗争を潜り抜けて来た、ジョーカーの思考が、そう叫んでいた。

足を一歩踏み出し、滑る。

強かな痛みと共に、べたつと、床に湖を作っていた血が、ジョーカーのでっぷり太った腹に塗りたくられる。

笑い声が更に高まる。

何とか立ち上がり、嘲る声を背に、ジョーカーは無我夢中でその場を抜け出した。

「……なんだ、てめエら」

ジョーカーが命からがら逃げ出した後、引き攣った表情をしている

5人のメンバーに、鉄雄は苛々しながら言った。

「言いたいことあんなら言えよ、ああ？」

誰も、何も言わない。

「こいつらは、あの夜、俺をコケにしやがった——だから殺した。

だが、勘違いすんなよ——お前らを許した訳じゃねえ。

お前らには働いてもらう。もし、あのブタを追い掛けて逃げようってんなら——」

鉄雄は、物言わぬ3人の身体を一瞥した。

「——こいつらみてエになる。スカスカの頭でも、分かるよな？

分かったら、すぐこのゴミを片付けとけ。思ったよか、血生臭エんだよ、死体ってのは」

鉄雄は、忌々しげにその場を後にした。

暫く、5人の残ったメンバーは動けなかった。

(……悪イが、先生。あいつらだけは、許す訳にはいかねエ)

鉄雄は、大股で歩きながら思った。

(強くなつたからには、俺は——カオリを辱める奴を、絶対に生かさねえ。そう決めてんだ)

「……畜生、シャワー浴びてエ……」

自分の体にこびりついた、生まれて初めて嗅ぐ強烈な血の匂いに、鼻を摘みながら、鉄雄はそう吐き捨てた。

最寄りのアンチスキルの詰所に、血と涙に塗れたジョーカーが息も絶え絶えに駆け込んで、宿直をしていた職員を驚愕させたのは、それから暫く経ってからの事だった。

——7月11日 午後

「——で、何で俺らしよっぴかれてる訳?」

「そーだよ、俺ら最近ずうつといい子にしてたぜエ? 学校にもちやあんと行つてたしよオ」

「絶滅危惧種のゴリラにちよっかい出したのがまずかつたんかな?」

「いっぺんに喋るな! やかましい!」

金田、山形、甲斐の3人は、職業訓練校トレーニングセンターでの(殆どの生徒が話を聞いていない)講義を終えた放課後、体育教師の高場に呼び出され、彼の運転するバンに乗りどこかへ向かっていた。

バンの座席の足元や後部には、工具やら授業で用いる計測器具、金属音を鳴らす何かが入っている重厚な工具箱らしき物などが、所狭しと乱雑に載せられており、加えて、コロンのような、わざとらしい甘つたるい香りが立ち込めていて、3人はとても狭苦しい思いをしていた。

「今、俺は警備員アンチスキルとしてお前達を連れて行ってるんだが、安心しろ、お前らが何かやらかした訳じゃあない……あくまで、今回はな」

「うぜエ言い方するぜ……」

「山形! なんか言つたか?」

「それよりよ、こんなむさツ苦しい箱に閉じ込められてんだ俺らはよオ」

金田が不貞腐れた態度を隠さずに言った。

「それ相応のお釣りのくる話なんだろうなア」

「ああ」

高場は短く返事をした。

ちようど、バンが赤信号で止まった所だった。

「お前達——島鉄雄には、最近会つたか?」

「何イ?」

金田達は、一様に表情を険しくした。

「おい、鉄雄のことでなんかあったのか？」

「会ったかどうか聞いているんだ！」

高場は重ねて金田達に聞いた。

「いや……あの月曜の夜以来だ、会ってもいねえし、ケータイにかけたって、ウンともスンとも返してこねえよ」

金田が、窓越しに、隣で同じように信号待ちをしているスモークガラスの車を眺めながら言った。

「そうか」

高場がまた短く言った。金田達からは、高場の表情は何えない。

「おいイ何だよ？聞くだけ聞いといてさア」

甲斐が文句を言った。

やがて信号が青になると、バンは走り出した。

「島の休校願いが、昨日メールで学校に届いた」

「はあ!？」

高場の言葉に、3人は驚いた。

「病気療養のため、暫く学園都市外に滞在するという理由になっていた。差出人は、島の母親だ」

「ちよつと待てよ」

金田が口を挟んだ。

「鉄雄の母ちゃんってのは、その……」

「ああ、お前達の方がよく知っているだろうな」

高場の口調は真剣だった。

「はつきり言って、島の母親と連絡をとれたことは、これまで一度も無かった。」

保護司にも聞いてみたが、全く寝耳に水だったそうだ。じゃあ島の母親が本当に出したのか、という話になるが、今の時点で確認はとれていない。何せ、どこに住んでいるのか、電話番号すらこちらには伝えられていないんだ」

「待てよ、その休校のなんたらって奴には、確か連絡先の入力が必要だろ?。」

甲斐の疑問に、高場は小さく首を振った。

「その通りなんだがな、甲斐。書いてあったのは、使われていない電話番号と、本国東京の貸しオフィスの住所だ……これをどう思う?」

「どう思うって……」

山形が顔を顰めている間に、金田が口を開いた。

「鉄雄が居なくなっただのは、誰かが一枚噛んでやがる。そいつア……」

「「アーミー」」

その場の全員の声がシンクロした。

「俺もそう踏んでいる。だから、この届けをまともに受理しちゃあいけないんだが——」

「なんだよ、額面通りに、バカ正直に受け取ったってのか!」

歯切れの悪い高場に、金田が怒りを露わにする。

「悪いがな、金田。ウチの校長のことを思い出してみる。生徒一人の親が、学校を休ませたいと、わざわざご丁寧に手紙をくれたんだぞ? それをどう思うか分かるか?」

「ああ、あの海坊主なら……」

金田は、頭髮のすっきり引いた校長の面を思い出した。

「……喜ぶだろうな、悪さするガキが一人減ったって」

「たまにはお前らと意見が合うこともあるんだな」

高場は投げ槍な口調で言い、大きくため息をついた。

「だが、それだけじゃあないんだ。お前達に——会わせたいヤツがいる」

「……そつちが本題ってか?」

「ああ」

金田の問いに、高場は答えると同時に、アクセルを踏み、バンを一層加速させた。

「……七区は嫌きれエなんだよ、いけすかねエ」

バンが止まり、降りる時になって、金田は表情を歪めて呟いた。

「学区には縁はなくても、ここには度々お世話になってるだろう? まあ付いて来い」

「いや、でも——」

甲斐は、目の前に建つ白を基調とした建物を見上げて言った。

「なんでわざわざここっちに？俺らって大抵、十区の方に連れてかれるけど？」

「まあ事情があつてな」

高場の大きな背中が入り口の扉へと近づいていった。それから、高場は壁に取り付けられた端末に何事か話しかけている。

金田達も後を追おうと一歩踏み出した所で、資材の搬入に來たのだろうか、物流業者のような出で立ちの男が山形にぶつかつた。

「痛ツ——おい、どこに目エ付いてんだオツサン！」

「すつすいませんー！」

山形が短気にドスを利かせると、男はすくみ上がった。山形よりも頭一つ分ほど背が小さく、丸眼鏡をかけた気弱そうな男だ。

「バカ野郎！警備員の膝元で何騒いでる！」

入場の許可を得たらしい高場が、唾を飛ばして怒鳴つた。

「山形！騒ぎ起こしたら面倒だぜ……ほら、行こう」

甲斐に腕を引っ張られ、山形はチツと舌打ちをし、男を人睨みすると、高場の後に続いて建物に入つて行つた。

男は、一行の姿が見えなくなるまで身を縮こませていたが、やがて帽子を目深に被り直し、早足で敷地を後にした。

しばらく歩いた男は、油断なく辺りを見渡し、停まっていた黒い車に乗り込んだ。

「動作確認を」

「了解」

助手席に乗り込んだ男は眼鏡を外し、運転席に座る黒服の特務警察官に指示を出した。

そして、ヘッドフォンを耳に当てた。

——第七学区、アンチスキル警備員第七三支部内、面会室

「おおおお、いつぞやの工業系少年達！はるばるここちまで来てくれてありがとうじゃんね」

文句は言わせない、というような圧を伴った快活な声に、うわっ、と山形が漏らした。

「なーにそんなしよぼくれた顔してんの!?今日は、あんたらにお返しするもんがあるじゃん?」

長く青みがかかった髪をひとつにまとめた女の警備員、黄泉川愛穂が、アクリルガラスの向こうで、にっ、と白い歯を見せて笑い、金田達に座るよう促した。

「お返して……あー!」

金田が大声を出した。

「バイク!」

「えっ、返してくれんの?」

「なに? いらないうっていうなら、色塗り直してアタシたちの備品にするけど?」

素っ頓狂な声を出した甲斐に、黄泉川は一瞬不満そうな顔を見せたが、すぐに「冗談!」と明るい顔に戻った。

「ウチの車庫だつて広くないじゃん? 占有してもらっちゃあ困るんでねー、

た・だ・し!」

喜ぶ金田達に向かって黄泉川は人差し指を立てて釘を刺す。

「暴走行為は許さんよ? それから、登録番号も偽装しないこと——もしまた迷惑かけるようなら、必ずとっ捕まえて——スクラップにする。いいね?」

金田達の顔から喜びが一気に引き、皆ごくりと唾を呑みこんだ。

この警備員は、本気になったら、必ず実行する。それだけの力と根性があると、暴走集団の間では言わずと知れたことだった。

「黄泉川先生、彼と引き合わせるのでしょうか?」

金田達の後ろで腕組みしている高場が、ややじれったそうに言った。

「ここのところ忙しいんだ、急ぎましょう」

「はいはい」

黄泉川は、手を引っ込めると背筋を伸ばして金田達をガラス越しに

見渡した。

「バイクを保管してるのが、第七三支部こっちなもんだから来てもらったんだけど……その前に、話をしたいって子がいてね」

いつの間にか、黄泉川の表情から笑みが消え、深刻そうな表情に変わっていた。

「……明るい話題ではないけど、君たちの意見も聞きたいんじゃない？」

そう言うと、黄泉川は背後の扉を開ける。

金田達が顔を見合わせていると、扉から、肥満体の若い男が入って来た。

「10分間ね」

黄泉川は入って来た男に声をかけると、自分は扉を塞ぐ形で背後の椅子に座った。

「お前——ジョーカーか!？」

金田が思わず指差して言った。

金田達は驚いた。彼らの記憶にあるジョーカーは、顔に奇抜なペイントを施し、威圧感を常にその巨体から放つような人間だった。

それが、目の前に座る男は、目元に大きな隈をつくり、小さな目は落ち窪んで見え、はつきりと充血しているのが分かった。顔に塗られていたピエロのペイントは洗い流されていて、ただの色黒な丸顔があるだけだった。

そして、その表情は、ひどくやつれ、生気が無かった。全体的に、目の前にいる男は、その巨体が萎びているようにも見えた。

「どうしたよ」

金田は戸惑いながらも、挑発するようにジョーカーに声をかけた。

「こんなところに入れられてるとはよ……どうしたア、餌が足りてないんじゃないの？」

ジョーカーは金田の言葉にもすぐには反応しなかったが、やがて顔をゆっくりと上げた。

「……3人だ」

「は？」

その声は、全く覇気が無く、金田達は顔を顰めて聞き返した。
「3人やられた!」

すると、今度はジョーカーが上擦った声で叫んだ。
「殺された! てめエら、あの野郎に一体何があつたんだか教えてくれるよな? どうしていきなりあんな念動能力野郎になつてんだ!」

ただ事ではないジョーカーの様子に、金田も甲斐も山形も、一度顔を見合わせた。

「あいつって——まさか」

「知らねえとは言わせねえぞ」

金田は、ジョーカーの次の言葉を聞いてはいけない気がして、身を僅かに引いた。

ジョーカーは、充血した目で金田を睨み、口を開いた。

「鉄雄だ。てめエんとこのケツ持ちの……島鉄雄が、俺の仲間を殺りやがったんだ!」

——都市軍隊本部、ラボ

「本当に、こんなすぐに出て行ってしまうのですか? 我々としては、もっと力を貸していただきたいのですがね——」

D r. 大西が困つたような笑みを浮かべて言った。

「お気持ちだけありがたく受け取っておきますよ、D r. 大西」

全くありがたくなさそうな、いつもの無表情で、木山は返事をした。
つい1週間ほど前、初めて木山が敷島大佐と大西に出会った部屋で、今まさに、木山は別れの挨拶をしに来ていた。

「島君は確かに興味深い研究対象でしたが——彼がもうここにいないとなると、当初の契約を履行することはできません。私は、元の所属に戻らせてもらいますよ。」

既に、仲間にも来てもらつて、荷物を運んでもらつていますしね」
大西には一切顔を向けずに、木山は手元の書類をビジネスバッグに詰め終えた。そして、木山は大西とは違う人物の方へ歩みを進める。
「大佐」

厳めしい表情で聳え立つ敷島大佐を、木山はまっすぐに見据えた。

「短い間でしたが——お世話になりました。感謝しています。ラボの研究に関わることで、私も、大いにインスピレーションを受けました」

「それは僥倖だ」

二人とも、感情を表に出さず、言葉を交わす。

「41号の——島君の行方を掴めることを、お祈りしていますよ」

「彼は貴方のことを、ある程度、信頼していたようだ」

探るような目つきで、大佐は木山を見た。

「もし彼から、貴方のもとへ連絡があれば、是非、我々にも一報頂きたいものだ」

「承知しました」

木山は大差に一礼すると、大西には目もくれず、部屋を後にしようとする。

しかし、部屋の出口には、兵士が二人立ち塞がっている。木山は足を止めて、眉を顰めた。

「木山博士！」

大西の呼びかけに、木山はため息を小さくついて、振り返った。

大西はにやにやしながら、片手を差し出している。

「何かお忘れではないかね？」

ふっ、と木山は息をつき、顔を上げた。繕った笑みを浮かべた。

「申し訳ない。昨日の事件の後で、失念していました」

木山は大西に近づき、バッグから小さなメモリーディスクを取り出す。

「ハンコ」

木山はそれを大西に見えるよう示すと、ケースに入れて、差し出した。

「波形データです。確かに、お渡ししますよ」

「感謝するよ！木山博士」

大西は、両手でそれを受け取り、慈しむように撫でた。

木山は、反射的に片目がひくひくするのを感じた。大佐は、ネズミでも見るような目で大西を見ていた。

「レベルアップ幻想御手！41号があれだけの力を得たんだ……他のナンバーに
投与することで、きつと彼らの能力も格段に向上するだろう——
！」

「念を押しますが、博士」

木山は喜ぶ大西を制して言った。

「あの、体力のない3人に聞かせてどうなるかは未知数です——それ
に、前以て皆さんで波形を検証するでしょうが、脳波に作用する音
というのは、能力開発を受けていない人物でも、少なからず影響を及
ぼすことが考えられます。聴く時は必ず——」

「特製の、イコライジングE Q ヘッドフォンを装着するんだろう？」

大西は待ち切れないという風に、子供の様にウキウキした表情で、
木山の言葉を継いだ。

「分かっているとも。そちらは、君は忘れずに、渡してくれたからね
……」

木山は、はしやぐ大西から視線を外し、大佐を見た。

大佐は、顔を一度扉へと向け、木山へ退出を促した。

「では、これで」

木山は白衣を翻し、兵士が開けた扉から、外へ出ていった。

大西が落ち着かずに歩き回る傍ら、大佐は油断のない目つきで、木
山が出て行った出入口を見つめていた。

「……老いぼれめ」

廊下を歩く木山は、誰にも聞こえない位の声で、そう毒づいた。そ
して、携帯電話を取り出した。

「……ああ、私だ……いや、今日はもうオフィスには戻らない……そち
らを開けておいてくれ、やっと自由になったからね」

短く相手と会話した後、木山は少し足を早めて、歩き去っていった。

——第七学区、警備員第七三支部内、面会室

「鉄雄が!？」

金田も、甲斐も、山形も、ジョーカーの口から出てきた言葉に耳を疑い、聞き返した。

「てめえ何度も言わせる気か！排気音で耳潰れっちまったのか!？」

ジョーカーは口角泡を飛ばしながら喚いた。

その後ろでは、黄泉川が考え込むような表情で黙って座っている。

「昨日の夜のことだ——突然、ふらっと来やがったと思ったら、物を浮かせたり、地響きを起こしたり——なんだ、あいつはレベル0だったんじゃないのか!？」

「いや、それは、確かにあいつは——」

「俺はあいつにやられて、気を失って——気付いたら、なっ、仲間が3人——俺のすぐ横で、血塗れで——あつ、頭をわらつれて——」

ジョーカーの声は急に小さくなっていった。そして、両手で顔を覆って俯いた。

「おいイ、こいつが言ってること、マジなんか？」

甲斐は、ジョーカーの言うことを素直に呑み込めず、近くに立つ高場に聞いた。

高場は少し首を傾げた。

「その件に関しては、我々も今調査中で——」

「タラタラしてんじゃないぞー！何でもこういう時に限って役に立たねえんだ、警備員が!!あいつを早く何とかしろ！人が殺されてんだぞ！」

ジョーカーが今度は急に顔を上げて叫び、両手で数度アクリルガラスを叩いた。

後ろの黄泉川は、そんなジョーカーを制止するでもなく、下唇を噛んでいた。

「ジョーカー！」

金田は厳しい声色で言った。

「なぜだ！なぜ鉄雄はお前らを襲った!?この間の仕返しだったのか!？」

金田の言葉に、ジョーカーは顔を一層歪めて、今にも泣きだしそうだった。

「そうだ……いや、そうじゃない……」

「なんだよ、はつきり言え！」

「分かんねえんだよ俺にも！」

山形の苛ついた言葉に、ジョーカーも怒鳴り返した。

「そりゃ、俺達とお前らは、今まで散々やり合ってきたさ。血を流したことだって一度や二度じゃねえ。だが——だが、あんな、虫けらみたいに殺すなんて、一回もなかったろう……！」

情緒不安定に、ジョーカーの話しぶりは浮き沈みする。ジョーカーは、今度は声を潜めて、金田に充血した目を向けて、話し始めた。

「あいつは言ってた……お前らにヨロシクって……他のチームを、叩き潰しにいくと……『帝国』と、名乗っていた」

「帝国……鉄雄が……」

金田は、その名を噛み締めるように呟いた。

「あんたらだって他人事じゃねえぞ！」

ガタン、と椅子を鳴らして、ジョーカーは立ち上がり、指を高場に向けて言った。

「警備員も、ジャッジメント風紀委員も——あいつは、周りの奴ら片っ端にケンカを売る気だ——早く何とかしねえと——」

ジョーカーは恨めし気に黄泉川を振り返った。黄泉川は、眉間に皺を寄せた。

「——人死には増えるぞ！俺には分かる……」

重苦しい沈黙が室内を満たした。

金田は暫く黙っていたが、やがて口を開いた。

「そうか……それで、てめえは尻尾巻いて逃げ出して来たんだな？
ジョーカー」

ジョーカーが、金田の言葉に、怒りの形相を表した。

「……なんだと？」

「仲間をやられて、それで、アンチスキル様に泣きついたってか？」

金田は、拳をギュツと握り締めた。

「怖気付いてんじゃねーよ！仲間がやられたってんなら、その落とし前をつけるもんだろーが！それでもクラウンのボスかよー！」

「金田ー！」

高場が、立ち上がろうとする金田の肩を抑えた。

「何とでも言え、この野郎……！」

ジョーカーは声を上擦らせた。

「てめえも会ってみれば分かるさ、人を殺した後に、あんな顔ができるんなら……あいつは……怪物だ

てめえの身内なら、てめえがあいつを何とかしてみやがれ、くそつたれ……」

黄泉川が立ち上がり、ジョーカーに近づいた。

「時間だよ」

ジョーカーは俯いて立ち上がり、金田達に背中を向けた。

まるで、残り火すら燃え尽きてしまったかのような雰囲気だった。

「言われなくてもそうするぜ」

部屋を出て行くこうとするジョーカーの背中に向かって、金田が言い放った。

甲斐と山形が、金田を見つめた。

「あいつは、俺の昔馴染みだ——あいつが何かおっぱじめようってんなら、俺が止めてみせる」

「金田……」

甲斐が声をかける。

金田は、決然とした表情でジョーカーの背中を睨んでいた。

ジョーカーは、少しだけ金田の方を振り返り、それから黄泉川に連れられて、面会室を出て行った。

「なあ、警備員は、あいつの言ったこと信じてんのか？本当に、鉄雄が人殺しをしたってのか？3人も？」

山形は、高場に重ねて聞いた。

「彼は、昨夜——いや、日が変わった後か——深夜に、十学区の支部に駆け込んできた。血塗れでな」

山形は「えっ」と言葉に詰まった。

「クラウンというそのチームの根城は、既に、島鉄雄とその交際相手が襲われた直後から、我々がいくつか抑えたんだ。それで、クラウンは次々にメンバーが抜け、弱体化していた。それで、最後に残った拠点が、第十学区の外れにある、今は廃墟になっているボウリング場だ。彼が言うには、そこに島が現れたということなんだが……」

「で、そこに当然オマワリしたんだろ?」

「もちろん、すぐに踏み込んだんだが」

甲斐の問いに、高場は煮え切らない答え方をした。

「彼が言うような、3人分の死体は……無かった。だが、ボウリング場のある一か所から、大量の……血痕が見つかった。血生臭い事が起きて、間もなかったのは、確かだ」

「クラウン内の仲間割れつてことも考えられねえか?」

甲斐が疑問を口にした。

「元々、ドラッグでイっちゃってる連中だし、キメ過ぎて錯乱したとか……」

「何にせよ」

バタン、と今度は金田達の要る側のドアが開き、黄泉川が入って来た。

「今の時点では、島君が関与したつてことに、決定的な証拠は無いじゃん。あのジョーカー君の証言だけだからね」

「あいつは——ジョーカーは、どうなるんだ?」

山形が、黄泉川に聞いた。

「彼はね、保護を求めてきたの。」

元々、彼には、違法薬物や暴力、恐喝に関わる様々な容疑があるから、もちろん、捕まえたんだけど——彼は、それを全て認めるって。

そして、何でもいいから、安全な所に居させて欲しいって」

「萎んじまったんだな、アイツ……」

山形の言葉を聞いて、黄泉川が視線を床に落とした。

「そう。チームをまとめ上げてた彼が、恐怖に怯える位のことがあったのだと思う。島君がどうかかわっているかは、まだはつきりとは分からないけれど……」

けれども、こないだの月曜日の件、そして今回の件。彼が急激に能力を高め、それを敵に行使しているって疑いは、強くなった」

「けれど、どうしたってんだよ？」

山形が吐き捨てるように言った。

「あいつが、なんでそんな急に力を？」

「……アーミー」

接見台の上で握り締めた手を見つめながら、金田が静かに言った。

黄泉川は、金田の言葉を聞いて、静かに頷いた。

「高場先生とも話したのだけれど……私達も、その線が強いと思う。」

ねえ、7月2日に、住宅街で、アーミーとやり合った時のこと、覚えてる？」

金田達3人は、顔を見合わせた。

「あの、奇妙な子どもと、ウニ野郎に、散々な目に遭わされた日か……」

「勘違いしないで。あれは、元はと言えばキミらが悪い。」

……まあ、それはともかく、あの日、現場からある物を押収してね。

詳しくは言えないけど、要は、精神状態を無理やり安定させて、演算能力を急激に高めるような薬なの、それ」

「何!？」

金田達は、先日、春木屋で駒場が言ったことを思い出した。

——能力強度を、その場で即引き上げる……そんな代物の話を聞いたことがあるか？

「ああ、それなら聞き覚えがあるぜ、先生」

金田が静かに言い、黄泉川が頷いた。

「やっぱり、噂になってるじゃん？警備員にも耳に入ってるの、そういうものが静かに出回っているって話は」

「じゃあ、俺らが聞いたのも、鉄雄が能力を上げたってのも、アーミーのその薬が原因ってことか？」

「断定はできん」

山形の言葉に、高場が答えた。

「奴らは極端に秘密主義だ——こちらが捜査のために問い質した所で、素直に答えを見せてはくれんだろう」

「てめえらがまどろっこしいってのは、俺もジョーカーに同感だぜ……」

金田は静かに言うと、立ち上がった。

「あいつは——鉄雄のことなら、よく知ってるさ」

養護施設の時から、ずっと一緒だったからな。クラウンの連中の城に、一人で殴りこんでいくような度胸は無いはずだ。

それが、急にタガが外れちまったってんなら——」

金田は、言葉を区切り、甲斐と山形を見やった。

「俺はあいつに会う。会って——止めてみせる。」

「でもさあ、金田ア、これからどうする気だよ？もしもあのジョーカーの野郎が言ったことが本当なら、まともになったらヤバいんじゃないの？」

甲斐が、バイクの状態をチェックしている金田に聞いた。

ジョーカーと面会した後、金田達は黄泉川に案内されて、没収されたバイクの保管庫へと来ていた。

「ともかく、鉄雄の奴を見つけなきゃ、話になんねえ」

フロントに手を置き、金田が答えた。

「情報を得るんだ……他のチーム、工業科の奴ら、駒場達……奴を見つけ出す」

「気を付けて」

金田達は、声を掛けた黄泉川の方を見た。黄泉川は柔らかな笑みを浮かべている。

「それを返すのは、私たちがキミらを信頼している証でもあるじゃん
キミたちのような——アー、元気がいい若者はね、きつとキミ達
なりのやり方で解決しようとするじゃん？」

でもね、私は、若い子たちに、傷ついてほしくない」

黄泉川は、優しい目で金田達を見ている。甲斐と山形が、気恥ずかしそうに顔を背けた。

「高場先生だって、私だってそう。事件が起こっているからには、キミらだけで突っ走らないで。話が本当なら、ただのスキルアウトの小競り合い以上に危険がある。」

そういう事態は、私ら警備員が、必ず解決する」

「ありがたいお言葉、身に染みるぜえ、センス」

金田は、ヘルメットを被って不敵に言った。

「だけどよセンス！鉄雄は、俺らの仲間だ……最後には、俺らがケリをつけてやるさ」

「ああー」

山形も、金田の言葉に威勢よく同意した。

「あいつは、根っこは気の弱い坊っちゃんさ——俺が突き詰めてやるさ」

甲斐は、金田と山形に笑いかけてから、黄泉川の方を向いた。

「なあ、黄泉川センス……バイク、キレイにしてくれて、ありがとう、ございました」

「おっ、気付いた？」

黄泉川が、にっ、と歯を見せて笑った。

「偉いぞオ、感謝は素直に言えないとじやん！

私も、乗り物は好きだからねえ、預かったからには、大切にするさ——キミらが余計な違反をしない限りはねー？」

「肝に銘じときますよ」

甲斐が言う頃には、金田と山形はもうバイクに乗り込んでいた。「行くぞー！」

そして、3人は唸りを上げて、車庫から明るい道へと走り出していた。

「制限速度と一時停止は守れよオー——!!」
走り去る3人に、黄泉川は叫んだ。

「黄泉川先生、大丈夫でしょうか……」

3人を見送った黄泉川の背中に、高場が声をかけた。

「なアーにイ、高場先生。そんなマツシブなのに、弱気になっちゃって？」

「俺も、長い事、あの職業訓練校で教師をやってきました」

高場が静かに語った。

「血気盛んなガキどものことです。血を見たことも何度だってありません。」

ただ、昨日の現場は——背筋が、何というか、ぞつとしたんです。何か、ただのケンカでは済まない、残酷な、一方的な蹂躪のような……」

黄泉川は、静かに高場の言葉を聞いている。

「彼らだってこのままじゃ無事で済まないのではないか……そして島が、もしも警備員にも矛先を向けているのだとしたら——我々も、心してかからないと危ないと思うのです」

「同感じゃんよ、高場先生」

黄泉川ははつきりと頷いた。

「私もね、実は気になることがあって——」

黄泉川の言葉に、高場が瞬きをした。

「高場先生。今回の件、絡んでるのは、本当にアーミーだけだと思う？」

「……どういうことですか？」

「あのアーミーの落とし物のカプセル。あれを、先生んとこの牧子ちゃんに解析してもらったけど——あれは、本当に強力。強力過ぎて、一般のカリキュラムの感覚で服用したら、例え一粒でも、間違いなく精神に悪影響を及ぼすじゃん？」

島君が、能力をコントロールできているなら、それはアーミーだけじゃない。他の手が加わったような気がするんじゃない」

「他の……誰だど？」

「そこはまだ……」

黄泉川がため息をついて、先ほど3人が出て行った車庫の出口を見た。

「ただね、高場先生。私は何だか——相手が、もつと別のどこかにいる気がするんじゃないよ……」

黄泉川と高場は、オレンジの夕日が差す、外の風景を見つめていた。

「ああ、おい！なんでこんなスピード上がらねえんだ!？」

「ストロークが短くなってるんじゃないやねえのか？」

「あの警備員！細工しやがったなあ！これじゃあ買物のスクーターだぜエ!？」

学校帰りの多くの学生達に好奇の目を向けられながら、金田達3人は、制限速度きっかりから何故かスピードの上がないバイクに跨って喚いていた。

「……あいつら、どつかで見たような……」

雑踏に混じって、上条当麻も、妙にゆっくりとしたスピードでうるさく通り過ぎるバイクの一行を見ていた。

「……いや、余計なことは考えるな……早いところ行かないと、半額のシールが無くなる……またビリビリに絡まれたら、貴重な夕飯が消し炭になるし……善は急ごう、ウン」

何事かを自分自身に言い聞かせて、上条は帰路を急いだ。

——都市軍隊 本部

「——以上申し上げたように、盗聴の結果、41号の行方に関しては、警備員もまだ掴めていないとのこと。10区のボウリング場跡は、もぬけの殻でした。引き続き、我々としても、職業訓練校の関係者を洗い、捜索を続けます。」

そして更に、この少年……上条当麻。第七学区の高校に通う、1年生です。先般の、実験体26号の脱走事案に際し、学生街での逃亡を手助けした疑いが持たれています。バイクの者共だけでなく、こちらもやはり拘束対象と見做すべきかと」

「何度も言わせるな。その件に関しては一度終いだ」

黒服の部下の一人、門脇が報告する内容について、大佐は椅子にか

けて、足組みをしながら慚然として言った。

「しかし、このままでは、我々アーミーの威厳が――」

「勘違いしてはならん」

大佐は立ち上がり、食い下がる門脇に対してピシヤリと言った。

「我々の任務は、名目上、あくまで、学園都市と本国との境界防衛だ。この学園都市のど真ん中で、今更スキルアウトでもない一学生に手錠をかけてみる。警備員や統括理事会、それだけではない！算盤弾きにしか目がない、本国幹部会のバカどもに付け入る隙を与えることになるぞ！」

「お言葉ですが、大佐！」

猶も門脇は食い下がった。

「先ほども申し上げたように、ナンバーズの『カプセル』が……あちらの手に渡っているのはほぼ確実かと！このままではジリ貧です、一度はつきりと行動に移すべきです！」

大佐は、門脇を厳しく見据えた後、目を閉じた。

「……不確かな情報で、警備員とまともに対立することがあつてはならん」

大佐は、再び目を開けて言った。

「いずれにしろ、今は、まだその機ではない。お前の任務は何だ？」

「――41号の、島鉄雄の搜索です」

「分かったら、任務に戻れ！これ以上野放しにしてはならん！」

「……はい」

門脇は逡巡した後、短く返事をし、それ以外に何も言わず、踵を返して部屋を出て行った。

部屋を出て行く黒服の背中を、大佐は厳しい表情でじっと見つめていた。

「……やはりそう簡単には打って出ねえか……」

廊下でふと立ち止まった門脇は、外したサングラスのレンズを拭きながら、独り呟いた。

「……ならば、こちらから仕掛けるしかない」

門脇は、何事かを決意した様子でサングラスを掛け直すと、再び歩
き始めた。

IX・黒子

41

7月12日、朝——第七学区、常盤台中学校 学生寮

「ろこ——くろこ」

「むにゃ……お姉さま……あともう少し……強めの刺激が……」

「なんの夢見てんのよ……起きなさいってば！」

「はっ!？」

ばさっ、と顔に風を受けて、白井黒子は、自分がベッドの上にいることに気が付いた。

窓辺から差し込む陽光は、既に夏の熱を帯びている。光が黒子の顔を照らし、唇の端から垂れる涎を煌めかせた。

「……なんだか、良い夢見てた気がしますの……」

「そりゃ起こして悪かったわね」

呆れたように、黒子の寝ていたベッドのタオルケットを畳むのは、ルームメイトの御坂美琴だ。

既に、黒子も通う常盤台中学校の夏仕様の制服に着替えている。

「いや……でも、こうして、王子様たるお姉さまに、眠れる姫たる私わたくしを起こして頂けるとは……黒子、幸せ者ですわ」

「布団剥いただけなんですけど」

「接吻」

「は？」

黒子は、枕をぎゅつと抱えて、美琴に向かって唇を突き出す。

「お姉さま——私わたくし、頭がぼーつとして……まだ、夢と現の境目を

漂っている気がしますの……ここは一つ、お姉さまの熱いベージュで——」

ドサアッ!と黒子は顔面に、丸めたタオルケットの一撃を食らった。

「せ、折角畳んだのに……」

「わたしが!畳んであげたんでしょうが!あんたのを!さっさとしな

「さい！遅刻するわよ」

「そう言い放って、美琴は洗面へと歩いていった。」

「……遅刻？」

「枕もとの目覚まし時計を手に取り、目を擦って、黒子は針を見つめた。」

「——んなッ!?もうこんな時間——」

「急ぎなさいよ、風紀委員ジャッジメントが遅れたら笑いものでしょお。卵、テキトーに焼いといたから」

黒子はバツ、と飛び起き、次の瞬間——

「ゴッ!？」

洗面化粧台に、強かに頭をぶつけた。

「……おどかさなくてくれる？寝起きに、しかもこんな室内で空間移動テレポートしようたって、そりゃあアンタでもミスるでしょうよ」

隣で前髪にピンを留めながら、美琴が言った。

「……お陰で目が覚めましたわ」

黒子は頭を片手で摩りながら、もう片方の手でヘアブラシを手にとった。

「……頻発するスキルアウト同士の抗争や、活発化する反政府ゲリラに対処するべく、統括理事会は昨日、一時的に、学園都市内での警察活動を、警備員アンチスキルと都市軍隊アーミーの合同で行うという協定を本国政府との間に結んだことを発表しました。これは即日発効しました。報道官によると……」

「黒子、あんた、最近寝るの遅いじゃない？疲れてるんでしょ」

「通学鞆の中身を確認する手を止め、美琴が朝食を掻き込む黒子に言った。」

「むぐ?。」

目玉焼きを一気に飲み込み、黒子は美琴の方を向いた。

「最近物騒だし……そもそも、校外で起きた事件のことで、風紀委員が仕事する必要はないんでしょ?。」

「それは——本来はそうですけど」

コップの牛乳で喉を潤し、黒子は食器を慌ただしく流しへと片付けながら言った。

「ニュースの言う通り、ここのところは、警備員だけでは手が足りていないのが実情ですの。私たちも、学園都市の平和を守る者として、余る手は尽くさなければいけませんわ」

「でもねえ……」

心配そうに気遣う美琴の背後では、点けられたテレビに、大柄で無骨な顔をした、アーミーの司令官の会見映像が流れている。

「——元来、我々の任務は、学園都市と外界との境界警備でした。しかし、外界にとつての数十年先の未来と言われる、この学園都市の高度な技術を狙って、反政府ゲリラがその動きをいよいよ危険な物にしています。今こそ、我々は、学園都市に暮らす人々の生活を、この豊かな街を、守り抜く覚悟です。それが、教職員として多忙を極める、警備員の方々の負担軽減にも繋がるかと考えております」

「実弾を用いた警備に対して、学生達の安全が却って脅かされるのではないかとの懸念がありますが？」

「それは誤解です。協定に基づいて、我々は、警備員と同等の装備基準により、行動します。即ち、実弾は基地の外へ持ち出さず、使う銃器は、あくまで制圧用の——」

「……そう言えば、アーミーに絡んだ事件もあつたつて言つてなかつた？」

「ああ——先週でしたか……私はあの時、直接遭遇した訳じゃありませんけど——」

黒子は美琴に返事をしながら、水でゆすいだ食器を食洗器に入れた。

「バイカーズ同士のケンカに私が駆けつけたんですけど。その当事者の一人の不良が、書庫バンクの情報と一致しない能力者で？それをアーミーが連れ去ったとか……？」

「改めて聞くと妙ね。なんでアーミーが、わざわざ走り屋の騒ぎに駆けつけて、その辺に生えてそうな不良をどうこうするのよ」

「軍人の考えることは分かりませんわ」

パウダー状の洗剤を食洗器に投入し、ピツとスイッチを押して、黒子は両手をタオルで拭いた。

「その件に関しては、警備員の先生方も、何か空を掴むような説明しかしてくれませんでしたし……何が起こったのやら……」

「黒子」

ポン、と、不意に黒子の頭に柔らかく、美琴の手が置かれた。

黒子は目を丸くして、自分より背の高い美琴を見上げた。

「正義感が強いのは、あんたのいいところだけど——あんまり根詰めちゃダメだよ？心配するよ？」

黒子は、優しく微笑むルームメイトの顔を見つめた。

快活な、整った顔。

笑った唇の隙間から、白い歯が悪戯っぽく覗いている。

そして、頭を撫でる掌が、温かい。

「……んな」

「？」

美琴が首を傾げた次の瞬間、黒子は両手を広げて、バネに弾かれたように飛びついた。

「んなぁンてお優しいお姉さま！天使！女神！菩薩さまアアア！！」

「——だからア黒子！もう出ないと遅れるって言ってるでしょうが！！」

ひとしきり騒いだ後に、二人は学校へと急いだ。

風紀委員である黒子に、大規模な交通事故への対応として、現場への特別な応援要請が入ったのは、その日の夜のことだった。

夜 —— 第十五学区、高速道路上

「暴走集団バイカーズ同士の抗争があり、一般車がそれに多数巻き込まれた！風紀委員は、必ず警備員の大人と二人一組で行動して！交通整理、負傷者の報告・確認を頼む！」

警備員のリーダー格らしき女性の声が響き、黒子はそれを何とか聞き取った。

メディアの本社が多く集まる十五学区だからか、近くには報道用の

へりも飛び交い、そのローターが発する回転音が、夜の街に響いていた。

黒子が、事故が起こったという方面を見ると、いくつもの投光器の先に、もくもくと立ち込める黒煙と、車両が燃え残っているのだろうか、炎の明かりも見えた。

その手前には、救急車や消防車、警備員の車両だけでなく、迷彩色を闇に溶かした、軍用車両も見えた。

「アーミー……今朝のニュースで言っていましたわね……」

黒子は指示を受けて、まず辺りに負傷者が残っていないか探した。暫くすると、欄干にもたれる形で、足を延ばして座り込んでいる一人の少年を見つけた。

「……先生……こちらに負傷者が！」

ペアを組んだ男性警備員に声をかけ、黒子は少年のもとへ駆け寄った。

夏の暑い夜だったが、丈夫そうな長丈のツナギ——ライダースーツを着ていると分かった。

額から、血を流して呻いている。

「風紀委員です！大丈夫ですか？分かりますか？」

「……すまねえ、足をやられた——力が、入らねえ」

伸ばした片足は、ツナギの生地が摩擦によって広く溶け、赤い血に塗れた肌が露出していた。

膝から先が、妙な角度に曲がっている。

「骨折かもしれん、救護班!!担架を！」

ペアの警備員が、背後に向かって大きく叫ぶ。

「人様に迷惑かけるだけでなく、自分まで痛い思いをしたでしょう？助けますから、もうやめに——」

「な、なあ、あんた、風紀委員だろ？」

痛みがひどいのだろうか、呻きながら、少年は黒子の顔を見て言った。

「気を付けろ——奴らは、アンタらも狙ってるぞ……」

「狙う？誰が？」

黒子は、少年の言わんとする意図を掴もうとした。

「奴らだ——『帝国』だよ」

少年が顔を歪めながら言った。汗が血に混じって、頬を伝い落ちていくのを、黒子は見た。

「帝国？」

「俺も、仲間も、どんどんやられてる……あいつらは、いかれてる。特にボスは——アイツは、化け物だ」

「アイツって——」

「担架が来た！喋るな！もう大丈夫だぞ！」

応援が運んできた担架に乗せられ、少年は、救急車の方へと運ばれていった。

「ばけもの……」

一体、彼は何を伝えたかったのか。黒子は一瞬考え込んだ。

「白井！悪いが、休んでいる暇はないぞ！」

「あつ、ハイ!!」

警備員に声をかけられ、黒子は思考を振り払い、他の負傷者を探すべく、駆け出した。

30分程すると、現場も多少落ち着き、風紀委員の生徒達にも一息つく余裕が出て来た。

黒子も、少し離れたところへ歩き、支給されたペットボトルの飲料を口にした。

「……アーミーと警備員との合同警察。その初回ともなれば……」

まだ、近くの空を飛び続けるヘリコプターの姿に目をやり、黒子は独り言ちた。

「マスコミの目も多く注がれるものですかね……」

「もし」

黒子は、壁高欄の近くで暇を持て余していそうな、2人組の若い士官に話しかけた。

「ん？——おお、ジャツジメントのお嬢さんか、何だい？」

片方の士官が黒子の腕章に視線を留めた後、顔を見て返事をした。

口髭を蓄え、艶のあるバリトンの声だった。

「ニュースでも聞きましたけど……なぜ、アーミーの方々が急に警備員と協力することになったんですの?」

「そりゃあお嬢さん、君のような、若い子供たちの命を守るためさ」
「……お言葉は嬉しいのですが」

黒子は、子ども扱いされたようで不満だった。

「私、これでも中学生ですの。もう少し詳しい説明を聞かせて頂いてもよろしくて?」

「ずいぶん高貴な喋り方をするんだなあ、最近の学生さんは!」

もう一人の、より小柄な兵士がからからと笑う。

「いやあ、俺達も最近入隊したばかりかだね?詳しいことは正直分からないんだけど、警備員の先生方は、普段教師として忙しいんだろ?かと言って、君らみたいな風紀委員の子供たちを危険にさらす訳にいかない——そこで、俺達の出番が回って来たんじゃないかな?」

「お言葉ですが——2週間ほど前の住宅街での騒ぎはご存じでしょうか?」

黒子は、相手が物腰の柔らかい人物だと理解し、敢えて相手の痛い所を突いて探りを入れようとする。

「はつきり申し上げまして、学生——特に私達風紀委員は、貴方方に對して、あまりいい印象を抱いていませんの」

「そりゃ手厳しい。よく分かってるじゃないか、君」

意外にも、口髭の士官の表情は柔和だった。

「ただね、個人的な意見だが——警戒されて当然だと思おうよ?」

「まあ、ご自分でそうお考えで?」

「そうさ」

口髭の士官が続ける。

「この街は、君たちのような若い力によつて、栄え、姿を変えていく街だろう?そこに、銃を担いで戦車に乗った軍人が押し入るつてのは——明らかに、民主主義の蹂躪だ。アーミーつてのは、所詮、学園都市の技術・自治を奪い取ろうとする、本国政治家共の飼い犬、ハゲタカに過ぎないのさ。いずれは民衆の力で——」

「おい、竜！」

もう一人の士官が、口髭の男を制した。竜と呼ばれた男に、相方が顔を寄せて何事か囁いた。

黒子は訝しんだ。竜と呼ばれた口髭の男の言葉は、明らかにアーミーの一士官とは思えない口調になっていた。

「あの……お考えは分かりましたわ、ありがとうございます」

ただ、もう一つだけ、伺いたいのですが……」

「おう、何かな？」

「最近——アーミーが、バイカーズの能力者を一人、拘束したっていうのは、本当ですか？」

「何?！」

二人の士官が、一気に真剣な表情になったので、黒子は面食らった。

二人は顔を見合わせると、一気に黒子と距離を詰めて来た。

「君、一体どこでそれを？」

「えっ?えっ?そりゃ私、風紀委員ですから、そういった報せは——」

「いつ?どこで?そいつはどんな見た目だった——!」

口髭の男が、黒子に迫って来る。

「子どもか?女の子か?男の子か?いや——老人のような見た目じゃなかったか!?!」

「ちよ、ちよっと!あんまりいっぺんに聞かれても——」

「おい!そこの二人!持ち場を離れるな!!」

遠くから、別の兵士の怒鳴り声が聞こえ、二人の男は、顔を見合わせた。

「——上官だ、竜。ひとまず戻るぞ」

「ああ、だが島崎。ちよっと先に行行っててくれ」

相方に促すと、竜と呼ばれた男が、胸ポケットから紙切れとペンを取り出し、急いで走り書きをした。

「……俺の番号だ。君が耳にしたという、その能力者について、詳しく話を聞きたい。後で連絡してくれ。できるなら、なるべく早く、落ち着いて話をしたい」

「ええ？そんな、急に——」

「俺は竜っていうんだ。頼むぞ！」

竜は、無理やり黒子の掌にメモを押し付けると、相方の後を追って、事故現場の方へ走り去っていった。

「……強引な殿方は好きませんわ」

黒子は文句を垂れながら、掌に寄せられた皺になった紙を見つめた。

——常盤台中学校、学生寮

『帝国?』聞いたことないわね」

歯磨きを終えてパジャマ姿の美琴は、テーブルでぐったり顔を伏している黒子に言った。

「というか、風紀委員ジャッジメントやってるあんたが知らないんなら、あたしだって分かんないよ」

「そうですわね……」

課外時間の特別招集を終えた黒子が、学生寮に戻ってこれたのは、夜の8時も回ったところで、黒子の体にはどつと疲れが押し掛かっていた。

「事故処理の後、支部に戻ってスキルアウト絡みのデータベースを探索してみました……めぼしいヒットはありませんでしたわ。結成して間もないチームでしょうかね?」

「ていうかき、まず名前がダサイよね」

美琴が湯沸かし機のスイッチを入れた。

「なんなの? 帝国だなんて——いかにもちよつとつけあがった三流、四流の不良共が付けそうなネーミングじゃん? で、そういうお調子者は、後々もつと強力な相手にボコボコにされるって、お決まりの展開になるような気がするけど。」

アンチスキル警備員の先生に聞いてみたら?」

「聞きましたわ」

黒子は両手をぐぐつと伸ばした。

「先生方は、最近名前を耳にしたことがある程度のものでしたの。というか、忙しそうであまりまともに答えてくれませんでしたけど……」

「それよりもさ、黒子。私が心配してんのは、その、アーミーの男に誘われたって件よ!」

急速に沸騰したお湯を、カップに注ぎながら、不満そうに美琴が言った。

「出会って即会いたいだなんて——絶対悪いナンパじゃない！無視よ！無・視！」

全く、アーミーの規律もあつたもんじやないわね……」

「場所と時間にも寄りますけれど」

黒子は、テーブルの上のメモにかかれた電話番号を見つめた。

「……ただ、私もちよつと気になることがありますの」

「もしも、行ってくんなら」

コト。と、白井の目の前に、カップが置かれた。

甘いココアの香りが漂い、黒子は頭を上げた。

「私も付いて行くわ。あんたが強いのは十分承知だけど、一人より二人の方が、安心でしょ？」

「……お姉さまには、遠く及びませんわ」

優しい美琴の顔を見て、黒子ははにかみ、美琴の淹れたココアのカップを手にした。疲れた自分の顔が、表面で波打っている。

じんわりと、両手の平に温かさが広がっていく。

7月13日（木）夜——第八学区、商店街

「おお、ほんとに急にきてくれて、すまないね！」

「いえ……大の大人が、わざわざ女子学生を呼び出して話そうとは、どういう御用で？」

明るく声をかけてくる竜に対して、黒子は警戒の色を露わにしながら聞いた。

学生街とは異なり、より年齢層の高い人々が行き交う商店街。その一角で、竜と島崎が待っていた。二人とも、昨晚出会った時の軍服姿ではなく、私服姿だった。

「まあまあ、立ち話もなんだから……どうだい、お腹はすいてる？」

「まあ……」

「安心してくれよ、奢るさ。それに、ここらは教職員も多い街でね。そんなところで、若いお二人に悪さしようなんて企む奴は、よっぽどのバカだ」

「そつちの子が、友達かい？」

竜より一回り小柄な男、島崎が、黒子の斜め後ろに立つ美琴を見て言った。

竜に比べ、こちらは眼光が鋭く、やや愛想の悪い印象を与えた。

「初めまして、……黒子の友達です、御坂って言います」

初対面の大人に対して、少しつつかえながら、美琴がぺこりと頭を下げた。

「いいとも、白井さん。友達連れてくるって言ってたもんね。ウン、飯は、多い人数で食べる方が、より旨い……」

ところで、二人とも、急がせてしまったかい？」

「どうして？」

黒子が尋ねると、竜は少し申し訳なきような顔をした。

「二人とも、制服姿じゃないか。着替える暇もなかったってんなら……」

「それはお気になさらず。校則ですので」

「そうか、考えてみりや常盤台だもんなあ！ 厳しいねえ」

黒子は、竜の言葉に違和感を覚えて、美琴の顔を振り返った。美琴も、黒子と同感だったようで、怪訝な顔をしていた。

「まあ、服に匂いがついたらごめんよ——タクシー代弾むから、許してくれな？」

黒子と美琴の表情の変化に気付いていないのか、気前の良いことを言いながら、竜が正面にある建物の入り口へ案内する。

昔ながらの「めし」とかかれた白い暖簾をくぐり、引き戸に竜が手をかけた。

戸を開けた瞬間、がやがやとした喋り声の渦と、食器同士が奏でる音の波が、喧騒の海となって耳を満たした。肉や魚の脂が沸き立たせる匂い、醤油や味噌の醸し出す匂い、それらが溶けあって、どこか懐かしい夕餉の香りとなって鼻腔をくすぐる。

黒子も、美琴も、思わず顔が綻んだ。

「いらっしやい！ 竜さん！ 島崎さん！」

声が飛び交う中、一際明るく元気な声で出迎えたのは、黒子や美琴

よりもやや年上だろうか、エプロンを身に纏った高校生ぐらいの女の子だ。はつきりとした目鼻立ちが、どこか凛としたモデルのような雰囲気漂わせている。

「どうも——4人なんだけど、入れる？」

「ちようどいっぱいになるとこですよ。運がいいね——あら、後ろのお二人は？」

「昨日知り合ったばかりだがね」

竜が振り返って黒子の顔を見たので、黒子は慌てて表情を引き締めた。竜の言う通り、昨日の今日で誘いに乗っているのだ。油断を悟られたくはなかった。

「見ての通り、お嬢様方だ——VIP待遇で頼むよ」

「お新香、2、3枚増やす位でいいなら——ていうか、まさかこんな若い子に手エ出すつもり？」

「誤解しないでくれ。俺は少なくとも健全だ。こいつが酔っ払って何かしようもんなら、俺が引っ叩いて、頭を冷凍庫に突っ込んでやる」

島崎が言うと、「ご心配なく」と竜が笑う。

「ごめんね、竜に付き合わせちゃって」

4人掛けの広い席に案内される途中、警戒している表情を察したのか、少女が黒子に声をかけてきた。黒子は手を振った。

「いえ、お気になさらず！」

「あの人、軽いところがあるから——何か変なことされそうになったら、大声上げてね。この店には警備員も多いし、何より、うちのおばさんが黙ってないから」

少女の言葉を聞いて、黒子と美琴が厨房に目を向けると、小山のよな隆々とした背中が見えた。女性だろうか、不釣り合いな割烹着を身に纏い、腕を振るっている。

その後ろ姿だけでも、かなりの屈強な人物だと分かった。

「……ありがとうございます」

「どもー」

黒子が礼を言うと、少女はにこつと笑顔を浮かべた。

礼を述べつつ、黒子は「そんな必要はないけれど」と心の中で呟い

た。

もしもお姉さまに手出しするような輩なら——その場ですぐに
磔にしてやる。

「なんにする?。」

座るや否や、品書きを示して竜が聞く。美琴と黒子が顔を見合わせ
る。

美琴は少し戸惑ってから、顔を上げた。

「ええつと——私達、初めてなんで、おススメを教えてくださいませ
?。」

「お?そうか、ならサンマだ!ここの焼き魚は一味違うぞ!今の時期
は人工だが——味は、天然に負けちゃいない!

おおーい、ケイちゃん!!」

ハアイ、と返事をしてやってきた先ほどの少女に、竜が4人分の注
文を伝えた。竜はついでに酒を注文しようとしていたが、隣の島崎か
ら止められていた。

少女は承り、水と漬物の小皿を置いていった。

「改めて……俺は竜。こっちのお堅い面した方が、島崎ってんだ。
どっちもしがない、一兵卒さ」

竜の雑な紹介に、島崎は頭を僅かに下げる。竜に比べると、どうも
厳しい表情が抜けない様子だった。

相手の名乗りを受けて、黒子と美琴も自己紹介をした。

「それにしても、ここは大人が多いのね」

美琴が周りで飲み食いする客を見渡して言った。

「学生街で普段生活してる分、こんなに大人が集まる食堂に来たのは、
いつぶりかってぐらいです」

「元々ここらは、教職員が多い学区だからな。中でも、君らの第七学区
にも近い位置にあるし、仕事帰りの先生にとって、人気の商店街なの
や」

竜の言葉を聞いて、黒子は改めて周りを見渡す。確かに、客の姿を

見ると、スーツ姿よりも、教員特有のジャージ姿が目立つ。それに混じって、作業着姿の人物もいる。

「貴方方のような、アーミーのみなさんも、この学区にお住まいでいらっしやって？」

「まあ、そんなとこだ。それで、ここは行きつけって訳」

「……工事関係の人も多いですわね？」

「それはな——来年の——ほら、大なんとか祭」

「大覇星祭」

黒子が指摘すると、竜は箸先に摘んだ一夜漬けを揺らした。

「そう！それ！」

竜が箸を揺らすのを見て、黒子はあからさまに顔を顰めた。

「オリンピックのエキシビションに、学園都市の能力パフォーマンスを入れるってんだろ？それで、新しい競技場が二〇区の方に建設中ってことで、今ここは、外からの出稼ぎも多い。朝、ここから建設現場へ出て働く連中が、夜にはここで飲んで、食って、遊んで、金を落とす。そういう、今まさにホットな街なんだよ、ここは！分かったかい、お嬢さん？」

「どうして、私達が常盤台だと分かりましたの？」

黒子が、店の入り口で会話した時に感じた疑問を、竜にぶつける。

「制服で分かるさ」

「随分と、お詳しいのですね？」

「俺と島崎は、この夏に外から異動してきたんだがね？常盤台と言えば、学園都市の顔みたいなモンじゃあないか！色んなところでよく写ってるから、有名だよ？」

「そうですね——今季のCMにも、使われましたものね。お姉さま？前に、CMの被写体の依頼、来ましたものね？」

「へっ？そうだったっけ……」

美琴は、急に黒子から振られた話題に、すぐに反応できないようだった。美琴の小皿からは、漬物が既になくなっていく。

黒子は美琴に目配せした。美琴は、調子よく笑う竜の顔を一瞥すると、黒子に顔を寄せて、小声で話した。

「あれ、そう言えば……今年のCMって……」

「そうそう！見た見た！器量のいい子が揃ってるもんだねー学園都市は！」

「竜！下品だぞ……」

竜は二人の様子に気付かず、島崎に注意されている。

そうこうしている内に、黒子たちの目の前には、芳しい香りを放つ、脂ののったサンマが、味噌汁、ご飯と共に運ばれてきた。

なるほど、確かに美味しい。控えめに醤油を垂らした大根おろしを添えて、一口目を口に運んだ黒子の腹が鳴った。柔らかい肉から滲み出た脂が、舌の上で醤油と大根の酸味と混ざり、口の中にマーブルングされていく。学園都市に来る前に、実家で毎年決まった時期に食べた、あの味だ。

「すまん、お嬢さんたち、普段はもつといいモン食ってんだらうから、落ち着かねえだろうが——遠慮なくつついてくれ！ここのおばさんの作る飯は、どれも旨いんだからな！なあ、チヨコさん!!」

島崎が声をかけると、カウンターの奥で、割烹着の女将さんが、包丁を握ったままの片手を挙げた。

「いえ、そんなこと——美味しいです、とても」

黒子も美琴も、緊張がやや緩み、懐かしい味に舌鼓を打った。

「で、聞きたい事とは？」

食事が進む中、黒子が本題に切り込んだ。

「ああ。君が昨日言っていた、その、軍が捕まえたっていう能力者の件だがね」

竜の言葉の調子が、一段低くなった。

「知っていることを、教えてほしい」

「それはどうしてですか？と言いますか……貴方方がアーミーなら、寧ろそちらの方が詳しいのでは？」

「末端までは、情報が降りてこないんだよ」

至極もつともそうな理由を、竜が述べた。

「いや、ていうのはさ、俺には年の離れた妹がいるんだが……学園都市の学生でね。常盤台じゃないんだが……それなりに能力開発も上手くたってたつて聞いているんだが、最近連絡が取れなくてね——何か、悪いことがあったんじゃないかって心配なんだ。それで、今回のタイミングよく異動してこれたから、元気にしてるのか、確かめられたら嬉しいんだ」

黒子は、箸を置いて訳を話す竜の顔をじつと見た。
少なくとも、嘘はついているようではないように思えた。

「竜さん。常盤台じゃあないなら、分かんないかもしれないですけど……学校とお名前を聞かせてくれてもいいですか？」

「学校は……二之腕高校。随分変わった名前だよな。」

で、名前だが、俺の苗字は釧路っていうんだが」

美琴の質問に、竜が答える。

「名前が更に珍しくてね——『いこ』っていうんだ」

「いこ？」

「帷とほりっていう字に、子どもの子。……知らない？知らないか……」

黒子は、美琴と顔を見合わせた。美琴は首を振った。

「……風紀委員を務めていますから、他の人よりは、この街の情報が多く入ってきます。」

もしも、何か耳にすることがあれば、連絡差し上げますわ」

「ありがとう。そうしてくれると、嬉しいよ。アーミーと揉めたんじゃないやなぎやいいんだが……」

黒子の申し出に、竜は小さく笑みを浮かべた。

「……君はどんなことを聞いている？」

あまり目の前の食べ物に手をつけていない島崎が、静かに聞いてきた。
た。

「その、アーミーが拘束したという能力者については……」

「私は、その現場を直接みてはいませんわ」

黒子が答える。

「ただ、誰が連れていかれたかは検討がつかず……残念ながら、竜さんのお探しになっている妹さんではありません。スキルアウトの少

年ですわ」

黒子の言葉に、竜が頷いて、「構わない。続けてくれ」と言った。「先週の月曜日の夜。第七学区の外れにあるコンテナ場で、バイクーズ同士の小競り合いがありましたの。そこから、軍の車両に運ばれていった少年……素性は知れませんが、何らかの能力を行使したと疑われていますの。ここまで、お二人はご存じで？」

竜と島崎は顔を見合わせて、首を振った。

「……すまない。初耳だ」

『帝国』という、最近活動し出始めた、新しいスキルアウトの一团については？」

「昨日の事故を起こした奴らだな？」

黒子の続く問いに、今度は島崎が答えた。

「一方的に、派手に相手を打ちのめしたらしいが、警備員以上に掴んでいる情報は、まだ無いと思う」

「後者はともかく……先に話したことは、事実であれば問題がありませんわ」

黒子はやや厳しい声色で言った。

「警備員との共同警備権について発効したのは昨日ですから……先週その時点では、特別警報の発令なしには、アーミーに学園都市の住民を拘束する権利は無かった筈ですわ。ですから、警備員の先生方も、風紀委員としての私も、どういういきさつなのか、詳細をお聞かせ願いたいものですわ」

「確かに、君の言う通りだ」

竜は、真剣な顔をして聞いた。

「上官に、このことを話してみようか？……いや、相手にされないだろうな」

「警備員からも既に何度も問い合わせしているようですが……協定はさて置き、警備員とアーミーは、仲が良い訳では決してありませんからね」

「すまないね、あまり力になれなくて」

竜が黒子に言った。

「もし何か分ければ……妹のことと引き換えて訳じゃあないが、こちらからも、君に教えよう」

「感謝申し上げますわ」

少しの間、沈黙が流れた。

すると不意に、ドンツとウォーターボトルがテーブルに置かれ、4人の目がそちらに向いた。

「ずいぶん話し込んでるみたいだけど……冷めたらもつたいないですよ！お冷のお替りは？」

ケイと呼ばれた少女の明るい声で、4人の食事が進み出した。

「あの二人は、アーミーじゃありません」

竜に渡されたお金で乗った帰りのタクシーの車中、黒子が発した言葉に、美琴がはつとした。

「……やっぱりそう思う？」

「学園都市内に駐留するアーミーの夜間外出には、厳格な規則があった筈。基本的に、皆基地内の宿舎に滞在し、寝食はそちらでなさっている筈ですわ」

「アーミーの基地って、確か……防音壁のある、第二学区！」

黒子は頷いた。美琴も思い当たる節があつたようで、言葉が続ける。

「それに、常盤台中学が外部へのCMに採用されたのは、去年……今年、枝垂桜学園！彼が言ったことは、間違っているわね」

「あの殿方……美味に舌鼓を打つ時、確かにお互いの気は許せますが、自らの気も緩んでしまったようですわね」

「じゃあ、あの人たちって——アーミーに化けてるってこと？」

「昨晚、事故現場で話した時から、どうも違和感がありましたの」

黒子は顎に手を当てた。

「反権力的思考が垣間見えたというか……となると、恐らくあの二人は——」

「……ゲリラ」

夜の街の対向車の明かりが、一瞬、深刻そうな顔をした美琴の顔を

照らし出した。

「黒子。警備員に相談した方が……」

「ええ。はつきりとした証拠はまだありませんが……何か企んでいるのは間違いないですわね」

黒子は、心配する美琴に答える。

『『帝国』という集団。アーミーの動き。そしてゲリラ……お姉さま。

黒子は、何か大きな事件が、この先起きる予感がしますの」

心配する美琴の横で、黒子は思考を深める。

（そして、昨日の竜という男の言葉……老人のような見た目と聞いてきた。妹のことを心配しているのだとしたらおかしい……一体誰を探しているのかしら？）

黒子と美琴を乗せたタクシーは、夜の街を学生寮へと向かって駆けていった。

夜も遅くなった頃、閉店後の食堂の中、客が入ることの無い裏手の一室で、竜と島崎を含めた数人が、額を突き合わせて話し合っていた。「つまり、そのアーミーに収容されたスキルアウトのボウズってのが、新しい実験体^{ナンバース}ってことで、恐らくビンゴだ」

竜が話すと、島崎は顔を顰めた。

「ややこしいな。今月初めの日曜に、第七学区の住宅街で騒ぎを起こしたやつとは別ってことか」

「ああ、そっちは26号。今日、あの風紀委員^{ジャッツメント}の嬢ちゃんが言ったのは、正確には分からんが、もつと上の番号だ。多分、30番台後半、40番台ぐらいのな」

「竜、今更だけど、ほんとに大丈夫？」

二人の話に割って入ったのは、ここにいる者の中で最も若い少女、ケイだ。

「ジャッツメントの子とあんな風にベラベラお喋りしちゃって……アーミーが言ってたでしょ？ 私達を抑えるために警備員^{アンチスキル}と協力するって。もし、あの子が感付いて、周りに私達のことを話したら……」

「その事なら、ケイ。案外心配する必要がなさそうだ」

竜がケイに向かって言った。

「なぜそう言えるの？」

「実は、最近、ある組織から、俺達のもとに接触があった。統括理事会とも繋がる組織だ。」

「理事会と？」

ケイが驚いて目を丸くした。

「そうだ」

竜が手をテーブルの上で組み、より顔つきを真剣なものにした。

「日曜日の、26号の一件を始め、ここ最近、アーミーと学園都市中枢との関係は、急速に悪化している。今朝のニュースで、アーミーのリーダーが言っていたことは……まあ、上辺だけのことだ。」

加えて、本国政府内でも、予算削減の流れからして、奴らアーミー

は目の上のタンコブだ。ここ学園都市に出張ってきてる連中は、特にな。

利害が一致しつつあるのさ。変な方向に曲がった枝を、剪定しよう
とね——島崎」

竜は、ケイから島崎へと顔を向けた。

「我らがハツカー！書庫バンクに探り入れたんだろ？ケイに教えてやんな！
……今夜話した、あのお嬢さん二人——えっと、なんて言ったっけ？」

「風紀委員の、この二つ縛りの方が、白井黒子。空間移動能力者テレポーターで、常盤台の一年生だ」

島崎が薄笑いを浮かべて、テーブルの上にタブレットを置く。

画面には、店の天井の一点から写したと見られる画像が表示されている。席に座った、黒子と美琴が映っている。島崎が、画像の人物を指差した。

「んで、もう一人が……こいつが、驚きだ。御坂美琴——超電磁砲レールガンだ」

「レールガン!？」

ケイの声は思わず裏返った。

「あの——第3位の？」

「な？敵に回したくはないだろ？」

分かりやすいケイの反応に、竜が笑いながら答えた。

「俺だってそこまで馬鹿じゃあない……だが、安心してくれ。組織あっちの人間曰く、アンチスキルにも手を回しておく。俺達から噛みつかない限り、アンチスキルやジャツジメントは、少なくとも敵じゃない。白井っていうあのお嬢ちゃんも、もしも上司に俺らのことを報告したとして、相手にされない筈だ」

「確証はあるのかい？」

カシャン、という音と共に、入り口近くの椅子に座るチヨコが聞いた。

工具箱を傍らに置き、大きな掌の上で、手入れを終えた拳銃のスライドを入れた所だった。

「あたしらは、まだこの街じゃあ根無し草さね……下手に目を付けられると、あつというまに雀り取られちまうよ」

「その組織からは、具体的な依頼も受けている」

竜が、他の3人に向けて言った。

「26号の脱走を機に、学園都市の科学者連中の中に、ナンバーズに興味を示している者がいるらしい。俺達は、その組織からの支援のもと、ナンバーズの情報……可能であれば、その個体を連れ去るために、ラボへ潜入する」

「ラボへ……」

ケイが息を呑んだ。

「武器と資金だけじゃとても足りないわ。人的資源を寄越してくれないと」

「具体的にはもう少し詰めるが……学園都市側も、こういう仕事に向いた連中を派遣するそうさだ。」

いわゆる、『暗部』ってヤツだな」

「頭のネジが何本か抜けた、狂犬みたいな連中だよ」

島崎が眉間に皺を寄せて言った。

「竜……俺はあんまり、お友達にはなりたくないぜ」

「ああ、隠密に、できるだけスピーディにやろうじゃないか」

竜が楽しそうに言った。

「幸い、今、アーミーもアンチスキルも、浮足立っている……そのスキルアウトから釣り上げた実験体というのも、噂じゃ脱走したらしい。きつと血眼になって探している最中だろうさ。アンチスキルだって、『帝国』とかいう連中にも対処しなきゃならんし、人手不足らしいからな」

チャンスは、そう遠くない内に訪れるぞ」

竜は背筋を伸ばし、島崎と視線を合わせた。二人はほぼ同時に頷いた。

「俺は、東京と、理事会側の組織との調整を進める。方針が決まれば、すぐに知らせる。」

島崎は、アーミーやアンチスキル、ジャッジメントの動きを探って

くれ。そっちの情報も、旗を上げるタイミングを左右する」

「簡単に言うな……アンチスキルやジャッジメントのネットワークは、書庫よりもずっと手強いんだが……まあ、やるだけやってみるよ」
島崎が答えた後、チヨコが拳銃を堅牢なケースの中にしまい込み、パチンと蓋をした。

「ここは暫く、臨時休業だね」

声量は大きくなるとも、威圧感をもたせた重たい声だった。

「本店の方に移るさ。もうすぐドンパチするってんなら、そっちで準備をしないとだからね」

「ああ、チヨコ。武器の準備を頼む。それから、お前さんが持つてる、スキルアウト連中へのコネを使って、新入りのナンバーズって奴の情報も得られればありがたい」

「ああ、駒場の坊ちゃん達にでも聞いてみるよ。この辺りじゃあ、一番顔が利いてるだろうからね」

チヨコが頷くのを見た竜は、最後にケイへと顔を向けた。

「それで」

ケイが言った。

「私は何をすれば？……待って、その顔、なんかめんどくさいことを頼もうとしてるでしょ」

「とんでもない。若いモン同士、よろしくやってほしいんだよ」

竜がケイに笑いかける。

「さっきの二人……常盤台のお嬢様たちに、近付いて欲しいんだ」

竜の言葉に、ケイはあからさまに嫌そうな顔をした。

「なんで？ていうか、どうやって？」

「あのジャッジメントのお嬢さんと、今夜話して感じたんだ。あの子は、分析力、情報収集力に優れた、聡明な子だっとき。俺は、『帝国』ってガキどもの中に、新入りのナンバーズが関わってるんじゃないかと踏んでいてね。きつと、あのお嬢さんは、俺達よりもずっと早く、そいつの情報を得るだろうよ」

「訳は分かったけど……それで、私にどうしろって言うの？」

「島崎に、あの子が所属している支部のスケジュールを探らせるから、

近い内に、その辺の道端で偶然会ったフリをして、友達になってくれ。そうだな……今度の週末にでも、第七学区の学生街で会えるんじゃないか？最近のジャッジメントは大変だな！休日返上で出勤することも多いらしいぞ」

「そんなア、私の仕事だけ、なんでそんな曖昧なの……」

ケイは、呆れたようにため息をついた。

「大体、テレポーターのジャッジメントと、おまけに超能力者のレールガン^{レベル5}を、敵に回すようなこと、ゼツツツタイにごめんだからね！」

「彼女らとまともに戦って勝てる奴は、こん中にはいないだろうさ……ああ、チヨコは分からね」

チラリと竜がチヨコに視線を送ると、チヨコがフンと鼻を鳴らした。島崎がぷつと吹き出した。

「まあ、俺や島崎がこれ以上近付くのは警戒されるだろうから……お前がいけばそう不自然でもないだろう」

「……ヤバくなったら、即退散するからね」

ケイはため息を深くついて、渋々了承した。

「竜」

ケイやチヨコが出て行った後、島崎が相方に声を掛けた。

「大丈夫か？」

「なんだ、いきなり」

怪訝そうな顔をして竜が立ち止まる。

「お前……焦ってる気がするぞ」

「そんなことないさ」

「……妹さんのことが、心配なんだろう？」

島崎がじつと竜の顔色を窺うと、竜は一息ついて、目を閉じた。

「正直に言えば、な」

「……見つかるといいな」

「ああ」

「ケイに、ジャッジメントへ近づいてくれと頼んだのも、彼女の情報が少しでも入ればなと思って……いや、俺のワガママだったのは、充分

に分かつてるんだ」

「別に責めちやいないさ」

島崎が、竜の背中をポンと叩いた。

「俺達は、金に目の眩んだ権力者どもは違う。肉親のことを想って、当然だろう？それが、正しい人間つてもんだ」

「ああ」

竜は、携帯電話を手に、画面を見つめた。

「俺の、たった一人の、家族なんだ」

画面には、若い頃の竜と一緒に、笑顔を満面に浮かべた、長い黒髪の少女の姿が映っていた。

7月14日（金）

——第七学区、ジャッジメント風紀委員第一七七支部

「——第十学区で昨日発見された、3人の身元不明の死体は、凶器が発見されておらず、念動力系の能力を行使した形跡がみられます。容疑者は、レベル3強能力者、もしくは、レベル4大能力者相当であることも考えられ、高い脅威です——」

集まった風紀委員のメンバーを前に、眼鏡をかけた女学生が話している。

「これに加えて、『帝国』と名乗る新たなバイカーズ・スキルアウト集団の活動、バイロキネシス発火能力を用いた強盗事件、アルミ缶を利用した爆弾事件……ここ第七学区でも、治安悪化は明白です。したがって、アンチスキル警備員の先生方から新しい指示がありました。

次の活動は、ジャッジメントの安全を守るため、原則禁止となります。一、平日の、学外・支部建物外での活動。二、学内外を問わず、平日20時以降の活動。三、単独での休日の活動の3点です。ここまでの、何か質問は？」

腕章を身に付けた、男子学生が手を挙げた。

「確認させてください……つまり、休日二人以上でやるなら、学外で活動に当たれるってことですか？僕らの安全を守るって言っているの？」

「そうです……ただ、これは、正直私も微妙に思ってるところで、
やや歯切れ悪く、眼鏡の女子学生が答えた。

「二昨日の夜、十五学区で起きた交通事故の処理に駆り出されたけれど、そういうのはこれからナシ。けれども、休日に関して言えば、活動に当たれる。というよりも、何かしら招集がかかる可能性が高いということでした。」

最も、既に校外で多くの手柄を挙げてしまっている、とっても優秀な後輩が、この中にはいるけれどもね」

女子学生が顔を向けた先には、背筋をピンと伸ばした白井黒子がいる。

「……お褒めの言葉を頂き、真にありがたき幸せですわ、固法先輩」

「白井さん、もしかして、今月もう始末書、書いたんですか？」

黒子の隣から、マスクを付けた初春飾利が囁いてくる。風邪気味らしい。

「高場先生が一緒だったから、あの時は大丈夫だったはずでは？私、書いてませんよ？」

「……いえ、確かにあの日は書いていませんの。けど、それ以外に……」

黒子は苦い顔をしていた。

「人手不足、ここに極まれりって感じなんだろう？要は」

黒子よりも前に座っている、茶色がかったロングヘアの上級生が、頬杖を突きながら言った。

「アーミーが力を貸してくれるってんなら、アイツらを頼ればいいのにさー」

「……そここのところの大人の事情は、分からないけれど」

固法が顔を顰めて言った。

「ていうか、アンタは会議中くらい腕章をつけなさい」

注意された茶髪の生徒は、肩を竦めて、鞆から腕章を取り出した。

「先輩、質問いいですか？」

初春が拳手をすると、「どうぞ」と固法が了承した。

「休日の活動は、単独でなければ例外的に認められるという理解でい

「いのですか?」

「ええ。2名以上ということ、アンチスキルの先生と、または複数のジャツジメントでなら、行動が認められます——私としては、特にあなたのような1年生は、先輩と組んでもらえた方が望ましいところね。」

「……他に、質問は?」

「ここで、黒子が手を挙げた。」

「あの……アンチスキルの先生方が警戒対象に挙げたのは、強盗やら爆弾魔やら、バイクアースだけですか?」

「それは、どういうこと?」

「固法が首を傾げると、黒子は、一瞬口を結んでから、再び開いた。」

「例えば——アーミーはゲリラ対策として、アンチスキルと共同警備にあたるということでした。ゲリラへの対策について、何かジャツジメントに指示がありましたか?」

「ゲリラね……特に言われてませんが」

「固法の言葉に、黒子は「そうですか」と静かに言うと、黙り込んだ。「もしかして……あなた、そんな深刻な顔をしてるってことは……ゲリラに何かされた!」」

「固法の疑問に、会場のメンバーの視線が、一斉に黒子へと向く。」

「ええ!? そんなことありませんわ!」

「ガタツと、弾かれたように黒子が立ち上がり、否定する。」

「白井、マジメだなあ! この学園都市で、ゲリラなんて噂話ぐらいでしかないのに!」

「もし活動家を捕まえたなら、東京で表彰されるんじゃないか!」

「周囲の学生達が、緊張が解けたように笑う。黒子も、ごまかすように一緒に笑っていた。」

「ほかに質問は?——なければ、今日の会議は以上です。解散してください」

「固法の号令で、学生たちがお喋りしながら、帰り支度を始めた。」

「(やっぱり、考え過ぎか……それとも、警備員は、そもそもゲリラを敵

視していない?)

「白井さん?」

「ハッ?」

他の学生が帰り始めている中、椅子に座って考え込んだままの黒子に、初春が声をかけた。

黒子は、素っ頓狂な声を上げて顔を上げた。

「——考え事ですか?ゲリラのことが、気になるんですか?」

「……まあ、念には念を入れて、警戒するに越したことはありませんわ」

黒子が慌てて会議資料を鞆に詰めると、初春はマスクをした顎に手を当てた。

「……まあ、確かに皆の言う通り、アーミーがゲリラ対策っていう割には、学園都市って、そんなにゲリラの活動は聞いたことないですよ?東京の方は大分騒がしいみたいですけど」

「学園都市の技術を手に入れば、ゲリラがアーミーに対して、戦略的に優位に立てることは間違いないですわ。だからこそ、警備員だつて、盗まれないように警戒するに越したことがないとは思いますが」「やっぱり凄いなあ、白井さんは。私なんかより、一歩二歩先のことを考えているんですもん」

謙遜する初春に向かって、黒子は目を瞬かせ、それから優しい笑みを浮かべた。

「……貴方のサポートがあつてこそですわ。初春」

黒子の言葉を聞いて、初春は「えへっ」と笑った次の瞬間、下を向いて咳込んだ。

「無理なさらず、会議を休んで体を労るべきだったのでは?」

「慣れてますから。これくらい平気です。」

初春が顔を上げ、二人は会議室を後にした。

「それにしても、能力者による殺人……この暑さで、貯水タンクから腐臭が漏れ出して見つかったって……ホラーですね」

エレベーターのスイッチを押し、初春が隣の黒子に言った。

「被害者も、素性の知れぬ者らしいですが……力を得た者は、その使い方間違えないよう、学び舎で勉強に励むというのに……いかにスキルアウトらしいやり方ですわ。いずれ、犯人は報いを受けますの」
閉まる扉を見ながら、黒子が言った。

「噂じゃ、その事件も、『帝国』っていうスキルアウトの新手と関係してるのか……白井さん、危ないですから、また無茶しちやダメですよ？」

「自分の身を守る者が、この学園都市の平和を守れますの。自分の力は、弁えていますわ」

「……気を付けてくださいね」

「もちろんですわ」

ビルの一階へと降りるエレベーターの中、初春の言葉を聞きながら、黒子は、十五学区の高速道路上で、バイカースの一員から聞いた言葉を思い出していた。

「気を付ける……奴らは、アンタらも狙ってるぞ……特にボスは、化物だ……」

(やはり、警戒すべきは、ゲリラよりも、スキルアウトか……)

エレベーターの扉が開かれ、黒子は初春と一緒に、暗くなった街へと出て行った。

とあるコンビニが建つ一角に、人ばかりができています。

通りに面したレンガ調の外壁面には、バスケットボール大の焦げ跡ができており、ところどころヒビが入っている。周囲には、黒く変色した金属片が散らばっている。

「……何？なんかあったの？」

「バクハツ。ほら、ここ最近立て続けに起きてる、アレじゃない？」

「でけえ音するからビビったよ、人騒がせだなあ……誰か死んだん？」

「ケガした人、いないらしいよー。まあ、ちよっとおっきい花火くらいだったんじゃない？」

若者を中心とした野次馬が、携帯電話で写真を撮ったり口々に言い合ったりする中、一人の少年が、人混みを抜けて離れていく。やせ型で、皺の目立つ白ワイシャツを身に付けている。前髪が眼鏡にかかり、骨ばった面長の顔を、より陰のある印象にしていた。

人目に付かない、大通りの外れまで来た所で、介旅初矢は自分の携帯電話を取り出し、先ほどの爆発現場の写真を表示した。

それから介旅は、指を画面上に走らせて、いくつかの写真を比べて見ていく。日付は異なるが、同じような、爆発現場の写真だった。

「……ダメだ」

介旅は歯を食い縛ると、携帯電話を乱暴にポケットに突っ込み、天を仰いだ。

「威力が変わってない……これじゃあ風船をちよっと派手に割ってるようなもんじゃないか……」

介度が立ち尽くす建物と建物の間には、じめつとした真夏の空気が淀み滞っている。介旅は、ハンカチで額の汗をぬぐった。額の前髪を掻き分けた後には、まだ新しい、青痣がはつきりと見えた。

「……やっぱ、無理なんかなア、僕には」

隈の目立つ目を細めて、介旅は呟いた。脳裏に、先ほどの野次馬の言葉が蘇る。

「怪我人も、ましてや死人も出てない……まだ」

介度は、壁を背に座り込んだ。

「……やめとけって、神様が言ってるのかなア……こんなこと」
しばらく、顔を俯かせてじっとしていた。壁のひんやりとした冷たさが、背中から、徐々に体に染み渡っていく。

「よオ、兄ちゃん。浮かない顔してるねエ」

不意に、気障ったらしく声をかけられ、介旅は顔を上げた。

いつの間にか、3人の男が、介度の傍に、大通りへの出口を塞ぐ形で立っている。2人は、明らかに不良と分かる、派手に髪を染めたり、顔にペイントを施したりした男だった。残る1人は、尖った革靴を履き、シャツにネクタイを締め、前髪を上にとまるように固めた優男だった。服装からして学生かとも思ったが、面立ちは介旅よりも年上に思えた。

介旅は男たちを一瞥すると、俯きながら立ち上がった。

「——悪いけど、今日は何もないよ」

「何が？」

介旅の投げ槍な声に、優男が眉を顰める。

「僕から金を巻き上げようってんだろ？……昨日も盗られたばっかだし、マジで今日は一円玉ひとつも持ってないんだ。殴ったって出てこないよ」

「そりゃ災難だったねえ」

優男がくつくつと含み笑いをした。

「だから、……そこを空けてくれよ。僕に絡むだけ、時間の無駄だよ」
介旅は男たちの隙間をすり抜けようとするが、男の一人が腕を伸ばしたことで遮られた。

「まあ、待ってって」

ポケットに手をつ突っ込んで、優男が振り返って介旅を見る。小馬鹿にしたような笑みを浮かべているのを見て、介旅の気持ちは更に落ち込んだ。

「実はさア、俺達、さっき面白いモン見ちゃって……これ」

優男が、ポケットから携帯電話を取り出して、画面を介旅に見せつ

けた。介旅は、それを見て青ざめた。

「!!……これ……」

「このスプレー缶……さつきドカン！ていった奴だよねエ？」

「そ、それは……」

うろたえる介旅に、優男は肩を竦めて、大仰に首を振った。

「いけないねエ、こりゃあ……幸い、ケガ人は居なかつたみたいだけど？一歩間違えれば、救急車騒ぎだよ？警備員アンチスキルや風紀委員ジャッジメントに見つかったら、君、どうなるか——」

優男が言う間、二人の仲間が、がっちり介旅の両腕を掴んで、逃げられないようにした。

「ま、待ってー!」

介旅の口から、必死な声が出た。

「今は、金はない——けど、部屋に戻れば、いくらかあるから、この事は——」

「チツチツ。まあ慌てなさんなって」

人差し指を立てて、目の前で優男が左右に揺らした。

「いけないことはいけないこと。けどさ……聞かせてくれよ。なーんで、こんなことしてるんだい？」

優男の言葉を聞き、介旅は、ごくりと唾を呑みこみ、俯いた。

「……ム力つくんだよ……風紀委員も、不良どもも……僕のことをバカにしやがって、無視しやがって……」

介旅は、地面に向かって振り絞るように言った。

「だから、仕返ししてやりたいんだよ、悪いかよ！強い力が僕のモノになれば、お前らみたいな奴らに、暴力振るわれることも、金を盗られることもないんだよ……!」

介旅は、殴られることを覚悟で、必死に啖呵を切った。

顔を上げて叫ぶと、優男が憐みの表情で自分を見ているのが分かった。

「……ウンウン、分かるよオ、その気持ち」

「……え？」

優男の反応は、介旅にとって意外なものだった。

「いやアね、俺もさ、昔、ジャッジメントにとぼつちり受けて、そりやあ人生おーきく損してんだよ。だから、分かるぜエ」

優男が、ずいっと介旅と近い位置まで、顔を寄せて来た。介旅は、腕を取られながらも、思わず顎を引いた。

「……奴らって、融通利かなくて、能無しでさー！いつも上から目線でサア！そんなでもって、肝心なところで役に立たねえ！俺達のこと、助けちやくれねエんだもんア！な？そうだろ!？」

「……ああ、うん……」

介旅は、目の前の優男が、自分と同じ思いを抱いていることに驚き、思わず声を漏らしていた。

いつの間にか、両脇の不良が、介旅の腕を離していた。

「だからさ、俺達も、奴らに仕返ししてやりてエのよ」

腕を広げて、演説のように優男が言う。

「お前と、おんなじ気持ちなのさ……分かるな？」

介旅は、ゆっくりと頷いた。

「……だが！そのためには、能力の強度^{レベル}をもっと上げなきゃならない。君がさつき起こした爆発、物足ンねエだろ？」

「だったらよ！……我が帝国に、入り給えよ」

「て……帝国？」

聞きなれない名に、介旅は目を丸くした。

優男はニヤツと笑うと、一枚のメモリーカードを差し出した。

「携帯、持ってたんだろ？これをさ、入れてみるよ」

介旅は、優男からカードを受け取った。

何の変哲もない、その辺の家電屋で手に入るであろうものだ。

「これって……」

「怪しいか？ああ、そうとも！誰だってハジメはそう思うものよ！」

半信半疑の表情を浮かべる介旅を見て、優男が言う。

「俺も、最初は信じられなかった……でもよ、そいつを聞いたら——
すぐにレベルが上がる。間違いねエ」

優男の言葉に、周りの仲間も頷いて同意する。

介旅は、それらの顔を見回してから、ゆっくりと、自分の携帯電話

の挿入口にカードを差し込んだ。

「歓迎するぜ。我が帝国臣民よ」

不安そうな表情を浮かべる介旅に向かって、男は両手を広げて言った。

7月15日、昼 —— 第七学区、風紀委員第一七七支部

「だから、その大覇星祭看板の落書きの件は私が出張ることでは——
—何なら、やった当人達にやらせてくださいまし！——ええ、そりや私も分かっていますよ！その辺のゴロツキの仕業に違いはないでしょうから、適当にとっ捕まえて消させればいいと思いますの！……容疑？見た目が風紀を乱すとか、ムカつくとか、その辺ぶち上げればどうでしょう!？」

いいですか！こっちは今、大変忙しくてよ！お陰様で、土曜の真ツ昼間から、観音様の手も借りたいところですよ！——ハイ？私だつて同じ1年生です！泣き言言わないでくださいまし！ええ、頼みましたわよ！」

電話を切ると、白井黒子は、パソコンのキーボードの上に顔を突っ伏した。

「……罪状の捏造はご法度ですよ、白井さん」

黒子の向こう側から、機械のように両手の指をカタカタ動かしながら、初春飾利が諫めた。

「初春……私達、活動が制限されている筈では？」

黒子は頭を持ち上げて、バックスペースキーを長押しした。今しがた、顔面で入力された無作為な文字の羅列が消されていく。

「却って忙しくなっているのは気のせいですか？」

「平日の活動時間が減った分、休日出勤で皺寄せが来るのは違いありませんねー」

「車道のと真ん中にジャンプ台！往来に向かって露出狂！おまけに看板の落書き!!なアーにが『中止だ中止』ですって！文句があるなら実行委に言ってくださいまし！いつも後始末をするのは私達……」

「まあ、それだけ、私たちジャツジメントが頼られて——その中で

も、みんな白井さんのこと、頼りにしてるんですよ」

初春が宥めるように言った。

「私たち1年生の中でも、白井さんの働きぶりは、みんなが認めてるところですから」

「学園都市の平和を守るのが私たちの仕事、ですけれど……」

書きかけの報告書データと睨めっこしながら、黒子がぼやいた。

「こうも案件が多いと、事件で危険に晒される前に、過労で危険ですわ……はア、お腹がすきましたの」

「白井さん、お昼買い出しに行く前に悪いんですけど、ちよこつとだけ見てもらっていいですか？」

「ハイハイ、今度は何ですか？」

初春の頼みに、黒子が席を立ち、向かい側の初春のパソコンを覗き込む。

「……昨日からの、このサーバーのアクセスなんですけど、何だか気になるところがある——」

初春が言いかけたところで、入り口の扉が慌ただしく開かれ、3年生の固法美偉が入って来た。

「三九号線沿いの喫茶店で爆発——」

ジャッジメントたちに緊張が走り、一斉に固法の方を見た。

「……残念ながら、居合わせた仲間が——1名負傷したわ」

初春は口を手で押さえ、黒子は目を見開いた。

「ジャッジメント風紀委員が……」

バイカーズのメンバーからの警告が、黒子の脳裏によぎった。黒子は拳をギュツと握り締めた。

「現場へ、何人か来て欲しいのだけれど——」

「あたし、行きます！」

固法の呼びかけに、黒子は真っ先に手を挙げた。

固法は黒子の方を見て頷いた。

「オーケー、白井さん。準備を——」

「初春！お昼は後で！」

「ちよ、白井さん、気を付けて——！」

固法が何か言うのを待たず、初春の声を背に、白井は部屋を飛び出した。

仲間がやられた。

その事実には、黒子は疲れた体を奮い立たせ、決然とした足取りで進む。

「……どこの誰だか知りませんが——必ず捕まえてみせる……！」
腕の腕章に触れながら、黒子は、そう自分自身に言い聞かせた。

——第十学区、「帽子屋」

休日の昼間、「closed」の掛札を掲げた扉の向こうで、電話が着信を告げている。

その受話器を、大きな掌が取り上げた。

「……まだやってないよ」

筋骨隆々とした体格に、不釣り合いな割烹着を身に付けたチヨコが、低い声で相手に言う。

「……ケイー」

廊下に向かってチヨコが呼ぶと、2階から足音を立てて、ケイが駆け下りて来た。

「竜から」

「……やっぱり」

気の進まない顔をして、ケイが受話器を受け取る。

「はい……あたしの出番？」

『察しがよくて助かるよケイちゃん』

どんよりとしたケイの声とは反対に、どこか嬉しそうに竜が答えた。

『島崎から連絡があった。あの空間移動能力者テレポーターの風紀委員……白井黒子が、第七学区の学生街に出動するらしい。つい10分程前、街のど真ん中で、爆発事故だか、事件だそうだ。これから位置情報を送るから、行ってくれ』

「急だね……簡単に言うけどねえ、竜」

ケイは文句を言う。

「仲良くしろって言ったって……どう声をかけろっていうの？」

『そこは、若いケイちゃんの子力で、なんとか頼むよ』

「アーミーが来る可能性は？共同で警備に当たってるんでしょ？」

『俺も、見えるところから見張るさ。アーミーが来るようなら、お前の携帯にすぐ連絡する……最も、お前は俺達とは違って、顔が割れてない筈だ。あまり緊張しなさんな。怪しまれないようにな』

「……今月のお小遣い、割増してくれる？」

『それはだな、お前さんの働き次第だ』

「ケチ」

言うが早いか、ケイは竜の返事を待たず、受話器を置いた。

「どこだった？」

「七区の学生街。ケンカ通りじゃない、多分さ」

チヨコの問いに答えながら、ケイはこめかみに手を当てた。

「はく、相手はLEVEL4のテレポーターかあ……面倒なことにならないきやいいけど」

「……任務じゃなきやあね」

チヨコの含んだ言い方に、ケイは振り返る。

畳の間にどっかり胡坐をかくチヨコは、ケイをじつと見つめていた。

「……ケイ、あんた、まだその年なのに……私らと一緒に働いてくれてさ。ほんとなら、もっと人並みに、友達つくったり、遊んだりしたいだろうにね」

「そんなの、気にしないでいいの！おばさん」

ケイは顔に当てていた手をぱつと放し、慌てて言った。

「私は、兄さんが死んだ時から……自分で選んだ道だから。大丈夫」

ケイは顔を上げてそう言うと、部屋を出て行こうと踏み出した。

「……おばさん、ありがとう」

ケイは足を止めて、チヨコに視線を送った。

チヨコは、ケイに向かって頷いた。

「……気を付けて行っておいで」

「行ってきます！」

ケイは、帽子を被ると、外へと駆け出して行った。

「金属缶を使った連続爆破事件？」

第七学区の学生街へと至る駅に降り立ったケイは、早足で歩きながら携帯電話で竜と会話していた。

『ああ。島崎からの情報によると、ジャッジメント風紀委員たちは、他にも何件か、そういう事件を掴んでいるらしい。で、決まって現場に残されているのは、空き缶やらスプレー缶の残骸。それらが起爆していると見ているようだ』

「それって、……言い方悪いけど、あたしらもよくやる手じゃない？」
『どうだろうな。例えば、空のアルミ缶にアルカリ性の洗剤なんかを入れて、化学反応を引き起こして、破裂させるやり方がある。それは俺らも使うやり口だが、あくまで破裂で中身が飛び散るだけで、周りを黒焦げにするような爆弾じゃあない。虚仮脅し程度のものさ。』

スプレー缶を素材にした件もあつたみたいで、ガスを使った爆弾で線も、風紀委員は考えているようだが……目撃者の証言だと、引火させた時に起きるような燃焼が起きていない。とすると、考えられるのは、パイプ爆弾パイプ爆弾のような花火もどきか、あるいは、俺たちには使えない手か……』

「使えない手って……」

ケイは言葉を区切った。

「……それってもしかして」

『ああ、俺らの想像が及ばないことを、簡単にやってのける奴らが、この街じゃあ少なくない』

「……能力者……ってことね」

『気を付ける、ケイ』

電話越しの竜の声は、普段と打って変わって、真剣なものだった。

『爆破事件は、七学区の学生街を中心に起きている。妙な金属缶を見つけたら、注意してくれ』

「厄介ね——用心するわ」

『俺はもう現場に着いた——白井がいるぞ。落ち着いた頃を見計

らって、うまく声をかけてくれ』

「了解」

電話を切ると、ケイは多くの人が行き交う通りを、更に歩みを速くして進んでいった。

昨日までとは打って変わって、爽やかな街路風が吹き抜ける日だった。

——第七学区、木の葉通り

「下がって！下がって！」

「警備員の到着は！まだ!? 大人は何やってんの！」
アンチスキル

「あと3分程です！他にも駆り出されてるらしくて……」

「固法先輩！」

ジャックジメント
風紀委員の一七七支部から、固法と白井をはじめ数名が、爆発があったという喫茶店の現場へ駆け付けた。仲間が規制線を張って野次馬を遠ざけている中で、先に居合わせたらしい、男子高校生の風紀委員が固法に声をかけた。

「畠野君、負傷者は？」

「一般人に被害はありません……ただ、仲間が……半井が、やられました。応急処置はしましたが、ひとまずあつちに……」

男子学生が指さす歩道の先には、テラスで使うテーブルや椅子を組み、そこにブルーシートをかけて作った、間に合わせのテントがあった。負傷した仲間は、そこで寝かされているようだった。

固法は、歯を食い縛った。

「救急車も、間もなく到着します」

「ありがとう——白井さん、この店の責任者を呼んできてくれる？ 状況を聞き取らなきゃ」

「ハイ！」

黒子に指示を出すと、固法は負傷した仲間の様子を見に、テントの中へ入って行く。

黒子は、爆発があったという喫茶店の出入口に目を向ける。

扉は完全にひしゃげて、残骸が店の内部に散らばっている。レトロ

な雰囲気醸し出していたであろう木目調の外壁は、大部分が吹き飛び、焦げ付いたウレタンが露わになっていた。特に、破壊の後が生々しい場所は、アスファルトと碎石層が辺りに破片となってばら撒かれ、数m程離れた場所に、歪んだ電飾看板が転がっていた。

黒子は、店長を務めているという男性を見つけると、テントの傍へ戻り、固法に声をかけた。

「先輩……怪我の具合は？」

「両足に金属片が……命に別状は無いけど、しばらくは立てそうにないわ」

固法は深刻そうに言うと、首を振った。

「……先輩、こちらが、この店の」

俯いている固法に、黒子が声をかける。固法はハツとして、顔を上げた。

「ごめんなさい……この店長さんですか？」

「は、ハイ」

年は40代くらいだろうか、男性の店主が、不安そうな表情で答える。

「白井さん、レコーダーの準備を」

「はい」

「アンチスキルへの円滑な情報提供のため、録音させて頂きます。よろしいですか？」

固法の問いに、店主が頷く。

「同僚から聞きました。2人組で巡回しているジャッジメントに、あなたから直接通報があったということですが」

「はい。今から20分程前でしたか……電話が来たんです。店内に爆弾を仕掛けたと」

「店内？」

店主の答えに、黒子も固法も眉を顰める。

「あの、すみません。爆発は、外で起こったのでは？」

「ええ——でも、電話では、はつきりと、店内だと。本当なんです」

「それで、二人のジャッジメントが到着した後は？」

「電話がかかった直後、ちょうどあの二人が店の前を通りかかったのを見て、声をかけたんです。二人は、まずお客様を、それから従業員を、私も含めて、外へと誘導してくれました。とにもかくにも、安全を確保してください……」

それから、店内を搜索された後でしようか——一人、女性の方が一度、外へ出て来た所で、その時——」

店主は言葉を切り、沈痛な表情で下を向いた。

「……すみません……爆発は、店外の看板のところ、だったと思います。ちょうど、あの子が出て来た瞬間に——くそつ、タイミングがなんて悪かったんだろう……」

店主の言葉を聞いて、一同は押し黙り、爆発があったという現場を見つめた。

仲間が規制線を張ったお陰で、野次馬は遠ざかり、警備員と救急車両が通れるように道が空けられていた。

遠くから、サイレンが聞こえる。間もなく到着するのだろうか。

「……よくも仲間を……」

黒子が、レコーダーを握る手に力を込めた、その時だった。

カランカランと、何かの不意に、遠巻きに見ていた野次馬の方から投げ込まれてきた。

それは、アスファルトの上軽い音を立てて転がる。

「あっ……」

黒子は思わず声を漏らした。

「何だコレ……」

規制線を張っていた数名の仲間が、転がって来た物に駆け寄り、その内の一人が拾い上げる。

(奴らは、アンタらも狙ってるぞ——)

脳裏にバイカーズという言葉が蘇った瞬間、黒子は考えるよりも先に駆け出していた。

罨だ。

「離れて!!」

ありったけの声を出して叫んだ。

ジャツジメントの仲間が、驚いた表情でこちらを見る。咄嗟に動けない者もいる。

仲間が密集しているせいで、自分の身をその場へ飛ばしたいが、上手く演算ができない。

黒子は片腕を目一杯に伸ばして走った。爆発の前に触れさえすれば、どこか遠くへ飛ばせる。そう黒子は判断した。

彼らの足元にある空き缶が、吸引クリーナーのような音を立てながら、メキメキと歪んでいく。

「間に合——っ!？」

黒子は、あと数歩のところで、飛散した砂利に足を取られ、急に体が前のめりになるのを感じた。

辺りに、けたたましい爆音が響き渡った。

耳鳴りがする。

黒子は、アスファルトに手について起き上がった。掌に痛みが走る。

躓いた時に、手を擦りむいたようだ。しかし、立ち上がれる。

「みんな……!？」

周りで倒れている仲間呼び掛けながら、黒子は最悪の事態を思い、背筋がぞくりとした。

しかし、仲間は恐る恐る顔を上げた。皆、慄いた表情をしているが、一見して、目立った怪我はないようだ。

「大丈夫!？」

黒子も、後から続いて固法も駆け寄る。

「ああ——俺、ダメかと思いました」

一人の男子が大きく息をついて、立ち上がり、体に降りかかった金属片を払いながら、周りを見渡す。

「さつき、助けてくれた人が——あの爆弾を何かで包んで、上へ投げ

飛ばしてくれました」

「助けてくれた？」

黒子が聞き返した時、風紀委員達の頭上から、何かが風に揺れながら落ちてきた。

黒焦げになった布のぼろきれだ。

「これって……」

黒子はゆっくりその布切れを取り上げた。微かに熱を帯びている。

その時、俄かに遠巻きに見ていた野次馬が騒がしくなった。

「——おい、あいつら、逃げてくぞー！」

若者の声が聞こえ、黒子はそちらに目を凝らす。

夏の盛りにしては目立つ、フード姿の人物が二人、遠くへと走っていくのが見えた。

「逃がしません！」

黒子は布切れをポケットに突っ込むと、意識を二人の方へ集中し、今度こそ自分の体を飛ばす。

次の瞬間、黒子の目の前には驚愕の表情を浮かべる二人の男がいた。

「なんだてめエー！」

片方の男が凄んだ。

「そんなに慌ててどこへ行かれるのです？」

黒子は、自分よりもずっと背の高い相手を睨みつけた。

「うるせえー！くされジャツジメントが！」

もう一人の男が威圧するように黒子の前に近づいてきた。

「ほう？ 私たち^{わたくし}に対して随分とお怒りですね——やましいことがあるから逃げるのですか？ 爆弾魔野郎、殿？」

「このチビが！！ナめんじゃねエー！」

黒子が挑発すると、相手は黒子の予想通りに憤怒を露わにして殴りかかって来た。

「……分かりやすい」

黒子は向かってくる拳を物ともせず、殴りかかって来た男の背後に

瞬間移動する。

「え？」

男が間の抜けた声を出している間に、黒子は身を屈め、男の膝の関節めがけて鋭い蹴りを放った。

そして男が倒れ込んだのを見計らって、黒子はスカートの中に忍ばせておいた鉄釘を転移させる。男は衣服を地面に縫い付けられ、もがいた。

「空間移動能力者——畜生ッ！」

黒子が振り返った時に、もう一人の男は悪態をつきながら、手に持っていた小さな筒の蓋を開けた。

途端に、筒から黄褐色の煙が噴き出て、辺りに立ち込めた。

「煙幕……改造した燻煙剤……！」

甘ったるい匂いが鼻をツンと衝いた。黒子が煙を避けて引き下がる間に、大通りから外れて、裏路地へと駆けていく足音が、煙の奥から聞こえる。

「白井さん！」

煙がやや晴れてきた所で、固法や、他のジャツジメントが駆けつけて来た。

「先輩……こいつの確保をお願いします！」

黒子は、地面でもがく男を指差すと、駆け出した。

「え、待って！アンチスキルも来たわ！あなた一人で行っては——」

「ダメです！——絶対に、逃がしませんの!!」

固法の制止を振り切り、黒子は逃げたもう一人を追って、建物の間隙の狭い路地へと走った。

背後から、救急車かアンチスキルの車両だかのサイレンが聞こえる。

（出口を、タイミングを見計らって起こした1回目の爆発。それに、2回目の爆発……明らかに、風紀委員を狙った犯行……）

『帝国』……許さない……！』

黒子は、歯を食い縛り、逃げた男の行方を追った。

黒子が、逃げた男を追いかけて行った先では、アイドリング状態の白色のバンが、路肩に雑に停められていた。

「おい！追いつかれてるぞー！」

助手席の窓から、頭にバンドを巻いた男が顔を出し、唾を飛ばして怒鳴った。

「気を付けろ！ハアツハアツ——アイツ、空間移動能力者だ！」

黒子から逃げていた男が、車の横に立ち、息を切らしながら仲間へ警戒を促す。

「風紀委員ですのー！」

足を肩幅より広めに開き、黒子は地面を踏みしめ、腕の腕章を示して言った。

「仲間を傷つけたこと……許しませんわよ」

「ハア？……なんだ、ガキ一匹じゃねえかよ……」

助手席からはバンドの男が降りた。バンドには、『帝国』と乱雑に黒のインクで書かれている。運転席からは、腹の突き出た、無精ひげを蓄えた男が降りてくる。

「おい、てめえ——運転代われ」

「え？なんで」

息を切らすフードの男に対して、無精ひげの男が言い放つ。

「あのポーズを、『隊長』のところに送んなきやなんねえだろ。それに——」

ひげの男とバンドの男は、ニヤニヤ笑いながら黒子の前に立ちはだかった。

「……強くなった、この力——試してみてえしな。ジャツジメントのおチビちゃんよ」

ひげの男が、懐からナイフを取り出した。それを掌で弄んでから、刃の背を舌で舐め上げてみせた。

「……舐めないでくださいまし？」

バンが急発進するのを見て、黒子は車を停めるべく、釘をエンジンに転移させようと足を探る。

「おっとオ」

その時、黒子の頬のすぐ脇を、直線的な軌道でナイフが掠める。黒子は、自分の髪が、はらりと風圧で揺れるのを感じた。

「おいたはいけねエよなア」

二人の男が笑い声をあげる。気を逸らされている間に、バンは甲高くブレーキを鳴かせて、狭い角を曲がって見えなくなっていく。

「そいつア——俺の脳ミソでどうとでも動く。俺様の念動力テレキネシスでな」
髭の男がせせら笑いながら指差した方を、黒子は一瞥した。

地面から3、4mほどの高さの位置に、ナイフが浮いている。

「さて、どこを切り刻んでほしいか言ってみろよオ」

黒子に向けられた切っ先が、真つ青な空を背景に、光をギリリと反射した。

「首か？胸か？尻ケツでもいいなア——まずはその服をだな——」

「ッ……貴方たち——『帝国』の方？」

下卑た男の声に対してはつきりと舌打ちをしてから、黒子は努めて平静を装って言った。

「おお!? ジャツジメント様にも知られてるたア! 俺らも有名人、てか?」

バンドの男が笑いながら答えた。

「帝国の民は……どうしようもなく知能が低いようですわね? この猿」

黒子は嫌悪感を滲ませ、歯を見せて笑い返した。

「ンだところア!」

髭の男が腕を振ると、ナイフが黒子目掛けて、空気を切り裂いて一直線に向かってきた。

黒子はそちらを見ることもなく、軽く地面を蹴る。

ナイフはカンと音を立てて、地面を滑った。

「あれ……」

二人は辺りを見回す。黒子の姿は無い。
ふと、髭の男の顔に影が差す。

「え?」

男が上を見上げた瞬間、黒子のローファアの底が、男の鼻面を思い切り踏み締めた。

男は顔を歪めてよろける。

黒子は男の顔面をバネのように蹴り、体を思い切り捻った。そして、もう一方の足をしならせて、男の後頭部に蹴りを食らわせた。

肥満体はぼてつと路地に転がり、動かなくなつた。

「げえッ!」

仲間が一瞬で倒されたのを見て、バンドを巻いた男が後ずさりし、ちようどマンホールの上に尻餅をついた。

黒子は、地面に落とされたナイフを拾い上げる。

「先ほど、お仲間が教えて差し上げたのを、もう忘れましたか?」

黒子が、怯えた表情のバンドの男に向かって言った。

「伊達にジャツジメントを務めている訳ではなくてよ?」

「ま、待てよ……」

男は片手を突き出して黒子に制止を促したが、黒子はナイフをひらひらと振つた。

「先ほどの下劣な発言……仲間を傷つけられたこと……私、怒つてましてよ?」

たとえばこれを、……あなたの腹中に移動させたくなくなるくらいには?」

「わ、分かつたよ……抵抗しねえ、降参だ」

バンドの男が、冷や汗をだらだら流しながら言った。突き出していた片手を下げて、自分が尻餅をついているマンホールの蓋を2、3度叩いた。

「アンタ、強エんだな……へへ、参つたぜ」

黒子は油断なく、男に視線を送り続けた。

「動かないでくださいまし——」

「白井さん!」

その時、黒子の背後から、固法が駆け寄って来た。

「先輩？」

「大通りの現場は、アンチスキルが抑えたから大丈夫！それよりこいつらが——」

固法は、地面に伸びている太った男と、座り込んでいるバンドを巻いた男を見やった。

「——流石、白井さんね、……そのナイフで脅している訳じゃないよね？」

固法が、ちらりと黒子の片手に握られた得物を見ると、黒子は首をぶんぶん振った。

「や、嫌ですわ先輩！そんな物騒な所業、この黒子がする訳ありませんの！」

「でもね、私もちよつと手荒にやりたい気分なの」「え？」

固法は、黒子の横に立って、バンドの男を見つめた。

「仲間をやられて怒ってるのは、あなた一人じゃないの、白井さん」

固法の声は静かだったが、確かな怒気が感じ取れた。

「私もよ」

二人のジャツジメントが、並び立って、相手を見据えた。

一陣の風が吹き抜けた。

「あ、ああ……二人もいるんじゃ、抵抗なんかしねエさ……」

声を詰まらせながら、男が言った。

固法が、男の様子を見て眉を上げた。

「なら、両手を頭の上に、腹這いになりなさい」

黒子は有無を言わせない調子で言う。

「オーケイ、オーケイ、分かったよ」

男が、またマンホールの蓋を叩いた。

「白井さん。あいつの下。用心して」

固法が急に囁いた言葉に、黒子が緊張する。

「先輩、何が見えますの？」

「あいつは——下がって！」

それまで怯えていた男が、ニヤリと笑い、体を急に横へと転がした。固法が黒子を突如後ろへ突き飛ばした瞬間、マンホールの蓋が吹っ飛び、ゴパアツと轟音を立てて水が空へと吹き上がった。

「察しがいいなア！てめエー！」

高く上がる水の壁の向こうから、男が勝ち誇ったように叫んだ。

「俺の手にした能力は水流操作！『帝国』でもレアキャラなんだぜエ！操作できる塊は1つだけだが……モノは使い様だ！」

轟と大量の水の塊が押し寄せてくる。

「あつ——」

固法が、水塊に体を巻かれた。苦悶の表情を浮かべる固法の顔が、黒子に見えた。

「先輩!!」

黒子が叫んで近付くと、固法は両手を突き出した。

「え……」

黒子は足を止めたが、遅かった。水塊が形を変え、黒子の体も覆う。息をするためにもがくが、顔が空気に触れる度に、水が形を変え、鼻と口を塞いでくる。辛うじて地面に着いている足を進めようと蹴るが、抜け出せない。

水に巻かれた自分の体は重かった。

肺に水が流れ込むのを感じ、黒子は頭がくらくらした。水流は、黒子の体を毬のように上下左右から弄ぶ。テレポートで脱出しようと演算を試みるが、苦しさで上手く集中できない。

「水道つてのは便利だよなア！水がゼンぶ繋がってんだからよ！てめエらジャツジメントを、二人も始末したってなりやア、俺の株も上がる！ボスのお眼鏡に適うってモンよ！」

水の向こうで、男が何事か叫んでいるのが辛うじて見えたが、黒子にはそれを気にする余裕はない。

(まづい、このままじゃ……)

黒子は、パニックになりながらも、必死に思考を巡らせた。

勝ち誇っているバンドの男の背後から、一人近づく者がいた。

小石が蹴飛ばされ、男の足元に転がる。

気配を感じた男は、右手を水塊へ向けたまま、振り返った。

「なんだよ、てめエ——今、いいところなんだから、ジャマすんな」

現れた少女——ケイは、身を屈めて、男の懐に飛びこんだ。

「あっ」

男が声を上げた時、ケイは男の片脚の腿を抱え上げた所だった。

男が集中を乱されたことで、操作されていた水塊は力を失い、重力に従って滝のように地面へ降り注いだ。黒子と固法がその場に手を着き、激しく咳込んで水を吐いた。

男がたまらず背中を地面に打ち付ける。

「てめエー！」

がむしやらに男が蹴りを放つが、空を切る。逆にケイは、男の股間を思い切り蹴り上げた。

男が情けない空気が抜けるような悲鳴を上げた。

そしてケイは、男の横へ体を滑り込ませると、体重を乗せた片肘を、男の顔面へ見舞った。

追撃を食らった男は、その場に四肢を投げ出した。

「……あなたは」

息を整えて黒子は、現れた人物を見上げる。

「無事、かな？白井黒子さん」

ケイが、膝をつく黒子へと手を差し延べた。

「そうですか。あの2発目の爆破を防いでくれたのは、あなたでしたの……」

「うん。咄嗟に体が動いてね」

ハイドロハンド
水流操作の能力者との戦いを終えた黒子は、陽の当たる場所で、アシチスキル
警備員が貸してくれた毛布にくるまって座っている。隣には、デニムのショートパンツにタンクトップという、身軽な格好のケイと一緒に座っている。

ケイの手には、先ほど黒子が返した、焼け縮れたベストがある。爆発物を遠ざける際に、包んだのだと言う。

「私、普段は別の学区に住んでるんだけど、週末のバイトが無い日は、よくこつちに遊びに来るからね。最近、物騒だとは聞いていたけど……まさか、目の前でこんなことになるとはね」

「お礼を申し上げなければいけませんわ」

黒子は、改めてケイの顔をまっすぐ見つめて言った。

「助けてくださって、ありがとうございます……ございました……それにしても、お強いのですね」

「まさか！君に比べたら全然！」

ケイは手を顔の前で振って言う。

「やっぱり風紀委員って凄いなーって思ったよ！しかも自分の体をあんな風に移動させるなんて、無敵じゃない！」

「いいえ、黒子はまだまだですの」

黒子は表情をやや曇らせる。

「私、熱くなると、自分一人で突っ走って……自分の力を過信してしまふ癖がありますの。お陰で、先輩を危険に巻き込んでしまつて……空間移動能力者には、他の能力以上に、冷静さが求められますのに。ケイさんのお陰で助かりましたわ。」

「いいえ。あの時は、あの男が背後を見せてたから……」

「ケイさんは」

黒子が顔を上げてケイに質問する。

「どこかで訓練を？あの身のこなしは、簡単に身に付く者ではありませんわ」

「そんな、訓練なんてもんじゃないよー！」

笑顔を見せてケイが答えた。白い歯が眩しい。

「まー、我流ってとこかなア」

「我流？」

「それよりさー！」

ケイが顔を黒子にやや近づけて言った。

「君のこと、なんて呼べばいいかな……」

「私を？」

黒子は、人差し指を頬に当てて考えた。

「まあ……黒子と呼んでいただければ……」

「じゃあさ！黒子ちゃん、って呼んでいい？」

「ちや、ちゃん付けですか……」

はつきりとしたケイの物言いに、黒子は少したじろいだ。

「まあ、構いませぬが……」

「じゃー！」

ケイは片手を黒子へ差し出した。

「こんな風が続けて会うのも、何かの縁だねきつと……よろしくね、黒子ちゃん！」

「ええ、こちらこそ、ケイさん」

黒子は、差し出された手を握り返した。

ふと、黒子の視線が下に向く。

「……起伏の明らかなスタイルですね、あなた……」

「？何か言った？」

「いえー何も！私も将来に賭けていますので！あはは……」

「なあに、それ！」

黒子が誤魔化すように笑うと、釣られてケイも笑った。

「白井さん！大丈夫ですかッ!？」

話している所へ、初春が駆け付けて来た。

「爆弾事件の犯人に襲撃されたって聞いて、心配で」

「ありがとう、初春。まあ、少し油断しましたが……平気ですわ」

黒子が初春に向かって微笑む。

「市民の協力のお陰で、何名か捕らえることができましたの。こちらの方が——」

「ケイっていいいます」

ケイが初春に向かって名乗った。

「黒子ちゃんとは一応顔見知りだったけど、今日、たまたま近くを通りかかって」

「初春飾利です」

初春は礼儀正しく、ペこりと頭を下げた。

「ご協力、感謝します！白井さんとは私、同級生で——仲間を助けてくださって、ありがとうございます！」

「そうですか……彼らが、『帝国』？」

「ええ」

初春に向かって黒子が答えた。

「詳しい取り調べは、アンチスキルがこの後するとして……水流操作の男が、自慢気に名乗っていた上、ご丁寧^{ご丁寧}にヘアバンドに書いていたからね。まず間違いないでしょう。目的は、無差別かとも思いましたが、今日の様子から見ると、^{ジャッジメント}風紀委員を狙い撃ちにした犯行の疑いが強いかと」

(バイカーズの少年の言った通りでしたわ……)

黒子は一言、心の中で付け加えた。

「なぜ、ジャッジメントが狙われるの？」

ケイが疑問を口にした。

「帝国という者たちが、スキルアウトの新集団だとすれば……恨みを買っていることは、残念ながら否めませんの。警備員と同じく、彼らの取り締まりにあたるのが、私たちの仕事の一つですからね」

黒子が顔を曇らせて答えた。

「でも、スキルアウトって、武装した無能力者の群れでしょう？」

ケイが質問を重ねる。

「さっきの水を操る男……明らかにそれなりの能力者だったよね？」

「確かに」

黒子も考え込む。

「高位能力者が、何らかの事情で犯罪行為を働いたために、スキルアウトと徒党を組むことが無い訳ではありませんが……能力者と組んで爆破行為を働いたとすると、厄介ですわね」

「……納得できません！」

初春が、静かに、しかしはつきりと憤りを露わにする。

「私たちは、街の安全を守るために、日々働いているのに——なんで狙われなきゃならないんですか？おかしいじゃないですか！」

「初春の言うことは最もですの」

黒子は頷いて言った。

「……残念ながら、いくら科学が発展しても、人の心はどこかで荒むものですわ。ああいった輩に立ち向かいながら、それでも、街の人々の暮らしを守るのが、私共ジャッジメントの役割ですから」

黒子の言葉を聞いて、暗い顔をしていた初春も頷く。

「それに……売られたケンカは、当然買いますわ」

黒子の言葉に力が籠る。

『『帝国』とやら、きつちり落とし前は付けさせてもらいますわ！』

黒子と初春の様子を見ていたケイが、感心した表情を浮かべた。

「かっこいいよ、二人とも！」

「そ、そうですね？」

初春が照れたように顔を背けた。

「うん、私より年下なのに……街のために信念をもって働いてる。よその警察だってできないこともあるのに、立派だよ！」

「ありがとうございます！そう言って頂けると、ほんと嬉しくて！」

初春の顔がぱあつと輝いた。

「ケイさんは、おいくつなんですか？」

「今年で17だね」

ケイが答えると、初春は頷いた。

「そうですか！じゃあ、高校生なんですね？」

するとケイは、苦笑いを浮かべた。

「あー……私、今学校通ってなくて……」

初春はしまったという風に、手を口に当てた。

「ご、ごめんなさい、プライベートなこと聞いてしまつて」

「いいのいいの！気にしないで！」

ケイが手を軽く振つて言った。

やや空気が気まづくなつたその時、黒子と同じように、濡れた制服の上に毛布を纏つた固法がやつて来た。

「ケイさん、でしたね」

固法が会釈する。

「私からもお礼を言わせてください。今日は、私たちを助けていただいて……ありがとうございます」

ケイも挨拶を返すと、固法は黒子と初春に、支部へ戻るよう促した。現場の検証をアンチスキルに引き継ぎ終わり、服が濡れてしまつた固法と黒子は、教員の車で送ってもらえることになつたという。

「危険なことになっているみたいだけど、気を付けてね」

別れ際に、ケイが笑顔を見せて黒子と初春に言った。

『『帝国』のこと、もし役に立ちそうな情報があれば、私からも黒子ちゃんに知らせるよ』

「ありがとうございます、頑張りますわ！」

黒子も微笑んだ。

「ケイさんも、お気を付けて！」

ケイは黒子たちに手を振り、去つていった。

「あつちに車が停まつているわ、行きましょう」

そう言つて固法が歩き出した。

「じゃあ、白井さん、あとでまた支部で——どうかしましたか？」

初春は、ケイが歩き去つた方を向いたままの、黒子の背中に声をかけた。

「え、ああ——そうですね」

「何か気になることあつたんですか？」

「いや……」

黒子は歩きながら、目線を斜め上へ向けた。何か、黒子の心に引つかかることがあった。

「……ケイさん、なんで私たちが年下だって知ってたのかなあ、と」「制服で分かったんじゃないですか？ 私たちはケイさんの年齢としを確か
に知りませんでしたけど」

「そうか、そうですね」

黒子は初春の言葉に納得し、前を向いた。

そして、眉間に皺を寄せた。

「それに、あの体つき……出るところはしつかり出て、くびれるところもはつきりとした、あれはまさに、大人の色香……！ ああ、お姉さまの心を掴むためにも、私もあんな風に成長したいものですわ」

「白井さん、どこを見てるんですか……」

想像を膨らませる黒子に、初春が呆れたように言った。

「それはともかく！ 支部に戻ったら、ミーティングですよ。奴らの正体、暴いてやりましょうよ！」

「ええ！」

初春の言葉に、黒子も力強く答えた。

事件現場から数分歩いて移動した後、ケイは、とある駐車場に停められていた車の助手席に乗り込んだ。

「ずいぶん、派手な再会だったな。肝が冷えたぞ」

「うん」

運転席に座る竜の言葉に、ケイが短く返す。

「……浮かない顔してるぞ？ 大丈夫か？」

「そんなことはない。寧ろ、楽しかったよ」

「普段、ああいう学生さんと話す機会はないもんな？ おともだちになれたんなら、良かったぜ」

「あくまで、任務でしょう？」

ケイは窓の外を所在なさげに見つめている。

竜は、ケイの様子を気に留めずに、車のエンジンをかけた。

「で……収穫はあったのかい」

「まあね」

ケイは、動き出した窓の外の風景を眺めながら答えた。

「帰ってから、話すよ」

二人が乗った車は、第七学区の郊外の方面へと走っていった。

——風紀委員 第一七七支部

グラビトン
「重力子の異常な加速？」

「ええ。たった今あった、警備員からの情報によるとね」

事件後の会議で、固法が、集まった黒子たちに向かって話す。

「今日の事件のあった現場を検証した結果、判明したらしいの」

「その、グラビ？のなんちゃらが、どう今回の事件と関わるんですか？」

固法に向かって、一人から質問が挙がった。

「簡単に言うと、金属を爆弾に変えるの。私も、正確に分かってるわけじゃないけど……こっち見てくれる？」

固法が手持ちのタブレットを何回かタップすると、アンチスキルから提供されたという図表が、部屋に備え付けられた大型のディスプレイに映し出された。

「世の中のあらゆる物質は、何からできているかってことを突き詰めていくと、分子、原子、原子核、……ミクロな世界の話になります。で、原子核の更に内側の、電子とか、クォークとか……これらを素粒子という。……学校でも習いますよね？」

色とりどりの球体を、線で結んだ図式が表示され、高校生のメンバーを中心に、何人かが頷く。

「ごめん……もう全ツ然わかんね」

「……この辺、アンタは聞き流してくれていいから」

固法は、近くに座る茶髪の女子学生に向かって顔を顰めた。それから咳払いを一つする。

「素粒子には色んな種類があつて、エレクトロン電子、クォーク、レプトン、フォトン光子……それらに運動エネルギーを与えて速度を上げると、高いエネルギー

ギーを放出できるようになります。スイスにある超大型の量子加速器が有名ね。一般的には、新しい元素を発見するとか、量子力学の研究で使われる手法だけれど。

で……今回、アンチスキルが調べたところ、爆発物の残骸から、最近発見された素粒子の一つ、重力子——グラビトンの急激な加速の痕跡が発見されたということですよ」

「物体の、超ミクロな部分に力を加えて、爆発物に仕立ててるってことですか？」

「ええ。そういう理解で間違いないと思います」

質問に対して頷いた後、固法は『捜査資料F』と題された、黒焦げた金属片の写真をディスプレイに示す。

「それで、現場にはいつも、金属製の——アルミの缶が残されていた。最初、私達は火薬やガスの類を使った爆破を疑っていたけど、そうではなく、起爆しているのは、アルミそのもの。犯人は、アルミを基点に重力子の急速な加速を引き起こし、エネルギーを放出、物体を爆発させている。という結論に至りました」

ここで、固法は一呼吸置いた。

「個人が武器の感覚で加速器を持ち運んでいるなんてことはあり得ない。つまり……そうした現象を引き起こせる、能力者の犯行が疑われます。そして、それ以上に厄介なのは……白井さん」

能力者、というキーワードに、部屋の面々がざわつく中、固法は黒子の名を呼んだ。

「今日捕まえた男……ジャッジメントを狙っていると、そういう言動があつたんですよ？」

「そ、その通りですよ！」

ざわめきの中で、黒子が声を張り上げて答えた。

「加えて、12日の一五学区で起きた高速道路における抗争事件で、『帝国』の相手チームの少年からも、同様の証言を得ています」

「ただの、テロ事件じゃないってことか……」

今日の喫茶店の事件で、最初に駆け付けたジャッジメントの一人である男子学生が、頭を抱えた。

「固法先輩。俺たちを狙っていることが分かった以上、これまで以上に対策を強めるべきです。仲間が現に一人、やられてるんです！」
「同感よ」

固法は真剣な表情で頷いた。

「防護シールドと、対爆ジャケットを、すぐにアンチスキルに融通してもらえるよう要請をします。必要時以外に、腕章を付けて歩き回らないように徹底しないと……それに、特に中学生の子たちは、無理に警備活動に参加しない方がいいかも……」

「私は逃げませんわ！」

黒子は立ち上がり、きつぱりと言った。

「仲間が負傷し、私も固法先輩もひどい目に遭いましたの。だからこそ、このまま放っておく訳にはいきませんわ！」

「私もです」

初春も立ち上がった。

「私たちが今まで活動してきたのは、こういう危険から、市民のみなさんを守るため。警備員ほど力はなくとも、できることがある筈です。ここで私たちだけ退いて、先輩方に頼り切りになる訳にはいきません！」

「初春……」

黒子は目を丸くして初春を見た。彼女が強く言葉を主張するのは珍しい。

「そうだ！僕も逃げません！」

「スキルアウト連中にやられっ放しでたまるか！」

「先輩がこう言っただ、尚更、あたしたちががんばらなきゃ！」

同調し、士気を高める声が、メンバーそれぞれから立て続けに上がるのを聞いて、固法は頭を下げた。

「みんな——ありがとう、って言っただいのか分からないけど……私はこのリーダーとして、みんなに危険な目にあってほしくないの。けど、ジャツジメントとして、負けたまま引き下がりたくもない！うまくできるか分からないけど……みんなの力を貸してほしい——お願いします——」

固法が頭を下げながら絞り出した言葉を受けて、自然と拍手が沸き起こった。

「美偉みいが一人で頑張る必要ないじゃん？」

茶髪の女子生徒が、隣から固法に声を掛け、固法は顔を上げた。

「あたしだって、後輩がケガさせられて、頭に來てんだ——絶対、一緒に、犯人捕まえような？」

「碧美あおみ……ありがとう」

ルームメイトの言葉を聞いて、固法はやっと、ほっとして笑うことができた。

「今日捕まった帝国のメンバーは3人……」

土曜日の午後。普段の休日であれば静かな風紀委員の支所だが、今は『帝国』への対抗心が燃え上がり、各メンバーが、警邏の計画を打ち合わせたり、アンチスキルとの連絡を熱心に取り合ったりする等、活気に満ちていた。

黒子は、向かい合わせの初春と、今日起こった事件について情報交換をしていた。

「警備員から正確な個人情報而降りてこないと何とも言えませんが……アルミの重力子グラビトンを操作できるような能力者ではなかったように思えますの」

「大通りで倒された人と、念動力テレキネシスの人、それに水流操作ハイドロハンドの人ですよね？」

初春が返した言葉に、黒子は頷く。

「つまり、爆発を引き起こした能力者は……あの逃げさせたバンの中に乗っていた可能性がある。初春、事件現場近辺の、監視カメラの映像にアクセスできますか？」

「できますよ。アンチスキルにアクセス許可をもらってから——」

「そんな悠長なことしてる場合じゃありませんの！」

黒子がパソコンの上から、顔を初春に近づけて語気を強めた。

「貴方なら、その位のハッキング、お手の物でしょう？ 相手はまた爆破事件を引き起こして、私たちを狙ってくるかもしれませんのよ!？」

「白井さん！ 声が大きいですって！」

初春は慌てて、口の前で人差し指を立てて周りを見渡す。

皆、熱心に作業に当たっていて、今の黒子の言動を気にする仲間はいないようだ。

「……分かりましたよ。今回は事が事ですから……始末書を書くのは、御免ですけどね」

「まあ、こういう手合いはナンバーの偽造が常ですけれど……どの方

面に逃げたかぐらいは、できる限り把握した方が役に立つでしょう」「そうですね。あつ、そうだ、ハッキングといえば——」

初春は、何かを思い出したように、黒子に目を合わせた。

「白井さん……昼にあなたが出かけるとき、丁度言いかけたんですが……どうも、昨日あたりから、この支部のネットワークに、誰かが侵入を試みているみたいなんです」

「ちよつとーそれって——」

黒子は立ち上がり、小走りで初春の近くに駆け寄った。初春は、パソコンの画面に、アクセス履歴を表示する。

「ほら、ここ——発信元のアドレスは、警備員でも、他の支部でもありません。書庫よりも数段強固なセキュリティを組んでるここにハックしてくるとは、相手は相当手練れですね」

「まさか、帝国!?!」

黒子が顔を青褪めさせる。

「私たちの行動が筒抜けだとしたら、由々しき事態ですよ!」

「できたばかりのスキルアウトチームに、そんなハッカーがいるとも思えませんけど——」

初春は話しながら、キーボードを素早く打ち、プログラムを次々に起動させた。

「ファイアウォールを組み直します。あと、回避サーバーにバックアップをとって……上にもすぐ報告した方が良さそうですね」

「誰が、そんなことをしているのか、分かります?」

「突き止めたいです」

初春がカタカタと指を動かしながら、早口に答えた。

「任せてください——こういうのは、私の仕事ですから」

「それにしても、能力者が既に3人、それにハッカーもいるかもしれないとなると——」

黒子は、窓のブラインドに指を差し込み、隙間から外を眺めて言った。

「——思った以上に、油断のならない相手なのかもしれませんね、『帝国』とやら……でも、逃がしません。必ずトップまで辿り着いて

……倒してみせますわ」

窓の外の、少し傾きかけた陽光が照らす街並みを見つめながら、黒子は決意を口にした。

夕方 —— 第一九学区

「着いたぞ、降りろ」

「ここって……旧スタジアム？」

運転をしていた、フードを被った若い男に促され、介旅初矢は、車を降りた。

手入れが長らくされていらないだろうだっ広い敷地には、アスファルトの隙間のそこかしこから草が伸びている。介旅たちが立つ場所の前には、イタリアのコロシウムを思わせる、2ないし3階層から成る楕円形の競技場が建っている。人の気配は、近くには無い。

「どうしてこんなところに？」

「さあな」

フードの男はぶつきらぼうに言う、歩き出した。

「俺だって最近入ったばかりなんだよ。ただ、隊長から、お前を連れて来いって言われただけだ」

「隊長……」

「何ぼさっとしてんだよ、早く来いよ」

立ち止まったままの介旅を見かねて、苛々した様子の方が振り向いた。

「あ、ああ、うん……」

介旅は、慌てて小走りで駆け寄った。

「あ、あのさ……」

「なんだよ」

介旅は、相手の顔色を窺いながら恐る恐る話しかけた。

「今日はうまくいったんかな？ 僕」

「ハッ、まあな」

介旅の先を歩くフードの男は、振り返りはしなかったが、口調には

少し嬉しさが滲み出ていた。

「お前がもってる能力、量子変速シンクロトロンだっけか？ ジャツジメントを一人病院送りにしたんだろ？ お前が現場を目視して、俺がいいタイミングで缶を投げる……特に2発目は、いい連携プレーだったんじゃないやねえか？」

「あ、そうだね。自分でもびっくりりさ。こんなすぐに強度レベルが上がるなんて……アレ、凄くなって思った」

「な、そうだろう？」

「はは……でもさ」

少し緊張が解け、介旅は思っていたことを口にする。

「2発目は、やり過ぎじゃないかなーって」

「ええ？」

「だってほら、とりあえず一人やつつけたし、追い討ちをかけるようなマネはよした方が——」

「おいお前」

フードの男が突然歩みを止め、介旅の方へ振り返った。

「何甘えたこと言ってるんだ？」

「え？」

介旅は、凄んできた男に面食らった。

「いいか、やるからには徹底的にやるんだよ」

「そ、そこまで？」

「当たり前じゃねえか！」

男は、介旅の眼前に顔を寄せて怒鳴った。フードで作られた影の奥に、ギラギラした瞳が見える。

「お前、何しにこの帝国に入ったんだ？」

「そ、それは」

介旅は唾を飲み込んだ。

「ジャツジメントに仕返すするため……」

「ああ。ジャツジメントだけじゃねえぞ」

男は歯を剥き出しにして言った。

「アンチスキルも、他のうざってえスキルアウト共も、マジメに勉強

腐ってる学生どもだってな、みんなぶちのめす相手だぞ」

「そ、そんな無茶な。何で一般の人まで——」

言いかけた所で、突然左頬に熱を伴った痛みが走り、介旅はよろめいた。

少し間を置いてから、顔を張られたのだと気づき、介旅はぞつとした。

「それが隊長からの指令で、ボスからの命令なんだよ！」

男は唾を飛ばして喚いた。

「いいか。生半可な気持ちで入ってきてんじやねえぞ。お前がトロイことをしてたら、組んでる俺までとぼつちり食らうんだ。もしそうになったら、お前のタマ潰してやるからな」

「わ、わかった、分かったよ……」

介旅が泣き出しそうな声で言うと、男は鼻を鳴らして、再び歩き出した。

結局、介旅はそれから相手に話しかけられず、黙って暫く歩いていった。

二人は、過去に資材を競技場内へ搬入するために使われていたであろう、地下の通用口から中に入った。人気の無い、暗い廊下を進み、暫くしてから重たい扉を開けると、大勢の観客が行き来できるような、広いホールに出た。

「よう」

二人に、声をかける者がいた。

介旅を数日前に勧誘した、ネクタイを締めた優男だ。休憩スペースとして使われていたのかもしれないカウチに、悠々と腰かけている。優男の周りには、部下らしき数人の人物もいる。男のように見えたが、中には顔の上半分を、目の模様を描いた布で覆っている者もいて、得体の知れなさを感じさせた。

「ご苦労だったな……おい、お前はもう帰っていいぞ」

「え、ハイ、でも隊長……」

介旅を連れて来たフードの男は、何か言いたそうにしている。

「何だ」

「あの、や、約束の、金。とカプセルは……」

隊長と呼ばれた優男が舌打ちをした途端、フードの男は黙り込んだ。

隊長が立ち上がり、詰め寄る。その背後から、隊長よりもずっと大柄な、筋骨隆々の黒髪を伸ばした男も着いてくる。

介旅も、フードの男も、二人を前に何も言い出せず、縮こまっていた。

「おいてめエ」

隊長が、フードの男に言った。

「今日の仕事を振り返って、どうだった？」

「ど、どうだったって……ガッ!?!」

フードの男の言葉は、途中で呻き声に変わった。

大柄な男が、半袖の腕を突き出し、片手で彼の首を掴み、持ち上げたからだ。

「てめえは確かにジャツジメントを一人倒したそうだな……けどよ、あと3人いた筈だ。そいつらはどうした？」

首を絞められている男を見上げて、隊長が問い詰めた。

「そ、それは……」

目を泳がせながら、フードの男が苦悶の声を出す。

「あいつら、時間稼ぎをして……もうすぐ戻ってくるはず……」

「来なかつたら？」

隊長が冷たく言い放った。

「相手は腐ってもジャツジメントだ。ブービートラップじゃなくてよ、そいつらが面と向かってやり合って、絶対に勝てるって保証はあるだろうなあ？ 捕まれば、俺らの情報が筒抜けになるかもしれないねえんだぞ!!」

「あ……だって、俺のせいじゃ……」

首を絞める大柄な男の腕には、漢字で何やらタトウーが刻まれており、その皮膚に血管が浮き上がる。フードの男は言葉を出すことも難しいらしく、顔がだんだんと赤くなってきた。

「おい、この生意気なヤツを仕置きしてやれ」

隊長が大柄な男に言うのと、男はもう片腕で、釣り上げられた相手の顔を掴んだ。そして、ホールの壁面に体を向けた。

流石に見ていられず、介旅は顔を背けた。

くぐもった悲鳴と、何度か鈍く壁にぶつけられる音がする。

「おい、そつちのお前……名前、何と言ったっけ？」

隊長は、介旅に声をかける。

「か、介旅、初矢です……」

「そうそう、介旅クンだったなあ。お前、喜べ——鉄雄様が、お前に会いたがっている」

「て、てつおさま……？」

壁に打ち付けられているであろう男の方を直視しないよう、顔を背けながら、介旅はか細く言った。

「ああ、そうだ」

隊長は、親指でホールの奥の通路を指差した。

「鉄雄様をお待たせするな。早く行け！」

「は、ハイ！」

介旅は、踵を返して歩き出した。なるべく、形容しがたい鈍い音の響きを耳に入れないようにしながら歩いた。

途中、音も聞こえなくなり、介旅は立ち止まった。介旅が歩いているのは、競技場の外周を巡る通路らしく、先が左方向に曲がっている。隊長達が居たホールは既に見えない。

周りは静寂に包まれ、人の気配がしない。電気が着いていないため、既に夕方に差し掛かったこの時間帯では、通路は不気味に暗くなりつつあった。介旅の足が微かに震える。

（そのまま歩めよ）

「えっ何!?!」

突然男の声が聞こえ、介旅は息を吞んで辺りを見回した。
誰も居ない。

（鉄雄様は、真っ直ぐ行った先だ。遅れるなよ臣民）

「て、^{テレパス}念話……？」

隊長が従えていた部下の中に、その方面の能力者がいるのだろうか。介旅は唾を飲むと、再び歩き出した。

一、二分歩いただろうか。やや開けた場所に、写真撮影スペースのような舞台があった。そこには、他の場所から運んできたのであろうカウチが一つ置かれ、少年が一人座っていた。逆立った黒髪と、首に巻かれた、赤いマントが目立つ。

「あんたか……モノを爆弾に変えちまう新入りってのは」

少年の声はハスキーで、声変わりをしたばかりのような声だった。「は、はい」

介旅は、舞台の下で頭を下げた。先ほどのフードの男の悲鳴が耳にこびりつき、相手を直視する気になれなかった。

「俺が、誰だか知ってるか？」

「て、鉄雄様？」

「そうだ」

介旅は、顔を上げなかった。一刻も早く、ここから帰りたい一心だった。

「今日は良い働きをしたそうだな」

「……ありがとうございます」

「そのジャツジメント、死んだのか？」

唐突な問いに、介旅は言葉に詰まる。

「どうなんだ？」

「びよ、病院送りだって……死ぬくらいのケガでは、なかったかも……」

「ふーん」

上司に叱責される企業社員にでもなった気持ちだった。介旅は、次の反応を聞くのが怖く、ひたすら頭を下げて、摩耗の激しい床の絨毯を見つめ続けた。

「それならいい」

返って来たのは、介旅にとって意外な一言だった。

介旅の前髪から、汗が雫になって落ち、絨毯に黒い染みを作った。

「顔を上げろ」

鉄雄の声を聞いて、介旅が恐る恐る顔を上げると、目の前にふわふわとカプセルが一錠浮かんでいるのが目に入った。

「褒美だ、取れよ」

介旅が両手を差し出すと、ぽとりとカプセルが掌に収まった。それは赤色と青色に丁度等分するように塗られていて、如何にも毒々しい印象を介旅に与えた。

「てめえで飲んでもいいし、その辺の、話が分かる奴に売り払ってもいい……それなりの額になる筈だ」

鉄雄は、薄く冷たい笑みを浮かべた。

「これからも、期待してるぜエ、新入りさんよ」

ああ、この人は。逆らってはいけない。

介旅は、直感的にそう確信した。

何度も自分は殴られ、虐められてきたが、そういった奴らは、少なくとも自分を金蔓だとか目下だとかいう風に見ていた。

目の前にいるこの男は違う。

金とか格がどうかこうとかいう問題じゃなく、底知れなさを感じた。

恐れが噴き出る介旅の顔を一瞥して、鉄雄は小さく笑い続けた。

X・ケイ

49

5年前――

兄の葬儀場には、数える位の人しか居なかった。兄が逮捕されたのは、爆弾テロの武器製造に関わった罪を問われてのことだった。財政緊縮派の剛腕として名が知られた議員を狙い、会館から出て来た所へ仲間が爆弾を投げ付け、ボディガードを何人かバラバラにし、議員の片足を吹っ飛ばしたテロ事件があった。その使われた爆弾の製造を、西東京の山間に隠された廃村を改造したベースキャンプで行っていたのが兄だった。兄は、ゲリラの活動に身を投じた政治犯として無期懲役を受けて投獄され、暫くした後、病死した。政治犯は、収容者同士、或いは面会者との意思疎通を最小限に抑えられた上、独房に入れられるという事で、収監されてから精神的におかしくなり、食事も碌に摂れなくなっていたという。兄は、刑務官から暴行を受け、その傷が元で死んだのだ、とか、絶望して自殺したのだ、とか、そういった噂も耳にしたが、自分にとってはどうでもいいことだった。

兄と自分は、10ほど年齢としが離れていた。高校を卒業して上京した兄は、間もなく、家族と疎遠になった。あの子、連絡も大して寄越さないの。と母が愚痴る度、仕事帰りの父は、分かった、メール送つとくよ、と適当に返事をしてはぐらかしていた。近所の誰々さんの娘さんは、ちゃんと毎晩テレビ電話させてくれるのに、ウチの子ときたら。と、母は口癖のように言っていた。学校のクラスメートの一人が言うには、ウチも似たようなもんだよ。大学生って、最後のセイシユンなんだって。だから、自分のやりたいようにやるんじゃない？ということだった。

まさか、ゲリラ活動に関わっているとは、両親は予想だにできなかったし、自分だって知る訳がなかった。テレビやSNSを通して、連日火炎瓶を投げまくってシュプレヒコールを上げる、覆面の集団の様子や、ハツシユタグを付けて賛同の数を稼ぐ仮想デモが行われているの

は知っていた。自分はそれらを、騒がしいなあと思わなかった。後日、半分物置と化していた兄の部屋に、警察の家宅捜査が入ると、男子がエロ本を隠すような場所から、「革新的な思想」とやらについて書かれた本がたくさん出て来た。古びたパソコンも押収され、ゲリラと連絡を取り合ったという履歴も発掘された。要は、家を出る前、高校生の時からそういう兆候があったという事だ。

父は、会社を退職した。酒の量が増え、母や自分にしよっちゅう暴力を振るうようになった。ある時、酔いつぶれた父は、依頼つてのはイガンじゃねえんだ。そういう風にしろってことなんだ。と、自分で割った窓ガラスで自らの手を傷つけ、だらだら滴り落ちる血に涙しながら、愚痴を零していた。赤ら顔で、涎をみっともなく垂らしながら泣き腫らす父の顔を見て、自分は絶対酒はやらないと決めた。母はテレワークの仕事をクビになり、壁に向かってブツブツ独り言を言う時間が増え、その反面、こちらから話しかけても返事をしなくなった。父も母も碌に家事をしなくなり、かと言って自分も手伝う気がせず、家は荒れ放題になった。

自分は学校に通えなくなった。兄の逮捕直後から不穏な視線を感じていたし、それまで付き合っていた友達もあからさまに自分を避けるようになった。決定的だったのは、ある日の理科の授業で行われた実験で、汚れた白衣を身に付けた担当教員が、燃焼つてのは注意してやるんだ、じゃないとテロみたいにケガしちまうからな、と口を滑らせたことだった。この先生の一言というのは、朝礼の並び方が悪いとか、何で次の授業の準備を机の上に出してから休み時間にしなかったとかドヤされる時とは異なり、効果てきめんだった。それからたくさんのあだ名を押し付けられた。犯罪者、テロリスト、ゲリラ女、下痢娘とかそういうのだ。呼ばれるだけでなく、机、ノートの表紙、上履き、そこかしこに書かれた。表立って行為に参加しない者は、ただ自分のことを居ない者だと無視した。極めつけは、担任の教員に個室に呼び出され、校長も同席している所で、他の保護者から苦情が来ている、テロリストの家族と一緒に学校の自分に自分の子供を通わせたくないだそうだ、だから別室で授業を受けないか、その方がお前も安心だろ

う、という話を一方的にされたことだった。最早、自分にとって学校に通う価値は一つも無くなった。

そして、程なく両親は離婚した。母は家の一部屋にほとんど籠り切りになり、父はある夜出かけたつきり、帰ってこなかった。兄の葬儀は家族葬という形で行われたが、喪主になっているのは嫌々引き受けたいらしい、神経質そうな遠い親戚だった。だったら最初からやらなきゃいいのに、と、片手で数える程しかない参列者を見ながら、自分は喪主側の席でぼんやり考えていた。

一通り式が終わった後に、自分に話しかける人がいた。プロレスラーと勘違いする程の大柄な女の人だった。兄にもしものことがあれば、妹は只じや済まないだろうから、助けてやって欲しい。そう兄から頼まれていたのだという。虫のいい話だ、と初めは無視した。てめえの所為でこうなったんだ、と兄を恨んでいた。ただ、どの道自分は、このままでは養護施設に入れられる。親戚は、自分を厄介払するばかりだ。人殺しの家族となれば、施設のカーストの中でだって、自分は苛められるに違いない。マシな道を選ぼうと思い、その女の人に付いて行くことにした。

女の人の家で食べた、サンマの塩焼きは美味しかった。今じゃ人工物も流行ってるけど、うちは天然で決めてるんだ、いい味してるだろう？と女の人は言った。久しく、誰かが作ってくれた温かい食事というのを食べていなかった。お腹が空いていたので、3回もご飯と合わせでおかわりした。

自分はチョコおばさんの養子になった。

おばさんにある日、兄と同じゲリラの仲間なのかと聞いたことがある。おばさんは、知らなくていいことだと怖い顔をして言ったので、それから気にならないようにした。ただ、おばさんは手先がとても器用で、夜遅くには、和室のちゃぶ台の上で、銃の手入れをしている所を見てしまったことがある。恐らく、この人もゲリラなんだろうなと察しはついていた。自分はゲリラを憎んでいた。けれども、普段は優しく、住まいと食べ物を提供してくれるおばさんのことは好きだった。だから、ゲリラのことは頭から忘れようとした。

おばさんが気を使って、学校に行けない自分のために、小学校高学年から中学校くらい勉強に關わる本を色々揃えてくれた。日がな一日それを読んで過ごしていたけれど、一番お気に入りだった本は、本棚の一番高い所に置かれていた、20世紀の中米の革命家が著したという戦術書だった。それは確かにゲリラの思想に通じていた筈なのに、まるで詰将棋を楽しむかのように、圧倒的不利な状況からどう事態を打開するか、想像を膨らませてワクワクしながら読めた。自分の国のゲリラは嫌いだったが、それはそれとして、本に書かれていることを、海の向こうの御伽噺として読んでいたのかもしれない。

ある日、大勢の警官が家に踏み込んできた。彼らは見慣れた制服ではなく、皆シヨツピングモールで買い物してから寄りましたという風な、一般人と見紛う格好をしていた。後で聞いた話によると、ゲリラに対処する特務警察という部署から遣わされた連中だった。彼らは皆冷たい目をしていて、自分に両手を壁についてじっとしているよう、銃を突きつけながら命令した。言われたままにしていると、おい、かわいい子だぜ。と1人が言い、2、3人の男が集まってきて、この間お前らに仲間がリンチされ、丸焦げにされたんだ、クソツたれ、と言いながら、わざわざ手袋を外し、自分の身体を乱暴にまさぐり始めた。自分が自分でなくなるような、気持ち悪さと不安とで動けなくなっていると、急に背後で激しくもみ合う音がして、すぐに、大丈夫か、とおばさんが声をかけてくれた。自分を取り囲んでいた警官たちは顔の部品がずれたんじゃないかと思う位打ちのめされていた。

ゲリラへの憎しみが消えた訳じゃなかったけれど、自分たちを追い込む大きな体制というものが、何となく分かった気がした。彼らは彼らで、敵意を持って、どこまでも追い掛けてくることを知った。

避難先で、おばさんに、ゲリラの仲間に入れてほしいと頼んだ。兄の遺志を継ぐ訳じゃないだろう、と胸の内を見透かされた。自分は、ほかにやりようがないと言った。強いて言えば、おばさんへの恩返しがあったかった。別に今の政治体制がどうか高尚な理由があった訳じゃなく、ただ現状をぶち壊したいという思いがあった。

避難先では、おばさんの仲間だという、20歳かそこらの男に出

会った。竜作と名乗るその男に紹介されると、まず中学校までは最低勉強した方がいいということ、そのためには、今から遠く離れた所へ身を移すことを忠告された。

ちようど、学園都市に任務があるんだと竜作は言った。数年は潜り込む必要のある、大掛かりな任務だと。竜作は、今なら、学齢期の児童の転入についてキャンペーンもやっている。政府が大々的に補助金を出すんだそうだ。それに乗じよう。高度な学力と確かな身分を求められる名門私学なら兎も角、庶民的な学校であれば、自分にも入れるものもあるだろうと言った。いくらなんでも、実験都市と言われる学園都市の学校に、半年も不登校の自分が入れるか、半信半疑だった。しかも、竜作の妹だという、ちようど同じ年の子も一緒に行くという。どちらかが落ちたら気まずいなど思ったが、ともかく、短い間に猛勉強した。幸い、チヨコとホームスクールをしていたのが役に立ち、学力的には何とかなりそうだった。

一度、お婆さんのことを「お母さん」と呼んでみたことがある。お婆さんは、ひどく驚いた顔をしてから、寂しそうに微笑んで、私はお前の母親には代われないんだよと言った。気恥ずかしいのだろうと思ったが、今まで通りの呼び方でいいと言われて、特に断る理由も無かった。何となく母と呼んでみたのにも深い訳はなかったし、そもそも呼び方一つで、お婆さんとの関係が左右される事でもなかったからだ。

「名前を変えよう」

入学申請の書類を出さなければいけない時になって、お婆さんがそう言った。チヨコという名も、竜作という名も、本当の名前ではないのかもしれない。家族とも縁を切った自分にとって、本当の名前に未練は無かった。イニシャルを一文字とって、下の名にした所だけが、名残だ。

そして、私は学園都市の、とある中学校に入学した。

竜作の妹だという子とは仲良くなれた。というより、友達という関係がどんなに脆いものか十分に思い知らされたので、彼女以外に交友関係を深める気もなかった。竜作の妹は、感情が表に出ない内気な子

で、長く伸ばしていた黒髪と、その前髪の奥にある細く切れ長の目が、彼女をとっつきにくい雰囲気仕立て上げていた。彼女も私以外に気を許せる相手がいなかった。

ある時、彼女が、顔が良く強気な女子を中心とした集団に囲まれていたのを連れ出したら、翌日、逆恨みを買ったらしく、複数の男子に言いがかりをつけられた。そして、おばさんに仕込まれた護身術で相手をまとめて返り討ちにした。そんな事が何回もあり、特に彼女が自分の傍にいたがったことで、常に一緒に行動するようになった。自分の保護者として呼び出されたおばさんを相手にして、教員が疎み上がったこともあり、自分と竜作の妹は、周りから近寄りがたいペアとして認識されるようになった。でも、お互いに勉強は真面目にし、それ以外の場面で、必要以上に目立たないようにした。放課後はいつも一緒に帰り、他の生徒が寄り付かないような、学区の外れで遊んでいた。

中学2年生になって、自分の身体検査システムスキャンの判定は変わらず無能力者レベル0だった。自分は精神感応系の微弱な素質があるらしかったが、どうでもよかった。元々、能力向上を目的に学園都市に来た訳ではなく、仮に得られたなら、将来の任務に役立つかもしれない、とは思っていた位だ。一方の彼女は、予想外に強度レベルが向上し、強能力者レベル3になっていた。けれども、互いの能力についてはあまり話題にしなかった。加えて彼女が、自分よりもレベルが高いことを笠に着ることもなく、それまでと同じように付き合いが続いた。彼女の能力は、ミクロな世界に作用するものらしく、説明を聞いてもよく分からないものだった。ただ、もつと極めれば、物理学の方面で就職に有利になるのだと、彼女は珍しく顔を綻ばせて語っていた。

竜作の妹は、兄がゲリラ活動に参加しているのを、知らなかったのかも知れないし、知っていたのかもしれない。竜作が、あいつには普通の人生を送らせてやりたい、と何度か口にしていた。ある時彼女は、名前を変えようかな、と呟いた。どうして、と聞くと、だって発音しづらいじゃん、と冗談なのか本気なのかよく分からない様子で返された。それから中学の卒業が近付いて、彼女は他の学生と同じよう

に高校へ進学することになった。自分は、高校には進学せず、チヨコおばさんの店を手伝いながら、本格的にゲリラの道へ歩もうとしていた。この学園都市で、高校に進学しないというのは、学園都市外へ出てやり直しを図るのか、はたまたスキルアウトへの道を進むのかという、滅多にない選択だった。当然、進路担当の教員からは白い目で見られたが、気にも留めなかった。寧ろ驚いたのは、竜作の妹が特に何も言わなかったことだ。自分で選んだ道なんだからいいんじゃない、とだけ言ってくれたのが、嬉しかった。もしかするとやはり、自分がゲリラに関わっていることを、薄々感付いていたのかもしれない。

「ケイちゃん。これからも、私たち友達だよな?」

長く絹のように滑らかな黒髪についた桜の花びらを払いながら、彼女は、卒業式の日になんかそう言った。

「うん、帷子ちゃん。これからも友達だよ」

彼女に対してなら、私は素直になんか言える。
きつと今も。

7月15日、夕方 —— 第十学区 「帽子屋」

「……ケイ。……ケイ、起きな」

頭がガンガンする。ケイは、チヨコの呼びかけで、目を覚ました。

「駒場が来たよ。アンタ、話したいって言ってたじゃないか」

「……もう、そんな時間なのね」

布団にも、タンクトップの背中にも、ぐっしよりと汗が染みついてる。

「なんか……長い夢見てた気がする」

「昼寝ってのは浅い眠りだからね、夢を見やすいモンさ。それより、7区で張り切った後じゃないか、疲れてるんなら、休んでても——」

「平気。ありがとう……すぐ着替えるから、行くよ」

チヨコが部屋を出て行くと、ケイは汗ばんだ自分の服を着替え始めた。

上半身が露わになったところで、ケイは自分の体を見下ろす。

女として成長していく自分の体が、ケイは嫌いだった。特務警察に

踏み込まれた一件以来、男性に対して、ケイは拭えない恐怖感を持ち続けている。だからこそ、男から見た女という存在になりたくなかった。寧ろ、自分がその恐れる男に、なれるものならなりたかった。膨らむ双丘は、自分を女として際立たせる邪魔者にしか思えなかったし、月の障りだって、なぜ男にはなく、女だけこんな苦しい思いをするのかと、常に理不尽に感じていた。

頭を振ってから、体の汗を拭き、新しい服に着替える。

部屋を出かけた所で、ふと、ここ暫く連絡がとれない一人の友達のことを思い出す。

彼女が、ケイの夢に現れた気がする。

「……イコちゃん、どこで何してるんだろ」

ぼつりと呟いてから、ケイは客人の元へ向かった。

7月15日 ——アーミー本部 ラボ

「どうだ……何か感じるかね？」

Dr. 大西は、期待に胸を膨らませながら、ガラス越しに、ヘッドフォンを耳に当てる26号と27号の様子を観察していた。木山博士から譲り受けた、幻想御手の音声波形データレベルアップバーを、ここ数日研究者が解析を行い、それらがナンバーズにどう影響するかの予測を立てていた。41号鉄雄と異なり、元からいたナンバーズは、皆早老による免疫の低下を有している上、それぞれが何らかの身体の障害を抱えているため、慎重に実験の計画が立てられた。そこで、満を持して今回、比較的体調の良い2名に、幻想御手を摂取させる実験が行われていた。

「……楽しい」

床に座るタカシは、大西相手には滅多に見せない笑顔を浮かべ、体を前後に軽く揺らしている。

「そうかな？」

車椅子に腰かけたマサルは、怪訝そうな表情を浮かべている。

「ボクは、こういうのはあまり好みじゃないなア。もつとき、やつぱりクラシカルな音楽の方が……」

二人の声は、ピンマイクを通して、隣のブースにいる研究者たちに伝わった。

「ほう？」

大西は二人の反応の違いに、興味をそそられた。近くの研究員に声をかける。

「被験体の脳波E E Gに変化は？」

「26号のβ波が+3%。実験前に比べ、高揚状態にあると言えます」
「ふむ……α波ではないのかね？音楽による精神集中を促すのであれば、βは寧ろ減少すると予測したが……」

大西はブース内に設置されたマイクに向かった。

「26号！もつと具体的に感想を言ってくれ！」

大西の声が、保育園のスピーカーから響く。

「……うん、なんだか元気が湧いてくる。この女の子？の歌、なんだかワクワクするよ」

「歌？」

研究者たちは顔を見合わせた。

「……おい、君。ちよつと聞いてきてくれ」

大西は、眼鏡を掛けた若い研究員に指示した。彼は難色を示した。

「ええ？しかしドクター、E Q ヘッドフォンイコライジングを用いずに聴くのは、危険だと——」

「おかしいと思わないのかな？」

大西は忙しなく歩きながら、周りの研究者に訴えた。

「木山博士も、41号も、『音』としか言っていない！『歌』等とは一度も言わなかったぞ？」

大西の剣幕に、若い研究員は渋々ブースを出て、タカシとマサルがいるベビールームへと足を運ぶ。それから、不安そうな顔で大西を一瞥してから、タカシのヘッドフォンを取り上げ、耳に当てた。

「……」

研究員は十秒程、ヘッドフォンから流れる音を聴き、やがて不思議そうな表情を浮かべて、タカシのピンマイクを借りて応答した。

「ドクター。……あの、これ、本当にレベルアップなんですか？」

「何？」

大西が、研究員からの言葉に眉を顰める。

「どういうことだ」

「いや、多分、ていうか絶対、これ違いますよ」

「貸してみろ！」

大西は小走りでベビールームへ入り、研究員のヘッドフォンを手にとった。

ダンサブルなBPMで、ブーストの利いたバスドラムが響き、歯切れよく倍音豊かなシンセサイザーの音が広がる。その上から透き通った女性のボーカルが流れる。

「おい」

大西は目を見開いて隣の研究員に言った。

「なんだこの曲は!？」

「アリサちゃんを知らないんですか、ドクター。鳴護^{めいご}アリサちゃん!」

「あ、ありさ?」

「今ネットで人気急上昇中のストリートミュージシャンですよ!街中でもしよっちゆうかかってますし、SNSでも話題沸騰で!」

研究員は顔を熱っぽく輝かせてまくし立てた。

「へえ、アリサちゃんて言うんだ」

タカシが顔を綻ばせて言った。

「ねえねえ、もつと聞かせてよ!」

「タカシくん、話が分かるなあ、君は!それでドクター、実はですね、僕、アリサちゃん推しで、グッズとかもいっぱい買ってて……まさに、今をときめくJK歌姫!あ、ところで来週末、有給もらいますよ。ラジオの公開収録にダメもとで応募したら、いやあ、これが当たっちゃって!!ドクターもあとでネットの動画見てくださいよ、僕のおススメはですね——」

他にどんな曲がおすすめのなのか、研究員の言葉を待たずに大西はヘッドフォンを押し付けると、小さな足を大股に開いてラボへ顔を出すなり、叫んだ。

「騙されたぞ!EQヘッドフォンなんてのも嘘っぱちだ!あれはレベルアップなんかじゃない!大佐に報告だ!木山博士をすぐに召還するんだ!」

ラボのメンバーは一様に、慌てふためいた。

「ところで、これ、何の実験なのかなア……」

わたわたする研究員の様子を眺めながら、マサルが怪訝そうに呟いた。

第一〇学区 —— 「帽子屋」

「おっす、駒場君」

「久しぶりだな、ケイ」

自分より遥かに背の高い大柄な男、第七学区のスキルアウトのリーダーである駒場の姿を見て、ケイは快活に挨拶した。この外見でも、自分とそう年齢が変わらない少年だから、見た目で人を判断してはいけないと、会う度にケイは思っていた。

チヨコが第八学区の食堂に加え、時々開くこの「帽子屋」は、アンダーグラウンドの世界を生きるスキルアウトや暗部組織御用達の武器屋だ。表向きは、通称の通り、型落ちしたアパレル製品を主に扱う中古雑貨・古物商として営業していたが、実際、この店に来る客は、皆チヨコの調達する武器、それに関連する品物が目当てだ。ゲリラにとっては、大切な資金源の一つであったし、学園都市の多様な人物・チームとの情報をやり取りする上でも役立っていた。チヨコ本人が荒くれ共を捻じ伏せる力を持つていることと、絶妙にバランスを取りながら各勢力との商売関係を維持していたことが理由で、この店は、そうした裏の業界における中立地帯となっていた。

「今日は何を買いに来たの？」

「硝薬と、炭素繊維カーボンファイバーをな。チヨコさんとは、俺たちのような貧乏人でも手に入るから、助かる」

抑揚の少ない、機械的な喋り方で駒場が答える。この男はいつもこんな話ぶりで、その体格も相まって非常に近寄りたたい雰囲気を感じさせるが、心根は優しい、人間味のある人物だということをケイは知っていた。ケイが気軽に話せる、数少ない男性の一人だった。

「褒めてくれて嬉しいよ。マネーカード、もう少し弾んでくれたって構わないんだよ？」

「いや、チヨコさん……すまない、それは無理だ。今の騒ぎが落ち着いたら、どこかでこの恩を返そう」

ケイは、首を伸ばして、駒場の斜め後ろで所在なさげにしている金髪の少年を見た。典型的な不良の印象を与える見知らぬ少年に、ケイはやや顔つきを厳しくした。

「そっちの人は……」

「あつ……浜面です」

片手を頭の後ろに添えて、少年が頭を下げる。

駒場が、ケイと浜面を怪訝そうに交互に見て、それから浜面を肘で小突いた。

「初対面だったか？何度か会っていると思っていたが」

「この辺りの街路には仕事じゃ入らないですよ、俺、たいていドライブじゃないですか、車で待ってたんだと思います」

視線をおどおどさせる浜面を、ケイはしげしげと眺めた。

「ふーん……派手なカツコしてるけど、悪い人じゃなさそうだね、駒場君がそばに置いとくぐらいなもの」

「いや、その、大したことないですよ」

どこか煮え切らない態度の浜面を、駒場が興味深そうに見る。

「……看板娘に惚れたか？」

「からかわないでくださいよ駒場さん！」

駒場がふっと笑みを見せたのを、ケイは物珍しく見た。ほとんど無表情なこの大男が感情を表に出すのは滅多にない。

「だらしないヤツに見えるかもしれないが、こう見えても運転の腕は確かだ。役に立つ」

「へえ」

ケイは素直に感心して浜面に向かって言った。

「すごいじゃん。年、私とそんな変わんないでしょ？もう免許取ってるんだ？」

「いや、それは……」

「そこは、『持ってます！』って言っとくんだよ、坊ちゃんぼっ」

チヨコが、どこか楽しそうに言った。

「そうだろ？駒場」

「ああ」

駒場は先程と同じく、薄く笑みを浮かべている。

「作ったからな、この間」

「へえ、堅実だねえ」

ケイが、事情を察して言うと、浜面はバツが悪そうに顔を俯かせた。しかし、馴染みの顔がもう一人いないことに、ケイは気付いた。

「あれ？　そういえば、半蔵君は？」

「留守番だ」

「珍しいね」

「実は、その事も関係しているんだが」

駒場が、ケイに向かつて、視線をより鋭くした。

「ケイ……『帝国』について知っていることを教えてほしい」

「奇遇だね」

ケイが返した。

「私もね、実はそのことで君らに話がしたくて」

「風紀委員ジャツジメントは、あまり詳しい情報まで掴んでいないようだな」

腕組みをした駒場が静かに言った。

「しかし、ジャツジメントを狙い打ちにするというのは……向こう見ずだな、帝国は」

「今日の事件で、私が話した子は……ジャツジメントが狙われたのは初めてだつて言つてたよ」

ケイは、昼に白井たちと遭遇した事件を振り返りながら話す。

「ただ、爆弾事件は前から何件か騒ぎになつてたから、もしかすると、以前から狙つていたのかもね」

「妙だ。奴らは、あくまでスキルアウト内で勢力を伸ばそうと企んでいるものと考えていたが。ジャツジメントを敵に回せば、警備員アンチスキルだつて黙っていないだろう。なぜわざわざ、蜂の巣を突つこうとする？」

「今は、アーミーだつて漏れなく付いてくるさ。アンチスキルと共同で治安維持にあたるつてんだからねえ」

チヨコが、眉間に皺を寄せて言った。

「駒場。アンタんとこと帝国は、今、やり合っているのかい？」

「まだ、にらみ合いといったところだが」

駒場がチヨコに答える。

「小競り合いは起きている……やつらは元々、十学区の出のようだが、最近七学区の俺たちの領分でも、薬物の取引を始めようとしているらしくてな。ジャツジメントにまで噛みつくようでは、迷惑極まりな

い……」

「所詮は身の程知らずってところだろうね」

チヨコがため息をついて言った。

「ちよいと気が大きくなり過ぎてるんじゃないかね？ スキルアウト同士でやり合うならともかく、ジャツジメントやスキルアウト、加えてアーミーまで敵に回すんなら、それこそ……革命でも起こそうってのかね。どこにそんな自信があるんだか」

チヨコは、途中、意味ありげにケイに目配せをした。

「あのさ、アーミーっていやあ」

それまで、静かに話をきくばかりだった浜面が割って話に入った。

他の3人の顔が自分に向いたことで、浜面はおどおどしながら話す。

「いや……実はさ、昨日の金曜日、アーミーの奴が、ウチの学校に来たんだよ」

「アーミーが？へえ、アンタ、どこの学校なんだい？」

「職業訓練校だよ……ここからあんま遠くないだろ？」

チヨコの問いに、浜面は肩を竦めて答えた。

「でも、アーミーが何をしに？」

ケイが尋ねると、浜面は駒場に顔を向けた。

駒場が頷いた。話してもいいという了承のようだ。

「島鉄雄ってヤツ、知ってるかい？」

「島……？」

ケイとチヨコは顔を見合わせた。

「ウチの学校の工業科のヤツなんだけど、元々は暴走族バイカーズの下っ端だった奴だ。こいつがある日、どういいういきさつだかは俺もよく知らないけど、アーミーに捕まった。アーミーの能力研究施設に送られたんじゃないかって話だ。で……ついこの間、そいつが脱走したらしい。それでアーミーは、特務警察をウチの学校に送って来たってわけ。まあ、大した手がかりもなく、引き揚げたけどね。島は、ここ最近、ずっと学校には来てないから」

「能力研究施設……」

噛み締めるようにチヨコが口にした。ケイにも、今の浜面の話には心当たりがあった。

「竜が言ってた。最近、アーミーの研究施設に入れられた、若い男の子がいるって」

二人の言葉に頷いて、駒場はチヨコの方を見た。

「チヨコさん、アーミーについては、あなたたちの方が詳しいはずだ。アーミーは何を研究しているんだ？」

「……奴らの研究施設は、『ラボ』と呼ばれている」

チヨコが静かに答える。

「表向きは、アーミーが主導する、軍事技術の開発・研究施設。その陰で、人の……能力開発も行っているらしい。この学園都市の中でも、奴らは寧ろ古株さ。ただ、奴らの手法は、ケイや駒場たちが受けた『カリキュラム』とは別物らしい。つまり、目立った成果を挙げられないまま、細々と続けているんだそうさ。実態は私らも、まだよく掴んでいないが……今月の初めに、第七学区の住宅街でガスの破裂騒ぎがあったら？ 私らの伝手によると、あの騒ぎは、アーミーに囲われている、古い実験体が起こしたんじゃないかって噂だよ」

「どうして、その島って人が、アーミーにいきなり研究されてるの？」

ケイが、疑問を挟んだ。

「だって、職業訓練校トレーニングセンターの生徒やってた子が、いきなりアーミーの能力研究の対象になるなんて、変な話じゃない？ 前からずっとそうだったならともかくさ」

「ああ、奴は無能力者レベル0だった。ついこの間までは」

「この間までって？」

浜面の言葉に違和感を覚えて、ケイが聞き返した。

「ああ。けど、いざ戻って来た島は……もうレベル0じゃない。能力者だ。それも強力な」

「……アーミーの研究を受けて、一気に能力が伸びたってことかい？」

チヨコの質問に、駒場がゆっくり頷いた。

「そこでだ……チヨコさん、ケイ。幻想御手レベルアップって言葉に聞き覚えは？」

聞き慣れない言葉に、ケイが疑問を浮かべて答えようと口を開け

た。

その時、入り口のドアが勢いよく開かれ、4人が一斉にそちらを向いた。

「おおい!! 駒場のゴリラ野郎! 探したぜエ! 全^{ぜえ}然^{ぜん}携帯に出やしないんだから、このデジタル音痴!」

黒いライディングブーツが、帽子屋の床を踏みしめた。大声を出しながら入って来たのは、赤いズボンを履いた、丸顔の少年だった。

チヨコは顔を顰め、駒場は眉を少し動かし、浜面はあからさまに嫌そうな顔をした。

「誰……?」

ケイの知らない顔だった。

少年は、ずかずかと店内を進んだかと思うと、ぴたりと足を止め、ケイの顔をまじまじと見た。

「あれえ……かわいいね、君! なんて名前?」

気色悪い。それが、金田に対するケイの第一印象だった。

「あの、あなた、誰？」

にやけた顔でこちらを見つめてくる金田に対して、ケイは再度誰何した。

「ああ、僕はね、この駒場君の知り合いでね、いやあ彼とは、もう腐れ縁ていうか？なかなかの仲ではあるんだけどもね」

「おい」

駒場がほとんど口を動かさずに口を挟んだ。何となく、苛々しているのがケイに読み取れた。

「金田。わざわざナンパしに来たのか？なら、ほかを当たるんだな」

駒場のそつけない言葉に、金田がわざとらしく肩を竦めた。

「なんだよオ、こっちはわざわざ半蔵にお前の居場所を聞き出して来てやったんだ、お前がとつとと電話に出てりゃあ、俺だってもつと早く話をつけられたんだぜエ!？」

「ミュートにしている。スパムが煩わしいのでな」

「年増みてエなこと言ってんじゃねえよ！そんなんだから霊長類以上人間未満扱いされるんだぜエ？」

「ヒトつて、霊長類じゃなかったっけ」

ぼそつと浜面が言ったのが聞こえなかったのか、金田は再びケイへと顔を向けた。

「しっかし、水臭エなア、駒場ア！こんな陰気な店に何で来てンだと思ったら、美人さんとヨロシクデートとはねエ!!」

「おい馬鹿やめろ」

「陰気な店で悪かったね」

駒場が珍しく焦った声を出した直後、チヨコがずっとケイの横に立ち、金田を見下ろした。

「……ええと」

金田は、自分の倍は肩幅の広いチヨコの姿を見て、一步後ずさる。

「……ここは剛田商店でしたか？」

「金田、悪いことは言わない、謝れ。すぐ」

冗談めかした金田の言葉に、ますます焦った駒場が小さく早口で言った。浜面は遠巻きに見ているだけだ。

チヨコは小さく笑い、そして、隣のケイの肩に手を置く。

「ウチの娘に何か用かい？」

ケイは目を見開いて、チヨコの顔を見た。肩に置かれた手が、とても温かく感じた。

「あ、娘さん、でしたか……いやあ、器量の良い子だったもので、つい」
金田は、冷や汗を浮かべる駒場の様子を他所に、まだ軽口を叩いている。

「まあ、自分の娘を褒められて悪い気はしないな」

チヨコは笑みを浮かべて、もう片方の手を差し出す。ケイには、それが作り笑いだと分かった。

「金田クンていうのかい？よろしく頼むよ」
「へっ？」

金田は、差し出されたチヨコの手を見て、困ったように周りを見回す。

駒場は、額に手を当てて俯いている。

浜面は、「握手しろよ、失礼だろ」と小声で言った。

「ああ、僕、金田って言います……駒場クンとはお友達で——」

金田が、へつらうような声で言いながら、ごつごつしたチヨコの手には、自分の手を差し出す。チヨコの手は、駒場に負けない大ききだ。そして、次の瞬間、金田の手首が、釣られたカツオのように捻り上げられた。金田が身を振って、裏返った悲鳴を上げる。

駒場が、あーあ、と声を漏らした。浜面は、おおつ、と感心している。

「おばさん……ありがとう」

ケイはチヨコの顔を見て礼を言った。チヨコが作り物ではない、どこか楽しそうな笑みを見せると、ケイも笑い返した。

それから、チヨコは金田をきつと睨んだ。

「ウチは一見さんお断りだね。冷やかに来たんなら、とつとと帰るな」

「わ、悪かったです！痛い！折れる！離してくれって！」

金田が顔を歪めて訴える。

「いえ、俺、マジメな用があるんです、ホント！駒場に、帝国を囲むって話でさア！」

「ちよつと待って、やつらって？」

ケイは、呻く金田に聞いた。

「もしかして……帝国のこと？」

「へっ……何、知ってんの？お姉ちゃん？」

金田が、何とか首を捻ってケイの方を向いて言った。

チヨコが駒場の顔を見ると、駒場は少しバツの悪そうな表情をした。

「ああ、悪い、チヨコさん……このバイク狂は、確かにこちらの知り合いだ。失礼を働いた」

チヨコがフンと鼻を鳴らして手を離すと、金田は膝をついて息を吐いた。

空気を切り替えるように、ケイは咳払いをしてから、口を開いた。

「何をしようとしているのか、聞かせてくれない？」

「つまり、君たちは……帝国と対決する気なの？」

驚いたケイは、目を丸くして駒場や金田に言った。

「ああ」

金田が不敵な笑みを浮かべて答えた。

「奴らは今、水面下でどんどん勢力を広げてる……あのおかしな、幻想御手^{レベルアップ}ってブツを餌に、どんどんその辺のクズを仲間に取り入れてやがるんだ」

「レベルアップのことを知ってるなら、相手が能力者ってことも分かっているの？危険だよ」

ケイは、金田の言うことを無謀だと思った。能力者との相対に慣れている警備員^{アンチスキル}ならともかく、風紀委員^{ジャッジメント}でも手を焼きそうな連中を、戦闘経験が豊富とはいえ、無能力者の集団である駒場たちが倒すのは、難しい気がした。加えて、この金田という少年は、道端で粹がる不良

の有象無象と何ら変わらないように見えた。

今日、ケイ自身も帝国の手先と思われる男たちと戦った。しかし、ケイがその内の一人を倒せたのも、大能力者^{LEVEL4}である黒子の存在があったお陰だと感じていた。

「アンチスキルやジャッジメントに任せた方が……」

「ケイ、って言ったな？」

金田がケイの方へ顔を向けて言った。出会った当初の浮ついた雰囲気とは打って変わって、とても真剣な表情だった。

「これは、俺がケリをつけなきゃいけないエ話なんだ。奴らのボス——
—そいつと向き合って、それで、……話をつけなきゃならねえ」

「島鉄雄君ね？」

ケイの言葉に、金田はハツとした顔をして、駒場の方を見た。

駒場が頷いたのを見て、金田は自分のブーツの爪先を見つめた。

「ああ……あいつが、アーミーに連れ去られたつきり、俺はあいつと顔を合わせちゃいない……だがよ、噂ばかりデカくなって……クラウンのボスの座を乗っ取ったとか、能力^{ちから}に突然目覚めたとか、……平気で人を殺したりとか、な」

「殺しを……」

予想以上の言葉に、ケイが息を呑んだ。

「帝国のメンバーの、一番最初の数人……そいつらは、元々『クラウン』という名のスキルアウトの一団だった」

駒場が、ケイの知らない情報を教える。

「その初期のメンバーが、今、島鉄雄に仕え、末端へ指示を出している。帝国の幹部という訳だ。なあ、浜面？」

「ああ」

浜面が、表情を暗くして答えた。

「数日前、クラウンが根城にしていたボーリング場の近くで、死体が3人分見つかったんだ。クラウンから逃げ出した奴の話じゃ、島がやったんだと。その、念動力^{テレキネシス}で——」

「あいつは——」

周囲の言葉に堪え切れなくなったかのように、金田が声を絞り出し

た。拳が握られ、震えているのを、ケイははつきりと見た。

「そんなことできるような奴じゃない筈なんだ」

「金田——」

「うるせえー！」

駒場が何か言いかけたが、金田は怒鳴り、遮った。

「俺はアイツと、小さい時から一緒だったから、よく分かってる……俺のチームでも、いつだって後から付いてきてた。気が小さくて、いつだって助けてやらないと……」

金田の声が、だんだん小さくなっていく。その姿を見て、自分が知らない事情があるのだと察したケイは、黙っているしかなかった。

「待ちなよ」

代わりに声を上げたのはチヨコだった。

「気になることが二つ。まず、レベルアップってのはそもそも何なんだい？駒場がさっき言ってた、クスリなのかい？」

「それは、違うんだ」

答えたのは、駒場ではなく浜面だった。

「クスリは、あくまで奴らが元々クラウンだった時代からのドラッグ、連中のやり口さ。資金を得るためのね。その、レベルアップってのは……」

説明に困ったように、浜面が駒場を見た。

「……レベルアップは、音だ。」

「音？」

駒場の言葉に、チヨコが首を傾げる。

「なんだい、レゲエでもかけて、ハイになろうってのかい？」

「中身までは知らないんだ。ただ、俺たちに最近入って来る情報ではそう言われていて、奴ら自身もそう吐いた。最近俺らと諍いを起こした奴を捕まえたんだが、それらしいデータも確認した。帝国は、この音声データをコピーしまくって広めている。ロコミで、ネットで……能力の強度がその場で上がる代物だとな。当然、多くの無能力者たちが食いついている。更に、能力開発の壁にぶち当たってあぶれた、LEVEL1や、2、果ては3の連中もいるという話だ」

「俄かには信じがたい話だね」

チヨコが腕を組み直して言った。

「じゃ、もう一つ……帝国が、どこを根城にしているのかは突き止めて
いるのかい？」

「それは、これからだ。だが、奴らは決まって、夜になると六学区の環
状線に現れて走り出すんだ。バイカーズだった名残だよ」

金田が唸るように言った。

「そこには、幹部連中も含め、もちろん、鉄雄もいる……奴らが巢から
出て来た所を、みんなしてネズミ捕りに追いついてるって寸法だ」

「金田……いつやる気だ？」

駒場が低い声で尋ねると、金田が鋭く駒場を見返した。

「グズグズしてらんねえぞ。奴らがこれ以上仲間を増やす前に、駆除
してヤンなきやいけねえ！」

「焦るな」

熱くなる金田に対し、駒場の声は至って冷静だ。

「無能力者のピエロが何人集まろうが敵ではないが、今や相手は得
体の知れない能力者の集まりだ。周りの、まだ帝国と対立しているチー
ムを味方に引き入れて、こちらの戦力を整えるべきだ」

「てめえは、凶体だけじゃなくてアタマも鈍いのか、ああ？」

自分よりもずつと背が高く、大きい駒場に、金田は構わず詰め寄る。

「俺はな、一刻も早く鉄雄のヤロオに話をつけたくて仕方ねえんだよ
!!てめえがチンタラしてるんだったら、俺だけでもやるぜ！」

「お前こそ、頭に血が上ってるんじゃないのか？」

「まあまあ、よせよ。ここで言い争ってもしょうがねえだろ……」

興奮した金田と、岩のような駒場の間に、浜面が仲裁に入る。

「ねえ、レベルアップが、能力を強くするって言うならさ」

ケイは、ふと浮かんだ疑問を口にした。

「君らは、何でそれを使わないの？」

「使わねえ。ったりめえよ……!」

金田が笑みを浮かべて答える。

「ヨボヨボのジャンキーどもとは違う。そんなブツに誰が頼るかよ。」

俺たちア、健康優良不良少年だからな！」

「なあに、それ」

まるで決まり文句のように言い張る金田に、ケイが思わず笑う。途端に、金田の顔が弛緩した。

「わ、やっぱりケイちゃん、笑った顔もかわいいなあ！ねえ、あとで俺と、お茶でも——」

「駒場君は——」

金田の言葉を無視して、ケイは駒場の方を向く。

「——まあ、何となく分かるよ。そういうの、好きじゃないもんね」
駒場が、ケイに向かって軽く頷いた。

「俺の主義には合わない。第一、レベルがタダで上がる訳がない。その裏には必ず、何か罫がある筈だ……」

「駒場さんは、俺らメンバーにも、絶対レベルアップを聞くなんて言ってる。そりやそうだ。考えてみたら、話が旨すぎるんだよ。何があったか、分かったもんじゃない。脳ミソをハックしてるんだぜ、きつと」

駒場の言葉に、浜面が付け加えた。横で、金田が膨れ面をしている。

「何だよ、てめえらばっか、この美少女と先にイチャイチャしやがって……」

「でもさ、実際、能力者相手に、どうやって勝つつもり？」

「それは——」

ケイの問い掛けに、駒場が答えようとしたが、それは遮られた。

店の入り口の扉が、再び乱暴に開けられたからだ。

「ここかあ？カネと武器が揃ってるって、十区の便利屋さんはよオ!!」

わざとらしく足音を立てながら、騒がしく何人かの若い男が入って来た。みな、顔の鼻から下をフェイスマスクで覆っている。マスクには、「帝国」と手書きで書かれている。

「ちよいと欲しいモンがあんだけだよ……タダでな!!」

先頭の、黒髪を立たせた男が、左の掌を上に向けて差し出すと、そ

ここにぼうつと火の手が上がった。

ケイは、即座に警戒して身を固めた。すると、ケイを庇うように、二人の少年が立った。

「……どう勝つのか、百聞は一見に如かずってヤツだ……」

「ああ、丁度ムシヤクシヤしてたんだ。向こうからノコノコやって来てくれて光栄だぜ」

駒場と金田が、鋭い眼差しで、押し入って来た帝国の者たちと向かい合った。

「……頼もしいじゃない」

二人の背中を見て、ケイは、ふっと笑みを浮かべた。そして、改めて身体に力を込めた。

「私も、負けてらんないわね」

話が違う。

焦りを顔に浮かべた丘原おかはらりょうた燎多は、口に充満する鉄の味を、咳込むようにして地面へ吐き捨てた。自身の発火能力を、より高みへと引き上げる幻想御手レベルアップバー。その融通と引き換えに、何件か、「帝国」やっちらの仕事を手伝うだけの手筈だった。

以前から手を染めている銀行強盗よりも、遥かに楽な仕事——十学区の薄暗い街角にある、女が仕切る店から、武器を奪うこと。ただし、条件として、周囲のスキルアウト達への宣伝のために、チーム名の入ったダサさ極まりないマスクを着ける。それだけだ。前髪を気障ったらしく固めた男の言い方には、端々に冷たい愉悦が感じられた。

ふざけるな。俺は、お前らドラッグ中毒のピエロ上がりとは違う。喉仏の辺りまでこみ上げた言葉を、唾をつけて吹っ掛けてやりたかった。その気になれば、奴の髪をチリチリに焼き上げて、情けない二酸化硫黄の臭いを突きつけてやれた。

そう、奴の言う通り、これは楽な仕事の筈だ。

ここには、機械仕掛けの警備システムも、ましてや時代遅れの防犯カメラさえ見当たらなかった。

しかし、丘原は今、尻餅をついて、マスクを血と涎で汚しながら、真夏の日差しで焼けつくような路面を後ずさりしている。

目の前には、細いストックバーを弁慶のように振り回す、力士のような体格をした女店主が仁王立ちしていた。

「ウチの店を荒らそうって？」

怒鳴っている訳でもないのに、空気ごと肺へと押し掛かるような声だ。

「落とし前はつけてもらおうよ？ガキども」

爛れるような顎の痛みに泣きそうになりながら、丘原はフガフガと言葉にならない声を出した。

相手は4人。

ケイは、「帽子屋」に突然現れた、帝国の手先と思われる男たちを警戒した。

先頭に立つ、黒髪を立てた男は、右の掌に松明のような炎を生み出している。発火能力者だ。パイロキネシストその後ろには3人。黒いシャツをパンパンに張らせた肥満体の男と、金髪を長く伸ばし、バットらしき物を手にした男。それから、上目遣いにこちらを睨みつける、そばかす顔の小柄な男だ。小柄な男は、包丁一本ずち、手で弄んでいる。時折、午後の日差しを受けて、刃が煌めいた。

最初から得物を明かしているのが3人。そして残る1人は、風体から言って、鈍そうだ。

対してこちらには、修羅場を幾つも潜り抜けて来たチヨコおばさんに、スキルアウトのボスの駒場。

金田と浜面のことは詳しくは知らないが、駒場の信頼をそれなりに得ている所からして、全くの素人ではなさそうだ。

人数からいっても、自分たちの側は有利に思えた。

しかし、駒場は先程、帝国が得体の知れない能力者の集まりだと言った。

人数の差があるにも関わらず、余裕綽綽の笑みを目に浮かべる男たちは、こちらの油断を誘っているのか。或いは、別の手があるのか。油断してはならない。ゲリラとして経験を積んできたケイの勘が、そう言っていた。

「……へえ」

発火能力者の男が、自分たちを見回してから、せせら笑うように言った。

「思ったよか繁盛してんな。陰気臭エ店なのにさ」
ダメだ。こいつら。

ここの店主を前にして、そんな事を言ったら……。

自分の横に立つチヨコの、厳めしい顔をちらと見やって、ケイは内心嘆息した。

チヨコの「帽子屋」は、十学区のスキルアウト、裏世界の住人達にとつての、絶対的中立地帯。

この連中は、暗黙のルールを知らない、余所者だ。

「言ってくれるじゃないか」

チヨコが前に進み出て言った。2、3歩だけ踏み出したのだが、威圧感を感じさせるのは、歩幅の大きさだけのせいではないだろう。

「お、あんたが、店の人……？」

男の言葉は、どこか上擦ったように聞こえた。

発火能力者の男は、平均的な成人男性くらいの背丈があつたが、何しろ、チヨコはそれよりも更に頭1つ分を余裕で超えるのだ。男も流石に気圧されたようだ。

「随分な礼儀してるようだが、何が欲しくて来たんだい」

チヨコが男を見下ろして言うと、男は圧を払うかのように首を2、3回振った。

「へっ！知ってんだぜ！帽子屋なんてのは、表向きの話だつてな！あんだろ？その、いろんな武器がさあ」

「あんた、道に迷つたんかい？」

面倒だという風にチヨコがため息をついて言った。

「お間違えじゃないかと思うけどね……」

「とぼけんなよ！」

男が語気を強め、片手の炎をより高く掲げた。

炎は勢いを増したように見えた。チヨコの顔が煌々と照らされた。

その表情は変わらない。

「言う事聞かないときあ、分かんてでしょ？……保険はかけてあんだろうなア？」

「ケイ」

チヨコの呼びかけに、ケイは顔を向けた。

「大事なものは、初期消火さ。アンタの後ろの壁際に置いてあるから、取ってきてくれ」

金田と浜面は、ぼかんとしていたが、普段から店の手伝いをしてい

るケイにはピンときた。

ケイは、商品棚の間にポツンと置かれている物を取って来る。

「ハイ」

ケイは両手で抱えていたものをチヨコに渡した。チヨコは片手でそれを軽く受け取る。

それは、消火器だった。

「プツ」

黒髪の男が吹き出したのを合図にするかのように、帝国の侵入者は、3人ともゲラゲラと笑い出した。

「オバサンよオ！舐めてんのか？こっちはな、LEVEL3なんだよ！分かるウ？」

右手の炎を、これ見よがしに掲げて、男が笑いながら言った。

「忠告する」

横から駒場が、機械的な声で言った。

「そのマツチを消せ。大人しくすれば、痛い目に遭わずに済む」

「ツセーな!!わかんねーのか!!レベル3だぞ!!強・能・力・者!!」

駒場に向かつて唾を飛ばしながら、男が怒鳴った。

「しようがないねえ」

チヨコが消火器に視線を落として言った。

「お、オバサン、話分かった？」

それとも、その栓、抜いてみるかい？」

男が両手を広げて言った。

「まあ、その前に、あつという間にこの店、黒焦げになっちゃうけどな！」

「いや……」

今度は浜面がボソツと言った。

「なんていうか、無理だと思うぞ。俺には分かる……」

「抜きゃあしないよ」

消火器の胴を、指でコツコツと叩いて、チヨコが言った。

そして、鋭く視線を上げた。

「勿体ないじゃあないか」

「何だとう？」

侵入者たちが怪訝そうにした次の瞬間、チヨコは片足を踏み出すと同時に、消火器の底の部分で、思い切り発火能力者の顎を殴り飛ばした。

男があつという間に店外へ放り出されたのを見て、残りの2人が驚愕を顔に浮かべた。

「店を荒らされては迷惑だ。まずは、外へ追い出す」

駒場が、まるでこれから害虫駆除にでもあたるかのように、業務的な口調で言った。

「うへエ、おつかねエ」

口笛をひゅうと鳴らし、金田が言った。

そうだ。

おつかないし、強くて、かつこいいんだ。チヨコおばさんは。

ケイの顔には、自然と笑みがこぼれた。

「丘原・テメエ——」

残った3人の内、肥満体の男が、怒りを露わにした。

そして、店内を見回し——ケイに突進して掴みかかってきた。

おばさんや駒場を明らかに避けている。自分になら、勝てると思つたのだろうか。

「……ムカつく」

ケイは一言呟くと、身を屈めた。

それから、大きな相手の懐に入るように、素早く駆け出すと、右手を握って左の掌に当てた。そして、片腕の肘を押し出すように突き出して、肥満体の男の腹にめり込ませた。

ぐおつ、と嘔吐するような声を出して、男は腹を抑えてよろめいた。その隙を逃さず、ケイは身を半回転させて、勢いをつけて、下を向く顔面目掛けて蹴りを放った。

男の顔が天を仰いだところで、今度は金田が、ジャンプからの踵落としを食らわせた。

男の肥満体は、近くの商品棚を巻き込んで倒れ、動かなくなった。

「おネーちゃん、つえエじゃねエか!!」

「どうも」

金田の称賛に、ケイは見向きもせず適当に返事をした。

ケイのすぐ横では、金髪の男が振り下ろしたバットを、駒場が肩で難なく受け止めている。

確か、彼は服の下に色々と仕込んである筈だ。闇雲に殴りかかった所で、その辺の不良ではまず勝てない。駒場はひよいとバットを奪うと、呆けている金髪の男に一撃食らわせ、続けざまに蹴り飛ばした。相手はくぐもった声を上げて、これまた店外へと追い出された。

「ヤロオ!」

今度は、目つきの悪い男が、両手で握り締めた包丁を突き出した。

2本とは言え、それはケイにとつて、腰が引けた構えのように見えただ。しかし、刃先が不自然にこちらに延びてくるのを見て、ケイは咄嗟に頭を逸らした。それでも、刃先は予想外に曲がり、曲刀の様な話になってこちらの首筋を捉えた。20世紀のハリウッド映画で、似たような物を見たことがある。液体金属を自在に操るサイボーグの話だったか。

「動くんじゃねえぞ!」

喚くように男が言った。既に人数の利はこちらに大きく傾いている。ケイはひとまず、男の言うことを聞いてやることにした。

「俺は、自分が触れている金属を、自由に変形させられるんだ! 切れ味良いぜエ! この女の血しびき浴びたくなけりや、全員大人しくしろ!!」

「だからなんで、能力を自慢したがるんだよ……」

浜面が呆れたようにケイの横に立ったかと思うと、素早く手に持った何かを、伸びた刃に向かって振り下ろした。線香花火のような火花を散らしたかと思うと、伸びた包丁の刃は大した音も立てず、いとも簡単に折れた。

「金属ってさ、延びると脆くなるのは基本なんだから、特に刃物のステンレスなんかは……なあ、大丈夫?」

「(心配どうも!」

自由になったケイは、浜面の気遣いに軽く礼を言いながら、男の鳩尾を蹴り飛ばし、店外へと追いやった。

「……大丈夫みたいだね」

驚いた顔をして、浜面が眩き、手に持った小道具を仕舞い込んだ。それからケイたちは、店のすぐ外で炎が勢いよく上がったのを見て飛び出した。

「おばさん！」

「心配無用だよ、ケイ」

険しい顔をしながらも、チヨコの口調は柔らかかった。

「逃げる間を稼ぐ、ただの虚仮脅しさ」

道の真ん中を塞ぐように燃え盛っていた炎の壁は、特に周りに燃え移ることもなく、間もなく消えた。

発火能力者達の姿は消えていて、代わりに、車が急発進したことを示すタイヤ痕が、路面に残っていた。

「チツ、逃がすかよ！」

「金田。追いかけるのもいいが」

逸る金田を、駒場が制した。

「ここに一人、残ってくれた奴がいる。話を聞いてみようじゃないか」
駒場が指さした先では、浜面が肥満体の男を後ろ手に縛っていた。彼は目を覚ましたようで、汗をだらだらとかき、顎を床に押し付けられながら、忙しなく瞬きしている。

「へえ、タフじゃん。けっこう思い切り食らわせてやったんだけどよ」

金田が興味深そうに、男の顎を、ブーツの爪先で小突いた。

「ねえ、みんな集まってきちやったよ」

ケイは、この辺りの住人達がぞろぞろと姿を現していることに気付いた。

見た目は厳つい者が多いが、チヨコやケイにとっては、顔馴染みの面々だ。

「チヨコさん、大丈夫かい！火の手が上がったから、肝を冷やしたが……」

「途中から見てたけどよ、ケイちゃん、かつこいいなあ！その辺の男

「じゃあ、敵わねえや！」

『帽子屋』に殴りこむつてのは、どこの素人だ!？」

「心配かけて悪かったね、みんな」

チヨコが、縛られている男をくいと親指で示しながら言った。

「ちよつと、元気のある若造が、騒いじまってるね。なに、若気の至りつてヤツさ……こつちでよく説教しとくから、任せてくれないかい？」

「せ、説教って——」

苦し気に声を出す男の周りに、駒場も、金田も、ケイも集まった。

「テメエらには、よーく聞きたいことがあるだよ」

金田がニヤつきながら言った。

「私もね」

不安げな男の表情を見下ろしながら、ケイは言った。

「わざわざ来てくれたんだしね……まあ、おもてなしはするよっ」

今すぐ逃げ出したそうな男の顔を眺めて、ケイはざまあみると思った。

——第一九学区

「アンタ、レベルがいくつだったよ……？おい、黙ってないでなんとか言えよ」

「……さん」

「ああ？聞こえねーな！」

「ッ、3だよ……喋るのも、辛いんだ、勘弁してくれ……」

「へえ、強能力者様が！そこのスキルアウトと、女2人の寄せ集めにボコられて、のこのこ帰って来たってか!!ざまあねえなア!!」

「帽子屋」の女店主と、そこに居合わせた連中に返り討ちに遭い、丘原燎多は仲間2人と共に這う這うの体で、「帝国」の「隊長」と呼ばれる男に指定された場所に来ていた。そこは十九学区にありふれた、買手のついていないビルの一角にあり、以前はカフェか何かとして使われていたであろう、空き店舗の一つだった。

簡単な仕事、と鷹をくくっていた丘原達は、隊長から吊し上げを食らっていた。丘原には、明らかにこちらを見下す隊長に対し、反論することができなかった。理由の一つは、女店主に思い切り殴られた顎が痛み、話すのにも苦痛が伴ったこと。もう一つは、たった先ほど、仲間の一人がぼろ切れのように倒されるのを目の当たりにしたからだ。

帝国の幹部らしき男の念動力を、「罰」として受けた仲間は、顔面至る所——恐らくは体中に痣を作り、直視できない容姿になっている。そして今、隊長を前にして立っているのは、丘原を含めて二人。倒れた仲間は死んではいない筈だと、丘原には祈ることしかできなかった。

「本来ならば、お前ら全員、こいつと同じ刑罰に値するが——鉄雄様は、我々帝国は、寛大だ……それに免じて、お前らにもう一度だけ、チャンスやる」

丘原達は顔を恐る恐る上げた。

「お前ら、武器調達より、こちらの方が本業だろう……？」

隊長が丘原達に向かって突きつけた携帯電話の画面には、第七学区

の街中にある、銀行の支店の位置が示されていた。

「いつも通り、ご自慢の能力で、金を奪ってこい。多ければ多い方がいい。決行は、明日、日曜日だ」

「あ、明日って——せめて、病院行かせてくれ——」
「うるせえ！」

仲間が、急な命令に対して抗議の声を上げたが、隊長の一喝で黙り込んでしまった。丘原も同じ気持ちだった。今日の明日で、銀行を襲えと言うのは、いくらなんでも無茶すぎる。

「こつちだつてな、てめえら2人ぼつちに期待はしちやいねーんだ！……そこで、我が帝国の戦力から、1人同行させてやる」
「ど、同行って……」

隊長が顔を向けた先には、先ほど、丘原の仲間の一人を滅多打ちにした男がいる。奇妙な外見の男だ。ヘアバンドで黒髪を真上に立たせ、タンクトップから出る二の腕は、オレンジウータンのように異様に長い。瞳は、薬物の影響か、淀んでいて、こちらを見ているのかいなのか、定かではない。そして、仲間の骨を折っている間、この男は、カンフー映画に現れそうな奇声を絶えず上げていて、それが丘原には恐ろしく思えた。

「こいつは『モンキー』ってんだ。お前らもよく見ただろう。強力な助っ人ってヤツだ……なあ？」

長い腕の男は、隊長にゆつくりと顔を向けて、にっと黄色く変色した歯をむき出して笑った。

「そういう訳で、お前ら、すぐに準備しろよ。明日、上手くやれば、その笑える顎の治療費くらいは分けてやる。明朝、第七学区の学生街に集合だ。詳細は、追って連絡する。……いいか、もし逃げたりすれば」

隊長は、革靴の踵で、倒れている仲間の頭を蹴飛ばした。

「こいつを見せしめとして、その辺に晒してやる。そして、その次はお前らだ。いいな!」

隊長に凄まれて、丘原は、健在の仲間と顔を見合わせてから、駆け足でその場を後にした。

丘原達が立ち去った後、隊長はその場を忙しく歩き回った。

「畜生……どいつもこいつも、使えねえヤツばかり……！」

おい、そいつをどつか適当に寝かせておけ。死んだらそれで構わな
い」

隊長に指差されたモンキーは、床にのびている、丘原達の仲間を、雑
に別の部屋へ引き摺って行き、床には赤黒い血の痕が残った。

(隊長。ご報告が)

突然、頭の中で響き渡った声に、隊長はびくりと肩を震わせた。

「……いきなり能力で話しかけんなって言っただろうが」

(申し訳ありません。ご理解を)

「ふん」

テレバス
念話で話しかけて来た相手に対し、隊長は苛つきを隠さず答えた。
傍から見ると、独り言のようだ。

「……で、鉄雄様は……いなくなった？なんだよまた」

(カオリ、さんの名をしきりに口にされていましたので、その事では
ないかと)

相手の答えに対して、隊長は舌打ちした。

「……それで、資金不足の件はなんと？」

(ご意見を伺いましたが、任せる、の一言でした)

「ハッ……ああ、そうかい。鉄雄様が戻られたら、知らせてくれ。

それから、明日の銀行襲撃の件だが……モンキーに同行させるが、
アンチスキル ジャッジメント
警備員や風紀委員も出張って来るだろう。お前に見張りを頼みたい
(分かりました)

隊長は電話を切ると、暫く考え込んだ。

やがて、顔を上げた。その目には、光がぎらついていた。

「……いいじゃねえか。だったら、やりたいようにやらせてもらうぜ」

——第十学区、「帽子屋」

「ええ？じゃあ、てめえ鉄雄のこと、何も知らねえってのか？」

金田の怒気を孕んだ声に、肥満体の男がビクツと体を震わせた。

「し、知らねえよ——さつきも言ったろ、俺はそんな奴に、一度も
会ったことねえよ……」

帽子屋が襲われた後、ケイ達は捕まえた襲撃犯の一人を、店舗奥の、窓が無い部屋で尋問していた。時々、ケイやチヨコを含めたゲリラの会合場所として使われる部屋だった。普段、部屋の中央にあるテーブルは、今は壁際にどかさされている。その代わりに、照明の真下にあたる位置に椅子が置かれ、肥満体の男が座らされていた。男は、両足を椅子の前脚に、両手を肘掛けに縛られている。駒場が浜面に促し、ペンチで男の右手人差し指の爪を摘んだところ、男は汗と涙を吹き出しながら、聞かれたことに何でも答えると必死になって言った。

今日の襲撃犯たちは、帝国と名入れされた悪趣味なマスクこそ付けていたが、それは形だけだったという。元々、発火能力者を筆頭に活動していた不良グループで、今まで何件も、能力を利用した窃盗・強盗を繰り返していたのだと言う。

そして、「幻想御手」^{レベルアップ}を入手することと引き換えに、帝国の依頼を受けた、という流れらしい。

「帝国は、どこを根城にしている」

駒場が、レシートを印刷するかののように、事務的な口調で問う。手には、先ほどからペンチが握られたままだ。

「いや、だから知らないんだって!」

「なら、お前達と帝国の手の者は、どこで話をつけたんだ」

「じゅ、一九学区!環状線降りてすぐのとこだった。あそこの旧市街には、廃ビルがいっぱいあんだろ?その内の一画だ、名前なんてとっくについちゃいねえような……だがよ、そこが奴らの本拠地かどうかなんてマジで知らねえんだって!ちよ、ホントホントマジだって、信じてくれよ!」

駒場が興味なさげに再び男の指にペンチをかけると、男は自由に動かせる首をブンブンと水浴び後の犬のように振って喚いた。凶体の割に、随分と小心者だと、ケイは思った。

「お前が会った、帝国の幹部連中って奴らは?どんな見た目だ?」

部屋の出入口の扉を塞ぐように立つ、チヨコが厳しい目つきをして言った。まっすぐに自分を射貫くチヨコの視線を直視できず、男は俯いて、今度は蚊の鳴くような声になった。

「……俺らが会ったのは、3人。その内、喋ったのはほぼ1人だ。前髪を、なんだ、こう、リーゼントみたいに固めて、ネクタイを締めた、気障なヤツだった。奴は、後ろの取り巻きから、『隊長』と呼ばれてたよ。で、その後ろの連中は、どっちもガタイのいい男だった……ほとんど口を利かずに突っ立ってて、気味が悪かったよ」

男の言葉を聞いて、駒場とチヨコが金田を見やったのに気づき、ケイと浜面も金田へ顔を向けた。

金田は、やや考え込む仕草をしてから、顔を上げた。

「……多分、クラウンから鉄雄に付いてったヤツだ。あのピエロ共の中でもやたら見た目に気を使ってたから、覚えてるぜ。金庫番みてエな仕事してたから、俺らは、簿記係ブックキーパーって呼んでた。だが、ジョーカーのブタ野郎に顎で使われてたし、ひ弱で殴り合いには出て来ねえから、そんな隊長だなんて気取るキャラじゃないと思うんだけどな……」

「なあ、もう知ってることは全部話したぜ」

拘束された男の懇願に、その場の全員が顔を向けた。そして、ケイが男に向かって言った。

「なに、解放してほしいの?」

男は首を何度か縦に振った。

「お前ら、帝国とやり合うつもりなんだろ?俺は、もうあいつらに金輪際関わらねえようにするからさ……他の仲間にも、よく言っとくよ。お前らの邪魔は、もうしねえ」

「で?そしたら、またどつかの銀行から、せこせこ金を盗むの?」

ケイの問い詰める言葉に、一瞬、駒場と浜面が、バツが悪そうに顔を背けたが、ケイは気付かなかった。肥満体の男が言葉に詰まって、ぐっと顔を引いたその時、壁際に寄せたテーブルの上に置かれた携帯電話が、音を立てて震えた。男のポケットから取り上げた物だった。

チヨコがテーブルに歩み寄り、手に取って画面の表示を眺めてから、男の目の前に突きつけた。

「これは、誰だ?」

「お、俺の仲間だよ。あの、ナイフ持った、小っこいやつがいただろ?」

——きつと、俺を心配して——」

その場の面々は、顔を見合わせた。

「どうする?」

チヨコの問い掛けに、ケイはある考えを思いついた。

「ねえ、みんなに聞こえるようにしてさ、ちよつと出てもらわない? ただし、こいつは——」

ケイは拘束されている男を指差した。

「何とか、私たちから逃げ出せた、っていうことにしてね。そしたら、なんか他にも情報が分かるかもよ」

「なるほど」

「いいんじゃないね?」

駒場と浜面が頷き、チヨコとケイは男をじつと見た。

「む、無理言うなって! この状況で、そんなうまく嘘つける訳——」

「ゴチャゴチャ言うんじゃないやねえよデカブツ」

慌てふためく男を、金田が罵った。

「うまいこと話を合わせる。結果によつては、解放してやる」

「ほ、本当だな? ——分かったよ、やるよ……」

チヨコの言葉に、男は力なく答えた。チヨコが振動する携帯電話の画面を操作し、男の眼前に再び向けた。

男が口を開く前に、相手の急ぎ込んだ声が響いた。

『沼津! お前今どこだよ?』

「あ、ええと、なんとか……す、ストレンジの屋台尖塔に隠れてる」

『ストレンジ? まだお前十学区にいいのか! はええとこ、いつもの場所で落ち合おうぜ』

「あ、うん」

『それより、ヤベえことになったんだよ……!』

「なんだよ、何があつたんだよ」

ケイは、携帯電話から聞こえる、ノイズ交じりの声をしつかり聞き取ろうと、より集中した。

『丘原のアニキは、顎をやられてうまくしゃべれねえけど、俺と一緒にいる……けどな、末田が……帝国の連中に捕まった。もう何べんもボ

「こられて、俺らが仕事をやり遂げねえと、きつと殺されちまう！」

「ま、マジかよ……」

通話相手からの言葉を聞いたその場の面々に、緊張が走った。青ざめた様子の男は、言葉を詰まらせながら、相手に聞き返した。

「し、仕事って、なんだよ?」

『明日の日曜、午前中に、第七学区のいそべ銀行をやれってよ……しかも、監視役で、帝国のおつかねえ奴が付いてくるから、逃げられねえ! 念動力テレキネシスだと思っけど、末田はそれで体中ボロボロなんだよ——』とにかく、これからいつもの場所に、すぐに来い!! いいな!』

「ちよ、待つ……」

肥満体の男が何か言う前に、通話はすぐに切られた。男が項垂れ、ケイ達は皆、表情を厳しくした。

「鉄雄の野郎オ……随分汚きたねえ手使いやがるじゃねえか」

やや沈黙が流れた後、口を開いたのは金田だった。

「なあ、今の話がマジならさ、す、すぐ放してくれよ……仲間が殺されちまう……!」

『仲間』という言葉に、金田や浜面、駒場にも思う所があつたようで、すぐに返事をしなかつた。

「解放はしてもいいと思う」

ケイが言葉を発し、皆が注目した。

「けど、あんたがやるべきことは——アンチスキルに自首することだと思う」

「はア!? ここで今更捕まれて、なんで——」

「いや、ケイの言うことは間違いじゃない」

チヨコがケイの言葉を引き継いだので、肥満体の男は反論を呑み込んだ。

「状況を考えてみる。今、お前は仲間を救いたい。お前らは、帝国に手綱を握られている状態で、身動きが取れない。なら、少しでも頼れる連中に縋るべきだ。」

それとも、これからあのデカイ口叩く放火魔坊主と落ち合つて、銀行襲つて、それで帝国に貢ぐのかい? それで仲間が元に戻る確証はな

いだろう」

「奴らの狙いは、自分たちの力が上だと、周りに示すことだ」

駒場が静かに言った。

「だったら、言う通りにした所で、奴らの思う壺だ」

「今は、アンチスキルも、ジャッジメントも、ましてやアーミーだって帝国を抑えようとしてんだろ？」

浜面が言った。

「なら、明日のその仕事だって、案外、帝国のお目付け役ごとパクられて終わりかもしれないぜ？今の内に自首して、事情を洗いざらい正直に話す方が、まだ傷口は浅いかもな」

それぞれの言葉を聞き、男は目を泳がせた。

「そ、それしかねえのか……」

なあ、あんたら、帝国とやり合うってんなら、あんたらが代わりに俺の仲間を——」

「甘ったれたこと言ってるじゃねえぞ！」

金田が一喝した。

「確かに俺は、鉄雄に、帝国に一発食らわせてやるさ。だがよ、そつちの事情は、お前らのケツに点いた火だろ。てめえの仲間を救いたいなら、てめえで片をつけンだよ！」

「そんな……」

項垂れる男に対し、ケイはやや柔らかい声色で話しかけた。

「あのさ、私は、この店をめちゃくちゃにしようとしたアンタらのこと、大ッ嫌いだけど……頼れるジャッジメントの知り合いがいるの。その子に話を通してみるよ。きつと、アンタの仲間のことも、何とかできる、超強い人だから」

「え？ジャッジメントにお知り合いが？」

金田が少し身を引いてケイに言った。ケイは薄く笑みを浮かべた。

「まあ、今日の今日で、連絡先交換したばつかなんだけどね。大丈夫、駒場君やチヨコさんに、迷惑はかかないようにするから」

「あの、俺は？」

「なに、アンタ、やましいことあるの？」

狼狽える金田を後目に、ケイはチヨコに了解を得てから、部屋を一旦後にして、自身の携帯電話を取り出した。

電話をかける相手は、今日の昼に二回目の出会いを果たした人物だ。

「お待ちせ。で、そいつなんだけど、私が連れてくから——」

「おいおいイ？なんだコイツ？」

部屋に戻ったケイを、怪訝な顔をした金田が出迎えた。

「急にさつきから、様子がおかしくなつて……」

金田の指差す先を見たケイは、ぎよつとした。

男は、縛られながらも、膝を体に寄せて、まるで胎児のような姿勢をとるかのようになり、小刻みに震えていた。目は自分の膝を見つめて見開かれ、口は打ち上げられた魚のように、ぱくぱく開いたり閉じたりしていた。座った椅子が、絶えずゴトゴトと音を立てて揺れている。チヨコも、駒場も、浜面も、戸惑った様子で遠巻きに男を見つめている。

「あ、ああ……あ、き、ら……」

ケイは、男が絶え絶えにそう言うのを耳にした。

『連続発火強盗事件について、有力な情報がありましたの!!』

その日の夜。喫茶店での爆発事件に関する仕事を終え、くたくたの体で帰路についていた固法美偉だったが、白井黒子の急き込んだ声に、表情が引き締まった。

『犯人たちは、明日、第七学区のいそべ銀行を狙いますわ！ここで奴らを捕まえてやりましょう!!』

XI・美琴

54

七月十六日 午前 —— 第七学区、いそべ銀行

アーミーの兵隊は、張り詰めた様子で上部からの指示を仰いでいる。

アンチスキル警備員は、まだ追いついていない。

ジャッジメント私たち風紀委員は、手出し無用と知っている。

なぜなら、目の前で今この時、無法者に対峙しているのは、

学園都市に180万人いる学生、最上位に君臨する7人の超能力者^{LEVEL5}

その序列第3位、超電磁砲^{レベルガン}だからだ。

(前日 夜)

連続発火強盗事件の犯人グループの1人を引き渡したいとの通報を受けた白井黒子には、驚いたことが2つあった。1つは、連絡をくれたのが、金属缶の爆破事件で手助けしてくれた、ケイだったということ。もう1つは、残党が、明日^{みょうにち}に七学区の銀行襲撃を企てているとのことだった。それも、「帝国」と組んで。

ジャッジメントの上司である固法美偉に報告するとともに、アンチスキルの先生に報せ、その人物を拘束した。しかし、錯乱状態に陥っていて、まともに事情聴取ができない、という話だった。

妙だ、と黒子は思った。土曜日の午後の爆破事件の際に拘束した3人の帝国のメンバーの中にも、同じように錯乱している者がいるらしい。アンチスキルの先生に、その疑問をぶつけてみると、帝国のグループ内では新型のドラッグが蔓延しており、その中毒症状が発現しているのではないか、との見立てだった。それにしても、まともに取り調べもできない内に、こうも立て続けに病院送りになってしまふのは、何か、情報漏洩を防ぐための精神干渉でもされているのではないかと邪推してしまった。

そして、話を聞けた者からの数少ない情報も、取り立てて有用とはいえなかった。拘束したのは、どれも最近グループに加わった末端のメンバーらしく、誰の指示で犯行に及んでいるのか、曖昧な答えしか返ってきていない。リーダーに立つのが誰なのかもはつきりしていない。

「ただし、重要と思われる情報もありました」

陽が落ちてそれなりになる時間帯に、風紀委員第一七七支部の面々は、各々に支給された専用のパソコンの画面と睨めっこしながら、緊急のオンライン会議を行っていた。黒子の目の前の画面上で発言したのは、支部のリーダーである固法だ。金属缶の重力子操作グラビトンによる爆破事件の容疑者として、七学区にある高校に通う、一人の学生が浮上したという。

「本来であれば、この人物について詳細を共有したい所ですが、割愛します……より危急の案件は、明日午前、七学区のいそべ銀行を襲撃するという、連続発火強盗のグループです。アーミーが周辺の警備を、アンチスキルが店舗内で客・従業員に偽装して警備を行い、私達ジャツジメントは……事が起きた場合に、一般人を遠ざける役割を担います」

つまり、ネズミ捕りだ。誰かがそう呟き、パソコンのスピーカーが俄かにざわめいた。

一般人の安全を最優先にするならば、はじめから店を閉めさせるべきかもしれない。しかし黒子は、これをチャンスだと考えていた。得られている情報が少ない今とはとにかく、帝国というグループ全体を取り崩すためにも、上層部へと繋がる情報の糸口がぶら下がるなら、掴みにいくべきだと思った。

開店前を狙って犯人グループが襲ってくることも考慮し、アンチスキルとアーミーは、開店時刻の2時間前から周囲を警戒するとい

う。「ジャツジメントは、必ず複数名で行動すること。今回の作戦行動は、あくまでもアンチスキルとアーミーが主体です。私たちは、一般人

と、自分たちの安全を最優先に行動してください。グラビトンの事件と、この発火強盗事件とが、同じ帝国の手によって行われている可能性が高まったからです。したがって、腕章は、指示があるまでは明示してはいけません。アーミーが、金属探知機を手に巡回しますが、皆さんも十分警戒してください。

……崇高な正義感は誇るべきものです。しかし、無謀に犯人に向かっていかせて、みんなの身を危険に晒したくはないんですよ？」

最後の言葉が自分に向けられたものだと感じ、黒子は一度唾を飲みこんだ。

これだけ休日勤務するんだから、手当を出すよう校長室にデモしようぜ、と固法の同級生である柳迫が言い、一同の表情が和らいだところで、会議は終いとなった。

黒子はヘッドセットを外し、背伸びをした。熱をもった耳が冷房からの風に触れ、心地よい。

カタン、と黒子のすぐ横で音がした。

「お疲れさま。……飲めば？」

ルームメイトであり、一つ年上の先輩である御坂美琴が、優しい表情をして立っていた。

黒子の鼻を、甘い香りがくすぐる。

「……最近、お姉様の淹れるココアが、楽しみで仕方ありませんの」

「どうも。最近暑いからね、アイスでよかった？」

「もちろん。感謝申し上げますわ」

黒子はカップを口に寄せる。じんわりとした甘みと冷たさが、舌から喉を通り、胸の奥に届いた。

「……明日は早いみたいね」

黒子が顔を向けると、美琴はややバツの悪そうな顔をした。

「ごめん、聞いちやいけないってのは分かっているんだけどさ」

「とんでもない！お姉様に隠し立てすることなど、万に一つだっただけじゃない！お姉様に隠し立てすることなど、万に一つだっただけじゃない！」

黒子は手を振って言った。

どれだけ科学が発展しても、強盗やら爆破、ドラッグ、抗争……罪を犯す人間は、この学園都市では枚挙に暇が無い。

「……だからこそ、風紀委員がいるのですもの」

美琴は、黒子の顔を見つめた後、ため息を軽く一つついた。

「……な、何か、私、妙なことを言いました？」

「……頼りにしているよ！おひげを生やしたジャツジメントさん」

黒子は赤面して、慌てて口の周りを拭った。

「じゃ、明日の任務のために、肩揉んであげるから！……それで、今日はもう寝なさい」

美琴はそう言うと、黒子の後ろに立ち、両肩に手を置いた。

「……お姉様だったら、きっと強盗犯も、爆弾魔も、一撃ですわね」

「あれ？そんなこと言うなら、私がほんとうに行こうか？明日の任務」

「いーえ！お姉様はあくまで一般人！私たちにお任せあれ」

そう言うと思った、と美琴は笑いながら言った。

御坂美琴が一般人というのは、黒子にとって、あくまで建前だ。

どんな犯罪者が相手でも、本当に圧倒してしまうだろう。

だからこそ、自分は、自分の持てる力で、役目を果たしたい。

決意を固める黒子の頬を、美琴の髪がくすぐった。

ココアとはまた違う、甘い香りが、黒子に眠気を誘った。

(当日)

「白井さん——白井さん？何か考え事してます？」

「えっ？……ああ、いや、何でもございませんのよ？」

怪訝そうに尋ねてくる、マスク姿の初春に、黒子はごまかしながら答えた。

今は任務中。しかし、黒子は何か忘れていのような気がして、そのことが時折心の中で頭をもたげていた。

「それにしても——くしゅっ！……ほんとに来るんですかね、強盗犯たち」

「……初春。くしゃみする度に同じこと言ってます？」

黒子は、風邪気味だという初春飾利に、呆れを隠さず言った。

強盗犯が襲撃するという銀行が面する大通りで、2人はペアを組み、日差しを避け、木陰のベンチに座っていた。2人の位置からは、およそ100m離れた辺りに銀行のガラス張りの玄関が見える。1時間ほどの杣を、この場所で待機し、あと10分ほどで次のペアに交代する手筈だった。

「だって白井さん！犬も歩けばアーミーに当たる、ってぐらい物々しいじゃないですか、ここーこれじゃ、口を開けて待ってますよーって、犯人たちに思い切り言っているようなものじゃありません？」

「確かに、ここまで多い人数で警戒に当たるとは予想外でしたが……」
銀行が開店してしばらく経ち、人通りも多くなってきた。一般の往来に混じって、ネイビーブルーの上下服に褐色の防弾ジャケットを纏った兵士の姿はよく目立つ。両側の歩道に、10m間隔で立っていると、言っても過言ではないだろう。先端が正六角形になった金属探知機を手に、歩き回っている。腰のホルスターには、拳銃らしきものが装備されている。アンチスキルと同規格のゴム弾だと言うが、実際の所、どうなのだろうか。

「今回、犯人をおびき寄せるのが目的なんですから——これじゃ逆効果ですよ。アンチスキルの先生方との連携はとれてるんですかね？」

「まあ、噂ですが、アンチスキルとアーミーは、治安維持の主導権争いをしていているという話も……」

「おつとつめぐるーさまです！ジャツジメントさん！」

聞き慣れた声に、黒子は振り返った。

「お姉様!？」

紙袋を手にした美琴が立っていた。美琴は初春の方を向いた。

「えっと、初春飾利さん、だよね？黒子の同級生の」

「み、御坂美琴さん!？」

初春は上擦った声を出した。

「あなたのご活躍は存じてます——初春です。覚えていてくださって、ありがとうございます」

「そんな、かしこまらないで！」

緊張している様子の初春に、美琴は笑いかけた。

「まだ10時にもなってないのに、暑^{あつ}いでしょ？二人とも、ほら、差し入れ」

「さ、流石はお姉様！この黒子とシエアするためのスイーツをご用意くださるとは、これぞまさしく甘美なる愛……!!」

「何言ってるの、自分の分も買ったから……」

一人で興奮する黒子を適当にあしらひ、美琴は紙袋からストロー付きのカップを取り出して初春に渡した。ファストフード店でこの季節に人気のアイスシエイクだ。

「ありがとうございますー！」

「？でも、初春さん、もしかして風邪？アイスはまずかつたかな……」

マスク姿の初春を見て、美琴が申し訳なさそうな顔をしたが、初春は首をブンブンと振った。

「いいえ、気にしないでください！大したことないですから！」

無理はしないで、と美琴が優しく初春の額に手を当てるのを見て、黒子はわざとらしく咳払いした。

「でも、ほんとにお姉様が来てくださるとは……早めにここを離れてください。まだ何が起ころかわかりませんので」

「そう？これだけアーミーが警戒している中で、白昼堂々と襲う馬鹿がいるんかな？」

シエイクを一口吸った後、美琴が初春と同じ意見を言った。

黒子は何度か頷き、ストローを口から離した。

「そう。もしもここを強行突破しようとするなら……実に原始的な思考ですわね。」

あるいは、何か絡め手を使ってくるか——」

ちようどその時、銀行の方面から、大きな爆発音が聞こえた。

「!!——ほんとに原始人だったかしら？」

「いえ、あれは……」

美琴の言葉に首を振り、黒子は目を凝らした。

確かに、爆発音が聞こえたが、銀行は先程と様子に違いはない。

銀行よりも更にその先で、何かあったようだ。

通行人は足を止め、逆にアーミーの兵士達は、爆発があった方向へ慌ただしく駆け出した。

その時、黒子と初春がそれぞれの片耳に着けている端末に、通信が入った。

『いそべ銀行北方面の路上で爆発。ジャツジメントは腕章を明示し、各自の担当箇所で、一般市民への対応に当たってください』

「初春！」

「はい！」

「お姉様、すみませんが、また後で！」

「あ、ウン、気を付けて——」

黒子は飲みかけのシェイクをひとまずベンチの上に置き、初春と共に走り出した。交代のために待機していた他の仲間とも合流し、腕章を急いで腕に付けた。

(……通りで爆発？銀行自体が襲われたのではなくて?)

黒子はふと、足を止めた。

何か、違和感がある。

近くを通り過ぎた兵士の会話が聞こえて来た。

「——金属探知機を！まだほかにもあるかも……」

「金属……重力子！」

黒子はハツとして、再び銀行の方を見た。シャッターが閉まっっている。

付近に、アーミーの兵士はまばらだ。

「初春!!」

「え?」

黒子の大きな声に、市民の誘導に当たろうとしていた初春が振り返った。

「白井さん、どうし——」

「銀行が！」

「ああ……爆発があったから、とりあえずシャッターを閉めたんじや——」

「違う！」

黒子は声を張り上げた。

「これは、陽動——」

その瞬間、今度はより大きな爆発が起こった。

銀行の正面玄関のガラスが轟音と共に粉々に吹き飛び、そこかしこから悲鳴が上がった。

「連続発火強盗……!!」

黒子は咄嗟に身を屈めて、食いしぼるように言った。

「初春！市民の避難を！誘導じゃ済みませんわ！」

「ハイ！白井さんは?！」

返事を返す前に、アーミーの一兵士の叫び声が辺りに響いた。

「止まれエ!!止まらなければ撃つ!!」

次の瞬間、銀行前に立ち込める煙の中から火の手が上がり、アーミーの兵士達へ襲い掛かった。その様はまるで、獲物へ狙いを定めた蛇だった。道路を塞ぐように展開していた兵士の隊列は、蜘蛛の子を散らすように崩れた。それを待っていたかのように、煙の中から駆け出して現れたのは2名。口元を布で覆い、手にはぎつしりと何かを詰まったバッグを持っている。崩されたアーミーの封鎖を駆け抜け、こちらに向かってくる。

黒子は、自分たちにほど近い路肩に、1台の銀色のセダンが停まっていることに気付いた。誰も乗っていないが、エンジンはかかりっ放しだ。

銀行内に待機していた筈のアンチスキルは見当たらない。アーミーはすっかり混乱している。

ならば、自分がやる。黒子は、男たちの走る前に立ち塞がった。

「ジャッジメントですのー！」

右腕に付けた腕章を、左手ではつきり見えるように掴み、叫んだ。背後から、自分の名を呼ぶ初春の声が聞こえた。無謀だと言われようが、ここは自分の力で、相手を倒す。それが、ジャッジメント風紀委員としての正義だ。

黒子は止まるよう警告したが、2人いる相手の内、1人が片手をこ

ちらに突き出したのを見て、咄嗟に黒子はその場から空間移動した。黒子が立っていた場所を、突風が吹き抜けていった。

黒子が能力を行使したことを理解する間もなく、風を起こした男は首筋に衝撃を受けて倒れ、次の瞬間には、着ていたジャケットを金属ピンで地面に穿たれ、身動きが取れなくなった。

黒子は間髪入れず、横で呆気に取られているもう一人の男を睨みつけた。

「まだ抵抗しますか？」

その男は、倒された仲間を見て、それから黒子を見ると、泣きそうな顔になった。

「もう、おしまいか……」

奇妙に息の抜けるような声で男が言った。そして鞆を取り落とし、がつくりと膝をついた。

戦意喪失だ。黒子はそう判断し、男を拘束しようと手錠を取り出す。

「黒子」

「ああ、お姉様！この通り、一件落着でして——」

「いや」

黒子は一旦手を止め、振り返った。

傍に、美琴が立っている。顔には、明らかに怒りの形相を浮かべている。

美琴のブラウスには、先ほどまで手に持っていた筈のシェイクがこびりついていた。確か、ブルーベリー味だったはずだ。

「食べ物への恨みには、私がうるさいの、知ってるでしょ？」

零れたシェイク以上に、冷たい声だった。

「でも、お姉様！もう犯人は観念してまして——」

「ちげえよー！」

今度は、黒子によって地面に縫い付けられた方の犯人が、顔をこちらに向けて言った。焦りに満ちた顔だった。

「あと1人いるんだよ——ヤベえのが」

え？と黒子が聞き返したその時、サーブされたバレーボールのよ
うに、何かがぼん、ぼん、と音を立てながら勢いよく転がって来た。転
がって来たのが人であり、制服を着たアーミーの兵士だということを
理解するのに、黒子は数秒かかった。腕や脚の至る所が奇妙な方向に
曲がっていて、人の形をしているようには見えなかったからだ。

「なっ……」

黒子は息を呑んだ。美琴が、先ほど爆発のあった銀行の方をまっす
ぐ見据えている。黒子もそちらを見た。

倒れ伏した兵士達の合間を縫って、長身の男が一人、こちらへ悠然
と歩いてくる。黒髪を逆立てるように額に巻いたバンドには、「帝国」
と書かれている。

「なんなのアイツ……ムカつく……！」

黒子は、隣的美琴の体を巡るように光が奔るのを見た。

日曜日の昼前、公共施設が立ち並ぶ明るい通りに似つかわしくない黒煙が僅かに残り、夏の空へとその残滓をたなびかせていた。救急隊が到着し、負傷した人々を次々に運んでいく。

あつという間だった。爆炎の中から現れた帝国の新手。黒髪を逆立て、炎で服が焼けたのか元々着ていなかったのか、隆々とした上半身は裸だった。妙に長い両腕を揺らして歩いてくる奇抜な様は、都市伝説に現れる怪異のようで、黒子は足が竦んだ。

そんな人物と対峙した御坂美琴は、電撃一閃を放ち、彼を昏倒させた。

たったそれだけだ。黒子が捕縛した二人と合わせて、アンチスキルが取り調べを行い、連続発火強盗事件は、解決へと一気に向かうだろう。

一度目の爆発は、詳細は不明だが、ビルの上階から落下した金属缶が爆発したとの情報があり、恐らく帝国の別の者——重グラビトン子を操作する能力者の仕業に違いない、ということ、アンチスキルやアーミーが付近の捜索を行っている。

そして、一度目の爆発の混乱に乗じて、3人の男が銀行に押し入った。パイロキネシスト、エアロシューター、エレキネシスト、風力使い、そして、詳細は不明だが、美琴が倒した念動力使いの大男。当然、銀行内に潜んでいたアンチスキルが捕縛にかかったが、なんと、大男に全員返り討ちにされ、腕や脚の骨を折られてしまったという。犯人たちが銀行から脱出した後にアーミーの兵士が多数負傷したのも、ほとんどが大男の力による者だったという。

「あの半裸男——それなりの手練れだったのかもしれないわね」
黒子が美琴の隣で言った。

「アンチスキルは彼らなりの戦術で、当然、念動力使いには対応できる筈ですのに」

「まあね。けど、飛び道具で先制すれば、大したことなかったね」

美琴は涼しい顔で言った。手には、チョコレートサンデーのカップ

が握られている。

犯人捕縛に協力した「一般人」として、先ほどアンチスキルの一人から貰ったものだ。もつとも、彼女の介入はこれが初めてではなく、その力の強さ故に、過剰防衛すれすれのこともあったが。

「本当に、外見はただの学生だな」

背後から、美琴に声をかける者がいた。

「君が、超電磁砲か……第3位の」

2 m近くの背丈があるかどうかという、大男だった。厳めしい四角い顔に、脇を刈り上げた短髪。他の兵士とは異なり、真夏の炎天下に似合わないスーツ姿だが、そのジャケットは内側の立派な体軀を隠し切れないようだった。

「礼を言う」

頭を全く下げず、こちらをじっと見下げて、男が言った。低く、圧を伴った声だった。

「我々の兵が、全く歯が立たず、戦闘不能にされた。8人だ。それを君は、ものの数秒で片をつけた」

「それは……」

「言つときまずけどー!」

突然話しかけられて、美琴が返事に窮している間に、横から黒子が割り込んできた。なぜか、怒っているようだった。

「あんなものじゃありませんからね。お姉様の實力は!それこそ、あなたがたアーミーが東になっても敵わないくらいのお力がありますの!」

「ちよ、黒子、失礼だって……!」

「大体、この学園都市の治安維持は、本来我々の管轄ですの。仰々しい身なりで街に出てくるなら、アーミーの皆さんには是非とも対能力者の対応術を研修して頂き、我々との円滑な連携と情報共有を図って頂きたいですわね!」

黒子の直情的な訴えに、アーミーの上官らしき大男は目をじっと細めた。

「風紀委員か」

男は、黒子の腕の腕章に目をやって言った。

「君が、犯人2人を拘束するところも見ていた。あれは……見事な瞬間移動だ」

「空間移動テレポートですよ。お褒めの言葉をありがたく受け取っておきますので、そこどころ、お間違えなさらぬよう！」

「威勢がいいな。そして、……健全だ。我々が敵わない訳だ」

美琴は耳を疑った。「健全」と言ったか？美琴の知る限り、黒子は健全の意味するところから惑星の裏側にいるような人間だ。

難しい顔をしている美琴をよそに、大男は踵を返して去っていった。

「アーミーの司令官ですよ」

黒子が美琴に囁いた。目は遠ざかる、岩のような背中を睨んだままだ。

「ああ、思い出した！こないだニュースで記者会見してた……」

「ええ。今月の初めでしたか、私は見かけたことがありますわ。その時もアーミーには、こちらの管轄の案件を横取りされまして。大方、本国の防衛省から、この学園都市を監視する目的で派遣されてるのでしょうか……こちらとの連携をする気があるのかどうか。どうも子供扱いされている気がしてなりません」

それで、あんな風に食ってかかったのか。美琴は納得した。

「あれを見たか」

後ろから付いてくる黒服の側近、門脇に向かって、敷島大佐が低く言った。

「第三位ですか。間近で見たのは初めてですが、なんともはや……あれで本気でないとするなら——」

「違う」

大佐は苛立ったように門脇の言葉を遮った。

「ジャッジメント——テレポーターの方だ」

「はあ……」

「生き生きとしているものだ。学園都市の能力者というのは。対して、我々のナンバーズは……薬を与え続けなければ、生きていくことも俾ならない。中身は子どもそのままだというのに。我々が、そのような姿に変えてしまった……」

少しの間、俯いた大佐の顔には影が差していた。しかし、すぐに顔を上げた。

「あの犯人共を、こちらの手に拘束する」

「しかし、大佐……今月結んだアンチスキルとの合意では、共同作戦に於ける一次的な逮捕権は、学園都市側にあると」

「我々の兵士がやられているのだ！あのテナガザルもどきに！」

「それは——」

「元来の地位協定を持ち出せ。17条の2、専属的裁判権だ。これは、我々アーミーに対する攻撃行為だとな。そして、何としても、『帝国』の指揮者を暴かねばならん！」

大佐はより大股で歩き、車に早々に乗り込むと、開けられたドア越しに指示を飛ばした。

「この事件には、木山春生と、41号が関わっているに違いない。探し出せ！」

「なあ、話を聞いてくれて！」

懇願する大声が聞こえ、黒子と美琴はそちらを見た。で両腕を巻かれた2人の若い男が連行されていく。黒子が拘束した2人だ。連れ立つアンチスキルが黙って歩かせようとするが、2人は必死の表情だった。その様子を見て、黒子はため息をつきながら歩み寄っていく。

「見苦しいですわよ！」

2人に向かって黒子がピシヤリと言った。

「言い訳なら、先生方に、取調室で丁寧にお話することですわね」

「おい、ジャツジメントのアンタ……頼む、ちょっとでいいから、聞いてくれ！」

「何のことですか？……というか、ひどい顔してますわよ、あなた」

黒子は眉を顰めた。黒子に顔を向けた相手は、パイロキネシストの若い男だ。フェイスマスクを取り払われ、素顔が露わになっているが、顎の辺りにくつきりと目立つ紫色の痣ができていて、痛々しい見た目をしていた。

「顔のことはどうでもいい！俺の自業自得なんだ、それより——」

アンチスキルの制止を振り切って、男が痣のある顔をずっと黒子に近づけた。思わず黒子は身を引いた。

「聞け——俺らの仲間が一人、やつらに捕まってる。ああ、この仕事をしくじったんだ、殺されちまう!!」

「や、やつらって?」

「帝国だよ!!」

男がアンチスキルの男性教員2人に捕まえられて、無理やり引き下がらされた。なおも、男は必死に言う。もう1人の犯人も、泣きそうな顔をしている。

「丘原のアニキ……」

「いいか、ジャツジメントでも、アンチスキルでも、なんでもいいんだ！あの念力猿を見ただろう！あいつらはヤバいんだって、何とかしてくれ——」

いい加減にしないか！とアンチスキルに制された男は、そのまま護送車両へと連れていかれた。

黒子はハツとした。今朝から何かを忘れている気がしていたが、ケイから受けた昨晚の電話だった。

——連続発火強盗の犯人の1人を捕まえた。仲間が帝国に捕まっていると言っているが、詳しく話を聞いてやってほしい。嘘を言っているようには見えない——

しかし、昨日逮捕されたそのメンバーは今、急性薬物中毒の治療で病院送りになっている。詳しく話が聞ける状態ではない。たった今拘束されていた男の言葉だって迫真ではあったが、既に逮捕された以上、ここからはアンチスキルの仕事だ。

「……なんか、色々あるみたいね」

さほど興味なさそうに、美琴が呟いた。

「……まあ、単なる仲間割れでしょう。犯罪者グループではよくあることでしてよ」

「そだよねー。あのさ黒子、このあとまだ仕事ある？フリーならさ、ちよつち買い物して、それからお昼でも……」

美琴が黒子に向かって言ったが、途中で尻すぼみになった。黒子がこめかみに手を当て、突然黙り込んでしまったからだ。その表情は、ひどく深刻そうに見えた。

「……黒子？」

「はっ、お姉様？」

怪訝に思った美琴が重ねて呼ぶと、黒子はハツとして表情になって美琴の方を向いた。

「お姉様には……いえ、なんでもありませんわ！」

「え？」

「あの、こ、この後でしたら、招集がかかっていますので——申し訳ありません、終わったら連絡しますわ！」

「ああ、そう……じゃ、その辺テキトーにぶらついてるね」

「申し訳ありませんわ！」

黒子は気もそぞろに、他の風紀委員が集まっている方へ駆けて行った。

「……どうしたんだろう」

街風が通りを吹き抜け、たなびく黒煙を青空へ散らしていく。美琴の心が、少しだけざわついた。

午後 —— 第一九学区、旧市街

日が陰るにしたがって、黒雲が上へ上へと、漏斗の形を広げつつあった。冷たさを引き連れて風が人影のない街路を走る。

「……」

白井黒子は一人、物言わずにぽっかりと口を開けた、廃ビルの入り口に立っていた。

7月16日、午後——第七学区 南の外れの学生寮

「……でき、〃一日十分、聴くだけで演算能力が向上する!!音のシャワー!!って謳い文句でね、ネットのフリマアプリで売買されてるらしくってさー、どーしよーもしもソレ聞いたら、アタシもいよいよ無能力者LEVEL0脱出できちゃう訳え?」

「そんな、胡散臭い英語教材じゃないですか、詐欺に決まっていますよ佐天さん……」

「またまた信用してないって顔だなー初春!でもさ、実のところ、初春だって、興味あんじやないの?」

「そりゃあ……もしも、私のレベルが上がったら……そうですね、それこそ、佐天さんや白井さんに今まで受けた仕打ち、2倍返し、いや、2乗して4倍返しに……!」

「どんな仕打ち受けて来たの、初春ちゃん……」

「初春ウ?アタシがあんたに仕返しされる覚えなんてこれっぽっちもないけどなー?親友じゃあないかあ、我々は!」

「カオリ先輩!騙されちゃダメですよ!この佐天さんは、公衆の面前で、私に対して、数々のハレンチな行為を!」

学生寮が立ち並ぶ路地を、3人の声が歩いていく。快活さに溢れた明るい声、飴玉を転がすような声、そして、小さく、控えめで、しかしどこか楽しそうな声だ。

「てゆーか、白井さんも来ればよかったのになー!あの限定のパフェ、ぜーったい、白井さんも好きだろうに!」

「どうですかね?白井さん、ダイエツト中だって、最近言ってたような……」

「白井さんて、あの、空間移動能力者の?」

横を歩く佐天涙子と初春飾利に、カオリが聞いた。

「そうそう!あたしたちと同学年なんですよ!常盤台の!」

「常盤台……お嬢様学校だね」

答えてくれた涙子に対し、カオリが小さく笑いながら言った。

「わたしなんかには、想像もつかないや。やっぱり、令嬢って感じなのかな」

「そりゃあ、もちろんそうでしょう!」

涙子は頬に指を当てた。

「そこは、同じ風紀委員の初春がよく知ってますよ!ねえ!」

「お嬢様……」

初春は、腕組みをして難しい顔をする。カオリは興味ありげに初春を見た。

「確かに、白井さんは見た目とってもかわいいですし」

「うん」

「けど、露出趣味があつて」

「……うん?」

「口調がお嬢様だし、実家はおっきな会社経営してるらしくつて」

「うんうん」

「それでいて、ルームメイトの御坂さんにゾツコンで。多分本気で」

「うーん」

「下着はものすごいきわどくつて」

「……見たことあるの?」

「へ?……と、とにかくですね!!」

怪訝そうな顔をするカオリに対して、顔を赤くした初春がぶんぶんと首を振った。

「とつても強くて、頼りになるんです!今日も、銀行強盗を捕まえちゃいましたからね!」

「へえ、すごい……」

カオリは素直に感心した。

「じゃあ、そんな人と一緒にお仕事している初春ちゃんも、きつとすごい人なんだね」

「へ?わたし?」

思いがけず褒められたことで、初春は面食らって立ち止まった。

「ど、どうなんですかね……私なんて、前線にはとても立てないですか

ら、裏方ですけど……」

「何をおっしゃる、初春さん!!」

涙子が、初春の肩をばんばんと強く叩いた。

「カオリ先輩、知ってます? こう見えて初春はすごいんですよ! なんてたって、ジャツジメントになるってのは、ながーい研修を受けて、それから更に! ……11こ? 12こだっけ? 試験を合格しなきゃいけないんですから!」

「13ですよ、佐天さん」

佐天の曖昧な言葉を、初春が静かに訂正した。

「そ、そんなに……」

カオリは口到手を当てて驚いた。照れ臭くて俯く初春の横で、涙子は自分のことのように誇らしげだ。

「じゃあ、それだけの思いがあつたってことだよね」

「思い?」

カオリが言った言葉に、涙子と初春は首を傾げる。

「だって、どんなレベルだろうが、ジャツジメントとしてがんばってるんだもの。誰かを守りたいって思いを強くもってるんだよね? それってすごいと思うよ。ほら、私って、こんな気弱な人間だから……守られるばっかじゃなくて、人を守るようになっていいなあつて。初春ちゃん見てたら、そう思ったよ」

「カオリさん……」

カオリは優しい声色で語り、初春ははにかんだ。

「誰かを守りたい、かあ……」

涙子は、カオリの言った言葉を繰り返して、そつと呟いた。

(レベル0でも、できるんかな?)

3人の頭上を、涼しい風が一陣通り過ぎていく。午後の太陽が、雲に隠れて、辺りが暗くなった。

3人は、第七学区の南の外れにある、カオリの学生寮の前に着いていた。涙子や初春の寮とは別の、古びた建物だ。

「ここまで送ってくれて、ごめんね。2人とも、今日はどうも——本当にありがとう。楽しかったよ。」

カオリが小首を傾げて笑いかけたことで、涙子は目を丸くした。

「いやあ、やっぱり、……」

「え?」

「カオリ先輩、かわいいですよ!ねえ、初春!」

カオリの顔をピシツと指差して、涙子は初春を見た。

「火曜日、成績会議日で、午後休みじゃん?今度、セブンスミスト行こうよ!カオリさんに、服買お!服!」

「いいですね、佐天さん!」

「ふく……?」

カオリは不安気な顔を見せた。

「私、おしゃれなんて、気を使ったこと今までなくって……」

「だからこそですよ!」

佐天が顔を輝かせる。

「素材がいいんですから!いろいろ試してみましよう!」

「いいの?ほんとに?」

「遠慮することないですつて!」

初春も笑って言った。

「私達、友達なんですから!」

「ともだち……」

カオリは、その言葉を噛み締めるように呟いて、再び笑顔を見せた。

「うん、友達、だね。嬉しい、ありがとう」

「そうと決まればア!そーだなア、カオリ先輩、ズボンが多いみたいだから、スカート履いてみませんか?」

「えっ、スカートなんて、制服以外じゃ、持ってないよ」

「へへへっ、それでは……先輩のスカートヴァージンは、この佐天涙子が頂きますね!」

「佐天さん、良からぬことを考えてません!?!」

「まさかア!目の保養にするだけですつてば!」

「ほんとですかあ……まあ、今度は白井さんも来れるといいですね!もっかい誘いますよ!」

「ジャツジメントのお仕事、忙しくないといいね……」

3人の楽し気な声がこだまする路地。

そこから少し離れた物陰で、様子をじっと伺う人影があった。

「……カオリ……」

1人が別れを告げて建物の中に入り、2人がお喋りしながら帰る時も、鉄雄はその場から動かず、何もできなかった。

——第一九学区、旧市街

十中八九、罨だろう。「取り壊し予定 立ち入り禁止」と張り紙されたガラスに映った自分自身の姿に、白井黒子は心の中で語り掛けた。付近の支柱が折れて倒れかかった防音壁にはより大きいサイズの掲示があり、それによると、この廃ビルは数か月かけて解体工事を行われる予定らしかったが、日付は既に1年程前のものだった。黒子の立つ辺りには、同様に放棄された建物が、そこかしこに所在なさげに佇んでいた。

昼前、連続発火強盗の犯人たちを捕まえた後、美琴と話している最中に聞こえた「声」を、黒子は思い出した。

(そいつの仲間の居場所を教えてやる。一人で来い、小さき風紀委員ジャツジメンよ。場所は——)

あの時、黒子は周囲をすぐに確認したが、テレビス念話で干渉しているらしい人物は見当たらなかった。

黒子は、念話が非常に繊細な能力だと聞いたことがあった。不特定多数が往来する中で、恐らくあの時声を聞いたのは自分だけ。すぐ隣にいた美琴は、電磁バリアを張っているためにそもそも念話の干渉を受けないとしても、周りにいた学生たちも、「頭の中に聞こえる声」に気付いた様子は無かった。もしも自分だけに的を絞って話しかけてきたのだとしたら、空気振動だか低周波だか、原理は分からないが、あの程度の練度を備えた能力者だ。

「だからと言って、なんで馬鹿正直に、ほんとに一人で来てしまったのかしらね、私は」

黒子は窓ガラスに映る自分自身に、自嘲的に独り言ちた。付着した

埃が、ちようど顔の辺りを隠している。

話しかけて来た相手は、「二人で来なければ、すぐに人質を殺す」と言っていた。それが脅しでないとしても、所詮相手はどこのも者とも知れないスキルアウトだ。相手に誘われている以上、ジャツジメントの仲間やアンチスキル、そして心から信頼を寄せる美琴にすぐ知らせるのが筋だろう。

しかし、黒子はそうしなかった。心のどこかで、「ほんとうに殺されてしまったら？」という恐れがなかった訳ではない。知り合いでも何でもない人物とは言え、自分の行動が基で人の命を奪われるのは居心地が悪い。

そして、銀行強盗を2人捕縛した後で、気が昂つてもいた。ジャツジメントの仲間を狙い傷つけている、帝国の懐に入り込める。自分がケリをつけてやりたい。そうした気負いもあるのを、黒子は自覚していた。きつと、美琴や上司の固法に、また一人で先走つたと、後で叱られるだろう。しかし、大切なジャツジメントの仲間に危険が及んでいることに加え、アンチスキルやアーミーの兵士が何人も傷ついているのを目の当たりにした今、黒子は行動せずにはいられなかった。

もしも、万が一の事があれば——黒子は、自らの髪をまとめている、右のリボンに触れて考えた。備えはしてあるが、自ら敵陣に入り込んでおきながら、助けを呼ぶような格好のつかない事態にはなりたくなかった。唾をひとつ呑み込んで、黒子は建物の中へと入った。

タンと、ローファーが床を鳴らし、音ががらんどうのエントランスに響く。外から差し込む日光と埃とが合わさって、どこか重みと乾きを持った匂いが鼻を衝く。黒子が足を踏み入れた場所は、過去にオフィスビルの玄関口として多くの人が行き交ったのだろうが、今は什器のほとんどが取り払われており、奥に床と一体になったカウンターだけが残されている。黒子は何歩か駆けて壁を背にし、辺りを警戒した。

床のタイルはところどころひび割れており、天井から落下してきたのだろう、板切れが散らばっていた。隅の方は砂ぼこりがカーペットのように広がっていたが、至る所に足跡がくつきり残っているのを、

黒子は確かめた。

誰かがここに立ち入っている。それも、最近。スカートの上から、金属矢を軽く触って確かめながら、確信を強めた時、微かに呻き声が聞こえた。

足跡が何人か分続く先を、黒子は睨み、壁に沿うようにして早歩きで進んだ。念のため、片手に数本金属矢を隠し持った。

動くことのないエレベーターホール先の、ビルの反対側の窓が見える。そこから右手に曲がる角へと、足跡が続いている。

「だ……だれかいるのか……こつちだ、助けて……」

男の声だ。黒子は周囲を警戒しながら、曲がり角の袂まで忍び足で行き、学生鞆から手鏡を取り出して奥を確認する。曲がり角の先は、ドアのない部屋があるようだ。黒子は鏡をしまうと、角を曲がり、部屋へと足を踏み入れた。

部屋は黒子の入った側から見て左手が、全面ガラス張りとなっていて、電気が通わずとも、まだ明るかった。ミーティングルームとして使われていたのだろうか、長机が何卓か、運び出されずに壁際で積まれている。そして、長机のすぐ脇で、一人の男が椅子に座らされている。茶色がかったカラーレンズの丸眼鏡をかけ、頭巾のようなものを被らされおり、真夏だというのに羽織っている長袖のジャケットは、どう見ても秋・冬物だ。当然、その顔には汗が噴き出ている。「ジャツジメントですの……その厚着は、自分から進んで着ている訳ではないようですね？」

「も、もちろんだよ」

男が息をつきながら喋った。黒子に向けた男の顔は、にきびが多い丸顔で、清潔感に欠けていた。

「通報を受けて来ました。あなた……帝国に囚われた方？」

「あ、ああ、うん、そうだ。僕は、捕まってる」

黒子の問いに、男はどもりながら答えた。

念話を使ってくる様子はない。少なくとも、目の前のこの男が、自分を誘った本人ではなさそうだと、黒子は思った。

「じゃあ、あなたが、……上条さん？」

黒子が相手の名前を確認すると、男はこくりと頷いた。

「そう、そう。僕だ。僕のこと」

「分かりましたわ」

黒子は1歩前に進んでから、男の背後に空間移動し、椅子ごと蹴り倒した。

がふっ、と息を無理やり吐き出しながら、男は口をぽかんと空けて黒子を見上げた。

「な、なにす——」

「人質のお名前くらい、ちゃんと調べておくことですわね」

倒れた男のジャケットの裾を、すぐに床に打ち留めると、黒子は言った。

「正しいお名前は、こちらで把握しておりますよ。自分の名前を間違える人質がどこにおりますの？ 大方、あなた、帝国の人間でしょう？ さあ、人質の本当の居場所を教えてもらいましょうか？」

黒子は部屋を見渡すと、声を一層張り上げた。

「ほかに仲間がいることは分かっていますの。出ておいでなさいな。さもなければ、この不摂生者の手足が直接、床に磔になりますわよ!」
黒子は男から目を離していた。そのため、男が眉間に皺を寄せて、不敵な笑みを浮かべて黒子を凝視していることに気が付かなかつた。
「ふわ~~~~つとね」

男が呟くのを聞いて、黒子は視線を戻したが、その瞬間、ひどく眩暈がした。

「あれ……」

黒子は側頭を抑え、ふらふらと何歩かよろめくと、そのまま倒れ込んだ。埃臭い床に、自分の体がひどく重たく投げ出されるのを感じてから、黒子は気が遠くなっていた。

「僕の名前かい？ ホーズキ男って呼ばれてっけどさ……」

ちようど自分と向かい合わせになる位置で、倒れたままの男が笑みを浮かべて言ったが、黒子にはその意味を考えることができなかった。

——第七学区、常盤台中学学生寮

机の上で携帯電話が着信を告げたのに気付き、御坂美琴はそれを取り上げた。

結局、ルームメイトの黒子には、ランチの誘いを断られ、「仕事がある」と言われたたきりだ。結局美琴は一人で部屋に戻り、溜まっていた週末の宿題と格闘している最中だった。

電話の画面に映し出された通知は、以前、初春に頼み込んで、御坂にも特別に届くようにしてもらったあるアプリの通知だった。

その内容を見て、美琴は目を見開いた。

「黒子……!!」

美琴の頭上に、青白い光がバチバチツと音を立てて渦巻いた。

——第一九学区、旧市街

「よくやったぜ、『ホーズキ』！」

帝国の隊長が手を叩きながら部屋に入ってきた。

床には、白井黒子が気を失って倒れている。

「そうだ。名前のことを忘れてたから、蹴られた時はびっくりしたんだなあ、もう」

仲間の手を借りて、縛られた振りをしていたホーズキ男が立ち上がり、服をはたいて言った。

「そうだ。お陰で相手から近付いてくれたんだ、逆に良かったかなあ」

「それにしても、まさかホントにノコノコ現れるたあ……いくら風紀委員ジャッジメントつつつても、ガキは所詮ガキだな」

隊長が横たわる黒子の体を蹴り飛ばした。黒子は天井を仰いでいるが、目は虚ろで、口の端から微かに涎が垂れていた。

「で、それで。このコ、どうすんの？」

ホーズキ男がしゃがみこんで、眼鏡の縁を片手で上げ、黒子の顔を間近から舐め上げるように覗き込んだ。

「そうだ。好きにしちやおうよ。かわいいしこのコ。うん」

「うっせえ、黙れロリコン」

隊長が面倒くさげにホーズキ男に言った。それから、僅かに口角を上げた。

「ま、確かにここで甚振ったって、それはそれで楽しいだろうが……一四学区に良い買い手がついたのヨ。だから、まあ、見た目に傷はつけちゃあなんねえ。少なくとも、今はな」

「へえ？」

「こーいうまな板みてエな身体を好き好む、羽振りのいい連中がいるのヨ……で、こいつは、おもちゃになる。しかも、常盤台なんてエタグがついてんだからよオ。いい値段で買い取ってくれるって寸法さ。後で、ビデオを送ってくれるらしいぜ」

「へえ。それはいい。それは、いいね」

隊長の愉悦に浸った言葉に、ホーズキ男をはじめ、周りの仲間がニヤつきながら頷いている。

「こいつのケータイは？」

仲間の一人が、隊長の命令を受けて、黒子の耐衝撃学生鞆から携帯電話を取り出す。

「カード抜いたら、それ以外はツブしとけ。ジャツジメントやら、常盤台の女共の連絡先が入ってるってなりやあ、案外いい値段で売れると思わねえか……おい！メガネのボーズは？どこだ!?!」

隊長の怒鳴り声に、入り口から、挙動不審そうにあちこちに視線を送りながら、介旅初矢が現れた。

「ビクついてんじゃねえよ！シンクロトロン量子変速!」

「すつすいません……」

蚊の鳴くような声で言い、介旅は隊長に頭を下げた。

「ゴキブリ駆除してんじゃねえんだからよ……で、『ピーナツ』は持ってきたんだろーな」

「あ、ああ、ここに……」

介旅が鞆から取り出したペットボトルには、暗緑色の液体が入っている。ボトルの中で、微かに発砲している。

「よし、じゃあ、お前。こいつに飲ませろ」

「え……」

隊長が親指で指した先の、昏倒している黒子に気付き、介旅は目を見開いた。

「てめえ、ジャツジメントに恨みあるって言ってたろ。とりあえずそれ飲ませて、目が覚めてもまともに動けないようにすんだよ」

介旅は、手に持ったボトルに視線を落とし、じっとしていた。頬を汗が伝っている。

「どうしたおらア!」

「わ、分かったよ!」

怒鳴る隊長に、介旅は顔を上げて2, 3度素早く頷いた。それから、黒子の傍に膝をつき、ボトルのキャップを開けた。介旅は、黒子の半

開きの目を見た。やや臙脂色の入った瞳が、うつすらと介旅の方に向いている。

介旅は、唾を一度呑み込んでから、鼻でため息を小さくつき、ボトルの口を黒子の唇へと寄せていった。

「よーし、あと、念のため、こいつの目を塞いどけ。万一正氣に戻つて、空間移動されたらおじやんだ。何てつたつて、金の生るお嬢さんだ。丁重にお運びしなきゃあな。車は？もうすぐ来んのか——!？」

隊長が指示を飛ばす部屋の外では、黒雲が立ち込め、雷鳴が遠くからゴロゴロと聞こえ始めていた。

——第七学区、ジャッジメント風紀委員第一七七支部

他の生徒と時折ぶつかりながら、初春飾利は事務室の入り口まで辿り着くと、手ごと叩きつけるように、人差し指を乱暴に認証パネルに当てた。立ち止まると同時に、抑えて来た空気が、咳となって口から飛び出す。もう片手を膝について、初春は荒く息をついた。

初春の逸る心と裏腹に、パネルは軽い電子音を立てて、認証エラーを示す。

——The login attempt is failed.
Either the fingerprint or vein is invalid——

「ふっざけんなッ!!」

自分でも気づかない内に、初春は怒鳴り声で悪態をついた。同じビル内で働く一般人が何人か、怪訝そうに振り返った。再度指を押し付け、開きかけた隙間から小さな体をねじ込ませるように入室する。

今にも涙になつて溢れそうな怒りと不安、危機感をもって駆け付けた初春だったが、その気持ちに反して、室内の人影はまばらだった。初春は周りの様子に構わず、自身にあてがわれた席へと進み、席に着くや否や、パソコンを立ち上げた。

「初春さん」

「分かっていますよ、固法先輩」

常人離れした速度でキーボードをタイピングしながら、初春は隣に静かに立つ固法美偉に返事した。

「白井さんの救難信号シグナルの位置は一九学区。私達一七七支部の管轄じゃないってことは。ええ、カスリもしませんもんね、分かっています」

「現地の警備員アンチスキルに、緊急で駆け付けけるように手配したの」

固法の声の端々から、心細さが滲み出ていた。

「初春さん、風邪がひどそうだし、休んだ方が——」

「わたしのー!」

バンツと初春の右手が机を叩き、固法は言葉を呑み込んだ。

「仲間なんです、大切な……研修時代からの……それが、クズ共の巢ネストに、ノコノコ飛び込んで入って、ほんと、何考えてんだか……」

初春の両手は、全体休止ゲネラルパウゼするピアノ奏者のように固まっていた。顔は、画面を見ることなく、俯いていた。

「……取り乱してごめんなさい。でも、一九区と言えば、学園都市でも一・二を争う過疎地帯……あんな破産地帯フェイルトベルトの治安維持に注力しようとは、理事会も普段から考えてないでしょう？ 現地のアンチスキルのやる気のなさは、私だって少し位耳にしていますよ。相手がスキルアウト風情だからって、七学区セブンスやストレンジばかり警戒すればいいって思ってたんですよ、私。つくづく、バカですよね」

初春が膝に向かって言葉を紡ぐ様は、ほぼ独白と言ってよかった。横に立つ固法が、何か言葉をかけようと、口を動かした、その時。

初春の携帯が、着信を知らせた。

初春は唇を噛み締めて、それを手に取った。それから、口を開く。

「……御坂さん……」

『初春さん！お願い！』

空気を切るような音と共に、切羽詰まった声が、電話口から聞こえた。

『黒子の居場所へ、案内して!! すぐ!!』

「そうですよね。シグナルが、御坂さんの所にも届いて……」

『黒子は、あたしの……大切な後輩だから……だから!』

「止めても、行くでしようね」

初春は、ちらりと横の固法を見た。

固法は両手を口元に寄せて、何も言わなかった。

「本来、ジャッジメントとしての私の立場で、一般人であるあなたに言える事ではないんですが……きっと私があるあなたの立場でも、同じことをすると思うんです。だから！」

初春の両手指が、再びキーボードの上を踊り始めた。

「位置情報を送ります。あなたを……頼らせてください！」

御坂美琴は、既に七学区を抜け出ていた。片手に付けたスマートフォンウオッチから、初春の声がする。

『携帯電話の位置情報は途切れましたが、白井さんのシグナルは、まだ生きてます。髪留めの発信機が相手に気付かれていなければ……今は最初と同じ、旧市街の廃ビルから動いていません！』

「あの子のツインテールに触っていいのは、ルームメイトのあたし！」
美琴は足で思い切り壁を蹴った。美琴は磁力を操作しながら、建物の鉄筋を伝って、街を縦横無尽に東へ向かって移動している。その様は正に稲妻のようだった。

「薄汚い奴らの手が触ったら、黒焦げにしてやる……！」

『今、その廃ビルに近い監視カメラの映像に、アクセスしています。怪しい奴らが動いたら、分かるように！』

「初春さん……そんなこともできるの？」

全力で駆けながら、美琴は機械操作に手慣れた様子の相手に驚かされていた。

美琴と通話しながら、監視カメラ映像へのハッキングを試みている初春の肩に、別人の手が乗せられた。

「……先輩が止めてもやめませんよ。絶対に」

「ちがうの」

決然とした表情の初春の肩に手を置いたのは、先ほどからしばらく押し黙っていた固法だった。

「研修の時からって、あなたはさっき言ったね……わたしだって、あの子が駆けだしの頃から面倒見てるから……!」

初春は、表情を僅かに緩めた。肩に乗せられた固法の手が震えているのが分かったからだ。

「あの子は……白井さんは、いつも自分一人で解決しようとして、傷ついて。手の内が分からない内は突入しないって言ってるのに。私は、それをただ見てることばかりで、不甲斐なくて。この間の喫茶店の時だって……」

「先輩——」

「だから!」

初春の肩には、固法の両手が乗せられている。固法は跪いて、顔を上げた。眼鏡の奥の、濃藍の瞳には、うっすらと涙が溜まっていた。「あなたには、できることがある。初春さん、お願い、力を貸して……あの子を、救いたい……」

初春は、キーボードから片手を離し、固法の両手にそっと添えた。「わかりました」

決然とした口調だった。

「私は、私にできることをします」

『御坂さん!今どこですか!』

「なに!?今私は——六学区!」

一度立ち止まり、周囲の風景を見回してから、美琴は通話先の初春に返事した。

『ちようどビルの入り口のあたりを映してる監視カメラがあるんですけど、誰か車で来ました!』

「!!帝国の奴ら……!」

『えっと、これは……』

初春の返事を待たず、美琴は怒りに顔を歪め、再び走り出そうとする。

『待ってください……一人だけです……女のひと?』

「えっ?」

御坂は、思わず聞き返した。

午後の西日は、立ち込める黒雲にすっかり隠れていた。

——第一九学区、旧市街

「いいか、十五分だ」

エンジンがかかったままの車の運転席から腕を窓の外へ下げ、竜作が言った。

「これは、完全に任務外だ……しくじっても、すぐには助けられんかもしれん」

「いいよ」

顔を向けることなく、ケイは短く返事をした。

「ありがとう。竜」

「ご武運を」

竜は親指を立ててみせると、車を発進させ、人影の見当たらない通りを走り去っていった。

ケイは、口を真一文字に結んで、廃ビルの入り口を睨んでいた。

そこは、黒子が入って行った場所だった。

数十分前 ——

「もう一度言つて!」

『いや、だからさ、白井つて風紀委員の子から、遭難信号メイデイが出たらしいんだつて。アンチスキルだとかジャツジメントが使つてる緊急回線を傍受してたら偶然耳に入つたつて訳』

血相を変えた様子で、ケイは隣の竜作から電話を奪い取るなり、通話相手の島崎に向かって問いただしている。

「場所は分かる!」

『発信元のことを言つてんなら、一九区の旧市街、サボテンみてえに並んでる廃ビルの内の一本だよ。なんなら詳しい座標を教えるが……どうしたんだよ、別に知り合いつて訳でも——』

「すぐに送つて、私に!!」

『あ、ああ、分かった、けどそれ以上は俺も首を突っ込んでねえから知らねえぞ。なんだつて、こないだジャツジメントのファイアウォールで火傷しちまつてから、逆探知されまくつてんだ、勘弁してくれよ』

一度電話を切ると、ケイは慌ただしく、後部座席のバッグの中身を漁り始めた。

「お前、あのジャツジメントにそんな思い入れがあつたか?」

「……ない」

「じゃあ、何で」

運転席の竜が怪訝そうに聞くが、ケイは見向きもしなかった。

「帝国のやつらとたまたまやり合つたつていうのは流れでだろ?そりゃあ、親しい仲を作るときゃあ、例の実験体に繋がる情報は得られるかもしれんさ。だがな、昨日の今日で、なぜそこまで情が入つてるんだ?」

「情なんかじゃない」

ケイはジャケットを羽織り、ポケットにナイフや応急道具を詰めていく。

「ただ——もし、帝国に絡んでるとしたら……私に責任があるかもしれない」

「帝国？ああ、昨日チヨコさんとここで捕まえたガキの言ってた人質つてやつか？だがオイ待てよ、ジャツジメントつてのは、そもそも校内の規則を守らせるマジメ君たちなんだろう？校外の、しかも離れた学区の件によ、まさかのこのこ乗り込むってこたあねえだろ。そりやアンチスキルの仕事の筈だ」

「あの子……自分ひとりで突っ走る感じだった」

ケイが静かに、噛み締めるように言う。

「私が、人質の命がかかっているから、何とかしてやってほしい、なんて言ったから……確かにあの子は強いと思う。それで、ひとりで何とかしようとしたのかも」

「考えすぎなんじゃねえのか、ケイ。落ち着けて……オイ、何してる」

後部座席のバッグからハンドガンを取り出し、装填数を確認しているケイに気付き、竜作は一段と声色を厳しくした。

「もし使うようなことがあれば、ジャツジメントやアンチスキルは、私を違う目で見るとさうだね」

「分かってんなら、考え直せ！俺らの目的は、あくまでアーミーだ！ジャツジメントの子ども一人がSOS出しているからって、なんでそんなモンこきさえて駆け付ける？逆に動きづらくなるだろうが。お前が何もしなくたって、アンチスキル共が何とかするだろうさ！」

「竜。……、第六学区だよな」

ケイは、竜作の横顔に向けて、携帯電話の画面を突き出した。運転中の竜作は、目尻にはつきりと皺を寄せながら、横目でそれを見た。

「現場まで、何分かかる？」

「お前、人の話を……」

竜作は車のナビに目をやり、一つ大きいため息をつくとき、乱暴に車を右折させた。ケイの体がドンツと傾いた。

「あーもう……チヨコに知られたら、俺が指の骨を何本か折られる前に止めてくれるんだろうな!？」

「約束する」

「畜生、わーッたよ……くそ、警備ロボに引つかかんねえことを祈るぜ」

「竜、ありがとう」

「いいか、すぐに片をつけて戻ってこい」

竜作は、髪の毛を片手で掻きむしりながら、アクセルを踏み込んだ。

「お前は、俺たちの——俺や妹の、大事な仲間なんだからな」

—— 一九学区、旧市街

『『帝国』の隊長さんってのはアンタか』

金髪の、猫のような鋭い目をした男が部屋に入って来た。男は手下を2人引き連れ、真夏に似つかわしくない白色のジャケットを羽織り、片手に持った煙草から紫煙をくゆらせていた。

「おせえよ、運び屋」

隊長は上目遣いに男を睨みつけた。男はかなりの大柄で、隊長よりも10cmほど背が高い。金髪の男は、一度煙草を啜え、それから煙を隊長の顔目掛け吐き出した。

「おいおい、随分ご挨拶だなア。ここのビルを紹介してやったのは誰だと思ってる」

「立場を弁えろよ野蛮人。てめえらこそ、俺たちのクスリと、レベルアップ幻想御手に群がったクチだろうが」

隊長は露骨に顔を顰めて言い返した。

「へえ？『クラウン』のメンバーを肅正して、ボスの座に座った能力者がどんなヤツかと思ったら……オイ、てめえじゃねえな。中間管理職がお出迎えたア、俺らも舐められたモンだなあ。ボスはどこだ？お隠れかい？」

運び屋の男は、自分より小柄な隊長を相手にして、余裕をかましている。仲間の男二人が、笑い声を上げた。

隊長は齒噛みをする、片手で背後の仲間の手招きした。何歩か前に出てきたのは、黒髪を肩まで伸ばした大男だ。運び屋の男と背丈はそう変わらない。

「なんだ、ヤンのか？」

運び屋の3人の中から、黒いシャツを羽織った細目の男が前に進み出た。男が片方の掌を差し出すと、部屋の隅に押し込められていた長テーブルが浮き上がった。隊長はそちらに顔を向けた。

「所詮、ポッと出のチームが粋がつてんじゃ——イツ!？」

運び屋側の男が突然呻き声を上げて膝をつき、それと共に浮き上がっていたテーブルがガタガタと音を立てて、他のテーブルの山に落下した。

帝国側の大男が、運び屋の細目の男に向かって、右腕を真っ直ぐ伸ばしている。大男が右手を班時計回しに捻り上げるような動作をすると、相手の男の手首から先だけが不自然にその場で振じられ、皮膚が引つ張られていくつもの溪谷を作った。

ヒツ、と声を漏らした者がいた。先ほどから所在なさげにしていた介旅だ。隊長はチツと舌打ちをして、金髪の運び屋の男に再度顔を向けた。

「いいか——俺たちは確かに、まだ若いチームだ。だが、帝国を辱めるといふなら、鉄雄様がお出でになるまでもない……俺たちの力を見くびるな」

金髪の男は、啞えていた煙草を床に捨て、ジリジリと踏みつけて、わざとらしくため息をついた。

「わーッた、わーッたよ。別に、ここで一戦やり合おうって訳じゃねえさ……その念動力解いてくんねえかな?こっちも何もしねえからよ」

隊長は、唇の端に笑みを浮かべ、片手を上げた。帝国の大男が伸ばしていた手を引つ込めると、運び屋側の男は息を大きくつき、手首を摩りながら用心深く立ち上がった。

「で?運びブツはどこだ」

金髪の男が聞くと、隊長は顎で介旅に指示した。介旅は、傳くように頭を下げながら、壁際からスーツケースをゴロゴロと運んできた。

黒色で、大型航空機に乗せられるギリギリのサイズの物だ。

「空じゃあねえだろうなア、相手は空間移動者テレポーターなんだろう？」

「重さで分かんだろうが。別に開けてみてもいいがな、クスリでおねんねしてんだ。小便塗れかもしれないねえぞ」

「ハッ、そーいう趣味は、ねえな」

運び屋の仲間の一人が、スーツケースの取っ手に手をかけた時、こめかみに指を当てていた隊長が革靴をトンと鳴らした。

「ああ、何だよ？」

金髪の男が怪訝そうにすると、隊長はフツと小馬鹿にしたような笑みを浮かべた。

「……お客さんだ、もう一名ご入店な」

「なんで分かんだよ」

「見張りがいるのさ。いらっしやったのは、女一人みてえだ……超電磁砲レールガンじゃねえな。こいつの連れか？」

隊長は、運び屋が掴んでいるスーツケースに目をやった。

「ハア？ 適当なこと抜かしてんじゃねえぞ……クハッ、ハハ」

金髪の男が歯を剥き出しにして隊長を睨みつけ、それから唐突に声を上げて笑った。煙草のせいで黄ばんだ歯は、明らかに何本か抜けていた。

「まあ……いいだろう、ここは俺たちの根城だ。お宅らはさつきと出てけ。その女、俺らの獲物だ。ジャツジメント共々、売っ払ってやるよ。安心しろ。てめえらには、このケースの女一匹分の報酬を、前の話通りくれてやるさ」

それから、金髪の男は、仲間二人に向かって振り返った。左耳につけたジグソーパズルのような形をした飾りが揺れた。

「女だとよ。俺らのレベルがどれくらい上がったか、いい実験台にしてみようじゃねえか」

温ぬるつとした埃臭い空気が充満するエントランスにケイは足を踏み

入れ、すぐに日陰になる壁際へと身を移し、辺りを警戒した。足元の埃が、いくつもの足跡によつて、カーペットのような平衡を乱されている。ケイはその足跡の流れを追っていたが、気配を感じて顔を上げた。

「そうそう、こつちよ、お嬢ちゃん」

金髪の男が、ニタニタと笑いながら、2階のバルコニーの手摺にもたれて、こちらを見下げていた。

「迷子になったんかなあ？お兄さんが優しく案内してあげよつかあ？」

「動かないで」

ケイはベストの脇のホルスターから素早くハンドガンを引き抜き、相手に向けた。男は、ヒュツと口笛を吹き、手摺に掛けていた両手を肩の高さに上げた。

「アンタ、『帝国』？」

「おお、マジか……てめえ、ジャツジメントじゃあねえな。どこのチームのヤツだ」

「質問に答えて。じゃなきや、脳天に穴を空ける」

「ハツ、この距離でか？」

「そう。この距離なら、外さない」

「随分な自信じゃねえか。仕方ねえな……」

金髪の男は、わざとらしくため息を一つついた。

「いいだろう。質問に答えてやる。まず俺らは、帝国じゃねえ。それからだな」

金髪の男は、身を僅かにケイの方へと乗り出した。

「俺を、あんなガキどもと一緒にすんじゃねえよ、このアマ！」

男が怒りを露わに怒鳴ると、ケイが咄嗟に身を伏せるのと、ほぼ同時だった。

パキンと乾いた音を立てて、ついさつきまでケイの肩があつた位置を通り抜けたナイフが、壁にぶつかってから床に落ちた。ケイはそれをすぐに拾う。取っ手の部分が緩い弧の形状をした、登山用らしきナイフだ。

「えっ？……」

拍子抜けした声が聞こえる。ケイから見て右方向の廊下に、細目の男が戸惑った顔をして立っていた。そちらへとケイは全速力で駆け、あつという間に距離を詰める。左手には、先ほど拾ったナイフが握られている。

「待つ——」

ケイはその男の目前で飛び掛かり、片手のナイフを振り翳し、柄の底で男の側頭部を殴りつけた。男はくぐもった声を上げて、肩から横っ跳びに倒れ込んだ。

「野郎！」

ケイの背後から、太い二の腕が首に巻き付き、すぐに絞め上げて来た。ケイは体が浮かされた瞬間に、大きく腰を前に振ってから、反動で踵を後方に思い切り叩きつけた。

飲みかけの炭酸ジュースのペットボトルを再び空けた時のような、気の抜ける音を涎と共に唇から漏らし、男がケイの脇へ倒れ込んだ。チエック柄のシャツを着た男だった。

「2人目……あと1人！」

ケイは自分に言い聞かせると、元いたエントランスへ走る。2階のバルコニーからは、階段が繋がっていて、ケイがいるエントランスへと降り立てるようになっていた。エントランスの窓際には、最初にケイが出会った金髪の男が、苦々しげな顔をして立っていた。ケイはハンドガンを両手で持ち直し、足を止めると引き金を引いた。

パアンという鞭打つ音が、がらんどうの空間にこだまし、男が立っていた手摺のすぐ下のガラスがおよそ2分の1を残して粉々になった。

「動くな！」

ケイは、この廃ビルに入ってから最大に声を張り上げた。重心をずらさないよう、銃を男に向けたまま、ケイは距離をじりじりと詰める。「アンタたちが3人組だったのは分かっている。車で乗り付ける所を見た。ほかに仲間はいないの!？」

「帝国のうぎってえガキどもなら、とうにおウチに帰ってもらったさ。」

嘘じゃねえぜ？ここは俺らの根城だ。長居されると迷惑だからな」

男は再び両手を上げてしているが、その顔に怯えは見られなかった。微かに笑みを浮かべて、近付いてくるケイを見据えている。

「ジャッジメントの女の子が一人、ここに囚われているはずだ。どこにいる？」

ケイと男の間は、5mほどの距離になった。

男がハッと冷やかすような笑いを漏らした。

「なアんだ、やっぱりその女の連れかよ。ジャッジメントが銃持ったお友達を持つてるたあ、こりやあ不祥事じゃねえか。なあ？」

「とぼけないで、言え！」

「分かった、分かった、確かにまだ、ここにいるぜ。案内するからよ」
ケイはつかつかと歩き、ハンドガンをも男の至近距離にぴたりと構えた。

「向こうを向いて、黙って歩いて！両手は上げて！」

ケイは歩く男に後ろからついていく。銃口は男の背中に押し当てたままだ。

「ほらよ、こん中だ」

男が歩いて行った先には、受付のデスクが残されていて、その陰に、帝国から引き渡されたスーツケースがポツンと置かれていた。

「そう」

ケイは小さく呟くと、ハンドガンをすぐに振り上げ、グリップの底を男のうなじ目掛けて振り下ろした。

そして、ケイが振り下ろした腕は、空を切った。

「あれ……」

ケイの目の前に、ついさつきまであった男の姿は無い。何が起こったのか分からず戸惑うケイは、突然脇腹に大きな衝撃を受けた。横殴りの力に飛ばされてケイは倒れ込み、その際に頭をデスクへと強かに打ち、床に転がった。

ケイの視界がチカチカする。男の両足のシューズが、目の前に迫っていることが分かった。

続けざまに顔面に2度、3度の衝撃を受けた。目を開けている場合

ではない。耳鳴りもする。タールのように思考全体に広がる痛みの中、ケイは鼻の辺りにツーツと生温かいものを感じていた。

「てめえがどこの誰だか知んねえけどよ」

ぐわんぐわんと揺らされるケイの頭に、辛うじて男の言葉が届いた。

「帝国の絡みだつて知つてここに来たんなら、当然、レベルアップを使った奴とかち合うつもりで来たんだよなあ？だとしたら、俺が素直に殴られやしねえつてのも分かんדר」

視覚をジャックする能力。

必死に痛みを耐えながら、ケイはそう思った。

迂闊だった。念動力テレキネシスやら水流操作ハイドロハンドやらの能力者に何度か勝つて、奢りがあった。目に見える物が全てとは限らないのに。

男は、近くに転がつていたケイのハンドガンを拾い上げて、感触を確かめるように撫でた。

「俺はよ、一通りのあくどいことをしてきた分、ジャツジメントやアンチスキルにはいつもケツを追つかけられてたけどよ……銃で人を撃つのは初めてだぜ。ありがとうよ。やられた仲間の分、膝に1発ずつ打てば、もう逃げられねえだろ、ざーんねんでしたア」

だがその前に。と男は笑いながら、スーツケースをケイの視界に入るよう、床に倒して見せた。

「てめえが助けたかったジャツジメントのガキが、こん中に入ってる。今から空けてやるよ。クスリ打たれてお人形さんみたいなんだとよ！それを見ながら、お前は今からタマをぶち込まれる。面白エだろ？」

ケイは立ち上がろうとしたが、脇腹の痛みがひどく、体に力が入らない。呻きながら、男がスーツケースのジツパーを動かすのを見ていた。

悔しかった。竜の言う通りだ。自分は何て愚かで、向こう見ずだったんだろうか。そもそも、大した知り合いでもない黒子を助けに来たこと自体が間違いだっただろうか。見聞きしたことに、目と耳を塞いでいればよかつたのだろうか。

ケイは目を瞑った。自然と涙が零れて来る。

「……あア？なんだこりゃ」

男の訝しむ声を聞いて、ケイは顔を上げた。

スーツケースが開かれている。のっぺらとしたものが、無理やり押し込められている。人の形をしているようにも見えなくはない。

次の瞬間、バチイツという音と共に、ケイの目の前で青白い光が弾け、ケイは思わず目を閉じた。

ドサツという音を聴いてケイが目を開けると、先ほどまで立っていた男が、四肢を痙攣させて倒れていた。ケイが何とか頭を動かすと、白いハイソックスに、ブラウンのローファーが床を踏みしめているのが見えた。

「黒子……ちゃん？」

「教えて」

底冷えするような響きの声を聞いて、ケイは痛みを堪えながら上半身を起こした。

「黒子は、どこ？」

ケイは、涙で潤んだ目を見開いた。

学園都市の能力者中第3位、超電磁砲^{レベルガン}としてケイも知る、御坂美琴が、電光を纏わせながら、じっとケイを見下ろしていた。

「御坂……さん」

「あなたが、なぜここにいるのか、私には分からない」

美琴は、ケイから目を逸らすことなく言った。

不可解な状況だった。美琴の目の前にいるケイは、先ほどまでスキルアウトらしき男と戦っていた。加えて、このビルの入り口から脇に逸れた所では、2人の明らかに柄の悪い男が倒されていた。ケイは、ジャツジメントでも何でもない、美琴よりちよつと年上の少女だ。美琴にとってみれば、数日前に一度だけ会っただけだ。そのような人物が、どうして自分のルームメイトである白井黒子が危機に陥ったであろう現場に居合わせているのか。どうして、スキルアウトと単身戦っているのか。

黒子は未だ見つからない。その事も相まって、目の前で傷つき、顔を血で汚しながら膝をついているケイという人間を、どう判断すればいいのか、美琴は悩んでいた。その精神面の不安定さを表出するように、美琴の髪は逆立ち、時折パチパチつと音を鳴らし、青白い光を放っていた。美琴は、自らを落ち着かせようと、肩で深く呼吸した。

「私は、黒子からの救援要請を知って、ここに来た。それは、ジャツジメント風紀委員にしか伝わらない筈。なぜ、あなたがここにいるの？」

「……それは」

「黒子から、あなたの話は聞いた。帝国っていう連中との戦いに偶然加勢してくれたと。そして、黒子は今日、その帝国の奴らに挑んだ。人質がいるっていう情報を掴んでね。その情報も、あなたが黒子に知らせた」

ケイの端正な顔を、幾筋も汗が伝っている。ケイは片手で脇腹を抑え、もう片手を床についたまま、荒く息をして、立ち上がろうとはしない。美琴が言葉を連ねる内に、ケイは徐々に目を伏せていった。

「……正直に答えて。あなたは、味方なの？それとも……敵なの？—

——ううん、何者？」

ケイは顔を僅かに俯かせた後、やや歯を食い縛って、美琴を見上げた。

「敵じゃない」

ケイの声と息遣い、美琴の体が放つ火花の音が、広い空間に微かに木霊している。

「そして、私が何者かは……言えない」

「ッ！正直に言わないなら——」

御坂はバチバチツと放電を俄かに激しくし、拳を握り締めた。

「言いたくなるようにする……黒子がどこにいるかもね！」

美琴は、湧き上がる疑問と不安をぶつけるかのように、ケイを睨みつけた。ケイが、ごくりと唾を飲み込むのが見えた。

「——お姉様ッ！」

聞き慣れた、甲高い声が美琴の耳に飛び込んでくる。美琴は声のした方向に意識を向けた。

奥へと続くエレベーターホールの壁に寄り掛かるようにして、黒子が立っていた。

「黒子ッ！」

美琴が声を上げ、ケイもそちらを見た。

「あんだ、ケガは……」

「私わたくしなら、大丈夫です……油断しました。お姉様、申し訳——」

「馬鹿！心配させて！」

美琴は黒子に駆け寄ると、両肩を掴んで叫んだ。黒子が目を一瞬丸くした後、済まなそうに伏せた。

「いくらジャツジメントだからって、こんな、一人で突っ走るようなマネはやめて！ たった一言でも、私に言いなさいよ！ 私は、あんだの……だって……何かあんだの身にあってらって……」

美琴は、安堵と憤りとがない交ぜになった感情を黒子にぶつけるが、言葉がまとまらなかつた。自然と口調が尻すぼみになる。そんな美琴の様子を目の前にして、黒子はそつと、自分の肩を掴む美琴の両

腕の袖をきゅつと握った。

「ごめんなさい、お姉様……」

暫く沈黙が流れた後、黒子は顔を上げた。

「お待ちなさい、あなた」

黒子がそれまでより鋭い口調で言う。

「なぜ、ここにいますのですか？ケイさん」

ケイは、床に転がったハンドガンを拾おうとしている所だった。銃に触れかけていた手を止め、黒子と美琴の方へ顔を向けた。

「私は……」

ケイが言いかけるが、唇を噛み締めて黙り込む。

そんなケイの様子を見て、黒子がゆっくりと歩み寄った。

「ひどい様子ですの。あなた」

黒子の口調には、厳しさと優しさとが同居している。ケイは、歩み寄る黒子から視線を外さずにいる。黒子の靴音が響いている。

「帝国の連中とやり合ったということは、あなたもまた、何かの目的があつてこちらにいらしたのでしよう。もうすぐアンチスキルも到着しますわ。ですから、そんな物騒な物は置いて」

黒子は、ちらりと床に転がる銃を見やり、ケイとの距離を詰めて語る。

「……今は、怪我の治療に専念するべきですわ、ケイさん」

「……これは」

ケイが、重い口を開いた。

「置いて行くことはできない」

そう言つて、ハンドガンを拾い上げる。

「黒子……やっぱりこの人……」

美琴は黒子の隣から一步前へ進み出て、腕を伸ばして黒子を庇う姿勢をとり、警戒感を露わにした。

黒子の表情も、美琴に同調して厳しいものへ変わった。

「ジャツジメントとして告げますわ。武器を捨てなさい。でなければ

――」

「捕まえる？私を？」

ケイは手早くハンドガンを懐に仕舞い込み、痛みを堪えてよろよると立ち上がった。

「私は、あなた達には敵対しない。けど、ここで止められる訳にはいかない。アーミーにも、アンチスキルにも……ジャッジメントにも」

「理解し難いですわ」

「私には……やらなきゃいけないことがある」

表情を明らかに歪ませながら、埃を髪に被らせたケイが美琴と黒子を見返す。

美琴と黒子の2人は、無言でケイと対峙した。

いつの間にか、砂を流すような雨音が、匂いを微かに漂わせて外から聞こえている。

それが美琴には、一瞬のようにも、とても長い間のようにも感じられた。

雨音の幕をくぐって、サイレンの音が徐々に聞こえてきた。ケイは、深く息を吸って、口を開いた。

「……敵じゃない、つてもし信じてもらえるなら。黒子ちゃん、御坂さん。ひとつ聞いてほしい」

ケイが手の甲で鼻から伝う血を拭うと、まっすぐに二人を見つめた。

『レベルアップ』を追って。それが、奴ら帝国の武器……」

「れべ——？」

聞き慣れない単語に、美琴も黒子も首を傾げる。

「奴らは、それを使って力を——」

「少女3名を発見！」

声を響き渡り、アンチスキルの一団が足音を鳴らして駆け寄って来る。ケイは言葉を止めると、そちらには目を向けず、僅かに黒子と美琴に頭を下げた。

「黒子ちゃん、無事でよかった」

「ケイさん、あなたは……」

ケイの言葉は、黒子にも、美琴にも、意表を突かれるものだった。ケ

イは、よろめきながら2人の横を通り過ぎようとする。先ほどまで、いざとなれば電撃を放つつもりだった美琴も、ケイの様子を間近に見て、動けずにいた。

「いつか……ともだちになれたらいいな」

ほんの小さな声で、下を向いたケイがそう言うのが、美琴には聞こえた。突然ケイは、怪我の様子からは想像できない位の力強さで走り出し、アンチスキル達とは反対方向へと去っていった。

「待っ……」

黒子が声を上げるが、途端に何人かのアンチスキルが側へ駆け寄って来た。

「一七七七支部のジャツジメントつてのは？どっちだい？」

バイザーで顔が見えないが、やや乱暴な口調の声で、男だと分かった。アンチスキルに、黒子が黙って腕章を示す。

「対象を保護！付近を搜索しろ、柄悪イガキはひとまず全部お縄だ！……全く、なんで常盤台の嬢ちゃんが、それも2人も？こんな貧乏街に来てんだ？訳わからん……」

「お言葉ですけどね！」

美琴はむっとして食って掛かった。

「私はこの子のルームメイトで、助けに来たんです！七学区から！」
「な、七!？」

美琴の言葉に、アンチスキルの男は驚愕した。

「どうやって、ここまでこんな早く……?」

「それよりも、みなさん、ここの学区の担当でしょ？もう少し早く来れなかつたんですか？」

「よく言われますがね」

男は、バイザーを上げた。浅黒く、精悍な顔が、困ったような表情をして現れた。体育の教師によく見る顔つきだと美琴は思った。

「こちとら、カネもヒトも足りてなくてね。今日だって、3キロ離れた高速で、なんといったか？あの帝国とかいう連中が走りまくって騒ぎを起こして……ああ、言い訳だな。申し訳ないってこった。……で、

これも帝国がらみだっけか？」

「ええ」

面倒臭そうな男の言葉に、黒子が返事をする。

「この階の、北の会議室跡で、2名、私がギッタギタ……失礼、拘束しましたから。奴らは少年を一人、誘拐して拘束しているという情報を受け、私はここに来ましたの。詳しく問い質してみてくださいいな。本当は、もっと他にもいたのでしょうか、この様子じゃ逃げられましたかね」

「分かった。ところで、そっちで延びている不良も、あんたが倒したのか？」

男は、先ほど美琴が倒した、金髪の男を親指で指した。

「いえ、あれは……お姉様が？」

「まあ、私っちゃあ、私だけど」

美琴は、男に足蹴にされていたケイの姿を思い出して、齒切れ悪く答えた。そんな美琴の心情を知ってか知らずか、アンチスキルの男はまじまじと美琴の顔を見た。

「……流石、英才の常盤台だな。見かけによらないってことか。まあ、助かったよ。アイツは、ここ最近派手に暴れてた、俺らも手を焼いている筋金入りのワルだからな」

「そんなにな？」

「ああ」

美琴の問いに、男が頷いた。

「トリックアート偏光能力って言うらしいんだがな。アイツは、自分の周囲の光を捻じ曲げる、厄介な能力持ちでな。誘拐やら強盗、暴行……いくつもしてかしてきてるんだが、光を捻じ曲げるってことは、要は触れねえのさ。手錠どころかゴム弾も向けられねえ奴だったからな。礼を言うよ。」

男の口調が、最後はやや柔らかくなった。

「で、入り口の横の通路で、もう2人氣絶してるやつがいたんだが、それもアンタらが？」

美琴と黒子は顔を見合わせた。美琴は首を振った。

「私じゃない。きつと……」

「そういえば、さつきもう一人女の子がいたろ？どこ行つた？」

男の問いに、美琴も黒子も、何とも答えようがなかった。

「……この件について、先ほど、アンチスキルの広報官は声明を発表しました。それによると、『強盗事件の容疑者を、強制的にアーミーが連行したことは、共同警備に関わる7月合意に真つ向から反するものであり、重大な懸念を表明。統括理事会にこの問題を提起……』」

カーステレオからは、激しい雨音の隙間を縫うように、ニユースキャスターの声が聞こえる。

「アンチスキル共が乗り込んでいったから、肝を冷やしたぜ。この足で、すぐ銃を処分するぞ。薬莖は回収できてないんだろ」

寂れた街に、時雨が降り注いでいる。竜作が運転する車は、深く暗いかなと雲が立ち込める西へ向かって、ただ一台、雨のカーテンをくぐり抜けて走っている。

「……後ろの応急キットは自由に使え。で、お前も休め……骨までいってないといけどな。まあ、その白井ってジャツジメントだって無事だったんなら、よかつたじゃないか。何でそんなに塞ぎ込んでるんだ？」

ケイは助手席で、窓ガラスをじつと見つめている。雨粒が止めどなく叩きつけ、雨季を迎えたサバンナのように、幾筋も表面を流れて落ちていく。

「……なんであんなこと言つたんだろ」

「何だつて？」

竜作が聞き返しても、それ以上ケイは何も口にしなかった。

やらなきやいけないこと？何だつたらうか。

何にせよ、友達になれなれない。

黒子とも、美琴とも、棲む世界が違うのだと、ケイは自らに言い聞かせていた。

7月15日 夜——第七学区、とある病院

「大体、白井さんはいつも猪突猛進過ぎます！視野狭窄というか狩人気質というか、もつと物事を俯瞰して考えてですね！いくら帝国の念話能力者から一言吹き込まれたからって、周りに一言も相談せずに突っ込みます、普通!?明らかに罠でしょう、罠！今回は御坂さんが助けに行ったから何とかなかったかもしれないませんが、あと一歩遅かったらスキルアウト共の玩具になってたかもしれないですよ!」

この調子で、初春飾利はもう10分以上マシンガンのように説教を撃ち続けている。初めは神妙な顔をして聞いていた黒子も、途中から辟易した様子を隠さなくなっていた。隣で聞いている御坂美琴も、流石に黒子が可哀そうに思え、初春を宥めようとしていた。

「ま、まあ初春さん、私からもきつく言っとくから！もうすぐ面会時間終わりだし、今夜はもうこの辺で……」

「そう！御坂さんにあなたの居場所をナビゲートしたのは、誰だと思ってます、白井さん!?!そう、わ・た・し！この初春飾利が、規定違反を顧みずにあのボロ街の監視カメラにアクセスしたからです！あく、固法先輩が目を瞑ってくれたから良かったもの、ほんっと焦ったんですから！ログ残さないようにするの大変なんですからね、ここだけの話!」

「なら、そんな大声で怒鳴らなくても……ここ、個室と云えど、病院ですのよ」

「バレたら始末書じゃあ済まないですよ、いつもの白井さんみたいにはね!」

眉をへの字に歪めて、皮肉を込めて呟く黒子に、初春はぴしやりと言いつ放った。

「帝国」の一味に拉致されかけた白井黒子は、正体不明の能力者の攻撃を受けて一時的に意識を失っていたと分かり、七学区の病院に一晚入院することになった。一通りの検査や点滴を受けた後、ベッドに寝かされた黒子自身は、もう問題ないと言いつ張ったが、御坂や初春、そ

れに先ほどこまで見舞いに来ていた固法美偉から、今夜は部屋を一步も出るなど口を揃えて厳命されていた。

「まあ、でも……まず、白井さんが居場所を突き止めようとした、強盗事件の仲間が見つかってよかったですけどね。暴行された上にクローラーのない部屋に閉じ込められて、かなり衰弱してたみたいですけど」

ややトーンを落とした初春の言葉に、黒子も一息ついて頷いた。

「類は友を呼ぶと言いますから、同情はできませんけど……あの発火能力者の男も、少しは安心するでしょう」

「黒子、あんた、ほんとーに大丈夫なの？」

念を押すように、美琴が黒子の顔を覗き込んで聞いた。

「なんか、クスリみたいなの飲まされたってんでしょ？ヤバくない？」
「ですから、それはさつきも申し上げた通り、全く問題ないですよ、お姉様」

黒子が、美琴を安心させるように、僅かに笑みを浮かべて答えた。

「私が倒した、2人の帝国の見張り役……奴らはそう言い張ってるらしいですけど、血液検査に加えて、さ、採尿もしましてよ!?薬物反応も何も出てこなかったんですもの。何を飲まされたかは得体が知れず、そりゃ気味が悪いですけど、この通り、黒子の頭は冴えておりますの」

「本当に？」

「本当ですわ、お姉様!どうしても疑わしいのであれば、今のお姉様の下着の色とフォルムを当てて差し上げましょうか？」

「ごめん、やっぱり普段からアンタの頭はぶっ飛んでたわ」

美琴が冷たく言い放つと、エノコログサを取り上げられた子猫のように、黒子は目を点にした。初春は、顔を俯かせて、なぜかやや赤面していた。

「て言うかさ、帝国って、そんなに能力者揃いななの？」

黒子の言動で室内の空気が冷えた所で、美琴が疑問を口にした。

「スキルアウトチームって聞いてたから、てつきり無能力者の不良の

集まりだと思っただけど……」

「LEVEL0の者が武装して組んだ徒党、という定義からは外れま
すね、確かに」

初春が天井の照明を見上げながら考える。

「銀行を襲って捕まった、念動力者の手長男、仲間を人質に取られてい
た発火能力者。バイロキネシスト 虚空爆破事件の容疑者。それに白井さんが言ってい
た姿が見えない念話の使い手に、テレパス 正体不明の小男……今まで棍棒を
持って騒ぐだけだった連中が、急に力を持ち始めたような。モノリス
に啓示を受けたって訳じゃあるまいし、なんか不気味ですよね」

「うだつがあがらず道を外した能力者が、帝国に次々に合流している
とか？」

黒子の推測に、初春が首を振った。

「それがですね、今まで逮捕された帝国の下っ端連中の身分を調べて
みると、どうも、書庫に登録されている強度レベルと現時点での強度レベルが一致
してない例があるみたいなんです。それこそ、元はLEVEL0と判
定されていた者も少なくなくて」

「妙ですわね」

黒子も視線を上に向けて考え込んだ。

「短期間で能力を上げるだけの努力をするとも思えない連中が……
元々レベルの低かった者が急激に力をつけたとすれば、それこそ初春
の言うキューブリックの映画紛いの奇跡が起きたとでも？ 一体、どん
なからくりが？」

「そういえばさ、黒子、ケイさんが何か言い残していかなかったっけ
？」

美琴が思い出したように言った。

「ほら、何だっけ、れば、レベルをあげる……」

やや間があつて、レベルアップ！と美琴と黒子がユニゾンして
言ったが、初春は合点がいけない様子だった。

「すぐピンとは来ない名前ですね………新車のドラッグの隠語か何かで
すか？」

「いや、そう………ケイさんがおっしやつてましたの」

「その、ケイって人も、何だか怪しい感じじやないですか。お二人の話を聞いていると」

訝し気に初春が言った。

「そりゃあ、喫茶店での爆破事件の時は、一般人なのに加勢してくれて、正直ありがたいと思いましたがよ」

初春はちらりと美琴の方へ視線を送った。

「——けれど、どう突き止めたんだか、私達と同じように情報を掴んで、また黒子さんの前に現れるなんて、妙ですよ。しかも銃を持ってたって言うし」

初春の言う通りだ。美琴は暫し考え込んだ。

帝国がジャツジメントを狙って事件を引き起こしていることが分かった以上、今回、黒子をおびき寄せた場所に、一般人である筈のケイが居合わせたのはおかしい。そして、黒子が言うには、発火強盗事件の犯人グループの一人が、帝国に人質に取られていると情報をもたらしたのも、ケイなのだ。帝国と裏で手を結んでいて、黒子を罠に嵌めようとしたというのは、充分にあり得ると感じた。

一方で、運び屋と呼ばれるらしい、金髪の偏光能力トリックアートの男たちと戦ったのもケイだ。それでいて、こちらの質問に答えることなく、傷を負った状態で姿を消した。その去り際に残した、「レベルアップ」という単語は、ただの出まかせではないとも、美琴には思えるのだった。「初春。一応、そのレベルアップって言葉について、アンチスキルに問い合わせてみませんか？」

黒子の提案する声で、美琴は顔を上げた。

「そうですね。もし帝国がらみの言葉なら、犯人たちからの事情聴取で得られているかもしれませんし……まあ、まるで時限爆弾が作動したみたいに、ドラッグ中毒で錯乱する奴が多いらしいですから、どれだけ有用な情報が得られているか、分かったもんじゃないですけど。あ、ドラッグといえば」

初春が手を軽くパンと叩いた。

「白井さん、虚空爆破事件の犯人、目星がついたってのは、固法先輩から聞いてますよね？」

初春の言葉を聞いて、黒子がベッドから体を起こした。

「そうでしたわ！だれ？どこの輩ですか？」

「いや、それが……」

初春が戸惑ったような表情をしたので、美琴は首を傾げた。

「第一容疑者はシロ？」

黒子が目を丸くして言った。

「ええ」

初春が頷いた。

「虚空爆破事件では、重力子を操作する量子変速シンクロトロンの能力者……これだけでもかなりユニークです。加えて、書庫バンクで調べれば、あれだけの爆発を起こせる人物なんてすぐ分かる筈でした。で、引つかかったのは、釧路帷子くしろかたびらっていう大能力者レベル4の高校生でした」

これから極楽浄土へでも行こうというのか、また縁起の悪そうな名前だと美琴は思った。

「で、なんでそのクシロさんは容疑者から外れたの？」

「はい。最初、アンチスキルは、釧路さんの行方を搜索して、在籍校にも当たったらしいんですけど、彼女は7月8日からダルクに入院中で、アリバイがあるんです。それも重篤で、まともに動ける状態でもないらしくて……」

「DダAダRダC……ちよつと、その人も薬物中毒ってこと？また物騒な」

黒子が薬物を飲まされたという疑いもあり、美琴は顔を曇らせた。初春が言葉を続ける。

「その釧路さん、学校も大分前から欠席しがちだったみたいで」

「あんたが一生懸命やってるっていうのに、学園都市の風紀も何もあったもんじゃないわね。ねえ、黒子？」

美琴は黒子の顔を見るが、黒子は険しい表情のまま、返事をしなかった。

「どうしたの、黒子？まさかまた頭の中で声がしてんじゃないでしょうね！」

「え？ああ、そんなことはありませんわ、お姉様。ただ、何か引つかかる

気がして……」

「何かあって？」

黒子の様子を、美琴は訝しんだ。しかし、黒子は違和感の正体を突き止められないようだった。

「ただ、第一容疑者がシロだとして、そこでヒントになりそうなのが――」

「帝国に絡む、急激な能力の向上……」

初春の言葉の続きを、美琴が受けた。初春はもう一度頷く。

「さすが御坂さん！ 釧路さんほどではないにしろ、この学園都市にはあと3人量子変速の使い手がいるようです。その中の誰かが、帝国と手を結んで、爆破事件を引き起こしているとみていいでしょう。今、アンチスキルの先生方が、その3人について調査している所ですよ」「隠れ抜くことはできませんわ」

黒子は静かに、だが決然とした口調でいった。両手は、白いシーツをぎゅっと握り締めていた。

「お姉様、初春。今回、私は迂闊でした。ごめんなさい。そこを救って頂いて、感謝しておりますわ……だからこそ、初春。私たちジャッジメントは、互いの手を携えて身を守る。奴らに、決して負けませんわ」「ええ、互いに、力を合わせましょう」

初春も表情を引き締めた。

「私、白井さんにも怒りましたけど、もちろん、その何倍も、いや、何十倍も、帝国に怒っているんです。仲間を傷つけられるのは……白井さんを傷つけられて、私だって腸が煮えくり返ってますからね。絶対に、このまま逃がしたくはないですよ」

「私も」

美琴の静かな言葉に、黒子と初春が顔を向けた。美琴には二人の気持ちだが、この病室にいる間に痛いほど分かったし、同時に帝国というチームに対する憤りがより高まっていた。

「私だって、元々はただの低能力者だった。私なりに努力を重ねて、力の使い方も学んだ。クスリだか何だか知らないけど、それで簡単に力に依存して、自分たちの欲のために使おうだなんて……私の大切な人

を傷つけられて、黙ってる訳にくかつての！」

「お姉様……」

ベッドの上の黒子に、美琴は優しい笑みを向ける。

「黒子ーいいい？ほんとーに、一人で突っ走らないこと。逆に、アンタがいくら止めても、私は帝国と戦えるチャンスがあるなら、やるよ？何てったって、あなたのルームメイトは、超能力者の、超電磁砲レールガンなんだからー！」

そして、美琴はポンと黒子の頭に片手を乗せた。

「そこらの有象無象には負けない。私がついてるから！」

黒子の目が、潤んだ。

「お……おねエえさまアああ!!！」

黒子の歓喜の叫び声と、黒子が美琴に抱き着いた拍子に響いた物音で、流星に看護師から注意が入った。そして、面会時間も過ぎていたということ、美琴と初春は黒子に別れを告げ、病室から出て行った。

「……釧路……はて、どこかで聞いた気が……」

一人残った病室で、黒子はベッドに横になり、天井を見上げながら呟いた。

ベッドはとても柔らかかったが、黒子はその夜なかなか寝付けなかった。それは、普段の寮と異なる環境だという理由だけではない気がした。

——第一九学区

「クソツたれ！」

部屋の中を忙しなく歩き回り、隊長が悪態をついた。

「折角、ジャツジメント供を縮み上がらせて、俺たちの力を示す絶好のチャンスだったのに……あの野郎……」

手には、携帯電話が固く握り締められていた。先ほど、運び屋の一団と、見張り役に残しておいた手下が、全員アンチスキルに捕まったという連絡を受けた所だった。人質にとった筈の、向こう見ずなジャツジメントの女にも、連続発火強盗のメンバーにも、逃げられて

しまった。

誰が、この事態を招いたか、隊長には心当たりがあつた。

「鳥男から連絡がありました……アイツ、俺たちと別れてから、七学区の自分の寮には戻ってないみたいですよ。行方を眩ましています」

部下の一人が、隊長に報告した。隊長は歯噛みした。

「自白してるようなモンだな……いいだろう」

隊長は、報告を上げた部下に顔を向けた。

「その部屋の扉に、適当に脅し文句を刻んどけ……見つけ次第、クスリで潰すぞ。奴は裏切り者だ」

「ですが、鉄雄様の意向は……」

「今、その鉄雄様とは連絡がとれねえだろうが」

隊長は苛立たし気に、部下に顔を寄せた。

「だから、今ここでのリーダーは俺だ。近くにいるメンバーに連絡とれ。夜の内に脅しとくんだよ！絶ッ^セ対逃^{テエ}がさねえからな、介旅のボウズ!!」

XII・ミヤコ

61

7月16日 午後——第七学区、警備員中央詰所^{アソチスキル}

「それで、君はどういう経緯で、あの廃ビルで見張り役をしていたんだ？」

「えっと……レベルが上がるっていうモノを、仕事をこなしたら売ってくれるっていうから。スーツケースを、別の人の車に積み込むだけだっけ聞いて、それで……」

「その『レベルが上がるモノ』の名前だが、次の言葉に心当たりはあるか？『ピーナッツ』『レベルアップ』『バケモンのおやつ』……」

「しつ知らないです。ほんと、ただ、レベルがすぐに上がる魔法みたいなモノがあるって、みんなの間でも噂になって……それがどんなのとか、名前はなんだとか、そこまでは」

「女子生徒の誘拐及び監禁をどんな手順で行ったんだ？」

「ほ、ほんと、あのビルに呼び出されるまで、まさかあんなことするなんて知らなかったんです！ほんとですよ！まず僕は誘拐してないし、途中から頭がパニックになって——！」

「落ち着いて話せ。君の関与度合いを聞いているんじゃない。見た事、聞いたことを言ってくればそれでいい」

「……あ、あのビルに入って、部屋に連れられて、そしたら、女の子が、倒れてました。それを、偉そうな幹部連中？が、僕に、手足を縛って、目隠しをしろって……こ、断れなかったんです！見たからには、やらなきゃ同じような目に遭わせるって。で、別のヤツが、ボトルに入ってた、ジュースみたいなものを飲ませてました。あ、あれは一体……」

「続けて」

「えっと、えと、それから、もう少し年のいったスキルアウトっぽい男たちが来て、その後……その後、客？だか邪魔？が入ったとかで、僕ともう一人のヤツがあのスーツケースを見張ることになって……『そいつは暫く動かないから安心しろ』って言われました。で、偉そうな

やつらは先にビルを出てつたんです。残った僕はケースを見て、でもそれが突然消えて……なぜか、中から出て来たあの子は目隠しも縄もしてなくて。だから、ただびっくりして。それから、すぐ蹴飛ばされて……あつという間だったから、痛いとかじゃなく、ほんと何が起きたのか。でも、僕が倒されて、あの子が風紀委員だったってことは、一件落着なんですかね？ああもうとにかく！どうか、学校には、親には知らせないで！僕は帝国とかいう連中と手を組んだつもりなんて全然……」

「下っ端も下の下のやつだな、これは」

アンチスキルの一人、工示は、ミラーガラス越しに取り調べの様子を観察していたが、ため息をついて傍にいる同僚へと向き直った。眼鏡の奥の瞳には、取調室と対照的に仄暗い室内とあつて、疲労の色が一層濃く浮かんで見えた。取り調べを受けているのは、マッシュルームカットの、肥満気味の少年だ。

「鋼盾掬彦……七学区の高校に通う16才、判定は無能力者。学級では目立たない存在。登校で大きく目立つ欠席・遅刻傾向は無し……僕が担任するクラスに、毎年必ず一人か二人はいるようなやつですよ」
工示の隣で、同僚である潮騒が、タブレットの画面を眺めて、つまらなそうに言った。

「連中のオツムがよくないってのは分かりました。テレポーター相手に、目隠しとお縄で通用するって思ってたんですかね。白井黒子の技量の高さは、有名じゃないですか。体に直に触れてりゃ、そんなもの意味ないのに」

「薬物を飲ませようとして無ければ、その分析は正しいがな。今回はなんの手違いか、無害なものだったらしいが。厄介な相手だと私は思う」

あ、そうか。と潮騒は呟き、ため息をついてタブレットのカバーをパタンと閉じた。

「罅が明きませんよ、工示さん。帝国絡みで、スキルアウト同士の小競り合い、強盗、暴行、加えて風紀委員^{ジャッジメント}までを狙い撃ちにした爆弾事件

……こちらら学期末だったのに。本部の総務の連中が何て言ったと思いますか？『成績つけ終わってるだろうからヒマだろ？』って！冗談じゃない、夏休み前の大事な時期に、無茶な自習計画を組んで駆り出される始末つすよ。大体、中央の連中がこういう案件は詰めるものじゃないですか？我々支部の人間がやる義理はないと思うんですが」

「それはどこも一緒だ。私だって不満さ」
工示は、取り調べを受ける鋼盾の様子を横目に、鼻を鳴らしながら言った。

「連れ去られたそのジャツジメントからの情報提供……『レベルアツパー』について、こいつは知らんようだ。そっちは他に何か聞いているか？」

「捕まえた奴によって言うことがコロコロ違うんですよ」

頭を振って、潮騒が答えた。

『レベルアツパー』だか『ピーナツ』だか、『かぜぐすり』だか名前は一致しない。それが一体何なのかと聞かれれば、カプセル型のドラッグだつて答える奴もいれば、飲み物だつてヤツもいる。果ては、気分を上げる音楽だつて言い張る奴も出る始末ですよ。川原の石の中からどうやって玉ぎよくを見つけ出せつて言うんです？」

「私に言われても困る」

にべもなく、工示は言った。するとそこへ、もう一人入室してきた。

「お話し中すみません。黄泉川さんから伝言です」

「何だ」

「103支部の科学班から、例の……アーミーのラボ製と思われるカプセルについて、第3次の分析結果が我々の支部へ届いたそうです……明日のミーティングの前に、工示さんに是非目を通して頂きたいと」

入室してきた者からの報告を聞いていた工示は、あからさまに機嫌を悪くした。片方の目尻が、ぴくぴくと神経質そうに動いた。

「黄泉川はなぜあのアーミーの落とし物にそんな拘る？今、私は奴らのことなど考えたくもない。つい先日だつて、発火強盗事件の犯人を無理やり連れてかれたばかりだぞ。目の前の事件を解決し、学生たち

を鎮まらせるに今は集中すべきだろうに……」

「103ってことは……ああ、職業訓練校のマキちゃんか！若いのによくやるねえ、彼女も」

苛々し気に話す工示の横で、潮騒が俄かに表情を明るくし、感心したように言った。

工示は、報告を述べた部下に対して疲れた顔を向けた。

「私はそんな解析結果に興味はない。いいか、黄泉川に伝えておけ。我々が今、何を第一に為すべきかを考えろと。兵隊連中の裾を踏んづけるようなマネをしている場合じゃないんだ。逆上せ上ったガキどもを何とかするのが最優先だろう」

「黄泉川さんが……大人しく引き下がるヒトじゃあないのは、工示さんもよくご存じでしょう？」

工示の後ろから、潮騒が肩を竦めて言った。

「アイツには、ミーティングで適当に発言させて、流して終いだ」

「まあまあ、工示さん。僕だって、アーミーの連中はいけ好かないですよ」

宥めるように潮騒が言ったが、工示はにこりとしなかった。

「ああ。だからこそ、余計なことは考えたくない。以上だ」

工示は、暗幕を背にして再び鋼盾がいる取調室の様子を覗き込んだ。

「ぼ、僕はただ……無能力者だからって、馬鹿にされるのが嫌で、だから、それで……」

取調官の前で、少年は頭を抱え項垂れていた。大きな体が、萎んで見えた。

夕方 —— 第七学区、とあるコンビニエンスストア

上条当麻は、嫌な予感がしていた。

そして、彼のそういった予感は、必ずといっていいほど現実の物となる。

「不幸だ」

上条の目の前のATMは、バチバチと音を立てている。機体の上部からは煙がツンとした金属臭を伴って噴き出ている。

この事態の原因は自分——ではない。と、上条は自分に言い聞かせた。

今もまさに、ショートを起こしている機械に拳を突きつけたまま、こちらを睨みつける少女のせいだ。

「無視すんなって言うてんの！ちよつとアンタ、聞いてる？」

エレクトロマスター

電撃使いらしいこの少女は、ここ最近、やたら自分に付き纏ってくる。なぜか毎回、自分への勝負を挑んでくるので、高位能力者に絡まれるのが本意ではない上条は、その度になんとかあしらっている。

しかし、今回はそれどころでない。痲癩を起こした少女が電流を纏って殴り付けたATMは、今にもきつとけたたましい警報を発するに違いない。上条は、少女を後目に後ずさった。

その時。

挿入口から、拍子抜けするような電子音を立てて、上条のキャッシュカードが吐き出されてきた。

「ま、マジか！よかったあああ！」

上条はカードを愛おしそうに指で摩り、大切に財布へしまった。

「ねえ、アンタ——」

「いやさあ！何度やっても暗証番号違いで弾かれちゃうし？そしたら今度は原因不明のエラーで、カードをパツクリ呑みこまれちゃうしさあ！これ無かったら再発行まで極貧生活まっしぐらだったぜ！お前の電撃に、今初めて感謝申し上げますよ！サンキュービリーブリー！」

上条は嬉しさのあまり、先ほどの悪寒も忘れて少女の両手を握り、ブンブンと縦に振った。少女は呆れ返っている。

悪い予感も、常に当たるとは限らない物だと、その一瞬、上条は幸せな気分浸れた。

数秒後に、異常電磁波を検知したATMが、苦悶の警報音をかき鳴らすまでは。

「ヤバいやバいつて！早く逃げなきゃー！」

後ろで電撃使いの少女が何か声をかけてくるが、お構いなしに上条は脱兎のごとく店外へ駆け出そうとする。

しかし、店の自動ドアを開けたところで、一人の人物が立ち塞がっていた。

「止まりなさい」

上条をそう言って制したのは、小柄な少女だった。

先程の電撃使いよりもさらに小さい。小学生と名乗っても違和感のない背丈だった。茶色い髪はまとまりがなくぼさぼさで、後頭部で中途半端に一つ縛りされている。学生街に似合わない、ズボンとシャツ共に真っ白という出で立ちだった。上条は無理やり少女を押しつけようとも考えたが、少女の右腕に付けられた物を見て、足が止まった。

「じゃ、ジャツジメント……」

口をぱくぱくさせる上条を、深緑の縞模様と、盾の形があしらわれた腕章を付けた少女が真っ直ぐに見つめた。

「店のATMが警報を……」

「待って！待ってください！あれは、あのビリビリ中学生の仕業で、俺はただカードを取り戻したくて——」

「詳しい事情は、移動先で聞く」

少女が指さした先に、車が一台停まっている。

アンチスキルの車に違いない。最近は、ジャツジメントとアンチスキルが連携を強化していると上条は耳にしていた。上条の胸に、重たい不安が押し掛かった。

「あの、事情聴取ならアイツだって——」

「そちらなら、仲間が既に」

ジャツジメントの少女が上条の背後を見やったので、上条も振り返った。

店内では、戸惑った顔をした店員と、慌てた様子で何かをまくし立てる電撃使いの少女に対し、もう一人の腕章をつけたジャツジメント

が話を聞いていた。体格のいい黒髪の少女だったが、なぜかこちらも上下共に白装束だった。

「こちらへ来なさい。上条当麻」

なぜ、自分の名前を知っているのだろうかと思ったが、これからアンチスキルにこっぴどくお世話になるのだという絶望感が、僅かな疑問を押し流すのに十分だった。上条は、小柄なジャツジメントに言われるがまま、コンビニのすぐ脇の路肩に停められた車の後部座席に乗り込んだ。

「お疲れ、サカキ」

上条は目を丸くした。運転席からこちらに声をかけたのは、大人のアンチスキルではなく、これまた白装束の少女だ。車を果たして運転できる年齢なのだろうか、パーマがかかった金髪を振り向かせ、ややふっくらした顔を向けてくる。

「ありがとう、モズ」

「ミキは？」

「すぐ来る」

助手席に乗り込んだ、まとまりのない髪の少女と、運転席の少女が短く会話している。

「あのー、これって、アンチスキルの車じゃ……」

先ほどまでの絶望とは別の違和感を覚えた上条が口を開いたが、横から大柄な人物が勢いよく乗り込んできたので、途中で黙った。ついさっきまで、店員やビリビリ中学生と話していた仲間だ。

「行こう」

サカキと呼ばれた少女が言うと、モズと呼ばれた運転席の少女が車を発進させた。

上条の隣に座る屈強な少女は、じろりと視線を上条へ向けてくる。その鋭さに、上条は一度唾を飲み込んだが、我慢しきれなくなつて再び口を開いた。

「なあ、教えてくれよ。お姉さんたち、アンチスキルじゃないだろ？全員ジャツジメント？こんな車で、俺をどこへ連れてく気……」

「上条当麻」

まとまりのない髪をした少女、サカキが、助手席から振り返って上条の名を呼んだ。

一切の親しみが無い、無機質な声に、上条は背筋をピンと伸ばした。「ミヤコ様が、お前に会いたいと仰せだ」

上条の伸びた背筋に、再び悪寒がぞくりと走った。

「なあ、俺をどこへ連れてこうってんだ？アンチスキルのところへ連れてくんじやないなら、何が目的なんだ？」

発進してしばらくたった車内で、上条が訝しんで聞く。

「……やっぱ無視ですか」

車が動き出してからずっとこの調子だ。同じ質問を既に何度かしている。上条ははじめ、コンビニのATMが壊れた件について事情聴取のために連行されるものだと思い込んでいたが、すぐに様子がおかしいということに気付いた。車はとつとつに学生街から遠ざかり、バイパスを走り、学園都市の東部郊外へと差し掛かっていた。土地の広さを利用した、ショッピングモールやアミューズメント施設、工場団地が多い第六学区だ。空はすっかり暗くなり、建物や街灯が放つ夜光によって雲が灰かに照らされている。

同じ車内にいる3人の少女は、ほとんど喋らない。音楽もラジオも何もかかっていない車内では、すれ違う車のエンジン音が時折響くだけだ。3人が上条に対して反応しないだけではなく、3人の間でも会話が生まれない、というのが不気味であり、白装束という外見も相まって、上条はどうしようもない居心地の悪さを感じていた。

居た堪れなくなり、上条は咳払いして、口を再び開く。

「もしかして、誘拐ですか？けどよ、俺は何の変哲もない貧乏学生でしてね。揺すったって、割引の総菜買うだけの金だって怪しいもんでしてね——」

「あのATMは」

助手席に座るサカキが突然答えたので、思わず上条は肩を震わせた。

「学園都市に普及しているモデルの中でも旧世代型だ。しかし、平均的価格はおよそ300万円。器物損壊は親告罪であるから、店舗側との示談交渉の如何によっては——」

「待て待て！待ってください！突然喋り出したと思ったら、何ですか！」

上条は、機械が再起動したように喋り続けるサカキを慌てて遮った。隣に座るミキがじろりと上条を見やった。上条は憤慨して反論する。

「言ったらろー！あれは、ビリビリ中学生がやったことで、俺はただ巻き込まれただけ……」

「機械の前で相手とトラブルを起こしていただろう」

顔を少しも向けずに、サカキが冷たく言う。

「であれば、お前も無関係ではない。御坂美琴の責任の方が大きいだろうが」

「……あのビリビリのこと、知ってるんだ？」

「名の知れた電撃使いだ」
エレクトロマスター

なら、なぜ自分の名を知っているのか、と上条は聞こうとしたが、それについては先程から何度もまともに答えてもらっていないので、出かかった言葉を飲み込んだ。

「なんだよお……せつかくカードが戻って来たっていうのに、弁償しなきゃだなんて……」

「そのカードに期待しない方がいい」

「へ？なんで？」

サカキの言葉に、頭を抱えていた上条は顔を上げた。

「御坂美琴の電撃は強力だ。旧モデルとはいえ、学園都市製のATMにエラーを起こさせる程に」

「だから何だよ？現にこうして手元にカードが——」

「その電撃を受けた機械の中にあつたカードが、まともに使えると思うか？」

「……マジか」

上条はいよいよお手上げだった。確かに、機械から吐き出されたカードは、磁気情報やら何やらが色々と狂ってしまっているだろう。いよいよ砂を噛む生活を覚悟しなければいけないようだ。

「……で、喋ってくれたから、もっかい聞くんけど」

上条は、金銭のことを頭から振り払うために、せめて話題を変えようとした。

「アンチスキルに引き渡すのに、こんな長い時間車を走らせる必要はないって、俺にだって分かる。一体どこへ連れてく気なんだ？」

また、サカキも他の2人も黙っている。上条は、車に乗り込んだ当初に、サカキが言った言葉を思い出した。

「み、ミヤコ様って言ってたよな？」

「「ミヤコ様は」」

3人が急に同時に喋り出し、上条はぎよつとした。

「「我らを導く。流れを見定める。我らは流れの中にあり、力は流れを押し留める」」

「……え、どういう……」

上条は、唐突に唱和した3人の言葉に戸惑った。

その時、車が信号徐々に減速し始めた。上条は、フロントガラスの向こうへと目を凝らした。赤色灯がいくつか見える。

「……検問？アンチスキルか？」

「違う」

答えたのは、車を運転するモズだった。

「アーミー」

その声には、明らかに警戒感が滲んでいた。

「ご協力感謝します！」

きびきびとした口調でアーミーの一兵士が言う。開けられたパワウインドウから覗かせた顔には、四角い縁の眼鏡をかけていた。

「現在、暴走族及びテロへの対策として、特別警戒中です。免許証の提示を」

運転席に座るモズは、黙って求められた物を提示する。

上条が乗せられた車が停まったのは、工業団地真っ只中の、大型車両が多く利用するであろう、大きな交差点だった。上条達から見て右左折はできないようで、直進のみ、一台ずつ通しているようだ。信号は停められており、代わりに電光板を点けたトラックと誘導灯を手にした兵士たちによって交通整理されている。運転席のモズを始め、3人の白装束の少女は一樣に緊張しているように見える。上条は、自身

を不当に拘束しているという負い目があるからなのかと疑った。となると、この3人はやはりジャッジメントではないのか。上条がそわそわしていると、隣から脇腹の辺りを小突かれた。

「妙なことをするな」

上条の隣に座る、険しい顔つきをしたミキが囁いた。彼女が単独で喋ったのを聞いたのはこれが初めてだ。上条は唾を飲み込んだ。

「……随分お若いんですね。こんな夜にどちらへ？」

「それを聞くのは野暮ってもんじゃない？ 兵隊さん！」

突如、今までの雰囲気にくぐわぬ快活な声を運転席のモズが上げたので、上条は驚いた。

「この、後ろの彼！ イケメンでしょ？ あたいたち、これから4人で楽しもうって訳！」

「あ、ああ、そう……」

アーミーの兵士は面食らったように言葉を詰まらせた。彼がちらりと視線を向けた先には、鮮やかな色彩に雲を染め上げる一画がある。確か、あちらには歓楽街があった筈だ。

隣のミキが、仁王のように眉間に皺を寄せていなければ、上条の気分は揺れたかもしれない。顔は窺えないが、助手席のサカキもきつと同じような表情をしていることだろう。モズの言葉は明らかに偽りで、上条は少しも気が休まらなかった。

「……ほどほどにね、嬢ちゃんたち」

「そっちこそ、ぐっ苦労オサマー！」

モズが金髪を揺らして努めて明るく答えた。アーミーの兵士は、想像していたよりも柔らかい物腰で、免許証をモズに返した。

「一台ずつ通します、合図があったら、徐行してお通りください」

「あつ、あのー！」

上条は我慢しきれなくなつて、口を開いた。サカキとミキが鋭い視線を上条に向けた。

「お、俺、よく分かんないけど、この子たちに連れ去られて」

「えっ？」

閉じかけていた窓の向こうで、兵士が目を丸くして振り返るのが見

えた。

「オイ、お前！」

隣のミキが唸るように言った時、突如、辺りに唸りを上げて排気音が響き始めた。

兵士たちが俄かにざわついた時、ボンという重苦しい破裂音と共に、突如前方で火の手が上がった。

上条も、サカキもモズもミキも、黒煙と炎が上がる方を見た。燃えているのは大型の輸送トラックらしいことが、火が描く輪郭から見て分かった。アーミーの兵士達が素早く展開する最中、迫る排気音と共に、怒号のような、やたら甲高い叫び声が混じって聞こえる。

「テロ？もしかして、ゲリラ？」

「違う、あれは……『帝国』！」

上条が戸惑って漏らした声に、サカキが切羽詰まった声で答えた。

目の前で突然、交差点の横方向から暴走集団バイカーズが乱入し、アーミーの検問部隊に対して襲撃をかけ始めている。アーミーは、火の手が上がるトラックを丁度中心にするように、円型の防衛陣を敷こうとしている。しかし、反対方向からも挟撃されているらしく、混乱している。腐れ兵隊共!!という叫び声が上がった。バットだかバールのような得物を手にした奴が、背中に火の点いた一人の兵士を、近接するや否や殴りつけているのが、上条の目に入った。上条の乗る車の後方にも既に待機の列が出来ていて、各々がパニックを表すかのようにクラクションを鳴らしているが、退避しようにもお互いが邪魔で身動きが取れずにいる。

「交戦事態が発生しています！市民のみなさんは、直ちに車を降り、避難してください！」

アーミーからの呼びかけが拡声されて響き渡る。それが聞こえるかどうかのタイミングで、上条たちの乗る車が突然衝撃を受けて揺らされ、今度は車内にけたたましく嘯りのような警報音が鳴り響いた。後方から追突されたらしい。

「どうする！サカキ！」

「モズ！私が道を空ける！突破できる？」

「や……やってみる！」

3人の白装束の少女たちは、早口に言い合う。運転席のモズが素早くボタンをいくつか操作すると、まず警報音が止まった。

「え、やってみるって……？」

上条の呟きをよそに、モズはアクセルを踏み込んだ。車がカラーコーンを蹴散らして急発進する。目の前では、炎を背にアーミーとバイクが入り乱れている。

まさか、撥ねていく気か。上条は背筋が寒くなるのを感じた。

助手席のサカキが前方に向かって片手を突き出すと、車の進行方向に突風が吹き荒れた。バイクのバイクやら、格闘する人影やらが、一緒くたになって吹き飛ばされていく。それによって現れた間隙を、モズの運転する車が通り抜けていく。

「いいぞ、このまま——」

モズが声を弾ませた時、不意に上条を含め、皆バランスを崩した。どう言う訳か、車が前方へ傾いている。そんな、ここは平坦な道の筈

——上条は顔を窓の外へ向けると、そこには驚愕に目を見開いたアーミーの一兵士の顔があった。

様々な物が宙に浮いていた。アーミーの車両、ひしゃげたバイクのバイク、破壊されたバリケード、そして人。兵士も、襲撃犯らしき身なりの若者もいた。そして、上条達が乗る車も、先ほどまでの推進力を奪われ、地面から浮上していた。

上条は、窓外のいくつもの物影の向こうに、一人の男を見た。

その男は、上条と同じ位の少年に見えた。巨大なバイクに跨り、足で地面を支えてもいないのに静止していた。腕組みをし、こちらをまっすぐに見据えている。夜風が炎を揺らめかせ、その顔が照らされる。黒髪を後方になびかせ、広い額が露わになる。上条は、鋭く眼光を放つ目を見た。その目は、自分に向けられているような気がした。

「アイツが、41号……！」

サカキが、震えた声で呟くのが聞こえ、上条は我に返った。不安定な車体の中、バランスを崩した拍子に、上条は右手でアシストグリップを掴んだ。すると、今度は急に上条達の乗る車だけが重力に従って

落下し、叩きつけるような衝撃が襲ってきた。

「今だ!!」

モズが叫ぶと同時に、車は力を取り戻し、一目散に炎から逃げ、闘争の現場から走り去る。

何だったんだ、アイツ。

上条の脳裏には、獲物を射貫くような少年の目がやけにこびりついていた。車が落下した時に噛んだのだろうか、口内で血の味が滲んだ。

一台の車が逃げていった。自分の力を、あつという間に縄抜けするように逃れていったのを、島鉄雄は感じていた。

舌打ちをして、鉄雄は前方へ向けていた力を緩めた。浮遊していたヒトもモノも、雪崩を打つようにしてアスファルトに落下する。その中には、鉄雄が率いる帝国の連中も幾人か含まれているが、気に留めなかった。

「気に入らねエな」

鉄雄は、代わりに一人の人間を、念動力で自身の元へ引き寄せた。自分の近くで倒れていた、アーミーの兵士だ。四角い縁の眼鏡が割れ、顔面は血で染まっている。

「待つ、待ってくれえ!」

爪先が地面につくかつかかないかの状態で、その兵士は鉄雄の力によって徐々に首を締め上げられている。兵士は苦悶の声を漏らした。

このまま、窒息させるか、首をへし折るか。そうすれば、アーミー共にも、幻想御手目当てで付いてきたバカ共にも、もつと自分の力を示せる。鉄雄はそう考えながらも、不意に別の言葉が頭をよぎった。

(できるだけ、人を傷つけないでくれ)

「……先生。アンタの言葉がなんでだか、離れねえんだよなア」

鉄雄は、兵士を掴み上げていた力を抜いた。兵士は鉄雄の目前に、膝から崩れ落ちる。

「全員、動くな！」

スपीカー越しの怒声が響き渡り、投光器からの眩しい光が自身を照らした。

「武器を捨てて、腹這いになれ！警告に従わなければ、発砲する！」

増援だ、どうします!?と、仲間の誰かが喚いた。

鉄雄はつまらなそうにため息を一つつくど、手を挙げた。

すると、周辺のアスファルトが、ザラメの様に砕け散り、地面が隆起する。投光器が傾き、バリバリと音を立てて光を失った。

「……もういい、引き揚げだ」

周りのメンバーが何事か言う前に、鉄雄は自身が跨るバイクを力で操り、Uターンして走り始めた。

炎は未だ燃え続け、夜空に火の粉を散らしていた。

——第六学区、工業団地内幹線道路

「礼を言う」

「えっ?」

アーミーと帝国との交戦に巻き込まれてから、再び走り出した車内の中で、サカキが唐突に口を開いた。上条は目を丸くした。

「帝国」——41号と遭遇するのは想定外だった。アーミーばかりを警戒していたが、あれ程まで強大な能力を行使するとは、予想以上の仕上がりだ」

「41号って、あの、なんかバイクに跨ってた奴?」

車が浮上した時、じつとこちらを獣のような目つきで捉えていた少年のことを、上条は思い出した。両足をつけずに、なぜ静止状態で直立していられたのか、周囲が騒乱状態だった中で、彼の姿だけが、写真を切り抜いて貼り付けたよう、上条にとっては不気味だった。

「けど、俺、礼を言われるようなことはなんも——」

「右手で、41号の念動力テレキネシスを打ち消したろう」

サカキが発した一言に、上条は一瞬言葉を失う。

「……知ってるのか?」

上条は、膝の上に置かれた自分の右手をちらりと見やった。

「無能力者レベルであり、全ての異能を打ち消す幻想殺イマジンプレイカーしたる、上条当麻」

サカキが、ヘッドレストの脇から、幼い外見の横顔を覗かせて、上条の名を呼んだ。この車に連れ込まれてから、彼女が顔をこちらに向けたのは初めてのことだった。

「お前のその力を、ミヤコ様は見込まれた。我々はお前を、ミヤコ様の元へ連れて行く」

ミヤコ様。再び挙げられたその名を、上条はどこかで聞いた覚えがあった。

操業を終えた工場の敷地内にある広大な駐車場に、バタバタとけた

たましい音を立てて一台の輸送ヘリコプターが着陸した。地上の投光器から投げかけられた光が、機体の後部ローター付近にあしらわれている2つの盾と桜が重なり合った紋章を映し出した。

地上で待機していた部隊の責任者が、期待から降りた人物に駆け寄った。

「大佐！」

「被害状況は」

「はっ、暴走集団^{バイカーズ}の輩を12名拘束しました。内、4名は負傷していますが、8名は——」

「被害だ。こちらの損害を聞いている」

顔を少しだけ部下に向けながらも、歩みを止めずに大佐が言う。報告を行う部下は、大股の大佐に歩調を合わせようと小走りになった。

「はっ……8名負傷。内3名は自力で立てません。1名は、全身に火傷を負い、緊急搬送されています。また、2tが1台、1/2tが3台大破しており……」

大佐が足を止めた現場は、数十分前にアーミーの警備隊と帝国が交戦した場所だった。既に火は消し止められているが、路上に散らばる様々な色のガラス片や、細かな車両部品、微かに漂う焦げた匂いが、戦いの跡を残していた。眉間に皺を寄せた大佐が、口を開いた。

「それ程の被害を……襲撃してきた奴等の中に、能力者は？」

「画像は不鮮明ですが、隊員の目撃情報や、拘束した襲撃犯からの自供によると……例の手配中^{ナンバーズ}の実験体が紛れ、能力を行使したようです。その……非常に強力な」

大佐は、現場から少し離れた所にブルーシートを張って設けられた、間に合わせのテントへと歩み寄った。

そこでは、半身に痛々しく包帯を巻かれた隊員が横たわっていた。隊員は、大佐の姿に気付き、片腕で体を支え、起こそうとする。

「大佐……！」

「よせ。そのままがいい」

大佐が手を挙げて制した。しかし、片手を地面についた隊員は、頭をもたげ、黒煤に塗れた顔を大佐に向けて、はつきりと喋った。

「見ました……奴です。41号が、島、鉄雄が……奴は、火の手を巻き上げ、まるで旋風を吹かせたように、我々を、車ごと持ち上げたんです」

「確かだな？」

「奴は、バイクに跨って、ただこちらをじつと、見ていました……じつと、見ていたんです。あれは、間違いなく、奴です……！」

「ご苦労だった、と声をかけ、大佐は目を暫く瞑ると、簡易テントを後にした。」

大佐は、付き従う部下に向かって指示を飛ばす。

「ラボのドクターに連絡をとれ。この学区を中心に41号の反応を走査スキヤンさせるのだ」

「分かりました」

テントから離れた所で、ふと大佐は足を止めた。

「拘束した連中を片っ端から尋問し、奴等の根城を吐き出させろ。少々手荒な手段を使っても構わん」

「はっ！」

「何としてもだ」

大佐が、自分の背丈ほどに隆起し、地震の爪痕の如く割れ砕けた道路を睨みつけて言った。

「41号を捕まえるのだ。アンチスキルに先を越されてはならん。我々の手で始末をつけるのだ」

夜 —— 第一二学区

学園都市の東端に位置する一二学区には、神学系の学校が集中している。月曜日の夜とあって、人通りは少なく、上条が乗る車が走る通りも閑静な雰囲気纏わせている。夜空にぼんやりと黒く浮かぶ建物のシルエツトの中には、東西の様々な宗教を思わせる佇まいの物があり、上条の住む第七学区との違いを主張していた。

上条は、車窓の外に、一際高く聳え立つ塔を見た。それは電波塔のように高さの割に細長く、先端は鋭利だった。塔の道路側に向いた一面には、円と、円から蜘蛛の巣のように走る幾つもの筋が刻印され、才

レンジがかつた光でぼうつとライトアップされていた。それと似たロゴを、上条は街中で目にしたことがあった。確か、近年急激に信者の数を増やしているという、新興宗教団体の用いる印だ。

車は、荘厳な2対の門柱の間を抜け、塔が立つ敷地内へと入って行く。嫌な予感がした上条は、隣のミキへと顔を向ける。

「あの、もしかして、俺をわざわざこんな学園都市の端まで連れて来たのは、宗教の勧誘ってことはない……よな？」

厳めしい面立ちのミキは、黙ったまま鋭い目を上条に向けた。上条はそれを、否定だと受け取ることにした。

車はやがて、駐車場の一面に止められた。

「降りろ」

ミキが短く言葉を発し、上条は従った。

駐車場では、少女達と同じく白装束を身に纏った大人が数名待機していた。しかし、サカキ達とは異なり、僧帽を被っていて、きつと剃髪しているのだろうと上条は思った。

「ご無事で何よりです、皆さま」

僧の一人が、目を伏せて言った。

「ミヤコ様が、拜殿でお待ちです」

サカキは軽く頷くと、上条に視線を送った。

「来い」

「ほんとうに勧誘なのかな……」

上条が呟くと、ミキが背中を強めに押した。上条は唾を飲み込んでから、サカキや僧達の案内に従い、建物の中へと入って行った。

夜間とあって、上質な木造の拜殿内に、一般の人の姿は見当たらなかった。上条を囲むようにして、白衣の者たちは無言で歩いていく。床板を踏みしめる一団の足音だけが響いた。

「上条殿」

やがて一団が足を止め、僧の一人が静かに呼んだ。

「ミヤコ様は中に居られます。さあ」

僧達も、サカキ達3人の少女も、皆顔を伏せている。上条は一呼吸置いてから、案内された扉の中へと入った。

広大な間だった。上条から見て向い側の壁一面に、太陽の様に光を
発する、巨大な浮彫レリーフがあつた。それは、ここを訪れる前に車窓から目
にした、塔に刻まれた物と同じだと、上条は気付いた。

その浮彫を背にして、一人の人物が鎮座していた。

「上条当麻……よく来たね」

しわがれた声が、上条へと届いた。

——アーミー本部、ラボ

「さつきから風潰しに探してるがね……これはどういうことだね」

初老の研究者が困惑したように言った。丸眼鏡をかけ、鷺鼻が目立つ顔立ちだ。前頭部は剥げ上がっており、それと対照的に後頭部にはライオンの鬣のような白髪が広がっていた。

「41号の色調は#191970 “ミッドナイトブルー”だ。で、それだけならまだいい。……振動数、振幅、周期、それら全てが一致する波長が何件検出されたと思う？8件だぞ！それも、六学区の、この30分間に限った話だ！」

プリントアウトされた紙束をバサバサと片手の平に打ち付けながら、鷺鼻の研究者が言った。

「いくら、この街に180万人の能力開発途上の若造がいるからといって、この異様な近似の検出率の高さは納得しかねる。基準値に誤りがないかチェックするべきでは？」

「いや、……これは、大佐に申し上げていないことなんだが」

隣で顎に手を当てて思索していた大西が、口を開いた。

「41号が行方不明になってから、当然、スキヤンは行つたさ……するとだな、今こうして起きていることと同じように、似通つた波長が多数見つかつていたんだ。ちょうど、10日……41号が脱走した日からな。しかも、検出率は日に日に高まっている」

「信じられん」

鷺鼻の研究者は、苛立たし気に紙束をデスクに置き、懐に手を突っ込んで、中をまさぐる。煙草を取り出すと、忙しなく火を点け、吸い始めた。大西は何か言いたげに口を開いたが、結局何も言わなかった。

「能力行使時の波長の揺らぎは、指紋と同じだ……こうも頻繁に同じパターンを、違う場所で同時多発するなど、あり得るか？それとも何か？幾つもの脳ミソをリモートで操つているとでも言うのか？セミに宿る病菌じゃあるまいし。まあ噂じゃ、7人の超能力者^{レベル5}の中には、

そんな芸当をやつてのける奴がいるらしいがね……」

「……遠隔操作か……」

同僚が紫煙をたつぷり空中に吐き出したが、大西は気にする素振りもなく、考え込んだ。

(木山春生……一体、島鉄雄に何をした？それとも……この街に何か仕掛けているのか?)

その時、分析室のドアが外側から数度ノックされ、2人の研究者は振り返った。

「失礼します」

入つて来たのは、黒服にサングラスを身に付けた男だった。大西には、彼が敷島大佐によく付き従っている男だと覚えがあった。

「特務警察が、こんな所に何か用かな？」

「ええ。あなたにお話ししたいことが。Dr. 大西」

「私に？」

大西は目を丸くした。

「また大佐から何か指示が？」

「……込み入った話です。来て頂きたい」

黒服の男、門脇は軽く頭を下げる。

「……まさか、特務警察に何か目を付けられることでも？」

タバコの煙をひとつ吐き、鷲鼻の研究者が冗談ぽく言った。

「まさか！しかし、一体……」

大西がやや狼狽した様子を見せた。門脇はそれを見て、サングラスの奥の目を少しだけ細めた。

——第一二学区、ミヤコ教団 拝殿

「待っていたよ」

「……あなたが、ミヤコ、様？」

上条が問うと、上段に座る老婆は僅かに頷いた。

奇妙な外見の人物だった。頬のすつかり垂れ下がった、皺だらけの顔はかなりの年齢を感じさせる。しかし、雛人形の大垂髪おすべらかしのようにきつちり結び上げられた黒髪は豊かで艶やかだった。上品な和装を

身に纏い座っているが、それでも小さな体だということが分かる。丸い黒色のレンズの眼鏡をかけているが、上条にはサングラスのようにも見えた。レンズの奥の目は、窺うことができなかつた。

「ええと……一体何の御用で？ 宗教とか、失礼ながら、毛先程も興味がない、のですが……」

相手の目線が窺えない上に、ミヤコは顔を下に向けていて、表情もなかなか見えない。上条は、相手の反応を探りながら、ゆっくり話した。

「まあ、よく来てくれたよ。上条当麻」

とてもゆつくりと、ミヤコは話す。久しぶりに訪ねて来た孫を出迎えているかのようだが、突然訳も分からず連れて来られた上条にとつては要領を得なかつた。

「あー、……お嬢さんたちに半ば拉致されたようなもんなんですけど。あの子らは、ジャツジメント？ 途中からそんな風には思えなかつたけれども」

「ああ……話は聞いているとも。途中、バイカーズの若造らとアーミーの小競り合いに巻き込まれたそうだね」

「いや、あれは小競り合いってレベルじゃなかつたような」

上条の反応が面白いのか、ミヤコはくつくつと僅かに肩を震わせながら笑った。相変わらず表情が見えず、声だけが聞こえるので、上条は寧ろ不気味に感じた。

「だが、お主らは息災だろう。お主自身の、その右手の力によって、41号の手から逃れさせた」

やはり、この人も知っている。上条は少し顎を引いた。

「……あの女の子たちといい、あなたといい、どうして俺のことを？ 何が目的なんだ」

上条の警戒心を滲ませた問いに、ミヤコは色とりどりに重ねられた袖を揺らした。

「いずれ来る流れの淀みをの、引き戻してもらいたいと思うてな」

「……流れ？ 淀み？」

上条が聞き返したが、ミヤコはただ首肯した。

「この学園都市では、至る所で能力の開発が行われておる。お主らが受けとるのは……そう、『カリキュラム』だったか」

昔話を思い出すかのように、再びミヤコが訥々と語り出した。

「生徒が180万人。その内少なくとも4割が、レベル1以上と聞く……わしらの時代のより、よほど賢くやっておるようだの」

「時代って……」

上条には、ミヤコの物言いに引つかかる所があった。

「あなたは、能力開発を受けた人？」

上条の疑問に、僅かに笑みを浮かべてミヤコが答えた。上条には、自嘲しているようにも見えた。

「お主らに比べれば、遙かに原始的よ。血管よりも細いガラス管にな、こう、塩水を通して……電気信号を与えるのよ。脳細胞に、何度も、何遍も……そうして、遺伝子の変異を待つ……」

「いや、物は言いようだけれども、多分、あなたの時代と、そう変わってないことをやっているかと思えますよ。俺達」

上条の言葉は謙遜でもなんでもなく、本心だ。「暗記術」や「記憶訓練」を名目に、その実、人体実験といえるものを、学園都市の教育機関はしよつちゆう行っている。脳へ至る血管に薬物を注射することは、時間割りで珍しいことではないし、頸部への電気刺激も上条は経験したことがあった。それが、合理的な手法の一つだと、学園都市では合意されているのだ。

「ただ、失礼なことを申し上げますが……あなたのような、お年を召された方が、昔能力開発を受けていたってのは、初めて聞いたけれど」
「そう気を使うな、若人よ。何せわしは、一度死んだ身なのだから」

目の前の老婆は、果たして、輪廻転生の話でもし出すのだろうか。上条は、やはり宗教的な説法を延々と聞かされるのではないかと心配し、咳払いした。

「話を元に戻しますがね。こんな月曜初っ端の夜から、俺をここに連れてきた理由、あなたやあの女の子たちの目的を教えてくださいたいんですよ」

「すまんの……色々なものを目にしてきたのだ、老いた身は、時の流れに無頓着になるでの」

ミヤコは、ゆっくりと顔を上げて、上条と初めて顔を合わせた。御座の両脇には灯籠が立てられ、そこには炎が暖色の明かりを揺らめかせている。眼鏡の黒いレンズが、炎の明かりを受けて、一度煌めいた。「もつとも……噂通り、お主の見る世界を覗くことはできんな。霞がかっておるわ」

上条は、ほんの僅かピリツとした静電気のようなものを感じ、右腕に一瞬目を落とした。

「……あなた、その目は」

「ああ、とうに盲いておるよ。 齡十の頃からな」

ミヤコは、皺の深く刻まれた片手で僅かに眼鏡に触れた。

「もつとも……それ故に見える世界があるというものよ。人は、誰しも触媒としての力を秘めておる。わしは、触媒となる者の眼を通し、世の中を見渡しておる」

「それが、あなたの持つ能力という訳か」

「……そう、それも一つよの」

上条はミヤコの言葉に首を傾げた。脳へかかる負担の大きさを鑑みて、一人の人間が持てる能力は一つだけである筈だ。義務教育でも習う、上条達学生にとつての常識だ。

「……その娘たちはな」

上条が疑問を言葉にする前に、ミヤコが話を続けた。

「わしの代わりに手足となり、よう動いてくれる。ほんに、善き娘たちよ。」

気配を感じた上条が振り返ると、いつの間にか斜め後ろに3人の白衣の少女たちがいた。ミヤコに向かって跪き、頭を垂れている。

「彼女達は、あなたの配下なのか？ ジャッジメントではなく？」

「ジャッジメントであることに偽りはないとも。ここの附属の学園の、所属生としてね。まあ、わしの命で、規定をほーんの少し飛び越え、方々の学外で働いてくれるがね。感謝しておるよ」

上条の後方で、サカキ達が呟くような声で「もつたいないお言葉」な

どど口にした。

「じゃ、俺をここまで連れて来たのは、越権行為って訳じゃんか」

上条は皮肉を込めて呟いた。

「そうまでして、何が目的なんだ？」

「そうよのう……サカキ」

ミヤコから名を呼ばれたサカキが、姿勢を一段と低くした。

「41号の力を、お前達は目にしたであろう。どう思うか？」

「はっ」

サカキがきびきびと返事をした。

「ミヤコ様の仰せの通り、油断ならぬテレキネシス念動力の使い手であると」

「遠慮はいらんよ、サカキ」

ミヤコはサカキの方へ顔を向け、言葉を被せるように言った。

「正直に申してみい」

「……強大な力だと存じます。恐れながら、兼ねてより伺っていた、ミヤコ様のお見立て以上に……あれは本気ではないように見えました。憚りながら、我ら3人が束になってかかっても、勝てるかどうか」

サカキの言葉に、更に後ろに控えるモズとミキは口を挟まなかった。

「うむ。……のう、上条当麻」

サカキからの報告を受け、ミヤコが再び上条へと顔を向け、上条も向き合った。

「41号という少年は、わしが得た知見によればの。お前達学生とも、統括理事会下のプロジェクトとも異なる場で能力開発を受けた者。わしは、防衛省の管轄による所だと見ている」

「防衛省？」

上条が聞き返した。

「この学園都市は、半分治外法権みたいなもんで……防衛省が自分の手で能力開発をしているなんて話は、聞いたことがないけれど」

「おるだろう。お主も今宵、出会った者たちだよ」

外から。ミヤコの言葉に、上条はこの7月初めに、奇妙な子どもを手助けしたことで、軍隊と対峙したことを思い出す。

「アーミーが？」

「おう。奴等も研究所ラボを持つておるのよ。それは決して大きくなく、細々としたプロジェクトじゃが、歴史は長い」

「でも、なぜそうと分かるんです？」

「……わしも、そのプロジェクトで力を開発された者だからの」

ミヤコはそう言い、手首にかけていた数珠をじやら、と鳴らした。その時動いたミヤコの右の掌に、紫色のゴシック体で「19」と描かれているのを、上条ははつきり目にした。入れ墨だろうか。

「お主は、その右手に『幻想殺し』を宿しておる。かねてより噂で耳にはしておった。それが、図らずもサカキ達の眼を通して、わしも見ることができたよ」

「あの、先ほどから話を聞いていると、思い当たるんですが」

上条は、このミヤコという老婆が何を自分に頼もうとしているのか、何となく予想がついていた。

「あなたたち教団は、その41号っていう能力者を何とかしたくて……もしかして、そのために俺に力になれと？」

上条はブンブンと首を振った。

「冗談じゃない、嫌ですよ！こちとら、アーミー絡みではいい思い出がなくてですね！そうじゃなくても毎日のように、不良やらレベル5の女子中学生やらに絡まれて、妙ちくりんな右手が1本あるうが10本あるうが、いつマジで怪我するかってヒヤヒヤしてんだから！それに、念動力相手じゃあ、トラックでも何でも投げ付けられたら、俺は一発でペしゃんこだよ！不幸は向こうから問答無用でやってくるんだから、頼まれてまで引き受けたくはないです！」

「おい！お前！ミヤコ様の御前で失礼を！」

後ろからサカキが窘めたが、嫌な予感が募り、構わず上条は一気にまくしたてる。何とかここから脱出したいとの思いが強くなった。

そんな上条の焦る様子を見て、ミヤコはやや身を乗り出すようにした。

「いや、41号はきっかけに過ぎぬ」

記憶から思い出を引つ張り、懐かしむようだったミヤコの声色が、一段、厳しいものになった。

「げに恐ろしきは……28号よ」

「28号？」

「ああ」

ミヤコの眼鏡の奥から、視線が鋭く自らに刺さっているのを、上条ははつきりと感じた。

「上条当麻。お主がもうすぐ立ち向かうであろう相手は、28号……アキラだ」

アキラ。

ミヤコが口にした名を、上条は静かに反芻した。

——アーミー本部、ラボ

「それは……私に、大佐を裏切れということかね」

大西はおどおどと視線を動かしながら、声を潜めて言った。

特務警察の門脇に呼び出され、2人は研究所の一面にある給湯室で話し込んでいた。

「大西博士。あなたはベビールームの3人のナンバーズのみならず、『アキラ』の科学的価値を常に高く評価されてきた」

サングラスをかけた門脇が語る。

「今、統括理事会では、あなたの研究へこれまでになく熱視線が注がれているのです。これは、あなた自身のキャリアの大いなる転換点となる、またとないチャンスです」

「それは……」

「対して、防衛省や財務省の能無し共はどうです？あなたを厄介扱いし、こんな古びた研究所に押し込め、予算は氷柱から滴る水だ。東京の最高幹部会の奴らが、円卓を囲んで何と言っていると思います？アキラは『氷漬けのミイラ』、ベビールームのナンバーズに至っては、『薄気味悪い保育園児』だと。博士！このままここで燻ぶっているおつもりですか？」

「確かに、私は……いや、しかしだな」

大西は、門脇の言葉に思う所があったらしく、骨ばった顎に手を添えて考え込む。

「役人達に言いたいことは山ほどあるさ、そりゃあ。だがね、大佐は私の研究に理解を——」

「41号の研究についても、そうお思いですか？」

門脇の一言に、大西の視線の動きがぴたりと止まった。

「あの、外部からやって来た木山という女……彼女の意見ばかりを大佐は重用するようになり、あなたは軽んじられていた。違いますか？」

「……」

「幻想御手などというツールは、41号の能力向上には役立つたかもしれないが、結果どうになりました？あの女の手引きで、貴重な実験体が脱走し、今は行方知れずです。本来、長年このプロジェクトに関わって来た、あなたの意見こそが、第一であるべきでした」
「……そう、そうだ」

大西は静かに門脇の言葉に同意する。

「大西博士。あなたは、アキラをそのまま封印することには、本当は反対なのではありませんか？」

「それは……」

門脇がサングラス越しに、大西の顔をじつと見る。大西は俯いている。

「このラボのナンバーズは、互いに能力を共鳴させることによって、力を高め、発揮することができる。もしも、41号が、ベビールームの者を遥かに超える力を持てば？そうすれば、きっとアキラを——」
「待て、言うな！」

大西は門脇へとはっと目を見開き、恐怖に駆られたように声を上擦らせた。

「私は——わたしは、そこまでのことは。いや、違う、……君は、ただの特務警察だろうか？なぜそれほどのことを言える？」

「博士。あなたは、研究者としての原点に、好奇心という原動力にもう一度立ち返るべきです」

門脇は大西の問いに答えなかったが、発した言葉は淀みなかった。
「私も、あの『災厄』については知らない世代です。しかし、ここは学園都市です。超能力者が7人、そして、それらに続く能力者が蟻のよう成群れをなし、当たり前前に暮らしている。なれば、アキラは、きつとコントロールできる。あなたが、学園都市の表舞台に立つことによつて」

大西は、自分より背の高い門脇の姿を見上げ、ゴクリと唾を呑んだ。
門脇は、静かに語る。

「木山博士の居所ですが、実は既に割れています。彼女が奪った41号の研究成果は、じき、あなたの手に戻るでしょう。そして近々、こ

こ学園都市におけるアーミーという組織も、解体される。大佐の政治生命もまた然りです」

「何だと。それは、どういう——」

「博士。我々に力を貸していただききたい」

門脇は、口を半開きに行っている大西へと片手を差し出した。

「アキラの研究に身を捧げた、あなたのお父上の遺志を継ぐためにも」

大西は、差し出された門脇の手を見つめ、何度も瞬きした。

——第一二学区、ミヤコ教団本部 拝殿

「わしも含め、防衛省のラボで研究された実験体……その中でも、能力があると認められた者には、番号が振られた。今のお前達が使う言葉で言い換えるなら……」

「強度、か」

ミヤコが手繰り寄せようとしていた言葉を、上条が引き取ると、ミヤコはゆっくりと頷いた。

「そう。その、お主達の基準とは違って、番号そのものに力の優劣は無いがな。そして、お主達よりもずっと前からプロジェクトはあったにも関わらず、ごく少数の者にしか付けられていない」

「もしかして、41号ってあの少年が最新？なら……」

上条は訝し気に言った。

「……たった40人少し？」

「いかにも」

ミヤコは自嘲的に笑った。

「無能力者を除いた、ある程度以上の力をもつ若者が、この学園都市には何十万人といるのだろうか？それなのに、わしらが生まれたプロジェクトは、数十年かけて、やっとこれっぽっちなのだよ。しかも、どれも、お主達の言う所の、強能力者程度……科学的有用性という点では、先端技術で既に十分賄えるものばかりだ。あの41号でさえ、今宵サカキ達の眼を通して、それで鼻真目に見ても、大能力者⁴といったところであろうな」

今のところはな、とミヤコは小さく付け加えた。

「あなたの掌に、刻印が見えた」

上条が言った。

「あなたは、19番目という訳か」

「誇れる勲章ではないがな」

ミヤコは、数珠を鳴らして自らの右の掌を、上条に開いて見せた。紫色の刻印が、今度ははつきりと、上条の目に入った。

「……思い出したんです。俺は、今月のはじめ、第七学区の街中で、妙な男の子と出会った。その子は、あなたと同じような印を掌に付けていた。番号は、確か……」

26。老人のような顔をしながら、子どもらしく振舞い、アーミーから逃げようとしていた少年の姿を、上条は思い出した。

「わしの後、20番台以降の子どもたちはな、変異した因子を組み込まれた遺伝子……それらを持って造られた子たちなのだ。彼らは、能力の先天的獲得と引き換えに、身体・精神の成長に異常をきたしていると聞いておる。お主が遭遇した者も含めてそうであろう」

「それ……もしかして、ゲザイナーベビーってやつか」

上条は僅かに息を呑んだ。幾ら科学の探求が倫理の壁を押し上げている学園都市であっても、遺伝子操作による人間の生成は国際基準に沿って禁止されていると聞いていた。

驚く上条の様子を見て、ミヤコは首を傾げた。

「……お主はそうか、知らんのか」

えっ何を？と上条は聞き返したが、ミヤコはすぐに姿勢を元に戻した。

「だがの、28番目の子ども。彼の力だけは、別格だ」

「アキラってやつ？」

上条は、再びその名を口に出したが、疑問に思うところがあった。「けれど、あなたの言う、そのアキラってのが、……超能力者^{レベル5}ぐらいのこと？なら、学園都市中の科学者が黙っちゃいないぜ。レベル5が7人しかいないってのは、俺みたいなのその辺の高校生でもよく知っているし」

つい先刻まで、自分に難癖をつけていた電撃を纏う女子中学生の顔

を、上条は苦々しく思い出した。

「そんな奴を、今でもアーミーが管理下に置いてるっていうのか？俺が出会った、26番目の子どもみたいに？」

「……28号が、今どこにいるのか、どのような状態にあるのか、わたしも知らないんだ」

ミヤコの回答に、上条は拍子抜けした。

「えっ！そんなどこにいて何をしてるかも分からないような奴に、俺が立ち向かえって？何ですかそれ」

「そう憤慨するな。奴は他のナンバーズとも、お前達の頂点に立つ超能力者^{レベル5}ともまた異質であるからにして、世の流れに歪みをもたらす存在。」

のう上条当麻よ。森の中に居る人間は、どんなに目を凝らしても、所詮木の一本一本を見定めることしかできん。だがの、一方で、人は大きな網を持って、古来、水を泳ぐ魚を掬ってきたであろう？魚にしてみれば、流れの中を泳いでいた所へ、突如理解し得ぬ力による干渉を受けるのだ。すると……我ら人として同じこと。もう一つ上段へ掬い上げられる日が来ないと、誰が言えるのだ？お主たちこそ、超能力のその先を目指しているであろう？なれば、同じことよ。アキラは、流れの中にはおらんのだ」

上条は困ったように、斜め後ろに控えるサカキ達を見たが、3人とも黙って目を伏せたままだった。彼女たちは、信者としての正しい姿なのかもしれないが、上条にとっては訳の分からないことが増える一方だった。

仕方なく、上条はこれ以上話しても埒が明かないと考え、口を開いた。

「あー、で……そろそろご高説は終いでしようか？」

「おお。もう夕餉の時間かえ？」

揶揄うようにミヤコが笑い、上条は眉間に皺を寄せた。

「いや、もう率直に申し上げますけどね。結局、急に連れ去られてきた割には、よく分かんない話だったし。これ以上俺をここに留め置くこうとするなら、本気でアンチスキルに通報しますよ！ほんものの！」

「お前！」

怒って立ち上がろうとしたサカキを、ミヤコが手を挙げて制した。「若い者は血気が逸るの。まあ帰りたいたいと申すなら、引き留めんし、確かに連れて来たのはこちらの責だ。七学区への送りの車も出そう。ところで……お主、そもそも何かジャツジメン^{風紀委員}トに目を付けられる覚えがあつて、娘たちに同行したのではあるまいな？」

あ、と上条は思わず声を漏らした。

コンビニでの、ATMの故障騒ぎをすっかり忘れていた。

いつの間にか、上条はサカキ、モズ、ミキの3人に、周りを取り囲まれていた。

3人とも、蔑むような視線を上条に集中させる。

「いや、あれは、悪いのはビリビリ……」

「上条当麻。もちろん、こちらもタダでお主の力を借りようという訳ではないのだ。わしはミヤコ教の祖たる者として、力を借りる者に正当な対価を与えるのは、当然のことと弁えておるよ」

「た、対価つて……入信とからなら、全くお断り……」

「それは無念じゃな。はて、サカキ」

はっ、とサカキが短く返事をする、ミヤコは惚けたように首を傾げてみせた。

「その破壊された機械とやらは……幾らぐらいで直せるものよのう？このチンケな学生風情に払える額かのう？」

上条は、ぎりぎりど歯ぎしりをした。ミヤコは、微かに口の端に笑みを浮かべているように見えた。

「良かったのですか？」

上条が、神官達に連れられてその場から居なくなつた後、杖を片手に広間を去ろうとするミヤコに付き添いながら、サカキが言った。

「うん？」

「上条当麻……幻想殺しを持つ者とは思えぬ、小物でした。あのようにならから施しを与える必要はあつたのでしょうか」

「俗物だね」

ミキが短く言う。

「顔はあたい、好みだけどなあ。そもそもあれ壊したの、超電磁砲なん
でしょ？損害請求がいくなら、アイツの方じゃなくて？」

どこかあつげらんとした調子で、モズが言った。

ミヤコは、3人の少女が口々に言うのを、面白がるように笑って聞
いていた。

「お前達が言うことは最もよの。案ずることはない。幻想殺しは、必
要な駒ゆえ……」

サカキ。その店の主に、話は通してあるか？」

「はい、滞りなく。信徒として、協力を惜しまぬと」
「うむ」

ミヤコは立ち止まり、振り返って、広間背面の巨大な浮彫を見上げ
た。

(……アキラが再び目覚める日は近い)

((はい))

3人の少女が、ミヤコの言葉に揃って返事をする。

「41号、幻想殺し、超電磁砲、バイク乗りの少年達……どれも欠けて
はならぬ。流れが曲折するか、はたまた本の流れへと引き戻されるか
……いずれにせよ、時は近いのだ」

深夜 —— 第七学区、とあるレンタルオフィス

迷彩色の防弾スーツを着込んだ男たちが、物々しく狭い階段を駆け
上がっていく。

「4F—6……ここだ」

一つの扉の前で、リーダーが他の隊員に目配せをした。

「油断するな。相手はただの一研究員だろうが、実験体41号と繋
がっている可能性がある」

一同が頷くと、リーダーはビルのオーナーから取り上げたマスター
カードキーを通す。

扉を開けると、中はビジネスホテルの一室を思わせる、質素な空間
だった。照明は点いておらず、代わりに奥の部屋で、ベッド横のテー

ブルに置かれたコンピューターの画面の光だけが目立っていた。

その画面の光に、下半身だけ照らされて立っている人物が居た。人影を目視した男たちは、銃を向けた。

「木山春生！両手を頭の上にし、壁につけ、背中を向けろ！」

名を呼ばれた木山春生は、一歩進み出た。ディスプレイの無機質な光が、端正な顔を白く照らし出した。木山は、うっすらと笑みを浮かべた。

XIII. 黄泉川

66

7月17日 —— 第七学区、アンチスキル警備員第七三支部

「一体何事だつてんだ」

「いや……とにかく、早く中に入れてくれって言うもので」

日付が変わって間もない深夜。宿直を務めている2人の警備員が慌ただしく玄関へ向かう。

「こんな火曜日の丑三つ時に、まさか酔っ払いのお守りじゃねえよなあ」

「どうでしょう、呼んでるのは女性です。センサーカメラの映像には、白衣を着た人間が映ってましたが」

二重扉の内扉を開錠した一方のアンチスキルは、相方に向かって怪訝な顔をした。

「……白衣？女だど？胡散臭いな」

二人は内扉を抜け、ガラス張りの外扉の方へと歩み寄った。

支部の周辺は、深夜でも街明かりが少なくなき、ガラスの向こうには、確かに髪の毛の長い白衣の女の姿が見えた。

「はいはい、どうしましたか……えっ」

二人は外扉を開けようとした所で、ピタリと足を止めた。

バン、と女が掌をガラスに打ち付けた。そして、ずるずると、ゆっくりと掌をガラスに押し付けながら、蹲った。

血の痕が、掌の形に、墨汁の足りない毛筆のように、ガラスにくつきり残った。

「わっ、わっ」

「何ビビッてやがる！バカ!!」

足が竦んでいる若手の相方を叱咤し、先輩の男が急いで扉を開けた。

「大丈夫かいアンター！」

助け起こされた白衣の女は、蒼白な唇を震わせて何事か喋ろうとする

る。

「おい！すぐに救急車！肩に負傷！多量に出血している！」

先輩からの指示に、相方は上擦った声で返事をし、慌てて携帯電話を手に取る。

「……？なんだって、今は喋るな——」

「……たのむ、たすけてくれ」

傷口に止血処理を施されている間、白衣の女は虚ろな目をしてうわごとのように呟いた。

「アーミーに、おわれて……ほご、してくれ」

背後の通りでは、輸送トラックが唸りながら深夜の街を駆け抜けていく。けたたましい走行音の中、木山春生の声が辛うじてアンチスキルの耳に届いた。

朝 ——

「駆け込んできた人物の名は、木山春生^{きやまはるみ}。29才。民間会社所属の研究員。左肩に銃創1か所。当直の通報で、病院へ搬送され、現在治療中。命に別状は無いものの、クラスⅡⅢ相当の出血性ショックが顕在していたため、詳細な事情が聴取できていません」

火曜日。通常であれば、教師は間もなく始業を迎える時間だが、臨時で招集された会議の参加者たちは今、警備員として着座している。会議室は空席が目立ち、参加している人数はまばらだった。

数少ない参加者の中から、屈強そうな体格の男が手を挙げる。

「その……会社つてのは？」

「水穂医科大学の卒業生を中心に立ち上げられたベンチャー企業です。大脳^精生^神理学を専門とする研究を行っており、Augmented^精Mentalis^神 Reality^現に関わる技術開発や新薬製造等の分野で外部機関と連携しているようです」

「大脳生理学……」

緑色を基調としたジャージ姿の黄泉川愛穂は、寝言のように小さく呟き、ペンを指で挟んだままの片手で鉄紺色の髪をがしやがしやと掻いた。昨晩も日付が変わる間際まで業務があり、それからの早朝ミー

テイニングとあつて、十分な睡眠はとれていない。髪は潤いがなく、指で梳く度に引っかかりを感じた。

「銃弾は？この資料によると、肩甲骨で止まっていたとあるが」

タブレットの画面から視線を上げた工示が、早口に言った。

年長者からの質問とあつて、説明者の若手の警備員は、僅かに肩を震わせてから答えた。

「先ほど摘出が無事済んだと連絡がありました。詳細な解析はこれからですが……送られてきた画像をAIの簡易分析に掛けた結果、P 8. 5の可能性が高いと」

「新首都工業が製造している拳銃か」

「はい。で、このモデルですが、昨年にも本格生産が始まったばかりで、国内では限られた卸先にしか流通してません。それが——」

テレビモニターに、トリガーの部分にチエーンが付けられた一つの拳銃の写真が示される。恐らく、展示用の物だろう。そのグリップ部分には、2つの盾に添えられた桜の紋章があらわれていた。

「アーミー！」

何人かの同僚がざわめく中、黄泉川は急に視線を鋭くし、モニターを睨んだ。

「そういえば……この人、俺達宿直が救急車呼ぶ間にうわ言みたいに言ってたんだ。『アーミーに追われてる』って」

目の下に濃い隈をつくっている、中年の男性警備員が思い出したように言った。

すると、工示がはつきりと眉間に皺を寄せた。

「……厄介だ。まさか、ゲリラ絡みじゃないだろうな」

「アーミーがもし実弾を発砲したとすれば、明らかに規定違反じゃん」

黄泉川が静かに、しかしはつきりと言ったことで、工示は顰め面を黄泉川に向けた。

「支部長。先日の連続発火強盗の犯人を強奪された件といい、アーミーの横暴は目に余ります。中央へ進言の上、協定内容の厳守と再発防止、責任者の処罰を求めべきでは？」

「……善処する」

「もつと強いお言葉が頂きたいところですね、仮にも我々のリーダーとしてのお立場ならば」

「何だと?」

棘のある工示からの返事があり、直後に、黄泉川の隣に座る男性警備員が、「黄泉川さん!」と窘めるように小声で言った。

黄泉川は机に手をつけて立ち上がり、怖気ずに言う。

「この第七学区は、学生の街です。市民の、子どもたちの安全を守るため、我々とアーミーは手を組んだ筈。ゴム弾の規定もその一つです。世間セカイに紛れたヒットマン紛いのことをさせるために結んだ協定ではない。支部長もお分かりでしょう?我々の思いが踏みにじられているんです!」

工示は、黄泉川の鋭い目を避けるかのように顔を落とし、片手で眼鏡の位置を直した。

「アーミーの仕業と決まった訳ではない。現時点で、君の言うことは全て、憶測に過ぎない」

「ならば、使用された銃の特定を早急に進め、線条痕の照会を、理事会を通してアーミーに——」

その時、バンというやかましい音が室内に響き、何人かの参加者が肩を震わせた。

工示が、苛立ちを露わに、掌を机に押し付けて、黄泉川を睨んでいた。

「なあ黄泉川……誰が、いつ、やるんだ?そんな暇人が、この支部にいるのか?うん?」

黄泉川は、黙って工示へ視線を返している。隣の小僚が、「勘弁してくれ」とでも言いたげに頭を抱えている。

工示は、腕時計を見て舌打ちすると、神経質そうに指先で机をトン、トンと叩き始めた。

「この学期末の、火曜日の朝っぱらから、管理職に頭を下げて自習計画を組んでだな、緊急にミーティングをしてる当初の目的は何だ?忘れた訳ではないだろうな」

「……グラビトン虚空爆破事件の、容疑者情報の共有、です」

「ああ。それで？その本題は済んだか？」

「……いえ、まだ」

「なあ、必要なことを、今やるべきことを、さっさと片づけて、効率よく行くべきだろう。我々は！」

工示は両手を広げて、まばらな参加者相手に訴えかけた。目立った反応は無い。

「寺に駆け込んできた女のことなど後回しだ！今は病院に預けている、詳しい話はその後でいいだろう！それよりも、我々が共有すべきは、この少年のことだ！」

工示が乱暴にポインターを操作すると、銃の画像に代わって、一人の男子学生の顔写真がアップで映し出された。眼鏡をかけ、頬のこけた、茶髪がかつた少年だった。見るからに気弱で、陰険な印象を受ける。

「——当初の容疑者であった女子学生が候補から外れたため、残り3人の『量子変速』シンクロナイゼーション能力者を当たった所、この男子高校生が浮上した。

介旅初矢。かいたびはつや7月上旬から学校を欠席しがちになり、先週末から連絡が取れなくなっている。本人は寮の自室に戻っておらず、関係者からも、これまでの爆破事件の際のアリバイが確認できていない。書庫バンクの情報では、異能力者レベル2だが、もし『帝国』に参加しているとすれば、能力を一時的に引き上げる例のドラッグを服用している可能性がある。アンチスキルとして、この生徒を重要参考人に指定し、ジャッジメント風紀委員各支部長にも、手配情報を送付した」

「子どもを巻き込む気!？」

一斉にメモをとる音でざわめく中、黄泉川が信じられないという口調で声を上げた。

「あの一連の爆破事件は、明らかにジャッジメントを狙っていると理解してんじゃん?！」

工示が、黄泉川に向かってせせら笑った。

「敵を知らずに、どうやって身を守れと言うつもりかね」

「今はジャッジメントの活動に制限をかけている。もしや、人手が足りないからって、校外での警備活動に手を借りるような、矛盾する真

「似はしませんよね？」

「話は終いだ」

工示が黄泉川の問いを無視し、忙しく立ち上がった。

「各自、本日の警備行動を通して、この介旅という学生の目撃情報を当たれ。ああ、もちろん、アーミーの落とし物の解析結果などは、サーバーにアップして、回覧で済ませとけ、それで十分だろうが」

工示が早口でまくし立て、先回りするように黄泉川の方を指差した。抗議するような素振りを見せた黄泉川は、口を噤まざるを得なかった。

「以上だ、解散！皆、2時間目まで無駄にしたくはないだろう……俺は年次休暇^{ねんきゆう}を消化しちまってんだ、校長が出張命令を渋りやがったからな。以上、解散だ！」

「あのクソ支部長。体面ばつか気にしやがって……」

響めつ面で廊下を歩く黄泉川の横を、先ほどの会議でも隣に座っていた同僚が並んで歩いている。

「まあまあ、黄泉川さん。支部長の言う事にも一理ありますよ」

「ほう？潮騒、あんたはホトケだねえ。あたしは今、腹ン中の閻魔大王が、そこら中釜茹でにして煮えくり返ってんじゃん」

「ほら、実際黄泉川さんも俺も、みんな忙しすぎるんすよ。人手不足は全くその通りで……吸うなら喫煙スペース行ってください、仮にも教師でしょ？」

潮騒に窘められて、黄泉川は渋々、ジャージのポケットから取り出しかけていた小箱を再び仕舞い込む。

「仮は余計だぞ、潮騒」

「すみません……まあ、黄泉川さんの提案しようとした議題、あからさまにスルーされちゃいましたね。あれは良くないと思いますよ、俺も」

「……見逃してはならない情報だと思っちゃん」

先ほどまで煙草を摘んでいた指で、寂しさを紛らわすように頬をつつきながら、黄泉川は言った。

「アーミーが今月の2日に、あの住宅街の騒ぎの時に落としたカプセルさ……成分を解析して、同じものを複数のマウスに投与したら、そいつらはある時を境に、昏睡状態に陥った。それらの異なる個体間の脳波は、不定期に、特徴的な短い棘波を示す……昏睡中の具体的行動としては、痙攣したり、鳴き声を上げたりとかな」

「でも、それが今回の騒ぎと、何の関係があるんです？」

「帝国の連中は、逮捕後に昏睡状態に陥るのが相次いでいるじゃん？」

エレベーターに乗り込んで、一階へのボタンを押し、黄泉川は才郷に答えた。

「それに、聞いたか？噂じゃ、ある同じ『うわ言』を何度も繰り返す症状が現れているって」

「集団パニックみたいなの？けれどそりゃあ……帝国の連中がばら撒いているっていう、ドラッグの幻覚作用で説明はつかないスかね」

「私は」

降下するエレベーターの中、言葉を区切って、黄泉川が言った。

「あの『帝国』って奴らと、アーミーは無関係じゃないと踏んでいる」「昏睡状態に陥った連中と、そのアーミーの落とした薬物の動物実験の結果が、似てるってことスか？」

「それもあるけど」

黄泉川と潮騒の乗るエレベーターの扉が開いた。

「アーミーのラボで開発を受けた、島て——ん？」

エレベーターから外へ何歩か踏み出したところで、黄泉川の携帯電話が着信を告げた。

「ごめん、先に行つてて」

潮騒に促すと、黄泉川は着信に応答する。

「ああ、牧子ちゃん。ごめん、折角作ってくれた解析資料だけど、やっぱりウチの支部長、アタマ固くて——」

『黄泉川先生！アーミーが！』

切羽詰まった若い女の声が電話口から響き、黄泉川は表情を引き締めた。

「どうしたんじゃん!？」

『アーミーの黒服たち——特務警察が、今ここに……職業訓練校に、強制捜査に来てます！目的は、恐らくあのカプセルです!!』

職業訓練校所属のアンチスキルである牧子からの焦りに満ちた声を聞いて、黄泉川は目を見開いた。

「カプセルについて？ラボから脱走した島鉄雄のことではなく？」

『ごつちに来た黒服の男はそういう趣旨のことを言っていました』

黄泉川愛穂の耳に、通話相手の牧子の声が聞こえる。早口で、電話口にかなり顔を近づけて喋っているのだろう、囁くような声だ。

『もしもカプセルについて探っているのだとしたら、そちらにも別動隊が向かっているかもしれません』

「……まさか、情報が洩れている？」

『用心してください、奴ら、思った以上にやる気みたいですよ——ごめんなさい、切ります』

切迫した声の後に、ツー、ツー、と切断を知らせる音が聞こえた。

黄泉川がたった今の話の内容について考えようとする前に、今度はドタドタという慌ただしい足音がした。

「黄泉川さん！」

慌てたように駆け寄って来たのは、先ほど別れた筈の潮騒だった。

「げ、玄関に、アーミーが！」

まさか。黄泉川が焦りに駆られて走り出すが、入り口へと辿り着く前に、肩を怒らせた工示が目の前に立ち塞がった。

「……嫌な客人を呼んでくれたな、黄泉川」

黄泉川が工示の背後を見やると、黒服の男が複数名、建物から外への出入口を塞ぐようにこちらへ向かってきていた。揃いも揃ってサングラス姿で、壁をつくるように迫る様は、威圧感たっぷりだった。

「責任者は？」

「……私だ」

先頭の黒服の男の問いに、苦々しげな顔をして工示が振り返る。

「何用だろうか、ここはアンチスキルの——」

工示の言葉を遮るように、黒服の男は手帳を開いて掲げた。

「警視庁及び防衛省合同保安局管下、特別任務警察、内務第三課、門脇だ」

工示が何か言う前に、門脇と名乗った男は素早くジャケットの内ポ

ケットに手帳をしまおうと、今度はA4サイズの紙きれを一枚、工示の鼻先に突きつけた。

「東都裁判所からの捜査令状だ。只今から、本建造物『警備員第七三活動支部』を対象とした強制捜査を執行する。容疑は、アンチスキルアーミー都市軍隊所有資産の不正取得だ。指示があるまで、全員、その場を動くな！」

門脇が言い終わるや否や、黒服の男たちの後ろから、青服に身を包んだ捜査員が大勢押し入って来る。

「お前があの紅白カプセルなんぞに拘るからだ……年休を追加申請する必要がありそうだな、畜生」

工示の憎々し気な言葉を聞いて、黄泉川は黙り込んだ。額から冷えた汗が一筋流れるのを感じた。

——第十学区、職業訓練校

「ワイルドコックとプリティイボンバーズには連絡ついたぜ、金田。やるなら、今週の土曜、だ」

「おし！ビッグスパイダーはどうだった？山形」

「まあ、期待しないで聞いてくれ。クレジットを積みつけて来てやがったあいつら、ふざけてやがるぜ」

「金だア？やろオ黒妻のヤツ……シけたこと抜かしやがって」

「それってもしかして、駄洒落？」

「うるせエバカ」

「俺はそんな気がしたぜ。なんせここの1、2年であいつンとこ、やたらほかのシマ荒らしするようになったしや……」

今は大講堂での授業中だったが、教師の一方通行的な話には耳を一切貸さず、金田は甲斐、山形らと後方の席で話し込んでいた。金田達だけでなく、周囲の生徒もまともに講義を受けている者は皆無で、教師から注意が飛ぶことも最早なかった。

すると突然、部屋の扉が開けられ、入ってきた人物ががなり声を上げた。

「金田ア！甲斐イ！山形ア!!いるかア!？」

前髪を雄鶏のとさかのように奇妙に固め上げた、体育教師の高場

だった。

「ゲツ、アゴだ……」

「なんだよ、俺ら指導食らうようなことしてねエゼ？」

金田達は、慌てて破られたり落書きがされたりしている自分たちの教科書で顔を隠した。

「困りますな、高場先生、一言、断って頂かなければ……」

「あつ、申し訳ない！ご指導中に！ちよつとあいづら借りますよ」

口ひげを生やした教官への挨拶もそこそこに、高場は丸太のような足を動かし、金田達の方へとやってくる。

「……何を話していた」

「別に」

高場の問いに、金田は一顧だにしない。他の2人もそっぽを向いていた。

「お前ら、もしも敵連中と一戦交えようというなら……やめておけ、俺達だって見過ごす訳にはいかない」

「関係ねえだろ！」

山形が急にガタンと立ち上がり言った。周囲の生徒の目が俄かに集まった。

「お前らアンチスキルはよオ！都合のいい時に善人面しやがって!!いか、これは俺達の問題だ。俺達はアンタらに甘えて何とかしてもらおうだなんてこれッぽちも思っちゃいねエゼ！余計な首を突っ込むんじゃないよ」

「いや、俺は……違う、それどころじゃないか、今は」

高場は、反抗的な山形の態度を叱るでもなく、言いかけた言葉を呑み込んだようだった。

「それより、お前らすぐに来い。ホレ、早く」

「……なんだよ？」

金田は目を丸くした。高場の顔は、金田達にとってお馴染みのへらへらした顔ではなく、存外に真剣なものだった。

半信半疑の金田達が連れて来られたのは、長い間手入れがされてい

ないであろう、教室室だった。埃臭い部屋の中に、いつ導入されたか分からないような古びたコンピューターやらケーブル、それらが詰まった段ボールが山積みになっている部屋だった。

「おい、こんなどこに押し込めてどうしようって——」
「いいか、次の予鈴が鳴るぐらいで帰るだろう、それまで、大人しくしてろ」

高場が、廊下に人氣が無いことを確認してから、抗議の声を上げる金田達に向かって声を潜めて言った。

「よく聞け。アーミーの特務警察が、今しがたここに現れて捜索に入っている」

「喪服野郎共が？また鉄雄を探しに来たのか!？」

甲斐が聞いたが、高場は首を振って否定した。

「いや、今回は恐らくそうじゃない……7月の最初の日曜に、住宅街でアーミー相手に騒ぎを起こしたろう。アレ絡みだ。お前達は顔を見られている」

「分かるように説明しろよ、アゴよりも脳ミソが縮んだか？」

山形が食って掛かった。

「アンタらアンチスキルのお取り計らいで、俺たちにお咎めはナシってことになったんじゃねえのか？」

山形の言葉に、高場はボリユームの多い黒髪を苛立たしく掻いた。

「そうなんだが……詳しい事情は話せんのだ、すまん。とにかく、黒服達に今お前達が見つかる、良くない——」

「おい、テメエ、そんなテキトーな説明で済むと思うなよ、それでも教師かよ」

山形と甲斐が高場に詰め寄るのを横目に、ふと金田は窓の外を見た。

そこはちようど、1階の保健室が見える位置だった。

窓ガラスに近いデスクに両手をつけて、緊張した面持ちで身体検査を受けている人影が見える。

保健師の牧子だった。捜査官の手が彼女の体に伸びている。

「あんの野郎！人の女に!!」

怒気を露わにした金田は言うが早いか、甲斐や山形、高場を押しつけて、けたたましい音を立てて引き戸を開け、廊下へ走り出していった。

「おおい！待てよ金田ア！」

「何だか分からんが……俺も行くぜ、今モーレッツにムカつくからな!!」

甲斐と山形も、高場に目もくれず、後を追う。

「お前ら……あークソツ!!どうしてこう話が通じないんだ……!」

額に手を当てて高場がぼやき、ドタドタと3人の後を追いかけていった。

「7月2日の日曜。第七三支部所属のアンチスキルの一員から、カプセルを一錠渡された、違うか？」

厳しい顔つきをした女性捜査官から服装の身体検査を受けた後、牧子はその場に立たされ、尋問を受けていた。周囲では、黒服達が慌ただしく薬品棚を隅から隅まで探し回り、備品やら器具やらが散らかし放題になっていた。

「……知りません」

「何もこちらは、濡れ衣を着せようとしている訳ではない」

顔をより近づけ、捜査官が威圧的に言った。

「はつきりとした根拠がある。お前は分析を依頼され、その結果を七三支部に送った筈だ。現物はどこに？」

「だから、私は知らない」

自分よりも背の高い相手を睨みつけて牧子は言う。しかし、喉はカラカラに乾いていて、声が掠れているのが自分でも分かった。

そんな牧子の様子を見て、捜査官は興味深そうに首を傾げる。

「……態度に現れているな。どうだ？」

「さあ、どういうことでしょう」

「あくまでもシラを切ると言うなら……捜査妨害でお前を拘束する。たっぷり、こちらの基地で話を聞かせてもらおう」

体格の隆々とした、壁のような黒服が二人、牧子の両脇を固める。

牧子は捜査官の方をじっと見つめ、ため息をついた。捜査官は、唇

の端に薄く笑みを浮かべる。

「観念したか？」

「そうね……両手を挙げることになるかもよ、アンタらがね」

牧子の放った言葉に、捜査官と黒服達が眉を上げる。

「何だど？」

その時、俄かに廊下の方が騒がしくなった。

その場の全員が、部屋の入り口の方を振り返る。

叫び声と、怒号と、それらをまとめて切り裂くようなけたたましい音が迫って来る。

「これは、一体――」

女性捜査官の声は、断続的な排気音にかき消された。

出入口を固めていた捜査官が頭を抱えて倒れ込む。何人もの生徒たちが、工具やバットを手にアーミーの捜査隊へと殴りかかって来た。

「お前らア!!」

牧子は呆れ果てて、天井を仰いだ。

倒れ込んだ捜査官を呻かせ、その上から部屋の中に真っ赤なバイクで乗り込んできた人物が目に入ったからだ。

「土足で人様の学び舎に入るたア!! どういう了見だおらア!! そんな――俺のカノジョに手エ出すンじゃねえよオ!! 叩き出せエ!!」

相手の土足を勇ましく糾弾する金田自身はというと、真っ赤なバイクに跨り、唾を飛ばしながら、仲間を鼓舞している。金田のバイクチームのメンバーをはじめとした生徒達が、次々と捜査官や黒服達に襲い掛かる。

アーミーの面々も、警棒を取り出し、応戦し始める。

窓ガラスが割れ、椅子や机が倒れ、薬品の刺激臭が立ち込め、辺りはあつという間に混沌とした状態になった。

「あアツ!!」

くぐもった声を上げて、先ほどまで牧子を尋問していた女性捜査官が、迫るタイヤを避けて転がった。

代わりに、金田が狭い室内で、机や椅子やらをなぎ倒し、牧子の目

の前でバイクを横付けした。

「よオ、12時の鐘が鳴るぜ、おねーちゃん」

「遅い」

牧子は一言文句を言うと、金田の後ろに跨った。

「ていうか、馬鹿じゃないの、こんなにならして……」

「元はといえばコイツらがやったんだ、請求書ならアーミーに送んな」
金田は自慢のバイクをバックさせて転回する。倒れていた誰かの腕をタイヤで曳き、柔らかく何かを砕くような衝撃がある。それから弾けるように、中庭へと通じる扉から部屋を飛び出した。

「まあ、お前は安全なところへ逃げな」

「ちよつと——正ちゃん、アンタはどうすんの？」

「俺？あいつらを早く葬式から帰らせてやるさ」

遠巻きに事態を見守っていた職員や生徒たちの輪に、牧子を降ろすと金田は不敵に笑った。

アーミーの捜査員たちは何人かの生徒を拘束したが、混乱していた。何せ、暴れる生徒の数は50人を優に超え、数で捜査員たちを大きく上回っていた。

「ほ、本部に救援要請を！これは暴動だ——」

「馬鹿！大佐に知られたらクビが飛ぶぞ!!」

「とにかく、まずは門脇さんに！」

傷だらけの黒服同士が、口々に言い合う。

「お前らア！やめんか、やめんかア！」

高場のように体力に自信のある教員たちが、力任せに暴れる生徒達を引き離しにかかる。

混乱の中で、高場の腕が一人の黒服の横っ面にめりこみ、一瞬で昏倒させた。

「おいイ、アゴオ!!いいのかよオ！」

甲斐が面白そうに声をかけると、高場は甲斐の襟元をむんずと掴んだ。

「お前ら、これ以上暴れるな——今のは内緒な」

甲斐を引きずりながら、一言高場は小声で囁いた。

「ああッ、金田ア!!」

鉄パイプを振り回す山形が叫んで指差した先では、金田が額から血を流し、大柄な黒服に羽交い絞めされていた。

「てめ、離せよこの野郎オー!」

金田はもがくが、上半身を捕まえられた上に、もう一人に足も掴み上げられ、怪我人のように持ち上げられ運ばれていく。

「罅があかん、何人が捕まえて、撤収だ!!」

リーダー格の黒服が叫び、搜索にあたっていた面々は、数人の生徒を連れて慌ただしく出て行く。

「これは——執行妨害だ。拘束する正当な理由がある」

牧子を尋問していた女性捜査官は、息を荒げながら、金田の両手首に手錠をかけた。

「金田ア!!」

高場たちに制されながら、山形や甲斐は叫ぶ。

割れたガラスや、倒れた棚、ツンとする刺激臭を残し、数分後には、それまでの喧騒が嘘のように、辺りは鎮まった。

「おいィ、どうすんだよ、金田が連れてかれたぞ!」

「どうするって——俺たちだけでも、やれることをやるしか」

「へーきだろう、ちよつと暴れただけだしさ……」

バイクチームの面々が口々に言う中、高場は額に汗を浮かべて目の前の荒れようを見ていた。

「高場先生!」

保健師の牧子が駆け寄って来た。緊張した面持ちだ。

「ここに来たアーミーの連中は去りました。けど……七三支部と、連絡がとれないんです」

「黄泉川先生のところか?!向こうは無事か?」

高場は嫌な予感がして、牧子に聞いたが、牧子は首を振った。

「十分前に一度話したんですけど、今は……黄泉川先生の携帯も、支部の窓口も繋がらなくて。もしも、強制捜査がこちらにも入っていたら……」

高場と牧子は、不安な顔を互いに見合わせた。

—— 第七学区、警備員第七三支部
アンチスキル

「平日朝から、学校での本来の業務を休んでまで、ミーティングか……
一体何についての話し合いを？」

「……」最近頻発している、連続爆破事件についての捜査会議だ」

支部長の工示は、門脇と名乗る特務警察のリーダーから質問を受けている。工示は、門脇に対して視線を合わせられず、しきりに瞬きをしている。動揺しているのが明らかだ。横で見ている黄泉川も、平静を装いつつ、内心はそわそわしていた。

「他には？」

「ない」

「ならば、単刀直入に言う。その女警備員が、去る7月2日、七学区住宅街に於けるガス爆発事件の処理中に、どういう訳か、アーミー化学班の研究資産を持ち去った疑いが持たれている」

「何……」

門脇は僅かに顔を動かし、黄泉川の方を見た。工示も迷惑千万といった顔で黄泉川の方を見ている。「言わんこつちやない」とでも口が動きそうだ。

黄泉川は肩を竦めた。

「何のことかさっぱり分かりません」

門脇は数歩、黄泉川の方へ足を進める。

「あの時、君は現場にいた。違うか？」

「……不良少年の護送中に、お宅らが無理やり張った封鎖線の中にたまたま入ってしまったってね。その件については、上層部同士で話し合いがついていると理解してはいますが」

「強気だな」

門脇が黄泉川の横に立つて行った。黄泉川が顔を向けると、ちょうどサングラスの間隙越しに、暗い瞳が僅かに見えた。

「まあ、あの時、あの場にお前らアンチスキルがいたことは、今は問題

ではない……さて、今朝のミーティング資料を見せてもらおう」

「……潮騒」

工示が声をかけると、潮騒が早足で自分のデスクへ行き、紙束を取って来た。受け取った工示が、それを門脇に渡す。

「ほう……グラビトン虚空爆破事件ねえ、学生が容疑者、と……犯人が早く捕まるといいな」

「なあ、潮騒」

黄泉川は、顔を門脇へ向けたまま、小さく囁いた。

「まさか、あのプリントアウトされた紙束……夜に駆け込んできた研究者のこと、入ってないだろうな」

「いや、あれは印刷してないっすよ」

四角い顔に冷や汗を浮かべながら、潮騒が答えた。

「急な案件だったもんで……伊良湖がとりあえずデジタルデータだけ用意したやつで」

「こんなガキの火遊びには興味がない」

門脇が紙束を乱暴に工示の手に押し付けた。

「今朝のミーティングの議案データがあるだろう。それを見せろ」

「それなら、本人に直接話を聞いてもらいたい。私は知らん」

工示は面倒くさそうに、黄泉川を指し示す。

このクソ上司。部下に責任をおっ被せやがったじゃん。

黄泉川は微かに眉間に皺を寄せた。

「勝手に触らないでもらえますかね」

会議室のホストに当たるコンピューターに触れようとした捜査員の手を、黄泉川は跳ねのけた。

「ここはアンチスキル支部。セキュリティはあんたらが考えているよりずっと強固じゃん。この端末は、事前認証を受けたアンチスキルメンバー以外の人間が操作しようとする、強制シャットダウンの上、全データに暗号化をかけるようになってるんでね」

「なら、お前がやれ」

門脇の口調には、苛立ちが見え隠れしていた。

「勿体ぶるな。我々は急いでいるのだ」

「黄泉川。お待たせするな。言う通りにしろ」

「……ハイハイ」

少し離れた所から、工示が腕組みをしながら黄泉川に指示した。黄泉川は、気を重くしながら、端末を操作していく。隣では、工示がじつと作業の様子を見つめているし、潮騒は部屋の片隅ではらはらしている。更に、青服の捜査員がひっきりなしに写真を撮っているの、全く落ち着かなかった。

やがて、デイスプレイが、ミーティングに提議するデジタルデータを集約したフォルダを示す。

『0716カプセル解析結果』！これだ、これを開け！」

門脇が興奮したように指差す。

黄泉川はすぐには手を動かさず、上官である工示の様子を伺う。しかし、工示は顎でしゃくった。

「早くしないか」

ダメか。

黄泉川はため息をひとつ、深くつくつくと、そのフォルダの内面へアクセスしようと、自身が設定したパスワードを入力する。

— ERROR —

黄泉川は目を丸くした。自分で設定した筈だが、疲れているのか。もう一度、今度は先程よりもゆっくり、キーを押し下げる。

結果は同じだった。

「おい、何をしている」

「い、いや」

門脇が急かすが、黄泉川は返答に詰まる。動揺してしまっていた。

「手を止めるな！早く開け！」

「で、でも」

黄泉川はいよいよ喉がカラカラになっていた。

「3回、連続で間違えると、セキュリティが作動して、データそのものが消えるから——」

「何だと、ふざけるな——」

「おいおい、黄泉川、何をしているんだ？まさか、残業のし過ぎで脳ミソが疲れちまつてるのか？」

工示が突然、首を振りながら饒舌に言った。

「今は10時を5分過ぎたところだ。なら、5分前に、ワンタイムパスワードが配付されている筈だろう？」

「えっ」

黄泉川は思わず声を漏らしてしまった。そんなものは無いはずだ。さつきまで不安そうな顔をしていた潮騒も、驚いたように工示を見ている。

しかし、工示はさも呆れたような顔をしている。その表情には笑みさえ見える。

「お前がさつき自分で言ったじゃないか。アンチスキル支部の情報セキュリティは強固だと。ミーティング資料のデータは、集約フォルダに残っている限り、きっかり毎時00分に更新されるパスワードを使わなければアクセスできないだろう！」

「何揉めてんだ」

横で見ていた門脇の口調が荒くなる。

「なら、そのワンタイムパスとやらをさつきと見つけろ」

「それがですね、各自に与えられた職務携帯に送られているもので。一旦返してもらえませんかね？」

工示がにべもなく言った。

携帯電話なら、黄泉川も含め警備員の全員が、特務警察が踏み込んできてすぐに没収されてしまっていた。

門脇が口を歪ませ、工示に詰め寄った。

「話が違うー！そんなことをしたら、お前達は他の支部や中央に助けを求めるんだろ！何のマネだ！」

「確かな証拠をお持ちなのでしょう？であれば、私らがどこに連絡を

ところが、何もやましいことは無いと思えますがね」

「貴様、この期に及んで——」

「かつ、門脇さん！」

言い争いを始めた門脇と工示に、割って入る声があった。別の黒服だ。慌てた様子で、室内に駆け込んできた。

「たつ、大佐が——」

そのたった一言を聞いて、門脇は工示からすぐに顔を背け、部屋の入口に現れた人物を見て、息を呑んだ。

「大佐……早かったな」

門脇が、口を僅かに動かし呟いた。

立っていたのは、黄泉川がかつて対峙した人物だった。

見上げるような体格に、スーツを着こんだ厳格そうな男、敷島大佐が、憤怒の形相を浮かべて立っていた。

数十分ぶりに携帯電話を手に取ると、いくつかの番号からの着信があった。勤務校、他の支部……その中の一つに折り返すと、繋がったそばから、相手が急き込むように話し出した。

『黄泉川先生！無事ですか？繋がらないから心配して……』

「ああ、すまないじゃん」

黄泉川は、相手を落ち着かせるように話した。

「携帯電話を取り上げられていてね。あの黒服連中は、お帰りになったよ」

『まさか、例のカプセルの資料を？』

「私が今、こうして牧子ちゃんに話せてるんだ。つまり、ひとまず無事ってことじゃん。あいづら、大した収穫も無く、あのデカイ大佐にどやされて、しよげて帰って行ったさ」

『大佐って……あの記者会見してた!?本丸が来たんですか？』

「そうそう。なんか、やたら焦ってたみたいだね。令状まで突きつけてきた割に、ドタバタしてたんよ。とにかく、こちらは無事じゃん」

『それは……ああ、良かった……』

溜まっていた息を一気に吐き出し、牧子の声が幾分か落ち着いていた。

「そちらは？連中は同じように乗り込んだんだろう？」

『それが……まあ、大変な騒ぎになりました』

「ふーん、アーミー相手にやるじゃん、あのバイカーズの少年達も」

十学区の職業訓練校であった騒動の顛末を聞いた黄泉川は、素直に感心して頷いた。

島鉄雄の件に関わり始めた時から、何となくは感じていた。彼らは、単なる自堕落な不良集団ではなく、自らの仲間や領域に対する彼らなりの信念をもっているのだろう。それが、突然乗り込んできた特務警察を相手に怯まず、立ち向かおうとする行動に結びついたのだと、黄泉川には思えた。

『校長はカンカンです。自分は減給じや済まないと。黒服たちが乗り込んできたとき、ただ玄関の戸を開けて見ていただけの爺さんがね……けれども、暴れた何人かの生徒が拘束されました。その中には、金田も……』

「金田正太郎……あの赤い少年か」

島鉄雄の、兄貴分。黄泉川に、ふと別の予感が頭をもたげた。

「ねえ、牧子ちゃん。金田クンは、ほんとにその場で暴れたから拘束されただけ？ほかの生徒と同じように？」

『それは……どういう意味ですか？』

「長電話もいいがな」

背後から突然話しかけられ、黄泉川は振り返った。

不機嫌さをたっぷり、眉間の皺に表している工示が立っていた。

「たっぷり荒らされた部屋の整理をしなきゃならなくてね。いい加減、来てくれるか。手が足りんのだ」

書類やバインダー、タブレットが無造作に散らばり、机や椅子が押しつけられている会議室を親指で指し、工示が言った。

黄泉川は、ひとまず牧子に断りを入れ、電話を切った。

「私はいいい加減学校に戻る。期末考査で赤点を取りまくっている生徒たちの補習計画を、午前以内に組まなければならぬね」

「……」自分は片付けされないんですね」

「お前が電話してる間にやったさ」

皮肉っぽく言うが早いか、工示は踵を返す。

その背中を、黄泉川は呼び止めた。

「支部長。一二つほど、気になる点が」

「……何だ、手短に頼む」

こちらを振り返らず、Yシャツの背中を向けたまま、工示が言った。

黄泉川は口を開いた。

「そうですね。ではまず、あなたが私の提案を今朝の議題に頑として乗せなかった理由。それは、特務警察があの時間に捜査に来ることを、支部長は事前にご存知だったからではないですか？」

工示は動かない。

「……私は、お前の提議が、今机上に上げられる緊急性に欠けると判断したまでだ」

「もしも私が、カプセルの分析結果をここにいるメンバーに並べ立てたら、黒服の尋問を受ける中で、誰かが詳細を吐いてしまう可能性が高まる。一方で、サーバ内のデジタルファイル留めておけば、アンチスキルが持つ強固な情報防壁で、奴らの欲しい情報を守れる。そうでしょう？」

ワンタイムパスワードなんて嘘。そして、元々私が設定していたファイルにアクセスするためのパスワードを変更できるのは、提案者である私自身と、管理者である人物。つまり、あなたしかいない」

「特務警察の一行が来てから、私はパスワードを変更する余裕などなかった。あれを誰がやったのかは分かんない」

「私が今朝、ミーティング用にサーバにアップした直後。その時にあなたが変えたとすれば、辻褄が合います」

工示は肩を上下させ、深くため息をついた。

「どうだろうな。神の手の仕業かね」

「まだあります」

話は終わりとばかりに一步踏み出そうとした工示に、黄泉川はなおも声をかける。

「支部長。あなた……あの黒服のリーダー、門脇と名乗る男に、情報を

リークしていませんか？」

「何だと？」

工示が声に棘を含ませ、振り返った。眼鏡の奥の目は、糸のように細められている。

「門脇は、電話を返して欲しいと要求されたとき、あなたにこう言いました。『話が違う』と。一体、何の話ですか？」

「やつらのたった一言の呟きを根拠に私を疑うのか」

工示は体を黄泉川へと向き直し、声を荒げた。

「お前の言う事は支離滅裂だ。ついさつきまでは、情報を守ったのが私だと言い、今度は情報を漏らしたのが私だと言う。自分の言葉を省みるアタマは備わっているんだろうね、黄泉川」

「ええ、自分でも不思議でした」

黄泉川は、怒りを露わにする工示に対して、退かずに言葉を続ける。

「私がつと違和感を覚えた場面がありましたね。アーミーの大佐がわざわざここまで乗り込んできたこと。その時の彼は、相当怒りや焦りを抑え込んでいたように見えました。まるで、この強制捜査について、指揮官である本人が何も把握していないかのようにね」

「アーミー達の様子を観察したから、どうだというんだ」

「黒服の、あの門脇という男は、独断で動いたか、はたまた……アーミー指揮官としての大佐の求心力に傷をつけることが目的。もしもそうなら、この学園都市での評判を落とすような暴挙を演出すればよい。それが、今回のアンチスキル支部と、職業訓練校への突然のガサ入れだとしたら？そこであなたは、門脇に協力し、捜査し甲斐のある場面をそれらしく設定し、時間帯を伝えた。でなければ、私が一〇三支部の科学班と一緒にカプセルを分析していたのは、もう2週間ぐらい前からの話だから、今このタイミングで踏み込みにくる理由が分からないじゃないですか。要は、アーミー周りの政争の具として、我々を使ったんでしょう」

工示は、険しい表情のまま、黄泉川をじっと見つめていた。特務警察の尋問を受けていた時と異なり、瞬きをしていない。

「想像力豊かな推理だ。しかし、なら何のために私はデジタルファイ

ルを守ろうとしたのかね？」

「あなた自身、アーミーも特務警察も好いていないからです、支部長。力は貸してやるが、それもある程度まで。全て言いなりになるのは、アンチスキルとしての矜持が許さなかった……違いますか？ いや、支部長」

黄泉川は、工示に歩み寄り、はつきりと言った。

「そうであってほしい。私は、曲がりなりにもあなたの部下として、期待しています」

二人は、ほんの短い間、相手の胸の内を探るように、黙って対峙した。

「……一つ言っておく」

やがて、先に工示が口を開いた。

「市民の安全を守る、そのために働くとお前は言った。お前は、今日の前の危機を見ている。私は、長い目で見ている。市民や学生達の安全のために、何が最善かを」

言い終わると、工示は黄泉川に背中を向け、去って行った。

「……何が起きていて、何が起ころのだろうか」

黄泉川は、懐から煙草を取り出し、啜えて火を点けた。

チリチリとした爽快感が、気管と肺をなめ回し、鼻腔を風のように駆け抜けていく。

「3限にも間に合わないだろうな。月詠センセに合同クラスを頼むか……」

黄泉川の思考が、一時的にクリアになるのとは相反し、視界に見える天井の照明は、紫煙によってひどくぼやけて見えた。

「黄泉川さあん！ 手伝ってくださいよオ……」

潮騒の悲痛な声を聞いて、黄泉川は頭を振り、歩き出した。

——アーミー本部

『君がどんな御託を並べようが、全ては言い訳にしか過ぎん。悪ガキ共の巣窟だけならまだ良かったさ。逃亡した研究者一人捕まえられずに、実弾を真夜中にぶっ放したのに飽き足らず、その上まさか、アンチスキル警備員の活動支部に特務警察を蟻の行列の如く乗り込ませるとは……大佐、正気かね』

「全くの誤解です、准将殿」

敷島大佐は、眉間に皺を寄せながら、執務室で上官と電話していた。普段なら、出入口の脇を固めている筈の部下の姿は無い。夏の日差しを受けて、高層ビルが屹立する街並みは光と共に熱も伝えるかのように輝いていた。その眩しい景色を見渡すパノラマの窓を背にして、大佐は先程から厳しい表情を崩さずにいる。

「木山春生の強襲も、職業訓練校やアンチスキル相手の捜査も、私まで事前に作戦立案があつて然るべきでしたが、実際には何の話も上がつていなかったのです！あの捜査命令は、偽物です。東京そちらの裁判所に確認したところ、そのような令状は発行していないと確認が取れています！」

『その偽物の令状とやらには、ご丁寧にも、君の電子署名が付いていたな。私だって疑うが、君が画策したのではないのかね』

「断じて違います！」

『だとすれば、誰が？君の身内ではないのかね』

上官の言葉に、大佐はぐつと言葉に詰まる。

『この際、誰がその令状を出させたか等は問題ではない。いいか、状況は我々にとって圧倒的に不利だ。事実として、君の名の下に、銃弾が放たれ、その対象は病院へと駆け込んだ。そして、アンチスキル相手の踏み込みだ……今夕にでも、マスコミは流すぞ、この件について。世間一般は、学園都市の平和を守るアンチスキルと、それを脅かすアーミーと見るだろう。我々の信頼は、ガタ落ちだ』

「この状況を生み出した不届き者を、必ず炙り出してやります」
『もう遅いのだよ、大佐！』

声を振り絞る大佐を、上官は一喝した。

『仮に、内部の不穏分子の仕業だとしてだな、君の責任問題は変わらぬのだ。統制が取れていないことの証なのだから。最早、君の進退は極まっているよ』

「ここで私が退くわけにはいきません！」

大佐は上官の支持を失うまいと、語り続けた。

「25号の予言についてお伝えしたはずです！近々、『アキラ』が何らかの動きを見せるのです！あの『災厄』を再び起こすようなことがあれば——」

『くどいぞ、大佐』

大佐の訴えを、上官は遮った。

『午後の最高幹部会の定例会で、急遽学園都市におけるアーミーの体制について審議するそうだ。私は喚問を受けたのだよ……敢えて言っておくが、私はもう君を庇わぬ。残念だが大佐。全責任は君にある』

「准将！」

大佐は唇を震わせた。

返って来る上官の言葉は、相変わらず冷たいものだった。

『言った筈だ。天秤の傾きを見定めろ、根回しが肝心だと。月初めの実験体脱走騒ぎといい、アンチスキルとの犯罪人を巡る衝突といい……学園都市という魔境で、君は『アキラ』に拘るあまり、視界を曇らせたようだ。追って沙汰があるまで、そこを動くな。頭を冷やせ！これは命令だ』

通話が切られた後、大佐はソファに腰を下ろしたが、少しも気が休まらなかった。額に手を当て、机に肘をつき、目を閉じて動かさずにいた。

「ナンバーズを……アキラを、守らねばならん。何としても……！」

大佐は低い声で独り言ちると、部屋の外で待機していた部下を呼び

つけた。

「木山博士の所在は掴めたか？」

「はい、第七学区の病院です。しかし……」

「すぐに向かう」

「お言葉ですが、大佐」

立ち上がり、背広の着こなしを整える大佐に向かって、部下がおずおずと言った。

「既に、外にはマスコミが待ち構えています。今出て行かれるのは、得策ではないかと……」

「このまま私が籠ってれば、雲隠れしたと騒がれるのがオチだ」

大佐は言い終わると、歩き出した。

「上から言われた通り、何も行わずとも、『アキラ』は起きるだろう。ならば……私は、できる限りのことを、行う」

「大佐！」

小走りで出口へ寄り、扉を開けた部下が言った。心なしか、声を上擦らせていた。

「私は……大佐が、あのような無謀な命令を下すお人ではないと、信じしております。この基地にいる者全てが、きつとそうでしょう。大佐と同じく、この桜を胸に、誓いを立てている者は」

部下は、軍服の胸にあしらわれた紋章に手を当てている。

二重の盾と、それを飾る桜の紋章。

大佐は、部下の様子をじっと見ていた。

「ならば、私はその信に応えるのみだ」

一呼吸の間を置き、大佐は体ごと部下へと向いた。部下が背筋を一層伸ばす。

「特務警察を……あの黒服共は、今後一切、このフロアに入れるな。奴らに目を光らせるよう、本部の兵たちだけに伝えるのだ。身中の虫に食い荒らされる訳にはいかん」

「はっー」

部下の凜とした声を聞いて僅かに頷くと、大佐は確かな足取りで再び歩き始めた。

昼 —— 第七学区、とある高校

「黄泉川先生——？ちやあんと噛んで食べましたか？無理な早食いは、体に毒ですよー」

「ご心配どうも、月詠センセ」

購買で仕入れてきた総菜パンを2個ほど腹に詰め込んだ後、うがい薬にシロップを混ぜ込んだような味のマウスウォッシュを一しきり口の中で攪拌させ、吐き出してから黄泉川は答えた。

舌足らずな口調で話しかけてきたのは、同じ学年ブロックを組む、桃色がかった髪と小学生と見紛う程の低身長と同僚、月詠小萌つくよみこもえだった。

「いやア、午前中は助かったじゃん。急に合同クラス組んでくれて」「お気になさらずですよー。よくあることですから」

体育教師らしく体格の良い黄泉川と並ぶと、月詠の頭は黄泉川の腰をすこし超える位だ。月詠は黄泉川の顔を見上げ、屈託の無い笑顔を浮かべた。

「ウチのかわいい子ちゃんたちは、元気が良過ぎるのですー。夏休み前の大事な時期に、黄泉川先生のお子様たちに迷惑をかけてなければいいんですが」

「いや、逆に私のクラスの子たちは、普段から大人しくってねえ。月詠センセのトコの元気を、分けてもらってありがたいじゃん」

月詠は、黄泉川の瞳を覗き込んだ。

「……お疲れですねー、黄泉川先生」

「ありや、分かる？」

「目の下、バッチリ隈取りしてますよー」

月詠はそう言うと、懐から煙草を一本取り出す。ここが職場でなければ、未成年と見間違えられて、通報されかねない光景だった。

「昼休みはもう少しあります……ちよつと一服しませんかー？」

その「一服」の間に、月詠の机上の灰皿には、みるみる吸い殻の山ができていく。まるで、成層火山の形成過程をクイック再生で見ている

るようだ。

「タバコ、また値上がりするかもって。私らの懐にはまた痛い一撃じゃんね」

喫煙者向けに支給された、卓上空気清浄機に顔を近づけながら、煙をくゆらせ、黄泉川は言った。

「みんじとう民自党が次の選挙で公約にブチ上げてますからねー。まあ、学園都市の外は、いよいよ喫煙者に世知辛い世の中になってますからねー」
「たった今吸った煙草で山の頂上に噴火口を作り、月詠が言った。」

「月詠センセは、選挙、どっちに入れるの？」

黄泉川が頬杖をつきながら言った。煙草で頭が冴える筈なのに、午前中の騒ぎの後とあって、体全体が何となく重かった。

「与党？野党？」

「正直、どっちも頼りないですが、どっちか選べって言われたら、こうみんとう講民党ですかねー、組合が推してますし、学園都市と本国との関係を、対立から共栄に！って言ってくれてますし」

月詠が新しい煙草を取り出し、火を点けた。

「ただ、あそこの幹事長のルックスは嫌いですけど。ネズミみたいでー」

「名は体を表すってね。何か、こそこそ裏で汚いことしてるって言うか……」

崩れかかって来たファイルの山からこぼれた生徒の答案に灰がこぼれ、黄泉川は急いで払った。学校業務のペーパーレス化が進んでも、黄泉川の持つ書類の山は思うようには消えていなかった。

「もう話が回ってますよー。アーミーがまさかアンチスキル相手に特務警察を差し向けるとは。黄泉川先生が無事でよかったですよ、本当に」

「全くもって、ムカつく話じゃん」

黄泉川は、午前中に踏み込んできた特務警察の黒服達のことを思い出し、気が重くなった。

「与党でも野党でもこの際いいから、ここの治安を守るってんなら、頼むから、言行一致してほしいじゃんよ。本当に……」

自分の灰皿を片付けると、黄泉川は伸びをした。

「黄泉川先生は、かっこいいのですよー」

黄泉川は、月詠からの急な一言に、目を丸くする。

「聞きましたよ。朝のミーティングで、生徒達を守るために何をすべきか、熱く語ったと。自分の信念を通し、大きな権力にもおもねず、正に子どもたちの鑑ですよー。今、何かと騒がしいですけど、今日みたいに、いつだって私にできることは力になるのですよー」

月詠も立ち上がり、手を伸ばして、黄泉川の背中をポンポンと叩いた。

「フアイトなのですよ！先生！」

黄泉川は、同僚からの温かい後押しに、自然と笑みがこぼれた。

「あれっ？上条クンじゃん。どうしたの、眠そうな顔して」

昼休みが終わり、下校前のホームルームに向かう途中、黄泉川は大あくびをしながら背中を丸めて歩く黒髪の男子生徒とすれ違った。

「あ、黄泉川先生……」

「早寝・早起き・朝ごはん・朝ウンチしてるかー？」

黄泉川は、いつもと同じように、生徒へ向ける笑みを作った。

「夏休み間近だからって、生活リズムが乱れちゃあいかんじゃん！」

「う、ウンチは余計じゃないすか……」

「なあーに言ってるん！朝の規則正しい排便こそ、健康な一日の始まりじゃん？」

「はア、ご心配、ありがとうございます」

覇気のない笑みを浮かべて、上条当麻は答えた。

「今日は午後休みですし、帰ったらまっすぐ布団に行って、よく休みます」

「まあ、キミの場合、自学はしてほしいって月詠センスが言ってた気がするけど……まあそう、家路は寄り道しないことじゃん」

黄泉川は苦笑いを浮かべて言った。

「本当なら、まだ午後放課の筈だったんだけどね。爆破事件とか、スキラアウトの活発化とか、最近特に物騒だからね。怪しい宗教の勧誘

も、若者をターゲットに、学生街で相次いでるらしいし、特別に今日は……どうしたじゃん？」

黄泉川の言葉の後半辺りで、上条は肩をびくつと震わせた。黄泉川が怪訝な顔をする。

「い、いえ、なんでもありません……」

その時、上条の後ろから、「おーい、上やん！」と親しく声をかける生徒がいた。

月詠のクラスの男子生徒二人だ。上条と合わせて、名物トリオと、職員室でもっぱら名付けされている。

「あ、黄泉川先生、声かけてくれて、ありがとうございます」

「午後、気をつけてな！調子整えるじゃん」

上条は軽く黄泉川に会釈すると、声をかけて来た金髪と青髪の友人のもとへ去って行った。

「午後か……木の葉通りの、どこだったっけ。セブンスミスト？」

黄泉川は、生徒が下校した後の予定を思い返す。本日二度目のアンチスキルとしての業務、校区内巡回と虚空爆破事件に関する聞き込みに当たる予定だ。

黄泉川は、首を一度回すと、自らのクラスのホームルームを行うべく、歩き出した。

XIV. 竜作

70

——アーミー本部

「申し訳ありません、大佐……。偽の命令書だとは露知らず、このような事態を招いたこと、不徳の致すところであります」

「丙」と背中に黒く大きく印字された防弾ジャケットを身に纏った部隊長が、顔を俯かせて言った。

「何に謝罪する？後悔も……。それらは今、不要だ。責任は私がとる。今は、必要な情報を得たいのだ」

敷島大佐が静かに言った。

「相手は若い女の科学者一人、それだけだった筈だ。しかし、なぜお前達強襲部隊から逃げ遂せたのだ？どうやって？それが知りたいのだ」
「はっ……。我々があのレンタルオフィスに踏み込んだ時、対象は丸腰でした……。いえ、そのように見えました」

「どういうことだ？」

スタン・グレネード

「サイレントタイプの閃光弾だったように思えます、断定はできませんが……。部屋の灯りは始めから薄暗く、我々は入室直後に暗視ゴーグルを装着しました。対象は、ポータブルコンピューターのディスプレイの灯りに照らされて、確認することができました。対象に投稿を呼びかけて、次の瞬間、目の前が真っ白になりました……。全員がそうでした。ゴーグルを付けたことが仇になりました」

「しかし、現場の後処理で、そのような物は見つかったか？」

「いいえ……。痕跡はありませんでした。理由は不明です」

「解せんな……。実弾を撃ったというのは？どのようにして発砲に至った？」

「あの、偽の命令書に、アンチスキルとの協定以前の装備を認める旨があり、我々全員が装備のグレードを上げていました。お恥ずかしい話ですが……。部下の一人が、フラッシュの中で不安に駆られたとのこと。一発、発射しました。対象は、ベランダへ逃げ、隔板を突き破り、

非常階段を通って逃げたものと推測します。外で待機していた4名の組は……ここ、これもまた失態で申し訳ありません、上階の騒ぎに気をとられ、捕縛に失敗しました」

「……その銃は？」

「規定に則り、保管庫に」

「嚴重に保管しろ。後日、軍法会議で槍玉に挙げられるのだから」
こめかみを押さえる大佐を前に、部隊長は、ただ俯くばかりだった。

「妙だと思わんか」

木山春生に対する強襲部隊を率いたリーダーへの聴取を終えた後、大佐は傍を付き従う部下に言った。

「はい。木山春生が、肩に銃創を負った状態で、部隊の追跡、監視の目をかいくぐり、街へ消えた点。庇い立てする訳ではありませんが、『丙』一個小隊の落ち度と断ずるには、些か不自然かと」

部下が自分の意見を述べると、大佐は小さく頷いた。

「その通りだ。しかも、部隊を目眩ましさせる武器を所持していただど？現場の検証で、スチール管どころか炸薬の残滓すら出て来てないというのだぞ」

大佐は、顔を改めて部下へ向けた。

「木山春生が何らかの能力者という可能性は？」

「客員として招聘した際の身分調査では、能力開発を受けたという履歴はありませんでした」

「書庫バンクから照会した情報か？」

「はい」

大佐は僅かに顎を引いた。軍人でもない若い女一人が、痕跡を残さず、手負いの状態で軍の手を逃れたというのが、どうにも不自然に思えた。

「やはり、本人に直接問い質してみるべきだな」

「本当に行かれるのですか？東京からはここに留まるようにと。外にはマスコミの目が……デモ隊共も騒ぎ立てるかもしれません」

「謝罪しに行くのだ。少なくとも、名目上はな」

大佐は言った。

「もしも本人に会えれば、何か掴めるかもしれない。衆目が集まり、病院側に拒まれるならば、それも良い。既に状況は袋小路である以上、泥水を啜るようなマネでもしなければならん。たった一人の怪我人相手に、トップが頭を下げに行くという様にな。

信頼できる部下のみを連れて行く。全員、外行きの恰好をしろと伝えろ」

—— 第八学区、商店街

「……本日午前11時過ぎから始まった、政府・与党及び野党の最高幹部会では、未明に発生した、学園都市第七学区に於ける銃撃事件について、議論が交わされました。この事件を巡っては、学園都市の警備員中央部広報官が、取材に対し、『20代の一般女性1名が銃弾にアンチスキルよる怪我を負って、近隣の警備員支部へと助けを求め、その後病院に搬送された』と述べています。また、事件現場となったレンタルオフィスの近隣住民から、アーミーの特殊部隊が強襲をかけたとの情報が複数寄せられています。政府は現在の所、公式の声明を発表していません。野党側は政府に対し厳しい追及を行ったものと見られ、与党幹部からも、政府が早急に対応すべきとの指摘が挙がったという情報もあります。

会議は現在も続けられていますが、12時30分頃の途中休憩の間に、野党第一党・講民党の根津幹事長は、記者団に対し、次のように述べました。

『まるで第二次大戦中の特高です。学園都市との共存・共栄を掲げる我が党として、断固糾弾します——学生の街、未来ある若者の街の、平和と科学技術を守ると、前々から防衛省は言ってきたんじゃないですか？それが、一般人に向けて発砲を起こしたとなると、これはもう、全く逆で、平和の破壊者と言わざるを得ない——この7月に入ってから、学園都市内に過剰な兵力展開をしているのではないかと、多くの指摘があつた訳です。現地の指揮系統はもちろん、防衛相、ひいては首相の任命責任も、当然問うていくことになる——』

なお、休憩中には、大塚防衛相も姿を見せましたが、報道陣の問いかけには無言を貫きました。また、ある与党筋からは、9月に控える総選挙を前に、春の税制改革を受けた批判による支持率低下が著しい中、これ以上の政権への打撃は避けたいとの声が聞かれ、政府及び防衛省として、軍幹部の更迭を含めた厳しい処置を早めに決断するのはどの観測が流れています」

「それは本当か？竜！」

部屋の片隅に置かれた、古い小さなテレビからは昼のニュースが流れている。その映像と音に背を向け、島崎が鋭い目を見開いて言った。

「アーミーのボスが、病院に見舞いに行くんだあ……」

「ああ。確かな筋からの情報だ」

「根津様か!？」

島崎からの問いに、竜作は頷いた。

「それだけじゃない。統括理事会の筋からも、より詳しい動向を教えてもらえた」

「……あの忍者めいた奴か」

パイプ椅子に座る竜作は、島崎の方へ少し身を乗り出し、語り始めた。

「あの大男は、あと30分もすれば、第七学区の病院に姿を見せる。目立たないように、周囲には数名のお付きしかいない。あの街には、アーミーがアンチスキルと合同警備を敷いているが、今、あいつらは犬猿の仲だ。その辺の学生だって知ってる。その上、兵隊どもは今、アンチスキルと同レベルの武装しかしていないことになっている。未明の発砲事件の後だ、余計慎重にならざるを得ないだろう」

「つまり……これ以上ないチャンスだな」

島崎の声には期待感が満ちていた。竜作は、テーブルの上で組んでいた手を改めて握り直した。

「根津様が、もう各労組に動員をかけてくださった。病院の周辺、学生街でデモンストレーションが始まろうとしている。俺たちはそれに

紛れて、隙を見て、奴を仕留める」

「あいつも所詮、凶体ばかりでかい、能無しだったな」

島崎がせせら笑った。

「実験体には逃げられるわ、部隊には無茶な命令を出すわ……いや、それとも指揮系統がぐちゃぐちゃなんじゃねえのか？ 挙句の果てに、今のニュースの感じだと、中央からも切り捨てられるみたいだしな」

「ああ、俺たちが引導を渡してやろう」

「ちよつと待って、竜」

立ち上がった竜作に、ケイが声をかけた。額には、トリックアート偏光能力の男と戦った際の傷を示す湿布が貼られている。

「第七学区で、攻撃を？ あそこは学生街だよ。今までデモだつて大々的にやったことはなかった筈。学生にどう見られるか……」

「ケイ。今、この学園都市では、若者から老人まで、みんなアーミーを敵視している。いや、いずれそうなる。奴らは一般人に銃を向ける、鬼畜だとな。だからこそ、同志たちが声を上げようとしているんだ」

竜作の答えに、ケイは一步近づいた。

「アーミーは私だつて憎い。けど、私が言いたいのは……」

目を伏せたケイに対し、竜作が少し苛ついたように肩を揺らした。

「なんだ、どうした。お前らしくもない。時間がないんだぞ」

「……今、ジャッジメント風紀委員も多く外の警備に駆り出されている。学生の能力者ばつかりの街で、デモ隊には能力者を敵視する者も多いはず。そんな街中で、下手に狼煙を上げれば、思った以上の混乱を招くかも。それは、私達の首を絞めかねないんじゃない——」

「ケイ！」

竜が大きな声を出し、ケイはびくつと肩を震わせた。

「いいか、革命成就へ向けた大きな一步を跨ぐ、二度とはないチャンスかもしれないんだぞ。あの大佐は、遅かれ早かれトップの座から降ろされる。その後では遅い。我々の力を示すには、今しかないんだ。この学園都市の外では、今も大勢の同志が、官憲にその身を踏み躪られているんだぞ！ お前がそんな弱気でどうする！」

竜作は、部屋の扉を指差して言い放った。

「チヨコさんに連絡を取れ。すぐに武器が要るとな。すぐだ！」

ケイは目を伏せ、青痣が残る腕で一度拭うと、無言で部屋を出て行った。

「……珍しいな」

「ああ」

島崎の言葉に、竜作が短く答えた。

「ジャツジメント連中と、深く関わらせ過ぎたか……まだまだ、アイツも子どもなんだ」

「いや、お前だよ、竜」

島崎が腕組みをして、竜作をじっと見た。竜作は島崎へ顔を向けた。

「あんな風にケイちゃん相手に怒鳴るなんて。妹さんと同じようにかわいがってたじゃないか」

竜作は暫しの間、黙った。

「……帷子は妹だ。そしてアイツは……ケイは、妹の代わりにはならないさ。もう、革命の戦士なんだ。そうじゃなきゃ、困るんだ」

竜作は小声で言うと、帽子を被った。

「行くぞ、時間が惜しい」

——第七学区、木の葉通り ネットカフェ「ビーナス」

介旅初矢は、ディスプレイに映し出されるネットニュースの記事に、充血した目を走らせていた。

タバコ税増税……総選挙……夏休みを前に、治安悪化を受けた短縮下校措置をとる学校……アーミーの不祥事……

「……連続爆破事件」

介旅は息を呑んだ。名前こそ出ていないが、第七学区内の男子高校生を重要参考人として手配しているとの記事が出回っている。

介旅の手が震えた。

掲示板サイトやSNSを覗こうものなら、自分の顔や住所が晒されているのでは？

介旅には心当たりがあった。日曜日に、帝国に囚われた風紀委員の

少女に、ドラッグと見せかけ、ただの炭酸ジュースを飲ませた。縛られた小柄な女の子を前に、罪の意識が芽生えたのだった。その日の夜すぐには帝国からの追っ手を避けて、寮には帰らなかった。明け方に寮に戻ってみると、自室の扉にはペンキのようなものでデカデカと脅し文句が書かれていた。

——帝国ヲ裏切ル者。非国民ニ天誅下ス——

文字から垂れた跡が生々しいその文句は、およそ100年も前の戦争時代を思い起こさせる古臭いものだったが、小心者の介旅の心を折るには十分だった。

それから二日。介旅はこのネットカフェの狭苦しい個室に閉じ籠っている。

こんなはずではなかった。

自分の何がいけなかったのか、介旅は幾度となく自問した。

ジャツジメントに反感を持ったことだろうか。自分から日ごろ金を巻き上げるいじめっ子たちに、なすすべなくやられていたことだろうか。それとも、帝国の誘いにのり、レベルアップによって望外な力を得たことだろうか。今更、女の子一人を救おうとした所で、遅かったのだろうか。

こっそり食料を買いに出た街中では、アンチスキルだけでなく、迷彩服のアーミーまで大勢警戒をしていた。

どの道、自分に逃げ場はない。

ならば、帝国に捕まるのが先か、アンチスキルに捕まるのが先か。アンチスキルに捕まれば、停学はまず間違いないだろう。下手をすれば退学、いや、ゲリラ紛いのテロ騒ぎを起こしたのだ、素点を大きく引かれて、普通裁判かもしれない。

ならば、帝国は？

介旅は身震いした。第一九学区の旧スタジアム跡で、自分の隣の男が、幹部の念動力テレキネシスによる責め苦を受けていたこと、彼の骨が砕かれる音と悲鳴を思い出した。

「くそっ」

介旅は悪態をつき、ポケットに手をつ突っ込んで塞ぎ込んだ。

すると、ふと片手に触れる物があつた。

掌に乗っていたのは、一錠のカプセルだった。スタジアムで、一度だけ会った、「鉄雄様」から受け取った物だ。

「クスリ……そうか」

帝国の連中は、どういう訳か、まだアンチスキルにアジトを知られていない。ならば、自分がその情報を携えて自首すれば？

そうすれば、自分の罪も少しは軽くなるかもしれない。このカプセルだって、奴らが違法に取引している証拠として扱われるだろう。

逡巡した後、介旅は決意を固めて、部屋の扉の前に立った。

その時、扉が外側から開けられ、見覚えのあるパーマがかつた前髪とネクタイ姿の男が待ち構えていた。

「探したぜエ、量子変速サンよオ」
シンクロトロン

介旅は、自分の内臓が全て一気に地面に落ちる感覚がした。

「た、隊長……」

隊長の後ろから、帝国の構成員が数名、狭い室内に押し入ってきて、あつという間に介旅をリクライニングソファに押し付けた。

「あの廃ビルで、『鳥男』に外ばかり見張らせていたのは迂闊だったぜ。お前の心の内を読ませるべきだった……このクソ裏切り者が」

ビニル革に顔を押し付けられ、介旅は息苦しかった。自分の涎が黒革の上でヌメリと光っている。

辛うじて横目で様子を伺うと、視界には一本の細い物が見えた。

注射針だ。

「カクテルで飲ませようとしたからごまかしがきいたんだよな。なら、やっぱ直にニンク射つとくのが一番だよな。お前はこれから、ジャンキーになって、この街へ繰り出す。それで、適当にその辺でイカれる。恥も外聞も曝け出せよ。そうそう、なんなら、能力使つてその辺ぶっ飛ばしたっていいんだぜ？ ネットに動画、生配信してやるよ！ バズるかなア？ オイ」

こんなはずではなかった。

押さえつけられた片腕に、静電気のような痛みを感じながら、介旅

は自分の運命を呪った。

午後 —— 第七学区、学生街

「こ、こんな騒ぎになってるだなんて、聞いてないですよ、黄泉川先生……」

不安を隠さず、鉄装綴里が黄泉川愛穂に向かって言った。

「鉄装は見た事ないんか……まあ、私も色んな騒ぎの現場に出くわしたことがあるけど、この学生街で反政府デモとはね、初めて見たよ」

嘆息して黄泉川は返事をし、目の前の光景を改めて見回すと、目を細めた。

「いや……政府だけじゃないか。色んなものに矛先が向いてるじゃん」

休日ともなれば若者で賑わう、商店街の大通り。今、黄泉川達の目の前を覆い尽くす人並みは、休日のそれよりもずっと密度が濃く、流れは常に一方へ向かっていた。20代から30代の大人、中には40代と見られる者も少なくなく、ほとんどが男性だった。それぞれが思いの旗やプラカードを掲げ、一方向へ向かって氣勢を上げながら歩いていく。書かれ、叫ばれる文言は、昼の速報で流れたばかりのアーミーの銃撃事件への抗議、税制の改悪の糾弾、労働環境の改善、ストライキ決行、来年に控えるオリンピックの中止要求など、主に政府や都政、資本家に向けられた物が目につく。木製の看板を手に歩く者も多く、柄の先でアスファルトの路面を叩く音は、無数のマーチングブロックを鳴らすようだった。しかし、黄泉川は別のことが気がかりだった。

「あれを見ろ、鉄装……あの赤いプラカード」

「……能力者優遇反対!?!だって、ここ、学園都市ですよ!?!」

「歩いているのは外から来た出稼ぎの労働者たち。学園都市の能力開発とは縁もゆかりも無い人々さ。来年のオリンピックで、学園都市が大覇星祭と抱き合わせて、能力行使によるデモンストレーションを行うことになってるだろ?そのために、今、インフラ整備の特需で、外からの労働力の受け入れが緩和されているからね」

「でも、だからって、なんで反能力者を訴えるデモを？ 訳が分かりません」

「私たちや、子どもらにとっちゃその通りじゃん。ただ、急速に進むこの街全体の再開発は、いくら自動化が進む学園都市といえども、結局人力に頼らざるを得ない規模まで膨らんじゃってる。しかも、開発を請け負う大手ゼネコンは、下請けにその仕事を流し、流された側が更にそれを別の企業に請けさせる……多層に渡って色んな連中が甘い汁を吸いに飛びついてる所為で、設備投資や人件費に金が回らず、現場の労働者はかき集められた方がいいが、劣悪な環境で働かされていることも珍しくない。それに加えて、外の人ってのは、この能力者の事を化け物扱いする、差別意識が根強い。そうして、不満は行政や雇用主だけでなく、より身近なところ、つまり、外の世界を知らない、子どもたちに向けられる……」

この日は、七学区内の多くの学校が、グラビトン 虚空爆破事件を始めたとして、国の活動の激化を受けて、午前放課にしている。当然、学生に対して、黄泉川たち教師は、寄り道せず、まっすぐ家に帰りなさいと口酸つくく言っていた。しかし、道路の両脇や店舗の中には、若者の姿が多い。一足早い夏休みを楽しもうと街に繰り出した若者たちは、普段目に見えないデモ隊の戦列へ出くわし、怪訝な視線を送っていた。

俄かに、黄泉川たちから少し離れた場所が騒がしくなった。路肩に駐車している内にデモ隊の列に呑まれたのだろう出前配達運転手が、デモ参加者数人に取り囲まれていた。

「まずいな、行くよ、鉄装」

黄泉川が駆けだし、ハイ、と慌てて返事をした鉄装が続く。

「我々は、労働者の権利を勝ち取るため、断固抗戦するのみ！ 妨害は許さん！！」

「ハイハイ、そこまでそこまで！ お兄さん、なんかお困り？」

黄泉川は困り顔の運転手の前に立ち塞がり、詰め寄っていたデモ参加者に向き合った。額に「ゼネスト貫徹！」と書かれた白い鉢巻きを付けた男は、ギラギラとした目で黄泉川を睨みつけた。

「アンチスキルか。理事会、政府の手先が邪魔立てするか」

「この人が、あなたらになんかしたんですか？ 仕事中のドライバーのようだけど」

口角泡を飛ばす相手に向かって、黄泉川は平静に聞く。感情が昂る人間の対処は、普段からの教師として、またアンチスキルとしての仕事柄、慣れたものだった。相手は運転手を指差して大声を出した。

「抗議活動をやめろと脅迫をかけて来た！これは、表現の自由と、争議権の侵害だ！」

「んなことしてないっすよ。俺はただ、次の配達先があるのに勝手にバイクをどかされてたから、やめてくれって頼んだだけで……」

困り果てた顔で、制服姿の運転手が黄泉川に言った。

黄泉川はため息をひとつと、再び口を開いた。

「この人も、私らアンチスキルも、あんたらの活動にどうこう口を挟むつもりはないよ。限度を守って平和的にやってる限りは、ね」

「その平和を脅かすものへ、我々民衆の意思を突きつけるのだ！」

デモ隊メンバーは、誇らしげに作業着の胸を張った。

「アーミーの司令官だ。この先の大病院へ姿を見せるらしいからな。アンタらアンチスキルだって、アイツらのことは好きじゃねえだろう？」

「分かった、分かったよ、どうぞ、お行きなさいな」

「くれぐれも邪魔するなよ？俺も、誰も彼も、我々は、個人の自由意志でここに居るのだからな」

黄泉川の言葉に、デモ隊メンバーたちはフンと鼻を鳴らすと、隊列に戻り、声高らかに歩いていった。

「……だそうです、運転手さん」

黄泉川は、周囲の喧騒にかき消されないぎりぎりの音量で、運転手に向かって声を潜めた。

「この人らは気が立ってる。しばらくすれば、ここも通れるようになると思うから……」

「なんだよそりやあ」

あからさまに、運転手は残念そうな顔をした。

「アンチスキルだろう？なんかかしてくれよオ、頼りになんないなアもう……」

「あの、黄泉川先生。もっとちゃんと対応すべきじゃ……」
「おずおずと鉄装が言った。」

「だって、今みたいに一般の人の往来が阻害されてるし、私らは何も聞いてないし、無許可デモじゃないんですか、これ？」

鉄装の疑問に、さもありませんといった風に黄泉川は頷いた。

「まあ、許可はとってないだろうね」

「だったら、どうして！」

「よく使う手さ。さっきの男も言ってたじゃん？不満をもつ個人がたまたま同じ時間に、たまたま同じ場所で、たまたま同じ独り言をコールして、たまたま同じ方向に歩いているのさ。これは、組織化された行動じゃなく、個人の集まり。もっと言えば、普段より人通りが多すぎるだけだよね」

「そんな！法律では——」

「道交法の77条、道路の使用許可のことを言ってるなら、確かに学園都市でも適用されるよ？けどね、一般の交通を阻害する状況つてのは、スピーカーやら演説台やらの、大きな、すぐに動かせない障害物を置いた場合とみなすって判例がでちやっつてんじゃん。この人らは人数だけはデカイけど、モノで道を塞いでるわけじゃあないからね」

「……なんか、スッキリしません」

鉄装が不満げな顔をするのを見て、黄泉川は再びため息をついた。
「まあ、私だって気持ちはおんなじよ。これだけ大勢の人間が、すぐにゲリラ的に集められたつてのは、誰かが何らかの号令をかけてるとみて間違いないね……どつちにしろ、下手に刺激して、東京のような暴動になったら、今の段階じゃあ、人数差で私らは押さえ込めない。アーミーがどう動くか……機動隊マルキを出張らせたりして、キナ臭いことにならなければいいけど」

黄泉川はそこで、ふと腕時計をみて時間を確認した。

「道草食っちゃったじゃん、さあ、行くよ」

「えつと……どこでしたっけ」

「しつかりするじゃん、鉄装。デモ隊を観光しにきたんじゃないんだから」

黄泉川は、デモの列が氣勢を上げて歩いていくのとは別方向に目をやる。

「セブンスミスト。パトロールついでに、虚空爆破事件の聞き込み、やんよー！」

黄泉川と鉄装が話している前を、デモ隊の列に紛れて、一人の男と若い女が進んでいく。二人とも、帽子を身に付けている。

「俺はこれから、『ポイント』へ向かう。2時間後に落ち合うぞ」

「……うん」

「さつき伝えた仲間に紛れる。俺がやり遂げても、仕損じても、ためらわず投げろ。いいな？」

「……」

「ケイ！」

怒鳴る竜作を後目に、分かったよ、と腕をひらひらさせたケイを見て、不満そうな顔をしながら竜作は早足で先へ進んでいった。

ケイの視界には、デモの隊列の向こうに、白色の横縞が入ったアーマーを身に付けた人影が、いくつも見えた。

「……警備員……」

本当にうまくいくのだろうか。と、ケイはジャケットの内側に忍ばせた「武器」に僅かに触れながら考えた。竜作の大声が脳裏にこだまし、咽返るような人並みの中で、ケイは自分が孤独だと感じていた。

「れ、超電磁砲!?あの常盤台の、第三位!?こないだ、銀行強盗を丸焦げに焼き上げたという、あの!?!」

「さ、佐天さん、声がいくらなんでも大きすぎますよ……」

デモ隊の喧騒から少し離れた、車も行き交う大通り沿いで、興奮した佐天涙子の声が木霊する。初春飾利は唇に手を当てて、涙子の肩を押さえた。

目の前の少女の昂る様子を見て、御坂美琴は苦笑した。

「あ、アハハ……それほどのことは」

その御坂の後ろから、コホンと咳払いが聞こえる。

「初春……もしか、お友達を連れて警邏活動に当たろう、等とは考えていませんわよね？」

「えーいやア、ほら、上からも指示があつたじゃないですか。虚空爆破の犯人の狙いをかわすために、腕章はナシ、あくまでも、アンチスキルが動いた場合の補助でいいって……」

ジトリと見やる黒子に、初春は頬を掻きながら答えた。

「白井さんこそ、なぜ御坂さんと一緒に？」

「ああ、それは私が——」

「じゅ、巡回先にたまたまお姉さまも用事があるとのことで、同行しているだけですのよ!」

喋りかけた美琴を遮り、黒子が捲し立てる。

「決して、職務を放って、お姉さまの試着の様を目に焼き付けようなどとは露ほども考えておりません!」

「聞かなかつたことにします」

初春は苦笑いを浮かべた。

「よく分かんないですけど……御坂さんも、ここで買い物？」

初春は、青を基調とした建物の看板に目を移して聞いた。

「ここ、フツのチェーン店ですけど……」

「全然いいの! 私ら、外出時は基本、制服着用だから」

美琴は手を振って答えた。

「服はどこだっていいと思ってるよ」

「くウ……常盤台のエースたる御坂美琴さん、レベル5ながら、私たちと同じ視点に立って物をお考えとは……! 感激しましたツ!」

そう言うと、涙子は前に進み出て、美琴の手をがっしり握ると、ぶんぶん振り回した。

「私、佐天涙子っていいいます! 初春の友達です、どうかお見知りおきを!」

「あ、ハイ、よろしく、佐天さん……」

美琴は、涙子の勢いに若干気圧されているようだった。

「ねえ、佐天さん！自分ばかり目立つっちゃダメですよ！」

初春が頬を膨らませて言った。

「今日は、彼女に似合う服を探しに来たんでしょ？」

「あ、ごめんごめん——御坂さん、もう一人、友達を紹介します、ウチの中学の先輩なんですけど——」

涙子と初春に促され、同じく制服姿の、しかし涙子よりも背の小さい少女が恥ずかし気に進み出る。

「あなたは」

先に反応したのは白井だった。

「あの時の！傷はもう大丈夫ですか？」

「なに？黒子、この人と知り合い？」

きよとんとした顔で美琴が聞く。

「え、えっと……カオリっていいいます」

小動物を思わせる上目遣いで美琴と黒子を窺いながら、カオリがわずおずと言った。

「初春ちゃんや、涙子ちゃんから話は聞いてます。白井さん、私を助けてくれて、ありがとうございました」

ぺこりと頭を下げるカオリに、黒子が微笑んだ。

「いえ、お元気そうで何よりですわ。ジャツジメントとして、当然の務めですよ！」

「カオリさんね」

美琴も笑って、手を差し出した。

「こちらこそ、よろしくー！」

二人の手が、ぎゅっと交わされた。

耳元で誰がやたらうるさく息をしているのかと思ったら、それは自分の物だった。それと共に、否応なく早鐘を打つ鼓動が頭にぐわんぐわんと響く。ワイシャツの下の肌着がじつとりと汗ばんでいて、真夏だからこそ汗をかいている筈なのに、かえってひどく寒く感じた。そして両手を抱えると、震えている。止まってほしいが、止まらない。

自分の今の様子は、周りから見たら不審、奇天烈そのものだ。いや、自分は何もおかしな所はない。少なくとも、小一時間前まではそうだった筈だ。何故こんな醜態を晒しているのかと思えば、あの憎たらしい帝国の連中のせいだ。奴らの嘲笑が目には焼き付いている。今度会ったら、最大出力をもって吹き飛ばして、その四肢がペンキのように飛び散る様を眺めてやる。ちょうど、自分の寮の部屋の扉に書かれた脅迫の落書きと同じだ。僕にはその力がある。そんな力をもった自分を、皆が見ている。異物を見る目、好奇の目だ。噂話をしている。きつと悪い噂だ。皆の話し声がハウリングを起こし、エコーを響かせて脳を脅かしている。そして、目。いくつもの目。どうしてそんな目で僕を見るのか。

いつの間にか、腕の震えは全身へと毒のように回り、青虫が這いずっているかのようだ。小学校の時の勉強の中でも、理科が特に好きだった。モンシロチョウの幼虫の観察日記をつける時、学校の菜園に行っては、キャベツの軟らかい新葉を選んで、毎日飼育籠に加えてやった。そして、虫眼鏡で、のそりのそりと動く青虫が静かに葉をこそぎ取る様子を眺めているだけで、心が落ち着いた。なぜクラスメートが、気持ち悪いと敬遠するのか分からなかった。虫がかわいそうだった。

——今の自分の置かれた状況から目を逸らすために、必死で違うことを考えようとしている。でなければ、本気で自分は気が狂ってしまっただろうから。自分を見ている誰も彼もが、あの青虫を遠目に嫌々見ていたクラスメートと同じなのだ。今の自分は、忌み嫌われる青虫だ。

大人に、助けを求めようか……ダメだ、やめた。自分のことを探している。僕を捕まえようとしている。この僕を。

誰も助けにはなってくれない。僕を救おうとしない学園都市など、くその山だ。見ている。

僕には、力がある。

みんな、僕の敵だ。

——第七学区、学生街 アパレルショップ 「セブンスミスト」

「まず、カオリ先輩、スカート絶対似合いますって！ 勇気出して、履いてみましょうよ、ね？」

「そうかなあ……なんか足元が落ち着かなくて……」

「じゃあ、こんなのはどうです？……膝丈のワンピースでひらひらさせつつ、デニムのパンツでビシッと——」

「あつ、いいんじゃない、初春？でもさ、この暑さにちよつち合わないっていうか……こつちならどうでしょう、先輩？」

「そうだね……うん、この明るめの方がいいかな、えへへ……」

「なるほどね、あの人バイカースに襲われたところをね……」

御坂美琴は、店内の休憩スペースに置かれたベンチに座って、白井黒子と話していた。

二人から見える、少し離れた展示フロアでは、3人の同じ制服を着た少女たちが、様々な商品を手に取り、体に合わせてみては、和気藹々と話している。

「ええ。ひどい怪我だった上に、状況が状況でしたから……心にも、きつと深い傷を負ったのでしようけど……あの様子を見ると、思った以上に、お強い方だったのかもしれないね」

活発な後輩2人に、次々に着せ替えられながら、戸惑いつつも控えめに笑顔を見せるカオリの姿を見て、美琴は顔が綻んだ。

「ま、それも、アンタが風紀委員として、あの子を助けたお陰じゃん、黒子」

「私だけの力ではありませんわ」

少し照れ臭そうな顔をしながら、黒子が答えた。

「あの二人……初春と佐天さんがあの場に居合わせて、そして、彼女のために行動してくれたこと。そうして、今日もこうして友達のように連れ立っていること。特に、初春はジャツジメントとしては私の後輩ですが……なんだか、誇らしいですの」

「……うんーそうだね」

温かな表情をしている黒子を見て、美琴は気持ち安らいだ。ここ数日、美琴から見た黒子は、ジャツジメントとしての責務を果たそうと、張り詰めていることばかりだった。そのため、ほんのひと時でも、ここに一緒に来て、3人の少女と出会えて、良かったと思えた。

「二七七支部の、白井じゃん？」

威勢のいい声に、黒子は背筋がピンと伸びた。美琴も声をかけた主を見た。

胸に白色の横縞と、三又の鉾の紋章。紺色の重厚なアーマーに身を包んだ女性のアンチスキルが立っていた。

「黄泉川先生！」

「元気にしてたかい？今月の初めに、バイクーズの取り締まりに当たった時以来だっけ？」

「ハイ。あの時は、アーミーの横槍で大変でした」

「アーミーねえ……連中も大変だし、帝国も……そうだ白井！帝国に襲われたって聞いたじゃん？大丈夫なのかい？」

「全く……この通り、健在ですわー！」

胸に拳を置き、黒子が元氣よく言った。

「あんなダサイ者共に、簡単にやられる白井黒子ではありませんの！」

「私が助けたんだけどねー……」

ぼそつと呟いた美琴の方へ、黄泉川が顔を向けて微笑んだ。

「ああ、超電磁砲レールガン！いそべ銀行の時は、多大なるご協力、感謝するよ」

「あつ、いえ……当然のことをしたまです」

「謙虚だねえ」

感慨深そうに黄泉川が頷いた。

「レベル5とは思えないくらい……ところで、白井も初春も。随分楽

しそうなパトロールだねえ」

「いえ、これは、その……」

「ハハ、冗談じゃん」

しどろもどろになる黒子に、悪戯っぽく黄泉川が笑った。そして、やや顔を黒子たちに近づけ、声のトーンを落とした。

「本来、君らが校外の警備にあたることはないんじゃない。ましてや、犯人はあんたらに目をつけてるっていうのに、警備員の上役共が君らに仕事を押し付けたせいでね……すまないじゃん」

「いえ、そんなことは」

「ま、少なくとも、一般の子どもには、今日は早く帰ってほしいってのは本当だよ。物騒だからね」

黄泉川は、はしやぐ涙子たちの方を見た。

「最近では息苦しい雰囲気だし、羽根を伸ばしたい気持ちは分からんでもないけど……白井からも言っちゃってほしいじゃん。用が済んだらまっすぐ帰宅するように」

「は、ハイ、すみません」

ぺこりと恐縮して頭を下げる白井と美琴を見て、黄泉川は更に近づき、声を潜めて言った。

「……柵川中学のカオリちゃん、だね？」

「ええ……初春たちが連れて来たそうです。前々から約束していたんだって」

黒子も声を小さくして答えると、黄泉川は「そっか」と小さく頷いた。

「元氣そうじゃん、よかった……」

黄泉川は少しの間目を細めて、それから屈めていた腰を上げた。

「……数日、虚空爆破事件の犯行は途絶えている。今日も何事もないに越したことはないんだけど。ただ、外で今、ゲリラ的なデモもやっててね。アンチスキルもそれであたふたしている所があるから、君らもくれぐれも油断しないでほしいじゃん」

「分かりました」

「重力子の急激な加速が検知されたら、私らも動くし、君らの携帯にも

速報がいく。そしたら、まずはその現場を確認して、周りど、自分たちの身を守りなさい。腕章はつけなくていいから。いいね？」

ハイ、と返事する黒子と美琴の様子を見て、黄泉川は満足げに頷き、その場を去っていった。

「銀行強盗がお縄になったと思つたら、帝国に爆破魔に、アーミーの暴走、おまけにデモと来たか……」

「全くですわ。ここはよく学び、よく遊ぶ、健全な学生の街ではありませんの？」

「白井さーん、御坂さーん！」

一緒になつてため息をつく美琴と黒子へ、鬱々とした気分を吹き飛ばすような明るい声が届いた。

「私たち、もう少し奥を見てみますけど、お二人はどうしますー？」

「初春つたら、すっかりシヨツピング気分ですわね……」

まあ、たまにはいいでしょう、と付け加えた黒子の顔は、満更でもなさそうだった。

「……あつちのコーナーには、寝間着が……」

そういえば、パジャマ、最近縮んじやつたっけ。

そう思い出し、美琴は黒子から少し遅れて腰を上げた。

黄泉川は、4ビートのエレクトロポップが流れる店内を歩きながら考えていた。

カオリ。職業訓練校の生徒で、アーミーのラボへと連れていかれ、今は「帝国」のリーダーを務めていると疑われる、島鉄雄の交際相手。あの楽し気な様子では、彼氏がバイカーズ絡みの殺人事件の容疑者として名前を挙げられていることなど、知らないようだったが……。

それとなく、後で探りを入れてみようと、黄泉川が考えていると、血相を変えた様子の相方が走ってきた。

「黄泉川先生！」

「どうしたじゃん？ 鉄装」

片手を膝について鉄装が立ち止まり、息を切らしながら口を開いた。

「1階のフロアで——虚空爆破事件の容疑者——介旅初矢に似た人間を見かけたという、目撃情報が複数！」

「何!？」

黄泉川の表情が一気に引き締まる。重力子の異変を、衛星が感知したという情報は、まだ無かったはずだ。

「奴の所在は？」

「それが——」

鉄装が何か言いかけた瞬間、黄泉川の背後から、甲高い悲鳴が聞こえた。黄泉川は、背中に悪寒がぞくりと走るのを感じた。

—— 第七学区、病院前交差点付近 雑居ビル

「協力、感謝する……同志」

神妙な面持ちで頭を下げる竜作に対して、初老の男が顔を俯かせた。

「……まさか、ゲリラに協力する日が来るなんて思わなかったよ」

静かに、男が語った。

「このビルの1階に入ってる古書店の本はな、弟が東京でやってたのをそのまま譲り受けて来たんだ。検閲が入ったもんで、随分苦労したよ……政府が強行しやがった税制の改変、あんたならよく知ってるだろう？出版業界だつて無関係じゃなかった。本つてのはな、一度にどでかい数を刷るもんだから、税抜きで価格表示するのが業界の常識だ。そうだろう？食べ物とは訳が違うんだ。総額のシールを全部一から貼れって押し付けられたら、俺たち零細の出版社はたまつたもんじゃないんだ。それを……弟は、アイツは、ただ、考え直してくれて、署名の発起人に名を連ねただけなのに……特務警察に連れてかれちまった。それで、もう長い間、会わせてもくれねえんだ。この国はいつからこうなつちまつたんだ？」

「……あなたのお気持ちは、痛いほどに分かります」

竜作は、ゆっくりと言った。

「あなたのような市民が抱える耐え難い痛みを、権力に胡坐をかく奴らへの一矢として必ず報いとして、放ちます。お力を貸していただ

き、感謝に堪えません」

「……どのような結果になろうと、確かなのは、俺はこのまま黙り込む訳にはいかないってことなんだ」

拳を握り、男が言った。

「外で大勢の人が声を上げているように、これが俺なりの叫び方だと思ってくれ。頼んだよアンタ」

男はそう言うと、自分の背後にある2つのスーツケースを指差した。

竜作は今一度、自分が今いる雑居ビルの主に向かって一礼すると、スーツケースを両手に階段を昇り、上階の書庫へと入った。そこでは、うず高く積まれた書籍の数々や、それらが押し込められた段ボール箱、古い印刷機などで溢れ、部屋に置かれた物、床、空気までもが薄く埃をまといっているようだった。

竜作は、紙片が散らばった床を進み、軋む重い窓を僅かに横へ開けた。

巨大な白い建物——学園都市のアーミー駐屯部隊のトップがこれから訪れるという、病院が見渡せた。駐車場に向かって飛び出した正面玄関が、はつきり見える。駐車場から手前のゲート前には、複数の車線同士が交わるT字型の交差点があり、竜作がいる雑居ビルの側には、既に大勢のデモ隊が横断幕を掲げ、司令官を待ち構えていた。その相向かい、病院側の歩道に人通りは少ないが、病院の警備員や少ない人数のアーミーの哨戒兵が、困惑した表情で立っていた。デモの事前情報は伝わっていないようだ。

竜作は、スーツケースを2つ、床に置くと、それぞれの中身を取り出した。

ゴトリ、と重たい金属の音が、僅かに埃の積もった床に伝わる。

片方のケース入っていたいくつかの部品を組み立て、塗装が至る所剥げたデスクを窓の前に移動させ、組み立てた物を、三脚を使ってデスクの上に設置する。人間の足首くらいの金属製の筒に、更に4つの金属製の箱が、一見規則性なく取り付けられている。黒色の箱型であるその上部にはそれぞれいくつかつまみが付いていて、ストリートラ

イブで使うポータブルアンプリファーのようだった。

竜作は、一際太いケーブルを、もう一つのスーツケースに収められたバッテリーに接続した。

統括理事会のあるメンバーの配下だという人物から支給された、学園都市で開発中の、プロトタイプの狙撃銃。銃というよりは、砲おぼづつと言った方がいい、その口からは、電磁石の原理を利用してスチール製の弾丸が反動もなく放たれるのだという。

竜作は、そつとその銃身に触れた。咽返るような部屋の空気の中、無機質な冷たさがはつきりと竜作の指に伝わって来た。

—— セブンスミスト 店内、2階

佐天涙子が悲鳴を上げ、初春飾利が泣きそうな顔をして口に手を当て、白井黒子とその隣に警戒心を露わにしながら空間移動した。パジャマの展示の前で、なぜかこの場で出くわした顔見知りの男と口論していた御坂美琴も、振り返った。黄泉川愛穂が、仲間と共に駆け寄って来た。ほかの客も、固唾を呑んで状況を見守っていた。

「誰も動くな!!」

茶色がかった長い髪を振り乱した、眼鏡姿の学生風の男が、叫んだ。片手に銀色のフォークを握り締め、その切っ先を一人の少女の首元へ当てている。そして、もう片方の腕で、少女を抱え込んでいる。

「動くなつてば……お前ら、みんな僕の敵だ……!」

ひどく汗ばんだ腕で締め付けられ、カオリは息が苦しくなった。

視線を上に見えた男の顔は、目が飛び出そうなるほどに必死の形相で、どこか泣きそうにも見えた。

この人、どこかで会ったような。

息苦しさと恐怖、戸惑いに混ざって、そんな場違いに冷静な感想が、カオリの頭をよぎった。

数分前

「何やってんだよ、お前」

全身ミラーの前で、御坂美琴は目を丸くしてひどく赤面した。かわいらしいピンクや水色の花柄が添えられたドット模様のパジャマを自身に合わせている最中に、突然聞き覚えのある声がかかってきたからだ。

美琴はパジャマを後ろ手に隠しつつすぐさま振り返り、たった今声をかけてきた、スパイキーな黒髪の男に向かって振り返った。

「な、何でこんなところいんのよ、アンター！」

「いちやワリいかよ……通りすがっただけだって」

上条当麻は「声なんかかけるんじゃないやなかった」とでも言いたげに眉を顰め、通路の先を指差した。

「俺が用あんのは上のフロアだよ。階段があっちなんだから」

「階段？エレベーター使えばいいじゃん」

美琴が怪訝そうに言う、上条は首を振った。

「今点検中なんだと……好きで女性物のフロアを通ってる訳じゃねーぞ」

そう言う、上条は早々に立ち去ろうとする。

「ま、待ってよー」

美琴が上条の背中に向かって言った。なぜか、自分の声が僅かに上擦っているのを感じた。

上条が怪訝そうに振り返る。その顔を見ると、美琴はなぜ待つように声をかけたのか、理由がないことに気付き、口をぱくぱくさせた。

「何だよ」

「アンタ……昨日の今日で、お金ある訳？ちゃんとカード使えたの？」

美琴は咄嗟に思いついたことを言う。上条が何度か素早く瞬きした。

「そりや……お前が心配することじゃないだろ。お陰様でね、こちらからカードが使えなくなつて大変で——」

「使えない？」

美琴が聞き返すと、上条はバツが悪そうに顎を引いた。

「だって、カードは無事に出て来たんじゃない？」

「いや、それは、お前があそこで電撃流すから！」

「じゃ、何で尚更服なんか買いに来たの？」

「そりや、貧乏学生と言えど、穴のあいた服をいつまでも着る訳にはいかねーだろ」

「そうじゃなくて、お金はどっから？」

弱みを突かれたような上条の様子を見て、美琴は意地の悪い笑みを浮かべて詰め寄った。

「なんか、怪しくない？」

「——ツか、関係ないだろ！」

上条が詰まりながらになって言い返した。

「お前こそ、あの騒ぎの後だし、コンビニのATMの修理代は当然弁償するんだよな!？」

「えっ」

今度は、美琴が虚を衝かれたように身を引いた。

「えっと……し、しなくていいって、店長が……」

「はア?どういうことだよ」

上条が面食らった顔をした。

「そんなの、私に聞かれても!ただ、店長さんが、『元々明日にでも交換予定だったから、構わない』って、言ってくれたから……」

「いや、おかしくね?そんなうまい話あるか？」

理由を言い立てる美琴に、上条が腕組みして疑いの目を向けた。

「お前、白服のジャッジメントに事情聴かれてただろ?何もお咎めなしだったのか？」

「白服……ああ、この辺じゃ見ない制服だった。て言うか、何が言いたいの？」

上条が美琴の問いにすぐには答えず、じつと見つめたので、美琴は

頬に熱が上るのを感じた。

「……やっぱりそうか」

暫くして、上条はひとり頷いた。

「やっぱりって、何？」

「何となく分かったぞ。あの雛祭りばーちゃん、手を回してたつてことか」

「あのきアー！」

上条の様子が、一人で勝手に納得しているように見え、美琴が苛立ちながら言った。後ろでパジャマのハンガーを握る手が、微かに汗ばんでいた。

「何が言いたいのか、はつきりし……？」

美琴は、憤りの言葉を途中で遮った。上条の背後から、髪を振り乱した学生風の男が駆け抜けていったからだ。

「……なんだ？」

上条が呟いた。学生風の男は、辺りを忙しく見渡してから方向を変えて、フロアの中心へ続く狭い通路を走っていく。

「おい、止まれ！」

今度は、防護服に身を包んだアンチスキルが2名、追い掛けて来た。

「……なんか、嫌な予感がする……」

胸騒ぎがした美琴が、ぽつりと呟いた次の瞬間、女性の悲鳴がはつきりと聞こえた。

フロアの中央寄りの売り場では、カオリが一人、美琴と同じように、商品を鏡の前で自分の体に合わせていた。

ぼさぼさの前髪が目にかかる、中学3年生にしては幼い顔と、夏の澄んだ空をそのまま垂らしたような水色の夏服とが、カオリの目にはひどくギャップを生んでいるように見えた。

「ワンピースかあ……」

涙子や初春が、絶対似合うと言ってくれた、その言葉を反芻しながら、カオリは体を左右に少し揺らしてみた。

薄手の生地が、店内の照明を受けて、控えめにきらりと光った。

こんな風に、新しい服を選ぼうとするのはいつぶりだろうか。

小学校を卒業したところから、大して体格が変わっていないカオリには、久しぶりの感覚だった。

こんな機会を作ってくれた、涙子と初春には、感謝のきもちでいっぱいだった。そして、とても久しぶりに味わう友達という感覚に、胸がずっと温かく高鳴っていた。

それに、服を合わせている自分の姿を見ると、それまでの高鳴りとは別の震えも感じる。

「鉄雄君、喜んでくれるかな……」

「せんぱーい？カオリせんぱーい！」

涙子の明るい声が聞こえ、カオリは商品を元に戻した。

「ああ、ごめん、今行くよ」

カオリも声を張り上げて、振り向いた所で、足が急に竦んだ。

目の前で、学生風の少年が息を荒げて立ちはだかっていたからだ。

「あつ、あの……」

「僕は悪くない……悪いのはみんなだ」

「え？」

聞き返したカオリに向かって、ギラリと、少年の手に握られた何かが煌めき、向けられた。

現在

「動くなって言ったんだ！」

口から唾を撒き散らし、介旅初矢が目を見開いて叫んだ。徹夜明けのように、奇妙に充血していた。

「アンチスキルも、ジャツジメントも！全員だ！」

「介旅君だね？——待ちなよ。攻撃なんかしないじゃん」

何も持たない手を挙げて、黄泉川は敵意が無いことを知らせようとする。しかし、介旅は片腕の力を更に強くし、カオリの首を締め上げた。

「嘘だ！信じられるか！お前ら——お前らは、今まで何度だって、僕を助けなかった癖に……」

カオリの両手が介旅の腕を搔きむしり、爪痕から血が滲んだが、介旅はまるで意に介していかないようだった。

「オーケー、オーケー！」

黄泉川は自分の両膝を床に付き、正座する形になった。それから、周囲を見渡して叫んだ。

「みんな、一旦退いて！」

「でも、黄泉川先生——」

「いいから！」

鉄装を始め、黄泉川と駆け付けた数名のアンチスキルの仲間も、黄泉川の指示を受けて、介旅から距離をとり、武器を持っていないことを示すために両手を空けた。

まずいな。黄泉川は急激に焦りを募らせた。介旅の様子は尋常ではない。『帝国』がバラ撒いているというドラッグでもやっているのか、まともな話ができる状態ではないと判断した。しかし、だからといって、介旅が爆発を引き起こす演算もできない、という保証にはならない。少なくとも、カオリの首筋に当てているのは、明らかにアルミ製のフォークだ。その気になれば、介旅はいつだって、重力子を加速させ、カオリはもちろん、このフロアの広範囲を吹き飛ばせるかもしれない。そうすれば、介旅自身も無事では済まないはずだが、最早彼は自暴自棄なのだ、黄泉川には分かった。

刺激しないことが最優先だが、彼はアンチスキルやジャツジメントを目の敵にしている。どうすればいいのか——。

黄泉川は、何か解決策が無いかと、思考を必死に巡らせた。

「どうしよう、初春、どうしよう！——先輩が！」

前触れもなく、急に人質に取られたカオリを見て、冷静さを失った涙子が何度もくり返して言った。初春は涙子の手を握るが、何も言えずにいた。

そんな2人の横から、黒子が進み出て、介旅をするどく見つめた。

「その人を放しなさい！」

黒子の凜とした声が響き、介旅も、初春と涙子も黒子の方を見た。

周囲のアンチスキルも、俄かに体を動かした。

「なんだ、お前！」

介旅が叫んだ。

「お前も、僕の敵なんだろう!？」

「ジャツジメントですよ！」

片腕に腕章は無くとも、黒子の声色は変わらなかつた。

「あなた、帝国の手先ですわね。その人は関係ない、放しなさい」

「白井！やめるじゃん！」

黄泉川が焦りを含んだ声で呼びかけた。

「彼の狙いを分かかって!? 私らに任せて！」

「じゃ、ジャツジメントだと！」

介旅が更に激昂する。

「な、なら、尚更、敵だ。僕を救わない、お前らが悪いんだ!!」

「ええ、あなたが、私たちジャツジメントを狙っているのは知っています」

黄泉川の呼びかけには敢えて答えず、黒子はゆっくりと介旅へと歩を詰めていく。

「なら、私が代わりますわ。その人を放しなさい」

「ダメ、白井さん！」

「黒子！やめて！」

初春が、切羽詰まった声で黒子の後ろから言い、それとほぼ同時に、別方向から駆け付けた美琴が叫んだ。美琴の後ろには、黒子もよく知るツンツン頭の少年が一緒だ。しかし、黒子には今、そちらに取り合う暇はなかつた。

「そうだよ……白井さん」

介旅に捕まっているカオリが、息も絶え絶えに言った。顔が紅潮している。

「私なんかのために……みんなを連れて逃げて」

「大丈夫ですわ。カオリさん」

黒子は毅然と、しかし優しい声色で言った。

「もう誰も——私の知っている人に、傷ついてほしくはないのです」

「お前、何を言ってる！今まで散々痛い目に遭ってきたんだ。この僕の気持ちなんか……」

介旅は言いかけて、急に言葉を止めた。充血した目を、まっすぐに黒子に向けている。

「……きみ、無事だったんだ……」

「ええ」

黒子が静かに答えた。

「あなた方、帝国の手に落ちる程、この白井黒子、ヤワじやありませんの」

「そうか、そうだったんだ……」

何かを悟ったように、急に静かに介旅が言った。カオリの首筋に突きつけているフォークを持つ手がより大きく震えている。

「そうだもんな……知る訳ないよなア、僕のことなんか」

「生憎と、帝国で働く爆弾魔さんのことなど、然程深く存じ上げませんわ」

黒子が、じりじりと歩み寄りながら言い放った。

「……なら、もう終わりだ」

黒子にさえ聞こえないくらいの声を、カオリは確かに聞いた。

自分を締め上げる介旅の腕に、ぽとり、と雫が落ちるのを、カオリは見た。

「全員、よく聞いて」

介旅が黒子と問答をしている間を見計らって、黄泉川が襟元のインカムをオンにし、口をほとんど動かさずに喋った。

「対象は薬物による興奮状態の可能性が高い。説得は断念。私が発音筒を転がす。合図するから、鉄装と島辺は、人質の少女を引き離して。残り全員で、シールドを集中させて、確保する」

「でも！音で人質が傷つく可能性は……」

「重力子の加速を始められたら、あたしら諸共みんな吹き飛ばし！」

鉄装からの反論に、黄泉川は早口で答えた。

「一刻を争う。演算を始める前に、やるよー！」

黄泉川は言うが早いのか、慎重に身を後退させた。

「潮騒、貫うよ」

「了解」

同僚の男性警備員の背囊から、黄泉川は発音筒を静かに取り出した。

やっぱり、いつもこうなんだ。

カオリは、息苦しきの中でぼんやりと考えた。

恐怖よりも、今は妙にふわふわとした不気味な感覚が頭の多くを占めていた。足が床についているのかどうか、分からなかった。

自分は、いつも悪いことに巻き込まれる。

その度、誰かに助けてもらおうとする。

今だってそうだ。白井さんやアンチスキルの先生たちに助けてもらおうとしているし、涙子ちゃんや初春ちゃんを心配させている。

私って、ダメだなあ……

「何だよ、何言ってるんだよ」

別に。

ただ、自分はある日、流れで死んでしまっただろうなって、何度も思ってきた。

苦しい思いもいっぱいしてきたし、嫌な思いもたくさん。

「……そうか、僕とおんなじか」

うん。

だから、あなたがここで私を殺したって、仕方ないのかも。

私が、死んじやってもいいなんて、簡単に思ったから。

きつとバチが当たったんだ。

「どうなんだろうな……僕も、ひどいことをしてきたから、そうなのかも」

でもさ。

思っちゃったんだよ。

楽しかったなあ、幸せだなあって。

友達らしい友達ができて。

私を、ひとりの人間として見てくれて。

「……やっぱり、僕とちがうな、君は」

……でもね、ごめん。それでも、今は、死ぬのは怖い。

「ダメだ」

死にたくない。

「ダメだ！君も、僕も……みんなここで死ぬんだ！道連れにしてやる！」

生きたい。

もつと、いろいろなことをしたい。

楽しいこと、幸せなことに会いたい。

助けて。

誰か。

助けて。

助けてほしい——

……鉄雄君！

「まずい！」

空気を吸い込むようなシューツという音が聞こえ始め、美琴は嫌な直感を感じ、手を伸ばした。

なんとか、カオリを巻き込まない形で電撃を放ち、あの男を倒す。

上条はダツと駆け出した。

右手を精一杯、介旅に向けて伸ばす。

どこか上の空の眩きが続ける介旅を見て、「今だ！」と感じた黒子は、太腿に忍ばせた金属ピンに手を伸ばす。

間もなく訪れるであろう惨状を予想し、初春と涙子は息を呑む。

「五、四、さん——」

能力を行使し始めたことを察した黄泉川は、できるだけ静かに、しかしはつきりと数えながら、発音筒のピンに指をかける。

突如、その誰もが、ぴたりと動きを止めた。

「あああああ!!」

介旅が苦悶の叫び声を上げながら、左手を顔の前に上げて驚愕の表情を浮かべていた。

手首から先が、あらぬ方向に折れ、すっかりと力なくぶら下がっている。

フォークが床にカツンと音を立てて落ちた。

ほかの誰もが、介旅のすぐ傍に突如現れた人影を凝視していた。

介旅に向かって、片腕を伸ばしている。

「……て、」

てつおくん。

カオリが声を漏らした先には、逆立った髪の毛、小柄な少年、島鉄雄が立っていた。

第七学区——病院前交差点付近、雑居ビル

「……遅い」

竜作の呟きは、埃臭く重みをもった部屋の空気に押し潰されるようだった。

竜作が狙撃の準備を整えて待機している部屋は人の出入りが少なかったのであろう書庫であり、うず高く積まれた紙の束から漂う黴臭さが、効きの悪い空調と相まって、竜作を圧迫していた。その上、竜作が今手をかけているプロトタイプの狙撃銃はバッテリーからの通電を必要としており、排熱で更に部屋の温度が上がっていた。引つ切り無しに目に染みる汗を、その度に竜作は拭わなければならなかった。いつそ目の前の窓を全て開け放つてしまいたいが、踝程の太さもある狙撃銃が目立たないようにするため、開け幅は最小限に留めるしかなかった。

今、道向かいに見える大病院のロータリーには、黒塗りの高級車が停車している。事前情報で得た特徴通り、その車内には、アーミーの駐屯部隊の指揮官が乗車している筈だった。車が通用口前に横づけされてから、5分は経っている筈だが、一向に人が降りてくる気配が無い。機を逃さないため、屈んだ体制でスコープを覗き続けていた竜作だったが、いい加減に痺れを切らし始めていた。

じわりじわりと肌を阻む暑さの中、病院の前でデモ隊が上げる声が経の様に感じられる。いつもならば竜作の心を昂らせる筈のシュプレヒコールも、この時は集中を乱す喧騒としか感じられなかった。

突然、携帯電話がイヤホン越しに着信を告げる。竜作は横目で画面を見て相手を確認すると、応答した。

「……まだだぞ」

『竜。悪い知らせだ——空振りかもしれねえぞ』

「何だと?」

通話相手の竜の仲間、島崎が告げる。彼は今、竜作とは別の場所から、万一狙撃が察知された場合に備えて監視している筈だった。

「アーミーとアンチスキルの通信を傍受した……ここから西の学生街でテロ騒ぎがあつて、その対応にあの大佐が当たるらしい」

「悪いが、お前の言うことはよく分からん」

苛立ちを滲ませ、スコープを覗き込みながら竜作が答えた。

「なぜわざわざアーミーのボスが陣頭指揮にあたる？ここまで来ておいて」

『それがだな、竜。噂の新入りの実験体だ……41号と呼ばれる少年が現れた。そのテロ騒ぎに絡んでいるらしい』

「バイクアズ上がりだつていう奴か——おつと」

島崎と話している途中、スコープの向こうで、車から降りてくる人影を認め、竜作は一瞬緊張を高めた。しかし、降りて来たのは大柄で短髪が特徴的なあの大佐ではなく、スーツ姿でやせ型の部下らしき男だった。男が降りた途端に車が発進したのを見届けて、竜作はため息をついて身を引いた。車ごと打ち抜くという手も無いわけではないが、それ程、腕に覚えはなかった。

「おい、今、車が出てつたぞ。どうする？」

竜作は、傍らに置かれた缶コーヒーを喉に流し込んだ。すっかり温くなっている。

『本部は、その新しい実験体とやらの情報も欲しがつてたぞ』

「そうか、写真でも撮りに行くか？」

竜は半ば投げ槍に言うつと、口を拭つた。

ターゲットが居なくなった以上、この狙撃砲は、今はお役御免だ。

「……めんどくせえな、片付けんの……」

結局、一発もその力を発揮することのなかった堅牢な得物を見下ろし、竜作は独り言ちた。

『なんか言つたか？』

「ちげえよ、こつちの話だ」

あの店主には期待外れの結果になったな、と竜作は心の中で呟き、それから口を開いた。

「ケイに連絡を。そのナンバーズがお出ましやがつたつて場所はどこだ？」

同時刻

耐火、耐爆性能を高めた堅牢な車内でも、駐車場の向こうから発せられる声のうねりは微かに届いた。それらが、自分をはじめとしたアーミーに向けられているものと分かっただけで、敷島大佐は静かに目を閉じていた。「平和の破壊者アーミーは出て行け」とか「銃声はいらない、豊かな暮らしをよこせ」などと聞こえてくる。

「……平和を破壊するもの、か」

ここ最近の報道攻勢を見れば、あの革新派デモ隊だけでなく、一般人だって遠からず似たような感想を持つのだろうと考え、大佐は自嘲的に呟いた。

41号出現の報せを受け、急遽部下の一人を木山春生が入院するという病院へと代理で差し向けたあと、車は動き出し始めていた。

「41号は学生街西方の服飾店『セブンスミスト』に出現したとの情報。そこでは別事件の容疑者が既に立てこもっていて、アンチスキル達が警戒している中で現れたということ……怪我人等の仔細な状況はまだ分かりません」

部下が述べる報告を聞き、大佐は閉じていた目を開けた。

「……一帯を封鎖し、民衆を遠ざける。付近のエリアに展開している兵力に加え、機動隊に出動を要請する」

「アンチスキルには何と？」

「過激派のテロ予告が入った、とでも流せ」

「あの、お言葉ですが、大佐」

少し間を置いて、部下がゆつくりと言った。

「デモ隊共が殺気立っている中、もし機動隊を展開するととなると、後の状況が……本国政府からの視線も、一段と厳しくなるやも——」

「いいか、誰が真に平和を守るものなのか、それを証明する時だ」

大佐がきつぱりと言った。

「六学区での、あの惨状を見ただろう。41号が暴れ出してみろ、それこそ、両手では到底数え切れぬ人死にがでてもおかしくはないのだ！それが、若者だろうとあのデモ隊連中であろうと、守るべきことは変

わらん。我々は、まずリスクを、より大きなリスクを見極める……私のクビが今や皮一枚で繋がっているのだとしても、できることをするまでだ」

罵声にも近い声が道沿いから飛び交う中、大佐が乗る車は加速していった。

—— アパレルショップ 「セブンスミスト」

くぐもった、途切れ途切れの悲鳴と、泣き腫らしたような荒い息遣いが響いている。それ以外、物音を発する者がいない。

折られた片手を抱き寄せるように抑え、介旅初矢は膝をついて喘いでいる。その傍の床には、今まで彼が虚空爆破事件で凶器にしてきたのと同じ類であろう、アルミ製のフォークが落ちていた。

蹲る介旅を除いて、その場の誰もが突如現れた少年に目を釘付けにしていた。少年は、上げていた片手を静かに下ろし、ただ、じっと苦悶の声を上げる介旅を見下ろしていた。その黒い双眸はとても冷たく、傷ついた獲物が息絶えるのを待つのをじっと待っているかのようだった。

「……鉄雄くん！」

黄泉川の思考は、カオリが発した声で再起動した。突然、アンチスキルも行方を追っている重要人物の島鉄雄が出現したことに驚きつ放しだったが、目が覚めたような感覚だった。

なぜ、ここに島がいる？ どうやって来たのだ？ 白井黒子と似た空間移動にも思えたが、彼は念動力系の能力者だと書庫のデータにあった。いや、そもそも無能力者判定だった筈だ。

いや、今はそんな思考に耽っている場合ではない。

黄泉川は、ピンを引き抜き抜きかけていた発音筒を一旦納めると、いつの間にかカラカラに乾いていた口をこじ開けた。

「確保ッツ!!」

言うが早いのか、黄泉川は弾かれたように駆け出した。

何が起こったのかは、佐天涙子には分からない。ただ、突然、冷たい顔をした怖そうな少年がぽつとその場に現れ、カオリ先輩を羽交い絞めにしていた学生風の男は苦しみ出して、蹲った。彼の腕から解放されたカオリ先輩は、両手を口で押えて、驚きの表情で現れた少年を見つめている。カオリ先輩を助けようとしたのであろう、白井さんも、御坂さんも、知らない男の人も、アンチスキルの先生達も、動きを止めたままだ。

涙子は、幾筋もの涙の痕を頬に作っていたが、突然の出来事に涙は引っ込んでいた。しゃっくりが出そうになり、ゴクリと唾を飲み込む。

てつおくん。

カオリが口にした名前に、涙子は聞き覚えがあった。

名前を呼ばれた瞬間、少年の冷たい顔が少し緩み、カオリの方を見た。

ほっとしたような、安心したような、少し優しげな顔。

「……あの人。」

涙子はその顔にも覚えがあることに気付き、手を握ったままの隣の初春の方を見た。初春も涙子を見返した。

確か、カオリ先輩がバイカーズに襲われた時に――。

記憶をたどっている途中、「確保！」という声が急に響き、涙子はハツとして顔を上げた。

周辺を取り囲んでいたアンチスキルが一齐に動き出し、まず蹲る介旅を床に押さえつけた。それとほぼ同時に、2人のアンチスキルはカオリの側へ駆け寄り、肩を抱く。髪の毛の長さからして、2人とも女性だろう。

「つか、カオリ先輩！」

涙子は、胸の悶えが急に外れたように声がついて出た。アンチスキルの先生が、先輩を保護して、犯人も取り押さえられた。

もう大丈夫――。

「待てよ」

少し高めの少年の声が、冷や水のように涙子の耳に飛び込んでき

た。

犯人が確保され、安堵したのも束の間。

白井黒子は唇をぎゅつと結び、目の前の光景に、一気に警戒を高めていた。

カオリを保護した2人のアンチスキル、黄泉川と鉄装が、介旅から引き離すべくカオリを支えて歩き出したところ、2人とも急に顔を歪ませて膝をついた。カオリは戸惑ったように2人を見つめている。

島鉄雄。黒子が風紀委員として入手している情報の限りでは、学区の職業訓練校の1年生であり、15才。なぜ彼の名を知っているのかと言えば、7月のはじめの月曜日、第七学区の外れの倉庫街で、バイカーズ同士の抗争の処理に駆り出された時に遭遇したことがある。確か、あの時は暴力を振るわれ怪我をしていた上、意識も混濁していたように見えた。その後、何故かアーミーの管轄下の病院に搬送されたとも聞いたが、詳細は知らない。

しかし、目の前で、冷たい顔をして、再び手を胸の高さに上げている少年は、その時の気弱そうな人物とはまるで別人だった。冷酷に、相手をいたぶるような表情。

島鉄雄は、念動力を二人のアンチスキルに行使していた。

「か、からだか、重い……」

眼鏡をかけたアンチスキルの一人、鉄装が両手を床について苦悶する。

その隣で黄泉川は、顔に汗を浮かべて横たわっている。腕を床に這わせてもがいているが、なかなか思うように身動きがとれないようだ。た。

「待てよ、アンチスキル警備員」

鉄雄が、口を開いた。声変わりしきっていないかのような、ハスキーな少年の声だった。

「俺は、その子に会いに来たんだ」

「随分な能力じゃん、島君。誰にレッスンを受けたのか、興味が湧くね……」

顔を僅かに上向かせ、横たわった黄泉川が絞り出すように言う。目は、歩み寄って来る鉄雄を睨んでいる。

「この子はね、さつきまで怖い思いをしてたんだ。今、必要なのは、保護し、休ませることじゃん……」

「そうかい」

黄泉川の言葉を適当にあしらい、鉄雄はカオリに歩み寄る。

「カオリ……」

彼女の名を呼ぶとき、鉄雄の表情は急に柔らかいものになる。

「待たせちまったな」

カオリは、蹲るアンチスキルの2人を見て、それから、目の前の鉄雄を見た。

「……ほんとに、鉄雄君？」

足が僅かに震えている。

「え？」

鉄雄が怪訝そうな表情をしたその時、

ブツツ、と針を強烈に打つような音が何度か響き渡り、鉄雄が前によろけた。

介旅を拘束した他のアンチスキルが、鎮圧銃を構えていた。発射したのは恐らく、彼らがよく使うゴム弾だ。

「敵対的行為！新たな対象を拘束する！」

男の声が響き、膝をついた鉄雄に向かって、アンチスキルが突撃する。

押さえつけるような念動力の束縛から逃れた黄泉川と鉄装は、よろめきながら再びカオリを支えてその場から離れる。

「先輩ッ！」

涙子と初春が上擦った声を上げて、カオリに駆け寄った。

「ツ野郎オー！」

鉄雄が顔を怒りに歪ませて、振り返り様に腕を振り抜いた。

「効いてない!?!」

黒子が思わず声を漏らしたその時、鉄雄を拘束しようと向かっていたアンチスキル達は、突風が吹いたかのように後ろへなぎ倒され、数

m弾き飛ばされた。展示されていた商品の列へ突っ込む者、棚ごと倒れ込む者もいる。

ハラハラと、色とりどりの衣服が舞っている。その鮮やかさは反対に、一帯は再び緊迫した雰囲気にもまれていた。

「止めなさい!!」

美琴が電撃を放ち、青白い閃光が一気に鉄雄へ向かう。

鉄雄は片手を美琴の方へ向けた。常人であれば、電撃を予見することなど不可能である筈だが、とにかく鉄雄が翳した掌に閃光が奔り、バチイツという強烈に鞭打つような音が木霊した。

「嘘ッ!？」

必殺技の超電磁砲レールガンには遠く及ばないにしろ、美琴の電撃は、人間一人を昏倒させるには容易い威力だった筈だ。美琴が目を見開いた。

対する鉄雄も、全くダメージが無いという訳ではないらしい。尻餅を一度ついていた鉄雄はよろよろと立ち上がり、こめかみを押さえている。鉄雄が鋭い目で美琴を睨んだ。

「今のは効いたぜエ！頭痛エのになア、このガキ！」

「やめろ！」

「させませんわ！」

美琴に向かって、フロアの床にヒビが地割れのように奔って行く。上条が美琴を咄嗟に押し倒すのと、黒子が鉄雄の頭上に空間移動し、首筋を回し蹴るのと、ほぼ同時だった。

「お姉様によくもー！」

言いながら、黒子は金属ピンで鉄雄のズボンとシャツを床に縫い付けた。鉄雄は何が起こったのか理解し切れない様子で、身動きが取れなくなつた自分の体を見る。

「観念なさい！でなければ、次はこれが、あなたの肉を抉りますわよ?」

鉄雄が見上げた先に、黒子は残りのピンを掲げた。照明をギリリと反射している。

しかし、黒子の予想に反して、鉄雄はニイッと笑みを浮かべた。

「そいつはどオかなア？」

黒子の細い踝を、拘束した筈の鉄雄の手が力強く掴んだ。

硬い床に打ち付けた筈のピンが、全て抜け、黒子の周りを漂っている。

この多対一の状況で、ここまで正確な操作ができるのか。黒子は自分の考えの甘さを悔やみ、その場から転移して逃げようとしたが、起き上がった鉄雄に足を掬われた。

今度は黒子が床に伏せる番だった。

集中が乱される。焦る黒子の目に、自分が先ほどまで得物にしていた、いくつもの金属ピンが映る。真っ直ぐに、切っ先をこちらに向けている。

「磔に——」

鉄雄が勝ち誇って言いかけたその時。

「うおおおッ！」

鬨の声を上げて、上条が突っ込んできた。

上条の右手が振り抜かれ、確かに鉄雄の顔面を捉えた。

「上条!!」

膝をついた黄泉川が叫んだ。

美琴も驚いた表情で事態を見守っている。

島鉄雄が、上条当麻に殴り飛ばされ、背中を強かに床に打った。上条は追撃の手を緩めず、倒れた鉄雄に掴みかかる。

上条は、鉄雄に馬乗りになり、両手で鉄雄の腕を押さえつけた。鉄雄はもがくが、体格で勝る上条からは抜け出せない。

「野郎オー!」

怒りの形相で、鼻血を垂らした鉄雄が上条を睨みつける。

「大人しくしてろ!この不良が!」

上条も力を込めて言った。

「女の子相手に、みつともねーと思わねえか?」

「何だど!」

鉄雄は、首を動かして、遠くからこちらを見守るカオリの方を見た。カオリは、とても不安そうに、はらはらとした表情をしていた。その両脇を固めるように、佐天涙子と初春飾利が厳しい表情で鉄雄を見返している。

鉄雄は額に汗を浮かべて、再び上条を見た。

「畜生、なんで、力が出ねえ?」

「無理よ、残念だけど」

もがく鉄雄に向かって言い放ったのは、御坂美琴だった。

「そいつの右手、どんな能力だって打ち消しちゃうんだから。あたしの電撃だってゼーんぜん効かないもの。触られてたらアンタ、力なんか出せないって」

美琴の言葉は、どこか自分の事を語っているかのように誇らしげだった。

「……そうか、てめえ、見た事あるぞ」

鉄雄が眉間の皺を深くして唸った。

「あのアーミーの兵隊どもが逃げ惑う中、俺の手をすり抜けやがった……知ってるぞ」

「そりゃ奇遇だな」

上条が短く言った時、アンチスキルが数名、鉄雄を取り囲んだ。先ほど、鉄雄の念動力を受けても、体を動かせる者だった。数人がかりで、鉄雄の両手首を寄せ合わせ、銀色に光るテープをぐるぐると巻いていく。

「なんだよこりゃ——痛ッ！」

「帯電テープ。静電気防止のアレとは逆のやつじゃん」

電流が走るような感覚で身を振る鉄雄に近寄り、黄泉川が声をかける。まだ足元が若干ふらついている。

「あんまり手荒なことはしたくないんだけどね。アンタのその様子見ると、ただ手錠かけるだけじゃあすぐ暴れ出すだろうから、我慢するじゃん。後でたっぷりと、色々聞かせてもらおうじゃんか」

「ふざけんな！俺は、強くなったんだ。前とは違う！だから俺は——」

上条が離れ、代わりに複数の屈強なアンチスキルに囲まれ、立たされた鉄雄が叫んだ。

「ただ、助けたかっただけで——カオリ！お前だよ！カオリ！」

「やめて！」

涙子が叫んだ。

「無関係な人を大勢傷つけて——それで、カオリ先輩を言い訳にしないで！そんなの、都合良過ぎる！」

涙子は、カオリを自分の背中に隠すように立った。涙子の後ろでは、カオリが顔を両手にうずめ、しゃくりあげていた。初春が、カオリの背中を何度もさする。

「……ほんとに彼女のことを大切に思うなら」

雷に打たれたような表情をしている鉄雄に、上条は厳しく言った。「てめえがしたことは、大間違いだ。言っても、まだ分からねえんだろうがな」

「抜かせ……」

鉄雄が呟くように言い、彼を囲むアンチスキルは、鉄雄を両脇から抱えて連れ出していく。

しかし、不意にアンチスキル達は立ち止まった。

「あれ……？」

その様子を見て不審に思った白井黒子のポケットで、携帯電話が震えた。以前、帝国に捕まった後に、新たに支給されたものだ。

黒子は通知を確認し、目を見開いた。

「……黄泉川先生!!」

「介旅は!!」

黒子が焦って黄泉川の名を呼ぶのと、黄泉川が叫ぶのとほぼ同時だった。

重力子の急激な加速を衛星が検知したという通知が、警備員と風紀委員に行き渡っていた。

手首を折られて、アンチスキルに捕まっていた筈の介旅初矢が、折られた方の腕をだらんとぶら下げ、荒い息をつきながら立ち上がっていた。血走った目で、鉄雄をまっすぐ睨みつけている。

近くには、数分前に鉄雄の念動力を受けたアンチスキルが倒れて気絶していた。

「帝国、クソ万歳!」

介旅が、唾をだらだらと垂らしながら叫んだ。

「お前のせいで!!こんなことに!!アハッヒヤヒヤツ、みんな死ぬ、死んじまえッ!!」

鉄雄は怪訝そうな顔をしてから、近くの床をふと見下ろした。

アルミ製のフォーク。鉄雄が現れる直前まで、介旅が力オリに向けていた物だ。

「全員、伏せろ!!」

黄泉川が叫んだ時、再び空気を吸い込むような音が鳴り出し、床のフォークが膝の高さ程に空中に浮かび上がると、古典的な念力シヨーのように曲がり出した。まるで、折り紙を折るかのようだった。

黒ずんだ光が、フォークから放たれている。

次の瞬間、爆発音が辺り一帯を揺らした。

セブンスミスト付近、繁華街

「……今、何か聞こえなかった?」

「あア?」

デモ隊の列に再び紛れているケイは、爆発音が聞こえた気がして、竜作に確かめた。竜作は顔を顰めて首を振った。

「この状況で、何が聞こえるって!?!」

竜作が言う事も最もだった。一般市民に銃を向けたアーミーのトップへ抗議の意思を突きつける、という名目で動員された労働者たちは、そのトップの人物が予告された時間になっても姿を見せないことに、苛立ちを募らせていた。不満を高めた参加者たちは、今や車の往来を妨げることも厭わず、大通りへ繰り出していた。太鼓やら鉦といった鳴り物をやかましく鳴らし、唾を飛ばしながら警備にあたるアーミーの兵士達を威圧し、詰め寄っていた。はじめは物珍しそうに遠巻きに眺めていた学生たちは、不穏な空気を察して、今やほとんど街頭には居ない。皆、学生街を避けて早々に逃げて行ったか、店舗の中へ身を寄せているようだった。

「……あれじゃない?セブンスミスト!」

押し合い圧し合いされる中で、ケイが声を張り上げて指差した先には、アンチスキルが集まって入り口付近に非常線を張っている、服飾店があった。

「あそこ、何が起こって——」

「ケイ!」

竜作が急にケイの腕を引き、身を引き寄せた。ケイが何事かと辺りを見回すと、デモ隊を押しつけるように、急にアーミーの兵士が多数現れた。セブンスミストに向かっていている。

「こりゃ、当たり前だな」

竜作がにやつと笑って言った。

それと共に、デモ隊の面々も口々に叫び始めた。

「軍人だ!ハエ共が寄って来たぞ!」

「戦争はんたい!!」

「正義は我々にある！アーミー、帰れ！」

「違法集会を解散せよ！！繰り返す！違法集会を解散せよ！」

アーミーの兵士の後方からは、鈍色の防護装備に身を包んだ一団がより機械的に隊列を組んでやってきた。ケイの目に、ぎつと50人は見える。

ケイは振り返って叫んだ。

「竜ウー！あいつら——」

「あの大佐、この状況でマルキなんか出して来やがって！！」

機動隊^{マルキ}。アーミーという組織の中でも、集団暴動等に対する治安維持に出動する者たち。特務警察と同じくらい、竜作達ゲリラにとって
は天敵だ。

「畜生、チャンスだつてのに！」

竜が歯噛みしながら、機動隊とは反対方向へと、人波を掻き分けていく。ケイもそれに続いた。

目当ての大佐の姿は見えない。こちらに向かっている筈だが、どこで指揮をとっているのか。

「政府の手先め、帰れ、帰れ！」

「暴力絶対反対！！」

デモ隊は、プラカードを棍棒代わりに振り回したり、その辺の石を投石したりしながら機動隊へ向かって叫ぶ。

対する機動隊は、前面の物がライオットシールドを構えて進み、後方の物は警杖を掲げる。

どっちもどっちじゃん、とケイは内心嘆息した。

紫色のアーマーを身に付けたアンチスキル達は、介入せず互いに身を寄せ合い、ただ道の端で身構えている。巻き込まれないことを優先しているようだ。

非常線が張られた店舗で起こっている事件を掻き消すかのように、通り一帯が混沌としつつあった。

—— セブンスミスト、店内

「なんで……僕の最大出力だぞ……」

打ちのめされたような声を聞き、上条は目を開いた。

尻餅について怯えている介旅の眼前に、島鉄雄が立っていた。両腕を縛っていた拘束テープは千切れ、手から肘にかけて、肌の広範囲が痛々しく赤く焼け爛れていた。

「ちげえな」

鉄雄が無表情で介旅を見下ろし、言った。腕の怪我を、露ほどにも気にしていないようだった。

「お前の様子、どう見たっておかしいじゃねえか、シンクロトロン量子変速。そんなザマじゃあ、ゴミみてえな能力になって、たりめーだろ」

鉄雄の言葉を聞いて、上条は辺りを見回した。確かに、音が派手に鳴り、衝撃がフロア一帯を揺らした割には、爆発による熱で焦げた跡は、不自然に鉄雄の立つ場所だけに集中していた。

「ねえ」

近くに座り込んでいる美琴が、上条に囁いた。

「アンタが、防いだの？」

「いや、違う」

上条は小さく首を振った。上条は黄泉川の声聞いてから、咄嗟に身を守るのが精いっぱい、右手を使って爆発を防いだ訳ではない。

「じゃあ、なんで……」

美琴が疑問の声を向けた先では、鉄雄が膝について、介旅の充血した目を覗き込んでいた。

「何があった、どうしてカオリを狙った……」

「ヒツ」

鉄雄の問いに、介旅の呼吸がより素早くなり、ガタガタと震え始めた。鉄雄は僅かに眉を上げた。

「そうか、『キッズ』を……誰だ？ やったのは……アイツか」

鉄雄は立ち上がると、口の端に笑みを浮かべた。

「島君」

離れた場所へ伏せていた黄泉川が、ゆっくり立つと、慎重に声をかけた。

「もうよせ。君も手当てしないと……」

鉄雄は黄泉川を見ると、顔を上げて「ハッ」と笑みを深くした。爛れた皮膚が露わになっている両手を上げ、肩を竦めて見せた。見るからに痛々しいのに、腕を自然に動かしたことが、上条にはとても不気味に思えた。

「大した事ねえんだよこの位。それに、勘違いすんじゃないやねエ。俺は……傷つかないようにしたかっただけだ」

鉄雄が顔を向けた先では、カオリが泣き腫らした表情で座り込んでいた。涙の痕が頬に濡れて光っている。

「鉄雄君……」

立ち上がるうとしたカオリを、涙子が肩を掴んで引き留めた。

その様子を見ていた鉄雄が興味深そうに首を傾げた。

「友達か……いいモンだな。必ずまた迎えに来る」

鉄雄は介旅に目を落とし、それから窓の外へと視線を移した。

「……落とし前をつけたらな」

鉄雄が眉間の皺を深くした時、ドタドタと大勢の足音が急に近付いてきた。その場の皆が、足音のする階段の方を向く。

茶色の防弾ベストを身に付けた、アーミーの兵士たちが、アンチスキルと同じ鎮圧銃を構えて押し寄せて来た。

「全員、その場で動くな！」

指示役らしき兵士が声を張り上げ、兵隊は散開する。

奥から護衛に囲まれて現れた男が、辺りを見渡して口を開いた。

「反応はこのフロアだ。誰も逃がすな！」

「もう遅いじゃん！」

黄泉川が叫ぶと、アーミーの一団は動きを止めた。

「……なんだと？」

「もう、彼は、行ってしまったよ」

低い声で聞き返す、渦中のアーミーの指揮官、敷島大佐に対し、黄泉川が静かに言った。

黄泉川の言葉に、上条は振り返ったが、そこには息をつきながらうずくまる介旅以外に、誰の姿も無かった。

「先生、彼は一体……」

上条が黄泉川を見て聴いたが、黄泉川は厳しい表情で、黒焦げになった床の辺りを見つめていた。

その顔には影が差し、疲労の色が色濃く現れていた。

「マジなんだろうな!?あの人質にとった女がカオリつてのは……」

喧騒から少し離れた裏路地に停められた一台の車に、帝国の隊長が慌てふためいて乗り込んだ。

「ほんとかどうかっていっても、遠くから撮ってたし、すぐアンチスキルに追い出されたから、実際分らないっすけど、もしマジだったら……」

「いや、いくらなんでもそんな偶然あるかよ、てめえの勘違いだろ!」
「でも、もし本当だったら?まずくね俺たち」

取り巻きたちが口々に喚く。

隊長は、組んだ両手の指を忙しく動かした。

「……逃げるんだ」

隊長の額に脂汗が浮かんでいる。

「もしもあのシンクロトロンがカオリに危害を加えたってんなら……
少しでも遠くへ、早く逃げるんだ!ほら、すぐ出せよ——」

隊長が、運転席にいる取り巻きの一人に発進するよう促した、その時、突然車体にドカンという衝撃が走り、乗り込んだ者たちは皆、咄嗟に頭を抱えた。

「なんだ!?!」

「オイ、天井が……」

内装の天蓋部分が見事にへこんでいるのを見て、一同は不審がった。

「てっ」

取り巻きの一人が、前方を指差して声を漏らした。

「……鉄雄、様……」

隊長もそちらを見て、口をあんぐりと開けた。

島鉄雄が、車のフロントに乗る形でしゃがみこみ、隊長達をじっと見つめていた。

ガラスについた手は、真っ赤に染まっていた。

次の瞬間、フロントガラスが粉々に砕け散り、隊長達は顔を覆う。

「よう、地獄へお出かけかい？クズども」

鉄雄が目には怒りを滾らせ、薄ら笑いを浮かべるのを、隊長は指の間から辛うじて見ることができた。

「どう思う……」

敷島大佐が、唸るように言った。隣では、Dr. 大西が手に持った端末の画面をひっきりなしに指で撫ぜている。

「は……何せ先ほど申し上げた通り、類似の反応の検出が相次いでいる物で、断言はできませんが、学生街を起点としたトレースに基づけば、41号の仕業とみて間違いないかと」

「類似、類似だとー」

やりきれない怒りを噛み締めるように、大佐が言った。

「これほどの力を振り回す輩が雨後の筍の如く現れてたまるか!!」

大佐と大西がいる路地では、アーミーによる規制線が張られている。大佐達の目の前には、まるで戦車に轢かれた後のような乗用車の残骸がある。高さが大人の腰程にまで圧縮され、その下の路面すら細かく破碎され陥没している。アスファルトの亀裂は、車が押し潰された場所へと向かって、まるで蜘蛛の作る円網のような模様を描き、行使された力が車へと集中した様子を物語っていた。

「複数の目撃者から、15分程前に、先ほど41号が現れた服飾店のあつる通りから、こちらへ向かって早足で歩く4、5人の若者がいたと証言を得ています」

部下の報告に、大佐は眉間の皺を深くする。

「……あの車の中に、何人いたか、最早数えることもできんのだろう」
「は、仰る通りで……機材を使えばこじ開けることはできるでしょうが、外から目視した限り、その……身体の損傷が激しく、身元特定には時間がかかるかと」

大佐は、ひしゃげた車体にこびりついた血痕を睨んだ。かつて窓があったであろう場所から、ジャムパンの中身がこぼれたように、下に向かつて垂れていた。

「奴はいつの間にかこれほどまで能力を高めたのだ?」

「脱走後に何らかの作用が、41号にあったとしか考えられません。」

この短期間でこれほどとは！」

大西の言葉には、どこか愉悅のようなものが感じられる。大佐は、自分よりもずっと背の低い科学者の頭部を忌々し気に見つめた。

「スキヤンの範囲を広げる。まだそう遠くへは行っていない筈だ——空間移動の力に成長がなければの話だがな」

「あおう、大佐、お言葉ですが……」

大西は、おずおずと言いながら大佐を見上げた。大きな目は、どこか探るような視線を放っている。

「その、大佐の指揮権は、まだご健在で……？」

「よく分かっているようだな」

大佐は大西を見返して言った。

「そちらの言う通り、まさに時間は惜しいのだよ」

—— 繁華街

「やつら、催涙ガスまでつかってやがる！あの大佐め、早死にしたいのか！」

竜作が、忌々し気に吐き捨てた。ケイにも、目尻をつつくような、ツンとした刺激臭が感じられた。

いくら本質的には不法のデモ隊を取り締まるためとはいえ、アーミーの対応は過剰だ。既に、何十人という参加者が制圧され、拘束されている。そんなアーミーの攻勢に、デモ隊側も黙っていない。先鋭化した参加者たちが、暴徒と化して、激しく抵抗したり、通り沿いの店舗に矛先を向け、破壊行為を行ったりしている。道端に警備ロボがいくつも煙をあげて倒れているのも目にした。アーミーがやっていることは、火に油を注いでいるのと同じだ。

これでは、政府どころか、統括理事会が黙っている筈がない。あの図体のでかい指揮官が引き摺り下ろされるなら、ケイも願ったり叶ったりだったが、学生にとって憩いの場となる筈の美しい街並みが壊されていくのは忍びなかった。

ケイ達は、走り回る人波に紛れて、指揮官の姿を探し、目を光らせながら、機動隊から離れた方向へと移動していく。

「武器を捨てなさい！違法行為です！」

ふと、ケイの耳に、毅然とした声が聞こえて来た。

眼鏡をかけ、ブラウスの上に濃紺のベスト、黄色いネクタイを付けた女子高生が、デモ参加者の男に相對している。腕章は付けていないが、ジャッジメント風紀委員だろうか。

「お姉ちゃん、こわいよ……」

背後には、小学生ぐらいの女の子が怯えた表情をして隠れていた。

「あんたら学生には用はねえ！俺たちはアーミーにやられてんだ！あっちを取り締めよ！」

「その、ポケットに忍ばせたもの、フォールディング折り畳みナイフ……あなた、本当にただのデモ隊？」

ケイは、その女子高生と会ったことがあるのを思い出した。喫茶店での爆破事件の時に、ハイドロハンド水流操作の男と戦っていた、ジャッジメントだ。確か、白井黒子の先輩格だったか。

ジャッジメントの少女の言葉を聞いた男は、激昂した。

「てめえ、何で分かった——まさか、能力者風情か！だったら話は別だ」

男が、懐から何かを取り出し、振った。ギラリとした刃が見えた。

「お前ら、奨学金がつつりもらえるんだってな——いい暮らしをできるのは、俺たちから搾り取られた税金のお陰って知ってたか？得体の知れねえバケモノが!!」

ナイフを振り上げ、男がジャッジメントの女子高生へ向かっていく。女子高生の顔が怯えた物となり、背後の少女は、彼女の手をきゅつと握って目を瞑った。

「街の安全を守るために、日々働いているのに——なんで狙われなきゃならないんですか？」

「街の人々の暮らしを守るのが、私共ジャッジメントの役割ですから」

「——今日は、私たちを助けていただいて……ありがとうございました——」

ケイの脳裏に、あの日、ジャツジメントの少女達からかけられた言葉が蘇る。

次の瞬間、ケイは猛然と駆け出していた。

先に進もうとしていた竜作が何か叫んだが、気にしている場合ではない。

ケイは、ナイフを手にした男に背後からタツクルし、地面に倒した。すかさず、背中に乗り、頭を両手で抱え上げると、思い切り地面に打ち付けた。

男が自身の顔面を手で覆い、呻き声を上げながらのたうち回る。舌を嚙んだか、顎が砕けた筈だ。

「逃げてー！」

ケイは、はつきりとジャツジメントの顔を見て叫んだ。

眼鏡の奥の目が見開かれる。

「あなた——あの時の」

「お姉ちゃん、かっこいい！ありがとー！」

不安そうな顔から一転、顔を輝かせた女の子が、ケイに向かって礼を言った。可愛い二つ縛りを飾り付ける緑色の鈴が、凜と鳴った。

ケイは、礼を言われたことに戸惑いつつも、一瞬、女の子に向かって小さく笑みを浮かべた。

それから、すぐにジャツジメントへ向き直る。

「ここは危険。早く逃げて」

「ええ、だけど、あなた——」

ジャツジメントの少女が、ケイの脇腹あたりに目をやる。

ケイは、しまったと思った。このジャツジメントは、透視能力クレアボーイアンスの持ち主だった。

ジャケットの内側に忍ばせた発煙弾を、ケイは思わず服の上から触った。竜作が大佐に奇襲をかける際の陽動として使おうとしていた物だ。

「だから、私には分かるの」

ケイが、困惑したジャツジメントの視線を察し、言った。

「ここは危ないから、早く――」

「何してる!」

ケイの腕が突然引かれた。竜作が焦りを顔に浮かべて、ケイを連れ出した。

ジャツジメントの少女がじつとこちらを見ている。ケイはあつと
いう間に人波へと紛れて、彼女の視界から去った。

「あいつはジャツジメントだろう!この状況で何考えてんだ!」

「街の人々を、守ろうとしてる!」

怒鳴る竜作に、ケイは言い返した。

「はア?」

「あの子たちは、罪のない人々を守っているの!」

竜作の手を振りほどき、ケイは叫んだ。

「私たちがって、目的は一緒のはず!あの子が襲われるのを黙って見
ているなんて、できなかつた!!ねえ、私、間違ってるの!」

ケイは、両の拳を握り締めて言った。

周囲の喧騒が、どこかガラス1枚隔てた物の様に、ケイには感じた。
それだけ、今の自分は孤独だった。

目を瞑って立ち尽くすケイを前にして、竜作は押し黙るしかなかつ
た。

「これは……ひどい……」

ケイ達からやや離れた場所に立つ黄泉川は、鉄装の漏らした言葉に
共感し、唇をきゅつと結んだ。

デモ隊の大多数が、アーミーとは逆の方向へと頭を抱えて逃げ惑っ
ている。氣勢を上げて、シユプレヒコールを主張する看板や、どこか
らか持つてきたのか、スコップを振り翳し、アーミーへと殴りかかっ
ていく者もいる。その一方、アーミーの、特に灰色の防護服に身を包
んだ機動隊は、シールドで隊列を組み、黒い波のように通りの人々を
威圧し、押し除けていく。抵抗するデモ隊参加者は、数人がかりの
シールドで小突かれ、地面に倒され、警杖や警棒で叩きのめされてい
る。シャツをまくられ、アスファルトの上を血だらけになりながら、

半ば引きずられるようにして護送車に連れていかれる者もいた。暴徒の仕業か、あちこちの店舗や建物のガラスが割られ、一部からは煙が上がつているのも確認できる。

虚空^{グラレイトン}爆破事件の犯人を無事拘束した後、再び通りに出た黄泉川の目に映った学生街は、怒号と、悲鳴と、足音が乱れ交い、普段の活気溢れる様相とは一変していた。黄泉川は緊張を滾らせながら、辺り一帯を目視する。通りに出ている若者、学生の姿は見られない。皆、通りから去ったか、屋内に避難し、息を潜めているのだろうか。

「この連中を落ち着かせるのは無理じゃん。けど……逃げ遅れた子どもがいなか、探さなければならんね」

「黄泉川先生、あの、ぐ無理なさらない方が……」

鉄装が不安そうな目で黄泉川を見る。

「あの少年——島鉄雄から受けた念動力、まるで押し潰されそうな……私も正直、歩くのもしんどいです。体のあちこちがまだ疼いて」「鉄装こそ、休んでな」

黄泉川は、小脇に抱えていたヘルメットを被り直す。鉄雄から受けた攻撃の圧力で、顔面の耐衝撃バイザーにヒビが入っている。

「私なら、大丈夫。まだやれる。困っている子を、助けなきゃ——」

その時、黄泉川の無線に連絡が入った。

『黄泉川、聞こえるか！』

「支部長！」

黄泉川はマイクに向かって声を張り上げた。

「ここはまるで戦場です。他支部にも声をかけて、人員の増員をすぐに——」

『そこから撤収しろ、黄泉川』

「え——はア!？」

黄泉川は、電話口から聞こえた上司の言葉に耳を疑った。

「この状況は、学生にも危険が及ぶこと、明白だと思えますが！」

『デモ隊とアーミーの間で起こっていることだ。我々が介入する義理はない。こちとら人員が足りないことなど分かり切っている。今は、勝手にやらせておけ』

「機動隊が強行鎮圧に乗り出しているし、そのせいでデモ隊も暴徒化している！それを分かっただの指令ですか！」

『そうだ』

にべもなく工示が言った。

「今、その通りの東西の両端に検問を敷いている。猫を噛むネズミ共をそこから出さなければいい話だ。後々、チーズを食い荒らした連中にも、走り回った猫共にも、相応の賠償を請求するさ。破壊された建物のオーナーたちには、しばらく耐え忍んでもらうことになるが……とにかく、我々七三支部は、検問に当たればいい。いいか、これは命令だ」

反論しようと黄泉川は口を開いたが、通信は切られた。

「なんだよ、これ、めちやくちやじゃん……まじ、うざつてえ」

数人の男女の学生が迷惑そうな顔をしながら、道沿いのファミレスへと向かって黄泉川の傍を足早に通り過ぎていく。

その集団へ、暴徒の一員が叫び声を上げ、顔を両手で覆いながら突っ込んだ。催涙スプレーで目を潰されているようだ。

押し倒される格好になった女子学生が、悲鳴を上げた。

「な、なにこの人、アタマおかしいって！離れてよ！」

「てめ、あっち行けコラ！」

仲間の男子学生が、もがく暴徒を女子から引き離し、両手を突き出した。そこでは突風が吹き、暴徒を弾き飛ばした。

「見ろ、仲間がやられたぞ！」

「能力者め！敵だ、囲め!!」

殺気立った男たちがあつという間に集まって来たことで、学生たちは一気に青褪めた。

「まずい！」

逃げ惑う人並みに逆らうように、黄泉川は囲まれた若者を救おうと駆け出した。

「黄泉川先生！」

後ろから鉄装が叫んだが、振り返らず黄泉川は向かっていく。

激しい人の動きの中を、黄泉川はぶつかり、よろけながら進んだ。「やめるんだお前らー！」

学生と暴徒集団の間に、先に割って入った者がいた。防弾ベストを身に付けた、アーミーの士官だ。まだ若く、少年のよ
うな顔つきだった。学生たちを庇うように、両手を広げて立ち塞がっ
ている。

「叩き潰せー！」

抗議の文言が描かれた看板を振りかぶった一人が、兵士に向かってそれを振り下ろした。バキツと木が折れる音がして、兵士は呻き、膝をつく。その間に、学生たちは頭を抱えて命からがら店舗の中へ逃げ込んでいく。

他の暴徒が、ここぞとばかりに殴打し、蹴りを入れた。兵士は地面に倒れ丸まっている。

「よせ!!」

黄泉川は歯を食い縛り、シールドの取っ手を握る手に力を込めた。体をシールドごと押し出すようにし、体当たりすることで、兵士をリ
ンチする暴徒たちを蹴散らした。

「おい、アンタ、しつかりするじゃんー！」

声をかけながら、黄泉川は顔の至る所を赤く腫らした若い兵士に肩を貸した。兵士が何事か言うように口を動かすが、途端に咳込んで言葉にならない。

黄泉川は兵士を支えて歩き出した。

「ひとまず、ここから逃げ——」

その瞬間、突然黄泉川の目の前に黒い塊が飛んできて、黄泉川は咄嗟に目を瞑った。

額の辺りに鋭い痛みが走り、黄泉川は自分の体が奇妙に浮かぶような感覚を覚えた。

「黄泉川先生……」

聞き覚えのある声があったが、ローパスフィルターを通したように籠っている。自分と呼んでいる。

鉄装。大丈夫だ、自分なら大丈夫……

上半身から倒れ込んだ路面は、夏の陽気によって熱され、まるでホットプレートのようなだった。頬にヒリヒリとした熱さを感じた後、黄泉川の意識が、黒ずんだまどろみの中に沈んでいった。

XV. 一方通行

77

「カオリ様は今、自身の学生寮へと至る道を歩いております。傍には、4人の女学生……2人は同じ学校に通う後輩、残る2人は、常盤台の者です。1人は、例の空間移動能力者の風紀委員と思われるです」

住宅街の中、周辺の建物より数階層分高いマンションの屋上で、両目を包帯で覆う代わりに額に大きく一つ目のマークを描いた男が、跪いて言った。

「案内致しましょうか？」

「いらねエよ」

跪いた男よりも高い場所、受水槽の上に仁王立ちした鳥鉄雄が言った。数時間前まで、隊長が身に付けていたジャケットをまとつている。

「付いて来なくていい。お前は『スタジアム』に戻れ。ホーズキにも声をかける。あいつらの他に、抜け駆けしてる野郎がいれば、全て叩きのめす」

「御意」

「皆に思い知らせなきやならねエ」

受水槽の上から跳んだ鉄雄は、水中を沈むかのようにゆっくりと目玉模様の男の隣へ降り立った。

『『帝国』のボスが誰かってことをな——分かるよな、鳥男』

鉄雄は、横で跪く男に向かって顔を向けた。

「仰せの通りです」

鳥男が小さく口を動かして答えた。

「隊長——いえ、会計係は身の程を弁えず、独断専行が過ぎました。鉄雄様が下されたのは、当然の報いです」

「フン、よく言うぜ」

異様な風体の男に向かって鼻を鳴らし、鉄雄は言った。

そして、タン、という地を蹴る音を弾かせると、鉄雄は姿を消した。

鳥男は、裸足でひとり立ち上がり、目の前の風景の一点をじつと額の目で見つめた。

遮られることなく吹く風が、彼が纏う大正期のバンカラの様な外套をはためかせた。

午後 —— 第七学区、南の外れの学生寮近く

「じゃあ、あのでこっぱち野郎が『帝国』の関係者かもしれないってこと？」

「関係者も何も、頭目的存在かもしれぬと」

御坂美琴と白井黒子は、陽が僅かに傾き始めた集合住宅街を歩きながら、その日あった出来事について声を潜めて話していた。碧々とした桜並木の葉が揺れ、歩く一行の頭上に時折刺さるような陽光を浴びせている。

「虚空爆破事件グラビトンの犯人が呟いていた『鉄雄様』という言葉。黄泉川先生は詳細を話してくださいませんが、あの犯人が島鉄雄という少年と何らかの繋がり……上下関係を持っていたとは推測に難くないですわ」

「でも、それなら、何で『鉄雄様』は、あのメガネが爆発を起こそうとした所を邪魔したの？」

「あの」

2人の会話に割って入ったのは、前から振り向いた佐天涙子だった。堪えていたのを吐き出すような声だった。

「やめませんか……今、その話題は」

「あつ」

美琴も黒子も、前を向き同じようにハツとした顔をした。

涙子の隣には、俯きがちに歩くカオリの姿がある。

「あの、カオリ先輩……」

カオリの傍に付き添う初春飾利が、そつと声をかけた。

カオリは、ふと思いつ出したように顔を上げ、立ち止まった。

他の4人の視線が自分に集まる。それを感じたカオリは、落ち込んだ気持ちそのままに、更に深く俯いた。

「……えっと、ごめんなさい。気を使わせてしまっただけで」
開かれたカオリの口から、蚊の鳴くような言葉が零れ出す。

「いえ、謝るのはこっち……あなたの気も知らないで、ベラベラ喋って」

美琴が心から申し訳なさそうに言ったが、カオリは首を小さく振り、「そんなことないです」と言った。

「彼とは久しぶりに会いました……でも、思っていた彼と違いました。皆さんに助けてもらってばかりで、私……」

「カオリさん……」

初春が、俯くカオリの顔を覗き込むようにして心配する。

カオリはしばらくずっとこの調子だった。セブンスミストで、虚空爆破事件の犯人に人質に取られたことに加え、交際相手の島鉄雄が、予想だにしない能力を行使して、周りの者に危害を加えたこと。アンチスキルや、美琴や黒子の助けによって無事に済んだが、心の面では相当なショックを受けたようだった。

その日はとにかくもう帰ろうということになり、心配した初春と佐天が帰路を付き添い、加えて美琴や黒子も同行することになった。鉄雄が、アンチスキルやアーミーの目をかいくぐって、再びカオリに接触して予想されたからだ。

帝国に対して明確な敵対心をもっていた美琴や黒子にとって、カオリが鉄雄と交際関係にあったというのは驚きだった。しかし、久しぶりに再会したボーイフレンドの姿に悲しみを募らせるカオリを、2人とも気遣った。それと共に、帝国というグループに対する評価とは別に、島鉄雄という人物のことを悪人と決めつけてよいのか、測りかねてもいた。

「あの……ここまでいいです」

古びた学生寮の建物の前で、カオリは立ち止まり、僅かに顔を持ち上げて言った。

その視線は地面に落とされていた。

「本当に、今日は、ありがとう——いえ、違いますね。何と云ってい

いか……」

カオリの心の中には、4人に対し、危険から救ってくれたことへの感謝の気持ちがある。

しかし、それ以上に、自分にとっての想い人である鉄雄が豹変し、自分も知らない高度な能力で牙を剥いたこと。それによつて、4人を危険に巻き込んだこと。

その事実が重くのしかかり、申し訳なきや、悲しみが晴れなかった。暫くの間、重たい沈黙が、少女達を囲んだ。

「——また、行きましょう」

口を開いたのは、佐天涙子だった。

「えっ」

カオリが顔を上げた。予想外の言葉だった。

「ほら、今日は結局、色々あって、服とか買えなかったけど——私、先輩とああやってお出かけできて、楽しかったですよ！ね、初春？」

「も、もちろんですよ！」

初春が何度も頷いた。

「もう少し、落ち着いたら——今度こそ、先輩に似合う服、ちゃん」とモノにしましょうよ！」

「先輩、今日合わせた服、かわいかったですよ！だから、お金はしつかり、とつとかなきやダメですよ！」

涙子が快活な声で笑顔を浮かべて言う。ちようどこの日の晴天のようだ。

しかし、そんな努めて明るく振舞ってくれる2人の様子を見て、尚更カオリの顔は曇った。

「2人とも、私を避けないの？」

「え？」

佐天と初春が目丸くする。

「だって、私の彼は……あんな悪い人だったんだよ？」

カオリは両手をぐっと握り締め、震わせた。

「そりゃ、今までだってバイク走らせて騒ぐようなことはしてたけど……私にも、何でか分からない、あんな風に、周りの人に襲い掛かる

ような人じゃなかった。それで今、鉄雄君は、悪いグループのメンバーなんでしょ？」

カオリの視線が、僅かに黒子と美琴の方へ向けられた。

「やっぱり、私と関わると、みんな良くないことばかり起きるんだ……だから、もう……」

「そんなことありませんわ！」

黒子が力強く言った。言葉に詰まっていたカオリは、黒子の方を見た。

「人が傷つけられるのを見て、悲しむことができる。カオリさん、あなたのその思いは、正しいものです。ですから、あなたを疑うことなど、あり得ませぬわ」

「でも！」

カオリは泣きそうな声で言った。

「初春ちゃんから聞きました。白井さん、あなたは、帝国つてそのグループの人に、ひどいことをされたんでしょう？ 私の彼が、鉄雄君が、そのグループのメンバーだっていうなら、私、あなたに恨まれたって、仕方がない！」

「カオリさん」

黒子が微笑んで名を呼んだ。優しい笑みだった。その笑顔を見て、頬を紅潮させていたカオリは少し落ち着いた。

「私、あなたに今日出会えて、良かったと心の底から思っていますのよ？」

「え？なんで」

「あなたこそ、お辛い目に遭ったことは、私もちろん、存じ上げています。きつと生半可ではない出来事だった……けれども今日は、こうして信頼される友を得ておられるではないですか」

黒子が顔を初春と涙子に向ける。

「友……ともだち？」

カオリも顔を向けたので、初春と涙子は少し照れくさそうに視線を泳がせた。

「特に初春は、ジャッジメントとしての私の後輩ですが……見てくれ

はまあ、ちつこくて少し頼りが無いですが」

それ、白井さんもヒトのこと言えます？と初春が頬を膨らませて言ったが、黒子は咳払いして続けた。

「……何が正しいか、正しくないのか、物事を真っ直ぐ見つめることのできる子なのですよ。そんな初春が、あなたのことを信頼している。私にとってみれば、それがカオリさんを疑わず、信ずるに足ると考える証ですわ」

初春が、今度は顔を少し赤くした。

「わ、私もですよ！白井さん！私も、人を見る目はあります！その、人並みには……」

佐天がやや尻すぼみに、しかし胸を張って言うと、黒子は頷いた。

「ですから、私はあなたを信じます。何かこの先困ったことがあれば、いつでも頼ってくださいまし。私は、ジャツジメントなのですから」

「白井さん……」

カオリが目を潤ませて言った。

「私も、あなたのことをもちろん信じてるよ」

美琴がカオリに向かって言った。

「むしろ、今日の様子見てたら、あなたこそ、この先危ない目にまた遭うかもしれない。その島ってヤツのことはよく知らないけど……でも、私たちが手にしている能力って、絶対に、自分勝手な都合で人を傷つけるためにある訳じゃない。あなたは、きっとその事をよく理解している。だから、私だってあなたを信じるし、力になるよ」

「御坂さん。みなさん——」

カオリは周りの4人の顔を見まわし、目元を一度手で拭うと、頭を下げた。

「本当に、みんな優しい人……こんな私に、ありがとうございます」

少女達のもとを、一陣の風が吹いた。

重苦しかった空気が、ほんの少し和らいだようだった。

そんな中、美琴はふと背後を振り返る。

「……お姉様？」

美琴の、先ほどまでと異なる厳しい表情に気付いた黒子が、声をかけた。

「……やっぱり、現れる気がした」

美琴の言葉に、その場の全員が振り向いた。

カオリは、口元に手を当てた。

「鉄雄君……!」

「言つたら。必ずまた会いに来るつて」

ズボンのポケットに両手をつ込み、不敵な笑みを浮かべて、島鉄雄が立っていた。

カオリの前に立ち塞がるように、美琴が立った。

黒子も、涙子も初春も、カオリを守るようにして立ち、現れた鉄雄をじつと見据えた。

「島……鉄雄!」

美琴が名を呼び、口元をきゅつと結んだ。

「常盤台のお嬢に用はねエよ。暗くなんねエ内にお迎え呼びなつて」

鉄雄がせせら笑うと、美琴の髪の毛が俄かに逆立った。

「言つてくれんじゃないの……!」

鉄雄は首を上げて、一番後ろで張り詰めた表情をしているカオリを見た。

「カオリ」

鉄雄が名を呼ぶと、カオリが肩をぶるつと震わせた。

鉄雄は掌をポケットから徐に取り出した。赤い火傷の跡が生々しい手だった。その指に摘んでいた物を、鉄雄が空中に投げ出した。

小さな物体が美琴たちの頭上を飛び越え、ふわりとカオリの前に浮かんで静止する。

「受け取つてほしい……お前も、能力ちからを得るべきだ」

カオリが恐る恐る両の掌を差し出すと、ぽとりと浮かんでいた物が落ちる。

携帯電話に挿入できる、メモリーカードだ。

「俺と一緒に来い。カオリ」

片手を差し出す鉄雄に、カオリの前に立つ少女たちがじつと相対した。

「このカードには何が？」

カオリの手に渡されたメモリーカードを一瞥して、白井黒子が問うた。

「なんだ、てめえも欲しいのか？」

島鉄雄が、黒子に向かって薄ら笑いを浮かべている。

「何が入っているのか聞いております」

黒子が油断なく鉄雄を見据えて言った。

「さしずめ、碌なモノではないのでしようけど……」

「へえ、当ててみるよ。どうせ風紀委員様の事だ、お察しなんだろう」

不敵に笑う鉄雄に対し、黒子は一度唇を噛む。

「能力を得る、とあなたは先程口にした。あなた方『帝国』のメンバーは、どういう訳か、直近の身体測定システムスキャンの結果とは食い違う、高度な能力を有している者ばかり。カードには、きっとそのカラクリを解くカギが入っている……違いますか？」

『レベルアップ！』

鉄雄が何か答える前に、初春飾利が鋭く言った。

「私たちジャツジメントにも、情報が既に入っています。どうなんですか!？」

御坂美琴は、厳しい顔で。カオリは、はらはらした表情で。それぞれ鉄雄を見つめている。

佐天涙子は、忙しなく目を瞬かせて、カオリの掌に置かれたカードに視線を走らせている。

鉄雄は、そんな少女たちの様子を見て、笑い声を上げた。

「知りたきや、てめえの耳で聞いてみるんだな」

「ふざけんじゃないよ!」

初春の怒声に、カオリや涙子、美琴も驚いて一瞬初春を見た。

「アンタらがバラ撒いたそいつのせいだ……私たちの仲間は、何人も傷ついてるんだ！」

「仲間？」

初春の剣幕に、鉄雄が眉を上げた。

「俺の知ったこつちやねえことだぜそりゃ」

「この、アンタ……！」

美琴が歯を食いしばり、怒りの形相を露わにする。

それは黒子も同じだった。黒子が一步鉄雄の方へ踏み出し、口を開く。

「惚けないでくださいまし！あなたが『帝国』のリーダーとして、レベルアップを取引する元締めを務めていることは、分かっています」
「決めつけんなよ、ジャッジメント」

鉄雄が首を振りながら言った。

「まず、お前ら相手に暴れてんのは俺の指図じゃねえ。下の奴らが勝手に盛り上がったただけだ。俺はてめえらしい子ちゃん達がどうなるうが、さして興味はねえよ。それに、俺はただ頼まれただけなんだけ？そのカードに入ってるブツを広めろってよ」

「誰に!？」

「どうでもいいだろオ、ンなことアよ！」

黒子の畳みかけるような問いに、鉄雄が苛立ちを滲ませて声を荒げた。

「俺たちが、ブツを広めて、それを無能力者や低能力者の連中が買い漁る。テメエらジャッジメントや高位能力者の陰でうだつの上がらねえ奴らだ。そいつらは、念願叶って、レベルが上がる。どこも悪くねエだろうが？あア？」

「想像以上にクソ野郎ね、アンタ……」

美琴の軽蔑も、鉄雄は鼻で笑い飛ばす。

「俺が用あんのは、そこにいる、カオリ。お前なんだよ！なあ」

名を呼ばれ、カオリはびくつと肩を震わせ、上目遣いに鉄雄を見た。

鉄雄が鋭い目でカオリを見つめている。

「能力があれば、こんなシケたところじゃねえ、もつといい景色が見られ

ンだ……俺と来い、カオリ！」

「カオリ先輩……」

涙子が、心配そうにカオリの顔を覗き込んだ。

——俺と来い、か。

カオリは、いつか鉄雄から、似たような言葉をかけられたことを思い出していた。

どこか遠くへ行こう。

そう鉄雄君は言ってたっけ。

あの日、燃えるような夕焼けを映した水面に向かって、取り留めもなく言葉を紡いでいた鉄雄と、今、目の前で手を差し出しながら冷たい笑みを浮かべる少年は、カオリにとって全く別人に思えた。

「さっきから聞いてりや、ちから、ちからって……そんな楽しんで手に入れて、だから何だっつてんの……！」

美琴が、ぎゅつと握った両手を僅かに震わせて言った。

「何だと？」

「常盤台中学の超能力者⁵は、元々、どこにでもいるような低能力者¹だった。そいつがなぜレベルを上げられたか。吐くほどの努力を続けて、頑張り続けて……力を掴んだ。宣教師気取りで救いを与えてるつもりだか何だか知らないけど、人を傷つけてでも力を楽して得るだなんて、アンタはどうしようもなく、弱い！」

「ンだこのアマ……」

鉄雄の目つきが、一気に鋭くなり、凶暴さを露わにする。鉄雄の足元の落ち葉が、俄かに、鉄雄を中心とした渦を巻くように舞い上がった。

「超能力者⁵か。言ってくれんじやねエか、面白^{おもしろ}エ！俺の力がどんなモンか、今度こそ試してやろうと思っただぜ！」

「お姉様だけではありませんの」

黒子が、その小さな体で進み出て、手を差し出した鉄雄とカオリの間に改めて立ちはだかった。

「あなたには聞きたいことが山ほどありますの。そして、帝国を野放しにはしておけません——初春！」

黒子の呼びかけに、初春は「ハイッ」と淀みなく返事をした。

「アンチスキルに連絡を。佐天さんとカオリさんを連れて避難して。この男は、ここで捕えますわ！」

「戯言ほざいてんじゃねえぞ！」

鉄雄が叫んだ瞬間、念動力が奔流となつて、メキメキとアスファルトを抉りながら黒子へ向かった。

しかし、その力が届く前に、黒子の姿は突如消える。

「!?どこに——」

鉄雄が首を左右に振って辺りを見渡した。次の瞬間、鉄雄の頭上へ転移した黒子から、重力を乗せた強力な踵落としを首筋に食らい、鉄雄が倒れ込む。

「アンタにはムカついてんの!ちよつと痛い思いしてもらおうよ!」

倒れ込んだ所を狙い、美琴が落雷の如く電撃を炸裂させる。

幾つものシンバルがかき鳴らされるような音が響き、鉄雄が白い光に包まれた。

「鉄雄君!」

「ダメです、先輩!ここは早く逃げないと!」

声を上げるカオリを、涙子と初春が腕を引つ張つて引き留めた。

美琴が電撃を落とした辺りには、土煙が立ち込めている。

「……………えっ?」

徐々に拡散する煙の中から、のっそりと人影が立ち上がったのを見て、美琴は声を漏らした。

「何で効かねえんだって思ってたんだろ?」

美琴の心を見透かすように、鉄雄が言った。

金属が軋む、不気味な音が響いた。

道路の両脇の街灯や電柱が、不自然に曲がり、その先端を美琴の方へ向けている。

バチイッと音を立て、電線が幾つも破断した。

畑の雑草を引き抜くように、軽々と、電柱や街灯が土くれを散らし

て浮かび上がる。それらは、蛇のように美琴へと狙いを定めて向かってくる。

「お姉様！」

駆け寄った黒子が美琴の腕を取り、その場から空間移動した途端、美琴の立っていた場所に電柱たちが凄まじい音を立てて衝突した。その様はまるで、鯨の死骸に群がり食いつく深海魚だった。

アスファルトの礫が土くれと共に飛び散り、千切れた電線が鞭のように空をしなっている。引き抜かれなかった電柱もバランスを崩し傾いている。大地震が残した爪痕のようだ。

土煙の中から、鉄雄が姿を現した。片手の特に目立った傷という傷はない。鉄雄は浮遊し、あつという間に築かれた、瓦礫の小高い丘のてっぺんに降り立った。

様変わりした辺りを見回し、鉄雄は獰猛な笑みを浮かべて口を開く。

「テレポート空間移動つてののか？うざつてえぜ……コソコソ逃げ隠れしてんじやねえよ、二人がかりの癖によオ」

「ヤな感じ、アイツ……やっぱり並の電撃は効かない」

建物の陰に隠れ、鉄雄との距離をとった美琴が、様子を伺いながら呟いた。

「ちよつと気絶させようかと思っただけだけど、思ったより力出したほうがいい感じ？」

「どんなタイプの念動力か……ですが、いかにも能力のレベルだけが急に上がった輩。やることは派手でも、あまりに力任せですわ」

美琴の隣で、黒子が冷静に言った。

「さっさとお縄にして、塀の向こうにブチ込むべきですわね。これだけの破壊活動をした時点で、彼の負け。アンチスキルも血相を変えて追い詰めるでしょう」

「どうせ近くで聞こえてんだろう！ジャツジメントの女ア！」

鉄雄の声が響き渡った。

「出て来ねえなら……ここらの建物一軒一軒イクラにするぞオ、オ

ラァ!!」

「不味いね、こりゃ」

美琴が右手を地面に向けて翳した。辺りに散乱した金属片や、黒い砂鉄の粒子が手元に集まり、槍のような外見を形成していく。それら細かなひとつひとつの構成物が、ヴヴヴと低い音を唸らせて振動している。

「セブンスミストで見たけど、奴は能力を発動する時、腕を振り回す。そこを貫けば、頭も冷えるんじゃない？」

「私もお供致しますわ」

黒子が太腿に忍ばせた金属製の矢を手にとって言った。そして、美琴の左手にそっと触れる。

「私は彼の背後へ飛びます。挟撃しましょう」

「分かった、じゃあ、1、2の——」

数えかけた所で、美琴は口を噤んだ。

小さな人影が、街路樹の倒れた道路脇から飛び出し現れたからだ。

「やめて!!」

精一杯の叫び声が響いた。

カオリが、両手を真横に広げ、鉄雄の眼前、瓦礫の山の麓に立っていた。

「何だ、カオリ……」

美琴や黒子に対する口調とは打って変わって、静かに鉄雄が呼ぶ。

カオリは広げた両手を震わせている。

「もうやめて！こんなことは——」

「やめてって、何だよ」

やや落胆したように鉄雄が言う。

「これを見ろよ。俺の……俺の力だ」

鉄雄も瓦礫の上でゆったりと手を広げて、破壊された周囲の様子を誇示して見せた。

「ひと月もたたねエ内に、ジャツジメントやアンチスキルなんて目じゃなくなった。スキルアウト共も、雁首揃えて頭を下げてくるの

さ。レベルアッパーが欲しいってな。今じゃ、あのレベル5ですらかくれんぼときた！ほんと、すげえだろ」

熱っぽく語る鉄雄の様子を、カオリは口を真一文字に結んで、じつと見上げている。

「カオリ、お前だって、レベル0だろ？レベルアッパーを聞いてみてくれよ。もう、肩身の狭い思いをしなくていいんだ。ピエロ共に乱暴されることも、ロクデナシの親の顔色を窺うことだってないんだ。中学で、お前をひどい目に合わせる奴らに、いくらだって仕返ししてやる！」

俺がそうさせてやるよ、カオリ。お前に、もう不幸せな思いはさせねエ」

「……すごいね」

カオリが静かに言った。

「だけど、それは——」

「カオリ先輩！」

初春が道路脇からカオリの下へ駆け寄って来た。

「マジであの人ヤバいって、逃げなきゃ——」

涙子も後を追ってきた。

初春がカオリの伸ばされた手を掴む。

「アンチスキルには通報しました。早くこの場を——」

「ンだと、こらア!!」

初春の言葉を聞いて、鉄雄が激昂する。

「邪魔すンじゃねエエ!!」

「ダメ!!」

カオリが咄嗟に初春を突き飛ばす。初春は後ろによろけて尻餅をついた。

鉄雄が右手を振るうと、アスファルトがバキバキと音を立てて砕け、瓦礫が散弾のように炸裂した。

「……ッ!!」

「か、カオリ先輩……」

鉄雄が息を呑むのと、初春が声を漏らすのと、ほぼ同時だった。両手を地面についていたカオリが、ゆっくりと立ち上がり、顔を鉄雄へと再び向けた。

服はひどく汚れ、所々破れている。片目を覆うように、べつとりと額から血が流れている。

「みんな、心配してたんだよ?」

静かに、しかし力を込めてカオリが言った。

「わたしも、金田君も……」

「ッあ、アイツは関係ないだろ!」

明らかに狼狽して、鉄雄が言い返す。

「私の知ってる鉄雄君は、ちよつと背伸びするのが好きで、けど気はそこまで強くなって……金田君や甲斐君、山形君に頼ってて——」
「やめろ」

「それでも、私に、優しくしてくれた。優しい人だった」

「やめろ!それ以上言うな!」

「鉄雄君、一体何があつたの!」

髪を振り乱し、カオリが叫んだ。

「今のあなたは、私の知ってる鉄雄君じゃない!私は、あなたには守られない!私は、私を大切にしてくれる人がいるんだって知つた!こんな私でも、もつといろんな人と繋がれるかもしれないって、気付けた!私の、大事な友達を傷つけるなら——」

カオリが、座り込む初春と涙子を庇うように立った。そして、再び両手を広げた。

「今度は、私が友達を守る!あなたに、傷つけさせはしない!」

「なんだと、畜生——ッ!」

鉄雄は、急にこめかみを押さえた。

「あ、アタマが、痛エ——ああッ!」

次の瞬間、鉄雄は弾かれるように体を仰け反らせ、瓦礫の山から転げ落ちた。

「カオリさんの言う事は正論——そして、あなたは今、動揺している様子。精神的に集中できなければ、ご自慢の力も上手く働きませんわよ？ 帝国のリーダーさん」

地面に倒れて呻く鉄雄を、黒子が見下ろした。

鉄雄は自分の右肩を見て、目を見開いた。2本の金属矢が刺さっている。

すかさず、黒子は鉄雄のシャツやズボンの端を地面に縫い付ける。鉄雄は息を荒げて、恨めしそうに黒子を見上げた。

「てめ、こんなことして、タダで済むと思うな——」

「あら、じゃあ、仕返ししてみれば！」

美琴が黒子の隣に立ち、鉄雄を見下ろして言った。

鉄雄はギョツとして、美琴の手元に浮かぶ、高速振動する砂鉄の槍を見る。その先端は、鉄雄のすぐ眼前に向けられている。

「けど、何か少しでも抵抗する素振りを見せようモンなら、その瞬間に、もっと大きいのがアンタを串刺しにする。マジだからね！」

「クソツ、畜生ッ！」

鉄雄が唾を垂らして悪態をついたが、美琴は意に介さない。

「所詮、アンタは身の丈に合わない能力だけ与えられて喜んでる、子どもなんだよ。いちいちキレて辺り構わず力を振り回すアンタは……弱い！」

「馬鹿な、俺は、強いんだ！」

もがきながら、鉄雄が必死に叫んだ。

「俺は、強くなったはずだ！ なア、カオリ！」

離れたところで、カオリは何も言わず、じつと鉄雄を見つめている。血が滲む額には、初春が応急処置としてタオルを巻いていた。カオリの表情は、怒りに満ちていて、それでいてどこか寂し気だった。

周囲に、人が集まり始めていた。近隣の住民だろうか、電柱がいくつも倒れる騒ぎに、様子を見に来たようだ。

「弱いよ、アンタ、どうしようもなく」

美琴がため息交じりに言い渡した。

「この街にはね、アンタなんか足元にも及ばないようなバケモノみた

いな連中が、まだたくさんいるんだから」

「強い、奴、だと……」

鉄雄が歯噛みして言った。頭痛がエコーを響かせて、どんどん強くなっているのを感じた。

「あら、お姉様も、その『バケモノ』の麗しきおひとりでは？」

「褒めてんのかけなしてんのかよく分かんないけど？黒子」

「まさか！私が、お姉様に礼を失するなど、あり得ないことで……オホン、それより、初春！アンチスキルの到着はまだですか？」

「学生街の方に人員割かれてるみたいで遅れてましたけど、もう間もなく……」

鉄雄の耳に、少女達の会話が聞こえているが、次第にどんな意味をもった言葉なのか、判らなくなっていた。

俺より、もっと、強い奴——。

(そうだよ)

あどけない少年の声がする。

(君はもうすぐ、アキラ君に……)

別の声が続ける。

アキラ？

アキラだと!!

(そう)

幼い少女の声が答える。

ワタシたちの、28番目の、仲間。

「ぼくは……ここだよ！」

「どこだ！どこにいるんだ!! あああああ!!」

鉄雄が今までになく大声を上げたので、美琴と黒子は驚いて振り返った。

黒子によって縫い付けられた金属ピンが、地面から外れてひしゃげる。

鉄雄を中心として、地面に亀裂が走る。

「危ない!!」

黒子は空間移動し、美琴は磁力を操作してその場から急速に飛び退く。

初春、涙子、カオリは全速力で走り、逃げ出す。

ドオンと爆発音が轟いた。

鉄雄は突如として姿を消した。

様変わりした現場では、破裂した水道管から白く吹き上がる水が、辺りにミストを漂わせていた。

初春と、美琴と黒子は、アンチスキルからの事情聴取を受けている。鉄雄がカオリに渡そうとしたデータカードも、アンチスキルに提出され、分析に回されていることだろう。

カオリは、手当を受けている。

一人木陰のベンチで待つ涙子の頭の中に、突如声が響いた。

(力がほしいのだろう)

「へっ!!」

あまりに突然のことだったので、涙子は跳び上がり、辺りを見回した。

心臓がばくばく早鐘を打っている。

「だっ、だれ!?!」

(鉄雄様は、力を欲する者に、施しを与える。受け取れ)

涙子の横で、微かにカツンと音がした。

涙子が目をやると、ベンチの上に、小さな物が落ちている。

「これって……」

涙子が指で摘み上げたそれは、鉄雄がカオリに渡そうとした物と同じ、データカードだった。

涙子は、そのカードをじっと見つめた。

心臓が、まだドキドキしている。

「……解せねえな」

「何が？」

「こいつは、一介のスキルアウトのリーダーだった奴。それだけに過ぎないだろう？」

助手席の男が、親指で後ろを指し示しながら、運転席の男に疑問を投げ掛ける。

「それがなんで、こんな風に一人だけVIP席を用意して送んなきゃならないんだ？更生院から支部へ事情聴取に呼びつけるだけだろ」
「俺も詳しくは聞いてないが」

運転席の男が、ハンドルを切って車を右折させながら言った。

「この男は、捕まる直前、ボスの座を巡る抗争で引きずり降ろされたらしい。その争った相手つてのが、例の街を騒がせてる新興チームのリーダー格の少年つて話だ」

「新興チーム？」

「『帝国』だよ」

「ああ……アレね」

助手席の男が、記憶を思い返すように、窓の外へと視線を移した。かけているサングラスに、時折街灯が映り込み、光っては消えていく。

2人が乗っているのは、一台のワンボックスカーで、それは陽の落ちた道路を駆けていた。アンチスキルが所有する車の一つで、車両の後部には、何らかの理由で咎を受けた者を乗せるものだった。

「メーワクだよなア……このクソ忙しい時期に。今日だって、学生街グラビトンでやらかしたんだろ？あの虚空爆破事件の犯人だって、帝国の手先だっていうじゃんか」

「その虚空爆破事件の犯人が逮捕された所に、帝国のリーダーじゃないかって少年が一瞬現れたつて話なんだよ」

「へえ。で、捕まえたのかい？ソイツ」

「捕まえられてないから——」

もうすぐ青に変わるであろう信号を待ち、ハンドルを指でトントンと叩きながら、ドライバーのアンチスキルの男が言った。

「手がかりが欲しいんだろ。現状、そのリーダー格だつていう少年の情報は極端に少ないのさ。今日、学生街、それと南の下町でも目撃されたらしい。そこで、俺たちが今運んでいる後ろの男に、改めて聴取を行うって話だ」

「で、たかだか二十歳にもなんねえこのガキ大将を、わざわざ丁重に送り届けるつてのは……」

助手席の男がやや探るような目でドライバーの仲間を見つめると、仲間の男は軽く頷いた。

「口封じ。襲撃の可能性があるということだ」

「あの肉の塊みたいなボーズにねえ」

助手席の男が、ちらりと視線を後ろに向けた。分厚い強化ガラスの向こうには、うなだれてじっと座る、大柄な少年の姿があった。

「ブタさん、大人しいもんだな。これから捌かれるんじゃないかって顔をして」

「レコーダーに全て録音されてるぞ。誰が相手であれ、人権を尊重した言動をとれ」

「ハイハイ、マジメなんだから——定時連絡だけ、ジョー」

フロントに据え付けられた機器の一つが着信音を鳴らしながら点滅し、助手席の男が応答した。

「——こちら警護457。道路状況は良好。」

『了解、状況の報告を。どうぞ』

「103更生院から護送中の対象に問題なし。あと20分でそちらに到着する予定。オーバー」

手短に済ませてスイッチを切ると、助手席の男は軽く伸びをした。

「連絡はいいから、定時に上がりたいモンだぜ、なあ?」

「同感だ」

「——オイ、ジョー!!前——」

愚痴をこぼしたその直後、助手席の仲間が跳ねるように体を乗り出

した。

ヘッドライトが、不意に道路上によろよろと現れた人影を映し出す。

咄嗟にドライバ―の男がガツとハンドルを切るが、遅すぎた。

ぐわあんと衝撃音を轟かせ、護送車が空中に高々と舞い上がった。バンパーやヘッドライトのガラスを撒き散らしながらきりきり舞いした後、空気の抜けたバスケットボールのように重たく弾みながらガードレールに衝突した。それから、上下逆さまに地面を滑って停止した。

前の席に座っていた2人のアンチスキルは動かない。

代わりに、後部のひしゃげたドアを無理やり蹴り破るようにして、中から肥満体の男がよろめきながら降り立った。

「いてエ……何だっつんだ……」

額を押さえながら、かつてクラウンと呼ばれるスキルアウトチームを率いていた男、ジョーカーが呻く。

「クソツたれ、鍵は……」

ジョーカーは手錠を繋がれた両手を忌々し気に睨む。ジャラリと金属音が漏れる。

ジョーカーは逆さになった車体の前部を覗き込む。割れたウィンドウの向こうに、口を半開きにして逆さ吊りになり、両腕をだらんと垂らしたアンチスキルのドライバ―がいる。

「アンチスキルがポシャってちゃ示しがつかねエだろうがよ……」

どこか嬉しそうな口調で独り言を言ったあと、ジョーカーは手錠をはめられた両腕を外から運転席へ差し入れると、ドライバ―の男が着ている制服のポケットを何か所か探った。そして、鍵束を探り当てると、手首を柔らかく返して、器用に自身の枷を外した。

「ハッ、こんなところ早くおさらばだぜ」

車から退いて数歩歩いたが、ジョーカーは気配を感じて振り向いた。

「……お、お前……」

小柄な男が街灯に照らされて、こちらへゆっくり歩いてくるのが見えた。

近付くにつれ、その男は逆立った髪型で、夜闇の中でも分かる獰猛な目つきをぎらつかせていることが分かった。

ジョーカーの脳裏に、血の海で高笑いする少年の姿が蘇った。

「く、来るな——うわあああ!!」

ジョーカーは、事故の衝撃で痛んでいた体に鞭打って、出来得る限りの全速力で、反対方向へと走り、夜の街の暗がりへと姿をくらませた。

少年は、ジョーカーを気に留めることもなく、ふらつきながら歩き続ける。

「——畜生、畜生……」

頭を時折抱えるように抑えながら、島鉄雄は不安定に揺れながら歩き、そして忽然と姿を消した。

7月17日、夜——

右腕に異物感を感じた。

重たい首をゆっくりと傾けて目をやると、親指の付け根、手首の内側の辺りに透明な管が挿入されている。

透明な連結管は、自身の体の右側へ伸び、そこから上へ向かっていく。視線を上げると、輸液パックが見えた。点滴筒の中を、雫が垂れた。聞こえるのは自身の息遣いだけで、今居る空間は盆に張った水のように静謐だった。

体を起こした。真っ白い寝具が衣擦れの音を立て、それと共に揺らされた輸液カートが軋みながら床を転がる。

閉じていた口を開けると、唇が妙にかさついているのを感じた。それでいて、喉は全く乾いていない。不思議な感覚だった。

「……黄泉川先生……」

どこか聞き慣れた声が飛び込んできて、黄泉川愛穂は自身の五感が一気に晴れるのを感じた。

「鉄装」

黄泉川が、病室の中心へと顔を向けると、鉄装綴里が立っていた。どこか潤んだ目をしている。

「鉄装、私は……」

「学生街で昏倒したんです、黄泉川先生」

鉄装が、早足で黄泉川のいるベッドの傍へ寄って来た。

「布に詰められた石が飛んできて……ちようど、先生のバイザーにヒビが入っている所に直撃してしまつて」

「石……う？」

黄泉川が自身の顔をひたひた触つて確かめる。額の辺りに、分厚い包帯が巻かれていることに気付いた。

「私はそれで、気を失つて——」

「いや、半分は昼寝だぞ、黄泉川」

厭味つたらしい男の声がした。

「支部長……」

「月詠先生から聞いたぞ。お前、ここのところ碌に睡眠をとつていなかったそうだな」

腕組みしながら、神経質そうに人差し指を動かす工示正影がいた。

「それでいて張り切つて街に繰り出して、デモ隊とアーミーの抗争の貰い事故つてヤツか。なあ、警邏業務に当たる前に、装備品の安全規定はクリアしたんだろうな？」

「あの、工示先生。少しお言葉が強すぎでは……」

「いや、鉄装。いいんだ」

黄泉川は首を小さく振り、俯いた。

「……面目ないです」

上官の言葉はいつも以上に棘があつたが、黄泉川には言い返す気が起きなかつた。彼が指摘したことは、概ね事実だと分かつていたからだ。

工示は、下を向く黄泉川の姿を暫く見つめ、大きくため息をついた。「……がむしやらに突き進んだばかりに、ブラックジャック如きに伸されるんだ。先の危険を見通せ。アンチスキルとして必要なことだ」

そして、片手に持っていたビニル袋の中をガサガサと探り、中身を
取り出してサイドテーブルにどんと置いた。

黄泉川は、テーブルに置かれた物を見て、目を丸くした。

「……支部長、これ——」

「増税後にはこんなこと一切しないからな」

自分が今しがた置いた、10カートンはあるだろうかというタバコ
の箱の山には目もくれず、ぶつきらぼうに工示が言った。

黄泉川と同じく目を丸くしていた鉄装が、何か言いたそうに口をぱ
くぱくさせた。

「何だ」

「……あの、支部長、ここ、病室……」

「早く隠しとけ。ドクターに白い目で見られたくはないからな」

どこかバツが悪そうに視線を明後日の方向へ逸らす上官の姿に、黄
泉川は自然と顔が緩んでしまうのを感じた。

「……ありがたく頂きます」

「間違つてもここで吸うなよ。退院したら、一服でも十服でもして、心
も体も休めろ。仲間が皆、お前を心配しているし、何より、お前の学
校の子どもたちが待っているだろう。我々は皆、学生たちの前では健
気に振舞わなければならないのだから」

「ええ」

黄泉川は頷いた。

「それが我々の仕事です」

「なら、次の見舞客との話もさっさと済ませて、今日は寝るんだな」
「客？」

黄泉川が聞き返したとき、工示は早くも踵を返して背中を向けてい
た。

「私はいいつを好かん。黄泉川、恐らくお前は、もつといけ好かない奴
だよ」

工示が早足で病室を出て行くと、間もなく入れ替わるように、少し
頭を下げて入り口から別の男が姿を現した。

その大きな体軀に、黄泉川も鉄装も目を見開いた。

「アンタは……アーミーの」

部屋に歩み入って来た敷島大佐に向かって、黄泉川は記憶を辿りながら話しかけた。

「黄泉川、と名を聞いた」

大佐が、低く重みのある声で、確かめるように言った。黄泉川は混乱しながらも僅かに頷いた。

はじめの一瞬、黄泉川は目の前の人物が、体格のよいただの一般人ではないかと疑った。午前中、警備員支部にやって来た時の厳めしいスーツ姿ではなく、今はノーネクタイで、白い半袖のYシャツ姿だった。ただし、シャツはやはりパツパツに張り、隆々とした体つきを隠せずにいた。

「駐屯部隊司令官のアンタが、こんな一介の教師の寢床に、何の御用で？」

黄泉川は疑問を口にする。大佐がゆっくりと口を開いた。

「礼を言いたい」

「礼って……」

黄泉川は、大佐が手にしている物に視線を移した。

大佐の大きな手には、黄色を中心とした花のアレンジメントがちよこんと乗せられている。武人然とした大佐の風貌には、あまりに不釣り合いに思えた。ベッド脇にいる鉄装が、口元を緩ませ、誤魔化すように俯いた。

「私の部下——入隊したての、若い男だ。君が助けたと聞いた。感謝申し上げます」

「ああ、アレ……」

暴徒化したデモ隊の複数人に袋叩きにされていた兵士の事を思い出し、黄泉川が言う。

「それにしても、おかしいじゃん。いくら部下を助けられたからって、アーミーのボスが、取り巻きもナシに、わざわざこんなアンチスキル一人ごときに時間を割いて来たっていうの?」

黄泉川の疑問に、大佐はふっと、妙に柔らかな表情をした。

「じきに、ボスではなくなるさ」

「え!？」

黄泉川も鉄装も、意外な大佐の一言に驚きの声を上げた。

「最早、隠すまでもない」

大佐は、病室の窓へと目を移した。

その目は、カーテンの向こう側にあるであろう、学園都市の夜景を眺めるかのようだった。

「つい先刻、東京の最高幹部会で、私の解任が決議された。今日の過激派に対する取り締まりによって、学生街に騒乱を引き起こしたことが留めだった。もうじき、深夜にもマスコミの知るところだろう。私は、次の日曜で司令官の椅子から降りる」

大佐は、話に聞き入る黄泉川に再び顔を向けた。

「この7月からか……君たち、アンチスキルとは衝突することばかりだった。この街を守ろうと、志を同じくする者同士である筈だったが、私の指揮は、無用な混乱を招くばかりだった。今更だが、詫びたい」

そう言うと、大佐は短髪の頭をはつきりと下げた。黄泉川と鉄装は、どう声をかけたものか、困って顔を見合わせた。

ややあつて、黄泉川は大佐へと顔を向き合わせた。

「いくつか聞きたい、大佐。正直に答えてほしいじゃん」

大佐は、黄泉川の声に顔を上げた。

「未明に、一人の脳科学者が、ウチの支部に助けを求めて駆け込んできた。あの女性が銃で撃たれていたのは、大佐、あなたの差し金か？」

「……否」

大佐の顔に影が差し、唇が苦々し気に歪められた。

「私は、指示していない」

「今日、ウチの支部と十区の職業訓練校に、特務警察がアーミーの部隊員と共に踏み入って来たのは？」

「それもまた。私の名を何者かが勝手に使って、部隊を動かしている……概ね見当はついているが」

「全然部隊を統率出来てないじゃないですか！そりゃ、上から叱られ

もしますって」

鉄装が呆れたような声を上げた。

大佐は目を細めて鉄装の方を見たが、何も言わなかった。

「……あとひとつ」

黄泉川が静かに言うと、大佐が三度（みたび）顔を向けた。

「今日、セブンスミストに現れたあの少年……島鉄雄を、あなた方アーミーは何故追っている？ いや……」

黄泉川はじつと大佐の顔を見つめた。

「彼に、何をした？ 大佐」

大佐は、黄泉川の問いを聞いて数秒目を閉じた。

「……彼は」

静かに、低く、しかし力の込められた声だった。

「怪物になりつつある……我々の手がそうさせてしまったのだ。取り返しのつかないことになる前に、止めねばならん」

「7月1日の夜だな」

黄泉川が大佐を探るように上目遣いに見る。

「十九学区へ向かうハイウェイの途上で事故があつた。倒れていた彼のもとへ、なぜかアーミーが現れた。そして、貴方は島鉄雄を収容した。私はそれを見た。それから……アーミーが、島鉄雄に何らかの手を加えた。恐らく、私達学園都市の教師が知らないような手を」

黄泉川は、両手をベッドにつけると、裸足の足をひたりと床につけ、立ち上がった。

冷たさに驚くように、包帯を巻かれた額がずきりと傷んだ。

「先生！ 急に立ち上がって——」

心配して近寄って来た鉄装を、黄泉川は片手を出して制した。

「どうするつもりだ」

黄泉川は、長身の自分よりも更に背の高い大佐を見上げて言った。語気が自然と強まる。

「貴方はもうすぐ指揮官の座を降りる身だ。それで、島鉄雄を止めると？ 無責任な事を！ この街は今、子どもたちにとって決して安全じゃない。あなた方が手から零したモノによって、波立っているんだ。連

続発火強盗、虚空爆破、ドラッグの蔓延、スキルアウト同士の抗争の激化——それらには悉く『帝国』の手が伸びていて、鳥鉄雄は、どうやらその頂点にいるらしい。早く止めなければ、子どもたちの身が危ないんじゃない！」

傷を負いながらも迫る黄泉川を前にして、大佐は口を真一文字にきゅつと結んだ。

「無論、諦めてなどいない！」

大佐の声にも、力が入った。

「私には時間はない、だが——必ず、彼を止めて見せる」

「……その言葉が、嘘ではないことを祈るじゃん」

黄泉川が、腰をベッドに下ろして言った。僅かに眩暈を感じた。

大佐は、黄泉川に、続いて鉄装に向かってそれぞれ一礼すると、踵を返して、扉へと向かった。

その途中で、ふと立ち止まった。

「……君たち、アンチスキルの力を借りるかもしれん。然るべき時には……力を貸してほしい」

「貸すともさ……子どもたちを守るためならね」

黄泉川は、大佐の岩肌のように聳える背中に向かって答えた。大佐は、振り返って表情を見せることはなく、病室を後にして去った。

「黄泉川先生、これ……ガーベラです」

ヤナギで編まれたバスケットから顔を出す黄色い花々に顔を寄せ、鉄装が俄かに声を弾ませる。

「優しさ……でしたっけ、花言葉。見た目に寄らず、悪くないのを選びましたね、あの大佐」

「優しさ、ねえ」

黄泉川は呟いた。あの軍人にも、人情味があるものだと思った。

天井に頭をぶつけそうにしながら、陳列された色とりどりの花々をじっと吟味する大佐の姿を想像して、黄泉川は思わず嘖き出してしまった。

病棟の廊下を、大佐が大股に歩いていく。

ふと、携帯電話に着信があり、大佐は応答した。

「私だ——ああ、今から戻る。木山は転院したようだ。何とか、平和的にアプローチを……何？」

大佐は、相手の声に耳を疑い、歩みを止めた。

「……それは本当か？」

大佐の額に皺が寄り、目が狙いを定めるかのように一気に鋭くなった。

20時40分――

こめかみがズキズキと痛む。頭蓋骨越しに、ひっきりなしに拳で脳をノックされているようだった。

ぼやけた視界を晴らそうと、目を擦る。

辺りは野球場のように広く、一帯をぐるつと囲むように、いくつもの照明塔が、白く鋭い光を放っていた。しかし、足元は整備の行き届いた芝生とは異なり、凸凹と砂礫の目立つ地面が広がっている。見上げると、予想外に夜空は広く、下弦を過ぎて新月になろうかという、細身の月がはつきりと見えた。今、立っている場所が、街中ではなく、開けた場所だということが分かる。

振り返ると、意外な物を目にする。

山のように積み上げられた、貨物コンテナだった。列車に載せられる物だ。三段ほどに積み上げられたそれは、10mほどの高さの壁を作り、左右へと続いている。よく目を凝らすと、遠方にも同じように積み上げられ、外界とこの場所を隔てるかのようなうだ。

ここは、どこだ。

島鉄雄は、自分がここに行き着くまでの事を思い出そうとする。

第七学区では、カオリを学生寮の付近で待ち伏せた。そこで、自分は拒絶された。

忌々しい超能力者レベレスや風紀委員ジャッジメントのガキどもに、見下された。

俺は、勝てなかった。

(アンタは、どうしようもなく、弱い)

電撃を操る常盤台の女に放たれた言葉が、今になって胸にぐさぐさと刺さる。

これまで、クスリや金、そして幻想御手を求めて、何人もの人間が、自分へと頭を下げにのこのこやって来た。クラウンの憎たらしいピエロ達をはじめ、自分が気に食わない連中を、手に入れた力で何人も潰してきた。いい子ぶったジャッジメントや聖職者気取りのアンチ

スキル、先輩面して敵対するスキルアウト、自分を馬鹿の一つ覚えで追いかけて回すアーミーの兵隊たち。木山春生から授けられたこの力で、自分に歯向かえる敵はいない。そう鉄雄は信じ込んでいた。

それがどうした。

カオリは自分を拒んだ。自分がかつてそうであったように、日陰者の無能力者である筈の彼女は、力を得られるという大望に顔を背けた。カオリを守るために、自分は介旅の起こした爆発を、身を挺して防いだのに。それどころか、年下の、たかだか中学生の女相手に、2度も地面へと這いつくばされた。無様だ。

自分は、もつと強くならねばならない。

もつと、もつと力を得たい。

そうすれば、あの女たちも、自分へと頭を垂れるだろう。

カオリも、俺を認めてくれるだろう。

金田なんて、最早足元の蟻だ。

もつと強くなる。そのために自分は、この言う事を聞かない身体を引きずって、あちこちへと転移しながら、どうにかここまでやってきた。

目指す場所は、アーミーの駐屯地——あの保育園だ。

あの皺くちやのガキども、ナンバースのもとへ行く。そして、奴がどこにいるのかを吐き出させる。

やつ？ 奴って誰だ？

再び痛み出した頭を手で押さえながら、鉄雄は、脳裏に時折現れる、ある名前を思い出そうとした。

「そこに居るのは誰ですか、とミサカは登録簿データベースと照合の取れない人物に対し誰何します」

ピッチバンドを無理やりかけたような、機械的な抑揚の声だった。鉄雄が顔を上げると、囲まれた土地の中央方面から、LEDの冷たい白光を背に歩み寄って来る人影があった。学生の夏服のような、サマーブラウスにスカートを身に付けている。逆光のために顔ははっきりと見えないが、肩に届くぐらいの髪がやや茶色がかったこと

は分かった。手には黒く長い形をした物を握っており、それは散弾銃のような武器に見えた。

「あア？」

鉄雄はその人影を睨みつけた。

「てめエこそ誰だ……まさかアーミーのヤツじゃあねえよなア。こんなところでガキが何してやがる」

鉄雄からしてみれば、こんなただっ広い人気の無い場所で、女学生が銃を手に一人ポツンといることの方が不審だった。少女が口を開く。

「ZXCV741ASD 852QWE963', check please」

「何言つて——」

「符^{パス}丁の確認失敗。部外者の侵入は実験の正確性を揺るがし予測演算に誤差をもたらす恐れがあるためセキュリティに連絡させて頂きま
す、とミサカは事前通告します」

「……アタマいかれてンのか？」

呆れた鉄雄の言葉に耳を貸さず、相手は耳元に手をやり、何やら小声で話している。

鉄雄は、脈打つ頭痛に押されるように、怒りが沸々と湧いてくるのを感じた。カオリに拒絶され、戦いに負けた事への悔しさ。思ったように転移能力を行使できないことへの苛立ち。そして自身の身体の不調。それらを土台にして、目の前に立つ理解できないことを口走る女に対する怒りが募る。

顔は見えないが、その外見が自分を弱いと言いつ放ったあのレベル5の中学生に似ていることに、鉄雄は気付いた。

鉄雄は眉間に皺を寄せ、目尻を引き攣らせた。

脅し半分に、腕を捻り潰してやる。

頭痛を振り払うかのように首を振り、鉄雄は意識を眼前の少女に集中し始めた。

その時。

「痛ッ」

背中に針を刺すような鋭い痛みを感じ、鉄雄は2、3歩よろめいた。肩越しに手を回して確かめようとするが、届かない。それから間もなく、鉄雄の意識は強烈な眠気に覆われ、引きずり落とされるようにその場に崩れ落ちた。

砂礫だらけの地面に頬をついた時、鉄雄には一瞬だけ、レベル5の電撃使いに似た少女が、暗視ゴーグル越しにこちらをじっと見下ろしているのが見えた。

「TravisからStaff roomへ。認可外の標的は沈黙。」

被検体R-9971に影響はなく、戦闘を続行。指示を請う」

『身元と、侵入目的の確認のため、尋問する。こちらへ搬送されたし』
「了解」

倒れて動かない鉄雄の背後の闇から、2人組の人物が溶け出るように姿を現した。アンチスキルに似た、黒と深い青色を基調とした自動服に身を包んでいるが、白色のラインは無い。代わりに特徴的なのが、両肩に装着された、甲殻類を思わせる形状のプロテクターで、照明から投げかけられる光を、鈍く跳ね返していた。

「なんだ、コイツ？まだガキじゃねえか」

通信を行っていた一人の男が、ゴーグルを額に上げ、懐中電灯で照らした鉄雄の頭を爪先で小突きながら、怪訝そうに言った。

「産業スパイにしちゃ、のこのこと用心過ぎるし、さっきまで道路工事でもしてましたって感じの格好だな。どこぞの暗部の鉄砲玉じゃねえか？」

もう一人の仲間が、拳銃を長く引き伸ばしたような銃を手にながら言った。吹き矢のように細長く伸びた銃身が、光を反射して煌めいた。

「ま、お外で実験するようになったんだ。いつかこういう輩が現れるとは踏んでたさ」

ゴーグルを上げた警備兵が肩を竦めて後ろを向いた。

「車を回してくる。早いとこコイツを乗せようぜ。第一位様の遊びの巻き添えになるは御免だからな——」

くしやり、と、硬い物と柔らかいものを同時に押し潰すような音が聞こえ、警備兵は足を止め、振り返った。

先ほどまで会話していた仲間が、こちらを向いていた。目を見開いて、首だけがこちらを向いている。

「オイ……」

警備兵は思考が追いつかず、間の抜けた声をかけた。

返事をする代わりに、相手は糸の切れた人形のように地面へ体を投げ出した。頸部が強引に捻られ、裂傷から血が規則的に水鉄砲のように噴き出ている。

その向こうで、島鉄雄が笑みを浮かべて立っていた。

緊張から来るものか、恐怖か。一人残された警備兵は、顔が急激に熱くなるのを感じた。

『……Travis、Random。状況を報告せよ……繰り返す……』
「……ありがとうエゼ。薬を射ってくれてな。お陰で、頭がスッキリしたぜ」

一般では認可されていない、強力な麻酔銃による鎮静を克服した鉄雄が、獰猛な笑みを浮かべて言った。

話しかけた相手は、地面に倒れている。頭部は、破裂した水風船のようになつていた。

傍に落ちている、破壊を免れた親指サイズのスピーカーが、ノイズ交じりに名を呼んでいるが、鉄雄は気に留めなかった。

アーミーの駐屯地はどっちだろうか。当初の目的に立ち返った鉄雄が、辺りを見回したその時。

ず、ずうん、と重たい物が地響きを立てて落ちる音が聞こえた。

興味本位で音の聞こえた方向へ歩いていった鉄雄は、やがて別の死体を見つけた。

麻酔銃に撃たれる前、鉄雄が相対した少女だった。壁を成していたコンテナの一つに、どういう訳か押し潰されている。右腕と頭部だけがコンテナによる下敷きから免れ、視認することができた。砂礫が、

少女の物であろう血を光沢にして輝いている。少し離れた所には、少女が携行していたライフルが転がっていた。

「おい、お前……」

鉄雄は、身を屈めて、少女の首を覗き込んだ。

暗視ゴーグルは付けていない。光を失った目がある。その貌かおに、鉄雄は見覚えがあった。

「……超能力者レベル5……？」

あの常盤台の電撃使いエレクトロマスターに、似ているどころの話ではない。

瓜二つ。更に言えば、明らかに同一人物だと言えた。

「なんで……」

混乱する鉄雄の耳に、石ころの上を踏みしめる足音が聞こえた。

何者かが、広場の中央の方から歩いてくる。

背後の照明塔からの白光と、細長い月が落とす光が、その瘦軀かおを描き出している。

男とも、女とも見える長さの髪の毛の白さが、光を受けて明らかに分かる。

「て……てめえの仕業か？」

つい先ほどまで勝ち誇っていた気分だったが、今の鉄雄の肌は粟立っていた。

もしも、レベル5を殺せるような人物がいるとしたら。

それは、同じレベル5に他ならない。

強い奴。自らが並び立ち、そして超えるべき存在。

鉄雄は、歯を一度食い縛ってから、口を開いた。

半ば無意識の内に、鉄雄は叫び、覚醒した思考力をありつけたけ集かさせた。

鉄雄の目の前の地面に、亀裂が走る。衝撃波が石礫を飛ばしながら、急速に痩せた謎の人物へと迫る。

もしも、この人物を倒すことができたなら――。

鉄雄の脳裏によぎったそんな期待は、突然自分に襲い掛かって来た石礫がもたらす痛みによって吹き飛んだ。

咄嗟に両腕で顔を覆ったが、ナイフのような鋭さを伴った飛び石によつて、腕や顔のあちこちに傷が作られた。

痛みが、鉄雄のアドレナリンを急激に上昇させる。

荒い息をつきながら、鉄雄はもう一度近づいてくる人物の姿を見た。

衝撃波を真正面からぶつけた筈なのに、バラバラになって吹き飛ばどころか、全くダメージを受けていないように見えた。

鉄雄の鼓動が速くなる。

「この野郎オ……うざつてエんだよオオオ!!!」

鉄雄の叫びが木霊した時、光を背にした相手は、影の差す顔の口角を動かし、僅かに笑みを浮かべていた。

痛い。

口の中は鉄臭い血の味で満ちている。

足は両方とも振り曲げられた感覚があり、力が入らず、地面に這いつくばるばかりだ。

そして何よりも、背に突き立てられた物。先端を鋭く折られた枕木が、体を投地した鉄雄の背に、深々と刺さっている。辛うじて脊椎は外れているが、肋を押し曲げる程に突き立てられたため、内面から鋸を引かれるような耐え難い痛みが続いている。

島鉄雄は、細かなバラスト交じりの血反吐を咽吐いた。

無駄なことだと分かっている、何とかまだ力の入る片腕を伸ばしてその場を逃れようとする。

シューズが、伸ばされた鉄雄の指先を踏みつけた。

鉄雄は苦悶の声を上げる。

ただ踏みつけられている痛さではない。突き抜けるような痛みの跡、指先の感覚は唐突に無くなった。

汗まみれの臉をこじ開けて見ると、片手全体が、地面へとめりこんでいく。信じられない光景に、鉄雄は嗚咽を漏らした。

そして、顔を上げた。

自分の手を踏みつけている、痩せた人物が、細長い月を背景に、こちらを見下ろしている。

戦いを挑んだのはつい数分前。しかし、まるで自分の攻撃は通じなかった。

衝撃波も、念動力で飛ばした物体も、何もかもが弾き返され、自分を襲う凶器となった。

それだけではない。たった少し触れたかと思えば、とんでもない勢いで鉄雄は吹っ飛ばされ、地面に、コンテナに叩きつけられた。

鉄雄は、目の前の人物に、今までに感じたことの無い恐怖を感じていた。

圧倒的な力量の差を眼前にした、恐怖。

夜の闇に慣れた鉄雄の目は、色素の抜けた前髪の向こうの、男とも女ともとれる中性的な顔立ちを視認できる。

その人物の目は、鮮血を散らしたような赤い瞳で、それでいてどこまでも冷たかった。

まるでこれから蟻を踏みつけるかのような、つまらなそうな目で、鉄雄を見下ろしている。

「やめ、——やめろ、オイ——やめてくれ……」

鉄雄の息遣いは、鼓動と共に速くなるばかりだった。

自身の片手首が、メリメリと音を立てて骨を砕かれていく。肉が、ミートハンマーで叩かれるように潰されていく。砂礫を皮膚下へと食い込ませながら、地面へと沈み込んでいく。

自身の手から、肘、肩、やがては身体全体へと、鉄雄は死が自分を蝕んでいくのを感じた。

「あああああああ!!!」

極限まで恐れを増大させた鉄雄が、ありったけの叫び声を上げる。

眼前の人物は、俄かに驚き、目を見開いた。その途端、鉄雄を中心とした辺り一帯に、突如として地響きが鳴り渡り、地雷が爆発したかのように、大量の石礫や土が夜空へと舞い上がった。

白い肌の人物は、ズボンのポケットに両手を突っ込んで立っていた。

遠くからの照明を受けて広がる光景をじっと見つめている。

その背後で、土を踏みしめる音が幾つもある。

「計画外の戦闘は、予測された演算に誤差を生じる可能性があります、と、ミサカは懸念を表明します」

一人の少女が、白い人物の背後から機械的に語った。

軍用の夜間ゴーグルと、夏仕様の学生制服を身に纏ったその少女は、先ほど、貨物コンテナによって圧死した少女があたかも蘇ったかのように瓜二つの外見をしていた。

「今回の乱入者についての情報は未だ不明ですが、戦闘の状況からは、大能力者^{レベル4}相当と推測されます。そのため、戦闘がもたらす能力成長曲線の歪みは無視できない物になり得るので、今後はセキュリティの到着を待ち、同様の事案を招くことは厳に慎んでいただきたい、とミサカは研究チームの要望をお伝えします」

抑揚のない口調で述べる少女に対し、白い人物は一切顔を向けることなく、一つ大きく舌打ちをした。そして、ひらひらと片手を振った。話はそこで終わりだった。

話しかけた少女は、口元の表情を一切変えず、その場を去っていく。彼女が向かった先では、同じようにゴーグルと制服を着た、超電磁砲^{レールガン}と全く同じ容姿の少女が、デッキブラシを手に、コンテナにこびりついた血痕をこそぎ落としている所だった。

白い人物は思案していた。

学園都市の第一位たる自分に戦いを挑む者は初めてではなかった。それら「三下」は、自分に傷一つ付けられず、誰もが散々に打ちのめされ、命乞いをしながら、敗北していった。

今回の相手の戦闘スタイルは、物体の投擲や衝撃波といった単調な物で、洗練されていない、その辺に転がっていきそうな念動能力者^{テレキネシスト}のやり口だと判断できた。そのため、いつものように力の向き^{ベクトル}を操作し、全ての攻撃を相手へと返し、圧倒した。

ところが相手は、堪えられずに事切れるでもなく、絶望して発狂するでもなく——忽然と姿を消した。

つまりは、逃げられたのだ。

学園都市に数多存在する能力者の最上位、たった一人頂点に君臨する一方通行^{アクセラレータ}は、苛立ちを募らせ、ため息をついた。

この実験場を警備する人員が2人、あの乱入者に殺されたらしい。まともに動けない位にはダメージを負わせたのだ。そう長くは持たないだろう。仮に生き延びたとしても、遅かれ早かれ、暗部の実験に首を突っ込んだのだ。すぐに身元が割れ、追っ手が差し向けられて、終いだ。もしもどこぞの対立組織からの鉄砲玉なら、その組織も落とし前をつけさせられることだろう。

そう分かっていても、一方通行は釈然としない。

止めを刺す前に自分の手をすり抜けて逃げられたのだと思うと、苛とど立ちはなかなか消えなかった。

一方通行は、先ほどに比べよりはつきりと舌打ちをした。その目の前には、テニスコートがすつぽりと入る程の広さの荒涼としたクレターが広がっていた。

7月19日、午前 —— 第七学区、柵川中学校

「あの島鉄雄って人……私たち風紀委員にも情報ジャッジメントが回ってきました。警備員は、彼を重要参考人……要は『帝国』の首謀者だつてことで、正式に手配したらしいです」

休み時間の教室の片隅で、初春飾利は佐天涙子と席を向かい合わせにしていた。初春が小声で明かす情報に、涙子が目を伏せる。

「カオリ先輩……大丈夫かなあ」

涙子の心配そうな声に、初春も頷く。

「昨日から、教員住宅の空き部屋に保護されてるらしいですけど、今日は学校に来てるのかどうか——あれ？」

初春が驚いて顔を向けた先、教室の出入口に、カオリが立っていた。

涙子も驚いて声を上げる。

「っせ、先輩！」

涙子の驚きの声に、教室のクラスメート達の視線が、一斉にカオリに注がれる。そして、ひそひそと噂話をするざわめきがさざ波のように広がる。

周りの目をもものもしない風で、カオリは教室を横切り、初春と涙子の傍まで歩み寄って来た。

「二人に、お礼を言いたくて」

カオリが微笑んで言った。

「昨日は、私のために、危険な目に巻き込んでしまって……けど、たくさん気にかけてもらえて、ほんとに嬉しかったよ。ありがとう」

「先輩、あの、大丈夫、ですか……？」

初春が、心底心配そうにおずおずと問い掛けると、カオリは笑みをより深くした。

「うん、わたしは大丈夫。ありがと、初春ちゃん」

「その、無理してないですか……昨日の今日で」

心配を他所に微笑みを浮かべるカオリが、初春にとっては取り繕った表情に見えた。

楽しい休日になる筈だったのに、グラビトン虚空爆破事件の犯人に人質にとられ、島鉄雄に襲われ……そうでなくても、カオリは今まで楽しいとはとても言えない学校生活を送って来た筈なのだ。ましてや、今日はセブンスミスでのテロ事件に巻き込まれたということが、噂に尾ひれをつけて、既にこの学校に広がり始めていた。普段以上の好奇の目が、カオリに向けられていて、それはカオリにとって苦痛であるに違いなかった。

それでも、カオリは小さく首を振った。

「大丈夫だって——わたし、自分が変わらなくちゃいけないから。昨日のことで、そう思ったんだ」

「変わる？」

「うん」

涙子の疑問に、カオリは頷いた。

「今まで、いろんな人の言う事を聞いて、それに引きずられてばかりで……そういう風に生きてきたんだと思う。だけど、初春ちゃんや涙子ちゃん、御坂さんや白井さんの姿を見て、自分はこうするんだって気持ち、ちゃんと持たなくちゃいけないなって、そう思ったんだ……うーん、なんか、言い方が下手くそ？だよね、ごめん」

「先輩……」

「とにかく、もうわたしは心配されるばかりじゃなくて、自分でも強くならなきゃ——守ってもらえばっかりじゃなくてさ……もちろん、彼には、もう守ってもらわけないし」

最後の方の一言は、とても小さい声だった。

再び、「ありがと」とぺこりと頭を下げると、カオリは初春と涙子に手を振って、教室を出て行った。

「……やっぱり、無理をしてるように見えるよ」

「私も、そう思う」

初春と涙子が話していると、クラスメートのアケミが近付いてきた。

「ねえ、二人とも……」

初春と涙子は、アケミの顔を見上げた。

「何？」

涙子が聞き返すと、アケミは一息吸ってから、口を開いた。

「あの人と付き合うの、やっぱり、よくないんじゃない？」

「え」

涙子が言葉に詰まった。アケミは話し続ける。

「昨日、セブンスミストで、あの『帝国』とかいう不良チームに絡まれたんでしょ？それでさ、あの先輩、元々バイカーズと付き合いのある悪い人でしょ……みんな噂してるよ。そもそも、あの先輩だって、その『帝国』とつるんでるんじゃないかって」

「それは——」

「そんなこと、ないです!!」

涙子が戸惑っていると、初春がガタツと椅子を揺らして立ち上がり、大きな声で言った。

アケミが肩をびくつと揺らし、教室中の目が、今度は初春へと注がれた。

「あの人は——カオリ先輩は、みんなが思ってるような人じゃないんです！優しくて、他人を想える人で——ただ、今までちよつと傷つくことが多かったから……とにかく、どこぞのドラッグ撒き散らしてるスキルアウトと関係してるなんて、絶対ない！私が、ジャツジメントとして、友達として、断言します！だから……」

初春は言葉を切ると、顔を紅潮させて俯いた。

握り締められた両手が震えているのを、涙子が見つめていた。

「そんな噂話は、しないで、みんな。お願いします」

静かに、噛み締めるように言うと、初春は席に座った。

「ごめん、アケミさん。熱くなっちゃって」

「ううん、でも、あたしは……」

アケミが何か言いたげに、涙子の顔を見た。涙子は、小さく首を振った。

「……うん、初春さんがそういうなら、分かったよ」

アケミが静かにそう言い、自分の席へと帰っていった。

「初春……」

涙子がそつと名前を呼ぶと、初春は涙子に向かって、一度、はつきりと頷いて見せた。

教室は、休み時間が終わり、次の授業が始まるまでの間、いつも以上に静まり返ったままだった。

午後 ———

「ねえ、ちよつと」

3年生の教室から、荷物をまとめて帰ろうとしていたカオリに、声をかける者があった。

教室で孤立しているカオリにとって、滅多にないことだ。カオリは不安に駆られて顔を向けると、そこには同級生である一人の女子の姿があった。

黒髪を二つ縛りにした、内気そうな女子だ。確か、ユキといったか。自分によく突っかかってくる女子グループの一員だったので、カオリには見覚えがあった。

「少し、来てくれる？」

「え……」

「いいから」

有無を言わせない口調だった。

あのグループは、運動部に所属している勝気な一人の女子がリーダー格で、この子は陰に隠れている印象だった。こんな風に強い言葉をかけてくるのは意外だった。

また、何か言いがかりをつけられるのだろうか。カオリは心が重た

くなりつつも、どうせ逃げ場はないと諦めて、少しでも早くその場を切り抜けられるよう、指示に従うことにした。

ユキはカオリを連れて、廊下を歩いていく。

歩きたびに揺れるお下げを、カオリは上目遣いに黙って見つめながら歩いていた。

「昨日のこと、ホント?」

「えっ?」

顔をこちらに向けないまま、ユキが突然話しかけて来たので、カオリは返答に詰まり、声を上擦らせた。

「いや、だからさ。セブンスミストのこと。人質になったって」

「あの……」

カオリは逡巡した。鉄雄君との繋がりをダシに、金を盗られるのだろうか。

迷った末に、カオリは思い切って正直に言う事にした。

「……うん、そうだよ」

「へえ」

ユキは少しだけ、顔をカオリに向けた。

「……大変だったね」

「えっ!」

「何その反応、心配してあげてんだけど」

「……ありがとう」

カオリにとって予想外の言葉だった。

ユキは構わず、歩き続ける。

普通教室棟を後にし、渡り廊下を過ぎ、特別教室棟の階段を上がる。

「あの、……って……」

たどりに着いた先は、女子トイレだった。

カオリが以前、いじめっ子グループからカツアゲされそうになった場所だ。

カオリが落胆していると、ユキが今度ははっきりと顔を向けた。

「安心して。今日は、アンタじゃない」

「……どういふこと?」

心配を露わにしているカオリに向かって、ユキは笑みを浮かべた。
「面白いモンが見れるの。きつと、アンタにとつてもね」

半信半疑で、カオリはユキに促され、女子トイレの中へ入って行く。

個室が並ぶ廊下の入り口に立つと、カオリは息を呑んだ。

まず、Yシャツ姿の男子が数人立っている。

そして、彼らが囲む先に、頭から水浸しの姿で、誰かが座り込んでいる。

グループのリーダー格の女子だった。

唇を蒼白にし、わなわなと震わせている。茶色に染められた前髪が、額にへばりついている。水を被ってから間もないのか、髪や鼻、顎の先からは雫が滴り落ちている。リボンは水浸しの床に打ち棄てられ、ブラウスはぐつしよりと濡れて、下着の形や色が露わになっていた。いつもの勝気な様子は全く無く、恐怖に満ちた顔だった。

「どういうこと、これ」

カオリが戸惑って振り返ると、後から入って来たユキが笑った。

「全部、コイツの仕業だったんだよ。笑っちゃうよね」

「仕業って?」

「盗みだよ、ねえ、ユミコ!!」

ユキが指さすと、リーダー格の女子、ユミコはしゃくりあげた。

「ほんと、ごめん、もうしないから……許して……」

取り囲む男子たちが、その様子をみてゲラゲラ笑う。携帯電話を向けて、写真や動画を撮っている者もいる。

その様子を見て、カオリは、自分が苛められている時と同じような悪寒が背筋に駆け抜けるのを感じた。足元がふらふらしてきた。

カオリはそれでもなんとか、湧き上がる疑問を口にする。

「で、でも、この人、自分も盗まれてたんじゃ……」

「私もそう騙されてたんだよ。でもさ、自演だったわけ。ゼーンぶね」

ユキが言うと、男子の一人が手にしていたビニル袋を揺する。透明な袋の中に入っているのは、いくつもの財布だと、カオリにも分かった。

「ユミコのね——コイツの能力は、光学操作だったんだよ」

「“だった”って?」

「あたしだって最近まで知らなかったもん。無能力者^{レベル}だって言ってたからね。で、コイツは、昔っから盗み癖があったんだってさ。さつき問い詰めたらそう吐いたんだよ。でも、ここんとこ急にうちの学年、財布がなくなるの、増えたでしょ?それで、連帯責任っていうの?先生達に口酸っぱく説教されてさ、ムカつく——そしたらなんのことはない、コイツがどう言う訳か、最近になって自分の体を透明化できるようになったんだってさ!それなのにあたしらは、コイツに命令されて、財布を探させられた。それでアンタみたいな弱気なヤツをおびき出しちゃあ、イキってたわけよ。バカみたいじゃない?でもまあ……」

ユキはまくし立てた後に、足元にあった清掃用のバケツを掴むと、カオリの横を通り過ぎてつかつかと歩き、思い切り中身をユミコへとぶちまけた。

「こう、ずぶ濡れじゃあ、透明になった所で、逃げられると思わないよね?ユミコ?」

ゲホツガハツと、ユミコは咳込んで涙を浮かべた。

「大体アンタ臭いんだよ。まあ、トイレの水ぶっかけたから当たり前か」

「おお、おつかねえなユキ……」

男子の一人が囁し立てると、まんざらでもなさそうにユキがにやりとした。

「ていう訳でさ、あたしは今から、こいつに仕返しするとこなんだ。だってさ!今まで散々いいようにこき使われてきたんだ。ちよつとぐらいやり返したって、正当防衛^{せいとうぼうえい}じゃん?そう思わない?」

「わたしは……」

カオリは、一刻も早くここから逃げ出したい気分だった。

財布がどうか、自分もかつてユミコにひどい目に遭わされたとか、そんなことはどうでもよかった。

ただ、自分と同じような責め苦に、違う誰かが、正に目の前で遭わ

されていることが、耐えられなかった。

カオリの気持ちをよそに、ユキや男子たちがゲラゲラと笑う。

「なあ、どうするよ」

「とりあえず、服脱がしていい?」

「ええ!この臭いヤツを!?てめー趣味悪ツ!」

「けどさあ、俺、日頃つからムカついてたんだよねー。だってこいつ、男バスの俺らにも練習サボるなどか、いちいち指図すんだもん、うっせーつたらありやしないっての」

「とりあえず、今からゼーんぶ、録画しとこうよ」

下卑た会話をする男子たちに、ユキが言った。

「好きにしていいいからさ……そんなで、友だち皆にシェアしよう?そうすりゃ、コイツも懲りるでしょ」

この後起こる状況を予想し、カオリは見ていられなくなり、その場を踵を返して去ろうとする。

「ちよつと、アンタ待ちなよ!!」

ユキが憤慨して声をかける。

「アンタだつてやられたんでしょ!?一緒に見てりゃーいいじゃん!」

ユキの言葉に、カオリは振り向かずには答える。

「わたしは、そんなこと——」

「じゃあさじゃあさ!ぜつたい先生にチクんなよ!」

ユキがカオリに向かって釘を刺した。

「ジャツジメントにもだからね!絶対に!もし言ったら——」

その時、ばしやりと、重たい物が水浸しの床に投げ出される音がした。

「お、オイ、オイ!コイツ、ヤバいんじゃねえの!」

焦ったような男子の声を耳にして、カオリは振り返った。

ユキも男子たちも、身を引いていた。

ユミコが、床に這いつくばり、痙攣しながら、顔だけを上に持ち上げていた。先ほどまでとは打って変わって、歯を剥き出しにして笑っている。

「わ、わたしたちは、だいじょうぶ。イけるんだ。——もつとサキ

に。デあえるんだ。あ、アキラさまに。あ、あは、アハハハハハハハ
！」

水が跳ねる音と、甲高いユミコの笑い声が木霊した。
カオリはその様子を見て息を呑み、立ち竦んでいた。

7月19日、午後—— 第七学区

「風紀委員初春さんは、そりやああいう立場だもん。誰とでも仲良しこよしーって言うだろうさ。けどねえ」

公園のベンチに座りながら、アケミが愚痴をこぼした。

「実際、帝国ていこくってスキルアウトのワル共はさあ、職業訓練校トレンセンの不良が仕切ってるなんて噂を聞くんよ。知ってる、ルイコ？」

「あ、あたしは——」

どきつとした佐天涙子は、目をぱちくりさせた。声が心なしか上擦っている。

「そ、そうなんだ、知らなかったなあ……」

「あれれ？噂話ラブのルイコらしくないじゃん、ねえ！」

むーちゃんが両手を頭の後ろに回し、からかうように言った。

「だからさ、あたしらルイコを心配してるワケよ」

涙子の隣から、顔を覗き込むようにしてアケミが言った。

「カオリ、さんだっけ？あの先輩がまあ悪い人かどうかは知らんよ？けどさ、事件ああやって巻き込まれてるってのは、ワルとの繋がりがあるからかもしれないし、ほかの先輩からもあんまい噂聞かないし……」

涙子は、顔を合わせられず、地面に視線を落とした。

反論したかった。カオリ先輩は、そんな人じゃない、と。

バイカーズ同士の抗争にたまたま出くわした日。あの時、傷だらけになったカオリの姿を思い出すと、胸がきりきり痛む。

だから、自分はカオリ先輩の味方になる。

しかし、アケミ達が、善意で自分の事を心配してくれているのも、理解できた。

それ故に、涙子は友人との会話の中で、自分の気持ちを伝えられずにいた。

「悪いこと言わないからさ、距離とった方がいいよ？忠告するよ、友達としてさ」

涙子は、はっとして顔を上げた。
友達。

カオリ先輩とは、友達になった。自分でそう決めた。けれども、アケミやむーちゃんやマコちんだって、柵川中学校に入学した頃からの、大事な友達だ。

しばらくぶりにアケミの顔を見た。

同級生の中では、彼女の顔つきは比較的大人びている方だと、涙子は思う。

切れ長のはっきりした目が、自分を見つめている。

その視線に、涙子は胃が縮む思いがした。

もしもここで、自分が我を張って、カオリ先輩を庇ったら？

アケミは、がっかりして、自分を冷めた目で見るだろう。そうしたら……

友達を、失いたくない――。

「まあまあ……悪いのは、その帝国って人達だよ」

赤みがかった頬が特徴的なマコちゃんが、穏やかな声で言った。

「ま、そりゃそうだ！」

むーちゃんが頬を膨らませて言った。

「あいつらが暴れ回るからさ――外出制限かかるし、アンチスキルもジャツジメントもピリピリしてるし……このまんまじゃあ、夏休みに入っても、気軽に遊びにも行けなくない？マジげんな！って感じー」

「あたしらはどの道、遊べんよ」

アケミが涙子から視線を外し、むーちゃんに顔を向けたので、涙子は内心ほっとした。

「期末の能力試験、ダメだったっしょ？宿泊補習、けって決定でしよ？」
「ゲツ、そうだった……」

アケミの一言に、むーちゃんはがっくり肩を落としてうなだれた。

「あれさー、納得できなくね？能力だなんて、どーしたって才能じゃん？あーあ、レベルアップがあつたらなー」

「^{レベルアップ}幻想御手？」

むーちゃんの口から出た言葉に涙子は驚き、思わず復唱した。

三人の視線が一齐に涙子に注がれる。

涙子は、しまったと思つた。3人からじつと見つめられて、息苦しさを感じた。

「なに、ルイコ、知ってんの？」

むーちゃんが興味津々な顔で聞いてきた。

「え、えつと……能力を、自動で引き上げるって噂の……だよな？」

どぎまぎしながら、涙子は言葉を選んで答えた。

「なあんだ、やっぱり流石じゃん、ルイコ！」

むーちゃんが顔を綻ばせた。

「2年の先輩が言ってたんだけどさあ、今バリたっかいお金で取引されてるんだって、それ！」

「取引って、そもそも何なの、それ？ヤバい薬か何か？」

少し心配そうな顔をしたマコちゃんが首を傾げると、むーちゃんも難しそうな顔をした。

「それがよく分つかんないんだよねー。アプリ？だか写真だか、音声なんだか……噂じゃ、がっこーにもそれ使って最近急に能力が使えるようになったって人がいるとかいないとか……！」

「どっちみち、そんなモン買う金はないさな……」

つまらなそうに言うアケミの横顔を、涙子は見た。

友達を、失いたくない。

ここで、私が3人の助けになれば……。

涙子は、自分の通学鞆の中身をそつと手で探つた。携帯電話が、そこには確かにある。

……それに、もしも無能力者から抜け出すチャンスがあるなら。自分だって試してみたい。

「あの……」

涙子はそろりと手を挙げた。

3人の視線が、再び涙子に集まる。涙子は、すつと息を吸った。

「私、持つてるんだ……レベルアップ」

夏空の下、急に吹き抜けた風が、公園の並木の葉をざわつと揺らした。

——第二学区、アーミー駐屯地 ラボ内「ベビールーム」

「じゃあ、大佐……あなたとは、お別れつてことですか？」

球体の移動機に座るマサルが聞くと、敷島大佐はゆっくりと頷いた。

「でも、どうして？」

マサルの横に立つタカシがきよんとした顔で言った。手には、先ほどまで床のレールの上を走らせていた、列車の玩具を持ったままだ。

「どうしていなくなっちゃうの？僕たちのこと、嫌いになった？」

「そうではない」

大佐が顔を向けてはつきりと言ったが、タカシは俯いた。

「僕が……勝手に外へ出たから……僕のせい？」

「そうではない。そうではないのだ」

大佐は繰り返した。タカシにも、そして自分にも言い聞かせているようだった。

「私はここを去らねばならないが、お前達は引き続きここに留まる。お前達が不利益を被らぬよう、できる限りの手を尽くすつもりだ」
「そんな難しいこと言われたって、分かんない」

タカシが不意に腕をばたばたさせると、手に持っていた玩具が弾丸のように飛び、壁に当たってバラバラに砕け散った。

「やめなよ、タカシ」

「いやだ！もういいー！」

マサルの制止を聞かず、タカシは部屋の奥にある寝室へと走り去っていった。

マサルはため息をつき、大佐を見上げた。

「すみません、大佐。寂しがっているんです、タカシは。もちろん、僕だってそうですけど」

「お前達が謝ることではない。私の責任だ。ここまで事態を悪化させてしまった」

大佐が目伏せて言った。

「大佐……実際、学園都市の人たちは、本当に、僕らに価値を見出しているんですか？」

マサルが探るように言うと、大佐は僅かに視線を落とした。

「……賢いな、27号^{マサル}」

「あなたとはもう、長い付き合いですから。何となく分かるんです」

少しの笑みを浮かべながら、マサルが言った。

「僕だって、外の世界には詳しくない。けれども、外には、アキラ君ほどではないにしろ、僕らなんかよりももっと凄い力を持った人がいる。そう聞いています……キヨコだってそう言っていましたから」

「キヨコが……」

大佐とマサルは、幾つものケーブルや計器が複雑に繋がれたベッドへと目をやる。

玩具が散らばり、遊具も設置されたこの広間に似つかわしくない、ガラス製のドームで守られたベッドが一つ、ぽつんと置かれている。そこには、キヨコが眠っている。

そちらを見つめながら、マサルが口を開いた。

「あの、もしキヨコが起きたら、この事は……」

「お前は、どう思う、マサル？」

大佐がマサルに向かって問うと、マサルは首を振った。

「……言わない方がいいと思います」

「そうか」

「きつと誰よりも……キヨコが寂しがりますから。大佐とお別れするなんて」

マサルの言葉を聞いて、大佐はぐつと拳を握りしめた。

「マサル」

「はい」

「目覚めが近いと。キヨコは言っていた」

大佐は膝をつき、マサルに視線を合わせた。

「キヨコから何か聞いているか？それとも、……何か感じているか？」

マサルは唇をきゅつと結ぶと、ひとしきり黙った後、口を開いた。

「すみませんが、大佐……キヨコはこのところ眠ってばかりですし

……アキラ君のことも、何も」

「……そうか」

「僕からも、質問をひとついいですか？」

立ち上がりかけた大佐に、マサルが声をかけた。

大佐は再び膝をつく。

「鉄雄君、ここに戻ってきているんですか？」

マサルの言葉に、大佐は僅かに顔を引いた。

「41号か……なぜそんなことを？」

「彼とは、力が通じ合っている気がするんです。前にここで会った時から」

マサルは、はっきりと大佐を見据えた。

「そのとき、眠りにつく前にキヨコが言っていました。『もしもアキラ君が起きるなら、鉄雄君が力が開放する時』だって」

「41号が……!!」

マサルが語った内容に、大佐は目を見張った。

医療区画の一室、そのガラスの向こうでは、包帯で全身をぐるぐる巻きにされ、各所にチューブを繋がれた島鉄雄が横たわっている。

大佐は、鉄雄を厳しい目つきで見つめ、周囲の人間と話していた。

「41号の容態はどうだ？」

「肉体は驚異的な再生能力を示しています。しかし、意識はまだ戻っていません」

『サルコフアギ』の石棺』のモニタリングチームは何と？』

医官からの報告を聞くと、大佐は矢継ぎ早に、後ろに控える部下へと顔を向けて質問する。

問われた部下は背筋をピンと伸ばした。

「ハッ、1540時点で、全ての状態値は許容範囲内とのこと。過去1か月間の履歴も然りです」

「41号の行動履歴については？」

「昨晚、七学区南端の学生寮地区で目撃されて以降、深夜に駐屯地敷地内で倒れているのを発見されるまでの間、これについて目下調査中です。……負傷を負った経緯は、未だ不明です」

部下は、最後の一言を、やや口調をゆっくりとさせて報告した。

大佐は厳めしい表情で、再び鉄雄を見た。

「それだけの傷を、一体誰が？何故お前は、今戻って来たのだ……私
は、もうすぐここを去らねばならないのに」

大佐はガラス越しに鉄雄を睨みながら呟いた。

「あの、大佐……あと5分で、ミーティングです……練馬の中佐殿と。
ご移動なされた方がよろしいかと」

背後から、部下がおおおと声をかけると、大佐は頭を振った。

「ハッ！懲戒異動に伴う引継ぎというヤツか……」

自嘲気味に笑みを漏らすと、大佐は踵を返して去っていった。

それから、島鉄雄は、一切身動きすることはなかった。

—— 第七学区、柵川中学校

「だから、カオリ先輩は、そのグループ連中に呼ばれて偶々居合わせた
だけなんです！窃盗騒ぎには加担していないし、今日の仲間割れに
だって無関係です、寧ろ金銭を強要されてた、被害者ですよ！今ここ
で事情を問い質す意味なんて全くないです！風紀委員として、私が保
証しますとも！先生方もしっかりしてください！失礼します！」

一氣にまくしたててから、初春はカオリの手を引いて、相談室をど
すどすと後にした。後ろからガタイの良い生徒指導担当が何事か声
をかけたが、一顧だにしなかった。

「い、いいのかな、初春ちゃん……」

カオリがおおおと後ろから言うのと、初春はカオリの手を握る力を
より一層強めた。

「いいんです。ここの教員はアタマでつかちで、何かと融通利かないですから」

「……初春ちゃんて、何ていうか、強いんだね」

「いちいち先生や上級生の顔色窺って日和ってたら、やってけないですからね」

初春は小柄な体を早足で前へ進める。カオリを引っ張って、人気の無い廊下の角まで来ると、初春はカオリに顔を近づけ、声を潜めた。

「あの、錯乱したユミコって3年生……能力を急激に向上させて盗みを働いてたとなると、やはり疑うべきは……」

「……レベルアップバー幻想御手」

カオリは、初春の言葉を引き取った。初春が頷く。

それから、カオリは不安そうに言葉を続けた。

「でも、どうして？何である人、急激に様子がおかしくなったんだろ……まさか、鉄雄君たちがバラ撒いてたドラッグを」

「それなんです、先輩。私、ドラッグの中毒じゃあないと思うんです」

「どういうこと？」

初春の言葉に、カオリは首を傾げた。

「帝国は、確かにレベルアップと一緒にドラッグも取引して、資金を得ているようです。あの3年生がドラッグを使用していたかどうか、正確なことは病院の診断を待たなければなりません……帝国がらみで、彼女のように錯乱状態に陥った者が、ほかにもいるらしいんです」

「だから、それは薬物で——」

「先輩。連続発火強盗って聞き覚えあります？」

初春が語った言葉に、カオリは視線を斜め上に上げて考え込んだ。

「えと、確か、パイロキネシスト発火能力者が次々に銀行を襲って……けど、その人たちって、もう逮捕されたよね？」

「ええ、こないだの日曜日に」

初春が頷いた。

「けれども、そのチームの主犯格の丘原って男がいるんですけど——」

「そいつは、アンチスキルに拘束された後、一昨日月曜日に病院送りになりました……ちょうど、今日のユミコさんのように、貼り付けたような笑顔を浮かべて、笑いながら、うわ言を言っていたそうです。そして、彼はドラッグを使用した痕跡がありませんでした」
「えっ」

カオリは口に手を当てた。

初春は話し続ける。

「同様に、直近の身体検査システムスキャンよりも大幅に向上した能力を見せる人物で……ドラッグの使用履歴なしに、錯乱状態に陥っている例が複数報告されているようです」

「じゃあ、あんな風に彼女がおかしくなったのはー！」

「……はい、ドラッグではなく、レベルアップに起因する副作用と、私は見ています」

初春が深刻な表情で語った。

カオリがごくりと唾を飲み込んだ。

「そんな危ない物を、鉄雄君は……！そうだよ、考えて見たらおかしいよ、初春ちゃん！大した訓練もなしに、能力がすぐに使えるようになるだなんて、話がうま過ぎる。何か裏があるはずだよ、そんなの」

「私も同感です。レベルアップは、想像以上に危険な物かもしれない」
「せん」

初春がカオリに答えた。

「私はこれから、あのユミコって人の携帯電話をジャッジメント支部で解析します。昨日、島鉄雄が残したメモリーカードに残された物と同じデータが見つければ……それがレベルアップでしょう。正体を掴まなければ、知らずに手を伸ばした人が危ないです」

初春の言葉を聞いて、カオリはハツとした。慌てて自分の携帯電話を手に取る。

「そうだ、涙子ちゃんにも知らせなきゃ……レベルを上げるとか、そんな怪しいデータは絶対開いちやダメだってー！」

初春は、涙子へと電話をかけようとしているカオリの様子を見守りながら、内心ドキドキしていた。

カオリの言う通りだと思った。

涙子は、普段こそ明るく振舞っているが、無能力者であることに負い目を感じている。初春はそう日頃から感じ取っていた。

けれども、まさか。

佐天さんだって、帝国がどれほど悪どい連中かというのは、理解している筈だ。

レベルアップを見つけた所で、使ってみようだなんて、思わないはず……。

初春が見つめる前で、カオリは携帯電話を耳に当てた。

しかし、カオリは首を小さく振った。

「……ダメだ、出ない」

何をしてるんだ、佐天さん。

初春は、妙な胸騒ぎを感じていた。

柵川中学校の校区内にある公園では、アケミが手を叩いて歓喜の声を上げていた。

「すごいよ、ルイコ！私、今までコップ持ち上げるのがやっとだったのに！」

「痛つてえ……だからって、私を落とすことないじゃん……」

空中から不意に落とされたむーちゃんが、腰をさすりながら恨み節を吐いた。

大丈夫？とマコちゃんが声をかける。

その傍の木陰では、涙子が地面にしゃがみこみ、自身の両手を見つめている。

涙子の両手の上では、櫛の葉が数枚、渦を描いて舞っていた。

微かな、けれども確かな、涼やかな空気の流れが、優しく涙子の掌をくすぐっている。

「これが……私の力」

噛み締めるように呟く涙子の背中に、夏風が揺らす枝葉の影が日差しと交じり合って、不規則なストライプの模様を煌めかせている。

「私……なれたんだ、能力者に……」

白井さんや御坂さんに比べれば、ほんのささやかな能力。それでも、涙子は嬉しかった。

目を瞑っている涙子の肩が、ぽんと叩かれる。

「良かったね、ルイコ」

見上げると、優しい笑みを浮かべるアケミの姿があった。

「……うんッ！」

涙子は、はにかんで答えた。

睫毛に、小さく一粒の涙が光った。

ベンチの上に置かれた、イヤホンを繋がれたままの携帯電話が、しきりに震えて着信を告げていたが、涙子は気付くことがなかった。

—— 第二学区、アーミー本部

『木原』だど!?よりによつて……最もナンバーズを渡してはいけなところへ……何という事だ」

自身と入れ替わりで着任するという、他駐屯地から来た中佐との会談を終え、会議室を後にして早々、敷島大佐は歯噛みしていた。

数人の部下が、後から付いてくる。皆一様に無念の表情を浮かべていた。その内の一人が口を開く。

「あの一言には参りました……しかも、『アキラの管理についてはおいおい検討する』と……」

「馬鹿げている。金と引き換えに、あの3人のナンバーズを外の研究者共に引き渡すことが、どういう結果をもたらすのか分かっているのか？アキラの封印は彼らの動き次第で緩みかねんというのに！木原など、すぐにでも3人にメスを入れ、アキラを解放しにかかるに違いない……」
「天上の意思」だか何だか知らんが、そんな絵空事のために、この学園都市230万人の生命を危険に晒せるか！」

「大佐、これはあまりにも……納得できません」

憤った部下が言う。

「我々がこれまで心血を注いできたものは何だったのか……ナンバーズを、アキラを安全に保ち続けることが如何に困難であったか。まるで中佐殿は分かっています」

「あの中佐は操り人形に過ぎん、本人は栄転だと思っているだろうが……この学園都市でアーミーを率いるということが、どれほどの重責か解つとらん。ナンバーズの移送の件も、中央が統括理事会に屈した証だ。内閣は斜陽、与党は総選挙を目前にしてジリ貧だ。最早、本国は学園都市に頭が上がるのだろうか——Dr. 大西はどこに？今日は姿を見かけていないが？この事は当然承知なんだろうな」

「それが……ドクターは本日、休暇を申請しているそうです」

「休暇だど？」

大佐は思いがけない言葉に、訝しんだ。

どんな娯楽よりも、薄暗いオフィスでデータの印刷されたレシートとの睨めっこを好みそうな大西が、休んでいるとは、大佐にとって初めて耳にすることだった。

そもそも、大西は能力開発の研究者としては、学園都市の主流派から爪弾きにされた、日陰者だ。木原を始め、中央の学者たちを心底毛嫌いしていた筈だ。

大佐は深まる疑念を表に出すように、眉間に何本もの皺を寄せた。

——第八学区、商店街　ゲリラアジト

「決行の日……次の日曜日、23日。あのデカブツの大佐が解任される。確かなんだな？」

竜作が念押しするように言うと、テーブルを挟んで反対側に座る、黒服にサンガラス姿の男、門脇が頷いた。

「信頼してもらって結構だ。何せ、ついこの間まで、あの大佐のすぐ傍に控えていたものでね」

門脇が、若干気取った口調で答える。

「指揮官交代の日、偶然にも電気設備メンテナンスの予定が重なっている。お前達は、業者を装って侵入し、現地施設のセキュリティにハッキングしてもらおう。入構IDは、先ほど渡した通りだ」

「それは分かった。だが、俺たちには俺たちの任務がある」

「やらせてもらっていいんだな？」

「優先順位を違えず、こちらの依頼を完遂したなら、後は好きにするがいい。我々の側が引き起こす騒ぎに乗じてもらって結構だ」

「へっ、そりや上等だ」

会合が始まってからずっと険しい表情をしていた島崎がはつきりと言ったので、竜は眉を上げた。

「竜ウ、俺は反対だ」

「……どうということだ」

「こいつを信用するに足る証拠が無い」

島崎は眼光をぎらつかせ、つかつかと歩み寄ると、目の前に座る門脇を睨みつけた。

「竜、俺たちにとつて、特務警察がどれ程憎むべき相手か、忘れたとは言わせないぞ。この黒服共が、同志たちの血を流させたことを！」

島崎は声に力を込め、徐にハンドガンを取り出し、門脇の額に突きつけた。

「島崎！よせ！」

「お前こそ目を覚ませ！竜！」

止める竜作に対して、島崎が門脇から目を逸らさず語気を強めて言った。

「ごこんとごろずつとそうだ……七学区のデモだって、焦って結局どうなった？失敗だったろう？」

「あれは、アーミーが我々の想像を遥かに超え、強圧的な手段に打って出たからだ。だからこそ、我々はこうして報復の機を窺っているんだ！」

島崎の言葉に、竜作も声色を強くして反論した。

しかし、島崎は譲らなかつた。

「いいか、お前が焦ると、周りの仲間も気が揺らぐんだ！その証拠に、この場にケイはいないじゃないか。考えてみる。頭を冷やせ！」

「お前——」

「勘違いをしているようだ、お前達は」

言い争っていた竜作と島崎は、割り込んできた声のした方を向いた。

次の瞬間、島崎が座っていた椅子はけたたましく音を立ててひっくり返り、彼はくぐもった呻き声を上げ、床に引き倒されていた。

竜作は一気に警戒感を高めて立ち上がったが、黒服の門脇は先程と変わらず座ったままだった。

竜作はそこで初めて、島崎を引き倒したのがもう一人の人物だと気が付いた。会合が始まってから、始終黙り込んで部屋の隅に立っていた男だ。髪はほぼ坊主に近い刈り上げで、痩せた体軀にYシャツを纏

い、臙脂色のネクタイを締めている。顔は頬骨がはつきりと浮き出ている。門脇と同様サングラスをかけている。

竜作には、男の行動が全く見えなかった。そして、なぜこの男の存在を忘れかけていたのだろうかと自身を訝しんだ。今、その男は剃刀のような殺気を放ち、片手で妙な角度に島崎の聞き手を捻り上げ、もう片方の手に拳銃を奪い取っていた。

床で悶絶している島崎のこめかみに、痩せた男が銃口を押し当てる。

「やめろ！」

殺される。そう危機感を募らせた竜作は目を見開いて叫んだ。

「お前達こそ、無駄な言い争いを止めるんだな。そんな物を見るためにここまで足を運んだのではない」

「杉谷さん——」

「お前も黙っている。先ほどから温過ぎる。これは交渉ではない」

杉谷と呼ばれた男が、何か言いかけた門脇に厳しい視線を向けた。

「どういう……ことだ……」

銃口と床に顔を挟まれた島崎が、冷や汗を浮かべながら言った。

「少し考えれば分かりそうなものだがな」

杉谷は、ゆっくりと銃を島崎から離し、そのまま自身の懐にしまった。

島崎は、荒い息をつきながら、竜作の傍まで後ずさりした。

「七学区学生街でのデモの件、あれを統括理事会が何とも思っていないとでも？ 暢気なものだ。お前達反政府ゲリラは騒ぎ過ぎた。既に、いつ暗部に消されてもおかしくはない、学園都市にとって目障りな存在だ」

「し、しかし……アーミーへの作戦では、理事会は我々に手を貸すと！」

竜作は、杉谷の言葉に耳を疑い、両手を広げて訴えた。

杉谷のサングラスのレンズの向こうには、冷徹にこちらを見返す瞳が垣間見えた。

「今は、やつら本土からの兵隊共を手なずけるのが先だと総合的に判断されているだけだ。肝に銘じておけ。優先順位はいつでも変わる

ぞ。お前達も、精々足掻いて、利用価値を示すんだな。次にしくじる
ことがあれば、すぐに照準はお前達へと合わせられる」

「脅しか?」

竜作は、歯を食い縛った。

「もしも、我々に何かあれば、外にいる何十万という同志が黙ってい
ない。我々は政界にも太いパイプを持っている。代償は高くつくぞ」

「……あの『ネズミ』の幹事長か」

杉谷は、不意に笑みを浮かべた。

「……何がおかしい!!」

竜作も島崎も憤慨した。

杉谷は一度俯き、手袋をはめた右手の指で眼鏡を押し上げた。

「……竜作、と言ったな」

杉谷が名を呼び、竜作は黙って次の言葉を待つ。

「……この学園都市へ、任を負って何年経つ……?もしも、未だ理事會
を東京の政府が抑えられると、本気で思っているのなら——哀れだ
な」

「それは……」

竜作は反論しようとしたが、続く言葉が口から出てこなかった。

島崎も、門脇すらも何も言わなかった。

薄暗い部屋の中、杉谷の背後に、途方もない闇が広がっているよう
な錯覚を、竜作は覚えていた。

——第七学区、水穂機構病院

「涙子ちゃんッ!!」

病室の扉をガラツと開けるなり、カオリは切迫した様子で駆け込
む。

その声に反応したのは、佐天涙子ではなく、初春飾利だった。
ベッド脇の椅子に腰かけ、淀んだ視線をカオリに向けている。

隣には、白井黒子も立っている。深刻そうな表情だった。

「……カオリ先輩」

初春の声は、いつになく暗く、沈み切っていた。風邪のためにつけているマスクのせいだけではないと、カオリは察した。

「涙子ちゃんは……」

カオリの問い掛けに、初春も黒子も、何も言わずに、顔をベッドへと向けた。

患者衣を着せられた涙子が、物言わずに、仰向けに横たわっていた。身体にかけられた布団の上に両手が置かれ、輸液パックからの点滴チューブが右腕に繋がれ、更にその先の手首にはアナライザーが取り付けられていた。それ以外は、目立った異常がなく、カオリにはまるで深く寝入っているように見えた。

「涙子ちゃんは、一体……？」

カオリは、声を震わせて聞く。

初春は俯いたままだった。黒子は、迷ったように視線をきよろきよろさせてから、やがて口を開いた。

「……学校から帰る途中、公園で、友人たちと居合わせて……その内の2人が意識を失って倒れました。通報した他の友人によれば、佐天さんが、レベルアップ幻想御手を所持していたと……それは音声ファイルで、意識を失った2人は、それを携帯で聞いた後、突然錯乱したように倒れ込んだ……それからは、このように昏睡状態で……身体には何も異常がないのに」

黒子はそのままで語ると、視線を俯いている初春へと向けた。

「これらは全て、初春が教えてくれたことですよ」

「私のせいです」

初春がか細く言った。髪の花飾りが、心なしか萎れて見えた。

「何で気付かなかったんだろう……佐天さんが、レベルアップを持ってるだなんて。それを使いたいぐらい、能力のことで悩んでいたなんて……」

「違うー！」

カオリは急に強く否定した。黒子が驚いたようにカオリを見、初春は僅かに顔を上げた。

カオリは、頬が急に熱を持つのを感じた。同時に、胸の辺りがきゅ

うつつと締め付けられる感覚があり、それでも何とか思いを言葉にしようとした。

「私が——わたしのせいだ。——私、鉄雄君を止められなかった。鉄雄君が、レベルアッパをばら撒かなければ——ううん、違う、あの夜！わっ、わたしを、涙子ちゃんが助けたばかりに——わたしのせいで、こんな——」

「お二人とも、間違ってます!!」

黒子がびしやりと言った。初春は目の端に涙を浮かべ、カオリはしやくり上げながら、涙がぼろぼろと零れ落ちている顔を拭いた。

「二人とも、悪いことなど無いのです！もちろん、佐天さんも——悪は、あくまで『帝国』です。奴らが、わたくし 私たちのすぐ近くまで、触手を伸ばして来ていると分かった以上、私たちは、その根元を叩きのめさなければなりません。それが、佐天さんを救う道ですの！」

カオリも初春も、黒子の力強い言葉に、小さく、だがはつきりと頷いた。

涙子が立てる呼吸の音が、規則正しく聞こえた。

「初春から、佐天さんについての一報が無くとも、私、ここへ来るつもりでいましたの」

涙子が眠る病室を一旦後にし、三人は黒子を先頭に、廊下を歩いていった。

「それって……なぜですか？」

黒子の言葉を意外に捉えた初春が聞いた時、3人はエレベーターの前に辿り着いた。

黒子が壁面のボタンを押す。

「グラビトン虚空爆破事件の犯人……介旅初矢も、今日午後、アンチスキルの取り調べ中に、意識を失って、ここへ搬送されています」

「えっ!!」

声を上げたのはカオリだった。カオリの脳裏に、自身にナイフを向ける、殺気立った少年の顔が思い浮かぶ。カオリは身震いした。

「……嫌なことを思い出させてごめんなさい」

様子に気付いたのか、黒子がカオリに声をかける。カオリはふるふると首を振った。

「元々、彼は仲間に強要されたドラッグの症状があり、薬物依存症回復施設で医師の立ち合いの下、アンチスキルが取り調べを行っていたのですが……ジャッジメントの仲間から知らされた情報によると、意識を失った後の状況は佐天さんとほぼ同様。この病院に、意識を失った状態で寝かされておりますわ」

「てことは、彼もレベルアップを……」

カオリがそう言った時、目の前の扉が開いた。

「ええ。介旅が持っていた携帯電話からも、レベルアップと思われる音声データが発見されていますわ……けれども」

3人はエレベーターに乗り込む。黒子はより上層の階へとボタンを押した。

「けれども?」

初春が尋ねると、黒子は表情を少し曇らせた。

「まず、佐天さんや介旅がなぜ意識不明なのか、病院に担ぎ込まれたばかりの現段階では、何とも原因が判明しておりません。レベルアップの使用という共通項があるからと言って、音声データがなぜ、どのようにして対象者の能力を一時的に向上させた後、意識を奪うのか……不明な点が多いのです」

確かにその通りだ、とカオリも思った。

そもそも、ただの音が、どうやって人の演算能力を向上させたり、或いは脳の活動を停滞させて意識を奪ったりできるのだろうか。仕組みが全く分からない。

「それじゃあ、私達は結局、専門家の分析を待つしかない、という訳ですか……」

悲しみを滲ませて、初春が尻すぼみに言う。

しかし、黒子は首を振った。

「……いえ、ただ任せきりにするのは、私、我慢がなりませんので」「え?」

カオリと初春が疑問を浮かべた時、エレベーターが止まり、黒子は

再び歩き出した。

「私がこの病院を訪れた理由のもう一つは……ここには、その手の専門家の方もいらつしやると聞いたもので」

「専門家？お医者さんってこと？」

カオリが聞いた時、3人は広い開放感のあるロビーにたどり着いていた。

ロビーの先にはガラス張りの大きな扉があり、大人の目線の位置に、「特別病棟」と印字されていた。

「いえ……患者さんです。今から、その方に面会に行きます」

黒子がそう言って、呼び出しのブザーを押す。

カオリと初春が顔を見合わせていると、係員がガラス扉の向こうから、スピーカー越しに話しかけて来た。黒子がジャッジメントの腕章を見せて身分を明かすと、扉は横にスライドして開いた。

3人は備え付けのアルコールポンプで手指を消毒し、病棟へと足を踏み入れる。

涙子が入院していた一般の病棟に比べ、心なしか広く、明るく感じる。

廊下をしばらく進んでいくと、黒子はある一室の前で止まった。

「……ここですわね」

カオリと初春は、病室の出入り扉に示された表札を見た。

「木山春生」と、そこには書かれていた。

「どうぞ」

黒子が病室の扉をノックすると、中から女性の声が入室を了承した。

黒子が先に、後から初春とカオリが中へと入る。

明らかに、先ほど訪れた佐天涙子の病室よりも開放的で、陽当りの良い部屋。部屋の主は、涙子とは異なり、ベッドに寝かされてはおらず、ベッド脇に置かれたデスクの前の椅子に腰かけ、こちらへと体の向きを変えた。

茶色味のあるウェーブがかかったセミロングの髪に、気怠い眼差し。目の下には、はつきりと隈が浮き出ている。幸薄そうな青白い肌の痩せた女性だった。傾きを増して橙色味を増す陽光が、背後の窓から差し込み、却って彼女の顔に影を作ること、より儂げな印象を強めていた。患者衣を身に付けているが、一見目立った外傷や病を患っている様子はない。

「お初にお目にかかります、きやまはるみ木山春生先生」

黒子が頭を下げ、挨拶した。

「お会いできて光栄です。先刻、連絡致しました、ジャツジメント一七七支部所属、白井黒子です」

「どうも。木山春生という。大脳生理学を研究している。専門は、AIM拡散力場……能力者が無自覚に周囲に放出している力の——」
話の途中で、木山は黒子の制服姿に目を留め、小さく首を振った。

「——君は常盤台だね。説明するまでもないか……」
どこか陰鬱そうなアルトの声は、長い前髪が影を落とす相貌にぴたりだった。

「大脳、生理学……」

「ん？ああ、大脳は動物の行動を支配する領域だ。その機能を研究している。私の場合、AIM拡散力場を専門とする以上、人間の潜在的

な意識や、情緒といった面にも手を伸ばしているがね」

カオリの眩きに対して、木山が説明を加えた。

「ところで、君ら……常盤台の学生さんではないね？」

「あっ！申し遅れました——」

木山が僅かに首を傾げたことで、初春とカオリも名乗る。

木山春生は、後に名乗ったカオリの顔を、なぜか興味深そうにしげしげと眺めた。

カオリは無性に不安になる。

「あの……」

「ん？ああ、いや、すまない。ジャツジメントではないのだね、君は」
木山の言葉に、カオリは咄嗟に頭を下げる。

「すみません。今日、この病院に友人が担ぎ込まれて……もしお邪魔でしたら、外で待ちます」

「いや、構わないさ。ジャツジメントのお二人に同行しているというなら、信頼がおけるといふことだろう」

木山からの予想外の誉め言葉に、カオリは僅かに頬を赤くした。

「あの、押しかけておいて失礼ですが、入院中、ということですよ？」

初春が言うと、木山は首を振った。

「ああ、気にしないでくれ」

ちらりと、不自然な膨らみのある左肩に目をやって、木山が答えた。

「銃弾の抽出は済んでいてね。まだ、思うようには動かないんだが」

「銃弾……」

黒子が僅かに息を呑んだ。

「その、噂に聞いているのですが……アーミーの部隊に襲われた研究者というのは……あなたが」

「まあ、アンチスキルは警備をしてくれているようだし、ジャツジメントたる君たちなら、まさかアーミーに口外することもあるまい。隠し立てしてもしようがないか」

木山はふっと笑みを浮かべ、デスクの上に置かれたコンピューターに視線を向ける。

「どうも、奴らは作戦行動を行う階層をお間違えなさったようでね。」

とんだとぼつちりだよ。私は予てからの研究に没頭していたいだけなんだ。幸い、ここの院長とは知り合いでね。こうして、絶賛テレワーク中なんだ」

そう言うと、木山は椅子を動かしてデスク上のコンピューターに向き直り、動く右手でキーボードを操作する。

その一方で、一切マウスに触れていないのに、画面上のポインタは忙しなく動き、幾つかのメールや添付のドキュメントを開いて表示していく。

その様子を見て、カオリは「どうやって……」と思わず声を漏らした。

驚いているカオリに気付いた木山は、ふっと口の端に笑みを浮かべ、手を止めた。

「オン・スクリーン・キーボードだよ」

木山の右手の指が、コンピューター・ディスプレイの下部に取り付けられている、横に細長いウェブカメラのような物を軽く突いた。

「目新しい技術じゃあない。今世紀初めにはゲーミングで分厚いメガネ様の物が出回り始めていた。これは、画面下に取り付けるだけで、視線の動きをトラッキングしてくれる。お陰で、ドライアイに拍車がかかったけれどもね」

初春とカオリは感心したように頷いた。

「この個室も用意してもらってね。研究機密に関わるデータをいじるには、オフィスのサーバーに直接アクセスしなければならないが……今どきは、セキュリティさえしっかり整えれば、基礎的な分析くらいクラウドでできるからね。ありがたいことだよ」

木山は少し首を伸ばし、黒子たちが今しがた入って来た出入口を見る。

「ところで、アーミーの連中は私を探しているだろう……この病院周辺に張り込んでいなかったかい？」

「いえ」

初春が答えた。

「彼らは、先日のデモ隊鎮圧の騒動で、指揮官の首が飛ぶことになって

「……てんてこまいしてるみたいです」

「そうか、指揮官は去るのか……」

木山は、初春の答えを聞きながら、出入口の方をしばらく見つめたままだった。

どこか遠い目をしていた。

「あの」

木山の態度が不服を表していると捉え、黒子が申し訳なさそうに言う。

「御加減が万全でない所に、お時間を取らせてしまい、すみません」

「いや、気にしないでくれ。白井君からの連絡は興味深い物だったし、実は今日、この病院の院長からも同じ件で相談を受けた所なんだ」

「本当ですか!？」

「ああ」

木山はそこで、ようやく黒子たち3人に視線を戻し、僅かに椅子に座る身乗り出して来た。

「——『帝国』というスキルアウトチームにまつわる、原因不明の昏睡患者の急増について、だろうか？」

「なるほど、『幻想御手』^{レベルアップ}ね……音声による能力の向上……」

「今日、担ぎ込まれた佐天さん……私の友人なんですけど、どこかからそのデータを入手したらしく、携帯で聞いて、一瞬能力のレベルが上がったと思ったら、急に倒れたと」

初春が、沈痛な面持ちで語る。

「他に、火曜日に学生街で起きたテロ未遂事件の犯人……彼も帝国のメンバーの一人で、レベルアップを使用して能力を向上させていました。その彼も、つい最近昏睡状態に陥っています。他に何人も同様に昏睡し……彼らの共通点は、レベルアップと呼ばれる音声ファイルを自身の端末に保存していたこと。ジャツジメントやアンチスキルのもとに、いくつも報告が上がっていますの。」

黒子が語る内容に、木山は動く方の手を顎に当てて、考える素振り

を見せた。

「今聞いた情報だけでは、不明な点が多い。能力を強化するということは、脳に影響を与える何らかのシステムが働いている筈だ。しかし、音声がそれを可能にするかと聞かれれば、困難だといえる」

木山の言葉に、黒子と初春、カオリの3人は聴き入る。

「短期間で、急激な能力の向上を実現する手段としては、例えばテストメント学習装置が挙げられるが……あれは、聴覚以外にも、味覚や嗅覚、視覚、触覚……五感全てに働きかけてようやく可能なんだ。それを聴覚のみで行うとなると、実現性は疑わしいが……その現物はあるかね？」

「今は、アンチスキルにデータを提出しておりますが、あちらも専門的に分析する協力者を欲しています。近々、正式に木山先生の研究所へ依頼をさせて頂くかと」

「研究所経由でも結構だがね、些か遠回り過ぎる。私に直接連絡を寄越して構わない」

「……よろしいのですか？療養中のお身体で……」

「興味がある。寧ろ、こちらからお願いたい位だよ。どうせ動かないのは片腕だけだからね。デスクワークに支障はない」

木山の言葉に、黒子と初春は顔を見合わせ、頬を僅かに緩ませる。

「ありがとうございます……！……実の所、先生のご意見を伺いたいと思っていたのですわ」

「まあ、まずはそのデータを分析してみるのと……丁度、こここの院長からも依頼を受けていてね。私の研究チームが、もう間もなく、搬送された昏睡状態の患者さんたちを観察して、データを収集することになっっている」

木山はそこで、初春とカオリへと視線を向けた。

「……君たちのお友達の状態も、調べさせてもらおうが……」

「本当ですか!？」

「涙子ちゃんは……先生、良くなるんですか?」

初春とカオリが、咄嗟に目を輝かせる。

「私は医者じゃない」

二人の期待をよそに、木山の返事は冷静だった。

「治療はできないが……そのような状態になった原因を解明するのが仕事だ。それは決して、お友達の状態を改善することと無関係ではないと思う。力になれたら嬉しいよ」

初春とカオリは、木山の言葉を噛み締めると、真剣な面持ちで頷いた。

木山は頷き返すと、再び黒子の方を向いた。

「是非とも、そのレベルアップとやらのデータを提供してもらいたい。ウチの研究チームがこれから患者を観察するから、その結果とも照らし合わせて考えてみようじゃないか。よければ、明日のこのくらの時間に、また来てくれないか。私は、断裂した筋肉が繋がるまで、もうしばらくここに詰められる予定だからね」

「分かりました。大変なところ、ご協力感謝申し上げます！」

「ありがとうございます」

黒子とカオリは礼を伝え、部屋を後にしようとする。

「あの、ひとつだけ、聞いてもよろしいですか？」

立ち上がった初春が言ったので、黒子とカオリは足を止め、彼女の方を見た。

「何だい？」

木山は、どこか沈んだ瞳で、初春を見上げた。

「私の友人……佐天さんは、昏睡状態に陥る直前、錯乱したようにうわ言を言っていたのですが……『アキラ』という名前を繰り返し口にしたそうです。急激な能力向上の副作用なのかどうか……何か心当たりは？」

「えっ」

カオリは思わず驚きの声を漏らした。

アキラ。

今日の午後、中学校の女子トイレで、いじめっ子のユミコもしきりに口走っていた名だ。

なぜ、接点のない二人が、昏睡に陥る前に、同じ名を？

木山春生は、初春の問い掛けに、視線を僅かに右上に向けて一瞬考

え込んだ。

それから、一度瞬きをして、初春を見た。

「……いや、何とも言えないね」

木山の様子を見てみると、カオリはなぜか、不意に何とも言えない違和感を覚えた。

3人の女子生徒が部屋を去った後、一人だけになった室内で、木山はゆつくりとコンピュータの画面に向き直った。

木山は、3人の中でも、一番寡黙で控え目だった少女のことを思い浮かべていた。

「……偶然かな。どういう風の吹き回しだろうね、島君。君の想い人が、私のもとへ来るとはね」

独り言ちながら、木山はコンピュータを操作していき、あるファイルを開いた。

「……君のお陰だ。もうすぐ……あの子たちを救える」

木山の疲れた目は、画面上に表示された波形パターンを映していた。

それは虹色に輝き、険しい稜線のような波を止めどなく形づくり、円を描いて揺らめいていた。

——第一九学区、旧スタジアム

赤錆びた空。そこに浮かぶ金柑色の雲は、刷毛を一度、雑に横方向へ走らせたようだった。

雑草がアスファルトのひび割れ目から伸びる、荒れ放題の敷地に、一般車両に偽装したアンチスキルの車が停車している。

『若者11名、ポイントBから入場したのを確認。その内3名は、シンクロナロン量子変速からの情報通り、幹部級、〃鳥〃 〃ホーズキ〃 〃タトウ〃の3名』

「ボスは何？」

『未確認です』

「了解、ご苦労」

屈強な体格をしたアンチスキルのリーダーの男は、斥候班からの報告を受けると、防護バイザーを下ろした。

「虫が巢に帰って来たぞ」

「いよいよつすね、島田さん」

島田と呼ばれたリーダーの男は、隣席の部下に頷くと、無線機を操作し、チーム全員へ指示を飛ばし始めた。

「聞いたか、バイカーズ共はいざ集会、だ。プラン通り作戦行動に移る。開始は1分後。相手はLEVEL2と3級の能力者揃いだ。抜かるんじゃねえぞ。ここでしくじれば 〃警察〃 の連中が出張って来る。俺達一九学区、マグニフィセント・アンチスキル荒野の警備員の根性を見せてやれ」

「僕ら、7人って人数じゃないですけどね」

「かてえなア、岡本。言ってみたかったんだよ」

無線機を切ると、片手で自身の蓄えられた顎髭を撫でながら、リーダーの男は岡本と呼ばれる部下に答えた。

「しかしよ、こんな不良債権、いつまでも放っておくんじゃねえって、区議会に喝入れなきやならねえな。言わんこっちゃない、だからワル共の巣窟になるんだ」

窓外に鎮座する、上部へ向かって開けたすり鉢形状が特徴的な、巨

大な旧スタジアムに目をやり、島田は忌々し気に言った。

「目下財政再建中ですからね、お偉いさん方は、古びた区庁の建て替えに躍起ですし……こういうところをキレイにしてくれるのはいつになるやら……」

岡本が、鎮圧銃のゴム弾装填数の最終チェックを行いながら言う。

「まあ、樹液に集ったカブトムシ君たちを採集するのは、俺達の仕事だ……常盤台の嬢ちゃんたちだって、あんなに頑張ってたんだ。俺らが働かないでどーするよ」

リーダーの男は、ふと、先日の土曜日に旧市街の廃ビルで遭遇した、第七学区から駆け付けたという2人の女学生のことを思い出していた。華奢な少女2人が、帝国絡みの凶悪犯を3人も倒してしまったというのだから、それを思えば、自分たちアンチスキルの士気も上がるというものだった。

「カウントします。作戦行動開始、10秒前」

隣の部下が、無線を再度ONにし、車載時計を見ながら数え出す。

「……3、2、1」

「行くぞ」

島田の車両から何人ものアンチスキルが降り立ち、素早く隊列を組む。彼らは複数のチームを組み、淀みなく早足で移動しながら散開していく。

隊長をはじめ、各部隊員の受信機に入電があった。

『“放送室”、パーキングポイントCよりチェック。各部隊応答願います』

『“飼育”、東1ゲートより入場』

『“図書”、西3ゲートより入場』

『“体育”、北2ゲートより入場！』

「生徒会本部”は正面ゲート！今敷居を跨いだぜ、オーバー！」

リーダーが率いる、5名から成る一団は、白を基調とした、2階部分まで吹き抜けた広大なエントランスに入った。

「“鳥”野郎を探せ。奴は遠距離からでも索敵する能力持ちだ。 ”

放送室！追跡情報を寄越してくれ！」

島田の呼びかけに、無線が応答した。

『鳥』は北側サイドスタンド方面から、地下回廊へ入った模様。西方バックスタンド方面へと向かっていると思われる。『体育』が追撃を試みていますが、他の構成員に阻まれています』

島田は、待機班からの情報を聞くと、やや訝しんだ。

今回の作戦における重要ターゲットの一人、『鳥男』は、先だって逮捕された「量子変速」という能力者からもたらされた情報によると、物理的遮蔽物をクリアできる念話テレパスないし読心能力者サイコメトラの可能性が高いということだった。そして、その人物は、高所から辺りを監視する傾向があるとされていた。

「地下か……慌ててんのか？」

脳裏に疑問が浮かんだが、島田は然程気に留めなかった。

「『体育』ならヤワなガキ共に苦戦はしないだろう。挟撃しよう。経路の案内を求む」

『現在地より西へ、20M先の昇降階段を降りてください。アト作品すぐ近くの階段です。そこから更に西へ走路を行います。電力が遮断されているため、地下走路の視界状況は不明です』

「了解。オーバー」

島田はやり取りを終えると、ハンドサインで周囲の部下に方向を示す。それから、一団は階段の入り口付近まで移動した。すぐ脇には、所々タイルが剥がれ落ちた、青と黄、黄緑の3色で構成された巨大な壁画が架けられている。

「イヤーマフ、ON。片山、発音筒！」

「了解」

メンバー全員が素早くヘルメットの耳元にあるボタンを操作すると、メンバーの一人が別の仲間の背囊から小型の水筒を思わせる灰褐色の物を取り出し、素早くピンを抜いて階段の下へと放り投げる。数発、紙袋を思い切り叩いたようなけたたましい爆音が轟く。残響を追い抜くように、一同は素早く階段を駆け下りる。

『飼育、帝国メンバー3名拘束。幹部級ターゲット無し！』

『図書、帝国のメンバー4名の隔離成功。1名確保!』

「順調だな」

地下走路へ降り立った島田は、ヘルメットライトを作動させながら、他部隊からの通信に対して呟いた。ゴム弾やスタングレネードの音、帝国のメンバーであろう若者達の怒号がリバーブを伴って薄らと聞こえる。

地下走路は薄暗い。外周側の天井に、等距離で自然光を採光できるように窓が設けられているが、既に夕方の時間とあって心許ない。ライトを床に向けると、薄汚れた茶色い塗装が、通路を示している。光沢はすっかり褪せているが、ウレタン樹脂の床は、弾力性を保つていて、今なお歩きやすかった。

(アンチスキル。聖職者。無給の労働者、やりがいを搾られる牛共。そのまま歩めよ)

一行の思考に、妙にエコーのかかった男の声が響き渡り、数名が僅かに身じろぎした。

「奴さん、気付いてやがるぜ、畜生。余計なお世話だつての」

『バックスタンド方面—120m』と付記された壁面のピクトグラムを照らしながら、島田が唸った。

「おうよ、俺たちや確かにボランティアだぜ」

「追われている筈なのに、随分と声に余裕がありました。畏でしようか?」

岡本が疑うと、島田は笑った。

「面白エ。こちとら20年やってんだ。区教委に引き抜かれるよか、よっぽど腕が鳴るつてもんよ——放送室。ターゲットまであとどれ位だ?」

『——ターゲット……にし……タツ……潜伏……』

島田達の無線に入電してくるのは、ノイズだらけの音声だった。

「おいおい、たかだか1階層降りただけだぜ?くそつたれ!」

耳元に手を当てて島田が悪態をついた。

「帝国の若造を土産にして、上に通信環境のアップデートをゴリ押ししましょう」

岡本が軽口を叩くと、島田は「全くだ」と応じた。

「オイ、〃体育〃！〃体育〃！……ダメだ、通じん」

反対方向から挟撃する筈の別部隊との通信を試みた後、島田は仲間に向かって振り返った。

「ブリーフィングの通り、このスタジアムの地下走路は、東西南北のロビーの間には、非常口か設備用のスペースしかない。もしターゲットがそこに潜んでいれば、先行して制圧の上、捕縛する。片山！バンを携行してくれ。閃光フラッシュの方だ。全員、バイザーの暗視機能をオンにしてろ」

島田の指示を受けると、一行は走路を先へと進む。

暫く、自分たちの足音だけが響いた。

「なあ、岡本」

途中、先頭を歩く島田は、背後の部下に声をかけた。

「あの〃鳥〃って奴……念話か読心能力者って前情報だったよな？」

「はい」

岡本が、柱の陰の暗がりを警戒しながら短く答えた。

「で、どっちだと思っ？」

「どっちって……」

「俺はな」

島田が囁くように言った。

「妙に思えるんだ。さっき、アイツは俺らの頭に話しかけて来た。これひとつをとれば、念話の能力だといえる。だがよ、アイツはまるで、俺らがこの地下走路を向かっていることを、意思の面でも、位置情報の面でもお見通し的那样だったろ？それを考えれば、読心能力サイコメトリーってことになる。2系統の能力を併せ持つことは、あり得ない筈だろ？」

「……確かに」

岡本が小声で返す。

「しかし、どちらも広義には精神干渉系でカテゴライズされるじゃないですか。一方の能力を極めることで、応用性を向上させている可能性もあります」

「そう、そこが微妙なんだ」

グローブを嵌めた手で首筋を搔きながら島田が歯切れ悪く言った。空調の止まった密閉空間は蒸し暑く、汗がだらだらと流れ伝っている。

「にしたって、見えない所からあんなはつきりと語りかけてくるなんてのは、どういう原理だ？ 空気振動でも低周波でも、そんな芸当は無理だ」

「……あの、島田さん」

「何だ」

呼び止められた島田は、疑問を一旦振り払って返事をした。岡本が上を指差しており、島田は一度仲間を制した上でヘルメットライトを上に向ける。

競技場として整備された内装に、明らかに似つかわしくない、赤や黒のケーブルがゴテゴテと天井を走っている。

「……こんなもの、据え付けじゃねえよなあ」

「これってもしかして、でん——」

その時不意に、辺りがバツと明るくなり、アンチスキルの一同は視界を奪われる。

「暗視モードを解除しろ！ すぐ!!」

自身も目を瞑りながら、島田が怒鳴る。

「うわああああ!!」

突如、叫び声が木霊する。

上半身裸の大男が、島田達の目の前に忽然と姿を現していた。島田達に向かつて、幹のように逞しい腕に血管を浮かべ、手を突き出している。

「千代田ア!!」

岡本が叫んだ。島田が眩しいながらも目を開けると、仲間の一人が、ヘルメットを被った頭を両手で抱えて、苦悶の声を上げている。それは、足をばたつかせて浮かび上がっている。防弾機能を高めたヘルメットがみしみしと軋む音を立てている。

「発砲!」

島田が合図し、アンチスキルはすぐさま態勢を整え、制圧銃からスタンゴム弾を大男目掛けて発射する。素肌に炸裂すれば、実弾とはまた異なった激しい痛みで、人間は立ってられない筈だ。

しかし、大男は血走った目を見開いて立ったままだ。島田は、幾つものゴム弾が大男の隆々とした体からぱらぱらと落下するのを見た。それはまるで、磁石から引き離された砂鉄が地面に剥がれていくようだった。

「こんなモノで、この俺を……」

ドスの利いた声で、大男が唸った。顔を振ると、肩のあたりまで伸ばした脂っこい黒髪が揺れた。口元には笑みを浮かべている。相変わらず突き出した腕には、黒い何かしらの入れ墨が見えた。

「『タトウ』だ!!」

島田は叫んだ。帝国の能力者の中でも特に強力とされる、3幹部の一人。

「欠伸が出るぜ!!」

大男が勝ち誇ったように叫ぶと、吊り上げられていた仲間のバイザーがとうとう割れ、顔の目や鼻、口といった至る所から血しぶきが上がった。

それを横目に、島田は覚悟を決めて駆け出した。

「音響銃！・イヤーマフ!!」

背後の仲間たちに呼び掛けるが早いか、島田は大男へ向かって極力低姿勢で飛び込んだ。

視線の高い大男は、能力を行使していたこともあつて対応が遅れる。洗練されたアンチスキルのタックルを受けて、背中からもんどりうつ。

「野郎!!」

「何してる、早く撃て!!」

「島田さん、離れて!!」

「馬鹿！迷うな！やれ!!」

大男と島田の怒号が響く中、岡本は一瞬逡巡した後、仲間の片山と連携して、焦りを押さえつつ素早く一つの武器を準備していく。

それは堅牢で狙撃銃に似た外見をしているが、本来銃口がある位置からは赤色のレーザーが放たれ、島田と揉み合う大男に向けられている。銃身の上部に、折り畳み傘が開くように黒一色の円形のスピーカーが展開され、その背面に片山が2本のケーブルを接続する。ケーブルの先は、片山が背負った背囊の中、仕込まれている増幅器アンプリファイアーへと繋がっている。

膝立ちの態勢で、岡本は銃を両手で構え、引鉄代わりのボタンを押し込んだ。次の瞬間、照射限界である2秒間、爆撃機が真上を飛ぶような破壊的な音が鳴り響き、前方の空気を滅茶苦茶にかき乱した。

甲高く耳鳴りがする。

島田は頭を抑えてよろよろと立ち上がった。

耳鳴り以外に音は聞こえないが、視界は明瞭だった。

岡本が自分を支えてくれていた。バイザーを上げた彼は、汗を浮かべて安堵したような表情をしていた。

——千代田は？

島田は、自分の声が頭蓋骨の中で妙に反響しているのを感じて顔を顰めた。

岡本が口を動かしているが、何事を喋っているのかは全く分からない。

岡本がまず指差した先に、介抱を受けている千代田が横たわっている。

——生きてるか。

島田の問いに、岡本がはっきりと頷いた。

それから、岡本が次に指差した先では、気絶したらしい大男が白目を剥いて倒れていて、2人がかりで拘束している所だった。自分はヘルメットを装着していた分、まだ気が保っているが、まともにあの大声響を受けたのだ、当分、能力行使どころか、耳もまともに聞こえないだろう。当然の報いだ。と島田は思った。

——放送室に報告を。

そう指示したその時、急に岡本がバランスを崩し、島田も一緒に倒

れ込んだ。

混乱した島田の視界に、次々に倒れ込む仲間の姿が映った。

島田が顔を上げた先に、薄汚い頬かむりを被った不気味な小男が立っていた。

——みつけた。

にきびだらけの男の口が、確かにそう言っていた。

男は片手で、何かを握るような仕草をする。

次の瞬間、猛烈な息苦しさを感じて、島田は胸を掻きむしった。

ほどなくして、アンチスキルのチームリーダーは意識を手放した。

——第二学区、アーミー駐屯地内、本部

ガラガラと、ストレッツチャーの移動する音が響く。

敷島大佐が歩くのに併走して、幾つものチューブや機器に繋がれた島鉄雄が、昏睡状態のまま運ばれていく。

「……通常収容区画に戻しても状態の維持は可能ですが、意識を取り戻す見込みは、何とも……」

「植物状態、ということか？」

付き添う医官に対して大佐が問う。

「そう言って差し支えありません。ただ、EEG脳波のある一部分が妙な波形を示して、常に固定されているのです。まるで、誰かに脳をコントロールされているかのように……」

「コントロール、だと？」

曲がり角を曲がった所で、大佐が語気を強めた。

「能力者の干渉か？ラボのナンバーズではなく？」

「ラボの実験体ナンバーズからの干渉を受けているのであれば、彼ら特有の波形の特徴が、41号のEEGにも検出される筈ですが、今回のパターンはそれともまた異なっており……」

「鉄雄オ!!」

突如、叫び声が響き渡った。

「こら、待てー!」

係官の静止を振り切って、「P」マークを付けた少年が、曲がり角の反対側から、大佐達の方へと走って来る。

「止まらんか!」

大佐の部下が、数名がかりで取り押さえる。

少年は、顔を冷たい床に打ち付けながら、なおも目線を上げ、ストレッチャー上の鉄雄に縋ろうとする。

「てめえ、何でこんなところにいんだよ! 一体何があった!」

「何事だ」

大佐が、もがく少年を一瞥して、部下に厳しい声をかけた。

「ハッ、申し訳ありません。この少年、先日職業訓練校で、公務執行妨害で逮捕した者で、本日付けで身分を解放する所で……」

「臭い飯食わせやがって、この野郎。ありや外国産か? 学園都市の人工サンマジやねえだろ」

少年は憎まれ口を叩いた後、自分を見下ろす大佐の姿に気が付き、眉間に皺を寄せた。

「てめえ、このタコ……住宅街じゃ世話になったな」

取り押さえられている少年、金田が不敵な笑みを浮かべた。

「何だっけ、ガス爆発事故、だっけ? 嘘がお上手なようで」

「お前……41号のバイカーズ仲間か」

大佐が唸るように言うと、金田は「へっ」と唾を床に飛ばした。

「何んだよ、その番号付け。こいつにや、島、てーっお! って名前があんだよ、そいつはな、俺のダチだぞ! 何しやがった!!」

金田の悪態に、大佐は苦々しい表情をした。

「……連れていけ、まだ解放するな。41号の事を知っている者ならば尚更だ」

大佐が指示すると、部下たちが金田を引きずるようにその場から離していく。

「ンだと、大ダコ！質問に答えやがれ!!ふざけんな——」

「一体、誰が、奴を捕まえろと？」

明らかに苛立ちを含んだ大佐の言葉に、その場に付き従う部下が唇を噛む。

「とっ、特務警察の、門脇殿が……」

「……あの蝙蝠め」

独断専行で、アンチスキル支部と職業訓練校に強制捜査をかけた黒服の男。自身が左遷される直接の原因となった人物を思い出し、大佐は拳を握り締めた。

「オイ！鉄雄！返事しろ！無事なのか!?鉄雄オオーー!!」

冷たい収容棟の通路に、金田の必死の叫び声が、未だに木霊した。

それが聞こえているのかいないのか、横たわる島鉄雄は、身動き一つすることがなかった。

XVII. インデックス

86

目の前に、島鉄雄が横たわっていた。
何をしているのかい？

そう私は声をかけた。

君のお陰で願いが叶いそうなんだ。

お礼を言わなくちや。

「今、鉄雄君は、眠っているの」

背後から声をかけられた。

振り返ると、あのラボにいた少女がいた。

眠っている？

「ええ」

皺だらけの顔の中、異様に紅く血色の良い唇が動いて言った。

「彼は、この学園都市でも、最強と言われる人物と邂逅して……死の淵を彷徨った。そして、思い知ったの」

何を？

「自分には、力が必要だということを」

ちから。力か。

「ええ。私たちよりも、あなたよりも、もつと大きな、とめない力を」

少女は、己の2本の足でしっかりと地を踏みしめ、私の隣に立った。

憂いを湛えた瞳で、横たわる島鉄雄を見下ろす。

そんな力を、一体何のために？

私が問うと、少女は首を振った。

「その疑問の答えは、空を掴むようなもの。飢えと渇きに苦しむ旅人が、水辺へと近づくのはなぜ？それは、水が欲しいから以外の何物でもないでしょう。鉄雄君は、力が欲しくて、力の源に近づいているの。」

最強を目指す、ということか。

克己心があつていいじゃないか。

少女は暫く目を閉じていた。

それは一瞬だったかもしれないし、永遠とも思える間だったかもしれない。

それから、私の方を見上げた。

老いた目元とは対照的に、吸い込まれるように大きく、潤んだ瞳だ。

「あなたは、私たちナンバーズの繋がりを利用して、鉄雄君に、力を授けた。」

少女が手を翳し、私に向けた。

その掌には、「25」と刻印されている。

「あなたから授かった力を、鉄雄君は、もつともつとたくさんの人に行き渡らせた。あなたとの約束を守ったのね。でも、水がより大きな川へ、そして海へと行き着くように、力は、やがて最も大きな渦へと引き寄せられていくの」

ああ、その通りだ。

私が授けた力だ。最後には、私へと帰結する。

「そういう未来もあった。けれど……違うの」

悲しそうに、25号が首を振った。

どうということだ？

私は首を傾げた。

計画は完璧な筈だ。

幻想御手によって、無数の脳同士を繋ぐ、巨大な演算ネットワークを創造する。

そして、そのアーキテクチャの頂点に立つのは、この私だ。

今なお苦しみ続ける、子どもたちを救うために。

私は、25号の華奢な両肩を掴んで揺らした。

揺れる25号の頭が、メモリが足りないコンピューターのディスプレイのようによくつももの残像を作った。

「総ての力は、鉄雄君でも、あなたでもなく。アキラ君へ集まるの」

無数の25号が、口を揃えて言った。

私は悪寒を覚え、彼女の肩から両手を離す。

倒壊したビルの上で、一人の少年が、両の掌を光差す天に向け、
念動力テレキネシスによつて瓦礫の螺旋を描いていた。

「ああああああああ!!!」

自分でも正気を疑う位の叫び声を上げて、私は、目を覚ました。

7月20日（木）、未明 —— 第七学区、水穂機構病院

木山春生は、自分自身の息遣いがこんなにもよく聞こえるものなのかと驚いていた。

悪夢にうなされた人間は、息を荒げ、悶え苦しみながら跳ね起きる。フィクションでよくある描写だ。しかし、今の自分自身は、ただベッドに仰向けに横たわっている。その一方で、心臓はばくばくと早鐘を打っている。激しい拍動と周囲の静けさとの対比が、却って先ほどまでの悪夢を嫌というほど思い起こさせる。

木山は、怪我をしていない方の片手について半身を起こした。じわりとシーツが湿っている。思わずガウンの襟元を掴んで引き寄せた。アンモニアと酢酸、メチルブタン酸の混合した臭いが鼻を衝く。悪夢の中で感じた、やたらとりアルな肉塊の腐敗臭を思い出し、木山は顔を顰めた。

辺りを見回すと、そこは昨晚眠りについた時と、特に変わりのない個室病棟だ。窓からは七学区中心街の街明かりが差し込み、青白く室内を照らしている。

窓？木山の中で、違和感が頭をもたげた。

その時、部屋の出入口の扉がノックされた。

「木山先生？入りますよ？」

入って来たのは、夜勤の看護師だった。

「すみません、呼ばれてもないのに……けれど、大分うなされていたようでしたので。廊下まで声が漏れ聞こえてきましたよ」

「それは……すみません。迷惑をかけてしまったようで」

「そんな、迷惑だなんて、とんでもない」

中年の人の良さそうな雰囲気を漂わせている女性看護師は、優しい声色で言った。それから、グラスをベッド近くのデスクの上に置いた。

「水、ここに置いておきますね。飲んでください」

「ああ、ありがとうございます」

「……無理もないことですよ」

「何が？」

看護師の言葉の意を捉えかねて木山は聞き返した。

「お辛い経験をなされたのですから」

木山の左肩を見つめながら看護師が静かに言った。

「仕事熱心なようですけど……本来、身体はもちろん、心にも休息が必要なんです。無理せず、十分に療養なさってくださいね」

「お気遣い、どうも」

木山は、自身が徐々に苛立っていることを薄々自覚していた。

看護師の心配はありがたいことだったが、今は独りになりたかった。

木山の心情を他所に、看護師は腰に手を当てて、なおも口を開く。

「アーミーの司令官、クビになって、学園都市学園都市を去るってニュースになってましたし、アーミーの部隊の規模自体も、大幅に縮小するらしいです。当然ですよ。先生の受けた仕打ちを思えば……」

「ええ」

木山は短く返事した。

「……ああ、私ったらつい長く話してしまつて……ごめんなさいね、助けが要れば、遠慮なくコールしてくださいな」

看護師はそう言い、木山に背中を向けた。

「……あの」

木山は、部屋を去ろうとする看護師の背中を呼び止めた。

「は、いっ」

看護師が振り返る。

木山は、聞こうか聞くまいか逡巡した後、意を決して口を開いた。

「私があなされていたらと、大声で……言っていましたか？その、何か意

味のある言葉を……」

看護師は、やや上を見上げて考え込んだ。

「ああ、そうですね……何か、名前を呼んでいましたよ」

「名前？」

木山は、嫌な予感がした。

答えの続きを聞きたくない。すぐにでも耳を塞ぎたい気分だった。

「ええ」

木山の思いとは裏腹に、看護師は言葉を続けた。

「確か……『アキラ』って、何度も……ご家族か、誰か、お知り合いの方？」

木山は、脳天をハンマーで思い切り打たれた気分だった。

「くそっ……」

看護師が出て行った後、木山は、ガウンの裾を握り締めて、悪態をついた。それから、着ている服を乱暴に脱いでいく。左腕が思うように動かないため、骨の折れる作業だった。ナイトブラのフロントパネルが、じつとりと濡れている。その湿り気は、今の木山にとって、ただただ嫌悪でしかなかった。とにかく、この嫌な気分から少しでも抜け出ようと、木山は下着を付けず、直に新しいガウンを引っ張り出して羽織った。

「どういうことだ。」

木山は、看護師が口にした名前を反芻した。アキラ。アキラ。

ダメだ。

思い浮かべる程に、不安感が重石のように押し掛かる感覚があり、木山は頭を振った。

アキラの名前は、確かにアーミーのラボで耳にした。しかし、あれは大西たち黴臭い研究者共の世迷言に過ぎないと思っていた。自分にはアキラに直接会ったことはないし、資料も目にしていない。第一、過去の実験対象となった実験体ナンバーズの一人に過ぎない筈だ。自分には、一切関係が無い。

それなのに。

木山は、看護師が置いていったグラスのミネラルウォーターを一息で飲み干し、口元を拭った。

夢の中にも、確かにその名が現れた。何人も的人物が。異形の姿と化した島鉄雄が、その名を呼んでいた。

それだけではない。昨日夕方に自分のもとを訪れた風紀委員がジャックズメント言っていた。曰く、幻想御手の使用者が昏睡状態に陥る際に、口にした名だと。

洗面台に立った木山は、自身の顔を睨みつけた。

不健康で、街明かりと同じように青白い顔。目の下の隈は、一向に消えないどころか、よりはつきりとしてきた気がする。

こここのところ、眠れない日が続いている。レベルアップのネットワークの形成状況を分析することに執着し、夜遅くも作業している。しかし、それだけが原因ではない。

悪夢だ。先ほど見た悪夢は、初めてではないのだ。今までにも何度も見ていて、それがどんどん鮮明になっていくのだ。

水道水をグラスに汲み、再び水を飲むと、木山はベッドまで戻った。街明かりが、窓からしんと差し込んでいる。

明かり？

木山は、看護師が入る前に一瞬感じた違和感の正体に気付いた。眠る前に、自分はカーテンを閉めた筈だ。なぜ開いているのか？

木山はベッドを回り込み、窓に手をかけた。

カビ臭を隠し切れないクーラーの送風とは異なる、心地よい夏の夜風を頬に感じた。

ほんの僅かだが、窓の端に隙間があった。

木山が窓を全開にすると、風に髪が揺れ始めた。

「まさか……25号」

ラボで相對したことのある、寝たきりのナンバーズの少女（と云っていいのか木山には計りかねたが）。

先ほど見た悪夢には、彼女が現れていた。

まるで、自分と現実のように会話していた。

夜風が、木山の汗を乾かし、思考を覚醒させていく。

木山は踵を返すと、デスクに向かい、コンピューターを立ち上げた。レベルアップの被影響者の数は、既に1万人にまで迫ろうとしていた。

ネットワークが拡がれば拡がる程、木山に与えられた能力は一層高まる。

「原因を究明しなければ……そのためにも……そちらが干渉してくるといふのなら……私だって黙っていないさ」

木山は、取り憑かれたように画面へ目を走らせながら、呟いた。

行動を、予定よりも早めに起こす必要があると、木山は徐々に確信を強めていた。

この計画を、邪魔される訳にはいかないのだから。

早朝 —— 第一二学区、ミヤコ教団 本部

東の空が白みがかって来た頃、敷地内の一画で、修行を始めて間もない若き神官達が集まって騒めいていた。

「何事?」

白装束に身を包んだ3人の少女がそこへ現れた。その内の1人であるサカキが、近くにいた双眼鏡を首からぶら下げた若い神官に問い掛けた。

「あつ、サカキ様、おはようございます。これは——」

「こんなところで油売っていいの?」

天然パーマを揺らしながら、モズが悪戯っぽく言った。

「朝の勤行、サボったら修養長にドヤされるんじゃないの?」

「いや、モズ様。でも、あそこに、ホラ……」

言葉に詰まりながら若い神官が指差した先には、教団の象徴たる神殿が見える。その屹立した塔の最上部に当たる突起部分に、何かが見つかっている。

「貸して」

神官よりも背の高いミキが、有無を言わせない口調で言い、返事を

待たず双眼鏡を手にした。

「……人形……いや、人、だね」

「嘘オ!!」

唸るようなミキの言葉に、モズが口を押さえた。

「けど、あんなどこにどうやって?」

「事情はよく分かんないんですけど、とにかく、空が明るくなり始めた
ら、何かがあそこに引つかかかってるって騒ぎになって……」

神官が困ったように言った。

「一応、専門の外壁塗装業呼んでるんですけど、この時間帯じゃあすぐ
駆け付けてくれる訳もないし……第一あんなどこにいるあの人を、ど
うやって下ろすのかって。とにかく危ないから、何とかしなきゃつ
て」

「ミキ」

サカキが仲間に声をかけた。

「ちよつとここからじゃ距離がある……飛ばしてもらえる?」

ミキは黙って頷くと、サカキを軽々と肩に担ぎ上げて、集まってい
る神官たちを掻き分け、前へ進み出す。

「え?ちよつと——」

双眼鏡を取られた神官が、呆けたような声を出す。

「だいじょーぶだよ」

モズが安心させるように、神官に隣から言った。

さざめく神官たちの前で、サカキを担いだミキが猛然と走り出す。

その走り方はやがて飛び跳ねるような大股のものになる。槍投げ
と走り高跳びの助走を混ぜたような姿だった。

ミキが気合の乗った叫び声と共に地を踏みしめると、次の瞬間、サ
カキが斜め上方へと飛んだ。

「サカキもミキも、とーつても強いんだから!」

呆気にとられる若い神官の隣で、モズは笑った。

サカキは自身の周囲の気流を操り、神殿の屋根を2度、3度踏み台
にして、たちまち尖塔の先端へと辿り着いた。

サカキが生み出す激しい気流によつて、引つかかっていた物の纏う

服がはためき、その拍子に何かが光ったのが、地上にいるモズにも見えた。

ちょうど、朝陽が東の地平から顔を覗かせた所だった。

サカキは塔に引つかかっていた人型の物を抱きかかえて離れ、空中を飛ぶ。それから徐々に緩慢な速度となり、元居た広場へと降り立った。

自然と、修行もそっちのけで見物していた神官たちの群れから、拍手と歓声が波立った。

「サカキ！」

モズとミキが駆け寄ると、サカキは抱きかかえていた物を地面に下ろす。

すると、それは脱力したようにへたり込んだが、鳶足の形で姿勢を保った。

「生きてる」

サカキが言うと、モズとミキは目を丸くした。

「……十字教」

ミキが低く呟くと、サカキは目つきを鋭くした。

サカキ達とほぼ同じ背格好のその人物は、純白の修道服らしき物に身に纏い、頭には一枚布のフードを被っている。銀髪と言えらるう滑らかで輝くような髪は長く垂れ、俯いた顔を隠し、明らかに異国の雰囲気醸し出していた。

モズは、その長い髪を軽く手で除けるようにして、顔を覗き込んだ。

「大丈夫―？あれ！」

「どうした？」

サカキが聞くと、モズは振り返って笑顔を浮かべた。

「ごっこの子……！超ちよオーかわいいンだけど!!お人形さんみたい！」

「はア？」

ミキが顔を顰め、サカキは咳払いした。サカキは膝をつき、修道女らしき人物と顔の高さを揃えた。警戒の色を絶やさず、慎重にサカキは言葉を選んだ。

「オイ、アンタ、一体なぜあんな所に……怪我は――」

「おなかへった」

「え？なんだって？」

聞き取れない程の小声で何事か呟いた相手に対し、サカキが聞き返す。

その人物は、ゆつくりと顔を上げた。

緑色の瞳が、サカキを捉えた。

白い肌。その端正な顔つきの少女が口を開く。

「おなかへった、って言ったんだよ？」

サカキも、ミキも、モズも、周りの神官達も、その一言に呆気にとられ、暫し言葉を失った。

徐々に熱をもたらす朝陽が、少女の衣服に縫い付けられた金糸の刺繍を、静かに煌めかせた。

「このブールは美味しいね！てつきりワシ和食ックを頂けるものかと思っただけどー！」

「ごめんよー、すぐに用意できるのが、配布用のパンしかなくって……でもキミ、今にもおなかと背中がくつつくぞー！って勢いだっし？」
「ううん、無償の施しで頂ける恵マナみだもの、美味しくないはずがないんだよ？」

「ところがどっこい、ぶどう酒はございませんからねー！いやあ、それにしても、ほんツといい食ベツぷりで、あたい、見てるだけで癒されるわー！インデックスちゃん！」

早朝に、空高く尖塔の切っ先に引つ掛かっている所を救出された、外国から来たと思わしき修道女風の装いの少女は、流暢な日本語で空腹を訴えた。今、少女は朝の陽光が差し込む和室で、炊き出し用のパンを頬張りながら、年が近いであろうモズとお喋りに興じている。外見は小学生程にも見えるし、10代半ばにも思える。しかし、ひたすら食べ物に口を詰め込みつつお喋りに興じる、その言動は、ミヤコの懐刀である3人の娘にとつて、随分と幼く感じられた。

「ところでここは……救貧院なの？アルムスハウス 豊の間に通されたんだもの、ブツデイズム シントイズム 佛教や神道の施設かと思っただけどー」

窓の外、広場に列を為す人々をちらりと見て、インデックスが言った。

「まあ、神仏習合してるのはそうなんかな？割とゆるめだよ、アタイらは」

ハムスターを思わせる程にインデックスが膨らませている頬を悪戯っぽく見つめながら、屈託なくモズが答えた。

「ここんどこね、職を失って困ってる人が増えてね。そういう路頭に迷った人たちのために、朝こうやって食べ物を無償配布することもあるんだ。そのパンなんか、近くのベーカリーから譲り受けてるんだよ」

「時間かけて焼き上げたのが分かる柔らかさに、仄かな甘み……この

インデックスの深き腹も満たされるってものなんだよ！

「でしょでしょ！学園都市このまちのパンは、化学調味料の実験作みたいな尖ったものが多いけど、そこはご安心！こちらは無添加、有機栽培の原材料ですから！何だったら、ハラールもカシユルートも認証済み！」

「へえ〜！それって陰陽道インヤウに基づいた自然食マクロビオティックっていうやつ？——」

「どう考えても……怪しいな」

楽しそうに会話に興じる二人を遠目に、サカキが疑いの目を向けて言った。

「『目録』インデックスだと？偽名だつてことを隠そうともしていないじゃないか。」

「競合宗教からの差し金かもしれない」

同じく、警戒の色を顔に浮かべて、ミキが囁いた。

「十字教系列の……風紀委員ジャッジメントには、今のところ、門ゲートの記録ログと照合できない不審人物の情報は来ていないが」

「無理もない、今は平日朝だ。アンチスキルも動きは早くないだろう」
自身の顔程もある巨大なブルーにストロベリージャムを塗りたくるインデックスに向けて、目を細めながらサカキが答えた。

「あたしたちもぼやぼやしてられない。ミヤコ様のお手を煩わせる前に、何を企んでいるのか吐き出させて——」

「それには及びまして」

背後からの飄々とした皺枯れ声に、サカキとモズは途端に居住まいを正し、振り返った。

「声で分かるわい。何とも可愛らしい客人だこと。さながら西洋人形だろうの」

黒髪を巨大に結い上げた老婆、ミヤコは、サカキ達が用意した脇息に肘をつきながら、インデックスに向かって話す。

「ミヤコと言ったね？あなたは……この主？」

「いかにも。禁書目録とやら」

インデックスの言葉遣いに思う所があるようで、背後でサカキが顔を顰めたが、ミヤコは気にも留めず首肯した。

「お恵みに感謝申し上げるんだよ。お陰で、右も左も分からない街で行き倒れる心配は、一先ず無くなったんだよ」

「ホ。それはそれは、僥倖よの」

相変わらず独特な口調ではあるものの、しおらしく正座しているインデックスは、ミヤコに向かって頭を下げた。ミヤコはその様子があったかも見えているかのように笑みを浮かべた。

「して……神官らから聞く所によると、お主、拜殿の塔の切っ先に……ああ、なんじゃ、サカキ、何と言えよ？」

「ハッ、凧のように引つかかっておりました、ミヤコ様」

「おお、それぞれ」

空を指差す仕草をして、ミヤコはサカキの言葉に何度も頷いた。

「為してそのような所におったのかの？ 神妙不可思議じゃて」

ミヤコの疑問に、インデックスはなぜか頬を膨らませた。

「感謝を述べた後で恐縮ではあるけど、いくらなんでも、他人を忌むべき海産生物の筆頭たる蛸たこに例えるのは失礼だと思うんだよ？ モーリタニアの沖合で水揚げされた訳じゃないんだし」

「あいや、すまん、蛸おくとほすではのうて、凧かいらよ」

「同じ発音なの？ 日本語って難しいんだよ」

きよとんとした様子のインデックスを見て、我慢しきれなくなったサカキが口を開いた。

「いい加減にしろ！ ミヤコ様に対して傲岸不遜な！」

「構わぬ。お前達、もう支度せい」

ミヤコは片手を挙げてサカキ達を制した。

「ですが……」

「わしの愛娘達が、遅刻やら欠時やらをこれ以上重ねるのは、あく、わしとしても、ちと立つ瀬が無いので……いや、半分以上わしの使いの所為だというのは分かっておるよ？ 故にじゃ、故に」

「なら、ミヤコ様から学園長に一言申し伝えて頂いて——」

「馬鹿を言うでない」

少し悪戯っぽく言ったモズに対して、ミヤコはぴしやりと言った。

「ホレ、早う行け、行けい」

ひらひらと手を振るミヤコを見て、3人は幾何か顔を見合わせた後、一礼した。

サカキは、顔を上げた瞬間、ちよこんと座るインデックスに対して痺れるような視線を送った。

そして、3人は部屋を出て行き、後にはインデックスとミヤコのみが残った。

異国の幼い修道女と、大垂髪の老婆という異形の組合せが対峙する。

先に口を開いたのはミヤコだった。

「……のう、インデックスとやら。年端もいかぬ女子一人が、何故、暁にあのような所に現れたのか。ましてやお主は、十字教の門徒と見ゆ」

ミヤコは、身をインデックスの対峙する方へと乗り出した。昔ながらの斜光眼鏡が、まっすぐにインデックスを捉えている。

「大方、訳アリじゃろう？我々に用向きがあるのなら、話せ」

インデックスは、先ほどまでの大食らいとは打って変わり、落ち着いて静かにミヤコに視線を返している。

「……私から言える事は少ない」

喉が渴いたような、どこか掠れ気味の声だった。

「私は追われてここに来た。私が持っている知識を守るため……私を追っている連中の正体は推測だけれど、どこかの敵対魔術結社だと思う。必死で、逃げて……あんな高い所に行き着いたのも、成り行き」

「ほう、魔術とな」

興味深そうにミヤコが相槌を打つ。

「食べ物を入れて感謝しているよ、ミヤコ様。あの白い女の子達もね。でも、このまま長居すると、きつと追っ手が現れて、あなたたちにも迷惑をかけてしまう」

「では、何処へ？」

顎をさすりながらミヤコが聞くと、インデックスは暫く目を伏せた。

「……教会へ。私はこの街に来るのは初めてだけど、ここ一帯は靈的な力が満ちているのを感じる。ねえ、ミヤコ様？この辺りにイギリス清教の教会はある？」

「和地関ウァチカンの教会ならこの学区内にあるが、清教となると、もっと西じゃな。確か、七学区に一つあったか」

「西、ね」

ぺこりと頭を下げると、インデックスは立ち上がった。

「ありがとう。恩は忘れないよ」

「なに、大したことはしとらん」

くつくつと笑い、ミヤコが言った。

「忘れない、などと気張らずとも良い。人は、いつか忘れる衆生よ……」

立ち上がったインデックスは、何か思う所があるようにミヤコを見つめた。

「ミヤコ様は、変わってるね」

「この神殿一つ、こきえた主じゃからの」

冗談めかしてミヤコが答えた。

「私のこと、もっと問い詰めないの？」

「どうということかのう？」

「……本当に興味が無いのなら、もちろんそれはそれで、いいのだけど」

インデックスは、自身が纏う、白銀の修道服に視線を落とした。

「異教の指導者なら、のこのこ飛び込んできた私を、私が持つ価値ある物を、ただ野に放つ訳はないと、思ってたんだ」

降り出しの雨粒のように、インデックスは言葉をぼつりぼつりと零した。

ミヤコは、口元に小さな笑みを浮かべた。

「お主が居るべき場所は、ここではない」

静かな、しかしはつきりとした声だった。

インデックスは顔を上げる。

「お主自身の未来は全く見えん。大方、その衣ころもの纏う力の所以じやろうが」

ミヤコの言葉に、インデックスの目が見開かれる。

「流れじゃ……この街が、この世界が向かう先に目を凝らすと……どことなく分かるのよ。インデックスとやら。お主は先へ進むとよい。そうすることが、お主自身に新たな道をもたらすであらうよ」

インデックスは、あどけなさとは裏腹の、凜とした真剣さを顔に浮かべ、ミヤコを見つめた。

「……教会の修道女シスターが、異教徒から、運命について諭されるとはね」

「はは、教祖直伝じゃぞ」

笑い声を上げて、ミヤコが言った。

「有難く受け取れい——おお、そうじゃ」

ミヤコは、引き戸の向こうへちらりと目をやった。

「お前達——この者を案内あないしてやってくれんかの」

「えっ？」

インデックスが見ると、開けられた戸の先に、再びサカキ達3人が姿を現した。

「第七学区でしょ！夏季講習ナシってことで、OK？」

モズが黄色い声を上げると、ミヤコは僅かに首を傾げた。

「すまんもう、やっぱりわしの御遣いを頼まれてしもうて。学園長にはよく伝えておくでな」

「でも、ミヤコ様——」

インデックスが当惑した声を上げる。

「案ずるな。僧共だけでなく、年齢としの近い娘らが付き添った方が安心じやろ」

ミヤコが言ったが、インデックスは不安そうな表情を崩さなかった。

「でも……」

「それに、この娘らは、お主が思うより、よく鍛錬を積んでおるぞ」

「ミヤコ様の命とあらば」

サカキが部屋へ入り、インデックスを真正面から見つめた。ちょうど同じくらいの背の高さだった。

「お前を目的の地まで送り届ける。どんな事情があるかは知る所ではない。気遣いは無用だ」

インデックスはミヤコとサカキ、モズ、ミキへと忙しなく首を振って、それから深々とお辞儀した。

「……どうもありがとう」

消え入るような声だった。

「外に車を用意してある」

ミキが低い声で言った。

「行こう」

サカキに促され、インデックスはもう一度ミヤコへと振り返り、礼をすると、部屋を出て行った。

（……もしも追っ手が現れたなら、どのような手の者かを観て、報せよ）

（ハイ）

ミヤコが、テレバス 念話でサカキに命じた。

（無理にあの修道女を護る必要はない。あの衣、強力な結界が張られている。ちつとやさそつとでは傷一つ付けられぬだろう、案ずるまでもない）

（御意）

サカキは応え、踵を返して仲間とインデックスの後を追った。

入れ替わりに、神官が2名部屋に入り、ミヤコが立ち上がるのを支えた。

「異能が通じん……そう、あれはまるで……『幻想殺し』のようにな……」

ミヤコの呟きは、隣で腕をとる神官の耳にも入らないほど、小さなものだった。

「じゅ、10万3,000冊の魔導書!?すごい、インデックスちゃん！」

「えへん！私の名は『インデックス禁書目録』！万物の法則を捻じ曲げる力を有する、叡智と秘術の生ける図書館って訳！」

「でも、君、一体どこにそれだけの本が？もしかして、端末を翳せば拡張現実ARで浮かび現れるとか？いや、インデックスちゃん、さてはオートマトン機械仕掛けで、自炊したデータの守り神ってところ？」

「モズの言ってる言葉は、ニュアンスがよく分からないんだけど、とにかく勝手に見られると意味がないからね、秘密だよ、ひ・み・つ♪」
「んもー、インデックスちゃんてば、ほんとかわいい！撫でていい!?つか、この生地、マジで肌触りよさそー」

「それはね、聖骸衣って言ってるね……」

「やかましい……」

ワンボックスカーの最後尾座席に座るサカキは、うんざりした顔で呟いた。

「あいつ、凄い虚言癖の持ち主なんじゃないか。魔導書だの服の結界だの、魔術師が自分からべらべら種明かしするか？」

同じく3列目のシート隣の、やや頭を下げて窮屈そうに座るミキが胡散臭そうに言った。

サカキは頷き、目の前の2列目の座席で、愉快そうに話に興じる、金髪のカリーヘアと時々波打つ純白のウィンプルに目をやった。

「インデックス」と名乗る少女を、目的地まで送り届けること。無事に済めばそれで良いし、万一、彼女が言う「追っ手」とやらに遭遇したとしても、それも良いと、ミヤコ様が語った。任務とはいえ、幼さを前面に押し出して、ぺちやくちやとまくし立てるインデックスは、サカキが苦手なタイプだった。

モズはよくあかも話に付き合えるな。心から楽しそうに、インデッ

クスに顔を向ける仲間に関心していると、運転席の神官が口を開いた。

「もうすぐ高速を降ります。イギリス清教の教会までは、小一時間程です」

「おっ！インデックスちゃん、近付いて来たよ！こつからは第七学区！あたいたちもよく遊びに来る、若者御用達の街さー！」

モズの言葉に、インデックスはシートベルトを伸ばし、両手を窓に押し当て、外の風景に目を丸くしていた。まるで初めて都会に出て来た田舎娘、といった様相だ。

やがて車は、減速し、料金徴収のレーンに差し掛かる。

しかし、徐行して通過する筈のレーンで、停車した。

「……おかしいな」

運転手の神官が怪訝そうに言った。

サカキ達も首を伸ばして前方を窺う。

レーン出口のバーが下りている。不正通行だったり、自動車に搭載されたICカードが無効だったりした場合などの現象だ。

「あの、どうしたんでしょうか？」

神官が、運転席側の窓を下ろし、近くのスピーカーに向かって呼び掛けた。

「……認識に失——……まま待機してください……」

スピーカーから返って来たのは、不自然にノイズが混じった自動音声だった。

「なあ」

ミキが窓の外を指差した。

「何だこれ？」

サカキは、ミキの指差した先を見た。

下ろされたバーの少し手前、車両検知器が納められた白いボックスに、黒色のスプレーで、星型を丸で囲った落書きのようなものが描かれている。

ペンタグラム
「五芒星」

インデックスが、不意に警戒した声で呟いた。

すると、突然彼女はかちやかちやと焦ってベルトを外し始めた。それを見たサカキは、目つきを鋭くして口を開いた。

「おい、お前。何勝手に——」

「ここで降ろして！」

インデックスが焦った声で言い、スライドドアの取っ手をがたがた掴んだ。ロックがかけられている。

「どうしたのさー！」

モズがなだめようとすると、インデックスは振り返った。

これまでに見なかった、切迫した表情だった。

「貴方たちはとにかく逃げて！バックしてでもなんでもいいから、ここから離れて——」

「そんな無茶な——」

「おい、あれ——」

ミキが再び窓の外を見て言った。

「どうして、あんなに長く……」

夏の日差しを浴びて、葉の緑色を深めたツツジの枝葉が、路面を這うように伸びて来ていた。

その近付く様は、無数の掌、指が蠢くようだ。

「運転手さん！窓！すぐ閉めて!!」

インデックスが金切り声を上げた。慌てて神官がスイッチを押し込み、窓を上げる。

窓が閉まり切るとほぼ同時に、蠢く枝葉は、あつという間にサカキ達の乗る車を取り囲んだ。擦過音を立てて窓を這い、車体を下から持ち上げた。

ぐらり、ぐらりと、サカキ達の身は揺らされる。一行は、はしゃぐ幼子が振り回す虫かごの中の虫だった。

「こいつらー！」

脳をぐわんぐわんと揺らされながら、サカキは必死に頭を巡らせた。自分は風力使いだ。先日、アーミーやバイカーズを蹴散らした時と異なり、今のような密閉空間では使い勝手が悪い。かといって無暗にドアを開けようとすれば、それをきっかけにあの植物の化け物に侵

入されるだろう。よりひどい結果になるのは目に見えた。

「おい！お前！魔術師なんだろ！何か打開する策は無いのか!!」

ミキが身を乗り出し、インデックスの肩を掴み血相を変えて叫んだ。寡黙な彼女がこのような声を上げるのは、それだけ切羽詰まった状況だということかもしれない。サカキの胸には、一気に焦りが高まった。

しかし、詰問されたインデックスは、目に涙を浮かべて首を振った。

「わ、わたしは、知識を持っているけど、つ、使い方を知らない——
使えないんだよ」

「嘘だろ！この——」

「うわっ！入って来やがった!」

突如、神官が慌てふためいた。いつの間にか、車内前方の送風口から、夥しい量の枝葉が侵入してきていた。それは、獲物を探すかのように、車内の四方八方へ枝先を伸ばしていく。

「モズ!」

サカキは覚悟を決めた。エアロユニット 風力使用の自分や、アームポイント 筋力強化のミキでは突破口は開けない。となると、頼みの綱は一人しかない。

「くそ雑草をこの車から引っ剥がして!私がみんなをできるだけ遠くへ運ぶ!」

「なら、私は置いてって!」

モズが何か返事をする前に、叫んだのはインデックスだった。

「奴らの狙いは私!私を置いて行って!みんなだけで逃げて!」

「ダメ!」

モズが叫んだ。

「アンタも一緒に来るの!」

「モズ!ミヤコ様は——」

「でも、この子は力が使えないんでしょ!」

サカキの言葉をモズが遮った。

「置いてくなんて、アタイは嫌!せめてここから遠くへ逃がそう!お願いだよ!」

モズは右手を力強く開き、その手首を左手で握り締めて前方へ構え

た。モズが得意とする衝撃波を放つ構えだ。

「く、来るなア！」

神官が恐怖に駆られて声を上げた。身体に、枝葉が這いより始めている。

「クソッ！」

ミキが中段の座席に身を乗り出し、逞しい腕でインデックスを抱えて睨みつけた。

「後できつちり話してもらうからな！一体、何がどうなってんのか——」

「全員、踏ん張れ!!」

サカキが叫び、モズが目を見開いた。

「いくよッ!!」

モズが目を瞑って腕を押し出すと、車を取り囲んでいた。枝葉が一斉に擦れ合う音を立てて、ひしゃげ、折れ曲がり、力を失くした。車に侵入していたツツジの触手は、葉を撒き散らして震えながら一気に後退していく。下方から押し上げていた力も一瞬弱まり、車は衝撃と共に地面に降り立った。

久しぶりに、フロントガラスの視界が晴れた。抜けるような青空が見える。

サカキは不意に手近のスイッチを押して、窓を下げた。

頬に涼しい風を感じた。その新しい空気を、自分の思う通りに、練り上げる。

車は突風と共に前方へ運ばれ、降りていた遮断バーを意図も簡単に吹き飛ばし、金属音をけたたましく上げながらアスファルトを滑り、横倒しになって止まった。

「みんな無事か!!」

サカキが叫ぶと、インデックスを離さず抱えていたミキが、颯め面をしながらぬつと身を起こした。

「もう当分、車には乗りたくないな」

言いながら、ミキは片腕をインデックスから離し、上へ向いたドアへと何度か叩きつけた。

ドアはひしゃげ、最後は接合部品を散らしながら青空へと舞い上がった。そして、ミキが作った出口から、全員が車外へと這い出した。

「た、助かった……」

「いや、まだだ」

膝をついて息を荒くする神官に、厳しくサカキが声をかける。

ツツジの化け物はまだ生きていた。モズの念動力によって多量の枝葉を切り落とされていたが、それでも残った部分がこちらへと這い寄ってきている。

「お願い」

インデックスがサカキの白装束の裾を掴んで言った。目には明らかに光る物を浮かべている。

「私をとにかく遠ざけて！高く放り投げられても、この服が守ってくれる——私、平気だから！」

「ああ、喜んでそうするよ」

皮肉を込めてサカキが答えると、インデックスは目を伏せた。

「今日会ったばかりなのに、ここまで守ってもらえたこと、絶対忘れない——」

インデックスが視線を落とす先、足元のアスファルトに、いくつかの黒い染みが生まれた。

「インデックスちゃん」

息を荒くしながらも、モズが肩をそっと叩いた。

「必ず、目的の場所へたどり着きな！約束だよ！」

モズが、汗を輝かせ、笑みを浮かべている。

その顔を見て、インデックスが頬を赤くし、こつくりと頷いた。

そして、インデックスの華奢な体を、ミキが抱え上げる。

砲丸投げのように、遠心力をつけて、インターチェンジ近くの、手近なビルの屋上目掛けて放り投げる。

そこへ、サカキが突風を送り、着地点を調整する。

今朝、尖塔に引っかかっていたインデックスを救出する時にとった手段と同じだ。

純白の修道服は、青空を背景にはためき、金糸の刺繍が一度、陽の

光を反射して煌めいた。

夏だな、と、サカキはふと場違いな感想を浮かべていた。

「こいつら……まだ襲って来やがる」

ミキが唸った。インデックスは遠くへと去ったが、植物の化け物は未だ蠢き、サカキ達を取り囲もうとしていた。

「無理に戦うことはない、引き揚げ——」

サカキの言葉は途中で切られた。

今までにない、弾丸のような速さで、鋭利な枝先がこちら目掛けて伸びて来たからだ。

サカキは咄嗟に跳躍し、空気の流れを操作しながら上空へ逃れようとした。

「あつ」

思わず声を上げた。硬い感触を伴った枝が、蔓のように足首に巻き付いている。

サカキの体は一気に地面へ引き戻され、叩きつけられた。

胸の空気が強制的に痛みを伴った咳となって、サカキの口から押し出される。

咄嗟に自身の身体の周りの空気圧を高めたことで、衝撃をいくらかは軽減できたが、それでも全身が痛い。

周りを必死に見渡すと、神官は既に縛られ、ミキやモズはそれぞれ植物と格闘していた。

不味い——

サカキは既に身動きが取れなかった。ただでさえ体が痛み、力が入らないのに、四肢に枝が絡みつき、地面に大の字に引き倒されている。

サカキの目の前に、枝と葉が生い茂り、その中心で蕾が膨らみ、額が開き、そして白色と桃色のコントラストが美しい、ツツジの花が咲いた。

それはサカキの顔の大きさを優に超える、巨大な花だった。

「この……季節外れなんだよ、化け物——」

首筋にも冷たく這い寄る感触を感じながら、サカキは毒吐いた。

サカキは、眼前の巨大な花と向き合わざるを得なかった。

花の色模様が、マーブリングのように流れ、いつしか人の目のように見えた。

シヨツキングピンクの雌蕊が、サカキの鼻先をくすぐり、雄蕊の根本、花卉の中心部分に、ぽっかりと穴が空いた。

「Dedicate —— the Index of Prohibited Books ——」

ブルガリアン・ヴォイスのような、大地の脈動を放つ、幾重にも響く声だった。

サカキは、その声に射貫かれて、全身に冷たい物が走るのを感じた。

絶体絶命の状況は、突如として終わった。

花がけたたましい悲鳴を上げて、サカキから遠ざかり、萎んでいく。

四肢を拘束していた枝も同様だった。

「何が——」

サカキが身を起こすと、元々ツツジが植わっていたであろう、料金徴収レーンのすぐ脇の一角が、轟轟と炎に包まれている。オレンジの軌跡が高々と躍動的に描かれ、生きていたツツジを燃やしている。それは、巨人が庭先で剪定に勤しむかのようなだった。

その炎を見つめて、一人、長身の人物が立っていた。サカキは、陽炎で揺らめくその背中を見つめ、口を開いた。

「……何者だ」

インデックスとは正反対の、漆黒の衣を纏った男が振り返った。

目でバーコードの刺青がひくつと動き、男は冷たくサカキを見下ろした。

「お前、何者だ」

サカキは再度、冷たい目をした黒ずくめの男に誰何した。

高所から叩きつけられた衝撃に加え、先ほどまで、熱されたアスファルトに体を押さえつけられていたせいで、体のそこかしこがじりじりと痛む。

自分たちを襲った植物が、何者かの手によって燃やされ、撃退された。それは、目の前のこの男の仕業なのかもしれない。

しかし、煙草を啜え、忌々しいものを見るような目でこちらを見下ろす男の様子は、決して善意でこちらを救ってくれたのではないと、サカキには簡単に理解できた。

「仮にも助けられておいて、随分と舐めた口の利き方だ。日本人はもう少し礼儀正しい民族だと思っていたけどね」

どこか片言気味の発音だった。そして、声には少年のようなあどけなさが感じられ、サカキは違和感を覚えた。

男がゆっくりと歩み寄って来た。夏真つ盛りだというのに、頭を覆うフードも含め、全身を漆黒のローブで身を包み、それでいて汗ひとつかいていない。フードを被っていても明らかかな、燃えるような赤い長髪、右目の元のバーコード様の刺青、耳の輪郭に沿うように多量にぶら下げたピアスが、近寄り難い印象を与える。

サカキは男が近づいて来たことを受け、痛みを堪えて立ち上がるが、想像以上に相手の背が高いことに気付き見上げる形になる。2mは優に越えているだろうか。

「ならば、あの化け物を燃やしたのはお前ということか」

「新大陸の田舎くんだりから出て来た、ラディカルベイガン急進異教徒たちのお遊びのことかい？ああ、安心するといい、葉っぱをキめながら輪になって小躍りしてた連中は、もう何も残っていないさ」

気取ったような口調で言うと、男は煙草を路面に落とし、紐の無い黒一色のブーツでじりじりと踏みつけた。

「それにしても、3人も雁首を揃えておいて、あんなお粗末な術式にも

良いようにやられるとは。極東の新興宗派だと聞いたからどんな連中かと思えば……神裂から得た情報も、買い被り過ぎだったとかどうか

「さっきから言うねエ、ポーズ」

天然パーマを乱したモズが、サカキの隣に立って言った。

「坊主だど？」

男の目元がひくりと動いた。

それを見たモズが笑った。

「そーだよ。アタイには分かる。アンタ、イケメンでワル気取ってるけどさ、実は案外年下だろ」

「馬鹿にするな、女」

男が凄んだ。

「お前達など、この僕の研ぎ澄まされた魔術の前では、足元にも及ばない」

「へえ、タバコ臭い上にどーと臭いけど、口だけはいつちよ前ってヤツか」

「何だと！」

「おい待て、お前、今『魔術』って言ったな？」

口元から流れる血を拭いながら、ミキが加わって言った。

「お前もあの大言壮語な修道女シスターの追っ手か？それとも十字教仲間か？」

「……無駄話をしているヒマは無い」

男の目が、フードの陰の中で、キラリと光った。

男が、懐に隠していた右手を出す。ゴテゴテとした銀の指輪が5本の指全てに嵌められており、夏の陽光を反射した。そして、その指で、1枚のカードを挟んでいる。サカキには詳細が分からなかったが、見えている柄はトランプの裏面のようだった。

「Fortiss31。東洋人には聞き慣れないだろうがね、僕の名ということになっておいてくれ」

相変わらずの気障ったらしい口調だったが、その中に、こちらを刺すような攻撃性が含まれているのを、サカキは感じ取った。

(モズ、ミキ。構えろ。何か仕掛けてくる)

サカキは足の痛みを堪えて立ち上がりながら、男に悟られぬよう、念話を用いて2人の仲間に警告を発する。

その時、ふわりと涼やかな風が吹いた。

「ああ、そうさ。僕達『魔術師』の——」

男が指を離すと、風にカードが舞い上がる。男の身長を軽々と越えてゆく。

サカキはそのカードを目で追った。

「——殺し名さ……炎よ^{kenaz}」

物騒な言葉を口にしたのに続けて、男は何事か、聞き慣れない、異国の短い言葉を呟いた。

その瞬間、舞い上がったカードが、爆発した。

予想外の爆風に、サカキは両手で顔を覆った。熱さを感じる。

しかし、それだけで終わらなかった。

オレンジの弾丸のようなものが迫り来るのを垣間見て、サカキは足元に全力で上昇気流を生み出し、跳び上がった。

炎だ。

猛禽のような形をとった、高熱の塊が、先程までサカキがいた路面を抉り、黒く焦げ跡を残す。

「サカキ!!」

モズの叫び声が聞こえるのと、炎の鳥が軌道を変え、サカキを追撃していくのはほぼ同時だった。

サカキは目を見開いた。

再び熱が迫り来るのを感じ、痛みを押しつけて、脳が危険信号を発する。

全力でこの状況を回避しなければならない。

サカキは腕を上から下へ思い切り薙いだ。

演算を通して思い描いたのは、巨大な団扇。

強引に作られた気流が渦を巻き、轟、と耳に唸り声を満たす。

向かってきた炎は、拡散し——巨大化した。

「あっ」

悪手だった。

そう気付いた瞬間、炎は開いた嘴で、サカキの身体を包み込んだ。モズとミキが悲鳴を上げる。

「お前達のようなよちよち歩きの異教徒どもに、『あの子』を渡す訳にはいかない」

炎に巻かれて力を失い落下していくサカキをつまらなそうに見ながら、男が言った。

「さあ教えろ。 Index—Librorum—Prohibitiorum 禁書目録はどこへ向かった？」

——第一二学区、ミヤコ教団本部

「壮観ですね」

神裂火織かんざきかおりは呟いた。言葉とは裏腹に、表情は物憂げで、感激は微塵もなかった。

「さしずめ、ここは法王の謁見の窓といったところですか」

和地関わあちかんと同位に語られては、恐れ多いわい」

教団の長たる老婆、ミヤコが、神裂に背を向けて言った。

空間を、信者の喧騒が揺らしており、聖人として聴覚を研ぎ澄ましている神裂でも、辛うじて聞き取れる声だった。

ミヤコ様、ミヤコ様——バルコニーから見下ろせる下層の広間では、数百人はいるだろう信者が、瞳を輝かせて名を呼んでいる。老いも若きも、男も女も、幼い子どもを胸に抱く者もいたが、身だしなみに余裕の無い貧しさを漂わせている者が多い。ある者は手を合わせ、ある者は目を拭い、またある者は跪いて何やら祈りを唱えている。

「それに、お主らの本拠は倫敦ロンドンであろう。イギリス清教の魔術師よ」

ひとしきり手を振った後、信者の観衆に背を向け、ミヤコが神裂へ振り返って言った。

「ええ。ご理解頂いているようでよかったです」

神裂は静かに言い、ミヤコをじっと見据えた。

「宗教観の薄いこの国では、どうも十字教といえれば何でも一括りに考えてしまう人も少なくないですから」

「……こう見えても、一宗教の祖であるからにして」

神官（神裂には仏僧のように見えたが、ミヤコはそう呼んでいた）の介添を受けながら、ミヤコはゆっくりとした足取りで神裂の横を通り過ぎた。

「最低限の常識は弁えておるつもりじゃよ」

神裂はミヤコの後についていく。信者たちの歓声は徐々に遠ざかっていったが、巨大な浮彫レリーフを前にミヤコが足を止めたその時も、背後からまだ聴こえた。遠鳴りではあるが、権威ある者へしやにむに縋ろうとするその声は、神裂の心に苛立ちのようなさざ波を起こした。

「時間はあまりないのです」

神裂は言った。

「今朝、我々イギリス清教の修道女……禁書目録インデックスがここを訪れたことは分かっています」

先ほどまでのただ静かな声とは違い、ほんの少し、鋭さを秘めた声だった。

「あなたがたの手の者が、彼女を車に乗せ、西へと連れて行った。どこへ向かわせたのですか？——いえ……」

神裂は、左手で腰に下げた巨大な太刀、七天七刀しちてんしちとうの柄を握った。すると、ミヤコの周囲に控える神官達の顔へ、さざ波のように緊張が走った。

「彼女を返していただきたい」

「……妙じゃの」

ミヤコの声色は、変わらず飄々としている。

「あの者、追われてここに来たと申しておった。じゃが、お主らは同じ神に仕える者、いわば仲間であろう？」

神裂は、杖についてこちらへ向き直ったミヤコをまっすぐ見る。神裂の常人を超える視力は、ミヤコの赤黒い斜光眼鏡に、自分の姿が映っているのを捉える。

——なんて心細い顔をしているのだ、私は。

神裂の胸に、苛立ちが募る。

しかし、目の前にいる、この不気味な老婆に悟られてはいけない。

ミヤコの顔。老いて伸び切った頬の皮の中に、栄養価の高い食事を摂っているであろう、脂肪がしっかりと蓄えられている。

この老婆には、貧しい衆生を救う聖人とは程遠い本性がある、と神裂は看破していた。

腰もすっかり曲がり、杖や介添を要する程、足取りも不確かだ。それでも、底知れない不気味さがあり、任務を一刻も早く遂げたいと願う神裂に、焦りをもたらす。

神裂は、雑念を振り払おうと唇を噛み締めた。

「あなたに、その仔細を離す義務はありません」

努めて冷静を装った。

「しかし、あの子——アレはお喋りな故、あなたも耳にしたでしょう？アレは危険なものだ」

「魔導書、とやらかえ？」

「確かに、アレを狙うものは多い」

神裂は、言葉を選ぶように、ゆっくりと言う。

「我々の仲間の魔術師が、あなたの手の者と、アレを追っています。新大陸の異教徒たちも強奪を目論んでいるとの情報がある。アレは、世の理をひっくり返すほどの力、『魔神』にも近い存在になり得る。それ故に、一番扱いを分かっている者が、保護する必要がある」

「保護、のう」

ミヤコが顎を撫でて、何か考え込む素振りを見せた。手首の数珠が、じやらりと鳴った。

「そして——率直に言つて、あなた方も疑わしい」

神裂の声は、決して大きい声ではないが、辺りの空気を切り裂くような、ひりひりとしたものへ変わっていた。

「ミヤコ教——極東のこの地において、あなたがたった一代で勢力を伸張させた、新宗教。その力はただ民衆に留まらず、今や政財界にも及んでいると聞きます」

「買い被りすぎじゃよ」

俯き、僅かに笑いながら、ミヤコが言った。

「いえ、違います。現に、野党第一党の重鎮も幾度となくあなたの許を

訪れているではありませんか」

「週刊誌の情報を真に受けるのかの」

「それだけ疑わしいと言っているのです」

神裂は、徐々にミヤコの言葉に対して間を置かずに応答するようになった。

この老婆を逃がしてはいけない。

「私の同僚の魔術師は、ルーン魔術の天才です。彼は強い。他の追っ手だけでなく、終にはあなたが同行させた配下の者も制圧するでしょう。もしも、市井の人間が、純粋な善意で彼女を助けた、というのなら、我々ももつと穏便に済ませたでしょうが……しかし、あなた方は、我々にとつて異教徒——つまり」

神裂は、右手で七天七刀の柄に触れる。

「——我らの資産——『インデックス禁書目録』を奪おうとするなら、敵として認めざるを得ない」

ぐるりと取り囲むように立つ神官たちの視線が、じつと神裂に注がれた。

信者の喧騒が、本当にどこか遠くへと消えてしまったかのように、静寂が流れた。

ミヤコは、視線を落とし、俯いて黙っている。

「資産、とな」

ミヤコがその一言とともに、肩を震わせた。

「……何が——」

刀の柄を握る神裂の手に力が込められた。

「——何がおかしい!!」

怒りを露わにした神裂の前に、ミヤコが顔を上げた。

「倫敦より来たりし魔術師、神裂とやら」

笑みを浮かべていた。

「……」たばか「自身を謀っておらぬか？」

神裂の背筋に寒いものが走った。

ミヤコの言葉は、胸の内をすつと抉るナイフのようだった。

「何を、根拠に——」

「護ろうとする、強い意志を感じたまでのこと。なあに、長年の勘とい
うヤツじゃよ」

ミヤコが杖先で床をコツコツと軽く叩いた。

「しかし……困ったのう」

神裂は、もはや感情を隠さず、惚けるようなミヤコを睨みつけてい
る。

七天七刀をいつでも抜ける体勢をとっている。

「あの者の力を欲しているわけでもなし、特段、行き先を隠し立てする
義理も無い。のだが……わしの娘たちに仇為そうというのであれば、
こちらとしても黙って伏する訳にもいかぬでの。お主と同じことよ。
あの娘たちは、わしにとつて護るべき存在であるが故」

「ならば——」

「さりとて、お主の力量は相当な物であろう？イギリス清教の魔術師
よ。それこそ、ここにいる者共が束になっても敵わん程と見受ける
……先ほどからひりひり伝わって来るわい。この老いた、乾いた肌
に。お主の怒り、焦り、不安……何をそこまで焦っておる？神裂よ」
「……気安く、名を呼ぶな」

神裂は、静かに、だが怒りを込めて言った。

しかし、ミヤコは意に介す素振りを見せない。

「あの修道女^{シスター}を案ずることはない。流れはそう簡単には変わらぬ。お
主の所為ではないのだから。例えお主が、生まれもつての加護の故、
幾人もの不仕合わせ^{ふしあ}を目にしてきたとしても……」

「何が……ッ」

神裂は、ミヤコに言葉を返そうとした。しかし、普段は容易に繋が
る筈の、単語と単語の結びつきが、ぷつぷつと切れてしまったかのよ
うだった。

なぜ、そんなことが言える。

この老婆は、自分の何を知っている。

暫しの間を置いて、言葉にならない感情の渦から、神裂はただ、目
の前の存在に対して任務を遂行しようとする義務感だけを取り出す
ことができた。

「……これが最後です」

神裂は口を開いた。

「禁書目録あの子の行き先を教えてください……我々の下に返しなさい。ミヤコ」
「断れば？」

ミヤコが言った。

「その太刀でもってわしを成敗するか？今までそんな機会は幾度もあったと思うが」

「いえ」

ミヤコの言葉を聞き、神裂は短く言った。小さなその声は、唯の呟きに近かった。

「それには及びません」

神裂の右手が、ほんの一瞬、動いた。

雷を落としたような音と共に、上質な檜の床板が、幾つも木っ端を作って舞い上がった。

はらはらとそれら木屑が落ちる中、ミヤコの華奢な身体が、袈裟懸けに深い傷を作って頽くずおれた。

「私は、イギリス清教下、必要悪ネセサリウスの教会に所属する魔術師として、あなたを敵とみなした。ミヤコ」

七天七刀をとうに鞘に収め、宣言する神裂の足元には、からからと複数の欠片に分かれたミヤコの杖が転がって来た。

「悪く思わないでください」

ミヤコの身体が横たわる周囲には、七つの斬撃の軌道が、床を抉る傷跡となって残されていた。

やってしまった。

神裂火織の額から、汗が流れた。

今日会ったばかりの異教の祖であるミヤコを、「七閃」をもって斬ってしまった。

どういう絡繰りか何らかの術か、彼女は自分の出自まで知っていると仄めかした。過去を言い当てられた怒りか、底の知れない相手に対する恐怖か。

神裂は、必要悪ネセサリウスの教会所属の魔術師として、18才にして多くの任務をこなしてきた。相手の命を奪ったことも初めてではない。しかし今回は、斬ってみれば、相手は既に床に倒れ伏し、赤黒い血溜まりを作る、ただの生身の老人だった。

相手方が「禁書目録」を狙う異教徒であるといえど、あまりにあっけなかつた。

自分は何か思い違いをしていたのではないか？

焦りに駆られ、神裂は周囲を見回した。

7人の神官たちが、自分を取り囲むように立っている。

妙だ。

神裂は、形容し難い違和感を覚えた。

教祖を屠られたというのに、神官たちに全く取り乱す様子がない。

憤りに顔を歪めるでも、自身の圧倒的な力に恐怖するでもなく、ただ立っている。

その表情は、一様に冷静そのものだった。

「私の『七閃』は」

不気味な沈黙に居たたまれず、神裂は周囲の神官へ言った。

「一瞬の間に七度殺すことができる。あなた方をまとめて斬り伏せることだってできます」

右手は七天七刀の柄を握り、いつでも再び居合できる体勢だ。

「最早、刀は既に一度抜かれました。こちらは覚悟ができています。あなた方はどうなのですか。大人しく、禁書目録をこちらへ引き渡し

なさい。保護させてもらいたいのです」

「やはり、込み入ったワケあり、のようじゃのう」

心臓が跳び上がった神裂は、唐突に声をかけられた方へと振り返った。それと同時に「七閃」を放とうとしたが——できなかつた。

右手が、動かない。

「……ミ、ヤコ……ッ」

「言ったであろう？我々程度では敵わぬと。やはりお主のその技——
—剣技なのか魔術なのかは分からぬがの、老人の盲いた目にはとてもとても捉えられなんだ。大したものよ、ホッホッ」

先ほど切り捨てたミヤコと、顔から背格好、服装に至るまで、全く同じ容姿をした老婆が、2人の神官を横に従えて現れた。その口調は、訪問者^{神裂}が旋風の如く部屋を破壊していることなど、まるで意に介していないようだった。

「しかし、これは……」

神裂の右手が、七天七刀の柄から離れ、不可視の力によって強引に床へと押さえつけられる。それに引きずられるように、神裂は膝をついた。神裂は目を見開いて自身の右腕を見る。雪のように白い肌に、青く血管が浮き出ている、これから静脈血を採るかのようにだった。

「お主の攻撃の引鉄を見極めたかつたのでな。ひとまず、その太刀は抜かんでもらえるとありがたいのじゃが」

神裂が焦って周りを見渡すと、先ほどまで突っ立っていた神官たちが、一様に目を瞑り、両掌を神裂へと向けていた。

「……皆、術者という訳か……」

「学園都市^街でいうところのテレキネシス^{念動力}というヤツかのう。お主らは勘違いしとるようじゃが、わしらが持つほんの些細な力は、魔術というよりも科学的な方策によるものであるからして。個々の力はお細い蠟燭のようなものじゃが、要はその使い方よ。合わされば、より大きな炎^{いび}となる」

「2人目の」ミヤコに従って来た2名の神官は、担架を持ち、先ほど神裂が斬り捨てた「1人目の」ミヤコの軀を乗せる。もはや息はないようで、担架から皺だらけの片腕がだらりと垂れ下がった。心なし

か、神裂が相対していた頃より一気に痩せこけたように見える。神官は始めから死体を運ぶ作業を命じられてきたのか、他の能力を行使する神官とは異なり、解剖医のような白衣をまとっていた。その白い生地に、べつとりと赤黒い血がついた。

その様を見ていた神裂は、別の違和感を得る。床に走る七閃の痕は、ある一戦を境に途切れている。ミヤコが先ほどまで背にしていた、光を象る巨大な浮彫レリーフに、全く届いていなかった。

「それは、影武者か……」

「目に見える物だけを全てと思わぬことじゃ」

神裂の呟きを、ミヤコが拾って言った。

「こう見えて、命を狙われることはこれまでにも度々あったのでな。備えあればなんとやら、よ」

今ここに立つミヤコの横を、瓜二つの遺骸が担架に運ばれて通り過ぎていくが、ミヤコは全く気にも留めない。

「私を試していたのですか。初めから」

「人聞きの悪いことを」

ミヤコの声に、神裂は初めてはつきりとした憤りを感じ取った。

「他所様の家に突然押し入って、家人を人攫いと決めつけた上、斬って捨てたのは誰だ。若い者は気が短みじうてかなわんわい」

「……まさか、これで勝ったつもりですか」

神裂は荒く息をつきながら言った。

「今はあなた方の力で抑えられていても、私はロンドンでも十指に数えられる魔術師。ほかにもやりようはあります。繰り返しますが、我々は、魔術師なのです」

「そうじゃのう、今、ここにいる数名で抑えられてはおるが、まさかこれがそちの限界ではあるまい。お主の言う通りであろうよ」

ミヤコが、膝をつく神裂の前に立って言った。

神裂は、目の前の老婆を睨みつける。

「先ほどの人形が代わり身であるなら、次の手を打つまで。私はこの楔を絶ち切り、あなた方全員を倒す。禁書あ目録の子を取り戻すためです」
「ああ、そうよの。お主なら可能であろうな」

ミヤコが、よりはつきりした声で言った。神裂の返答に対するその口調は、どこか満足そうだった。

「じゃが、今一度言う……目に見える物だけを全てと思うな」

上階まで吹き抜けとなつていゝる、広大な空間に響くのは、ミヤコの声と、神裂の息遣いだけだ。

「ここにいる数名による戒めであれば、お主がもう少しばかり力を現せば、容易く突破できるであろう。じゃが——我らには、数多の輩ともがらがおる。それをも、全て斬り伏せる覚悟か？神の使いたるお主が、心を悪鬼とするか？」

「敵とあらば」

神裂は歯を食い縛つた。同時に、神官達が及ぼす束縛を打破する術を思考する。

「それが、ネセサリウスの一員たる、私の務め——」

「それが、無辜の民であつてもか？」

「無論——今、何と？」

神裂の言葉に動揺が現れ、ミヤコが、僅かに唇の端を歪ませた。

それから、唐突にミヤコが神裂へ背を向け、歩き出す。

「お主の意志は、よう分かつた」

神裂は、ふっと体が浮き上がるのを感じた。

手は相変わらず、刀に届かない。

そのまま神裂は、静寂の中、ミヤコの後を歩かされる。

「それほどまでに、あの娘を護りたいと願うのならば、行くがよい。お主はここで戦たたかうてゐる場合ではないぞ」

ならば、行き先を教えろ——神裂は反論しようとしたが、なぜか声が出ない。

首元を締め付けられている感覚があり、足が勝手に前へ進む中、神裂は目だけで周囲の神官を睨みつけた。

これも、こいつらの仕業か——？

「それでもなお、刃を向けるというのなら——」

たどり着いた先で、ミヤコが足を止め、神裂を振り返つた。

「——我ら全員の屍を超えて行け」

神裂は、ミヤコの横に並び立たされた。

そこは、先刻ミヤコが信者に向かって手を振ったバルコニーだった。

神裂は、眼下の広間を見て、息を呑んだ。

無数の目が、神裂を見ていた。

ミヤコに向かって縋り、歓喜の声を上げ、祈りの言葉を垂れていた数百人の信者たちが、今、全く音を立てず、ただ神裂を見ていた。

その顔は一樣にただただ無機質であり、何の感情も読み取れない。

全て、意思を奪われ、操られているように見えた。

注目を一身に浴びて、神裂は喉が急激に乾いていくのを感じた。

視線の一つ一つに、神官の手から発せられるのと同じ「力」が込められていた。

「誰もが、偶々今日ここに集った者」

いつの間にか、神裂の背後に回っていたミヤコが言った。

「我らを倒そうとするなら、彼らもまたお主の敵となろう。命を投げ打つ者たちじゃ」

「ツこんな——これは！」

神裂に声が戻った。ひどく狼狽した声が出た。

「人柱だ——幼子までいるというのに、市民を盾にするなど、許されることでは——」

「我々の教義では——」

ミヤコの声は淀みない。

「こう教える。人は誰しも、『上層』へと辿り着かんとする望みを秘めておると。それが、『触媒』としての原動力じゃ。一度火花が散れば、それらは互いに火を灯し合い——やがては、『聖人』にも抗い得る力となる。」

「う神裂よ。お主らは、イギリス清教であろう？ おおよそ500年もの歴史を辿る、十字教の一翼。わしらといえは、お主らに比べれば、島国のちっぽけな一団に過ぎぬ。しかし、お主ら魔術師がその大杖を振ろうとするならば、我らは出来得る手を尽くして反抗する。覚えておけ、窮鼠は猫をも噛むぞ」

神裂はうなだれた。

ここに集っているのは、何の落ち度も無い市民であり、彼らの尋常でない様子は、恐らくミヤコと神官たちの術によるものだと、神裂には察しがついた。

神裂の手が震える。

為そうと思えば、七天七刀を抜き、技を発動し、辺りを血に染めることもできたかもしれない。

神官たちの手は、既に下げられていた。

しかし、神裂の戦意は、とうに喪われていた。

「あの修道女は、西へ向かった」

俯く神裂に近づき、ミヤコが静かに言った。

「七学区と呼ばれる街がある。そこには、お主らイギリス清教の出先があつた筈じやろう。彼女はそこを頼ろうとしておる」

神裂は、ひどく疲れ切った顔を上げた。

「……しかし、あれはただの出張所に過ぎない。裏の顔を知らないのです。そこにいる神父は、魔術師の『ま』の字も知らない」

「だとすれば、尚の事」

ミヤコが言った。

「早う追いかけるがよい。ただし、ここを去るにあたり、ひとつ条件があるのでは」

「条件？」

「ああ」

ミヤコが言った。

「今しがた入った報せによれば、修道女は既にわしの娘たちの手を離れておる。じゃが……お主の仲間がの、未だ疑念をもって娘たちを制圧せんとしておるようなのだ。赤髪の、傾きたる風貌の、大男だという。なれど、これは不運な誤解に基づくもの。そうじやろう？」

神裂は、横目でミヤコの顔を見た。

赤黒い眼鏡に、自分のひどく弱った顔が映っている。ミヤコが口を開く。

「互いに、無益な戦は止そうではないか。のう？」

盲目とは聞いている。しかし神裂は、ミヤコに全てを見透かされている気がしてならなかった。

はち切れんばかりの不安に耐えきれず、神裂はその場を脱兎の如く駆け出した。

信者と神官の顔が、全て、その背中を追っていた。

神裂がその場を去って、しばらく後。

「……奇跡だ」

信者の間から、誰となく、声が上がりに始めた。

「い、今、何が起きたんだ」

「光が、光が、見えた——」

「なんだか、すごい幸せな気分だったような……」

「これが……救いなのか!」

「ミヤコ様!」

「ミヤコ様!」

「ミヤコ様!」

先ほどまでの静寂はどこへやら、信者たちは皆、感極まってミヤコの名を呼んでいる。

その信者たちに手を振ると、ミヤコは背を向け、杖無しで、己の足で歩き出した。

「……肝が冷えましたぞ」

高位の神官が一人、ミヤコの傍に寄り、声を潜めて言った。

「なあに、ちいっとばかり脅かしただけのことよ」

ミヤコは、からからと笑いながら言った。

「あやつは……そこまで鬼畜生の心の持ち主ではないと分かっていたからの」

寧ろ……仲間の若造よ。愛娘に傷をつけようものなら、ただじゃおかん」

後半の言葉に込められた語気の強さに、側近の神官はぐくりと唾を呑んだ。

「……『身代わり』を補わねばのう」

ミヤコが世間話でもするかのように、軽く言った。

「目ぼしい者は居るかえ？」

「今日集っている者の中に、齢八十程の、身寄りがなく、戸籍も随分前に売り払ったという女がおります」

「おう、それじゃ」

ミヤコは、軽く人差し指を上げて言った。

「早い内に、着せ替えておくように。『アキラ』のことといい、あの『修道女』のことといい、命は大いに越したことはない」

「……はい」

密かに冷や汗を流している神官の心情を知ってか知らずか、ミヤコは信者たちの歓声を背に歩いていった。

どれくらい走っただろうか。

神裂は建物と建物の間の路地に入り、冷たい壁に手を突いて息を切らした。

ミヤコ教の神殿から逃げ出した後も、すれ違う住民の視線が自分に向けられている、そんな不穏な感触を振り払えずにいた。

今の自分は、片脚だけ大胆に短くしたジーンズに身の丈を大きく超える七天七刀を腰に下げているという状態だ。刀はともかく、服装は術式の発動の効率に関わることだが、ただでさえ、この街ではあからさまに異物感を出す外見だ。

いや、あれだけの信者をマインドコントロールするミヤコのことだ。ひよつとすると、この街の住民全員を操ることができるのかもしれない。

紆余曲折あったとはいえ、イン^伸テック^間スの行き先を聞き出すことはできた。だとすれば、ミヤコの配下にも、この国の警察組織にも目を付けられる前に、武器を隠し、早い内に去ることが得策だ。

早鐘を余韻の様に鳴らす胸の内に、先ほど神殿で吞まれた悪寒がまだ残っているようだ。

それを悟られぬよう、神裂は首を何度か振ると、携帯電話を取り出

し、同僚へと繋いだ。

「——ステイル。あの子の行き先が分かった——」

「サカキッ!!」

ミキは悲痛な声を上げて駆け寄る。

炎に巻かれて力を失い落下する小柄なサカキの身体は、すんでの所で落下点にたどり着いたミキもろとも地面を転がった。

体全体が痛んだ。そして、口腔に硬い苦味が迸った。ミキは唾を吐き出す。黒ずんだアスファルト片がいくつも飛び出た。

何事か、遠くでモズが憤怒の声を上げるのが聞こえる。

しかし、それを気にする余裕はミキにはない。ミキは膝をつき、サカキの身体を抱きかかえた。

「サカキ！しっかり……」

(……ミ、キ……聞いて……)

ミキの思考に、サカキからの念話が弱弱しく聞こえる。

ミキは、抱いたサカキの身体を見回し、ふと違和感を覚えて首を傾げた。

ステイルⅡマグヌスは勝利を確信していた。

「インデックス禁書目録を連れ去った異教徒というから、どんな者かと思っただけど」

薄ら笑いを浮かべて、ステイルは言った。片手に摘んだカードが燃え上がり、火の粉を散らす。

「これくらいの『ぬるま湯』にも耐えられないなんてね。神裂も買い被り過ぎたかな、こりゃ」

「お前！よくもサカキを!!」

金髪の少女、ミキが憤怒に顔を歪め、片手の平をこちらに向ける。

何か仕掛けてくる——そう察したステイルは、より素早く先手を取って、矢のように炎を相手目に向けて射る。

息を呑んだミキが咄嗟のところまで炎を回避し、どうにか受け身を

取って転がった。

「舐めるなよ、娘」

ステイルはルーンを刻んだカードを新たに一枚取り出し、それを起点に炎の壁を創り出す。

壁はあつという間にアスファルト上を延伸し、モズを取り囲んだ。

炎の向こうで、汗を浮かべたモズの顔が見え隠れした。

「お前達は異教徒であり、インデックスを——つまり、僕らの資産を奪った。もうとつくに、明確な敵なんだ。インデックスの行方を吐け。さもないと、次は必ず殺す。さっきの似非風使いにはとろ火をくれてやったが……あれとは訳が違うぞ。」

ああ、言っておくが、時間を稼ごうとしてもムダさ。ここら一带には人払いのルーンをしてあるんだ——先ほどからこれだけ鉄火場になってるのに、警察やら野次馬が来ないのもおかしいだろう？ ぼやぼやしていると、お前も、あの落ちた女も手遅れになるぞ。命が惜しいだろう？ つまり、お前達に選択権は無い訳で——」

「なあ、魔術師」

不意に聞こえた声とともに、頭上に影が落ちたのに気付き、ステイルが上を見上げる。

「お前こそ、見くびるな」

頭上の人影がそう言い放った次の瞬間、ステイルは突風に目を塞がれ、それと同時に腹に渦巻くような強烈な衝撃を受け、強かに地面へ背中を打ち付けた。

何とか身を起こしたステイルは、自分の目を疑った。

先ほど、炎に焼かれて戦闘不能になった筈のサカキが、鋭い目でこちらを睨み、立ち塞がっていた。

「何——ほの^{Ken}——」

ステイルはマントの内側に忍ばせていたカードを取り出し、詠唱を試みるが、その前にサカキから突風の追撃を受けた。

それから間もなく、ステイルはがっしりとした体つきの黒髪の女——

——ミキに、腹這いになる形で押さえつけられた。

「馬鹿な！」

咽ながら、ステイルは困惑の声を上げる。

「あれは500℃だぞ！手加減したとはいえ、動けるはずが――」

「だから言った。見くびるなど」

サカキが静かに言った。

ぼさぼさの髪が至る所ちりちりに焦げ、白装束にも黒い跡を無数に残しているが、しっかりと自らの足で立つことができていた。

「ミキ」

顔を灼熱のアスファルトに押し付けられたステイルの耳に、サカキの声が届く。

「そいつは多分、ルーン使い。ちよつときつくして。モズを助ける」

「ちよつとでいいのか？」

ミキが答えるや否や、ステイルは首を締め上げられ、意識を手放した。

「サカキ！」

術者が意識を失ったことで、自らを囲む炎がかき消えたモズが、すぐさま仲間のもとへ駆け寄って来た。

「大丈夫!? ケガは……」

「動ける」

サカキは、煤だらけになった自らの装束を手ではたきながら答えた。

「とりあえず、今は」

「でも、どうやって……」

「自分でもよく分からない」

サカキは首を振ると、ミキがのしかかる下で気を失っている赤髪の魔術師を見下ろした。

「もう駄目だって、切羽詰まって……咄嗟に、新しい演算式を組んだ。真空断熱のようなものかも。お陰で、苦しかった」

「そんな、簡単に言うけどさあ」

煤けたサカキの頬をハンカチで雑に拭いながら、モズが言った。

「魔法瓶じゃあるまいし」

ほっぺたをわしやわしやとされるサカキは、迷惑そうながらもどこか緩んだ顔をしていた。

「サカキ様！モズ様！ミキ様！お怪我は!?」

そこにばたばたと走り寄って来たのは、運転手を務めていた神官だ。顔中汗びっしりで、利休帽が今にもずり落ちそうなくらい傾いていた。

「こちらは平気」

短くサカキが告げると、神官はほっと胸を撫で下ろした。

「それはよかった……今しがた、ミヤコ様に報せを致しましたが、神殿にも『魔術師』を名乗る者が押し入っているとのこと」

「何だって!?!」

モズが血相を変える。

「ミヤコ様は!」

「無事とのこと。案ずるに及ばずと――」

「なあ、ちよつと」

魔術師に押し掛かったままのミキが唐突に言った。

「携帯、鳴ってんだけど」

軽やかなシロフォンの旋律が、ステイルの纏う修道服のどこかから聞こえてくる。

サカキは黙って魔術師の身に手を這わせ、やがて着信を告げる携帯電話を取り出した。

「日本語、通じる相手かな……」

モズがぼそつと呟いた。

サカキは電話の画面に指を走らせる。解錠なしアンロックに応答できた。

『――ステイル。あの子の行き先が分かった』

聞こえて来たのは、急ぎ切った女の声であり、自然な日本語だった。

「ステイル、というのか」

サカキは、気絶している男をちらりと見やって、抑揚のない声で言う。

「……お前も、魔術師か」

『……ミヤコ教の『娘』ですか』

ほんの少しだけ息を呑む音が聞こえた後、相手の声は、打って変わった静かな、警戒心を表したものに変わった。

『その電話の持ち主は別にいる筈。彼をどうしたのですか』

「質問しているのはこちらだ」

サカキはにべもなく言った。

「お前は、魔術師かと聞いている」

『……いいでしょう』

ため息交じりの沈黙の後に、相手が口を開いた。

『イギリス清教下、必要悪の教会所属の、魔術師……そうです、魔術師です。神裂と申します』

「ならば答える。こちらは、ミヤコ教団の徒だ」

サカキは淀みなく言った。

「今、十字教の装束を身に付けた男と交戦したところだ。ステイル

……お前の仲間か？」

『……ええ』

間を置いて、神裂が答えた。

『彼は私の仲間。神父です』

「神父様だってエ？」

ミキが怪訝な顔をした。

「冗談だろ、メタルバンドの賑やかしくて言われた方がまだ信じられる」

「その『神父』のお陰で、我々は一時、死に瀕した」

言葉とは裏腹に、サカキは怒りを示すことなく、冷静に言う。

「だがそれはともかく……そちらが目的としていた修道女は、既に我々の手を離れている。追撃を即刻やめろ」

『ええ。その点については、こちらとそちらとの間で……齟齬がありました』

神裂が言った。

『失礼をしました。我々はあなた方を追いません。そこで、ステイルを……彼は今、どうしているのですか』

「赤い髪の魔術師なら、我々が拘束した。今、私の仲間が跨っている」
サカキの言葉を耳にするや否や、モズがぷつと嘖き出した。

サカキは怪訝そうに顔をモズへ向ける。

「——何？私、何か変なこと言った？」

「ごめん、えつとね、言い方がね……」

モズがくすくすと笑いながら言った。

『……ステイル、この非常時にあなたは……』

神裂の内心がそのまま声に現れた。それから、誤魔化すような咳払いが聞こえた。

『とにかく、我々は今後一切、あなたがたに関知しません。そこで、ステイルを解放して頂きたい』

「私は反対だ、サカキ」

ミキが無然とした顔で言った。

「私ら、こいつに殺されかけたんだぞ。なのに、タダで見逃せてるのは納得いかないな」

「……ミキの言う事は、最も」

サカキは電話を一旦離し、小声で言った。

「ただ、こいつのお陰で、あの植物の化け物から救われたのも事実。だから……情報を得よう」

すると、サカキは再び携帯電話を耳に当てた。

「分かった。解放する」

相手の答えを待つことなく、サカキは電話を一方的に切った。

それから、サカキはミキに押さえつけられているステイルの横でしゃがみこみ、顔を覗き込んだ。

「オイ、起きな……」

「どうするつもり？」

「奴らは、イギリス清教、と名乗った」

モズが聞くと、サカキはステイルの頬をぺちぺち叩きながら答えた。

「だとすると、インデックスを追うのは何故？奴らにとって敵ではなく、味方であるはず」

「うーん、裏切り、とか？」

「そんなことするようなヤツには見えなかったが」

ミキが唸るように言った。

「食べ物への恨み、つてならあり得るかも」

その時、サカキに顔をはたかれていたステイルが呻き声を上げた。

「なあ、お前、イギリス清教の魔術師なんだってな」

目覚めたばかりで薄く目を開けているステイルに、サカキが静かに言った。

「ちよつと、話、聞かせろ」

「ああ、あと、あのヘンテコなカード、全部出してもらおうよ」

モズも寄ってきて言った。

「また何か抵抗されたら困るし……全部服、脱いでもらおうか？」

「そりゃあいい」

ミキがせせら笑って言った。

「せめてそのぐらいいはお返ししてもいいよな？」

「お、お前ら……」

3人の会話を聞いて、ステイルが震えた声で言った。

その青褪めた顔を、サカキは間近から見据えた。

「……正直に答えた方がいい。すぐ終わる」

ステイルが目を見開くのを見て、サカキは薄く笑みを浮かべた。

昼 —— 第七学区、学生街

「……でも、ここらのアパートはみんな八階建てだぜ？踏み外したら、あの世へ直行じゃねーか」

上条当麻は、先ほど突然自室のベランダに出現した、修道女風の身なりをした少女へと怪訝そうな声で問い掛けた。

「仕方なかったんだよ、地獄ハデースに墮ちることを覚悟してでもね」

壊れたエアコンのせいで、湿っぽくうだるような空気が支配する居間にちよこんと座った少女は、上条にとってよく分からないことを言った。先ほどから聞く所によると、ビルとビルの間を飛び移ろうと

して、落下し、7階にある上条の部屋の外、ベランダの手摺に、布団よろしく引つかかっていたのだという。

上条には俄かに信じ難い話だった。しかし、それはともかく上条は、空腹を訴える少女のために、冷蔵庫で干からびていた残り物をフライパンに放り込んで揺すっている所だった。

「追われていたからね」

少女の発した言葉に、フライパンを揺する上条の手が止まる。

「……追われてるって」

上条は、視線をフライパンの形容し難い内容物から、少女へと移した。

「誰に」

「何だろうね」

落ち着かないように、純白の修道服を纏った上半身を左右に揺すりながら、少女が言った。

「私、連中から逃げて……そう。朝、一度は助けられて」

「助ける？」

「そ、それで——」

上条は目を丸くした。

不意に、少女の言葉が詰まり、嗚咽が混じったからだ。

「ちよ、お前、どうした？」

上条は慌てて駆け寄った。

俯いていた少女が顔を上げる。

雪のように白い肌に2つ、大きなエメラルドの瞳。

その端から、きらきら光るものが零れていた。

「あれ？」

少女が、目の端を細い指先で拭った。

「わたし、どうして泣いてるの？」

「はア？」

上条は、相手の言っていることが理解できなかった。

それでも、突然泣き出した少女の様子を見て動転し、理由もよく分からないまま謝ろうとした。

「あの、俺、もし気を悪くしたんなら——」

上条の言葉にすぐ返事をせず、今度はより強く、少女が目をぎこしごとく擦った。

拭った後の目尻に、ほんのり赤みが差していた。

「必ず、辿り着けて——守ってくれた……」

少女が小さくしゃくりあげた。

「モズ……みんな、忘れない……忘れない、よね？」

何事かを自問自答すると、少女は目の前のテーブルに突っ伏し、顔を両手で覆った。

「なんで……どうしよう、忘れ、たくない……!」

「インデックス」と名乗る少女がさめざめと泣くのを、上条は結局、台所から焦げた臭いが漂ってくるまで、困惑しながらただ見守ることにできなかった。

7月20日(木)、午後——第七学区、ジャッジメント風紀委員第一七七支部

白井黒子にとって、「猫の手も借りたい」という言葉がこれほどまで自身の心情を表すのにぴったりだと感じられたことは無かった。

「一九学区での『帝国』一味捕縛作戦……アンチスキル警備員殉職……『レベルアップ幻想御手チャレンジ』投稿者のアカウント停止要請……運営会社へのサービス一時差し止め請求……」

隈の目立つ疲れた両目が、画面上の文字群を追う度、ぶつぶつと独り言が口について出ていた。

今、第一七七支部のオフィスには、黒子ただ一人の物音だけが寂しく鳴っている。他の者は、皆不在だった。

黒子の所属する一七七支部に限った話ではないが、現在、ジャッジメントを取り巻く状況はあまりに多忙だった。先週の時点で、「帝国」によるジャッジメントを狙った襲撃が多発したため、黒子たち学生メンバ―の活動は大幅に制限がかかったはずだった。しかし、今となつては有名無実化してしまっている。そもそも、本来学外の治安維持はアンチスキルの任務だが、その教師たちおとなが業務過多になっているのは、黒子たち学生の目から見ても最早明らかだった。

そのことを裏付けるニュース記事を、黒子は目の前のコンピュータを操作して、改めて読む。

一九学区警備員 スキルアウト集団の取り締まり中に殉職か
学園都市の治安維持機構の脆さを改めて問う

アンチスキル中央広報部の発表(19日午後9時07分)によると、昨日19日(水)午後6時頃、一九学区霞ヶ原町の旧公営競技場、通称「旧スタ」跡地において、複数の警備員アンチスキルが業務中に死傷した。

それによると、一九学区管轄内における複数のアンチスキル支部が合同チームを編成し、19日の夕方から、『帝国』と呼ばれる新興スキルアウトチームに対する一斉検挙を行っていた。その際、スキルアウトチームのメンバー多数を拘束したものの、反撃を受け、アンチスキル部隊員1名が死亡、4名が重傷を負ったという。広報部は殉職した区内の高校に勤務する30代の男性教員であるという。区教育委員会は、取材に対し、「情報が錯綜しており、現時点でコメントは控える」と答えている。

今回の検挙対象とされる『帝国』は、^レ異能力者²、^レ強能力者³相当の構成員が多数在籍しているとの情報がある。能力者の犯罪集団に対しては、アンチスキルではなく本来「警察」が対応するべき事案だが、このことについてアンチスキル広報部は、「相手に能力者がいたかどうかは）確認がとれていない。現時点で作戦内容は適切だったと考えるが、問題点が無かったか、今後検証する」としている。

本来、学生の教育にあたるべき教員が、ほぼボランティアとして治安維持にあたる「警備員」の組織機構については、これまでも教職員の多忙化改善、安全の確保の面から、度々問題視されているが、今回、殉職者が出たことで、批判の声が世論から上がることは避けられない状況だ。元警察庁次長の清水富士夫氏（69）は、学園都市の治安維持の現状についてこう指摘する。「教職員に治安維持機構の主翼を担わせるという今の仕組みの限界を露呈している。そもそも、スキルアウトと呼ばれる集団は無能力者^レの若者が多いという評価がまかり通っているが、その前提が……」

（本記事は有料です。7月いっぱい、期間限定、初回購読料無料キャンペーン実施中！）

末尾の宣伝文句に腹が立ち、キーボードを打つ指に力が込められたその時、デスクの脇に置かれた携帯電話が着信を告げた。

黒子は発進者の名をちらりと確認すると、ほんの少し口元を緩めて

応答した。

『黒子！思いついたことがあったの』

勝気そうな、それでいて優しさを含んだ声。

黒子は、いつもその声に安心感を覚える。

「……おねえさま」

『どしたの、黒子。元氣ないじゃん』

電話の相手、御坂美琴は怪訝そうな声を返す。

『まあ、そっか。いつもタツグ組んでる初春さんがダウンしちやつてるから？』

『もちろん、それも無関係ではないのですが』

黒子は、一人きりの部屋で伸びをし、そのまま状態をデスクに預けた。相向かいの席には、普段であれば、頭に花輪を乗せ、凄まじい勢いでタイピングする同級生の姿があるはずだが、今はない。初春飾利ういはるかざりは、風邪を悪化させて寝込んでいる。

黒子の頬に鋼鉄スチールの無機質な冷たさが伝わる。

「……いえ、泣き言を言っても仕方ないですわね」

『そうやって強がるのが、アンタの悪い癖——』

「分かってますの！けれども……ここが踏ん張りどころですよ」

黒子は電話を持つ手とは逆のもう一方の指先で、何となくリズムをとった。そうしていると、自分の指先が何か別の生き物のように見える。てくる。

「アンチスキル先生は手一杯、軍アーミーはスキャンダルで覚束ない。今、レベルアップがもたらしているこの混乱を一刻も早く鎮めるには、私わたくしたちジャツジメントが力を尽くさねば。

佐天さんも毒牙にかかった、あの副作用。意識の喪失。……日々患者の報告数は鰻登りですわ」

黒子はディスプレイ上に別のウィンドウを開き、表示されたとあるグラフを睨みつける。

「私たちのもとへ報告が来るのだから、きつと全てではない。今こうしている間にも、どこかでレベルアップ服用者による事件・事故が

起き、そして誰かが倒れている……つい最近、アンチスキルの対策チームが算出した推計では、アレを用いた人数はもうすぐ一万人を超えるのではと」

『一万……』

美琴が暫しの間、絶句する。

「医療資源は圧迫されつつあります」

黒子は身体を起こした。美琴との会話を通して、疲労が蓄積された己の身に、気力を何とか漲らせる。

「ここ数日、救急患者の搬送困難が増えていると……言ってみれば、充分な受け入れ態勢がないための、たらい回しです。レベルアップによって昏睡状態に陥った患者が治癒したという事例が一件も上がっていないのが最大の問題なのです。彼らは、自力で歩くことはもちろん、食べることもトイレも儘ならない状態です。そんな人が、これからの一週間は更に、何千人も生じると予測することは難しくはありませんわ。すると、どうなると思います？」

『……医療崩壊』

電話の向こうで、息を呑む音が聞こえた。

「病床はもちろん、点滴、排泄、それらを解除するための人手だって、いくら学園都市が医療先進都市といえど、限界があります。通常の患者を受け入れる余裕が失われれば、やがては街全体の機能不全を引き起こします。何としても、この異常事態を止めなければ」

『だったらー！尚更ー！』

力強い声が、黒子の耳に届いた。

『アンタ一人でどうにかなる問題じゃない……そりゃあたしだって、いくら第三位っていつても、ただ一人の人間……だけどね』

美琴が一呼吸置いた。

『あたしも、相当頭に来てるから……アンタや佐天さん、知り合いを傷つけるレベルアップにも、それを悪用してのさばる、帝国のバカどもにもね！』

どうせ、学校も夏休みなんだ。あたしは、あたしにできることをやる！いい？黒子。あたしはもうすぐ、カオリさんと合流する。早くア

ンタも来てくれると嬉しいけど」

「お姉様……ええ、そうですね、そうこなくては、ですね」

黒子は、美琴の言葉に胸がじんわりと温かくなり、鼻を小さくすすった。

「もうすぐ先輩たちが戻る時間ですから、それから入れ替わりで、すぐそちらに向かいます。木山先生へ、こちらが収集したデータを一刻も早く届けなくては」

『分かった———そうだ』

美琴がふと黒子に言った。

『1つ思いついたことがあるの。これから会う、その木山って先生にも伝えようと思うんだけど』

黒子は、目に力を湛え、美琴の言葉に耳を傾けた。

『……共感性って分かる？』

「共感性って……赤い色をあつたかいつて感じたり、青い色に冷たさを感じたりするっていう、あれですか？」

「そう！例えば、ソーダフロートには青色が付きものでしょ」

第七学区の街中を歩く美琴は、人差し指を立てながら隣の力オりに答えた。

「青色は通常、食欲減退を誘う色って言われてるけど……今日日みたいに暑い夏には、涼しいイメージを持たせるのが売れる秘訣でしょ？」

「でも、それがどう今回のレベルアップの事件と関係してるの？」

美琴や黒子が通う常盤台中学、カオリが通う職業訓練校を含め、多くの学校が夏休みに入ったというのに、学生街の人通りはまばらで、若者よりも、巡回中のアンチスキルやアーミーの隊員を数えた方が早く指が折れるのではないかと思えた。

そして、治安維持のために立つ彼らの様子もどこかおかしかった。

アンチスキルは、皆一様に切迫した表情で、殺気を四方に飛ばしている。一方、アーミーの兵士たちは、不安げに視線を揺らしたり、足を定めず歩き回ったりしている者が多い。

最近立て続けに起こった、同僚の殉職、それから司令官の解任報道。それらが影響しているのだろうか、と美琴は推測した。

「前回、私とカオリさん、初春で木山先生に会いに行つたときの結論として、この短期間で大幅な能力向上をするためには、学習装置のような大掛かりな仕掛けが必要ということでしたわ。だとすると、たかだか数MBメガにしかならない音声ファイルが、どうして聞き手の脳の演算能力に作用できるのか、不明でしたわね」

「そこで、共感性って言葉がカギかもしれないって思ったの」

美琴は黒子の説明を引き取つてカオリに聞かせる。

「長調ドウアなら楽しい気分モルに、短調なら悲しい雰囲気カプリースに。パガニーニの奇想曲は知ってる？ 同じ一連の曲の中でも、1番の急いたスピツカーと24番のダンスブルな主題を聴き比べれば、受ける印象は大きく違うし……」

「お姉様、バイオリンを嗜んでらっしゃるのですわ」

ほかんと口を開けているカオリに、黒子がそつと耳打ちした。カオリは感心したように何度も頷いた。

美琴は弓を弾く動作をしながら語っていたが、ふと咳払いをして少し顔を赤く染めた。

「と、とにかく……水穂機構病院にいる、その木山って先生が専門家なんでしょう？」

美琴は場の空気を切り替えるように言った。

じりじりとした太陽の熱が、額に汗を滲ませている。それを美琴は腕で拭い、数歩先に駆けると、後の二人へ振り返った。

「伝えてみようじゃない？ 私らの閃きをさ！」

ところが、病院に到着した3人は面食らった。

「会いに来てみたら、今日は面会謝絶だなんて……！」

「まあ、データの宛先はこの間教わりましたから、送ればいい話ではあります。また支部に戻らないといけませんし……この場で見解を聞きたかったですわ」

ロビーのソファに座つて、美琴と黒子は俯いた。

「あの人、怪我をして入院してるんだよね？」

2人の前に立って、カオリが徐に口を開いた。

美琴と黒子が顔を上げる。

「それなのに、あんなに取り憑かれたように仕事をしていて……」

「そうなの？」

今回、初めて病院を訪れた美琴が、黒子へ顔を向けた。

黒子が小さく頷いた。

「まあ、確かに療養に努める、という雰囲気ではありませんでしたわね。顔にも疲れがはつきり表れていましたし、やはり、無理が祟ったのでしょうか」

「あの、黒子ちゃん」

カオリは、漠然とした不安を顔に浮かべていた。

「怪我を押しつまで、あの人、何を研究してるのかな。いや、何のために研究してるのかな」

「何のためかというと……」

黒子が顎に手を当てて考える。

カオリは、明確な答えを求めていないかのように、首を振って言葉を続けた。

「私、何となくこの間、黒子ちゃんとあの人に会った時……木山先生、何て言えばいいんだろ、切迫してるというか、何かに追い詰められているというか、そんな気がしたの」

「カオリ先輩？」

「ごめんね、曖昧なこと言って」

カオリが再び首を振る。

「私は、二人みたいに頭がいい訳じゃないから、勘みたいなことしか言えなくて。」

「それともう一つ——」

カオリが顔を上げて、黒子と美琴の顔を見た。

「初春さんが、面会の別れ際に木山先生に聞いたこと、覚えてる？ 『アキラ』って名前を知ってるか。って」

「アキラ？」

美琴が聞き返した。カオリから発せられたその名前は、唐突で、場違いに思えた。

「実はね、中学校で、私の目の前で倒れたレベルアッパーの被害者がいるんだけど、その人も口走ってたの。アキラ、アキラって。何度も……御坂さん、何か知ってる?」

美琴は首を振り、黒子の方を見た。

黒子も同じように首を振り、再び考え込んだ。

「アキラ……聞いたことがあるようなないような……帝国の連中にはレベルアッパーの副作用を起こした者も多いです。調書記録を後で照会してみましよう」

アキラ?

ありふれた名だ。けれども、黒子にはその名を持つ知り合いがいる訳ではなかった。事件・事故を報じるニュースで読み上げられたとか、ある日のテレビで映っていた芸能人の名という訳でもなさそうだった。

けれど、黒子はどこか、その名にほんの少しの引っかけかきを感じた。聞き覚え、という程のはつきりした記憶ではないが、どこかで、多分、黒子はその名に出会っている。

それが、いつ、どんな場面であつたか――。

急に体が前へ引き倒される感覚があり、黒子の思考が現実へと引き上げられた。

「ツ!!あの、もう少し安全運転をお願いします!?!」

「悪い悪い!前の軽けいがさア、ちんたらケツ揺らして走ってるもんで――」

「あなた仮にもアンチスキルでしょう?制限速度を守るのが当たり前です!」

「いや、今は任務中――」

「緊急出動ではありませんよ、高場先生!!あくまでも単なる移動です」失敬、と呟きながら、運転席にどっかかりと座す岩のような

職業訓練校トレンセンの教師は、刈り上げたこめかみを片手でポリポリと掻いた。

車内には、黒子の好きでない臭いが立ち込めている。わざとらしいミントの香りが、タバコ臭に覆い被さっているようだ。高場の荒い運転は、黒子が同乗するバンをひつきりなしに揺らし、その度にドリンクホルダーへ無造作に置かれたガムボトルがカラカラと音を立てた。「しかし、本当にいいのかい、白井さん。あんなバイク狂い共に会いに行くだなんて」

信号待ちで、所在なさげに膝を揺すりながら、高場が言った。

「ただでさえ非常事態なんだ。その上、君に学区を跨いで来てもらうだなんて、本来はあっちゃいけないことなんだが」

「……業務管轄のルールを持ち出すのであれば、交通法規は最低限守って頂きたいものですわね」

皮肉を込めて、黒子は答えた。

「私も、あの暴走族バイカーズにはいろいろと確かめたいことができましたの。それに……日曜日でしたか？『帝国』の連中が大規模に街へ繰り出そうというのはい」

「ああ、そういうことらしい」

高場が言った。

「元はといえば、奴らもバイカーズ上がりだ。ウチの学校のチームとは犬猿の仲だ。この間、根城にしていた一九学区のスタジアムにガサ入れがあったから、今はどこから現れるか分からんが……これから君が接触しようとしているチームは、今は甲斐かいってヤツが中心になつてるんだが、恐らくアイツら、他のチームを集めてでっかく殴り込みをかけるみたいだ」

「甲斐……」

黒子は違和感を覚えた。脳裏に、赤いツナギを纏った暑苦しい男の姿が朧げに浮かぶ。

「金田という少年ではありませんでしたか？あそこのチームのリーダーは」

「アイツは、今、アーミーに連行されてる」

「えっ！」

「3日前の月曜日のことだ」

高場が苦々し気な表情を浮かべた。

「島鉄雄が『帝国』の首謀者だっことは知ってるだろう？島はまあ、ここ数日表に出て来ていないんだが……問題はヤツじゃない。とにかく月曜日、島のことを探しに来たんだか他の目的があったのか知らんが、アーミーに手綱を握られた特務警察黒服どもが押しかけて来やがった。すると金田のヤツ……アイツ、バカだからさア、ひと騒動起こしちゃまって……以来、音沙汰ナシだ」

信号が替わり、前の車を追い立てるようにして高場がギアを入れ替え、車を発進させた。

「俺は何度も奴らを止めようとした。帝国は、今やただのバイクレベルアンノウンズじゃないことははっきりした。奴らは、頭のネジの外れた、強度不明の能力者の集まりだ。倫理も仁義もクソも無い、獣みたいな連中だ。俺たちアンチスキルだって、最大級の警戒態勢で鎮圧に当たる予定なんだ。鉄パイプ振り回して、消音器マフラーをいじくって騒ぎ立ててどうにかなる問題じゃないんだ」

苦々し気な顔をした高場の言葉は、徐々に呻くような抑揚になっていった。

「白井さん。こんなことを頼むのは間違いなんだが……君からもどうか止めてやってくれ。このまま馬鹿正直に立ち向かった所で、アイツらは敵わない。それどころか、最悪……死人が出る。いくら手のかかるワルガキ共だっって、ウチの生徒だ。そんなの、俺はもう真つ平なんだよ」

黒子は、大きな高場の身体の陰、運転席側のドアポケットに、今時珍しい紙媒体の新聞が入っているのを目にした。大きな見出しから、昨日起こったアンチスキルの殉職事件についての記事だと推測できた。

車がスピードを上げ、南へ向かって走って行く。

黒子が再び視線を上げると、高場の目元は、脂汗なのか涙なのか、潤んでいるように見えた。

車が停まると、黒子は黒色のサマーパーカーを制服のブラウスの上に羽織った。

黒子は、常盤台中学校に入学してから、原則、寮や校外への外出において指定の制服の着用が義務付けられてきた。その制服を隠すのは、黒子にとって滅多にないことだった。

「ここで待っている。いつも通りなら、アイツらがもうすぐ寄って集まって来る時間だ。君の仕事が終わり次第、寄り道せず戻ってきた方がいい。あそこのマスターは見た目こそイカついが、俺とは知れた仲だ。話は通してあるから、悪いようにはならないと思うが……何かあれば、さっき伝えた短縮ダイヤルをかけてくれ。すぐ駆け付ける」

「お気遣い、痛み入りますわ。けれども——」

黒子はパーカーの袖を触る。その生地の下には、確かに腕章の感触がある。

「私、ジャッジメント風紀委員ですの。そう簡単にやられる訳には参りませんわ」

黒子はバンのドアを開けて降り立った。

午後のまだ明るい時間といえど、第七学区の学生街とは明らかに雰囲気の違い、薄汚れた路地。

（これ以上、レベルアップの被害者を増やしてはいけない……止めてみせる！）

黒子はとある雑居ビルの入り口で足を止めた。

黒子が見上げた先には、「春木屋 B1」と書かれた古ぼけた看板照

明があった。

7月20日、夕方 —— 第一〇学区 屋台尖塔 地下 スナック
「春木屋」

「てめえ澄ました面^{ツラ}しやがって！ 言いてえことがあんならはずきり言えってんだよ！」

「じゃ、はつきり言わしてもらおうけどよ。状況は良くないぜ。日曜の計画は、止めるべきだ」

目の前で山形と半蔵が火花を散らしている。山形が口角泡を飛ばして半蔵に怒りの声を上げ、半蔵は冷静に、しかし譲る素振りを一切見せない。二人の言い争いを前に、甲斐は頬杖をつき、眉間に皺を寄せた。

「ハッ！ 何を言い出すかと思えば」

立ち上がった山形がせせら笑いを浮かべ、座ったままの半蔵を見下した。

「ビビったかよ？ 七学区のボスとかほざいてる割には、小っせエタマしかぶら下げてねえのか」

「へえ、こっちは、お前らの脳ミソの大きさを疑うぜ」
半蔵が腕を組み直し、山形をじっと見上げた。

「排気ガスに塗れ過ぎか？ CO₂^{一酸化炭素}で縮んでんじやねえんだったら、その頭をどうにか使って少しは考えろ……帝国の連中が、昨日一九学区で、警備員連中相手に暴れ回ったってのは聞いてんだろ」

「それが!? どうしたってんだよ」

相変わらず食って掛かる山形を相手に、半蔵が僅かに肩を竦め、口を開いた。

「いいか、お前ら走り屋共^{バイクイース}はどう思ってるか知らないが、俺たち無能力者武装集団^{ススキルファクト}にはな、掟^{ルール}ってもんがあるんだよ。アンチスキルの目をごまかし、隠れ、逃げることはあれ、殺すなってヤツだ。なぜだか分かるか？ 俺たちは、レベル0の烙印を押され、学校なんか通え

なくたって、それでも生き延びたいってのが願いなんだ。どっかの屍喰部隊スカベンジャーみたく、教師相手せんせいにわざわざこっちから手向かおうなんてことはしねえ。そんなことすれば、あつという間に目を付けられて潰されんのがオチだ。少なくとも、駒場さんの下で働く七学区の同胞は、それを守る」

半蔵は言葉を区切ると、はつきりと一つため息をついた。

「で、『帝国』だ……アンチスキルを、少なくとも一人殺したらいいな？ 学園都市のアンチスキルをマジで敵に回すってことは、街全体に牙を剥いてんのと同じなんだ。もうその時点で、奴らは俺たちとは違う、もつとイカれたリングへ転がり込んだんだよ。俺らが手を出すまでもなく、どっかの部隊だか、もつとやばい連中が、奴らを徹底的に潰すだろうよ。他に良からぬことを企んでる者がいるとすれば、そいつらへの見せしめにもなるからな。訳の分からねえ音楽ドラッグをキめて、能力を上げた気になって、それで虎の尾を踏んでおしまいつてヤツだ。そんなトチ狂った連中相手に、わざわざ危険を冒す必要は、これっぽっちも無い」

「……フン、そうか、そうかよ……」

山形はやれやれ、といった表情で、首を振ったかと思うと、次の瞬間、半蔵の襟元を掴んで引き上げた。

甲斐はそれを見て、たまらず制止に出た。半蔵の隣の席に座っていた浜面も立ち上がった。

「オイ、山形!!」

「止めろ!」

「必要は無い、だど?」

山形は2人の言葉を意に介さない。半蔵の首元へ伸ばした手を震わせている。

「あいつらのお陰で、何人の仲間がやられたか分かってんのか!? アンチスキルがどうかかそういう大人の都合で決めるモンじゃねえだろ! これは仁義の問題だ! ここで落とす前をつけなきゃ、一体、誰がやられた仲間の無念を晴らすつてんだよ!! あーそうか、そんなビビツてるもんだから、あの駒場のゴリラ野郎はここに来てねえつて訳か。代

わりにてめえのようなヒョロい下っ端をお使いによこすとはなア!!」
「やめろつつつてんだろ!」

甲斐は山形を後ろから羽交い絞めし、必死に半蔵から引き?がした。小柄な自分よりも数段大きな体の山形を動かすのは、楽ではなかった。

一方、山形の言葉に顔を紅潮させて、浜面が前へ進み出た。

「この、バカにしやがって——」

「オイオイ、ケンカなら外でやれガキども!店で暴れんなら承知しねえぞ」

カウンターの向こうから、スキンヘッドのマスターが鋭い声を飛ばして来た所で、一同の動きが一瞬止まった。

甲斐は店の中を見渡した。

店が始まってそう間もない夕方の時間とあって、部屋の中に人影は多くない。言い争いに怪訝な視線を向けてきているのは、カウンターに座る、ドラッグ中毒らしきモヒカンの男。唇の端から、涎をいつも垂らしている。そこから少し離れた席には、黒のパーカーを羽織り、フードを目深に被った小柄な背中。体格からして女のようにも見えるが、先日、ふらっと店に現れた高校生の少女が能力の暴発騒ぎを起こしたこともあり、何か訳アリなのだろうと甲斐には思え、下手に顔を窺うことは憚られた。部屋の隅の薄暗いカウチには、ニユートラルな外見をした常連のカップルが絡みつくように座っているが、二人はこちらを気にする素振りを全く見せていなかった。

「……よせ、浜面」

半蔵が腕を上げて制した。浜面は小さく舌打ちすると引き下がる。半蔵は、口元を袖でぬぐい、乱れた服を整えると、至って先ほどまでと変わらない声で山形に向かって話し始めた。

「もちろん、俺たちのチームだって、帝国には少なからず被害を受けてる。だからこそ、駒場さんは、俺らの拠点を今不用意に離れる訳にはいかねえんだよ、それぐらい分かれ。」

それよりもだ……日曜日に計画を実行するとして、本当に勝算はあるのか?」

「何だど？」

「ああクソ、ダメだ、お前じゃ話にならねえ。氷でも嚙んで頭を冷やせ

——なあ、甲斐。どう思う？」

「……どう思うって」

半蔵から話を振られた甲斐は、暫く返答に詰まった。

「……帝国だって今、ガタが来てんだろ。幹部連中が、七学区の学生街でゴミみたいに死んでたって話は聞いたぜ？そうやって内輪もめしてるような連中が相手なんだ、いくら能力者が何人かいるつつたつて、こつちが力を合わせれば、きつと——」

「そうじゃねえだろ」

半蔵が畳みかけるように言った。

「アンタ、分かっているはずだ。金田が——あの暑苦しいリーダーがいなくなつて何日経った？駒場さんは、アイツのことを評価してた。ところが、アイツは今、どこにいるか分からねえとききた。そのことは、お前達のチームの評判を相当落としてるだろうが。で、結局の所、どれくらいのチームが、日曜日に集まることになってるんだ？」

「それは……」

甲斐は俯いた。

金田がアーミーに拘束されて以降、何とかチームをまとめようと、自分なりに努めて来たつもりだった。しかし、自分はこれまでいつも金田の相棒であり、金田がいるチームでしか行動したことが無い。甲斐は、自分に金田程のリーダーシップが無いことを痛感していた。事実、金田がチームに不在であると知れ渡ってから、急に周囲のチームの態度が明らかに素っ気なくなった。日曜日に、人殺しも厭わない狂ったメンバー揃いの帝国相手に、身を危険に晒してまで仇を返そうという気概のある声は、甲斐に届いていない。

「対帝国」の旗印でまとまりかけたチーム同士の連合は、急速に瓦解しつつあった。

その現実が胸にこみあげてきた甲斐は、何とか冷静に半蔵へ言葉を返そうとした。

「やはり、日曜日に抗争を仕掛ける気ではいるのですね」

凜とした少女の声が聞こえた。

「私も、そのことで……お話に加えて頂きたいものですわ」
わたくし

甲斐たちが顔を向けた先では、カウンターの端の方に座っていた人物が、徐にフードを脱ぐところだった。

茶色がかったツインテールをなびかせて、白井黒子がこちらを向き、立ち上がった。

「アンタ、テレポーター空間移動者の風紀委員……!」

「覚えていてくださったのですね。職業訓練校一年生、工業科所属の甲斐さん」

ツインテールを揺らして、黒子がかつかつかとこちらへ歩み寄った。

「白井黒子と申します。まあ、名前も覚えて下されば、バイクーズ風情とはいえ、ほんの少しだけ、光栄と思わなくもないですわ」

癪に障る話し方だった。甲斐はその顔に見覚えがあった。

「倉庫街の時、アゴ高場と一緒に来たヤツだな」

「オイオイ、ジャツジメントの嬢ちゃんだよ、こんなシケたタコの店へ何の用だ?」

山形が、警戒心を露わにして黒子を睨みつける。

「知ってるぞ俺ア。ジャツジメントつてのは、学校の外で働いちやいけねーんだろ?しかもここア学区だぜ?なアんでお嬢様がこおんな下界までご降臨なすったのかア、何が目的だ?」

山形のとびきり不愉快さを露わにした問いに、黒子が答えようと口を開いた時、ガシャン、とグラスが割れる音が響いた。

「じゃあつじめえんとだあア!?腐れアマがよ!このオ!」

その場の一同が怪訝そうに、明らかに素面では無いがなり声が聞こえた方を振り返る。

カウンター席の中央寄りに座っていた、モヒカンの男だ。千鳥足で、肩をいからせながらこちらへ近付いて来る。

「お前らが俺のダチをよオ、アンチスキルにチクった所為だぞオ!?オ

イ、てめコラ？お陰でこちとら商売上がったりなんだよ才近頃才!!」
男がむんずと黒子の細い手首を掴んだ。

黒子は、ただ目を細めて男を見返している。

「あア!?分かつてンのかこのまな板——」

次の瞬間、甲斐の耳が風を切るような音を捉え、それと同時に、目はモヒカン男が鈍い音を立てながら頭から床に頽れるのを見た。

辺りに沈黙が漂った。

「オイ……まさか、死んだんじや」

「まさか!」

浜面が恐る恐るといった様子で言ったのに対し、黒子はため息をつきながら否定した。

「人間の前頭骨の最小耐性限界は900**ポンド**ですの。高さ20cmから落としたぐらいでは、ひび一つ入りませんわ」

よく見ると、黒子の目元は僅かにひくついていた。甲斐の背筋に、唐突に悪寒が走った。

「なんでそう言い切れるんだよ」

「統計ですわ」

「統計って……」

浜面が呻くように言った。

甲斐がモヒカンの男の胸元を見ると、確かに上下している。脳震盪を起こしたのか、とにかく生きているようだ。といっても、これで不穏ないびきでもかき始めたら、要らぬ救急車騒ぎになるのでは、と甲斐は不安になった。

「大切なお客様を一名、倒してしまいました」

黒子がカウンター向こうのマスターへ振り返りながら言った。

「ご迷惑でしたか?」

「いんや」

マスターはこちらを見向きもせず、グラスを磨きながら答えた。

「そいつ、ここんとこツケ溜めまくってたからよ。そろそろお灸を据えてやろうと思ってたところさ。外へ放り出してくれねえかな?でかいゴミが転がってちゃあ、当店のホスピタリティにマイナスってヤ

ツだ」

「もちろんですわ」

黒子とマスターの会話を聞きながら、甲斐や山形は疑いの目を向けていた。マスターはまるで、最初からこうなることを分かっていたかのような態度だった。

山形が立ち上がり、食って掛かった。

「オイ、タコ親父！てめえ、ジャツジメントなんか店の中に引き入れて、一体どういう——」

「ねえ、皆さん！この男、運び出してくださいさる？」

「つもりだって——ハア!？」

黒子の言葉に、甲斐も山形も目を丸くした。

「だってお前……お前が倒したんだから自分で……」

「よせ」

半蔵が山形の袖を掴んで首を振った。

冷や汗を浮かべている。

「できることなら」

黒子が片手をこちらに向けて歩み寄って来た。

「善良な市民の方々のご協力を頂きたいのですが……」

顔には、とってつけたような笑顔を浮かべている。

甲斐と山形は顔を見合わせた。

「あなた方とは、是非ともお話したいことがありますの……まずは、場を整えませんか？」

笑顔とは裏腹に有無を言わせぬ圧を感じた甲斐と山形は、黙って頷き、床で伸びている男の体にかけた。

「単刀直入に申し上げますわ。日曜日、『帝国』に対する攻撃の計画……お止めなさい」

カウンターから引つ張って来た丸椅子に座るなり、白井黒子は甲斐や半蔵たちに向かって言い放った。

「……どんな説教を垂れにきたかと思えば……」

山形が反抗的に言った。

「てめえらジャツジメントに言われる筋合いはねえよ。これは俺たちの問題だ。口出しすんな」

先ほど、黒子に制圧された男を店外へ運び出してから、少しずつ客が増えて来た。甲斐たちにとっては見知った顔が多く、その多くが、見慣れない黒子に向かって怪訝な顔を向けたが、黒子は一切気にする素振りを見せず、凜とした態度だった。

黒子は山形にやや鋭い視線をぶつけた。

「勘違いしないで頂きたいのですが、私は今、ジャツジメント風紀委員としてここに参っている訳ではありません」

「どういう意味だ？」

甲斐は、黒子の言葉の真意を探ろうとする。

「あなた方にこうして接触している目的は主に2つ。1つ目は先程の問いです。まあこれは元々、別の方からの言伝なのですが……私も同意見ではありませんわ。理由は先程、そちらの殿方が仰っていた通り」
そう言つて、黒子は半蔵の方に掌を差し出して示す。

「帝国の件は、最早あなた方でどうにかなる問題ではありません。相手は武装無能力者集団ではありません。武装能力者集団です。しかも、頭のネジが外れた者ばかりの。私が所属するジャツジメントだって、何人も負傷させられました。だからこそ、あなた方のような素人が行動を起こした所で、アンチスキルにとっては邪魔にしかならないでしょう。手をお引きなさい」

「……ずいぶんと言つてくれるな」

何か反論したそうな山形を制し、甲斐は努めて冷静に言った。

「だが、さつき仲間が言った通り、どう動くかは、俺たちが決める。ア
ンタがそうやって脅してきた所で、ハイそうですかとはいかねえな」

甲斐の返答に対して、黒子がため息を一つついた。

「そうお答えになると思いましたわ」

それから、切り替えるように顔を上げた。

「では、2つ目の目的。私からあなた方に聞きたいことがあります」

「……鉄雄の居場所なら、俺たちが聞きてエぞ」

山形が不機嫌な顔をして言ったが、黒子は首を振った。

「いいえ、島鉄雄のことでも、金田正太郎のことでもありません」

「じゃあ、誰だ？」

甲斐が問うた。

「アキラ」

黒子の言葉が、はつきりと甲斐、山形、半蔵、浜面の4人に届く。

「この名に聞き覚えは？」

甲斐と山形が黙って顔を見合わせる中、手を挙げたのは浜面だっ
た。

「何日か前、帝国の手先とやり合ったんだ。その中の一人、レベルアップ幻想御手を
服用して、錯乱した奴が、その名前を何度か喚いてた……うなされ
るってか、熱に浮かれたようになっていうか……」

やはり、と黒子は頷いたが、どこか物足りなさそうな表情をしていた。

「レベルアップの副作用で錯乱した患者に共通する症状ですわ。昏
睡状態に陥る直前に、その名前を口にするらしいんです。アキラ

”と。あなた、ほかには？”

「い、いや、悪いけど、それぐらいだ。俺から言えるのは。別に、そう
いう名前の知り合いがいる訳じゃない」

黒子が真剣な目をして顔を寄せて来たので、浜面は顎を引いた。

浜面の返答に対して、黒子はやや残念そうな表情を見せた。

「私は、帝国自体を止めることも大事だと考えていますが、この原因不
明の昏睡に陥った人々を救いたいです。帝国がバラまいてきたと
いう、レベルアップが諸悪の根源。今や、SNSや動画サイトにも

面白半分レベルアッパーの音源を流す輩が後を絶たない始末。イタチごっこですわ。これ以上被害が広まる前に、この事件を止めたいのです。私は、ズアキラグという名にカギがあるのだと思います。ですから、あなた方が知っていることを、教えて頂きたいのです」

言い切ると、黒子が頭を下げたので、甲斐も山形も面食らった。

ジャツジメントといえば、自分たちバイクチームとは対照的な優等生の集まりであり、常に目の上のタンコブのような存在だった。その一員が、こうして自分たち不良に頭を下げて来ると、戸惑うばかりだった。

それでも、甲斐から言える事は少なかった。

「し、真剣にお悩みのこと悪いけどさ……帝国のことならともかく、ドラッグに溺れた連中の戯言なんざ、俺ら気にしてなかったというか――」

「ズアキラグと関係があるかは分からないけど」

半蔵が唐突に、思い出したように言い、黒子や甲斐はそちらへ顔を向けた。

「今、俺たちスキルアウト仲間の間で噂になっている言葉があるんだ。レベルアッパーがなぜ聞いた者の能力を引き上げるのか――それは、『神様のおかげ』だって」

「かみさまア？」

山形がわざとらしく片手を耳に当てて聞き直した。

「よせよお前、帝国のバカ共が、実は宣教師だったってオチ？なんだっけ、今流行りのあの宗教、甲斐？」

「ミヤコ教？」

「そうそう！平安だか平城だかなんだか知らねーけどさ、カルトじゃねえかまるで！」

山形がまくし立てる横で、黒子は締まった表情のまま、半蔵へと問い掛ける。

「その、神様、というのは？」

だいかくさま
「大覚様」

半蔵が言った。

「噂ではそう呼ばれてる。大いなる目覚めをもたらす者、だってよ……その『アキラ』ってのと、もしかしたら同じヤツのことを指すのかもしれないな」

「有益な情報かもしれませんが。お聞かせいただき、感謝申し上げます」

黒子が一度頭を下げ、立ち上がった。

「再度お伝えしますが、帝国について、日曜日はアンチスキルの先生方へお任せなさる方が賢明ですわ。帝国は今や暴走状態。その持てる能力は未知数。どんな危害を加えてくるか分かりません。理性が通じる相手ではありませんの。アンチスキルが、最大限の態勢で臨む位には」

「忠告ありがたいけどよ、アンタはどうなんだ」

甲斐は立ち上がった黒子の顔を見据えて言った。

「どう、とは？」

相変わらず、凜とした佇まいで、黒子はこちらを見返している。

「ジャツジメントとして、あんたはどうするんだってことだよ」

甲斐も立ち上がり、先程から心に浮かんでいた疑問をぶつけた。

自分たちに行動の自制を促す以上、学内の治安維持が任務であるジャツジメントも、今回出る幕は無いはずだった。

「大人たちに任せきりにするのか？知ってるぜ。帝国はジャツジメントを狙って、現に何人もやられてるそうじゃねえか。アンタ、優秀なんだろ？何も感じねえのか？帝国に、このままやられっ放しでいいと思ってるのか？」

口調は自然と厳しいものになっていた。

黒子は暫し目を閉じて、甲斐の言う事を黙って噛み締めているようだった。

「……あなたの言うこともごもつともですわ。私は、帝国が憎い。傷ついた仲間の分も、彼らを倒したい」

黒子が目を開け、再びまっすぐ甲斐をみた。明るいブラウンの大きな瞳が、店内の照明を映して静かな輝きを放っている。

「そして、それと同じくらい、街の人々をこれ以上巻き込む訳にはいかない、とも思っています。傷ついてほしくないのです。それはたとえ、バイクーズやスキルアウトたるあなた方だってそうです」

「……おかしいこと言うじゃねえか。俺らはアンタら、ジャツジメントと散々やり合ってきたんだぜ？敵って言ってもいいはずだ」

山形や半蔵、浜面が目を丸くして黒子の言葉を聞いている中、甲斐は敢えて挑発するように口を開いた。

「ええ、そうですよね」

黒子は毅然と言った後、笑顔を作った。甲斐もこれには驚かさされた。

「けれど、大切なのは、過去に何があったかではなく、今この瞬間何をすべきかではありませんか？」

その言葉が胸の内に投げ込まれ、甲斐の心は俄かに波立った。

「私は、自らがやるべきことをするまでです」

「おい、このタコ親父！てめえジャツジメントと知ってて白井黒子を引き込んだろ！」

「そうがなり立てるなって山形。アンチスキルから言われたんだよ、あの娘に場を貸してやってくれって。こないだ女子高生がここでドカンってやりかけた騒ぎがあったろ？あの時も目をつけられてヤバかったんだからさ、もう『ピーナッツ』からも手は引いたし、疑われることはしたくねエ訳よ！営業免許証だって、去年オールOKで更新したばつかなんだしさア……」

「どうしたよ、甲斐……」

黒子が去った後、山形がマスターに食ってかかる脇で、半蔵が甲斐に声をかけた。

甲斐は、手を組んで座り、黙り込んでいた。

「……いや、さ。金田がいてくれたらなあって」

俺はどうするべきなんだろうな。

言葉の後ろ半分は、胸の内だけで呟いた。

過去よりも、今、か——。

甲斐の脳裏に、黒子の言葉が反芻していた。

同日 深夜——第七学区、水穂機構病院

開け放った窓からは、夏の盛りには珍しい、涼やかな街風が吹き込
んだ。カーテンを揺らして俄かに差し入って来た月明かりが、窓際に
置かれたボトル入りの植物標本ハーバリウムの色彩を鮮やかに浮かび上がらせた。
ガウンをややはだけさせ、手術痕の残る左肩を露わにする。

唇を噛み、意識を生々しく膨らんだ部位へと集中させる。

身体が沸騰するように熱い。

自分の思考が、ほかの誰かと一緒に重なって働いている感覚がす
る。

眩暈と共に不意に体が重たくなり、椅子に背を預けた。

大量の発汗があり、のろのろと肌のそこかしこをタオルで拭う。

荒かった息が落ち着いて来たので、左肩に目をやる。

元通り、何も痕跡は残っていない。何度か回してみても、違和感
はない。

それが分かると、急激な空腹感に襲われた。

常人とは比べ物にならない早さで治癒を進めたせいだろうか。こ
こを出たら、とにかく何か口にいれなければ。

服装を整えると、デスクの上の、コンピューターの残骸——ハー
ドディスクを中心に、念入りに破壊されている——に目をやり、部
屋を後にする。

廊下は深夜であつても、煌々と明るい。

腕時計に視線を落とす。この時間、決まって彼女が巡回に来る筈
だ。

「あら、木山先生？」

柔和な笑みに、少し心配そうな様子を混ぜた表情を浮かべ、中年の
夜勤看護師が声をかけてきた。

「眠れませんか？窓を開けて見たらいかがかしら、今夜は風が気持ちい

「いですよ?」

「ああ、そうでしたね」

正面に立ち、少し背を曲げて、相手の顔を、目をまっすぐ覗き込む。
「あの……」

「木山春生という患者は、あなたに諭されて、病室へ戻り、夜風を受けて落ち着き、眠った」

そう言っつて、怪訝そうな表情に変わった相手の額に触れる。

「何も異常はありませんでしたよ」

額から指を離すと、相手はどこか呆けた表情になった。返事は無い。

「お勤めご苦労様です。感謝していますよ。その病室のベッドが丁度空いてるんです。お休みになつてはいかがです? 鍵は私が閉めておきますから」

手を差し出せば、看護師はゆっくりと頷き、首からぶら下げたIDと一体型のカードキーを渡してくる。

自分の首にそれをかけ直してから、木山は廊下の天井の一角にある監視カメラを一瞥する。

前以て位置を確認しておいたそれは、すぐ横の壁の方向へと見当違いに向いている。

「良い夜を」

そう言々と、木山春生は病棟を去った。

7月21日(金) 午前 —— 第七学区、ジャッジメント風紀委員第一七七支部

「初春! 休んでいなくて大丈夫ですか?」

入室早々に黒子が驚いた声をあげる。それに対して、マスク姿の初春(心なしか、頭の花飾りも萎れているように見える)は、片手だけ上げると、黙ってコンピュータに向かい続けている。

「あの、初春——」

「白井さんが調べてくださったキーワードについて、調べたんですけど」

初春が早口に言うと、画面の向きを変えて、傍に歩み寄った黒子に

も見えるようにした。

「何のことはない、一発で出てきました。これ、今のトレンドなんです
が……」

黒子は、初春と一緒に画面を覗き込んだ。

……

3. プラチナムフライデー

4. 大覚様

5. #もうウンザリだよ民自党

6. アキラ万歳

7. #講民党根津幹事長の議員辞職を求めます

8. #この夏当てよう！ゲコ太SSR

……

黒子は額を押さえた。

「こ、こんな堂々と……？しかも、アキラって名前まで」

「下手にクリックしてタイムラインを見ない方がいいです。出てくるのはアイドルのライブとか食レポに見せかけて、レベルアッパーの音声を乗せた動画がうじゃうじゃ。いわゆるスパムトレンドです——
——とびきり有害な」

初春はそこまで矢継ぎ早に言うのと、背もたれに体を預けて伸びをし
てから、大きなため息をついて点を仰いだ。

「無論、同僚にも声をかけて、片っ端からハッシュタグとその関連投稿
を全削除するよう、運営会社へ要請を出していますが……はつきり
言って時間の無駄です。こうしている間にも、どれだけレベルアッ
パーの罹患者が増えるか……」

初春の言葉を聞いて、黒子は背筋が凍る思いがした。

まだレベルアッパーの根源に迫れてもいないのに、事態は悪化の一
途を辿るばかりだ。

黒子は、とりあえず違う話題を出すことにした。

「ハア……木山先生から何か連絡はありましたか？昨日直接はお会い
できなかつたので、データをお送りしたのですけど」

「いえ、私は把握してませんが——」

初春が否定したその時、別室から大股に固法美偉このりみいが歩いて来た。

「ちようど、そのことで話があるの」

勢いよく話しかけて来たので、黒子も初春も背筋を正した。

「今、水穂機構病院から連絡があつて——木山春生先生が、行方不明だつて」

黒子も初春も、言葉をしばらく失つた。

何かしなくては。でも、やるべきことは、何なのか——どうすればいい？

焦りとは裏腹に、新しい情報が立て続けに入ってきたことで、黒子の思考はかき乱されていた。

XIX・ 麦野

95

金属質の途切れの無い旋律がミニマリスティックに聞こえてくる。木山春生が聞かせてくれた、レベルアップのメロディ。それは春木屋で流れていたBGMに似ていた。

長い黒髪を垂らした、陰鬱そうな少女が、顔を両手に埋めて、泣きじやくるように言った。

「兄さんを助けなきゃ——そのためには、力を高めて、超能力者^{レベル5}にならなくちゃいけないの。じゃなきゃ、兄さんが……!!」

痩せた体格の少年が、眼鏡の奥の瞳に憎しみを滾らせて言った。

「みんな、僕の敵だ。敵だったんだ……力が欲しい。そうして、僕を踏み躪り、嘲笑って来たヤツら全員殺す！殺してやる!!」

逆立った髪型をした若い男が、片手に炎を浮かべて、絶望的な表情で言った。

「いずれこんな汚れ仕事、止めてやるつもりだった……仲間もやられて、もう、俺、どうしたらいいか……力さえ！もつと力さえあれば……」

白衣を纏った木山春生が、立っている。

「数は揃った。あとは君次第だよ、島君。また会おう」

力さえあれば。

力さえあれば。

一万を超える人の数だけ、声がする。

力が欲しいと。

月光に白い髪の映える男が、地に倒れ伏した自分を見やり、無言で歩み寄って来る、

制服姿の少女が何事かを叫ぶ、

カオリが泣き腫らした目で必死に語り掛けてくる、

運転席で怯えきった男の目が見開かれる、マネキンが煌びやかな衣

服の雨を切って吹き飛ばす、軍服を来た兵士が宙に浮かび見悶える、バイクがトラックに衝突し燃え上がり、下卑た声を上げてクラウンのメーターが踊り、木山春生が笑みを浮かべてこちらを見つめドクターが手を叩き大佐が警戒心を露わにして睨み炎が相手の顔を焼き尽くしカオリが金田が甲斐が山形が緑色が光が掌の26

「アキラ君が呼んでるわ。鉄雄君」

幼い女の子の声はつきりと聞こえ、島鉄雄は覚醒した。

7月21日（金）、午前5時30分 —— 第十学区、「帽子屋」

「何かの間違いじゃあないだろうね、突如予定より2日前倒しで、今日決行するなんて……」

慌ただしく銃器の準備を整えたチヨコが、険しい表情で呟いた。

窓の外は既に夏らしく早い夜明けを迎えている。これから日が高くなるにつれ、また猛烈な暑さの一日となるだろう。

ケイも不安を顔に浮かべて俯く。

「竜は何て？」

「あの坊主頭……杉谷といったか、ヤツからの指示だそうさ。事情が変わった、とね」

「何か、嫌な予感がするよ」

バックパックの中身を漁りながら、ケイは言った。

「最近の竜、様子がおかしいと思わない？何か、やたら焦ってるというか」

「弱みを握られてる可能性はある、理事会の手先にね。じゃなきゃ、こんな無理な作戦に飛び回るもんか」

チヨコが唇を噛み締めた。

「厄介なのは、これを中央しんくきょうが追認してるってことだよ、竜の言う事が本当ならね……どのみち、ここで成果を出さなきゃ、アタシらの明日は危ない」

「おばさん」

「いいかい、ケイ」

チヨコはケイに向き直り、その両肩に手を置いた。

「お前は一番若い。もしものことがあれば、自分が生き残ることを最優先に行動するんだ。あたしら大人の都合で苦しい思いをして、万一にでも死ぬなんてことがあっちゃやならない。お前の未来は、お前のもなんだから」

「ありがとう。でも、私は死なない」

チヨコの手には、自らの手を重ねてケイは言った。

「生き抜いてみせるよ。今までがそうだったように。だって、おばさんが一緒なもの」

午前8時15分 —— 第七学区、アンチスキル警備員第七三支部

「同じことは二度と言わせるな、黄泉川」

眼鏡の向こうの細い目を更に糸のごとく細くした工示雅影の言葉には、ピリピリとした苛立ちが聞き取れた。

エマーゼンシ「緊急出動だ。君はその意味を理解できないほど時間外労働が溜まっているのかね？だとしたらすぐ休暇を取って家で寝ていろ」

「出動の意味なら理解しますが、問題は理由です、支部長」

黄泉川愛穂は早足で移動する工示の後にびったり張り付いて歩き、譲らずに言う。

「いくら夏季休業期間とはいえ、今朝になって突然、全学校への臨時閉庁の告知、それに加えて、アンチスキルに全員招集をかけ、その訳が、『アーミーにクーデターの動向有』とは？あまりにも青天の霹靂です。それをもって我々は今から、アーミー本部駐屯地及び学園都市内の各出先機関に出向き、即時の武装解除を求めるなど！」

「治安を保つ予防措置として当然の、上からの命令だ——」

「命令!? 確証は！」

黄泉川の言葉は、憤りのあまり工示の返答に被さる。

「これが、政治的抗争の一環としての策略だという可能性は!? 我々が今からやろうとしていることは、あまりに重大な意味を孕んでるじゃない。ゲリラ、海外の産業スパイ、政党間の覇権争い、過激派! いくら

でもアーミーを動かそうとする勢力はいる！いや、学園都市の上層部がアーミーを一挙に排除し、軍事バランスの天秤をひっくり返そうとする目論見かも——」

「ダアン！と工示が拳で壁を叩いた音により、黄泉川は足の動きも言葉も止めざるを得なかった。」

「それ以上……言うな、黄泉川」

工示が激情を無理やり押し留めたかのように、声を絞り出す。

「お前がいくら、向こう見ずでも、頑固でも、陰謀論に被れていても……そんなのはこの際、どうでもいい。だが、上の意向に逆らう姿を殊更に悪目立ちさせるな。正義感の旗を高く掲げ過ぎて、くそつたれな肥溜めに堕ちていった奴は、アンチスキルの中にも少なくないんだ。俺は、自分の部下からそんな思いをする奴が出てほしくない。例えそれが、上司に対する敬意の欠片もないような人物でもな」

踵を返した工事の背中からは、話は終わりだ、という意志が見て取れた。

「あの大佐は！」

黄泉川は大声で語りかけた。

「私の病室まで、足を運んで来ました——穏やかでした。これから職務を追われようとする人間とは思えない程。あなたもすれ違ったでしょう？それなのに、あんな『フェイク丸出しの動画』が、前以て都合よく、我々の側だけにリークされるなんて……おかしいと思わないじゃない!？」

足を止めていた工示は、こちらを振り返ることはなかった。

「たとえそのナリがチープでも。これまでの過程が重要なんだ。あの大佐は敵を作り過ぎた。本国からの指令が来ているというのがその証拠だ。お前は命令通り、待機しておけ」

工示は再び歩き出し、慌ただしく行き交うアンチスキルの隊員の人波に吞まれ見えなくなっていた。

黄泉川はその背中が視界からいなくなっても、立ち竦んでいた。

午前9時45分 —— 第二学区、アーミー駐屯地

『予定では明後日となっているが』

「そりゃあ何かの間違いですよ兵隊さん。そりゃ、俺たちは別にこのまま帰ってもいいんですがね。明後日やろうが今日やろうが、手間はおんなじじゃないですか」

小規模業者用の通用口で、島崎が取り繕った営業スマイルを浮かべながら、カメラ越しに守衛のアーミー隊員と話している。

その様子を見て、チヨコは隣の竜作にそつと話しかけた。

「おい、本当に話は通してあるんだろうな……いきなり2日前に押しかけられたら、宅配だって素直に受け取る奴は少ないだろう」

「今時は宅配便だって、直前に融通が利くシステムがあるってもんさ、携帯でこうポチポチつとな、チヨコさん」

竜作はあくまで顔に余裕を浮かべている。

「理事会側は、アーミーに予定変更を伝えたと言っていたぞ」「だどいいが」

守衛と予定より長く問答する島崎、それに対して疑念を抱くチヨコと、なだめる竜作。

島崎がやや声を大きくして、何度か問い掛けている。どうも相手方の声が聞こえずらいようだ。

ちぐはぐな仲間の様子に、ケイは不安が胸の内で膨らみ、鼓動と一緒に外へ漏れ出て、悟られるような感覚がした。

今、ケイ達4人は、アーミーの本部——つまり、敵の本拠地へと侵入するべく、違法に提供された入構IDを携え、電気配線の修繕業者を装ってここへ訪れている。

オレンジの制服を纏った4人は、武器や侵入工具を、金属探知を避けられる特別内装のキャリーケースに入れ、それを一人一台の台車に載せている。傍から見れば、変哲の無い仕事道具を運搬しているように見えるはずだ。

ここまで準備を急ピッチで整えるのに、今朝は慌ただしかった。

これまで、いくつもの任務をこなしてきたが、ここまで不安が募る

ことは、ケイにとって初めてだった。

『……今、確認がとれた、つい最近予定が変更になったようだな。カメラに一人ずつ向かい、虹彩認証をとること』

「どうも」

モニターのスピーカーから聞こえて来た音声に対して短く返事した島崎が、他の3人に向かい、頷く。

それから、4人全員がカメラに自分の顔を向ける。認証は、問題なく通過する。

『入ってよし。作業が終わり次第、速やかに退出し、必ず報告を入れること』

事務的な指示の後、ゲートが開かれると、4人は台車を押して施設内へ入った。

ケイ達4人がゲートを通過したのを、守衛所の室内で、黒服にサングラスをかけた男がモニター越しに見届けた。

それから男は、カーキ色のヘルメットを装着する。ヘルメットはヘッドフォンをそのまま接着したような耳元の部分まで覆う形状になっており、男は耳元の部分を操作する。

「中尉。ツエねずみ宮沢賢治 『童話集 銀河鉄道の夜 他十四編』

岩波文庫 1951年達”はネズミ捕りへ入りました”

『(苦)苦』

短い返答を受け、黒服の男、門脇は交信を終えると、部屋を後にした。

部屋に1つだけある椅子には、後頭部を柘榴のように弾けさせた守衛が座っていて、首をほぼ90度真横に傾けて動かないでいた。椅子の前にある操作盤には帽子が血塗れの乗っていて、盾に桜を重ねた紋章がべつとりと赤く染まっていた。

「……こんなもので易々と入れるものなんだねえ。うっとおしいから早く外せて良かったさ。いざってときに照準合わせられなかったらどうすんだい」

虹彩の模様を偽装するコンタクトレンズを外し、目を擦りながらチヨコがぼやいた。

「アンタならお構いなしだろ、いざとなりやその腕つぶしがあるんだし」

竜作が軽口を叩いて、空のペットボトルを差し出す。

チヨコは、ふんと鼻を鳴らし、そこへ外したばかりのレンズを入れた。

「余計な心配事は増やしたくないさね」

4人全員のレンズを回収し、バックパックにしまい込んだ竜作は、仲間へと指示を出す。

「作戦通りだ。10時にヤマは動く。俺たちの持ち時間はその後、10時15分、つまり、今から30分だ。これから指定のポイントAへ向かう。」

——おい、ケイ。ケイ!」

呼ばれていることに気付いたケイは、ハッと顔を上げた。

「しつかりしろ。もう敵の胃袋ン中だぞ」

「……ウン」

非難がましい視線を送る竜作に対し、ケイは静かに返事し、頷いた。

竜作と島崎が先に歩き出す時、ケイの右肩に、チヨコの大きな手が置かれた。

チヨコが、ケイを見下ろして一度、はっきりと頷いた。

優しい目だった。

やるしかない。

生き延びなければ。

ケイは頷き返すと、チヨコの横に立って歩き出した。

午前9時50分 ——アーミー駐屯地内本部、4階、収容棟

「ちぎししょう……」

金田は、金属製の頑丈な扉に両手を打ち付けた。

広さ4畳程の収容室内には、布団と、机、水道に、部屋の隅に仕切りも何も無く置かれたトイレがある。換気口は天井隅に近い場所にあるが、登る手段も格子を外す手段も無い。扉には金田の顔よりもやや高い位置に覗き窓があるが、そこからはただ無機質で陰気な廊下が垣間見えるだけだった。

ここに押し込められたのは、特務警察が職業訓練校に乗り込んできた火曜日だった。金田の感覚が正しければ、それからもう3日目の金曜日だ。いくら特務警察の捜査を妨害したからといって、なぜこれほどまで自分が拘束されるのか。

「鉄雄……」

薄くつぶれた座布団に胡坐をかいて座り、机に肘をつきながら、金田は仲間の名を呼んだ。先にアーミーに捕われ、謎の能力の向上を發揮しながら、クラウンを乗っ取り、ジャツジメントにもケンカを売りながら、勢力を拡大させた張本人だという。これまでの尋問では、鉄雄との関係性を尋ねられたが、そんなものはアンチスキルにも話したことだ。なぜ、アーミーが自分をここまで拘束し、留め置くのかが理解できなかった。

そして、鉄雄は今、このアーミーの本部に、自分と同じように囚われている。それも、担架に乗せられ、傷だらけの、意識の無い姿で。2日前、釈放される途中ですれ違ったのは、金田にとって、久しぶりの再会だった。人格の変貌だとかレベルの高い能力者になったとか、噂でしか耳にしていない鉄雄の現状を確かめるには、余りにも一瞬の邂逅だった。

思えば、あの時に鉄雄と行き会ったことが原因で、拘束期間が延びたのかもしれない。事実、昨日は特にこれといった尋問がなく、ひたすら退屈な時間を過ごしていた。

鉄雄を助け、解放しなければ。そして、自分のチームのもとへ連れ戻し、今までに何があったのか、洗いざらい吐かせなければ。

金田の胸の内に、仲間に対する情が火花を立てて静かに燃えていた。

そんな時、廊下の方から物音が聞こえ、金田は顔を上げて扉を見た。金田にとつて違和感を覚えたのは、女の声が聞こえたからだ。ここは男子の収容棟のはずだし、女の隊員が自分に応対したことは無かった。

金田は、扉に近づき、耳をそばだてた。

「俺？3班の丸亀ってんだ！いやなんでって、マジで君、かわいいからさ……ちよーつと仲良くしてくれりゃあ、ここの暮らしぶりも随分変わるツてモンよ……」

「ホントお!?それマジでサンキューって感じ!こんな陰気なところ早く出て行きたいしィ……あ、んじやあさあ、ここに島鉄雄って人が捕まってるって聞いたんだけど……あ、なんか40?だとか41だとか番号で呼ばれてるとか……」

鉄雄!?

女が鉄雄のことを探っていると分かれると、金田は集中を高めた。

一瞬、鉄雄のことを探ろうとしている女の正体が気になったが、疑問を振り払って、まずは話を聞き続けることにした。

「あー、名前は知らねーんだけどさあ、数字があるってことは、そりゃきつとナンバーズだなあ」

「ナンバーズ?」

「そうそう、犯罪者じゃなくて、実験体として……でも、君、なんでそんなこと知って——」

「ねえねえ、その人、どこにいるかなあ?教えてくれない?」

「えっ、ちよつと待って、さすがにそりゃ機密——」

ダアン、と今まさに耳を押し当てていた扉が衝撃を受け、金田は飛び退いた。

「ねえねえ、教えてくれるならさあ、いろいろお礼、しちやうよ?」

女の声は高めで、幼い印象と色香が同居するものだった。

金田は無意識に唾を飲み込んだ。

「ま、マジでツ!?うわあ金髪碧眼美少女いい匂い……ウン、ナンバーズってのはさア、主にS館サウスに特別収容棟があつてさ、それが13階だか14階だか……だったかなア、まあ俺でも流石にセキュリティ権限

ないんで入れないけど——」

「にやはっ!!丸亀さん!マジでスパダリ!!最ツ高——!!」

じゃあね、クソ野郎」

呻くような音と、乱れた足音の後、けたたましい破裂音と共に、金田の収容室の覗き窓が粉々に砕け散り、ガラスが内側に散乱した。

それから、何か重たい物が床に落ちる音がする。

「結局、男なんて下種ばっかって訳よ……ってヤツバツ!!発砲しちゃったよコイツ!早いとこ逃げて麦野に知らせなきや——」

「おいおいイ!!ちよーつと待ってくれエ!そのアンタア!!」

金田は足元のガラスを器用に避けながら、壊れたガラスの外へ向かって、声の限り叫んだ。

「は?何?急いでんだけど」

声の主は、少し離れた所にいるのか、割れた覗き窓からは姿が見えない。

「あんた、誰だか知らないけど、鉄雄を探してるんだろ?俺の仲間なんだよ、そいつ!」

「ふーん、どうでもいい訳よ、そんなの」

返答は、先ほどまでの猫なで声とは打って変わって冷たい。

それでも、金田は必死に呼びかけた。

「俺の仲間!で、最近どうもアーミーの連中に能力弄られたっぽくって、ここに捕まってる!顔も知ってる!情報が欲しいんだろ!?!なア、俺をこっから出してくれ!」

暫し沈黙があった。

「……能力って、それ、最近の話?」

冷静に問う声が聞こえた。

「この7月からだ!それまではアイツ、無能力者で——」

「ふーん……ちよつと顔、見せて」

つかつかと歩み寄る足音が聞こえ、金田の目には、のぞき窓の向こうに、鮮やかな金髪と濃い青色のベレー帽が乗った頭が見えた。

続いて、甲高いモーターの駆動音と共に、分厚い扉に取り付けられたハンドル部分が裁断されて始めた。火花が散ったので、金田は驚い

た身を引いた。

ハンドル部分が切り取られカランと音を立てて床に落ちると、金田は扉を急いで開け放つ。

廊下に立っていた人物の姿を見て、金田は目を丸くした。

金田は人形に詳しくなかったが、まさにフランス人形という言葉がぴったりな美少女だ。ベレー帽とウェーブがかかった金髪、夏に似合わないブレザーと、集団で踊るアイドルグループの衣装にありそうな、赤色とチェック柄のミニスカートを身に付けている。

薄い碧色をした大きな瞳が、金田の姿を頭からつま先まで眺める。

「……ダツさ」

「開口一番それエ？」

「ええ、超シヨックなんですけど！もし任務が長引いてたら、この私
が、そんなアヒルみたいな囚人服装せられちゃってたなんて！」

「仕方ねーだろ！俺だつて好きでこんな着てる訳じゃ——」

金田が胸に「PPrisoner」と大きく示されている囚人服を摘んでアピールしたその時、ビーツ！とけたたましく警報音が鳴った。

「いや、こんなことしてる場合じゃないんだつた!!」

そう言うと、少女は鼻血を噴いて昏倒している若い男の隊員の顔を迷わず踏みつけながら走り出した。

金田も慌ててその後を追う。

「いい!?アタシは自分のことだけ考えて動くから、アンタは付いてくるんなら死なないこと！結局、自分の身は自分で守れてって訳よ！」

「ちよつと待ってっ！」

金田は息を切らしながら少女の横を併走した。少女は華奢な体格に似合わず、フォームの整った速い走りだった。

「とりま、アンタ、名前は——」

「フレンダー！」

金田へと顔を一顧だにせず、少女は短く答えた。

「役立たずだったらすぐ殺すからね、いい!？」

フレンダーと名乗る少女と金田は、警報音が鳴り響く中を一目散に駆けて行った。

午前9時50分

—— ジャッジメント
風紀委員第一七七支部

「かれこれ1時間以上経ちますわ！本日の警邏任務は全て中止、外出を控えるか支部で屋内待機せよとは一体なんですか？」

「白井さん、5分前もおんなじこと言いましたよね？」

白井黒子が苛立った様子で髪を掻くのを、初春飾利は疲れた顔で皮肉った。

黒子も初春もしばらくこの調子だ。そして、支部内には待機を命じられたジャッジメントの仲間が他にも数多く居て、皆そわそわしながら、何が起きているのかあれこれ憶測を話し合ったり、携帯電話のニュース速報に何か上がってはいないかしきりに指を動かし検索したりしていた。

黒子はきつと目を開き、初春を見つめる。

「初春！これは何かおかしいことが起きていますよ！」

「それもさつき聞きました——」

「いいえ！解決してませんのであなたに愚痴るしかありませんの！木山先生の行方不明の件について報告を上げたら、警備員アンチスキルから割ける人員が無いとは！ただでさえ『帝国』とレベルアップの件で大変なことになってるのに、ただ待たされるだけだなんて、こちらに何か情報の提供があってもよいではありませんか！」

「だから、さつきから言ってるように、私も同感ですってば」

マスク姿の初春は、腫れぼったい目を擦ってぼやいた。

「任務の中断だけでなく、支部からの外出も禁止となると、いい加減ここでデスクワークしてばかりいるのも気が進まないというか——」

「おい！みんな、これ見ろって！」

黒子と初春の、今日何度繰り返したか分からない会話は、突如仲間の誰かの叫びで遮られた。

え？何？とか、ヤバいんじゃないコレ？といった戸惑いの声があちこちから上がり、仲間同士集まって、コンピュータの画面を見入ったり、携帯電話を忙しなく操作し始めたりした。

「一体何が——」

黒子が困惑の声を上げる横で、初春が猛然とキーボード上で指を踊らせている。

「白井さんー！こっ、これ——」

初春が驚きの声を上げて画面を見つめるので、黒子も横に並び立ってそれを見た。

「……う、なんですの、これ……」

黒子も、他の仲間と同じように目を見開き、画面に表示された動画を食い入るように見つめた。

午前9時55分 —— アーミー駐屯地、E館

『となると、その金田って奴の言う事が本当なら、島鉄雄も大したことなさそうね』

「ええと……勝手に引っ張って来た私が言うのもなんだけど、こいつの言うこと、麦野は信じるの？」

離れた所で出入口を見張らせている金田を見やりながら、フレンド||セイヴェルンは声を潜めて通話相手に聞いた。

アーミーの収容棟から逃げ出している途中だというのに、金田は時折大欠伸をしたり、棚に並べられた書類や器具をしげしげと眺めたりしている。フレンドは、ごめんちよつと待って、と断ってから、電話に手を添え、声を潜めながら金田を叱る。

「ねえアンタ、マジメに見張んなさいよー！」

「おいおいイ、早くこんな辛気臭エとこ逃げようぜエ？いつまで長電話してんだよオ」

わざとらしく腕を広げて肩を竦めながら、金田と名乗る囚人服姿の少年が言った。フレンドにとっては口調も仕草も、気に障る所だらけだった。

「うっさい！大事などこなんだからしっかり見張ってて！」

「へえへえ、大体、どうやってケータイ持ち込んだんだか……」

これだから女子は、等とぼやきながら金田が渋々外の様子を伺う。

警報の作動した収容フロアから脱出したフレンドは、強引に付いて

きた金田と共に、監視装置の死角となる薄暗い、人気の無い書庫へと身を潜めている。幸い、この辺りはさして重要でない機材や備品の書庫となっているらしく、アーミーが巡回する人気は無い。

フレンドは気を取り直して電話へ向かった。

「ごめん、ええと——こいつ、緊張感無いし、今んとこそこらに生えてる不良って感じ。情報、確かだと思う？」

『職業訓練校にいたこととかバイクチームのこととか、喋ってる内容は、こちらが得ている島鉄雄についての事前情報と一致するわ』

電話の相手であり、フレンドの仲間である麦野が、落ち着いた口調で言う。

『依頼内容によれば、今回の‘城攻め’における大きな不安定材料は、その島って実験体らしいの。アーミーの研究者連中が、蜘蛛の糸のような金策でどうにかこさえた——アンタが連れてきているバイカーズ仲間の言うことが真なら、そいつは能力を向上させて間もない、素人よ。今まさに世間を賑わせている、レベルアップの中毒者たちと同類ね。しかも、内部情報によれば、今時点では昏睡状態。おまけに、セブンスミストでこの間起こった戦闘の記録を見たって、よく見積もっても、大能力者程度』

麦野が電話の向こうで、ひとつため息をついた。

『でも感謝してるわ、フレンド。何せ今回の標的は、ついこないだまでただのバイカーズだったんだから、情報が少ない。あなたから聞いた話は無駄ではなかったわ。でもね、つまんないけど、今回私たちの出番はなさそうね。惰眠貪ってるガキが起きないんじゃあ』

「ええ。じゃあ、私のギャラはあ？」

『陽動の分だけね。まさか、追加報酬貰えると思ってんじやないでしょうね』

「そんなあ」

麦野の言葉に、フレンドは目に見えて落胆する。

「バカアーミーの気を引いてまで、ナンバーズの居場所を絞り込んだのに。大体あの必要はあったの？人形仕掛けるだけで充分じゃん、研究者の手引きがある訳でしょ？」

『裏切り者から得た情報は、信用ならないの。個人的にね』

麦野がはつきりと言った。

『偽の情報、貰ってこともあり得るじゃない？だからこそ、あなたに余計に働いてもらって、探りを入れさせたのよ。フレンダから聞いたお陰で、ずーっと安心よ。ご苦労だったわ』

「……にしし、ありがとね麦野」

フレンダの顔が自然と緩んだ。

「で、これ聞いたら一旦切るけど——」

フレンダは再び金田の方を見た。

「この付いてきた男、もう用済みかな？」

『たかるハエは叩き潰しなさい』

麦野の声は、台所から返事をしたかのように平然としていた。

「さて」

フレンダは携帯電話をしまうと、代わりにヒートカッターを取り出した。

マイナスドライバーのような形状をしたそれは、先端が鉤のように湾曲し、鋭利に尖っている。見た目の小ささに反して、収容室の金属製の扉も立ち切れるほど、局所的に高熱を発する物だった。

（脱獄犯クンには悪いけど、こめかみをプスつと——）

「オイ、動くなよ」

金田の鋭い声がして、フレンダは動きをぴたりと止めた。

何?! バレた!?

フレンダが動揺して片手にもったカッターをさりげなく背後に隠している、金田は口元に人差し指を当てている。

フレンダの耳に、部屋の外から近付いて来る足音が聞こえて来た。

2人分。アーミーか？

フレンダが柵の陰に身を隠し、金田は出入口のすぐ脇で構えている。

この部屋には扉が無い。出入口に相手が現れば、より早く対応するに限る。

「……その発砲音つてのがこの上のフロアで——」

どちらがそう喋ったのか、男の兵士が2人部屋に入って来たところで、金田が近くにあったモツプの柄を手に、先に入って来た兵士の喉元にフルスイングして叩き付けた。

兵士は涎を吐きながら前のめりに倒れて痙攣する。

「あつ——」

2人目の兵士は呆気を取られているのか、足を止めて倒れた仲間を見下ろす。

「そおれ！」

金田が間髪入れず、モツプを兵士が晒している頭に向かい振り下ろす。

べきいと脆く折れる音がして、兵士が屈みながら後ろによろける。

金田が折れたモツプの柄の断面を見て、あつ、と間の抜けたような声を出す。

ぼけてんじゃないよ！とフレンドは心の奥で悪態をつきながら駆け出した。よろけた兵士が、どうにか氣力を振り絞って、腰から拳銃を取り出しているのが見える。

しかし、それよりも早く、金田が2、3歩で素早く距離を詰め、鋭く側頭部に向けて回し蹴りを食らわせた。兵士は銃を取り落とし、壁に頭を打ち付けてずるずると床に伸びた。

「へえ……」

フレンドは素直に感心した。ただの不良少年というだけではなく、体がよく動くようだった。

「やるじゃん」

「かわいこちゃんから褒められちゃあ悪い気はしねえな。どう？俺、使えるでしょ？」

「そうね」

すぐに始末しなくてもいい位には。とフレンドは内心で付け加えた。味方だと思われている限りは、案外役に立つかもしれない、と考えを改めていた。

金田は、床の拳銃を取り上げてから、気絶している兵士の両脇を

抱えて引きずり出す。

フレンドはその様子を怪訝そうに見る。

「何してんの？」

「こいつから借りる。服」

金田が、兵士を先ほどまで潜んでいた倉庫まで引きずりながら、やや息を切らして言った。

「いかにも逃げてますって、こんなナリじやあ埒が明かねエ」

金田は、早速一方の兵士の装備を剥がしにかかった。フレンドは特に見る気も無いので、背を向けた。

「でき、ちよつと聞いてもいい？」

「何を？」

「ねエ、アンタみたいな嬢ちゃんが、鉄雄に何の用があるのかってさ」「それは——」

今回の任務のターゲットだ、と馬鹿正直に伝える気はフレンドに無かった。

「作戦よ」

作戦？と金田が聞き返した。

「アーミーが、ここんとこ我が物顔で学園都市をうろついてるでしょ？お陰で何人も、アンタや島——てつお、みたいな、私らと同じ若者が、無実の罪で連行されて……」

へえ、と金田が意外そうな目でフレンドを見た。

「反政府ゲリラってヤツ？」

「あんな政治屋こつこと一緒にしないでくれる？」

フレンドは顔をしかめて金田を睨んだ。

確かに、今は合同で動いてはいるらしいが、あの連中は所詮、一回限りの使い捨てだ。

こつちは、今まで何度も死線をくぐっているのだ。フレンドの胸の内には、金田の言葉に対する反感があった。

ふーん、と金田は気の無い返事を返す。

「でもさア、作戦ってことは、ほかにも仲間が居る訳だろ？この後、何か策があんのかよ？」

「そうね」

フレンドは適当に相槌を打ちながら、携帯電話をちらりと見た。

「結局——ちょうどいい時間って訳よ」

フレンドが呟いたまさにその時、建物中の至る箇所爆発が起きた。

午前10時00分 ——アーミー駐屯地、本部、中央館

「41号が——意識を取り戻したと？」

執務室にいる敷島大佐は、部下からの報告に耳を疑い、長大なデスクに両手をつけて身を乗り出した。

「それで、現状は？」

「いえ、ただ、その報告を急ぎ上げたいと、現場のチームから連絡がありました……」

「起きた、の一言だけで済むと思うか！」

大佐は部下に対して詰問する。

「今の精神状態は？また前回のような騒ぎを起こす訳にはいかん！冷静に対処しなければならんのだぞ」

「しかし、詳しい評価は、現場の専門家の判断を待たなくては……」

「この大事な時に！大西ドクタイは何をしているのだ！」

大佐が歯噛みしたその時、ズズウン、と断続的な地響きが聞こえ、執務室が小刻みに揺れた。

その揺れと音に、大佐は心当たりがあった。

「何の爆発か!!」

大佐の言葉から意を察した周囲の部下たちは、状況の確認へ出向こうと駆け出す。

しかし、それよりも前に執務室の扉が慌ただしく開かれた。

「何事だ」

大佐が問いかけた相手は、数日前から派遣されていた、学園都市外の別基地から派遣されてきた中佐だった。骨が浮き出たような顔つきで、小さな目をした男だ。

その中佐が口を開く。

「大佐。担当直入に言う。あなたに逮捕命令が出ている」

「何だと！」

大佐は驚き椅子から立ち上がった。中佐は後ろに手下をぞろぞろと引き連れて、つかつかと大佐のデスクの前まで歩み寄った。一方、部屋を出ようとしていた大佐の部下たちは、皆困惑して大佐の側へ後ずさる。

中佐の手下の一人がタブレットを取り出し、大佐の前に画面を突きつけた。

その画面に目を通した瞬間、大佐は眉間に深く皺を寄せる。

「これは——貴様、陰謀だ！」

「それはこちらの台詞だ。大佐」

中佐は唇の端に笑みを浮かべ、自分よりもずっと背の高い大佐を見上げている。

「クーデターの画策——学園都市内で爪弾きにされているのが余程応えたのでしよな。これは立派な、国家転覆罪にあたる」

「何を言う！私はあと2日でこの座を明け渡す身だぞ！」

大佐は先程まで座っていた革張りの椅子をばんと叩いた。

「そのような根拠がどこにある！」

「無論、あるとも！オイ」

中佐が顎でしゃくると、部下が手に持っていたタブレットをスワイプして、一つの動画を表示する。

そこには、今まさに自分たちがいる執務室の背景——学園都市第二学区の街並みが見える——を背景に、座った大佐が正面を向いて話す様子が映っていた。

『——私は、学園都市の治安維持を任されたアーミーの指揮官として、ここに宣言する。無能や日本政府役人や、ゲリラのネズミたち、統括理事会の狂人どもにこの街を明け渡す訳にはいかない。今こそ、武装決起の時だ。我らアーミーが、反国家主義者並びに日の本に巢食う奸賊ばらを一気に殲滅し……』

「何だこの映像は……」

一気に体温が冷えていく感覚がする中、大佐は声を振り絞った。全

く身に覚えのない演説だった。

「知らん。知らんぞ、私は！」

「言い訳なら、軍事法廷ですることだ、大佐」

中佐がそう言い放った瞬間、部屋中にはつきり聞こえる、館内放送が流れ始めた。

『全隊員に告ぐ。ただいま10:03ヒトマルマルサンをもって、全隊員は武装を解除し、第一演習場に直ちに集合せよ。これは訓練ではない。これは防衛大臣命令である。繰り返し。全隊員に……』

中佐が勝ち誇ったように笑みを深くした。

「分かっていると思うが、これはかの准将閣下もお認めだ。お前は見捨てられたのだ。大佐。何、一足早くお役御免となるだけのことだ」

中佐は周囲の配下に、大佐一行を武装解除して拘束するよう命じる。

それを見た大佐の小数の部下は、腰に手をやる。

「やめろー」

大佐が腕を上げて大声を上げた。抵抗を試みた部下たちが、悲痛な表情で大佐を見る。

「賢明な判断だよ、大佐」

中佐が領きながら言った。

「きつかけさえ与えてくれれば、今ここで制圧してもいいのだが——つまりは、敵対行為に対する正当な対応というヤツだがね」

顔に汗が伝う。大佐は目を瞑り、思考を巡らせた。

中佐率いる相手は20人以上。対してこちらはたった4人。

多勢に無勢だった。

これまでか。大佐の胸に、キヨコ、タカシ、マサル達の顔、アキラの収容カプセル、それらナンバーズの姿が去来する。

今ここで自分が任務を放棄すれば、この国は、この学園都市は、どうなる——。

「……オイ、何だお前」

唐突なざわめきと、中佐の困惑した声に、大佐は顔を上げた。

そして、目を見開いた。

「よお」

患者衣のシャツ姿、小柄な身体に、小馬鹿にしたような笑みを浮かべて、島鉄雄^{41号}が大佐のすぐ傍に立っていた。

「ガキ共はどこだ？」

つい先ほどまで昏睡していたとは思えない程、明瞭な声だった。それは同時に、底知れない冷酷さと愉悦を秘めている。大佐にはそれが感じ取れた。

「41号——」

警戒心を滲ませて大佐が口を開いたが、中佐が部下と共に、鉄雄へと銃を向けた。

「貴様、何者だ——どうやって入って来た!？」

中佐の声は上擦っていた。

ナンバーズ特有の、空間移動だと大佐は悟った。

しかし、この能力は他のナンバーズとの共鳴が無ければ使用できなかった筈。

まさか——と大佐が思い当たったその時、鉄雄は大きく舌打ちをした。

次の瞬間、炸裂音と共に、鮮血や金属片が辺りに飛び散る。大佐は咄嗟にデスクの陰へ身を隠した。

中佐がああああっと叫び声を上げている。構えていた拳銃が暴発したらしい。右手の先は、中側の3本の指が千切れ、どこかしらへ吹き飛んでいる。辛うじて皮一枚で繋がった小指が、ぷらんぷらんと子どもが下りた直後のブランコのように揺れていた。

「そんなに俺を殺したいか？」

鉄雄が笑みを浮かべた。髪が風に舞い上がるかのように逆立っている。

「やってみろよ雑魚どもオ！」

「いかん、撃つなア!!」

大佐は身を潜めながら、できる限りの声で叫んだ。

幾つもの銃声が鳴り響き、その音の雨は程なくして悲鳴の渦へと姿

を変えた。

「……そう、予定変更ね」

とある車中で、助手席に座り携帯電話を耳に当てていた女が呟き、通話を切った。

それから、手を打ち合せ、ぱんぱんと2度鳴らす。

「はい、依頼主からの追加オーダーよ」

「てことはもしや、フレンダには超朗報ですか？」

後部座席に座る2人の内、茶髪のショートカットの少女が身を乗り出して聞く。

その隣で、黒髪のジャージ姿の少女が眠たげな目で助手席の女を見る。

「ええ。きつと喜ぶわ」

助手席の女は、スラリとした脚を組み替え、後ろの仲間2人を振り返って言った。

『『アイテム』の順番よ。ターゲットがお目覚めですって。ナンバーズの41号、島鉄雄』

麦野沈利は快活に言い、ドアの取っ手に手をかけた。

午前10時05分 ——アーミー駐屯地、本部、某所

「41号が覚醒し敵対的だと判明した以上、我々は急ぎ目的を達成しなければならぬ。分かるか？」

「分かる。分かりますとも」

フロアとフロアを繋ぐ冷たい緑を基調とした廊下の一画で、Dr.

大西は目の前の男にへこへこ白髪頭を下げながら相槌を打った。

「ただ、中尉殿。彼は確かに粗削りですが、私が手掛けた最高傑作でして……その、可能な限り傷つけず確保し、研究成果として表舞台に発表できればと——」

「それは我々の知る所ではない」

冷たく男が言い、大西を見下ろしている。男の顔立ちは頭蓋骨に直接皮膚を張り付けたように骨ばっているが、所作や言葉の一つ一つには力強く生気が込められているのがアンバランスだった。そのため、歴戦のベテラン軍人のようにも、若き将校のようにも思える。瞳の色は日本人には珍しい明るいグレーだ。

大西はこの男が何者なのか詳しくは知らない。部下からは中尉と呼ばれている。中尉といっても、大西は少なくともこの駐屯地を出会ったことの無い人物だ。また、彼が今、この軍の本部に侵入している謎の部隊——恐らく、今回の計画を担う暗部の一部隊——を率いるリーダーであるということは分かる。アーミーの兵士と同じく迷彩色の服を上下に身に付けているが、大西が普段から接する一般兵とは異なり、長袖のより肌に密着する物を着ている。それらに加え、明るい黒色の重厚なタクティカルベスト、耳まで覆う硬質な素材でできた軍用メットも、アーミーの兵士とのはっきりした違いだ。彼を含めた謎の兵隊たちがみなそのような格好をしているが、中尉と呼ばれるこの男だけは、なぜか白い幅広の布切れをスカーフの様に首に付けており、他の者と区別する目印になっていた。

「41号と呼ばれるその能力者に関して、我々ではなく、別部隊の管轄だ」

中尉が大西に言うと、傍の部下に顔を向けた。

『アイテム』からの返答は？」

「了承と。案内人の手引きのもと、現在、41号との接触を図るため移動中です」

「せ、接触というのは……」

部下の言葉に不安を感じた大西がおずおずと聞いたが、中尉は相変わらず冷たい視線を向けて来た。

「知りたいか？なら奴らに会って聞いてみるといい。『原子崩し』メルトダウナー率いる連中に、話を通じるとは思えんがな」

メルトダウナー？どうにも不穏さを忍ばせる言葉だ。

今回の計画には、大西だけではないアーミー側の内通者、複数の暗部と呼ばれる闇組織、統括理事会、加えて、本国政府の意向も浅からず関わっていると、大西は耳にしていた。特務警察の男の誘いに乗ってはみたが、いざこうして行動してみると、自分の考えていた以上に事態が大きくなっていて、正直なところ大西は困惑していた。

「とにかく、今お前がやるべきことは、我々を『ベビールーム』まで案内することだ。Dr. 大西」

中尉が、灰色の目で大西を捉えて言う。

聞きたいことはまだ山ほどある。

しかし、自身の正当な評価と名声を得るため、敷島大佐を裏切つても、実験体達（ナンバーズ）をこの貧しい監獄から連れ出し、然るべき研究機関へと移送しなくてはならない。その野心を実行に移すと決めたのだ。

だから大西は、中尉の言葉に黙って頷いた。

「全員、聞け」

中尉へと、兵隊達が一斉に体を向ける。

『中佐』飾り物が死亡したことを受け、只今から部隊の指揮は、自分、ジョージ山田、中尉が執る——正式にな」

兵隊たちから押し殺したような笑いが聞こえる。

「『イプシロン』は司令官敷島の身柄を確保しろ。場合によっては殺しても構わん。『アルファ』は隊を二手分ける。半分は俺と来い、残

りはゲリラのネズミ共を駆除しろ。そろそろ罫をかじりに群がつてる頃だ。『ベータ』は全員俺に続け。目標は変わらず、ラボのS—15Fに位置する『ベビルーム』。最優先の回収対象は25号^{25th}。アーミーの兵隊は大多数が武装を解き、建物外へ誘い出されているが、万一残党に遭遇したならば排除する。ただし、『アイテム』が敗北した場合、先んじて我々が接触した場合は、41号への対応にも当たる。

……『山田班』の名を挙げようじゃないか。杉谷に、この仕事をむざむざ譲つたのを後悔させてやる。行くぞー！

兵隊一同が武器を構え、それからブーツの音を鳴らして移動を開始する。

大西は兵隊に囲まれる形で、遅れをとらないよう、小さな老体を必死に動かし付けて行った。

—— S 館、4 階、電気室

「監視の奴らも慌てて出てったよ」

自分たちの背丈よりも頭3つ分は高い、巨大な直方体の形をした配電盤が多数並べられている埋め込まれている埃臭い部屋で、チヨコが部屋の外の廊下を窺いながら言った。その背には、ケイの背丈ほどもある巨大なバックパックが背負われている。

「島崎、そっちは？」

「もうちよい……よし、これだよ」

配電盤の内の一つの内部機構を操作していた島崎が、手を放し、安堵の表情を浮かべて息をついた。

竜作がその横に駆け寄る。

「おい、やったのか？」

「ああ、これで、この棟一帯の電気制御ロックは無効になった筈だ」

「ほんとに？」

ケイは島崎に訝し気に聞く。

「なんか、もつとこう、照明が落ちるとか、ぶーんて機械の動作が落ち

るみたいなきことが無いの?」

「照明全部落としちまったら大変だろ、ほら、ここ見てみるよ」

島崎に手招きされたケイは、配電盤の表面に取り付けられた液晶の表示について説明を受け始めたが、話の内容が専門的過ぎて何のことやらさっぱり分からない。

「喜んでるとこ悪いがね、もたもたしてるヒマは無いんじゃないのかい?」

チヨコが語りに熱を入れ始めた島崎へ釘を刺した。

「ほら、また聞こえる」

銃声。上階の方からだろうか。バラタタタタ、というそのくぐもった連射音は、不意にケイの脳裏に、電動ミシンを思い起こさせた。昔、兄がゲリラ活動を原因として捕まる前に、小学校の社会科で「昔の生活道具」として体験学習した。前世紀のものだというくすんだ白色のそれは、針が布を打つ度に被服室の机を揺らした。あの銃声は、人の体をあつという間に撃ち抜いている。ミシンと異なるのは、うたれた物はバラバラになり、二度と元には戻らないという事だろう。

この戦いの場に身を投じている以上、自分もその覚悟を持たなければいけない。

「別動隊の奴らが、アーミーの残存兵と戦っているんだ」

竜作が言った。彼によれば、10時きっかりに起こった爆発もそうだという。自分たちゲリラが、首尾よく警備システムに穴を空けるための陽動という事だった。

本当にそうだろうか。ゲートをくぐった時からの胸騒ぎが、ずっとケイの中で続いている。現に、自分たちはこれまで一発の銃弾も放っていない。どこか離れた場所で戦いの火蓋が切って落とされているというのに、どうにも不自然に、自分の周りは静かだ。

「これで、頼まれた分の仕事は終わりだろうか? さっさと次へ行こうじゃないか」

チヨコが言うと、竜作は頷いた。

「ああ、俺たちの宝物を頂くとしよう」

これで政府の砂の城は崩れるぞ。そう笑う竜作の顔を見ると、

ケイは、胸の内の恐れが一層激しく肋骨を引つ搔くのを感じた。なぜか早く鳴り続けるこの鼓動は、きつとこれから待ち受けている物に対する恐れなのだと思った。

—— 中央館、 司令官執務室

敷島大佐は薄く目を開け、デスクの陰に隠した自分の四肢が命じた通りに動くのを確かめた。

同時に、床も天井も全て塗りたくったような強烈な血と火薬の匂いに顔を顰めた。

「いつまで寝てんだよ、山男」

からかい声を聞き、大佐は膝について立ち上がった。

「41号……」

「どうだい、これは」

島鉄雄が両手を広げて笑ってみせた。

「俺がどうしててめえを殺さねえのか、不思議ですって顔だなア？まあいいことを教えてやるよ。1つ、俺は今、久々に気分がいい……頭中でうるせエ声が相変わらずしやがるが、そいつらはもう、俺の言う事を何でも聞くんだけ、力をもっと寄越せつてな。その結果がこれだ。どうだ、強エだろ？」

そこまで語った鉄雄は、伸ばしていた左手の先に、天井から何かが落ちてへばりついたのを見て、顔をしかめる。それは、先ほど鉄雄に向けて銃を放った、中佐かその手下か誰かの中指と人差し指、その付け根の関節部分だった。鉄雄は手を振ってそれを払い落とし、べたついた血をズボンで拭いた。

大佐はほんの一瞬、ちらりと天井を見やる。天井の板張りごとひしゃげて割れた照明に、赤黒く染まった髪の毛一塊がぶら下がっていて、更にそこには歪んで割れた眼鏡が絡みついて、血を滴らせていた。

「……凄まじいな」

「へっ。あともう1つ教えてやろう」

鉄雄は大佐の短い答えに満足なのか、笑ったまま語り続ける。

「俺は別に、お前ら軍人共がどうなるうが知ったこつちやねえ。木山センセとも、まあ約束したしな。俺を殺すつもりなら逆に殺すけどな。それにしてもお前ら——お取込み中だったみたいだな」

鉄雄は周囲に目をやる。3人いた大佐の部下は、放心した表情でへたりこんでいる。意外なことに、飛び散った血をそこかしこに受けながらも、身体の状態は3人とも無事なようだ。

「何が目的だ?」

大佐が聞くと、鉄雄は腹を押さえ、とうとうハハハと声を上げて笑い出した。

「目的だつて? そうだなあ! ……ここ数日、色んなヤツの声がすんだけどさ。その中でも一際俺をしつこく呼んでるヤツがいるのさ。会ってみてエな!」

アキラ。その名を鉄雄が口にした瞬間、大佐は叫んだ。

「やめろ! 41号! アキラには手を出すな! あれは…あれは、お前の手に負えるものではない!」

「んな固エこ言うなよ。呼ばれてるから行くだけの事だぜ? そのためには、お前んとこのガキ共にまず会わなきゃいけない気がする。どうよ? お前、今ヤバえ状況なんだろ? もしも教えてくれりゃあ、助けてやれるぜ! 俺なら」

「何だど?」

「わっかんねーかなア! 仲間割れしてんだろ? ガキ共の居場所を教えてくださいんなら、代わりにお前を追い込んでる兵隊共を潰してやろうつてんの!」

鉄雄が探るような目つきをして、大佐の顔を見つめた。

「さあ、ガキ共はどこにいる?」

大佐は鉄雄と対峙しながら、自分の全身が小刻みに震えていることに気付いた。それは昇進を機に前線から離れて、久方ぶりに感じる、恐怖だった。

「大佐!」

島鉄雄が去って間もなく、大佐の部下の兵士が何人も慌ただしく

入って来た。皆切迫した表情で、何人かは怪我を負っている。彼らは部屋に入るなり、20余名分の身体がそこら中に飛び散っている惨状に顔をしかめたり、顔を背けたりした。

大佐は、デスク上に取り付けられたボタンを押す。しかし、何も働かない。

「……通話システムは、やられているか」

大佐は、元から部屋にいた3名を連れて、ひとまず廊下へ出た。

「謎の勢力が——我々の仲間に紛れていました。我々は、あの緊急放送の後、奇襲を受け、何とかここまで辿り着きました。仲間が大勢やられ、またそれ以上の者が、放送を真に受けて既に任務を放棄してしまっています。外には既に外敵が取り囲み、対して我々は少数……他の支部との連絡も絶たれています。大佐、教えてください。あの放送は……」

部下の一人が、息を切らして言う。

それに対して、大佐は一度目を閉じて俯き、それから顔を上げ、部下たちの顔を見渡した。

「私は、誓ってクーデターなど企ててはいない」

自分へと向けられる視線に相對し、静かに、はっきりと大佐は語った。

「しかし、既に相手の方が数段上手であることは否定できん。私はこれから、敵の目的を挫くため——41号を阻止し、残りのナンバーズを保護するため、できる限りの事を実行する。とはいえ、今私は賊軍だ。これから私について従えば、お前達の命は脅かされるだろう。自分の命、家族の安全、平穏な暮らし……より大切に想う物があるのなら、武器を捨てて演習場へ向かうがいい」

集まった部下たちは、顔を見合わせることもなく、大佐を見つめている。

覚悟を決めた目をしていた。

「……既に大勢の仲間がやられました」

初めに発言した部下が言った。

「大佐を信じ、従います。奴らに一矢報いてやりますよ」

「そうだ、そうだ。と同意する声が多く上がる。」

「……すまぬ」

大佐は俯き、聞こえない位の声で、謝罪の言葉を漏らした。

「大佐。あなたの仰る通り、奴らの目的はベビールームのナンバーズですよ」

掠れた声を出したのは、ナンバーズの研究グループの一員の博士だった。鷲鼻の目立つ顔は煤か何かでひどく汚れていて、こんな時でも愛用のタバコを啜えている。

「私のいたラボの研究室に押し入って来た連中は、ありやあ金をかけてるんでしような、特殊部隊みたいな恰好で、データを一通り盗みやがりましたね。それから私以外の仲間を皆拘束して、すぐ次の目的地へ向かっていきました。私は運よく隠れてやり過ごせましたが、やけに手際がいいと思っただんだ……裏切り者がいたんですよ」

「それは……大西か？」

「……残念ですよ」

大佐の問いに、研究者は一言だけ言うという意味ありげな視線を送り、萎びたタバコに火を点けた。

その仕草を肯定と受け取った大佐は、唇を噛み締めた。誰のものだか分からない血の味がした。

—— 中央館、地上1階

「やっぱり、超血生臭いじゃないですか。ラボの深部ならともかく、ここは入り口ですよ？もう少し上辺だけでも超隠密にやるって聞いてましたが」

絹旗最愛きぬはたさいあいが、銃弾の雨を浴びて右肩口を引き裂かれ横倒しになっているアーミーの兵士を一瞥しながら、顔を顰めて言った。

「も、申し訳ありません——内部の抵抗勢力が予想以上に多く、戦闘が散発的に続いているようです」

絹旗の不満に対して、一行を先導する黒服の男が頭を低くする。

「それはそれは。あなたの元上司は人望が厚かったのね」

麦野沈利が皮肉を込めて言うのと、黒服は一層へこへこする。あまりに卑屈なその態度に、麦野は内心に苛立ちを募らせる。

「これじゃ始末が大変そう。この後、何も知らないアンチスキルが来るんでしよう？ 精々モップがけをがんばりなさいな」

半ば吐き捨てるように麦野は言った。

やはり、裏切り者は好かない——どこかから流れ弾でも飛んできても、このカラス野郎の頭に風穴を空けてしまえばいいのに。

先に建物内部に侵入している別動隊からの出動要請を受け、麦野が率いる暗部組織「アイテム」の一行は、斥候のフレンダを除く3名が、黒服の男の案内のもと、アーミーの駐屯地に聳え立つ建物の正面玄関から堂々と入場した。その際、遠くの訓練場であろう広場の入り口に、大勢の兵士が所在なさに群がっているのが見えた。あれが、策略に乗せられて武装解除したという一般兵だったのだろう。確か、本国政府から派遣された防衛省の役人が、クーデターというシナリオをでっち上げて、集まった兵士を待機させている筈だ。

アーミーのビルは、4階程度の基礎となるフロアと、その上に並び立つ3つのビルから成り、それぞれ本館、S館^南、E館^東と呼ばれている。麦野達が目指すナンバーズの研究施設、通称‘ラボ’があるのは、フレンダからの情報で整合性が取れた通り、S館の中階層にあるという。そこに至るため、一行は本館の広々としたロビーを抜け、南側のビルへと向かっていた。そろそろ、建物と建物の上に整備された、吹き抜けの広々とした中庭に差し掛かる。

ふと麦野は、ここに来てからほとんど口を開いていないもう一人の仲間へ顔を向け、顔を顰める。

「滝壺——たきつぼー！」

「えっ」

鉄火場に似合わない、そこらの高校のグラウンドから来たともいえないようなジャージ姿の少女が、半開きの目を麦野に向ける。

「えっじゃないわよ。靴の裏——」

麦野から指摘された滝壺理后が、片足を上げてシューズの裏側を覗き込み、あー、と声を上げた。

その靴裏は、赤黒く汚れていた。

「血だまりを敢えて踏んずけて来るなんて、任務中の行動としては落第よ」

「……ごめん」

滝壺の背後には、怪談話に現れるような赤い足跡がぺたぺたと通路の床にプリントされている。それを麦野が指差すと、滝壺は項垂れた。

滝壺は黒服に向かって顔を向ける。

「お手洗い、どこ？ 洗いたい」

「はっ？」

呆けたような黒服の反応に、麦野は大きいため息をつく。

「……早く。案内して。絹旗、滝壺に付いてやってくれる？」

「超了解です」

「1分で戻りなさい。何かヘンな事したら、コイツ殺しちやっつていいから」

麦野が発した言葉に、黒服の男は空気が抜けるような返事をし、何事かまくし立てながら滝壺と絹旗を案内して行った。

その場には、麦野一人が残される。日陰から中庭に数歩進み出て、辺りの様子を窺う。陽光に暖められた中庭はサッカー場ハーフコート程の広さがあり、ただっ広い芝生にいくつかベンチが置かれているが、人の気配は無い。先程見かけた戦闘の痕跡を思い出し、狙撃兵が潜んでいたら厄介だと麦野は思った。

夏の盛りの青色が、眩しい日の光によって白く霞む上空がビルによって切り取られて見える。汗臭い兵隊連中にも、昼休みがあるんだろうな。そんな取り留めのない想像をしていると、いつの間にか戻ってきていた絹旗が麦野の袖を引っ張った。

「麦野、アレ」

絹旗が指さしたのは、麦野がちょうど見上げていた上空だ。

手を翳してもう一度目を凝らすと、日の光を背に、鳥が二羽、羽ばたいている。

「あれは、アーミーの……」

ヴィイインという無数の蠅が鳴らすような駆動音を響かせて降りて来たそれは鳥ではなく、人間の乗った機体だった。ホバーバイクにスノーモービルの下半分を合わせたような外見だが、プロペラで浮遊するホバーバイクとは違い、機体の背後からは高熱のジェットが噴き出していて、空気を歪ませている。

「フラインググループプラットフォーム!!」

戻ってきた黒服の男が叫んだ。

「奴らアーミーの残りだ、皆さん、隠れて!」

実際に目にするのは初めてで、やや興味を惹かれてそれを観察していた麦野は、機体の正面から、3連の細長い円筒が向けられていることに気付くと、目を細めた。

「滝壺!死にたくなきゃ退いてなさい!」

「ええ」

絹旗が麦野の横に並び立って拳を握り締めた。

「飛んで火に入る超夏の虫、って奴ですね——」

絹旗がそう言った瞬間、フライングプラットフォームのガトリングガンが重低音を唸らせて火を噴いた。

麦野や絹旗がいる周囲の芝生や石畳に、弾丸の雨霰が叩き付けられ、芥となつて舞い上がる。

アーミーのフライングプラットフォーム2機は、砂ぼこりに塗れた地上の様子を確認しようと、滞空している。

砂ぼこりが晴れると、麦野と絹旗はそれぞれ、先程までと同じように立っていた。

周囲の地面が、銃弾に晒されて無残な状態になっているのに反して、2人とも、全くの無傷だ。

機体に乗ったアーミーの兵士が、何事か叫んでこちらを指差しているのが見える。駆動音にかき消されて言葉は分からないが、ゴーグルを付けた兵士の口が動いている。

麦野は舌打ちした。

「ッるせえ羽虫が……」

「超同意します」

絹旗の声を聞いた麦野は、左の掌を空へと向ける。
次の瞬間、青白い光線が2本、晴れ渡る空へ向かって迸った。

——E館、10階

「ツなんだア!？」

金田は頭を抱え、体を丸めたまま叫んだ。

エレベーターが停止していたため、フレンダと共に階段を駆け上がって来た所、突如付近の中庭に面した窓が轟音と共に割れた。窓の外には、何かSFに出てくるビームのようなものが走った気がする。顔を上げると、外では黒煙が立ち昇っているのが見える。

「どうやら、結局、私たちの勝ちって訳よ」

「か、勝ち?」

「そう!」

フレンダが嬉しそうにはしゃいで言うのを、金田は冷や汗を浮かべて聞いていた。

そんな金田を、フレンダは腹を抱えて笑いながら見下ろす。

「アハハッ!ホラ、いつまで寝てんの?置いてくよ?」

——中庭

墜落して炎を上げている2つの残骸に背を向けると、麦野は大股で歩く。

そして、尻餅をついている黒服の男の襟元を掴み上げた。

「いいか、よく聞け」

ヒツ、と情けない声を男が上げる。

「アタシらはアーミーと戦争しに来たんじゃない。あくまで目的は41番目の実験体だ。ナンバーズこんなところでタダ働きさせんじゃねえ、割に合わねえだろうが!その陰気な脳ミソで理解したか!?!ならさっさと私らをラボまで連れてけこのタマ無し野郎!!」

絹旗が頷き、滝壺が申し訳なさそうに身を縮こませ、黒服の男は何度も小刻みに頷いた。

午前10時15分 ——アーミー駐屯地、本部、S館15階、『ベ
ビルーム』

「ダメだ、警備の大人から何も返事がないよ。どこかに行っちゃった
のかな」

26号^{タカシ}が駆け戻ってきて言った。部屋の封鎖された出入口には通
報ブザーが設置されているが、押ししても押ししても反応が無かった。

「さっきの変な放送のせいだ、多分」

27号^{マサル}が考え込んで言った後、電動車椅子を、多数のコードが繋が
れたベッドへと近づける。

「どう、何が起こってるか見える？」

「こちらに近付いているわ」

ベッドに横たわる25号^{キヨコ}がそう言うのと、タカシとマサルは不安そう
に顔を見合わせた。

マサルは車椅子からキヨコの方へとやや身を乗り出した。

「キヨコ、それは、鉄雄くんのことかい？」

「鉄雄くんも、そう」

キヨコの見開かれた目は、天井の方へ、空へと向けられている。

「でも、鉄雄くんだけじゃない」

「ほかにもいるの？」

タカシが聞いた。

「強い人……強力な、光を集める、操ることのできる人……」

「きつと、外の力を持った人だ」

キヨコの言葉に、マサルはハッと驚いたような顔をした。

「この間、大佐とちよつと話しただろ。大佐はここのとどこか変
だったじゃないか。きつと、敵だよ。僕たちを狙ってきているんだ」

「うわあー!」

タカシが頭を抱えた。

「こわいよお、どうしよう!」

「落ち着いてタカシ！」

マサルはタカシの肩をさすった後、再びキヨコへと顔を向けた。

「キヨコ、鉄雄君は、どうするつもりだと思う？」

「アキラ君よ」

キヨコが言った。その言葉の響きは、どこか夢見心地で、捉えどころがない。

「鉄雄君は、力を……今までよりも大きな力を持って目覚めてしまった。だから、今も大勢の人と戦い、殺している。これから、もつともつと大きな力を求めて、いよいよアキラ君に会いに行くの」

「……僕たちとアキラ君との“つながり”を狙ってるんだ」

マサルが深刻な表情をして言った。

「もしもアキラ君が起きれば、きつとまた大変なことになるよ」

「止めなきや！」

タカシが、キヨコのベッドの柵を掴んで言った。

「鉄雄君を、僕らでやつつけるんだ！」

「でも、敵は鉄雄君だけじゃない。強い人がもう1人、こつちへ来ているんだらう？」

マサルもキヨコの元へ近付いて言った。

「どうする？2人も相手じゃ、僕らが力を合わせたって負けちゃうかも」

「アキラ君が起きるのは、止められない」

キヨコの言葉に、マサルとタカシはじつと耳を傾ける。

「けれども、そこまでの道筋を、私たちは選べる。鉄雄君の力が、よりアキラ君に均しくなるようにすれば……きつと、未来も変わる」

「もしかして、わざとアキラ君に近づけるのかい？」

マサルが聞いた。

「どうやって？」

「力は、力同士ぶつかり合うことで、大きくなる」

キヨコはそう言うのと、骨と皮ばかりにやせ細った片腕を、震わせながら空へと伸ばす。

「あの光を操る人を、鉄雄君にぶつければ、もしかしたら……」

キヨコがそう言って目を閉じると、マサルとタカシは一度顔を見合わせ、それからほぼ2人同時に頷いた。

「分かった」

「やってみよう」

タカシとマサルも、キヨコと同じように手を伸ばし、目を閉じた。

——同館、14階、武器保管棟、開発研究部室

「見つけたぞ!!」

竜作の歓喜の声が予想以上に大きく、ケイ達3人の仲間は辺りを急いで警戒した。

「大声出すなつて竜ウ」

島崎がたしなめたが、竜作は詫びもそこそこに、目の前を指差す。

「こいつだ。アーミーのへそくりだぜ」

竜作はそう言って、目的物が納められたガラスケースに目を凝らす。

出入口を警戒しながら、ケイやチヨコも、竜作が見つけた物を確認する。

ケイにとつて、テーブルの上に置かれたそれは、一見、迫撃砲を二回りぐらい小さくした武器のように見えた。全体が光沢の無い黒色で、望遠鏡に似た砲身は腕一本分程の長さがあり、砲身の下には平たい部品が付いていて、持ち手か台座として使うのだろうかと思えた。砲身の根元のトリガーは小銃の物と似ているが、その上には左右両方に折りたたまれた照準がある。武器の後方の外見が、ケイがこれまで目にしてきたどの銃とも異なる。役割が推測できない複雑な機構がパズルのように組み合わさっていて、おそろく肩にかけることを想定した湾曲面の付近には、電気的な端子が幾つもついている。その内2つの端子には、同じく黒色をしたケーブルが接続されていて、その先は円をいくつか巻いた後に、すぐ近くの携行バッテリーと思わしき部品と繋がっていた。

ケイたちにとつての今回の目的物だった。アーミーの新兵器だと、

ケイは竜作やチヨコから聞かされていた。

「粒機波形射出砲 ver. 0. 71……」

チヨコが兵器の手前に置かれたプレートの内容を読み上げた。

「アーミーが学園都市に寄生している理由だよ、コレが……噂じや、第3位だか4位だかの、高位能力者の研究から得られた産物だと」

チヨコがケイに向かって目配せした。

「第3位なら、ケイ、アンタ知り合いだろ？」

「……御坂さん」

一九学区で訣別した、常盤台の凜とした女学生。ケイは複雑な思いを、ただ一言、名前として呟き、吐き出した。

竜作がレーザー砲をじつと見下ろして口を開く。

「コイツがどれだけ攻撃力をもったヤツかは分からんが……能力者の研究を応用した兵器ってのがもしバレれば、モロに条約違反で、政府は総辞職間違いないナシ、防衛省の連中も首が面白いように飛ぶわけだ。言わば人体実験の産物なんだからな。俺らは無事これを盗み出し、仲間へ引き渡して、世界中の同胞へ、人民の目へ、白日の下へ晒すのさ。学園都市の内輪で盛り上がりつつりやあまだ隠せたかもしれないが、政府お抱えの軍アーミーがこんなモノを生み出してたとなりやあな」

悪は破れたり、と竜作が気取って言い、透明ケースへと手を伸ばす。

「バカ、触れるな！」

島崎が声を潜めて一喝した。

「振動センサーぐらい疑うのが普通だろ！焦るんじゃないやねえ！」

悪イ悪イ、と竜作は両手を上げ、じゃあ頼むよ、と島崎に言った。

「お前は説明書でも無いか探してろ」

島崎は慥然と言いつつと、しゃがみこんでレーザー砲の警備装置の切断に取り掛かる。

「アーミーは近くに居ないみたいだけど、無理やりこじ開けちゃダメ？」

「この部屋に缶詰にされて、最悪ガスを吹き込まれてオダブツになるかもしれないえぜ？ゴールの前こそ、転んだらまずいんだよ」

ケイの疑問に背中で答えた島崎は、作業を続ける。

「確かに、アーミーの兵隊一匹ともかち合っていない。不気味な位だよ」
チヨコが唇を舐めて言うと、竜作は笑みを浮かべた。

「今日はツイてる。前向きにいこうじゃないか」
本当にそうだろうか。このまま、何事もないに越したことはないのだが。

ケイがそわそわしながら辺りを警戒している内に、島崎から安堵の声が聞こえた。

「オーケイ……ぐ開帳といこう」

流石だ、と竜作が満足気に言い、ケースを慎重に取り外す。

「チヨコ、持ってみてくれ」

このメンバーの中で最も銃火器の扱いに慣れたチヨコが、島崎から促されてレーザー砲を両手に持つ。決して小振りとは言えないのだが、まるで赤ちゃんを抱えているみたいだ、とケイは思った。

「フン……バッテリー式ってことは第3位の^{レールガン}応用か？第4位はよく知らないが」

チヨコはレーザー砲を様々な角度から手に取り眺めると、充電はされてるんだらうね、と呟き、傍に置かれた有線バッテリーのベルトを試しに肩に掛ける。

その時、ケイの耳には微かに柔らかく軽い物が弾む音が聞こえる。

警戒を緩めていなかったケイは、その音のした方を見る。

床に、紐のついた円筒形の物が、速度を大分緩やかにしてケイ達の方へと転がっている。

それを見たケイは、背筋が背骨ごと引き剥がれるかと思う程心臓を弾ませた。

「みんな!!」

ケイは人生でこれまでにないほど口を開いて叫んだ。

「伏せ——」

次の瞬間、タイヤがパンクしたような音の圧が口を張り裂かんばかりに襲い、同時に視界全体が眩い白で溢れ返った。

車の後部座席で揺られているような感覚。

耳はキーンという高鳴りが僅かに引き、くぐもった連射音が聞こえる。

目は開けられない。しかし、ケイの体を誰かが強く引っ張り込むのを感じる。

ここにいろ！と聞き取れた。

チヨコおばさんの声だと分かった。大きな手が自分の体を離れる。ダメだ。自分も反撃しなければ。作業着の内に潜ませた拳銃をまさぐる。

安全装置を解除しようと試みるが、頭上を薙ぐ銃声そのまま振動となつて脳を揺さぶっているかのようだ、指が言う事を聞かない。

島崎イ!!と叫ぶ声が聞こえた。竜作だ。

悪い予感が当たったんだ。親指の爪が剥がれかけていて痛い。それでも必死でセーフティレバーを押し下げようとしながら、ケイは不意に涙を零した。なぜ、もつと仲間に訴えなかったのだろう。これは罠で、自分たちはまんまと誘い込まれたのだ。

スタン・グレネードがスモークを撒き散らしたのか、それともまだ目が晴れ切っていないのかのどちらかだが、徐々にケイの視界が全体的に紫がかつたシルエットを捉える位には回復した。ケイは銃を握り締めた右手を伸ばし反らして、作業台の陰からとにかく出入口に向かつて弾倉が空になるまで撃った。

手を一度引っ込めたその時、ケイの横を、掌程の幅でオレンジ色をした閃光が奔った。

驚愕の声、絶叫が聞こえる。チヨコがレーザー砲を放ったのだ。

なんだこれは、水撒きしてんじゃないんだよ！とチヨコが悪態をつくのが聞こえる。それと共に、再び応射が襲ってくる。

おばさん!!

ケイは叫んだ。叫ばないと、チヨコが知らぬ間に殺されてしまうと思つたからだ。

弾の補充に手間取り、数発分落としてしまった。

足音がバタバタと聞こえ、物陰に隠れていたケイは目を見開いた。憎むべき、アーミーの兵士が、唇の端を歪めて立っている。真つ黒

な銃口がこちらに向けられている。

ケイがどうにか足を突っ張ってその場を回避しようとしたその時、別の人影が飛び込んだ。できた。

「うおおおおおっ!!」

その人影は、ケイを狙っていた兵士を思い切り銃床で殴り倒した。

フレンドが制止するのを聞かず、金田は武器庫へと突入していく兵士の背中へと銃を撃った。

武器庫の中から聞こえて来た叫び声は、十学区で共に帝国に対して戦ったケイの声だと金田には分かった。

3人の兵士が膝から崩れ落ちる。

それらを踏み越えて、金田は部屋の中へと駆け入る。

誰かに銃を向けて命を刈り取ろうとしている一名を殴り倒した。

その兵士は近くの作業台の角に頭部をぶつけ、ずるずると床に体を預け、動かなくなった。

金田が左手後方を振り返ると、驚愕の顔をしたケイがいた。

「仲間の仇を!!」

無精ひげを生やした男が怒り狂って銃を向けて来たことで、金田の注意は無理やりそちらへ逸らされた。

「わアア違う違う!!俺アーミーじゃないんだって!!」

金田は必死で弁解し、両手を上げた。自分が、アーミーの兵装を奪って擬態していることを失念していた。

金田君!!と叫びケイが駆け寄って来る。

「待って、竜!!この人は敵じゃない!!」

「馬鹿言え!!」

竜作は半狂乱で叫んでいる。

「ならばなぜ奴らの恰好を!?!」

「分捕ったんだよこれエ!!」

金田は変装に用いようと身に付けた軍服を指で摘んで見せた。

「俺はアーミーに捕まって押し込められてたんだ、元々!アンタら、他にも作戦仲間が居るんだろ!助けてもらったし、案内してもらったん

だよオここまでエ！」

「竜、こいつはあたしも知ってるヤツだ」

レーザー砲を担いだチヨコが、竜作の構えている銃に手をかけ下ろさせて言った。

「何でこんなところにいるんだかは知らないが、ウチの店を帝国のガキ共が襲ってきたとき、この坊主は守ってくれたんだ、信用できる」

ケイの顔がほんの少し、安心したように緩んだ。

チヨコの逞しい体に、目立った負傷は無いように見える。

竜作は息を切らし、自分の背後の床を振り返った。

そこには、腰から背中を多数の銃弾で抉られた島崎が、血だまりをつくって蹲り、事切れていた。

「島崎さん……」

ケイが息を呑み、竜作は島崎と金田を交互に見た。

「スパイかもしれない……」

竜作が汗を滴らせた顔を金田に向けて言った。

「おい小僧。その仲間とは誰だ？」

「ああ、そこにいるぜ。オーイ!!」

金田は出入口に向かって叫んだ。

返事はない。襲って来た兵士たちの死体が転がっているだけだ。

竜作が眉間の皺を深くする。

「……なんだと？」

「い、イヤ、ホントなんだって……さっきまでそこにいたのに……」

疑いの目つきを鋭くする竜作に対し、金田は困惑の声を返す。

チヨコとケイは顔を見合わせた。

「おいイ!!フレンドアー!どこだア?」

金田が名を呼んだが、やはり返事は無かった。

金田が呼ぶのを知らず、フレンドは一目散に駆けていた。

金田がゲリラと顔見知りだとは予想外だった。武器庫は確かゲリラが目的地としていた所だ。そこを通りがかかることになったのがま
ずかった。

フレンダたち「アイテム」には、今回の作戦において、ゲリラは学園都市内の左派不穏分子諸共、抹殺される対象だと知らされていた。ただし、それは別動隊の役目であり、自分には関係ない。火の粉が降りかかる前に判断を決し、こうして本当の仲間との合流を目指していることは正解だと、フレンダは自信をもって行動していた。

目的地は間もなくだ。フレンダは携帯電話を取り出し、リーダーへ連絡を試みる。

「……う・アレ、麦野？」

何度掛け直しても、リーダーからの応答は無かった。

——同館、階段室

「あの一、麦野？聞いてます？」

絹旗最愛は急いで小さな体を動かし、階段を駆け上がると、麦野に追いついて横から声をかけた。

電気系統が切断されているせいで、エレベーターは使えず、絹旗たちは階段を使い、かれこれ1階から何層もフロアを上に移動してきた。格闘の心得がある絹旗にとっては問題でない。問題なのは、麦野が一心不乱に、黙々と上へ上へと昇り続けていることだ。

「いや、何かしら、超返事してくださいよ！」

絹旗は、自分よりも頭2つ分程は背の高い麦野を見上げながら呼びかけ続ける。

大人びた端正な麦野沈利の横顔は、まっすぐ前方、正確には階段を昇った先へと向いたままで、一向に返答はない。

「あの黒服、麦野がおかしいのを見越して、超とんずらしましたよ！事前情報は疑わしいって麦野も言ってたじゃないですか！どんどん進んでいきますけど、目的地のラボはほんとにこっちで合ってるんですか？」

「こっちだよ」

麦野が唐突に返事をしたので、絹旗は逆に肩をびくつと震わせた。

「このまま、上へ」

「……むぎの?」

絹旗は、今度は静かに、恐る恐るリーダーの名前を呼ぶ。

麦野の声はまるで氷のようだ。絹旗にとってそれは、生氣を感じさせない。

明らかに様子がおかしい。不安を覚えた絹旗は後ろを振り返り、更に目を見開いた。

「……滝壺!」

もう1人の仲間、滝壺理后が、踊り場で手摺と膝にそれぞれ手をつき、喘いでいる。

麦野に呼び掛けることに気を取られ過ぎていた。その事を悔やみ、絹旗は急いで階段を駆け下りた。

滝壺の顔には汗が吹き出ている。息をぜえぜえとついているその様子から、絹旗は一瞬、立て続けの上り階段に疲れたのかと思ったが、すぐさまもう一つの懸念が頭をよぎった。

「ねえ、もしかして滝壺……誰か追跡してる?」

滝壺は絹旗の問い掛けに、目を閉じたまま、ふるふると首を振った。

滝壺が否定したのはその通りだ、と絹旗は思った。滝壺のもつ「AIMストーカー能力追跡」の力は、たいしやう体晶を服用しなければ発動できない筈だ。体晶は、滝壺の能力を十二分に引き出すが、彼女の身体に掛ける負担も大きい。故に、服用するタイミングは見極めなければならない。ターゲットたる島鉄雄に会敵していない以上、麦野が滝壺へ体晶を渡したとは考えられなかった。

滝壺が何か口を動かすのを見て、絹旗はより顔を近付ける。

「……え?何て?」

「勝手に……感じる」

滝壺が、息を切らしながら言葉を紡ぐ。

「麦野の、AIM拡散力場に……誰か、干渉してる……誰?どこ?わ、分からない。知らない、パターンが混じってて、か、解析が難しい……」

絹旗は更に混乱した。

滝壺の言葉が嘘でないなら、勝手に能力が発動しているだけだな

く、麦野は誰かしらの別能力者に操られているということになる。

精神系？いや、単純にそうとも言い切れない。滝壺が察知しているということは、極端な話、滝壺と同系統の能力者がこの建物にいる可能性がある。

絹旗は滝壺を背負った。麦野程ではないものの、自分よりもずっと体の大きい滝壺を運ぶ。しかし、自身が持つ能力故に、絹旗には苦ではない。上を見上げると、麦野は既に次の踊り場を通り過ぎて、靴音を響かせている。まだ昇る気だ。

麦野の様子がおかしいのはもう確定的だった。「アイテム」の戦力的な核たる滝壺に目もくれずに一人突き進むのは、普段の麦野からしてあり得ない。麦野一人の強さの問題ではなく、滝壺に何かあったら最後、アイテムわたしたちの存在価値は大暴落してしまうのだから。

滝壺の身体のことを考慮するなら、今すぐ体晶を服用させるのが応急手段だが、唯一体晶を管理している麦野は、先程から話が通じない。かといって、リーダーの許可なく勝手に戦線を離脱する訳にもいかない。

ここは敵地。島鉄雄だけでなく、アーミーの残党にも遭遇するかもしれない。そのことを考えると、絹旗一人で滝壺を運ぶのは、万が一の時には不利に思えた。

絹旗は麦野に追いつこうと足を早めながら、片手で携帯電話を取り出した。

ここで頼るとしたら、あと一人いる仲間だ。

「……フレンダ、今どこですか？」

『もしも？絹旗あ？もお心配したよ！麦野にかけてもぜえくんぜん出ないんだもん！』

いつも通りの調子の良い声に、絹旗は若干安堵する。

「いいから、超聞いてください。なるべく早く合流します。滝壺が危ないです」

『えっ』

滝壺の名を出したことで、事態の深刻さを察したのか、フレンダの声の調子が変わる。

『分かったよ——こっちは今、S館の——』

絹旗はフレンドの応答を、途中から聞き逃した。

麦野が、階段を昇った先の扉の前で立ち止まっていたからだ。

絹旗は滝壺を背負いながら、急いでその横まで駆け上がる。

「麦野！話を——」

「ハハ」

相変わらず冷え冷えとした麦野の声が、階段室に響いた。

「ハハハハ……」

絹旗は扉を見る。

金属製の頑丈そうな両開き扉の表面には、無骨なゴシック体で、「S—15F」と記されている。

取っ手に加えて鍵穴と一体化した端末が付いている。暗証番号を入力して開くようだ。

その機械端末には目もくれず、麦野は掌を前にかざした。

「ちよ、麦野——」

慌てて絹旗は後ずさった。

麦野が急に発した電子線が、彼女の今の声色を象徴するかのような温かみの無い白い光の塊となり、それは眼前の扉を溶かしていく。

『ねえ、絹旗あ!?聞いてるう!?』

通話中のままの携帯電話から、フレンドの声が聞こえるが、絹旗は返事をしない。

淀みなく出口を開いていく麦野の姿を黙って見つめていた。

背中に背負った滝壺の手が、絹旗の胸元を掴み、ベストの布地を握り締める。その手がガタガタと震える。

「この先」

麦野が、開かれた扉の先を瞬きせずに見つめ、そう言った。

血の匂いだ。絹旗は直感的に悟った。

午前10時30分 ——アーミー駐屯地、本部、S館15階

「いつまで手間取っている!」

「も、申し訳ない、解除コードが、変更されている」

怒鳴りつける山田中尉の前に、Dr. 大西は顔を引き攣らせて、しどろもどろになりながら答えた。

「恐らく、誰か私の同僚の仕業だ——け、警備の兵士なら知っているかも……」

「ああ、全く持って素晴らしいアイデアだな」

山田中尉は歯ぎしりして素早く銃を取り出し、大西の眉間に突きつけた。

「死体の口をどうやって割らせるつもりだ!? イタコでも呼びつけるか? お前も、そいつらと一緒にになりたいか? このベビールームに侵入できてこそ、お前をここまで連れて来た価値があったというものだ。これ以上我々を待たせるな!」

「そ、そんな無茶な……」

大西は息を呑んで、ちらりと自らの後方を見た。

ベビールームの出入口を警備していたアーミーの兵士たちは、武装解除を命じる欺瞞の放送を受けても、任務を放棄しなかったらしい。先ほど、山田中尉の部隊と接触し、投降を拒否した結果、全員物言わぬ軀むくろとなり、壁際へ雑に押し込められていた。

ベビールームの入口まで来て、大西たちは嚴重に封鎖された扉を開放できずにいた。電気系統に干渉してセキュリティの弱体化を試みる別働隊がいるはずだったが、このラボの最重要区画の警備システムは独立したものだ。正統なコード入力無しには、外部から侵入するのは容易ではなかった。

「ちゅ、中尉!」

部下の一人が焦った声を出す。

「アイツは――」

山田中尉以下、潜入部隊の兵士たちと大西が、そちらを見た。

「41号……」

大西は息を呑んだ。

先ほど大西たちが来た通路に、島鉄雄が立っていた。患者衣は至る所が破れ、返り血で染まっている。こちらへ歩いてくる度に、裸足がひたりひたりと微かな音を立てる。

その表情は、愉悦に染まっていた。

『アイテム』は仕損じたかッ……!」

山田中尉は呟くと、ガスマスクを取り出し素早く顔に装着した。

「催吐剤！演算を封じたら、怯んだ隙に集中して撃て」

「ま、待ってくれ！どうするつもりだ!」

指示を受けた兵士たちが一斉にガスマスクを装着するのを見て、大西は慌てた。

「ゲロで喉を詰まらせたくなければ、早く扉を開けろ!」

白色のタツカーのようなものを右前腕に固定しながら、山田中尉は大西を一喝した。

大西は後ずさり、鉄雄の方を見る。

鉄雄は立ち止まり、興味深そうにこちらを見ている。

「へえ」

鉄雄が口を開いた。

「どんな手品だよ？やってみろよ」

「……やれ!」

山田中尉の合図で、兵士の一人がガス弾を放つ。

それはおもちゃの花火のように緩い速度で廊下を跳ね回り、灰褐色の煙を立ち込めさせた。

大西は恐怖で壁に手をつき、息を荒くする。

鉄雄の姿は完全に見えなくなった。

「撃て!」

そこへ一斉射撃が行われ、大西は轟音に耳も目も塞いだ。

すると、大西の顔のすぐ傍を何かが空を切って掠める。

やめろ！不味い！と部隊が慌てる声が聞こえ、大西はゆっくりと目を開けた。

何人かの部隊員が、血を流して蹲ったり、或いは倒れたりして、動かなくなっている。

跳弾か？と警戒する声を誰かが上げたが、違う、と大西は直感した。

「銃は——ムダだ」

大西は悟ったように言った。

それを聞いた山田中尉が、ガスマスクの顔を一瞬だけこちらに向けた。

「もう、41号は、君らの手に負えない……」

空気の流れが突然生まれ、大西の目の前で、ガスが晴れていく。

廊下を照らす照明が何度か小刻みに明滅し、再び点灯した時、鉄雄が無傷で立っているのを目の当たりにした。

「……BC拡散弾！」

山田中尉が焦りを無理やり押さえつけて声を上げ、右手に装着した武器から、タイヤに空気を充填するようなパシュツという音と共に、何かを鉄雄に向けて発射する。生き残った部下も追隨する。

その微細なカプセル様の弾丸は、10cmほどの距離を空けて、鉄雄の目の前で突然勢いを失い、全て静止する。

「つまねェよ」

鉄雄が蠅でも振り払うような動作をすると、弾丸が向きを変える。

危険を察知し、大西は身体を丸めて扉の横で蹲る。

そこへ、肩に差すような痛みを感じた。

大西がそこを見ると、山田中尉たちが放った特殊な弾丸の内の一つが、自らの白衣を貫いて刺さり、小さな赤い染みを作る所だった。

「あ、ア……」

がたがたと大西は体を震わせた。あまりの恐怖に、息が詰まる。

息ができない。大西は自らの首を掻き切り、身悶えした。

目から涙が溢れた。滲んだ視界の中で、山田中尉が前のめりに倒れる。

少しでも空気を吸いたくて、大西は体を仰向けに返した。島鉄雄が扉の前に立っている。

自分の研究の、これまでにない最大の成果——。

大西は喉に食い込ませていた片手を、鉄雄に向けて伸ばした。

それから間もなく、滲んでいた視界が急激に色を失い、暗転していく。大西は自分の体が浮き上がるような落ちていくような、形容し難い感覚に吞まれていった。

自分を止めようとした部隊の面々が悉く倒れたのを後目に、島鉄雄は「A—ROOM」と銘打たれた扉の前に立った。

この先に、子どものような老人のような風貌をした、3人の実験体ナンバーズがいる。

ここを前に訪れたのは、1週間？いや、2週間ほど前だったか。

思い入れは無いはずなのに、鉄雄は自分が奇妙な懐かしさを覚えていることを自覚し、舌打ちした。

とにかく、自分はあのナンバーズに会う。そして、「アキラ」の居場所を聞き出す。

扉を破壊しようと、手を翳し、力を集中しようとしたその時だった。

後方から足音が聞こえ、鉄雄は振り返った。

「……誰だ、てめエ」

アーミーの兵士でも、敵対部隊でもない。

立っていたのは、1人の女だった。およそ戦場に似つかわしくない薄紫のワンピースを身に付け、すらりと背が高く、赤みがかった茶髪を腰近くまで伸ばしている。

女は鉄雄の問いに反応せず、じっと見つめ返している。

「誰だって聞いてんだよ」

再度鉄雄が問うと、女は返事をする代わりに、すつと左手を胸の高さまで上げ、掌を上に向けた。

「……？」

鉄雄が首を傾げた。

女の掌に、光球が現れる。

そして女が、腕を鉄雄に向けて伸ばす。

次の瞬間、目の前が青白い光で覆われ、鉄雄は顔を咄嗟に覆った。辺りに爆音が響き渡り、ベビールームの扉は吹き飛び、開かれた。

同階 ——

「本隊！本隊！こちらグイプシロン！」

一人の男が、無線を相手に必死に声を上げる。

「^{ターゲット}敷島率いる部隊と交戦中！予想以上に相手の数が多く、形成は不利です……至急応援を——！中尉!? 応答を——」

「挟撃だ！」

敷島大佐は自らも曲がり角から銃を撃ちながら指示を出す。

「私の合図で制圧しろ！3、2、1——」

一際銃声の嵐が勢いを増し、そして唐突に止んだ。

「大佐、こいつら、我々の装備じゃないです……海外からの流れ者か、或いは学園都市の使い走りか」

部下が、事切れた相手の兵士の体を検分して言うと、大佐は眉間に皺を寄せた。

「政府の不穏分子と結託した、統括理事会の手の者か」

以前、ターミナルゲートで受け取った警告めいたメッセージが、大佐の脳裏に蘇った。

思い返せば、前兆はあったのだ。ここまで事態が切迫するのを止められなかったことに、大佐は自責の念を禁じ得ず、頭を振った。

「……負傷者はこれ以上追隨しても、足手まといにしかならん。ならば、生きろ。演習場まで出れば、或いは命だけは助かるやもしれん。私と共に来るならば、死ぬ覚悟を持って来い」

顔を上げた大佐に、部下たちが黙って頷く。

「目的地は、もうすぐだ」

大佐は廊下の先を見つめた。

15階まで来た。「ベビールーム」は、この階層の反対側だ。

「今、何て？」

ケイは横を歩くチヨコに聞き返した。

「アイツらは、アーミーじゃない」

チヨコが、自身の半身ほどもある丈の軽機関銃を手にしながら、険しい顔で答えた。

先ほど武器庫で得たレーザー銃は、これもまた大きなバックパックに収めている。ジツパーの端の隙間から伸びた配線は、袈裟懸けに運ぶバッテリーに繋がっている。それらを合わせれば相当な重さになるはずだが、チヨコの身のこなしは軽い。

「奴らの銃さ……アーミーの支給品なら、あれは東京の企業が作つてるものだけど、アイツらのは違った。明らかに海外のを元手に作り変えたヤツだ」

「それってまさか……」

ケイは睡をぐくりと呑んだ。

「……私たちの他に潜り込んでる、暗部の奴らが？」

「計画決行日を変えたり、いやに前半は静かだったり、おかしいことが多かった」

チヨコが声を潜めて言った。

「アタシらは……嵌められたのかもしれない」

この計画を実行に移した当初から、ケイの胸の内に引っかかっていた嫌な予感。

それが現実のものになりつつある。

それも、アーミーとの単純な戦いに収まらない、もっと悪い状況として。

ケイは顔を曇らせ、先を行くりーダーの背中を見つめた。

「この事、竜には？」

「言ったさ」

チヨコがケイに答え、それから首を振った。

「だが、ダメだ。アイツは聞く耳を持たない。島崎をやられて、冷静さを失ってる……」

「ああ、まだ手が痛エゼ。ツクシヨウ……なあみんな！」

2人の深刻な会話を遮ったのは、どこか能天気な金田の声だった。慣れない発砲をした後、アドレナリンが引いたのか、利き手をしきりにひらひら振っている。

「ここは14階だろ？みんなは、これからどこへ？」

「金田君……」

自分たちの懸念とはかけ離れた様子の金田に対し、ケイはため息をつく。

チヨコと竜作も一度立ち止まり、振り返った。

「俺たちは——」

「脱出。そうだろ？竜」

竜作の言葉を遮るように、チヨコが決然と言った。

「狙いのブツは手に入れた……島崎の分も、アタシらはこれを無事に外へ運び出さなきゃならないだろ？」

「……ああ」

竜作がチヨコのバックパックをちらりと見て、それから唇を噛み締めて言った。

「ああ、そうだ。分かってる、分かってるさ」

「そうか。俺は、上に上がるぜ」

金田の言葉に、ケイは驚いて振り返る。

「そんな！どうして!？」

「フレンドアが言ってた。鉄雄は多分、この上の階だ」

金田が真剣な表情をして言った。

「俺の仲間だ。助けてやんねえと！そのために逃げて来たんだ」

「無茶言わないで。あなた一人で何が出来るっていうの？周りはどこに敵がいるのか分からないのに……」

ケイが引き留めようとしたが、金田は拳を握り締め、首を振った。「俺は行くぜ！アイツ、以前すれ違ったときは、包帯巻かれてベッドに寝かされてた……アーミーの奴らに、これ以上好き勝手はさせねえぞ！」

「まあ待て金田。ケイの言う通りだ」

チヨコも金田を制止する。

「寝てる友達を見つけたとして、それからどうする？お前ひとりで背負ってく気か？このビルを1階まで？」

「……アンタらゲリラは、行つたつていいさ」

金田が静かに言った。

「俺一人だつてやる。これは俺の問題だ」

「どうやら、そいつの言う通りになりそうだぞ」

進路の先を窺っていた竜作が言った。

「見ろ。下りは塞がれてやがる」

4人は階段の手前まで来た。しかし、下りの入り口は、非常シャッターが下りて閉ざされている。

「セキュリティは動かなくしたはず……！」

「ここらの階層は恐らく独立系統だ。なんとつて、ナンバース実験体様のホテルだからな」

顔を歪ませるケイに対して竜作が言い、それから別方向を向いた。

「……まるで誘われてるみたいだ」

竜作が見上げた方向は、1つ上の階へと通じる上り階段だった。そこは開放されている。

「いいじゃねえか。アーミーの奴らに鉢合わせたら、あの世へ漏れなく送つてやる」

辺りを警戒しながら、4人は15階の廊下へと足を踏み入れた。

「この階は……」

正面の窓から差し込む陽の光に目を細めながらケイが呟いた。

「ああ」

金田が左右に続く廊下を見回しながら言った。

「フレンドの言う事が本当なら、ここに例の——」

「止まれ!!」

突然かけられた大声に、ケイも金田も肩を震わせた。

チヨコと竜作は素早く反応し、ケイと金田を元の階段の方へ押し込み、それから武器を構える。

「両手を頭の——武器を持っているぞ!」

相手の声の緊張感が一気に高まった。

20メートルは離れているだろうか。緩やかにカーブを描きながら長く続く廊下の一方の先に、兵士の姿が見える。

「チツ……クーデターを仕損じた負け犬どもがまだ居たぜ」

竜作が勝気に笑みを浮かべて言った。

「ああ、だが向こうの方が、数が多い——」

チヨコが言ったその時、金田が不用心にも前へ進み出た。

ケイが驚いて手を伸ばす。

「ちよつと、金田君——」

「オーイ!撃つなア!俺ア仲間だ!」

金田が出た予想外の行動に、ケイ達は目を丸くする。

それは、対峙している兵士たちも同様だった。

「アンタらは別の道を探せ。俺が時間を稼ぐ」

アーミーの兵装を身に付けた金田が、ケイ達へ早口に囁いた。

ケイは目を瞬かせた。竜作とチヨコは顔を見合わせる。

金田は、再び前を向いて大きく口を開けた。

「助けてくれよオー!こいつらに捕まっついて……」

「ほう」

低い声を聞いた金田は、体を硬直させる。

兵士たちの背後から、大きな体軀が姿を現したからだ。

「それはそれは……どうやって着替えたのかは知らんが」

金田には見覚えがある。これまで何度も対峙した、威圧感を四方に飛ばす、見上げるような大男。確か、大佐と呼ばれていたか。

「収容棟で大人しくしているかと思えば、やはり間者だったか、貴様……」

顔を憤怒に歪めた大佐を見て、金田の生存本能が、自身の主へ急激な危機感を告げる。

次の瞬間、金田は踵を返して駆け出していた。

「逃げるオ!!」

「嘘でしょオ!?!」

金田の行動の移り変わりっぷりに、ケイも思わず甲高い声を上げる。

「あのデカブツ、捕まったんじゃないのかよオ!!」

金田が走る横を、いくつもの銃弾が高い音を奏でて空を切り、突風のように追い越していく。

「逃がすな!!」

大佐が櫓を飛ばし、部下たちが一斉に金田達へ向かって射撃する。階段正面の窓が粉々に砕け、陽の光によって晴天のスキー場のように煌めいた。

「ここはダメだ!」

チヨコがケイと竜作に言った。

「別の道を——」

しかし、竜作は手榴弾を取り出し、ピンを口に咥えた。

「竜ウ!!」

ケイとチヨコが叫んだ。

「何を——」

竜は応える代わりに、ピンを抜いた手榴弾を、大佐達へ向かって投げ付けた。

数十の風船を一斉に割ったようなけたたましい音が響き、硝薬の匂いを漂わせて煙が立ち込めた。

「チヨコ! ケイ!」

竜作が銃を構えて叫んだ。

「宝を離すな、先に行け! 俺はアイツを殺す!」

「馬鹿言わないで!」

ケイも負けじと叫んだ。

あの人数相手では、どうやっても勝ち目はない。

「島崎の仇を、討つ！思い知らせてやる！」

言うが早いか、竜作は銃を煙の向こうへと立て続けに発砲し始めた。

「竜ウ!!」

「聞こえねえよ……今の内だ！行こうぜ！」

竜作の銃声が響き渡る中、金田がケイの袖を強引に引っ張り、反対側の廊下へと連れ出した。

「おい、そっちは——クソツ!!」

チヨコはケイと金田が向かった先を苦々しく見た。それから、一瞬だけ竜作を振り返った。

「……死ぬんじゃないよ！」

チヨコは、ケイを守るべく、竜作に背を向けて駆け出した。

「……死体はありません。窓から落ちたのでしょうか……」

数十秒の打ち合いが忽然と止み、階段の手前を警戒しながら、アミーの兵士の一人が言った。

「男一人に構うな」

大佐が言った。その体に新たな傷は無い。

「それより、残りの連中が向かった先だ……急ぐぞ！」

大佐の目は、「ベビールーム」へと続く廊下へと向いていた。

——ベビールーム

そこは、無機質なこれまでの内装とは打って変わって、公園を思わせる、開放的な空間だった。

それでも、なぜか床や壁面、遊具、至る所に転がった玩具に至るまで、青みがかった配色が多く、絹旗はどこか冷たさを感じた。

「た、滝壺っ」

後ろから付いてきたフレンドが、肩を貸していた滝壺をひとまず床に座らせ、休ませようとしていた。

それを見た絹旗は唇を噛み、リーダーの元へと駆け寄った。

「麦野っ！」

何者かに操られているかのような様子の麦野は、ここでも部屋の真ん中に立ち、絹旗の音がまるで聞こえていないかのようだ。それでも絹旗は呼びかけた。

「もう、いいんじゃないですか!?あの鉄雄って奴は超藻屑ですよ!麦野の攻撃を真正面から受けて、生きてるはずががががが! 滝壺のためにも、ここで一度退却を——」

麦野が何事か口を動かした。

「えっ?」

絹旗が聞き返すと、麦野はすつと左手を上げ、何かを指差した。
「鉄雄君」
てつおくん

麦野の冷たい声が、今度ははっきりと聞こえた。

島鉄雄が、そこにいた。

1階層分に留まらない、高さのある空間。その空中から、いつの間にか姿を現し、ゆっくりと降りてくる。

「嘘ッ！」

フレンドが息を呑んだ。

「麦野の原子崩しマルチダウンをまともに食らったのに!」

その驚きは、絹旗も同じだった。

絹旗は警戒心を一層高めた。

こいつは、並の念動能力者テレキネシストでもないし、簡単な標的ターゲットでもない——

鉄雄の裸足が、ひたりと床に降り立った。

「……どういふつもりだ、お前」

鉄雄がじつと麦野を睨みつける。

その広い額には、血が幾筋か流れているが、気にする素振りはない。「なぜ、俺の名前を知っている。いや……なんだ、あの光は。お陰で死ぬかと思っただけ……どこの能力者だてめえ」

麦野は黙ったまま、再び左手に光球を灯した。

それを見た鉄雄がぎりりと歯を食い縛って身構える。

麦野の手から、青白い電子線が鉄雄に向かって放たれた。

それは、鉄雄の眼前へと真つ直ぐ飛び、そして——弾かれた。まるで、見えない風防があるかのように、電子線は鉄雄の目前で湾曲し、背後へ逸らされている。それに伴って、鉄雄の背後の床や壁に亀裂が走る。

絹旗は驚愕して思わず身を引いた。麦野の光線の軌道を逸らす相手など、これまでに見たことが無かった。

それに、先ほど部屋の入口で先制攻撃を仕掛けた時は、確かに鉄雄に防がれることは無かった筈だ。

鉄雄は焦りの表情をやがて変えた。笑みを浮かべて、麦野をまつすぐ見つめ返している。

次の瞬間、鉄雄は宙へ高く跳び上がった。

麦野は表情を変えず、立て続けに光線を放つ。

その全てが狂いなく鉄雄を捉えているが、麦野を見据えた鉄雄の前に、やはり同じように弾かれている。

鉄雄は麦野のすぐ背後に降り立った。

思わず絹旗が声を上げる。

「むぎ——」

「お前、強いんだな」

絹旗が危機感を感じて行動を起こす前に、鉄雄の眩きが聞こえた。

次の瞬間、麦野の体が横つ飛びに吹き飛び、壁を砕いてめり込む程に打ち付けられた。

フレンドの悲鳴が響く。絹旗と滝壺は、麦野の体が磔のようになってだらんと力を失っているのを目の当たりにした。

「お陰で楽しくって仕方ねエゼ！ありがとよ——ハッ！ハッ！ハハー——」

鉄雄が歓喜し、笑い声が木霊した。

XX・ナンバーズ

100

アーミー本部、駐屯地正門前

「ここに至って何怖がってるんですか。もう着きましたよ、鉄装先生」
アンチスキルの警邏車両の運転席に座る潮騒は、車を停めてシートベルトを外し、助手席にいる同僚へと声をかけた。

「で、でも、潮騒先生」

冷や汗で鼻の頭までずり落ちていた眼鏡を直しながら、鉄装綴里は不安げに言った。

「相手はその辺の不良でも強盗犯でもなく……軍アーミーですよ？ 私たちよりもよっぽど、戦闘のプロの人達でしょう？」

「そうは言っても、他の駐屯地はどこも武装解除したじゃないですか」
潮騒は困ったようにこめかみの辺りを掻いた。

「こちらが未然にあの大佐の企みを察知したお陰で、あちらの指揮系統はのっけからズタズタ。どこの基地も狐につままれたような状態だったって話です。この本部だって、大多数の兵士は素直に外へ出て来ていて、武装蜂起しているのは大佐以下直属の僅かな人数らしいですし、それも先遣隊が制圧しかけてるんですから。我々はあくまでも周辺の警備です。平気ですって」

潮騒は何とか安心させようとする。しかし鉄装は、大丈夫かなあ、などとしきりに零しながら、薄桃色のハンカチで汗を拭いている。

教職に採用されたての鉄装の横顔には、まだあどけなさが残る。それでいて警備員アンチスキルに志願してくるのだから、度胸はそれなりにあるのだろうか、今回の任務には相当に不安が募っているようだ。

潮騒と鉄装を含め、周辺から招集されたアンチスキルに与えられた任務は、群がる野次馬やマスコミを中に入れないこと。文字通り「警備員」なのだから、そう緊張することもないのだが、と潮騒は思った。

「……わ、私、荷物取ってきます」

鉄装がドアを開け、車両後方へと小走りに向かう。

——黄泉川先生がいてくれたらな。

潮騒は独り言ちて、待機を命じられている先輩隊員のことを思い出した。面倒見のいい彼女のことだ。きっとこのような状況で、バディを組む後輩の不安を解するのは、お手の物なんだろう。

「あの！潮騒先生！」

思ったよりも早く鉄装が戻って来たことで、潮騒の思考は急に現実
に引き戻された。

「えと、その、恥ずかしながら、予備の装備一式が無くて……」

「ええ？」

怪訝な声を上げた潮騒は、鉄装と一緒に車のバックドアを開けて確認する。

「おつかしいなあ、俺のはあるのに……」

「はっハイ！」

鉄装が申し訳なさそうに頭を下げる。

「ごめんなさい、こんな大事な時に、忘れてしまつて……」

「いや、一緒に点検したじゃないですか。俺だってちゃんと見ましたよ」

おつかしいなあ、と繰り返し、潮騒は首を捻った。

鉄装の装備の予備一式が、防刃シャツ、ズボンから脛あて、ヘルメツトに至るまで、車内に掛けてあった一式がごっそり無くなっている。

「……まあ、今回はまさか予備が必要なことなんてないでしょうし」

やはり出発時に、鉄装と自分の双方が見落としてしまったのだ、と潮騒は無理やり納得した。

周りを見渡すと、既に多くの仲間が、警備につき任務を始めている。

「急ぎましょう、支部に戻ったら一緒に探せばいいんですから」

すみません、ありがとうございます、と鉄装が頭を下げた。

車に鍵をかけ小走りで移動していく潮騒と鉄装からやや離れた場所
所に、同じアンチスキルの装備を身に付けた別の人物がいた。

「……すまないね。借りるよ」

自分にしか聞こえない声で、木山春生はアーミー本部の聳え立つビルを見つめる。

およそ2週間ぶりに、ここへ戻って来た。ナンバーズに改めて会うために。

「……オイ、あんた」

歩き始めようとしたところで、木山に低い声がかげられた。

振り返ると、腕章からして階級がある程度上の者らしい、男のアンチスキルだった。厳めしい目つきで木山を見ている。

「……何か？」

「何かじゃないだろう」

男の隊員が、自分の胸の辺りを手で示す。

「ベスト見ろよ。背中につけてどうすんだ」

ああ、と木山は納得し、3つの横縞ストライプと三叉槍があらわれた防弾ベストの位置を直す。

「すみません、急いでいて」

「まあ、急な招集だったしな、お互い頑張ろうぜ」

予想外な労いの言葉に、木山は内心ほっとし、礼を述べると、その場を去る。

同じく持ち場へ向かおうとした隊員は、ふと思い立って足を止め、振り返った。

アンチスキルの中では年長である彼にとって、見覚えの無い顔だったからだ。

しかし、先ほど話した相手の姿は、既に大勢のアンチスキルの人波の中へと消えてしまったようだった。

——アーミー本部、S館15階、ベビールーム

「フレンダッ!! 滝壺を頼みます!!」

絹旗は叫ぶや否や、脱兎の如く駆け出した。

何事か背後でフレンダが喚いていたが、絹旗にそれを気にしている

余裕はない。

吹き飛ばされた麦野を見て高笑いしている島鉄雄⁴¹が、絹旗の接近に気付いて顔を歪ませる。

「発情してンのかよ？ 雌犬が次々と……」

暢気に軽口を叩く余裕を見せている鉄雄に向かって、絹旗は内股に忍ばせた銃を素早く取り出す。

鉄雄の顔が驚きに染まり、ほぼ反射的に顔を覆った。

銃声が響く。

鉄雄は念動能力^{テレキネシス}を展開して銃弾を弾いた。

「やはり」

絹旗が、小さな体躯に似合わない速度であつという間に鉄雄との距離を詰める。

顔にかざした両腕の間から、鉄雄の目が見開かれるのが見えた。

絹旗は、がら空きの鉄雄の腹を思い切り蹴り上げた。

「超鈍いですね、お前」

絹旗が言い放った。

鉄雄は血反吐を吐きながら、体3つ分の高さ程も宙に浮き、そして強かに体を床に転がせた。

「やった絹旗ア！」

滝壺を介抱するフレンドが歓喜の声を上げた。

「大方、そのテレキネシスにかまけて強くなったつもりでしょう？ けど、か弱そうな女に銃を向けられただけでビビってるんなら、戦いに関しては超どしろーとですよ」

絹旗が辛辣に言った。鉄雄は、体を丸めて身悶えしている。

絹旗は一瞬だけちらりと壁に叩きつけられた麦野を見た。四肢をだらんと床に投げ出して動かないが、壁を砕くほどの勢いで飛ばされたにしては傷ついていないように見える。何者かに操られながらも、咄嗟に電子線による緩衝壁を展開したのだろうか。

敵地の真っ只中、そして滝壺が危ないという状況を鑑みて、麦野が戦闘不能になるのはまずい。目の前の41番目の実験体^{ナンバース}は、能力こそ底知れないものの、戦闘に関しては明らかに不慣れた。この隙に一気

に勝負をつけなければならぬと、絹旗は考えた。

「て、てめエ」

咳込んで血を飛ばしながら、鉄雄が掠れた声で言い、絹旗を睨みつけた。

「なんだ今の蹴り……ただのガキじゃねえな」

「……外見で判断しないでもらえますか？」

絹旗は片足を半歩分下げた。

「超、不愉快です」

足元の空気が急激に渦を巻く。絹旗はロケットのように飛び出した。

「く、来んじゃねエ」

鉄雄が捨て鉢に腕を振るうと、先ほどまでの戦闘で生じた瓦礫の小が絹旗目がけて飛んで行く。

向かってきた瓦礫は、絹旗の体の表面に纏われる不可視の壁によって碎け、弾かれていく。

鉄雄が息を呑んだ時には、絹旗は既に体を翻し、足を高々と上げていた。

「超無駄です」

鉄雄の首筋めがけ、絹旗は勢いをつけて踵を振り下げた。

鉄雄の上半身が掘削のような音を立てて床にヒビを入れる程に頭から叩きつけられ、一方で下半身は反動でエビのように跳ね上がった。

絹旗は能力を行使して相手の首を折った。

これで生きている人間はいない。

背後から、拍手が聞こえた。

「フレンド、任務終了です」

絹旗は振り返って言った。

「麦野を回収しましょう」

「む、麦野お……死んでない？」

「そう簡単に死ぬ訳、ありませんよ。あの超麦野ですし」

涙目で立ち上がったフレンドに向かって絹旗が言った。

その時、ミシリと音がした。

違和感を覚えた絹旗は足元を見やる。

絹旗の足元の床には新たなヒビが入っていた。それが、静かに、蜘蛛の巣を形成して拡がっていく。

「ツー」

細かな衝撃を感じた。

見ると、腕や脇腹、首筋など、至る所に石礫が飛んできて、絹旗の能力によって皮膚上4, 5センチメートルの位置で震えながら静止している。

それらはひび割れ、更に細かな礫となって絹旗の体にまとわりつく。

何かがおかしい。

そう察した時には、絹旗は体の異様な重さを感じ、既に床に膝をついていた。

そうしている内に、そこから中から瓦礫が飛んできてくる。中には絹旗の体の大きさに迫る物もある。

「か、体が……」

重い。

絹旗は正座のような体勢になるが、腹に重石のような瓦礫が押し込められてきた。

辛うじて顔を少しだけ上げ、鉄雄の方を捉える。

顔は見えないが、半分は血に染まった腕がこちらへ向けられているのが分かった。

「つ、つぶれる、ひね、ひねエ」

どこか空気の抜けたような声が聞こえた。

「嘘でしょ、生きてる……？」

自分の足元へと、岩を抱えながら吸い込まれていく感覚だった。絹旗は最早顔を動かすこともできず、目の前の視界は無数の石礫で覆われた。

いくら装甲があるとはいえ、このままでは体が押し潰される。

銃声が聞こえた。

フレンダの仕業だろうか。
助けて。

五臓六腑に突き刺さる痛みを伴った猛烈な息苦しさの中で、絹旗は自分が命を失う事を懸念しているのだと気付いた。

過去に「実験」を受けてから、他者への思いやりは案外残されていても、自分自身の生存を願う感情は抑制されていた。それでも、今湧き上がるこの気持ちは、死への恐怖なのかもしれない。

その危機は、突然去った。

絹旗を抑えつけていた圧力は突然霧散し、自分の身の周囲に、瓦礫の山が出来た。

ごつごつとしたお世辞にも寝心地がいいとは言えないその山に、脱力して身を預けながら、絹旗は辛うじて薄目を開けた。

眩い、青白い光に包まれて、怒りの形相をした人物が立っている。「てんめえええ!!」

麦野が声を張り上げ、叫んだ。顔中、煤と血に塗れている。

「保育園児が！超能力者^{レベル5}に勝とうだなんてなア!!千年早えんだよこのクソガキがア！」

麦野は部屋の反対側へと顔を向けて叫んでいた。

途中に設置されていた凶体の大きいコンピュータをなぎ倒し、荒々しい軌跡を残して、今度は島鉄雄が壁まで吹き飛んでいた。

その途中には、肩口から千切れた右腕が、どうにか原型を留めて転がっていた。

「滝壺オツ!!」

麦野は怒りを収めず、仲間の名を怒鳴り声で呼ぶ。

壁にもたれるようにしてへたりこんでいた滝壺が、息をつきながらへと顔を上げる。

麦野は肩を怒らせて大股で歩み寄ると、その両肩を掴んだ。

「追跡しろッ！」

麦野が滝壺へと凄まじい剣幕で命令した。

「誰かが、この私の脳ミソをハックしやがったッ!!消し炭にしてやらねえと気が済まねえんだよ!!」

「む、麦野っ。気持ちは分かるけど、無茶だよっ」

フレンドダが慌てて駆け寄っていった。

絹旗も、ふらつきながら立ち上がる。

能力による防御が働いたとはいえ、鉄雄の攻撃は凄まじい圧力だった。肋が折れてなければいいが、と絹旗は咳込みながら考えた。

「滝壺も、何か干渉受けてたっばいんだよ、今から更に能力を発動させたら、どうなるか——」

「大丈夫」

滝壺が汗をぬぐい、麦野を見上げた。

「私なら、大丈夫。麦野を危ない目に合わせた相手がいる。ほっとく訳にはいかない、でしょ?」

フレンドダと絹旗が心配そうに見守る中、滝壺の返答を聞いた麦野は、口角をニヤリと上げて、懐からシャープペンシルのケースのような物を取り出し、滝壺の手に押し付けた。その透明なケースの中に収められた白い粉末のひとつまみだが、滝壺の手のひらへと音を立てずに零れた。

するとそこへ、複数人のバタバタという足音が聞こえ、絹旗とフレンドダは振り返る。

「あつ、お前!」

フレンドダが驚きの声を上げる。

「結局、生きてたって訳ね。悪運が強いこと」

「フレンドダ!」

金田もまた裏返ったような声で呼び返した。

「おま、どうしてこんなところに?」

「何?知り合い?」

ケイが聞くと、金田はフレンドダを指差した。

「俺を収容室から出してくれたんだよ、この子が!」

「この子って」

ケイがフレンドダを見て目を丸くした。

「ここはアーミーの基地だよ?学生街じゃないのに、その格好は……」

「見た目に騙されちゃあダメさね」

チヨコが機関銃を握り直して言った。警戒心を孕んだ声だった。「あんたら……『アイテム』だね？今回の計画には、暗部組織が噛んでるって話だった……聞いたことあるよ。年端もいかない少女だけで構成された、学園都市の不穏分子の抹殺に当たる少数精鋭の能力者チームがいるってね」

「そういうアンタらは結局、死に損ないのゲリラの端くれって訳ね！自分らが罠に嵌められたって、気付くの遅くなーい？」

フレンダが高く笑い声を上げて言った。

「そう！我らこそ、うら若き美少女戦士、アイテムって訳よ！……麦野はちよつと歳いつてるかな？あ、因みに私は唯一の無能力者！凄いでしょ？それにしてもアンタたち、ここからどうするつもり？もうこの街に、アンタたちの居場所なんてないってのに」

フレンダの言葉を聞いたケイが一步前へ進み出る。

「待って！それどういう意味——」

「フ・レ・ン・ダア!？」

金田もケイもフレンダも、ヒツ、と息を呑んで背中を震わせた。

麦野がゆらりと髪を振り乱し、青筋を浮かべて振り返った。

「私の何がいつてるって?」

「お、オイ！てめーらが何のチームか知らねえけどさー」

口をパクパクさせているフレンダを尻目に、金田が叫んだ。

「島鉄雄ってヤツを探してんだ！知らねえかよ?」

鉄雄の名前を聞いた途端に、麦野がひとしきり高笑いしたかと思うと舌打ちし、光弾を放つ。

金田が咄嗟に身を屈めると、その光はすぐ頭上を掠め、背後の壁に衝突して焼け焦げを作る。

「壁のシミになったガキが何だつて?」

麦野の声は冷え冷えとし、それでいて怒りに溢れていることが分かるものだった。

「……オイ、まさか」

「残念ですが」

金田が頭を抱えながら恐る恐る立ち上がると、絹旗が口を開いた。「あなたのお友達は、既に麦野の手で消されました。落とし物なら、あそこにありますよ」

絹旗が指さした先に、血塗れの片腕が転がっているのを見て、金田は放心したようにあんど口を開けた。

「ドブネズミ共は黙ってる。今、私は猛烈に虫の居所が悪イーんだ」

麦野は吐き捨てるように言うと、滝壺の方を見た。

いつの間にか、滝壺は荒かった息が整い、汗も引いていた。

「うん。大丈夫」

明るいブラウンの瞳がらんと光り、声には力が戻っていたが、どこか機械的だった。

「まだ感じる。ターゲットのAIM拡散力場は記録した」

滝壺が指差した先には、別の部屋へと続く入り口があった。麦野がそれを見て目を細める。

「何番目だか知らねえが……全員地獄行き、か・く・て・い・ね」

その時、また別の集団の足音が聞こえ、ケイは振り返った。

「マズいね」

チヨコが言い、ジャキツという音を立てて銃の安全装置を外した。

あの大男の大佐と彼が率いる残党たちだ。

前方には能力者集団のアイテム、後方にはアーミー。

どうする。どうすればいい。

ケイは必死に思考を巡らせた。

「おばさん」

ケイの横で、金田が小さな声でチヨコに話しかけていた。

「頼みがある」

チヨコは金田の言葉を聞いて、驚きの表情を浮かべた。

その頃、ベビールームのすぐ外では、敷島大佐たちが、床に転がっている多くの死体に足を止めていた。

部下が死体の身元を確認する。

「ベビールーム担当の衛兵と……所属不明の兵力です。銃で撃たれています。出血の少ない、妙な死体もあります。相討ちでしょうか？ さっきの女子供の仕業とは思えません」

「……ドクター」

天井を仰ぎ、泡を吹いて事切れている大西を見下ろして、大佐が呟いた。

隣みとも、憤りともとれる声色だった。

「私が、パスワードをつい今朝変えたんだ。何だか嫌な予感がしたからな。押し入るのに、手間取ったんだろう、彼らは」

口のタバコを噛み締めながら、鷲鼻の研究者が呟いた。

それに対して無言を貫き、大佐はベビールームの入り口を見つめた。

大きな爆発があったかのように、扉は吹き飛んでいる。抉られた壁の断面には、高熱で晒されたことを示す鉛細工のような変形の痕が見て取れた。

「41号か、別の者の仕業か……」

大佐は拳を握り締めた。

「死体は放っておけ。3人を……ナンバーズを、何としても保護するのだ！」

ベビールームは、公園を模した広大な空間と、寝室として使われる小部屋がある。

照明が落とされ、暗く静まったその小部屋の一つで、3人の実験体ナンバーズが、閉じていた目をほぼ同時に開けた。

「気付かれたみたいだよ」

27号マサルが、球体の移動カプセルの中から言った。

「どうする？ 鉄雄君は倒れたけど、あの女の人、ものすごく僕らに怒ってるよ」

「……戦う？」

正座している26号が、膝に置いた手を震わせて言った。

「あの人、怖い。とつても強そうなもの。どうしよう」

「あの人、元々鉄雄君を殺すつもりで来たのに、怒りっぽいんだね。なんだか八つ当たりじやないかな」

マサルは愚痴るように言うと、近くに置かれたベッドのへと顔を向けた。

「どう思う？・キヨコ」

「私たちは、ここで消えることはない」

ベッドに横たわる25号が口を動かした。

「それに……鉄雄君はまだ、生きているわ」

「だとすると、尚更うまく立ち回らなければならぬ。ぼくたちの力を合わせるんだ」

マサルの言葉に、タカシが頷き、キヨコは視線で応じた。

マサルとタカシが、青白い光の差し込む部屋の入り口を見る。

ブーツの足音が聞こえる。

敷島大佐率いる軍の兵士たちが、ベビールームに踏み込もうとしたその瞬間、ババババツ、と破壊的な連射音が響き渡った。

「二昨日来やがれ兵隊共！」

チヨコが操る機関銃が、弾帯を鞭のように振り乱しながら火を噴いている。空になったリンクがカンカンと小気味よい音を立てて床を転がる。既に麦野の原子崩しメルトダウンによって破壊され、ぽっかり口を開けている部屋の出入口が、追い討ちをかけるように掃射によって抉られていく。

アーミーもそれに応戦し、攻防が俄かに激しさを増していた。

「閃光弾は残っているか！アレを黙らせろ！」

大佐が忌々し気に叫んだ。

「どうするの金田君!!」

ケイが必死に叫んだ。チヨコが弾倉を差し替えている間、拳銃で何とか敵を押し留めようとしている。

「もうちよつと稼いでくれ！」

金田は、チヨコから受け取ったレーザー銃のケーブルを挿し直しながら言った。

「あーもう！これ充電切れじゃねエだろうなア!？」

「アハハハハッ!!気分はもう戦争だねえ!!」

麦野が高笑いした。右目の周りを、自身の血が赤く帯を作り、中途半端な隈取りのようになっていた。

「滝壺！命知らずのナンバーズ共はこの中でいいわね？」

「うん」

麦野が確認すると、その背後に、目を見開いて立つ滝壺が頷いた。

麦野はその返答に、一層凶悪な笑みを深くする。

「さあーで、クソガキども。かくれんぼは終わりだつての」

暗い別室に向けて光弾を放とうとしたその時、麦野の眼前の壁が突

如一斉に崩壊した。

「ああ!?何だよこれは!」

麦野が驚き身を引いた。

麦野の目には、巨大な3体のおもちやが映っていた。

2体はぬいぐるみで、茶色の熊と桃色がかつた白いうさぎだ。触り心地の良さそうなアクリルボアの足をこちらに向けて進めてきて、それらは床を踏みしめる度、麦野の体を揺らした。顔面にあるそれぞれ1対の目には角膜が無く、妙に黒く塗りつぶされた瞳孔と対照的な白目の部分だけがあり、しかも部屋の明かりを全く反射していないことから、不自然な不気味さを際立たせていた。もう1体はミニチュアの車を巨大化させたような怪物だが、絵本から飛び出して来たかのように単純化された外見で、詳細な機構が省かれているように見える。後輪の1対のタイヤを足のようにくねらせながらス進んでいて、赤い塗装のフロント部分にはぬいぐるみと同じく落書きのような目がついていた。

ぬいぐるみはともかく、車がこんな着ぐるみのような妙な動きをするか?と麦野が訝しんだその瞬間、熊のぬいぐるみが、肉球のついた片手を迫らせた。

咄嗟に麦野が飛び退くと、床がビスケットののように脆く割れる。

そこへ間髪入れず、車とうさぎの怪物が倒れ込んでくる。2度3度と後退を続けて避ける。

何だっつてんだよこれはア!!と麦野は再び叫び、左手に電子光を灯らせる。それを見た玩具の怪物たちは、驚いたように突進を止める。

麦野が原子崩しのビームを放つと、うさぎの耳を抉る。生地が引き千切られるが、溢れ出て来たのは綿ではなく、乳白色の大量の液体だった。麦野は予想外の光景に目を見開く。泡立ちながらそのうねりは麦野へと押し寄せる。勢いに卷かれ倒れ込んだ麦野の口内をどこか甘ったるい重みのある液体が満たし――

ミルク?腰の高さまで浸かるその液体を片手で掬い上げ、麦野は呟いた。

「麦野!!」

振り返ると、滝壺がまつすぐにこちらを見つめていた。

「惑わされなさいで!それは、まぼろし」

滝壺の言葉に麦野はハツとし、はつきりした思考のもと、改めて左手に電子光を操る。

そしてもう片方の手で、トランプを一回り大きくしたようなカードを取り出す。それは太陽光パネルのように黒光りしていて、麦野が宙に放り投げると、鈍く光を反射した。麦野はそのカードめがけてビームを放つ。

カードに直撃したビームは、そのまま幾々にも分岐し、3体の怪物をズタズタに引き裂いていく。

怪物たちは紙細工のように分解され、散り散りに消え失せていく。『拡散支援半導体』をもっと早く使えば面倒でなかった筈だ。この私を2度も騙そうとはね……下手な絡繰りばかり使いやがって……」

麦野が歩みを進める先では、瓦礫の山のふもとで、3人のナンバーズが埃と煤に塗れて膝をつき、恐怖の表情を浮かべていた。

「大人を虚仮にしたらどうなるか、教えてやるよ。あの世でちゃんと復習しな」

麦野の眼前に、青白い光が眩く広がった。

出入口での打ち合いは拮抗していた。そこへ、金田が放ったレーザー銃が炸裂する。

ヒツ、と息を呑み、部屋に入りかけていた兵士が辛うじてレーザーを避け、尻餅をつく。

「なぜ奴らがプロトタイプを持ち出している!?!」

大佐が困惑の声を上げるのが辛うじて聞こえた。

「イカすじゃねえか、コレ」

金田が手にしたレーザー銃を見つめ、口笛を吹く。

「余裕かましてる場合じゃないってば!」

ケイが壁際に身を潜めながら叫んだ。

「金田君、一気にアイツらを——金田君？」

ケイは困惑の声を上げた。

金田が再びレーザー銃を構えて向けた先には、今まさにとどめを刺そうとナンバーズの3人へ迫る麦野の背中があったからだ。

「何してんの!?今はアーミーを——」

「鉄雄をよくも……」

左目で照準器サイトを覗き込みながら、金田が憎しみを込めて呟いた。

「死イ……」

「やめときなよ」

引鉄にかけられた金田の指は、首筋に鋭い感触を得たことで凍り付く。

フレンダがいつの間にか金田の背後に回り、鋭い切っ先を突きつけていた。金田の収容室の扉を焼き切ったあの得体の知れない道具だ。

「アンタには一応、借りがあるから。けど、ウチのリーダーに銃口を向けた時点で、普通なら殺してる」

フレンダの声は、収容棟から共に逃げた時の陽気なそれとは打って変わって、冷たく背筋に滑り込んだ。

「ふ、フレンダ……」

「金田君！」

固まって震える金田を、ケイとチヨコが横目で捉えるが、アーミーとの攻防が再び激しくなる中で、身動きが取れないでいる。

「それに、マジで1パーもあり得ないけど、もしも、私が撃つのを止めてなくても、アンタに麦野を傷つけられる訳ないでしょ？その銃、麦野の能メルトダウン力の紛い物なんだから。一瞬で跳ね返されて、お陀仏って訳よ」

「ンだと……」

金田が反論しようとしたその時、

「まず、いー！」

チヨコが必死にそう叫ぶのが聞こえた。

金田やケイ達の足元に閃光弾が転がされると、麦野が発動した光がいよいよナンバーズを覆い隠すほどに広がるのと、ほぼ同時だった

た。

耳鳴りの中で、金田は床に伏せていた顔を上げる。

視界は紫がかったモノクロのように見える。

遠くに、宙に浮かぶ人影が見える。

宙に浮かぶ？能力者じゃあるまいし、そんな筈は……

金田は目を擦って、そして見開いた。

「鉄雄……」

金田が思わず名を零した先には、体のあちこちを血に染めながらも、目に力を宿した島鉄雄が、麦野を睨んで浮遊していた。右腕を伸ばしている。

麦野はいつの間にかナンバーズへと向いていた体を反転させている。

麦野が放つ電子光は鉄雄へと向けられていた。それは麦野の手から真っ直ぐに鉄雄の腕へ向かい、その指先で揺らめきながら静止している。一見、何もない空で光線が遮られているのは、金田にとって不思議な光景だった。

麦野の青白い光は、鉄雄の右腕を明らかに照らし出している。

破壊された観測機器の配線が神経になり、赤色や青色のそれらが束ねられて筋肉になり、パイプが骨になり、ボディやセラミックがそれらを支え形づくり、繋いでいたナットやネジの一本一本が結合を為している。

「サイボーグ機械生体だあ？」

麦野が忌々し気に言った。

「いい加減にしろよ死に損ないが!!手品師かてめえはよお!!」

「痛かったぜさっきのはよオ!!」

麦野に張り合うように鉄雄も叫ぶ。

「畜生ウ、殺してやるぜこのアマア!!」

「余所者には構うな!!」

名を呼び返したその一瞬だけ、鉄雄の顔から凶暴さは消え失せ、驚いたような幼い表情が浮かんでいた。

「余所見してんじゃねえよ!!」

麦野の叫びに、鉄雄は振り向きざま、機械化した右腕で反射的に顔を覆う。

その腕に、麦野の渾身のビームが弾かれずに炸裂した。

何百枚もの鉄板を同時に殴りつけたような金属音が響き渡り、鉄雄が宙を錐もみしながら落下する。右腕は壊れ、無数の部品が宙をてんでばらばらに舞っていた。

「あはははハハッ!!今度こそ死にまちゆね〜!ロボット好きのクソガキよオ!!」

麦野が止めを刺そうと鉄雄へと距離を詰めた。

「41号」

敷島大佐は、落下していく鉄雄の姿をちらりと視界に収め呟いたが、すぐさま目の前の3人のナンバーズの収容にとりかかった。

「緊急経路から脱出する!3人をSTFへ——」

「超妨害します」

何人もの兵士が、床や地面へ叩きつけられて昏倒している。

絹旗が兵士たちの陣形を突破し、ナンバーズへと迫っていた。

「やめろ!手を出すな!」

タカシが叫び、能力で押し返そうとするが、発動する前に絹旗はタカシを蹴り上げる。

呻き声を上げ、タカシが壁に激突し、うずくまる。

続けざまに絹旗は、自身の体より遥かに大きいマサルの移動カプセルを持ち上げ、打ち棄てる。四肢に麻痺を患うマサルは、床に投げ出され、身動きが取れなくなる。

大佐が絹旗へ銃を向けると、絹旗が怯えた表情で床に座り込んでいるキヨコの首筋を掴むのと、ほぼ同時だった。

「作戦目標は2つあります」

絹旗が、自分よりも遥かに背の高い大佐を正面から見上げながら言った。

「1つは、41号の抹殺。もう1つは、この25号と呼ばれる実験体サンバースの回収です。依頼主クライアントから要望を受けていますので、悪く思わないでください」

「何をしている!」

まだ動ける部下を、大佐は叱咤した。

「相手は能力者だ!感うな!」

「しっかし——」

銃を中途半端に構えながら、部下の一人が困惑の声を上げた。

「相手は、これは、まだ子ども——」

「暗部だ」

大佐は、部下よりも一回り大きい、銀色に鈍く光る拳銃をまつすぐに絹旗へ向けて、迷いなく言った。

「キヨコを放せ。さもなければ撃つ」

「……超拒否します」

絹旗の返答も揺らがず冷静だった。

「やってみたらどうです?」

挑発するような絹旗の言葉を受け、大佐は2発の銃声を轟かせた。間を開けず、金属的な高ピッチの音が奇妙に響く。

キヨコが思わず目を瞑る。

薬莖が軽やかに弾み、床を転がる音がする。

大佐の部下たちは皆、口をあんぐりと開けた。

大佐は、油断なく銃を構えたままだ。その額に汗が一筋流れる。

「あの41号とは違いますね、あなた」

傷一つ受けていない絹旗が、変わらない口調で言った。

「流石学園都市を生き抜いてきた、アーミーの指揮官といったところですか。外見に惑わされず、確実に急所へ、2発続けざまに撃ち込むとは。しかし……」

絹旗の左のこめかみ付近、皮膚上数cmの位置で、2つの弾丸が震えながら静止し、白煙を上げている。

「私の空素装甲オフェンスアーモは、たかだか銃を数丁揃えた所で破れませんので」
言い終わると、先端をすり減らして歪んだ弾丸が、床に落ちて跳ねた。

「ああ」

大佐が銃を下ろした。

「そんなことだろうと思ったよ」

次の瞬間、大佐が鋭く踏み込んで距離を詰めて来たので、絹旗は再び装甲を発動しようと身構える。

その絹旗の小さな体の、左脇腹に、大佐の回し蹴りが食い込む。
絹旗は脳裏に疑問を浮かべた。意識が遠くなり、全身の空気が一気に持つていかれる感覚がして、キョコを放し、倒れ込む。

「拳動がおかしかった」

大佐が伏せた絹旗を見下ろして言った。

「大方、41号との戦闘によるものか。左肩を動かさず、常に猫背だ。やられているのは肋骨か？」

「オイ、何をしている!!」

大佐の檄に、部下たちが肩を震わせる。

「動ける者は動け!この者を拘束しろ!ナンバーズを急ぎ回収し、撤収する!!」

「滝壺ツ!ヤツは?」

ワンピースの至る所を擦り切れさせた麦野が、後方を歩く仲間に見つめた。

「……北東に15m……静止状態……反応は、まだ、ある……」

滝壺の声は、先ほどまでとは変わり、再び弱弱しく、途切れ途切れになり始めていた。

疲弊がいつも以上に早い、と麦野は内心焦っていた。

41号と、先ほどの玩具の怪物の正体である3人のナンバーズとを、それぞれ追跡させたせいだろうか。既に戦意を折られている老人のような子供は絹旗達に任せるとして、41号は厄介だ。肉体の再生

能力まで有しているとなると、骨も残らないほど消し去って、止めを刺さねば。

そう考えて歩みを進めている最中、突如麦野は足をなにかに取られ、バランスを崩す。

「……………これは?！」

麦野の片脚に、腕程の太さもある深緑色をしたコードが床を突き破って絡み付いている。それは蛇のようになねり、まるで生きているかのようなだ。

背後では、息を切らした滝壺がついに足をとめ、床にへたりこんでいる。

「たぎ——」

麦野が振り返って声をかけようとしたところ、突然、自身の体勢が崩れた。

のたうつコードによって、麦野の足元一体の床が破壊され、抜けた。

麦野は重力に従い、落下する。滝壺も頭から滑り落ちる。

「あああつツツツ!!！」

悪態をつく暇もない。麦野は必死に、電子光で自身を包み込み、滝壺へと腕をあらん限り伸ばした。

フレンドは絶望していた。

目の前で、轟音と共に床に大穴が空き、麦野と滝壺が呑まれた。

絹旗は力を失い、アーミーに拘束されようとしている。

これまで幾つもの任務をこなし、失敗など知り得なかった「アイテム」の、能力者3人が戦闘不能だ。

「ど、どうしよ……………」

震えるフレンドをよそに、金田が横を駆け抜ける。

「鉄雄オオオツ!!！」

金田は瓦礫の山を乗り越え、大穴を避けていく。

どうする? 逃げるか?

足を震わせるフレンドのスカートのポケットで、その時、携帯電話が着信を告げた。

金田は、鉄雄が土煙の中からゆっくりと姿を現すのを見た。

「金田……」

鉄雄は、血と埃に塗れた顔を金田に向け、自嘲的な笑みを浮かべた。

「鉄雄」

金田は、10歩分ほどの距離を空けて名前を呼ぶ。

「お前」

「どうだ？ すぐエだろ」

鉄雄は右手を上げた。

麦野によって破壊されたはずの、機械化した腕が、再び周囲の残骸を集めて形成されていく。

「まるで、俺の体じゃないみたいだ……何なんだよこれは」

「オイ鉄雄」

「来んじゃねえ!!」

何度も名を呼び近づこうとする金田を、鉄雄は機械の腕を振って拒絶する。麦野と戦っていた時とは打って変わり、悲壮感の漂う声だった。

「このふざけた腕を見ろ……これが俺か!? お前になんかどうもこうもできねえだろ! うざってえんだよ!」

「何だど!?」

金田が戸惑いの声をあげる。鉄雄は首を振った。

「ただ、強くなりたかって思っただけなのに……どんどん俺の中で、俺の力が、俺のじゃなくなるみたい、大きくなってやがる……!」

「それは、アキラ君に近付いているからだよ」

あどけない声に、鉄雄がはっと顔を上げる。

アーミーの兵隊に寄り添われながら、床に座りこむ3人のナンバーズ。その内のマサルが口を開いた。

「君の力は、どんどん大きくなる。やがてはアキラ君みたいに……」
「マサル、どういうことだ？」

「アキラ」の名を聞いた途端、大佐が険しい口調でマサルに聞く。
「アキラ！そいつだ！俺のことをずうつと呼んでいやがるんだ!!」

マサルが何か答えるよりも先に、鉄雄が眉間に皺を寄せ、苦しそうに叫ぶ。

「お前らに聞きたくて、俺はここまで来たんだ！どこだ!?そのアキラってのは、どこにいるんだ!？」

「それは……」

キヨコが鉄雄を見つめた後、目を閉じて俯く。

金田には、鉄雄がハツとした表情を浮かべるのが見えた。

「何だど？」

鉄雄が呟いた。

「原子力発電所って——」

その時、幾筋もの青白い光が、金田と鉄雄の間の床を穿ち、天井へと幾筋も伸びた。

床が鉛細工のように溶かされる。金田はたまらず身を退く。

「あのババア!!まだ生きていやがったか!!」

不安定になった床の上で、鉄雄が毒づいた。

「テメエにはもううんざりだ！俺は——」

鉄雄は振り返り、金田の顔を一瞬だけ見た。

「俺は、先に行く」

「41号!!」

大佐が叫ぶのが聞こえる。

「て」

金田が手を伸ばす。ケイが後ろから駆け寄り、その伸ばした手を掴んで引つ張り込む。

「鉄雄!!」

青白い光が続けざまに奔り、床が更に崩れ、天井までも崩落する。

大佐やアーミーの兵士達は、ナンバーズを守ろうと壁際へ後退する。

混乱の最中、絹旗は力を振り絞って拘束を解こうとする。
ベビールームは、いよいよ崩壊しようとしていた。

轟音の渦の中で金田は、鉄雄が一瞬跳び上がったかと思うと、姿を
掻き消すのを確かに見た。

「がんばれ……あと少しだ」

赤黒く染まり切った間に合わせの包帯を額に巻いた軍の兵士が、背中の仲間を励ましながら、階段を遂に下り終え、1階の通路を緩慢に歩いている。背負われた仲間は、歯を食いしばった呻き声でそれに応えた。

仲間は、片足のふくらはぎの肉がズボンごと大きく抉られていて、一部乳白色の骨が覗いている状態だ。足の付け根に、シャツを引き千切って用意した布切れを固く結んで、何とか出血を留めようとしていた。

静かだ。兵士はそう思った。3つある本部の建物がほぼ敵側に制圧されたというのに、幸いにも、正体不明の敵の部隊に出くわさずここままで降りて来れた。あの真偽不明の放送の内容を信じるなら、少なくとも、外の演習場まで出られれば、大勢の投降した仲間と合流できるはずだ。

命さえあれば。大佐の言葉を信じ、戦場で負傷した2人の兵士は、エントランスを目指す。

ふと、前方からバタバタと駆けてくる複数の足音に、兵士は身を固める。

「……て、きか」

背中 of 仲間が、蚊の鳴くような声で聞いて来た。

顔を振り、前髪から滴る汗を払い、兵士は目を凝らした。

「あ、いや……あれは」

迷彩色を基本とするアーミーの制服とは異なる、警察組織に似た深い紺色の防護服。三叉槍の紋章。

「アンチスキル
警備員……！」

助かった。兵士は張り詰めっ放しだった表情筋が自然と緩むのを感じた。

アンチスキルらしき一団の人数は十人程。自分たちと相向かいになり、5、6メートル程の距離を空けて立ち止まった。

「止まれ！」

「待て、俺たちは武器なんて使えない……助けてくれ」

相手のリーダーらしき一人が制圧銃を構えたので、仲間を背負う兵士は疲労困憊の体をどうにか奮い立たせ、片腕を上げて、反抗の意思が無いことを伝えようとする。

それに対して、相手の一団は一度武器を下げ、互いに手を伸ばせば届く程の位置にまで距離を詰めてきた。防護ヘルメットから下がるバイザーによつて、表情を窺い知ることはできない。

「敷島大佐は？」

「……上だ。S館の、中階層……」

籠った声で相手が問いかけて来たのに対し、息を切らして兵士は答える。

「おかしなことが起きている。謎の武装組織が潜入して……我々はクーデターなど企てていない。いや、それより、早くこいつを何とかしてやってくれ。このままじゃ片足が本当に使えなくなっちゃう」

兵士は仲間を案じて言った。

それを聞いた相手は、互いに顔を見合わせ頷き合った。

「助かる……」

兵士が思わず声に出した安心感は、次の瞬間にひっくり返される。

相手の一団は、無言で再び武器を構えたからだ。

「お、オイ、俺たちは——」

ゴム弾とは明らかに異なる発射音が聞こえたかと思うと、兵士の視界は急転した。体に穴を空けた幾つもの痛みで薄らいでいく意識の中、「爆破」とか「回収」といった言葉がくぐもって聞き取れたが、これらの単語がどう繋がるのか、脈略を推測する前に兵士の認識は暗転した。

『フレンド!?フレンド!何とか言いなさいよ!!』

『今マジでヤバいんです、電話なら後で——』

『手短に伝えるわ。計画は変更。アンサクセス失敗扱いにはならないから、退却し

て』

「……ハイ？」

電話を耳に押し当てたフレンドは、時折落下してくる天井からのガラス片を警戒しながら、身を屈めてベビールームの出入口まで何とか戻って来た。先ほどまでのゲリラとアーミーとの攻防で、ど真ん中を繰り抜かれた蜂の巣のようになっていた。

「どういうことですか？」

いつ大規模に崩壊してもおかしくない部屋からひとまず廊下に移り、フレンドは電話相手の女に疑問をぶつける。

『「山田班」壊滅の報告を受けて、上は考えを変えたらしいの！ああ、詳細は今聞かないで、私も本当に知らないんだから。それで、麦野と連絡が取れないものだから……41号は殺せた？ほかのメンバーは無事なんでしょうね？』

「あ……ターゲットは、逃げた……麦野と滝壺が、ゆ、行方不明だよ」
フレンドが絞り出した言葉に、電話相手が息を呑むのが聞こえた。

『まさか……絹旗は!?』

「彼女は——」

フレンドが振り返った瞬間、部屋の中から、ロケットのような勢いをつけて、絹旗が転がり出てきた。

「絹旗ッ！大丈夫!？」

「私の、ことは、超無視してください」
腹を片手で庇いながら、絹旗がよろよろと立ち上がった。

「この下には別フロアがあった筈です。麦野と滝壺を助けましょう」
『そちらには、回収部隊が急遽派遣されたわ』

電話相手の女は、絹旗が合流したことを悟ったのか、声色を妙に落ち着かせて言った。

『駐屯地は今、アンチスキルの正規チームに包囲されている。あなた達が暗部としての顔を見られるのはマズい。回収部隊は、外見を奴らに偽装している。時間が無いわ、後15分もすれば、その建物にいる全員がああ世行きの切符を掴まされるの』

「待つてよー結局それ、どういうこと!？」

『てつとり早く、解体でもするんでしょ!』

戸惑うフレンダに対して、電話相手の声には苛立ちが募っていた。『奇襲部隊の存在に感付いたアーミーの生存者がいちや困るんでしょ、上は!とにかく、アンタたちも急いで出て来なさい!死なれちやこつちだつて困るんだから!!』

次の瞬間、通話終了を知らせる小気味よい木琴のようなサウンドが聞こえ、フレンダは乱暴に携帯電話をしまった。

「……フレンダ?」

絹旗の問いにフレンダは答えず、代わりにどこへしまつていたのか、両手のひらに乗るサイズのぬいぐるみを三つほど取り出すと、乱暴に出入口付近の床に捨て置いた。それから、修正テープのような外見をしたカートリッジを素早く床へ幾筋も張り巡らせる。

その時、崩れかけている部屋の入口に、金田とケイが姿を現した。意識が朦朧としているチヨコを両脇から抱えている。

フレンダの姿を見て、金田が口を開く。

「おい、一緒にー!」

「近寄んじゃないつてのネズミども!」

フレンダは吐き捨てるが早いか、ヒートカッターを取り出し、今しがた張り巡らせたテープへ押し当てる。

導火線が空気を吸い込むような音を立てて急速に燃え盛り、床に捨てられた人形へ辿り着いたかと思うと、それらは外見の大きさよりも存外に激しい火を噴き始めた。

金田とケイが目を見開くのが、ゆらめく炎の向こうに見えた。

「何しやがる!」

「バーカ、死ね!」

憤慨して叫ぶ金田へ、フレンダも怒鳴り返した。

「結局、こつちの計画はめちやめちやつて訳よ!テキトーなことばかりほぎきやがつてこのバイク狂!あのでこつぱちのお友達によりしく言つといてよ!麦野が必ず殺すつてね!!」

「超人任せじゃないですか……」

絹旗が呆れたような声を出す。

フレンダは金田たちに向かつてべーつと舌を出すと、怪我をした絹旗に手を貸しながらその場をできる限り急いで去った。

「畜生！」

燃え盛る炎の前に、金田はやり場の無い怒りを声に絞り出した。

「こんなところで死んでたまるかよー！」

ケイも、焦りを顔に浮かべて辺りを必死に見回す。

支えられるチヨコを含め、3人がいるベビールームは、部屋の中央に重機が何台も収まるような大穴が空いた状態だ。巨大なコントラバスを古びた弓で弾くような、重たく軋む金属音が常に聞こえる。天井からはひっきりなしに建材が崩落していて、床も徐々に確かな足場を狭めている。あの狂乱した超能力者の女が階下から放つビームの嵐は一旦小康状態になっていたが、金田たちの身に危険が及んでいることは明白だった。

二人が支えるチヨコが、何事か呟いた。

「おばさん!」

「ケイ、金田……あたしを置いて行きな」

ケイが顔を向けて呼びかけると、チヨコは目を瞑ったまま呻くように言った。

そんな!とケイが叫んだが、チヨコは首を振った。

「若い者が生きるんだ。あたしは迷惑かけられないさ……すまないね、目がやられちゃって、まともに動けないんだ」

「馬鹿なこと言うな!」

金田も必死に呼びかけた。

「あんたを置き去りにできるか! 駒場や半蔵に顔向けできねエだろうが!」

生きる、生きなきゃならない。

一際部屋が不安定に軋む音が鳴り響く中、金田は何か糸口は無いかと部屋を見渡す。

向こう側の壁際に、大佐率いるアーミー達が身を寄せ合っているの

が見えた。

「……アイツは」

その中の一人、皺だらけの顔をした子供が、こちらを見つめていることに、金田は気付いた。

次の瞬間、金田は両腕がぐいつと空へ引つ張られる感覚がした。

「脱出口は!?!」

敷島大佐は部下へ問う。

ダメです、崩落が激しく安全に移動できません、と部下からの叫ぶような報告を受ける。

3人のナンバーズを最も内側にして、大佐とその部下のアーミーの生存者たちは、崩壊しつつあるベビールームの奥まった一画で身動きが取れずにいた。

「これは……いよいよ万事休すかもな」

研究者の中でたった一人、大佐に追従してきた鷲鼻のドクターが、こんな状況の中だというのに、諦めの色を顔に浮かべて、タバコに火を点けようとしている。

「おい、大西……生きてるかア?火イくれないか……」

馬鹿者、気を確かに持て、と大佐は殴りつけそうになったが、その前に、自分のズボンの腰の辺りを引っ張る感覚に、顔を下げた。

「僕達の力で、ここを出られるよ」

片肘を痛々しく擦りむいている26号が、大佐を見上げて言った。

「タカシ……いや、しかし、それは」

タカシの顔を見つめ、大佐は逡巡した。

「お前達、先ほどの戦いで、消耗している筈……体は持つのか?」

「今は、力を合わせなきゃだから」

ねえマサル、キヨコ、とタカシが床に座り込む仲間2人の方を向く。

2人が確かに頷く。

「でも、あの人たちも一緒に」

タカシが指さした先には、燃え盛る出入口の付近で途方に暮れてい

る人影があつた。

41号の知り合いだという收容者の少年と、ゲリラの2人だ。

タカシの意を察した大佐は、顔を歪める。

「あやつらは、不穏分子だぞ!」

「それでも、助けたいんだ」

タカシのまつすぐな瞳に、大佐はほんの僅かの間、目を瞑り、それから開いた。

「……分かった」

タカシとマサル、キヨコが、それぞれほぼ同時に両手を上げ、目を閉じて集中する。

「アカいのが来るぞオー!!」

兵士の誰かが叫んだ。一際大きな瓦礫が、天井から軋む音を立てて剥離したかと思うと、砂ぼこりを立てながら真つ黒な影を落として迫って来た。

大佐は思わず顔を背けた。

次の瞬間、体が不意に浮き上がるような気がした。

「絶対、せーすツ対、殺す!ひと思いなんて甘く思うんじゃねえぞ! まずは指の爪だ! そっから指、手、肘、順番に焼き尽くして——!」

「さっさと超退避しましょう、麦野。気持ちには分かりましたから」

絹旗は、古代中国の刑罰めいた復讐心を繰り返し口にする麦野を諫めながら階段を下っていく。

アンチスキルの外見をした回収部隊とは、ベビールームを脱出した後、すぐに合流できた。

島鉄雄の攻撃によって下層階に落下した麦野は、驚くべきことに、肋骨を骨折した絹旗に比べれば傷が浅い方だった。聞けば、咄嗟に『マルチタウナー原子崩し』を放射状に展開したことで、抱き止めた滝壺ごと、衝撃を吸収することに成功したのだという。もっとも、その後に激昂して上階へ向かってビームを放ち続けたことが、かえって絹旗やフレンドの命を危うくしたのだろう。しかし、その点を抗議しても麦野は聞く耳

をもたないと、長年の付き合いから絹旗には分かっていた。

絹旗はため息をついた。氣力を振り絞って空素装甲オフエンスアーマーを常時足元に発動し、歩行時の衝撃を和らげるようにしているが、絹旗も、度重なる能力の使用が祟って意識を失い運ばれている滝壺も、しばらく活動は無理だ。健常なのはフレンダくらいで、いくら『電話の女』からのフォローがあつたとはいえ、自分たち『アイテム』の評価を下げることになりやしないかと気がかりだった。

「けれど、41号の身柄の確保は問わないから帰って来いだなんて。こんな風に計画を途中で変えること、結局今まであつた訳え？意味分かんないんだけど」

フレンダがぼやくように言った。メンバーの中で唯一負傷らしい負傷を負っていないせいとか、口調が一際軽い。最も、普段からこんな感じではあつたが。

「ま、でもいつか。ギャラは予定通り配られるってんなら——」
「いい訳ねえだろ!!」

怒髪天を衝くような麦野の叫びに、フレンダはもちろん、自分たちを警護する偽装アンチスキルの男たちも肩を震わせる。

なんで平気でそんなこと言うかな。絹旗は口の軽い同僚に呆れたため息をついた。

「私らはな！マシン扱いされてんだぞ！観測機械だ！ブリーフィングデコ助野郎での41号の貴重な戦闘データが取れるだろうからプライマイゼロだど!?馬鹿にするにも程があるってーの!!」

麦野が、煤だらけの髪をくしゃくしゃに手でしだく。

「畜生ッ！あの野郎はどこへ行こうが、絶対に逃がさねえ、借りはでっかく返してやるっ!!」

絶対に殺す、という今日何度目か分からない麦野の毒を聞きながら、絹旗は家に戻ったら先週末に借りた映画のDVDを見て寝る、と心に決めていた。確か、頭が4つあるサメの映画だった気がする。いや、5つだったか？タイトルのインパクトに惹かれて衝動的に選んだために、記憶が不確かだった。

ひとり好きな映画を見て、頭を空っぽにしたい。これも生への欲求

なのだろうか、と絹旗は脇腹の差すような痛みを、歯を食いしばって堪えながら考えた。

「ここは!?」

久しぶりに感じる熱と光。

金田が、今居る場所がどこかの高層ビルの屋上だと気付いたのは、学園都市にいくつも支店を構える大手銀行の塔屋看板が目の前に聳えていたからだ。

「大丈夫?」

血管の浮き出た、血色の悪い手が差し出された。

金田は、そちらを見上げる。

「お前は……あの時の」

タカシが、膝をつく金田に手を差し延べて立っていた。

「よしなよ、タカシ君」

移動カプセルごと転移してきたらしいマサルが、咎めるように言った。

周囲には、ベッドに横になったキヨコも、大佐達アーミーの面々もいる。

「そいつ、タカシ君にひどい乱暴したんだろ? 気遣うこと無いって」

マサルが再び言うと、タカシは申し訳なさそうに俯いた。

「確かにそうなんだけど……鉄雄君は、君のともだちなんですよ?」

「なんだと?」

金田が表情を厳しくする。

タカシは金田をまっすぐに見た。

「僕が、あの日の夜に高速で彼とぶつかったから。アレがきつかけで、鉄雄君は力に目覚めて、それで苦しんでるんだ。だから、さつき君を助けた。これでおあいこにしようよ」

金田は差し出された手をじっと見た後、チツ、と舌打ちした。

「分かったけどよ、坊主……教えてほしいもんだな」

金田は自力で立ち上がることに何の問題も無かったが、ほんの短い

間、タカシの手を握った。以外にも、蠟のような色をしたその手には温もりがあった。

「アイツに……鉄雄に、何が起こったのか。これから、何をしようとしているのかをよ」

「ええ」

金田の後ろから、ケイが言った。顔を手で押さえて座り込んでいるチヨコの背に、腕を回している。

「あの戦いの様子を、私は見た。超能力者^{レベル5}と互角の力……どういうことなの？ただのバイカーズの一員だった人間が、たかだか数週間で、あれ程の力を、なぜ？」

「お前達がそれを知ってどうする」

低い声を発したのは大佐だった。

広告看板の鉄骨を支えるコンクリートブロックに腰かけ、疲れた表情でケイを見た。

「ゲリラが知った所で、最早どうにかなるでもあるまい」

「アンタたちもね」

顔を押さえているチヨコが言った。まだ目は見えないようだ。

「仲間から聞いたよ。クーデターの疑いをかけられて失脚かい？いや、本部があんな騒ぎになったんだ。早いところ尻尾巻いて逃げたらどうだい？学園都市中が、アンタの人相をポスターに貼り出すだろうさ」

「……フン、そうかもしれないな」

自嘲するように大佐は笑みを浮かべ、振り返った。

大佐が見る方向には、肩を寄せ合うように立つ3つの高層ビルが見えた。アーミーの本部だ。

報道のヘリコプターだろうか。バラバラバラと、数機がその周囲を回るように飛行している。

大佐の部下の兵士達も、疲れているのか、戦意を喪失しているのか、ゲリラである筈のチヨコとケイを前にしても、最早逮捕しようと武器を上げることではなく、各々本部の建物を眺めて座り込んでいた。

「41号が、あれほどに力を持つようになったのは……決して、我々の

手によるものだけではない」

「嘘つくんじゃないぞ」

静かな大佐の言葉に、金田が噛みつく。

「てめえらのラボが、幻想御手とかいう代物を作ってバラ撒いてやがんのは分かってんだよ！それで鉄雄を実験のオモチャにしたんだろ
うが！」

「それは——」

「それは、決して軍^{アーミー}単独で成し得た業^{わざ}じゃあないさ」

抑揚のない、女性の声が聞こえた。

金田達が声のした方を振り返る。俄かに警戒心を高めたアーミーの兵士達が、使える武器を構えて向けた先には、昇降口から姿を現した一人のアンチスキルがいた。

「まあ、待ってくれ。私は別に、君たちを捕まえに来たわけじゃないんだ」

手を上げて、その人物はバイザー付のヘルメットを外す。

敷島大佐が目を見開いた。

「木山、春生……」

大佐が唸るように呼んだ名と、その風貌は、金田には聞き覚えも見覚えも無かった。茶色がかった長髪をなびかせた、幸薄そうな女だった。

「やっと会えたね、ナンバーズ諸君」

木山と呼ばれた女は、ヘルメットを投げ捨てると歩み寄って来る。夏の陽光の下を近付いてくるにつれて、その女が目の下の隈を強烈に濃くしていることに、金田は気付いた。

「君たちが私を呼び、私もまた君たちに会いに来た。大変だったよ。アンチスキルの人波に紛れながら、あっちへこっちへ場所を移す君たちを探し当てるのは……随分な苦勞をしているようだね」

「ナンバーズと交信しているだど？どういことだ」

大佐は厳しい声色で問う。

「今更姿を現して、何が目的だ！」

「まあまあそう怒らないでください、大佐」

木山は両手を軽く上げて、肩を竦めた。

「今、私はあなた方に敵対する気なんてありません。それに、あなた方だって、ここにいる全員だけでしょう？上に恭順していないのは。本部もラボも、他の駐屯地も全て、理事会の手中に収まってしまったそうですよ。私を捕まえたところで、どうにもならないんですから」

私を知りたいのは——と木山は、ナンバーズ3人の方へ、明るいブラウンの瞳を向けた。

「私と君たちを繋げているもの。『アキラ』と呼ばれる者がどこにいるのか……そして恐らく、島君もそこに向かったんだらう？」

アキラ？と金田とケイは顔を見合わせた。

大佐が何か言いかけて口を開いたその時、ズ、ズ、ズウンと重たい怪獣の足音のような地響きが聞こえた。

「ほっ、本部が……!!」

兵士の一人が上擦った声を上げた。

見ると、先ほどまで聳え立っていたアーミーの本部ビルが、3棟とも低層階から煙と炎を四方に吐き出し、達磨落としいのように下へ吸い込まれ、崩れていく所だった。

「理事会の仕業だ。連中、あなた方を決して逃がさない気ですよ」

空気を揺らす地響きの中、木山が静かに、しかしはつきりと言うと、大佐は肩を震わせてキツと木山を睨んだ。

「ねえ、大佐。そのご友人も……島君を止めたいのでしょうか？あなた方に残された余力は僅かだ。私なら、島君を止められる」

「何だと？」

「何が言いたい！」

大佐と金田が同時に立ち上がった。大佐は木山の傍まで大股に近づき怒鳴った。

木山の顔色は少しも揺らぐず、視線はナンバーズの方へ向いていた。

「そのためにも……ねえ、坊や、おじょうさんたち」

木山は膝を曲げ、ナンバーズに視線を合わせた。

ナンバーズの3人も、それぞれの瞳で木山と向き合った。

「島君が向かった先……君たちの28番目の仲間、アキラ君の居場所を、教えてくださいね？」

金田も、ケイも、大佐も、その場の誰もが、木山とナンバーズが向かい合う様子を凝視し、耳を傾けていた。

木山の脳裏では、レベルアップのメロディと、アキラという名前を呼ぶ数多の声が、再び大きく渦巻き始めていた。

XXI. 山形

103

午前11時15分——

ここで、臨時会議を終えた統括理事会からの緊急記者会見の様様をお伝えします。広報部長、おやふねもなか親船最中常任理事です。

……する等、対応は万全といえます。野間総理はじめ、大塚防衛相ほか、本国政府からの十二分な協力のもと、第三学区Ⅱ北部駐屯地、第二三学区Ⅱ第三四航空旅団基地、第一七学区Ⅱ西部駐屯地の三方面について、午前10時45分までに、全て武装蜂起の意思がないことを、各駐屯地及び基地総司令と確認済です。加えて、第七学区を中心に、現在アンチスキルとの合同警備目的で展開されている兵力についても、一度武装を各地区の活動支部に預けた上、それぞれの所属基地へ帰順し……そして、第二学区の本部ですが、これにつきましても、所属兵員……これは市街警備派遣員合わせての数ですが、1223名中、1157名の所在を把握済みです。ええ、武装解除済みという意味です。残る66名……今回のクーデター未遂の首班と見られる司令官を含めますが、これについても、現在、潮岸内務部長指揮のもと、防衛省との合同制圧部隊を急遽編成し、鎮圧に当たっています。戦闘行為は、駐屯地内部のビル内に限って発生していると報告を受けています。しかし、住民の安全を最優先と考え、現在、駐屯地から半径2km圏では、アンチスキルによる一般人の立ち入り禁止区画の設定と住民の避難誘導がつつがなく行われております。従いまして、住民の皆様には、どうかご安心頂きたい——

「なあくにが防衛大臣の協力だよ。てめえんとこの子分が起こした騒ぎだぞ。こつちの人員根こそぎ引っ張っていきやがって……」

出勤服に身を包んだ同僚の一人が、コーヒーを啜りながらテレビ画面に向かって毒づいた。

他人事のように言っちゃって、とか、これで今度の総選挙は政権交代間違いなしだ、等という意見がちらほらと上がるのを、黄泉川愛穂は窓の外を見ながら、落ち着かない気分で聞いていた。

警備員第七三支部のオフィスは閑散としていて、今は数えるほどの人数しかいなかった。アーミーの大佐率いるクーデター画策の報せが駆け巡ってから1時間強がたち、学区を跨いだ緊急招集の中、ここにいるのは、数少ない待機を命じられた隊員だ。追加の出動要請がいつかかってもいいように、全員装備を整えた状態にいる。

これであの大佐もとうとう終わりだな、という声が聞こえ、黄泉川は窓ガラスに当てた手に力を込める。違う。あの大佐がこんな無謀な策を突発的に起こす筈がない。入院した自分を見舞いに訪れた時の様子からして、彼は更迭される自身の今後を完全に受け入れているようだったし、万が一に事を起こすなら、もっと根回しを慎重に、前々から万全に行っている筈だと、黄泉川には確信が持てた。こんな、旗を上げておきながら殆どの仲間にとっぽを向かれるような失態は晒さない。

窓の外は晴れ渡り、第七学区の学生街の風景が、いつもと変わらず広がっている。テレビの向こうに映る、第二学区にあるアーミー本部の緊迫した状況とは切り離された世界だ。しかし、同じ支部に所属する自身の同僚も現場の警備に駆り出されているとあって、黄泉川の内心はちっとも穏やかではなかった。

ふと、オフィス内の僅かな同僚たちがざわめくのが耳に入り、黄泉川の意識はそちらへ向けられる。

いつの間にか、統括理事会の理事の一人による会見映像は、スタジオのアナウンサーの映像に戻っていた。

ええ、会見の途中ですがここで、たった今入って来たニュースをお伝えします。第二学区の本部駐屯地ですが、先ほど、大規模な爆発が起きたと……ええ——倒壊！^{アーミー}軍の本部ビルが倒壊したとの速報です

——あの、へりの映像、出ますか？——

「これは一体……どういうことじゃん!？」

黄泉川愛穂の驚愕の聲が響き渡った。食い入るように見つめるテレビ画面の向こうでは、白と黒の入り混じった煙を低層階から噴出し、地面へ吸い込まれるように崩れ落ちていくビルの姿があった。

制圧部隊の仕業か？ゲリラの横槍だ！いや、そんな筈がない。あれは追い詰められた大佐が自暴自棄になって——等と同僚が口々に言い合う。

「鉄装……潮騒！」

この支部の中でも、特に自分とチームを組むことが多い同僚の名を口に出していた。

携帯電話で、二人の連絡先へ立て続けにコンタクトを試みる。しかし、通じない。

吊り橋を渡るかのように、足元が急に覚束なくなる嫌な感覚に襲われた。

こんな所で待つてられるか。2, 3歩駆け出した所で、今度は自信の電話に着信が入った。

急いで画面を確認し、黄泉川はぐくりと唾を呑む。

「——支部長」

『指令だ、黄泉川』

上司の工示雅影の聲は、いつも通り神経質で事務的な声だった。

『我が七三支部含め、第七学区全支部の待機隊員は、市街に居る学生に帰宅を促すと共に、支部で待機している風紀委員ジャッジメントを自宅まで送る警備にあたる』

「あのっ！」

通話相手に被さるように、黄泉川の聲が口を突いて出た。

「そちらの状況は——私らの仲間は、無事なんですか！」

『お前が案ずることではない』

早口な返事が返って来た。

『籠城していたアーミーの残党どもが大方潰れたかもしれんが、我々支部のメンバーは全員所在の確認がとれている。誰一人、擦り傷一つ負っていない。これでいいか?』

黄泉川は、皮肉めいたものではあっても、上司の告げた答えに安堵せずにはいられなかった。

『……信じるじゃん、支部長』

「当然だ」

工二が言った。

「分かったら、任務に集中しろ。チーム分担はメールボックスに送ったから確認しろ。若者の命を守ることが使命だと言ったのは、お前だ」

了解、と黄泉川は返し、通話を切った。

聞きたいことは山ほどあった。しかし、嫌みな上司が最後に告げた言葉もまた、黄泉川の信念であった。

黄泉川は頭を振ると、指令の詳細を確認するために、他の同僚と同じようにコンピュータの画面へと向かった。

——某所

『『帝国』なんかもう、どうでもいいんだ』

学園都市中央部の市街地が見渡せる、とあるビルの屋上で、鳥鉄雄が遠くを見る目で言った。

「俺はとにかく、あのガキどもが言っていた、アキラのもとへ行く。だが、今はアンチスキルがうようよしてやがる」

鉄雄は、傍に控える人物へと顔を向けた。

「今夜だ」

鉄雄の機械の右手が擦れるような駆動音を鳴らし、軽く握られた。『『声』を、ありつたけに届けろ。思い思いに暴れて、奴らの注意を惹きつけるんだ。パーツとな』

握った右手を、鉄雄が開いた。

「後は知らねえ。『鳥男』、できるな?」

「無論です」

瘦身の薄汚れた身なりの男が、膝をついて言った。目隠しをするように布切れを巻き、そこには大きな一つ目が描かれている。

「皆、時を今か今かと待ち侘びております。鉄雄様の一声で、皆が声を

上げるでしょう。そして我々は、大覚アキラ様と一つになるのです。我らの声は一つに。次に進もうと。い、いけば、分かるツ!!そ、それが、我ら臣民のつ定め……った、っ楽しみで仕方ありません……!」唐突に鳥男は笑い出し、言葉に詰まり出した。

「つわ、我らも後を追います、すぐに!」

「……勝手にしろ」

見たくもない物を見た、とでもいう風に、鉄雄は顔を背け、再び市街地を見た。

「で、頼んでた物は持ってきたんだろうな?」

も、もちろんです、とたどたどしく言うと、鳥男はショーウインドウで使われるような深紅の幕を差し出す。

鉄雄はそれを引つたくと、右腕を覆うように袈裟懸けにした。

「……金田」

隣の男にも聞こえない程の小さな声で、鉄雄が呟いた。

屋上を吹き抜ける風が、鉄雄が身に付けた紅幕をマントのように揺らめかせた。

夕方 —— 第十学区、春木屋

「俺は信じねーぞ、そんな話をよオ!」

「臨時休業」と薄汚れた札がぶら下がった扉の外まで聞こえそうな位の大声で、山形が怒鳴った。

「鉄雄が、超能力者^{レベル}とやり合って、拳句の果てに片腕をマシーンにして消えただア? いつからあのどんケツモヤシがターミネーターになったんだよ、えエ? お前の目はフジヤマかア?」

節穴だろ、と甲斐が呆れたように突っ込むが、山形は気に留めず、金田に向き合っている。

「ああ。俺だつて自分の目が狂っちゃったンじゃねえかって思ったさ」

客がいないカウンターに肘をつき、顔の前で手を組み合わせた金田は、山形と対照的に静かな声で言った。

「だが、俺はこの目で見たんだ……アイツはただの能力者どころじゃねえ……化け物になっちまった。証人だっている」

金田が顔を向けた先には、ケイとチヨコが座っている。

「うん。金田君が言うことは、事実なの」

ケイが言った。

「アーミーの兵士はもちろん、暗部の殺し屋たちだって歯が立たないほどに、島鉄雄っていう君らの仲間のメンバーは、強かった」

山形はケイの言葉を聞いて、しばらく黙り込んだ後、頭を抑えて手近な椅子にどっかりと座り込み、大きなため息をついた。

「なんだってんだよ、畜生……大体、何でいきなりゲリラの女連れて来てんだよ。てめえらテロリストじゃねえか」

「ビル爆破のことを言ってるんなら、そいつはお門違いさね」

チヨコが腕組みをして言った。

「あれは私たちの作業じゃない。あんな911紛いのことができない訳ないだろう。それともなんだ、アンチスキルに突き出すかい？私とケイを」

チヨコの言葉に、ケイが目をやや心配そうに山形や甲斐を見たが、2人とも渋い顔をして俯くだけだった。

「そんなんじやねえよ……」

山形が、先ほどまでとは打って変わって、噛み締めるような小さな声で言った。

その時、入り口からの下り階段を駆け下りる足音が聞こえ、その場の全員がそちらを見た。

「よう、お帰りなさいませ、だ。赤いリーダーさんよ」

扉を開けるなり笑みを浮かべて入って来たのは、半蔵だった。

「駒場は一緒じゃねえのか」

金田が立ち上がって言うと、半蔵は手をひらひらと振った。

「まあそう聞いてくれると思っただけだな……要は、ヤバいのよ」

半蔵はそう言うと、首をやや傾げ、値踏みするように金田を上目遣いに見た。

「お前が帰ってきてるってことは、ここにいる全員、島鉄雄がああビル

で潰されちまった訳はねえって知ってんだろ……『帝国』の奴らが妙な動きをしているって話だ。今夜にも、大挙して何か事を起こす気だ」

「鉄雄！」

半蔵の言葉に、金田が眉間に皺を寄せて言い、甲斐や山形も一気に表情を鋭くした。

「奴が号令をかけたんだな？」

「確証はないがな。その可能性は高いと見ていいだろう。駒場さんや浜面は、奴らが涎垂らして噛みついて来た所をぶっ飛ばそうって備えてるところだ」

半蔵の面長で整った顔が、金田を見据えている。

「で、どうすんだ？ バイカーズのリーダーさんよお」

金田は振り返り、甲斐と山形を見た。二人とも、立ち上がった。「やるぞ」

「もちろんだぜ金田ア!!」

山形が血気盛んに拳を突き上げた。

「ああ、でも……マジで鉄雄が、金田の言う通りのバケモンなら、できるだけ多くのチームの力を借りねえとだ」

甲斐が金田に近寄り言った。

「予定より早い……今からシャカリキになって声をかけまくるんだ。数で圧すつきやねえだろ」

「もちろんだともよオ!!」

金田が拳に力を込めて叫んだ。

「ヨタヨタの幻想御手ジャレンキ狂い共に、いいようにやられてたまるかってんだ！俺たち、健康優良不良少年のクソ力を見せてやろうじゃねえか!!」

「私も協力する」

ケイも立ち上がり言った。

「いいよね、おばさん？」

「ああ……表立ったことはできないが」

チヨコが組む腕に血管がはつきりと浮かび上がった。

「だが、できることをしようじゃないか……私らをここまで匿つてくれているんだ。礼は返すさ。お陰で、目もはっきり見えるようになったしね」

そこで、半蔵がパンと手を叩いた。

「よしっ！そうと決まれば……実は、お前達に会わせたいヤツがいてな」

誰だよ？と金田達は顔を見合わせる。

半蔵が合図をすると、扉を開けてもう一人の人物が姿を現した。

「ジョ……ジョーカー!!」

金田が驚愕の声を上げた。

浅黒い色の風船にタンクトップを着せてモヒカンをちよこんと乗せたような男だった。それは、金田たちのバイクチームが長い間ライバルとして闘争してきた相手だった。以前は顔にピエロのペイントを施していたが、なぜか今回は、顔面の中央を縦に走るタイヤ痕の複雑な模様を描いていた。

「てめえ、のこのことそのブタっ腹晒しに来たかよ、えエ？アンチスキルの拘置所で喚いてたじゃねえかよ！」

「てめえこそ、あの爆破の場から生き延びたかよ、死に損ないが！」

憎まれ口を叩きながらも、金田の口調はどこか再会を懐かしむような気持が乗っていた。

それは、ジョーカーも同じようだった。

「どーしてお前がジョーカーを連れて来てんだ？こいつはパクラられた筈だろオ」

山形が怪訝そうに聞くと、半蔵はニヤリと笑った。

「俺らのチームも、お前らのチームも、こいつの……クラウンとは、やり合つたらうがよ」

半蔵が笑みを浮かべて言った。

「まあ、色々あって、こいつは娑婆へ戻って来た……駆け込んできたのが、駒場さんとこだった。大分入れ替わりが激しいとはいえ、まだのうのと生き残ってやがる帝国の幹部連中は、元はと言えばジョーカーの手下だ。情報はまあ、ムダじゃねえと思つたのさ」

「俺は、鉄雄の野郎を叩きのめしてえと思ってる」

ジョーカーは手近なカウチソファにどっかりとその肥満体を沈めて言った。しかし、拘留されていたせいも、心なしか体つきはやや絞られているように、金田には感じられた。

「正直言つて、てめえらに下げる頭なんぞ一つもくれてやりたくねえが……だが、仲間を大勢やられたのは、お前達と一緒にだ。俺は目の前で、仲間を殺された。泣き寝入りする訳にはいかねえ、そう思ってるだよ」

「そりゃ、まあ」

甲斐が戸惑ったように両手を頭の上に組み、金田へ視線を向けた。

「クラウンとはお世辞にも仲は良くなかったけどさあ……どう思うよ？金田」

「……ハッ、デケエ船が必要だな」

ジョーカーや甲斐の言葉を聞いた金田が、静かに言った。

「ああ、汽笛を鳴らしてやろうぜ、思い切りな」

半蔵が言うと、その場にいた全員が立ち上がる。

「よよし！乗るかア!!」

山形が氣勢を上げると、それぞれが顔を見合わせ、頷く。

金田、山形、甲斐らのバイクチーム。

ケイとチヨコ。

半蔵。

ジョーカー。

そして、呼応する者を集めるべく、行動を開始しようとした、その時。

店の外が俄かに騒がしくなった。

バイクの排気音が一気にけたたましくなったかと思うと、ガラスが割れる音が聞こえ、それからドタドタと重い物が階段を転がり落ちる音がした。

ドカン、と中途半端に開いていた扉を跳ね飛ばして転がり込んできたのは、アルコールの匂いに塗れた若い男だった。

へ、へへ、と涎を口の端から垂らして笑いながら、ふらふらと立ち

上がる。

「て、鉄雄さま！大覚さま！アキラさま、ばんざあぁあいいい!!」

そう唐突に叫んだかと思うと、鉄光りするナイフを翳して来た。

半蔵と金田が両脇から蹴りを啜え、ジョーカーが止めとばかりに一度頭上へ抱え上げてから叩き落とすと、男は痙攣して動かなくなつた。

「よオ、こいつは懐かしの元部下かよ!？」

山形が目を回している男の顔を踏みつけると、ジョーカーは舌打ちした。

「全然知らねえよ、こんなヤツ」

ジョーカーが、汚物でも見るかのように男を見下げた。

「イかれてやがる」

「もう動き出したんだね?」

ケイが、店の出入口を睨む。

外では、叫び声や排気音が勝手構わず騒いでいるようだった。

「今、追加の連絡が浜面から入った」

半蔵が携帯電話に目を落とし、しまいこむと表情を引き締めた。

「七学区の学生街でも相当な人数が暴れ出しているらしい。奴ら、見境なく騒ぎまくるつもりだ。けど、アンチスキルはアーミーの対応で手薄だし、こりゃあ案外いいタイミングを狙って来たのかもしれない」

「オイ、金田!」

ジョーカーが店を後にしようとする金田を呼び止めた。

「てめえ、いいモン持つてるらしいな……貸せ」

「いいモンだア?今急いでんのに……もしかして、アレのことか?」

金田が思い当たったかのように聞く。

「い、いや、でもアレ、すぐ充電なくなるし、バッテリー重いし、使い物になんねえぜ?」

「まあ、2, 3時間ぐらい預けろよ」

ジョーカーはカブトムシでも見つけたかのように、細い釣り目を更に細くした。

「鉄雄はヤバい力を持つてんだろ？なら、スパナとバイクで囲むだけじゃあ勝てっこねえだろ……こう見えて、俺ア手先が器用なんだぜ？」

ジョーカーが、ニヤリと口角を上げた。

——第七学区、教員住宅街

「不幸だ」

上条当麻がその一言を発するのは、つい先日夏休みに入って以降に限っても片手で数え切れない回数に達している筈だった。

「インデックス」と名乗る白装束の修道女シスターがアパートに落下してきてから次の日。科学の街に暮らす上条にとつて、その出来事だけでも目が回るような事態なのに、炎を操る「魔術師」と名乗る存在までも現れ、インデックスは負傷。「幻想殺し」イマジネブレイカーの右手をもつて撃退したものの、インデックスの傷が癒えるまで、上条は高校の担任である月詠小萌の古びたアパートに身を寄せていた。

出血を多く伴う負傷に苦しんだインデックスはまだ起き上がれず、小萌は夏季補習に関わる仕事に加え、出勤したアンチスキルの教員の分の仕事まで手掛けていて、帰りが遅い。上条は小萌が残したメモ書きを元に、主に割引の総菜を狙って夜の買い出しに出ている所だった。

その上条が今置かれた状況は、お世辞にも良くなかった。

「金だよ金エー……よこせよ、フヒヒ」

数人の男女が上条を囲んで喚いている。

みな同じように衣服は薄汚れ、中には顎が外れたように口が開きっぱなしの者もいる。

「じゃないときア、くっクスリが手に入んないのよ……あ、アキラ様に、もっとお近づきにならなきゃ、分かるでしょオ!？」

シャツが伸び切ってはだけた胸元に涎を垂らしながら、ぼさぼさの髪を振り乱した女が笑った。

「ああ、今、一つ分かったぜ……」

上条はなけなしの金が入った財布がポケットにしまわれているの

をしつかり確かめた上で、一步身を退いた。

そして、一目散に身を翻して駆け出した。

「ここは世紀末だったってなあああ!!いや、終末か!?食いつばぐれシスターやら消防法木っ端みじんの魔術師が出てきたのもそういうことか!?ちくしよー、アンチスキルは何やってんだア?助けてくれええ!!!」

ゾンビのごとく腕を伸ばして追いつがる者たちから少しでも早く遠ざかろうと、上条は四肢を全力で動かした。

その様子を、遠く離れた雑居ビルの屋上から、香水の匂いを振りまいた神父、ステイルⅡマグヌスが双眼鏡で覗き込んでいた。

「アレだよ、アイツだ」

ステイルは苛立たしさを孕んだ口調で言った。口に啜えた煙草から、煙が夕焼け空へ立ち昇った。

「あんな奴に、この僕が負けたんだと思うと、自分が情けなくって仕方ないね。しかも、この街へきてこれで2連敗ときた」

「過ぎたことを悔いても仕方ありません」

着古したジーンズを片足だけ腿の付け根から素肌を露わにするようばつさりカットした、異様な姿の魔術師、神裂火織が、裸眼で上条の姿をはつきり捉えながら言った。

「敵の戦力は未知数。こちらは増援が望めない以上、万全の備えで事にあたる必要があるでしょう。ステイル、カードの補強は済んでいるのですか?」

「当然さ。16万4千枚。なに、60時間もあれば――」

「では、明日までは少なくとも待つてくれる訳だな?」

厳めしい口調で少女の声色が聞こえたその時、神裂が目にも止まらぬ速さで振り返り、腰に差した七天七刀に手をかけたが、ステイルが待て!と制した。その声は、ステイルにとって聞き覚えがあり、尚且つ2度と聞きたくない声であったからだ。

「ミヤコの娘……何をしに来た」

ステイルが警戒を露わにした先には、白装束に身を包んだ3人の少女が、いつの間にか屋上に忍び込んで立っていた。「ミヤコ」の名を聞いた途端、神裂が目に見えて狼狽する。

「ミヤコ!?では、ステイル、この娘こらが……あなたを破ったと?」

「その話はいい!神裂!」

嫌な記憶が蘇ったのを、ステイルは煙草の香りを肺いっぱい吸い込むことで振り払う。

「インデックスには干渉しないとそちらは約束した筈だ。それとも、極東の矮小な宗教では、そんな誓いを守る倫理の欠片も持ち合わせていないのか?」

「勘違いしているようだが」

まとまりのない髪型をしているサカキが、一歩前に進み出て言った。

「我々は、『禁書目録』インデックスに用は無い。あの異能を打ち消す右手を持つ少年……上条に手を出さないでもらいたい。少なくとも明日まで。それを乞いに来た」

「……上条、当麻」

神裂は、刀の柄に触れていた指先をゆっくりと離したものの、依然油断なくサカキ達を見つめている。

「その理由を尋ねても?」

「「ミヤコ様の御意思である」」

3人が突如声を揃えて言ったことで、神裂もステイルも身を強張らせる。

「アキラの目覚めは間もなくだ。そのためには、幻想殺したる、上条当麻の力が必要だ。ミヤコ様は、そう仰っている」

サカキが静かに言った。

神裂とステイルは、サカキたちの言葉を咄嗟には理解できず、黙り込んだ。

午後に溢れ返るほど降り注がれた陽光の熱を未だに保った風が、びゅうと駆け抜けた。

——第七学区、常盤台中学校学生寮

「やかましい……」

静かな怒りを、静電気として皮膚上に湛え、御坂美琴は重厚な3層窓を開け、ベランダへと進み出た。

変哲の無い鉄筋コンクリート造りのビルが立ち並ぶ中、常盤台中学校の2つある学生寮の内の1つは、石造りの洋館を模した造りで、辺りに異彩を放っている。その正面玄関に面する通りで、下卑た笑い声や怒号が沸き起こり、バイクのエンジンが高らかに嘖く音も、閑静な夜を迎えようとする街を引き裂いていた。

美琴の部屋だけでなく、周囲の部屋の女学生たちも、何事かと次々に外へ出て来ていた。

「私も同感ですわ、お姉様^{わたくし}」

ルームメイトの白井黒子が、これまたピリピリとした殺気を放って横に並び立った。

「先ほど、初春から連絡がありました……アンチスキルがてんてこまいしているこの隙を狙って、一大騒動を起こそうとしている輩がいると」

「……『帝国』ッ!!」

美琴が拳を震わせると、挑発するかのように一際大きな声が、正面の通りからはつきりと聞こえて来た。

「よォ〜!!お嬢様方ア!一緒にイ!大覚様の元へエ!行こうぜエ!突っ込んでやるからさア、ケツを差し出せよオ!!」

ぎやははは、と下品な笑い声が聞こえ、火の手が上がるのが見える。「黒子ッ!……ここに来て、寮の規則は守った方がいいと思う!?寮内での能力行使禁止って奴ッ!」

青筋を浮かべ、髪の毛を逆立たせた御坂が、隣の黒子へ半ば怒鳴るように聞く。

「いいえ、あやつらがいるのは寮の外。全く問題ありませんわ。そうでしょう?」

黒子が拳をつくり、指をぽきぽきと鳴らした。

「今朝からのクーデター騒ぎ、そして不完全燃焼……私、とーっても、

ストレスが溜まっていますよ？」

「同感ね」

御坂の頭上に、雷光が迸った。

「ブっ潰すッ!! 帝国の野郎どもッ!!!」

7月21日(金)、夜

やった——検問を抜けた車内で、運転する黒服の男は思わず歓喜の声を漏らし、拳をハンドルに叩きつけた。

かつて、アーミー指揮官付の特務警察官として任に当たっていた門脇は、今、第二学区の外周をぐるりと囲む防音壁で行われていた、アンチスキルによる臨時検問をどうにかすり抜け、第十学区の北部を、更に北へと目指し、一人車を走らせていた。特殊に細工した後部座席下のスペースには、詰められるだけ詰めたラボの研究資料が、紙・デジタルデバイスを問わず隠されている。

「アイテム」の誘導は、リーダーの女の様子がおかしくなったのを見限り、隙を見て投げ出したが、それを差し引いても、統括理事会のある人物にとっては大層な土産となる筈だった。これを無事届けることにより、今までアーミーの窮屈なお役所仕事でがんじがらめにされていた自分も、より強い権力を手に、別の道で出世できる望みがあった。

門脇の脳裏に、一人の男の貌が浮かぶ。今回のクーデター騒ぎを直接企図した、短髪の殺気立った男。杉谷というその男から指示を受ける度に、常に蔑みの視線を投げ付けられてきた。しかし、こんな劣等感も、もうお終いになる。元の所属先を裏切ったことに見合うだけの成果を手に、自分はこの学園都市で取り立てられ、あのナイフのような男をも一気に超えてみせる。そう門脇は、自身の未来に対する野心を膨らませずにはいらなかった。

ふと、目前の信号が赤信号になり、急激なブレーキをかけて止まる。

落ち着け。喜びと併せて心の中に根を張り始めた焦りを鎮めようと、門脇は自分自身に言い聞かせた。ここで焦って信号無視をした所を、万一巡回中のアンチスキルに呼び止められては面倒だった。第二学区の鎮圧作戦と、大規模に倒壊したビルの後始末に多くが駆り出さ

れている筈だが、この混乱の中で、使える人員をどうにかやりくりして警備を強化している。無用なリスクは避けなければならない。

ふと、交差点の左手から聞こえて来た耳障りな排気音に、門脇は顔を顰める。

それとほぼ同時に、目の前の信号の色が変わったことで、門脇は車を発進させた。

「——ツブねえ!!」

直後、右足を思い切り踏み込んでブレーキをかける。

凄まじい音と光の突風を伴わせて、バイクや改造車の集団が、高速で蛇行しながら、信号等お構いなしに薄暮の古びた市街地を駆け抜けている。彼らは、門脇の乗る車の前後をすれすれに、テールランプを彗星の尾のように視界へ焼き付けていく。

「てめえ!!」

憤慨した門脇は、暴走集団が走り去っていった右手の方へ、パワーウインドウを開け下げて怒鳴る。

「ふざけんじゃねえ、この不良共——」

その時、凄まじい衝撃と共に車が揺れ、フロントガラスが一面霜の降りた地面のように白くヒビが走り、門脇は思わず両手で顔を覆う。

鳥のさえずりのような警告音が、狂ったように鳴り響く。

「何だって——」

門脇が驚愕の声を上げたその時、一台のバイクに乗った少年が、奇声を上げながら何かをぱっくり口を開けたボンネットの内部へ放り込む。

次の瞬間、門脇の乗る車は風船が割れるかのように辺りへ部品を撒き散らし、弾け、火の手を上げた。

全身を焼けつくような痛みと熱に舐め回された門脇は、奇妙に傾いた視界の向こうで、誰かが拳を突き上げているのを辛うじて認めた。

「大覚様ア!!……ばんざあアアアアアア!!」

花火だア!!と叫びながら、バイクに「帝国」と書かれた旗をくくり付けた少年は、血塗れで火に吞まれようとしている門脇を置いて、走り去っていった。

——第七学区、常盤台中学校学生寮付近

「俺たちア人数と根性じゃ他所に負けたことがねエ実力派のツツパリグループだア！ご覧あれ、女ども！俺様のマグナムもこオんなに突っ張って……」

そう叫んでベルトを外した長ラン姿の男数名の下腹部を目掛けて電撃が飛ぶと、全員が声にならない悲鳴を上げてその場にうずくまり、痙攣した。

「あーキモっ！マジでキモっ!!」

御坂美琴は嫌悪感を露わにしながらそう吐き捨てると、近くの電灯をショートさせ、男たちの姿が目に入らないようにした。

「お姉様!」

近くへ白井黒子が空間移動して現れるなり、焦った声をかけてきた。

「悲鳴が聞こえて……お怪我は!」

「うーん、大丈夫」

努めて平常な声を装い、美琴は黒子へと振り返った。

「ちよつと嫌なもの見ちゃってね……」

「仰る通りですの!」

美琴の本意に気付いているのかいないのか、黒子は憤慨の表情で寮を囲む塀へと目を向けると、今まさに塀をよじ登って侵入しようとしていた別の男を蹴り落とし、間もなく美琴の側へ戻って来た。

「ここをどこと心得ているのでしょうか、あの野蛮人どもは」

常盤台中学校の学生寮の内、「学舎の園」外苑にある一方の寮周辺では、通常では考えられない程の騒ぎが起きていた。しかし、寮内に侵入や攻撃を仕掛けようとする『帝国』一派の目論見は、お世辞にも成功しているとは言い難かった。

火炎瓶を持った男がそれを振りかぶれば、地面下の配管から水流が吹き上がり、男を窒息させる。爆破によって強固な外壁を破壊しようとする者たちには、瓦礫片を指先一つで浮かばせた1年生がそれを叩

きつける。美琴たちが滞在するこの学生寮は、常盤台中学校の2つある学生寮の内、強固なセキュリティを誇る女学校街「学舎の園」の外部に位置する方だったが、周りで侵入者を撃退している学生仲間を見ると、ちらほらと学舎の園内部の寮にいる筈の者も見当たる。同僚の危機を聞いて加勢しにきてくれたのだろうか。

「おほほほほ!!学園都市が誇る名門校、常盤台の邸に狼藉を働こうとは!!この私が薙ぎ払って差し上げましょう!」

黒髪をなびかせる学生の一人がハイテンションに声を上げ、片手に持った扇子を一振りすると、別の侵入者が塀の上にしがみついていた所を一陣の突風が吹き抜け、その男を道向かいのビルの窓ガラスへ突っ込ませた。

あれは誰だったか。確か最近転入してきた――
「それにしても、全く無謀としかいいようのない行動……目的がよく分かりませんわ。お姉様?」

黒子が眉を顰めて話しかけて来たことで、美琴の思考は遮られた。ああ、うん、と何気なく適当な返事をして、美琴は辺りを見回す。なるほど、黒子の言う通り、侵入者は大半が塀の外で戦闘不能となり、僅かに塀を越えて中に押し入った者たちも、庭先で捕縛されていた。数の上でも、戦力的にも、こちらが断然有利だ。

「街中で迷惑行為を働くに留まらず、いくら学舎の園の外部に位置するとはいえ、よりによって強能力者以上の者ばかり集まるこの常盤台の寮を襲うとは……」

黒子と美琴は、付近で一人の侵入者を警備係の大人と共に拘束している、栗色の髪をした学生の側へ歩み寄る。

「湾内さん!」

黒子が同じ1年生であるその少女に声をかける。

「この者たちの目的を知りたいのです。ちよつとよろしいでしょうか――」

「白井さん、聞いてもムダですよ、これは」

湾内絹保が美琴と黒子へと困ったような顔を向けた。

「全然話になりません」

「話にならないって……」

美琴は数歩進んでから、立ち止まり、芝生の上に拘束されて横たわる男の顔を見下ろすと、口元を思わず手で押さえた。

ひ、ヒヒ。と口を歪めて笑う男は、顎まで涎でべっとりとしていて、窓から漏れる明かりによってぬらぬらと光っている。目は焦点が合っておらず、絶えずあらゆる方向へぐるぐる視線が動いている。後ろ手に縛られた体を揺する様は、まるで殺虫剤をかけられたムカデのようだ。

「お、俺たちも、後から行くんだ。あ、アキラさま……て、てつ、ツ様——大覚様！ばつばば、万ん歳——！」

「どの侵入者もこんな感じみたいです」

顔を背けた美琴に、湾内が説明する。拘束された男が、警備係の大人に、じつとしてろ！と怒鳴られ、地面に押さえつけられる。

「相手は異能力者^{レベル2}、あるいは強能力者^{レベル3}ぐらいの連中が揃っているみたいですけど、思考が定まっていないのか、見当違いな能力の行使をしている奴ばかりです。お陰で倒すこと自体は苦じゃないんですが、理性を失ってて、正直、気味が悪いです」

「……幻想御手^{レベルアップ}……！大覚様って、一体なんですか……」

黒子の呟きに、美琴も頷く。

「どいつもこいつも末期……狂気に駆られた帝国の奴らが、もう無暗やたらに破壊行為に及ぼうとしているの!？」

「いえ、無暗とも言い切れません」

暴れる男を押さえようとする湾内に、男の衣服の裾をピンで縫い付けることによって手を貸しながら、黒子が言った。

「確かに個々の行動は短絡的で理性を失っていますが、その一方で、集団でほぼ同時に襲撃をかけてきています。まるで、誰かに無理やり操られているかのようです」

湾内が、途方に暮れた顔を黒子に向けた。

「アンチスキルの到着はまだなんですか」

それに対して、黒子がふるふると首を振った。

「通報ならもちろん済んでいます、昼間の軍のクーデター騒ぎの後

始末で人手が足りず、時間がかかると……」

「それにしたって遅すぎない?」

美琴は憮然と腕組みをして言い、塀の向こうの街明かりへ目をやる。

「だって、高位能力者も多いこの学生街への襲撃だよ? 治安維持のために、これでもかかってくらい監視カメラつけて投資してる癖に、アンチスキルの出勤が遅れるなんて、変じゃ——」

「あーらあ、ご苦労なさっているようね。御坂さん?」

嫌に鼻につく話し方の声に、美琴は顔を顰めて振り向いた。美琴にとつて、特に苦手意識が強い人物がそこに現れていた。

「あなたの言う通りい、堅牢なセキュリティを誇る『学舎の園』内部まで押し入ろうとして、あの連中、猛進して来たけどお? 丁重におもてなししてあげたわあ、もちろん」

美琴は、相手に確実に聞こえるように、大きなため息をついた。

「で、わざわざここまでお出ましって訳?……食蜂操祈!」

「そんな飢えた野犬じゃないんだしい、出会い頭に噛みつくことはないんだゾ? 御坂さん?」

数人の腰巾着を従えて、学園都市第五位の超能力者は、からかうように笑ってみせた。夜の闇と寮の明かりがせめぎ合う中で、笑みを浮かべ細めていても、目の奥の瞳がらんと奇妙に輝いている。

「もつと栄養つけなさい? そうすれば、あなたもより健康的な肉体に成長する素地はあるんじゃないかしら?」

「何の用?」

セクハラめいた冗談を耳にしてにこりともせず、美琴はつつけんどもんに言った。隣では黒子がガルルと今にも牙を剥かん程に唸っていて、むしろ彼女の方が獯猛な犬のようだった。

「まさかわざわざ助けに来た訳でもないでしょ」

「そんな冷たい事言わないで? 仮にも同窓、常盤台を牽引するあたしたちじゃなあい。早々にこちらは静かになったことだし、仲間の危

機に馳せ参じたつて訳よお、信じて?」

わざとらしくため息をつきながら、食蜂が美琴の一つの問いに三つも四つも言葉を連ねて返す。

「ま、その必要はないようだけどね? あらかた片付いているみたいじゃあない? 流石第三位の超電磁砲様^{レベルガン}つてどこかしらあ?」

「別に、あたし一人の力じゃないから」

美琴がちらりと隣で獣のように姿勢を低くしている黒子を見やり、頭をおもむろに撫でる。すると、黒子がばふつと空気を吐き出し、なぜかその場で倒れ込んだ。

「そっちこそ、こんな連中、やろうと思えば全員操って大人しくさせられるんですよ? てか、どうせやったんでしょ?」

美琴が言うと、食蜂はひらひらと手を顔の前で振ってみせた。

「やってないわよお」

「へえ?」

美琴が挑発するように声をかける。

「第五位の心理掌握^{メンタルアウト}様なら、楽勝でしょ? できない訳——」

美琴はそこで言葉を切った。

食蜂の顔から急に人を食ったような笑みが消え、真顔になったからだ。

美琴がほとんど見たことのない、食蜂の表情だった。

「あの……」

美琴が言いかけた所で、食蜂は真顔のまま、ずいっと美琴に近付く。

極端に近い距離に顔を寄せ、そして、柔らかく重みのある感触が美琴の腕に絡みついた。

「触らぬ神に、祟りなし」

生温かい吐息に包まれた食蜂の囁き声が、美琴の三半規管を撫で上げ、揺らした。

美琴は肩を震わせ、思わず食蜂の体を両手で押しつけ、身を退いた。今しがたの言葉の意味を凶りかねて、口を開いた。

まだ、腕に生々しい感触がまとわっている。

「そつ、それって、どういう——」

一瞬俯いた後、すぐに食蜂は顔を上げた。

「あらあら！得体の知れないドラッグにあっばらばーになっている人たちの脳みそなんて、指先一つ触れたくもないわあ？当たり前でしょ？」

先ほどの真顔は隠され、再びいつもの笑みを貼り付けていた。

「私の周りには、優秀な人達がたくさんいるしい」

食蜂が、隣に立つロールした髪を下げた背の高い女子の肩を叩いた。叩かれた女学生は謙遜するかのように目を閉じて顔をやや下に向けた。

「私が出るまでもないの。こんな悪漢たち相手にはね」

「嘘ついてない？アンタ」

食蜂の言葉をまともに捉えず、美琴はなおも問い詰めようとする。

「一体、奴らの何を知って——」

その瞬間、遠くから爆音が聞こえ、辺りに地響きが伝った。

美琴や他の学生たちは顔を同じ方向へと向け、地面をごろごろ簧巻かれたように転がっていた黒子も正気に戻って立ち上がった。

夜空の先に、遠くではあるがはつきりと、煌々とした炎の明かりとゆらめく黒煙が見えた。

「爆発……！」

「正義感の強い御坂さんなら、この事件を収める主役に相応しいと思うわあ、心からね」

食蜂は爆発を気にすることもなく、取り巻きと共に、はや背を向けていた。

「どうせあなたのことだもの、この寮だけじゃなく、街に繰り出て、アンチスキルの代わりに働こうとも思っているんでしょう？門限まではまだ時間があるし……頑張りなさいな！連中、数だけは雨後の筍みたいだから、気をつけてねえ」

ちよつと、と声をかける御坂に構わず、食蜂は仲間を引き連れて去っていった。

「何が目的ですよ、食蜂は……」

警戒の色を浮かべて黒子は去っていく食蜂の背中を睨む。

「……お姉様？」

「黒子」

美琴は、爆炎が揺らめく方向の空を見据えながら言った。

「ああ言われちゃあ、黙ってらんない……いや、あの女の指図なんかじゃない。アンチスキルが動けないなら、私が、私の意思で、この騒ぎを起こしている主犯をとっ捕まえてみせる！」

決然と立つ美琴の姿を、黒子は数秒の間見つめた後、ふっと笑みを零した。

「お姉様ならそう仰ると思っていましたわ」

そして、黒子も美琴の横に並び立った。

「私も……お供致しますわー！」

——第十学区、ストレンジ

「ここら一带の帝国の野郎共は掃除し終えたぜ！金田ア！」

「うっしーだがよ、そろそろパッド交換した方がいいぜえ!?ソレえ」

金切り音を上げて側にバイクを停めた山形に、赤いツナギを身に付けた金田が茶化すように言った。

「その内な——なあ金田。帝国の連中だがよ、こいつら新参者ばかりだぜ。走りは野暮だし、こつちを挑発してたかと思ったら立ちゴケして、そのまま正気を失ってる奴もいた」

気味悪イよ、と山形は顔を油オイルの匂いが染みついたタオルで拭い、地面へ唾を吐いた。

山形の報告を聞いた甲斐が、金田へ顔を向けた。

「アイツら、ほっといてもアンチスキルがパクるぜ。寝かせとけよ」

「だがよ、鉄雄の野郎は見当たらねえ」

道路標識の支柱をもぎ取って作った鉄パイプを拭きながら、忌々し気に山形は言った。

「こつちに来ちやいないとなると……」

「……七学区か」

金田が唸るように言った。

「駒場が言うには、あっちで暴れてんのは走り屋じゃねえ。レベルアップを餌にかき集めて来た能力者の集団だ。手こずってるらしい」

「能力者……」

金田の言葉に、甲斐が表情を険しくする。

「何だよ、甲斐、ビビッてるのか?」

山形がからかうような視線を向けると、甲斐はむすつとして唇を突き出す。

「違エよバカ」

「能力者が群がってるってことは、幹部連中もそつちだ」

金田が不敵に笑い、ゴーグルをかけ直した。

「ボスはその神輿のてっぺんってな……さあて! 駒場のゴリラに、縄張りを取り返す貸しを作ってやろうじゃねえか!」

おお!と一同は声を上げ、再びそれぞれの愛機に跨り、エンジン音を轟かせる。

「待つてろよ鉄雄……!」

引き裂いていく空気に黒髪をなびかせながら、山形は鉄パイプで地面を何度かノックする。

その度に、燃えるような色を輝かせて火花が立ち、後方へと散っていった。

「一体、何の騒ぎだつてんだよ！これは……」

息を切らしながら上条当麻は買い物途中だったにも関わらず店の外へ転がり出た。

周りでは、同じような帰宅途中の学生や社会人を主とした客が、悲鳴を上げながら駆けていて、中には怪我を負ったのか明らかに顔や手に赤い筋を作っている者もいる。

サイレンを鳴らし赤色灯を煌めかせながら、2、3台の警察車両が付近に停まった。間髪入れず、重厚な装備に身を固めた隊員が降りてくる。

「全員遠ざけろ！封鎖線をすぐに引け！」

「負傷者を救護します！動ける方は緑色のベストを来た隊員のもとまで来てください！」

「君、怪我は？」

アンチスキルが口々に叫ぶ中、その中の一人が上条に話しかけて来た。暗褐色のフェイスアーマーの奥に、眼鏡をかけた顔が辛うじて見えた。

「いえ、俺は、大丈夫です」

「すまないが、協力願いたい。中の状況を教えてほしい。通報がいつぺんに来て、情報が錯綜している」

呻き声や悲鳴が飛び交う中、5、6名の隊員がシールドを手に店舗の入り口に相対し、封鎖するように列を整えている。

「突然、何人かの客の様子がおかしくなってる！」

上条は、自分が見聞きしたことを何とか冷静に説明しようとする。

「叫び声上げたり、刃物を振り回したり……あと、能力者もいます！ツ
多分、エレクトロマスター電撃使い」

「君が見たのは、何人くらい？」

「わ、分かんないけど、3、4人かな——能力者は1人だと——」

上条の説明は、唐突に悲嘆の叫び声がすぐ隣から聞こえて来たこと

で遮られた。

バッグを肩にかけた女性が、店の入り口に向かって叫んでいる。子どもが！いないの！と泣き腫らしながら叫び、店へ戻ろうとするのを、アンチスキルに引き留められている。

「協力、感謝する」

上条にきつちりと深く一礼すると、眼鏡の隊員は自身もシールドを手に店舗入口へと向かっていく。

出て来やがったぞ！と誰かが叫んだ。

若い男が、半狂乱に何事かを叫びながら、何かを振り回している。店舗内の照明に照らされたその得物の切っ先がギリリと光るのを、上条は見た。確保！と合図がかかり、一斉に複数人のアンチスキルがシールドで囲み、相手を地面へ押さえつけていく。

その時、上条は、入口にほど近い駐車スペースで声を上げて泣く子供の姿を捉えた。3, 4才くらいの男の子だろうか、いつの間にもどこから現れたのか、小さな口を目いっぱい開いて、空に向かって泣き、立ち尽くしている。

先ほど、自身の子を探していた女性が、甲高く何か叫んだ。子どもの名だろうか。

「オイ！ダメだ！止めろ！」

店舗入口を固めていたアンチスキルの集団から、急に慌てた声がかかる。

本能的に、上条は嫌な予感がした。入口を見やると、数人の隊員が弾かれたように地面へ脱力した倒れ込むところだった。

「だっ大覚ウ〜アキラ様の元へエエ！行くんだア!!みんな行こうぜえ、ハハハ!!」

ストラックスに白いシャツという、どこにでもいそうな高校生らしき装いの若い男が、顔のあちこちに痣を作りながら、笑い、叫んでいた。掲げた手に、コンセントに金属ピンを悪戯で差した時のように、青白い光と火花が迸っている。

上条は右手を伸ばしながら咄嗟に駆け出す。その直後、別の隊員が男を引き倒すのと同時に、男の手からパークが放たれた。

上条の右手が男の子の眼前に差し出されたその時、電撃が炸裂し、周囲へねずみ花火のように弾け、霧散する。

母親が駆け寄り、すぐさま泣きじやくる男の子を抱き止め、一目散に離れた所へと逃げて行く。

お礼の一言も言われる暇もなかったが、上条は安堵して息をつく。

「ビリビリに比べりやあ、静電気だな、あれくらい……」

「オイ、君！大丈夫か——」

先ほど、上条に話しかけて来た眼鏡の隊員が声をかけて来た。上条は右手首を何度か捻って、それから頷く。

「驚いたな……伝導を遮断する能力か——」

「支部長！手一杯です！もっと増援がないと！」

上条が能力者であると勘違いした眼鏡の男に、救護担当を示す緑色のベストを付けた別のアンチスキルが懇願する。しかし、支部長と呼ばれた男は首を振った。

「とつくに要請している！しかし、この七学区だけでも、通報が冬眠明けのセミのように湧き出ている……緊急警報の発令もあり得るだろう。とにかく、拘束した奴を片っ端からぶちこめ、店舗内の避難は完了し——」

突然、上条の目の前で話し合っていた2人のアンチスキルが、ゴゴンという鈍い衝撃音と共に吹き飛ばされ、駐車場の地面を転がり、警備車両に叩きつけられて動かなくなった。

上条が驚愕して店舗入口の方を見ると、身の丈2mは越しているだろうか、破れたジーンズに筋骨隆々とした上半身を際立たせる白い肌着のシャツ、それに似合わぬ生真面目そうな丸眼鏡を掛けた大男が仁王立ちしていた。

「何だアイツは!?!」

残された部下の隊員が一齐に距離をとって囲み、集中的に射撃を加える。暴徒鎮圧用のゴム弾だが、囲まれて撃たればただでは済まないはずだ。上条が遠目に見ても、男は顔を幹のような両腕で覆い、怯んでいるように見える。

だが、次の瞬間、男は背後にあった何かを片手で掴むと、それを思

い切り振りかぶって放り投げる。ガタタタ、と歪んだ硬質な音が響くと、周囲を取り囲んでいたアンチスキルが、一人も余すことなく倒れ伏せた。

「えっ——」

上条は、アンチスキルが倒れていくのを目の当たりにしてから、咄嗟に頭を抱えて伏せた。

その次の瞬間、伏せた上条の、ツンとした髪の毛先を刈り取るほどの勢いで何かが猛然と通り過ぎ、けたたましい音を立てて後方の警備車両に激突した。

上条はそちらを見やってあんぐり口を開ける。ひしやげたカートが車輪をからからと鳴らして宙を舞い、アスファルトに落下する。その横では、山道で大岩の落下を受けたかのように、上条が両手を広げたよりも大きくぐにやりと変形したバンが、ゆっくりと傾き、横転した。

「お前達は、我が領土を侵犯している……!」

周囲の野次馬から上がる喚声の中、唸るような低い声を男が発した。

「いずれ、お前達も臣下へ下るのだ。大覚様の……!」

「だいかく、だいかく……! 訳分かんねえよッ!」

思わず上条は叫んでいた。理不尽だと思ったからだ。

こんなテロ紛いのことを仕出かしておいて、支配だとかそういう言葉を一方向的に宣言するのは、全く受け容れられなかった。

男の顔が、上条へと向けられる。

マズい、と上条は咄嗟に感じた。悪寒が背中を駆け上がっている。

ゴム弾の強襲を受けてひび割れた丸眼鏡の奥の眼が、上条には直接見えなくても、じつとこちらを捉えているのが分かる。

男がガラガラと背後からまたカートを引っ張り上げ、マイバッグでも持つかのように片手で持ち上げた。

「反逆者が……!」

歯を剥き出してそう唸るのを聞き、上条は背中を向けて逃げ出そうとする。

「逃げちまうんかよ?」

嫌に自信たっぷりな男の声が聞こえ、上条は思わず足を止める。あの「大覚様」ダイカクサマシンパの眼鏡男ではない。

「さつき幼子を、身を挺して守ったろ?アレはなかなかの根性だったが……」

上条の隣にふと現れた人物。前のボタンを留めず、腕に通したただけの白い学ランが、温い夜風に翻った。

「惜しいなあ、ここで背中を見せちまうんじゃ——」

うおおおっ!!と眼鏡男が気合いの乗った声を上げ、再びショットピングカートを投げ付けてくる。重力に引かれ落下することの無い、奇妙な弾丸のような軌道で、空気を切り裂いて迫って来る。

「まだまだ根性が足りないってもんよ!!」

学ランの少年が迫り来るカートを片手で受け止め、足を一歩開いたかと思うと、その勢いを生かして体を一回転させる。そして、カートをお返しとばかりに眼鏡男へ向かってぶん投げた。

カートが男の顔面に直撃して店舗に向かって吹っ飛ぶと、何故か店舗が天井を吹き飛ばして爆発を起こし、更にどう言う訳か航空シヨールのようなカラフルな煙がもくもくと立ち込めた。

野次馬も、苦境に陥っていたアンチスキルも、上条も、全員が口を半開きにして、言葉を失った。

「どおだ。こんなモンよ。あの大男、体は鍛えてたみたいだが、あの『ちよつとすごいスローイン』で伸されちまうんじゃあ、根性が足りてねえな」

「いや!おかしいだろ!」

明らかに的を射ていない少年の言葉を聞いて、放心していた上条は水を得た魚のように堰切つて言葉を吐く。

「なんなんだよ!あの投げ返し!車がぺちゃんこになる弾丸みてえな物をなんでキャッチボールできんだよ!」

「そりゃ、根性だ」

「あの爆発もか!?!どうして煙に色が付いてるんだよ!ブルーインパル

スじゃねえんだぞ!？」

上条は、先ほどまで自分が買い物をしていて、今となっては半壊し瓦礫と化した店舗を指差して喚いた。

「第一、あんなことしたらお前、中に取り残された人が——」

「ああ、それなら、心配いらねえ!」

学ランの少年が、ぐつと親指を立てて笑って見せた。

とても整った、美しい歯並びだった。

「客と従業員は、全員避難済みだ。中にいたのは、あの大男の取り巻きだけだ。『帝国』とかいう不良グループらしいな!食料やらめぼしいものを強奪していた!」

「どうして分かるんだよ」

「人生、壁の一つや二つ見透かすぐらいの洞察力は必要だろう?根性があれば、できる!」

「できねえよ!寧ろ教えてくれよ!そしたら俺、学校の『すけすけみるみる』だって、あんな苦労せずとも——」

「すまん!後にくれ!」

上条が半ばややくそになつて反論を試みていると、学ランの少年が掌を突きつけて制止した。少年が真剣な顔つきで夜空の一方向を見上げると、そちらでは火災が起きたのか、煌々とした明かりと、黒煙が立ち昇っているのが見えた。

「今、この辺りは非常に危険だ。アンチスキルは混乱しているようだからな!君も、すぐに避難したまえ!」

え、ちよつと、という上条の声を置いてけぼりにして、少年は地響きを立ててビル3階程の高さまで跳び上がる。

「お前は、一体どうすんだよ!」

「俺か?俺は——」

空中に浮遊した少年が、にっと白い歯を浮かべて笑う。

「根性を入れに行くんだよ!ひ弱つちい帝国の奴らにな!!」

それから、少年は不思議なことに、何も無い空中をまるで運動場のトラックだともいうように駆けていく。白い学ランが翻り、さながら渡り鳥のようだった。

「……………」

途方に暮れた上条が正気に戻ったのは、先ほど救った男の子とその母親が感謝を伝えるに近づき、何度目か声をかけた時だった。

学生街からやや離れた古い街並み。そこに不規則な蜘蛛の巣のように張り巡った路地の一画で、バイクに乗った3、4人の集団が弾かれたようにアスファルトを転がった。

「悪いな！」

物陰から仲間と共に姿を現した浜面は、歓喜の声を上げて走り、転げて呻いている一人の男の頭部をトルクスレンチで殴りつけた。

「今日いい天気だったからよ！物干しをしまい忘れて——」

不意に首筋に熱い物を感じた浜面は、咄嗟に身を屈める。

頭から血を流した男が、浜面の背後から殴りつけようと拳を振り被った。浜面の頭をかすめた手は焼け爛れ、べろんと皮膚が剥離しぶら下がっていて、なぜか溶接工事のような火花がはつきりと散っている。

「んだよ、その能力……！」

嫌悪感を顔に露わにして、浜面は腰を落とした体勢から素早く相手の足を払う。くぐもった声を上げて、相手が顔から地面につんのめった。

追撃しようとして浜面が立ち上がると、いきなり刺激臭のある液体が顔にかけられる。

鼻腔に押し入るような臭いに、浜面はさっと血の気が引いた。

「ヤバ——」

地面に両手をつく男が浜面へと顔を向け、歯の抜けた顔でへらへら笑う。

片手から、再び火花が散る。

次の瞬間、強烈な踵落としが男の首筋に命中し、男は手足を震わせ、今度こそ動かなくなった。

「無事!？」

大きな瞳に街灯を映して輝かせる、黒髪の少女。ケイだった。

「あ、ああ」

自分ときほど年齢が変わらない筈なのに、どこか大人びた雰囲気
に醸し出すその姿を前に、浜面は言葉に詰まる。

「すまね、ケイちゃん」

その時、丸太のような足が今しがた気絶させられた男の頭部を重機
のように踏み抜き、アスファルトにヒビを入れた。

「シャワーでも浴びるんだな、浜面」

レシートを吐き出すようないつもの声色で、針葉樹の古木を思わせ
る体躯のリーダー、駒場利徳が浜面を見下ろして言った。

「美女の鼻を曲げたいか？」

「……面目ねえ、駒場さん」

地面にめりこんだ頭の四方から血を滲ませ、ひび割れにそって雪解
け水のような血だまりを作りつつある男から視線を上げ、鼻の頭を搔
きながら、浜面が礼を述べた。

「うわ……駒場クン、容赦ないね」

ケイがくすくすと笑った。

駒場はフンと鼻を鳴らすと、携帯電話を取り出して耳に当てる。

「こちらは大方片付いた」

『そうか、サンマは大漁だったかよ——なんか言う事あんじゃねえ
か?』

電話からは風切り音とエンジン音がやかましく聞こえ、その合間を
縫うように勝気な声が聞こえてくる。

自分の仲間が地面に転がる帝国の構成員たちを抱え、引きずってい
くのを見ながら、駒場は僅かに目を細めた。

「そうだな——礼を言う」

『はっ、俺たちのチームの追込みのお陰だぜ』

「礼がてらに伝える。俺たちの情報網によれば、より強力な能力者は
七学区の学生街、お前達が向かっている方だ」

駒場はより空が明るい、中心街の空へと顔を向けた。

「恐らく幹部連中がいるのだろう」

『鉄雄のことは聞いてねえか?』

「それがからつきしだ。お前の言う事が真実なら、今回音頭を取っているのが奴だとしても不自然ではないが……ただ、島鉄雄は長らく行方を眩ましていた。子分共が好き勝手に暴れているだけでも見える」
『ハッ』

細かいことはどうでもいい、との意がこめられた返事が聞こえた。
『いいさ。ヤツをこの勢いで見つけて叩きのめしてやる。片腕がネジ巻きヤローなんだ、見りやすぐに分かるさ』

駒場の耳が、遠くの空から伝わる微かなサイレンを捉えた。

「しくじるなよ、金田。そろそろ遅れていたアンチスキルが動き出す頃だ。ジャツジメントも駆り立てられているかもしれん」

『てめエこそな、ボスゴリラ』

一際エンジンの唸る音が高まり、通話は切られた。

「ねえ」

駒場が声をかけられた相手へ目をやる。

「帝国相手にジャツジメントも動き出すって……ほんと?」

「確証は無い、が……」

駒場は逞しい腕を組んで、ケイに向かって言った。

「こんなどうしようもないクズが溢れる夜に、己の正義感だけで突っ走るジャツジメント。そんな奴に、心当たりがある……」

ケイは駒場の言葉を聞き、唇をきゅつと噛み締め、それから口を開いた。

「ねえ、その幹部連中がいそうな場所って、どこ?」

「爆発が起きたのは、東の方——一五学区寄りの化学工場! 付近の一带に避難勧告が出されたようです!」

「派手な花火を打ち上げたって訳? ムカつく野郎じゃんホント……」

路上の水分を凝結させて季節とは真逆の氷を張ろうとする男を電

撃で昏倒させながら、御坂美琴は白井黒子に言葉を返した。

二人は学生街まったただ中の大通りで、付近の建物を襲撃して回っている「帝国」構成員と戦っている。アンチスキルも駆け付けているものの、当初は相手の人数の多さ故に劣勢を強いられていたが、大能力者^{レベル4}である黒子、超能力者^{レベル5}である美琴の両名の加勢により状況を一変させていた。構成員は意味不明な言葉を喚き散らしながら、次々と逃げ出したり、拘束されたりしつつあったが、常盤台の学生寮に押し入ろうとした者たちと同様、まともに受け答えのできるものは滅多にいないようだった。

「事態のまずさにやつとアンチスキルも本腰を入れて来たようですし、既に通報はしましたが——」

黒子が不意に言葉を止め、手を翳して振り返る。

美琴や黒子の目の前の道路を、けたたましい音を引き連れて、何台ものバイクが猛スピードで駆け抜けていく。ドップラー効果によるエンジン音のグリツサンドが耳に張り付いた。

「止めて来ますわ！」

「ちよ、黒子——」

美琴が声をかけようとするが、もう一人奇声を上げて殴りかかって来た相手に気を取られる。黒子は既に空間移動を繰り返して、バイクの暴走集団に追いつこうと遠くへ去っていた。

「あんな深追いしないで——！」

「かつ金田ア!!ユーレイだア!!」

「はア? やつと鉄雄を見つけたかも知れねエって時に、寝惚けてんじやねエぞー!」

甲斐が悲痛な叫びを上げたことで、バイクに乗って逃げる帝国の残党を追いかけていた金田の意識はそちらに逸れた。

「今時ユーレイなんて、この科学の都市^{まち}にいる訳……」

そういつて視線を横に向けた金田は凍り付いた。

ツインテールの少女の姿が、点滅するように現れては消え、しかしはつきりと確実に、疾走する金田のバイクの横に追従している。

「ひ、ひえええええ!!」

金田がバイクを横倒しにして急ブレーキをかけたことで、チームの一団も止まることを余儀なくされる。

「あ、見た！俺も見たぞ甲斐イ」

「だから言ったろがよ！女のユウレイがア」

「バカヤロウこんな時に女だなんて盛ってンじゃねえよ猿かよテメエ」

「誰が、幽霊ですの？」

バイクを停めた金田や甲斐、山形らメンバーが口々に喚く中、気取った声を出して、ローファーがアスファルトの上に軽快な音を立てて降り立った。

「うわ！出やがった、ターボばーちゃん!!」

「ああ、てめえ！こないだの……」

甲斐が指さした先には、白井黒子が立っていた。

「騒いでいるから、またぞろ帝国のバカ連中かと思えば、あなた方とは……手出し無用、と申し上げた筈ですが!？」

黒子が眉間に皺を寄せて甲斐に詰め寄る。

「いや、なんでてめえ追いつけるんだよ俺らに!？」

「私、空間移動の応用には心得がありましてよ？反復して行うことで、疑似的に新幹線程の速度で移動することなど、たやす……って金田正太郎!？」

甲斐の隣で驚愕する、赤いツナギのリーダーを見て、黒子もまた驚きの声を上げる。

「今までどこにいらしてたんですの、あなた!？」

「つるせえよ、こっちにも色々事情があんだよ……」

そこまで金田が話したところで、突然、金田や黒子たちの前方で爆炎が上がる。

一同がそちらに顔を向けると、金田達が向かおうとしていた方向の、立体交差を構成しているトンネル内で火災が起こり、もくもくと黒煙が上がっている。サイレンが聞こえ、自動で作動するスプリンクラーが見えた。

「野郎！撒く気だぜ！」

憤った山形がバイクの唸りを上げる。

「待ちなさい！誰を追いかけているのです!？」

「鉄雄に決まってんだろ畜生！」

制止しようとする黒子にそう叫ぶと、山形は猛然と突き進み、炎と煙をもともせずトンネルへ突っ込んでいった。

「待て、ダメだ、山形ア!!」

金田は手を伸ばして叫んだ。とある過去が急に脳裏に蘇ってきたからだ。

鉄雄がおかしくなったのは、あの日の夜が始まりだった。クラウンを追い掛けた鉄雄は一人トンネルを突き進み、そして――。

ダメだ、一人で行っては。

油の匂いのだだようトンネルを前に、金田は胸の奥に、じつとりとした悪寒が滑り寄るのを感じた。

「見つけたぜ……」

発泡性の消火剤が沁みる目を擦った山形は、トンネルの出口からほど近い場所で、横倒しになったバイクと、足を引きずりながら路肩へと逃げる男の姿を捉えた。黒の短髪に、小柄な背格好、グレーの作業服を身に付けたその背格好は、山形が知るかつての仲間の姿によく似ていた。また、バイクに乗っているには不自然なことに、左腕を覆う形で袈裟のような布切れを纏っていた。金田が言っていたように、左腕がおかしなことになっているのを隠しているのだと察した。「待ちやがれ！鉄雄オオ!!」

山形は進路を左に切り、ふらついた足取りで路地に駆け込んだ男の背を追った。

車1台がやっと通れるかという程度の幅の路地に、その男は蹲っていた。大通りの街灯の光が、男の丸まった背を照らし出している。

バイクを停めるなり駆け出した山形は、勢いよくブーツでその背を蹴りつけ、男を地面へ這いつくばらせた。

「よくも好き勝手暴れてくれたな。鉄雄。ケツ持ちが……何があったよ」

くぐもった声で呻き、咳込んでいる男の首根っこを、山形は掴み上げた。

「オラ、てめえ、ツラ見せる——」

男の顔を自分へと向けた時、山形は目を見開いた。

片目の上に大きな青痣を作った男の顔は、鉄雄とは明らかに別人だった。知らない若い男だ。

「ヒ、ヒヒ。俺が、鉄雄様だつてエ？」

男が引き攣ったように笑うと、唇の端から涎と血が混ざった粘液が垂れた。

男は、布切れを翻し、一見何事もない左腕を伸ばし、山形の手首を掴んだ。

「ンな訳ねーだろオ。バァーカ!!」

その時、山形は背後に別の気配を感じ、振り向こうとした。しかし、突如後頭部にピリツという痺れるような痛みを感じ、次の瞬間、全身の力が、糸が切れたようにぷつりと抜けて行った。

——悪イ、金田。しくじった……

あつという間に暗くなっていく意識の中、山形はぼんやりとそう呟こうとしたが、既に言葉を紡ぐ力は失われていた。

白井黒子は、火災が起きたトンネルを避け、まずトンネルの上を横切る線路のフェンス際に降り立つ。それから間もなく、線路の反対側、更にはトンネルの向こう側の道路上へと続けざまに空間移動した。

アンチスキルによる道路規制のお陰で、片側3車線の通りには車通りが見当たらない。その中で、トンネルの出口からほど近い場所に、1台のバイクが横倒しになっているのを黒子は見つける。

黒子はそのバイクに駆け寄る。付近には持ち主らしき者はいない。辺りを見回すと、横に入る細い路地に、別のバイクと、作業着姿の男が倒れているのを見つけた。

黒子はうつ伏せに倒れている男のもとへ走り寄った。袖を乱暴に引き千切って無理やり半袖にしたようなシャツを着た男。仰向けに返したその顔に、黒子は見覚えがあった。

「あなたは……!」

先ほど、一人でトンネル内へと突っ切っていった、金田のバイクチームの男だ。

鼻の穴から、ドロツとした血液が流れ出している。

「しっかり……!」

男の顎をやや上げて、黒子は顔を寄せる。それから、首元に人差し指と中指を揃えて当てる。

ゆっくりとした動きが感じ取れる。しかし、呼びかけには全く応じ

ない。

俄かに背後が騒がしくなった。

「おい——オイ！山形ア!!」

金田達だ。火災の起きているトンネルを避けて、遠回りして駆け付けて来たのだろうか。

金田が真っ先に駆け寄り、横たわる山形の肩を掴む。

「そんな、嘘だろ——なあ、山形、山形ッ!!」

「揺らさないでください！命に関わります！」

黒子が金田の手首を掴み、一喝すると、金田は潤んだ目を黒子に向けた。

「ああ!?黙ってる——仲間が！山形が！」

「ですから！まだ生きています!!」

黒子の重ねられた言葉に、金田は目を丸くする。

「すぐに病院へ連絡を。恐らく脳内出血を起こしています。でもまだ脈はある——すぐに処置をしなければ！」

「ッ！畜生、ちくしょう……」

金田が急いで携帯電話を取り出す横で、甲斐が言葉を詰まらせた。

「一体なんで、山形……」

「島鉄雄を追い掛けていた、というのは本当ですよ!?!」

黒子が鋭く聞くと、甲斐が顔を上げる。

「あ、ああ、顔を直接見た訳じゃないが、仲間から情報を受けて、それで……後ろ姿がそっくりな奴を追い掛けてたんだ。……オイ、まさか

——」

甲斐が目を見開く。

「鉄雄が——鉄雄が、山形をやったってのか!?!」

「いいえ。手を下したのは、恐らく違います」

黒子は、拳を握り締めて立ち上がった。

「頭部に目立った外傷がないのに出血を起こしている……その手口の能力者に、心当たりがありますの」

それから、黒子は歩き出し、大通りへと足を進める。

「オイ、待てよ！」

金田が携帯を耳から離し、泣きそうな声で黒子へ叫んだ。

「どこへ行く気だ！鉄雄の野郎を狙ってるんなら、あいつは——あいつは、俺がこの手で——！」

「今、あなたがやるべきことは!!」

黒子は顔を向けず、叫んだ。

沸々とした怒りが、黒子の握られた拳に込められ、僅かに震えと成って滲み出していた。

「お仲間の傍に居ることです。これ以上、死んではいけない。きつと、助かります。きつと！」

「じゃあ、お前はどうすんだよ！」

金田の叫びに、黒子は言葉を返さなかった。

次の瞬間、黒子の姿は、金田たちの前から掻き消えた。

黒子が駆け付けたその化学工場では、消防が大挙して駆け付け、懸命な消火活動が続けられていた。

正面入り口からやや離れた産業用道路に立った黒子は、巨大な玩具カプセルを思わせる幾つもの球形タンクの林の中で、濛々とした灰白色の煙が陽の沈み切った空へと立ち昇っていくのを目にしていて。一際背の高い、3本が一塊となっている赤い煙突からは、煙と共に時折、赤橙色の炎が渦巻くのが見えた。

「黒子ッ！」

呼びかける声に、黒子が振り向く。そこには、肩で息をする御坂美琴が立っていた。

「こんな学区の端まで……一人で突っ走らないでって言ってるじゃん」

口を片手で拭い、美琴がたしなめるように言った。

「あんた、前に帝国に捕まった時だって、そうやって——」

「ええ。自らの未熟さは弁えておりますわ。だからこそ、お待ちしておりますの、お姉様」

黒子が決然とした口調で言う。瞳に、ゆらゆらとした炎の明かりや、消防の投光器から投げかけられる光が映っている。

「あれは、ポリカーボネート樹脂の原料を製造する化学工場。燃えているタンクには、フェノールから造られる有機化合物が貯蔵されているとのこと。幸いにも火災発生時は終業後で、加えて自動化が進んでいたこともあつて死傷者は無し。学園都市でも有数の企業の、管理が行き届いたこの工場にマッチを落とした輩——まだ捕まっていない、帝国の幹部の仕業だと見ていますの」

「それって、島鉄雄？」

「……いえ」

黒子の額に僅かに皺が寄り、視線が鋭くなる。

「先ほどお姉様が仰った……私、借りがありますの」

「黒子」

美琴が黒子の横顔を見つめて言った。

「あんた、そいつってまさか」

「私が気になるのは、火事そのものではありませんわ」

黒子は、火の手を上げている工場から顔を逸らし、別の方向を見た。

「……あの隣接する事務棟……アンチスキルの車が多く停まっていますわ。しかし……静かです。アンチスキルの影も見当たりません」

美琴が黒子と同じ方向へ目を向けると、なるほど、車2台が通れるほどの門が開きつ放しの出入口の向こうに、紅白の送電鉄塔と3、4階建ての校舎のような形をした建物があり、その周囲にはサイレンを付けたままの警邏車両が、少なくとも十台は停まっている。しかし、不思議なことに、そちらに人の気配は感じられず、静かだ。

「行ってみましょう」

黒子の言葉に、美琴も頷き、足を進めた。

黒子と美琴が開いた門から敷地内へ入っていった直後、1台のワゴン車が道端に停まった。

「ありがとう。ここで降ろして」

停車するなり、後部座席に座ったケイは早口に言った。

「けど、ケイさん……ほんとにいいのか？ 駒場さんは、そこまで深入りする必要は無いって」

運転席から、浜面が心配そうに振り返った。

ケイは顔を上げ、申し訳なさそうな表情を見せる。

「ごめんね、私のわがままに付き合わせて」

「何言ってるんだい、お前だけ走らせはしないさ」

助手席に岩の様に座っていたチヨコが車から降り、バックドアを開けて武器を探りながら言った。

「おばさん、でも」

「島崎がやられ、竜が生きているかどうかわからない今、あんたは私のたった一人の仲間だ。この街ではね」

チヨコがケイに向かって冷静に言った。

「帝国の幹部連中がここにいてるってんなら、ぶちのめしてやろうじゃないか……ウチの店を荒らしてくれた借りはきっちり返すさ」

「いや、これは元々、俺たちのチームと奴らとの争いだ」

浜面が慌てたように言った。

「それなら寧ろ俺が——」

「ドライバーが車を守んなきゃ、誰がこのアシの面倒を見るんだい？ 帰りは歩いていくだなんてご免だよ」

チヨコが笑って言った。

「浜面、アンタはここに居な」

「ありがとう、おばさん」

目を一瞬伏せてから、ケイは決然とした眼差しで、先ほど黒子たちが向かって行った先を見た。

「アンチスキルの車がいくつも止まってる……注意して行きましよう」

そして、叶うなら、黒子と美琴の力になりたい。

そうケイは胸の内では誓っていた。

「……やっぱりおかしい、隊員がいない」

事務棟の建物に集っている車両を1台1台見て回りながら、黒子が呟いた。

「変ね。まさか車に一人も残さず、全員突入って訳でもないだろうし……ん？」

怪訝そうに同意した美琴は、ある車両の陰、建物から見て反対側に隠れるように、何者かが膝を抱えて座り込んでいるのを見つけた。

身に付けている装備から、美琴と黒子には、その人物がアンチスキルだと分かった。

「あのー……ここで一体何が……」

美琴は横から呼びかけたが、途中で声が萎んだ。

そのアンチスキルは顔面の防具を外しており、若い男だと分かった。教壇に立ち始めてそう経っていないのだろう、大学生と言われても納得できる風貌だ。男は、美琴の声が聞こえているのかいないのか、一顧だにせずに、何かをしきりにぶつぶつと呟いている。

……いやだ、いやだ

あまりにか細かい声なので、え？と美琴は聞き返し、耳を敬てた。

「あのー！」

罅が明かない様子に、黒子が鋭く声をかける。

「ジャツジメント風紀委員ですのー……ここで、一体何が？」

黒子の声に、やつと男は反応し、顔を上げた。その目は、ついさつきまで泣き腫らしていたかのように潤み、やや充血していた。

「……嫌だ……みんな、やられた」

「みんなって、仲間が？」

美琴が尋ねると、男は目を瞬き、唇を噛み締めた。

「つ、通報を受けて来た……ここに、怪しい人物が入り込んでるって……踏み込んだら、みんな、バタバタ倒れて……ここ、怖かったんだ俺は。まだ採用されて半年も経ってないんだ、何ができるって!？」

男の肩がぶるぶると震えている。

「怪しいやつって、帝国？隣の工場の爆破を仕掛けた？」

「わ、分かんない——何も分かってない……」

美琴の問いに、男は首を振るばかりだった。

黒子は、男の顔の高さに合わせて膝をついた。

「ならば、すぐに応援を——」

「だから！俺たちが応援なんだよ!!」

黒子の言葉を遮り、男が声を上擦らせた。

「先行のチームがパニックになったって報せを受けてきた！けど、俺らも蟻地獄にまんまと落ちたって訳だ！何もできないんだよ、何かが、マジでヤバい何かが、中にいるんだ。ここに……」

黒子は口を真一文字に結ぶと立ち上がり、携帯電話を取り出し、アンチスキルの緊急コールへと連絡をとる。

「……ひとまず、私から改めて応援を要請しましたが、今はこの騒ぎで、すぐに駆け付けける雰囲気ではありませんわ」

「そう……なら」

美琴は、車列の向こうに、静かに、どこか重みをもって居座る建物の姿を見つめる。

「どうする？」

「私がやるべきことは、決まっていますわ」

黒子が美琴の隣に並び立つ。

「お姉様は？」

「もちろん」

短く、しかし自信をもって美琴が答えた。

黒子は、その返答を聞くと、満足そうに微笑んだ。

「……行くのか」

すっかり気力を失くした隊員の男が、顔を黒子たちに向けて小さく呟いた。

「君ら、たかだか学生2人に何ができるとも思えないが」

「追加の応援は呼びました」

気分を害するでもなく、黒子が言った。

「時間は少々かかるかもしれませんが……あなたはここでお待ちに

なっついて結構ですわ」

「……仲間をやられて、動けなくなった、情けない大人からの、せめてもの情報提供だ」

男が目を伏せて言った。

「敵の姿は見てない。が、多分相手は見えない所から、こちらの行動を掴んでやがった」

男の言葉に、黒子は目つきを鋭くする。

「それは、能力者ということですかね？」

「ああ、恐らく」

男が微かに頷いた。

「俺たちの無線に割って入ってきたみたいだった。俺だけじゃない、みんなの頭の中で声がしたんだ……『お見通しだ』とか、そんな感じの。それからすぐ、みんな、急に糸が切れたみたいになった……」

そこまで言っつて、男は膝を抱えて再び俯いた。

「死神みてえな奴だよ、あそこにいるのは」

それきり、男は黙り込んだ。

男の言葉を聞いた黒子は、拳を握り締めて、建物を睨みつけた。

「……やはり、私と因縁がある相手のようですよ」

「だったらさ」

美琴が黒子の肩に手を置いた。

「闇雲に飛び込んでも危険……だけど、相手が精神干渉系の能力者だっていうなら、分はこっちにある」

目を丸くした黒子に、美琴はにと歯を見せて笑いかけた。

「黒子に——私の大切な仲間。手を出したこと、絶対に後悔させてやるんだからね」

「相手方の主だった幹部で、まだ活動を続けていると見られるのが、2名います。彼らのことを、アンチスキルは、『ホーズキ』と『鳥』と呼んでいます。内、『鳥』は、こちらの位置や思念を捕捉する、或いは念話^{テレパス}を仕掛けてくる能力を持っていますの」

黒子は、美琴にそう言った。

「能力の射程範囲は不明。しかし、先日の一九学区旧スタジアムの一件から推測されることには、鉄筋建築内の遮蔽物を超え、少なくとも3〜40m離れた位置からこちらを捉えてくると見込まれています」「もう一人の、『ホーズキ』って奴は？」

美琴が問い返すと、黒子は明らかな嫌悪感を顔に浮かべた。

「……薄汚れた身なりの、肥満体の男ですわ。私は不意を衝かれてあつという間に意識を失いましたが……一九学区で殉職したアンチスキル2名の死因は、心停止。彼の仕業だと、生存者が述べています」

黒子の言葉を聞いた美琴の背筋に、ぞわつと寒気が走った。

「……黒子、一歩間違えてたら、危なかったんじゃない」

「面目ありませんわ」

目を伏せる黒子にかける言葉が見当たらず、美琴はコホンと一つ咳払いした。

「そういうことなら、まずはその『鳥』野郎をどうにかしないとね。私たちの行動が筒抜けになって、もう一人の仲間の所へ誘導される危険がある」

「ならば、建物の上の階を中心に攻めると？」

黒子の問いに、美琴はウインクしてみせた。

「ええ、まずは、私一人だね」

そして、美琴は現在、世閨に紛れ、事務棟の外壁を、磁力を操作することで蜘蛛のように登っている。

(高所からセンサーを張り巡らせているんだとしたら)

美琴の掌が、外壁を構成する鋼板と引き合い、体を重力から引き揚げてくれる。

(内部よりも見晴らしのいい場所……屋上にきつといる)

間もなく、美琴の体が3階を過ぎようという時、突如くぐもった銃声が連射して響き渡り、美琴が張り付いている壁面近くの窓ガラスが音を立てて外に向かって碎け散った。

突然のことに驚愕した美琴は一瞬集中力が途切れ、途端に体が落下しそうになるのを何とか押し留め、体勢を元に戻した。

窓はほぼ完全に吹き飛んでいる。美琴は横へ体を移動させると、顔を覗かせないよう注意を払いながら、中の様子を伺う。

「おばさんー!」

何者かが叫ぶのが聞こえた。

その声に聞き覚えがあった美琴は、窓枠に足をかけると室内へ降り立つ。

服とも呼べない汚らしい襤褸切れのようなものを纏った、頭の禿げあがった痩せぎすの男の背中が目前にあり、その向こうには、尻餅をついた大柄な女性と、庇うように立つ少女の姿が垣間見えた。

「ケイさんッ!!」

美琴が叫ぶのと、男が振り向くのと、ケイが目を見開くのはほぼ同時だった。

「なんだア? 誰か来たのかッ!?!」

男の顔が、窓から差し込む街明かりに照らされる。

奇妙な風貌だった。青白い顔の、本来目があるべきところは薄汚れた赤い布で巻かれ塞がれており、剥げ上がった前頭部には大きく見開かれた一つ目のシンボルが墨のような黒で描かれている。

そのシンボルが美琴を真正面から捉えている。思わず美琴は薄気味悪さを覚え、一瞬硬直した。

「我らが火祭りを邪魔立てするかッ!」

美琴がハツとしたとき、男が素早い身のこなしで距離を詰め、片手にギラリと光る物を握り締めていた。

「ダメッ!!」

ケイの声が響き、直後、けたたましい銃声が美琴の耳をつんざいた。ナイフが弾かれて壁に打ち付けられる。

「おのれッ!!」

男は武器を弾かれた手をもう片手で押さえ、吐き捨てるが早いのか、美琴の横をすり抜けて窓の外へと飛び出した。

美琴はすぐさま振り返り様に電撃を放つが、男には当たらない。奇妙なことに、男は落下するでもなく、上昇気流に煽られるかのように、ふわりと視界の上へと飛び去るのが見えた。

「あれが、[〃]鳥[〃]……う」

美琴は眩いたが、背後から聞こえた呻き声にハツとし、うずくまっている女性とケイに駆け寄った。

「大丈夫!?! 一体何が」

「御坂さん……おばさんが」

ケイが泣きそうな顔をして言った。「おばさん」とケイが呼ぶその女性は、脇腹を押さえ、歯を食いしばっている。押さええている手から、赤い液体が滴っている。

「あたしなら、大丈夫さね」

ヒューツと息を吐きながら、「おばさん」が言った。

「あの白い小僧、銃弾を弾きやがるとはね。細っこい見た目で判断しちゃいけないってことだ……」

「喋らないで!」

ケイが来ていたベストを脱ぎ、女性の傷口を覆うように腰にきつく巻きつけようとする。

「なあ、あんた、^{レールガン}超電磁砲だろ」

チヨコが汗の滲む顔を上げ、美琴を見つめて言った。

「ウチの食堂に顔を出した時以来か……なんであんたがここに来たかは知らないが——あの小僧とやり合うってなら、気を付けな。奴は帝国の幹部だ。どんな力を持っているか、見くびるんじゃないよ。全部」

「……あなたたちこそ、何でこんなところにいるのかは分からないけど」

目の前で流れ出る血の匂いに湧く不安を押さえながら、美琴は努めて冷静に言った。

「外に私の仲間がいる。風紀委員の。私から連絡を取るから、ここで動かないで」

「なに、風紀委員だつて——」

「議論してる余裕があると思ってるの？」

歯噛みするチヨコの言葉に被せるように、美琴はやや口調を強くする。

ケイが仕舞い込んだ拳銃や、その仲間であろう怪我をした女性の背後に置かれている血に染まったショットガンを、美琴は見やった。彼女らが、ジャツジメントやアンチスキルとは決して相性が良くないだろうことは、美琴にも想像がついた。

「……ありがとう」

ケイは言葉を詰まらせた後、頷いた。とても小さな声だった。

「あの蝙蝠は、すぐに片付けるから」

美琴は振り返って駆け出すと、男の後を追って、窓の外へと飛び出した。

運転席のハンドルに両手を預け、もたれかかっていた浜面は、ふとメール受信を告げた携帯電話を見て、目を丸くした。

「マジかよ——」

浜面は飛び起きると、すぐにケイへと連絡を試みる。

「……ヤベえ、出ない」

携帯電話をポケットに突っ込み、浜面は弾かれたようにドアを開け、車外へ飛び出した。

「早く——知らせなきゃ！」

浜面は、全力で体を動かし、先ほどケイとチヨコが向かった事務棟へと夜の闇の中を走って行った。

金属製のフェンスを易々と乗り越えた美琴は、だだっ広い屋上へと降り立った。そこはバスケットコート2面を合わせた程度の広さがあり、南向きの方向には空調の室外機のような外見をした機械が4、5個設置されていた。隣接する敷地で今なお上がる火の手の明かりが差し込み、ウレタン防水加工が施された床を照らし光沢を生み出していた。時折形を変えて揺らめく長い影を落としているのは、美琴と、もう1名居た。

「何故だ！」

一つ目のシンボルを前頭部に仕込んだ男、「鳥男」が美琴の姿を見て叫んだ。

「俺の『目』は曇りない筈！貴様のことが全く分からん。霞のようだ……何故読めない！何故捉えられない！」

「残念ね」

美琴がゆつくりと前進し、距離を詰めながら言った。

「サイコメトリー読心能力だかなんだか知らないけど、私に索敵を仕掛けてもムダ。アンタ、『帝国』の偉いヤツなんだって？聞きたいことがあるんだけど——」

「非国民め！」

鳥男が滑るように美琴に迫って来た。しかし、美琴は2、3歩横に体をずらすと、鳥男はそのまま通り過ぎ、前のめって困惑したように立ち止まった。

「どこだ！どこにいる?!」

「……アンタ、おかしいよ」

目隠しをされた顔で辺りをきよろきよろと見回す鳥男の姿は、美琴にとつて奇妙で、不恰好で、薄気味悪かった。

元々の視角を塞いでいる以上、何らかの能力を行使してこちらの位置を把握しようと試みてみるとみるべきだったが、現在の鳥男の様子は、正しく美琴を捉えているとは言いがたい。美琴のもつ電磁波の防壁レベルアップバーのお陰か、それとも幻想御手の狂乱が忍び寄っているせいなのか、美

琴には断定できなかった。

「今宵は我らが帝国、一世一代の火祭り！大覚様の大きいなる目覚めのため、鉄雄様の望みのため、有象無象の者共に邪魔立てはさせん！」
「二世一代どころか、ここでお終いにする」

美琴が吐き捨てるように言い、電撃を放つと、くぐもった声を上げて鳥男が片手を押さえ、うづくまる。先程ケイに弾かれたもの以外に、二丁目の武器を携えていたが、それもまた手から取り零す。収納式のナイフが、一瞬光を煌めかせながら落ちる。

「大覚様って何？鳥鉄雄の目的は？どこにいるの？……いや、それよりも」

美琴は電光を時折体の周囲に迸らせながら、怒りを顔に湛えて歩く。

「黒子に手を出したばかりじゃなく、常盤台ウツの寮まで襲って……とりあえず、一発痛い目に遭ってもらおうよ」

美琴の手がぎゅつと握り締められた。

その姿が見えているのかいないのか、目隠しをした顔だけははつきりと美琴へ向けた鳥男は、急にハツハツハツと引き攣った笑い声を上げた。

「俺一人をどつ、どうした所で——もう遅い！始まっている！とつ止められないんだ——大覚様の目覚めは！鉄雄様は！」

後ずさりした鳥男は、よろめきながら室外機の上によじ登る。そして、フェンスに背を預ける。

そのフェンスが、脆くひしゃげる音を立てて後方へ倒れる。

「あつ——」

美琴が声を漏らしたその時、鳥男の姿が見えなくなった。

美琴は駆け寄り、今まさに落下していく鳥男の姿を凝視した。

美琴の思考が、周囲の状況を瞬時に把握し、次の瞬間、強烈に軋む音が木霊した。

「……たとえ事故でも、死なれたら寝覚めが悪いに決まってる」
美琴は自分にそう言い聞かせた。

地面ギリギリの位置で、まるでのたくる蛇のように湾曲した雨樋の排水パイプが、鳥男の体を巻き上げていた。

「パイプが鋼^{トタン}釘だから良かったけど……アンタみたいなクズ野郎だつて、勝手にあの世へ逃げるだなんて許さないんだから」

美琴が磁力操作を解除すると、力を失った歪んだパイプは軋みながら壁へと向かってしなり、鳥男の体は冷たい地面を二転三転した。

美琴は金属製の壁伝いに降りていくと、相変わらず引き攣った笑いを上げながら倒れている鳥男へと近付いた。

「いつまで笑ってんの——答えてもらわなきゃいけないことがいっぱいあるんだから。いい加減その気色悪い目隠しを取れつての——」

美琴は無理やり、鳥男の目を覆う布切れに手をかけ、引き解いた。

「……え？」

暗がりによく見えないその貌を、美琴は電光を灯して照らす。

そして、それを目の当たりにした瞬間、美琴は抑えきれず、悲鳴を上げた。

「お姉様？何発も銃声が聞こえた物ですから、心配しました！」

アンチスキルの車列に隠れて待機していた黒子は、携帯電話で美琴と連絡をとっている。

『黒子。鳥男は捕まえた。もう建物に入って大丈夫だと思う』

「本当ですか！」

『ていうかこいつ、例の昏睡が始まって、動かないよ、もう』

「あの、お姉様？」

黒子は相手の声色にまるで覇気が無いのを心配する。

「ご無事で？」

『……ああ、私は大丈夫。ただ、ちよつと嫌なもの見ちゃって——それより』

美琴が空元気を出すように咳払いした。

『そこにいる若い男の先生、こつちに寄越してくれる？黒子から見て反対側の敷地に鳥男はいるから、拘束してほしい。逃げないとは思うけど』

「了解ですわ！」

『それから、3階の東側の突き当りの部屋に、2人、人がいる——ケイさんと、もう一人知らない女の人』

「ケイさんが？」

黒子は意外な名を聞き、驚きの声を上げる。

『連れてくる女の人を怪我をしている。何とかできないかな？』

「……分かりました。私としては、今すぐにでもホーズキ男をぶちのめしに行きたい所ですが、もうすぐ増援のアンチスキルも到着しますし、ここは人手を揃えてから行く方が安全でしょう」

『うん。私もなるべく早く合流する』

通話を終わると、黒子はいまだ怯えている若いアンチスキルに声をかけようと歩き始める。

その時、建物から、発砲音が聞こえる。

黒子はその音に足を止める。

「……また銃声……？」

「ケイちゃん、逃げろ！」

浜面の声が廊下に反響し、続け様につんざくような発砲音が2、3発聞こえる。

ケイは必死に冷たい床を這いつくばって、体を動かす。先ほどから相変わらず、両足の膝辺りから下の感覚が、まるでマネキンにすり替えられたようにぼんやりしている。そのくせ、太腿が接種を受けた後の腫れ上がりのように、妙に熱を帯びていて、とても気味の悪い感覚だった。

「畜生、なんで、なんで当たらねえんだよてめえ！バケモンかよ——」

空撃ちの音がカチカチと聞こえる。

私もそうだった、とケイはぼんやりと考えた。発汗が激しく、髪が濡れ、床の埃が毛先にこびりついた。おばさんは大丈夫だろうか。今はただ、自分はどこにかく逃げなければならぬ。

もみ合う気配の後、どうつと何かが倒れる音。

一瞬、期待がケイの頭をよぎったが、次の瞬間聞こえて来た声に、ス・トンと気持ち奈落の底に落ちる感覚がした。

「ぼっぼくを苛める気だな？お前も——不良だ、悪者は……みんなやっつけなくちやだよなあ」

あの頬かむりをした奇妙な小男だ。

この建物に入った瞬間に感じた得体の知れぬ悪寒。その発信源は全てこの男だったと、ケイは今になって分かる。

あの目隠しをした仲間ではない。こいつが本丸だ。

ちらりと目線を背後にやると、倒れ込んだ浜面の金髪が垣間見えた。

やられたのか。この建物内で、散々に打ち棄てられていた、アンチスキルの連中と同じように。

「なあ、鳥男とりお！なあんでさっきから、返事しないんだよお」
間延びした声で、小男が叫ぶ。

「どおだ、ぼっぼくは、やったぞお。こんなに、やっつけた！ぼくの手柄だ！そうだろ？銃なんて意味ないさあ、なんてったって僕ら、レベ・ル・アツ・パーに、選ばれたんだからね！」

カラカラと音を立てて、ケイの傍まで何かが床を滑って来た。

浜面の銃だ。ケイはそれを掴もうと手を横に伸ばす。

「だから、みんなの力は、僕たちへと集まる……」

途端に、体重が手の甲にのしかかり、ケイは顔を歪める。

この夏の盛りになつかわしくない、長靴のような不格好なブーツだった。

「ムダだよお、弾切れみたいだしねえ、ソレ。君の銃と、おっ、おんなじさあ」

ギリギリと自分の手を踏みつける汚れた靴から、その持ち主のそば

かすだらけの顔へと、ケイは顔を上げ、渾身の怒りを込めて睨みつけた。

「いい目してるよオ、ぼっぼくはさ、そういう目が嫌いじゃない……君みたいな、きれいな女の子が、悔しがる、苦しんでる、そういう顔がさア！だから——」

突如、小男はケイの手を踏みつけていた足の力を緩め、廊下の先へと注意を向ける。

小男が右手をぐっと握り締めて伸ばした。

「隠れたってムダさあ！知ってるぞお!!」

叫び声の後、ずっと先の曲がり角から、どたつと白井黒子が姿を現し、そのまま体を倒れ込ませた。

何故？

突如右半身の力が抜けて身体をつんのめらせた黒子は、疑問を頭に浮かべた。

「鳥男がやられたのに、なんでえって思ってたんだろお！へっへっへへ、へ、お見通しだ。ぞお」

人差し指を立てて笑いながら、「ホーズキ男」が勝ち誇った。

「でもさあ、鉄雄様の後にレベルアップを聞いた奴で、生き残りは多分僕だけだろお？つまりはだ、今びよーいんで寝てる連中の演算能力の、少なくとも半分は僕のもんってワケだよ！うん？ちがった？4分の1だったかな？うんまあ、どうでもいいことだねえウン……」

ホーズキ男は一度言葉を区切り、自分のソーセージのような親指を噛み切った。

末節の傷口から染み出した赤黒い血液が、ホーズキ男の眼前で雨粒のように丸い雫をつくり、浮かび上がった。それらの粒が弾丸のように飛び、黒子の顔に弾ける。

黒子は目を全力で瞑った。言いようのない嫌悪感が、全身を舐め上げていく。

「つまりはだ、ぼくの力……ぼくは ブラッディハンド 血流操作” って勝手に呼んでるけど……一定の範囲内だったらね、分かるのさ……どこの誰が、どん

な血液型をしていて、ただだけコレステロール値が高くって……どんな流れをしているのか、とかね。隠れたってムダっていった意味、分かったあ？もつとも、ぼくは運動音痴だから、鳥男と話ができなきや、攻めるには向いてないんだけどねえ」

黒子は、急激に痺れて感覚がなくなり始めた左腕と左足のことを考えた。

血の巡りを滞らされているのだ。

ここに来るまでに倒れていた何人ものアンチスキルも、山形も、そうやって脳への血流を阻害され、意識を奪われたのだ。

幸い、自分の思考はまだはつきりしている。

しかし、まだ自由が利く左手を懸命に動かすが、右足の腿に忍ばせた鉄釘を上手く取り出せない。

焦りが黒子の脳裏に湧き上がる。

「さて、ぼくの凄さがさあ、分かってもらえたところで、いよいよ君みたいなの、知ったかぶったジャツジメントをやっつけてあげるんだ。嫌いなんだよねえ、君らのこと……いっくら僕がリンチされてたって、たあすけど、し、ししなかつた癖にい」

黒子は、身動きのとれない自分へと、悠々と歩き出そうとするホーズキ男をきつと見返した。

しかし、男は急に倒れ込んだ。

「なっ！」

ホーズキ男が顔を振り返らせる。

上半身の自由が利くケイが、黒髪を振り乱し、必死の形相でホーズキ男の片脚を掴み、引き倒していた。

「お前、はっ放せ、放せよおお!!」

ホーズキ男が右手を開いて、ケイの顔先に突きつける。

次の瞬間、ケイがぶつぷつりと糸が切れたように、力を抜き、頽れる。

黒子は、左手で、黒く冷たいその感触を確かに掴んだ。

ケイが、ホーズキ男に掴みかかる前に、思い切り投げて床を滑らせた、浜面の拳銃だ。

「はっ、それでどうしようってっ！」

立ち上がったホーズキ男が、肩を竦めて厭味ったらしく言った。

「それ、弾切れだよ？」

「ええ」

黒子は、ホーズキ男をまっすぐ見据えながら、はつきりと言った。

「ありがとう、ケイさん……とにかく、手に触れれば十分ですの」

次の瞬間、ホーズキ男が苦悶の叫び声を上げた。

「ああああああああっっっ!!!」

ホーズキ男は、自分の右手を見ていた。

その掌のほぼ真ん中に、黒子が転移させた拳銃の銃身が刺さっていた。自身の血が、貫通した隙間から、ぴゅっぴゅっぴゅっぴゅっとして弾け飛んでいる。

「手が、手があああああっ!?!」

「あなたは、能力を発動させるときに、必ず右手を相手に向ける。それがトリガーでしょう？」

黒子は、滞っていた血流が堰を切った雪解け水のように体中を巡るのを感じていた。

「鳥男の位置探知と、念話……その助力で、あなたは、この建物内に侵入したアンチスキルの血流を遠隔的に操作して、戦闘不能に追い込んだ」

急に全身が温められるようだ。眠気に似た倦怠感が黒子を包み込みつつあった。

「でも、なぜでしょうね。皆、息がありましたわよ？倒れていた皆……バイカーズの山形も……」

レベルアップが、自分を選んだと、ホーズキ男は誇らしげに言っていた。

本当にそうだろうか？

あれがもたらす狂乱から、逃れられる者などいないのではないか？だから、能力行使の精度が低くなって……

黒子は耐えられなくなり、床に体を横たえて、重たい瞼をこじ開ける抵抗を止めた。

「……………ろこー！くろこっ……………!」

ああ、大好きな、安心する声がする。

幾人もの足音に混じって聞こえる親愛なるルームメイトの声をとどめに、黒子は意識を手放した。

——くろこ くろこ！

それは学園都市に暮らす自分にとって、やはり誰のものよりも安心する声だった。

お姉様。心配は要りませんわ。敵はこれで制圧され、町には平穏が

「黒子！」

頬をぺちぺちと、痛みを伴わない程であつたが、軽くはたかれていく。

昼白色の柔らかな光が、視界の上側から自分へと振り撒かれていた。棒状の照明が、自分の頭側にある白い壁面に取り付けられている、そこから発せられているようだ。そういえば、自分はどうも、工場の事務棟の冷たい床ではなく、柔らかいベッドに寝かされているようだ。

目が慣れてきて、自分を覗き込む人物の顔に焦点を合わせる。

「……おねえさま」

御坂美琴が口を開き、飲み込むように息を深々と吸った。

「私をもっと早く駆け付けてれば良かったんだ」

そう言うのと、美琴は両手を再び伸ばし、黒子の頬を今度はより強く、両側へ引っ張る。

「そしたら、こんな風にあんたがまた病院に厄介になることはなかったのに……いや、そもそも帝国の奴らを深追いしない内に止めればよかったのかな」

ぴりつとした痛みを黒子は感じた。

お姉様は悪くない。これは私の責任——そう言おうとしたが、フガフガとした気の抜けた音しか口からは出なかった。

——第七学区、とある病院

「おや！目が覚めたようだね？」

緑のシャツの上に白衣をまとった、中年の男の医者が美琴の後ろに現れ、声をかけてきた。目と目の間が離れ、角ばった顎をしたその顔はまるでカエルのようだと思つた。

「もう面会時間も終わりが近いんだ、そのままゆつくり寝かせてやつてもいいじゃないかと言つたんだがね？どうしても君が目覚めないと不安だというんだ。まあ、君のことを心から想つてのことだからね？」

「もちろん、存じ上げておりますわ」

頬を引つ張る手が離れた後で、黒子は美琴に向かって言い、笑顔を作つてみせた。

美琴がはあと大きなため息をつく。

「ドクターからは心配いらないうて聞いてたけど、あんたいつまでたつても起きないんだもの」

美琴に言われて、黒子はベッド脇に置かれたデジタル時計に目をやる。

工場の火災現場に駆け付けてから大分経っている。寮の門限も過ぎてしまつていた。

そんな美琴と黒子の様子を見ながら、カエル顔の医者はほんの僅かに安心したような笑みを見せる。

「友情は尊いものだけでも、あまり騒がないでもらえたら嬉しいね？ご覧の通り、今夜は手一杯なんだ」

黒子と美琴が辺りを見回すと、同室内に4つベッドがある内、少なくとも向かい側のスペースは、別の誰かが寝かされているのだろう、カーテンで閉ざされ、物音がしなかった。医者の言葉から想像するに、どの病室のベッドも埋まっているのだろう。黒子も美琴も、申し訳なさそうに口を押さえた。

「君が受けた血流障害の影響だが、短時間かつ血管の収縮が比較的小規模だったからね？それ自体の影響はほぼ無いと言つていい。念のため、血管拡張剤を低用量点滴させてもらったから、明日にでも問題なく退院できるだろうね？」

医者に言われて初めて、黒子は自分の片腕の静脈に点滴が繋がれていることに気付いた。パックのラベルに、「ニトログリセリン」と書かれている。

カエル顔の医者は、黒子の腕からバンドと瓶針を外しながら語る。「付け加えるなら、君は極度に疲労していたわけだ。正確に言うなら、君の脳がね？ 風紀委員はあくまで校内の治安維持が任務と聞いているけどね？ この騒ぎだ、熱い正義感を燃やして走り回っていたのかね？ お友達によると、君は高位の能力者だと言うしね？」

「……学区の端から端まで、ハイウェイを走る車と同じ速度で移動しましたわ。空間移動テレポートを繰り返して」

黒子の気恥ずかし気な白状に、医者はやや弛んだ頬に片手を当てながら、それはそれは、と素直な感心なのか皮肉なのかよく分からない反応をした。

「携帯に何度も着信があった。みんなも心配してるみたい」

美琴に言われて黒子が携帯電話を開くと、その通り、何件もの通知が溜まっていた。

初春、固法先輩、常盤台の学生寮仲間……。

その着信一つ一つの内容を確かめようとして、黒子はふと思い出したことがある、カエル顔の医者を見た。

「あの！ 私の傍に、他の女性が倒れていませんでしたか？」

医者は、一度瞬きをして黒子を見返した。

美琴がはっと顔色を変え、俯いた。

「あの人は——ケイさんは、無事なのですか!？」

顎に再び手を当て、医者が考え込むような素振りを見せる。

「……管を外した直後で悪いがね、少し外へ出てもらえるかね？」

黒子が連れられたロビーは、ナースステーションの向かい側にあつて、夜の時間帯ということもあり、閑散としていた。壁にかけられた大型のテレビからは、静かな音量で無人の空間に向かってニュースが流れている。その上、ほとんど白といていくらい極端に薄い桃色の床に、文句なしに白一色のロビーチェアが並んでいる風景が、目覚

めたばかりの黒子には、ひどく無機質で冷たいものに思えた。印象とは裏腹に柔らかい椅子の一つに黒子と美琴が腰かけ、その隣の椅子にカエル顔の医者が座った。

「結論から言うと、あの化学工場の事務棟に倒れていた者は、全員助かった。少なくとも、ウチに搬送されてきた人たちはね?」

「少なくとも?」

「ここもそれなりの規模だが、全ては引き受けきれない。君もジャツジメントなら把握しているだろうが、レベルアッパーの罹患者でただでさえ病床がひっ迫している所に、アーミーのクーデター騒ぎ、そしてあの『帝国』という暴徒集団の騒乱ときた。倒れていたアンチスキルの方々は、近隣の病院と分散して何とか受け入れた。中には脳血管に関わる急性疾患を起こして危険な者もいたが、ひとまず命は助かっている」

「それで——」

黒子はやや身を乗り出して医者に聞いた。

「私の近くで倒れていた若い女性——ケイさんは」

医者が口を開きかけた所で、俄かに辺りが騒がしくなった。

「ここに居たかよージャツジメント!」

赤い汚れたツナギを来た少年、金田正太郎だ。大腿に、ライディングブーツの足音をずかずかと鳴らし、怒りを顔に湛えてやってくる。黒子は面食らった。

医者は眉を吊り上げ、美琴は非常識だとしても言いたげに顔を歪めた。

「一体どうし——」

「鉄雄だ!お前は見たんだろ!!」

腕を広げ、口角泡を飛ばしながら金田が叫ぶように言う。

「どういう意味ですの?」

「山形だよ!!」

続けざまに別人の名前を口にされ、黒子は困惑する。

やめろって、とモスグリーンのジャケツトを着た腕が金田を引き留

める。金田の仲間の甲斐だ。

更にその斜め後ろには、花飾りを頭に乗せた少女が、縮こまった様子で落ち着かなそうにしている。

「初春!？」

「ごめんなさい、白井さん」

おどおどした様子で、初春が唇を噛んだ。

「白井さんが担ぎ込まれたって聞いて、急いで来たんですけど……白井さんの病室に向かう途中で、この人たちに捕まっちゃって……どうしても会わせろって」

「感心しないね? 大声を出さないでほしいものだ」

カエル顔の医者が憮然とした顔で、腕組みをしている。

何事かと、カウンターの向こうから看護師もぞろぞろと出てきたが、金田は引き下がらない。

「お前が山形を一番速く追いかけてった筈だ! 鉄雄が! 奴が、山形をやったんだろ!？」

「私は見えていませんの」

黒子は立ち上がり、毅然と金田を見据えて言った。

「私だ到着した時には、既にお仲間の——山形さんは倒れていました。近くには誰もいませんでしたわ」

金田の目が一瞬泳ぐのを、黒子のはつきりと見取った。

「……確かなんだろうなッ!」

「嘘などついても、仕様がありませんわ。私が知りたいぐらいですよ」
クソッ! と金田はため息交じりの悪態をつき、拳を握り締めて視線を落とした。

「山形も、浜面も、ケイちゃんまで……鉄雄の野郎、許さねエ……」

「そんな大切な仲間なら、ここで何ウジウジしてんの? アンタ!」

言葉を投げ掛けたのは、美琴だった。

歯を食いしばって金田が顔を上げた。こめかみをひくつかせている。

「何だと……」

「仲間を、大切な人を守りたいなら、いじけてるヒマなんか無いって

言ってるの」

美琴が続けざまに言い、金田が立ち上がる。

「お前に何が分かんのだ——」

「ええ、分かる訳ない！」

詰め寄ろうとした金田を遮るように出された美琴の声が、僅かに震えていた。

「アンタにとって、今出て来た名前の方がどんな関係だったかなんて私は知らない！けど、こっちも大切な人を、大切なモノを、アイツら帝国に好き勝手やられてんの！」

「お姉様……」

間を遮るように立ちはだかり、金田へと言葉を吐く美琴の背中へと、黒子は思わず声を漏らしていた。

美琴は金田に向かって更に口を開く。

「島鉄雄を、私は追う！見つけ出す！この手で借りを返さないと気が済まないの！アンタらバイカーズなんかよりも先に、私が倒す！」
「言ってくれるじゃねエか……」

金田の目にも力が灯っていた。

「アイツを一番よく知ってるのは俺だ。どこの能力者様か知らねえが、てめえみてえな中坊に鉄雄はやらせねえ。やるのは、俺だ！」

世間知らず、と初春が呟いたが、金田の耳には聞こえていないようだった。

急に踵を返すと、金田は歩き出す。

「行くぞ甲斐イ！招集だ！鉄雄を絶対引きずり出すんだ！」

おい、金田、と甲斐が声をかけるが、金田はずんずんと進んでいく。

甲斐は困ったような顔をして躊躇し、素早く黒子の近くへやって来た。

「悪い。アンタが見つ付けてくれなきや山形は死んでたんだ。アンタはむしろ、俺らのチームメンバーの、命の恩人なのに」

「山形さんは？無事なのですか？」

「一応、生きてる。けど、脳に酸素いつてない時間が長かったから、この先どうなるかは……」

視線を泳がせてから、もう一度黒子や美琴を見た甲斐は、頭を下げた。

「金田も、近い仲間の一人をやられて気が立ってるんだ。俺だって、そりゃ憎いけど……とにかく。ありがとう」

甲斐が感謝の言葉を述べ、金田の後を追って去っていった。

「全く。院内で暴力沙汰なんて笑えないからね？保安員を呼ぼうかと思っただよ？」

カエル顔の医者がやれやれと首を振った。

「あの、ケイさんも、この病院に？」

黒子が問うと、医者は渋い顔をした。

「……あの建物にいた女性2人かい？確かにウチに運び込まれているが……特別な病棟にいる」

え？なんで？と美琴が疑問を口に出す。

カエル顔の医者は暫し思案した後、黒子を見た。

「君はジャッジメントだ。間もなく情報が回るだろうが……あの2人には、IDが無い」

初春が驚きの表情をする。

学生はもちろん、この学園都市の住民は、老人から赤子に至るまで、個人識別番号

IDが付与されていて、それらは全て統括理事会管理下の中枢コンピュータで管理されている。外部からの来訪者にも専用の物が発行され、技術盗難を防ぐため、出入りを厳しく取り締まられている。IDが無いということは、即ち、真つ当でない人物だと暗に宣言しているようなものだった。

「ここは病院だからね？貴賤問わず、どんな人間にも、治療が最優先だよ？だから一度は私の方から断ったが……だがね？いつかは警察病院行きだ。警備員が、ベッドの上のあの2人を追及することになるだろうね？」

ゲリラ。その予感がいよいよ現実味を増してきたことで、黒子はなんとも言えない感情を抱く。

ケイが銃を寄越してくれなければ、自分はホーズキ男に為す術が無

かっただろう。そんな恩人であるケイが、テロリストと世間一般から看做されている反政府ゲリラの一員だという可能性が否応なく高まったことで、黒子の思いはぐるぐると複雑に渦を巻いた。

「初春さん。これだけ『帝国』がバカ騒ぎしたのに、島鉄雄の行方については何か情報は入ってないの？」

物思いに耽る黒子の代わりに、美琴が初春に聞いた。

しかし、初春は首を振る。

「それが、主だった襲撃メンバーは逮捕されたんですが……みんな碌な証言もしない内に、例の錯乱と昏睡状態に入ってしまった。まるで示し合わせたかのように、不気味です。襲撃は、御坂さんたちが駆け付けたあの化学工場が最後のようで、今になって外は落ち着いていませぬが」

「あの最後の幹部。『鳥男』と『ホーズキ男』からも、何も聞き出せていませんの？何かを知ってそうな物ですが」

黒子からの質問に、初春は再度首を振る。

美琴が不意に口を片手で押さえた。黒子は心配そうに美琴を見る。

「お姉様？」

「いや、ごめん……嫌なことを思い出しちゃって」

黒子と初春が心配そうに覗き込む。

美琴はため息をついた。

「……『鳥男』が錯乱した時、私その場にいたの。あの目隠しを外したら……アイツ、目が無かった」

目が？と理解できない様子の初春と黒子に、美琴は自分の人差し指を目元に持つて曲げ伸ばしする。

「駆け付けたアンチスキルが言うには、多分……抉り取ったんじやないかって」

美琴の言葉に、初春がぐっと唾を飲み込んだ。

「一体何のために……」

分からない、と美琴は呟き、なおも訥々と語る。

「アイツは、ビルから転落する直前に言ってた。島鉄雄は止められないって。あと、大覚様ダイカクサマってヤツが目覚めるとも……なんにしろ、まず

は島鉄雄を見つけ出して止めなきや、ロクなことにはならないって、分かるでしょ？自分の目をぶち抜くような連中のボスだよ？きつと、この騒ぎに乗じて、もっとヤバい何かを仕出かそうとしてるんだよ！」

美琴の言葉に、黒子はぎゅつと自分のスカートの生地を握り締めた。

その通りだ。止めなければならない。

同時に、帝国の活動が収束したと聞いて、言いようのない不安が頭をもたげていた。

仮に島鉄雄を捕まえ、帝国が崩壊したとして、今レベルアップによって意識を失っている1万人近い人々は、元に戻るのだろうか？どうすれば救えるのだろうか？

黒子の脳裏に浮かんだのは、まず佐天涙子の屈託のない笑顔。それからなぜか、己の目を失った鳥男が、レベルアップの束縛から解放されたとして、その後どうやって生きていくつもりなのだろう、という、好奇心だった。敵方の人物の、悲惨であろう今後を訳もなく想像したことに、黒子は唐突な恐怖感を覚え、一層布地を握り締める手の力を強くした。

オホン、とカエル顔の医者が咳払いをしたことで、その場の雰囲気がりセットされた。

「実は、常盤台の学生寮の寮監さんから連絡があつてね？白井君への労りと、それから……御坂君、君はすぐ帰宅するようにとのお達しなんだがね？」

やばっ、と美琴は時計を見た。

門限の8時20分を、長針は既に悠々と通り過ぎていた。

何にせよ、動き出すのは、明日の朝以降だ。

そのためにも、早く体を休ませ、英気を養わなければならない。

美琴や初春に別れを告げた黒子は、そう心に決めた。

病室へと戻る黒子の耳に、ロビーの壁掛けテレビからニュース音声が聞こえる。

……第二学区でのアーミー駐屯地本部ビル倒壊現場の搜索作業は、この後も夜を徹して行われる見込みです。この事件では、未遂に終わったクーデターの首謀者と見られる、敷島大佐等、五十名近くの所在が不明となっており、倒壊したビル内に閉じ込められている人もいる可能性があるとのこと。また、内務省のアンチスキル所管関係者によりますと、このビル倒壊は、逮捕を拒絶した敷島大佐による自爆という見方も、捜査関係者の間では現れているようです。続いて、今夕から第七・一〇学区の繁華街を中心に発生している、スキルアウトによる暴動については……

——第七学区、南の外れの学生寮

掠れたベルの音が部屋に響く。

こんな時間に誰が？

怪訝な顔をしたカオリは、寝間着の上にパーカーを羽織って、ドアスコープを覗き込む。

今日の午後からカオリの寮周辺で警備についてくれている、アンチスキルの女性だった。歳は30代位だろう。がっしりとした体格で、髪を後ろで一つに縛っている。

「定時確認ね、カオリさん？変わりは無い？」

ドアの向こうからくぐもった声が聞こえる。

「いえ、大丈夫ですが」

カオリはふっと安心し、返事をした。部屋の時計をふり返ると、なるほど、事前に約束した安否の確認をするという時刻だった。

「こんな時間まですみません、私なんかのために」

「いいのよ。あなた、『帝国』の連中から目をつけられてる可能性もあるんだし。まあでも安心して。幹部級が捕まったらしくて、もう目立った騒ぎは収まっているって情報が来たの」

「そう、ですか」

鉄雄君は——とカオリは言いかけて飲み込んだ。

涙子を昏睡状態に陥れた、レベルアップ。それをバラ撒く元手だと判った以上、もはや島鉄雄は、カオリにとって、大切な存在でも何でもない。

そう自分に言い聞かせていた。

「コンビニで、割引のおにぎり、たくさんあったから、買ってきたの。安物で悪いけど、いくつか要らない？」

それは、ありがとうございます！と、カオリは声を弾ませてドアロックを外した。

決して懐事情が暖かくはないカオリにとって、素直に嬉しい申し出だった。

ドアを開けると、アンチスキルの女性が立っていた。先ほどまでの親し気な笑顔は消え失せ、無表情で突っ立っていた。コンビニのビニル袋など、どこにも見当たらず、手ぶらだ。

「あの……」

カオリが不安に思っただけで声をかけると、アンチスキルは黙ったまま、部屋には入らず、脇へとどいた。

代わりに現れたのは、白衣をまとった女だった。

カオリはその人物に、見覚えがあった。

「あなたは……！」

「探したよ、カオリさん」

ボサボサに乱れた茶色の髪を揺らして、女が玄関に押し入ってきた。

カオリは一、二歩退がり、三和土と床の段差に踵を躓かせて尻餅をついた。

「夜分にすまないね。君の力が、必要だ。手を貸してほしい」

木山春生の、隈がはつきりと浮かび上がった目から、ギラギラとした視線がカオリに注がれる。

白衣の袖から伸ばされる手が目前に迫って来るのに、カオリはぶるぶると震えて動けなかった。

XXII. アキラ

109

7月23日未明 —— 第二学区、某所

「全く、ここは蒸し風呂のようだ —— 空調機能の強化にもっと予算請求すべきだったな、これは」

「ごちゃごちゃと計器や配管、コードが乱雑に配置された狭苦しい車内で、汚れた白衣を着たドクターが汗を拭いながらぼやいた。普段はライオンを思わせる逆立った白髪が、今は汗で垂れ下がり、生え際を後退させている額に張り付いている。

「まだ出発しないのかね!？」

「統括理事会の連中が出した警報の発効まであと何分だ?」

無数のモニターに囲まれた前方の運転席に向かって、後ろから敷島大佐が声をかける。

2分10秒です、と運転席に座る部下がきびきびと返事をする。

「対 セキユリテイボール S B 妨害電波の最終チェックを」

室内にもう1人座る部下が、大佐の指示に対してレバーを幾つか上げ下げし、モニターを見つめる。問題なし、との返答がある。

「本当にうまくいくんだらうな……」

ドクターが眼鏡を白衣の袖で拭きながら言った。元々袖自体が汚れているので、レンズが綺麗になるかは未知数だ。

「普通に走ればものの数十分で着く道程なのに、こんなかくれんぼをしながら行くとは、まるで犯罪者じゃないか」

あながち間違いではないのかもしれない、と大佐はドクターの言葉を聞いて思った。脳裏には、崩壊していく軍本部のビルアーミーの姿が蘇った。

出発時刻が迫る車内の後方へと、頭を屈めながら大佐は足を進め、積荷スペースとの間に特設された金属製の扉を押し開ける。

「気分はどうだ、お前たち」

本来はがらんだものの貨物スペースであるはずの後方は、移動式の救

急医療車両のように改造されている。簡易ベッドには目を閉じた
25号が横たわり、壁際の折り畳み椅子は26号が、そしてベルトで
固定された車椅子には、27号が座っていた。そしてその周囲を、足
を抱えるようにして、けれども警戒心を一切緩めない目つきで、少数
の生き残りの兵士が固めていた。

「問題ありませんよ、今のところは」

マサルが大佐を見上げて答える。

「キヨコは？」

「眠っています。薬に限りがある今、無暗にアキラ君や鉄雄君を追跡
するのは危険ですから」

マサルは、微かに呼吸音を立てているキヨコを横目に答えた。

「とつても静かだ」

タカシが、窓一つない壁を見上げて言った。

「昨日の夜まではいろんな声が聞こえていたけど、今は全然……」

「アキラの気配は感じるか？」

大佐の厳めしい声に、タカシもマサルも首を振る。

「けど、眠る直前、キヨコは間違いなく、今日この日に、鉄雄君がアキ
ラ君を『揺さぶる』って言ってました」

「……41号」

暫し目を閉じた後、大佐は体の向きを変え、元の座席へと戻り、どっ
かりと座った。

「石棺サルコファギへ向かう。アキラを、41号を止める最後のチャンスだ。心し
てかかれ」

間もなく、市街地のとある地下駐車場から、一台の大型トラックに
偽装したアーミーの秘密車両が現れ、昨日までの大騒ぎが嘘のように
消えた明け方の街を静かに移動し始めた。

「カオリさんが居なくなっただけ!？」

学生寮の自室のベッドに座ったパジャマ姿の御坂美琴は、携帯電話を耳に当てて叫んだ。

「なんでまた?」

昨晚、帝国の暴漢を追いかけて夜の街へ繰り出した拳句、門限を破って帰宅したことで、寮監からはこっぴどく絞られた。這う這うの体でベッドに飛び込んでから、まだほんの数分しか経っていないような気がする。しかし、白井黒子からまず聞かされた言葉に、美琴の眠気は一気に吹き飛び、思考が覚醒していた。

『詳しいことはまだ不明です。けれども、帝国の活動が激化した昨日から、危険が及ぶことを防ぐために、カオリさんにはアンチスキルの身辺警護がついていた筈ですの』

電話からは、黒子の押し殺したような声が聞こえる。時間が時間であるため、病院で通話をするには、かなり人目を気にしなければならぬだろう。

『初春が寄せてくれた情報によれば、昨晚20時の定時連絡を最後に、警護担当の職員からの報告が途絶えていたようです。その担当職員は身柄を確保されていますが、カオリさんの部屋はもぬけの殻。携帯電話や貴重品の類も置きっ放しのようですし……』

「まさか、帝国——いや、島鉄雄が!？」

かつてカオリをガールフレンドとして従えていたという、帝国の首領の名を、美琴は怒りを込めて呼んだ。

『可能性はあります。他のメンバーが軒並み捕まっている中で、いまだに行方を眩ましたままですから。とにかく、私は今日午前での退院許可が出ていますから、これから大急ぎで荷物をまとめて、支部へ向かいます。アンチスキルは昨日の今日で混乱が続いていますから、どこまで追えるか……初春と協力して、付近の監視カメラの映像を洗い出しますの』

「私も行くー!」

片手で制服のブラウスをクローゼットから引き出しながら、美琴は勢いよく言った。

『ダメです！』

しかし、すかさず聞こえた黒子の返答は拒絶だった。美琴は面食らい、抗議の声を上げる。

『どうして！』

『ニユース、見ましたか？統括理事会はアーミーのクーデター騒ぎ、それと帝国の暴動を受けて、つい先程から、七学区や十学区、二学区に第五警報を発効させましたわ！』

「だ、だいごつて——」

『“重大な科学技術の流出が著しく懸念される事態”に発令される、アレですわ——早い話が、生活必需品の買い出しや、エッセンシャルワーカーの移動を除き、学区内はロックダウンが敷かれています。今月初めのガス爆発騒ぎとは段違いの措置ですの。既にアンチスキルや帰順したアーミーの兵隊たちが、至る所に検問を始めていると聞きます。私たちジャツジメントは、身分を示せば通してもらえますが、一般の学生が捕まったなら、いくらLEVELS^{お姉様}といえども、面倒なことになりますの』

「でも、だからって——」

美琴は部屋の南向きのカーテンを開けた。夏の急ぎ立てるような夜明けは、既に外の街並みを夜の名残から引きずり出そうとしている。

「黙ってじっとしてることなんてできない！私は行く！島鉄雄がカオリさんを使ってこれ以上何か企もうっていうなら、絶対に止める！カオリさんを助け出す！」

電話の向こうで、ゆっくりとしたため息が聞こえた。

『まあ……お姉様ならそう仰って憚らないと思いましたわ』

黒子が言った。

『分かりました。私^{わたくし}がまずそちらに戻ります。それから一緒に発ち、初春と合流しましょう。今しばらくどうか、お待ちになってほしいです。何とかしてみせますわ』

「ありがとう、黒子」

体に気を付けて、と美琴は気遣いの言葉を添えると、電話を切り、白

み始めた空を睨んだ。

そういえば、黒子は朝ご飯を食べてくるのだろうか。病院食となれば、舌の肥えた黒子には物足りないだろうか。

味に自信は無くとも、自分が作ったものなら、喜んで何でも食べるだろう。取り急ぎ美琴は、これから来るであろう戦いに備えて、ルームメイトの分も含めて、腹ごしらえの支度をすることにした。

——第一〇学区、春木屋

「オイ、起きろ……いつまで寝てんだよ赤大根野郎！」

後頭部への重たい衝撃と、ささくれ立った畳が頬に擦れる痛みとで、金田は突然、ぬるま湯のような眠りから釣り上げられた。

強制的な起床特有の苛立ちを、金田は寝惚け眼で相手を睨みつけることで精いっぱいぶつけようとする。

「ツてエな……何すんだよ黒ブタ」

「黙れ。汗臭エんだよてめエ、昨日の走りから風呂入ってねえだろ、シャワー浴びてこいや……ていうかだな、朝っぱらのこの時間に集合つつたのはてめえだぞ金田」

達磨に四肢が生えたかのような体躯の男、ジョーカーが、腕を組み仁王立ちしながら金田を見下げて言った。

そうだっけ、とぼやき、あぐらをかいた金田は後頭部を搔く。

後ろでは、同じように雑魚寝していた甲斐が、畳に転がっていたコークの空き瓶でジョーカーに背中を殴りつけられ、強引に起こされていた。

昨晚、山形が緊急入院した病院から、怒りに身を任せてバイクを走らせ、やがてこの春木屋へ転がり込むように戻って来た。心には、大切な仲間をやられておきながら、鉄雄を探し当てられなかった敗北感が満ちていた。マスターの制止も聞かずにこの空いていた黴臭い従業員部屋へ押し入り、それから他のチームと連絡を取り合い、そうこうしている内に夜が深くなっていた。

そうして、夜明けを迎えていた。

「……ほかの奴らは」

金田はぼやいた。ジョーカーが振り返って再び金田を見る。

「もう……みんな来てるのか」

「馬ツ鹿じゃねえのお前。来れる訳ねえだろ」

大げさに肩を竦めて否定してみせるジョーカーに、金田は苛立ちを露わにする。

「なんでだよ」

「これを見ろツての」

ジョーカーが携帯電話に何度か指を滑らせて、画面を金田に突きつけてみせる。

そこにはSNSのタイムラインが表示されている。同じような画像や動画がいくつもアップロードされていた。

「何だよ、この……コタツがおハギ乗つけたような代物は」

金田が動画を目にしてから、自身の知識を基に直感的に表現したその機械の外見は、奇妙な物だった。街灯が輝く真夜中の公道を、ブーンという駆動音を立てながら素早く移動しているのは、5台が1列に連結した赤色のドーム型の機械だった。ドーム1つの幅は、乗用車1台分程あるだろうか、それはおおよそ正八角形に造られた平面フレームの上に設置され、八角形の頂点の内の1つおき、合計4つの頂点から、馬の脚をセラミックでカバーしたような、関節を1つずつ持つ脚が生えている。それらの先には金田達のバイクよりは一回り小さい車輪が付いていて、夜道を滑るように移動するその様は、4本脚の蜘蛛が規則正しく整列して動いているようにも見えた。

「これ……セキュリティ・ボールじゃねえか」

腰を摩りながら、身を乗り出して来た甲斐が思い出したように言った。

「何のスポーツだよそりゃ」

金田の言葉に、ちげえよ、と甲斐がやや呆れたように答える。

「そういう名前の、無人警戒機だよ。確か、アーミーと学園都市が共同開発したとかいう……最近だと、三学区で春にやってた、科学技術サ

ミットの警備に駆り出されてたんじゃなかったか?」

甲斐が目を擦りながら言った。

「そうか、と金田は適当に相槌を打ち、それから立ったままのジョーカーを睨みつける。」

「で、何でその『電気ごたつ』が街中を散歩してるって?」

ジョーカーはすぐには答えず、どっかりとあぐらをかいて畳に座ってから、やおらに口を開いた。

「……警報だ」

「ゲリラ豪雨でも来んのか? 『おりひめ』の計算も予報できないことがあるんか?」

「そうじゃねえ。理事会だ」

舌打ちしてジョーカーが言った。

「統括理事会が、レベル5の警報をこの学区に出しやがった。店の外へ出ようモンなら、山手線の電車位にはコイツを拜めるぜ」

「5つてなると、つまりは……俺らは外へ出た途端捕まるってことじゃねえか!」

甲斐の言葉に、金田も事態の厳しさを徐々に理解することができた。

金田は膝の上に置いた拳に力を入れる。

「んだと、マジなのか!? 帝国もバラバラになって、後は鉄雄を絞めるだけだってこの時に!」

「でもジョーカー、おかしくないか? セキュリティ・ボールも警報も、元はといえばアーミーの管轄だったんじゃなかったのか?」

甲斐が疑問をぶつけると、ジョーカーはタイヤ痕のペイントを施した厳つい顔を左右に振った。

「クーデターを潰されて、リーダーが生きてるか死んでるかも分からねえのに、今のアーミーにそんな権限があると思うか? 東京だよ。政府が防衛省に圧力かけて、権限を理事会に売っ払っちまいやがったのさ。おまけに、このマシンだけじゃねえ、アンチスキル、それに投降したアーミーの兵士までもかき集められて、あちこちに検問が敷かれてるらしい。俺たちは当分、この狭っ苦しい店ン中に缶詰って訳さ」

ジョーカーの言葉に、金田は俯いた。それと同時に、疑問も湧いた。アーミーが機能不全なのは分かるとして、駐屯地本部の反乱は鎮圧され、帝国の残党も昨晚の内に一掃された筈だ。それなのに、なぜ統括理事会は、日付が替わり今日になってから、このような警報を発令しているのか。

もしか、奴らも鉄雄を探しているのか？そのため、こんな大がかりな封鎖までしているのだろうか。

「……そういえば、お前は何でここに來れてるんだよ」

金田が顔を上げて口を開きかけたとき、甲斐は別の話題を切り出していた。

「他の連中は外に出るのさえ億劫なんだろう、まさか一晩中ここに泊つてたのか？」

ジョーカーは甲斐に向かってニヤツと笑みを浮かべた。

「そのまさかだ」

「じゃあ、何でてめえ、昨日俺らが帰ってきた時に、声くらいかけねえのかよ」

「マスターに作業部屋を借りたんだ」

妙な返答に、金田は、はあ？と聞き返す。

ジョーカーは徐に立ち上がった。相変わらず顔には笑みを浮かべている。

「来いよ。どうせすぐには動けねえ。俺が徹夜でチューンアップした、例の兵器、見せてやるよ。あれで鉄雄もイチコロだぜ」

金田に顔を向けて、ついに笑みを明らかに顔全体で示したジョーカーは、まるでお前のために手袋を編んだのよとでも言いたげな様子だった。金田と甲斐は顔を見合わせ、戸惑いの後、ジョーカーに案内され別の部屋へ付いて行くことにした。

——第七学区、教員住宅街

「ツな、なに、何ですか!?強盗!?泥棒?盗っ人?」

目覚めたと思ったら、急に目の前に見慣れない顔が迫っていたので、上条当麻は裏返った声を上げて飛び起きた。

「あ、とうま、おはよ」

声が出た方へ顔を横に向けると、白い修道服に身を包んだ少女、インデックスが、座卓の前にちよこんと正座していた。両手に自身の顔ほどもある大ききの膨らんだパンを持ち、口をもごもごさせていた。昨夜まで、上半身を起こすことも精いっぱいだった筈だ。その様子の変貌に、上条は目を丸くする。

「お、お前、もう動いて大丈夫なのか？」

「うん、お陰様でね。やっぱり、血を失った後は、美味しい物を食べて取り戻さないとだからね」

「そ、そういうもんか……いや、ていうか」

上条は、先程眼前にアップで映った顔の持ち主へと改めて向き合
う。

「てめえー！ミヤコンとこの——何勝手に人の家へ上がり込んでるんだよ!？」

「ここはお前の家ではない筈だが、上条当麻」

ミヤコ教の教祖の手足となつて動く、白装束の少女、サカキが答えた。相変わらず無表情に、上条へ冷たい視線を向けている。

「いや、俺たちはちゃんと、家主の承諾のもとここにいさせてもらったんだ！お前達はどうだ、不法侵入じゃねえのか!」

上条の主張に偽りは無い。ここは上条のクラス担任である月詠小萌が住むアパートの一室であり、自分とインデックスは、魔術師との戦いで受けた傷を癒すため、数日前から匿われている。

上条の言葉に、サカキはすぐに答えず、部屋の出入口へと顔を向けた。

「起きない」

のそりと廊下から現れたのは、黒髪で長身の少女、ミキだった。「相当深酒したみたいだ。いつもあんな感じなのか？というかまず、未成年ではないんだな？」

漂ってくる酒の匂いに鼻を摘み、ミキが首を振りながら上条に言っ

た。

「と、いう訳だ。承諾を得ようと努力はした」

サカキが肩を竦め、上条は頭を抱えた。

自分もこのアパートに駆け込んだ当初は驚いたが、月詠小萌はその幼い外見とは裏腹に、大の酒好きだ。インデックスを治療してくれた初日の夜こそ飲まなかったものの、翌日からは夜遅くまで、ビールやカクテルの空き缶、瓶をいくつも空けている。ちゃんと酒が抜けてから出勤できているのだろうか。

「まあまあ、上条くん、心配しなくていいよ」

インデックスとテールを挟んで向かい合い、同じようにパンを頬張っているのは、パーマが強かかった金髪の、モズだ。

「アタイら、別にインデックスちゃんや君のとこの先生に、危害を加えようなんてこれっぽっちも思っちゃいないさ」

「モズはね、やっさしーんだよ！サカキもミキも！」

インデックスが大きなパンの塊を飲み込み、笑顔をいっぱい浮かべて言った。

「とうまと同じ、命の恩人なんだよ」

爛漫なインデックスの笑顔と、発せられた言葉に、上条の心は微かに震える。

それは、不意に向けられた感謝に対する驚きか、比較されたことへの嫉妬か、よく分からないものだった。

「……で、お前ら、何が目的だ？」

それぞれが勝手に振舞っている3人娘に向かって、上条は厳しい声色を作って問うた。

「こんな朝っぱらから……言つとくが、入信はお断りだぞ。イギリス清教のシスターの御前だ。そうじゃなきゃ、一体何がしたくて――」

「上条当麻。お前の右手、イマジンプレイカー幻想殺しの力を借りるため、我々は来た」

サカキが言うのと、突如3人の娘は体の向きを変え、上条へと一様に視線を向けた。

またこれだ。上条は思い出す。

ミヤコ教の施設に強引に連れていかれた時も、この3人は時折、不意にシンクロした動作を見せた。それはとても不気味で、上条にとつて慣れるものではなかった。

インデックスが、別のパンに伸ばしていた手を止め、不安そうに上条と3人の方を見る。

サカキが口を開いた。

「今日、間もなく、アキラが目覚める。学園都市この街が滅びる危機だ。力を貸してほしい」

サカキやモズ、ミキが一樣に頭を下げたのを、上条もインデックスも、ぽかんと口を開けて見つめた。

——第一〇学区、原子力研究施設 外縁

遠くに見える山の端は、東から滲み出しつつある朝の光を予感して、徐々に碧々とした形を露わにしようとしていた。

それを背景とし、フジツボを思わせる上へと狭まる筒型をした冷却塔や、ドーム型の建屋、その他大小様々な建造物が、今日もまた日の出を受けて、その白色に統一された姿を晒そうとしていた。

学園都市最大の原子力実験施設の周囲には、緩衝林がぐるりと取り囲み、さらにその外周は数百m以上に渡って空き地が設けられている。そしてその縁には、高圧電流に有刺鉄線、防獣スピーカーを携えたフェンスが、侵入者を拒もうと立ちはだかっていた。

第5警報が発令された第十学区の明けは、とても静かだった。

そのフェンスに面したある一か所に、ふらりと一人の人物が現れた。

ぼろぼろになった赤いマントを時折はためかせる少年は、目の前のフェンスの、その向こうに姿を現しつつある施設群に目を凝らす。

少年の目の前で、フェンスは軋む音を立てたかと思うと、竹細工のように簡単に、大きくひしゃげ、一人一人が優に通れる隙間を作った。

島鉄雄は、その内部へと一步を踏み出した。

——第一〇学区、原子力実験施設外縁

パシツ、と軽くはたき落とすような音が聞こえ、島鉄雄は背後の空を振り返った。

見ると、2対のプロペラを有したドローンが、奇妙に歪んだ形をふらつかせながら墜落し、砂地へと落ちて火花を散らせた。

「監視モジュールの一種だよ」

いつの間にか、先程鉄雄が足を踏み入れたフェンスの裂け目を背に、一人の男が立っていた。頭を角刈りにし、サングラスをかけた、冷たい雰囲気を漂わせる男だ。真夏の朝、既にじわじわと汗が滲むような気候だというのに、黒のスーツを纏い、片手をスラックスの懐に突っ込んで立つ姿は、まるで最初からそこに居たというような雰囲気を醸し出していた。

「随分と大胆に押し入るのだな、41号」

サングラスの向こうから、恐らくはこちらに視線を向けて、男が言った。

「それとも、島鉄雄、と呼んだ方がよいだろうか」

「誰だ、てめえ」

鉄雄は面倒だという感情を露わに短く言った。

「^{アーミー}軍の残党かよ。あのビルでくたばったかと思っただぜ」

「そう邪険にするものでもない」

男が顎に手をやって答えたとき、驚くべき程静かに、音を立てず、鉄雄の周囲に迷彩服姿の兵士達が集まって来た。

「……いや、違えな」

鉄雄は、銃を向けるでもなく、ただ鉄雄を囲んでいる兵士たちを見回して、警戒心を高める。

「雰囲気は違えんだよ、何となく。アーミーの兵隊連中は、もつと泥臭い感じがしたが……お前ら、アーミーじゃねえな？さては、ビルでドンパチやり合ってたほうの奴らか」

「我々の身分はさて置きだ。どうせあと1時間もすれば、以後関わる

ことはない」

丸刈りの男が言った。

「島鉄雄。そちらに申し出がある。このまま闇雲にこのだっ広い研究所を歩くのも骨が折れるだろう。我々が、アキラの元へ案内しよう」

「何だと？」

鉄雄が眉をぴくっと上げ、ドスを利かせて言ったが、男の表情は対照的に、微動だにしなかった。

7月23日、朝

目覚めた瞬間に鼻腔を満たしたのは、石油のようにべた付いた匂いだった。

カオリは目覚めてからまず、全身の節々に突っ張った痛みを感じる。膝と肘をそれぞれ九の字に曲げて、胎児のように横たわっていたことを知る。やたら天井の低い自動車の車内に自分がいることに気付いた。頬に張り付く椅子の感触は、決して硬くは無かったが、ざらついた皮革らしさを十分にカオリに伝えていた。頭をもたげて身を起こそうとした瞬間、祈りを捧げるかのように胸の前に寄せていた両手首付近で金属質な音が鳴り、ようやく自身が硬く冷たい物で束縛されていることを知った。

「手錠……」

口から出た声は、自分でも驚く位に掠れていた。無性に、このままでは餓死してしまうかのような焦燥感に襲われ、慌てて唾を飲み込む。はじめ、喉が微かに痛んだ。エンジンがかかりっ放しの車内は空調が効いていて、暑さは無かったものの、空気がとても乾いていた。自分は風邪をひいてしまうんだろうな、と、現在の状況に似つかわしくない懸念が一瞬頭をよぎった。

カオリが知る乗用車の物よりも、ずっと角度が後ろ倒しになっている座席に身をもたれかかせ、姿勢を立て直す。窓の外には朝陽の眩し

さが明らかに見て取れる。窓の外には、何台か分の駐車場の空きスペースと、白色の壁をもつ3階建ての施設の一面がそう遠くない距離に見える。反対側の窓から見える風景もどこかの街中であるという以外は、カオリに見覚えのある物ではなく、ここがどこなのか、見当もつかなかった。

自分はなぜ、こんな所にいるのか？

昨晚、自分のアパート周辺を警戒してくれていた警備員の女性が、部屋を訪ねて来たのを思い出した。その時、自分は部屋の扉を開けて、それで――。

不意に、ガタツと車が解錠される音が響き、カオリは鼓動を跳ねさせた。

「起きていたか」

くぐもつた声が窓越しに聞こえた。木山春生だ。長く伸ばした茶色がかつた前髪が夏の朝陽を受け止め、目元に影を落としている。その影の中でも、目の下には明らかに隈がはつきりと浮き出ている。不健康そうな顔には、これといった表情が無く、強いて言えば諦観が窺えた。

木山は車を回り込むと、運転席から乗り込み、黒色のアタツシユケースを助手席へ放り込んだ。

「体は冷えていないかい」

木山は身を後部座席の方へ乗り出して、カオリの姿勢を整えると、シートベルトを斜めにかけてカオリの身体を固定した。

「ほんのちよつと席を外すだけだとしてもね、ここ連日の猛暑だ。エンジンをつけっ放しにしたが、かえって毒であつたなら申し訳ない」「一体……」

カオリは、途中まで言いかけて、改めて唾を飲み込んだ。

「なんなんですか」

「実に曖昧な質問だな」

木山は手に収まる程度のサイズのマグを口元に運ぶ。

「それは、なぜ君を連れ去ったか、という意味かね」

続いて木山がカオリに差し出したのは、パック入りのジュースだ。

コンビニやスーパーでしばしば見かける。

「ソルティ・レモネードは好みかい。もうここ何年も、子どもと接することが少なくてね。君ぐらいの年頃の女の子が、どういうものを好むのか、いまいち私は疎いが……飲むといい。熱中症は避けねばなるまい。安心したまえ、毒は入っていない」

ストローを差し込んで、カオリの口元に突きつけられる。

「あなたは、涙子ちゃんを……佐天さんを救うために、力を貸してくれると思ってました」

カオリは、差し出されたストローを無視して、言葉を詰まらせながら言う。

手錠をかけられ、見知らぬ場所へ連れて来られたこの状況が、良いものである筈がない。目の前にいる人物が、顔見知りではあるとは言え、そんなことは気休めにもならない。カオリは、喉元まで上がって来た恐怖心にえづきそうになりながらも、何とか勇気を振り絞って話した。

「佐天……あの幻想御手レベルアップで昏睡された女の子か」

カオリが飲み物を受け付けないと察し、木山は容器を差し出す手を引つ込め、黒のストッキングを履いた自身の膝元へ視線を落として言った。

「友達なんです。私の、大切な」

カオリが声に力を込めて言った。

「あなたが、私をこんな風に誘拐したりして、何をするつもりなんですか」

「そうだな……」

相変わらず、木山は視線をカオリに合わせようとしなない。下を向き、両手をハンドルに乗せたまま、考え込んでいるようだった。

「そのレベルアップを、真に完成させるため……と言ったら、信じるかい？」

カオリは、今しがた木山が口にした言葉が理解できない。

「どう、という意味です」

「幻想御手の使用者は、最終的に意識を保った者が、他の昏睡状態にあ

る者の演算能力を拝借できるんだ」

木山が、ようやく顔を上げ、カオリへと顔を向けた。

「今なお、この学園都市で活動している使用者は、私が把握している限りたった2人だ。残った方が、演算能力を総取りできる。だから、2番目には……島鉄雄君には、その座を明け渡してもらわねばならない。分かるかい？」

木山の口元に、カオリが見る限り初めての笑みが浮かんだ。

「君にはその交渉の場に立ち会ってもらいたいんだ。カオリさん」

カオリは、先程木山に差し出されたレモネードを飲んでおけばよかったと、ふと後悔した。

車を発進させようと木山がギアを切り替える後ろで、カオリはまたしても生唾を飲み込もうとしたが、それ以前に口の中がカラカラだった。

——第一〇学区、原子力実験施設

「し、侵入者？」

明るいパールグレーの作業服を身に纏った所員は、素っ頓狂な声を上げた。

「何を目的に——まさか、テロとか——」
「詳細は不明だ」

アンチスキルやアーミーの制服が入り混じった人員が物々しく周囲を警護する中、サングラスを掛け、髪を短く切り揃えたりーダーだという人物が冷静に言った。

きっかけは、今朝の夜明けの直後、施設外縁部の北部地域を監視していたドローンの一機が、異常を検知したことを知らせるアラームを鳴らしたことだった。そこからは事態は早かった、ものの15分もしない内に、アンチスキルとアーミーの合同部隊だという警護チームが、内務局から派遣されてきたという。元々、この施設はアーミーのエネルギー局から委託を受けたアーミーが警護を任されていたが、昨

日のクーデター騒ぎで混乱している中、余りに急速に事態が動いていて、所員たちは混乱していた。現在、各種実験施設の運転はストップし、必要な箇所には制御棒が挿入され、冷却措置が取られている。こちらとしては、放射性災害を予防する取り組みは恙なく実行できている。後は、その謎の侵入者とやらが、大人しく目の前の屈強な部隊に制圧され、昨日のクーデター騒ぎ以来どこかへ逃げ出してしまっている平穏が戻って来ることを祈るばかりだった。

「ここは我々が護る。所員は皆、速やかに誘導にしたがって避難しろ。直ちにだ」

有無を言わせぬ口調で、何故か一人スーツ姿のリーダーが言ったので、応対する所員は泡のように吹き出す疑問を無理やり飲み込み、小刻みに頷いた。

間もなく、所員たちが慌ただしく居なくなったモニタールームで、スーツ姿の男、杉谷は携帯電話を取り出し、部下へと指示を発する。「部外者は居なくなつた。あとは、島鉄雄を問題なく、『カプセル』へと導け」

——第一〇学区、春木屋

「いいか、そいつを無暗に落としたり壁にぶつかけたりしてみろ！絶対にやらかすんじゃないぞ。この俺が丹念に詰め替えてやったファイバー光学繊維だ、正しく、安定して使う限りはだな、電力変換率は、てめえが持ち込んだ時に比べて10%は向上している筈だ。だがな、俺が厳選してやったその外層は繊細なんだ。衝撃が加われれば、中の石英がクラッド」

「つせえよ、ちつたあ黙つてろ！」

いかに自らが改造を施したレーザー銃の省電力性が向上しているかについてマシンガンの如く御託を並べるジョーカーに、金田は苛立つて声を荒げた。

「てめえの機械いじりの御託を拝みにきたんじゃないやねえんだぜ」

「でもよ、ジョーカー。そこまで拘って改良したっていうんなら、どうして自分のモノにしないんだ？」

朝方のバーの店内は静まり返っていて、客の姿は無い。金田がレーザー銃を手にとって様々な角度から眺めている横で、甲斐が不思議そうに言った。

「お前らしくもねえだろ」

椅子にふんぞり返って座るジョーカーは、腕を組み直し、睨むように甲斐を見据えた。

「……そりゃあ、俺は鉄雄アイツが憎い。アイツのお陰でどん底に叩き落とされたさ。仲間も大勢失った。何より、この俺が、アイツのことを怖いと思っちゃまった。てめえらのチームの中でも、真っ白いひよっこだと思つて見下してたヤツにな」

ジョーカーが、一言一言を噛み締めるように言う。

「だが、アイツのことを一番よく知ってるのは、お前達であり、多分……金田、てめえだ」

ジョーカーに名を呼ばれたことで、武器を弄っていた金田も手を止め、顔を上げた。

「俺の手でケリをつけてやりたい気持ちはヤマヤマだ。けどよ、うまく言えねえが……その役を背負しよつてんのは、金田、てめえなんじやないかと思うんだ。だから、こうやって、力を貸してやる」

感謝しやがれ、と最後に取つてつけたように言い放ったジョーカーに対し、金田は暫く目を丸くしていたあと、ニヤツと笑みを浮かべた。

「ああ」

不敵な笑みだった。

「恩に着るぜ」

金田は、手にしたレーザー銃の傍に置かれた箱型のバッテリーを撫でた。ラボでは1機のみだったが、形・大きさが違えど適合するものを、ジョーカーがもう1機、別の機械から切り離して調整し、用意してくれていた。

「アーミーのラボじゃあ、相手を牽制はできたけどよ、すぐバッテリー切れになりやがった。今度こそは鉄雄の額デコに一発、食らわせてやる

ぜ」

その時、カウンターの奥から現れたマスターが、大きな欠伸をひとつ飛ばすと、リモコンを手に取り、テレビの電源を入れた。

映ったのは、画面端に青い速報の帯を伴ったニュース映像だ。昨日からのアーミーのクーデター騒ぎや、発令された警報に関わる報道が、どの局でも延々と流れている。

「随分余裕かましてんなア、店の仕込みはいいのかよオ、タコ親父」

金田がからかって声をかけると、マスターはフンと不機嫌そうに鼻を鳴らした。

「分かってて言ってるんだろオこのガキ。こんな警報が出てる街で、誰が飲みに来るってんだよ」

「来るヤツはそんなン気にしないで来んだろ。ここをどこだと思つてやがる、屋台尖塔だぜエ？」

「どうせ商売上がったたりだ。面倒くせえんだよ」

カウンターに肘をつき、半開きの目でテレビを眺めながらマスターが言った。

「それよりもよオ、お前らいつまで駄弁ってるつもりだ。アンチスキルやアーミーに目を付けられてるからってよ……ウチの店は教会じゃねえんだぞ」

「客なんざ来ねえって言ったのはてめえだろがコラ」

金田が立ち上がり、憤慨して言った。

「何なら、タコの耳に懺悔ってか、聞かしてやろうかってんだ……ん？」

どうした、と甲斐が怪訝そうに声をかけた。

金田は悪態をつくの唐突に止め、マスターが視線を向けているのと同じ、女性アナウンサーが現行に目を落としながら読み上げるテレビのニュースを見ている。

「……繰り返しお伝えします。内務局から先程発表された情報に寄りますと、今日午前5時30分頃、第十学区の——……原子力研究所において、襲撃行為が発生したとの通報がありました。現在、アンチスキルとアーミー……えー、これはクーデターに参加しなかった部隊

です。これらの即応部隊が対応に当たっているとのこと。これを受け、エネルギー局は自動通報システムの起動により、発電所をはじめ、各種実験施設の稼働を緊急停止し、発電設備については冷却措置を稼働させました。襲撃を行っているのが、単独犯なのか複数犯なのか、昨日より、一連のアーミーの武装蜂起やスキルアウト騒乱との関連性また人的被害、施設への被害が発生しているかなど、詳細は現時点では分かっておりません。現在、施設周辺は原子力特別研究特区に指定されているため、避難命令の対象となる住民は居ないとのことですが——」

「鉄雄だ!!」

金田が弾かれたように大声を上げたので、甲斐もジョーカーも驚いた。

「ヤツだ! ヤツはそこにいる!」

「待て、待てよ金田。なんで分かんだよ」

傍に寄ってなだめようとする甲斐に、金田はキツと視線を飛ばした。

「昨日、ラボから逃げ出した時、知らねえ女が現れて、そこで、あの妙なガキども……実験体ナンバースの連中が言ってた。レベルアップにやられた奴らが喚いてやがる名前があつたら! “アキラ”は十学区の原発、地下深くに眠ってるって!!」

「急にそんなモン言われても分かんねえよ!」

甲斐が困惑して言う。

ジョーカーも立ち上がった。

「甲斐の言う通りだぜ金田ア。いくら帝国のジャンキー共がそんなうわごとをくつつちゃべっていたとしてもだ。その“アキラ”と鉄雄の間にどんな関係があんのかなんて、俺らには何一つ分かつちやいねえ」

「だが! アイツはきつとあそこに——」

金田が反論しようとしたその時、マスターが、あつ、という声を上げてテレビを指差した。

「……」ここで、内務局から公開された、施設周辺の緩衝区域を巡回する

監視ドローンが撮影した画像をお伝えします。この……髪型からして、男性、のように見える一人の人物が映っていますが、これは……」
金田も、甲斐もジョーカーも、黙って画面を食い入るように見つめた。

奇妙にコントラストの弱い画像には、だだっ広い更地のような場所に、撮影側から視線を外して歩いている最中の一人の人物が映っていた。

上空からズームアウトして捉えた写真だが、逆立ち気味の短髪と、何より人物の右半身を覆うように肩からかけられた赤い布が目立っていた。その顔は、前方を真っ直ぐに見つめているようだった。

「鉄雄だ……！」

金田は再度、かつての仲間の名を噛み締めるように口にすると、レーザー銃を引つ手繰り、バッテリーのストラップを肩にかけるや否や、甲斐やジョーカーを振り返ることもなく、猛然とバーの出入口を破るように開け、地上への階段を駆け上がった行った。

「どっ、どうすんだよ——」

「知るか、こうなったらアイツは止まる性質タチじゃねえ！てめえがよく分かってんだろ！」

ジョーカーが一喝すると、甲斐は覚悟を決めたように口を真一文字に結んだ。

「やるっきゃねえな……」

甲斐が握り拳を作って言った。自らに言い聞かせるようだった。

「アンチスキルがなんだ、アーミーがなんだ……！金田があそこへ辿りつけるように、全力でやってやるんだ」

「もう一度、呼べるだけ、仲間を集めようじゃねえか」

ジョーカーが、甲斐と共に階段を走って昇りながら言った。

「頭数は多けりや多い方が、目眩ましにやあなる」

店の裏手で、甲斐とジョーカーが追いついた時、金田はボロボロになった銀色のポリエステルのバイクカバーを、今正に取り去ったところだった。

巨大な前輪と、そこから流線形を描くフロントガラス、そしてロゴステツカー交じりに、全面に至る赤のボディカラーが、目に飛び込んできた。

—— 原子力実験施設内、「石棺」サルコファジ地下

学園都市で最大の原子力関連の研究を行う施設、その敷地の一角には、煙を吐き出す建屋とは対照的に、静的に佇む巨大な構造物がある。それはアーチ状をした、高さ100m、全長は150mにも達しかつという、巨大なコンクリートの塊で、表面はポリカーボネートでびっしりと覆われている。前世紀に発生した原子力発電所の悲惨な事故後、放射性物質の飛散を食い止めるために建造された—— 少年くとも一般には、構造物の目的はそのように伝えられていた。

その構造物の地下奥深く、かつて、アーミーの大佐とラボの研究者一行が足を通わせた、極寒の区域。そこには、厳重な防寒服に身を包んだ一団が現れているが、彼らはアーミーやその研究者たちとは異なる。

ガラス張りのコントロール・ルームで、何名かがパネルを操作すると、照明の明かりが辛うじて差し込む奥まった場所で、表面を結氷させた重い扉が、軋みながら横へと開いていく。

赤い布きれをマントのように纏った少年が、暗闇の中へと進んでいく。傍目にはかなりの軽装だが、氷点下を優に下回る寒さに震える様子はない。

防寒服の一団は、少年が歩みを進めるのを見届けると、元来たエレベーターへと足を向け、その場を去った。

凍てついた床を這う巨大な配管を避けるように歩き、少年は暗闇を見通す目で、眼前の巨大なカプセルを見つめる。

「会いに来てやったぜ……中に居るんだろ」

島鉄雄の脳裏に、不意にレベルアップの甲高い金属音が木霊する。それは長三度に近い和音を形成し、コンサートホールのステージど真ん中で、ハンマーを鉄琴の鍵盤へ打ち付けたような響きだ。

カプセルのネームプレートに張り付いた氷が、不意にぴしりと音を立てて剥がれ落ちた。

へ A K I R A

N O . 2 8 へ

「アキラ君が!!」

それまで車に揺られながらこんこんと眠っていた筈のキヨコが突然弾かれるように叫び、敷島大佐は目を見開いた。

「感じるわ———すぐ目の前に、いるわ、彼が———」

「キヨコ!」

大佐は、キヨコが横たわる寝台の柵に手をかけ呼びかけた。

「誰が、誰がいるというのだ!」

「僕達にも……分かる」

「ウン、アイツだ……」

マサルとタカシが言った。こめかみを押さえ、顔を歪めている。

大佐は何かを察したようにはっと息を呑んだ。車両内に居る他の兵士たちの表情にも、緊張が走る。

「鉄雄君が、アキラ君の目の前に、居るわ」

キヨコがそう言った。

大佐の額に、汗が流れた。

「先を越されたか……」

その時、運転席との連結部がノックされる。

「大佐!」

前方から呼びかける部下の声に、大佐は顔を向けた。

「検問です———有人の。声を潜めてください」

「やれやれ、41号を止められず、アキラにも辿り着かれて。……止められたのは我々の方という訳か」

タバコ好きのドクターがぼやいた。落ち着かない様子で両手の指を合わせ、ピアノのトリルを弾くように忙しなく動かしている。

敷島大佐は一層顔を険しくし、頭を抱えた。

「木山春生がカオリさんの誘拐犯!？」

白井黒子はここ数日、驚きのあまり、普段にもましてこのような裏返ったような声を出すことばかりだ。

黒子の隣には、通常はこの支部に立ち入れない筈の御坂美琴の姿がある。黒子の手引きでオフィスに入れてもらった美琴は、たった今知った事実には、腕組みをして難しい顔をしている。

「なんで、木山先生がそんなこと……」

「カオリ先輩のアパート付近の防犯カメラの映像から、特定しました」
険しい顔つきで初春飾利が頷く。

「警護にあたっていた警備員アンチスキルの女性隊員を何らかの手段で懐柔し、カオリさんを連れ出し、車に乗せたようです」

初春がディスプレイの画面を美琴と黒子に向ける。そこには、車高の極端に低い、平べったい形をしたスポーツカーが、モノクロの画面奥に向かって走り去っていく様子が繰り返し再生されている。

「また、随分目立つ車を……車種もナンバーも割れているのでしょう?これでは捕まえてくださいと宣言しているようなものですわ」

黒子が渋い顔をして言ったが、初春は首を振る。

「それが、昨日からの騒動の連続で、アンチスキルは混乱し通しで……まだ態勢を整えて追跡する所まで至っていないんです。今朝からの5級警報で、やっとまともな検問を敷き始めましたから、それで引つかかってくれればいいんですけど」

もしもカオリさんの身に何かあったら、と初春は顔を曇らせる。

黒子は大きいため息をついた。

「目的は? 一体何を考えて木山先生はそのようなことを?」

先程美琴が呟いた疑問を、黒子も同じように口にする。

「目的はともかく、木山がとった行動について分かったことがあるの」
クリップ止めされた紙の束がデスクにばさりと置かれたことで、一同が顔を上げる。

支部のリーダーである固法美偉が真剣な表情を浮かべ立っていた。

「分かったことは?」

黒子の問いに、固法は一瞬眉を上げ、本来部外者である美琴を見や

る。

美琴は口を結び、背筋を伸ばした。

「……まあ、いいか、どうせ5級警報の出てる緊急時だし」

小さな声で呟いたあと、固法はコホンと咳払いをした。

「木山春生は行方を眩ます直前まで、水穂機構病院に入院してたでしょ？木山が病院を抜け出た経緯を、アンチスキルが調べてただけど、その報告がこちらにも回って来た。木山春生は、アーミーから身辺を保護されていたことを利用して、病室を自分の研究室代わりにしていた……幻想御手の」

「レベルアップの!？」

美琴や黒子、初春が驚きの声を上げる。黒子が、プリントアウトされた紙の束を取り、流し読みしながらめくっていく。それを、横から美琴と初春が覗き込む。

「木山が割り当てられた個室は特別で、病院内の他の公衆無線とは別に、中継ウェブサーバーを介して独立したクラウドとデータを送受信するようになっていた。ほとんどの痕跡は消去されていたけど、僅かに残ったものから、レベルアップの何人もの罹患者の脳波を分析したデータが復元された。そして決め手は——」

「……木山先生自身の脳波との一致」

書類に掲載されていた棘波の画像を目にして、美琴が息を呑む。

「そう、患者の固定化された脳波の形状は、90%以上の割合で木山春生のそれと合致していた」

固法が言った。

「あの人は、大脳生理学の研究の一環として、脳波を暗号化して電子キーの役割を果たす技術の開発に取り組んでいた。自分の脳波を研究材料にして、その成果を公開していたことから割り出せたの。加えて、今回の病院での動向については、院長も一枚噛んでいる。院長は、木山先生の大学時代の恩師だっというから……動機はまだ不明だけれど、木山がレベルアップの研究を続けられるよう手回しをしていたって、アンチスキルに問い詰められて、吐いた」

一気に語ると、固法は大きく肩で息をつき、疲れた様子で椅子に体

を預けた。そして、ずれた眼鏡を一度外し、ハンカチで拭きながら再度ため息をついた。

「レベルアップを広めたのは帝国。そもそも帝国にレベルアップを提供したのは、木山先生とみてまず間違いなさそう……でも、これだけの昏睡患者を生み出してまで、一体何を狙って……」

「それもそうですが！まずはカオリさんの安否です！」

初春はパシツと自分の両頬を手で叩くと、自身のコンピュータに向かい、猛然とキーボードを叩き始めた。美琴はその様子に若干気圧され、身を引く。

「先輩が何か危害を加えられてたら……ッ！こうなったら、私が街の監視カメラ映像に風潰しにハッキングして……」

「初春さん。あなたがその方面で凄腕なのは認めますが」

黒子がなだめるように言った。

「街の警備もようやく嚴重に整ってきたところですし、ここはアンチスキルからの連絡を待つて——」

その時、オフィスに設置された電話が電子音を鳴らし、着信を告げた。

ガタツと音を立てて固法が立ち上がり、眼鏡をかけると、受話器を取り上げ素早く応答する。

「第一七七支部です。——はい……木山春生が！検問に！」

固法の答える声に、その場の一同が顔を上げた。

「やったー！」

美琴は思わず声を弾ませた。

「後は、カオリさんを早く——」

「えっ——今、なんて!?!」

固法が続けざまに驚きの声を出したので、美琴を始め、皆が面食らった。

受話器に手を当てて、固法が美琴たちの方を振り返る。

「木山春生が、一〇学区との境界の検問で発見されて——」

その顔には、信じられないという文字が今にも浮かびそうな様子だった。

「強行突破したって……その場のアンチスキルやセキュリティボールは、壊滅だと」

美琴と黒子、初春は、3人で顔を見合わせた。

「カオリ先輩……」

初春が発した消え入るような言葉に、美琴も黒子もしばらく返事ができなかった。

数分前

「質問、してもいいですか」

いまだ手錠を嵌められたままのカオリは意を決し、運転席の木山春生へと声をかけた。レベルアッパーに関わるこの一連の事件で、手を引いていた人物が、今自分を拘束して、どこかへ連れて行こうとしている。恐らくは、鉄雄の所へ。恐怖が胸の奥でムカムカと這いずり回り、泣きたくなる気持ちを抑えるために、カオリはとにかく黙り込むのでなく、とにかく何か会話をしようと考えた。

立て続けの破裂音に強烈なりバーブをかけたようなエンジン音が聞こえる。木山とカオリを乗せたガヤルドは、七学区の郊外を南へ走るバイパスを駆け抜けている。住宅の数は減り、広大な敷地を持つ企業の建物や、工場が見当たるようになってきた。もうすぐ、第十学区との境界のはずだ。

「どうぞ。できることなら、具体的に問うてくれると答え易い」

幸いなことに、木山は今、これ以上の危害をカオリに加えようとする気は無さそうだ。特に拒絶するでも脅しつけるでもなく、柔らかな声で返事をした。バックミラーに映る気怠げな瞳が、自分を捉えるのがカオリに分かった。

「木山先生がレベルアッパーを作ったというなら、涙子ちゃんを——いや……」

カオリは一瞬俯いて唇を噛むと、再度顔を上げた。

「眠っている人たちを直す方法も、知ってるんですよね？」

カオリの目は、鏡に映る木山の顔をしっかりと射貫いている。

「……そうだな。肯定しよう」

木山がやや間を置いて答えた。

「友達が、心配かい」

「はい」

カオリは、両足のジャージの生地をぎゅつと掴んで、すぐに答えた。

木山に拉致された時の、部屋着のままだ。

「この間、君と共に私の病室を訪れた花飾りの女の子……同じ学校の子だろうか？君と同じように、まっすぐで、勇気のある目をしていた」

木山が、どこか懐かしむように言う。

「良い友達に恵まれたのだね、君は」

「元に戻してください」

木山の称賛には反応せず、カオリは食い入るように言う。

「私の友達のことを口にするのなら！また元のように会いたい。話が見たい——私は……」

嗚咽が洩れそうになり、カオリは手錠をじやらと鳴らし、両手で顔を覆う。木山には見られなくなかった。

「……君のご友人にはすまないと思っている。本当だ」

木山が静かに言った。車は渋滞の最後尾に着いたらしく、僅かに振動しながら停車している。

「その証拠に、君にこれを預けよう」

車が停車したことで、木山はハンドルから手を離し、脇に置いたアタッシュケースの中から、小さな物を取り出し、後ろ手にカオリへ渡す。

カオリは掌の上のそれを見つめる。

「レベルアップパーは、聴いた者、つまり使用者同士の脳波を同期させるものだ。それにより、使用者同士、能力行使の処理速度が向上する。私はあるシミュレーションを行うために、レベルアップパーを開発した。本来なら『樹形図ツリーダイアグラムの設計者』の使用で事足りるのだが、申請を何度やっても通らなくてね……そして、君に渡したソレには、同期状態を解除するためのプログラムが書き込まれている」

木山がカオリに渡したのは、プラスチックケースに入った、何の変哲もない記憶媒体メモリーチップだった。

「島君からは、君はもつと、内向的だと——それも卑屈過ぎる程だと聞いていたが、どうも違うようだ。君は思慮深く、勇気のある子だ」
鉄雄の名が出てきたことで、カオリはメモリーチップに落としていた視線をはっと上げる。

木山はハンドルを指でトントンと叩いていた。

「誤魔化さずに言うが、島君と相対したら、私は君を人質にするつもりだった……しかし、気が変わったよ。君にそのアンインストールプログラムを託す。もしも私が島君に……いや、しくじったら、君がそれを使い給え。勝手に押し付けてすまないが、それまでは私に同行してもらいたい」

「鉄雄君とあなたに、何の関係があるんですか」

カオリは語気を強めて言った。目の前の博士が、まるで鉄雄と旧知の柄だともいうように語るのが、何となく不愉快だった。

「それに、まるでこれから会いに行くみたいなのをさつきから——私を連れて、どこへ向かってるんですか」

木山が答える前に、カオリは身を傾けて窓から前方を見た。

半球体をした、4輪駆動の自走警備システム、セキユリティボールが、複数車線のバイパスを塞ぐように横並びに鎮座していた。その後列には、赤色灯を回した車両もいくつか見える。

「どうやら、私を連れて行くまでもないようですよ」

カオリは、アンチスキルの検問に出会えたという事実には、安心感を覚え、自然と頬を緩ませる。

木山の駆るガヤルドの後方も、大型の資材トラックが既に順番待ちをして塞いでいる。引き返すことはできない。

「どうするんですか？ 私を無理やり連れ去ったことは知られてるんでしょう？」

「アンチスキルに、アーミーか」

木山の声色に、はつきりとした嫌悪感が混じっていた。

「尻尾を振った犬と、手綱を失った迷える子羊だな」

前方の車が、一台、また一台と、検問を通過して走り去っていく。「レベルアップ」は人間の脳をネットワーク化して、クラウド様の演算機器を立ち上げるためのプログラムでね」

木山が、ハンドルに体を預けるようにしながら言った。

「だが、それだけではない……言ったろう？ 使用者は、昏睡状態にある他者の演算能力を借りられるとね」

木山とカオリの乗る車が、ゆつくりと前進し、検問に差し掛かった。装備に身を固めたアンチスキルの隊員が一人、運転席の窓をノックする。

木山は特に拒まず、ウインドウを下げた。

「IDの提示を」

アンチスキルの声は男性のものだった。木山はバイザーを付けた相手に、ゆつくりと顔を向ける。

「ん……おい、アンタ、もしや——」

木山が、ハンドルに預けていた左腕を徐に上げ、追い払うかのようにその指先を隊員に向けた。

そういえば、とカオリはふと木山の姿に違和感を覚える。

病院で初めて木山に直面した時は、確か左肩を包帯でぐるぐる巻きにする程の怪我を負っていた筈では——。

その時、隊員が手にしていた鎮圧銃を構え、なぜか後ろを振り向く。

銃口を向けた先には、セキュリティボールが壁を成している。

ババババツと鋭い音が響き、ゴム弾がセキュリティボールの一体に幾つも炸裂する。

もちろん、ゴム弾では堅牢な装甲を破ることはない。それでも、セキュリティボールは異常を検知し、けたたましい警報音をビーツと響かせた。

検問を敷いていたアンチスキルの誰もが俄かに騒ぎ出したところで、木山が、今度はフロント越しに前方へ向かって、両手を差し出す。

その瞬間、すさまじい突風が吹き荒れた。

アンチスキルの警備車両も、バリケードも、巨大なセキュリティボールでさえも、地面を離れ、宙を舞って飛ばされていく。台風の災

害映像でしか見たことのないような光景が、カオリの目の前でたちまちの間に起こっている。付近の建物の窓ガラスが割れ、金属が無造作にぐしゃりぐしゃりと叩きつけられる音が響く。

木山は間髪入れずにギアを切り替え、アクセルを思い切り踏み込む。スキール音が空気をつんざき、木山とカオリの乗った車は瓦礫をいくつも蹴散らしながら、破壊の爪痕を駆け抜けていく。遮る物はない。

「レベルアップの、意識を保った使用者は、残り2人」

急な加速にバランスを崩し、訳も分からない内に座席に横倒しになったカオリは、木山の声に頭をもたげた。

「島君と、そして、私だ」

バックミラーに映る木山の目元が笑っているのを見て、カオリは絶望的な気持ちになった。

木山の車が高速で去っていく背後では、検問待ちをしていた車から次々と人々が降り、何かと様子を伺ったり、危険を感じて逃げ出したりしている。

木山のすぐ後ろで順番待ちをしていたのは、一台の大型トラックだった。

「なんだ、今の襲撃は」

大佐が怪訝そうな声を部下へかける。

「ゲリラか？ 帝国か？」

「わ、分かりません」

運転席側の部下が困惑した声を上げる。

「とにかく——アンチスキルと、あちら側についた同胞達は、行動不能と見えます。……道も開かれました」

どうしましょう？ と顔を向ける部下に対し、大佐は身を乗り出す。「降って湧いた好機だ、逃す手はなかりう」

大佐の背後のベッドでは、キヨコがしきりに身を振って呻き声を上げ、その様子をタカシとマサルが苦しげな表情で覗き込んでいた。

—— 第一〇学区、ストレンジ

「おい！仲間をできるだけ呼ぶつつったよなア!!」

金田が、エンジンの風切りの音に負けないように、隣を走る甲斐へと向けて叫んだ。

「ああ、そう言ったさあ!?!」

甲斐が負けじと叫び返す。

「誰がアンチスキルをしこたま呼べつつったんだよオ!!」

金田がやけくそ気味に叫ぶと、背後から一層サイレンの音が高らかに響く。

「こらア!!金田ア!!甲斐イ!!今は非常時なんだぞオ!!5級警報だぞ、5級!!数は数えられるのか!?!遊んでる場合かア!!」

怪盗アニメーションに登場する名物警部よろしく、助手席の窓から顔を突き出し、昔ながらのメガホンを手に叫ぶのは、金田や甲斐を職業訓練校で教える立場でもある、高場だ。高速で走る車の窓外に露わにした黒髪は、すっかり崩れ、ワカメのように後ろへなびいている。金田達の背後には、高場を始め、アンチスキルが追跡する警邏車両が波のごとく迫っていた。

金田達は東西に延びる片側四車線の広大な産業道路を、化学工場集散区域へと至る方面に向かい、バイクを駆っている。春木屋で一緒にいた、ジョーカーの姿は無い。「仲間を集める」と一旦別れてから、それきりだ。

「帝国のバカ共はみんな捕まるか病院送りになった!もうお前達が暴れる筋合いは爪の先一つとしてない!大人しく停まらんかア!!」

「だーかーら!!」

金田は後ろへ唾を飛ばしながら叫んだ。

「鉄雄が原発を襲ってんだっつーの!知らねーのかよこの鉄アゴ!」

「聞こえねーよ!何なら、もっと近付いてみたらどうだよ!」

半ば諦めた表情の甲斐を横目に、いよいよ金田は憤って顔を真っ赤にした。

「畜生オー！こんなところでケツまくってる場合じゃねエのに……ジョーカーの野郎、ブヒって逃げやがったか!!こうなったらアーミーから分捕ったコイツで、あのアゴを焼いてやる!!」

2人のバイクは、交通規制がなされ、車通りの無い交差点に差し掛かろうとする。金田が片手で、背中に背負ったレーザー銃に触れかけた。

その瞬間、パアアアツ、とけたたましいクラクションが横道から聞こえた。

「ツぶな——」

金田と甲斐はバイクを咄嗟にヘアピンさせる。

間一髪、金田と甲斐が通り過ぎた交差点へ、横道から巨大なトレーラーが突っ込んできた。それは警笛を轟かせながら縁石に乗り上げて弾み、今にも横転するかと思える程危なっかしく体をゆきりと揺らし、主線を塞ぐ形になる。

甲斐はバランスを崩して転倒し、体をアスファルトの上で丸める。金田は体を傾けて、間一髪倒れることを免れる。

高場が血相を変えて頭を引っ込めた。メガホンが道路へ落下し、ぐしゃりと後続の車両に潰される。

アンチスキルの車両団はブレーキを余儀なくされ、急停車する。

「何だいきなり!?!」

金田が自分たちとアンチスキルとを隔てたトレーラーを見る。トレーラーのアルミコンテナ部には、でかかど「疾風 迅雷 CLON」
WN」と乱雑なペイントが施されている。

「金田アツ!!」

達磨のような体をした、ピエロのペイントを施したヘルメットを被った男が、ニヤリと笑みを浮かべていた。

「ジョーカーツ!!」

金田がぱつと顔を輝かせて叫ぶ。

「言ったる、仲間を集めるってよオ!!」

ジョーカーが誇らしげに言うと、トレーラーの後に続いて、別のバイクの一団が唸りを上げて現れた。ジョーカーと同様、ピエロのペイ

ントを施したり、ガスマスクを身に付けたりしている者が多い。

「クラウンは鉄雄に乗っ取られた筈じゃあ……」

「アイツのやり方が気に食わず、離脱した奴らも居たって訳だ——
行け！ここは俺たちクラウンが、アンチスキル^先方のご指導を引き受け
てやろうじゃねえか！」

ジョーカーに率いられたバイクの一群は、足止めを食らっている高
場たちアンチスキルへと向かい、挑発するように喧しく空ぶかしをか
き鳴らした。

「甲斐！行くぞ！」

「ああ——悪い、足をやっちゃった」

甲斐は片膝をついて、もう片方の足を投げ出して、足首を押さえ
ている。

「うえ、まずいぞ……」

ジョーカーの乗るトレーラーが、不意に衝突音と共に揺れた。甲斐
も金田もそちらを見る。

「マジかよ、オハギだ」

ジョーカーのトレーラーを押しつけるように、セキュリティボール
が複数台、クラウンの騒音にも負けじと警告音を鳴らして、金田達へ
迫って来た。ずんぐりした外見に似合わず、4脚の車輪が滑るように
機体を運ぶ。

「甲斐イ！」

「ダメだ、俺は置いて行け!!」

金田が慌てて甲斐へ駆け寄ろうとした時、迫り来るセキュリティ
ボールとの間の路面に、何かの群れが軽やかな金属音を立てて転がっ
て来た。

金田にはそれが、スプレー缶のように見えた。一つ一つに、導火線
のようなものが付いている。

「オーイ」

間延びした、気取った声が聞こえた。

ヘッドバンドを付けた長身の優男、半蔵だ。手をズボンのポケット
に突っ込み、面白い物を見たとも言おうようにからからと笑って、甲

斐に歩み寄った。

「お仲間は任せとけ」

半蔵は呻く甲斐に肩を貸す。

「早く離れろって。電子制御なんだろう？お前のバイク」

半蔵の言葉が耳に入った直後、バンバンと音を立てて、セキユリテイボールの足元へ転がっていた多数の金属缶が破裂する。すると、晴れ上がった空に、陽の光を反射してキラキラと無数の光が瞬いた。すると、不思議なことに、セキユリテイボールは一旦進行を止め、それから不規則に前後左右に揺れた。機体同士が接触し、火花を散らし、横転した。

「金田!!」

野太く、低い声が歩道からかけられた。

金田はその声の主である、岩の様に屈強な体の男へと顔を向けた。

「駒場ッ!」

金田は、第七学区のスキルアウトを束ねるといふ相手の名を呼ぶ。

「すまねエ、俺——浜面やケイチちゃんを巻き込んで——」

「行けッ!」

駒場は、金田が聞いたことのないような大声で叫んだ。

「お前が、島鉄雄を止める!!」

そう叫ぶや否や、駒場は手にしていた金属缶を、丸太のような足で素早く蹴り上げる。

金属缶に内包されていた数多の攪乱チャフシードの羽が、爽やかな夏空へと舞い上がる。

セキユリテイボールはますます混乱し、その内何台かは強制的にシャットダウンして動きを止めた。

「頼むー金田ア!」

半蔵に支えられながら甲斐が叫んだ声が、最後の一押しとなり、金田は自身の真っ赤なバイクを立て直し、喧騒の場を背に、風のように走り出した。

「クソッ、クソッ……」

金田のハンドルを握り締める手に力が籠った。

「待ってるよ、鉄雄——」

その頃、金田達から遠く離れた、原子力研究施設敷地内の石棺では、分厚いコンクリートで固められた頂上部へ、唐突に一筋のヒビが走った。

そして、みるみるとそのヒビは枝分かれし、不気味な碎ける音を立てながら拡がっていった。

「とにかく！私は行くっいたら行く！止めないでください！」

御坂美琴は、オフィスの出入口まで大股で辿り着くなり、振り返り大声で言った。

「どういう絡繰りか知らないけど、木山春生が強力な能力者だってなら、尚更力オリさんが危ないじゃない！警備員アンチスキルじゃ歯が立たないなら、私が相手になる！」

「待ってください、お姉様！」

白井黒子が駆け寄ろうとするが、立ち上がって数歩走った所で不意にバランスを崩し、膝をついた。

見かねた固法美偉が白井黒子を支える。

「あなたは、昨日意識を失うほどの攻撃を受けたばかりなんだから――

――無理は禁物！」

しかし、と黒子は恨めし気な目で固法を、そして美琴を見上げる。

「大丈夫」

美琴が自分の胸をトントンと軽く叩くと、静かに、だがはつきりとした声で言った。

「私が、木山春生を止めて、カオリさんを救う――そして、このくそったれな騒ぎを終わりにしてみせる。こんな時こそ、『お姉様』を頼りなさい」

美琴の目は、まっすぐに黒子を見つめている。

「もしも力になってくれるっていうなら――そうね、ここで私からの連絡を受けられるようにしておいてよ。何か大事なことがあるら、すぐに伝えられるようにしたいから」

そう言うと、美琴は扉の向こうへと早足で去っていく。

「待って！」

後を追って初春飾利が飛び出す。

「私も行きます！」

「初春さん」

廊下で美琴が立ち止まり、振り返って目を丸くする。

「相手は得体の知れない能力を使うんだから、危険——」

「今は5級警報下です。風紀委員ジャッジメントの私が同行しなければ、足止めを食らうに決まっています」

初春が、胸の前で拳をきゅつと握った。

「佐天さんを、カオリさんを……眠ってる人たちを、助けたいんです！」

初春の頬に紅が差す。

「そりゃ超能力者レベル5の足元にも及ばないでしょうが——島鉄雄や木山春生との戦いになったら、きつと御坂さんが頼りです。ならば、白井さんとの連絡は私が引き受けます。私にだって、きつと何かができるはず！お願いです、一緒に行かせてください！」

「……とは言うものの」

ジャツジメント支部が入居するビルを後に、街頭へ足を踏み出した美琴は立ち止まった。

「この状況下でどうやって一〇学区まで行こうか……」

休日の午前、普段であれば行き交う車の量も多く、学生の足として重宝されるタクシーを探すのにも手間は取らないはずだ。

しかし、今の学生街は閑散としていて、人影はまばらだ。辛うじて認められる人々は、どこか周りの目を気にしながら、視線を地面に落とし、早足で歩き去っていく。空の向こうのあちこちから、アンチスキルかセキュリティボールが発しているものは分からないが、サイレンが遠鳴りして聞こえる。

「5級警報下ですからね。警報が下がるまで、タクシーはどここの会社も運行を控えているそうです」

後を付いてきた初春が、携帯電話の画面に指を走らせながら言う。

「公共インフラは動いているんだよね？じゃあ、駅まで行くしか——」

「それが、御坂さん」

初春が苦々し気に顔を上げた。

「この警報発令が強権的だと、各労組が反発しているそうで……ライトレール、モノレール、その他鉄道、バスに至るまで、ストを執行しているところばかりみたいです。まともに動いている公共交通機関はほぼ無いといっていいです」

「ハア？」

思わず美琴は声を荒げ、振り向いた。

「この、大事な時に!？」

「こないだの、七学区を闊歩したデモ隊が取り締まられたのを、根にもってるんでしょうね」

美琴の剣幕にややたじろいで、初春が言った。

「この警報も、反政権的活動を取り締まるための隠れ蓑だって言うてる連中が——」

その時、美琴と初春の前に、一台のワゴン車がやってきて、停まった。

白を基調としたボディの側面に、「警機1231」とプリントされている。アンチスキルだ。

美琴たちの反対側、助手席側のドアが開かれる音を聞き、ほぼ反射的に初春が美琴の前に進み出た。

「あの一！」

助手席から降りて来た人物に対して、初春が腕の腕章を示して声を上げる。

「こちらは、ジャッジメントです！不要不急の外出という訳では——」

初春は、途中で言葉を止めた。

助手席から降りて来た小柄な相手も、同じように片腕の腕章を示したからだ。

「承知している。第一七七支部所属の初春飾利殿」

「アンタ……!」

美琴はその相手に見覚えがあった。コンビニエンスストアのATMでトラブルを起こしたとき、自分に事情を尋ねてきたジャッジメントだ。

「二度目だな、御坂美琴。レベル5の超電磁砲」

白装束のジャツジメントが、小さな顔を傾げるようにして、美琴の姿を認める。

「風紀委員第三八五支部所属、サカキ 榊だ」

まとまりのない髪型をした少女、サカキが、口をぽかんと空けた初春と美琴に向かって名乗った。そして、親指を後ろの車両へと向けて示す。

「二〇学区の原子力研究特区へ向かうのだろうか？二人とも乗るといい。我々が追う者も、お前達が追う者も、きつとそこで相見えるだろう」

半信半疑のまま、初春に続いて車に乗りこんだ美琴は、重ねて驚く。中列の座席に座る少年の顔を、嫌という程知っているからだ。

「あ——アンター！」

上条当麻に人差し指を向けながら、美琴が上擦った声を出した。

「なんで、こんなところにいんの!!」

「そりゃこつちの台詞だ」

驚きを禁じ得ないのは相手も同じようだ。上条当麻は美琴から身を引き、呻くように言った。

「お前も、この電磁波防護服の連中に誘われたのか？」

「行き先は同じなんだろう。5級警報に加えてこのスト騒ぎの中じゃ、まともに移動はできない」

上条を挟んで、美琴から見て反対側に座るのは、サカキの仲間だろう、同じく白装束を身につけた、尖った顎に黒髪の風紀委員の少女だ。仏頂面で、腕組みをして座っている。少なくとも、初春が何も指摘しないことから、腕章は本物なのだろうと美琴は思った。

仏頂面の少女が上条と美琴の方を見る。睨みつけるような視線だ。「窮屈だ。もっとそつちに寄れるだろう」

「……ハイハイ、分かりましたよ」

刺さるような視線を向けられた上条が、ため息をつきながら美琴の方へ体を動かす。美琴がいつも見かける学生服姿ではなく、家からす

ぐ飛び出して来たのだろうか、ジャージの短パンにスポーツブランドのロゴの入ったTシャツというラフな格好だ。上条の太腿がスカート越しに自分の肌に当たった気がした。美琴は唇をきゅつと引き締め、びくつと身を縮こませる。

「なんだよビリビリ」

怪訝そうに上条が美琴を見た。そして、不意に右手を美琴の左肩に乗せる。

美琴はハツとして、上条へ顔を向けた。

大真面目な、ツンツン頭の顔が間近にある。その顔が口を開く。

「言つとくが、得体が知れなくなつて、相手はジャツジメントだ。ここでもしお前が俺にビリツと食らわせようものなら——」

「ッ、うッさい！」

美琴は首を振つて手を払い除け、上条を睨みつけた。訳が分からな
いが、顔が上気するのを感じる。

「言われなくても、その位分別はついてる！余計なお世話！」

「なんだよ、いつもは時間も場所もお構い無しに噛みついてくる癖に」
「かつ噛みつくって——！」

「あのー！」

3列目の席から、花飾りをつけた顔が呆れたように覗き込む。

「やめましようよ、言い合ふの」

初春の言葉に、美琴も上条もバツが悪そうな顔をして黙り込んだ。
助手席から振り返るサカキが、一つ咳払いをした。

「同行させておいて悪いが、お喋りに興じている暇はない」

サカキが運転席のアンチスキルに向かつて小声をかけると、その隊
員は小さく頷いて車を発進させた。

美琴は窓の外を流れ出した風景に顔を向け、ため息をついた。

いつもこうだ。上条コイツといると、調子が狂う。

何をしているんだ。自分は今から、カオリさんを助け出しにいくの
だ。

そして、木山春生や島鉄雄が立ち塞がるなら、打ち破るのみだ。
美琴は両手で自分の頬を軽く打った。まだ妙な熱を帯びていた。

——第一〇学区、原子力研究施設、北側ゲート

「……警護は誰もおらんのか」

車からアスファルトの地面に降り立った敷島大佐は、周囲を見渡し
て呟いた。

大佐一行は、アキラが地下に封印されている石棺サルコファギから最も近い
ゲートの入り口まで辿り着いた。

アーミーの最重要機密に至る門である以上、普段であれば、24時
間態勢でアーミーの専門部署の者が厳重に警備を敷いている。大佐
が意図する所ではなかったとは言え、クーデター決起に参加しなかつ
た警備隊は、ここで待ち構えていれば、大佐一行を拘束しにかかつて
くると見ていた。しかし、そのような人影は全く見当たらない。大佐
に同行してきた数少ない部下たちも、緊張を顔に浮かべながら周囲に
目を光らせているが、一面灰色に舗装された地面を、風が吹き抜ける
音だけが聞こえるばかりだ。

「マサル」

口元のピンマイクを通して、大佐はナンバーズの一人に話しかけ
る。

「41号の気配は？」

『アキラ君の目の前——じっと、動いていないみたいですよ』

マサルの返答が、イヤホン越しに大佐へ聞こえる。

「今度は、まるで誘われているようだな」

煙草を啜えたドクターが、ライターを何度も鳴らしながら言った。
「見ろ、どうぞお入りくださいとでも言いそうじゃないか」

ドクターの言葉を聞いた大佐は前方に向けて鋭い視線を送った。
ゲートは解放されており、その先には大佐もかつて利用したヘリポー
ト、そして更に先には、巨大なコンクリートの塊——アキラの石棺
が見える。

そして、ヘリポート白線を跨ぐようにして、一台の青色のスポーツ

カーが停められている。

「アレは……」

部下の一人が声を漏らしたその時、車のシザーズドアが翼を広げるかのような特徴的な動きで開かれ、中から一人の人影が降り立った。

ヒールがカツンと路面を打つ音が聞こえた。

「木山、春生……！」

大佐が唸るように名を口にすする。

部下たちが、大佐の前に並び立ち、一斉に銃を向ける。

「おやおや、あなたもここまで辿り着きましたか、大佐」

木山が、大佐たちの真正面に立って言った。

複数の銃口を向けられていても、まるで怯む様子が無い。

「お互い、追われる身でしたか。あなたも相当悪運の強いお方だ」

「お前がここに何の用だ」

大佐が凄んだ。

「41号の暴走を止めねばならない。そこをどけ」

大佐の言葉に、木山は、はあつとため息をつき、空を見上げた。

雲が西から東へ流れていく。木山のウェーブがかった髪が、風に波

打つように揺れた。

「島君に用があるのは、私も同じでね」

なびく髪を片手で押さえ、木山が俯く。

どん、どん、と音が聞こえ、大佐は視線を一瞬、その音が聞こえる

方に動かしした。

木山の乗り付けたガヤルドだ。音と共に車体が僅かに揺れている。

誰か、乗せられているのか――。

『大佐――』

ふと、大佐のイヤホンに、マサルからの入電がある。

『気を付けて！彼女は今――』

「そちらこそ、邪魔立てするな」

木山が顔を上げた。その目は怒りに満ちていた。

大佐の前で隊列を組んでいた部下の一人が、不意によるめくように向きを変えた。

「オイ、お前——」

誰かが慌てたような声を上げた。

バアン、と破裂音がして、大佐は反射的に身を引いた。

部下の一人が、驚愕の表情を浮かべて小銃を構えている。その先には、地面に這いつくばって呻く仲間の姿がある。片足を撃たれて、苦悶に満ちた表情をしている。

「ち、違う!!」

俺じゃない、と銃を構えた部下が口走った次の瞬間、全員が、互いの足元に銃口を向け合った。

大佐は、その内の一つが、自身へと向けられていることに気付いた。幾つもの銃声が一斉に鳴り響き、それとほぼ同時に、トラックに偽装した大佐達の車両が、突如に浮かび、そして重苦しい音を立てて横転した。

「降りたまえ」

ドアを再び開けた木山が、穏やかな声をかける。

車内では、青褪めた顔をしたカオリが、怯えながら木山を見上げていた。

「先程約束した通り、君はここまでだ」

木山が懐から小さく細長い鍵を取り出し、カオリの手錠を外した。

「後は、私一人がやるべきことだ」

一人へリポート上に取り残されたカオリは、木山が走らせるガヤルドが小さくなっていくのを見つめる。

カオリは自分の背後から、互いに脚を撃たれた兵士達が上げる呻き声を聞いた。

手錠を外されてもなお、カオリは自身の両腕を胸の前で組むようにしていた。その腕は、震えが止まらなかった。

「ミヤコ教って言ったっけ」

気恥ずかしさを逸らすように口を開いたのは美琴だった。

「なぜ、アンタたちは私たちを連れて行ってくれるの?」

美琴の問いに、助手席のサカキが後ろを振り返り、黒髪の仲間（ミキという名らしい）と目配せをした。

「利害の一致だ」

「……もう少し具体的に言ってくれない?」

余りに簡潔過ぎるサカキの返答に、美琴は声に棘を含ませる。

それに対して、サカキは正面を向いたまま淡々と話す。

「我々は、帝国のリーダーである島鉄雄がこれから起こす事態に対処するべく動いている」

「事態って?」

「アキラの覚醒だ」

「それって……最近、SNSとかでやたらトレンドに上がってる名前……」

美琴は隣の上条を見やる。上条は肩を竦めてみせた。

「帝国の連中がしばしば口に出す言葉ですね?」

後ろから発言したのは初春だ。

「彼らが祭り上げる、何らかの上位存在。それが何を指すのかは、全く具体的ではありませんでしたが……レベルアップの摂取によって、^{^^}アキラ^{^^}に近づく。そのようなことを語る者が多いと聞いています」

「或いは、『大覚様』とも呼ばれる」

サカキが言った呼び名に、美琴は聞き覚えがあった。化学工場で、追い詰められた帝国の幹部が口走っていた。

「我々がアキラについて把握している情報は少ない。それが、過去に防衛省主導の能力研究によって生み出された28番目の存在であること。そして、現在は一〇学区の特区内にある原子力実験施設のどこかに眠っていて、帝国の首班たる41号島鉄雄がその目覚めをもたらすであろうということだ」

「それが起きると、どうなるの?」

美琴の問いに対して、僅かな間があった。

「災厄がもたらされる」

「……相変わらずもやつとした答えね」

サカキの短い返答に、美琴が言った。前を向いたままのサカキの無表情な顔は、美琴には微動だにしないように見えた。

「つまり、島鉄雄と木山春生というレベルアッパーによって通じた両者の目的は、アキラと呼ばれる謎の存在にあり、2人はその眠れる悪魔レウィアタンをくすぐろうとしている」

後ろから、初春が言った。

「こんなところですか？」

「最後の生易しい表現を除いて肯定する」

サカキの抑揚のない声が返って来た。

「アキラについては何となく分かりました。けど、不審な点があります」

初春が声色をやや厳しくして言う。

「第一に、あなた方ミヤコ教のみなさんはなぜこの件に干渉するのか。今の話だけ聞いていると、あなた方には利害というものが存在しないように思えます。第二に、私たちをわざわざ連れて行くことの、あなた方にとってのメリットを教えてください。あとは、野暮かもしれませんが……あなた達、本当に正規のジャッジメントとアンチスキルなんですか？もしも偽装を働いているのであれば、看過し難いです」

初春の指摘に、また暫し沈黙が流れる。車は、往来のほとんど無い交差点で信号待ちをしている。低いエンジン音が聞こえる。外の街は静かで、今しがたサカキが言ったような事態が刻一刻と進行している。雰囲気は感じ取れない。

「二つ目の問いだが」

サカキが口を開いた。

「我が教団は、この学園都市に根差し、人々の救済のために働く。よつて、災いが降りかかり人々が苦しむのを阻まんとするのは当然のことだ」

美琴は、今しがた述べられた理由を、ひどく耳あたりのよい言葉に満ちていると感じた。それは隣の上条も、後ろの初春も同様だったよ

うで、疑いの表情をうかべている。

「余計な詮索をするな。私たちには答えられないし、知らずともお前達は不自由しない」

上条の隣ですっと黙っていたミキが、美琴たちに鋭い視線を投げ掛けて言った。

「第二に」

ミキに向かって抗議しようとした美琴を遮るように、サカキが言った。

「木山春生については把握していないが、島鉄雄は少なくとも、我々の手には負えない。恐らくは、アンチスキルにもだ。そこで、ミヤコ様は、お前たちの力が必要だとお考えだ。手を貸してほしい」

「言われなくなったってそうするつもり。指図なんか受けない」

美琴が強い口調で言った。

「で？アンタもそれで連れて来られたの？」

先ほどから黙って話を聞いている上条に美琴が話を振ると、上条は気まずそうな顔をした。

「いや、俺は、何というか——」

「私たちには明確な目的がある」

美琴が、口ごもる上条に畳みかけて言った。

「アンタがわざわざこの連中の誘いに乗る理由は何？」

「上条当麻の幻想殺しイマジンプレイカーは重要だ。島鉄雄の力を止める切り札になり得る。そこで、我々は上条当麻の力を借りる見返りとして、同居人の警護を申し出た」

「ど、同居人!？」

思わぬ言葉に、美琴は驚きの声を上げる。

「アンタ、弟妹きょうだいでもいたの？」

「いや、アイツはきょうだい——ウン、そんなとこ」

明らかに上条は狼狽えている。

そこへ言葉を挟んだのは、ミキだった。

「嘘をつくな。血縁関係は無いだろう？アレは明らかに英語圏白人の女——」

「ハア!?何それ!聞いてないんだけど!!」

「ちよ、誤解だつて!!お前、なんか勘違いしてんだろ!!」

美琴が激しい剣幕で怒り出し、上条は必死に弁解している。

「あの、それはともかく!」

初春が大きく咳払いをして、美琴と上条の言い争いを遮った。

「あなた方が本当に正規のジャツジメントでありアンチスキルなのか——あなた方の拠点は第一二学区のはずです。どうしてこんな学園都市中心部まで繰り出してきているんですか?」

「まず、我々は正規の所属員だ。君の同僚に照会してもらってもいい。確かだ」

サカキが初春に答えた。

「ここ最近の、軍のクーデター未遂、そして『帝国』の暴動。それらに対処するために、学園都市内の各所から、アンチスキルが動員された。一二学区も例外ではない。そして、現在の五級警報下でも活動の許諾を得ている」

サカキの今度の説明は、初めと打って変わって、それなりの説得力があるようだ。美琴にはそう思えた。

「私やミキは、それを利用して同行している。疑念は晴れただろうか?」

初春は美琴と視線を交わした後、黙って頷いた。

「それはいいですけど、この車、変な道通ってますね」

初春の言葉に、美琴は意識を窓の外に向ける。

なるほど、確かに、自分たちが乗るバンは、今商店街の中の路地を突っ切っている。

「駅前を通ってバイパスに向かった方が早いんじゃない」

「先程情報が入った。駅前は今、ストライキを訴えるデモ隊とそれを鎮圧する機動隊で混乱している。これを避けて行く」

サカキの言葉を聞いた上条は、自分の携帯電話で何事かを検索している。

「うわ!本当だ……大変なことになってるぞ」

上条が覗き込む画面には、次々と野次馬が投稿したと思しき駅前の

混乱の様子が更新されていく。

「統括理事会は、この一連の騒動の中で、アーミーと反政府勢力双方の影響力を一気に削ぐ算段だ」

サカキの表情が険しいものになっていった。美琴が見る、初めての变化らしい変化だった。

「我々として、無関係ではない。だからお前達の力を貸してほしい」

急に、サカキとミキが同時に、同じ言葉を口走った。

「ただ、と上条が呟いた。

美琴は、今しがた2人が言った言葉が、2人とは別の意思が働いたものではないか、と直感した。

何にせよ、と美琴は窓の外へ再び視線を向けた。

商店街の建物群は消え、開けた空が見えるようになった。

早く、目的地まで辿り着きたい。そして、友人を救うのだ。

美琴は逸る気持ちを押さえ、きゅつとスカートの裾を握り締めた。

—— 第一〇学区、原子力実験施設 北部ゲート

「大佐！」

キヨコを体の前に抱えたマサル、それにタカシの3人が、膝をついた大佐の周りに寄って集まって来た。

「お前達……無事だったか」

右脛に銃創を負った大佐は、絞り出すような声を出した。車両に積まれていたシャベルの柄を、包帯の上に当てて固定しているところだった。

「あの女の人、アキラ君に影響されてるんだ」

「どういうことだ？ 奴は41号と違う。ナンバーズではないだろうに」

滴る汗を拭いながら、大佐はマサルに疑問を投げ掛ける。

「あの人がしてた、音の実験のせいだよ」

タカシが言った。

「僕らの力をマネしようとしたんだ。音を使って、みんなの力を集めて。けど、それってとっても危険なんだ」

「元々力を持たない人が、急に大きな力を使ったら、その人は耐えられなくなつて、やがては破滅するわ」

マサルに抱えられたキヨコが言った。

「それは鉄雄くんも、あの女の人も、みんな同じ」

「そう。だから、僕らは、みんなを止めなきゃいけないって決めたんだ」

マサルが言うと、キヨコとタカシが頷く。

「何？」

その様子に、大佐は間に合わせの添木にテープを巻く手を止めた。

「お別れです、大佐。……どうかお元気で」

「待て、お前達——」

大佐が手を伸ばした時には、もう、3人のナンバーズの姿はかき消えていた。

「木山の奴め、全員ご丁寧に急所を外していやがる。全く、嫌みな奴だ」

他の隊員の手当てに奔走していた鷲鼻のドクターが、大佐の背後へやって来た。木山春生の能力行使の嵐の中、ナンバーズを除けば、唯一怪我を負わなかった人物だ。

「さて、どうするつもりだ、大佐……」

疲労困憊した様子で、ドクターが座り込んで言った。車両が横転した時の衝撃で、眼鏡はひどくひび割れている。

「最早こうなつては、41号を止めることなど……おい、何をしている」

添木の固定を終えた大佐が立ち上がったのを見て、ドクターが困惑の声を上げる。

「まさか、ここに至つてまだ、41号を止めようなどと考えているのではないだろうな!」

大佐は無言で、自身の大型のハンドガンの装弾数を確かめた後、ホルスターに再び仕舞う。

「いい加減にしろ!我々は失敗したんだ……後は、41号に殺されるか、アキラに消し炭にされるか……さもなければ、石頭のアンチスキル共に捕まって、軍事法廷行きだ。どの道、引導はとつくに渡されているだろう!おい、聞こえているのか——やりたければ、勝手に一人でやれ!」

「ああ」

大佐は、ドクターを始め、蹲っている隊員全員を見渡す。

いつの間にか、全員の目が大佐へと注がれていた。

誰も顔に、疲れと、諦めが浮かんでいる。

「私一人でも、決着を付ける。そうせねばならん。責任は、私にある。皆、ここまですべてしてくれたことに、感謝する。お前達は、忠誠心から上官に付き従ったが、最終的にその上官は錯乱し、自分たちを撃つた……アンチスキルには、そう伝える。命令だ」

巻き込んでしまつてすまない、と、大佐は頭を下げた。隊員の誰か

が、嗚咽を漏らした。

それから、大佐は改めて、座り込んでいるドクターを見下ろす。

「ドクター……アレを、『SOL』を使いたい。車のコンピュータは生きているか？」

「SOLって……大佐！正気か!?まさか、レーザー・グリップだけで41号を狙う気か！」

ドクターは立ち上がり、両腕を広げ、驚愕の声を上げた。

「自殺行為だ！何のために輸送屋に化けてまで車を持つてきたと思っている！あのグリップはあくまで遠隔操作での座標補正用だ！コンピュータの支援無しに手動で撃てば、SOLのビームの射程範囲に巻き込まれるのは分かっているだろう！アンタはあつという間に4,000℃で骨も残らず焼かれちゃうんだぞ！」

「遅かれ早かれ、アンチスキルが駆け付けてくるだろう」

叫ぶようにまくし立てるドクターとは対照的に、大佐は静かに言った。

「頼む。『ひこぼし』のコントローलへハッキングを仕掛けてくれ……どれくらい持つ？」

ドクターは、広げていた両手をパタンと落とし、苛立ちを表すかのように白髪をぐしゃぐしゃと掻いた。

「相手は防衛省だけじゃない。統括理事会の化け物共だ。衛星管制センターにいつ感付かれるか……1時間か、或いはものの5分か……早いに越したことは無いぞ」

ドクターは力の抜けた声でそう言うと、大佐に歩み寄り、白衣の内ポケットから取り出した物を手渡した。

それは拳銃の銃身を極端に切り詰めたような外見をしていて、大佐の力強い掌で扱うには窮屈に思えるような大きさだった。

「ビームの照射半径は最小に設定しておく、が……死にたくなけりや、10、いや、20メートルは離れる。保証はできんがな。それと、間違っても原発を撃つなよ。分かっているだろうがな」

大佐は小さく頷くと、踵を返した。

片脚を引きずりながら、先程木山が車に乗って走り去っていった、

巨大な石棺を目指して、歩みを進めていく。

「大佐！」

手当を受けた部下の一人が声をかけると、周りの者も、皆口々に呼ぶ。

立てる者はふらふらと立ち、立てない者は座ったまま、敬礼の所作をとる。

大佐は振り返らず、歩いて行った。

「……さて」

ドクターは、くしゃやくしゃになった箱から、最後の一本の煙草を取り出し、口に咥えた。親指でヤスリを回すと、フロントから火花が散る。残り僅かなガスに、奇跡的に火が点いた。目を閉じて一服し、上を見上げ、夏空へ向かって痺れるような煙を吐き出した。

煙が、余りに広い空へとあつという間に溶けていく。

「アンタがそこまでやるといふなら……こつちも、もう何も失うものはないさ」

アンチスキルが駆け付ける前に、依頼を実行しなければならぬ。ドクターは煙草を地面に落とし、足で2、3度踏みつけると、横転したトラックへと歩み寄って行った。

大佐がゲートをくぐって進んでいくと、木山が車を停めていた場所に、ジャージ姿の少女が一人、ポツンと立っている。

「……あのー」

少女が声をかけてくる。その顔に、大佐は見覚えが無い。視線を向けると、少女は顔を引き攣らせた。

「えと、だ、大丈夫、ですか……」

ひどく、恐怖を感じていると分かる話し方だった。

「ああ」

大佐は短く言った。

「木山は……これからする事について、何か言っていただろうか」

大佐から問いかけられた少女が、目をきよろきよろさせてから、胸に手を当て、肩を大きく上下させながら深呼吸をした。自分自身を落

ち着かせようとしているようだった。

「てつ……島鉄雄に、会いに行くと、言っていました」

再び大佐に視線を合わせた少女の顔は、先程までより、幾分冷静さを取り戻していた。

「あの人は、レベルアップの開発者です。ほかの人の力を集めて……それで、自分で使っているんです」

大佐は、少女の言葉を聞き、僅かに頭を下げた。

「成程。ありがとう」

大佐は、僅かに背後の負傷した部下たちを振り返るような仕草をした。

「すまないが、彼らに付き添ってやってくれ。そして、こう伝えてほしい。『大佐が、皆を撃った』と。『みな、脅されていた』と」

「……あの！アーミーの人、ですよ？」

その場を去ろうとする大佐の背中に、少女がよりはつきりした声で呼びかけた。

「鉄雄くん……一体、何をしたんですか？」

大佐はもう一度振り返り、少女の顔を見つめる。少女の瞳に、明らかな怒りの色を見た。

「君は……41号——島鉄雄と、知り合いか」

少女が、こくと頷いた。

「……すまない」

大佐はそう言った。もう振り返ることはなかった。

「始末は必ずつける」

脚を引きずりながらも、木山を追っていく大きな背中を、カオリは暫く、手を胸の前で組みながら見つめていた。

それから、唇を噛み締めると、さつと振り向いて走り出した。

「みなさん！——大丈夫ですか!？」

カオリは、負傷した兵隊たちへ何か力になろうと、駆け寄っていた。

「木山春生—— 大脳生理学者です。能力開発を受けた人間ではないようですが」

実験施設から1 km程離れたビルの一区画に設けられた観測所で、部下が杉谷へと報告を行う。

「アーミーを圧倒した様子からして、奴がレベルアッパーの開発者であり原初の被験者だという情報は真のようだな」

杉谷は、実験施設の監視プログラムから転送されて来た録画映像をモニターで確認しながら言った。

「奴の現在位置は？」

「石棺に到着した所です。石棺には破損の兆候が見られ、間もなく41号によつて破壊されると見込まれますが……木山を排除しますか？」

「放っておけ。レベルアッパーの生き残りであり、今や高位能力者となった2人の相互干渉如何によつては、アキラの覚醒の確実性が増すと考えられる」

部下の問いに、杉谷が淡々と答える。

「では、この……敷島大佐はどうしましょう？」

部下の続く問いを受けるのとほぼ同時に、杉谷の見つめる画面の画像が切り替わる。

直線的な誘導線にそつて、歩を進める大佐の姿があった。

サングラスの内側の、杉谷の目が細められる。

「……無様で、健気なものだ」

杉谷は静かに呟いてから、体の向きを変え、別の部下へと声をかける。

「北部ゲートへの、アンチスキルの正規部隊の到着は？」

後5分です、という返答が部下からなされ、杉谷は頷く。

「ならば、大佐も間もなく動きを封じられるだろう……指揮はどの支部の者が？」

「第七三支部。黄泉川という人物です」

「杉谷にとって聞き覚えのない名だった。」

「他に、侵入を試みている者はいるか」

「東部ゲート側200mの検問で、2分前にバイカーズが1名捕捉されています。ほかに報告はありません」

「そうか、と簡潔に返事をしてから、杉谷はより声を張り上げた。」

「これでアーミーはお終いだ。残りの観測は、学者共の虫眼鏡に任せ、我々は撤収する。直にここも藻屑になるかもしれない」

室内の部下たちが、機材一式を手早く片付け始めたところで、杉谷さん、と声をかける者があった。

「北のゲートに集合しているアンチスキルですが、妙なものが」

「妙とはなんだ、と杉谷が部下と共にモニターを改めて覗き込む。」

「今回の『テロ』対処に招集された部隊は、七・一〇学区の支部の構成員がほとんどですが、1台、一二学区からの車両が来ています」

「一二学区だと?」

杉谷がモニターを覗くと、一台の警邏車両が映っており、車体横に印字された機体番号は、確かに一二学区であることを示していた。

「この一台は、他の七学区等の一団とは離れて行動しています」

「一二学区……神学・宗教学校が多い学区だな」

顎に手を当てて思索した杉谷は、やがて顔を上げた。アンチスキルにも影響力を及ぼすことのできる宗教組織に、心当たりがあった。

「Bチーム、排撃隊として俺についてこい。残りは引き続き撤収にあたれ」

—— 東部ゲート付近 検問所

「離せて！てめえらに構ってるヒマはねえんだよ！」

大人しくしないか！とアンチスキル数人がかりで地面に抑えつけられている金田正太郎は、必死にもがき、叫んでいた。

「俺の友達が！あの原発ンとここにいるんだよ！てめえらは大人しく職員室に戻ってコーヒーでも啜ってやがれクソツタレ!!」

馬鹿なことを言うな！と怒声が聞こえ、金田はより強く後頭部を掴まれ、アスファルトのざらついた表面に頬を擦り付けられた。口の中にガリツとした苦く硬い感触が入る。

その時、金属的で奇妙な重低音が聞こえた。

アンチスキルが俄かにざわつく。金田は顔を僅かに上げたが、隊員の足ばかりが見える。聴覚に意識を集めた。

その音は、テレビのクイズ番組で間違えた回答者を床に落とす時の、炭酸ガスを噴き出すあの音に似ていた。だが、例え100台のテレビで同じ場面を一斉に流しても、金田の耳を揺らす轟には及ばないだろう。それ程、大きく破壊的な音だった。その内、象の群れが危険を感じて逃げ出す時の悲鳴のような高音が唐突に混じり、何か硬く巨大な物がひっきりなしにぶつかり合う衝撃音、そして爆発音が断続的に響き渡るようになった。地面が縦に小刻みに揺れ、金田を抑える手が離れた。

それを金田は逃さず、体をバネのように跳ね上げて素早く起き上がると、まずレーザー銃を抱えていた一人の隊員を背中から蹴り倒し、奪い返す。それからすかさず、脇に止められていた紅のバイクに飛び込む。

しゃがみこんで姿勢を保持していたアンチスキルの隊員たちが、何事か口々に叫んだが、気にしている余裕はなかった。

スパークを散らすと、金田は全速力で検問を飛び出した。

施設の方面へ加速しながら金田が顔を上げると、見たこともない光景を目の当たりにした。

蛇の怪物だと、金田には一瞬思えた。1km以上は距離があるだろうが、青空を背景に、巨大な配管がいくつも、白い煙をまき散らしながらのたうっていた。それらはゴシユウウウという排気音を轟かせながら、鞭のようになつてガスを勢いよく空へ吐き出すと、煙の渦に沈み込む。それを何本もの配管がカオスな方向へ動き回っていて、コンクリート片がひっきりなしに、火山岩のごとく舞い上がっている。

「鉄雄……!!」

菌を食い縛ると、金田は破壊が巻き起こっている方向へとバイクを走らせた。

—— 実験施設北側 緩衝区域

アキラの封印。地下深くのカプセルを世間の衆目に晒すまいと施されたカモフラージュのもつとも外角に当たり、最大の機構である石棺。コンクリート造りの巨大構造物が、卵を割るかのようにヒビを広げ、突如として内側から吹き飛ばされ、崩壊し始めた。

敷島大佐は、その光景を目の当たりにして、目を見開いていた。崩壊した構造物に代わって、白色の煙があつという間に空を蹂躪していく。大佐はその煙に心当たりがあつた。アキラのカプセルを極低温まで冷却する大量の液体窒素が漏出し、急激に気化しているのだ。

煙の中から、いくつもの冷却パイプやその構造材が、バラバラに打ち上げられていくのが見えた。それらはまるで、空を飛ぶ雁の群れのようにだと、大佐の思考に一瞬の錯覚を起こさせた。

「41号……！」

轟音を立ててそれらが降り注いでくる。大佐は覚悟を決めて、身を伏せた。

—— 北部ゲート付近

「あれは——」

行方不明だったカオリとアーミーの一团を発見し、奇妙に揃って足を撃ち抜かれていた兵士たちを救護していた黄泉川愛穂は、眼前で起こる破壊の様相に言葉を失っていた。

それは、仲間の隊員達も同様だったようで、暫し全員、呆気に取られ、動きを止めていた。

ドガン、と衝撃音がし、地面が揺れたことで黄泉川は意識を覚ませた。

黄泉川の目の前で、カオリが頭を抱え、しゃがみこんでいた。

「みんな伏せろー！」

叫ぶが早いのか、黄泉川は前に飛び出し、カオリの華奢な体へ強引にかぶさった。

衝撃が途端に連続して強まり、大波となつて幾度も黄泉川の思考を揺らした。

「何だよ、アレ……」

黄泉川たちからやや離れた場所では、車を降りた上条当麻が呆然とした声を漏らしていた。

御坂美琴や初春飾利も同じ様子だった。

石棺が崩れ、煙に包まれていく。地響きがこちらにも伝わってくるのが感じられる。

「鳥鉄雄の仕業だ」

白装束を纏ったサカキが、はつきりとした声を上げる。心無しか声が震えているように上条には聞こえた。

「時間が無い。お前たちの目指すものはあちらにある」

「いやでも」

サカキを振り返った初春が、当惑した声を上げた。

「あっちって、確か、原発が——」

その時、パアンと乾いた音が聞こえ、一同の意識が逸れる。

「襲撃だ!!」

ミキの声が響き渡る。

先ほどまで上条たちが乗り込んでいたバンのフロントガラスに蜘蛛の巣状のヒビが入り、穴が開いている。運転手がぐったりとして座席にもたれかかっているのが見えた。

「どういふ事!?!」

美琴が身を咄嗟に屈めながら叫んだ。

「帝国!?!アーミー!?!それとも、一体誰が——」

「行くなら、行け！逃げるなら去れ！」

車両の下に半ば潜り込むように身を隠しながら、サカキが叫んだ。「奴らの狙いは私たちだ！お前たちは離れろ！」

更に数発、辺りの地面を抉って銃弾が飛んでくる。上条の頬を、礫が掠め、熱をもたらした。ミキもサカキと同じように身を潜めた所だった。

意を決して、美琴が駆け出した。

今まさに崩壊している、石棺に向かっている。上条はその様子を正気ではないと思った。

「おい!!まさかあんなところに飛び込む気か!!」

「カオリさんを助ける!!」

振り向き様に美琴は必死に叫んだ。

「アンタはどうすんの！」

上条が頭を必死に低くして迷っている内に、信じられないことに、初春も美琴の後を追って駆け出した。その横顔からは、決死の覚悟が窺えた。

「……ああ、クソ！」

何が待ち受けているのか、いつも以上に不幸なものであろうことは、上条に容易に想像できた。

今、この時点だつて、十分に不幸なのだ。

ならばいつそ、彼女たちの遅れを取らぬよう、走り出せ。

上条は、意を決して足を前へ踏み出した。

じりじりと、アスファルトの上をにじり寄る足音がする。

軍服風の黒ずくめの人物たちが、小銃を構え、車両を背にしたサカキとミキを取り囲んだ。

「ミヤコ教の捨て駒か」

杉谷が、サカキとミキに向かって言った。

「そういうお前達は」

深く息を吸い込みながら、サカキが言った。

「誰の手先だ。潮岸か？木原か？」

「知る必要があると思うか」

杉谷が冷徹に言うのと、兵隊たちの銃口がいよいよサカキとミキへ違
いなく向けられた。

「なあ、撃つ前に少しだけ言わせてくれ」

ミキが静かに言う。

杉谷の表情は微動だにしない。

「私らのことを、捨て駒だと言ったな」

ミキとサカキが、ほぼ同時に顔を上げた。

「間違いだ」

銃声が一斉に巻き起こると同じくして、竜巻のような突風が巻き起
こる。

兵隊たちが困惑して身を引く。

何人かが、反転して向かってきた銃弾を受け昏倒する。

弾丸のような動きで飛び出してきたミキが杉谷へ向かって体当た
りを食らわせようとする。

それを、杉谷は即座に反応して受け流す。

ミキの体がひっくり返り、背中から強かに地面へ倒された。

「よくもミキをー」

サカキが歯噛みして叫び、再び風を巻き起こす。

杉谷は眉根を上げて、拳銃をサカキへ向けた。

かつて石棺が鎮座していた場所は、土煙が徐々に晴れ、大量の瓦礫
の山と化している姿を晒しつつあった。

その中央部、特に小高い山を形成している場所へ、島鉄雄が一歩一
歩足を踏みしめ、登りつめていく。

頂には、鉄雄の肩程までの大きさになる機械的な球体が転がってい
た。高名なスペース・オペラのクライマックスに登場するような、灰
白色の機械部品を複雑に継ぎ接ぎした外見をしていて、不安定になっ
た接合部から、ひっきりなしに白煙を噴き出していた。

その目前に立った島鉄雄は、球体を見つめている最中に、強烈な頭痛を感じる。

金属音と、数多の呼び声が、頭の中で木霊する。

忌々しい。

「……割れろ」

額を抑えていた手を振り翳し、憤怒の表情で鉄雄が言う。

バカン、と球体が握り潰されるように割れ、破片を辺りに撒き散らす。

白煙が力強く吹き出し、鉄雄の視界を遮った。

やがてその煙が晴れると、鉄雄は目を見開き、思わず声を漏らす。

「なんだよ、これ……」

「なるほど」

左から何者かの声がして、鉄雄は、ぱつとそちらを振り返る。

「そんなモノが、私たちを呼んでいた『アキラ』の正体だったとはね」

白衣を土埃に汚し、木山春生が瓦礫を登って姿を現した。

鉄雄は目を見開き、そして唇の端を歪めた。

「……先生」

「久しぶりだな、島君」

瓦礫の上で鉄雄と向かい合い、木山もまた、薄く笑みを浮かべていた。

「聞こえるだろうか？君も」

木山春生は、鳥鉄雄の足元に転がっている、人間の腕程の太さである円筒形の標本カプセルを眺めて言う。

鉄雄は、黙って木山と同じように視線を落とした。

「彼」からの呼び声だよ」

鉄雄の沈黙を受けて、木山が手を差し出して言った。

「どういうメカニズムかは分からないが……私が君へ提供した^{レベルアップ}幻想御手は、どうやらヒトならざる者と交信する望遠鏡を向けてしまったようだ。Wow!とでも書き残すべきかな」

木山と鉄雄がそれぞれ見つめるのは、妙にくすんだ蜜柑色をした一連のガラス瓶だ。ガラスの表面には仰々しい書体でラベリングがされていて、液体で満たされたそれぞれの内には、何者かの標本サンプルが浮かんでいる。

ガラス瓶のひとつの、いまだこびり付いている固形化した窒素も徐々に煙となって消えゆくと、そのラベルの最も目立つ字がはつきりと露わになる。

アキラ 脳神経

「あんたにも聞こえるって？」

鉄雄は俯いたまま、上目遣いに視線だけを上げ、木山を捉えた。

「知ったように言うじゃねエか。何でだよ」

木山は、培養液の中に浮かぶ、芽が極端に伸びた歪なジャガイモのような標本へ目を落としたままだ。その目は、多分の憂いを含んでいた。

「私も、君と同じだからさ」

「同じ、だと？」

鉄雄が一息ついて、そして、視線を鋭くした。

「笑わせんじゃねエよ」

鉄雄の背後で、自動車ほどの大きさもあるコンクリート塊が浮かび上がる。鉄雄が紅のマントの下の、機械化された右腕を振り被ると、

塊がぱらぱらと瓦礫を払い落としながら、空気を割いてまっすぐに木山のもとへ飛んで行く。

木山が立っていた位置に、コンクリート塊が炸裂する。ところが、木山の眼前でそれはぱっくりと二つに割れ、音を立てて地面を抉り転がった。

鉄雄が目を見開く。

「……先生、聞いてねエゼ。能力者だったのかよ」

「私も驚いている……どうした、その腕は。島君」

木山は静かに聞いた後で、鉄雄の返事を待たず、唐突に笑い声を上げた。

「何だそれは……それがレベルアップの力だと！この学園都市のどこに、機械化された義手を精巧に組み上げ、合併症も引き起こさず、生身の体に合わせて機能させる能力者がいるというんだい!?それは……非常に興味深い。興味深いよ、島君!だが……」

鉄雄の周囲の空気が、パリパリと乾いた音を立て、急速に冷えていく。空気中の水蒸気が冷却され、氷塊が形成されていく。そして、ランスの先端のように鋭利な氷塊が何本も、鉄雄の体目にかけて飛来する。

そこで鉄雄が唸り声を上げて再び手を振り翳すと、氷塊はあつという間に融解し、蒸発した。

木山は笑みを絶やさない。

「残念だが、私はここで立ち止まる訳にはいかない。君を倒し、一万人の脳を統べる司令塔となる。レベルアップの頂点に立つのは、私だ」

「冗談キツイぜ、先生よオ」

鉄雄が眉間に皺を寄せ、小馬鹿にしたような声色を作った。機械化された右腕を掲げて、鉄雄は木山へ言う。

『『ヒトならざる』……なんとかだったな?なら、俺はどうだ。人間か?あア?』

冷たい金属の指で、鉄雄は自分の額に触れた。

「お前、俺の頭に……何しやがったあアア!!」

ドガガガとドリルを突き立てるような地鳴りと共に、衝撃波が一気に地面を抉りつつ木山へ迫る。土煙で木山の姿はあつという間に見えなくなった。

「はアはア、と鉄雄は息をつき、それから舌打ちをした。

「本当に残念だと思っっているんだよ、島君」

土煙の向こうから、木山の声が聞こえる。

「君には感謝している。君の力のお陰だ。君が帝国というチームを組織し、それはネットを通じて、承認欲求を満たされようとして執心な若者たちの空間へと、レベルアップを流行させる広告塔になってくれた。君たちの間では、こういうのを、バズる、というのかな。まあとにかく、私一人の力では、一万を超える被験者をこの短期間に生み出すことなど、到底不可能だったろう。予想以上の成果だよ」

「ごちやごちやうるせえんだよー！」

鉄雄は、周囲に倒れている巨大な配管の残骸を念動力で持ち上げる。それは蛇が鎌首をもたげるように、破損した鋭い切っ先を、晴れかけた土煙の向こうの木山へと向けている。

「俺は確かに、力が欲しいって言ったけどよ……分かんだよ。自分の中で、俺じゃない何かがある、どんどん膨れ上がってんのが……どうしてくれるんだよ、先生。どうすりゃいいんだよオ!!」

「君の能力が、どのようにしてそこまで昂っているのか、興味を惹かれる所ではあるが」

木山が煙から一歩踏み出し、片手を何か引き上げるかのように上げる。

鉄雄が向けて来た配管が、まな板の上の人参のように輪切りにされ、力を失い落下する。

「できるだけ穏便に済ませるつもりだ……君は私の、恩人だからね」

ウェーブのかかった前髪が風に揺れ、木山の瞳が鋭く、苦悶の表情を浮かべる鉄雄へと向けられる。

左の瞳は、奇妙の赤く染まっていた。

「ふざけんじゃねえ!!」

鉄雄が叫び、木山が再び手を振るう。

小高く築かれた瓦礫の山が吹き飛ぶような爆発が起こり、轟音が辺りに響き渡った。

カオリは鼻をくすぐるような砂の臭いを感じ、目を薄らと開ける。自分に覆い被さっている、大きな体の持ち主の事を感じた。

「……黄泉川先生！」

カオリは脇にどくと、アーマーを身に付けた黄泉川愛穂の体を揺する。少し間を置いて、緩慢に黄泉川が体を起こした。体に降りかかっていたアスファルトの破片がばらばらと落ちる。

「……先生、血が」

「ああ、カオリさん……怪我はないじゃん？」

黄泉川は、額から血を流し、顔は砂でひどく汚れている。それでも、精一杯の笑みを浮かべてカオリを見た。

カオリがこくと頷くと、それはよかったじゃん、と言いながら黄泉川は立ち上がろうとする。しかし、脚を痛めているのか、表情をひどく歪めた。

「あの、先生、傷の手当てを——」

「私のことはいいいじゃん」

黄泉川は座り込んでいるカオリの肩をぼんと叩き、何とか立ち上がった。

眼鏡をかけた、若い女性のアンチスキルが駆け寄って来た。

「黄泉川先生！」

「鉄装。皆の状態は？」

鉄装綴里が表情を暗くする。

「潮騒先生が、左足を負傷して、立ち上がれません、他にも何人か、怪我をした隊員が……」

「ああ。だが、生きているんだな？」

黄泉川が念を押すように言うと、鉄装はしばし黙り込む。

「どうした？」

「あの……アーミーの兵士が……」

黄泉川が、カオリの肩を押さえつつ振り返ると、動ける隊員が、地面に横たわる何かを覆うようにブルーシートを広げているのが目に入る。

黄泉川は暫く目を閉じて沈黙した後、口を開いた。

「……応援を要請しなければならないな。本部に、それから東部担当班にも連絡を。それから、すぐに線量計ガイガーカウンターで放射線の測定だ。石棺が吹き飛んだんだ、事態はとうに我々だけの手には負えない——」

「カオリ先輩!!」

黄泉川が指示を飛ばそうとするところへ、呼び声と駆ける足音が割って入って来た。

「……初春ちゃん！それに御坂さんも——」

カオリは久方ぶりの笑顔を見せた。真っ先にカオリのもとへ駆け寄って肩を掴んだのは初春飾利だ。後から、御坂美琴と、私服姿の高校生くらいの少年が付いてきた。七学区のセブンス・ミストで、自分を助けようと奮闘してくれたのを、カオリは覚えていた。

「怪我は？ 木山春生に連れ去られたって聞いて、私——」

「あ、うん。何とか大丈夫。さつきは、黄泉川先生が助けてくれたし——」

再会を喜び合うカオリと初春を見て目を丸くした黄泉川は、驚いたような声を上げる。

「上条！それに初春、御坂さんまで——どうしてここへ来たじゃん!?! 危険だ!」

「それは……分かってます」

上条当麻の表情は、先ほどまでに比べ俄然引き締まったものになっていた。学校で普段からよく知る黄泉川をはじめ、アンチスキルが何人も負傷している目の前の状況を前にして、その顔には覚悟が滲み出していた。

上条の斜め後ろでは、美琴が携帯電話を手に早口で何事かまくし立てている。

「ええ！あたしだって知ってる！今日の前で見えたから!……原発!?!」

今ここで言われたところで……んあー！もう！万が一ヤバくても手遅れだしそんなの！黒子の方でどうにか調べられないの!？」

「白井が懸念している通りだ」

黄泉川が、足を引きずりながら上条の前に進み出た。

「いかに過去の遺物だと言っても、石棺が崩壊したんだ。どういう意味をもつか分かるだろう。一刻も早く、ここを立ち去るべきじゃない！」

「先生、その事なんですけど」

初春がカオリから黄泉川に視線を移して言った。

「石棺が崩壊したこと自体は、直ちに放射線被害をもたらすものではありません。実験区の原因に被害が出てれば別ですが——石棺の下には、過去にメルトダウンを起こした施設跡なんてなかったんです」

「何?」

黄泉川が怪訝な顔をしたところで、再び爆音が聞こえる。その場の一同がそちらを見た。

石棺が崩壊した後には、瓦礫や建材が積み上がっているのが見える。そこで、再び土煙が上がっている。奇妙なことに、赤や白色の光が時折煌めいているのが見える。

「木山春生……!」

美琴が唸るように言うと、カオリが不安げな表情を浮かべる。

「あの人、言っていました。鉄雄君に会いに行かなきゃならないって——

——きつとあそこで、木山先生も、鉄雄君も……!」

「木山と、島鉄雄もいるのね!？」

美琴はぎゅっと拳を握り締めると、初春とカオリを振り返る。

「初春さん！カオリさんを連れて、アンチスキルの先生たちと一緒に避難して!」

「御坂さんはどうするんです!？」

初春が心配そうな声をかけると、美琴はニヤッと笑って見せた。

「驕るつもりは無いけれど……私、超能力者だから！レベルアップーを使ってみんなを苦しめてる奴ら、まとめてひっ倒す!」

そう高らかに宣言すると、美琴は黄泉川が制止する声を聞かずに走り出した。

「おい！待てよ、ビリビリ！」

上条も美琴の背中を追って駆け出した。

「すんません！黄泉川先生！アイツのこと、何とかしてきます！」

「おい待ててば……なんて若い子たちじゃんか」

呆れたように黄泉川が呟く。それから、表情に生気を宿して顔を上げた。

「鉄装！」

「ハッ、ハイッ！」

「突っ立つてる場合じゃない、今すぐ動くじゃん！一般人の保護と、傷者の応急処置、避難を！本部には、原発の被害を上空から空撮して、被害状況の評価を光の速さでやるようにケツ引つ叩いて！木山の勤務先へのガサ入れの報告はまだ!?それから、動ける者で、あのバカ2人を追い掛けるじゃん!!」

黄泉川がまくし立てると、鉄装は何度も裏返った返事を叫び、周囲の仲間と連携して行動し始めた。

「支部長……もしかすると、予想とは全く違う事態が起きてるかもしれないじゃんよ」

負傷のために、今この場にはいない上司の顔を思い浮かべながら、黄泉川はひとり呟いた。

慌ただしく動き始めるアンチスキルの隊員たちを、カオリと初春は不安そうに見つめた。

カオリは何か言いたそうに口を開いた。

「……初春ちゃん」

「何ですか、先輩？」

カオリが小さな声で語り掛けると、初春は顔をカオリに寄せる。

「実は、木山先生から預かったものがあるの」

カオリは、真剣な表情で初春を見つめた。

畜生。

鉄雄は声に出して毒づいた。

生身の左肩を切り裂かれ、血が流れ出ているのを、機械化された右手で押さえながら、瓦礫の陰に身を潜めて、息を切らしている。

「随分臆病に振舞っているじゃないか」

いつの間にか、木山が背後に回り込んでいた。鉄雄はがばつと振り返り、木山を睨みつけるようにして意識を集中させる。

亀裂が地面を走って木山へと向かう。しかし、波動は木山の目の前数mの所で弾かれたように霧散する。木山の周囲の空気が、ほんの一瞬眩く光を放った。

さつきからこの繰り返しだ。攻撃を多く放っているのは鉄雄だが、全て木山に避けられるか、防がれている。鉄雄の頭痛は時を追うごとにひどくなり、数少ない木山からの反撃によって体を傷つけられたこともあり、無性に焦燥が高まっている。

「演算に集中できていないな。それとも、単に訓練不足か……」

木山の衣服はひどく土埃で汚れているが、それは鉄雄と遭遇した当初の通りだ。鉄雄の攻撃はほとんど通じていない。

「無理もないと思うよ。君はほんのひと月前まで、職業訓練校で怠惰に過ごす、一介のバイカーズであり、無能力者だったんだ。演算の仕事を磨き上げる時間なんて無かったろうし、アーミーのラボは能力の発現ばかりに重きを置いて、精度の向上には無頓着だったからね」

「ごちやぐごちやとうるせえー！」

軌道が明らかな衝撃波では防がれる。そう考えた鉄雄は、木山春生の立つ位置一帯の重力操作を試みる。

しかし、なぜか的外れなことに、木山の後方で瓦礫の崩落が起こる。その瞬間、眩暈を伴うほどの頭痛の波が押し寄せ、鉄雄は呻きながら膝をつく。

「これは私の推測だが」

木山は何をするでもなく、鉄雄をただ見つめて言った。

「今、レベルアップの被験者で、意識を保った者が君と私の二人だけ

だとすると……今、私たちは綱の上で押し合いへし合いしている訳だ。一方がバランスをひとたび崩せば、たちまちもう一方に意識を呑まれる。そして今、君は正に奈落の底を見つめている状態だ。仕方がないのさ。第一号の被験者は私だ。アドバンテージはこちらにある。なぜなら、レベルアッパーは、脳波を私のものへと調律する働きを持つのだからね」

木山は姿勢を屈めると、瓦礫の中に転がっていた金属缶を手に取り

「君がなぜ、今の今まで屈服せずに意識を保っているのかが妙だが……なあ島君。なぜ君はそこまでして戦うんだい？ 私には明確な目的があるが……君は、何のためにここまでやって来たのかな」
「ふざけるんじゃないよ……」

顔を押しえた、機械の指の隙間から、鉄雄は木山を睨み返す。

「俺がいよいよこんなザマになったのは、お前がああ音を聞かせたからだ……違うか」

木山はやれやれと首を振った。

「君が、力を欲しいと言ったんだよ？ 全く、コレだ……子どもは言う事がコロコロ変わるから、嫌いだ」

木山の赤い眸が鋭くなる。

「それに、お門違いという奴だ。文句なら、アーミーのラボの老人共に言うべきだな。生きているかどうかは知らないが……私は彼らに協力したに過ぎない。最も、そのお陰で、レベルアッパーの完成に至ったのだけどね」

木山の掌で、ふわりと金属缶が浮かぶ。

「なあ、島君。何も別に、君を殺してしまおうなんて思っただけはないんだ。ただちよつと、諦めて、気絶でもしてくれればそれでいい。私はある事柄について調べるのに、皆の脳を借りたいただけなんだ。人を傷つけはしない。それは君にも頼んだはずだが」

「今更聖人ぶんのかよ、先生」

鉄雄は足を震わせながら、どうにか立ち上がる。

「何でレベルアッパーが、こんなに短い間に、これだけ多くのバカへと

広まったかって？俺のお陰？ちげエよ。俺がやったのは、何人かのピエロどもに釣りの仕方を教えただけなんだよ……レベルアップを広めたのも、それを元手に金を巻き上げたのも、アーミーやアンチスキル、ジャツジメント、周りのスキルアウトに片っ端からケンカ売ったのだって、『帝国』の偉ぶった連中が好き勝手にやったことだ……俺の、知らない所で……俺がリーダー？さア、どうだかな」

「私が言える立場ではないが、これだけ大きな事態になった所で、その弁明は説得力が無いぞ、島君」

木山の操る金属缶が掌を離れ、ふわりと鉄雄の頭上へと移動する。

「例えば、こんな能力……これを私が再現できるのも、君の働きのお陰だ」

鉄雄が金属缶を見上げると、シユウウウと吸い込むような音を立てながら、缶が収縮し始めた。

「ハッ……いつは覚えてるぜ」

鉄雄が忌々し気になつと腕を振るうと、金属缶はバリツと音を立てて飛散する。

「俺への当てつけか？七学区の店で、カオリに手を出しやがった眼鏡野郎の——」

「甘いよ、島君」

鉄雄の言葉に被せるように、木山がはつきりと言った。

「能力行使の仕方が、単調過ぎるんだ、君は……」

木山の言葉を聞いて、不満そうに目尻に皺を寄せた鉄雄は、ふと眩しさを感じて辺りを見回す。

鉄雄の周囲を、キラキラと太陽の光を受けて反射する無数の金属片が漂っている。

それらが全て一様に、再び収縮を始めた。

木山が口を開く。

「妄想を現実にするなら、もっと多くの想像を働かせることだ」

鉄雄は咄嗟に腕で顔を覆った。

次の瞬間、鉄雄を四方から爆炎と風が襲い、辺りに粉塵が巻き起こった。

その爆風は、二人の戦場の麓まで辿り着いていた、美琴と上条にも叩きつけられる。

「危ない!!」

上条は咄嗟に美琴を地面へ押さえつけた。

なるべく鉄雄には悟られないようにしていたが、心身に不調をきたしつつあるのは、木山も同じだった。

額から落ちる汗をぬぐい、木山は大きくため息をつき、すんとその場に腰を落とした。

すぎずきとした頭痛が、どっと押し寄せてくるようだ。

「……すまない、島君」

粉塵が晴れてくると、瓦礫の上に、血痕と共に細かな機械部品が散乱しているのが見える。

鉄雄の右腕を構成していた物だと、木山は推測した。

これで、レベルアップの被験者の脳波は、全て自分の物になった。眠ったままの、あの子たちを救える。

疲れた笑いが、木山の唇から零れた。

木山はふらふらと立ち上がり、鉄雄が居た場所に背を向ける。すると、ふと瓦礫の上に転がる筒状の物体が目につく。

鉄雄が白日の下に曝け出した、「アキラ」の標本サンプルだ。

敷島大佐を始め、アーミーの者たちは皆、この「アキラ」を恐れているようだったと、木山は思い出した。しかし、目の前に転がっているのは、ただのスライスされた神経系統だ。

それでも、木山の脳裏には疑問が浮かぶ。

ならば、ここ最近、自分にしきりに語り掛けてくるものは何だったのか。悪夢のようなあのビジョンは何を示唆しているのか。

レベルアップが他者と脳波を共有するものである以上、他者の思考や潜在意識が無意識の内に流入することは可能性としてあり得た。しかし、それが「アキラ」と何か関係があるのか。

木山はゆつくりと、「アキラ」の脳神経サンプルへと手を伸ばす。

指先が、ガラスの冷たい表面に触れた。

その瞬間、木山の鼻腔に、強烈な腐臭が立ち込める。

驚愕して身を引くと、自身の両腕が、何か熱をもった、柔らかい肉感のあるものに包まれる。

振り向くと、ぬらぬらと光沢を放つ巨大な肉塊が、口をぽつかりと開けるかのように、眼前へ立ちはだかっていた。

言いようのない粘性をもった液体が、びちゃびちゃと髪を、頬を濡らす。

腐臭が一層強烈になる。

「違う!!」

大声で木山は叫んだ。

これは現実ではない。幻だ。

意識を何とか集中させると、体を濡らしていたもの、両腕を拘束していたものが突如消え去る。

鼓動が早鐘を打つ。木山は息を切らし、辺りを見回す。

落ち着かせようと息を吸い込むと、腐ったような臭いが微かにした。

臭い？

木山は足元へ顔を向けた。

ピンク色をしたゴム手袋のように柔軟で、光沢を放つ手が、自身の片足を掴んでいた。

思わず、ヒツ、と息を呑んだ。木山の全身に、鳥肌が走る。

足を抜こうとするが、その前に、奇妙な手が、2本、3本と増え、それらは絡み合いながら木山の足を掴み、膝、太腿、内股へと這い上がって来る。

木山が歯をガチガチ鳴らしながら顔を上げると、鳥鉄雄が立ち上がっているのが見えた。

全身、血みどろだ。

そして、先ほどまで機械化された精巧な右腕が接続されていた肩口から、赤いマントを押しつけ、脈動する肉塊が、所々に機械部品を巻き込みながら、自動車程の太さへと膨れ上がりながら、自身へと伸び

てきているのを見た。

次の瞬間、木山は姿勢を崩し、地面へと引き倒される。

「やめ——」

あつという間に、体が燃えるような熱さに包まれていく。

鼻と言わず、口元までもが、腐臭で満たされていく。

恐怖で満たされた木山の脳裏に、幾つもの呼び声が割って入った。
アキラ、としきりに呼んでいた。

「ビリビリ！おい、大丈夫か——」

ガラリと、自身の背中に被さっていた石礫を払い、上条は体の節々に痛みを感じながらも起き上がり、美琴の背中を揺さぶる。

美琴も、大きな怪我は内容で、すぐに体を起こす。

「うん、あたしは平気——」

美琴の目が大きく見開かれ、言葉が途絶えた。

上条はその様子を不審に思い、美琴の目が釘付けになっている方へ振り返る。

「なに、あれ……」

美琴がぶるぶると指を震わせながら、瓦礫の小高い丘の上を指差した。

その言葉には、上条も同感だった。

「アレは——」

上条が口を開いた瞬間、バイクのエンジン音が一気に背後から押し寄せて来た。

「鉄雄オオオオ!!」

ドドドツと音を立て、金田がバイクを停めるなり、肩に担いだレーザーの銃口をまっすぐに丘の上へと向けた。

「金田……?」

自身の名を叫ぶ声に気を取られ、島鉄雄はそちらを振り返る。それは、上条当麻と御坂美琴も同じだった。

「あいつは——ッ!?!」

上条は振り返った瞬間、瓦礫の上でバランスを崩し、後ろへよろける。

そこは、金田が構えたレーザー銃の射線上だった。

「わっ、馬鹿——」

金田は当惑し、引き金を中途半端に引いてしまう。

脇へ軌道の逸れたレーザーが、上条のすぐ足元の地面を抉り、更に鉄雄の変異した腕へと照射される。鉄雄は熱に触れたかのように、伸長した腕を引っ込め、その反動でふらついた。

「何だよ！あの腕は?」

金田が驚き、照準から目を離していると、体勢を立て直した鉄雄がこちらを憤怒の形相で睨みつけてきた。

「この野郎オ!!」

危険を直感した金田が、慌てて踵を返し、瓦礫の坂を転げ落ちる。それは上条も同じだった。

その直後、辺りの地面が連続して、地雷を踏んだかのような爆発を起こし、衝撃と共に濃く煙を巻き上げ、バラバラと土や瓦礫が吹き飛んだ。

頭を抱えて倒れこみ、伏せていた上条は、自身の体の無事確かめる。

「……御坂?!」

御坂の姿が見当たらない。

まだ煙が立ち込める周辺を見渡す。

あちらこちらに瓦礫が散らばるばかりの風景には特徴がなく、御坂

がどこにいるのか見当も付かない。

「くそっ、どこだ——」

探そうと身を起こしたその時、上条の背後でがらがらと足音が近づいてくる。

島鉄雄か——身構えた上条の襟元を、力強く2つの手が掴み上げた。

「この馬鹿野郎オ!!邪魔すんじゃねエよ!!」

頭にひどく砂を被った金田が、上条に掴みかかるなり怒鳴った。

「てめえ、さつきはチャンスだったのに!台無しじゃねエか!」

「おま——こんなことやってる場合か!!」

自分を締め上げてくる金田の手首をどうにか振りほどいて、上条は憤慨して言った。

「いきなり現れるなり撃ってきやがって——しかも何だよそれ!?そんなビームライフル知らねえぞ!どっから持ってきた!!」

「ぶちやぶちやとうるせえ!——あっ」

顔を紅潮させていた金田が、何かを思い出したように人差し指を作って上条へ向ける。

「てめえ、そのウニ頭——学生街で俺たちの邪魔をしやがったろ!?!西条だか東条だかっていう」

「上条だ!!西でも東でもねえし!」

金田の唐突な言葉に、上条も徐々に怒りを沸かせて言葉を返す。

金田は腕をまくり上げ、威嚇するように上条へ詰めようとする。

「……んなことどうだっていい!なんでこんな所にいるんだよ!」

「はア!?!それはそっちこそ——」

「鉄雄は俺のチームのメンバーだ!」

足元の瓦礫が崩れ、金田はよろめくが、なおも上条へ近づこうと試みる。

「仲間を大勢やられてる!いいか、これは俺たちの問題だ!正義ヅラして口挟むんじゃねえつつつてんだよ」

上条は呆れたように表情を歪める。

「お前らバイカーズが散々身勝手しているせいで、この街全体が滅茶

「苦茶になつてるんだぞ！」

金田の言い分は、上条には理解しがたいものだった。

「それをお前らだけの下らないお友達ルールで何とかしようってか？どこまで自分勝手なんだ！お前たちは！少しは頭を使えよ能無しめ！」

「言わせておけば……」

金田もいよいよ顔を真っ赤にしている。

「てめえに何が分かんだよ！この——上条オオオ!!」

「年上にはな、『さん』ぐらい付けろよ、このチャリンコ野郎!!」

「ちよつと、アンタ達！」

2人が言い争いをしている所へ、美琴が戻ってきた。転倒してすり切れたのか、スカートの裾が大きくほつれている。

「揉めてる場合じゃないでしょ……アイツ、まだ何か仕掛けてくる気じゃない？」

美琴が振り返った方を、金田と上条が見る。

爆発の衝撃で地面が露になりやや開けた場所に、鉄雄が息を切らしながら、立っていた。先ほど奇妙な変異を起こしていた右腕を庇うように、ボロボロになった深紅の幕で覆っているが、それは不自然に膨張しているように見えた。

「そつちの男と女は……七学区で偉そうに吠えてたつけなあ……」

前髪から垂れてきた汗が目には沁みたようで、鉄雄は頭を振った。それから、金田を見て嘲り笑う。

「どういう風の吹き回しだよオ、金田。こんな奴らといつの間にお友達になったんだ？腑抜けたじゃねエか随分と」

「てめえが知ったこつちやねえぜ鉄雄オ」

金田が上条を押しわけ、一歩進み出て挑発するようにせせら笑いを浮かべた。

「そういうお前こそ、どうしたよ？顔色悪イぜ。医務室に駆け込んでお寝ねした方がいいんじゃないの？」

金田はそう言うと、レーザー銃のバッテリー表示に一瞬目を落とし、背後の上条と美琴を振り返った。

「手エ出すんじゃねえ。チームのメンバーが死にかけてる。アイツがやりやがったんだ。落とし前をつけさせる」

「へエ？誰が死にかけてるって？」

鉄雄が嘲るように金田へ言った。

「山形だー」

金田が怒りを込めて叫ぶと、鉄雄は一瞬、呆けたような表情をして、その後、笑みを取り戻す。

「そりゃあ知らねえよオ。勝手に一人で事故ったんじゃねエのかよ、そうだ……いつもそう言つて俺を馬鹿にしたよなア」

金田は、鉄雄の言葉を聞いて、レーザー銃を握る手に力を込める。

「鉄雄……許さねエぜ」

「そんなチャチな武器おもちゃでどうにかなると思つてんの？」

金田に疑問を挟んだのは美琴だ。

「アイツ、様子が変。さつきも腕が妙なことになってた……ここは私に任せといて、素人は引つ込んでなさい」

「はア？何様だてめえ」

「お前たち、言い争つてる場合じゃないだろー！」

今度は金田と美琴が険悪な雰囲気になり、上条がたまらず間に割つて入る。

「さつきからゴチャゴチャとー！」

鉄雄が苛立ちの声を上げると、辺りの地面に再び地響きが起こる。

「まとめてどっかいっちなまえエー！」

ヤバツ、と上条が声を漏らし、金田もふらつく。

鉄雄の前方を起点として、衝撃波が地割れとなって3人へ襲い掛かってきた。

次の瞬間、上条と金田の立つ場所は急に日陰になった。

「相変わらず力任せの能力ね」

美琴が右手を差し出し、地面を倒れていた巨大な配管に触れていた。配管はめりこんでいた瓦礫ごと、磁力操作により持ち上がり、ビル3階程の聳え立つ防壁となつて鉄雄の放った衝撃波を防いでいた。

美琴は配管沿いに壁を駆け上がると、その頂点に立ち、鉄雄を見下

ろす。

金田があんぐりと口を開けてその様子を見守る。

「ええ……あの女、もしかして凄エ能力者だったりする?」

何言ってるんだコイツ、とでも言いたげに上条は呆れた表情で金田を見た。

「答えなさい!」

美琴は鉄雄を見下ろして言った。

「私は、幻想御手レベルアップで倒れた人たちを救いたい! どうすれば、みんなを目覚めさせられるの!」

「俺が知ったこっちゃねエよ」

眉間に皺を寄せて、鉄雄が吐き捨てるように言った。

「アレを作ったのは俺じゃねえしな。先生に聞けよ」

鉄雄の返答に、美琴の表情が鋭くなる。

「先生……! 木山春生はどこに!」

「さア? 探してみろよ……生きてりゃいいけどな」

鉄雄がにたりと残酷な笑みを浮かべると、美琴の髪の毛が逆立つ。

「アンタ……やっぱり一発入れないと気が済まない!! 探させてもらうよ、アンタをぶちのめした後でね!」

そう言うが早い、美琴の体から、青白い光が跳ねるような軌道を描いて瞬く間に鉄雄へと迸った。

バシツと強烈に叩きつけるような音が響き渡る。しかし、鉄雄の立っていた場所は黒い焼け焦げが残るだけだった。

美琴は当惑する。

「ッあれ!? どこに——」

「気を付けろ、上だ!!」

上条が後ずさりながら美琴へ警告する。

美琴が空を見上げると、ギラつく太陽を背に、黒い影が見えた。

美琴は咄嗟に危険を感じ、その場を飛び退く。その次の瞬間、黒い影が弾丸のように降り、美琴が立っていた瓦礫の壁へ着弾し、激しく破壊した。

上条と金田は命からがらその場を転がるように退避する。

辺りの瓦礫を利用した磁力操作で何とか地に降り立った美琴は、鉄雄が降り立った地点に立ち込める土煙を睨みつける。心臓が鼓動を一気に早めるのを感じる。

「電撃を見切った……？いや、ただのまぐれか——」

「いいこと教えてやるよ」

土煙の向こうから、鉄雄の声が聞こえる。

「てめえがどこのお嬢様か、んなこと俺はちつともキョーミがねエ。だけどよ、レベルが高エからって勝ち誇るヤツが、俺は大嫌いだ……：そういうや、あの女も喚いてたなア、超能力者^{レベル5}だとか言って。ま、大したことなかったけどな」

「あの女って……」

美琴が確実に面識のある女性のレベル5は一人しかいない。その、第5位の心理掌握^{メンタルアウト}——食蜂操析には、つい最近会ったばかりだ。特に変わった様子は無かった。

それ以外の人物、となると、美琴は会ったことはなかったが、同じレベル5として、噂程度には聞いたことがあった。

「アンタ、まさか、第4位を——」

美琴はそう口に出した瞬間、妙に体がだるいことに気づく。

足に痛みを感じて見下ろすと、細かな石礫が、自分の靴や踝、膝へと集まっていた。素肌に食い込み始めていて、痛い。

「お喋りしてる場合かッてんだよ」

いつの間にか、鉄雄が煙の奥から姿を現していた。右腕が明らかに膨張し、幕の下でグロテスクに蠢いているが、その表情は汗に塗れながらも勝ち誇っている。

「いつまでその重力に耐えられるかな……」

重力操作。美琴がその言葉を思い浮かべた時には、体が鉄の塊になったように重くなっていた。美琴は体を屈め、知らず知らずの内に膝から下を礫の小山へと埋めている。そうしている間にも、周囲の瓦礫や石は自身の体を覆おうと集まり、体中が悲鳴を上げ始めていた。

瓦礫それぞれの金属の磁力を操作して、脱出を。いや、電気を思い切り放って破壊できるか——美琴の脳裏に様々な脱出の考えが走

るように浮かぶ。集中を試みるが、経験したことのない状況に思考はパニックになり、演算するどころではなかった。

ミシミシと石同士が耳元で押し合い圧し合いしている。その嫌な音を縫うように、高笑いが聞こえてくる。

「ざまアねエなエリート様がよオ!!」

助けて——美琴は体が切り裂かれるような痛み悶え、声にならない叫びを上げる。

「止めろおお!!」

上条は、美琴が鉄雄の攻撃を受け危機に陥っているのを目にする。瓦礫の上を駆けつけようと必死に足を動かすが、遠い。右腕を伸ばすが、まだ空を掴むだけだ。

その時、上条の隣を、強烈に唸る音を轟かせて何かが駆け抜けていった。ドップラー効果でグリツサンドをかけたようなそのエンジン音が、上条の耳に焼き付く。

「鉄雄オツ!!」

金田のバイクは瓦礫を踏みつけると、ロイター板を踏んだように跳ね上がり、鉄雄へと迫る。

鉄雄は咄嗟に身を避けるが、金田のバイクのタイヤが、鉄雄の生身の左腕をぐしやりと踏みつける。

鉄雄は地面に横たわり、苦悶の声を上げる。

「おい御坂、しっかりしろー」

重力の戒めが解けた美琴の肩を抱き、上条が呼びかける。

美琴は肌のあちこちに傷を作り、血を滲ませている。上条が揺さぶると、焦点の合わない目を開け、喘ぐような息を洩らした。

「うぐ……てめえらもう全員死ね……」

鉄雄が這いつくばりながら、上条と美琴の方を睨みつける。

上条は、いよいよ怒りが頭に上り詰めるのを感じた。

「自分たちの欲のためだけに、人を巻き込んで、傷つけやがって……!」

美琴をそつと横たえると、上条は脱兎の如く駆けだす。鉄雄を目指

して走る。

「そんなことが許されると思ってたんだつたら——！」

上条は、思い切り右腕を振り被る。

鉄雄は、表情を歪め、顔を庇うようにマントに包まれ膨張した右腕を持ち上げる。

「そのとち狂った幻想を、ぶち壊す!!」

鉄雄の腕を覆っていたマントがずり落ちた。人体模型に限界を超えて綿を詰め込んだような、肉塊が露になる。

上条の右腕が、鉄雄の右腕に炸裂する。

瞬間、鉄雄は弾かれるように吹き飛んだ。

上条は息をつきながら、今しがた相手を殴りつけた右の拳を見つめる。

血まみれだ。しかし、それは自分の血ではない。

「アイツ……」

ぞわりと背筋に冷たいものが走るのを感じ、上条は恐る恐る顔を上げた。

どこからか漂ってきた腐臭が、ぬめりと上条の鼻を舐め上げた。

バイクを急旋回させ、安定した足場で停まった金田は、鉄雄の方を見定めた。

鉄雄は、上条に殴り飛ばされたところだった。人が殴り飛ばしたにしては、やたら鉄雄は勢いをつけてボールのように跳ね飛んだように見える。

割り入ってきた奴の手を結果的に借りる形になったのは気に食わないが、いずれにしても鉄雄を狙う絶好のチャンスだった。仲間を、今も生死の境を彷徨っている山形を辱めたのだ、最早容赦はしない。

金田は肩越しにレーザー銃を構え、照準をズームし、鉄雄をしつかり収めた。

引き金の指に力がこもる。

鉄雄は胎児のように丸まり、身悶えしていた。痙攣しながら横に転

がり、金田の方を向く形になった。

上条に殴られた鉄雄の右腕は、花開いていた。

金田の脳裏には、そのような表現が浮かんだ。肩口から百合の花のようにぱっくりといくつも枝分れた肉は、スーパ―の棚に陳列する挽肉のようなピンク色をしていて、びたびたと打ち上げられた魚のように蠕動し、辺りに血や細かな肉片をまき散らしていた。その質量は明らかに、元の鉄雄の腕を凌駕して、鉄雄自身の体よりもなお巨大だった。開口部の窪んだ中央には、瓦礫の中から取り込んだのか、元々機械化していた時の名残なのか、無造作に何らかのコードや配管の残骸が取り込まれ、さながら柱頭のようなだった。

照準の向こうにピントが合った鉄雄の顔は、血管が明らかに浮き出ている、驚愕と恐怖で歪み、自分の右腕があつた場所へ見開かれた目が釘付けになっていた。

瞬きを忘れているのは、金田も同じだった。照準を合わせていた手からは力が抜け、銃をおろしていたが、それでも金田は今見た光景が信じられず、目も口も開けたまま、動けずにいる。

「かねだ……」

鉄雄が苦し気に声を洩らした時、鉄雄の背後、瓦礫が小山を築いた頂に、何者かが立っていた。

「41号オ!!」

全身に煤を被って黒く汚れた、敷島大佐だ。拳銃を短く切り詰めたような何かを握りしめ、まっすぐに鉄雄へ向けている。

「終わりだ!」

大佐の握る照準器から赤く細い光線が放たれ、鉄雄の丸まった背中を射る。

やめろ。金田は無意識に、そう声に出していた。

それから数秒して、鉄雄のうずくまる場所へ、白色光が上空からまっすぐに降りてきた。

それは次第に輝きを増し、やがて目も眩むほどになる。金田は我に返ると、目を背け、その場を猛然と走り出した。

そして、高熱と爆風が辺りに轟いた。

——北部ゲート 付近

「どういうことじゃん？原発に一切被害が出ていないってのは……」
「私も不思議なんですけど」

黄泉川愛穂の疑問に対し、鉄装綴里は当惑したように言った。

「爆発にも似た石棺の崩壊による瓦礫の飛散距離からして、発電所区域内にも被害が出ていてもおかしくはないんですが、なぜかそこだけ避けたかのように、無傷らしく……まるでだれかが見えない屋根を張ったみたいに」

「そんな都合のいい話があるとは信じがたいけど——」
「あのー！」

初春が割り入るように声をかけると、黄泉川は視線を初春へと向けた。

「ああ、カオリさんが木山春生から受け取ったデータチップか……レベルアップの解除プログラム、ね……」

「ええ。木山先生の言うことが本当ならば、これをどうにか、防災放送でもなんでも使って街中に流せば、木山の企みを阻止し、昏睡状態の人たちを救い出せるかもしれません！」

初春が熱っぽく言うが、黄泉川の表情は冴えなかった。

「しかし……信用し難いじゃん」

「なぜです!？」

「木山の言うことがだよ、初春。却って患者たちの状況を悪化させる音声プログラムだとも限らないだろう。こんな所じゃ分析もできない。木山の研究オフィスに査察をかけたチームにまずは引き渡さなければ、安全が保障できないじゃん」

「それは……っ」

初春は焦りの表情を浮かべる。

その横でやり取りを見守っていたカオリは、ふと意識が逸れる。

石棺の崩壊現場が遠くに見える。そこへ、一本の光の筋が、上から

まっすぐに降り注いでいた。その白い光は、青空から一直線に降り、そして崩壊現場に煙を巻き起こしている。

「あれはいったい?」

鉄装が更に戸惑った声を上げる。

地響きがこちらにも伝わってくる。その内に、光の筋は地表から上空へと、徐々に細くなり、かき消えていった。着地点からは相変わらず黒煙が立ち上っている。

そこでカオリは、不意に、自分の名を、呼ばれた感覚を覚える。

その声の主は、慣れ親しんだものだった。

「……鉄雄君?」

「どうしました、先輩——」

初春が声をかけた時、カオリは自分の目を疑い、手の甲で擦ってみた。

しかし、やはり、異常な物が見えた。

「……なんだ、あれは」

黄泉川が声を洩らした。

カオリをはじめ、その場の全員の目には、瓦礫の山に、ピンク色をした人型が、ゆっくりと立ち上がるのがぼんやりと見えていた。

カオリの心臓が、どくと鳴った。

——第七学区、水穂機構病院

「一体どうしたというんだね?! レベルアップの患者たちが急に暴れ出したというのは……」

「わ、分かりません」

ドクターの切迫した問いに対し、看護師は困惑して答えながら、必死にベッドの上でもがく患者を鎮静しようとして押さえつけていた。

「さっきまで眠っているようだったのに、急に暴れ出して——早くバンドを!! 急いで!」

ベッドの上の患者は、ガウンが乱れるほどに身をよじる。長い黒髪

を振り乱し、目を充血させ、見開いている。そして、口をあらん限りに開き、大声で叫んでいる。

「アああああキいいいいラああああアアアつあつあつうあああああ
あ」

「落ち着いて佐天さん！——何があつたの……」

慄いたような看護師の呼びかけは、暴れ続ける佐天涙子の耳に届いてはいないようだった。

「衛星兵器だと！いったい誰が——」

「いや、それより、何なんだよ、あのデカブツは!?! 石棺てのは生物兵器でも閉じ込めてたのか!?!」

石棺の崩壊跡に突如現れた、巨大で異形の人型をした存在に、アーミーの兵士たちの収容にあたっていたアンチスキル一行は困惑を隠せずにいる。

初春飾利とカオリは、事態を呑み込めず、立ち竦んでいた。するとそこへ、初春の携帯電話に着信がある。初春は電話を手に取った。

「……白井さん？あの巨人は一体なんなんですか!?!」

『アンチスキルからドローン映像が送られてきました。しかし——ああもう！アンチスキルに分からないものが、私たちに分かる訳ないでしょう!?!』

「生きてる……んですかね?」

『巨大で、それでいて不定形……肉の塊、どことなく赤ん坊のようにも見えますわ……ほんと気色悪い——』というか初春、こちらは今、アンチスキルもジャツジメントも大混乱ですわ！衛星兵器が勝手に起動するわ、原発のハザードを恐れた住民からの問い合わせが殺到するわ……ねえ初春!?!お姉さまは無事なんでしょうね!?!』

初春にもカオリにも、その答えは分かりかねた。初春は継るように黄泉川愛穂の顔を見上げる。

しかし、黄泉川もまた苦しい表情で、首を振った。

「御坂と上条を追っていった隊員とは連絡がとれていない……増援部隊も駆けつけている筈だが、どこも混乱している。すまない」

「あの、人間？みたいなもの、大分動きはゆつくりみたいですけど」

鉄装綴里が、唇をわなわなと震わせながら言う。

「何なんでしょうか……あれも、幻想御手レベルアップと関係が?」

「恐らく、そうだ」

しわがれた声が背後から聞こえ、一行は振り返る。

煤けた顔にひび割れた眼鏡をかけ、ライオンの鬣のような白髪を蓄えた白衣の男が、アンチスキル2人に両脇から支えられて立っていた。カオリはその男の名を知らなかったが、確か、大佐に追隨してきたドクターだと見覚えがあった。

「いや、頼む、少しだけ喋らせてくれ」

肩を支えるアンチスキルが引き返すよう促すが、ドクターはそう言っただけで、カオリたちの方へ顔を向けた。かなり憔悴した様子だ。

「あの——巨大なモノがなんだか、分かるのか？」

黄泉川が聞くと、ドクターは割れた眼鏡の奥の目を細めた。

そして、推測だが、と前置きして話し始める。

「あれは……『アキラ』に誘発されて出現したものだ。41号か、または木山春生か——」

「あの、アキラって何なんですか？あなたたちアーミーは、そのアキラにどう関わって——」

言葉の意味をよく呑み込めず初春が質問をするが、ドクターは掌を示して制した。

「事は急を要するんだ、とにかく言わせてくれ。アキラは我々の研究資産の一つにして、最大の成果だ。28番目のナンバーズで……過去に大規模な能力暴走を引き起こし、沈黙した。我々の先人たち、アーミーのラボ……いや、防衛省、もとい政府は、徹底的にそれを研究し、そして……その力の根源を何も突き止められず、秘匿した。あの石造りの缶詰はそのために築かれたんだ。いつかこの学園都市の科学が、奴の正体を明かすことを期待してね。」

アキラ自体は、生物学的には死んでいるはずだ。私だって現物をこの目で見たことはないがね、あそこに収められていたのは、ただの標本だと聞いている。しかし今、木山が41号を通して広めた、そのレベルアップとやらが、この街の能力者共から力をかき集めたんだらう？推測するに、アキラの力は死なず、未だくすぶり続けているんだ。集められた力は、アキラに誘われて、一つの異形を創りあげた……それは、元の持ち主の意思とは関係なく、一つ一つの細胞が、その大きさに見合わぬエネルギーを与えられた。

正直に言うが、決定打は先程のSOL——アーミーと学園都市が共同開発した衛星兵器だろう。大佐は、事態がこれ以上悪化する前に41号の抹殺を試みたが……逆効果だったようだ。油が引火したキッチンに水をぶっかけてんだな。そして、より大きな容れ物を欲して、歩き出した、なれの果てなんだ、あの化け物は」

早口に語り切ると、ドクターは大きく息をつく。

「我ながら、どうも非科学的なことを口走っている気はするがね。何せ初めての事態だ」

「あの」

周囲の皆が黙って聞いている中、カオリは堪えられずに聞いた。

「あなたはさつき、41……鉄雄君か、木山先生だと言っていましたね？まさか、あの巨大なものが……」

ドクターは疲れた顔で、一度頷いた。

「レベルアップが、罹患した者の脳波を強制的に一人の人物のものへと調整するものだ、木山はそう言っていたんだろ？41号と木山と、どちらが生き残ったかは知らんが、一人のもとへ集約された能力は膨大なものとなる筈だ。アレが41号だとして、奴は元々、お前たち主流派の能力開発では鳴かず飛ばずだった一介の不良に過ぎないから、奴自身のポテンシャルではない。レベルアップの作用は、我々にとつても予想外だったのさ。巨大な力は、アキラへと誘引され、あんな代物になったんだろう。人間一人の体には収まりきらないのさ」

「そんな……」

カオリは言葉を失い、遠くに見える巨体を振り返る。

「あれが、元は一人の人間だなんて……」

鉄装がごくりと唾を呑み込んだ。

「止めるには？」

黄泉川が厳しい表情で聞いた。

「アレが膨大な力の集合体だというなら、この先ロクでもないことになるのはサルにだって分かるじゃん！アレを止め、元に戻す手はないのか！」

「言つたらう。私だつて初めてのことなんだ、怒鳴られても何もできんよ」

ドクターは諦めたように俯いた。

「……レベルアッパーによる脳波の共有を、一発で断ち切るような魔法の品があれば、或いは解決の糸口になるかもな……」

そこまで言うと、ドクターは両脇のアンチスキルに支えられ、その場を去っていった。

「……初春ちゃん！」

カオリは初春に呼びかけた。初春も力強く頷く。

「黄泉川先生」

初春が黄泉川に向かって言う。カオリも横に立ち、黄泉川の顔を見つめる。

「今は何が正しいのか、誰にも確証を持つことはできないと思います。それでも——可能性が少しでもある方に、かけてみませんか？」

「私、木山先生が隠し事をしたり、嘘をついてたりしていたようには思えなかつたんです」

カオリも真剣に言った。

「私は、木山先生を信じます。もしも、あのカードにレベルアッパーの解除プログラムがあるのなら……」

「先生！」

初春とカオリ、2人の懇願を聞き、黄泉川は遠くで蠢く異形に目をやり、再び2人の顔を見つめた。

「……やってみよう」

黄泉川の言葉を聞き、初春とカオリの目が見開かれる。

「出来得るあらゆる手段を使って、その音声ファイルを街中に流す。責任は私がとるじゃん」

初春とカオリは顔を見合わせて息をのみ、それから揃って、ありがとうございます、と頭を下げた。

カオリは初春の顔をまっすぐ見た。

「初春ちゃん。先生たちと一緒に、レベルアッパーの解除プログラムをお願い」

「もちろんです……って、先輩は？」

心配そうな顔をして首を傾げた初春に、カオリは唇を噛みしめ、一度、遠くの巨大な物体を見た。

瓦礫の山の上で、這って移動しようとしているように見える。御坂美琴が放ったのか、電撃のような光も見えた。

「私は、助けたい……鉄雄君を」

カオリは初春の手をとり、一度ぎゅつと握りしめる。そして手を離し、その場を駆け出した。

「カオリ先輩!」

後ろから、初春や黄泉川たちが引き止める声が聞こえる。しかし、カオリは振り向くことはなかった。

ドクターは、あの異形が鉄雄か木山のどちらかであると言っていた。けれども、カオリには見当がついた。

あんな姿になってしまったのは、鉄雄君だ。

あんな姿になって、それで、自分を呼んでいる。

「私が……今度こそ、私が、助ける……!」

カオリは、恐怖心を跳ね除けるように自分へそう言い聞かせ、息を切らして瓦礫の山を目指して走った。

——「石棺」跡地

「何なんだよ、アレ……」

上条当麻が漏らした言葉に、御坂美琴も金田も全く同意だった。

空から白く強烈な光線が島鉄雄を直撃し、辺りに閃光と高熱をもたらした。あともう少し、鉄雄との距離が近ければ、3人の命はなかったかもしれない。

そして、コンクリートか金属製配管かは分からなかったが、光線による熱に晒された瓦礫が茶色く濁った煙を噴き上げる中、姿を現したのは、巨大な人型の物体だった。高さは2階建ての家屋を優に超える。全体的に赤い肉の塊に見えたが、ところどころにピンク色、黄色

い筋ばった部分や硬質な灰褐色の部分が混じり合っていて、その表面は絶えず蠢き、時折機械的な部品が、波打ち際の岩のように見え隠れしている。全体的に丸みを帯びたその体は四つん這いの姿勢を取っていて、煙を上げながら緩慢な所作で這い回ろうとしている。特に頭部は体に対して大きく、それが胎児のようであると印象付けた。

不意に風が吹き抜け、3人は顔を背ける。腐った玉葱と糞便と汗の匂いを煮詰めたような強烈な臭いが鼻を衝いたからだ。

「ねえ、アイツって、もしかして……」

表情を歪めた美琴が、金田を振り返る。

金田は顔を強張らせ、拳を震わせている。

3人が再び巨大なそれを見る。

頭部にあたる部分で、光を反射する何かが現れた。

それは一対の目だった。恐らく、片目の大きさは、3人の体を収めてしまう程だろう。開かれた瞳は瞬きせず、濃い茶色をしていた。

そして、その両目の下に、別の開口部が現れる。その開いた口から、音が轟く。

「ア……キ……ラア……ア、あ、ああ……」

「この声……!」

ひどく歪んだような声だったが、金田には聞き覚えがあった。

「鉄雄オ!!」

金田が2、3歩踏み出し、あらん限りの声で呼びかけた。

「お前……お前なのか!」

金田の呼びかけに、その巨体は反応した。

薄く開かれた両の目が、じつと金田たちを見つめる。

「か、ね、だあ」

その声は、悲痛さに満ちていた。

「た、す、け、て……」

「嘘でしょ……」

美琴が口を押えて呻いた。

「これも、あのレベルアップのせいだったの!」

巨大な異形と化した鉄雄が、金田達の方へと体の向きを変える。ど

ろどろに膨張した、腰や臀部と思しき部位がざざつとざわめく音を立てながら広がり、またまとまろうとする。

その姿を、厳しい表情で、敷島大佐が見つめていた。

「くそっ！41号……」

瓦礫の丘に、添え木を片足に施した状態で何とか立つ大佐は、顔にびっしりと汗を浮かべながら、歯を食いしばって、再びSOLのレーザーグリップを手に構えた。

「食らえ!!」

叫んで、引き鉄を引くが、赤いレーザーは放たれない。

「何、どうした——」

焦りを露にして大佐がグリップを見つめていると、鉄雄の腕が急激に伸長し、大佐の方へ迫る。

辺りが影に包まれ、大佐はハツとして見上げる。

次の瞬間、足場になっていた瓦礫の山ごと、大佐は勢いよく宙へ放り出された。

「け、けどさ。今のところ、アイツ動きはひどくのろまだぜ？」

上条は、狼狽えながらも樂觀的な言葉を口にする。

「さつきみたいに念動力をバカス力撃テレキネシスつてくる訳でもなさそうだし……」

上条の言う通り、巨大な「鉄雄」は、確かに異形な姿で見える者を圧倒するものの、今のところただ動き回っているだけに思える。

しかし、金田の呼びかけに反応した後、その巨体は、道路いっぱい
に広がる程の太さの腕を、ゆっくりと伸ばしてきている。

「こっちへ来る!!」

美琴が叫び、上条と金田の腕を強く掴んだ。

「どうしろっていうの！ひとまず、ここは退こうよ!!」

「バカ！てめえらだけで勝手に逃げろー!」

金田が、美琴の腕を乱暴に振り払った。

「俺はアイツを何とかする!」

「何とかって、どうやってだよ!?!」

上条がもつともな意見を口にしたその時、ざわつと波が砂浜を引くような音を立てて、一気に腕が迫ってくる。

先端には、雑に5本の指が形成されている。一本一本が電柱ほどの大きさもあり、更に各々の指の先端からは、もつと細い指が粘土で出鱈目にくっ付けたように生えている。指の先に手が生えている。

「く、来んじやねえっ!!」

上条は迫り来る鉄雄の肉塊に向けて、咄嗟に右腕を伸ばす。

破裂音を立てて、腕が一気に四散し、幾つもの肉塊が地面へと散らばった。しかし、鉄雄が伸ばした腕は手首の辺りまでが消失したに過ぎず、一度引つ込められたが、また新たに再生されようとしている。

「ダメだ、これじゃ」

上条が苦しい表情で呟いた。

その横で、金田が驚いた表情をしている。

「なんだよてめえのその右手——ていうか、何がダメだって?」

「コイツの右腕はね! 異能なら何でも打ち消す力があるの!」

半信半疑の顔をしている金田に、美琴が言う。その表情には焦りが見え隠れしている。

「けど、そう単純にはいかないってことね」

鉄雄は、再生しつつある腕を見つめている。その表情は奇妙なことに、周囲のあらゆる物に興味を示す赤子のように無垢に見えた。

そこへ、バタバタと複数人の足音が駆けつけてきた。

「大丈夫か!?!」

アンチスキルの一団だった。リーダーらしきバイザーを被った人物が言う。

「一般の学生が何でこんな所にいるんだ! 早く退避しなさい!」

「アイツ、何とかできるんですか!?!」

上条が継るように言うと、リーダーはまっすぐに巨大な鉄雄を見た。恐らく、バイザーの下は厳しい表情をしているに違いない。

「……やれるだけのことはやろう。ここは任せておきなさい」

あちこちからコードや体液を噴き出しながら、鉄雄の腕が迫ってくる

「二人とも、私の後ろへ!!」

美琴が叫んだ時、大小様々な瓦礫が、おもちゃのように宙を舞い、アンチスキル達を薙ぎ倒していった。

過去には石棺内の収容施設の建材だったのであろう、金属板を磁力で盾代わりに操作した美琴は、自身に新たな傷ができていないことを確かめると、煙が晴れつつある辺りを見回す。

先ほど鉄雄を攻撃したアンチスキルの部隊は壊滅状態だ。美琴の後方へと吹き飛ばされた彼らは、誰もがアーマーを破壊され、広範囲に渡って倒れたり、瓦礫にもたれたりして、動き出す気配はなく、生きていのか死んでいるのかも定かではない。

アンチスキルの支援は望めそうもない。美琴はそう思った。一人ずつ助けてやりたいが、テザーによる損傷を再生しつつある鉄雄が近くにいるこの状況では、それどころではない。

「何だよ、あつという間にやられちまって……」

美琴に守られていた金田がまず起き上がり、それから上条も恐る恐る身を起こした。

「俺らでやるしかねえのか」

「ああ。けどな」

上条が、自身の右拳に視線を落としながら言った。

「どうするつもりなんだ？俺の右手じゃ、すぐ再生されちゃう。アンチスキルのドローンが通じなかったんだ、お前のレーザー銃で与えられるダメージなんてたかが知れてるだろ」

金田は、ギリツと歯を食いしばった。

「んなこと、てめえに言われなくたって」

「……お前の全力なら、いけるか？」

上条が美琴を見た。

言われた美琴は、スカートのポケットにそっと手を入れる。

「いつもすまし顔で防いでたアンタに言われるのは癪だけど」

美琴の指先が、冷たい金属の感覚を探り当てる。

「全力で行かせてもらえるってんなら、私が——」

「オイ、待てよ」

割って入ったのは金田だ。

「何だかよく分からねえけど、お前、すげえ能力者なんだろう？」

金田の表情には、どこか焦りのようなものが見える。

「その、全力つてのは——鉄雄を、殺すのか？」

金田の言葉に、美琴はコインを取り出しかけた右手の動きを止めた。

「それは……ッ」

美琴にとつて、金田の言葉は胸に刺さるものだった。

普段、上条に戦いを挑む時には意識しなかったが、美琴の全力の能力行使は、軍隊を相手にしても一人で立ち回れる程のものだ。上条の右手には打ち消されてしまいが、それを、再生能力をもつ異形と化したとは言え、ヒト一人に向けたら、どうなる？

人間の命を、奪ってしまうのではないか。そんな懸念が頭をよぎり、美琴はぞつとする。

「な……なら、アンタは何をしにここへ来たの!？」

美琴は、どうにも気持ちの悪い想像を振り払うかのように、強い口調で金田に詰め寄る。

「仲間の仇を打ちにきたんじゃないの!?!それこそ、こつ、殺すつもりで……」

「俺は……」

美琴が躊躇したように、金田もまた表情を暗くする。

「傷ついた仲間の、その、決着をつけに」

そうだ。自分はこれまで、甲斐やジョーカー、駒場に対してごまかしてきたのだ。

山形や浜面は、ひどく傷つけられたとはいえ、死んだ訳ではない。帝国との抗争の中で命を落とした仲間はある。しかし、それらは後から考えてみれば、鉄雄を祀り上げていた幹部連中が手を下したことだと分かる。連中は皆、鉄雄に粛清されるか、アンチスキルに捕まるか、或いはレベルアップの狂気に囚われて今頃植物状態だ。一方で、鉄雄はどうも、自分たちとの戦いにはさほどの興味がなかったようにも

思える。

しかし、自分は激情に駆られてここまで来て、そして鉄雄と相対した。

俺は、鉄雄をどうしたいんだ？

口に出さず、金田は自問自答した。レーザー銃の柄を握る手に、力が籠る。

「けど、ここで迷っている訳には——」

上条が焦れたように言った。

傷の再生を終えた鉄雄が、赤ん坊の泣き声に近いような意味のない叫び声を時折上げながら、やはりこちらに迫ってくる。

3人は、その姿を苦しい表情で見つめる。

しかし、鉄雄の動きが突如、動画を一時停止したかのように止まる。金縛りのように、伸ばした腕を止めている。肉塊の細かな蠕動は以前続いているが、拡張も縮小も見られない。

「君たち」

子どもの声が、空から降ってきた。

驚いた金田と上条、美琴が、上を見上げる。

3人の小柄な体躯が、夏空を背景に、ゆっくりと降り立ってきた。彼らは鉄雄を力のこもった眼差しで見つめ、それぞれが片手を伸ばしている。

1人は、やせ細った、おさげ髪の女の子だ。足が悪いのか、投げ出すように地面に座り込み、それでいてなお、力を込めて手を鉄雄に向けている。掌には、「25」と刻印されている。

もう1人は、やや肥満体の男の子だ。正座しながら鉄雄に向ける掌には、「27」と刻印されている。

そして3人目は、大きな瞳を持つ男の子だ。他の2人と異なり、両足でしっかりと立っている。掌には、「26」と刻印されている。

彼らは3人とも、少年少女のような体格ではあったが、顔にも手にも、老いた深い皺が刻まれていた。

「お前ら……ラボの！」

金田が驚きの表情を浮かべる。

「あつー！」

上条が、26番目の人物を指さして口走る。

「君は、学生街で会った」

「ウン、あの時はありがとう、お兄ちゃん」

26号^{タカシ}が、ちらと上条に視線を送り、屈託のなさそうな笑みを浮かべる。

「今度は、僕らが君たちを助けるよ」

「どういうこと?」

困惑した美琴が、動きを止めた鉄雄と3人のナンバーズとに視線を走らせながら言う。上条や金田と違って、美琴はこの3人の誰とも面識が無い。

「あなたたち、何者なの?」

「鉄雄くんは、このままだと取り返しのつかないことをしてしまうの」
25号^{キヨコ}が言った。その表情はタカシと異なり、憂いを帯びたものだった。

「それは鉄雄くん自身にも、もうコントロールできなくなっているの。だから、止めなきゃいけないの」

「どうするんだ?」

金田が数歩、ナンバーズへと歩み寄って言った。

「どうやって、鉄雄を止められるんだ?」

「鉄雄くんは、どんだん力を働かせているから」

27号^{マサル}が、切れ長の目を更に細めて言った。

「鉄雄くんよりも前に、僕たちが先に、アキラくんを呼び起こす」

「アキラ?」

上条が問い返すと、タカシが頷く。

「そうさ。だから、それまで、時間を稼いでほしいんだ。君たちに」

ナンバーズの突然の登場に、上条と金田はすぐに状況を呑み込めずにいる。

「……分かった」

静かな美琴の言葉に、上条と金田はそちらへ顔を向けた。

美琴は、真剣そのものの目をしてナンバーズを見る。

「教えて。どうすればいい？」

体の動きを止められている鉄雄は、巨大な目で、じっとその様子を見据えていた。

その口が僅かに開かれ、何度目かの名を呼ぶ。

「ア……キ……ラ……」

微かに饅えた匂いを捉えて、カオリは立ち止まり、両膝に手をついて息を整えた。

崩壊の衝撃で飛散した瓦礫が、多く、そして大きい物がそこかしこに散らばっている。鉄雄の変化した巨体が近づいてきた。50mほど先の瓦礫の山の向こうに、丸まった背中が見える。

なぜ、初春やアンチスキルの先生たちの制止をふり切つてまで、必死にここまで危険を顧みず走ってきたのか、正直な所、自分でもよく分からない。

自分はレベルアップを服用した訳ではない。それでも、無能力者^{レベル0}の筈の能力が片鱗を見せたかのように、頭の中で声が聞こえる。

カオリ。

鉄雄君の声だ。カオリにはそう確信めいた何かがあった。カオリは膝から手を離し、背を伸ばして辺りを見回す。

「……大丈夫ですか!？」

アンチスキルの装甲をまとった人物が、一人瓦礫の傍でうつぶせに倒れているのを見つけた。

破損したバイザーから見える顔は血だらけで、肩を叩いて呼びかけても呻くような微かな声しか漏れ出て来ない。

カオリは不安を一気に高め、きよろきよろと再び辺りを見回す。

確か、御坂さんともう一人、男の人が鉄雄君のもとへ駆けつけていくのを止めるため、アンチスキルの増援が向かったと、黄泉川先生は言っていた。

カオリはそのことを思い出すが、周囲にそれらしい人影はほかに無い。

「……助けを呼ばなきゃ」

そう呟いて、ジャーズのポケットに手を伸ばすが、自分は携帯電話を持っていないことに気付く。

木山春生に連れ去られて、そのままだ。自分は何も持っていない。「しつかりしないと、わたし……」

そう言い聞かせつつも、一方で自分を責める気持ちも沸き上がった。

なぜ、自分はただの直感に任せて、何かしないといけないという気持ちだけに駆られて、向こう見ずにもこんなところへ来てしまったのだろう。

初春ちゃんや白井さんとは違う。

自分は、無力だ。

不意に泣き出したくなる気持ちを、どうにか抑えようと、カオリは目を擦る。

あ、あああ、あ……

獣の遠吠えのような声が聞こえ、カオリは顔を上げる。

「鉄雄君……」

名を呼ぶと、カオリは倒れているアンチスキルに、後で必ず助けます、と言いつ残し、立ち上がる。何の保障もないが、とにかくそう言葉にしなければ、罪悪感に押し潰されてしまうと思った。

瓦礫の向こうへ、登ろう。きっとそこには、ほかのアンチスキルの先生がいるはず。

カオリがそう思って、少し足を進めたその時だった。

「やあ、君もなかなか向こう見ずなんだな」

大きな瓦礫の横を通り過ぎたとき、突然声が聞こえ、カオリはびくんと肩を跳ね上げた。

それから声のした方を向き、カオリは口を手で覆う。

「……木山、せんせい……」

「どうした、そんな驚かなくてもいいじゃないか」

顔を蒼白にした木山春生が、瓦礫に背を預け、力なく笑っていた。

右腕の白衣の袖は血まみれで、肘から先が無くなっていた。

「君のボーイフレンドとおそろになっちゃってしまつたよ、怒らないでくれ……いや、あちらはもつととんでもない代物になっちゃってしまつたか……」

ひゅっひゅっ、と音程のとれないフルートのように、木山は短く息を吸い、くくくと笑うと、激しくせき込んだ。

白衣の胸元に、血の跡が重ねられて飛び散つた。

——第七学区、教員住宅街

「どうも、大丈夫かなあ」

畳の部屋に座り、インデックスが今日何度目か分からないほど繰り返した台詞を口にした。

朝からテレビは特別編成のニュースを始終流している。その画面に、インデックスはかじりついていた。

「きつと大丈夫、だなんて言うつもりは、ないですよね？」

その様子を部屋の入り口で見守っていた家の主、月詠小萌が、子供のように幼い外見とは裏腹に厳しい言葉を囁く。

「あなたがたの教祖様は、全てお見通しなんでしようけど、私たちは違うんです。あなたがたの都合で、上条ちゃんをあのよう危険な場所に連れ出すというのは、担任として、看過し難いのです」

「……理解しているよ」

白装束にパーマのかかった金髪の少女、モズが小さな声で答える。小萌と同じように、離れた位置から、インデックスの小さな背中を見つめている。

「ただ、あなたを逆撫でするようなことを敢えて言うが、ミヤコ様のお言葉に従い、私たちは上条の力を借り、あの場へ——戦場へ同行させた。そして、上条は無事に帰還する。断言できる」

「あの女の子——インデックスちゃんは、今、上条ちゃんを一番の頼りとしているんです」

言い訳をとても鵜呑みにはできない、というように、小萌は唇を引き締め、鋭い視線をモズへとぶつける。

「ここで何か、彼が傷つくようなことがあれば……あの子がどれほど悲しむか。もちろん、それは私も同じです」

「心配してくれてありがとう、こもえ」

インデックスの声がはつきりと聞こえ、2人は意識を向ける。

いつの間にかインデックスはテレビではなく、2人へと体を向けている。エメラルド色の瞳がまっすぐにこちらを見ていた。

「私は、モズのことを怒ったりしてないよ？」

「……どうして？」

モズが聞き返す。努めて平静を装ったつもりだが、小萌の言葉を受けた後では、不安が隠し切れない。声が僅かに震えてしまう。

「モズだって……心配でしょ？サカキやミキのこと」

凶星だった。モズは唾を呑み込み、俯く。

上条を連れて行った2人の仲間は、一〇学区の原子力研究特区まではたどり着いた所までは連絡がとれた。そこから、アキラの眠る施設へと向かった筈だが、しばらく音沙汰が無い。念話テレパスを試みようにも、ミヤコ様ならば容易いのだろうが、自分たち娘同士では余りにも距離があり、できない。

「……そうだね」

つい、口をついて出てしまった。

サカキやミキのように、任務のためだけを考え、冷徹になり切れない。そんな自分を痛感して、猶更モズの表情は曇った。

「それに、大きな異変が起きてるんだってこと、私にも分かるよ」

インデックスが、テレビ画面に目を向けて、静かに言った。

画面では、アンチスキルが派遣した無人ドローンによって撮影されたものだという、上空からのざらついた映像が繰り返し流れている。膨大な瓦礫の広がる荒野で、巨大な人型をした、形容しがたいもの、はいはいをする赤子のようにゆっくり動いている。

「私には、アレが一体なんなのか、見当もつかないのです。科学の産物だととても思えない」

小萌が不安げな表情を露にして言う。

「インデックスちゃん、あれが、あなたの詳しい……魔術、的なものだと思います？」

インデックスは、僅かに首を傾げる。

「……アレが生物だとしたら、創造主ヤハウエの為せる領域。私たち魔術師にとっては禁忌タブーなんだよ。見た目、小人ホムンクルスどころじゃないしね。でも、この街で当たり前だっている、『科学』のものでもない気がする。私の直感だけだね。清め払いの電動使い魔オートマテックアガシオンとアレが同じ仲間だなんて、

こもえやモズだつてまさか思わないでしょ?」

インデックスはフードの金刺繍を煌めかせて、モズの方へと顔を向ける。

「ミヤコは、何て言ってるの?」

モズは、しばらく言葉を返すことができなかった。口をもごもごさせる。

「ミヤコ様は——」

ここしばらく、主であるミヤコの「声」は聞こえてこない。自分が心を乱され集中できていないせいだと、モズは思った。自責の念が強まり、そしてインデックスの純粹な疑問に答えることができず、自然と目頭が熱くなる。

「誰にも完全には理解できないことが起きてるんだね。きつと」

インデックスの言葉に、モズは顔を上げる。

インデックスの顔を見て、まさに修道女シスターだ、とモズは思った。その表情には、慈しみがあつた。

「放つておいたら、大変な混沌カオスが起きる。だから、とうまも、サカキもミキも——モズも、みんな頑張ってるんだね」

インデックスは立ち上がると、モズの傍まで歩み寄る。修道服の裾がするすると畳に滑り、柔らかな音を立てる。

「みんな、ヒーローなんだね」

インデックスがはにかんだ。

「だから、心配だけど……信じて待つことにするよ。モズも、こもえも、そうしよう、ね?」

モズの隣で小萌が小さく頷く。

小萌に悟られないように、モズは必死に唇を噛みしめ、素早く装束の袖で目を何度も擦った。

——とある病院

「待つてください!勝手に外に出ては——ああ、誰か、応援を!!」

看護師が複数人駆けつけ、患者衣をはだけさせた若者を引き留めようとす。若者は、涎を唇の端から垂らしながら、焦点の合っていない目でうわ言を叫び、酔っ払ったような足取りで進もうとするのを制止されている。

「あ、あ、ああああアキつききつらあ、ああああアアアつ——」
「……これはまた、随分品の無いパーティーをおっぱじめやがったねえ」

階段を降りて来たチヨコは、曲がり角の陰からその様子を窺う。

「あれも、レベルアップって奴のお恵みかい？随分カルトだねえ」
「この病院も、たくさんの患者が収容されてたみたいだから、大混乱だね」

その背後で、ケイが囁くように言う。

「アンチスキルの連中にライト当てられるのは御免だね、この隙に、早いとこ逃げ出すに越したことはないよ」

「おばさん、大丈夫なの？」

ケイの心配そうな視線を察したチヨコは、自分の脇腹に目をやる。職員の更衣室に忍び込んで拝借したTシャツの下は、帝国の鳥男に刺された傷がある。

チヨコは顔を上げて、ケイに向かって笑顔を作る。

「いい医者みたいだったからね。面と向かって礼が言えないのは残念さ……何、どうってことない、かすり傷だよ……」

それより、とチヨコは額から滴る汗を拭いてケイに問い返す。

「お前こそ、大丈夫なのかい……能力者に攻撃を受けたんだろ」

「私は、平気」

チヨコと同じく盗んだキャップの鏢に指先を触れ、ケイは答えた。

「出来た血栓は、ほんの小さなものだったし……御坂さんが、すぐ手当を手配してくれたみたいだから」

「……超能力者にも、まともな人格者がいたとはね」

やや思う所があるのか、チヨコは暫し目を閉じてから、再び廊下へと気を配る。

「仲間達が、ストを起こして立ち上がってるんだ。うたた寝しちやら

んない、行こうか」

うん、とケイは頷く。

そして、2人は怒号や悲鳴が飛び交う病棟を駆けて行った。

—— 第一〇学区、原子力実験特区、「石棺」跡

「私の——耳というべきか、いや、違う……前頭葉に直接聞こえてきていたんだ、あのアキラという名がね。念話テレパスの一種には、空気振動に干渉するやり方があるらしいが、違うんだ。アレは、聴覚を超えて……」

「喋っちゃだめです！先生」

瓦礫にもたれかかりながら、熱に浮かされたように話す木山春生を前に、たまりかねたカオリは制止した。

「何か、傷口に、止血するものを——」

「その必要はない」

「でも！」

「いや、本当なんだ」

木山は、肘から先を失った右腕を上げてみせる。

その切断面は、黒く焼け焦げていた。一部露出した骨も、焦げ茶色に変色している。

「覚悟していた筈なのに、怖くなったんだ……島君に敗れ、しかもレベルアップ幻想御手で集めた数多の演算能力は、あんな化け物となって、私の手を離れてしまった……私はあの子たちを救うためなら命など惜しくないと思っていた。なのに、いざ闇の底から寒気と狂気が忍び寄ってくる、怖くなって……私は、パイロキネシストレベルアップの解除プログラムを聞く直前に、パイロキネシスト発火能力者の能力を拝借した。君には本当のことを言っていなかったね、保険として胸に忍ばせておいたこの音声ファイルのことを……だから、こんな無様な姿で、あの巨大な赤ん坊が駄々をこねるのを見ているしかないという訳さ」

木山は、残っている左手の指先で、自身の片耳に触れる。そこには、

白いワイヤレスイヤホンが付けられている。

「あの子たちを救う最後の望みを、私は自ら手放してしまったんだ。島君が、あのように変貌したのを目の当たりにしたら、私は、怖い。ああ、そうだ、怖くなって……」

カオリは唾をぐくりと飲み込み、一度振り返って瓦礫の山の向こうを見る。「鉄雄君」だったものは、しばらく目立って動きを見せず、うずくまるような形で静止しているようだが、その表面は拡散を待ちわびているかのように、時折騒めいている。

カオリは再び木山へと視線を向ける。

「二体……」

聞きたいことは山ほどあった。しかし、目の前の木山も、背後の鉄雄も、どちらも長々とお喋りに興じる程余裕のある状態であるはずが無いことは想像がついた。

「どうして、そこまでして、あなたは戦っているんですか」

カオリが問いかけると、木山の瞳に影が差したように見えた。

「23回だ」

木山が口を僅かに開いて、囁くように語り出す。

『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』を使って、私は過去に関わった実験で恢復不能になった人間……君よりも幼い子供が、何人もだよ。彼女たちを救う手段を探そうとした。けれども、それは統括理事会も囁んでいる実験だったんだ、何度申請しても許可が降りなかった。アンチスキルの忠犬共は私を探しているだろうが、その実験の不当性については知らされていないか、目を瞑らされているだろうね。私が頼れるものはこの街にはない。だから、自分自身が巨大な演算能力を持って……解決しようとしたんだ」

「じ、実験で」

木山から語られる言葉を呑み込み切れず、カオリは疑問を口にす
る。

「能力開発の一環なら、そんな犠牲が出るなんて、だって、いろいろな学校で行われているんじゃないや——」

『チャイルドエラー置き去り』という言葉を知っているかい」

木山がカオリの声へ被せるように言った。

「私がかつていた研究施設は、身寄りのない子たちを集めた養護教育機関としての顔もあった……私はそこで、学級担任として児童の信頼を得ることで、能力の成長度合いを詳細に見取り、彼女たちが実験に協力的になるようにした。もちろん、私も研究員の一人として……」

ゴホツ、と木山がせき込んだので、カオリがその肩に手を置く。

木山は首を振った。

「AIM拡散力場の暴走を誘発させる実験などと……知っていたらあんなこと、しなかつたんだ！なのに、私は気付けなかった。無理に暴走させた能力は、行使者の脳に深刻なダメージを負わせたんだ。私は、教え子を……彼女たちを、体のいいモルモットにした訳だ。救わなければ、あの子たちを……」

けれど、と木山は瓦礫の向こうの巨大な影へと視線を向ける。カオリもそれにつられて顔の向きを変えた。

「最早、それは叶わなくなったな」

そこへ、唐突に足音が近づいてきた。

「カオリさん！ダメじゃないですか、勝手に一人で——って木山春生!？」

鉄装綴里だった。片腕をなくした状態の木山を目にして、腰を抜かし、口をぱくぱくさせている。

「ごっ、これは一体、どういう」

「鉄装先生、すぐに動ける仲間をこちらに呼んでください。木山先生もですし、ほかにも倒れている人がいます。手当てが必要です」

カオリは、自分でも驚くほど、すらすらと冷静な言葉が口について出た。

鉄装が、ひやいと返事をして、少し離れた所へ移動し通信機を操作し始める。

「木山先生」

言葉を失っている鉄装に構わず、カオリが言う。それは震えながらも、はつきりとした声だった。カオリは木山の顔を見る。

「あなたが教えてくれた、人を助けたいって気持ちには、全然及ばないかもしれませんが……こんな私でも、鉄雄君を、助けたいんです。お願いです。どうすれば鉄雄君を止めて、元に戻せるのか——レベルアップの生みの親であるあなたなら、この解決策が分かるんじゃないかって思うんです。教えてください」

カオリは一つ息を吸う。

「あなたから渡されたメモリーチップは、今、ジャッジメントの友達が、街中に流そうとしている所です。アレを流せば、レベルアップのつくったネットワークが崩れて、鉄雄君は止められる。そうですね？」

カオリの真剣な表情に、木山は唇を噛みしめて、少しの間考え込んだ。

「その可能性はある」

木山が言った。

「解除プログラムの音声ファイルを聞けば、少なくとも、昏睡している人々は意識を取り戻すだろう。そしてあの巨大な存在は、『幻想猛獣』^{AI Mバースト}とでも言うべきか……レベルアップによって集められた多数のAI M拡散力場が触媒になって産まれたものだろうから、ネットワークを破壊することで、止められると期待できる」

「じゃあ！初春ちゃんがうまくやってくれれば——」

しかし、と木山が、表情を明るくしたカオリを制する。

「本来、AI M拡散力場の集合体なんてものに自我は無いはずだ。しかし、アレにはまだ、島君の意思が残っていて、更には『アキラ』の存在に影響を受けて動き回っている。私の予想を超えたことが起こっている……解除プログラムでネットワークの破壊に成功したとして、あの怪物はネットワークからは既に独立しているかもしれないし、期待通りに停止するかは未知数だ。すまないが、私にも結局のところ、何が起こるかは分からないんだ」

カオリは、木山の説明を聞き、目を閉じて思索する。

「もしも、鉄雄君が、自分の意思であの変化を解くことができれば、それが一番いいですね」

「それはそうだが」

木山はカオリの言葉に表情を一層曇らせる。

「島君自身にも、実体化した肉体をコントロールできていないようだし、君にとつては辛いだろうが、自我だってもしかすると既に——」

「木山先生」

カオリが目を開き、膝をついて、木山とまっすぐ顔を向き合わせた。

「お願いがあります。その音楽プレイヤーを貸してください」

カオリの言葉の意図が分からず、木山は目を瞬かせる。

「どうするつもりだ？ 解除プログラムなら、君の友人が——」

「いえ、解除の方じゃなくて」

カオリは一度、大きく息を吸った。

「レベルアップが欲しいんです。私が聞きます。私、精神感応系の無能力者なんです。私が能力を一時的に高めて、鉄雄君に語り掛けます……もういいんだよって」

木山は目を見開いた。

「そんなことをしたら、君があつという間にネットワークに取り込まれるかもしれない。いや、アキラの虜になるか？ どちらにしても、正気ではられないぞ。それに、君の友人がネットワークを破壊すれば効果はない。それを待つ方が……」

「私、力になりたいんです、鉄雄君の」

わがままを言っでごめんなさい、とカオリは頭を下げた。

「それに……なんとなく、私の言うことが、届くような気がします」

カオリが差し出した手を、木山は見つめた。

カオリが駆けて行った先に目をやりながら、木山は息をついた。

「……島君。君があればどこまでに想われているというのは、きつと幸せなことだよ」

そう呟き、木山はふらつきながら立ち上がった。

「私も、まだ引き下がる訳にはいかないな」

「こんなに負傷者が多いなんて……戻ってくるのが遅くなっちゃっ

た」

辺り一帯で怪我を負った者を把握し終えた鉄装が、仲間数人を引き連れて戻ってきた。

「木山春生が本当に？」

「ええ、重傷を負ってまともに動ける状態では——」

仲間へ説明しながら鉄装は辺りを見回す。

「……アレ？木山……カオリさん？」

先ほど見かけた2人の姿は、そこにはなかった。

「鉄雄君は、今、とつても不安定な状態なんだ」

鉄雄の変異した巨体を制御しながら、27号^{マサル}が、上条当麻と御坂美琴、金田の3人へ言う。

「この街の、たくさんの人の力を集めて、暴走している。しかも、アキラ君とお互いに刺激し合っているから。放っておいたり、無理に力を加えたりすれば、今度はアキラ君が暴走してしまう。そしたら、街全体が消えちゃう」

「待て、今、さらつととんでもないこと言わなかったか？」

上条が焦ったように言う。

「何なんだよ、そのアキラってのは。あの怪物以外にも何かいるのか？」

「アキラ君は、僕たちが集めたから」

26号^{タカシ}が上条に言った。

「だから、それは心配しないで」

「バランスが大事なの」

25号^{キヨコ}が続けて言った。

「時間は少ないけど、焦ってはダメ」

「この近くには、壊されると大変なことになる建物がいっぱいあるでしょっ。」

「……原子力実験炉ね？」

マサルの言葉に、美琴が答えた。

「でも、奇跡的に被害は出てないって……」

「アキラ君のカプセルが現れて、建物が吹き飛ばされたとき、僕たちが瓦礫の落ちるのを防いだんだ」

マサルが言うのと、美琴や上条が驚きの表情を浮かべる。

「でも、今度はそうはいかない。僕たちは3人とも、アキラ君に話しかけなきゃいけないから」

「だから、鉄雄君を引き留めてほしいの」

「頼んだよ」

キヨコとタカシが言った。

「なあ、待ってくれ！」

3人が去ることを予感して、金田が声をかける。

「鉄雄は……元に戻るのか？お前たちがやろうとしてるのは、鉄雄を殺しちまうのか？」

3人は一度、顔を見合わせて、そして暗い表情を浮かべる。

「……鉄雄君には、早過ぎたの。あまりにも急に力を使い過ぎて」

キヨコが静かに、金田へ言った。

「でも、鉄雄君は、私たちの41番目の仲間だから」

「仲間？」

聞き返した金田に、3人のナンバーズは頷いた。

そして、飛び上がるように上空へかき消えた。

「待てよーまだ聞きたいことが」

「集中してー！」

大声を上げて空へと手を伸ばしている金田を、美琴が叱咤した。

「アイツ、来るよ!!」

ぎゃああああ、と悲鳴のような怒声を上げて、戒めを解かれた鉄雄がその身を起こした。

見上げていた空を鉄雄の蠢く巨体が埋め尽くし、金田はレーザー銃を握る手に力を込めた。

「畜生……」

「よく分かんねえけど、戦うのは間違いないみたいだな」

上条も、金田の隣に並び立って、右手を握りしめた。

「けど、これじゃ埒が明かない……!」

空中で錐揉みした後、磁力を操作してどうにか着地した美琴は、息をつきながら鉄雄の巨体を睨んだ。

変異した鉄雄の能力自体は、美琴にとってみればやはり単調だった。念動力による衝撃波は変わりがなく、寧ろ当たり散らすように狙いもなく乱打する様子もあった。

「厄介なのは……」

美琴はそう呟くと、危険を察知し飛び上がった。

美琴が立っていた地面に、鉄雄の体表から弾丸のように伸びてきた触手めいた肉塊が炸裂し、音を立てて亀裂をつくる。

この変化する肉体そのものだ。グロテスクで奇怪なそれは、絶えず細胞の創造と壊死を起こしているようで、饴えた臭いを辺りに撒き散らしながら、目やら腕やら指やら、体の各部位をてんでんばらばらに生やしたかと思うと、今のように刺突や殴打による攻撃を仕掛けてくる。

美琴は電撃を放って、触手を焼き切る。元は人間一人の肉体なのだと思うと、嫌悪感が胸を駆け上がったが、戦闘を続ける内に感覚が麻痺しかけていた。

ところが、焼き切られた触手の断面から、花が咲くように、更に細かな触手が枝分れして向かってきたことに、美琴は集中を乱される。思わず、顔を両手で覆った。

美琴の寸前まで迫った何本もの触手を、ズバツとコンクリートを破断しながら光線が縦方向に一閃し、跳ね除ける。

「余裕かましてンじゃねえぞレベル5!」

金田がレーザー銃を向けながら怒鳴った。

「そういうお前もな!」

上条は、金田の背後に迫っていた肉塊を右腕で殴りつけ、ひるませた。

美琴は、より広範囲に広がる電撃を放って、鉄雄の肉体を退かせた。

そして、2人の近くへ駆け寄る。

「あの子たちはまだなの!?いつまで時間稼ぎをすれば……」

美琴は荒く息をつきながら言った。

「オイ、大丈夫か」

「……ちよつとしんどいかな」

氣遣う上条に、美琴は珍しく弱音を吐く。

3人の中で、最大戦力は美琴だ。イマジンプレイカー幻想殺しを持つているとはいえ、上条は右腕で接近攻撃を仕掛けることしかできない。金田は遠距離武器を持つてはいるが、その体は生身の人間だ。美琴は、鉄雄に対して攻撃を仕掛けながら、他の2人を庇うこともしばしばだった。度重なる能力の使用が、美琴の思考力を疲弊させている。

「ねえ、アンタには悪いけど」

美琴は、金田へと視線を向けながら口を開いた。

「もしも、いよいよどん詰まりになったら……そうになったら手遅れだから。私、余力がある内に、全力全開を撃たしてもらおう。例えそれが、島鉄雄を殺すことになるうともね」

金田は表情を厳しくした。

「……お、俺は諦めねえぜ！何か、何か手が——」

「あたしがいなきや、アンタあつという間にペしやんこでしようが！」「でも！アイツは俺の友達で！」

先ほどの電撃が堪えているのか、悶えるように肉塊を震わせている鉄雄を睨みつけながら、金田が言った。

「こんなことをしてかして、仲間にも頭を下げさせてやるんだ！それに、殺しちまったら、カオリちゃんだって悲しむ！」

「それはッ……！」

美琴も決意が揺らいだ。

そうだ。自分は元々、木山に連れ去られたカオリを救うためにここまで来たのだ。

島鉄雄は、カオリにとっての大切な人だ。鉄雄が「帝国」のリーダーとして悪行を重ねていると分かってなお、カオリは思いを断ち切れないように見えた。

自分が、鉄雄を殺していいのか。

美琴は、唇を噛んだ。

「……おい、何であんなところに、女の子……」

上条が唐突に声を上げ、美琴や金田の背後に指を差した。

2人は振り返る。

「……かっ」

「カオリさん!？」

美琴と金田は、同時に驚きの声を上げた。

「……鉄雄君」

上条を、美琴を、金田を追い越し、進み出たカオリは、前肢をついで、巨大な体を起こそうとしている鉄雄に向かい、その名を呼んだ。艶めかしく肉塊が光沢を放つ中、一對の目が開かれ、カオリの姿を捉える。

「……か、おりいいい……」

鉄雄の口から、掠れるような声が漏れた。

「私の声、聞こえる?」

風が辺りを吹き抜け、カオリのまとまりのない黒髪を揺らした。

耳元には、白いワイヤレスイヤホンが嵌められている。

カオリの脳裏には、数多の声が聞こえていた。

あまりにも声が多すぎて、気を失いそうだったが、それでも気持ちを確認に持とうと奮い立たせ、カオリはゆつくりと足を進めた。

能力者相手に、野球に対する情熱を失った男の人。

後輩からの陰口を耳にし、学園都市の能力評価に対する絶望感を深める女の子。

仲間を囚われ、泣きそうになりながら銀行へと踏み入っていく若い男。

たった一人の肉親の危機に、レベル向上へと切迫感を強めていく女の子の人。

セブンスミストで、アンチスキルに囲まれながら、諦めた表情で自分を見下ろす眼鏡をかけた少年。

「どんなに頑張っても、レベル0と上の人とじゃ、天と地ほどの差がある」

佐天涙子が、床に膝を抱えて蹲りながら呟いた。

「レベル0の私って、欠陥品なのかな」

「みんな、いつも目障りだったんだよ」

鉄雄が、忌々し気に顔を俯かせて言った。

「金田も、山形も……ジャツジメントもアンチスキルも。偉ぶって、俺を見下して……俺が、弱虫で、何の力も無いから」

「そんなこと、ないよ」

カオリは呟いた。

「鉄雄君も、涙子ちゃんも。苦しいでしょ。きつとこれは悪い夢だから、覚めるんだよ」

カオリの足元に、鉄雄の肉体から滴る体液が染みを作った。

「鉄雄君、いつか言ってくれたよね。二人で、どこか遠くへ行こうって。嬉しかったよ。ねえ、行こうよ。どこか楽しくって、わくわくする所へ。だから——」

カオリは、巨大な鉄雄の顔へと、両手を差し出した。

「戻ってきてよ、鉄雄君……」

背後で見守っていた金田は、目を丸くした。

「鉄雄……」

鉄雄の体が、煙を上げて収縮し始めた。

上条も美琴も、驚きの表情を浮かべた。

増殖していた細胞が一気に死んでいったことで、辺りに生暖かい熱がもたらされる。

カオリの額に、たちまち汗が浮かんだ。

そして、目の前には、膝をついて、弱弱し気な表情を浮かべる、元の鉄雄の姿があった。

「カオリ……」

鉄雄の目が潤んでいた。

「鉄雄オ！」

金田がレーザー銃を投げ捨て、駆け寄ってきた。

「金田……」

鉄雄の表情も、緩んだものになる。

「俺……」

「大丈夫だよ、鉄雄君」

カオリが優しく語り掛ける。

「きつと、もう……」

カオリも、喉に熱い物がこみ上げていた。

鉄雄の体に触れようと、手を伸ばす。

「……なんだ、この音？」

「音？」

上条と美琴が、不思議そうに空を見上げる。

普段は広告やニュース映像を流している飛行船が、青空の中を、音楽を流しながらゆったりと飛んでいた。

「なんか……五感に訴えかけてくるような……」

美琴は、先ほどまで募っていた焦燥が解けていくのを感じていた。

「レベルアッパーの、解除プログラム……」

カオリもまた、空に浮かぶ飛行船を見上げていた。

初春ちゃん、やったんだね。

レベルアッパーのネットワークは、これで消え失せた。

カオリは頬を綻ばせた。

「やったよ、鉄雄君！もうこれで——」

鉄雄へと顔を向けて、カオリは言葉を失った。

鉄雄は背中をのけ反らせ、カオリから距離を取ろうとしていた。

身体が、再び膨張している。

「……に、げ、ろ」

瞳をぐるりと回してカオリを見た鉄雄が、辛うじてそう言うのが聞こえた。

次の瞬間、けたたましく劈く悲鳴を上げて、鉄雄の体が噴火するよ
うに膨れ上がった。

「鉄雄オオオオ!!」

金田の叫び声が後ろから聞こえたその時、カオリの視界は既に肉塊
で埋め尽くされていた。

どうして――。

疑問を浮かべたカオリは、全身を熱で包まれ、あっという間に息が
できなくなった。

「カオリさん!!」

美琴が悲痛に叫んだが、その声はもうカオリには聞こえない。

カオリは、鉄雄の体に呑み込まれた。

「やめろ！鉄雄!!やめろよ畜生!!——やめてくれ……」

金田が後ずさりながら必死に叫ぶ。

AIMバースト

幻想猛獣と化して、カオリを呑み込んだ鉄雄は、この世のものとは思えない絶叫を上げながら、噴煙を上げる火山の如くその体を膨張させ、一度変異が解かれた前に比べ、更に巨大に、金田達の前に立ちはだかろうとしている。その体つきは、赤子のように見えた収縮前とは異なり、最早人の体を為しておらず、大まかな円錐形で小山のようになっていた。赤を中心とした色とりどりの肉壁が、滝のように流れては遡っていく。

「金田ああああアアアア」

鉄雄の叫びが木霊する。

「カオリがあああアアアアたああすけてええええ」

「退がって!!」

血相を変えて美琴が体表から光を迸らせる。

「カオリさんを——」

「ダメだ!」

上条が美琴の肩を右腕で掴んで制止する。美琴が放とうとしていた電撃は霧散し、美琴は目を見開いて上条を振り返る。

「どうして!!」

「中にあの子が閉じ込められてる!力任せにやったら危ねえだろ!!」

「だって!このままじゃ」

美琴が泣きそうに顔を歪めて、上条の腕を振り払う。それから再び鉄雄の方を見るが、攻撃を躊躇わざるを得ない。

それは金田も同じだった。地面のレーザー銃を拾って構えるが、曲がりなりにも人の形をしていた以前と異なり、鉄雄の体は捉えどころがなく、カオリがどこに囚われているのか判断がつかない。

「鉄雄!聞こえるか!今すぐ放しやがれ!てめえの彼女だろオがおいこらア!!」

木山の語った言葉を、途切れがちな思考でカオリは思い起こす。
ああ、アキラつてやつの影響か……

鉄雄君の体は、レベルアップから切り離されても変異をし続ける。

「カオリ!!カオリ!!逃げろ、逃げてくれえ、頼む」

あれ。レベルアップのネットワークが壊れたなら、もう声は聞けない筈なのに……。

まあ、今となつては、そんなことどうでもいい。とにかく、鉄雄君にも、もう全然コントロールできていない。

肩甲骨と背骨と肋骨がくしゃくしゃに丸められようとしている。体のどこだかの内臓に刺さるような痛みが、苦しい。それは、もうすぐ自分を引き裂いていくんだらう。

鉄雄君。ごめん。

助けられると思つてたのにな……

目玉が飛び出そうなくらい頭も痛かったが、カオリはずっと目を閉じていようと決めた。

そうすれば、ほんの少しでも、この苦しみが楽になると思つた。

意識が飛んでいく。

閉じた瞼の向こうが、急激に白んできた。

繰り返し、繰り返し。上条の右手は、がむしやらに鉄雄の肉塊を殴りつけ、こじ開け、分け入っていく。

際限なく再構成を続ける鉄雄に対し、それでも前へ進む。

そして、右手の指先が、細い華奢な腕を探し当てた。

「く、おおおおおっ!!!」

沸騰したように熱い空間で、上条は掴んだ腕を思い切り引っ張り上げる。

力を失い、重さをもった人間の体を担ぎ、背負う。鉄雄の肉塊が行く手を阻もうとする。それを右手で押しつけ、上条は日の光が差す方

へと泥泥にぬかるんだような足場を駆けていく。

「カオリさん!!」

「鉄雄オ!!」

美琴と金田がほぼ同時に叫ぶ。

上条は、カオリを背負って、息も絶え絶えに帰還する。

その後を縫ってくる鉄雄の体を、金田のレーザーが引き裂き、美琴の電撃が焼き切っていく。

鉄雄の肉体が、悲鳴を上げた。

「カオリさん!」

上条が困憊して倒れこみ、美琴がカオリの体を何とか引き取る。

「しっかり!」

カオリは唐突に口を開け、ゲホゲホとせき込んだ。

ここから逃がさないと。と美琴が辺りを見回した時、アンチスキルの防護服を着た一団が駆け寄ってくるのが見えた。

「みんな、無事!?!」

鉄装綴里が、一団の中から切羽詰まって声をかける。先程、ド

ローンで攻撃を仕掛けて、反撃によって壊滅した者たちとは別部隊のようだ。

「先生!早くカオリさんを——」

美琴が、意識を朦朧とさせているカオリの肩を抱いて訴える。

「おい、鉄雄……様子がおかしいぜ」

両手について息を整える上条に、金田が不安げに言った。額からは汗が滴っている。

鉄雄は、脚が異常に増えた蛸のような形状を取っている。蛸でいうところの胴体部分にはぼっかりと口のようながらんだ空洞が生まれ、そこから叫び声が轟いている。断末魔の悲鳴のように、時折甲高い音を交えた声が続いている。

その口の上部に、ぎよろりと二つの大きな目が唐突に浮き出た。口との位置関係は歪んでいて、福笑いのようなようだ。その目が、脚の一つを凝視している。

金田や美琴に攻撃を受けた部位だ。切断された断面からは、黄色や

赤みを帯びた体液が、脈打つように吹き出ている。

「アイツ、再生しないのか……?」

上条が疑問を声に出す。そこへ、鉄装が振り返った。

「さつき、レベルアップの解除プログラムを、この街中に流しまくったんです!」

早口に、鉄装がそうまくし立てる。

「あのデカブツも、力を失うはず……さあ、みなさん、今の内に!」

ところが、鉄装に呼びかけられた一行がその場を退却しようとした瞬間、猛然と鉄雄は幾つもの触手のような肉塊を高速でしならせ、鞭のごとく辺りを所構わず破壊し始める。凄まじい地鳴りと振動が一行を襲い、立つこともままならなくなる。弾みで金属片や建材が飛び交い、降り注ぐ。

「往生際が悪いったら!!」

自分たちの頭上に降りかかる配管の類を磁力操作や電撃による破壊で跳ね除けながら、美琴が叫んだ。

「さつきとくたばんなさいよあのバケモノ!!」

美琴が叫んだ瞬間、ひと際激しく地面が揺れたかと思うと、突如自分の体が宙に浮くような不思議な感覚を覚える。

美琴だけではない。金田や上条、鉄装、その場の全員が同じ感覚を抱いていた。

考える間もなく、地面の砂や芥、瓦礫の数々は、巨大な蟻地獄に捕まったかのように、鉄雄の巨体目掛けて滑り落ちていく。鉄雄の体から伸ばされる触手は一層数を増し、狂ったように辺りを破壊していく。よく見ると、鉄雄自身もその巨体を地下へと沈めていくようだ。

鉄装たちアンチスキルは、力を失ったカオリの体を守りながら、崩壊を免れようと遠ざかる。

「やば——」

上条は、つい先ほどまで踏みしめていた地面が無くなり、臍の辺りが冷える感覚を覚える。辛うじて這い出し、巨大な陥没穴の淵の部分で体を支えた。

ああああ、と叫ぶ声に、上条は顔を向ける。

「金田ああ!!」

上条が懸命に名を呼んだ。

金田が、レーザー銃を手放して、滑るように落ちていくのが見えた。その目は見開かれ、下には上条の予想外に、がらんだうの空洞がぽっかりと口を開けていた。

あ、俺死ぬんだ。

金田は僅かの間、宙に投げ出されたことによる奇妙な感覚に対して、そう思った。

その時、不意に体に何かがしなりながら巻き付く感覚があり、金田は急激に胴体を引っ張り上げられ、内臓全てを吐き出してしまうかのような苦しさを覚える。

息が詰まったあと、金田はやつと咳き込み、自分の体を掬い上げようとしているものを見た。黒光りする塗装が施された、腕の太さ程のケーブルだ。千切れた先端からは銅線のような細い金属が何本もしなっているのが見えた。自分の腰から胸の辺りを何周もして、上へと伸びている。金田はケーブルの元を辿ろうと顔を上げた。

「じつとして!!」

苦し気な表情を浮かべて、美琴が上から叫ぶのが辛うじて聞こえた。

「ただでさえ、疲れてんのに、さつきから妙な電波が飛んでてキツいんだから!!」

ケーブルが美琴によって操作され、金田の体がクレーンのように引き上げられていく。

かつてアキラの冷凍カプセルが隠されていた広大な地下スペースを引き上げられながら、金田は鉄雄の巨体を見た。

並みのビルならずっぽり収まりそうな地下に身を落としてなお、AIMバーストの巨体は残骸や土を這い上がり、地上に顔を覗かせていた。金田は、辛うじてそれが元々人間だったことに気付ける両の目を見た。その視線は、青空を背景とした一点へ向けられている。

陥没穴の縁、鉄骨が地面から露出して、ちょうどバンジージャンプの出発点のようになった場所に、人影が一つ見え、金田は目を疑う。

「アイツは……」

眩いた瞬間、金田は体を回転させられ、乱暴に地面へと投げ出された。

「おい、金田！」

土の上を、2、3度箕巻きのように転がった金田へ、上条が駆け寄り、すぐに穴から引き離そうとかレ体を抱え上げる。

「お前、大丈夫か——」

「アタシの心配はしてくんないの!？」

頭を片手で押さえながら、制服を土と埃に汚した美琴が、やや不安定な足取りでやって来る。

「ああ、もうなんなのこれ……頭、いたっ」

「すまねえ、助かった」

上条の手を借りながら、金田は立ち上がり、美琴に礼を言う。

「何で急にどでかい穴が空いたか知らねえけど、とにかくアイツは自滅だ」

上条が、地中から触手をゆらめかせる鉄雄を睨んで言った。

「美琴ももう限界だ——逃げよう」

「ああ、でも」

金田は先程垣間見た人影を再び見つけ、指を差す。

「アイツ……なんであんなところ？」

金田の怪訝な声に、美琴と上条もそちらの方向を見る。

「……あの人」

美琴は、遠くに見える姿に目を凝らした。見覚えがあった。

汚れ切った白衣をまとった木山春生が、断崖に立ち、鉄雄を見つめて立っていた。

「お姉様！お姉様！……ダメですわ、通じない……」

風紀委員の一七七支部のオフィスでは、コンピュータに向かった黒子が、端末を操作しながら美琴へ必死に通信を試みるが、全く繋がら

ず、切羽詰まった表情を浮かべていた。

「監視ドローンも映像が途切れたつきり」

コンピュータとテレビの画面とを交互に見ながら、固法美偉も不安そうに言った。テレビの臨時ニュースでは、キャスターが困惑した顔で何事かを喋っている。つい先ほど、大きく土煙が上がったかと思うと、空撮の中継映像が突如途切れてしまい、それきり現地の状況は不明になっていた。

「初春は、確かにレベルアッパーの解除に成功したのですよね!？」

黒子は、固法を振り返り叫ぶように念を押す。

それに対して、固法は小刻みに頷いた。

「それは、確か……各地の病院や街中で、錯乱を起こしていた患者が一斉に鎮静して、快方に向かっているらしいから」

黒子はツインテールの髪を乱暴に掻き毟り、肘をデスクについて頭を抱えた。

「ならば、お姉様……無事なんでしょう? ねえ……」

消え入るような声を洩らす黒子の小さな背中に、固法はかけるべき言葉を見つけられずにいた。

「島君」

体を伸長させ、どうにか地上へと顔を覗かせようとしているAIIMバーストへ向かって、木山は呟いた。

「レベルアッパーのネットワークを破壊され、再生能力を衰えさせているとはいえ、やはり君は、独立した活動のエネルギー源をもっているようだね」

地上へ晒された肉塊がぐるりと向きを変え、胎児のような両の目が、木山を捉える。

強烈な異臭を放つ肉塊が、木山を見つめ、距離を詰めてくる。

「アキラか、それとも『虚数学区』の為せる業か……」

もうすぐ、手を伸ばせば触れられるであろう位置にまで、鉄雄の目

が近づいてきた。

木山の半身を収める程の直径がある淀んで巨大な瞳には、片腕をなぐし、やつれた自身の姿が映っているのを認める。

「私の目的は潰えた。あの子たちを救うことは、できない、だろうね……」

木山は、スカートの内側に忍ばせておいた拳銃を、ゆっくりと無事な左手で取り出し、銃口を鉄雄の瞳に向ける。

鏡写しのように、自分自身と銃を向け合っている形になった。

「……許してくれ」

僅かな声を洩らし、木山は引き鉄を引く。

パアンと乾いた音が響いた瞬間、ぎやああああ、とけたたましい悲鳴を上げ、鉄雄が体を仰け反らせる。

「痛！」

木山は、発砲した反動で、左手に痛みを感じ、思わず胸の方へ手を引き寄せる。

拳銃が、かん、と足元の鉄骨に当たって軽い音を立てた後、暗い地の底へと吸い込まれて消えていく。

は、はは。と木山は乾いた笑いを洩らす。

撃ったこともないのに、素人だな、私は――。

自嘲した木山が顔を上げると、目前に幾つもの手が迫っていた。

珊瑚に潜むウツボのように、鉄雄の肉塊は、木山の体を素早く掠め取り、その身の内に呑み込んだ。

「木山、はる、み……い！」

美琴は驚愕に目を見開いた。

自分が追い求めていた相手。垣間見た姿はボロボロに傷ついていて、そして、簡単に怪物に喰われてしまった。

「鉄雄……」

金田が、仲間の名を呼ぶ。

「まだ、何か狙ってるみたいじゃねえか？」

金田達の立つ位置からは、陥没穴からその身を這い出しつつある鉄雄の姿がよく見える。

その肉塊が、小高い山を形成した瓦礫の方へと伸びていく。

そこでは、3つの小さな人影が、じつと地面に座り込んでいた。

「あの、ガキたち……！」

ナンバーズだ。すぐ背後に鉄雄が迫っているというのに、気付いていないのか、全く動こうとしないように見えた。

「あんな所で何を！」

「おーい！逃げろお!!」

美琴と上条も気付き、必死に叫ぶ。

しかし、3人のナンバーズはそれでも動かない。鉄雄の触手が、3人の小さな体に、肩に、脚に、髪に、体を這わせつつあった。

「ありがとう」

金田はその時、はつきりと声を聴いた。

あどけない、男の子の声。

26番目のナンバーズ、タカシの声だ。

「君たちのおかげで、間に合ったよ」

「えっ？」

金田は、突如頭の中に聞こえてきた声に驚き、隣の上条と美琴を見る。

2人は相変わらず、ナンバーズに呼びかけている。聞こえていないのだろうか。

「あの、ヤっつき——」

そう金田が言いかけた瞬間、ナンバーズが座っている辺りから、空から降り注ぐ夏の日差しよりも、ずっと眩い、強烈な光が放たれ、金田達は思わず顔を覆った。

ナンバーズの3人が座り、目を閉じて一心不乱に祈る先には、うず高く積まれ、ちょうど玉座のようになった構造物の残骸があった。その上には、かつて冷凍カプセルに収められていた、瓶詰の28号^{アキラ}の生体サンプルがで並べられている。

逃げろ。

上条の声が辛うじて聞こえたとき、タカシは、胸の中に温かいものが溢れるのを感じた。

優しい人だな。

ほんの短い間ではあったが、ラボから逃げ出して街中を歩いた時、守ってくれた人。

そんな人が暮らすこの世界を、めっちゃめっちゃにされたくはない。

タカシとマサル、キヨコは顔を上げた。3人の思念が、ガラス標本へ届く。

ガラスにひびが入り、くすんだ黄色をしたホルマリンが溢れ出す。と同時に、標本が輝きを放ち始め、3人のナンバーズは手を翳し、目を細める。

懐かしい、友人との再会に、目元を緩める。

やあ。

久しぶり。

光の中に立ち上がった少年へ、ナンバーズがそれぞれ声をかける。
アキラくん。

眩い光が、辺りを包み込んでいった。

敷島大佐は、頬のあたりにさらさらとした感覚が伝うのを感じて目を覚ました。

左の頬に指を伝わせると、そこには乾いた薄茶色の細かな砂が付いた。

右膝の、銃弾の貫通痕からは痺れるような痛みがじわりじわりと響いている。それを意識して顔を歪めた後、自分が今どのような状況にあるのか、周囲を確かめるために首を回す。

肉体を変異させた鉄雄に吹き飛ばされて、気を失っていたようだ。周囲には、アキラの冷凍セルを構成していた建材が瓦礫となって散らばっている。自分はその瓦礫に挟まれるようにして、地に横たわっていた。生きていどころか、木山の介入によって受けた銃創以外に、新たな傷が無いのは奇跡的だった。

「……敷島大佐」

女の声に、大佐は顔を向ける。

微かに青みがかかった長髪を垂らした警備員アンチスキルの隊員。その顔に、大佐は見覚えがあった。革新勢力の暴動の際に、自分の部下を、その身を挺して救ってくれた人物だった。

「確か、黄泉川と聞いたか」

「生きていたとはね」

黄泉川が言った。顔は煤に汚れ、疲労の色が濃く見えた。

「どうやったのかは分からないが、島君を制圧するため、レーザー兵器を切り札にするとは、予想だに wasn't かった。けど、その状態じゃあ、もう歩けないだろう。手当が必要じゃん」

「それは、お互い様だろう」

大佐が、微かに口の端を歪め、黄泉川愛穂の足元をちらりと見て言う。

「そちらこそ、足の運びがおかしいぞ」

「……流石じゃん」

そう黄泉川が呟いた時、彼女の背後から何人ものアンチスキルの隊

員が走り寄って来た。

「私を、捕まえるのか」

大佐は低い声で言った。

「好きにして構わん。私は敗れた。だが……教えてくれ。41号は今、どうなっている？」

「大分暴れ回っているようじゃん、こちらも多くがやられた」

黄泉川が答えると、仲間が大佐を取り囲む。

「先ほど、大きな爆発が——」

その時、突如付近から眩い光が差し込み、大佐も黄泉川も、他のア
ンチスキル達も手を翳し、顔を背けた。

「今度は一体、何が——」

黄泉川が呻くように声を上げる横で、大佐はどうか光へと目を凝
らす。

「……お前たち」

大佐が呟いた言葉を黄泉川は聞き取ったが、その意味を理解できな
かった。

「何が始まったんだ」

金田が声を上げるその眼前では、眩く光が満ちていた。それは真昼
の空にもう一つ太陽を吊り下げたようで、青空や雲はほとんど光に隠
れて見えない。そして、鉄雄の巨大化した身体が、神の降臨を目の当
たりにして恐れ戦くように、ずるずると地べたを後ずさっていた。

金田と美琴も言葉を失っていると、光を背に、不意に小さな人影が
現れる。

「君は……!」

「アキラくんは、力を解放しようとしている」

目を見開いた上条の傍らに立ち、26号タカシが言った。

「今、キヨコとマサルが一緒だけど、時間がない。長くは抑えられない
よ」

「どういうこと?」

美琴が目つきを鋭くして言った。

「あなたたちが起こしたんでしょ? その、アキラって奴を」

「アキラくんが力を解放すれば、周りのたくさんのものを呑み込んじゃうからね。街も、人も……前もそうだった」

タカシが、大きな目を美琴に向けて言った。

「アキラくんだけではダメなんだ、そこで、鉄雄くん力も解放させたんだ。そのためには、あと一押し、すぐく大きな力をぶつけるんだ」
そこで一瞬、タカシは表情を暗くする。

「僕たちはアキラくんを抑えるのに手いっぱいだ。だから、君たちに頼るしかない。さつき空からすぐく大きな光が降って来たでしょ? あれみたいな、大きな力を、鉄雄くんにぶつけるんだ」

「待てよ、あんな衛星兵器みたいな力を、どうやって……」

金田が発した疑問を聞いて、上条は視線を横へ向ける。

美琴が、スカートのポケットに右手の指先で触れた。

「……宇宙からのレーザーには及ばないだろうけど。私の全力で、何とかするんだとしたら」

「でも……」

金田が迷ったように叫んだ。

「なあ、鉄雄は、どうなるんだ——死ぬのか!？」

タカシは振り向いて、地べたで震えている鉄雄の巨体へと目を向けた。

「アキラくんは、鉄雄くんをきつと遠くへ連れて行ってしまおうと思う。それは、僕らもきつと……けど」

タカシが、上条を見た。

「君のその、不思議な右手があれば……もしかすると、元の鉄雄君だけを引き戻せるかも。でも、ものすごく危険だ。アキラくんの力に、完全に呑み込まれてしまえば、その先は分からないから」

「どっちみち、簡単じゃないのは分かってる!」

美琴が、意を決したように言った。右手を固くきゅつと握り締めている。

「私のコインは、50mも飛べば溶けちゃうから。もっと近くから射たないと——だから」

美琴は、上条の顔をまっすぐに見る。

「アンタ——頼んだからね！そのうっとおしい右手で、訳の分からないアキラって奴から、連れ戻してよ!!」

「……ああー!」

上条は、美琴に向かって頷き、それから金田へと向く。

「どうなるか、俺にも分かんねえ、けど——精一杯やってやるよ、お前の仲間も、救えるように」

金田は、上条の言葉を聞き、唇を噛んだ。

「タカシくん!」

25号と27号もその場に現れた。背景のアキラから放たれる光は、ますます輝きを増している。いつの間にか、不穏な風が吹き始め、晴れていた筈の青空に黒雲が沸き立ち、急速にその背丈を伸ばしつつあった。

「周りの大人たちは、みんな遠くへ飛ばした。あの女の子も安全だ——やるなら、今だ!」

「その赤い男の人は……」

キヨコが金田を指さして言った。

上条と美琴が、金田を見る。

金田はぎりつと歯を食い縛って表情を歪め、それから口を開いた。「俺は逃げねえぞ!」

精一杯の声で、金田が叫んだ。

「俺には、チートな右手も、レベル5の電撃もねえよ!けど、けどよ——^{アイツ}鉄雄は俺の、仲間だ!ここで背中向けられるかよ!」

美琴を先頭に、上条、金田を合わせた3人は、荒れ果てた瓦礫の上で、巨大な光球へと向き合う。

一方、ナンバーズの3つの小さな人影は、光球へとまっすぐに浮遊して向かっていく。

タカシが、振り返り、地上の3人を見て口を開く。

「——頼んだよ！」

それから、ナンバースの姿形は光に吞まれ、見えなくなった。

美琴はその言葉を聞き届けると、振り返り、上条と金田を見た。

2人とも、唇を噛み締め、頷く。

美琴も頷き返し、顔の向きを、地上で震える鉄雄の巨体へと向ける。

アキラへと向かって叩頭するかのような鉄雄の肉体は、何を察したのか、巨大な目を美琴たちへ向けて開いた。

「あ、き、ら……」

「待つてろ鉄雄。今連れ戻してやる……」

鉄雄の肉体——今や力を失いつつある幻想猛獣AIMバーストから発せられる声に、金田が答えた。

上条が右の拳を固く握りしめ、美琴はポケットから小さなゲームセンターで使われるコインを取り出す。

「これで……」

指で弾かれたコインが、ほぼ真上へと回転しながら浮かんだ。アキラから放たれる光をきらりと反射したそれは、やがて重力に従い落下する。

「終わりにするッ!!」

美琴が高らかに言い放つと、青白い電光が周囲に弾けた。

美琴の手元に戻って来たコインは、赤橙色の光となつて、AIMバーストを一直線に貫いた。

爆風と熱が3人の前方で沸き起こると、辺りに悲鳴が劈いた。それは、AIMバーストと鉄雄の声が入り混じっていた。

何事かを、金田が堪え切れずに叫んだ。

一瞬、3人は、目の前にアキラと同じような光球が、もう一つ生まれたのを見た。

2つの光の塊は、程なくして融合し、あつという間に3人の視界全てを覆い尽くした。

美琴と金田は、後ずさりして顔を両手で覆う。

上条は目を瞑り、咄嗟に2人の体を自分へと抱き寄せた。顔を覆っている2人のそれぞれの手を手繰り寄せ、自らの右手で掴む。3人が

手を重ね合う形になった。

離れるな――。

上条はそう叫ぼうとしたが、間もなく体が浮かび上がるような感覚がしたかと思うと、五感が何も捉えられなくなり、ぷつりと意識が途切れた。

とても柔らかい白色の光が差し込み、上条当麻は目を擦った。

自分はどうなったのか。疑問に思い足元を見ると、色とりどりの花柄をデフォルメしたような柄が描かれた床に立っていた。

上条は、天井から白色光が照らす、円形の部屋に立っていた。天井は礼拝堂モスクの内部を思わせるように緩やかな円錐形を描き、目立つような窓は無い。壁面は照明と同じく白一色だ。振り返ると、同じく煌々とした明かりが照らす廊下が見えるが、不思議と先の方は靄がかかったようにぼやけて定かではない。

自分は、原子力実験区画で、アキラと島鉄雄の覚醒を目の当たりにした。そして、気が付いたらここにいる。傍にいた筈の、美琴と金田の姿はない。

上条が戸惑っていると、不意に足元に何かが軽やかに弾みながら転がって来た。

掌サイズの、ビニル製のボールだ。上条が拾おうと身を屈めたところ、先に小さな人影が滑るように飛び込んで、そのボールを拾った。上条は、ボールを拾い上げたその人物を見つめる。

清潔そうな白い服、半袖のシャツに、長ズボンを身に着けた男の子だ。小学校の低学年位だろうか。柔らかかそうな黒髪に、丸っこい顔で、はつきりとした目鼻立ちをしている。正面ではなく横から見ても、どこことなく不思議な透明感を感じさせる子だった。

「あの、君……」

上条が声をかけようとすると、不意に周囲ががやがやと騒がしくなる。

いつの間にか、目の前の少年と同じような子どもが、何人も室内で

遊んでいた。先ほどまでは無人の静寂が部屋を包んでいたのに、あたかもずつと前からそのように遊んでいたようだった。

「おおい、アキラくん！」

聞き覚えのある声でした。

やや尖った頬が目立つ、悪戯っぽい笑みを浮かべた別の男の子が、ぶんぶんと手を振ってこちらにアピールしている。次は僕だってば！とその男の子が大声で呼びかけた。

「タカシ、君？」

名を思い出し、上条は呟く。自分と特に関わりが深い、ナンバース実験体の一員。しかし、その風貌は、皺の刻まれたものではなく、正に活発な子どもだった。

アキラと呼ばれた少年は、屈託の無い笑みを浮かべて、ボールを振り被る。この部屋にいる子どもたちは、数えてみると8人だった。その誰にも、上条の姿はまるで視界へ入っていないようだ。

「アキラって……」

(もう何十年も、ずっと前のことだけどね)

タカシの声が不意に木霊する。

先ほど、目の前で遊ぶ子どもが発した声ではない。上条の頭の中に響くような声だった。

「タカシ君!」

驚いた上条は、改めてはつきりと名を呼ぶ。

(僕たちは、君たちよりもずっと前に、能力ちからを持てるようになって集められたんだ。それこそ多分、君が生まれるよりもずっと前のことさ)

イマジンプレイカー幻想殺しを持つ上条にとって、初めての体験だったが、テレパス念話で通じ合う学生は、きつとこんな風に声が聞こえているんだろうなと上条は思った。

「ここはどこなんだ？ 一体、俺たちはどうなったんだ？」

(アキラくん力はすごいからね。なんていうか、異次元みたいな別の世界を創れるみたいだよ？ そこでは、アキラ君自身や、内側に入っただ人たちの……記憶っていうのかな？ 覚えてること、思い出すことが、互いの精神こころに混じり合ってる。これは、僕の記憶。君は不思議な

右手を持つてるけど、アキラくんの力は、超能力っていうのは外れたところにあるから、君にも見えるんだと思う」

「異能じゃない……？」

上条は、自分の右手を見た。

幻想殺しを持つ自分が、言わば記憶という幻想の世界に取り込まれたのだろうか。

（君の力は、奇跡みたいな力を吹き飛ばしちゃうんでしょ？アキラくんがもってる……いや、僕たちが目指したものは、そういうのとは似てるようで、ちよつと違うんだよ。生き物の根っこに関わることだからね）

「それはどういう……」

上条が疑問を浮かべた時、背後の廊下から複数の足音が聞こえ、上条は思わず脇へ飛び退く。

上条には目もくれず、クリップボードを手に複数人の白衣を着た大人が話し込みながら入室してきた。

「……25号には期待が持てます。目下8割を超す精度の未来予測を^{シミュレーション}視野に入れていきますから、この調子でいけばより高度な演算処理器の開発にも……」

「いや、それよりも、もつと凄いののは28番目の彼でしょう。直近の定期予測値によると、間違いなく……」

上条には咄嗟に理解しがたい会話が聞こえてくる。

女性が一人、手を叩いて子供たちに呼びかける。

「ハイ、じゃあみんな集く合く！午後のお薬の時間だからねー！」

チョコレートを配るかのような雰囲気だ。子供たちがわあつと集まる。

アキラと呼ばれた少年も、屈託の無い笑みを浮かべて大人の元へ駆け寄っていく。

（それでね）

上条は、タカシが立ち止まり、自分をじっと見ているのに気付いた。（もつと、大きく力を伸ばそうとしたんだけど）

ボールが上条の足元へ転がってきて、止まる。

上条が顔を上げると、そこはいつの間にか廊下だった。

全身を白い防護服で包んだ人物が4人、担架を運び、上条の目の前を通り過ぎていく。

担架の上には、明らかに人がくるまれていると思われる膨らみがあり、それは微動だにしなかった。

頭部があるはずの辺りは、灰色で大小様々な計器が取り付けられたヘルメットのようなものが見える。

「No. 23」とその側面に印字されているのを、上条は見た。

(僕らの体は、いつもどこか、うまくいかなかった。やっとな力を手に入れたとしてもね)

タカシの声が聞こえ、上条は担架が運ばれていった方と反対方向を振り返る。

別の大人に手を引かれたタカシが、不安を顔に浮かべて、担架が運ばれていくのを見つめていた。

「何だこれは。今も昔も変わらないじゃないか」

不意に今度は、別の女性の声が聞こえ、上条は顔の向きを変えた。そこに居る人物を見て、上条は目を見開いた。

赤や薄黄色でひどく汚れ、染まった白衣をまとった瘦身の女性だ。確か、美琴が追っていた科学者だ。右腕は、失われていない。

「全くもって、不^ふ仕^し合^あわ^わな^なことだ……」

悲嘆に暮れた表情で、木山春生が微かな声で呟いた。

その時、上条の周囲に爆音が響き渡り、閃光で包み込まれる。

上条は腕で顔を庇う。周囲の世界が崩壊していく。

鉄雄との戦いの場所で見たとような、大小様々な瓦礫が、螺旋を描いて巨大なアキラの光球へと吸い込まれていく。上条の体も、それに向かって引き寄せられていく。

劈くような悲鳴が後ろから迫ってきて、上条が顔を向ける。赤ん坊のような顔をした幻想猛獣^{AIMバースト}が、引力によって身体を引き裂かれながら、断末魔の声を上げている。

あれは、島鉄雄自身なのだろうか。それとも、鉄雄から脱した、力の塊なのだろうか。

その時、不意に、巨大な石塊が目の前に現れ、上条は顔を覆った。

雨だ。

どんよりとした黒雲が渦を巻き、雨が降りしきっている。

いつの間にか、辺りはどこまでも瓦礫が散乱した廃墟へと景色を変えていた。

アキラと呼ばれていた少年が、両手を暗い空へと掲げている。その頬はすっかり濡れていて、ひどく泣き腫らしているようにも見えた。

アキラが手を翳した先では、大小様々な瓦礫が浮遊し、二重螺旋の構造を描いていた。それは科学番組でありがちなコンピュータ・グラフィックスのようにゆつくりと回転し、天高く続いていく。

(それで、アキラくんは……)

続いて聞こえたのは、27号の^{マサル}声だった。上条が気配を感じて辺りを見回すと、先ほど研究所^{ラボ}で見かけたよりも、更に重厚な防護服をまとった幾つもの人影が、墓場の鬼火のようにぽつと現れたのに気付く。その集団は自分とアキラを取り囲んでいて、中の一人が、鎮静銃を構える。銃口の向こう、筒の中には、果てしない虚空がある。上条の視線はその闇へと引き寄せられていく。

(たくさん人が死んじやった。でも、君たちが住む街が出来上がった) 上も下も、右も左も分からない虚空の闇の中で、上条はマサルの声を聞く。

(今じゃ数えきれない位の、力を持った人がいるんでしょ？君たちはうまくやってるよ。僕らの時代よりも、ずうっとね)

「うまく、だなんて……」

上条は自分の右手を握り締めようと力を入れる。自分の体さえ一切見えないが、とにかくそうしようとした。

「そんな犠牲が……その上に俺たちはのうのと立ってて。そんなことを、俺は今まで、考えもしなかった……だったら、そんな力、無い方がいんじゃないのか！」

「でも」

不意に声が、女の子のものへと切り替わる。

「仲間ができた。目に見える世界だけに頼らず、心と心で通じ合える、本当の仲間。それはきつと、私たち人間の進化。アキラくんの力も、あなたの右手も……方向は違っても、私たちはそうやって、未来を選ぶほうとしているの」

金田の目の前が、再びラボの白い室内へと変わった。

髪を三つ編みにした美しい少女、^{キヨコ}25号が、上条をまっすぐ見つめている。その後ろでは、^{アキラ}26号、27号、28号、そして、他の20番台のナンバーズが、笑顔を浮かべて遊んでいる。

「仲間？」

上条が聞き返す。

そう。と、キヨコの声が、上条の思考に響く。

「金田くんや、美琴さん……アキラくんに、木山先生、鉄雄くん」

8人のナンバーズが、手を取り合いながら、天へと昇っていく。

「カオリさんに、レベル5の人たち。それに……上条くん……」

嵐が吹き荒れるようなノイズが、キヨコの声に覆い被さっていく。上条の体もまた、どこか別の場所へ向かって引き上げられていく。

ビーツ、ビーツ、というけたたましいサイレンの音が耳を震わせたことで、美琴は周囲を見回した。

どこかの病院だろうか、ガラス窓から処置室を見下ろすような上階に美琴は立っている。白衣を着た医者、というより、スーツの上に白衣を被った中途半端な格好をした大人が、何人も慌ただしく動いている。輸液がどうか、心拍数がこうだとか、そういった言葉が切迫感を伴って聞こえてくる。それらの声は、妙にエコーがかかっている、ぐわんぐわんと美琴の思考を揺らした。

ガラス窓に手を押し付けた一人の後ろ姿を、美琴は見つめる。その人物は短めの茶色がかった髪をしていて、背格好からして恐らく女性だ。両手をガラスに張り付けたようにしながら、不動で立っている。

ガラス窓の向こうに何があるのか、美琴はそろそろと（実際足音は全く立たなかったが）女性の横まで歩き、階下の様子を見下ろす。「ひっ」

その瞬間、目にした光景に、美琴は思わず口元を抑え、尻餅をつきそうな位の勢いで後退する。

「他人ひとに観られるのは、何とも、苦痛だ」

静かな声を聞き、美琴は、はっと顔を上げる。

木山春生が、諦観に満ちた顔で立っていた。

「あなた、なぜ——？」

「それはこちらの台詞だよ、超電磁砲レールガン」

木山が、美琴にちらりと視線を送って言った。

美琴は唾を飲み込み、口を開く。

「でも、だって、あなたは——」

「島鉄雄に呑み込まれて、死んだ。そう言いたいんだろう？」

木山は瞼を伏せ、唇を噛んだ。

「まあ、私もそう思ったよ。彼の体内で、私の体は押し潰されたと……何故、事ここに至ったかは知らないが、これは間違いなく、私の記憶の世界だ」

「あなたの、記憶？」

ああ、と木山はガラス窓の前の女性の背中を見つめて言った。

「さつき、私はナンバーズの子供らの記憶の世界にいたはずだが……そうだ、君のお友達かい？少年も一人いたよ」

「……アイツが？」

逆立った黒髪をした、よく見知った顔を思い浮かべ、美琴は周りを見渡す。

「……ここには来ていないみたい」

「よく分からないな」

頭を振った木山の横を、こめかみに大きな色素班をもつ腰の曲がった老人がゆつくりと歩き、通り過ぎていく。

その老人は、やがてガラス窓の女性の横に立ち、何事かを囁いたかと思うと、ポンと肩を叩き、去っていく。

すると、へなへなと体の力を失った女性が、その場に膝をつく。ガラス窓に、白く爪痕が残る。

美琴の目に、絶望に満ちた横顔が見えた。

「……アレが、あなた？」

木山がほんの僅かに頷いた。視線は、後ろ手をひらひらと振りながら部屋を出ていく老人の曲がった背中へと、激しい憎悪をもって向けられている。

『科学の発展に、犠牲はつきもの』だとは、よく言ったものだよ」

木山が重い口を開いた。

「私の教え子たち……使い捨てにされたあの子たちは、今も目を開けることなく眠り続けている。私は救いたかった。それが、幻想御手^{レベルアップ}を創り出した理由だ。もつとも——君から得た着想だがね」

木山の言葉に、美琴は目を丸くする。

その時、周囲の景色が、突風に飛ばされるように掻き消え、代わりに薄暗い廊下へと替わった。

若き研究者としての木山春生が、瞬きせずに直立不動で立っている。呼吸器^{マウスピース}を装着させられ、頭部を血塗れにした小学生低学年位の子どもが、何人もガラガラと運ばれていく。

「人体……実験」

「あのリーダー^{ジジイ}は相当な権力者でね」

現在の木山は、先ほどと同じように、美琴の横に立って、若き日の自分の背中を見つめている。

「アンチスキルはもとより統括理事会も札束を握らされている。そのお陰で、樹形図^{ツリーダイアグラム}の設計者を、何度、何度も申請したが、跳ね除けられた。だから、巨大な演算装置が必要だったんだ。そうすれば、あの子たちを……」

「待ってよ」

美琴は、何かに憑かれたように話し続ける木山を引き留めた。

「私が、レベルアップを開発するものになったって、どういうこと？」

木山が、光を失った瞳で美琴を見る。この世界に来て、初めて美琴

は、まともに木山と目を合わせた。

「私は知ってしまったんだ。君も、私と同じ。抗うことのできない、絶望的な運命を背負っているということだよ」

「それって、どういう……」

困惑する美琴の周囲の風景は、再び風に卷かれたように、所々歪んで曖昧になっていく。

木山は再び顔を上げた。頬に一筋、濡れた跡が見えた。

「私は、恐らくもう生きて戻ることはない……だから」

「ねえ、木山先生」

美琴が呼びかけた時、木山春生の体にも、黒ずんだ光のようなものが走り、その形を模糊にしつつあった。

記憶の世界が、崩壊していく。

美琴は慌てて、木山に駆け寄ろうとした。

「ちよ、ちよっと——」

「あなたには、待っている人がいるでしょう?」

突然聞こえて来た少女の声に、美琴も木山も視線を下ろす。

廊下としての特徴を失い、ただの白い床が残った、美琴と木山の間、ナンバーズの一人、キヨコが立っている。

「短い間だったけど、ラボであなたの心を読んで、分かったの。あなたは、とても優しい心の持ち主だって」

灰色の髪を揺らして、キヨコが木山を見上げる。

「あなたを、待つ人がいる世界へ帰すわ。私たちは、もうすぐここから去ってしまうけど、今なら……一人だけなら。二元の世界へ戻すことができる」

キヨコが、皺の刻まれた小さな手を木山へと差し出す。

木山は視線を落とし、それから戸惑ったように美琴を見た。

「だが、それなら彼女に……」

木山の迷える表情を見て、美琴はふっと笑みを浮かべた。

「あー、私、自分で何とかするから。それに、教え子たちのこと、本当に諦めるの?」

美琴の言葉を聞いて、木山が雷に打たれたような顔をした。

「もし恢復したとして、あなたがいなかったら、悲しむよ、きつと。その絶望的な運命ってのが、どれほどのものか、私には想像がつかないけど——」

美琴が、白く染まっていく周囲を見渡して、それから拳を握りしめた。

「私だったら、諦めない。切り開いて見せる。今も。これからも」

木山は、驚いた顔をやがて緩めた。

「……すまない」

「謝るんだったら、元の世界で、眠らされた一万人に謝ってよ」

美琴は手を振る。

「ああ、そうだ……カオリさんには真つ先に。あと、佐天さん。私の友達だから」

「……約束しよう」

木山は微かに笑みを浮かべ、頷いた。それからキヨコを見た。

キヨコもまた頷く。

キヨコの差し出した手に、木山が自分の手を重ねる。

すると、木山の姿は忽然と消えた。

キヨコが美琴を振り返る。

美琴は驚いた。キヨコの顔から、皺は消え失せている。

「……アンタ、そんなに可愛かったんだ」

キヨコは、片手を口元にやり、気恥ずかし気に首を傾げ、はにかんだ。おさげがふわりと揺れる。

「ふふっ！どうもありがとう！超能力者のお姉さん！」

白く染まり切った世界で、美琴は体が浮かび上がる感覚を覚える。

(彼が、あなたたちを元の世界にきつと帰してくれるわ)

キヨコの声が、頭の中に響く。その姿は、もうすっかり下方で小さくなり、やがて光に隠されるように見えなくなっていく。

(きつと、大丈夫。未来は、あなたたちが創っていくものだから)

「……とうま」

体を穏やかな波に預けているような感覚に包まれ、美琴は小さく呟いた。

泣き声が聞こえる。

児童養護施設に隣接した小さな公園には、ビルの向こうから漏れ出た夕日が静かに広がっている。

ポロシヤツを着て、短い髪をした一人の男の子が、土を被った袖で目を拭い、それから水飲み場の蛇口を捻った。手を冷たい水に曝し、時折鼻を吸る。

「あいつら、能力者になるために学校行くんだってよ、嘘だろよ絶対」
不意に男の子に声がかかった。男の子は、擦り傷を負った手から視線を上げる。

もう一人、片方の鼻の穴から血を垂らした少年がいた。少年は、気の強そうな顔でニツと笑いかけた。

「だってさ、考えてみるよ？能力者なら、ケンカなんてこう、念力でスプーン曲げるみたいにさ、よゆうで勝てるに決まってるんじゃない？」
「だぞ、一・二発引っぱいたら、ガキみたいに泣き出して逃げやがってやんの、弱っちいじゃねえか、なあ？」

ポロシヤツの男の子は、潤んだ目で、現れた少年を見る。

少年は、ごしごしと手の甲で鼻を拭い、フンと鳴らすと、公園の出口の方を睨みつける。

「アイツら、偉そうにしゃがってさあ！俺らのこと、『捨て子』とか『なんどかエラー』だとか言ってるよ！なんだよ、エラーって。機械じゃねえっての俺たち」

そう言うと、少年は何かを思い出したように首を傾げ、頭をぽりぽりと掻いた。

「ん、まあ、確かにウチの母ちゃん、ホジヨキンが出るからってさ、こんな知らない町に俺のこと放り込んでよ。しょうがねえんだよなア、弟の世話で忙しいんだって……で、お前も最近来たの？」

少年からの問いかけに、男の子は身を引いて、おずおずと頷く。
へえ、と少年は再び得意げに笑みを浮かべる。

「そっかーじゃあ、俺がいろいろ教えてやんよ！つってもまあ、俺もこないだ来たばっかしだけど——」

「忘れ物だよーアンター！」

またしても別の人物が現れた。

茶色のショートカットに、吊りスカートとブラウスに、蝶ネクタイという出で立ちの、活発そうな女の子だ。服装を見れば、2人の少年とは明らかに異なる雰囲気だったが、今、その洒落た服は、少年たちと同じように泥に汚れている。

呆れたような、怒ったようなふくれっ面を浮かべて、女の子は手を差し出した。砂に塗れたロボットの玩具が握られている。

「ケンカ売ったなら、ちゃんと取られたもの取り返しなさいよ！」

「何だよ、いきなり人のケンカに割り込んできたくせに。お前のことなんか知らないぞ？大体、それ俺のじゃねえし」

少年が邪険に扱うと、女の子の膨れた頬に更に赤みが増した。

「ハア？助けてやったのに、その言い草は無いでしょ！」

女の子が負けじと言い返す。

「あたしが手伝わなかったら、アンタ、絶対負けてたからね」

「ンなことあるかよ！ゼッてー、俺一人で何とかなったし、あんな奴ら！」

あの、とポロシャツの男の子が声を出す。

少年と女の子はピタリと言い争いをやめ、男の子を見る。

「……ああ、もしかして、君の？ホラ」

女の子からロボットを差し出され、男の子はこくりと頷き、それを受け取る。

フン、とまた鼻を鳴らし、鼻血の少年が女の子を見る。

「……で？お前、誰？俺らの施設じゃねーだろ、あそこにそんなおじよー様っぽいカッコしてる奴アいねーもん」

「あのね、私、さつき慰問演奏に行ってたの！あんたんとこの施設に」「イモン……何だよソレ、焼いたら旨いのか？」

「あーもう！バイオリン、ピロティで弾いてたでしょ！聞いてなかったの？」

「知らね。きょーみないし」

まるで思いやりのない少年の返事に、女の子は息をのみ、それから大きく吐き出す。

「そんなすげえ楽器を弾くおじよー様が、なんでこんなところにいんだよ」

からかうように少年が言うと、女の子は腕組みをして、しばらく黙り込んだ。

「……退屈なの。どうせこの後、どっかの偉い人と夕飯食べて、それから塾に行つて……将来は、いい学校に入れつて、いつつも言われてるから……」

少年と男の子は、先ほどとは打つて変わつて静かに語る女の子の言葉に聞き入っていた。

「へえ、おじよー様も楽しじゃないんだな」

口を開いたのは少年だった。一歩女の子へと歩み寄る。

「名前、なんていうの？」

問われた女の子は、吊りスカートを握りしめていた手を緩めた。

「……みこと。あたしは、御坂美琴っていうの」

「みこと、美琴か！」

少年は、ニツと歯を見せて笑った。

「美琴、助けてくれてありがとなー！」

「さつきはそんなこと言わなかつたくせに」

呆れたようにため息をついた女の子は、少年へ顔を向ける。

「で、あんたは？」

「俺？俺は、金田つてんだ」

互いに名乗つた2人は、ロボットの玩具を手にする男の子を見る。

「俺たちさ、人数多い相手に、一緒に立ち向かつたんだ。すぐくね？なあー！」

金田の誇らしげな言葉に、男の子は目を丸くする。
「僕」

少年が、口を開く。

「僕は——」

「御坂」

上条当麻が、美琴へと声をかける。

「金田」

赤いツナギを着た金田と、制服姿の美琴が、上条の方を振り返る。
2人とも、一瞬呆けたような表情を浮かべる。

「……そうだ」

美琴が、静かに言った。

「帰らなきゃ——」

「いや、でも」

金田が、夕日の差す方を振り返る。辺りに、夜がひたひたと迫ってきている。

「鉄雄」

ポロシャツ姿の、幼い姿のままの鉄雄が、名前を口にした。どこか、安心したような表情を浮かべている。

「島、鉄雄っていうんだ」

「鉄雄」

金田が、手を伸ばす。

「俺は、あの時……友達になろうって、そう思ったんだ……」

金田の声を聞いた鉄雄が、はつきりと笑った。

「ともだち、友達……」

上条が、意を決して島鉄雄へ歩み寄る。右手で、自分よりもずっと背の低い、鉄雄の頭に触れる。

次の瞬間、遠くから眩い光が差し込んだかと思うと、夕焼けがぼろぼろと剥がれ落ち、風が唸る音が響き出す。

上条は後方へ弾かれてよろけた。態勢を立て直すと、夕陽の代わりに、アキラの光球が輝いているのが見える。辺りの風景は、それを目指して崩壊し、引き伸ばされていく。

金田が、ふらふらと鉄雄の方へ歩き出す。上条はそれを見て、引き

留めようとする。

「金田」

「金田ッ！」

上条と美琴が、ほぼ同時に金田の肩を掴んだ。

「か……ね……だ……」

アキラの光を背に、笑顔を浮かべた鉄雄の姿もまた崩壊していく。
「てっ」

声を漏らした金田の瞳は、潤んでいた。

「鉄雄オ!!」

強烈な引力が3人を襲う。金田の姿もまた歪み出す。

力の奔流に巻き込まれながら、上条の右手が、青白く、眩く光り出す。

美琴が上条の手を両手で掴み、目をしっかりと閉じて踏み止まろうとする。

上条は、美琴の支えを借りながら、右腕をあらん限りに伸ばす。

金田が、涙を流しながら、振り返り、手を差し出す。

3人の手が、重なり、触れ合った。

「……なんてことじゃん」

眼前に広がる光景に圧倒され、黄泉川愛穂は息を呑んだ。

かつて、石棺があつた位置に、地下から巨大な構造物が噴出し、直後から辺り一帯で島鉄雄が変異したという異形の生物が暴れ回っていた。負傷を押しつけて逃げつきたところ、巨大な光球が出現し、直後、眩い光と共に、瓦礫の山は消え去った。

今、黄泉川の目の前、一面に大口を開けているのは、野球ドームを幾つも呑み込んでしまいそうな程の広大なクレーターだった。月面からそのまま切り取って持ってきたかのようなその赤茶けた荒野は、底に至るまでは家屋を何軒も重ねる位の深さがある。水道管が露出したのか地下水脈を断つたのか、あちこちから水が噴出してちよつとした湖を形づくっている。辺りは真夏とは思えないような冷たい風が吹いたかと思うと、熱風が吹き抜けることもあり、奇妙な空気感で満たされていた。巨大な光球が輝いた頃には上空に黒雲が沸き立ち、一時は俄雨も振ったが、今は一時の勢いを弱め、雨は止みかけている。台風が襲来した時のように刻一刻と形を変える厚い雲の隙間からは、徐々に紺碧と光が差し込んで来ようとしていた。

「鉄装……！」

先行して現場へ向かった後輩の名を、黄泉川は悔悟の念を込めて口にした。

「すまない……私が、こんなザマばかりに。若いお前が命を散らすことになるなんて——」

「そ、そんな自分を責めないでくださいよ。まあ、いや、死んだかと思つたのは本当ですけど！」

「ああ、そうだとも！」

黄泉川は拳を握りしめ、自らの脇腹を打った。負傷した片足が疼く。

「私は、子どもたちを止められなかったばかりか、仲間すら死に追いやった大バカ者じゃん！」

「あの、黄泉川先生？私、死んでませんってば!!」

「ああ、死んで——ええ!？」

目を丸くした黄泉川が、背後を振り返り、素っ頓狂な声を上げた。
「鉄装!!生きてたじゃん!？」

鉄装綴里が、笑みを浮かべて黄泉川へ近寄る。眼鏡についた乾いた泥が、はらはらと剥がれ落ちた。それを見た黄泉川の顔にも、張り詰めた糸が解けたように笑顔が浮かんだ。

「良かった!!通信はずっと繋がらないし……一体何があったじゃん?」

「自分も何があったか、どうも分からず……カオリさんを確保した直後に、突然、私や他のチームメンバーは空間移動させられたんです。あんな一遍に、大人数を……」

「カオリ……今、あの子は?」

「無事です」

鉄装が答えた。

「酸欠状態に陥っていたので、まだ万全ではないようですが、命に関わるものではないです」

鉄装は、広大なクレーターを眺め、ため息をついた。

「変異した島鉄雄は……異様でした。正直、自分は怖くて、足が竦んでしまつて……まだ、生きてるのが夢じゃないかと思えます。先遣隊のメンバーも手ひどく被害を受けましたが、幸い全員生きています。島鉄雄は……どうなったのでしょうか？影も形もないです」

黄泉川は俯き思案しながら、鉄装の言葉に聞き入っていたが、ふと顔を上げた。

「上条当麻と、御坂美琴は……?」

黄泉川の問いに、鉄装は口を開いたが、暫く答えに窮した。

「……今、皆で搜索しています。転移させられる直前まで共に行動をしていたのですが、その後は……」

「上条……!」

鉄装の答えに、黄泉川は唇を噛み締め、クレーターを睨む。

空からは、何台もの救援のヘリコプターのローター音が聞こえ、雨

の匂いが急速に漂ってきた。

夜明け前と見まがう程、光が乏しく、湿気に塗れたクレーターの底で、御坂美琴は雲の隙間から徐々に青を覗かせつつある空を見上げた。

「帰ってきた……んだよね？」

「じやなきや、なんだ？ここは地獄の窯の底か？最も、こんな湿っぽいんじゃない、マッチ一本の火も起こせないだろうけどさ」

後ろから、上条当麻が冗談めかして声をかける。

「色々あり過ぎて、よく分かんねえけど……俺たち、生きてるのは確かだと思っぜ」

美琴は振り返り、上条を見てふっと笑みを浮かべる。

「あんたに助けられた……ってことでいいんだよね？ありがとう」

美琴の礼に対し、頷きながら上条は歩く。

薄い反応のまま、上条が自分の横を通り過ぎたので、美琴はやや不服そうな顔をした。しかし、すぐにその表情は消える。

上条は、膝について座り込んでいるライダースーツの後ろ姿に歩み寄っていた。

「……金田」

上条が名を呼ぶ。

「すまない。助けられると思ったんだけどさ……ダメだった。アイツは……」

沈んだ上条の話し振りを耳にして、美琴も黙って金田の背中を見つめる。

慎重に言葉を選んで話そうとする上条に対し、金田はすぐに返答せず、ゆっくりと立ち上がり、空を見上げる。

ブーツが泥を踏みしめ、湿った音を立てた。

「……行っちゃった」

金田は、まず一言、そう口にした。

「鉄雄も。実験体ナンバーズの奴らも。アキラも……」

上条と美琴が、金田と同じように上を見上げる。すると、3人は急に眩しさを感じ、それぞれ腕を翳す。

雲の隙間から日の光が差し込み、3人の居る位置をスポットライトのように照らし出す。それは凹凸の激しい荒れた地面の上を静かに滑り、湿り気を纏った黄金の帯を揺らめかせた。

「ありがとうな」

金田が感謝の言葉を述べて、上条はえっ、と聞き返す。

「あれは俺の記憶だったけど……お前、凄すげえよ。その右手、人の心にまで上がり込んで引っ張れるんだな」

どうも素直に礼を言われているとは思えず、上条は曖昧に笑う。

「アンタにも感謝しなきゃだ、美琴」

金田から、存外にも下の名で呼ばれたことで、美琴は驚く。

「俺、ずっと忘れてたよ。俺ら、前にも会ってたんだな」

美琴は、金田の言葉を聞くと、ふっと肩の力を抜き、笑った。

「……そうね。私も心の奥にしまい込んでた」

「お陰で、2人とも戻せたんだな」

上条が、美琴と金田の間に入り、しみじみと言った。

その時、3人の頬に、ほぼ同時に雫が落ちた。

改めて3人が上空を見上げる。

天気雨だ。

光の帯が、いつの間にか無数の粒となって煌めき、土埃を洗い流すと、3人の体にも荒れた大地にも、潤いを降らせている。それらは、頬を、体を伝い、地面で跳ね返って、泥と混じって3人の体を濡らした。そうして、3人は、数え切れない光を纏っていた。

「……鉄雄」

金田が、両の掌を上に向け、雨を受け止める。

美琴は、金田が言わんとすることが何となく分かるような気がした。

不思議と温かみのある雨粒だった。それらは、一粒一粒の中に、遙か遠くからの記憶を秘めている。島鉄雄に、キヨコ、タカシ、マサル、

アキラ。そして、^{レベルアップ}幻想御手を通して繋がった、一万人を超す人々の思いが、光になって、今、降り注いでいる。それらは土へ、川へ、海へ、水蒸気へ、形を変えながら、元の持ち主の所へ還り、或いは互いの人間の心へと溶けていく。

雨と光をもみくちやにしながら、一台のヘリコプターが降下してくる。

ダウンウオツシユとローター音の渦が、金田たち3人の元にも届く。

「おおおい!!上条おゝ!御坂あゝ!」

メガホンを手に、黄泉川愛穂が、スライドドアを開け放って叫んだ。

「あれえ!!?金田クンじゃん!どうして——」

「黄泉川先生……!」

美琴が笑みを顔いっぱい浮かべて、大きく手を振る。

対照的に、金田はゲツと声を出した。

「あのセンセ……まさか俺を捕まえに来たんじゃねエだろうな……」

「黄泉川先生!」

上条が、笑いながらも心配そうに叫んだ。

「あの、そんな体乗り出したら、危ないですって!!」

「とにかく、生きてて良かったじゃん!!」

上条達の言葉は駆動音にかき消されて聞こえていないだろう。操縦席の方へとしきりに顔を向けながら、黄泉川は破顔して叫び続けた。

「ずーっと電話がかかってきてるんだ!白井や小萌から『無事か』ってなあ!!待ってる、今助けてやるからな!!オイ、早く降ろしてくれ!無理!?ケチくさいこと言ってるんで、ほら、ランディングだランディング!グ!じやなきや梯子出すじゃん、梯子!!」

ヘリコプターのローターに散らされる雨は、徐々にその勢いを弱めつつあった。クレーターに、光が広がりつつある。その光は、街全体の空と繋がり、よく見慣れた夏の風景へと合わさっていく。

「黄泉川先生?!無茶しないでください!聞こえてますう?!上から見て、冷や冷やしますってば!!」

接続状況が相変わらず不安定な通信機に向かって叫びながら、クレーターの外縁に立つ鉄装は、はらはらと学生達の救出の様子を見守っていた。

そこへ、別の隊員が駆け寄り、何事かを鉄装へ知らせる。

「あ、ハイ、何でしょう……ええっ?!木山春生が!?!どこに!」

仲間から知らせを受けた鉄装は、踵を返して走り出す。

その途中、一度立ち止まった。

「ああ、カオリさん!まだ安静にしてなきゃ——動いちやダメですよ!」

言うが早いか、慌ただしくまた駆け出した鉄装には目もくれず、ふらふらと一人の少女が歩く。

輝くような日差しが戻って来た空と、巨大なクレーターを眼前に、少女の頬に涙が一筋伝う。

それは、もう間もなく止んでしまうであろう雨と一緒に、少女の頬を濡らし、服に染みを作っていた。

少女が片手を伸ばす。

掌に、雨粒が2、3滴弾ける。ほんの僅か、光が煌めいた。

「……鉄雄君」

カオリは、濡れた手を愛おしそうに胸元へ寄せ、強く握り締めた。

学園都市は、夏だった。それは、いつも通りのようなうだる暑さに、ほんの少し、瑞々しさを垂らしたものだだった。

——第七学区、柵川中学校

2 度目の組閣失敗 —— 政治体制、危機的に深刻化

四日夜の記者会見に於いて、末武民自党新総裁は、衆参合わせた国会の第二勢力である講民党との同日未明までもつれた党首会談が決裂し、組閣に失敗したことを正式に認めた。これにより、7月に前内閣が電撃的総辞職を行って以降の政治的空白は、またしても解消の機会を逸した。

事の始まりは7月22日。学園都市の駐留部隊の一部が、指導者に率いられて武装決起するという前代未聞の事態に、先の能間内閣は動揺した。折しも、税制改革に対する不満や、学園都市において非武装民間人へ攻撃を行った疑惑により、支持率を大きく低下させていたところ、この事件は決定的な一打となった。当初、与党内では、大塚防衛相の辞任で収めようとした動きもあったが、能間前首相はその日の内に総辞職を決定。9月に迎える次期衆院選に向けて、何とかダメージを最小限に留めたいという意図が働いた。

ところが、翌23日には、学園都市に於いて2つの事件が発生する。第十学区に於ける原子力実験特区の非常事態と、統括理事会の指揮化で行われた、都市内武装革新派勢力の一斉摘発だ。

前者は、原子力事故という指摘も各所から指摘される中、内閣辞職直後という空白期に起きたことが影響し、未だに公的な説明はほとんど進んでいない。学園都市統括理事会は、人的な被害は0であると強調する一方で、『先端科学技術の漏洩を防ぐ』ことを名目に、一方的に現場周辺10km区域を立入禁止と決定した。しかし、その法的根拠や、放射線災害の全貌については明らかにされず、曖昧なままだ。また、この件については、20世紀から秘密裡に政府が進めてきた能力開発実験との関連がまことしやかに囁かれており、与党民自党だけで

なく、野党内の政治有力者にも疑いの目が向けられているが、未だにはつきりとした答えを表明した人物は居ない。

後者は、統括理事会が武装蜂起を受けて臨時的に收容した軍の兵力を即座に運用したことが大きく問題視されている。これについて、理事会広報部は、24日の発表において、次のように述べている。『過激派が行った学生街等における暴動は、これまでの活動を大きく超える規模であり、既存の機動隊や、ましてや教員主体のアンチスキルでは対処できないものだった。未来前途ある学生の生命を守るため、こうした非道に対して一切許容しないという断固たる態度を表明する措置である。』学生街への物的被害に留まらず、多数の学生が負傷したこの事件をきっかけに、労働運動に対する国民世論は急速に批判へと傾いており、野党講民党の支持基盤となる各種労組の運動も結束が揺らいでいる。こうした中、8月当初の世論調査においては、新党電撃や茸の会等の急進的ミニ政党への支持率が上昇しており、既存政党への不信感の高まりが見て取れる。

次ページ《憶測を呼ぶ根津前幹事長の急死。内輪もめで自壊する野党講民党》

〈前へ 1 2 次へ〉

「政治のニュース読むなんて、佐天さんらしくないですね」

鈴を鳴らすような声が聞こえ、佐天涙子は顔を上げる。

「それ、間接的にあたしのことデイスってない？」

「そんなことないですよー、学園都市の学徒たる者、我が国の時流にアンテナを向けるのは当然……やっぱり佐天さんらしくないか」

花飾りを揺らしながら、初春飾利が苦笑いを浮かべる。

余計なお世話です、と不満そうに言いながら、涙子は体を椅子の背もたれに預けた。

「幻想御手の被害者のための特別補習に、眠らされてた訳でもないのに参加してる初春の方が、よっぽと勉強熱心だと思うけどな」

涙子は両手を組んで上へ伸ばし、体をほぐしながら言った。

教室は冷房が強烈に効いていて、湿り気と汗の匂いが混じった何と

も言えない空気で満たされている。この部屋にいるのは、学年を問わず、ほとんどがレベルアップの被害を受けて長期間昏睡していた者たちだ。机に向かい続ける緊張感から、束の間の解放を謳歌する生徒たちの騒めきがあちらこちらから聞こえる。午前中の60分2コマ分の補修が終わり、中休みに入るところだ。涙子の場合、夏休みにちようど入る頃に昏睡状態に陥ったため、授業の補修を受ける必要は無かったが、膨大な量の長期休業課題を早くこなす必要があったため、缶詰になる覚悟で参加している。

「あんなことがあったのに、まるでずっと昔のことみたいです」

涙子の座席のすぐ傍に立ち、初春が言った。

「佐天さん……学園都市から出て行くって、本当ですか？」

涙子は、両手を組み、その上に顎を乗せて、目を伏し目がちにした。「出て行くんだとしたら、こんなクソ真面目に補修受ける訳ないじゃん」

「人の口に戸は立てられないものですよ」

初春が、心配そうに涙子を見つめる。

「ここ最近の立て続けの事件は異常だって、私だってそう思います。実家から帰ってくるように言われる学生は少なくないそうです。無理もないです」

でも、と初春は佐天の机に両手をそっと置いた。

「折角、佐天さんが無事に戻って来たのに……お別れにはなりたくないんです」

涙子は暫く黙った後、素早く顔いっぱい笑顔浮かべて初春を見た。

「嬉しいこと言ってくれるじゃん！初春う」

声はどこか震えていた。

「笑い話じゃなくて！私、本気で悩んで——」

初春の言葉に、涙子はすぐに真顔になった。

「……親が心配して、ここにこよく連絡寄こしてるのは、ホント」

涙子はぼつぼつと語り始めた。

「元々、ウチの親、あたしがここに来るのは反対でさ……それに、私自

身、アケミたちにもずいぶん迷惑かけたし、今回のことで、自分がど
んだけバカなんだって思い知ったし。その癖、結局元の無能力者^{レベル}に
戻った自分のことを思うと、あんな目にあっただけなのに、どこか残念
がる自分がいて、それが嫌で——」

その時、涙子の片手が引つ張られる。初春が、佐天の片手を、自ら
の両手で包み込んでいた。

「私は、佐天さんに自分を責めてほしいだなんてこれっぽちも思って
ません」

初春の小さな手に包まれ、佐天は予想外の温かみを感じた。

初春の顔を見ると、頬にほんのりと赤みが差しているのが分かる。

「ただ、私たちは友達だと、私はそう思って……だから、佐天さんを助
けたんです。何も、佐天さんが責任を感じることもなんてないんです
！」

「初春……」

涙子は、心なしか目が潤んできている初春の顔をまじまじと見つめ
た。

「カオリ先輩だって」

初春は、窓の方を見やって言う。

「きつとそう思ってます」

涙子は、初春と同じように、窓際の席へ座る人物へと顔を向ける。

少し跳ねた黒髪、小柄な肩。カオリがそこに座っている。休み時間
とあっても、近くによって声をかける者はいない。そのことをどう
思っているのか分からないが、カオリは熱心にテキストを開いて読み
込んでいる。

今回の騒乱の直接の原因となった「帝国」と繋がりがあったという
ことで、事件解決後当初、柵川中学校におけるカオリへの風当たりは
強かった。もちろん、それはカオリに落ち度がある訳でもなく、カオ
リ自身、原子力実験学区での事件に巻き込まれ、病院へ入院する程大
変な思いをしたと聞いた。カオリが周囲から責められないよう、矢面
に立ったのが初春だった。

涙子は、カオリの小さな背中を見つめながら、考える。

レベルアップの事件による昏睡から自分が目覚めた後、初春が自分に教えてくれた。カオリ先輩が、万人を超えるレベルアップの罹患者を救う突破口を切り開いてくれたと。妙な話だが、昏睡の最中に自分は夢を見ていて、そこにはたくさんの人物が現れた気がする。自分の知らない沢山の学生の思念。「アキラ」という謎の概念。そして、カオリ先輩も。能力開発の結果に恵まれず、劣等感を深めていく自分の元へカオリ先輩が現れ、優しく何か語り掛けてくれた気がする。

カオリは事件の加害者側ではなく、寧ろ解決のために身を挺したのだと、初春は風紀委員という立場をフル活用して懸命に訴えた。アンチスキルに所属する先生方も同様の証言を行い、力を貸してくれた。その結果、少なくとも表立ってカオリを非難する生徒は居ない。けれども皆、どこか腫物に触るかのように、カオリのことを避けているように感じられた。

「私、もつとちゃんと色々先輩に話したくて。お礼もしつかり言わなきゃいけないのに」

涙子が口を開いた。カオリの跳ねた毛が、時折びよこりと揺れるのが見える。

「先輩のことを疑う気持ちなんてこれっぽちもないんだよ？そうじゃなくて……その、なんて声を掛けたらいいか分かんなくて。あの、彼氏さんのことを考えたら……」

窓の外には、抜けるような晴天が広がっていて、車が行き交う喧騒が臙げに聞こえてくる。

「そう、ですね」

初春も静かに同調した。

「帝国」を率いていたリーダーの少年。初春によると、彼の身には、レベルアップの影響で「大変なこと」が起こったらしい。初春もその場に直接居合わせた訳ではなく、遠目に見ただけだそう。曰く、「怪物になってしまった」と。それ以上の情報は、ジャッジメントには一切下りて来ず、現場に駆け付けたアンチスキルのメンバーにも厳しい緘口令が敷かれているという。そして奇妙なことに、当日、テ

レビで上空から現場を撮影していた映像が中継されていた筈なのだが、大手メディアの事後報道では全く引用されておらず、SNS上でも片っ端から削除されているという。ここまで大掛かりな情報統制がされているということは、国家ぐるみの陰謀を疑う論も吹き上がって宣なるかなといったところだ。超能力者^{レベル5}である御坂美琴が、現場へと駆けつけ事件解決に一役買ったらしいが、最近彼女は非常に忙しいらしく、初春も、同じ常盤台中学校所属で繋がりのある白井黒子も、詳しい話を聞けていないのだそう。そうして謎が謎を呼び、レベルアップの事件が収束した今でも、被害者がかつて口走っていた「アキラ」や「鉄雄」といった名前は独り歩きし、若者たちの間で一種のネットミームと化してしまっていた。スピリチュアルなもの、スラング、ドラッグカルチャーの象徴^{シンボル}として。

とにかく、カオリにとつての大切な人物は——それが、学園都市の多数の住人を巻き込んだ騒乱の首謀者だとしても、いまだ行方知れずであり、もしかすると、その命は失われてしまっているのかもしれない、と初春は推測していた。

自分に救いの手を差し伸べてくれたのは、初春とカオリ先輩だ。そう思うと、涙子は、一刻も早くありがとうと伝えたかった。けれど、事件の結果を考えると、二の足を踏んでしまうのだった。

もやもやした気持ちを抱えたまま、涙子は窓の外へ何となく視線を写した。

トロンボーンを何本も強烈に吹き鳴らすような排気音が聞こえる。

「……なんか、うるさくないですか？」

初春が怪訝そうに言った。

教室が騒めいていた。明らかに、このバイクの音は異常だ。すぐ近くを走り回っている。

オイ、アレを見る。と、一人の男子生徒が声を上げたのを皮切りに、室内の他の生徒たちも窓側へと集まる。窓が次々に開けられ、途端に教室内に爆音が押し入って来た。

涙子と初春もそれに混ざって、背伸びしながら外を見た。

「え——何コレ？」

涙子はぼかんと口を開けた。

涙子たちの居る教室は4階にあり、校庭が広く見渡せる。

バイクが何台も、派手に音を吹かしながら、クレイ補装にタイヤ痕を付けていく。暴走族バイカーズを思わせる、排気筒をパイプオルガンのように何本も上へ向けているものも見えた。

バイクに乗った若者たちは、用具倉庫から強奪したのだろうか、ラインパウダーの袋をバイクの後部にくくりつけたり、或いは2人乗りの後部の物が抱えて巻いたりして、連携しながら何やら描いている。涙子が目を丸くしていると、それらは驚くほどの早さで、決してきれいとは言えない、のたくったような文字を形作っていく。

「山形ア!!どうだア?」

特に目立つ一人——赤いツナギを身に着け、これまた赤く、前後に長い形をしたバイクを駆る少年が、一旦停止して、上を見上げて叫ぶ。

「いいぜエ!!ばっちりだア!!」

今度は、教室の上、屋上の方から叫び返すのが聞こえた。

教室内がざわつく中、涙子は校庭に白く描かれた文字を読んだ。

み　ん　な
生　き　て　る

赤いツナギの少年が、涙子たちの方の教室を見ている。親指を空へと突き上げて、笑みを浮かべている。

涙子は、その姿にどこか見覚えがある気がした。

どこで会ったんだっけ……?ていうか、何のサインだろう、アレ? 「なるほど、なるほど」

涙子が記憶を呼び起こそうとする作業は、近くの初春が、普段から想像つかないほど低く、ドスの利いた声で唸ったことで中断させられた。

「随分とお熱いメッセージであることは認めますが……ジャツジメントとして、看過できませんね!!」

「それってどういう——」

涙子の疑問を聞くまでもなく、初春は踵を返して教室の反対側へ駆

け出し、廊下への引き戸をガラリと開ける。

するとその時、急に反響する爆音が迫ってくる。

「どいたどいた！すまねえ、道を開けてくれえ!!」

廊下を黒い塊が走り抜けていく。二人乗りのバイクだ。運転するのは、ジャケツトを身に着けた小柄な少年。後ろには、頭に包帯を巻いた作業着姿の男だ。

二人とも、不敵な笑みを浮かべてバイクで走り抜けていく。廊下に出ている生徒たちが、驚いて身を引いていく。

「あんのバカ野郎共！」

初春が乱暴な言葉を口にする。頭の花飾りが茨の冠に変わったんじゃないかと佐天は思った。それから初春は、バイクを追いかけて廊下を全速力で走っていった。普段なら、初春が「走つちやダメなんです！」と生徒に声をかける立場なのに。

窓の外では、騒ぎを聞きつけた教師たちが怒声を上げながら走っていく。それを察したバイク乗り達が、一目散に正門へと向かって走り出した。

空になった炭酸カルシウムの袋が、夏風をその身いっぱい吸い込んで、青空高く、風船のように飛んでいく。

あつという間に起こった出来事に、室内の興奮が冷めやらぬ中、涙子の隣で、誰かがくすつと笑った。

「カオリ先輩」

涙子は名を呼んだ。

カオリが、口元に手を当てて、くすくすと笑っている。上がった頬に林檎のような赤みが浮かび、えくぼがちよこんと現れている。カオリが笑う度、長いまつ毛が揺れている。

「ありがとう」

「え？」

カオリがほんの小さな声で何事かを呟いたが、周りの声にかき消され、涙子は聞き取れなかった。

「あのね、涙子ちゃん」

ひとしきり笑った後、カオリは体の向きを変え、涙子へと向き直つ

た。

小さな顔に、大きな黒い瞳が2つ、涙子をじつと捉えている。

涙子は微かに緊張を覚えた。

なんで声をかけてくれなかったの。そう言われると思い、怖かった。

「良かったよ。涙子ちゃんが戻ってきてくれて」

カオリの口から、涙子にとって予想外の言葉が出た。

その言葉の意味を解釈するのに、涙子は時間がかかり、相手を見つめたまま、口をぱくぱくさせる。

カオリは、やはり笑顔を浮かべている。

「あの」

やつのことで、涙子は声を出すことができた。

「先輩、私——」

「私ね」

窓の外の校庭であたふたする教師陣に目をやり、カオリが言う。

「もっと勉強しようって思った。涙子ちゃんや初春ちゃんに出会えて、いろんなことがあって——能力って凄くなって、もう何年も学園都市に暮らしてるくせに、今更そう思ったんだ。私は、ちっとも大したことないレベルだけど、でも、そうじゃなくて。この力って何なのか、どうして私たちの中に、そういうエネルギーが隠れてるのか。それって凄い謎じゃない？だから、いっぱい勉強して、そういう不思議の正体を、掴んでみたい。今、何だかそんな風に思ってるんだ」

一気に語ったカオリは、はつとしたような顔をして、申し訳なさそうに涙子を見た。

「ごめん、なんか私ばかり、変に喋っちゃって——」

涙子は一、二歩踏み出し、カオリのすぐ背後へと周り、そして、小さなその肩をバンツと叩いた。

勢いでカオリが少しよろける。

「ほんとに！先輩ってば、もう！」

涙子は、カオリよりも背が高い。腕をカオリの首に回し、後ろからそのまま羽交い絞めにする。

びつくりしたカオリが、何とか首を回してつぶらな瞳を涙子に向ける。

「もう——凄い人ですよ、先輩は！」

そうかな、とカオリが戸惑ったような声を上げる。

構わず、涙子は片腕を首に、もう片方の腕をカオリの腰に回し、後ろからぎゅつと強く抱きしめた。

倉庫街で、傷を負ったカオリを助けた時と相変わらず、華奢な、細い体だった。それでも、涙子はあの時には分からなかった、確かな温もりを感じていた。

ありがとう。

涙子は、はつきりと、カオリの耳元でそう言った。

カオリ先輩の表情は、はつきり見えない。

けど、笑ってるといいな。だって、とても素敵だから。

私、まだ帰りたくないな。

初春や、カオリ先輩と。みんなと一緒に居たい。私だって、負けてらんない。勉強しなきゃ。

自分の腕に添えられるカオリの手の温かさを感じながら、涙子は胸の中で、静かにそう決意した。

そして、涙子の腕の中で、カオリは涙子が期待した通り、或いはそれ以上に、満ち足りた笑顔を浮かべていた。

金田のチームは、爆音を轟かせながら第七学区を駆け抜け、根城の第一〇学区へと至ろうとしていた。

交差点を曲がろうと機体を傾けた時、金田は不意にバランスを崩し、そのまま路面を滑って横倒しになる。

らしくねえなあ！とメンバーからからかう声をかけられた。彼らは構わず金田をあっという間に追い越していく。

咄嗟に頭を抱え、体を丸めた金田は、ホットプレートのように熱せられたアスファルトから一刻も早く離れようと、すぐに身を起す。

幸い、どこも大した怪我はしていないようだ。

——全く、言う通りだ。

金田は自分自身に毒づいた。

ふと、小柄で弱気な顔をした仲間の顔を思い出す。しよっちゅう、こんな風に倒れては、押しがけして走り出していた。

「へっ、鉄雄よオ。今のはバカにしてもいいぜ」

遠くへ去った、しかしどこかで生きていると信じている友の顔を思い出し、金田は呟いた。それから、自らのトレードマークである、真っ赤なボディを起こそうと、横倒しになったそれへ駆け寄る。

ふと、車止めのポールの向こう、歩道側で、自分を驚いた顔で見つめている人物に気が付いた。

「よオ、久しぶりじゃねえか」

あちらこちらへツンと黒髪を立てた少年に、金田は会釈した。

あゝ、と黒髪の少年は困惑した声を出す。

「すみませんが……7月の終わり、より前に、もしやお会いしたことがあるでしょうか……？」

「はア?と金田は首を傾げて聞き返した。

「何だよからかってんのか?俺たち、なんだかんだ、いいチームプレーだったと思っただけだ」

それでも、黒髪の少年が困ったような表情を浮かべたままできると、その背後から、ずっと背の低い少女がひよっこりと顔を出す。

「どうま?知り合い?この人、随分派手に喇叭らっぱを吹き鳴らしてるみたいだけど?」

腰まで垂らした銀髪に、エメラルドの瞳。日本人離れた外見に加え、なぜか安全ピンをぶらぶらと襟元に取り付けた白い宗教的な服装に、金田は目を惹かれる。

「へえ、嬢ちゃん。コイツの知り合い?」

「まあね。修行中の身の私にぴったりの、貧相で最低限の食事を提供してもらってる、というのかな?」

「……修行中と仰るなら、もつと禁欲的な発言をなされては?」

少女の言葉に、黒髪の少年はがっくりとうなだれる。

その様子が面白く、金田はからかってやろうと思いつつ。

「修行中……そうか！クソ暑いのにそのフード……一日に何回か、西に向かってお祈りするアレ系？」

「事実誤認だし適当過ぎるよね？ 私たちにとつても回教の人にとつても侮辱。とうま、あなたは経済的に貧しいけど、この喇叭吹きの人には知性が貧しいんだよ」

「冗談だって。十字教サンだろ？ぶら下げてるの見りや分かるぜ」

立て続けに金銭の余裕が無いことを揶揄されて力をなくしている少年をよそに、金田はけらけらと笑った。

「でも、そんな清きシスター様を引き連れるなんて、お前も趣味が飛んでんなあ！あの電気ウナギちゃんと付き合ってたんじゃないよ？」

「は？なんのことでしようか!？」

金田のからかいに、少年は明らかに声の調子を変えた。凶星だったのか、隣の少女の反応を気にかけているようだ。シスター風の少女は、ジト目で上条を見上げている。

その時、唐突に重さを伴ったドラムのビートが聞こえて来た。金田も、少年と少女も、音が聞こえてくる方へ顔を向ける。

少し離れた歩道沿いの広場に、人だかりができています。こじんまりとした野外ステージで、胡坐を掻いて座る一団が何やら演奏を始めた所だった。一団はモノクロのストライプが強烈な衣装に身を包み、アンプリファイドされたエレクトリックドラムやキーボードを担当する者がいる一方、巨大な鉄琴やゴング、竹琴といった粗削りな迫力を奏でる者もいる。耳障りのよいポップとは全く異なる、独創的な音階が細かい連符を刻みながら幾重にも重なって高揚し、時折切り裂くように割り入る金属音が緊張感を高める。

「レベルアップの音がどんなんだか知らないけどさ、ああやって再現しようとする音楽が流行ってるらしいじゃん？実際に眠らされた連中の体験にインスパイアされてんだとよ」

金田が感慨深げに言った。

「アレのせいで、俺ら苦勞したつてンのかな、けど、嫌いじゃないぜこの感じ」

「それって」

少年が不安げに金田を見る。

「聞いたら、俺たちも意識なくしちゃうんじや——」

「バカ、再現だつつつたろ。モノホン通りにできる訳がねエ」

金田は呆れたように腕組みをする。

「でもなんか、こう、脳ミソに響いてくる感じがするよな」

一団の演奏に熱が入り、周りの観客も波打つように身体を揺らし始めた。

その内、メンバーは長大な撥を振り上げながら、口を開け、コーラスを響かせていく。

アキラ。木山。鉄雄。

レベルアッパーの使用者が目の当たりにした幻覚^{ビジョン}。そこに現れた人物の名を、繰り返し口ずさむ。

観客も同調し、祭礼のような唱和へと膨れ上がっていく。

鉄雄。

金田は友の名を呼ぶ。

やつぱりお前は、生きてるよな。こんなにとくさんの人の中で。

一瞬だつたらうか、それとも長く聞き入っていたのだろうか。金田を現実へと引き戻すようにサイレンが聞こえ始めた。こちらへ近づいてくるのが分かる。

やべっ、と声を洩らし、金田は自身のバイクの運転席へ飛び込んだ。そして、少年が連れてくる白衣の少女を見る。

「どうだいシスター？ラブソングを歌いに、教会まで乗ってくかい？」
「ゴスペルは専門外だし、喇叭を吹き鳴らすのは私じゃなく天使の役目なんだよ？あなたは明らかに違うけどね！」

むすつと頬を膨らませ、顔を背けて少女が言った。

どうやら、金田の印象はとても良くないようだ。

オーケー、と金田は気にも留めず言う。

それから、黒髪の少年へ顔を向ける。

「神の御加護を、だ。じゃあまたな、上条！」

そして、金田はバイクを後方へバックさせたかと思うと、ホイールのコイルから金色のスパークを迸らせ、甲高く唸る音を上げて急発進した。

記憶を失くした困り顔の少年と、膨れっ面のシスターの少女の横を、やがて何台ものアンチスキルの車両が、サイレンをかき鳴らして通り過ぎて行った。

やがていつの間にか、街は夜を迎える。

人の欲望に応えるネオン、道を指し示す街灯、暗闇を引き裂くバイクのライト、それを追いかけるランプ。様々な光が急速に街中を走り抜け、その軌跡は蛇のように身体をのたくらせ、翻る。

バイクを駆る者のゴーグルに、幾筋もの光が走り、それらはすぐに背後へと遠ざかり、過去となる。逆に、目前に広がる世界が、幾つもの未来として待ち受けている。

その耳には、蓄積されたエネルギーを解放しようとする声が聞こえる。開けられた大口から、祭りの掛け声のように沸き上がる。

ジエゴグは幾層ものビートを刻み、レオンは反響し、ウガールは人々の意識を呼び覚ます。

今夜もどこかで、止め処ない活力が唸りを上げ、街中を縦横無尽に駆け抜けていく。

源となる力は、学園都市の学生、一八〇万の脳皮質から発せられる電気信号に秘められている。

人は想像を働かせる。細胞が分裂するように生まれ続ける想像が、若者に力をもたららし、互いの意識を交えては、この街を、世界を創り変えていく。

その勢いは止まらない。止まることはない。

八月。 b

「妹が……帷子^{いこ}が！嘘だ！俺は、信じないぞ!!」

窓のない汚らしい一室で、額に包帯を巻いた竜作は絶望を顔に浮かべながら言った。

近くの床には、死亡診断書の写しがビリビリに引きちぎられ、散乱している。

「残念だが」

剃刀のような雰囲気醸し出す黒服の男、杉谷が仁王立ちして言った。

杉谷の目の前では、椅子に座った竜作が、目を閉じ、頭を抱えて俯いている。

「薬物中毒の治療と、幻想御手による錯乱と……無理が祟ったのだから」

「俺の……たった一人の妹なんだぞ!!」

竜作が座っていたパイプ椅子を壁に投げつけ、慟哭した。

「レベルアップなんて、あんなモノさえなければ……ああ——」

杉谷は、膝について泣き伏している竜作を見下ろした。

「仇を取りたいだろう」

竜作は、真っ赤に泣き腫らした目で杉谷を見上げた。

「考えてもみる。レベルアップを世間に流したのは誰だ？アーミーだ。本部ビルに乗り込んだお前が転落し、数日昏睡した原因は？アーミーだ。ここ最近の混乱に乗じて、お前たちの同胞を学園都市から駆逐したのは誰だ？尻尾を振る相手を挿げ替えただけの、アーミーの兵隊共だ。お前の妹が命を落とす原因になったのは——」

「憎い！」

竜作が拳を握りしめて叫んだ。

「殺してやる！俺の妹を、殺した奴を、俺が、この手で……」

杉谷は膝をつき、竜作と視線の高さを揃えた。

「敷島大佐が、明日、一七学区の拘置所から移送される。行先は本国東京だ」

竜作が、ハツとした顔で杉谷の顔を見た。

「奴は政治犯だ。学園都市の壁の外へ出てしまえば、我々の手の及ばない所にいってしまおう。ブクブク太った政治家たちの駆け引きに使い捨てられるだけだ。無論、そこにお前が付け入る余地は無い。だが言い換えれば、奴がこれ以上喋る前に、消えてほしいと願う人間は少なくないんだ。お前に、その一手を下すたった一度のチャンスを与えることができる」

竜作は、漆黒のサングラスの向こうにある筈の、杉谷の目を直視した。

「さあ、どうする？」

答えは決まり切っていた。

その翌日。

杉谷から渡された武器の引き金に、竜作は指を架ける。

7月に、第七学区の病院前で、大佐を狙った時と同じだ。

1 kmは離れているであろう、訓練を受けた軍人でも容易くはない距離。無人のビルの屋上から、竜作は報道陣が囲む、拘置所の出口の僅かな空間を狙う。前回と同じく、プロトタイプだというオーバースペースの狙撃銃を携えた竜作は、奇妙な高揚感に包まれ、失敗という2文字が全く脳裏に浮かばない。

両手を布で包まれた、屈強な体格の敷島大佐が、警護の者に固められ、フラッシュを浴びながら現れた。まっすぐに前を見つめ、無表情に、確かな足取りで護送車へと向かう。

今度こそ竜作は、狙いを違わなかった。

秒速290 m、音速に肉薄する勢いで音も無く打ち出されたスチール製の弾丸は、周囲にいた警護要員数名を吹き飛ばし、そして大佐の巨体を肩口から薙いだ。血潮と共に、大佐が途端に地面へ頽れる。

「やった……やったぞ！」

竜作は照準から目を離し、歓喜の声を洩らす。

「やったー！やったー！帷子、俺は——」

歓喜の余り、竜作は、すぐ背後に忍び寄った殺気に、全く気付くこ

とは無かった。

「……ああ、予定通りだ。はぐれネズミは駆除した」

後頭部から銃撃され、程なく事切れた竜作の死体を前に、杉谷は床に手袋を投げ捨てながら、携帯電話の相手へ話す。

「後はそちらに任せた。射撃のデータは、砂皿に。大佐は、『案内人』へ引き継いでくれ」

そう言つて杉谷は電話を切ると、床に捨てた手袋に携行缶からオイルを垂らし、空になった缶もまた床に放る。そして、火の点いたマッチを落とすと、竜作の死体から立ち上がる炎に目をくれることなく、屋上から姿を消した。

——第一〇学区、ストレンジ

……今もなお、現場は大混乱です。繰り返してお伝えします。先ほどアンチスキル広報部が発表したところによりますと、敷島大佐を狙撃したと見られる射殺された容疑者の身元が判明したとのこと。容疑者は、釧路竜作、28歳、男性で、先月7月に第七学区において暴動を引き起こした革新派武装勢力……

「一体、何がどうなっているんだ」

廃棄された立体駐車場の事務室で、ラジオから流れる音声を聞きながら、チヨコが唸るように言った。

「竜作の奴、ラボ以来音沙汰が無いと思ったら……何を一人で勝手に突っ走りやがって……」

「私たち、連絡をとる術がなかった」

狭く埃臭い室内で、ボロボロになった壁紙に背中を預けたケイが、深刻そうな面持ちで言った。

「私のせいだ。私が、ままと帝国の罠にかからなければ……!」

「悔やむなら、足掻き切った後にすることさね、ケイ!」

ハンドガンのマガジンの装填を確かめたチヨコが、厳しい声で言っ

た。

「仲間の拠点一網打尽。根津様も死に、外部に助けを求める手段は無し……」

チヨコは事務所を後にして、慎重に歩を進める。

「いよいよ私らは袋のネズミって訳だ。抜け穴を探さなきゃね」

「運び屋を？」

「ああ」

背後を警戒するケイに、チヨコが答えた。

「今の私らにどれだけの値打ちがあるか……だが、ここで野垂れる訳には——」

その時、2人に、動くな！と野太い声がかかる。

「追手！」

言うが早いか、チヨコとケイは咄嗟に、近くの放棄された車の陰へ滑り込む。

機動隊か、教師たちアンチスキルの安全確保という名目で、統括理事会の警察組織に体良く吸収されたアーミーの兵隊か。ケイは一瞬だけ、コンクリート製の柱の傍に、いくつもの懐中電灯の光源が煌めくのを見た。

2人が身を隠す車両に、幾つもの銃弾が襲い掛かる。窓ガラスが割れ、フレームが引き裂かれていく。

チヨコが、相手のちようど頭上に位置していた、明かりの点かない電灯を打ち抜く。バラバラと碎けた照明が降りかかり、掃射の嵐が一瞬止む。その隙に、チヨコとケイは全力で駆け出す。

「階段はダメだ！」

チヨコが叫び、2人は舗装の荒れたスロープを下へと走っていく。地上階層まで、まずは何とか辿り着かなければ。

何度目かのスロープを下り、角を曲がった所で、息が切れ始めたケイの眼前に、別の一団が銃を手に待ち構えていた。

止まれ!!

誰かがそう叫ぶのが聞こえた。

挟み撃ちだ。

心臓が早鐘を打ったその時、ケイの体はぐいっと横へ引つ張られた。

「おばさんもーこっちへー!」

短く、急ぎ立てる女の声があった。

チヨコが受け身を取りながら、脇の駐車スペースへと飛び込む。

その代わりに、小指程の大きさの金属球が床を転がり、待ち受けていた部隊の方へと散らばっていく。

「伏せて!!」

空気を吸い込むような音がした次の瞬間、凄まじい爆風が壁の向こうで巻き起こり、金属の碎片が、つい先ほどまでケイとチヨコが立っていた辺りまで、強烈な勢いで衝突し、めり込んでいく。直撃を受ければ、人間などひとたまりもない。

「……い」

ケイは自分たちを助けてくれた人物を見上げる。

切れ長の目に、日本人形のように真っ黒な、腰まで伸びる髪。痩せた顔。

「帷子ちゃん!?」

「久しぶり、ケイちゃん、おばさん」

ケイにとつての、この街での唯一といえる親友。長らく行方不明だった、竜作の妹、釧路帷子がそこに立っていた。微かな呻き声を押し潰すように、後から追いかけて来る部隊の足音が迫り来るのを聞いて、帷子は腰に下げたポーチに手を突っ込み、スチール製のパチンコ玉をいくつも手に取った。

「アイツら、殺すから」

そう言うと、帷子はパチンコ玉を、今度は追手の方へと転がす。

大能力者^{レベル4}としての彼女が「量子変速^{シンクロトロン}」を發揮し、二度目の炸裂が起こった。

目を丸くしたチヨコが、姿勢を立て直して帷子を見上げる。

「お前、今までどこに——」

「話は後!」

憎しみの込もった目で、追手が沈黙したのを覗き込んだ帷子が、チ

ヨコの言葉を遮った。

「助けが来る」

帷子がそう言うのとほぼ同時に、ギヤアンとスキール音を響かせて、一台のワゴンがケイたちの前に急停車する。

「乗れっ!!」

タンクトップ姿で、逞しい腕を露にした金髪の男が、下げられた窓越しに叫んだ。

「浜面君!?!」

続けざまに驚くべきことがあり、ケイは混乱した思考のまま、チヨコや帷子に続いて車に乗り込んだ。

全員が乗り込むなり、浜面仕上は車を急発進させる。ケイは窓の外に、血塗れになった、迷彩服姿の人影を幾つか垣間見た。何か軟らかい物の上を、明らかに車が乗り上げたが、考えないことにした。

「駒場さんの指示だ。君らを助けろって」

ハンドルを操りながら、浜面が運転席から、後部に座るケイとチヨコに言う。

「それはっ、ダメだよ、浜面君」

ケイは申し訳ない気持ちで一杯だった。

ただでさえ、ケイには、帝国との戦いの中、浜面が自分を助けようとした時に負傷したことへの負い目があった。

「私たち、今は追われている身で」

「それは、駒場さんも承知だ」

「いや、浜面。ケイの言う通りだ」

チヨコも厳しい面持ちで言う。

「助けてもらったことは感謝するさ。けど、その辺で降ろしてくれ。学園都市から、私らは明確に敵だと見定められちゃったんだ。あたしらを囲えば、駒場のチーム全員に危険が及ぶ」

「それでも、駒場さんはメリットがあると判断したんだよ、チヨコさん」

駒場が答えたとき、車は折れかけたバーを吹っ飛ばし、陽の差し込む路地へと出た所だった。

「あなたが『帽子屋』として、長いことこのストレンジで築き上げて来た人脈は、今も生きてる。俺達には、あなたの存在は有益なんだ。これから起こる戦いのためにも」

「戦い？」

「ああ、ケイちゃん。もちろん君も必要だ。この子に絶対救えって頼まれたからな」

浜面が、助手席に座る帷子を親指で指し示す。

「一昨日、屋台尖塔の地下街でふらふらになってるところを、たまたま俺たちの仲間が見つけたんだ。聞いてみたら、ケイちゃんとの組織の身内だっていうから……」

「私、高校に入るとき、暗部の人間に誘われたの。超能力者^{もつと上}を目指してみないかって。奴ら、知ってたんだ、竜作兄さんが、ゲリラで動いてるってこと……言うこと聞かなきや、ゲリラなんて蟻を踏み潰すぐらいに消せるからって、脅されて……」

帷子が一気に語っていく。その内容はどれも初めて聞くもので、ケイもチョコも聞き入るしかなかった。

「足がつくと不味いから、そいつらに偽名で書庫^{バンク}に登録してもらった……でも、『かたびら』なんて名前、今思うと、変だったかな」

「確かに、もうちよつとこう、何か捻りがないと……」

浜面が心の声を正直に口に出したが、キツと帷子に鋭く睨みつけられたことで、頭を下げる。

「迷惑かけちゃいけないと思って、ケイちゃんや兄さんとも連絡とらないようにしてた。けど、どんなに訓練しても、4から5の間には壁があった。その内、私、おかしくなってた。ドラッグに手を出して、レベルアップにも。おかしくなってる間に、兄さんは——」

「帷子ちゃん」

ケイが、シート越しに手を伸ばし、帷子の華奢な肩に手を置く。

「いいよ、もういいよ、喋らないで——」

次の瞬間、帷子は肩に乗せられたケイの手を強く掴み、振り返った。

「竜作兄さんを殺した奴らを、私は許さない……!!」

血走った目で、帷子がケイに向かって訴えた。

その顔は、ケイの思い出に現れるものとは大きく変わっていた。ケイは思わず、寒気がした。

帷子は、血走った眼で、ケイを、チヨコを、浜面を、一同をギョロツと見回す。

「私がそつちに力を貸す。私、こう見えても強くなったから。その代わり、そつちも協力して。兄さんの仇を打つ！いいよね？」

有無を言わさぬ帷子の物言いに、他の三人は暫く黙り込むしかなかった。

「……俺はいいと思う」

沈黙を破ったのは、浜面だった。

「どうせ俺らだって、この街の爪弾き者なんだ。ケイちゃん、チヨコさん。だから、互いに助け合うべきだ」

「なら、駒場の言う『戦い』ってのは、何なんだい？」

チヨコが疑問をぶつけると、浜面の表情に影が差した。

「ああ……ここ最近、特にひどくなってる。相手は恐らく、能力者だ」「ひどくなってるって、何が？」

チヨコに続いて疑問を口にしたケイの顔を、浜面は視線だけ動かし、ルームミラーで捉えた。

「……無能力者狩りだ」

「無能力者、狩り……」

ケイが、浜面の言った言葉を反芻する。

その短い言葉は、なぜかとても重い重みをもっているように、ケイには感じられた。

一行の乗った車は、北へと走り去っていく。空には、俄雨をもたらすであろう、かなと云が見えた。

——第七学区、「窓のないビル」

「着いたわ」

若い女の声と共に、付けられていた目隠しが外される。

敷島大佐は、久方ぶりに晴れた視界で、まず周囲の状況を確認する。窓の見当たらない、奥行きのある室内だ。それどころか、目視できる範囲では扉も無い。内壁から天井、床に至るまで黒一色で、ところどころにハロゲンライトのような赤橙色の無機質な照明が取り付けられ、光沢のある床に反射している。空調はよく利いていて、微かに背後から奥へと向かって空気が流れているのが感じ取れる。

空気がやってくる方向、背後を大佐は振り返る。

「あなたは死んだことになってる。来る途中に聞いたかもしれないけどね」

そう告げたのは異様な風体の少女だった。高校生程の年齢だろうか。二つに束ねた髪は幼さを感じさせたが、奇妙なのはその服装だった。真夏に似つかわしくない、冬物の長袖のブレザーをバンカラマントのように袖を通さず肩にかけ、下半身はミニスカートというちぐはぐな格好。挙句の果てに、ブレザーの内側には素肌を大胆に露出させ、胸を薄桃色のサラシで覆っているだけだった。引き締まった腹部に照明を受けて、窪んだ臍が影となって目立ち、妙な存在感を放っている。

その恰好を前に、大佐はほんの僅かに顔を顰めた。

少女が微かに嘆息した。

「……自分で言うのもなんだけど、私を初めて目にして、そこまで反応が薄い男はそうそう居ないわ」

「……はどことだ」

「さあ。あなたを招いた主なら、奥にいるから」

少女は、大佐の短い問いに対して、部屋の奥を指さして答える。

「聞いてみたら？ どうせ碌でもない誘いだらうけど」

少女の案内に従い、大佐は部屋を奥へ向かって歩いていく。以前負った傷のために、その歩き方はどこかぎこちない。やがて大佐の前方、頭よりやや高い位置に、天井から吊り下げられたモニターが降りて来た。

モニターに映されているのは、長い銀髪の人物だ。肌の状態からし

てまだ若い年齢だと、はじめは思えたが、静かにこちらを見据える緑色の瞳は、永い年月を見てきたようにも感じられる。加えて、長髪なこともあいまって、男にも、女にも見える。画面は薄い朱色で染まっ
ていて、液体で満たされているかのようには、その人物の髪も揺らめい
ている。不思議なことに、その顔は上下逆さまに映っていた。

「アーミーの司令官殿。御足労頂き、かたじけない」

アルトとバリトンが混ざったような、どこか機械的な響きのする声
が聞こえた。映像の中の人物の口は、ほとんど動かされていないよう
に見える。

「昔の肩書だ」

大佐は、まっすぐに逆さまの人物を見上げて答えた。

「学園都市の……上層部の者だな」

「統括理事会の定例会において、既に君とは出会っている。音声のみ
ではあったがね」

敷島大佐は、記憶を辿り、ある一つの存在に思い当たる。

「……まさか、理事長か」

統括理事会の長、学園都市の頂点に立つ人物が、僅かに目を細めた。
「東京の政治屋共に、君を引き渡すのは大変惜しい。故に、君を縛る枷
を断ち切った。感謝してほしいものだ」

映像の中で、微かに泡が立った。

「己の言う通り、最早肩書など捨て去れ。私のために働いてもらう。
プラン
計画のために」

「……アキラか」

大佐は、相手を正面から見据えて言った。

「非常に興味深い」

スピーカーから聞こえる声がそう言った。

「そうだ、私からも礼を言いたい。あの日、そちらが『ひこぼし』に搭
載されたSOL^{ソル}を起動させてくれたお陰で、面白い物を見ることがで
きたことに。本来は、君の所の実験体を鎮圧しようとしたのだろう
が、結果は期待を上回ったのだ。『アキラ』のちよつとした目覚めを観
測することができたのだから。『かぐや姫』殿は気難しく、説得には骨

が折れたが」

「……やはり、ひこぼしのコントロールをわざと開けたな。後から顧みれば、軍籍を剥奪された元幹部如きが、SOLを一発でも撃てたのがおかしかったのだ」

相手の言葉を聞き、大佐は眉を顰めた。

「あの時、起こったことは、一歩間違えば破滅だった。この街がまるごと廃墟になってもおかしくなかったのだ。アレは、触れてはならん力だ。何を目論んでいようが、制御できる訳がない。例え、科学の街の最高権力者であろうとも」

「そう言われると、やってみたいくなるものさ。私は探究心が強い人間でね」

カメラがズームし、緑色の瞳がやや大きく映る。大佐を覗き込んでいるようだ。

「お前は、私の何を知っているというのだ？」

「20世紀の始まりに、K2ケイツーに挑んだと。弾かれて帰って来たともな」
大佐は、小さく鼻を鳴らした。

「それは名が同じというだけのオカルティストか……アキラは、カラコルムとは比べるべくもない。第一、最早奴は、この世から遠く去ったのだ。私に何ができる？」

「為すべきことは、山ほどある」

合成音声のような相手の声が答える。

「プランは、幾つも備えておくに越したことはない」

「断れば？」

大佐が、僅かに反抗心を込めて聞く。

相手は、言葉を発する代わりに、壁一面に突然、画像を表示するこ
とで答えた。

部屋が、画面光によって急に明るくなる。

大佐は、息を呑み、目を見開いた。

壁には無数のモニターが埋め込まれていた。そこに表示されているのは、軍服姿の、正面を向いた何人も的人物の顔写真だ。

「君がかつて率いていた兵力は、総て私の統制下に入った」

画面の人物が、無機質に言う。

「安心したまえ。本国の無能共と、私は違う。反逆罪で問うことはない。彼らは、無謀な上官に付き合わされただけの、忠実な士官だ。お陰で、今、この学園都市の治安は劇的に向上している。君が私に対しても忠誠を誓うというのなら、引き続き、彼らの命は保証される」

見知った部下たちの顔が、次々と表示される。
光に照らされた大佐の顔に、汗が流れる。

大佐は、逆さまの人物を、これ以上ない敵意を込めて睨みつけた。
「賢明な判断を期待する。敷島大佐」

学園都市統括理事長、アレイスター・クロウリーが、ほんの微かな笑みを浮かべて言った。

——第一二学区、ミヤコ教団、本部

「舌の根は乾いたかのう？わしの記憶がボケていなければ、お主らはひと月ほど前に、この地で頭の命を刈り取ったと覚えておるが」

「それは影武者だったろう、何を戯けたことを」

飄々と語る教祖、ミヤコを前に、炎を操る異国の魔術師、ステイル
「マグヌスは苛立ちを露にしながら答えた。

教団本部の大拝殿で、ステイルは上段に座るミヤコの小さな体を睨みつけている。

「とにかく、言っているだろう。方針が変わったのだ……ああ、クソ、こいつは話が長過ぎる。神裂、なぜあの時全員一思いに斬り殺さなかった？容易いことだろう」

ステイルの背後に控える、巨大な刀を携えた神裂火織は、苦し気な表情を浮かべたまま、答えなかった。

ステイルは舌打ちすると、嫌々ながらも再びミヤコと向き合う。

「7月23日に顕現したモノ。あれは存在してはならないものだ。科学の力で生み出された人間が、新たな世界を創世するなど！許せる筈がない！^{ロンドン}倫敦はそう判断したのだ！」

「おうおう、何とも苛烈な言葉じゃ。わしやあ、今夜、寝小便に気を付けなければならぬのう」

「ミヤコ。教えていただきたい」

黙っていた神裂が、一歩前に進み出て口を開いた。

「あの存在……アキラは、本当に消えたのか。我々イギリス清教は、疑っているのです。あなたが世の行く先を見定める眼をお持ちなら、教えてほしい」

「本当にボケているのでなければな」

「貴様！ミヤコ様を愚弄する気か！」

ミヤコの傍には、3人の白装束の少女が傅いている。その内、まどまりの無い髪をした、松葉杖をついた少女がステイルに対して激昂した。

ミヤコは手を上げて制す。

「みつともなく大声を出すな、サカキ……そうよのう。わしもとても興味があるよ。アキラにはの」

「十字教といつても、その中身は一枚岩ではない」

神裂が言った。

「もつと過激な行動に打って出ようという動きもある。ローマ正教が、近々強力な魔術師を差し向けると情報が入っているのです。そうすれば、この学園都市で戦争が起きる。あなた方にとつてもただでは済みはしないでしょう」

ミヤコが僅かに顔を上げ、遮光眼鏡の奥の盲いた瞳を、神裂とステイルへ向ける。

「……アキラは流れの中には居らん。遠くへ去ったとも言えるし、或いは……その辺を彷徨っているかもしれないのう」

ミヤコの言葉に、ステイルと神裂はハツとした表情を見せ、互いに顔を見合わせた。

ステイルが口を開く。

「どこだ！どこに——」

「盟約を結ぶ意思はあるかね？」

ミヤコが今までにない強い声色で畳みかけるように言い、ステイル

は言葉を呑み込んだ。

モズとミキに支えられ、ミヤコはゆつくり立ち上がり、壇を降りて神裂とステイルの前に立った。

「アキラは今、微妙なバランスの上に、偏在している……いつぞや、また力を解き放つやもしれん。さすれば、学園都市どころか、地球にも関わる事態にもなるであろう。わしだけでも、お主らイギリス清教だけでも、危機を乗り切るには不十分だ。どうだ？ここは互いに矛を収め、手を取り合うべきだと思うが……無論、双方にとって得になるように話を進めるとも。どうかのう？」

ステイルと神裂は互いに目配せした。

やがて、ステイルが大きくため息をついた。

「何が望みだ？」

——第一七学区、特別拘置所

「15分だ。規定に則り、時間を厳守するように」

男性の刑務官が厳めしく言い、金属製の重厚な扉を開けると、面会室を出て行った。

御坂美琴は、部屋に備え付けの時計を見上げる。

15分。

知りたいことは山ほどある。あまりにも短い制限だ。しかし、今の自分には悠長にしていられる余裕などない。

鋭く冷たさを湛えた美琴の目の下には、紫色の隈が現れている。

そして、美琴は、アクリル板の向こう、拘留者側スペースの扉が開かれるのをじっと見つめる。

「珍しい方が面会に現れたものだ」

木山春生が、椅子に座るなり口を開いた。かつて出会った時のような白衣ではなく、くすんだ青色の作業服姿だった。

「超電磁砲……有名人じゃないか。そんな君が、一万人を昏睡に陥らせ、帝国等という暴力集団を扇動した重罪人に、何の用だい？」

美琴は、木山の虚ろな目をじつと見た。木山は拘留中に髪を切ったようで、前髪はかつての目元を覆い隠す程の長さではない。原子力実験特区での一件の時に見かけたロングヘアではなく、記憶の世界で見た、かつて教師を務めていた時のような、清潔感のある短い髪形だった。それでも、相変わらずその瞳は暗く、生気に乏しかった。

「分かっていると思うが、事件のことならここでは話せないよ。君は私の弁護士ではないし、あの一件のクライマックスに関わった一人だろう？ 察するに、君も、あの時何が起こったか、自由に話せる状況ではない筈だ。違ukai?」

美琴は、木山の後ろに控える屈強な刑務官の姿を一瞬意識する。しかし、目は木山の顔を捉えたままだ。

「……夢の、話をしたいの」

「夢。夢か。いいじゃないか」

木山は、手錠を架けられた両手を上げ、美琴に見えるようにする。「夢の中で、私は彼の心に触れたんだ。君は見たのかな？ 確かに、私は一度、右腕を失った筈だった。ところが、今こうしてちゃんと存在している……だがね、時々感じるんだ。この腕には、私のものではない意思が働いていると。それは、アキラかもしれないし、島君かもしれない。ではなぜ腕を再び得たのか？ ナンバーズの情けか？ 大覚様の為せる奇跡か？ どうだい、素敵な法螺話だろう？ 弁護人に言わせれば、責任能力を回避するストーリーとしては落第らしいのだけどね」「違う。そんな話が聞きたいんじゃない」

要領を得ない口上に苛立ち、焦ったことで、美琴は強く木山の話に遮った。

刑務官が僅かに顔を顰めるのが見えた。美琴は一度深く息を吸う。「私が聞きたいのは……あなたの夢のことなの。」

木山は、美琴の言葉を聞き、薄く笑みを浮かべた。

「私の、ね。君は、救いを求めているのかい?」

「そういう言い方もできる」

相変わらずはぐらかすような木山の言い方に、美琴は努めて冷静に答えようとする。

激昂してはいけない。馬鹿正直に突っ込んだら、この面会は途端に
終いだ。

自分が背負っているという「絶望的な運命」。目の前に座る人物は、
その正体を探るための、ほんの僅かな手がかりなのだ。

ドツベルゲンガー
「複 像に出会ったら、その人間は死ぬっていうでしょ」

心臓の鼓動が僅かに速まるのを感じながら、美琴は話した。

「都市伝説じゃないかっていう意見が大半だけど、避けられるなら避
けておきたいじゃない？科学的に突き詰めていくと、脳機能の働きに
よるっていう説もあるんでしょ？じゃあ、人間の脳は、どうしてそん
なものを見せてしまうの？大脳生理学者としてのあなたの意見を伺
いたくて——夏休みの自由研究のために」

とってつけたように最後の一言を言い切ると、美琴は木山の表情を
じつと窺った。

頼む。伝わってくれ。

美琴は祈った。

数秒の間を空けて、木山は僅かに身を乗り出して口を開いた。

「オカルトとしては古典的かつ魅力的な話題だとは思うよ。けれども
ね、科学的に考察しようとする研究は、率直に言って既に尽くされた
議論だと言わざるを得ない。君自身も先ほど述べたように、アレは脳
機能の誤作動によるものだよ。自己像の幻視と言ってね、側頭葉と頭
頂葉の接合部にはボディ・イメージを司る部分があるのだけど、腫瘍
が生じるなどして損なわれると、自分の肉体が離れた場所にあるか
のように錯覚してしまう症例が実際に複数確認されているんだ。新鮮
味のある研究の余地は無いと思うが——或いは」

期待とは外れた言葉を連ねられたことに対し、美琴が口を挟もうと
したのを察して、木山は口調を強めた。

「……ツリーダイアグラム樹形図の設計者に聞けば、何か分かるのかもしれないな。私は
終ぞ叶わなかったけどね」

予定よりも大幅に面会時間を短縮された木山は、自らの単独室へ戻
ると、お世辞にも寝心地が良いとは言い難いベッドに腰を下ろした。

国際法上で厳禁されている筈の、クローンの生成。第三位の複製体を、もちろん本人のあずかり知らぬ所で生み出し、様々な研究へと利用する。木山が知っているのは、エレクトロモスター電撃使いとしての彼女らの能力を応用した、脳波によるネットワークを構築しようとするものだった。つまるところ、自分が開発した幻想御手も、レベルアップ彼女らの研究を基礎にしている。

しかし、科学の発展のためなら倫理など簡単に捨て置ける学園都市のことだ。もっと常軌を逸した研究の人柱へと、クローン達が使われていることは想像に難くない。実際、先ほど面会した御坂美琴の目は、明らかに何かを知ってしまったことを窺わせた。

「……一撃を食らわせてくれよ、レールガン」

ほんの小さな声で呟くと、木山は部屋の天井の隅に設置された監視カメラを覗む。

カメラが、微かに唸るようなノイズを発した。

アーミーのラボで、「彼」と面談していた時と同じだ。

「人の皮を被った悪魔どもが、慌てふためくのを、私だって見たいのさ」

自分は当然、娑婆には出られないだろう。

そのことを分かっている、木山は美琴に小さな期待を抱くことにした。

木山は、自分の右手へ視線を落とし、左手でそつと撫でる。

血管が青く浮き出て、脈動しているのを感じる。熱を孕んでいる。

木山はその熱を、左手の指先で味わった。

「そうは思わないかい？ 島君」

やがては、自分もこの力を利用して、戻る。

眠れる教え子たちを、救わなければならぬ。

そのために木山は、今の間は機会をじつと待つことにした。

学園都市が誇る最高峰の頭脳、衛星軌道上のスーパーコンピュータと唯一交信できる場所は、美琴の予想に反してもぬけの殻だった。

「絶対能力進化」計画を何としても阻止するため、樹形図の設計者にアクセスし、実験の結果について偽装した予測を立てさせる。固い決意を胸に施設へ侵入した美琴は、狐につままれた気持ちで埃の被ったコンソールを操作し、データベースへのハッキングを試みている。「嘘でしょッ……!」

膨大な量のデータの中から、「統括理事会への報告書」と銘打たれたドキュメントファイルを見つけ出し、美琴は愕然とする。

「樹形図の設計者は、スクラップになったっていうの……?」

ダメだ。妹達を救わなければ。何か、何か手がかりがある筈だ。

諦めきれず、藁にも縋る思いで、美琴は更にデータを斜め読みしていく。

暫くして、ただ一人の侵入者を除いて誰も物音を立てない交信室で、息を呑む音が響いた。

「……『超電磁砲』量産計画を応用した、SYSTEM到達の可能性開拓』……?」

その演算申請ファイルの日付は、7月27日。樹形図の設計者が破壊される前日だった。

美琴は、液晶に表示された文書を、逸る気持ちで読み進めていく。

The Project “Juvenile” A”

……以上のように、都市軍隊科学研究班「ラボ」から接收した研究ファイルを勘案すると、7月23日午前10時23分42秒に、第一〇学区原子力実験特区で生じた大質量の物理的特異事象（以下0723事象）は、防衛省管下超能力研究プロジェクト内の、28番目の実験体ナンバーズ、通称「アキラ」が覚醒したことに起因すると推測される。

本事象に於いては、発生の中心座標からほぼ同心円状に拡がる半径300mの区域の建材、土壌が大量に消失し、瞬時にクレーターを形成した。それと同時に検出された現象として、ガンマ線及び重力波の

発生、赤方偏移、放射性崩壊、原子核融合、原子崩壊等が列挙される。これらの分析結果を統合すると、宇宙の誕生とも言うべき現象がその時起こっていたといえる。

このことは、「アキラ」が人為的に別次元の世界を創造し得る、つまり神ならぬ身にて天上の意思に辿り着くという、学園都市の能力開発の究極目標ⅡSYSTEMへの到達の道を切り拓く鍵であることを強く示唆している。

しかし、アキラの遺伝子情報は、現時点までに、ラボ跡地及び0723事象発生地の捜索において獲得できていない。一方で、0723事象におけるアキラの覚醒へ触媒としての役割を果たしたと思われる、ラボ実験体41号——本名「島鉄雄」の細胞を、現場から回収することに成功した。島鉄雄は、書庫の最新記録によれば「無能力者Ⅱレベル0」であるが、レベルアップ幻想御手の作用とアキラの影響を受けたことにより、最終的には超能力者Ⅱレベル5程度まで能力を向上させていたことが示されている。加えて、0723事象の記録及び分析では、アキラ程の規模ではないものの、島鉄雄も宇宙創造と類似した物理現象を引き起こしていた事が疑われる。そこで我々は、島鉄雄のDNAマップを、凍結された「超電磁砲量産計画」の手法に組み込むことで、島鉄雄のクローンを量産し、その過程で生まれた個体が、アキラの代替として、SYSTEMに到達できる可能性を探る。

命題：「超電磁砲量産計画」では、生成されるクローン『妹達』のスペックが素体の1/100にも満たないことが問題視されたが、上記の通りに島鉄雄のクローンを生成した結果、スペックの劣化は同様に起こり得るか。それは0723事象直前の島鉄雄オリジナルと比較した場合、どの程度の差であるか。

「レベル6を目指す計画は、妹達をアクセラレータ一方通行に殺させるもの以外にも、存在している……？私のクローンを作るのと、同じ技術を使って、島鉄雄を……」

衝撃を受けた美琴は、震える指でコンソールに触れる。

この演算申請は、了承されたと分かった。

ならば、その結果はどうなったのか。
美琴の指が、結果へとアクセスするボタンへと近付く。

——某所

ゴポゴポと気泡を立てながら、容器内のリンゲル溶液が排出され、モジュールのガラス蓋が開閉する。そして、裸体の少年が前のめりに床へと倒れ込む。

「……見た目はうまくいったけど」

床に突っ伏した少年の姿を見下ろし、黒のタートルネックの上に白衣を纏い、派手な金髪をヘアバンドで纏め上げた女が慎重な面持ちで言った。おおよそ研究者らしくない外見だった。

「肺機能は？生きてる？」

金髪の科学者が少年の体に顔を近づけたその時、骨のくつきり浮き出た背中が不意に跳ね、少年はゲホゴホと激しく咳き込んだ。

「やっつだよ……やっつだよ」

ヘアバンドを巻いた額に手を当て、金髪の科学者は緊張の糸が一気に解けたように大きく息をつく。

「これで何体目だっけ？え？」

「あー、確か18番目です」

茶髪で黒縁の眼鏡をかけた、より若い助手の研究員が、タブレットの画面に目を落としながら言った。

「その……人の形してて、良かったです」

「同感ね」

まだ咳き込んでいる裸の少年を見下ろしながら、金髪の研究者が言った。

『欠陥電気』の時とは大違い……腐ったミートボールが出来上がった日は、流星の私も夕飯に肉料理を食べる気にはならなかったわね。こんなに時間かかるとは、予想外も予想外！21日に、あの実験がストップして以来でしょ？長かったわー、てか本当に島とかいう奴のD

NAマップで間違いないんでしょうね、アレ。何か別のクリーチャーだったりしたら……あなた、さつきから何で目を逸らしてるのよ」

「いや、でも」

眼鏡の助手がタブレットで顔を隠しながら言った。

「こないだはまだ同性だったから……今度は、おつ、男ですよ……何で私たちが担当なんですか？まともに見られませんよ」

「仕事を選び好みできる立場じゃないのは分かってるでしょ！」

金髪の研究者が呆れたように言った。

「いい!?」アクセラレータ一方通行の野郎がへマしたお陰で、私らはこの新しい仕事をやり切れなきや、口封じされるか、良くて暗部に放り込まれる羽目になるんだから！ホラ、早くコイツをテストメント学習装置に運ぶ！」

「えー、私が……」

助手の研究員は、顔を赤らめながら、額について蹲ったままの少年へと屈みこんで近寄る。

「あー、君の名前、なんだっけ……動かしてもいい？」

「バカ。これから知能を15歳並みに上げるとこだつてのに、出てきたばっかの新生児に名前聞いてどうすんのよ」

「あー、そうでした……」

上司にどやさされたことで、若い助手はこほんと咳払いをし、床に這いつくばる少年の左腕を恐る恐る自分の肩に回す。

「ていうか、この人、私より絶対重いですって」

助手は少年を支えて立ち上がるうとしたが断念し、息をつく。

「あの、やっぱり手伝って——」

上司からの返事は無かった。

膝をついた少年の右腕がいつの間にか上げられていた。その肩から先が奇妙に引き延ばされ、骨など存在しないかのように捻じれ、ぬらぬらと赤く光沢を放つ筋繊維を露にしている。その先では研究者の相方が顔を肉塊に覆われ、声も上げずに、首から下がじたばたともがいている。

「ぼくは」

声変わりしかけの、独特な掠れ声が耳に入って来た。

助手の研究員は、唇を震わせながら、自分が今支えている少年の顔を見た。

あどけなさの残る顔に、伸び放題の黒髪。感情のこもっていない黒い瞳が、じつと研究員を見つめていた。

近くで、何か重たいものが、どしやつと湿り気を伴って床にぶち撒けられる音がした。

研究員の目は、少年の顔を凝視したまま、動かすことができない。

「鉄雄——島、鉄雄」

helpus . mvg4

電子音。

画面が開始直後に大きく揺れ、木製テーブルに携帯電話が置かれたと思われる物音がする。開始後0.2秒時点で画面は安定する。大きなため息が2度聞こえる。

閑散とした室内。窓外からは約3000Kの色温度の日光が木造の床へと差し込んでいる。動画の色調を無視すれば、夕方であると推定できる。

画面奥、テーブルの向こうに、白を基調とした壁紙が一面に張られている。画面左側、窓の方向から、回り込むようにして、アンチスキルの防護服に身を纏った、長髪の女性隊員が現れる。青みがかった黒髪やその表情からは、濃い疲労が窺える。

「あー、この録画が、本国だか外国だかの誰かさんに届けって願ってる——今日は10月——」

椅子に体をぶつけたことによる大きな衝撃音が響く。

「——あのクソツタレから1週間は経ったか？私は黄泉川愛穂、第七学区の、アンチスキル第七三支部所属隊員だ。少なくともこないだまではね。ほんとだったらウェブで配信したかったんだけど、中継局は奴らの縄張りだ。一瞬で終わらせる必要があるから、事前に録っておくことにする」

女性隊員は一瞬と窓外へ視線を向ける。密集する広葉樹林を通した木漏れ日が揺れる。

「今、本国——いや、学園都市の外のみんなには、奴らからの発信がキャッチャー吹っ飛ばす勢いの剛速球で投げつけられてるんだと思う。きつとみんな困惑してるだろうね。アレは——まともじゃない。プロパガンダですらない。ただの、電波じゃん。まあとにかく、これが些細なきっかけになってくれさえすればいい。食料ありつたけど、戦力が必要。100万を越す人々が食いつなぎ、奴らを止めるためのね」

大きなため息。

「9月30日——学園都市と外界との通信が一切断られた。多分、合ってるね？北、東、南の3つのゲートが全てシャットダウンされたし、西の山にはいつの間にか、理性を失った操り人形の兵隊共が、突然降って湧いて出た。大半は、7月の事件の後に学園都市の治安維持部隊へ再編された、かつてアーミーの所属兵だった連中だ。奴らは自我を持ってない。互いに、言葉もなしに、まるで会話の能力者みたいに連携している。どんな絡繰りかは知らない。彼らはそもそも能力開発すら受けていない筈なのに。とにかく彼らは、『アキラ』の意識下に入っていない人間を、制圧、略取するようにプログラムされてる。連れ去られたらどうなるかは、知らない」

女性隊員の視線が再び窓外へ向けられた。およそ2秒間。瞬きを素早く繰り返す。

視線がカメラへと戻される。

「雨の夜だった。発端は、外国からの敵対勢力が侵入したって通報だ。私は車載の無線で送られてきた、そのブレブレの合ってるんだか分からない写真資料を見て……妙な格好をした奴だとは思った。普通、潜入が目的なら、もっと目立たない恰好をするじゃんって。で、その後——意識を失った。私だけじゃない。部下も、同僚も、上司も……みんな倒れた。7月のレベルアップの時もそういうのが多発したけど、あれよりももっと大規模。思考をハックされるでもなく、ただ、よく映画であるじゃん？手刀を叩きつけるヤツさ。あんな感じ。でも、その所為で、300人は命を落とした。どんなに少なく見積もっても。私らが後日見つけた範囲で言えば、例えば、風呂入りながら防水携帯弄ってた子どもとか。病院の看護師が軒並み意識を失ったせいで、透析できなくなった患者とか。ひどいもんじゃん。……でもね、

あれは、ただの前兆だった」

隊員が苦々し気な表情を浮かべる。

「私にとっては伝聞でしかないけど。才郷と杉山が教えてくれた。第七学区の郊外に『天使』が現れたと。それは、ある女学生の身体に、ステンドグラスで描かれるような輪っかと砂鉄の竜巻みたいな、巨大な

翼を生やしてたらしい。正確に言えなくて、おとぎ話に聞こえるだろうが、昏睡に陥ってたのは警備員だけじゃない。学園都市の、二三〇万いる人口の四分の一にも及んだとか。起きてた人間は、その事件を知ることがなかった。何せ、通信が悉く遮断されたからだ。」

「天使は……妙ちくりんな格好の人物を撃退した、らしい。ただでさえ我々の機能はマヒしてたから正確には分からない。7月の、島鉄雄の事件の時と同じ——いや、もつと大規模だ。何せ、一〇学区との区境に流れてた川が、無くなったんだ。大穴になっちまったじゃん。天使は、島鉄雄じゃない。いやそもそも、行き倒れる私たちを天国へ連れてつてくれる神の使いなんかじゃない。アレは……『アキラ』だ。みんなよくご存知の。ネットミームの、also known as 別名、大覚様……」

隊員が自嘲気味に笑う。

「7月の事件以降、学園都市の上の連中は、アキラを復活させようと画策してたんだと思う。その成果が、アレだ。レベルガン 超電磁砲のクローンが形作るネットワークを足場にして、AIMバースト 幻想猛獣と同じ原理で生み出した。妙な侵入者は、海外から送り込まれた刺客で、学園都市そのものごと、アキラを抹殺しようとしていたんだ。結局刺客は退けられたが……アキラはそれで止まらなかった」

「まず、統括理事が何人も死んだ。機能は回復してない。私らアンチスキルの指令系統もズタズタだ。治安が不安定化したと思ったら、次の朝にはもう奴らが動き始めた。アキラを神輿に担いで、この学園都市を作り替えようとする連中。それに、アキラの意識下に取り込まれた人々。食べるし、呼吸もするけど、喋らない。笑わない。感情が無い……奴らの目的は掴みづらいけど、ゆくゆくは一つのどデカイ集合意識に溶け合うことを目指してる。多分そういうことなんだと思う」

「北部から、さつき言った元アーミーの操り人形たちが大勢繰り出して、重要なインフラを次々に抑えてった。四学区の食糧ファームに備蓄倉庫。一七学区の工業ベルト。東は二三学区を完全に取られた。空港にきた救援隊やメディアは悉く迎撃されたって聞いたが、本当か？ 一一学区を抑えられたのも痛い。お陰で必要な物資がこつちに

回ってこないじゃん。それから、一学区は……分からない。多分、理事長は分かかってやってるんだろうから……私ら、まだ正気を保ってる人間は、主に南側の一〇とか一二学区で何とかしようと思ってる。ただ、ゲートは相変わらず開かない。科学技術を守ろうと要塞都市にしたのがこんな風になるってのは……避難訓練をもつとちゃんとやつとくんだったじゃん」

「こういうとき、パワーバランスを崩せるのは、超能力者の子らだ。だが、状況は樂觀できない。

まず第一位は、30日の夜にひどく傷ついた。生きてはいるけど……こつちには満足いくほどの医療資源がない。助けを求めている人であふれてる。彼は、元のように動ける見込みが、無い。

第二位と四位は、多分あつち側について。協力してる訳じゃないと思う。アキラが神輿なら、その前に立って音頭を取ろうとしてるんだろう。一方通行が倒れた今、自分が能力者の頂点になり替わろうとしている。特に第二位は多分、そういう奴だから。

第三位は——御坂美琴は味方だ。けど……彼女の妹達シスターズが、アキラの支配下に取り込まれている。彼女は妹達との通信をシャットアウトしているみたいだが、精神的には、マズイ状態だ。いつ無謀な行為に走るか、分からない。

第五位はもつと悲惨だ。私らが何とか引つ張り上げた時は、もう手遅れだった。彼女は自分の力をもって、アキラの牙城を切り崩そうとしたのかもしれない。そしたら……ああ、あの子がいつか目覚めることがあるように……」

隊員が小さく嗚咽する。

「……第六位は、二日前にシエルターに来了。といつても、奴の使い走りだが。名前を貸してやるって言ってたから、皆がそんなものより食べ物をくれて怒ったら、帰っていった。アイツは、よく分からない。じゃあ奴らの側につくかと言われれば、そうでもない気がする。

第七位。あの熱血少年と、幻想殺しの上条くんは元気だ。今のところ。バイクやスキルアウトの坊主らと一緒に、何か反撃の計画を練っているらしい。上条くんは、30日に随分危ない目にあつて、そ

れでいてなお、今度は絶対アキラを止めるって息巻いてる。ハハ、危険は冒さないで欲しいが、この状況で私がそんなこと言う資格は無い、のだと思う。でも……若い元氣な子たちには、生きる希望が見えるよ。生きていてほしい。本来は、我々大人が止めるべき事態だ」

隊員が、ちらりと腕時計を見る。そして、カメラへ視線を戻す。

「東の、一二学区では、ミヤコ教団がアキラと対抗しようとしているらしい。あの人たちに何ができるか分からないけど、今、助けを求めの人が続々集っているって噂だ。ほかにもいろんな宗教組織が同盟を組んで対抗しようとしていると。」

それから、……ああ、そうだ。超能力者には、8番目の席に座りかけた子がいるんだ。島鉄雄。7月の事件で行方不明になっていたが……どうも、生きているらしい。一学区や七学区で目撃例が複数あった。連中の側についているのか、それともこっちに来てくれるのか……彼は元々、アキラとのリンクを得ていたんだ。何か、この事態を打開するカギを持っていそうな気がする。久しぶりに、会ってみたいじゃん、ハハ」

「私はこれから、ここから2kmの送受信施設トランシーバへ向かう。初春が、ほんの僅かな時間だが、アメリカの企業がやってる、衛星コンステレーションのVバンドの一部を開放してくれる。連中の目をかいくぐって、そこで、この動画をネットにアップロードするんだ。これを聞いた人へ。頼む。私たちを助けてくれ。百万を超す人間が、アキラの——『ネオ学園都市』の支配を逃れて、耐え忍んでいる。」

ただ、同時にこれだけは注意してくれ。アキラの姿を、間違っても衛星から撮影しようなんて思うな。送りつけられてくる映像もダメだ。まともじゃない。奴は見ちゃいけない。声を聞いちゃいけない。まさか、本国の政府首脳は、部下からの写真や動画で報告を受けていないか？乗っ取られたりしちゃいないだろうね？奴の姿は、傍から見れば、どこにでも居そうな少女だが、それはガワだけの話だ。中身は、私たちの想像を超えた——」

隊員が唐突に喋るのを止める。窓外に視線を向け、耳をそばだてている。

無言で隊員がカメラに歩み寄り、手を伸ばす。
映像が一瞬大きく傾き、終わる。